杉田家の性転換事情

Ｃｕｒｔｉｓ　Ｅｍｅｒｓｏｎ　ＬｅＭａｙ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
杉田家の性転換事情

【Ｎコード】
Ｎ３９９０ＧＡ

【作者名】
Ｃｕｒｔｉｓ　Ｅｍｅｒｓｏｎ　ＬｅＭａｙ

【あらすじ】
　二十二世紀初頭。医療技術の進歩により、限定された条件の下では完全な性転換（性器の相互移植による男性化または女性化）が可能となった世界において、少子高齢化に悩む日本では試験により国民を４階級に分け、劣等階級の国民は上等階級の国民に奉仕する一方、上等階級の国民は一夫多妻等により優秀な子供を沢山つくることが社会的使命となっていた。
　他方、一夫多妻の合法化により極端な男尊女卑社会が出現し、優秀な女性は多くが男性化（性転換）を望むようになったため、これ

を叶(かな)える法制度が整備されてきた。
　かくして、国民の義務となった階級決定試験は中学三年の秋に全国一斉に実施され、結果によっては劣等階級の生徒は上等階級の生徒が希望する場合、性器の交換移植に応じる義務が課せられた。
　そのような状況の中で、試験の結果、男子から女子への性転換を命じられた主人公杉田優稀と、希望が叶って男性への性転換が認められた優稀の腹違いの妹杉田千博の二人を中心に、杉田家とそれを取り巻く人々の日常を、笑いと涙と感動で描くヒューマンドラマ。

　物語の開始時点で中学3年生の登場人物達が、性転換という運命の流れに翻弄されながらも年齢相応の性の発達に正面から向き合い、思春期の変化に迷い、悩み、戸惑いながらも、一人でも多くの子孫を残すという社会の要請に応えるべく必死になって日常を生き、家族を築き人生を営んで行く、そのような物語になります。
　主人公及びその周辺の登場人物は、いずれもみな最終的に自分の居場所を見つけ、それぞれの幸せを掴むことになります。登場人物の意識の上では、程度の差はあれど全員がハッピーエンドで終了する予定です。

　内容が性転換を扱っているため、性的な記述が随所に出てきます。性的描写は特に官能を意図してはいませんが、物語の背景として、中学卒業時点で成人し結婚が奨励される（なるべく早く結婚して子供をつくることが社会的に期待されている）時代のため、中学生でも性行為を普通にすることになりますし、この年齢でも夫婦生活としての性描写も出てきます。
　なお、性行為の描写は、かなり詳細かつ微に入り細にわたりますので、ご注意下さい。ただし性的描写も含めて、医学的に完全に正しいということではありません。物語上の脚色があります。

第1話　プロローグ（1）（前書き）

初投稿です。週1更新を目標に、ぼちぼち進めますので、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

なお、未確定ですが、現在の構想では全体で８０話～１００話程度を予定しています。

第1話　プロローグ（1）

　二十一世紀も後半となると、医学は長足の進歩を遂げ、他人からの臓器移植に伴う拒否反応は完全に克服された。また遺伝子工学と生命工学の融合の結果、臓器クローンが一般的に普及し、心臓や肝臓など、殆どの臓器はドナーがいなくても、自分の細胞からでも他人の細胞からでも、工場で生産できるまでになっていた。さらに先進的な医療の現場では、細胞レベルでの染色体の改変や遺伝子情報の書き換えといったことまで可能となってきたため、人間の身体のパーツは殆どすべて部品のように生産され、医療ネットワークの中で流通販売されるようになった。つまり病気等になった臓器は、投薬や手術で地道に直したりせず、クローン技術によって工業的に製造された新品と交換するのが、多くの治療の第一選択肢となり、人々の意識の上で、身体や臓器に対する考え方も、随分と様変わりした。

　これらの進歩は単なる病気治療としての臓器移植にとどまらず、ついには男女間での生殖器の移植さえも可能となっていた。この結果、かつては夢であった完全な性転換が可能となり、男性から女性でも女性から男性でも、どちらも異性化を果たした上で、その身体での妊娠・出産という生殖行為すら完璧に可能となっていた。

　これらを支える手術技術の進歩として、マイクロサージャリー及びiPS細胞による神経系の再接続が高レベルで可能となったのも大きい。これは移植した臓器への神経系接続が殆ど完璧に行えるようになり、手や足などは移植すると直ちに以前からの自分の手足とほぼ同様に使えるようになるのが普通となったし、脊髄損傷など、以前ならば寝たきりになるような患者であっても、容易に完治するようになったからである。勿論、多少のリハビリは必要だが、かつての辛く苦しいリハビリとは別物で、せいぜい数日から最大でも2

カ月程度の、簡単なトレーニングプログラムで自分の身体と完全に馴染むようになった。しかし、これだけ進歩した医学をもってしても、主として精神的な問題及び倫理的な問題のため、生殖器の移植については、脳移植と並び、他の臓器にはない特有の超えられないハードルが存在していた。

脳移植の場合には、例えば肉体がダメになったとき、新しい身体に脳を移植するというのは可能になったが、これは言葉としては脳移植であっても、どちらかといえば脳を保存部位として、他の身体全体を移植したと考えることができる。なぜなら身体のほうを基準に考えると、脳を移植してしまったら、その人格は脳のほうに残ることになるからだ。つまり身体は単なる入れ物に過ぎず、脳こそが当人を当人たらしめる中心ということである。だから、脳の一部でも損傷を受けたとき、これを移植により復元するということは、少なくとも記憶を司る大脳皮質に関しては不可能（無意味）とされていた。（運動を司る小脳や間脳の移植が、ようやく動物実験段階であった。）

他方、生殖器を移植した場合、他人から移植された精巣及び卵巣で生産される精子及び卵子は、それぞれ元の身体の遺伝情報や性染色体を引き継ぐこととなり、それは結局、自分の本当の子孫（自分の遺伝子を受け継いだ次世代＝血の繋がり）を残すことにはならないため、いくら生殖行為が完全に可能で妊娠・出産が行えるとしても、それは代理母による借り腹と一緒で、本当に自分の子供ではなく、養子／養父母の関係に過ぎないのではないか、という根源的な問題が残されていた。これがあるため、他の臓器ではクローン技術で製造された人工臓器が売買されているのに、脳と生殖器だけはクローンには馴染まないとされ、クローン臓器は製造されていなかった。

それに、そもそも男性の細胞からでは、どうクローンしてみても男性の生殖器しか製造できず、逆もまた然りだったので、性転換するためには必ず他人の（反対の性別の人の）細胞からクローンをす

るしか方法がなかった。しかし、それを許してしまうと、自分の細胞のクローンではない、つまり他人の遺伝子・他人の性染色体を受け継いだ性器が多数出回る可能性を排除できず、これを防ぐためのひとつの方法として、性転換をするためには、必ず男性及び女性双方のドナーが存在し、双方の生殖器をそれぞれ交換移植しないと、性転換はできない（医療技術的な問題に加えて、倫理的な面から法律で規制されていて、してはいけない）ことになっていた。勿論、双方の生殖器を交換移植したからといって、自分の遺伝子が自分の子供に引き継がれる訳ではないのだが、そこは生殖器を交換する男女間で双方納得の上、相手の遺伝情報を理解してから生殖器の交換というプロセスを踏むことにより、自分の感情に折り合いをつけるようにしたというのが実態である。（勿論、この背景として、男女の比率が大きく変わってしまうことに対する防止措置とか、特定の男性あるいは特定の女性の遺伝子を受け継ぐ同一の生殖器が多数世間に流通するのを防ぐ必要があるという面も大きかった。）

しかも、性転換において、もうひとつの困難は、いわゆる性成熟年齢つまり第二次性徴の発現時期という問題があった。つまり、第二次性徴が完全に完成する前であれば、ほぼ完璧な性転換が可能となる一方、既に第二次性徴が完成してしまった性的な大人（個人差はあるが、概ね１６歳以降と言われている）にあっては、いくら生殖腺をすっかり交換したとしても、肉体の細かな部分の性的成熟が男性・女性それぞれに完成し固定してしまった後なので、男性ホルモン／女性ホルモンにより変化させるには限界があり、そのため、性転換手術を受けることができるのは、第二次性徴が完成する以前、具体的には１５歳程度までが限界とされていた。

つまり、性的成長以前または成長中に施術しなければ完全には異性化しないため、性転換のためには遅くとも中学生のうちに性転換手術（性器交換手術）を受けるという決まりとなっていた。

この考え方だと、まだ少年・少女のうちに自分の性別を決定することになるため、一部識者の間で批判もあったのだが、一般的に性

同一性障害の者達は小さいときから自分の性別について、違和感を抱き続けていることが広く知れ渡り、これらの患者は最初に性転換を希望しだすのが例外なく小学校低学年時代からで、第二次性徴が発現し出すと、自分の現在の性別に嫌悪感すら抱くのが普通だったため、これらの患者については、中学生になるタイミングで性転換手術を受けるのが、ごく一般的となっていた。これは中学生になるといった学校が変わるときに、新しい性別で新しい生活と新しい友人関係を築くのが、当人にとっても周囲にとっても、無用な軋轢やストレスを最小化できるからであった。

これで性転換を巡る倫理的な問題点が、概ね解決したと考えられ、細かな法整備や医療機関での運用面も次第に整備されていったのだが、そのような理解が社会全体に拡がってから約１０年、次第に別の問題が顕在化した。

以前から、女性の社会進出が謳われてはいたが、まだ圧倒的に男性優位社会の日本では、総理大臣は歴代すべて男性であり、女性宰相が出現する兆候も見られない。各種経済団体の常務理事等を見渡しても、著名な大企業のトップは９割方男ばかり。とすれば、将来の可能性というか選択肢を考えて、女性から男性への性転換を望む者が次第に増えてきたのも自然な流れであった。

この結果、性転換の技術が医学的に完成し、かつ法整備も整った二十一世紀の終盤には、男性化を望むものが女性化を望むものに対して、ついに5倍程となってしまった。

これは、日本も近年の少子化を背景として導入した一夫多妻制度や、男性と女性の役割分担の固定化（男性は企業戦士として社会の第一線で身体を張って仕事に打ち込み、そのような男性を支えるため女性は専業主婦の良妻賢母として家庭を守り子供を産み育てるといった、古い価値観の復活）により、建前の議論とは裏腹に、かつての男尊女卑の意識や風習が以前にも増して拡大したことで、ますます顕著になってしまったことも大きい。本来は、そのような風潮に反対すべき急先鋒となるはずの優秀な女子が、こぞって男性化を

希望してしまったため、ブレーキをかける役割がいなくなってしまったのである。

　男性化を望む女性については、性同一性障害患者を装っているが、なにせ心の内面に関する問題のため本当の性同一性障害患者なのか、それとも利害得失や憧（あこが）れ等から女性よりも男性が有利と考えて性転換を希望しているのか、専門医でも見分けがつかない場合も多い。他方、法律的には完全に同等とはいえ、諸々の風俗習慣、いわゆるシキタリの上で明らかに不利になる女性化を望む男性とは、ほぼ全員が真正の性同一性障害患者だと断言できる。しかし、そもそも性同一性障害患者の男女比率がどうなっているのか、５対１は適正か、というような研究は、プライバシーに深く関与する部分のため、殆ど進んでおらず、また現存するデータの信憑性（しんぴょうせい）についても、誰も証明することができなかった。

　結果として男性化を望む圧倒的多数の女子に対して、性器を交換する男性の絶対的な不足は大きな政治問題となり、とうとう社会不安にまで発展してしまった。というのも、性転換のためには性器交換に応じる相手方が必要という法律があるのに、男性化を希望する女性に対して女性化を希望する男性の割合は１／５しかいないため、現状を不満と考える女子中学生を中心とした数十万人規模のデモや騒乱が随所で発生したからである。混乱はやがてピークに達し、中学生側及び警官隊にも何名も死者が出るに及んで、時の政府は大批判を覚悟の上で、ある制度を導入した。これは中学３年生で受ける試験によって、国民を総合的な能力で第一階級から第四階級までの４階級に分類すると共に、特に優秀な者には自分の希望する性別への性転換を認める一方、第四階級にも満たない者は、性転換を希望する者との間で性器を交換移植する義務を負わせ、本人の意志とは無関係に、強制的に性転換させることにしたのである。

　これにより、思春期に入り性を意識しだした少年少女にとって、成績優秀であれば反対の性別に性転換することができる路が開かれる一方、逆に成績不良だと嫌でも自分の今の性別を強制的に転換さ

せられてしまう可能性が生まれることとなった。

　こうして、成績不良または身体能力が劣悪な男子生徒にとっては、強制的にあそこを切り取られてしまうという恐怖の暗黒時代が到来し、約３０年が経過した。時代は二十二世紀に入っていた。

第2話　プロローグ（2）（前書き）

同一のサブタイトルの続きなので、連続投稿します。
これからも、同一サブタイトルのときは、極力連投するよう努力します。

第２話　プロローグ（２）

３０年前に、大変な難産の末に国会で強行採決され法制化された、「能力判定及び性別選択衡平法」では、国民を能力によって階級分類してしまい、それによって将来の職業すらも殆ど決まってしまうことや、劣等階級となってしまった場合、本人が望まなくとも、法律で性転換手術を強制するといった、成績劣等者は成績優秀者のための生贄になるという制度であるため、あまりにも非人間的だとして人権団体からの批判はもとより、与党の中でもかなりの異論はあった。しかし少子高齢化の中で急速に国力を落とし、先進国から滑り落ちるのみならず、競争の激化した国際社会において、国家を存続させることも危い状況に晒された日本は、背に腹は替えられないという現実的な判断から、このような制度を採らざるを得ないところまで追い込まれていた。いや、むしろ、この制度により、再び強い国になれるのではないか、そんな国民の願いと期待が込められた制度でもあった。

なお、少子高齢化対策として、もう一つの重要な改革があった。それは民法の範疇なのだが、一夫多妻制度が同時期に法制化されたのである。この二つの法律は、まったく異なる内容であり、制度的にも関連することは皆無なのだが、実は人々の意識の中で「男尊女卑」というキーワードによって密接に繋がっていて、同じ風潮、同じ文脈の中で自然発生的に同時成立したものであることは疑いがない。ただし日本では昔から側室制度や「おめかけさん」といった文化もあり、優秀で甲斐性のある男性が複数の妻を娶ることについては、社会的にすんなり受け入れられたため、資産家や第一階級男子は、妻を複数持つことが直ぐに一般的となった。ちなみに、専ら運用上の制約から、権利義務が同一の「妻」という立場は、基本的に２名までとなっていて、これを超えるものは「側室」（おめかけさ

ん）として、特に子供の相続に関する権利義務の上で差別化が図られている。（本人の経済的利益については本妻と平等で同一。）
　さて、紆余曲折の末、しかも制度立ち上げ時には立て続けに幾つもの改良が図られたにもかかわらず、幾多の混乱も見られたこの能力・性別判定試験制度であるが、成立から３０年が経過した現在では、概ね以下のような運用がなされている。
　まず、中学３年生の秋に全国統一で実施される能力・性別判定試験の結果によって、男女を問わず第一から第四の階級が決められる。この階級は、単に進学先を決めるというだけでなく、その後一生にわたり変わらない資格となるため、文字通り自分が死ぬまでの人生を決めるものとなる。
試験は１週間かけて実施され、１日目から３日目は今まで習った知識、教養、知能指数等をすべてペーパーテストで判定する筆記試験となる。科目としては、中学校での必修科目である全９科目に加えて、知能指数や一般教養、社会常識、礼儀作法、その他、となっており、１日５科目（各９０分）ずつ３日で１５００点満点となる。さらに各種検定や資格、また自分の得意な習い事でもあれば、それらも些少ではあるが加点の対象となる。
　４日目は、身体・運動能力を測定する運動試験が、１０種目の競技で１０００点満点となる。この１０種目は、５つの大きなカテゴリー別になっていて、各カテゴリーの中から各自が得意なものを２種目選べるようになっていたため、例えば陸上のカテゴリーでは短距離走と高飛びを選ぶ者、長距離走と砲丸投げを選ぶ者、といったように分かれており、水泳のカテゴリーならば各種泳法（古式泳法も含む）、水難救助やサーフィン等まで含まれていた。要するに、全部で５カテゴリーから各２競技合計１０種目を選び、その総合点で１０００点満点となるのである。基本的には記録によって点数が決まるのだが、それに加えて種目内で学年トップとビリは、それぞれ２割の加点と減点があった。勉強が苦手でも、ここで荒稼ぎする生徒は多く、特に成績下位の男子にとっては、それこそ自分の男性

器が生贄として切り取られてしまうことになるかどうか、文字通り男をかけた熾烈（しれつ）な争いとなることが恒例だった。

　最後の５日目は、身体機能の測定であり、身長や体重その他の一般的な測定が中心なのだが、これについても同年代の平均値を大きく上回ったり下回ったりすると、基準点（８０点）から加点または減点となる。また握力とか肺活量、筋力（腹筋や背筋等）、それに視力や内蔵機能まで、それぞれ平均値が示されていて、そこから大きく外れると、やはり同様に基準点から加点または減点対象であった。この身長や体重測定が１００点満点、次に筋力や内臓機能の測定が１００点満点、そして最後を飾るのが生殖機能の測定で、ここは少子化対策の成否を握る重要な項目のため、３００点もの配点がされていた。この項目、女子は採取した卵子に異常がなければ、あとは生理の周期程度で殆ど差がつかないのだが、男子にあっては、受精させる能力に密接に関係することから、男性器のサイズや形状（主として剥け具合や反り具合、エラの張り具合等）、それに勃起力とか射精量、精子数それに精子の運動能力等を測定される。女子が卵子の採取のために別室に移動している間、男子は制限時間内にどれだけ強く勃起できるか、何度勃起することができるか、そして何回射精できて、合計の射精量は何ミリリットルであるか、といったことを競うことになる。ここも特に劣等生の男子にとっては、自分の男性器の運命がかかっていることから、恥も外聞もなく、各自それぞれの方法で必死になって、少しでも良い点を得るべく測定に臨む姿が見られた。少年たちはクラスメートの目を気にする余裕もなく、秘蔵のオカズを持ち込んだり、普通ではない姿勢と方法で自らの性感帯を刺激し続ける。自分の性癖をすべてさらけ出して射精に励む姿は、さながら人間の本能と知恵と努力の集大成の様相であった。

　この試験で、総合点２７００点以上が有名国立大学（かつての旧７帝大）等への進学が保証された第一階級、２１００点以上がそれ以外の大学まで進学してホワイトカラーとなるべき第二階級、１５

００点以上が大学に進学しても良いが基本的には高卒で職人や農民となるべき第三階級、そして１５００点未満が高校に進学しても良いが基本的には中卒で肉体労働に従事することを想定した第四階級に分類されるのである。採点は絶対評価の点数による資格試験なのだが、各階級はクラス４０名のうち、概ね上位から2名～3名、１7名～１8名、１6名～１7名、３名～４名程度になるのが普通で、逆にこのような人数比となるよう試験の難易度をコントロールしていると言われていた。

ただし、人数比は、就労動態や各産業の求人状況等で毎年見直しを実施しており、枠が多少変化する。これは昔の高校受験・大学受験で毎年募集人員数が変化したり、倍率が変化するようなものであった。

なお、いわゆるブルーカラー労働者は第四階級になるが、少子高齢化と機械化が進んだ結果、従来のブルーカラー労働者は産業用ロボット等により代替されてしまい、残っているのは機械化が困難な、文字通り人間が自らの体力で肉体労働をしなければならない一部の現場だけになっている。これが第四階級は肉体労働者階級という、絶滅したような歴史用語を用いられることになった所以（ゆえん）であり、人数的にはごく少数となっているところである。

また、階級を超えて上の学校を目指すのは自由なのだが、現実的には成功者など、各中学とも数年に1名程度だった。というのも、判定試験が、やや甘めの採点となっており、特にボーダーライン付近の生徒には、なるべく上の階級となれるよう配慮があったことも大きい。

少子化のため、各学区とも小学校、中学校はそれぞれひとつしかない。テストの結果で高校に上がるときに階級が決められて、第四階級は中卒で働くことになるが、第一階級から第三階級までは同じ高校で、階級に応じて選択すべきコースに分かれて学ぶことになる。本格的な高等教育は大学のみとなっていて、その中でも第一階級の生徒だけが進学できる総合大学は全国で7つの有名国立大学のみ（

北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州）、それ以外はすべて単科大学または専門大学となっていて、第二階級の生徒がそれぞれの学力にあった希望する進学先を目指すことになる。（私立大学は、最難関の有名校が２つほど専門大学として生き残ったが、それ以外は少子化で学生数が減少し、すべて淘汰されてしまった。）

つまり、能力判定試験とは、本来は高校以降の進路を決め、その後の国民としての階級等を決定するための総合的な試験なのだが、そこに性転換対象者となる成績優秀者（希望者のみ）及び成績劣等者（希望者と反対の性別の者が、希望者と同数選ばれる：義務であり本人の意志にかかわらず手術を強制されてしまうため、男子生徒の間ではチンコとキンタマを差し出す「生贄」と呼ばれて恐れられていた。）を決める要素が付加されたということである。

性転換対象者を決める現在の具体的な運用は、概ね以下のようになっていた。

まず、男女を合わせてクラス最上位の１名か２名（概ね２８００点以上の希望者のみ）と、最下位の１名か２名が性転換対象として宣告される。これらの生徒には、成績発表・結果返還時にクラスの皆の前で男性化対象者には青いカードが、女性化対象者には赤いカードが手渡される。このカードが手渡された瞬間から、それぞれの男性としての、または女性としての社会的身分が一切剥奪され、周囲からは性転換した後の性別として扱われる。トイレもこれまでとは違った性別のところに入らなければならず、また当日帰宅するまでは一応猶予されているが、本来は制服も直ちに取り替えなければならないし、言葉遣いも改めなければならない。（とはいえ、言葉遣いについては、乱暴な口調の女子や、やさしい口調の男子など、男女の性差が小さくなって久しいこともあり、間違えても指導されるだけで罰則があるわけではない。）

さらに細かい基準とか規則がいろいろとあり、例えば成績優秀者にせよ成績劣悪者にせよ、単にクラスでトップあるいはビリになっただけでは対象とはならず、それぞれ一定の基準点以上、または基

準点以下という条件があり、クラスでトップの1名か2名が上の基準レベルを超えている場合であって、かつそのクラスのビリから1名か2名が下の基準レベルを割り込んだ場合のみ、その者たちの間で性器交換手術が行われる。こう聞くと、そのような条件を満たすケースは、めったに発生しないように思うかもしれないが、実際にはクラストップの生徒はたいがい男子になりたい女子であり、筆記点も運動点もダントツで基準など楽々クリアすることが普通だった。一方ビリの生徒は、たいがいなよなよしい男子で、こちらも基準点に満たないことが普通であった。というのは、前述のとおり、この試験では筆記点に加えて運動点の配点も極めて大きく、女子でも男子になりたいような生徒は文武両道、運動部の主将やエースを務めているケースが殆どなのに対して、男子で成績下位に来るような生徒は、筆記試験の結果もさりながら、運動点において女子にも大きく負けるような絶望的運痴が多く、彼らは普段から男子としての力強さ、積極性、体力といったものが欠落している場合が殆どであったため、筆記点と運動点、それに身体機能点を総合した場合、筆記点で相当良くないと、総合ではビリになってしまうのである。

この物語の主人公、杉田優稀（すぎたゆうき）も、そんな女子っぽい底辺男子の一人だった・・・。

第3話　試験結果

「これより、21xx年度の能力・性別判定試験を開始する。」
1問目は〝was〟かな、それとも〝has been〟かな。いや、まずい。こんなところで時間をかけるわけにはいかないんだ。先に進もう。何としてでも第四階級男子は逃れないと・・・。次は〝that〟で間違いないはずだから、Cだ。うん、この感じなら何とか第三階級に入れそうだな・・・。
僕は杉田優稀（すぎたゆうき）。クラス一番のチビで体格も貧相だ。顔だって女の子みたいに可愛いと言われることも多く、小さいときはよく女子と間違えられたこともあるし、いまだに女の子みたいだとからかわれることもある。それは名前にも現れていて、漢字が女の子みたいだ。男の子だったら、せめて「勇気」とか「雄樹」とかにしてくれれば良かったのにと思ったこともある。この女っぽい名前が、まもなく大きな意味を持つことになるなんて、神ならぬ身の僕にわかるわけなかった・・・。
僕たちの町は小さいので学区がひとつしかなくて、僕はその唯一の中学校である西山中学校3年D組の生徒だ。僕は見た目どおり運動が苦手なので、この試験では筆記で何とかカバーしなければならない。といっても、筆記も決して得意ではないんだけど、このために毎日頑張ってきたのだから、そんなに悪い成績にはならないだろう。少なくとも肉体労働者階級の第四階級にはならないように努力を重ねてきたつもりだ。というのは、万一、第四階級になってしまった場合、他の人ならいざ知らず、僕にとっては人生の破滅に向かってまっしぐらだからだ。
別に僕は中卒や肉体労働者階級に対して、差別意識はないつもりだし、どんな職業でも貴賤（きせん）はないと思っている。けれど、僕のように体力がない男子には恐怖がひとつある。何かというと、僕の体格・

体力では、肉体労働者階級になっても、多分務まらない。上の第三階級つまり農業・工業従事者になれれば良いんだけど、もし成績が悪くて第四階級相当の点数しか取れない場合、体力的に第四階級にも不適当と見做(みな)されて、その更に下のランク、強制性転換対象者にされてしまうおそれがあるんだ。これは、判定基準の詳細が書かれたホームページには、きちんと触れられていて、可能性としては否定できないんだけど、実際問題僕の周囲では、最近3年位前までの先輩に聞いても、誰もそんな前例（つまり点数を飛び越えてまで、性転換対象者にされてしまったという例外の人）は知らないと言っていた。まあ、今では成績がすべてであり、筆記点、運動点、身体点の合計3000点満点で、総合計で何点とれたかに掛かっているから、めったにないことなんだろうな。とにかく1点でも成績が上の子が尊重される、これがこの試験制度の基本だと思う。

強制性転換対象者が何名出るかは、女子で男性化の希望者がまだ公表されないため、試験の結果が返されるまではわからない。でも、このD組で可能性があるのは、運動・勉強共に男女含めてダントツで学年トップの榊怜央(さかきれお)さんしか居ないと思う。彼女は身長も高く、容姿端麗で、今だってタカラジェンヌとしても通用しそうなんだから、男子になったら、さぞかしイケメンになるんだろう。でも、それなら生贄は多分1名だけの筈だから、とにかくビリにさえならなければ良い。

試験は3000点満点で、筆記点が1500点満点、運動点が1000点満点、それに身体機能点が500点満点となっている。これらの合計点で2700点以上だと第一階級、2100点以上で第二階級、1500点以上で第三階級、それ以下が第四階級という目安になっている。あくまで目安であって、毎年少しずつ変化するらしいけど、偏差値で決めているんだろう。また性転換希望を叶えるには、2800点以上でないと苦しい。逆に1200点以下だと強制性転換手術を受けさせられてしまう。（まあ、こっちは上位の希望者の人数とかにも依るので、厳密に決まっている訳ではないけど

ね。）
　このクラスにも運動は得意だが、勉強がまるでダメなバカは何名かいるんだ。きっとヤンキーの坂野とか村上とかが落ちるに違いない。こいつらには、女顔だとか華奢で女体型だとか、いつも弄（いじ）られてきたけど、こと勉強に関してはコツコツやってきた僕が負けるわけがない。あんな不真面目なバカに負けてたまるか。
　とはいえ、こいつらみたいな脳筋野郎は運動点で荒稼ぎするケースが多いから、要注意だな。逆に僕は運動点で、半分の５００点も取れないだろうし、本来はあまり差がでない身体点も体格のせいで、せいぜい３００点がいいところだから、第三階級に入りたければ筆記点で８００点以上は取らなければ危ない。僕にとっては、それなりのハードルだ。
　でも、まだ内緒なんだけど、なんたって僕はつい先日、クラスでも屈指の可愛さと性格の良さ、それに良家のお嬢様のような雰囲気を持つ橘円（たちばなまどか）さんと付き合いはじめたばかりなんだから、何がなんでも頑張らないとね。・・・橘さんがなぜ僕と付き合う気になったのか、ちょっと謎なんだけどさ、橘さんから付き合わないかと提案があったんだ。
　・・・告白された・・・？・・・というのとは、すこし違う気もする。でも、とにかく彼女から、「私と付き合わない？」とはっきり言われたんだぜ。思わず「なぜ僕と？」と聞いてしまったら、「杉田君は近くに居ても身構えなくて良いし、安心していられるから」という意味不明な言葉が返って来た。要するに人畜無害と見做されたって訳だ。
　でも僕のことを男として認識していない訳ではなさそうで、まだ付き合って日が浅いからと、自分の部屋には通してくれないし、僕の家に誘ったときも、まずはご両親に挨拶してから、とかわされた。これって裏を返せば、付き合いが深まればそういう関係にもなれるという意味だよね？・・・まあ僕とすれば、とにかく着実に少しずつ関係を深めて、いずれクラスでも恋人宣言できるようにしたいと

考えているんだ。勿論、橘さんと、いつか最後の一線を超える関係になれるのかどうか、それはまだわからないし、彼女は榊さんに次いで成績が良いんだ。だから、多分第一階級になるか、悪くても第二階級のトップくらいは間違いないだろうし、そうすると将来結婚するということも無理なのかもしれない。けど、少なくともファースト・キスもまだなのに、男でなくなってしまうなんて、とんでもない。橘さんだって、レズは嫌だろう。

この時は当然、そう思っていたんだ・・・。それなのに・・・・・・。

ーーーーーーーーー

ーーー

（一週間後の金曜日）

「じゃあ、出席番号順に結果を発表していく。名前を呼ばれたら、教壇まで答案を取りに来い。」

「有栖川・・・1623点、第三階級。」「上崎・・・2768点、第一階級。おめでとう。男子のクラストップだ。」「江藤・・・2292点、第二階級。」「岡本・・・2582点、第二階級。」「加藤・・・2176点、第二階級。」「木村・・・・・・」

まずは男子から出席番号順だ。どんどん名前は呼ばれていき・・・。

「お、坂野。頑張ったな。筆記は相変わらずだが、お前は運動点がかなり良いからな・・・。ギリギリ逃れたぞ。1211点、第四階級。」

坂野がガッツポーズをしている。

そして、僕の番だ。

「杉田」

「はい。」

席を立ち、緊張の中、教壇まで歩く。

運動はやっぱり出来なかったけど、筆記には自信がある。大丈夫だ。自分を鼓舞しながら教壇に向かう。
「杉田。お前には残念な結果になった。」
「え？」
「これが結果だ。突然のことかもしれないが、受け入れてくれ。」
結果用紙と一緒に赤いカードを渡される。
「１２１１点。このクラスでは、お前が強制性転換の対象者に選ばれた。」
「え、いやそんな。だって筆記には自信が・・・。」
だが、結果を見ると・・・。
「・・・な。確かに筆記だけだと、余裕で第三階級になるんだが、お前、運動点が絶望的だろう。それに身体点も決して良くないぞ。生殖機能は結構良い点数だが、それ以外は軒並み最下位じゃないか。総合すると、そうなってしまうんだ。実は、総合点では坂野と同点で、二人ともギリギリだが基準点は上回っていたんだ。だが、お前の体力じゃ第四階級は務まらないよ。同点でも運動点や身体点が高い坂野とは、そこが大きな違いだ。それで先生方の全員一致でお前は第四階級ではなく女性化対象が良いという判断になったんだ・・・。判定基準について、詳しく解説した資料が添付されているぞ。後でよく読んでおけ。」
いきなり死刑判決を受けたなんてもんじゃない。突然、心臓を撃ち抜かれ、もう死んでしまったことが理解できずに、血飛沫が吹き出す自分の胸を呆然と見つめているような惨状だ。頭が真っ白になって、世界がグルグル回っている。でも、かろうじて失神しなかったのは褒められることとみたいだ。この瞬間、卒倒して崩れ落ちてしまったり、腰を抜かして失禁してしまう生徒は、かなり多いらしい。というか、体格も良くいかにも男らしい生徒ほど、パニックしたり気を失ってしまうことが多いんだそうだ。それはそうだろう。突然、お前は去勢することになった。チンコとキンタマを切り取る、と言われて、平然としていられる男子は、まずいないだろう。

「あんまり落ち込むなよ。お前華奢（きゃしゃ）だし、女顔だし、性格診断も女性寄りだから、むしろ良かったんじゃないか？」

「それと性転換対象者はひとつ上の階級になれるから、お前は１２００点台にもかかわらず第三階級だ。これは一生続く肩書だから、結構大きな特典だぞ。階級が上がると結婚するときも選択肢が増えるし、体力がないお前には、かなり有利なんじゃないか。総合的には決して悪くない結果だと思うぞ。」

　そんな先生の言葉なんて耳に入らず、おぼつかない足で席に戻る。

「あ、でもまだ男性化希望者が出なければ望みはあるんじゃ・・・。」

席に戻ってそう思い込もうとしたが、次の瞬間その望みは消える。出席番号順で女子に移り、前の席にいた榊さんが呼ばれたからだ。

「榊、おめでとう。お前、前から男になりたいって言ってたもんな？・・・２９１１点。クラストップで学年トップでもある。勿論、男性化対象だ。」

　満面の笑みを浮かべた榊さんが、青いカードを受け取るのが見えてしまった。救いの蜘蛛の糸は、僕の目の前でプッツリと切られてしまい、今度こそ本当に死刑が執行されてしまったと悟った瞬間だった。

　そこからはもう何も覚えていない。あとで聞いた話だと、坂野は皆に握手して回り、「俺のチンコは無事だったーっ！！」とか「俺はこれから心を入れ換えて真面目になるぞー！！」と叫びながら、全身で喜びを表していたようだけど、そんなことはまるで目に入っていない。

　先生から、明日は土曜日だけど１０時に登校して去勢処置を受けること、正式な性転換手術は８日後の来週末になること、法令により拒否することはできないので、手術承諾書に保護者の署名と自分の署名をして、明日持ってくること、今この瞬間から女子として扱われるので、トイレを間違えないようにすること、できるだけ女言葉を使うこと、明日登校するときは女子の制服か、女性用の私服を

着てくること等を告げられ、気づいたら家路についていた。心配して家の近くまでついてきてくれた友人が後から話していたところでは、赤信号を見もせず渡ろうとしたり、足を踏み外して側溝に片足を入れてしまったり、歩道の段差に躓いて転んだりと、まるで夢遊病者のようだったらしい。（しかも、僕にはその間の記憶が一切ない。）

どこをどう通ってきたのか、まるで記憶がないまま、気がついたら自分の部屋でベッドに突っ伏していた。

第４話　絶望

「あ、あのっ、今日、これ、渡されちゃった・・・。」
その夜の夕食時、僕は試験結果である赤いカードを皆に見せた。
「それって・・・？・・・まさか・・・！！」
母さんが困惑したように聞いてくる。
「うん・・・、試験、ダメだった・・・。それで来週末、性転換手術をされちゃうんだ・・・。」
別に家族に言い訳をするつもりはないけど、何か説明しなきゃ、と気が焦る。でも、恥ずかしくて、怖くて、身体が固まってしまい、何も話すことができない。思考停止とは、こういうことを指すんだろう。
父さんと第一妻の芳恵さんは、あまり興味なさそうな顔だ。僕のことを、あまり良く思っていない芳恵さんは当然だけど、多分父さんとすれば、芳恵さんが産んだ長男で僕とは腹違いの義朗兄さんが、第一階級男子として既に有名国立大学に進学しているから、僕のことなど、どうでも良いのだろう。
「私はこれ。」
千博が青いカードを出した。千博はクラストップの成績だったから、やはり男性化を希望したのか。僕とはえらい違いだ。
あれ？でも、そうすると、付き合っていた勝美はどうするんだろう。勝美は千博にベタ惚れだった筈だけど、知っているんだろうか？
そんな考えが一瞬、頭を過(よぎ)ったが、父さんはまるで興味がないという顔で、僕たちの顔も見ずに味噌汁を飲みながら言った。
「そうか。では、これからは優稀のことは女子として扱うことになるな。明日から千博と席を入れ換えて、博美と環との間の席に座り、これからは家事を手伝いなさい。」
父さんは昔の人のような価値観を持っていて、極端に男尊女卑の

考え方をするんだ。家の中では、特に徹底している。
「はい、わかりました。」
「それから千博、お前はこれから杉田家の次男として、立派な第一階級男子になれるよう一層頑張るんだぞ。」
「はい、わかりました。」
　そのような話をしながら、父さんが2通の手術承諾書の保護者欄に、何の躊躇（ちゅうちょ）もなくパパッと署名した。千博はもう自分の承諾書に自分で署名していたが、僕は自分で署名するべき場所に、署名するのが怖くて、まだ空欄にしているのに・・・。
　父さんに一瞬で引導を渡されてしまい、泣かないと決めていたつもりなのに思わず涙が溢（あふ）れてくる。
「男子たるもの泣いてはいけない。と言いたいところだが、お前はもう女子だからな。好きなだけ泣くといい。人前で泣くことができるのは、女子だけに許された特権だ。」
　赤いカードを渡された瞬間から、女子として扱われる。でも、だからといって、もう幾ら泣いても良い、と言われると、父さんから見捨てられたことが改めて胸に迫る。
　出来の悪い僕など、父さんに何も期待されていないのは知っていた。第一階級で、メガバンクの重役をしている父さんにすれば、第三階級にもなれない僕なんか、きっと兄弟姉妹の中でも、みそっかすの員数外なんだろう。だけどこの仕打ちはない。思わず涙が止まらなくなる。いくら自分の責任だとはいえ情けなくて悲しくて、さらにこれからのことが怖くて俯（うつむ）いてしまう。
「千博、お前は念願かなって第一階級男子になるんだ。むやみに泣いたりしないようにな。」
　千博は僕と同い年で腹違いの女の子だ。僕より1カ月だけ遅く生まれたので、戸籍の上では妹なんだけど、赤ちゃんのときからずっと一緒に育ってきたので、感覚的には双子の兄妹だ。あ？もう姉弟になるのかな？いずれにせよ、義朗兄さんと同じく、とても優秀で、勉強もスポーツもクラスでトップ、多分学年でも榊さんに次いで2

番位じゃないかな。やはり第一階級出身の芳恵さんは優秀なんだろう。（ちなみに母さんは第三階級出身らしい。もっとも、女性は結婚するときに階級が問題になることはあっても、結婚してしまえば、もう階級は関係ないみたいだ。ただし僕みたいに子供の出来が悪いと、厭味を言われたりするけど・・・。）
よくあることらしいんだけど、第一妻と第二妻では、妻同士あまり仲が良くない。もっとも、我が家の場合、仲が良くないと言うよりは芳恵さんが一方的に母さんを良く思っていないだけみたいだ。まあ、妻を複数持つことが多い第一階級男子の家では、珍しくもないんだろう・・・。
頭も家柄も良くて第一階級の芳恵さんは、容姿が良いだけで第三階級出身の母さんを第二妻に加えたことを根に持っているんだと思う。いや、あれは階級とは関係がない、単にモデルのように美人でグラマーな母さんに嫉妬しているだけかもしれない。芳恵さんだって、特別美人という程ではないにしても、普通に綺麗で充分に魅力的なのに。
「女の子が二人になって、羨ましいわね。私が産んだ子は二人とも男子になってしまったので、ちょっと寂しい気持ちだわ。」
母さんをがっかりさせないようにと頑張ってきたはずなのに、こんな厭味まで言われてしまった。僕はどんどん精神的に追い込まれてしまい、もう何をどうして良いか、わからない。べそをかきながら、涙を拭うこともできず、震えながら俯いて固まってしまう。
「えぇ、可愛い娘二人と、それに息子にも囲まれて、幸せですわ。」
「大丈夫よ？優稀。私がついてるから。何も心配することはないわよ。」
嫌味を言われても、変わらず優しい言葉をかけてくれる母さんに、僕はたまらず泣きついてしまった。
「・・・まあ、さすが、頭の悪い遺伝子ですこと・・・。」
「母さん、いい加減にして！家族で悪口を言い合うのは止めようよ。何で私の男性化を喜んでくれないの？」

千博が窘（たしな）めてくれた。
「そうだな、我が杉田家としては、優稀が女になって、千博が男になる訳だから、息子も娘も、どちらもプラス1とマイナス1で、男三人、女二人というのは変わらない。父さんとすれば、男子でも女子でも、自分の子供であることには変わりはないし、優稀と千博の立場というか役割が入れ代わるだけだ。自分で望んだ千博は勿論のこと、不本意な結果になってしまった優稀も運命を受入れ、二人ともそれぞれ、新しい人生を精一杯生きていくように努力しなさい。」
父さんが話を総括し、その場はお開きになった。
いつもは父さんが一番風呂に入ったあと、兄さんが風呂に入り、その次が僕の順番なんだけど、今夜からは千博が義朗兄さんの次で、僕はずっと後になる。我が家は父さんの方針で、こういうところにまで男尊女卑の精神が貫かれていて、男性が先、女性は後というルールが厳格に決まっている。でも今夜は特例で、僕が一番風呂に入るように義朗兄さんから勧められた。本当は赤いカードと青いカードが渡されてしまったから、もう千博は男性扱いで僕は女性扱いなんだけど、普段はルールに厳しい父さんも黙って譲ってくれた。
本当に久しぶりの一番風呂で、確か前回は父さんが出張で、兄さんは大学の合宿とかで二人ともいなかったときだから、もう2年位前だろうか。ゆっくり風呂に入りながら、自分の身体をじっくり観察しつつ、念入りに洗ってゆく。
最近、ようやく少しは大人の男性らしい身体つきになってきた僕の身体。陰毛は中学1年の3学期で生え揃ったけど、腋毛は最近になってやっと、ちょっとだけ生えてきたところだ。それにあわせてすね毛も少しだけ濃くなったようにも思う。といっても、まだ髭は生えていなくて、鼻の下にかすかに産毛がある程度だ。
肝心のペニスは、最近、明らかに一回り大きくなったような気がする。勿論、まだ皮は剥けていない。でも、中学1年の夏休みに精通があって、その後オナニーをするようになったときに、本やネットで皮を剥くようにすると良いと出ていたので、それから自分で皮

を剥く努力を続けた結果、２年生の春休みには何とか皮が全部剥けるようになった。最初は少し痛かったけど、それからは極力、皮を剥いてオナニーをするようにしていたら、亀頭の部分が１年で随分発達してきて、僕の体型には似合わないような、立派なペニスになり、勃起すると手で簡単に剥けるようになった。他の男子のペニスをじっくり見たことはないけど、修学旅行や林間学校の風呂やシャワーでチラ見した限りでは、僕のペニスと睾丸は、多分クラスの平均的なサイズか、もしかすると、やや大きいほうかもしれないと密かに考えていたんだ。これはクラスの中で、男女あわせても一番チビな僕にとっては唯一、他のみんなと同じ位の、平均値的な身体の部分ではないかと誇りに思っていた。

でも、それももう見納めだ。ようやくここまで育った僕のペニスは、本来の用途に一度も使われないまま、来週には切り取られてしまうし、睾丸に至っては明日、抜かれてしまう。そう思ったら、また涙で視界が曇ってしまった。これまでも、お風呂場で勃ってしまい、オナニーしたこともあったけど、この状況ではとてもオナニーの気分になどならないし、そもそもフニャフニャで刺激しても元気にならない。男性のインポは９割が精神的なものだと、前にネットで見たことがあったけど、まさにこれだ。明日にはもう去勢されてしまい、キンタマを抜かれてしまうので、僕が男でいられる最後の夜なんだから、せめて最後のオナニーをしておこうと、いろいろやってみたり、思い切りエッチなこと（それこそ、橘さんとの初体験など）を想像してみたりもしたのだけれど、どうやっても僕のペニスは、うなだれたままだった。もう、僕の男の子としての人生は、終わってしまったんだ。さっき父さんに、キッパリ引導を渡されたというのもあるかもしれないけど、あの赤いカードを渡されたときから、女子として扱うというのは、こういうことだったんだ・・・。

ペニス同様、うなだれたまま風呂から出たが、考えることはただひとつだけ。あそこを切り取られてしまう恐怖と絶望で頭が一杯となり、怖いのと情けないのとで震えながら、ベッドで布団を被って

涙を噛み締めていたら、ドアがノックされた。
「優稀、起きているんでしょ。入って良いかしら。」
返事をすると、泣いているのがわかってしまいそうで黙っていると、母さんがそっと入ってきて僕のベッドに腰掛けた。
「母さんは芳恵さんみたいに頭がよくないので、優稀にも大変な苦労をかけてしまいごめんなさいね。もう少し優秀な遺伝子だったら、優稀もこんなことにならず、父さんの優秀な遺伝子と合わさって義朗や千博みたいに頭の良い子供になれたのにね。」
母さんの言いたいことはわかる。でも、成績については僕の責任だ。少なくとも筆記試験でもクラスで下から数えたほうが早いこと自体が、今回の結果になってしまった訳だし、僕と同じように背が小さくて華奢(きゃしゃ)な加藤君は、運動点や身体点では僕と似たような点数だったけど、筆記が1300点もあって、堂々と第二階級に入っている。つまり僕も頑張ってきたにせよ、他の子はもっと頑張ったに違いない。それを遺伝のせいにするのは卑怯だ。男らしくない・・・、と言おうとして、もう自分は男としては扱われなくなってしまったことに気付き、またしてもやるせない気持ちになって、母さんの膝に顔を埋めて、堰を切ったようにわんわん泣きだしてしまった。
母さんは僕が落ち着くまで、長いこと僕の頭を抱きしめて、背中をやさしくさすってくれた。
芳恵さんよりも明らかに大きい、母さん自慢の豊かな胸の感触、それはかすかに覚えている、小さいときに母さんのおっぱいを飲んでいた記憶を呼び起こし、ようやく僕はしゃくり上げながらも少しだけ落ち着いてきた。（僕は乳離れが遅く、４歳位まで母さんのおっぱいを飲んでいたそうだ。）
もう一度、母さんのおっぱいを吸ってみたいな、という気もしたが、さすがに中学3年生でやったら母子相姦の変態親子になってしまう。
あれ？・・・ふと気がついたんだけど、僕はもう女子扱いだから、母子相姦にはならないのかな？・・・女の子なら、中学生で母さん

のおっぱいを触っても、許されるんだろうか。
　少し気まずい思いで目を伏せていると、母さんが静かに語りだした。それは、今日の僕の試験結果など、頭から消し飛んでしまうような驚くべき話だった・・・。

第5話　衝撃の事実

「ごめんなさいね。でも遺伝的なことを言うと、実は母さんは優稀の本当の母さんではないのよ。父さんは間違いなく優稀の父さんだけど・・・。」
「？？？」
「実はね、この話は誰にも話したことがなくて、父さんも知らないし、今回のことがなければ、一生秘密にしておくつもりだったのだけど、優稀がこんなことになってしまったので、優稀にだけは話しておくわ。誰にも絶対に言わないでね。」
何だか真剣な顔で話しだした母さんの目を見つめて頷（うなず）く。
「実はね、母さんも男の子として生まれたの。そして優稀と同じように、中学3年のときに女性化対象者にされてしまったの。もう20年ほども前のことだったわ。」
「まさか・・・？！」
「当時は今と違って、成績だけで決まるのではなく、成績以上に体力だとか身体つき、女っぽい顔つき、性格、全体の印象、そういったものがずっと重視されていたの。母さんの成績は良くはなかったけどビリではなくて、運動点を入れても母さんの下に何人か居たわ。」
「でも、母さんは小さいときから女の子と間違われることが多い子供で、小学校の頃からいずれは女性化するんでしょって、周りからよく言われてきたの。実際、そう言われることが不思議でないような、女の子っぽい可愛い子供でね。身体つきだけでなく、仕草とか話し方とか、女の子に近いと思われていたみたい。」
「少なくとも、母さんの両親は、いずれ母さんが女性化対象になるかもしれないということを、小さいときから考えていたフシがあるの。でも母さん自身は、そんなことが起きるとは、夢にも思ってい

なかったし、みんなで母さんのことをからかっているのだと思っていた。だって、女性になって男性を好きになる自分なんて、まるで想像できなかったから。」
「だから、中学3年の秋に能力判定試験があって、その結果、総合的な判定で女性化対象にされちゃったときは、母さん自身あまりのショックに教室で卒倒してしまい、救急車を呼ぶ騒ぎになった程なのよ。」
「そんな・・・。でも成績は・・・。」
「ええ、成績はそこまで悪くなかったけど、今もやってる性格判断テストとか、体格・体力測定、これは当日の点数とか成績だけじゃなくて、潜在的な能力とか伸び代も重視されたらしいけど、さらに加えて当時は先生以外にも外部の専門医がやってきて、クラスでの様子などをしばらく観察するということもあったりして、それら全体で見て、母さんのクラスで女性化対象の一番は母さんだということになっちゃったの。まあ、これは女性から男性になりたい場合でも同様で、特に男子になりたい女子生徒が複数居た場合には、その中で成績が一番というだけでなく、男性化適正が一番なのは誰かという判定があったりしたのを覚えているわ。ようするに男らしいのは誰か、女らしいのは誰か、性転換することが、本当に本人にとっての幸せになるかどうか、という考えね。といっても、勿論これは建前だし、そもそも成績で大差がついたら話は別なんだけど。」
「・・・そうなんだ・・・。」
「まあ、これはどうしても主観とかが入ってしまい、判定結果に客観性がないっていう批判も大きかったことから、だんだん今のように点数重視になってきたらしいけど、でも成績によって階級分類がされることから、特に肉体労働者となる第四階級は、優稀みたいに成績だけでなく体力が問題視されるようなことも増えてきて、どっちが正しいというものではないのでしょうね。日本は少子化で、国が滅亡するという瀬戸際にまで追い込まれてしまったから、とにかく優秀な子供を一人でも多く産んで貰うための試行錯誤がまだ続い

ているのかもしれないわ。」
「ともかくそういう訳で、倒れてしまった母さんを送りながら、学校から校長先生と担任の先生、それに校医の先生とか保健の先生とかが揃って自宅を尋ねてきて、男性・女性の適正化率の説明とか、生活態度など、どうして女性化対象第一位になったかということを両親と話し合っていたの。そこには母さんは入れなくて、自分のベッドで2時間位横になっていたら、ようやく中に入るように言われたんだけど、父さんが開口一番言ったのは、『女性になるのは、そんなに嫌か？』だったの。」
「・・・それは・・・。」
これは酷い。さっきの父さんの口ぶりも悲しかったけど、そんなことを言われたら、僕だったらきっと、人生に絶望して自殺してしまうに違いない。
「この一言で、父さんは私に女性となることを勧めていることがわかってしまったの。それで一気に心が折れて頭が真っ白になり、もう何も考えられなくなったわ。」
「その後のことは、いまだに記憶が飛んでいて良く覚えていないんだけど、気がついたら手術承諾書に署名させられていたわ。自分と保護者の署名、それから校長と担任と校医が署名したものを全部で3通作成して、そのうち1通を残して校長達はそそくさと帰っていったの。今も、忘れようにも忘れられない、母さんの心の大きな傷だわ。」
「その夜は、もう家族の会話も何もなく、母さんは呆然としてベッドの中で震えていた。というか、当時は今と違って翌日に学校に行く必要もなかったので、そのまま手術のある1週間後まで、ずっと自分の部屋に引き籠もって魂が抜けたみたいになっていたの・・・。」
「まるで刑の執行を待つ死刑囚の心境だったわ。考えるのは去勢手術のことばかり。オチンチンとタマタマを切り取られちゃうって、どんなことなんだろう、自分はそんなに悪いことをしたんだろうか、

そんな考えが頭に浮かんでは消えていくのよ。将来の自分の人生とか、女になったらどうなるのか、そんなことはまったく考えることもできず、毎日股間を押さえては、そこが切り取られちゃう恐怖に震え、涙を流していたの。」

「・・・母さん・・・。」

「ネットでいろいろ去勢のことや、去勢の歴史など調べてもみたわ。でも気が滅入るようなことばかり。昔は刑罰だったとか、捕虜が反抗しないためだとか・・・。去勢された男性がどうなるのか、という写真も出ていたりして、見るからに惨(みじ)めで、自分が重大犯罪人になったような気分だったわ。」

「あとから考えると、女になることがどうしても嫌だったということではなかったのかもしれないの。それよりもとにかく、切り取られちゃうということだけに頭が行っていたのね。勿論、そんなことを冷静に考えるような余裕があったわけではないけど・・・。」

「せめて切り取られちゃう前に、当時ようやく覚えたばかりのオナニーをしようかと思ってもみたけれど、そんな精神状態では勃つものも勃たないのね。それで、『ああ、もう自分は男として終わってしまったんだ・・・。』と考え、また涙するという悪循環の1週間だったわ。」

「・・・・・。」（僕とまったく一緒だ・・・。）

「両親とも、腫れ物に触るみたいに接してきて、部屋に入ってくることも声をかけてくれることもせず、食事をドアの外にそっと置いておくだけだったの。きっと、私にどう接して良いのか、両親としてもわからなかったんでしょうね。」

「手術当日の朝は、父さんに車で病院まで送って貰ったらしいんだけど、母さんにはまったく記憶がないのよ。病院のどこかの部屋で、ストレッチャーに載せられて、看護婦さんが母さんの服を脱がしていたような断片的な記憶はあるんだけど、手術が終わって自宅に帰ってくるところまでの記憶は、見事に欠落しているの。きっとトラウマが記憶を封印しちゃったのね・・・。」

「だから、母さんには今の優稀の心境がとてもよくわかるのよ。むしろ、よく我慢して耐えていると思うわ。本当に偉いわね。だから今夜は、母さんの胸で思いっきり泣きなさい。そして涙で辛い想いを流してしまうのが良いわ。結果が出ちゃった以上、もう母さんがしてあげられることは何もないんだけど、優稀の悲しみ、恐怖、絶望、どれも母さんは全部経験しているから、何でも聞いてちょうだい。」

衝撃の告白で、僕は自分のことなど考えられないほどのショックを受けた。だって自分を産んでくれた母さんが、実は男性だったなんて聞いて、落ち着いていられるわけがない。僕は自分が明日には去勢されてしまうことも忘れて、母さんの顔をまじまじと見た。何となくこのことは、今夜だけしか話してはいけない、今夜を逃すと二度と聞くことができないことだと、雰囲気でわかったので、母さんの膝と胸に頭を挟まれたまま、いろいろと聞いてみた。それは、母さんのことについての興味が2割位、あとは自分の将来に対する不安や心配、恐怖が8割位だった。

「そうね、今は性転換したことを隠す人は、あまりいないけど、当時は性転換したことは、男女どちら側でも、他人には知られないようにする、という考え方が普通だったの。それで、過去の男性だったときの痕跡というか、証拠になるような持ち物や名簿、アルバムの類は、学校でも家庭でも直ぐに廃棄させられたの。学校の記録も、過去に遡って修正されたらしいし、戸籍も直ちに書き換えられて、かつて男性だったということは、どこを見ても出てこないの。まあ、戸籍については今も同じ扱いで、性転換したということは戸籍からはわからないようになっているらしいけど・・・。」

「母さんの小さいときの写真は、家族写真も含めて見つけ次第処分されちゃったわ。だから母さんは、性別がわからない赤ちゃんのときの写真は残っているけど、幼稚園から小学校、中学校までの写真というのが、一切残っていないのよ。」

そう言って、ちょっと悲しそうな目をした。確かに母さんの小さ

いときの写真って、僕も見た記憶はない。生まれたときの赤ちゃんの写真は見たような気もするけど、その後は全部高校生以降のもので、今と変わらない美人でグラマーでモデルのようなな母さんが写っていたものだ。

「写真のデジタルデータは、どこに隠してあっても、ネットから簡単にAIサーチされて発見されてしまうでしょ。そして自動的に消去されちゃうので、小さいときの写真は一切ない筈なんだけど、実はプリントしたものがこの1枚だけ残っていたの。」

大事そうに取り出して見せてくれたのは、白黒で3センチ四方位の証明写真だった。そこには、詰め襟を着て髪形も短くさっぱり刈り込んでいるが、顔つきや目元とか鼻や口など、母さんにそっくりで、かわいい美少年が写っていた。

「これはね、3年生になったときに学生証の証明写真を撮って、1枚を提出したけど、もう1枚予備があって、偶然筆箱のフタの裏のところに入っていたの。母さんが性転換する半年前位の写真よ。今となっては、母さんが男の子だったという唯一の証拠かしらね。」

裏側には、掠(かす)れかかった手書きの文字で、20xx年4月1日、斎藤博海と書いてあった。母さんの旧姓が斎藤というのは知っていたけど、男の子だった母さんの名前は、同じ読みでも最後の漢字が違っていた・・・。そうか、斎藤博海君って名前だったのか・・・。

母さんが秘密にしていた理由が、今はっきりわかった。当時の習慣とかもあったのかもしれないけど、この話は芳恵さんにだけは絶対に知られてはいけないんだ。ただでさえ美人でグラマーな母さんの女力(おんなりょく)に嫉妬して、何かと母さんに辛くあたる芳恵さんが、もし母さんがもともとは美少年だったなどと知ったら、どんな酷(ひど)いことになるかは想像に難くない。だからこの話は本当に今夜限りで封印する必要がある。僕と母さんと二人だけの秘密だ。多分、母さんはもう絶対にこの話をしないだろうし、僕も死ぬまで話すつもりはない。よく、墓場まで持っていく秘密という言葉があるが、まさにこれなんだろう。

「今は昔と違って、性転換したことを隠すようなことはしないから、優稀の昔の写真とか記録は、残しておいてあげる。ただ父さんは、ああいう性格だから、服なんかと一緒に処分しろと言うかもしれないわ。隠し場所は母さんと優稀だけの秘密にしましょうね。」

「母さんから、今の優稀にしてあげられる、たった一つのアドバイス。さっき母さんは、女になることがどうしても嫌だったわけではなかったのかもしれないと後からわかったと言ったわよね。実際、人間の幸せというのは、男でも女でも、そんなに大きく違うことはないというのが、両方の性別を経験した母さんの結論なの。それどころか、父さんに見初められて第二妻となり、優稀を産んだときは、本当に幸せだった。優稀と環、それに晶の三人の子供を、自分のお腹を痛めて産んだことの幸せ、それに三人の子供を育て、家族一緒に暮らす幸せ・・・。多分、これは男性のままだったら、絶対に経験することはできなかったと思うわ。」

「だから、優稀も今はショックで何も考えられないかもしれないけど、長い人生の中で見てみると、女性になることは、必ずしも不幸ではない、むしろ両方の性別を経験できるすばらしい人生だと思える日がきっと来るはずなの。恐怖も不安も、今の一瞬だけ。でも幸せは一生のもの。そして人生の幸せは、男女平等にあるものなのよ。」

　そんな話をしながら、母さんにやさしく抱かれてベッドに横たわっていた僕は、自分一人ではなかったんだ、母さんという大先輩がついていてくれるんだと安心して、いつしか眠りに落ちていた。

第6話　千博と勝美（1）

博美さんが優稀の部屋に入っていった。先程、父さんや義朗兄さんに一番風呂を譲られていた優稀だけど、本当にもう魂が抜けてしまったような状況で、とても見ていられない。夕食時は何を話しても上の空で、メソメソと涙を流し、風呂から出ても幽霊のようにフラフラと自分の部屋に閉じこもると、まだ8時前だというのに、どうやら布団をかぶって電気も点けず震えているらしい。博美さんとすれば、自分の生んだ子供が、自殺しそうなほど苦しんでいるんだから、それは何とかしようとするだろう。こういっちゃなんだけど、父さんは優稀の悲しさや恐怖に、まったく無頓着で気遣いのかけらもない。これまでもそう感じることは多かったけど、夕食のときのあの口振りは、いくらなんでも酷い。それに私と優稀の承諾書にサインしたときの様子を見れば、優稀が泣きだすのも無理はない。

名前どおり優しい性格の優稀が、恥ずかしさや悲しさ、怖さに耐えながら必死で話をしているのに、そんなことにはまったく興味がないという態度、あれは典型的な第一階級男子の尊大で傍若無人な性格そのものだ。もっとも、それは私の男性化についても、同じような無神経さというか無関心ぶりだったのだけど・・・。

と、いきなり優稀が号泣する声が聞こえてきた。博美さんと話して、張りつめていた気が緩んだんだろうか。

優稀はああ見えて、まず泣くことがない子だ。優稀が泣いているのを見たのは、もう何年前のことだろう。確か優稀が可愛がっていたシロが、家の前で車に轢かれて死んだときだったから、もう8年前になるのかな。まだ小さかったあのときでさえ、涙をポロッと零しながら、それでも必死に耐えていたのに、今日は帰って来てからずっと泣きっぱなしだ。女になるのがどうしても嫌なのはわかるし、

突然のことでショックを受けているのも当然だけど、優稀の性格からしても、この号泣は尋常じゃない。
　以前、どこかで読んだ記憶なのだけど、男の子にとって、あそこを切り取られるということは、死刑などよりも何倍も恐ろしい拷問であり、それによって実際に精神に異状を来して自殺する子も多いという。だから、母親が小さい男の子を叱るとき、「そんなことをすると、おちんちんをとられちゃうわよ！」というのは脅し文句の定型句になっているし、敵国に捕まった屈強な男性が、あそこを切り取ると脅されて（または本当に切り取られて心が折れてしまい）秘密を白状してしまうというのも、スパイ小説のお約束らしい。
　確かフロイトの説によると、男の子にとって、オチンチンは自分のアイデンティティのすべてであり、それを切り取られることは、自分の全人格を否定され、お前はもう価値のない、生きていても意味がない人間だと宣告されるに等しいのだという。女の子にとっての乳房とか、子宮や膣、卵巣といった内性器とは、まるで意味や位置付けが異なり、ある意味心臓よりも大事な自分の分身、いや、自分そのものなのだという。
　確かに今回の優稀の取り乱した様子を見ていると、この説は正しいように思えてくる。
　しかし、だとすると、私のために、私の我儘(わがまま)のために、自分から志願して男を捨てると言ってくれた勝美・・・。あそこを切り取られるという選択をしてくれた勝美には、どんなに感謝をしても、し切れない。勝美は、私と恋人でなくなることのほうが、オチンチンを切り取られることより、何倍も怖いと言った。そして私と恋人で居続けられるなら、オチンチンを切り取られることなど、たいした問題ではないとまで言い切った。そこには、何の恐怖も迷いも感じられなかった。
　今日、勝美は約束どおり３番の生徒を大きく引き離して、私の次の２番（つまり男子ではクラストップで、それどころか学年全体でも男子では２番）の成績を取り、希望ということで赤いカードを受

け取った。
　それを誇らしくクラスの皆にみせつけると、満足した様子で私のところにやってきて、私の青いカードと並べて見入っていたが、私には最高の笑顔を見せてくれた。私としても、自分の性器を交換する相手があなたで良かった。変な男子の性器を移植されたり、自分の性器が変な男子に移植されるのは嫌だったけど、あなたなら何の心配もない。私も安心して手術に臨むことができる。いや、むしろあなたとの性器交換が待ち遠しい。
　・・・勝美・・・。あなたの、この思いやりと、私に対する変わらない愛情に、私は一生をかけて全力で恩返しする・・・。「償い(つぐな)」などという言葉を使うと、きっとあなたは嫌がるでしょう。だから、そうは言わない。でも、どんなことがあっても、それこそ死が二人を別つまで、あなたを生涯にわたって愛し続けるわ。勝美・・・。
　これからは、私があなたをリードしてあげる。あなたの人生をメチャクチャにしてしまったのだから、私が全責任を持ってあなたを幸せにする。そして、あなたが私のためにしてくれた、この勇気ある決断を、絶対に後悔させないと約束するわ。勝美・・・。
　・・・今夜は、あなたが男の子でいられる最後の夜ね。今頃、何を考え、どうしているのかしら・・・。男の子としての最後のオナニーでも楽しんでいるのかな・・・。
　勝美・・・。勝美・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「どうゆうこと？」
　勝美が聞き返した。学校帰りに、いつもの城址(じょうし)公園の木陰のベンチに並んで座り、私がまもなく実施される能力性別判定試験で、男性化を目指すと告げたときだ。
「話したとおりなの。あ、別に性同一性障害とかじゃないのよ。と

にかく男子になりたい、それがすべてかな。敢えて理由を探すとすれば、母さんから少し離れたい、干渉されたくない、それが最大の理由かもしれない。」

「それに、私は勉強も体力や運動能力も、多分クラスで一番だと思っている。だったら自分の可能性を追求してみたいの。それって変かしら？」

「いやっ、そっ、それはっ。でっ、でもっ。そうなると僕はっ・・・？！」

　この男の子は遠藤勝美、名前は「かつよし」と読むのだけど、私も含めて親しい友人は皆「かつみ」と呼んでいる。ただし本人は、そう呼ばれるのがあまり好きではないらしい。クラスメートで、付き合って2年半になる、私の彼氏である。一応、学校でも双方の両親も公認の仲なのだが、まだ手をつなぐ程度の清い関係。先月、私の家に遊びに来たとき、私から求めて初キス（といってもチュッとするだけのバードキス）をしたけど、最後の一線はおろか、ディープキスもしていない。でも、彼は私にベタ惚れで、本当に一途に私のことを愛してくれている。

　彼の家は、私の家の裏手に広がる城址（じょうし）公園の反対側にあって、お互いこの公園で小さいときから遊んでいたので、何となく見知った顔だった。けれど公園がかなり広くて距離が離れていたため、幼馴染みというほどには親しくなかったし、幼稚園は別々だった。

　小学校は一緒で、小5のときに同じクラスになって、そのまま小6も一緒となり、同じ中学に進学したときに彼から告白された。小学生時代から、一緒に居ると何となく楽しくて、波長が会うなという気がしていたので、告白されたときにも、別に嫌な気分だとか迷惑とは思わず、付き合ってみても良いかなという程度の軽い考えで、その場でOKした。もっとも、当時の私はまだ幼くて、小学校時代の気持ちのまま、付き合うということがどういうことか、本当に上辺だけしかわからなかったのかもしれない。

　しかし、そんなスタートでも、付き合ってみると、実にウマが合

うというのか、何となく落ち着いて居心地が良い。それに、とにかく私のことを常に一番に考えてくれて、大事にして貰っているんだという感覚が心地よくて、まあ理想的な彼氏なんだろうと思っている。

　これまで2年半、取り立てて大きな進展はないものの、中学生としてはごく普通の健全なお付き合いをしてきたつもりだ。一緒に登下校したり、週末はデートで映画館やショッピングセンターに行ったりして、クリスマスや誕生日には手作りのプレゼントを交換したりもした。デートと言えるのかどうかわからないけど、学校（ちなみに小学校と中学校は隣り合わせ）からこの城址公園まで二人で一緒に帰って来て、ここでしばらく話をしてから、それぞれの家に帰るのが日課だった。もっともこれは、小学校時代から通学路が一緒なので、とりたててデートということではないだろう。またお互いの部屋で一緒に勉強したり、宿題の課題を一緒にやったりと、二人きりになることも普通になり、夜おそくなることもあったけど、彼はとても紳士で自分からは絶対に手を出さない。彼の家で遅くなったときは、城址公園を横切って私の家の前まで送ってきてくれるけど、私から手を握らないと、手を繋ごうともしないし、肩を抱くとか、そういったことは絶対にしない。でも、私が寒そうにしていると、自分の着ているパーカーを脱いで私に羽織ってくれたりと、いつも私のことを一番に考えてくれている。

　もう、とっくに双方の両親にも紹介して公認の仲となっていたので、もう少し伸展があるかとも期待しているんだけど、最初に手をつないだのも、キス（まだバードキスまで）をしたのも、私から求めたからだ。

　彼はその後も、おそるおそる雰囲気を読みながら、まるで私の許可を求めるような視線を交わしてからでなければ、手を握ることもしない。でも、本当に私のことを愛していて、驚くべき精神力で自分を律しているのは良くわかる。というのは、せんだって彼の部屋で2回目のキスをしたとき、彼はズボンの前を、これ以上ないくら

い大きく膨らませて、真っ赤な顔で鼻息も荒く、今にも私を押し倒すかと思ったのに、手をぎゅっと握りしめて歯を食いしばるような顔で、必死になって宿題の図形の問題を解いていた。

　この日は彼の家には誰もいなくて、もう少し進展するのかと少し期待もしたけど、そのまま私が帰るまで、ズボンの中にまるで折り畳み傘でも隠しているのではないかと見紛うような状態のまま、必死になって最後まで我慢しきったのだから、多分この年頃の男の子としては、驚異的な精神力に違いない。

　彼は私よりも背が低くて、男子ではクラスで二番目にチビだけど、運動神経は抜群でサッカー少年だ。小学生のときから地元の少年サッカークラブに所属していて、今では中学校のサッカー部で副主将兼エースストライカーでもある。足が早く運動能力もトップクラスだし、また勉強も常にクラスで男女合わせて5番以内には入っていて、それどころか私に次いでクラス2番（ということは男子のクラストップ）になったことも何度もある。このまま行けば間違いなく第一階級に入れるだろう。だから、私と彼が付き合っているのは、クラスの中でも公認で、まあ似合いのカップルだと見られている。（ただし身長差から、蚤の夫婦と呼ぶ人もいるけど、私も彼も、そんなことは気にしていない。）それと、少し前までは、ちょっと線が細くて中性的な少年という雰囲気だったのに、最近急に男らしくなり、声が低くなって脛毛も濃くなってきたみたいだ。

第7話　千博と勝美（2）（前書き）

連投します。次からは毎週末更新になると思います。

この後も、しばらく千博と勝美の話が続きます。

第7話　千博と勝美（2）

「勝美のことは愛しているわ。それはずっと変わらない。だから、今後、もし首尾よく私が男性になったなら、生涯にわたる親友としてずっと仲良くしていたいと思っている。」
「でっ、でもっ、それじゃっ、僕たちはっ。」
「そうね。恋人として愛し合うというのは、もう無理でしょうね。」
「そっ、そんなっ！！・・・もうすぐ試験があるから、それが終われば結婚できる年齢になる。そうしたら直ぐにでも千博と結婚したいなと、ずっと思っていたんだ。だけど、そうすると・・・。」
「そうね、私もずっと、勝美と結婚する未来を考えていたのよ。だから、本当に残念だし申し訳ないけど、それは諦めて貰わないと。」
「くっ、まさか、こんな形でふられてしまうなんてっ。そんなっ、そんなのってっ・・・。」
「ごめんなさい。勝美のことは今でも大好きで、私も心から愛しているわ。でも、男女の愛を育むのは、やっぱり同性では無理。私は腐女子ではないから、男性になってBLをするつもりはないし、そんな関係は勝美にとっても不毛でしょう。いつか将来、私に女性のパートナーができるのかどうかは、まだわからないけど、少なくとも男同士では恋愛関係にはなれないわ。だから是非、勝美とは一番の親友同士になりたいの。」
「うぅっ、くっ、どうしてっ・・・。」
「私の我儘（わがまま）で、あなたには辛い想いをさせてしまうわね。でも、私が男性になれるかどうかは、まだわからないわよ。」
「そんなことはないよ。千博ならば勉強はダントツでクラストップだし、運動も抜群、女子バスケ部の部長でエースじゃないか。これで選ばれないなら、試験の方法が間違っているに違いない。もう千博が男性になることは、確実だよ。そうか、そんなに男性になりた

かったのなら、是非とも頑張ってね。僕も応援するから。」
　むきになって、口ではそう励ましてくれた勝美だったが、もう魂が抜けてしまったようにがっくりして、心ここにあらずとは、こういう状態を言うのだろう。眼には涙を浮かべ、ちょっと何かあれば泣きだしてしまうに違いない。それでも健気に拳を握りしめ、喉から絞り出すように私を応援すると言ってくれて、本当に私のことを愛していたんだと、改めて感激した。
「うちのクラスだと、誰が女性化対象になるのかな。私と性器を交換することになるんで、あまり変な相手だと、ちょっと嫌だな・・・。試験の成績次第だけど、多分、仁科君か片桐君辺りになるのかな・・・。」
「やだっ！やだやだっ！！そんなのダメだっ！やっぱりダメだ！！」
「勝美・・・。」
「僕は絶対に許さない！千博のおっぱいやマンコが仁科だか片桐だかに移植されるなんて、そんなの耐えられない！！」
　いきなり勝美が叫びだした。普段の彼からは、信じられないようなキツい調子で、心の底から吠えるような強い下品な言葉。
「そっ、それにっ、それに、そいつらのチンコが千博に移植されるなんて、そんなことになったら、僕はきっと気が狂ってしまう！！」
「・・・ゴメン・・・。」
「千博に移植されたそいつらのチンコを切り落として、そいつらに移植された千博のマンコをくり抜いて、ついでに僕のチンコも切り落として、そうして僕は自殺するんだっ！！」
　鬼気せまる形相で叫ぶと、勝美は地面にうずくまって頭を抱え、涙をポロポロ零しながら「ちくしょうっ、ちくしょうっ、なっ、なぜっ、ちくしょうっ、うっ、っくっ、ちくしょうっ、うっ、ぅううっ」と震えながら嗚咽(おえつ)している。
　私の我儘(わがまま)が、ここまで勝美を追い込んでしまったことにショックを受けて、私は思わず勝美の身体を力一杯抱きしめた。そしてパニックしている勝美の頭を抱き起こすと、勝美の口に思い切りキス

をした。
「?!?!」
　軽いバードキスではない、舌と舌をからめ合わせる、ねっとりしたディープキス。勿論、私にとっては初めてだし、勝美にとってもやはり初めてだろう。驚いている勝美の口を無理やりこじあけて、私の舌を強引にねじ込むと、勝美の口内を舌が届く限り、舐め回した。また勝美の唾液を、音を立ててすすり、私の唾液を勝美の口に送り込んだ。
　はじめてのディープキスにびっくりして、これ以上大きく開けないくらい目を見開いている勝美の目を、私も1センチか2センチの距離で見つめながら、勝美の口内を舌で蹂躙していく。私の腕は、勝美の背中に回して、力一杯抱きしめている。
「うっ、むっ、ぁむっ、ぅむっ。」
　最初はびっくりしていた勝美が、いきなり私のことを力一杯抱きしめた。それと同時に、これまで絶対に自分からはキスをしなかったのに、急に自分から舌を思い切り入れてきた。
「ぅぐっ、むぐっ、ぁむっ、むむっ。」
　二人とも、息もできない位に必死で口を吸いあいながら立ち上がり、身体をしっかり密着させて強く抱き合った。口や上半身だけでなく、下半身もしっかりくっつけて密着させ、身体を少しでも一体化しようと、まるで立位のセックスをしているような体勢になった。私の貧弱な胸は彼の身体と私の身体とに挟まれてつぶれ、彼の股間はまたしても折り畳み傘を入れたようになり、その折り畳み傘は、私と彼の下腹部に挟まれて、石のような存在感を私に伝えてきた。
「ぁむっ、ぅむっ、むぐっ、んふっ。」
　お互い、相手に胸や股間を押しつけつつ、力一杯抱きしめあいながら、相手の口内をなめ回す。時間にすると、ほんの2~3分だったかもしれないが、随分長い時間に感じた。私は勝美の唾液を何度もたっぷり飲み込み、勝美も私の唾液を残らず飲み込んでいた。私も勝美も、最初はお互いの手を相手の背中に回してぎゅっと抱き合

っていたが、まず私が身体を勝美の身体にぐいぐいと押し付けあいながら、手をそろそろと回して勝美の身体を撫で始めた。すると、勝美も私に合わせるように、やはり身体をぐいぐいと押しつけてきて、特に股間を私の股間に必死に押しつけるように動かしだした。でも、多分、勝美は自分が何をしているのか、わかっていないようだ。無意識で必死に身体全体を私に押しつけてくるのは、男子の本能なのだろうか。私の股間に押しつけられている勝美の股間は、本当に折り畳み傘が入っているのではないかと疑いたくなるほどに、存在感を私の股間に伝えている。

ぼーっとした頭で、何となくセックスとはこんなものなんだろうかと考えていたら、突然、勝美の腰がガクガクと痙攣（けいれん）しはじめた。

「んっ、んんっ、んくっ、んひっ。」

口が塞（ふさ）がっているため、言葉にならない呻き声とともに、ガチガチに固く大きくなっていた勝美の股間が、腰の痙攣（けいれん）に合わせてビクンビクンと震えた、と思った瞬間、急に私の股間がじわっと生暖かくなり、それと同時に勝美は腰が抜けたように後へ倒れ込みながら、へたり込んだ。

「あぁっ、ぁひっ、あひっ。」

勝美は、どうやら目の焦点が合っていないような雰囲気で、まだ腰をガクガクと痙攣（けいれん）させ続けて、口からは涎（よだれ）が溢（あふ）れている。ふと見ると、黒い学生服の股間には白濁した粘液のような染みが大きく拡がっていき、それがみるみる拡大していった。中心からは、その白濁液が、どろっどろっとかなりの勢いでまだ沸きだしており、勝美の股間はすごいことになりつつあった。

「えっ、勝美っ、大丈夫？」

何が起きたのか、わからないまま、私が驚いて声をかけると、勝美は急に飛び上がるように私から離れようとしたが、腰が抜けてしまったのか足がもつれて転がって、そのまま私から逃げるようにへっぴり腰で立ち上がると、真っ赤な顔をして息をするのも苦しそうに言った。

「ごっ、ごめんっ！後で連絡する。本当にごめん！！」
　そう言い残して、まだ足腰が立たない老人のような様子で、ポケットから出したハンカチで必死になって隠すように前を押さえ、鞄も持たずによたよたと逃げるように自分の家の方角へ一目散に消えていった。
　ふと気がつくと、先程生暖かい感触があった私の股間は、スカートにぬるぬるとした粘液のようなものがべったりとついていた。手にとってみると、ちょっと生臭いような、栗の花のような匂いがした。
「えっ、これって、もしかして・・・。」
　私も、優稀がオナニーをしているところを、盗み見たこともあるし、優稀のごみ箱を片付けると、毎回、まさにこれがティッシュに包まってたくさん捨ててあるのも知っている。また、男の子が興奮すると、本人の意思とは無関係に射精してしまうこともあり、初体験のときに女性に挿入する前に暴発して射精してしまった童貞少年の話というのも、よく聞くところだ。
　しかし、あの自制心と克己心（こっきしん）の塊のような勝美が、いきなり射精してしまうとは思いもせず、何だか頭が一杯になってしまった。男子というのは、こんなふうに突然、自分の意志とは無関係に射精してしまうものなんだろうか。しかも、特にオチンチンを刺激したということでもなく、ガチガチになったそれを私の股間に押しつけてはいたものの、服の上からなので、刺激としては随分間接的だった筈だ。いずれ私も男子になったなら、こういう経験をすることになるんだろうか。そもそも女子の性的快感は、私も自分ですることもあるから知っているけど、あそこをちょっと押しつけたり、胸を押しつけたりしても、そんなに大きな快感は感じない。それだけでイッちゃうほどの快感が本当に得られるんだろうか？
　それともこれは、パニックした勝美の精神状態が普通ではないので、僅かな刺激でも暴発しちゃったんだろうか。きっと、勝美自身も、自分に何が起きたのか、よく判らないんじゃないかな。そうでなければ、あんなに慌てて逃げるようにして帰ったのは、理解でき

ない。
いずれにせよ、自分が目指そうとしている男の子の生理の深遠をかいま見たような気がして、しばらくボーッとしていたが、そろそろ日も傾いてきて、急に寒くなってきたので、そこでようやく我に返った私は、勝美が置いていった鞄を回収して、自宅に戻った。明日は土曜日だから、今夜は鞄がなくてもそんなに困らないだろう・・・。明日にでも届けてあげようっと。
自宅に戻っていろいろと片付け、夕食を済ませてのんびりしていると、勝美から短いメールが来た。
『今日は本当にごめんなさい。服を汚しちゃったよね。僕のこと軽蔑するでしょ? いろいろ話したいことがあるんだけど、会ってくれるかな。それとも、こんなエッチな変態とは、二度と会いたくないぃ?』
『私こそ気が利かなくてごめんなさい。勝美の鞄こっちにあるから、明日の朝、それを持って勝美の家に行くね。』
あんなことがあった以上、私の家には来辛いだろうと思った。それに私の家は大家族で、常に誰かが居るけど、一人っ子の勝美はお父さんが単身赴任、お母さんは近くに住む両親の介護とかで週末はいつも不在なので、邪魔をされずに二人だけで話をするには丁度良い。そう考えて、明日の朝に勝美の家に行くことにした。そこに下心がまったくなかったと言えば、多分嘘になる。もし私が勝美と初体験をするなら、これが最後のチャンスだろうという『思惑』という名の期待が・・・。
その晩は、風呂でいつもより入念に身体を洗い、むだ毛のお手入れもばっちり決めた上で、アロマオイル入りの美肌ローションを全身に塗ってからベッドに入った。そしてこれまでの2年半の勝美との思い出を脳内で反復しながら、眠りに就いた。

第8話　困惑

「ああっ・・・。どうしよう・・・。千博に精液をかけちゃった！」
もうダメだ。ズボンの前をハンカチで押さえながら、必死になって何とか自宅まで戻ってきた。
夕方の城址公園には、ほとんど人影がなかったのが幸いだった。千博に言いふらされることは考えにくいけど、もし誰か、それこそ友達にでも見られたら大変だった。学校で話題にされたりしたら、恥ずかしくてもう学校に行けなくなるところだった。
自宅に戻ると、母さんはもう帰宅して夕食の準備をしていた。僕は隠れるように風呂場に直行し、大きな声で「汚れちゃったから、先にお風呂に入るね！」と叫んで、制服のズボンとパンツを一緒に風呂場に持ち込んだ。
股間はベトベトで、トランクスはもうぐちゃぐちゃ、制服のズボンも精液の染みが大きく拡がっている。いつも見慣れた精液も、こうしてみるとすごくいやらしい。千博になんて言い訳すれば良いんだろう。僕はこんなにエッチでいやらしかったんだろうか・・・。
さっきの千博の話は衝撃的だった。千博が男になりたいなんて、思ってもみなかった。でも、千博はぶっちぎりでクラストップの成績だから、男になって自分の可能性を試してみたいというのは、よくわかる。僕は特に男尊女卑の考えは持ち合わせていないから、別に男性でも女性でも、どっちでも構わないと思うけど、それは僕が男子だからであって、きっと女子の千博はこれまでにもいろいろと思うところがあったのかもしれない。
でも、よりにもよって千博から友達宣言されるなんて、考えてもみなかった。千博とはお互いに深く愛し合っていて、クラスでも公認のカップルだし、両方の両親にも認めて貰っていた。これは決して惚（ほ）れた欲目じゃなくて、千博もまた僕のことを深く愛してくれて

いる確信がある。だって、確かに告ったのは僕からだけど、手をつないできたのも、初キッスも、両方とも千博からなんだ。
　僕たちは、まだ中学生らしい清いお付き合いしかしていない。でも、まもなく受ける能力判定試験が終われば、法律的には結婚できるようになるから、中学卒業と同時に結婚して、一刻も早く子供をバンバンつくろうと考えていたのに・・・。なにせ僕は一人っ子で、父さんと母さんは随分肩身の狭い思いだったらしいから子供は最低でも４名は必要だと思っていたんだ。（最近では高校生夫婦というのもわりと多くなってきた。というのは少子化対策で子供を産んだカップルには、生活保障から勉強支援まで、驚くほど手厚いサポートが国や市町村から出ていて、高校生で子供を産むことについて金銭的にも生活の上でも、それに勉強の上でさえも、何の心配もないんだ。）
　いや、今の問題はそこじゃない。千博のマンコが片桐か仁科に移植されるだって？！そんなの絶対にダメだ。まだ、見たことも触ったことも勿論ないけど、あれは僕が、恋人の僕が貰うはずだったのに、横から取られちゃうなんて、そんなの酷（ひど）い。しかもあいつらのチンコが千博に移植される？！そんなの絶対にイヤだ。千博には悪いけど、そうなったら千博に移植されたチンコを切り取って、僕のチンコも切り取って、二人して死ぬしかない。いや、だめだ。千博はそんなことを望んでいない。ああっ。気が狂いそうだ。僕はどうすれば良いんだろう。
　ダメだ。考えがまとまらないし、頭の中は真っ白でパンク寸前だ。いけない、いけない、まずは服を洗わなきゃ。トランクスはざっと水で流して、絞ってから洗濯機に放り込んでおけば良いか。多少匂いが残るかもしれないけど、これまでだって夢精したときには同じようにしていたから、仮に母さんに気付かれたとしても、まあ構わないや。問題はズボンを染みにしないことだ。石鹸でよく洗ってから、皺（しわ）にならないように干しておくと母さんがアイロンかけておいてくれるから、これで良いはずだ。そうだ、確か、精液はお湯で洗っちゃいけない

んだっけ？
それにしても千博には何て話そうか。あそこで射精してしまうなんて、恥ずかしくて消えてしまいたい。千博は当然、あれが何だかわかっただろう。いきなりそんなものを自分のスカートの前のところにつけられたら、どう思うだろう。間違いなく呆れたに違いない。これじゃまるで電車の中で女子学生に体液（？）をかけたとニュースに載る痴漢そのものじゃないか。僕がこんなにエッチでいやらしいとわかったら、僕のこと嫌いになっちゃうかな・・・。
僕たちは小学校のときから知り合いで、中学1年で告ってから、もう2年半も付き合ってきた恋人同士なんだ。だから、千博がどんなに呆れてしまっても、まさか、これだけで僕たちの関係が終わりになるとは、普通なら思わないんだけど、千博はもうすぐ男性になっちゃうんだ。このまま別れちゃうなんて、そんなのないよ・・・。
あぁっ？でもっ、さっき友達宣言されちゃったんだっけ！・・・ということは、もうこれで終わりなの？！！嫌だっ！そんなの耐えられない。だめだっ、涙が出てきちゃった。僕はいったいどうしたら良いんだろう・・・。（ぐすっ、ぐすん、んぐっ。）
こんな頭の中がグチャグチャで混乱している状況なのに、チンコは元気になってきた。やっぱり僕はエッチでいやらしいスケベな人間なんだ。僕だって年頃の男の子だから、勿論オナニーはしているけど、最近は性欲が抑えきれなくなってきた。千博のことを考えると、1日に2度3度としたくなるんだ。最近、チンコとキンタマが急に大きくなってきたような気がするんだけど、もしかして、そのせいだろうか・・・。
この前、千博が遊びにきて、僕の部屋で二人きりになったとき、いきなりキスしてきたんだ。二度目だし、軽くチュッとするだけだったんだけど、もう僕のチンコはビンビンのガチガチで、どうしようもなかった。千博にも絶対に気付かれていたと思う。でも、必死になって宿題の図形問題を解いて、千博が帰るまで我慢したんだ。
あれは辛（つら）かった。千博が帰ったと同時にズボンとトランクスを一気

に脱ぎ捨てて、鬼のようにオナニーをしちゃった。トランクスは我慢汁でもうベトベトで、3回も連続で射精したんだ。最近、どんどんエッチでいやらしい妄想がひどくなってくる。毎日オナニーしないと、すぐ夢精しちゃうし、いつも千博と抱き合っている夢ばかりだ。

僕はクラスの男子では2番目にチビだけど、このごろ随分身体ががっちりしてきて、これまでの小学生みたいな体型から、大人の男という雰囲気が少しは出てきたんだ。脛毛(すねげ)が少し濃くなってきて、腋毛も結構生えてきたし、何よりチンコがちょっと剥けてきたんだ。まだ父さんみたいに完全なズルムケには程遠いけど、これでいよいよ僕も大人の仲間入りだと喜んでいた。でも、大人になると、こんなにも性欲が強くなっちゃうのかなあ。あとちょっとで結婚もできる年齢だから、そうしたら我慢する必要もなく、堂々と千博とセックスしたいな。まずは今度の成人式にプロポーズして、卒業と同時に結婚を考えていたんだ。もうちょっとの辛抱だと思っていたのに、これでお終い?!あぁっ、やっぱり気が狂っちゃうよ!

もう、頭がグルグル回って、何がなんだかわからなくなってきた。とにかく風呂から出て、夕食でも食べよう。台所からはいい匂いが漂ってきている。お腹も空いた。もう夕食だ・・・。

夕食後、自分のベッドにひっくり返って、少し頭を冷やしながら考えた。一つ目は、とにかく千博に謝らなければならない。あんな痴漢みたいなことをしちゃったんだから、きっとショックを受けているだろう。もうこれで絶交とか言われたらどうしよう・・・。まずはメールで、会ってくれるかどうか確認だ。

あれっ?そう言えば、僕の鞄はどうしたんだろう。確か城址(じょうし)公園までは持ってきて・・・。えっ?もしかして公園に忘れてきた?それは具合が悪いな・・・。人に見られて困るようなものは入れてなかった筈だと・・・?あっ!そう言えば榎木が貸してくれた超過激なエロ本が2冊入ってたんだ!!どうしよう。借りたものを失くすのもまずいけど、僕の鞄からあんな物凄いエロ本が出てきたら、拾

った人はどう思うだろうか・・・。チラッと見ただけだけど、何名もの女性がお尻をこちらに向けて、マンコを自分でクパァとしていたり、そこにいろいろなものを突っ込んだりしている写真とか、僕たち位の男の子が何名もの女の子に責められて、半べそかきながらもアヘ顔で、さんざん射精させられている写真とか、とても人には言えないような恥ずかしいのばかりだ。あとで探しに行ってみよう。でも明日の朝のほうが見つけやすいかな。どうしようか・・・。

・・・ああ、どうしても考えがグチャグチャのバラバラで、何をしたいのか、何をしたら良いのか、まったく頭が働かない。さっきから考えが堂々巡りだ。まずはお詫びと週末会ってくれるかのメールを打たなきゃ・・・。

わずか2行のメールに、1時間もかかった。と、3分かそこらですぐに返事が来た。

よかった。千博は特に怒っても呆れてもいないようだ。明朝、千博がこっちに来てくれるって。で、ひとつクリアしたと思ったら、次なる大問題発生!！

鞄は千博が持っていたんだ??!！

どうしよう、どうしようっ！

誰か助けてっ！！

どうか、どうか、鞄を開けて中を見られていませんように。神様、こんな神頼みで本当に申し訳ありませんが、今日、こんなことがあった後で、あのエロ本を千博に見られちゃったら、もう人生終わってしまいます。どうか、どうか僕のお願いを聞き届けて下さい・・・。神様、とにかくお願いします・・・。

結局、その夜はずっと眠れないまま、夜が明けてしまった。あと5時間位で千博がやってくる。

泣きはらした顔も恥ずかしいけど、そもそもあんなことのあとで、いったいどんな顔をして会えばいいんだろう・・・。まずは昨日のことを謝るのは当然だけど、そこで言葉が途切れちゃう。それに、

もしエロ本のことを問い詰められたら、どう答えればいいんだろう。月曜日に学校の屋上から飛び下りるしかない。
いっそ、千博にセックスをお願いしてみるか・・・。多分、真剣にお願いすれば拒否はされないと思うけど・・・。いや、ダメだ。それじゃ、何の解決にもならない。目の前の不都合な事実から目を逸らすことしかできない。そんな目的で大事な二人のはじめてを使うなんて、もっての外だ・・・。
いろんなことが頭を過っては消えて行く。でも、その間、常にずっと一つのことが僕の頭の片隅にある。それは、千博のマンコは僕のものだ、という思いだ。これを考える度に僕は、自分がそんなにエッチだったのかと自己嫌悪に陥るけど、それでも頭から吹っ切れない。結局、そこに戻ってしまう。愛とはセックスではない、そう考えようとしても、千博のマンコに僕のチンコを入れる日のことをずっと夢見てたんだ。それなのに、千博に片桐か仁科のチンコがついているなんて、あり得ない。いっそ、片桐か仁科に移植された千博のマンコを僕のチンコで貫いたら・・・。ダメに決まっている。いくら元は千博についていたとしても、もう他人のものだし、法律的にはレイプになっちゃう。それに、元は千博のマンコでも相手は片桐か仁科だ。女子になったからって、そんなの勃つわけがない。うぅっ・・・。

・・・千博・・・。僕はどうすれば良いの・・・？
・・・・・。
・・・悔しい・・・。何か方法はっ・・・。
・・・・・千博・・・。
・・・あれ？今、何か・・・？？
・・・頭の中に何か閃いた様な・・・？
・・・・・。
・・・千博のマンコを？？？

僕のチンコで・・・？？？
・・・・・・。
・・・千博のマンコは僕のもの・・・？？？
・・・僕が千博のマンコを貰うはずだった・・・？？？
・・・・・・。
・・・この言葉は・・・。もしかすると・・・？？？
・・・・・・。

第9話　決断

翌朝、勝美の家に行くと、いつもどおり勝美の部屋に通された。彼の部屋には小さいちゃぶ台のようなローテーブルがあり、それを挟んで二人で床に正座した。彼は私の目をまっすぐ見つめると、まず深々と土下座した。

「昨日は本当にごめんなさい。ぼっ、僕っ、取り乱しちゃって、その挙げ句（あげく）千博にその、そのっ、あんなっ、せっ、せ、精っ、そのっ、かけちゃってっ・・・。」

耳まで真っ赤になって、どもりながら必死に謝る勝美は、やはり紳士でかわいい。キスをしたら暴発して射精してしまったというのは、男の子にとっては死にたいほど恥ずかしいことなんだろうけど、こうしてしっかり謝罪する姿は、改めて惚れ惚れ（ほれぼれ）する。謝ることすら恥ずかしいのだろう。“精液”をかけた、と口にできず、どもってばかり。だから私から助け船を出してあげる。

「私は気にしていないから、勝美も気にしないで。私は義朗兄さんも優稀もいて、男の子の生理はわかっているつもりよ。精液だって毎日ごみ箱に入っているし、それどころか内緒だけど優稀のオナニーを覗き見（のぞきみ）して、射精するところも見たことがあるわ。だから、男の子が興奮するとどうなるか、普段からよく知っているの。それにもかかわらず、あんな濃厚なキスをしたのは私でしょ。」

「でっ、でもっ、そのっ、あれは僕が取り乱したので、それで千博が僕を励まそうとして・・・。それにっ、最後は僕も自分からっ、そのっ、あっ、あれをっ、千博に擦りつけてっ・・・。」

「その取り乱す原因をつくったのは私だから。いきなり恋人から友達宣言されて平常心でいられる人って、あまりいないんじゃないかしら。しかも、その相手が性転換するから、なんて聞かされたら、普通の神経じゃ取り乱してパニックになるわよね。私が悪かったの。

私こそ、ごめんなさい。」
　そう言って、私も同じように土下座した。すると、ようやく頭を上げた勝美が、はじめて自分から私の手をぎゅっと握り、私の顔をじっと見つめながら話しだした。
「こんなエッチでいやらしい僕を許してくれて、ありがとう。」
　それから、ぎこちない仕草で私の手の甲に、そっと口をつけた。それは、おとぎ話の王子様が、跪いてお姫様の手にキスをする一枚の絵画のようで、思わず胸がキュンとなった。
「本当に、千博は本当に男になりたいの？・・・僕は一度も聞いたことがなかったけど、前からそう思っていたの？」
「ごめんなさい。本当にこれは私の我儘なの。かなり前から、そうね、中学校に入った頃から、漠然と考えるようになったんだけど、でもしっかり意識するようになったのは、ここ半年位かな。能力判定試験が現実的な日程として意識されるようになってから、考えを固めてきたので、そういう意味では3カ月前位に考えをまとめたような気がする。まだ家族にも相談していなくて、昨日、勝美に話したのが、他人に話した最初よ。もしかすると、家族は反対するかもしれないけど、でも私なりに悩んで決めたつもりなの・・・。勝美には、辛い話になってしまって、心から申し訳ないと思っている。私にできることなら、何でもするわ。」
「・・・じゃあ・・・、あ、いや・・・、でも・・・、そんなこと・・・、やっぱり・・・、ダメだけど・・・。」
　そう言いながら、握っている手に力が入る。何かものすごく逡巡しているような、でも勝美としては言いたいことがあるのだろう。勝美がここまで迷うのは、普段の彼からすると、とても珍しい。
「何でも良いから、希望を言ってみて。私にできることなら、何でも叶えてあげる。もし勝美が私とセックスしたいというなら、そうしようよ。私も勝美といつかセックスしたいと、前から考えていたんだ。昨日、あんなことがあったからじゃないけど、勝美も健康的な男の子なんだから、当然性欲はあるよね。知ってるよ。これまで

勝美が必死になって自分を抑えてきたのを。ズボンの前を見れば、勝美がどんな状態になっているか、私にもわかるよ。」

「・・・・・・。」

「勝美の言う通り、もし私が男の子になれるなら、もう時間は殆どないよ。」

「・・・それに、我慢のし過ぎは身体に悪いよ。また昨日みたいに暴発しちゃうから。それともあんなエッチな本を見て解消するの？」

つい口走ってから、しまったと思った。勝美に悪いよ。勝美が一番恥ずかしいと思っていること、一番触れて欲しくないことを、つい抉(えぐ)ってしまった。しかも、私が勝美の鞄を覗(のぞ)いて、エロ本を見たということもバレてしまった。一瞬で茹で蛸(ゆでだこ)のように真っ赤になると同時に、勝美の雰囲気があきらかに変化した。私の手を握っている指は、痛いくらいに力が入り、目が据(す)わったというか、人格が変わったような鋭い目つきとなって、これまで一度も見たことがない、獲物を前にした猛獣のような顔つきになった。

瞬間的に、『あ、これは襲われる』と確信した。しかし、不思議と恐怖はなかった。そもそも、もう1年以上も前から、勝美に処女をあげることになるだろうと、ずっとそう思っていたし、昨日のこともあって、今日私がここに来ると言ったのは、勝美の家に誰もいないということを知っていて、そういう関係になるかもしれないという可能性を覚悟した上でのことだったから。いや、覚悟ではなく期待・・・だったのかもしれない。

だから、私も勝美の手を思いきり握り返して言った。

「いいよ、勝美の好きなようにして。私も勝美とひとつになりたい・・・。」

「なっ、ならっ、それならっ、お願いがっ、いや、約束して欲しいことがある！」

「私にできることなら、何でも。」

「今度の能力判定試験、大丈夫だとは思うけど、絶対に一番を取ってくれる？僕も全力で頑張って、必ず千博に次いで二番を、それも

２８００点以上取るようにする。女子のトップが千博で、男子のトップが僕になるようにしたいんだ。」
「勿論、そのつもりでいるけど、でも何故？」
「僕は、男子でトップになったら、トップの権利として、女性化を申請する。そうして、千博と性器を交換して、千博が僕のチンコで男になり、僕が千博のマンコで女になる。そうすれば、千博に他のやつのチンコが移植されるのは防げるし、千博のマンコが他のやつに移植されるのも防げる。しかも、男になった千博と女になった僕は、引き続き恋人として愛し合えるし、将来結婚することができる。」
「なっ！何を言い出すの！！」
「別に気が狂ったわけじゃないよ。勿論、変な話だとは思う。でも制度上、何も問題ない筈だ。千博と僕がそれぞれトップを取れれば、これが一番良い方法だと思いついたんだ。」
「本気なの？勝美はそれで本当に良いの？パニックして、頭が変になっているんじゃない？」
「そんなことはないよ。昨晩、結局一睡もせず、ベッドの中でずっと考え続けていた。千博が男性化して僕と同性の友人になるという未来は、どう考えても思い描けない。昨日の千博の友達宣言だけで、あれだけ取り乱しちゃったんだ。もし、本当にそんなことになったら、昨日、パニックになって思わず口走ったとおり、僕は精神に異状をきたして、一生、精神病院に入院して廃人となるか、それとも自殺することになるだろう。勿論、千博と心中云々は何とか自制するとしても、気が狂って自分のチンコを切り落としてしまうに違いない・・・。」
「・・・勝美・・・。」
「だから、本当に、本当に是非お願いしたいの。僕も頑張って千博に次いで男子トップを取るから、千博は必ず女子トップを取って、僕と二人で性転換、いや、性器の交換をして欲しいんだ。このとおり、お願いします。」

そう言うと、また彼は深々と土下座した。私は彼の話が、あまりに突拍子もない上に、どう反応して良いかわからず、それこそ私のほうがパニックとなって、思わず口走った。
「でもっ、仮にそれがうまく行ったとして、私と恋愛関係を継続できるという保証はないわよ。二人とも性転換したら、それぞれもっとずっとすばらしい相手ができたりするかもしれないわ。そのとき後悔しても、もう遅いのよ。」
「それはまた別の話だよ。性転換しなくても、そうなる可能性は常にあるし、お互いの気持ちが変わってしまったのなら、それは仕方がないことさ。でも、二人ともこんなに愛し合っていて、少なくともこれまで二人とも結婚まで考えていたのに、千博が男性になりたいという、それだけの理由で二人の関係が終わってしまうのは、僕には耐えられない。」
ゆっくりと顔を上げた勝美は、涙を滝のように流していた。昨日も驚いたのだが、これまで、彼が泣いた姿を見たことがなかった私は、今日また流れる涙を拭おうともせず、私の目を真っ直ぐ見つめて懇願する勝美に、思わずまた抱きついた。
「勝美っ！勝美っ！あなたが好き！！愛している。心から愛している。私、あなたの彼女で本当によかった！！今度の試験で必ず二人してトップをとろうね。そして性別を入れ換えても、変わらず愛し続けて、結婚しようね。約束する。」
その言葉を聞くと、はじめて勝美は微笑んで、私のことを力一杯抱きしめてきた。そして、今度こそ彼から私に口づけをすると、何の躊躇（ためら）いもなく、ごく自然に私の口内に自分の舌を入れてきた。
ねっとりと舌を絡ませながら、口内をすべてなめ回す。相手の唾液を全部飲み尽くし、自分の唾液が全部飲まれていく感覚。まるで自分と相手の体液を一滴残らず交換するような行為・・・。
私は、勝美の本当の恋人になったような気がした。これまでも恋人だと思っていたが、ここまで精神的に勝美と一体となれたのは、はじめてのことだった。それで、キスをしながら、手を下に降ろし

ていき、彼の股間を弄(いじ)ると、彼はビクッとして飛びのき、私から離れた。
「だっ、だめだよっ。」
「どうして?私は勝美とひとつになりたいよ。私は勝美と初体験するんだって、前から考えていたし、性別を交換するなら、もう今の性別でセックスできるのは、多分今日位しか時間がないよ。」
「それだからさ。僕は千博と一回だけのセックスの経験をしておくような考えはないんだ。この一回だけしか経験できない、もう二度と経験できないことを、下手に知ってしまうのは、嫌なんだ。それよりも、性転換手術をすると、その後で性器を交換した相手とセックスしなきゃならない決まりだったよね。皆に祝福されて、千博にあげた自分のチンコで千博から貰ったマンコを貫いて欲しい。そして、新しい性別で本当に愛し合う経験を重ねて行く。それが僕の願いなんだ。」
「僕たちは役割が替わっちゃった、とも言えるけど、よくよく考えると、僕のチンコが千博のマンコを貫くわけだから、僕にしてみれば千博の処女を僕が貰うとも考えられるし、千博にしてみれば自分のマンコが僕のチンコで貫かれるわけだから、僕のチンコに処女を捧げたということになる。なんだか頭がこんがらがってきて、何を言っているのか、自分でもよく判らないんだけど、二人の性器を使って初体験をするということは、何も変わらない。性転換しても一緒なんだ。」
「だから、今、ここでセックスはしたくない。キスなら何度でもしたいけど・・・。」
「わかった。それが勝美の望みなら、私は１００%尊重する。そもそも私の我儘(わがまま)で、ここまで勝美を追い込んでしまったのに、勝美は私にすべてを合わせてくれて、自分が望まない性転換まで志願するんだから、私はどんなことでも勝美の望みどおりにするわ。」
「僕は性転換を望まないわけじゃないよ。そりゃぁ、去勢されてチンコとキンタマを切り取られちゃうのは、物凄く怖いけど、千博を

失う怖さに比べたら、どうということもない。喜んで手術を受けるさ。それに僕のチンコは千博に移植されるわけだし、代わりに千博のおっぱいとマンコを貰えるんだろう。それって、僕にしてみれば天にも登るようなご褒美(ほうび)だよ。」
「しかも、結婚したら千博に僕のチンコで愛して貰えるんだから、他にはもう何もいらないよ。」
そういって屈託なく笑う勝美は、もう完全に普通の精神状態を取り戻したようだった。

第１０話　恋人の特権

「ねえ、勝美。ひとつ提案があるんだけど。二人とも、もうすぐ手術を受けるのなら、セックスはしないにしても、今この状態の二人の身体を、お互いに見せあって、全部記憶にとどめておきたいの。勝美の身体だけでなく、私の身体も、もうすぐ変わってしまうのだから、それぞれを隅々まで瞼に焼き付けておくの。それに、二人で性器を交換するんでしょ。だったら、相手の性器について、あらかじめ見て確認しておくのは、とても意味があることだし、いざ手術を受けた後で戸惑わなくても済むと思うわ。普通、性別を交換する相手とは、事前にこんなことをしたくてもできないけど、私たちは恋人でしょ。ならば恋人同士だけに許される特権を最大限に活用しようよ？」

「？？？！！！」

「だから、裸になろう。私の身体を、全部見て欲しいし、勝美の身体を全部見せて欲しい。」

そういうと、私は立ち上がって服を脱ぎだした。

「えっ、ええっ！そっ、そんな！！」

うろたえている勝美を尻目に、私はあっと言う間に下着まで全部脱ぎ捨てると、全裸で勝美に近づき、彼の服を脱がし始めた。

「だっ、だめっ、だめっ、やっ、やめてっ、こんなの変だよっ。」

「でも、私たち性器を交換するんだよ。お互いの身体をよく知っておく必要はあるんじゃない？私は勝美に、私の身体の大事なところまで、すっかり見て知っておいて欲しいし、私も自分に移植されるものを、よく見て知っておきたいの。どんなふうになっているか、どんな反応なのか、知りたいとは思わない？・・・だめ？」

必死になって抵抗しようとする勝美だったが、全裸の私が彼の前に立ってお願いすると、しぶしぶ服を脱ぎだした。

最後のトランクス一枚になると流石に脱ぐのを躊躇していたが、意を決して先に全裸になっていた私が勝美の目をじっと見つめると、意を決したようにトランクスを脱ぎ捨てた。

ビンッ。という音が聞こえてくるみたいに、勝美のペニスがガチガチに勃起して、上を向いていた。前に優稀のオナニーを覗き見したときの記憶との比較だと、勝美のペニスのほうが少しだけ大きい気もする。けど、サイズはそんなに大差があるようには見えなかった。ただ、先端は剥けはじめていて、中からピンク色のものが半分くらい顔を出している。優稀は勃起しても自然には剥けてはいなかったから、勝美のほうが少しだけ大人になっているということなんだろうか。(優稀は、オナニーのときは自分の手で剥いてから擦っていたっけ。男の子の兄弟がいると、そういう現場も目にすることがあるんだよね。でもこっそり覗き見したのは内緒だ。)

「ねえ、もっとよく見せっこしよう。まずは私からね。」

そう言うと、私はベッドに浅く腰掛け、股を大きく広げて、両手でワレメをそっと広げた。

「これが勝美にあげることになる私のオマンコ。よく見ておいてね。てっぺんの小さな突起がクリトリス。普段は隠れているんだけど、興奮すると、ちょっと顔を出すの。オナニーのときは、ここを触るとすっごく気持ちいいんだよ。」

勝美は、真っ赤になって、目を丸くして見入っている。口をパクパクさせて、まるで酸素不足になった金魚のようだ。しかしこの状態でも、紳士の彼は絶対に手を出そうとしない。それとも身体が硬直してしまい、単に動けないでいるだけなのだろうか?

「ほら、こうするとクリトリスの皮が完全に剥けるの。皮を剥いたクリトリスを直接触ると、頭が変になっちゃうほどの、ものすごい快感で、あっというまに頭が真っ白になってイッちゃうんだよ。まだわからないけど、男性の射精の感覚に近いのかな・・・。」

私はさらに力を込めて手を広げ、膣の中まで見えるように、いわゆるクパァ状態にした。

「私の処女膜見えるかな？勝美と初体験するときに、勝美にあげようと思っていたんだけど、勝美の希望どおり、勝美に移植した後で私が勝美から貰ったペニスで突き破ってあげるね。」

勝美がごくりと唾を飲み込む音がした。

「さっ、触っても良い？」

「勿論よ、もうすぐ勝美のものになるんだから・・・。あ、でも、処女膜は傷つけないように気をつけてね。」

勝美はおずおずと手を伸ばすと、まず私の陰毛をさわさわとなで回した。次に私が広げている小陰唇から膣の入り口に、優しく触れた。既に十分濡れて光っている私のそこを、まるで壊れ物に触るようにそっと人指し指と中指の先で触ると、彼の指先も私の愛液でしとどに濡れて、彼が指を離すとニチャッという音とともに粘液の糸を引いた。勝美は自分の手についた私の愛液を、確かめるように親指と人指し指を付けたり離したりして、粘液の粘っこさを確かめているようだったが、掠（かす）れた声で聞いてきた。

「こっ、これっ、これって・・・千博もっ、そのっ、興奮してっ・・・。」

「ぁんっ、そうっ、そうだよっ。勝美に見られて、勝美に触られて、私も興奮してるのっ。私もっ、ぁあっ、きっ、気持ちよくなっている証拠だよ。」

「んっ、ふんっ、ふーっ。」

勝美は、私が手で広げている股間を、嘗（な）めんばかりに顔を近付けてきた。勝美の鼻息がクリトリスにかかって、感じられるほどだ。と、今度は剥き出しのクリトリスにそっと触れてきた。

「ひっ、んっ、ぁあっ、ぅんっ。」

思わず声が漏れる。思えば、勝美と付き合いはじめてからずっと、いつの日か勝美にこうされることを思い続けてきたのかもしれない。というか、最近ではオナニーをするときはいつも、勝美にここを触られていると想像しながら、自分で弄（いじ）っていた。でも、実際に勝美に触られると、ほんの一瞬なのに自分の手で触るよりも、何倍もの

快感が全身を駆け巡った。勝美の希望を聞いたから必死に自制しているが、このまま勝美に思い切り貫かれたい、そのガチガチになったペニスを、私に突き立てて欲しい、という感覚がどんどん大きくなってきて、我慢できなくなりそうだったので、焦って言った。

「もう良い？また後でたっぷり見せて上げるけど、そろそろ勝美のも見せて欲しぃな。」

　そう言うと、勝美は観念したようにベッドに腰掛け、大きく股を開いて私にペニスを突き出してきた。勝美のペニスは、ガチガチになって腹にくっつくほど上を向き、先端からは透明の粘液がダダ漏れ状態で、睾丸から大股のほうまでべったりと垂れてぬらぬらしていた。勝美は恥ずかしいのか、目をぎゅっと瞑（つぶ）って歯を食いしばり、プルプルと小刻みに震えながら耐えているようだ。

「触るね。勝美はもう剥けはじめているんだね。大人じゃない。」

　先端の皮をそっとつかんで、静かに根元に向かって引き下ろすと、皮がすっと反転してピンク色の亀頭が全部顔を出した。すると、まさにその瞬間。勝美が押し殺したような声で叫んだ。

「んっ、んんっ、あっ、ぁあぁ、いっ、ぃいぃっ、っくっ、ぃくっ、いくっ、いくーっ。」

　ブルブルと全身を痙攣（けいれん）させ、腰を思いきり前に突き出しながら、ペニスで空中の一点を突っ付くようなしぐさをしつつ、亀頭の先端から物凄い勢いで白濁液が吹き出した。

　それはびゅーっ、びゅーっというように間欠的に何度も何度も繰り返し吹き出し、一部は私の顔にかかったが、殆どは私の頭を飛び越え、部屋の反対側まで到達して、机の向こう側に着地した。

「すごいっ！！」

　素直に、心からの言葉だった。優稀のオナニーを見たときは、こんなに凄い勢いじゃなかったし、射精した量も桁違いだ。優稀はもっとかわいらしく、ドピュッ、ピュッという程度だった。さらに驚いたことに、あれだけ大量に射精したのに、まだペニスはガチガチのビンビンで、天を突くようにそびえ立ったままだ。まだ何度でも

射精できるぞっと、全力で主張しているようだった。きっと勝美は、優稀と比べて身体機能点の生殖力についても、ずっと点数が高いんだろう。
「勝美のオチンチンは立派だね。大きさといい元気のよさといい、もう剥けてるところといい、完全に大人のオチンチンじゃない。こんな立派なもの、本当に私が貰ってしまって良いの？勝美はそれで後悔しないの？」
「うん、話したとおり、切り取られちゃうのは凄く怖いけど、千博の、そのマンコと交換するんだから、むしろ楽しみだよ。ただ、片桐や仁科のチンコと比べたことはないから、あいつらのほうが性能は上かもしれない。といっても、そもそも何をもって性能の良いチンコというのか知らないけどね・・・。」
　そう言って笑った勝美は、一度射精したためか、ようやく緊張が解れてきて、二人とも裸の状態に慣れてきたようだった。
「ねえ勝美、ベッドに寝てくれる？」
「これで良い？」
　素直に仰向けになる勝美。私もその横に一緒に横になると、勝美の上に身体を重ねてキスをした。
　勝美も、もう何の躊躇いもなく舌を差し込んできた。
　二人で裸になり、肌を重ね口を吸い合う。手や足は、相手の身体に少しでも密着できるように絡め合い、また相手の身体を隅々まで撫で摩る。性器こそ結合していないが、これは完全にセックスそのものだ。
　しばらくそうしていると、勝美が急に私から離れて言った。
「ごっ、ごめん、このままだと僕、我慢できなくなっちゃう。」
「それでも構わないよ。ていうか、私もさっきから勝美とひとつになりたくて、必死で我慢しているんだよ。」
「でも、それじゃぁ・・・。」
「わかってる。勝美はそれじゃイヤなんだよね。それは尊重する。でも、このままじゃ、二人ともモヤモヤして辛いし、我慢は身体に

悪いわ。だから、ねっ・・・。」
　私は身体を起こすと向きを変え、勝美の上に反対向きに四つん這いになった。私の眼前には、腹につかんばかりにガチガチのビンビンになっているペニスがあり、私は太股で勝美の顔を挟み込むようにして股間を勝美の眼前に晒している。勝美のペニスからは、無色透明の液体がダダ漏れ状態だが、多分それ以上に私の股間も濡れているのがわかる。いや、もしかして、勝美の顔に垂れてしまっているのではないか、そんな気がしてきた。
　私は勝美のペニスにそっと接吻すると、まずアイスキャンディーのように先端を舐め始めた。すると勝美も、私の股間を周辺部からそっと舐め始めた。
「んっ、んんっ、んひっ、ぁひっ」
「あむっ、ぅむっ、ひぁっ」
　お互い、喘ぐだけで言葉も出せず、一心不乱に相手の性器を舐め合う。先に我慢できなくなったのは、私だった。
「んぐぐっ、ぁぐっ、むぐっ」
　勝美のペニスを思い切りくわえ、喉の奥まで飲み込むようにして口の中に収めると、舌で亀頭を刺激しながら頭を前後に大きく動かした。すると、勝美も、私の愛液をズズッとひときわ強くすすったあと、剥き出しのクリトリスに思い切り吸いついてきた。
「んんんんっ、んんんんっ、んひひっ、んひーっ、んひひーーっ。」
　これまで経験したことのない、物凄い快感。全身がどこかに飛んで行くような感覚とともに、腰から背中にかけてビリビリと痺れるような感覚が走り、全身が痙攣する。もうだめっ、イクっ、と思った瞬間、勝美も「あがっ、ぁうっ、ぃひっ、っぐっ、ぃぐっ、っくっ、くくーっ、ぃくーっ。」と叫んで、またしてもペニスから多量の精液が吹き出した。初めて味わうそれは少し青臭くて、苦いようなエグいような味がして、なによりどろっと喉の奥にまとわりつくような感触だったが、決して吐き出すような不味さではなかった。むしろ、これが勝美のペニスから吹き出したものだと思うと、とて

も愛しく味わって飲み込みたくなった。
　勝美が射精することは予測していたので、吹き出す精液を思い切り吸い出してみた。バキュームフェラというらしいけど、こうすると、精液が尿道を通ってくるときの速度がずっと速くなるため、男子の快感が何倍にも高まるんだって、女子会トークで聞いたことがある。
　ストローでコップの水を一気に吸い上げるように、ちゅるるるるーっ、と音がする位、勢い良く吸い込むと、「んんっ、んひっ、むんんっ、ひっ、ひーっ」と言いながら腰をガクガクと痙攣(けいれん)させて激しく射精していた勝美は、まだ射精が続いているのに、急にガクッと糸が切れたみたいに力が抜けてベッドの上で動かなくなった。私のクリトリスを強く吸っていたのもなくなったため、ちょっと心配になって、精液をごくんと飲み込んでから振り返った。
「勝美、勝美、大丈夫？」
　勝美は、口から泡を吹き、だらしなく半開きになった口から舌を突き出したまま、白目をむいて意識を手放していた。
　よく話に聞く、女性が連続イキで気絶する話など、てっきりネタだと思っていたけど、よもや男性が連続イキで気絶するとは思わなかった。
　私も腰が抜けてしまい動けなかったので、そのまま勝美の腹の上に全身を預け、勝美のペニスに頬ずりしたまま、私の股間は勝美の顔に乗った状態で、ぐったりと休んでいた。
　勝美の希望どおり、お互い処女と童貞は、ギリギリ守ったのかもしれないけど、精神的には最後の一線をはるかに超え、ずっと激しい性行為をした気分だった。

第１１話　最後の朝

試験結果返却から1週間は学校が無いんだけど、昨日先生に言い渡されたとおり、対象者は次の日に登校しなければいけない。性成熟や性的機能に異常が無いかの身体検査を受けるのと、いきなり変わると身体に負担がかかりすぎるので少しずつ変えていくため、それぞれ男性ホルモン剤か女性ホルモン剤の投薬をするためだ。それと、きちんとした性転換手術は1週間後なのに、男子に限っては、手術に先行して判定の翌日には睾丸を抜かれてしまう。

これは、男子の去勢は、学校でも３０分位で実施できるような簡単な手術だからとか、理由はいくつもあるらしいけど、これによって後戻りできないという心の退路を絶つことが一番の理由ではないかと思う。昨日母さんの膝で涙が枯れるまで泣いたのは、もうこれが男子として最後の夜だという恐怖と絶望だったのかもしれない。

今朝も、いつもと同じ時間に目が覚めた。もう１２月に入って、かなり日が短くなってきたので、まだ外は薄暗い。今日の登校時間は１０時なので、まだずいぶん時間がある。父さんも義朗兄さんも今日は休みで、週末の朝の家の中は寝静まっている。

ベッドの中で昨日のことを考えていると、しっかり朝立ちしていることに気がついた。

「そう言えば、昨夜は日課のオナニーをしていなかったっけ。」

いつもは、風呂かベッドのどちらかでオナニーをしてから寝るのが日課になっていた。寝てる間に夢精するのは嫌だし、はいているトランクスを自分で洗うのも面倒だ。それに万一、家族（特に母さんとか芳恵さん）に知られたら恥ずかしくてやってられない。朝立ちしても平日は登校前の忙しいときで時間がないから、普段はオナニーを寝る前にするようにしていたけど、休日などで朝にオナニーをしたことも勿論ある。

でも今朝は、もうこれで最後のオナニーだと思うと、いても立ってもいられず、パジャマと下着を一気に脱ぎ捨てると、素っ裸でベッドに仰向けになってペニスを扱きだした。

このところ、オナニーは必ず皮を剥いてローションを使い、亀頭を直接刺激するようにしている。そのほうが、亀頭が発達して、皮が早く剥けるようになるってネットで読んだからだけど、最初は刺激が強すぎて痛くなってしまい、あまり気持ちが良くはなかった。でも、しばらく続けていたら、慣れてきたのか、昔やっていた皮オナニーよりも、この亀頭オナニーのほうが、より強い快感を感じるようになってきた。

今では、亀頭オナニーの最後に、亀頭からペニス全体に痺れるような強烈な快感が広がり、お腹から太股の辺りの筋肉が攣ってしまうような、それこそ思わず「助けて」と言いたくなるような異次元の快感がペニスから全身を駆け抜けるようになった。でも、この快感も、今朝これでお別れだ。

僕のペニスと睾丸は、これが男性として最後だとわかっているのか、全力で存在を主張していたが、あっと言う間に大量の射精をした。きっと、一回の射精としては、これまでで一番沢山の量の精液を射精したような気がする。

射精する直前に、たまたま小さな空の薬ビンが手元にあったため、自分の人生で最後の精液をこれに入れて、しっかり蓋を閉じ、母さんの思い出の写真のように、自分も一生、これを手元に置いておこうと思った。勿論そんなことは無意味だし馬鹿らしいという気もしたんだけど、なんと言うか、これこそ僕が男子として15年間生きた証であり、男子として残せる最後の証拠だという気がして、どうしても取っておきたくなったんだ。でも誰かに見せる訳にもいかないだろうな。どこかに隠して置かなくっちゃ・・・。それともいつの日か、僕もこれを自分の息子に見せるようなことになるんだろうか・・・。

起きて1階に降りていくと、もう母さんは朝食の支度をしていた。

「あ、おはよう。どう、もう大丈夫？一人で登校できる？」
「昨日はありがとう。おかげで随分落ち着いた。」
そんな話をしていると、千博も起きてきたので、二人で母さんの作ってくれたトーストとハムエッグを食べた。ごく普通の、休日の朝の風景で、特に今日のこれからのことを話すでもなく、何となく母さんも千博も、僕に気をつかっているのがよくわかった。
遅い朝食の後、登校するので制服に着替えた。赤紙を渡された時点から女子として扱われるので、もう男子の制服を着ることはできない。ただ、まだ似合わない生徒も居るので私服登校も一応許可されていた。勿論、私服でも女物の必要がある。
でも、父さんはそういうケジメには厳格で、千博とお互いの制服を交換して登校することになった。下着もお互いの新品の物を身につけ、古いものは今朝捨てられた。私服などは使い古しを使うように言い渡される。
女物のパンティを履き、スカートとブラウスのセーラー服を着ると、意外と似合っている自分にやるせない思いを抱きながらも諦める。まだ胸はないのでブラはつけていないが、これ以後、もし男物のトランクスとかを履いていたら、僕はとんでもない変態とされてしまう。
昨夜は一晩中、母さんに付き添って貰い泣いていたら多少は気持ちの整理がついた。自分がこんなに涙脆(なみだもろ)いなんて知らなかったけど、これも女性化の影響かな・・・。
勿論、まだ自分が女性にされてしまうことには、少しも納得していないんだけど、結果は自分の責任だからどうしようもない。前を向くためにも、無理やりでも気持ちを切り替えることにしたんだ。
それに、母さんの秘密を知って、ものすごく驚いた反面、自分だけじゃなかったということで、ずいぶん気楽になった気がする。母さんも最初は僕と同じようにショックで口もきけなかったらしいけど、今はどこからどうみても女性だし、そもそも僕と環と晶の三人の母さんであるのは間違いない。優しくて、美人で、スタイル抜群、お

っぱいも立派な母さん・・・。
芳恵さんが嫉妬するような「女力（おんなりょく）」に溢れる、女の魅力いっぱいの母さん・・・。あれが２０年後の僕の姿だと考えたら、そういう人生もあるのかと少しだけ思えるようになってきた。
　そんなことを考えながら、電車に乗った。僕みたいな、女性化対象になってしまった男子生徒がいないかと見回したのだけど、そんな雰囲気の子は一人も見当たらない。
　そもそも休日だから学生がほとんどいないのは当然だけれど、良く見ると学ランや男子用ブレザーを颯爽（さっそう）と着た女子生徒？らしいのは、若干名乗っていた。多分あれは男性化対象となった成績優秀な女子生徒？なんだろう。千博みたいに・・・。
　聞いた話だけど、この去勢処置を受けるために登校しなければならない男子生徒は、ほとんどが学校に一人で行けないのだそうだ。布団を被ってブルブル震えていたり、玄関で足が止まってしまったり、自宅の前で腰を抜かしてしまったり、とにかく普通に登校できる生徒は、かなり少数派らしい。
　そういうときって、両親に車で送って貰ったりするんだろうか？それはそれでかなり恥ずかしいな・・・。というか、去勢されるために車で連れてこられるなんて、まるで死刑を執行されるために連行される囚人みたいで、絶対に嫌だ。
　勿論、僕だって去勢されることは納得していないし、制度だからシブシブ従うにしても、僕の人生なんだから自分の足で歩いていこう、それが前に向かって進むための第一歩だ、まず、そう心に決めた。
「ごめんね、優稀。」
　電車の中で千博が話しかけてくる。制服は昨日まで僕が着ていた男子の詰め襟を着こなしていた。女子は胸があるので、男子の制服が着られない子もいるらしい。でも千博はそんなに胸が大きい訳ではなく、また僕は男子の中では華奢なほうだといっても、やはり胸板の厚みは女子よりも一回り大きいから、多少の不自然さはあって

も着ることができたみたいだ。
　千博は普段、僕とは一緒に登校しないのだけど、今日は一緒に出てきた。おそらく昨日のことだろう。
「まさか優稀が女性化するとは思ってなかった。あんなに勉強してたから・・・。」
「仕方ないさ。いまさらどうにもならないよ。筆記点だけなら、第三階級には入っていたんだけど、僕は運動点が絶望的に悪いからね。それで、第三階級になれないと、僕の体格や体力では第四階級は厳しいって言われちゃったら、もうどうしようもない。これが僕の運命だったということさ。受け入れるしかない。逆に千博は本当に頑張って男になったんだ、僕に遠慮せず、もっと誇っていいと思うよ。」
　母親同士の関係はともかく、別に千博とは仲が悪い訳では無い。義朗兄さんともそうだ。昨夜、一番風呂を譲ってくれたことでもわかるとおり、義朗兄さんはこれまで、出来の悪い弟を何かと気遣い、随分やさしくしてくれた記憶がある。芳恵さんが一方的に母さんと僕らを敵視しているだけで、むしろ千博たちには同情されている。
「でも、なんで千博は男になろうと？」
　千博が家族に希望を告げたのは、ついこのあいだだった。なんで急にそう思ったのか、理由を聞いてみた。
「私は、母さんから逃げるため。」
「逃げる？」
「うん、まぁ、何というか、説明が難しいんだけどさ、男になれば母さんの言う通りに生きなくていいからね。」
　うん、確かに、それはあるかもしれない。最初に千博が男になりたいと言い出した時、芳恵さんは随分反対していた。義朗兄さんが居るから必要ないと。あそこで父さんが、子供の人生は子供が決めるもので、結果についても子供の責任だと言わなかったら、多分千博の願いは認められなかったかもしれない。まあ、その結果責任を問われているのが、今の僕の姿なんだけどね・・・。

実際、端から見ているだけでも、千博は千博なりに大変で、娘だからと芳恵さんが昔やりたかったこと、なりたかったものの為に勝手にレールを敷かれ、習い事とか、仕草とか、やることなすことすべて細かく決められていた。母さんとの性格の違いなんだろうけど、おおらかで自由に育てられた環のことを随分羨（うらや）ましく思っていたようだ。

男になれば、それはあまり無くなるだろう。芳恵さんは、義朗兄さんには、あまり口を出していなかったからね。

一般的に妻が二人居る場合、家の中の教育方針は、それぞれの家で異なる。我が家では二人の妻がそれぞれ自分の子供を育てることになっていて、妻二人の教育方針は随分違っていた。長男と次男の違いもあるだろうけど、エリートの跡継ぎとして父さんからも鍛えられた義朗兄さんと、放任に近かった僕とでは、ここまで違う。まあ、その結果がこれなんだが・・・。

「そっか、なら良かったじゃない。」

そう言うと、ちょっと驚いた顔を浮かべた。

「ところで、千博が性別交換する相手は誰になったの？」

「遠藤勝美。知っているよね。」

「えぇっ、カツヨシが？彼は楽勝で第一階級の上の方になれる成績だよ？」

僕は驚いて言葉を失った。勝美は千博のクラスメートの彼氏で、もう付き合って2年以上になる。最近では、ときどきお互いの部屋に二人だけで勉強したりしているけど、多分まだ本当に清いお付き合いしかしていないような気がする・・・。処女と童貞、どころか、おそらくキスだってしたかどうかは怪しい。もっとも、それは僕も一緒なんだけど・・・。

彼は小学校からずっと一緒で、僕とは親友とまでは言わないにしても、小3と小4で同級生だったから良く知っているし、それ以後も仲のよい普通の友人として接していた。千博とは小5からずっと同じクラスで、ごく普通の男子として千博と付き合っていた筈だ。

成績抜群、多分クラスで千博に次いで、男子では1番か2番じゃないかな。それにサッカー少年で、僕と違い運動も得意なのに、何故女性化なんだろう・・・。
「実は女性化は勝美の希望なんだ。」
電車が最寄り駅についてドアが開く瞬間に言われたので、反応できずにいると千博は駆け出して行ってしまった。
あまりの出来事にぽかんとしていたが、慌てて電車から降り、追いかけようとした。けれど僕と違い走るのも速い千博は、見慣れた通学路に消えていった。

第１２話　去勢（１）（前書き）

ようやく佳境に入ってきました。でも優稀君（？）が完全に女の子になるのは、もう少し先になります。

第12話　去勢（1）

「おはよう。杉田さん。見違えたよ。」
　通学路を歩いて行くと、校門の少し手前で後ろから声をかけられ、振り向くと学ランを着た榊さんが居た。僕は女子の制服を着ているので、何だか恥ずかしくなり、カバンをパッとお尻に持ってきてスカートを隠す。
「その仕草、すっかり女の子だね。可愛くて似合っているよ。」
　そう言われ、いまさら隠しても意味がないので自然体で振る舞うことにする。
「榊君はもうすっかり男子だね。しかもイケメンじゃないか。」
　詰め襟の学ランを着ているから、というのもあるけど、僕に比べるとずっと背が高く、クラスの大多数の男子よりも上背があるのも、イケメン度が高く見える理由だろう。
　それに、話し方や性格的にも男子の鏡といった雰囲気で、女子の間での人気も高い。
　ハッキリ言って、僕より榊君の方が男に相応(ふさわ)しいのではないかと言われれば納得してしまう。勿論、それと僕が女の子になることは別問題なんだけど・・・。
「うん、小さいときから、どうしても男になりたかったからね。」
「榊君は性同一性障害なの？」
「いや、そういうつもりはないけど、でもなんとも言えないかな。別に女でいるのが嫌ってわけじゃないんだ。ただ、昔から男になりたい気持ちがあったのは確かだ。性同一性障害かどうかは僕にもわからないよ。」
　何だかよくわからない。
「だから、ごめんね。どうしても男になりたいんだ。父さんの会社を継がなければならない、というのもある。そのためにずっと男に

なる日を目指して努力してきたんだから。」
　これは何となく理解できる。父親の跡を継ぐ関係で男性になりたい女性というのは、わりとよく聞く話だ。でも、榊君には確か弟がいた筈だ。榊君みたいに、特別に優秀じゃないとしても、普通はその弟が会社を継ぐもんだろう。それが榊君の男性になりたい理由だとしたら、少し弱い気がする。それより、噂だけど榊君はこれまで女性相手にレズセックスをしてきたというのを聞いたことがあるので、だとすると本人がわからないと言っていても、やはり性同一性障害で心の中は男性なのかもしれない。だったらそのような診断を早くにつければ良いのにな。何もこの試験で僕を巻き込まなくても良かったのに・・・。と、ちょっとだけ恨みがましく感じてしまった。でも、榊君がいなければいないで、誰か代わりの女子が男子になりたがるだろうから、結局これは僕の側の問題なんだ・・・
「君が女の子になりたくないのは、わかってる。だから、君の一番大事なものを奪ってしまう代償に、責任をもって君を幸せにするよ。約束する。」
　その言葉に驚く。
「それって告白?」
「いや、君が誰を好きでも、誰と結婚して添い遂げてもね。勿論、君が僕のことを好きになって、僕と結婚したいというなら、全面的に責任はとるよ。君が望むなら、第一妻の座は、君のために常に空けておくから。」
　キザな笑みを浮かべ早々に学校の方へ去っていく。榊君が女子から人気ある理由がわかった気がする。そして、ふと、榊君なら男を譲ってもいいかもって思ってしまった。
　しかし、この言葉が後々の僕たちの運命に、よもやあれだけ大きな意味を持つことになるとは、思いもしなかった・・・。
　学校に着いてからの検査は目まぐるしかった。校舎の入り口、下駄箱のところで受け付けを済ませると、僕は２－Ｆの教室に行くよ

うに指示された。教室に入ると、まず驚いたことに、服を全部脱いで、素っ裸で健康診断を受けるように言われた。といっても、広い教室には自分一人と若い女性の看護婦さんが二人いるだけ。これはプライバシーに配慮しているというよりは、そもそも健康診断を受ける対象者が、各クラスとも男女1名ずつしかいないので、教室を贅沢（ぜいたく）に使えるからだろう。（例外で2名ずつというクラスもあったようだけど、1年生から3年生までの教室を全部使えるので、その位は教室の数にも余裕がある。）

健康診断なので、制服を脱ぐことには抵抗はなかった。いや、むしろ女子の制服を着ているのは、かえって居心地が悪かった。それに、建前はともかく、まだ僕は男子なので、上半身は裸になっても別にどうということもないけど、さすがに下着も脱いで素っ裸になるのは恥ずかしくて、ショーツを脱ぐのを躊躇（ちゅうちょ）していると、看護婦さんがやさしく声をかけてくれた。

「最初は恥ずかしいのも仕方がないですが、もうあなたは女子として扱われています。だから私たち看護婦も女性ですし、先生も全員女医を配置しています。女性同士、早く慣れて下さい。」

確かに理屈はそうなのかもしれない。でもちょっと詭弁（きべん）に聞こえるし、恥ずかしさは変わらない。ただ、恥ずかしかったけど、どうせこれから手術で全部見られるのだし、女子の下着（くまさんショーツ！）を着ていることも充分に恥ずかしかったので、覚悟を決めスッパリと全部脱いで、あそこをブラブラさせながら健康診断を受ける。

通常の健康診断に加え、採血と、移植手術の拒否反応を調べたり、性転換後のホルモンバランスや性的成熟度を調べるために、口内から綿棒で細胞摂取が行われる。これらひととおりの検診が終わると、教室の真ん中に置いてある歯医者の電動椅子のようなものに座るように指示された。

写真：教室の中央に置いてあった電動椅子
（両足の部分が大きく開きＭ字開脚姿勢にされてしまう）
＜ｉ４４５９１８―３１９４２＞

腰掛けると、両側の把手に掴まるように言われて、その状態で手首をベルトで素早く固定されてしまった。また、両足は膝の下の部分に、やはりベルトがあり、それで固定されてしまった。
　さらに看護婦さんが台の下のスイッチを操作すると、モーターの音とともに両足の部分の台が上に大きく持ち上がりながら、左右に大きく開いて行き、膝を曲げて股を極限まで開いた状態、いわゆるＭ字開脚姿勢を取らされた。
　手も足も固定されているため、もう僕は股間を大きくひろげて晒したまま、身動きすることもできない。ペニスやキンタマ、そして肛門まで、全部丸見えで、何をされても抵抗できない。しかもこの姿勢、上半身を少し起こしているため、自分の股間の様子が実によく見える。あとでわかったんだけど、これは理由があって、自分が去勢される瞬間を見せて、もう自分は男子ではなくなったと心に刻みつけるため、わざと本人によく見えるようにしているらしい。
　僕が大事なところをすべて差し出すポーズで「まな板の鯉」状態になると、看護婦さんの一人が椅子を持ってきて、Ｍ字に開いた足の間に座って、僕の顔と股間が全部写るようにビデオ録画を始め、僕の左側に座ったもう一人の看護婦さんが第二次性徴に関する問診を始めた。この椅子、Ｍ字開脚姿勢になると、股間が大きく広がって、その部分には何も遮るものがないため、看護婦さんがそこに入り込んで、僕の股間に簡単に手が届くようになっている。これが、噂に聞いたことがある産婦人科の内診台だと、ここでようやく気がついた。
　問診は、発毛時期や精通の時期、性欲の強さやオナニーの平均回

数及び最大回数、性体験の有無、さらにオナニーはどんなふうにやっているか、オカズは何を使っているか、バイブやオナホを持っていたり使ったりしたことがあるか、等を事細かに聞かれ、ちょっとでも曖昧な回答や、僕自身でもよくわからない内容だと、更に追加質問できっちりとした回答を求められた。質問は微に入り細にわたるもので、性器の発育度合いから普段の性的行動や性衝動など、およそ考えられる限りの角度から質問され、これは本当にものすごく恥ずかしかったんだけど、そもそもこんな恥ずかしい姿勢にされて、しかも録画までされているというプレッシャーから、もう頭の中はパニック状態になっているため、回答をはぐらかしたり誤魔化したりするような余裕は一切なく、すべての質問に対して全部正直に白状させられてしまい、僕の性癖はすっかり丸裸にされてしまった。（だって、顔とペニスを両方ともばっちり録画されていて、質問の内容によって僕が赤くなったり恥ずかしがったり、それどころかペニスが反応してしまい元気になったりピクピクしたりする様子まで、全部ばっちり録画されているんだから、羞恥プレイもいいところだ。）

　問診と並行して、股間に座った看護婦さんにはペニスの状態確認というか計測をされた。色やサイズ、勃起力、勃起時の膨張係数、包茎の度合い（剥け易いか、簡単に剥くことはできるか）、それに陰毛の生え具合等も、すべて特別な器具（専用の定規とかノギスのようなもの）できっちり測定され、録画とは別に平常時と勃起時の写真まで撮られた。さらに、オナニーの実演だと言われて、僕がやっているように皮をしっかり剥いてから、ローションを垂らしてペニスを手で扱かれ、僕が次第にアへ顔になり、快感に悶えて喘ぐ様子まで録画された。（でも最後まではさせてくれなかった。）

　いくら女性同士とは言われても、やっていることは女性の看護婦が男子のペニスを扱いたり、オナニーの回数とかやり方を女性の看護婦に白状したりするのだから、恥ずかしくて顔から火が出るようだったんだけど、この問診結果とビデオは、性器交換をする相手に

渡して、お互いの参考にするんだそうだ。とすると、僕も恥ずかしいけど、あとで僕も榊さんのこんな秘密を見知ることができるのだろうか・・・。

拷問のような時間が終わると、注射を2本打たれた。1本は精神安定剤で、もう1本は女性ホルモン剤とのこと。そしていよいよ、精巣の切除だ。事前に詳細な解説の載ったパンフレットを渡されていたけど、改めて看護婦さんから、去勢を先行させる必要性についての説明があった。

そもそも、いきなり精巣と卵巣を取り替えると、ホルモンバランスが崩れて身体への負担が大きいため、事前に反対の性別のホルモン剤を投与し、身体を慣らす時間として手術まで1週間の猶予期間が設けられているんだけど、男子の中には、その期間で女子とセックスをしたり、レイプしたりする者も少なくないらしい。勿論、女子にもそういう生徒はいるのだろうけど、男子が特に問題となったのは、過去に相手を妊娠させちゃった学生が、少なからずいたのだとか。（女子の場合は、手術のとき子宮を取り出すため、仮に受精しても着床できないのだそうだ。）これは意図せずに妊娠させちゃったというケースもあるけど、意図的に（わざと）妊娠させようとしたケースもあったらしい。まあ、これは1週間後に去勢されてしまう、切り取られてしまうとわかっていたら、誰だって自分の遺伝子を残したい、子孫をつくっておきたいと思うのは、男子として、というか生物の雄として当然の本能だから、理解できる行動だ。僕だって、可能なら橘さんとそうしたいという気持ちは、勿論あったし。

そこで10年程前から、このような駆け込みセックスに伴う、意図しない妊娠（特に女性側が希望しない妊娠）を防ぐために、正式な手術は1週間後だけど男子の去勢だけは先行させることになり、赤いカードを渡された翌日には睾丸を抜かれることになったとのこと。

勿論、それ以外にも男性ホルモンと女性ホルモンの効き方の違い（男性ホルモンがあると、女性ホルモンを投与してもあまり効かないが、女性ホルモンがあっても男性ホルモンを投与すると、男性化が起きる。つまり男性ホルモンのほうが優位にあるらしい）等、男性だけ直ちに去勢される理由をいくつか説明されたけど、やはり精神的な部分が一番大きいのだろう。殆どの男子は、睾丸を抜かれてしまうと、それで一気に性転換を受け入れるようになるのだという。多分、無理やりでも気持ちの整理を付けさせられてしまうということじゃないかな。それで、まもなく赤いカードを渡されたその日に、有無を言わせず直ちに睾丸摘出をするようになるという噂もあるんだけど、いろいろな準備とか、本人が家族に伝える時間とか、承諾書にサインを貰ってくる時間とかを考慮して、まだ今のところは当日の去勢にはなっていない。

説明は、僕のほうからの質問の時間もとってくれてあったんだけど、それも含めても１０分も掛からずに終了してしまった。
「もう質問はありませんか。疑問とか、この際だから聞いておきたいことや、心残りはありませんね。」
無言でコクンと頷いた。いよいよ、男の子に決別するときがきてしまった。

第１２話　去勢（１）（後書き）

良いところで切れてしまったので、次話は明日投稿します。

なお、次話の途中にショッキングな挿絵（？）がありますので、心臓の弱い方、特にスプラッタ系が苦手な方は閲覧にご注意下さい。

第１３話　去勢（２）（前書き）

途中にショッキングな挿絵（？）がありますので、心臓の弱い方、特にスプラッタ系が苦手な方は閲覧にご注意下さい。

第13話　去勢（2）

「じゃあ、毛を剃っていきます。」

　看護婦さんの一人が泡立てた石鹸液と太い刷毛筆（はけふで）をもってきて、僕の股間に泡をたっぷり塗り付けた。そして、T型の安全剃刀で、あっと言う間にVゾーンだけでなく陰嚢から肛門の周りまで、毛を全部きれいに剃り上げてしまった。

「はい、ツルツルになりましたね。では、先生を呼びに行ってきます。」

　その間、もう一人の看護婦さんに、蒸したタオルでよく拭かれて、さらに消毒液を含ませたガーゼで丁寧に拭かれる。と、そこにまだ若い女医の先生が入ってきて、じゃあさっさと済ませましょうと、爽（さわ）やかに言いながら、陰嚢の部分に局部麻酔をかけられる。注射器を持った手が股間に伸びる瞬間、睾丸とかペニスに針を刺されるのかと、一瞬恐怖が走ったけど、麻酔は陰嚢の皮膚（皮の部分）だけに刺すような感じで、ペニスにも睾丸にも、直接は針を刺されなかった。これも、ちゃんと理由があるのが、あとでわかったんだけど・・・。

　2～3分待って麻酔が効いてくると、陰嚢の横の方にメスを入れられて小さい縦穴を空けられる。

　そこから睾丸を押し出し、出てきた睾丸を引っ張って輸精管を根元から切る。

　なんだかたまらない気持ちで、眼をつぶっていたかったんだけど、これは男でなくなるという精神的な気持ちの切り換えを受け入れるためにも、是非見ておかなければならないからしっかり見ておくようにと言われて、必死で自分の睾丸が取り出されて切り取られるところを見続ける。

　僕はスプラッタが苦手で、血が出るのを見るのは怖かったけど、

血は陰嚢を切開したときに、ほんの少し滲(にじ)んだ程度で、あとはまったく出なかった。

　引き出した睾丸には、輸精管とともに細い血管が来ていた。でも切断する前に糸で手早く縛ってしまったので、血はまったく出ない。ただ、輸精管が手術用のはさみで切断された瞬間、麻酔が掛かっているはずなのに、金玉を殴られたようなショックがあった。

「痛っ」

「我慢してください。片方はもう終わりましたから。」

　そう言うと切り取った睾丸を膿盆(のうぼん)に置き、もう片方も同じように皮を切って引っ張り出し、血管を縛った上で輸精管と一緒に、チョキンと切る。再度殴られたようなショックが襲って来る。

「痛っ」

　思わず悲鳴を漏らしたけど、さてどの位痛かったかと聞かれると、物理的な痛みではなかったような気もする。いわば精神的な痛み、精神に対する大きなショック、これが男じゃなくなった心の痛みか・・・、と思いながら、これで終わったのかと、ホッとしていると、ステンレス製の膿盆(のうぼん)に載せた僕の睾丸を二つ、見せてくれた。これで、本当に男でなくなった、ということを思い知らされ、心にポッカリと穴が空いてしまったように感じられた。

　　　写真：僕から切り取られた睾丸

＜ｉ４４２８８４―３１９４２＞

　切り取った自分の睾丸を見せられた後、記録に必要だからと言われて、全裸でＭ字開脚している僕の腹の上に、切り取った睾丸を二つとも入れた膿盆(のうぼん)を載せ、僕の顔から切開されている股間まで、切り取った睾丸とともに全部写るようなアングルで写真を撮られた。これが、僕から睾丸を切り取ったという証拠写真になり、僕の睾丸だったという大切な記録になるんだそうだ。でも、僕が去勢されて

男の子でなくなってしまった瞬間の涙で濡れている状況を、切り取られた睾丸と一緒に撮影するなんて、どんな羞恥プレイよりも酷い。こんな写真、万一出回ったら、もう僕は生きていけない。これって、あとで何かの訴訟でも起こされないための保険なんじゃないだろうか。

その後、耳鼻咽喉科で鼻水を吸い出す機械とそっくりの、チューブで繋がった細い管のような物を、輸精管の切れ端の中に入れられて吸引される。睾丸を取ってもまだ精子が身体内に残っているからだ。チュルチュルッ、チュルチュルッと音を立てて吸い出される度に、僕の中の男が全部吸われていく気がしてくる。

吸い出した精液は後で分析され、生殖機能が正常かどうか、精子に奇形や異常がないかどうかを調べられるらしい。

睾丸を取り出した穴は、両側とも手際よく縫い合わされた。それぞれ2針ずつ縫ったみたいだけど、ごく薄い陰嚢の皮膚を2センチ程度切っただけなので、普通は縫わなくても大丈夫な位だそうだ。ただ、この手術は1週間後に完全な性転換を受けるまでに傷口が塞がっていないと、相手に陰嚢を移植したときに不都合なため、少しでも早く傷口が直るように縫い合わせるのだという。

傷口を縫い終わると、若い看護婦さんがガーゼで僕の目をそっと拭ってくれた。自分では気がつかなかったけど、涙をいっぱい零していたみたいだ。ちょっとだけ痛かったけど、別に痛くて泣いた訳じゃない。昨日あれだけ泣いて、もう未練はないと思っていたのに、男でなくなってしまったという悲しさ、寂しさは、どうしようもなかった。

「では、最後に射精して、精嚢に残っている精子を全部出して頂きます。」

そう言うと、先生はペニスにローションをたらして、先端を完全に剥き、亀頭をゆっくりと扱きだした。これがあるので、麻酔は最低限として、陰嚢の表皮だけにかけるんだって。

若い美人の女医さんに、ペニスの皮を剥かれて亀頭を刺激されて

いる。両側では、僕とあまり年齢の変わらない看護婦さんが見つめている。だけど、たった今、睾丸を抜かれてしまったショックか、それとも睾丸を抜かれてしまうと、そもそも勃たなくなるものなのかは知らないけど、僕のペニスは、ちっとも元気にならず、ずっとうなだれたままで、射精ができるような状態にはなってくれない。
「やっぱり勃たないですね。機能的には睾丸がなくても勃起と射精には関係ないですし、あなたの体内にはまだ男性ホルモンが溢れているのですが、睾丸を抜かれると、精神的な問題で、こうなってしまう男子は多いのです。」
そう言いながら、先生が亀頭をやさしく刺激し続ける一方で、看護婦さんの手でローションをたっぷり塗ったペニスのような形のプラグを肛門に挿入され、前立腺を裏側からぐりぐりと刺激された。
「あっ、あっ、ひっ、ぁんっ、ああんっ、やっ、ぃやっ、やめっ、やめてっ。」
「男の子は、ここを刺激すると必ず射精反応が起きます。力を抜いて快感に身を任せて下さい。」
「ひっ、ひっ、ぃひっ、ぁあっ、あんっ、だっ、だめっ、だめっ。」
あっと言う間に強制的に勃起させられた。睾丸を抜かれても、こんなにガチガチのビンビンに勃起するものなんだ。ちょっと意外だった。
「この感覚は、今後女の子としての性的快感と通じるものですので、その練習だと思って下さい。」
「あんっ、ぁあんっ、ああっ、あひっ、ひっ、ぃひっ、ぃいっ、いっ、いくっ、いくっ、いくうーっ。」
僕はたまらず、思いっきり射精した。今朝、射精したばかりなのに、こんなに多量に射精するんだ、という位の量だった。
先生は冷静に、射精した精液を残さずガラスのシャーレに受け止めた。なんだかわからないけど、これで僕の男の子としてのすべてが身体内から取り出されてしまったみたいだった。
「たくさん出ましたね。では、ちょっとこのまま15分ほど休んで

いて下さい。」
そういうと、先生は部屋から出ていった。きっと、他のクラスの子を去勢しに行ったんだろう。僕はM字開脚の姿勢のまま、放置された。その間、看護婦さんがペニスや肛門を温かいおしぼりで、やさしく拭いてくれた。亀頭の部分も、おしぼりで何度も拭いてくれた。昨日の夜、風呂でしっかり剥いてきれいに洗っておいて、本当に良かった。

股間を拭いたりしてくれている間に、看護婦さんがいろいろと話しかけてきて、僕の態度をすごく褒めてくれた。さっき、睾丸を切り取られるとき、僕は先生に言われたとおり、しっかり目を逸らさずに黙って見つめていた（正確には「痛いっ」と小さく叫んでしまったけど）。これは、なかなかできないことで、勇気があって立派だと言うのだ。そんな態度の男の子は、何年かに一人いるかいないかという程度らしい。皆、どうしているのかと聞いたところ、３割程度は早々に気絶してしまい、１割程度は大暴れして、開脚台もろともひっくり返るほどに暴れまくるのだという。そして残りの６割程度（これが一番多いそうだ）は、ブルブル震えながら号泣して、「いやだーっ」「やめてーっ」「たすけてーっ」「ごめんなさーいっ」「おかあさーん」「ゆるしてーっ」「切らないでーっ」などと大声で泣き叫ぶとのこと。

気絶してくれれば、まだ気が楽だけど、暴れまくる子は必死で押さえつけなければならず体力的にとても疲れるんだって。でも、一番嫌なのは、わんわん泣いている子の睾丸を摘出するときで、男の子を拷問にかけ、身体と心に一生消せない傷を刻みつける鬼畜になったような気がして、精神的にものすごく滅入ると言っていた。ここまでして、わざわざ本人に去勢の瞬間を見せる必要があるのか、全身麻酔でもいいんじゃないかって思ったりするそうだ。（でも気を失っちゃった子は、切り取る瞬間にわざわざ気付け薬を嗅がせてまで、意識を取り戻させて切り取るところを心に焼き付けるんだって。自分が男ではなくなる瞬間を、しっかり見せつけるというのは、

心をスムーズに女性化するために必要だと説明されたんだけど、いくら目的のためとはいえ、本当に鬼の所業だよね。）
でも、どんな子でも、切り取った睾丸を両方とも膿盆（のうぼん）に載せて目の前に持ってくると、とたんにがっくりとなっておとなしくなり、もう暴れたり泣き叫んだりすることもなく、まるで糸の切れた人形のように従順になるのだという。多分、とうとう男でなくなってしまったという絶望感に心が折れてしまい、キンタマとともに魂も抜けてしまうのだろう。去勢されると、家畜でも人間でも性格がおとなしくなるとのことだけど、特に人間にあっては、動物的な性衝動がなくなるという以上に、心が折れてしまうのが大きいのだと思う。
この睾丸摘出手術は、基本的に女医さんが担当することになっているんだけど、さきほど説明があったように、もう女性扱いだから女医さんにするというのは、実は建前で、男性の医者は患者が可哀相で手術できなくなっちゃうらしい。その気持ちもよくわかる。可愛い男の子が泣き叫ぶところを見るのが好きなどという特殊な性癖でない限り、自分が無理矢理睾丸を抜かれて、男性じゃなくされてしまうところを想像しちゃうんだろう。それに比べて、最初からタマのない女性なら、わりあい冷静に手術をすることができそうだ。
まあ、これは僕の女性に対する偏見かもしれないけど・・・。
約15分位すると、先生がまた僕のところにやって来た。時間からして誰か次の子が一人、タマを抜かれちゃったに違いない。その子は泣き叫んだのだろうか・・・。
「そろそろ次をお願いします。」
と言うと、さっきと同じようにローションを塗って僕の亀頭をゆるゆると刺激しだした。それに合わせて、看護婦さんもまた肛門からプラグを入れて前立腺をぐりぐりする。
賢者タイムのせいか、最初はふにゃふにゃで無反応だった僕のペニスだけど、この2カ所責めでみるみる勃起してビンビンとなり、またしても短時間で射精させられた。これまでも一日に三回オナニーしたことがあったが、そのときはもっと間隔が開いていた。こん

なに短時間で連続射精したのは、はじめてだ。
そのせいなのかどうかはわからないけど、二度目の射精では、射精の快感は変わりないし、射精した量もそんなに変わらなかったのに、水のような無色透明の液体しか出なかった。これもやはりシャーレに受け止めると、前に採取された精液と並べて見せられた。こうして比べてみると、2度目の射精は、精液というより我慢汁を大量に出したみたいだ。こういうのって、潮吹きって言うんだっけか？
「最初の射精では、まだ精嚢に精子が残っていたので、このように白く濁っていますが、次の射精では、もう精子が残っていないので、こちらのように無色透明です。」
「これであなたの身体からは、もう精子がなくなりました。とはいえ、今やったとおり、機能的には勃起も射精も普通にできますので、これから1週間の間に、女性と最後のセックスを楽しむのも自由ですし、最後のオナニーもできます。ただ、睾丸を摘出したので男性ホルモンの供給が途絶える一方、これから毎日、女性ホルモン剤を服用して貰いますので、身体も心もどんどん女性化してくる筈です。多分、勃起したり射精したりという気分にはならなくなってきますが、それが自然ですので、むしろ女性になる心構えを養って下さい。」
つまり、タマを抜かれてしまうと、そもそもムラムラしなくなるということか。これで男の子は、無事卒業となった訳だ・・・。
「たった1週間ですが、手術するまでに、性格とか雰囲気が殆ど女子と変わらなくなる男子も多いです。これは身体的にもそうですが、精神的なものが大きいのかもしれません。ただ、身体にも精神にも負担は大きいですので、無理をせずにリラックスして過ごして下さい。」
「もう生物学的に男子ではありませんので、服装だけでなく言葉づかいも女性言葉に切り換えて下さい。こういったものは慣れですので、恥ずかしがらずにどんどん使ってみて下さい。とはいえ、いきなりだとハードルも高いでしょうから、まずは手術までの1週間で、

自分のことを『わたし』または『あたし』といった、女言葉の一人称で呼ぶように努力してみて下さい。『俺』とか『僕』とかは、絶対に使わないようにしましょう。これができるようになるだけで、もう心の女性化の半分は成功したようなものです。」

「お風呂に漬かるのは、今日一日だけ控えて下さい。シャワーは大丈夫です。傷口は水で流す程度にして、シャワーから出たら自分で消毒しておいて下さい。市販の消毒薬で結構です。普通の小さな切り傷ですから、特に運動の制限はありません。オナニーも構いません。」

「セックスは、股間を相手の股間に打ちつけることになる関係で、明日以降にして下さい。」

「それでは、服を着てそちらのベッドで少し休んで、12時になったら帰って結構です。本日はお疲れさまでした。」

第１４話　勝美（カツヨシ）→勝美（カツミ）

　１２時のチャイムが鳴ったので、言われたとおり部屋を出て行くと、校門のところには、全部で7名~8名の生徒が似合わない女子の制服を着て、ふらふらと家路についていた。どうやら僕のように睾丸を抜かれてしまった男子が各クラス1名ずつ（2名というクラスもあったのかな？）居るみたいだ。皆、足どりが重く、俯いたまま一言も話さない。まるでゾンビか幽霊のような雰囲気で歩いていて、僕もあんな様子なのかと、ちょっと嫌になった。

　ふと気がつくと、女子の制服を着ているからわかりにくいけど、多分あれは遠藤勝美だ。他の子と違い、彼（彼女？）だけは背筋をピンと伸ばして前を真っ直ぐ見つめ、しっかりした足どりで歩いていた。

「おーい、カツヨシ！」

「あ、優稀さん、あなたもそうだったのよね。どうだった。あたしは麻酔がかかっていた筈なのに、少し痛かったわ。」

「ねえ、カツヨシ。君、女性化を希望したんだって本当？まさか、性同一性障害者じゃないよね？だって千博と付き合っていたんだから・・・。」

「あたしは、昨日からカツミになったの。優稀さんは以前からカツヨシと呼んでくれていたけど、これからはみんなが呼ぶように、カツミと呼んでちょうだい。あ、でも漢字は一緒だけどね。」

　カツヨシは、もうすっかり女になった気分みたいだ。第一、完全な女言葉に切り換えていて、自分のことはしっかり「あたし」と称しているのは凄い。僕なんか、まだとてもそんな気分ではないのに・・・。とはいえ、いつものカツヨシとのギャップというか変化に、物凄い違和感を受ける。でも、こうして見ると、彼？も案外女顔だし、わりと小柄（といっても、僕より5センチ位は背が高いけど、

それでも彼のクラスでは前から2番目らしい。勿論、僕は僕のクラスで一番チビだけど・・・。）なので、ちょっとボーイッシュな可愛さがある。
「あたしが女性化を希望したのは本当よ。だって千博が男性化を希望したんだもの。仕方がないじゃない。これが唯一の解決方法だったのよ。もう恋人じゃなくなるなんて、あたしには耐えられなかった。千博に、誰か他の男子のオチンチンが移植されるなんて、絶対に嫌だったし、千博のオマンコが他の男子に移植されるのも絶対に避けたかったの。」
「そうなんだ・・・。」
「そのために、あたしも頑張ったの。千博がトップを取るのは間違いないけど、あたしも男子でトップを取らないと、二人して性転換対象者にならない可能性がでちゃうでしょ。そうなったら悲劇だから、二人で約束して、必死で判定試験に臨んだわ。それで、ようやくここまでこぎつけたっていうわけ。」
やはり、カツヨシ、いやカツミは、自分で女性化を希望したみたいだ。それも、男性化する千博と付き合い続けるために、自分の性別を変えることで・・・。
「もう、女言葉を使っているんだね。僕はまだ、そこまで心がついていかないんだ。」
「うん、それは自分で望んで性転換するわけだから、もう昨日の夜からそう努力しているわ。まだまだ慣れなくて変に聞こえるかもしれないけど、そこは見逃してね。服とか下着とかも女物を揃えなければいけないんだけど、何をどこでどう買えば良いのかもわからなくて、千博に聞いているところなの。でも、千博も手術は先でも、もう男性扱いになってしまったので、女性下着の売場とかに付き合って貰うわけには行かなくて、どうしようかと困っているの。いずれ生理用品だって買わなければいけないし、誰か手伝ってくれる人はいないかしら。」
「そういうことなら、橘さんに頼んでみようか。」

「なんで橘さんが？・・・あれっ、もしかして、優稀さん橘さんと付き合っていたの？」
「うん、ちょっとね・・・。でも内緒だよ。それにもう、僕には彼女とお付き合いする資格がなくなっちゃったから・・・。」
「そうね。あたしたちはもう男性じゃなくなっちゃったんだし、橘さんがレズだとも思えないわよねぇ。でも、ありがと。あたし達は手術がある関係で、終業式の日までは学校がお休みだから、もし手伝ってくれるなら、手術で入院するとき以外はいつでも大丈夫よ。」
「カツミはタマを抜かれるのが怖くなかった？僕は昨日、怖くて悲しくて、ずっと泣いていたんだけど、今日、抜かれたキンタマを見せられて、思わずまた涙がでちゃった。」
「それは怖かったわ。もうこれで男の子でなくなる、というのは、仮に性同一性障害者だったとしても、やっぱり怖いんじゃなくって？でもね、あたし看護婦さんに褒められちゃったわ。タマタマを抜かれるとき、気絶したりパニックするのが普通らしくて、抜かれる瞬間をしっかり見ていたら、そんな子は何十人に一人なんだって。でも、あたしの場合、切り取られたオチンチンとタマタマは千博に移植されるのよ。それであたしは千博のおっぱいとオマンコを貰うんだから、恋人との間で服を取り替えっこするような感覚よ。他の人とはちょっと事情が違うのかしら。今はとても幸せな気分だわ。」
そうだ、カツミは千博と性器を交換するんだ。だから自分で女性化を志願したのか。カツミが千博にベタ惚れなのは前から知っていたが、ここまでとは・・・。まあ、ある意味幸せなのかな。カツミも幸せなんだろうけど、これだけ理想的な彼氏が、性転換してまで純愛を貫いてくれるなんて、千博もなんて幸せなやつなんだろう。リア充め！爆発しろっ！！と、ちょっと嫉妬してしまった。
でも、そうか、僕も褒められたけど、やっぱり普通の男子はキンタマを抜かれるときに、気絶したりパニックしたりするのか。まあ、それが当然なのかもしれないな・・・。
「僕は手術で痛かったことより、２度も射精させられるとは思わな

かったよ。いろいろと覚悟はしてきたつもりだったけど、精液を搾り取られるとは思わなくて、びっくりした。特にお尻の穴に入れられてグリグリされたのには参った。あれで簡単に射精しちゃったよ。」

「でも、先生が話さなかったかしら？あの感覚は女性がセックスでイクときの感覚に近いんだって。あれ、ものすごく気持ち良かったじゃない？初めての経験だったけど、これまでの男の子のオナニーとは比較にならない快感で、あたし、ものすごく感じちゃって、涎（よだれ）をたらしてアンアン泣き叫んじゃったの。しかも、身体の中に挿入されて、自分ではどうしようもない状態のまま我慢できない快感が襲ってくる。きっと女性のセックスって、こういう感じなんでしょうね。男性を受け入れさせられるっていうか、男性に無理やり入れられて、イカされてしまうのかしら。早く千博のオチンチンでイカされてみたいわ。あたし、ちょっと手術が待ち遠しくなってきちゃったの。」

　それは僕も少し思った。けど、そんな話、恥ずかしくてとても言えない。こんなにあけすけに話せるカツミって、やはり凄い。いくら恋人同士で、しかも自分から望んだとはいえ、僕なんかとは覚悟が違う。それともまさか、カツミはこれで変な快感に目覚めたりしないよね？！

「ねえ、確か、カツミの家は夜まで誰もいないんだよね。それにカツミのお父さんは海外に行っちゃってるんでしょ。もしよかったら、ウチにちょっと寄っていかない？いろいろ話したいこともあるし、千博とも話をして行くと良いよ。」

「本当？でも、悪いんじゃなくて？優稀さんも千博も、手術を前にして本格的な女性化、男性化の準備をしているところでしょ。あたしなんか、ただのお邪魔虫にならないかしら？」

「そんなことはないって。第一、カツミと千博は長いこと付き合ってきた恋人同士なんだろう。千博も喜ぶと思うよ。」

「じゃあ、お言葉に甘えて、ほんのちょっとだけ、千博に挨拶に行

くわ。男の子を卒業したあたしを見て貰いたいから。こういうとき、家族が多いって良いわね。何を話すのでなくても安心するでしょ。」
「でもウチの場合は、母さんと第一妻の芳恵さんが居て、あまり仲が良くないから、別の意味で気をつかうこともあるんだ。まあ腹違いでも兄弟姉妹の仲は良いのが救いだけど。」
「それって羨ましいわよ。あたしは一人っ子だから、兄弟姉妹が沢山いるだけでも憧れ（あこが）ちゃうわ。」
「ところでさ、僕のこと『優稀さん』って呼んでるけど、これまでみたいに『ユウキ』って呼んでよ。僕も勝美のことは『カツミ』って呼んでいるでしょ。性別が替わっても、僕たちの関係が変わる訳じゃないし、二人とも女性化しちゃったんだから、異性に対する気の使い方は不要じゃない？」
「それで良いの？なら、これまでどおり『ユウキ』って呼び捨てにさせて貰うわ。やっぱり、このほうがしっくりくるわよね。ありがとう。」
そんな話をしつつ、二人で家路に向かいながら、前から気になっていたことを、是非とも聞いてみようと思った。だって、これは今しか聞けないことだから・・・。
「ねえ、勝美と千博は、どこまで行ってたの？付き合って2年以上だよね。もう最後まで経験した？・・・んなわけはないのかな？」
いきなりど真ん中のストレートな質問に、勝美は一瞬で顔を真っ赤にして、急にあたふたというか口をパクパクさせながらむせ込んだ。
「えっ、えほっ、ごほっ、あっ、あたしたちはっ、そっ、そんなんじゃないの。きっ、清いお付き合いだったから・・・。」
ちょっと嘘っぽい。確かに二人が清いお付き合いだったのは知っている。もしかすると、キスもまだかもしれないとも思っていた。でも、この焦りよう。何か変だ・・・。いつもの自然体で自信タップリの勝美とは、あきらかに違う。ちょっとカマをかけてみるか・・・。

「実は試験の2週間前の金曜日に、千博が帰って来て、部屋で鍵を閉めて何かをしてぃたんだ。千博が部屋に鍵をかけるって、かなり珍しいことなんで、何となく家族に知られたくないことかなって、気にはなったけど、プライバシーもあるから放っておいたんだ。何をしているのかなあって・・・。何か、服の手入れをしていたようだったけど、そんなことで鍵をかける必要はないしね・・・。」
「えっ、えほっ、ふっ、服っ？っ、なっ、なっ、そっ、それっ、いやっ、あのっ、制服はっ、そのっ、制服なんてっ、よっ、汚れてっ、・・・なっ、なんでもっ、ないっ、そっ、そのっ。」
「えっ？僕は制服だなんて一言も言っていないよ？勝美はどうしてそう思ったの？何か知っているの？そもそも僕は千博の部屋を覗(のぞ)いたわけじゃないし、何となく服の汚れを落としていたような音がしただけだから。」
「ぇっ、ぇえっ、あっ、あのっ、そっ、そのっ、せっ、制服っ、ぃやっ、ちがっ、そのっ、せっ、せっ、せいえきっ、じゃないっ、あのっ、そのっ・・・。」
「で、それはともかく、その翌日の土曜日に、朝から勝美の鞄を持って勝美の家に出かけて行ったんだけど、午後遅くに帰ってきたときには、ボーッとしてて、何を話しかけても本当に上の空(うわのそら)だったたんだ。よほど衝撃的な体験でもしたのか、精神的な面でも、身体的な面でも、あきらかに普段と違っていて気になったんだけど、勝美の家で何かあったの？」
「げっ、げほっ、げほっ、そっ、そんなっ、なにもっ、きっ、気のせいだよ、ぼっ、僕は、僕は千博とセッ、セックっ、いやそのっ、何もっ、何もしていないからっ。ぜっ、絶対っ、せっ、ちがっ、何もっ。」
　耳まで茹で蛸(ゆでだこ)のように真っ赤になって、メチャクチャどもり出した。しかも言葉づかいが完全に男の子に戻ってしまっているし、聞き間違いでなければ、今一瞬、精液とかセックスとか言いかけたような気がする。これはあからさまに怪しい。もう少しからかってみ

るか。
「そうかなぁ・・・。確かその週末だったような気がするんだよね。千博が男性化をめざすって家族の皆に話しだしたのは・・・。だからてっきり、勝美と何か話をして、そうとう突っ込んだ話の上で決心というか決断したに違いないと思ったんだけどなあ。」
「ごっ誤解だっ、誤解だってっ、そんなことはっ、僕たちは何もっ。本当にっ、何もっ。」
「まあいいや、これからウチに来て千博とも会うんでしょ。そのときに聞いてみるよ。」
「えっ、そっ、それはだめっ、ぜっ、絶対っ、こっ、困るっ、いや、そうじゃなくてっ、あっ、あのっ、そっ、そうだっ、僕、急にそのっ、さっきの傷がその、痛くなっちゃったからっ、今日は自宅にっ、先に帰らせて貰うっ。」
「えっ、どうして？せっかくだからおいでよ。きっと千博も喜ぶよ。」
「だっ、だめっ。行ったらっ、まずいっ、いやっ、ごめん。せっかく誘ってくれたのにっ、行けないのっ。本当にごめん。」
「じゃあまたっ、ごめんねっ。」
茹で蛸（ゆでだこ）のように耳まで真っ赤になり、眼を泳がせて支離滅裂に謝りながら、勝美は一目散に自分の家に向かって駆けていってしまった。純情な勝美を少しからかいすぎたかな。可哀相なことをしちゃった。でも、あれは絶対に何かあったようだ。あの勝美と千博がねえ。
もしかすると、勝美の性格からして、最後の一線は超えていないのかもしれないけど、それに近いことはやったんだろうな。ちょっとキスしただけとかじゃあ絶対にない。まあ恋人同士なんだから、他人には言えない二人だけの秘密の関係だってあるはずだ。
あとで千博を問い詰めてみるか。でも、いくら兄妹？（今はもう姉妹？それとも姉弟？）でも、さすがに悪趣味かなあ・・・。

第１５話　二人の関係

勝美をからかってから家に帰ると、みんな僕のために昼食を待っていてくれた。急いで制服を室内着に着替えて食堂に行くと、父さん以下、全員がもう席に着いていた。僕の席は、今日から母さんと環の間、これまで千博が座っていたところで、千博は僕が座っていた義朗兄さんと晶の間になっていた。僕とすれば、こっちのほうが居心地は良い。千博もそうだろう。ただ、まだ小２の晶は、これまでは隣が僕だったけど、これからは隣が千博で、反対側は芳恵さんだから、ちょっと心細そうな顔をしている。でも、芳恵さんはこれまでと一緒だし、千博は面倒見が良いから大丈夫だろう。

座る場所は、まあどうでも良いけど、千博はこれまで僕が着ていた室内着のＴシャツにハーフパンツを着ていて、多分まだブラは着けているようだけど、髪も短く刈り込んで、ぱっと見ただけでは男の子に見えた。もっとも、僕だって千博のジャージとトレーナーを着ていると、色合いから女の子に見えるんじゃないかな。これで髪を少し伸ばせば、もう少し女子っぽくなると思う。

食事のときは、家族全員が僕に気をつかっているようで、今日のことは一切話題にならない。ただ、言葉の端々(はしばし)に、千博に対しては男の子に対するような言い方とか表現で、また僕に対しては女の子に対するような言い方とか表現を使おうとしている雰囲気だけはある。かなりぎこちないけど、それは僕や千博の話し方も一緒だろう。

そのような雰囲気を打ち破るように父さんが口をひらいた。

「優稀も千博も、性転換すると名前を変えることができるんだが、どうする？何か希望があれば、それにするぞ。」

「僕はこのままでいいや。千博って名前は女でも男でもあるから、慣れているものにしたい。」

「ぼっ、僕もこのままでいいです。優稀も女の名前でも不自然じゃ

ないし・・・。」
「わかった。一応、手術までの1週間が登録猶予期間だから、もし気が変わって変えたいと思ったら、直ぐに言いなさい。これは保護者である父さんの名前で申請しなければならないので、父さんが手術の日に市役所に行ってくる。それと優稀、もう女子なんだから、女言葉を使いなさい。すくなくとも『僕』はないぞ。せめて『私』を使いなさい。最初は難しいだろうけど、早く慣れて自然に出るように。」
「はい。」
「それから芳恵と博美、二人で優稀に女子としての立ち居振る舞いや仕草を教えてあげなさい。座り方とか身のこなしとか、女子として、はしたない雰囲気にならないように。」
「「はい。」」
食事が終わり、食器の洗い物や片付けを手伝おうと台所に向かったら、芳恵さんに声をかけられた。
「優稀、今日は手術してきたんでしょ。こっちはいいから、少しのんびりして休んでいなさい。」
「明日からは手伝ってね。」
と、母さんにも言われたので、そうさせて貰う。
自分の部屋に行こうとしたら、千博が丁度部屋に戻るところだったので、ちょっとだけ話をしようと思った。
「少し話したいんだけど、時間ある?」
「僕も話したかった。」
千博の部屋に入る。もともと千博は、あまり女子っぽくない雰囲気の子で、部屋のインテリアとかも女子にしては極めて質素というか無骨だったけど、昨日から早速模様替えをしたのか、もう男の子の部屋といっても違和感のない雰囲気に変わっていた。（さすがにピンナップグラビアとかエロ本とかは見当たらなかったけど・・・。）
まず、千博の話を先に聞く。

「あのさ、話しにくいことかもしれないけど、今日はどんなふうだった？」
「話しにくいと思うから、僕から先に、こっちがどんな様子だったかを話すね。」
「まず入口で受付をすると、指定された１－Ｆの教室に行ったんだ。教室には女性の看護婦さんが二人だけ。先生は途中でちょっとだけ来たけど、基本的にはこの看護婦さんが全部対応していた。」
そうなんだ。とすると、僕が聞いた女性化対象者だから女医と女性看護婦という説明は何だったのだろうか。やっぱりあれは、単なる建前なんだろうな。
「まず全部脱いで、素っ裸になって、普通の健康診断を受けたんだ。追加項目としては、血液検査と口腔内からの細胞採取位だった。次に産婦人科の内診台に乗って股を大きく広げて、あそこの診察があった。あちこちのサイズを計測したり、中をひろげて観察され、しかも写真まで撮られた。」
「そこまでは、こっちもまったく同じだ。」
「それと並行して、性的発達や性欲などに関する詳細な問診があった。物凄く微に入り細にわたるプライベートな質問で、普通じゃ恥ずかしくてとても答えられないような内容なんだけど、こっちは内診台であそこを晒（さら）しているので、恥ずかしくて頭がマヒしているのか、聞かれたことに全部正直に答えちゃった。性体験の有無からはじまって、普段どんなオナニーをどのくらいの頻度でやっているか、とか、何をオカズにしているか、とか、どこが一番感じるか、といった自分の性癖を洗いざらい白状させられたんだ。それと恋人がいると答えると、その相手との関係や、性行為をしているか、しているならどんな内容かも聞かれて、今思い返しても、顔が赤くなるような質問だった。」
「それも同じだ。ぼ、いや私も正直に答えちゃった。」
「その後、オナニーの実演までさせられて、それをビデオに撮られた。」

「それも同じ。」
「射精した?僕はクリトリスを弄(いじ)くられて、イクところまで撮影されちゃった。」
「こっちは扱(しご)かれて悶(もだ)えさせられたけど、射精まではさせられなかった。射精はタマを抜いた後で2回もさせられたから。」
「そうなんだ・・・。でも、この問診結果とビデオ、性別交換をする相手に見せるんだって。早くオナニーのやり方に慣れるためとか言ってさ。僕は勝美と恋人同士だからまあ良いけど、これまでまったく関係のない相手にこんなビデオや問診結果を渡すなんて、プライバシーも何もあったものじゃないよね。」
今、千博がつい口走った内容で、僕の知りたいことの大半はわかっちゃった。やはり勝美と千博は、恋人として普通の男女の関係になっていたみたいだ。勝美の性格からして、あるいは最後の一線はまだ守っているのかもしれないけど、少なくともお互い、オナニーを見せあったり、問診の回答程度なら当然に知っているのだろう。それがわかっただけで、もう僕から質問する必要はなくなったんだけど、千博の話はまだ続いた。
「僕のほうは、だいたいこれで全部だった。すごく恥ずかしい内診と、それ以上に恥ずかしい問診、それにオナニーの実演ビデオ撮影が加わったけど、健康診断と合わせても全部で３０分位だったかな。それで最後に男性ホルモン剤の注射を1本打たれて、あとは薬を貰うための処方箋を貰って帰って来た。時間があったから、床屋で髪を短くして家に戻って来たのが１２時ちょっと前だった。」
「ふーん。私のほうは、開脚台に固定されて、問診とかビデオ撮影の後、注射を2本打たれた。女性ホルモン剤と鎮静剤だって。次にあそこの毛を全部剃られてツルツルにされた。その後女医さんがやってきて、あっと言う間に麻酔をされて睾丸を抜かれちゃった。陰嚢の下のほうに2センチ位の小さな切れ目を入れて、そこから睾丸を押し出すように取り出し、血管を縛って輸精管とともにチョキンってね。血もまったく出ず、本当に片側2分位しかかからなかった

よ。切り取られた瞬間、鈍い痛みというか衝撃があった位かな。」
「優稀はそれを見ていたの？平気だった？気絶したり、泣き叫んだりしなかった？勝美は大丈夫だったかな。」
「看護婦さんから聞いたところでは、普通は気絶したり泣き喚いたりするらしいね。でもぼ、いや、私は昨晩、母さんの胸で涙が枯れるまで泣ききったから、案外平然としていられたよ。こういう男子は珍しいんだって。変なところで褒められちゃった。勝美も平気だったみたい。帰りに彼と、あ、もう彼女なのかな、とにかく校門で会って、二人で城址公園まで一緒に帰って来たから、いろいろと話ができたんだ。勝美は正式な手術が待ち遠しいと言っていたよ。」
「ね、それで、他にはどんな？」
　それはまさに恋人の安否を気にする少女の眼差しだった。勝美が千博にベタ惚れなのは知っていたけど、何のことはない、千博も勝美にここまでベタ惚れだったんだ。これは案外、二人の関係は進んでいるのかもしれない。やっぱり、もう最後までしちゃっているとか・・・。でも、それにしてはちょっと違和感が・・・？
　あるいは、今回のことがあったから、初体験をした、ということなんだろうか？やはり千博を問い詰めてみよう。悪趣味と笑うなら笑え。
「その後、抜かれた睾丸を二つとも、ステンレスの平たい入れ物に並べて入れた状態で見せられて、それを腹の上に置いてM字開脚の姿勢のまま、股間から顔まで全部をばっちり写真撮影されたんだ。」
「間違いなく私から睾丸を抜いた証拠だそうだけど、あんな写真、万一出回ったらもう私は生きて行けないんじゃないかと思った。まあ、そのときはそんな余裕はなかったけどね。」
「睾丸を抜かれて、これで男の子じゃなくなっちゃったと嘆く暇もなく、身体から精子を全部出しちゃわなきゃならないと言われて、まず睾丸を切り取った輸精管からチューブで精子を吸引されたんだ。そのあと、陰嚢の傷を縫い合わせて、ここまでが約10分位かな。」
「その後、精嚢に残っている精子を出して貰うと言われて、女医さ

んがペニスを扱きだした。でも去勢されたショックで、ペニスが全然勃たないんだ。すると肛門にプラグのようなものを入れられて、前立腺を裏側からグリグリ刺激された。これをやられると、男子は必ず射精反応が起きるんだって。それで、あっと言う間に勃たされて、強制的に射精させられちゃった。勝美と話したら、勝美もまったく同じことをされたって言っていた。」
「そうなんだ・・・。」
「この前立腺刺激による射精は、二人ともこれまで経験がなかったんだけど、物凄い快感でね。先生の話だと、これは女性のセックスの快感に近いものなんだって。勝美はそれを聞いて、手術が待ち遠しいと言っていたよ。」
「その後、先生は一度出て行って、他の子の去勢を済ませてからだと思うけど１５分位経ったら戻ってきた。そうして、もう一度、同じようにして射精させられた。それで、最初の射精で出た精液と２度目の精液を、両方とも並べて見せられて、前者は普通の精液でどろっとしていて白く濁っていたのが、２度目は無色透明でさらさらの液体だというのを一緒に確認し、これは2度目の射精には精子が入っていないからだと説明された。」
「基本的には、これで全部かな。手術までの注意事項とか説明を受けて、１２時まで休んでから下校するようにと言われた。あと、私も帰り際に女性ホルモン剤の処方箋を貰った。」
「ふうん。特に辛かったり苦しかったりしたことはなかったの？」
「やっぱり、切り取られた自分の睾丸を二つ、目の前に見せられたのが一番堪えたね。あれでがっくりして、なんと言うか、とうとう男の子じゃなくなっちゃったという事実に心が折れちゃった。もう泣かないつもりだったのに、思わず涙が出てたから・・・。それは勝美も一緒だったみたいだけど、彼、あ、また間違えちゃった、彼女の場合は、自分で希望したから、少し様子が違ったのかもしれないかなぁ。」
「わかった。ありがとう。僕が聞きたかったことは、だいたいこれ

で全部だ。答え辛いことを聞いちゃって、ごめんね。でも正直に教えてくれて、ありがとう。勝美がどんなだったか、どうしても知りたかったんだ。意識があるのにあそこを切り取られちゃって、怖かったり辛かったり、苦しかったりしなかったか、僕には理解できない感覚なんで、すごく気になってたんだ。僕の我儘で勝美が酷い目にあっているんじゃないかって心配でね・・・。」

まあ、酷い目にあったというのは間違いないだろう。ただ、主観だから本当のところは他人には判らないと思うけどね・・・。

「じゃ次、優稀の話って、何？」

もうほとんど回答がでたような気がしたけど、最後にちょっと疑問もあったので、単刀直入に聞いてみた。

「うん、私のほうの話は、さっきからの話の中で、ほとんどわかっちゃったようなものだけど、でもこれだけ恥ずかしい質問に回答したんだから、ズバリ教えてくれる？」

「なに？」

「千博と勝美って、どこまで行っていたの？・・・もうセックスしているの。それともまだなの？」

「な！！」「あっ、あたしたちは、そのっ、まっ、まだっ、まだ清い関係だよっ・・・。セッ、セックスまでは、そのっ、していないし・・・。」

「あっ、勿論、恋人だからキスはしているけど、それも最近まではチュッとするだけだったし・・・。」

第１６話　それぞれの時間

千博も急に女言葉に戻っちゃった。勝美もだけど、人間、やはり焦ると普段の地が出るものなのかな。ただ、ちょっと引っかかるところがある。

勝美もそうだけど、千博もこういうとき、嘘は絶対に言わない。そもそも嘘がつけない性格だし、ごまかそうとしても、この性格もあって、まず成功しない。大抵は、変にどもったり焦って舌をかんだりして、結局正直に白状することになる。さっき勝美があわてて家に逃げていったのも、自分がそういう性格なのを知っているから、僕との会話を避けたのだろう。何となく、何かを隠しているような疑いが消えないし、勝美と千博二人とも焦りまくっている状況が気になる。

「ふうん。とすると、まだセックスはしていなくて、軽いキスまでだっていうことだね。」

そう言って、千博の目を真っ直ぐ見つめた。すると、既に耳まで真っ赤になっていた千博が、耐えられないように視線を逸(そ)らせて、少しずつ話し始めた。

「あたしと勝美は、まだ間違いなく処女と童貞だよ・・・。キスについては、ディープキスまで経験しているけど・・・。」

うん、それは多分本当なんだろう。千博がこういう言い方をしたときには、まず嘘じゃない。それに勝美の性格からしても、千博に手を出したとは考えられない。でも、それだけのことを言うのにしては、二人揃って何か挙動が不審だ。もうすぐ法律的には結婚できるんだし、友達でセックスしている奴らもそれなりに知っている。それに、２年半も付き合っているんだから、ベロチューくらい当然にしているだろう。誰も不思議には思わないし、公認カップルのキスを咎(とが)める奴もいないだろう。それなのにこの焦り方は何だろう。

ここは下手に問い詰めるのではなく、黙って千博の目を見続けることにした。
「それで？本当にそれだけ？」
　すると、とうとう観念した千博が言いだした。
「・・・挿入はしていない・・・。それは勝美の希望なんだ・・・。二度と経験できないことを下手に知ると、後で辛(つら)いからと言っていた。」
「でもあたしはセックスがしたかった。いや、したくなっちゃったんだ。・・・勝美とひとつになりたかったし、勝美も我慢できなくなったみたいで・・・。それでシックスナインをした・・・。」
「そう言うことか・・・。」
「オーラルセックスって、あんなに気持ちが良いものだとは思わなかった。オナニーなんか、比較にならない。それとも愛する人と二人でするセックスは、どんな形でも精神的な満足度が圧倒的に高いから、快感も大きいのかな。わからないや。」
「そんなに良かったの？」
「勝美なんか、泡を吹いて白目を剥いて気絶しちゃった。あたしも、あまりの快感で、あとちょっとで気絶するところだった。腰が抜けちゃって、しばらくシックスナインの態勢で勝美のオチンチンに頬(ほお)ずりしながら、自分のあそこは勝美の顔にくっつけたまま、勝美の身体の上でぐったりしていたんだ。」
「勝美が先に気絶したからよかったけど、あと一瞬であたしも気絶していたのは間違いない。その位強い快感で、身体の性的快感と、精神的な快感というか精神的にイクというのが、同時に襲ってくる、はじめての体験だった・・・。」
　やっと合点がいった。要するに二人は挿入こそしていなくて、まだ間違いなく処女と童貞だけど、もう普通のセックスよりもずっと濃厚な性行為を済ませちゃったということか。僕なんか勿論童貞で、しかもついに男性としてのセックスの喜びを知らないままで去勢されてしまったのに、なんて恵まれた羨(うらや)ましい状況なんだろう。やっ

ぱりリア充か！爆ぜろ！！
「そっか。二人は愛し合っているからこそ、お互いの性器を交換することにしたんだものね。ってことは、いわゆる恋人同士の男女関係にあったってことだよね。勝美もやるなあ・・・。それでいつ頃から？」
「・・・試験の2週間前の週末だった・・・。その前日の金曜日に、帰宅途中の城址公園で、はじめて私が男性化を希望していると告げたら、勝美が取り乱しちゃって、それで翌日の土曜日に勝美の家に行ったときに・・・。」
　金曜日ということは、千博が帰って来てから部屋に鍵をかけて、なにやら服の手入れをしていた日だった。多分、そこでまず何かあって、それで翌日になだれ込んだんだろうな。概ね城址公園で、服を汚すような行為でもしたんだろう。でもこれですべて謎が解けた。勝美の挙動不審もわかったし、その後の二人の様子が変だったのも、全部つながった。
「全部話してくれてありがとう。ちょっと羨ましくなっちゃった。二人で性別交換してまで愛を貫くなんて、なかなかできることじゃないよね。」
「・・・うん。勝美には、本当に申し訳ないことをしたと思っている。だからこれからは、男性になった僕が責任をもって彼を幸せにする義務があるんだ。」
「その考えは立派だと思う。榊さんも似たようなことを言っていたけど、やっぱり男性から男を奪っちゃうっていうのは、それだけ重いことなんだろうな・・・。でも、勝美は、そんな考えをして欲しくはないんじゃない？」
「勿論、だから、そうは言わない。彼も、あ、勝美も、そんな言い方は望んでいないと思う。」
「そうだね。また今度、ぼ、私も勝美と話をしてみるよ。じゃあまた後で。ありがとう。」
　その後、夕食時はもう少しみんなも慣れてきたのか、会話のぎこ

ちなさが少しずつ解消されてきた。でも、まだ女言葉には慣れない。千博はさっきの焦ったときを除いて、もうほとんど完全に男言葉になってきていて、自分のことは普段は「僕」、ときどき「俺」と言ったりしている。といっても、千博はまだホルモン剤の注射をしただけなんだけどね。

夜、母さんに続いて風呂に入った。言われたとおり、湯船には浸からず、シャワーだけにしておいた。何も中身がなくなった陰嚢が、何とも悲しくって、触っても中身がないことに、また泣きそうになった。これはいっそ、ペニスもなくなってマンコになれば、悲しくなくなるのだろうか・・・。

――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

――――――――――

(少し時間が戻って、昼過ぎに城址(じょうし)公園で優稀と別れた勝美)

あ、危なかった。あのまま話をしていたら、あたしと千博との関係を全部白状させられちゃうところだった。まして優稀の家にお邪魔なんてしていたら、それこそ今日の恥ずかしい問診なんて比較にならない、このあいだの週末にあった一部始終をすっかり話すはめになったに違いないわ。あのときの千博との体験は、あたし達恋人同士だからこそ許される、恋人同士だけの絶対に秘密の体験で、あたしが千博のバキュームフェラでイキまくった末に気絶しちゃったなんて、千博と二人だけの一生の秘密なんだから・・・。

万一、こんなことがクラスの皆にバレたら、もうあたしは学校に行けない。いや、それどころか、校舎の屋上から飛び下りることになっちゃうかも・・・。まさか、千博が優稀に話しちゃったりはしないわよね・・・。

そんなことを考えながら、自宅に戻って昼を自分でつくって食べた。あたし一人だけだから、簡単にパスタを茹(ゆ)でて済ませちゃった。

父さんはずっと海外に行っていて、たまにしか戻ってこないし、母さんはこのところ、週末になると実家のおじいちゃん、おばあちゃんの介護で夜まで不在になるので、週末に限ってだけど、夕食の準備もあたしが担当している。だから、最近では家事も少しずつできるようになってきた。といっても、まだほんとに簡単なことばかりだけど・・・。

でも、よく考えたら、中学を卒業すると、いつ千博と結婚してもおかしくないのよね。これまでは千博が家事をしてくれるのかなーって、何となく考えていたけど、これからはあたしがやらなきゃいけないんだから、急いで母さんに家事全般を教えて貰わなくちゃ・・・。子供ができちゃうと育児に追われて難しくなるし、それまでに良妻賢母と言われるようにならなくっちゃ。大変だけどやりがいがありそうだわ。

部屋でごろごろしていたら、母さんが思いの他早く帰って来た。
「ただいま。今日の夕食は私が準備するわ。勝美はその、あそこを切り取られちゃったんでしょ。私は女性だからよくわからないけど、大変だったわね。もう痛くないの？少し部屋で休んでいなさい。」
「うん、ありがとう。でも、本当に小さな傷だけだから大丈夫。あ、それならご飯の前にシャワーを浴びちゃうから。」

シャワーを浴びるとき、股間を触ってみたけど、袋の中に何もないのは、ちょっと寂しかった・・・。このオチンチンも、もうあと1週間ね。でも、千博と交換するんだから、手が届かないところにいっちゃうんじゃないわよね。むしろ逆で、これから、このオチンチンに沢山お世話になるんだわ・・・。うふっ。毎日だったりしてね♡。・・・きっと、さっきみたいに気絶するほどの快感なんでしょうね。わくわくしちゃう♡。

そして夕食。
「今日はすごい豪華じゃない？どうかしちゃったの？」
「どうかって、勝美の新しい門出を祝おうとしているんだけど？」
「この前、話を聞いてから、たった1カ月で、とうとうここまで来

ちゃったのよね。勿論、まだ正式手術は来週だけど、もう勝美は男の子じゃなくなっちゃったんだから、後戻りはできないでしょ。だったら、その決断と選択を応援してあげなきゃね。なにせ勝美は私のたったひとりの子供なんだから。」

「ごめんなさい。多分、お父さんとお母さんは、一人っ子のあたしが男の子のままのほうが良かったのよね。でも、あたしは一人っ子だったから、自分の子供は絶対に４人以上は欲しいと思っていたの。それで千博には子供たくさん産んでくれる？って、いつも話をしていたんだけど、もうこれからはあたしが産む側なんだから、何も遠慮せずにバンバン産むの。それこそ１０人でも２０人でも産むわ。」

「そんなことを考えていたの？面白い子ね。一人っ子なのはお父さんとお母さんの問題であって、勝美には何の責任もないじゃない。お父さんとお母さんは、あたしが一人っ子だったので肩身の狭い思いをしたでしょ。でも孫の数でそれを取り返してあげる。」

「まさか。」

それとも、性別交換を希望したのはそれが原因のひとつとか？」

「冗談よ。さ、ご飯もできたし、食べながら話しましょ。お父さんはいないけど、ワインを開けるから、勝美も少しだけ飲まない？もうすぐ成人なんだし、それにシャワーを浴びてもＯＫならば、傷はたいしたことないんでしょ。」

「ん。じゃ、ほんとにひとくち、乾杯だけ。」

「勝美の新しい人生の門出に！」

『乾杯！！』

「あたしね、お父さんもお母さんも、あたしが性別交換するのは反対すると思っていたの。だから、こんなにすんなり祝福して貰えるなんて思ってもいなかった。本当にありがとう。」

「本当はね、お母さんは少しだけ反対だったな。なんだかんだ言っても、まだ日本では古い男尊女卑の考え方が主流だし、いろいろなシキタリとかもあってね、女性で得したと思ったことは、そりゃあ

ゼロではないけど、かなり少ないのが実情よ。」
「でも、お父さんは案外割り切っていたわね。子供の人生は子供のもので、親が決めるものじゃないって。まして、勝美はもう試験も終わって、あと1カ月ちょっとで成人式なんだから、勝美が自分で真剣に考えて選んだ道ならば、それを応援してやるのが親の務めだって言ってね。」
「それと、お母さんはね、勝美の性別交換相手で、かつ結婚相手が杉田千博さんだから、応援しようと決めたというのも大きいのよ。もう2年も前からおつきあいしていて、てっきり千博さんが勝美のお嫁さんになってくれるものと考えていたのだけど、逆になっちゃったわね。でも、とにかくあの人は良い人よ。」
「人間の幸せは、男性でも女性でも一緒だけど、結局、良いパートナー、良い家族に恵まれるかどうかにかかっているのよね。どんなにお金があっても、どんなに出世しても、そんなものは本質じゃないの。」
「千博さんとなら、どっちが夫でどっちが妻かなんて関係なく、きっと素晴らしい幸せな家庭を築けるに違いないって思えるわ。」
「あたしだって、千博が相手じゃなかったら、性別交換なんて考えなかったわ。だから、千博が男性化すると聞いたときは、本当にショックでパニックになっちゃったの。でも、ふと発想の転換をしてね、それで私も女性化することにしたの。」
「実は、これまではあたしが男だから外で働き、千博が家を守り子供を産み育てる。そう漠然と考えていたの。ほら、あたしも一応、一級男子を目指して頑張っていた訳だしね。でも、よくよく考えれば千博のほうがあたしより成績も体力も、全部上回っているって気がついたのよ。だから千博が外で働いてあたしが専業主婦になるほうがずっと合理的でうまく行くと考えたわけ。」
「あたしは別に男尊女卑ではないつもりだけど、やはり家庭内で役割分担ってあるんだと思う。これからは千博とあたしの役割を取り替えて結婚生活を営んでいくつもりだから、お母さん是非あたしに

女性としての、良妻賢母としての心構えや知識、技術を教えてね。千博との結婚は、多分もうすぐな気がするから、それに間に合うように。」
「わかったわ。お正月から成人式までは、お父さんも帰国してくるから、そのとき完全な女性となった勝美と、親子3人でいろいろ話しましょう。女の子になった勝美の成人式の晴れ着姿も見たいわ。とにかく今夜はおめでとう。」

第１７話　最初で最後の体験

去勢から数日経った頃、メールが届いた。

橘さんからだった。新しい生活リズムにも少し慣れてきて、そろそろ外出してみようかと考え出していたところだった。

《ねぇ、今日会えるかな？》

本当は会うのが怖かったんだけど、ここで会わないと、もう二度と話す機会はないと思ったから、勇気を出して会うことにした。でも、僕はもう彼女とお付き合いする資格がないんだ。多分、これでお別れを言って、うまくすれば友達宣言をして貰い、これから女友達としての関係を築ければ、御の字だろう。何とか泣かずにお別れをすることができるかな。

そんなことを考えながら、クローゼットを探して千博が着ていたワンピースを着る。もう外出の時も女装しなきゃいけないから・・・。いや、だめだ、意識を切り換えなきゃ。もう僕は女子になっちゃったんだから、女装とは言えない。こっちが正装で、男子の服装で出歩いたりしたら、男装趣味の変態女子になっちゃう。

姿見で確認する限りでは、どこからどう見ても女の子に見える。まだ胸はないけど、小柄で華奢（きゃしゃ）な僕にはまったく違和感なく、むしろこのワンピースはよく似合っていた。それに、土曜日にはじめて女子の制服を着て感じたやるせなさは、もうあまり気にならなくなっていた。去勢されてから、心の女性化は、着々と進んでいるみたいだ。

ちょっと出かけてくる、と声をかけて家を出たけど、母さんにも芳恵さんにも、特に何も言われなかったので、安心して外に出てきた。

家族には何も言われなかったけど、外に出るとやはり周囲の視線が気になる。最初はクラスメートや知り合いに会わないかとビクビ

クしていたんだけど、周囲の誰も僕のことなど気にしていないようだった。でも、待ち合わせ場所に来た橘さんは当然驚いていた。
「優稀だよね・・・。見違えちゃった・・・。」
「うん、もう女の子だからね。」
「そっか。・・・でも似合っているよ。どう見ても女の子にしか見えない・・・。」
「ありがとう。・・・でも、ごめんね・・・。まさか、こんなことになるなんて・・・。」
会話はすぐ終わってしまう。
「あたしの家に来ない？」
沈黙を破って橘さんが口を開く。先日までは橘さんの家に行きたいと言っても、まだそんなに深い付き合いじゃないからダメと言っていたのに、きっと橘さんの中で僕との関係が変わっちゃったんだろう。それとも、恋人とか友達とかは関係なくて、ただ異性は簡単に家に上げないけど、同性なら問題ないという意味だろうか・・・。
移動中は何も話さなかった。いや、話したいこと、伝えなけりゃと思っていたことは山ほどあったけど、頭の中が混乱していて、何も口から出てこなかった。あるいは話をするのが怖かったのかもしれない。それは橘さんも同じだったんじゃないかな・・・。
家に着くと、橘さんの部屋へ黙って通された。女友達なら自然な行動なんだろう。憧れていた橘さんのベッドに並んで腰掛け、そっと手を握り思い切って話しだした。
「もう、付き合えないよね？・・・女の子になっちゃったから。」
物凄く悲しくて、泣きたかったけど、これだけは話しておかないといけない。
「・・・うん、ごめん。私はレズじゃないし・・・。でも、これからは女友達として仲良くしよう。優稀のことは生涯変わらず一番の親友として応援するよ。」
想像していたとおり、橘さんに友達宣言をされてしまった。全部、僕の責任なんだ。

「知ってる？女同士の友情って、恋人同士の恋愛関係よりも、ずっと濃いんだよ。休み時間にトイレに行くのも、いつも必ず一緒だし、生理用品の貸し借りなんかも普通のことなんだよ。あっ、勿論、レズっていう意味じゃあないからね。」

「私もまだ実感はないけど、彼氏ができたら、どこまで進んだか、とか、セックスの様子や内容なんかも、全部話し合うんだよ・・・。もっとも、私はまだ優稀と付き合いだして日が浅いし、実は親友と呼べる友達がまだいないんだ。だから、優稀が親友になってくれると嬉しいな。」

つとめて明るく話しかけてくる橘さん・・・。でも、僕も悲しいけど、彼女だって僕以上に悲しい筈だ。せっかく付き合いはじめた恋人を、こんな形で失うんだから。まるで、恋人を不治の病で失うテレビドラマのヒロインみたいだ。そんなことを考えていたら、また涙が零れた。僕って、こんなにも涙脆かったっけ？それとも、これも女性化が進んできたからなのかな・・・。

「でも、最後に恋人らしいことしたいな・・・。」

「えっ？」

「いつか優稀とこういうことをしようと思っていたんだ・・・。」

と、僕の唇に自分の唇を重ね合わせ、驚いている僕の口の中に舌を入れてきた。

僕も同じように橘さんの口の中に舌を入れ、必死になって唾液を吸い合い、口の中を嘗め回す。僕にとっては、人生で初キスだ。睾丸を抜かれたちゃったのに、不思議とムラムラとした気持ちが湧いてくる。

橘さんが着ている服をゆっくり脱ぎだした。それを見て僕も、焦ってワンピースをスポッと上に脱いだ。お互いに下着姿になると、僕が身につけているのが、かわいいくまさんショーツだと思い出し、恥ずかしくなる。でも、橘さんは優しい顔で微笑んでくれ、僕のショーツにそっと手をかけてきた。

僕の股間がすべて橘さんの目に晒される。これまでなら多分、皮

被りのペニスが気になっただろう。でも今の僕の頭を占めているのは、抜かれてしまったタマのことばかりだ。
　陰毛を全部剃られてしまっているので、タマが抜かれた傷跡が微(かす)かに見える。ただもう治りかけているみたいで、左右の陰嚢の下側に小さなスジが目につく程度だ。それよりも中身がない陰嚢は、男子の股間として橘さんの目にはどう映っているのだろうか・・・。
橘さんは中身のない僕の陰嚢を確かめるようにそっと押しながら言った。
「本当に、もう無いんだね。」
「うん、土曜日に抜かれちゃった。」
「痛くなかった？」
「切り取られるときに少しだけ。でも手術の痛みよりも、心の痛みのほうがずっと大きかった・・・。」
「そっか。辛いこと思い出させちゃって、ごめんね。・・・でもそれなら安心して出来るよね。」
　抜かれる前だったら、好きな子とこんな状態になればガチガチに勃ってたはずなんだけど、去勢された今は、多少ムラムラして変な気分になっても半勃ち程度にしかならない。
　橘さんはブラを外して、胸を僕の好きなように触らせてくれる。
「もうすぐ優稀にも、こんな胸が出来るんだよね？」
　イタズラっぽく笑うと、なんといきなり僕のあそこを咥(くわ)えてくれる。橘さんにしても、間違いなく初体験なんだろう。拙(つたな)い口遣いだけど、視覚と感触、両方の刺激でようやく僕も興奮し、半勃ちだったペニスは、ムクムクと起き上がって存在感を主張しだした。
「おっひふなっへひは」
　橘さんが咥(くわ)えながら喋(しゃべ)る感触が刺激となり、ガチガチの完全勃起状態になる。橘さんの口の中にあるので見えないけど、感覚から僕のペニスは完全に剥けたみたいで、橘さんが亀頭のカリから鈴口までをゆっくり嘗(な)めてくれるのがわかる。人間の舌も、猫の舌みたいに、案外ざりざりしているような気がして、急速に快感が高まって

きた。
　タマを抜かれてから、いくら自分で刺激しても、決して勃起はしなかった。そもそも、そんな気分にすらもならなかった。去勢直後のあのときは、女医先生が話したとおり、まだ男性ホルモンが残っていたということと、前立腺の直接刺激という禁断の技を使われたので射精したけど、あのときでもう男性としての僕は終わってしまって、どんどん女性化に向けて身体が変わっているのだと思っていた。けど、どうやら最後のチャンスを与えられた僕のペニスは、もう一度だけ、全力で頑張ることにしたらしい。刺激され続けた亀頭からは、蕩(とろ)けるような快感が腰を通して脳味噌まで伝わってくる。
　でも、これが橘さんとの最後かと思うと、すごく悲しい。
　そんなことが頭を過(よぎ)るうち、あっと言う間に限界が来る。橘さんが舌と唇でジュポジュポと音を立てて扱(しご)きながらズズッと吸い上げると、ペニスがビクンっと脈を打った。
「で、出るっ」
　物凄い快感とともに、すごい勢いで射精した。橘さんは、それを一生懸命飲み込んでくれたけど、口から少し溢(あふ)れて下に垂れていた。でも、まったく無色透明で、涎(よだれ)を零(こぼ)しているだけだと言われれば、そのようにも見えてしまう。
「タマがなくても普通に射精するんだ・・・。」
「でも、精子が入っていないから、白くないんだ・・・。どんな味だった？」
「うーん・・・。普通の精液の味を知らないから、比較しようがないけど、本で読んだ知識だと精液は苦くてエグくて、青臭いって書いてあった。でもこれは、少ししょっぱいだけで、涙のような味なのかな・・・。」
「多分、精子がないから、そうなんじゃないかと思う。」
　そんなことを話していると、ふと前からの疑問が頭を過った。もう橘さんとは、恋人関係ではなくなってしまうことから、多分これが最後のチャンスだと思ったんで、つい口を突いて言葉が出た。

「ねえ、ひとつ聞いていい？・・・何で橘さんは僕と付き合うことにしたの？僕が人畜無害に見えたから？」
「ひどい！・・・そんなの、優稀のことが好きになったからに決まってるでしょ！！」
「ごめん。でも僕は勉強ができないし、体力もないし、チビでなよなよして、およそ男性としての魅力がないんじゃないかと、自分でもコンプレックスなんだけど・・・。例えば性別は違うけどさ、今度僕と入れ代わる榊さん、あ、もう榊君だっけ？彼女、じゃなくて彼なんか、イケメンでさわやかで、勉強もできて運動も得意なんだから、ああいう人がモテるんだと思っていた。」
「優稀は自分の魅力に気がついていないだけだよ。男性でも女性でも一緒だけど、他人から好意を持たれる人は、みな一様に優しくて、気配りができて、自分のことより他人のことをまず考えてくれる、そういう性格の人なんだよ。」
「今の日本では、とにかく他人より勉強でも体力でも、いろいろな能力において少しでも優れている人が偉い、そういう人ばかりが優遇される社会じゃない。しかも、そういう優秀な人のために、能力が低い人は犠牲を強いられる。その最たるものが優稀みたいに男の子の一番大事なところを生贄にされちゃうような社会じゃない。」
「今回の判定試験も、そのような能力による差別社会を実現する道具のひとつであって、そのせいで人々の意識が歪められている。とにかく能力が高い人は無条件に偉くて、能力の低い人は偉い人に奉仕することが当然だと思われているんだよね。でも、私はそんなの嫌い。私も一級女子に何とか滑り込んだけど、他の一級女子を見渡しても、皆自分のことばかり考えていて、他人を思いやる心なんて、まったくないのが実情だよ。むしろ、他人を蹴落(けお)としてでも、のし上がろうというのが今の風潮じゃない。まあ、中には優稀の妹の杉田千博さんのように例外も居るけど、あの榊さんだって、決して褒(ほ)められたものじゃないんだ。それは同じ一級女子として見ていても、鼻につくところだよ。」

「そうなの？」
「榊さんと私はクラスで勉強が一番できる女子グループだったから、それなりに付き合いがあるけど、例えば男尊女卑の考えが相当強いんだ。あるいはそれが榊さんに性転換を思い立たせたひとつの理由かもしれない。それに内緒だけど、榊さんは女の子とレズセックスもしていて、タチの榊さんに処女を散らされちゃった女の子は何名もいるんだよ。私には言葉を濁（にご）してはっきりと言わなかったけど、自分は必ず一級男子になるんだから、三級や四級の子をどんどん食べちゃって構わないんだって、そんな言い方をしていたことがあるの。だから優稀のおちんちんを移植されたら、泣かされる女の子が増えるかもしれないわ。」
「こんな言い方で申し訳ないけど、性別再確認式のとき、まず優稀が一番に泣かされちゃうんじゃないかな。・・・仕方がないことだけどさ、あたしもすごく悔（くや）しいんだよ。だから今日、どうしても優稀とこういうことをしておきたかったの・・・。」
・・・知らなかった。あのイケメンで爽（さわ）やかな榊君に、そんな暗黒面（ダーク・サイド）があったなんて・・・。僕のペニスが、そんな目的で使われるとしたら、ちょっとイヤだな・・・。僕は仕方ないにしても、榊君に僕のペニスで女の子を泣かせないで欲しいってお願いしてみようかな？
「でも榊さんが他の人とちょっと違うのは、責任感が物凄く強くて、自分が悪いと思ったら万難を排してでも責任をとろうとするんだ。それに自分の責任で他人に迷惑をかけたような場合は、必死になって償おうとする。まあ、そういった性格だからこそ、処女を食べられちゃった女の子にも、それほど悪くは思われていないみたいだけどね。」

第１８話　童貞卒業

「話を戻すけど、一級男子は、もっと酷いのよ。今の男尊女卑の社会を維持している中心が彼らなんだから、当然といえば当然かもしれないけどさ、この中学の一級男子の中で、ちゃんと他人のことを思いやることができるのは、多分遠藤君だけだと思うわ。彼は例外的に性格が良くて、実は彼のことを好きな女子は多いんだけど、彼は知ってのとおり、２年も前から売約済でしょ。それに今回の件で、彼は女子になっちゃったんだし・・・。」

「その他の男子を見てみても、上崎君にせよ、岡本君にせよ、成績は優秀だけど、隙あれば他人を出し抜こうというのが見えちゃうのよね。あっ、別に彼らの性格が特段悪いといっているつもりはないんだけどさ。単に、今の価値観として、そういう考えをするのが普通ってだけなんだけどね。でも、私はそういう社会の風潮が、大嫌いだったの。」

「そこへ行くと、優稀は本当に性格が素直でしょ。まず男尊女卑の考えは微塵も持ち合わせていないし、もっと珍しいことに階級格差をまるで意識していないじゃない。たとえば、私みたいに一級女子とも、ごく自然体で話をする一方、四級の男子でも女子でも、普通に友達として何ら軽蔑したりせずに接しているわよね。話をしてみても、気遣いに溢れていて、常に相手がどんなことを考えているか、何を希望して、何を嫌がっているかを気にしながら言葉を選んでいる・・・。」

「実は優稀と雰囲気が似ている、華奢で小柄な加藤君は勉強もできて、ちょっと憧れたんだけど、半年位前に告ったら既に彼女がいたの。幼馴染みなんだって。・・・あたしが優稀に告ったときのこと覚えている？ちょっと不思議な問いかけをしたでしょ。」

　確かに、あの表現は忘れ難い。確か、「・・・あたしと付き合わ

ない？」というような言い方だった。告白というには、かなり不思議な言い回しだった。

「あれはね、加藤君に振られちゃったので、私も臆病になっていたんだ。あのとき私は自分がどういう男子を好きなのか、少し自信をなくしちゃっていたんだけど、いろいろなことを考えれば考えるほど、優稀の顔が浮かんでくることに気がついて、優稀こそ自分が求めている相手だと確信したからなんだ。でも、優稀に振られたら、ちょっと立ち直れる自信がなくて、まもなく試験を受けるというこのタイミングで、振られてもダメージが少ないように、変な疑問文でおっかなびっくり告ったというのが実態なのよ・・・。」

「そんな複雑な想いだったんだ・・・。知らなかった。」

「優稀は気がついていなかったのかもしれないけど、実は優稀のことを狙っていた女子は、クラスでも結構居たんだよ。女子に優しくて、自然と気配りができ、それに可愛い。ただ、優稀は体力がなくて、そのせいで総合成績でも決して良くなかったから、さっき話したように、多くの女子が優稀のことを魅力的と感じつつも、お付き合いすることには慎重で躊躇(ちゅうちょ)していたんだ。ほら、やっぱり私たちの年齢になるとさ、もうすぐ結婚適齢期になるから、同じ階級同士でないとね。皆、どうしても結婚まで視野に入れて付き合う相手を考えたりするじゃない。」

「それで、誰も優稀にアプローチしないんで、私が勇気を出して手を上げたということなの。私は打算的な関係はイヤだったから、自分が好きになった相手なら、階級は気にしなかったんだ・・・。」

それで謎が解けた。僕は家族構成が少し複雑だからか、わりと周囲に気をつかうタイプで、いわゆる周りの空気を読むことはよくあった。けど、そんなの特に意識してやっていた訳じゃないし、それが女子の間で高く評価されているとは知らなかった。

父親が一級男子でないと第二妻を持つことはできない。（側室は経済的余裕があれば誰でも持てる。）一級男子の比率から考えて、父親が一級男子の家庭は、各クラスでもせいぜい１家族か２家族し

かいないのは確かだったけど、それが性格と関係していたとは考えもしなかったし、ましてそれがモテる要素になるとは、思ってもみなかった。
確かに僕は小さいときから、「名前にそっくりの優しい性格だね」とか、「こういう性格の男の子は本当に珍しいね（だから、名前が優しい稀という字なんだね）」と、よく言われてきた。この名前は母さんがつけてくれたそうで、父さんはせめて漢字を男の子らしく変えたらどうかと提案したけど、母さんが絶対に譲らなかったと聞いている。僕の女性化といい、まるであつらえたような展開に、母さんはまさか、これらをすべて予想していたんだろうかと、不思議な気分になった。
「さ、疑問が解消されたところで、そろそろ最後をやってみよっか？」
一度射精して、賢者モードになっていたペニスが、この一言で再度硬さを増してきた。
橘さんがショーツを脱ぎ捨て、僕の上に跨る。そして、僕のペニスを自分のあそこに合わせてきた。
僕のペニスも、本当に最後のお勤めとわかっているのか、雌を孕ませようといきり勃つ。でも、もう元となる子種は無いんだけど・・・。
そして、角度を合わせながら、そっと挿入していく。僕のペニスは、はじめて本来の場所に入ることができて、喜びに打ち震えている。賢者タイムのうちに、また皮が被ってしまっていた僕のペニスだけど、挿入に従い包皮が反転して、膣内でまたズル剥けになったらしく、亀頭が膣上部の肉襞に擦れて、震えるほどの快感が亀頭の先端から伝わってくる。
やがて、ゆっくりと突き進んでいたペニスの先端が、壁のようなものに突き当たった。
「橘さんもはじめてなの？」

思わず聞いてしまった。別に橘さんを責めている訳ではないし、処女でも処女じゃなくても、そんなことは僕の気持ちに何の影響もない。ただ、処女なのに、女の子になってしまう僕が相手で本当に良いのかと思ったんだ。
「処女はイヤ?」
「違っ・・・。」
違う、僕はもう男じゃなくなるのに?と聞こうとする前に橘さんは体重をかけて力強く腰を下ろし、僕のペニスで処女膜を突き破ったと確信した。
「っつっ・・・。」
最後まで挿入し、痛みで固まる橘さんをそっと抱きしめ、
「ごめん。でも、僕じゃもう責任取れないよ。」
最近では、国の政策もあって、若いうちから子づくりが奨励されている。だから、試験の前に経験しちゃう中学生も普通に居るけど、やっぱり女の子の処女は大事なものだ。特に結婚するときは、相手の家柄にも因るけど大きな意味を持つ筈だ。
「責任なんて関係ないよ?私がこうしたかっただけだから。」
まだ痛いのか、僕の胸にぴったりと身体を重ねて動けずにいる。息も荒いが、その眼差しは満足感に溢れていた。
「逃げよう。2人でどこかに。そうしたら、きっとこのまま・・・・・。」
言いかけたら唇を塞がれた。まるで僕の台詞を遮るかのように。そしてひとしきりねっとりとしたディープキスをすると、唇を離して僕の目を見つめた。
「ありがとう。・・・でも、女の子になる覚悟はできたんじゃなかったの?・・・なら迷っちゃだめ。お願いだから、私のためにも頑張って。じゃないと、私まで悲しくなっちゃう・・・。」
真剣な表情をした、その眼には、涙が光っていた。思わず僕も涙が零れた。その涙にやさしくキスをすると、
「だいいち、もう玉もないクセに。」

今度は冗談交じりにそう呟き、腰をゆっくり動かし始める。
僕のペニスは、本来の場所で本来の快感を満喫し、余すところなく快感を全身に伝えてくる。特に動かす度に亀頭のカリが肉壁に擦られると、もうペニスが蕩けそうな快感で、頭がバカになってしまいそうだ。きっと僕は、だらしないアヘ顔をしているに違いない。
ずっとこのままこうしていたい、それしか考えられず、ただ橘さんにしがみついて腰を振っていたら、「他の体勢もやってみない？」と言われ、身体を入れ換えて正常位の形になる。エロ漫画とかでよく見る形だが、いざ自分でやってみると、自分の体重を支えなければならないため、腕も腰も、かなり疲れる。
ズンッ、ズンッと突くが、玉がないためか、それともさっき射精したからか、わからないけど、イケそうにない。橘さんにお願いして、四つん這いになってもらいバックの体勢で突く。
この体制は楽だったけど、「これ、あたしのあそこが全部見られて恥ずかしいんだけど」と橘さんが不機嫌そうな声で言った。
でも、文句はいいながらも、僕の好きにさせてくれる。次に、繋がったまま身体を起こし、お互い向かい合って抱っこしたような態勢になる。確かこれは対面座位ってやつだっけかな。この体位だと、突くと正常位の時には当たらなかった奥の子宮口に当たる、それが気持ちいいようで橘さんも喘ぎ声を上げる。でも、ピストンは少しやりにくい。
さすがに四十八手を全部試すようなことは無理だったけど、それ以外にもいくつか体位を試してみて、まあ普通の人が普通にセックスするときの体位は、概ね体験することができた。それどころか、シックスナインの態勢で、オーラルセックスもやってくれた。きっとこれは、もうこれで人生最後の男としてのセックスになる僕のために、好きなだけ気が済むまで体験させてくれているのだと気がついた。
結局、最後は正常位で、彼女が足を僕の腰に回してしがみつく、いわゆる「だいしゅきホールド」、男性側からは「種付けプレス」

での一部変形（本来の種付けプレスだと、足は僕の腰ではなく、もっと上のほうになる。）というものに落ち着いた。うろ覚えの知識だけど、たしかこれは子供が欲しい男女がすべき、一番妊娠しやすい体位だったはずだ。もう種はないけど、僕の人生最後の射精に相応しいだろう。

初めはゆっくりだったピストンだが、もう腰が止まらないほど速くなり、必死になって射精の瞬間を迎える。

パンッパンッ、パンッパンッ、パンッ。

「んんっ、んんっ、ぃっ、ぃくっ、いくーっ。」

精子はいないけど、それでも精液をしっかりと注ぎ込もうと身体が反応し、ペニスを少しでも奥深くへ入れようとして、亀頭を子宮口へ押し付ける。

ペニスがビクンッビクンッとして、それに合わせるように腰が痙攣しながら、痺れるような快感とともに、大量の精液を子宮の中に向けて射精した。

橘さんも初めてなのに、軽くイッたようで、僕の腰に回した両足を思い切り締めつけるとともに、膣がググッと引き締まり、精液を搾り取ろうとした。

少しして、二人とも快感が過ぎ去ると疲労困憊のまま、ベッドに、仰向けで横たわった。

「どうだった？優稀？」

「すごく良かった。感動した。最後に僕を男にしてくれてありがとう。これでもう思い残すことはないよ。橘さんはどうだった？痛くなかった。」と聞き返すと

「もう、さっきからあたし一人で優稀のこと名前で呼んでいるのに、優稀はあたしのこと名前で呼んでくれないの？他人行儀で嫌だから、優稀も名前で呼んでよ。親友なんだから。」

異性として最初で最後の体験が終わったから、恋人を卒業して同性の親友になった。そういうことなんだろう。

「うん。ま、円、ありがとう。」
　そう言って胸に手を伸ばすと、普通に触らせてくれた。それで、今度は下の方を触ろうとすると、「女の子同士はそんな事しないの。それとも、優稀はあたしと百合の関係になりたいの？」と怒られてしまった。
　もうあと二日で、僕は完全な女子にされてしまう。さっきは、ああ言ったけど、やっぱり思い残すことはいっぱいあるし、こんなに楽しくて気持ちが良くて、幸せになれることが、これで最後なんて悲しい。けど、一度も経験せずに、一度も本来の用途で使うことなく切り取られてしまうのでは、あまりにも悲し過ぎてやるせなかった。
　それが、円のおかげで一生の思い出を貰うことができた。最後にちゃんと、男としての本来の経験をすることができて、僕は本当に幸せだ。一週間、ただ泣いて過ごしたという母さんと比べても、ずっと恵まれている。僕のペニスも、きっと本望に違いない。
　これで明後日は、迷わず胸を張って手術に臨むこととしよう・・・。
　その後しばらく無言で抱きついていると、円が口を開いた。
「初めはね、悲しかったんだ。せっかく付き合いだしたのに、優稀が女の子になっちゃったら、もうこういうことも出来なくなるわけでしょ？でもね、今はこれもありかなって思うようになったんだ。だって、もしかしたら優稀が男のままでも階級が違うと結婚出来ないかもしれないよね。それなら女の子同士になって親友なら、お互い結婚しても、ずっと一緒に居れるから。だから、今日みたいなことはもう出来ないけど、何かあったらあたしを頼ってね？優稀。あたしも何かあったら、隠さず真っ先に優稀に相談するからさ。一生の約束だよ？」
　その言葉を聞いて、またしても涙が溢（あふ）れて来てしまう。

恋人じゃなくなっちゃうけど、女の子同士になるけど、親友として円のことを一生大事にしようと心に決めた。
「ありがとう、円。」
「あたしこそ、思い出をありがとう。忘れないでね。あたしの初めては優稀、優稀の初めてはあたし。二人で童貞と処女を捧げあった、初体験の記念日なんだから。これは優稀が女の子になっちゃっても、もう誰にも覆せない事実なの。一生忘れないでね。」
そのとおりだ。この日のことは一生忘れないでおこう。
いや、忘れたくても忘れられないだろう。僕と円の、恋人としての最初で最後の体験なんだから。
明後日には切り取られてしまう僕のペニス・・・。榊君のものになっても今日のことを、そして円のことを、ずっと覚えていてくれると嬉しいな・・・。
円の横顔を見ながら、そんな思いが頭に浮かんだ。

第１８話　童貞卒業（後書き）

思いがけず、男子として最初で最後の本懐を遂げることができた優稀君（？）ですが、完全な女子となる覚悟はできたのでしょうか。
次回はいよいよ、性転換手術本番となります。

第１９話　手術の日

いよいよ性転換手術当日となった。もうここまできたら、手術を恐れてもしょうがない。一昨日は思いがけず円と愛し合うことができたんだから、運命を受け入れる覚悟はできたつもりだ。

去勢のとき女医先生に言われたとおり、この１週間で随分女性化が進んだような気がする。少し脂肪がついて身体がぽっちゃりしたように感じるし、意識の上でも女性的な行動に抵抗感が少なくなってきたようだ。これはやはり睾丸を抜かれてしまったところに女性ホルモン剤投与の効果が効いてきてるからなんだろう。それとも愛し合うと、女性化が進むんだろうか。でも、女子としてのセックスではなく、僕は男子としてのセックスをしたんだけどね・・・。

あと、目立った身体の変化としては、肌もすべすべのつるつるになってきた。気のせいか、口髭（といっても産毛だけど）とすね毛も、少し薄くなったみたいだ。

学校は休みだったけど、父さんの指示でずっと女子の制服を着ていたら、これにも随分慣れて、脱ぎ着も自然になってきたし、女物のショーツやブラジャーを着けるのも気にならなくなってきた。慣れって凄いなあと思う。まあ、ブラはまだ体型的には意味がないんだけど、女性ホルモン剤の影響か、乳首が少し敏感になって、下着と擦（こす）れるとちょっと痛痒いような、あるいはピリッと痺（しび）れるような、不思議な感覚になってきたから、千博が買っていた新品のブラがあったので、なるべく着けるようにしている。この分だと、乳腺を移植されて神経がつながったなら、かなり感じるようになるんじゃないかという気がしてきた。

でも言葉はまだ慣れない。話すときは、気をつけていたら次第に女言葉が出るようになってきたけど、焦ったりするとどうしても、元の男言葉に戻ってしまう。まあ、これは勝美や千博を問い詰めた

とき、二人が慌てて元の言葉に戻ってしまったのを見ているから、特に不思議でもなく、そういうもんなんだろうと考えている。

ただ、話し言葉は努力して女言葉になってきたけど、頭の中で考えるときは、まだどうやっても女性の視点にはならない。わからないけど、当分は無理そうな気がする。それとも、手術が済んで完全な女性になったら、案外早く直るんだろうか？・・・あ、今、女性的になることを「直る」と考えたような気がする。これって思考の軸足が女性視点になってきた兆候じゃないか。

すると、女性化が順調ならば思考もすんなり女性になるのかな・・・。もうここまで来たら、新しい自分になることを期待して楽しまなきゃダメだもんね。いつまでも男子だったとメソメソするのは止めるんだ。手術が終わってペニスがなくなっちゃっても、もう絶対に悲しがったり、やるせなく思うのは止めよう。むしろ、ようやく完全な身体になったと嬉しく思うように努力しよう。これは性同一性障害患者の多くが直面する大きな問題だと、先生から渡されたパンフレットには書いてあったっけ。・・・大丈夫、僕には大先輩の母さんがついている。

そんなことを考えながら手術準備室では手術着に着替える。これは当然女物だ。ピンクで下半身はない、ワンピースのような貫頭衣だ。

下着を全部脱いで、手術着のみになるよう言われていたので、このところずっと履いている（というか今のところこれしか持っていない）くまさんショーツを脱いだ。母さんはさりげなく、環と晶と一緒に後を向いてくれたんだけど、母さんの秘密を知った今、母さんに見られることに恥ずかしさはなかった。いや、それどころか、もうこれで永久に失われてしまう僕のペニスを、是非とも母さんにしっかり見て貰い、瞼（まぶた）に焼き付けておいて欲しいとさえ思った。だって母さんは、生まれたときからずっと僕のおしめの世話をしてきてくれて、その後も小学5年生まではときどき一緒に風呂にも入っていたんだから、当時の僕のかわいいおちんちんが、今のペニスと

呼べるまでに立派に成長した姿を、なくなっちゃう前に是非見せたかったんだ。
「母さん、脱いだ服や私物は、ここに置いておくから、病室のほうに持って行ってね。」
　わざと全裸で母さんに向き合い声をかけると、母さんは振り向いて一瞬だけ僕の股間を凝視（ぎょうし）した。けれど、次の瞬間、フッと優しい顔に戻ると、どこか遠くを見る目になった。僕は、母さんが僕を見つめているように見えて、実は僕のことが（あるいは僕の股間が）目には入っていないような気がしたので、もうこれで気が済んだんだろうと考えて、ゆっくり手術着を着用した。
　このとき母さんの瞳（ひとみ）に浮かんでいたのは、小さいときの僕の姿だったのか、それとも遥（はる）か遠い昔の自分の姿だったんだろうか・・・。
「じゃ、行ってくるね。」
　ストレッチャーに横になり、母さんと環、晶の三人と別れて、看護婦さんに押して貰って手術室に向かった。
「よろしくね。杉田さん」
　手術台が二つ並んでいる、大きな手術室で待っていたのは、やはりストレッチャーに横になっている榊さん。あ、もう榊君だった。着ているのは水色でズボンもついた、男物の手術着だ。男性ホルモン薬の効果か、更にイケメン男子となっているような気がした。
　先生や看護婦さんたちは、二つの手術台の周辺でいろいろ準備に勤（いそ）しんでいるようで、時間があったので、榊君と少し話すことができた。
　この1週間で、何名かの女の子とやったそうだ。もとからレズセックスでタチはやっていたんだから、当然か。でも男との性行為は皆無らしい。やっぱり榊君は、性同一性障害なんじゃないかと疑ってしまう。
　交換したデータやビデオでも、まだ処女だと言っていた。確かにビデオには、処女膜らしきものがはっきり写っていた。自分のビデオ撮影からも推察できたし、千博から聞いた話でもそうなんだけど、

本当に中まで広げて、処女膜を撮影したり、オナニーでイクところまで撮影してあって、本人と会ったらなんだか恥ずかしくなってきちゃった。でもさすがに榊君は、そんなこと気にもしないといった風体で、堂々としている。

　榊君曰く、男になったらさすがに見境なく手を出すことは出来なくなるからと、この一週間はレズセックスばかりしていたらしい。

「男になったらやっぱり自重するんだ？」と聞いたら、「まあ一応ね。」と言われる。

　あれ？でも、ペニスこそまだないけれど、もう榊君は男子の扱いだよね。だとすると、それはレズセックスではなく、立派な？普通のセックスになるんじゃないかな？・・・いや、まあ、相手が納得しているなら、勿論なんだって構わないんだけどさ・・・。

「最後にやっておきたいことは無い？」

　恐らく男としてやっておきたいことを聞いているのだろう。

　最後の立ちションはしたし、昨夜最後のオナニーもした。実はタマを抜かれてから、女の子を見てムラムラしたり、勝手に勃起してしまうようなことは一切なくなっていたし、そもそもエッチなことが頭に浮かぶことも一切なくなった。でも物理的な刺激には、それなりに反応するし、ちょっとコツが要るんだけど勃起して射精もできることもわかっていたから、最後にオナニーをして、薄くなっちゃったけど精液を飲んでみようと思い立ったんだ。自分の精液を飲むことができるのは、絶対これが最後だし、これから女子になると、オーラルセックスで相手の精液を飲まなければならない場面も出てくるから、そのときの心構えを練習しておこうと考えたんだ。自分の精液なら、それほど抵抗はないからね。でも、頑張って最後にオナニーをして、飲んでみた僕の精液は、円が言っていたとおり、薄くて微（かす）かにしょっぱいだけで、涙か、または血液のような味しかしなかった。タマを抜かれる前の精液のように、どろっとして青臭く、エグい味とは随分違っていた。なぜそんなことが言えるかというと、実は昔、ベッドに仰向けでオナニーしたときに、射精したら頭のほ

うまで飛んできた精液が、もろに口に入ってしまったことがあるからなんだ。誰しもこんな間抜けな経験の一つや二つ、きっとあるよね？（でも、こんなこと僕の沽券にかかわるから、絶対ナイショだ。）

心残り、というわけではないけど、男湯や男子トイレは赤紙が渡された日から入れなかった。まあ、そんな機会はなかったんだけど、そもそも、まだ僕には男性の裸を見たいという感覚は生じていない。というか、僕は別にホモでもゲイでもないので、男性の裸など、あまり積極的には見たくない。でも、これも身体が完全に女性になると、やがて男性の裸に胸がときめくようになるんだろうか？

「例えばセックスとか僕とやっとけば良かったかい？」

勿論そんな気がある筈はない。なんだか小馬鹿にされたようで、あまり嬉しく感じない。それに、僕と円との事情を知ってそうな雰囲気もある。それで、ついむきになって口走ってしまった。

「ありがとう。でも男の子としての最後のセックスは経験できたから・・・。」

「誰！相手は！！」

急に榊君が鋭く叫んだ。これまで余裕たっぷりで、僕をからかうような態度だったのに、なんだか焦ったような、詰問するような口調だった。表情が一気に険しくなり、雰囲気が変わったのがわかる。榊君のこういう表情は、はじめて見た。それで、思わず口を濁した。

「まあ、ちょっとね・・・。一応、こんな僕でもさ・・・。」

実は、僕と円との関係は、まだオープンにしていなかったんで、このまま心に秘めておくつもりだったんだ。だって、僕とセックスして処女を失ったということが、円の今後の恋愛や結婚に、マイナスになったら申し訳ないと思ったんだ。それと、榊君の口調から、なんとなく『勝った！』という気がして、これまでいつも相手のペースで話をされていたのに、ちょっとだけ僕が優位に立てたような気がしたから、カッコをつけて思わせぶりな台詞を一度言ってみたかったんだ・・・。ほんの一週間前に交換したデータとビデオでは、

僕がまだ童貞だと述べているから、この一週間で僕も頑張ったということがわかっただろうしね。いや、それどころか、まだ女子としては処女（多分そうだよね？）の榊君を、この方面では出し抜けた！という密かな優越感があったのもある。

　でも、本当にそんな難しいことをいろいろと考えたわけじゃなくって、ただ何となく気恥ずかしかったから口を濁（にご）したというのが本当のところだった。やっぱりこういうことは、あまり他人に話すことじゃないしね・・・。それなのに、このときの僕と榊君のやりとりが、よもや、その後２０年にわたり医学界を揺るがした大論争の発端というか決定的な証拠となり、やがて新しい医学の発展に大きく寄与することになったなんて、まさか考えつく筈もなかったんだけどね・・・。

　一瞬だけ険しい顔をした榊君の雰囲気は、すぐ何もなかったかのように元に戻り、僕に笑いかけてきた。

「そうか、杉田さんも充実した一週間だったんだね。」

「うん。心配してくれてありがとう。一週間でやりたいこと、やるべきことは全部やったつもりだから、未練がまったくない、というのは嘘になるけど、やり残したことは多分ないと思う。」

　そう笑って答えると、

「そうか、良かった。ちょっと心配だったんだ。」

　と笑みを浮かべ、

「嫌がっているのに手術を強制するのは、やっぱり気が引けるからね。僕の都合で、君の男を奪っちゃうんだから。」

「でも、本当に君でよかったよ。てっきり坂野君か村上君辺りになるかなと思ってたんだけど、君の方が明らかに女の子に向いてそうだ。今でもそれだけ可愛いんだし、君は絶対に美人になるよ。僕も君が相手なら全力で頑張るから。」

「？」

　何だかよく分からないことを言われたみたいで、きょとんとしていると・・・。

「いや、良いんだ。気にしないで。・・・じゃあ、お互い生まれ変わってこよう。」
　そう言って、僕から視線を外し、手術台の側にいる先生のほうを向いた。
「もう、話は良いかしら？」
　どうやら先生は、僕たちが話し終えるのを待ってくれていたらしい。
「大丈夫です。」と答えると、本人確認をされ、手術前の最後の注意を簡単に受ける。
　そして、ストレッチャーから手術台に移って横になると、点滴の注射針を両手に付けられ、また指先に酸素濃度を測るセンサーだとか、脈拍を見るセンサーだとか、次々といろいろ付けられ、本当に手術が開始された。最後にマスクを付けられ、頭の中でゆっくり１０からカウントダウンするように言われた。
　１０、・・・９、・・・８、と数えだして、５から先の記憶はない。この眠りに落ちるほんの数秒の間に、これで１５年間連れ添った相棒（愛棒？）ともお別れだ、という想いと、目が覚めたら、あのビデオに写っていた榊君のマンコが自分の股間についている筈だ、という二つの考えが一瞬頭を過ったような気がした・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
――――――――――――

　榊怜央と杉田優稀の手術が終了した後、まだ二人が麻酔で眠っている午後４時過ぎ、同じ病院の同じ手術室で勝美と千博の手術が開始されようとしていた。執刀医や手術チームのメンバーは、榊怜央と杉田優稀の手術を担当した同じスタッフで、全員で遅い昼食を採って一休みした後に開始された。
　手術スタッフは、本日の性別交換手術を受ける患者２組ともが、男女双方ともに手術に対するおそれや不安をまったく見せない雰囲気に、珍しいこともあるものだと感心していた。

第２０話　手術の後に

目を覚ますと、ベッドの横で椅子に腰掛けていた母さんがナースコールを押して看護婦さんと先生を呼ぶ。母さんはやつれた表情で目の下にクマが出来ていたので、もしかするとあまり寝ていないのかもしれない。壁の時計は、午前１０時を少し回ったところだった。
たしか手術は朝の９時頃にはじまった筈だから、まさか１時間ということもないだろう。してみると、僕は丸一日も寝ていたことになる。母さんも疲れた訳だ。
まだ、片腕には点滴の針が付いていて、それ以外にもいくつかセンサーは付いているようだ。
まず、直ぐにやってきた看護婦さんが、ベッドを少しだけ起こしてくれて、そこに寄り掛かるようにして上半身をちょっと上に起こした。股間に体重をかけられないので、ベッドはあまり大きく起こすことはできないと言われたけど、このちょっと起こした状態でもわかる、おっぱいがかなり大きい感じがした。まだ包帯で巻かれているため、あまりはっきりとはわからないんだけど、明確な重量をもった何かが胸に《くっついている》感がするから。
これを常に胸に抱えていると、肩が凝ったりしそうだ。かなり邪魔な感じがする。こんなの、本当にそのうち慣れるんだろうか。そもそも榊君のおっぱいって、こんなに大きかったっけ？そうは見えなかったけど、着痩せするタイプだったのかな？
肝心の股間は大きな胸の向こうに見えてはいるんだけど、包帯とかいろいろな布でぐるぐる巻きになっていて、そこからチューブとかも何本か出ていたりして、どうなっているのかよくわからない。でも、ペニスに力を入れてみても、何も感じないし反応がない。男の子なら誰でもやったことがあると思うんだけど、ペニスや肛門に力をいれると、本来ならピクピクと動くような感触がある筈なのに、

まったく感じられないんだ。もう麻酔は切れているから、やっぱり、なくなってしまったんだと、改めて実感する。そんなことをぼんやりと考えているところへ、先生がやってきた。今回も、僕の担当は女医先生だった。
「手術お疲れさま。気分はどうかしら。手術前にもちょっと話をしたけど、改めて、君の手術を担当した西郷清実です。手術は二人とも無事成功。予定通り、どちらも４時間くらいだったわね。」
「昔は手術が終わると直ぐに麻酔を切ったんだけど、今は身体への負担とか痛みが引くのを待ってからといったことを考慮するため、手術後２４時間は麻酔で寝ていて貰うの。だから今の日時は手術の翌日の午前１０時を少し過ぎたところです。」
「君のペニスや陰嚢、前立腺、精嚢、輸精管など男性器一式をすべて摘出後、榊君から摘出した卵巣、子宮、膣組織、小陰唇、大陰唇、クリトリスなど、女性器一式と乳腺などを君に移植しました。」
「逆に榊君には君から摘出した男性器一式を移植しました。また、先に君から摘出してあった睾丸も、同時に移植しました。ま、そっちはチームを組んだ井上壮一郎先生が執刀されたんですけどね。」
　井上先生とは、あそこに居た男性の先生のようだ。やはり榊君の手術を担当したのは男性の先生だったらしい。
「あ、それから二人とも膀胱も一緒に摘出して交換しています。特に男性の場合、前立腺は膀胱とくっついていて、尿道を取り囲むように位置しているので、そこだけ剥がして取り出すのは尿道括約筋の関係で難しいの。だから男女とも生殖器を交換するときは膀胱と尿道も一緒に摘出して、股間の臓器は全部取り替えてしまうのが標準術式になっています。」
「あと、骨盤にかなり手を入れています。これは出産のとき、子供が骨盤をスムーズに通過できるように、小骨盤を削って骨盤腔を大きくしたり、恥骨下角を浅くしたりして、女性の骨盤と同じになるようにしています。この結果、いわゆる安産型のヒップとなりましたので、お尻や腰回りに少し脂肪がつけば、見事な女性の体型にな

るでしょう。きっと多くの男性を魅了することになると思いますよ。」
「手術をする上で特に難しいところはありませんでした。二人とも完全に成功したと考えて良いでしょう。これで晴れて君は女性になれたし、榊君は男性になれました。」
「関係書類はもう提出しておいたから、昨日付けで君たちの戸籍や行政的なデータはすべて変更されている筈です。といっても、お役所仕事だから、実際に変更が反映されるのは、一週間以上かかると思うけどね。」
「今後、君には遅くても2ヶ月以内には生理がやって来るでしょう。君に移植した卵巣からは継続的に女性ホルモンが分泌され続けているから、体型や肌の表面など、更に女性らしく変わっていく筈です。」
「また気がついていると思うけど、もう髭は生えてこないでしょう。胸毛とかすね毛もそうなります。そもそも君はあまり毛深いほうじゃなかったみたいでしたね。」
「陰毛は剃ってしまったけど直ぐまた生えてくる筈です。まあ、体毛については個人差もあるので、一概には言えませんけどね。そうだ、サービスで腋毛は永久脱毛をしておいたから、もう脇の下のむだ毛のお手入れはしなくて済みます。」
「次に胸に移植した乳腺だけど、榊君の胸はAカップで、中3としては平均値か、やや小振りというところでした。ただ榊君は体格が良くて、上背があったし身体も大きかったから、乳腺の絶対量としては、結構大きかったの。それを身体の小さい君の胸に押し込んだので、上に盛り上がった今の君はCカップ位か、あるいはもうちょっとあるんじゃないかしら。傷が落ち着かないと正確なところは測れないけど、Dカップ位あるかもしれないわよ。中3としては、まず巨乳と言っても良いでしょう。少なくともクラスでは一番か二番になる筈だわ。かなりグラマーな部類になります。」
「今後、女性ホルモンの働きで、まだまだ大きく育つだろうから、

最終的にはEカップを超えて、Fカップ位になると思うの。日本人としては、グラビアモデル並の巨乳だわね。実はこういうケースは割とあるらしくて、巨乳のグラビアモデルのうち何割かは、君のような性転換した元男性だったという説もあるくらいなのよ。まあ、都市伝説の類かもしれないけどね。」

　それでこんなに胸が重かったのか。僕は華奢なほうだし、そんなに胸が大きくなっても困るんだけどな。そう言えば母さんもグラマーだったのは、こういう理由だったんだろうか？

「乳輪とか乳頭、いわゆる乳首の部分だけど、これも二人のものを交換しています。榊君は乳頭も結構大きかったわね。かなり使い込んでいたのかしら。以前のような、男の子のポチッとした小さな乳首ではなく、大きめの種なしブドウ位の大きさになっていて、感度もすごく良さそうだったわよ。あとで包帯を交換するときにでも見てごらんなさい。きっとすぐに乳首の快感に目覚めると思うわ。女性は乳首の刺激だけでもいっちゃうからね。」

　先生はなにげなく言ったみたいだけど、昨日までの僕だったら、この「種なしブドウ」という言葉に、きっとまた涙していただろう。でも、逆に完全な女性となった今は、種なしと言われても、あまり心には堪（こた）えなかった。ペニスも何も、一切合切が無くなってしまったのに、喪失感はあまりない。人間の意識って、状況によって、こんなにも急激に変化するものなんだ。僕はもう完全に女性になったんだ、自然とそう切り換えられると嬉しいな。

「神経系統もほとんど完全につないであるから、もう完全に感覚があるはずよ。だから、傷が治り次第、あちこち触って見てごらんなさい。オナニーも是非しましょう。性的快感は女性ホルモンの分泌を盛んにするから、むしろ、どんどんやるといいわね。ただまあ、これまでなかった感覚だから、慣れるまで1週間程度はかかるかしら？」

　手術成功の話を聞かされ、オナニーを勧められる。

「昔は手術をすると、一週間程度は傷が腫れて痛くて大変だったら

しいけど、今は解剖学的に最適の場所で切ったり縫ったりするし、何といってても神経系が完全につなげられるようになったんで、痛みはまず感じない筈だわ。それでも万一、痛かったり違和感があったりしたら、申し出てちょうだい。」

「何か質問は？」

「はぃーっ、その、たぁぃいんわぁっ？！」

　声が変に甲高く、裏返ってしまっている。

「あ、それも説明しなきゃね。喉に包帯が巻かれているのは、君の喉仏を削ったからなんだ。君はもう声変わりが始まっていたけど、そもそも女性の声は男性より高いのが普通なので、声帯を少し小さくしたの。それに女性に喉仏があっては変だしね。今はまだ声帯が慣れていないから、声が裏返っているような変な声だけど、落ち着くと概ね５音階程度高くなっていると思うの。落ち着くまでの数日間はあまり大きな声を出さない方が良いから、話すときは気をつけてね。」

「ちなみに、榊君は男性ホルモンの血中濃度が上がっているから、これから喉仏が発達して、声変わりが起きる筈だわ。いや、１週間前からなので、もう声の質が少しずつ変化しているかもしれないかしら。」

「それと、質問のあった退院の時期だけど、これは君が女性の身体にどれだけ慣れたかを基準に考えることにします。純粋に傷の治り具合としては、１週間あれば十分なんだけど、一番の問題点は排尿に慣れたかどうか、つまりトイレで普通におしっこができるようになったら、それで退院となります。今は尿道から膀胱まで留置カテーテルが挿入されていて、まずそれをこれから抜くんだけど、それからトイレトレーニングをして貰って、失敗せずにＯＫとなったら退院です。でも最初は誰でも漏らしてしまうものだから、おしめを当てておくほうが良いかしら。」

「他に何か質問は？特に痛いところとか、苦しいところはないわね？」

声が出しにくいので、黙って首を振る。

「それから榊君との初体験だけど、榊君の勃起力回復と君の最初の生理が来るまでの間で考えて3週間後に行うようにしておいたわ。」

そう、一番の問題はこれだ。性転換者は自らの新しい性別を受け入れるために、性別交換した相手と性行為をしなければならない。これは性別再確認式（俗称では「交換初夜」と言う。新婚初夜に因(ちな)んだネーミングらしい。もっと直接的に「貫通式」などと言う人もいる。）と呼ばれていて、これを済ませてはじめて、性別交換に関する一連の処置が完了したということになり、新しい性別で結婚できるようにもなる。以前は誰が相手でも良かったらしいんだけど、そうそう都合よく相手が見つかる訳でもないし、それ以上に変な相手ではトラウマになってしまうことも多々あったそうだ。それで、試行錯誤の末、性別交換した相手との間で、執刀医やカウンセラーの支援の下に性行為をするという今の形に落ち着いたらしい。僕の場合なら榊君とだ。パンフレットによれば、特に恋人同士でなくとも、男女双方ともに自分についていたものなら、受け入れやすかろうという考えもあるとのことだと書いてあったっけ。もっとも、男女双方ともに別の相手を見つけてきて、その4名全員の希望として申請すれば、性別交換した相手とでなくても特例として認められるらしいけど、短期間に男女双方でそのような相手をそれぞれ見つけてくるのは、かなり難しそうだな。

　この性別再確認式という制度だけど、昔というか最初のころは、そもそもなかったんだという（だから母さんは経験していないようなことを言っていたっけ）。ただ、身体的な性器の交換をしても、心の性別が追いつかないケースが多かったため、いろいろと研究をした結果、セックスをすると男女双方とも心の性転換が一気に進むということがわかってきて、それで取り入れられた制度だそうだ。

「はぃっ、わかぁりましぃたっ。」

「場所は何処にする？希望があれば自宅でもホテルでも構わないんだけど、お互い新しい性別には慣れていない筈なんで、この病院の

特別室を終日おさえておいたわ。ここなら最初に私とか、カウンセラーの先生からのアドバイスもできるし、希望があれば立ち会うこともできるの。それで良いかしら？ちなみに榊君もそれで良いそうよ。」

　黙って頷（うなず）き、僕の女性としての初体験が３週間後にセッティングされた。

　先生が出ていくのと同時に円が入ってくる。

「どぉこから聞ぃてぇた？」

　あまり聞かれたくない話をしていたため、確認したくなる。

「優稀のおちんちんを摘出したところからかな。」

　なるほど、ほぼ全部か。急に円に申し訳なくなって、思わず目を伏せた。

「仕方ないよ、決まりだもんね。」

　何が、とは口には出さないが、最後の榊君とセックスすることを指しているのだろう。

　勿論、円なりに思うところはあるに違いない。いくら同性の親友になったと言っても、先日まで恋人で、自分の処女を捧げた彼氏が女の子として男に抱かれるのだから、複雑な想いにならないほうがおかしい。

「でも、もう親友として応援するって決めたから。優稀も頑張ってね」

「うん、大ぁい変そうだぁけど、なぁんとかぁ頑張ぁってみぃる。」

　その後は、導尿カテーテルを抜くのが痛くて、看護婦さんにグイッと引き抜かれたときは、思わず悲鳴を上げてしまった。けど、男だともっと何倍も痛くて、ペニスに焼け火箸を突っ込まれたような痛さだと聞き、思わず股間を押さえて今だけは女の子で良かったと心底思ったんだ。それから、初めてのおしっこが中々出なくて、円や母さんにアドバイスして貰ってようやく目の前で放尿したり、失敗して粗相してしまったりと色々あったが、何とか退院まで漕ぎ着

けた。結局、入院は10日間で、この間に手術の傷は、殆ど癒えていたし、声も落ち着いた。

千博はちょうど1週間で、一足先に退院したそうだ。ということは、勝美のペニスを貰って、それがきちんと勃起・射精することを確認できたということなんだろうな。また榊君もやはり1週間で退院したとのこと。男性は1週間、女性は10日間というのが、平均日数らしい。

実は入院中、母さんが病院に詰めてくれて僕と千博の世話をし、芳恵さんが自宅で待機して家事全般をするという体制だったんだけど、退院して帰宅すると、僕の部屋はすっかり模様替えされていて、コテコテの女の子の部屋になっていた。カーテンや壁紙など、ピンクを基調としたものに交換されていて、ベッドカバーはパステル色の花模様で、床にはピンクのハート型をしたラグマットが敷いてあった。机とか小物類も部屋に合わせて新調してくれたらしいけど、これらもすべて女の子の部屋に合わせたようなお洒落なデザインだった。

写真：すっかり模様替えされた僕の部屋

<i451781－319342>

さらに、ドアの裏側には中学生位のジャニーズ系イケメン男子3人が、極小のビキニ水着を着てビーチで戯(たわむ)れるピンナップポスター？が貼ってあり、こんなものどこから調達してきたのかと、思わず吹き出してしまった。勝美一筋だった千博が持っていたとは考えにくいけど、まさか、芳恵さんの趣味なんだろうか？

第２０話　手術の後に（後書き）

導尿カテーテルですが、男性でもそんなに痛いものではありません。私も全身麻酔による手術の経験が２度あります（性転換手術ではありません）が、特に抜くほうは、ほとんど痛くなかったです。

今後も類似の記述がありますが、あくまでこの物語における脚色です。（ただし、この時代では麻酔が発達しているため、手術でもまったくの無痛が当然とされていますから、ほんの僅かの痛みでも、患者にとっては大きな苦痛と感じるのでしょう。）

第２１話　退院して（前書き）

前回の後書きでも触れましたが、導尿カテーテルの挿入は、実際にはそんなに痛くははありません。私は意識がある状態で特に麻酔もなく挿入されたことがありますが、違和感はともかくとして痛みはわずかでした。

ただ、かなり昔ですが、膀胱鏡（金属の棒状のもので、硬鏡と言われていました。膀胱の中の病変を直接覗いて見ることができる機具だそうです。）を尿道に入れられたことがあり、これは本当に痛くて苦しくて、死ぬかと思うほどの拷問でした。（焼け火箸とは言わないにしても、冗談ではない痛さでした。）

まず、針のない注射器のような器具でゼリー状の皮膚用麻酔薬をペニスの先端から浣腸のように注入され、その後太さが８ミリ程度もある棒を入れられるのですが、太めの箸のような金属製の棒で、事前に見てしまったこともあり、痛さも怖さも倍増しました。

入れられるときも激痛でしたが、検査終了後もしばらく排尿時にかなりの痛みがあり、二度とやりたくない検査でした。

この小説では、このときの経験をもとに脚色・描写していますが、最近では軟鏡というファイバースコープを使った胃カメラのような膀胱鏡も増えてきており、痛みはかなり軽減されているようです。

第２１話　退院して

家に戻ると、翌日から母さんと芳恵さんの二人して、僕に家事全般を次々に特訓しだした。僕も女性になったからには、しっかり女の子をすると心に決めていたので、頑張って働いていると、芳恵さんが愚痴ったり意地悪したりすることが殆どないことに気がついた。これまで何となく煙たい存在だったけど、案外悪い人ではないのかもしれない。それよりも、芳恵さんが指導する女の子としての立ち居振る舞い、仕草や言葉遣いは、なかなかハードで厳しい。母さんもいろいろと教えてくれるけど、それは女の子としての常識とか、生活する上での男子との違いなど、いわば日常的な知識が中心だ。これはもともと男子だった母さんに教えて貰うのが、とても判りやすい。

一方、ご両親とも第一階級で自分自身も第一階級の芳恵さんは、いわゆる良家のお嬢様なので、礼儀作法とかマナーとかには特に詳しく、また厳しい。これまで千博が引き受けていた芳恵さんの干渉とは、こういうことかと納得した。確かに毎日続くと、少しうんざりする。でも、何日かすると、家事をしっかりやって、芳恵さんの趣味にも文句を言わず付き合っていたら、芳恵さんの僕と母さんに対する態度が、あきらかに変化してきた。つまり、何のことはない、芳恵さんは千博が自分の思い通りにならなくて、子供たちと仲がよい母さんに八つ当たりしていたんだろう。何にせよ、とても良い兆候なので、これは大事にしようと思っている。芳恵さんの干渉も、僕には充分我慢できそうだし、それこそ女子となったことを楽しむ一環と考えれば、どうということもない。この1カ月、もっとずっと辛くて悲しいことばかりだったから、母さんと芳恵さんとの関係が少しでも改善するなら、こっちも頑張ってみよう。

先に退院していた千博は、もうどこから見ても完全な男子学生だ。

手術を受けた者は2学期の終業式の日まで臨時の休みとなっているので、学校に行く必要はないけど、なぜか家でも学ランを着ていることが多い。僕も女子の制服を着るように父さんに言われていたから、多分千博もそうなんだろう。これは確かに男性化・女性化に向けて一定の効果があるみたいだ。

　千博に導尿カテーテルを抜くときの様子を聞いてみたら、真っ青な顔になって股間を押さえ、ぶるぶると震えだした。

「これまでの人生で、あんなに痛かったことは一度もなかった。生まれてはじめての痛さだった。もう二度とやりたくないし、あんなに痛いと知っていたら男性になろうとは考えなかった・・・。」

　カテーテルを引き抜かれたときは、本当に焼け火箸を突っ込まれたような痛みだったらしい。しかも、その後も数日間は尿道がしくしくと痛み続け、おしっこをしようとすると尿道がしみて、焼けるような激痛が走るため、怖くておしっこができなくなってしまったとのこと。しかし、水分を採らないように努力すると、おしっこが濃縮されてしまい、ますます出すときに強くしみるようになっちゃうんだって。これには心から同情した。なんといっても、こちとらその痛みが容易に想像できてしまうからね・・・。

　病院では千博があまりに水分を採らないことや、おしっこが出ていないことから、排尿を促すために点滴で水分を補給したんだけど、それでも千博がおしっこを我慢するので、仕方ないからもう一度カテーテルを入れると言われちゃったらしい。先生が二人と看護婦さんが三人もやってきて、下半身を脱がされ、ベッドに押さえつけられて、さあ挿入すると先生がペニスを掴（つか）んだとき、とうとうあまりの恐怖に泣き叫んで失禁してしまい（これも、おしっこが漏れてくるのがしみて、激痛だったみたい）、まあ結果的におしっこが出たので無罪放免となったそうだ。普通だと、いくら病院とはいえ、先生や看護婦さんらに見られながら、おしっこを漏らすなんて、男子でも女子でも関係なく、ものすごく恥ずかしいだろうけど、千博にとってはそれどころではなく、拷問以外のなにものでもなかったみ

たいだ。先生がペニスを掴み、カテーテルの先端を尿道口にあてたときには、ついに焼け火箸を突っ込まれると本気で思ったらしい。無意識なんだろうけど、「たすけてーっ！！」「やだーっ！！」「やめてーっ！！」「勝美に返すーっ！！」「ゆるしてーっ！！」と全力で泣き叫んだそうだ（ただし本人はその記憶がない）。これは千博にとってトラウマになっちゃったようで、思い出すとぶるぶる震えだして、話が一切できなくなっちゃったんだけど、同室に居た母さんが、あとでこっそり教えてくれた。勿論、こんなことは千博の体面のためにも、絶対秘密だけどね・・・。

榊君はどうだったんだろう・・・。

そもそも導尿カテーテルは手術のときに麻酔下で挿入するもので、全身麻酔のかかっていない意識のある状態で入れられると、まず殆どの男性はあまりの痛さに悶絶して気を失うと言う。でも女性は尿道が短い（男性の尿道は２０センチ以上あるけど、女性はせいぜい５センチ位だという）ので、そこまでは痛みがなくて、カテーテルに皮膚用の塗り麻酔をつけてから挿入すれば、何とか我慢できる程度なんだって。妙なところで女性優位なこともあったもんだ。

家に帰ってきた夜、風呂に入るとき、前に父さんに言われたとおり、僕の順番は義郎兄さんと晶の間ではなく（そこは千博の順番になった）、母さんと環の間になったんだけど、晶が一緒に入りたいと言い出した。晶はこれまで、僕の次だったけど、まだ小２で小さいし、幼稚園のときは僕が風呂に入れていたことも多かったので、最近でもときどき二人で一緒に入っていた。

まあ、順番に関しては、しょせん小さい子供のことだし、これまでも用事があったりして順番を入れ換えることもあったから、父さんのルールはあるにしても、そこまで杓子定規なことはしていない。それに晶が僕の順番まで待って一緒に入るのは、晶の自由だ。ただ、僕が女子になってしまったので、これまでのように男の兄弟という関係ではなく、姉弟という禁断の関係になるんじゃないかと、ちょ

っと気になった。それで一応、母さんに一緒に入って良いかを聞いたところ、別に晶とは母さんもときどき一緒に入るから、姉弟でも優稀がよければ構わないんじゃないと言われたので、一緒に入ることにした。
　もっとも僕としては、最近では一緒に入ることもなくなっていた環と一緒にお風呂に入ることを密かに夢見ていたんだけどね・・・。
「優稀お兄ちゃん、女の子になっちゃったって本当なの？」
　脱衣室でブラウスとスカートを脱いでいると、もうスッポンポンになった晶が不思議そうな、というか不安そうな顔で聞いてきた。
最初の去勢手術の日から、ずっと女子の制服とか女物の洋服を着ていたし、言葉遣いも少しずつ女言葉に変えるように努力していたので、何となく変だと思っていたのだろう。とすると、これは僕の体を確認したかったんだろうな。まあ晶に見られても別に構わないし、僕が気にしなければ良いだけだろう。
「そうよ。もうお兄ちゃんじゃなくて、お姉ちゃんなのよ。だから、これからは優稀お姉ちゃんって呼んでね。」
　そう言いながら、母さんから借りたブラを外した。勿論、母さんのでは少し大きいんだけど、肩紐と後フックで調整してパッドを入れれば、何とか様になっている。身体が慣れて外出できるようになったら、早速自分のサイズのものを買いに行こう。そんなことを考えていると、晶がそっと胸に手を伸ばしてきた。
「本当に本物だ！！お母さんみたい！」
　晶は末っ子のせいか、僕以上に甘えん坊で、確か年長さんになるまで母さんのおっぱいに吸いついていた筈だ。ほんの二年前のことだから、まだ記憶が鮮明なのかもしれない。
　そのまま好きに触らせながら、このところずっと履いている、くまさんショーツをクルッと剥くようにして脱いだ。陰毛が剃られているので、スリットやクリトリスが見やすい筈だけど、女性器は外からはあまり見えないし、これまで確認した限りでは、そんなにビラビラがはみ出したりしてはいないから、多分母さんや環の股間と

同様に見えるんだろうな、と漠然と考えていた。ところが僕の股間を見た晶は、ヒッと短く悲鳴を上げて激しく狼狽し、真っ青になって自分のかわいいつくしんぼを押さえて震えだした。

「やっ、やっぱり、切られちゃったんだ！！・・・優稀お兄ちゃん、おちんちん切り取られちゃったの？！？！」

　晶は眼に涙を浮かべ、恐怖に震えつつ僕の股間を凝視している。それも単に見つめているというのではなく、怖くて身体が固まってしまい、眼を離せない状態みたいだ。

「そうなのよ。女の子になるんで、おちんちんとタマタマは、手術で切り取られちゃったの。その代わり、こんな大きなおっぱいを貰ったのよ。お母さんみたいでしょ。いずれ赤ちゃんを産んだら、おっぱいをあげるの。」

「ねぇ、痛くなかった？怖くなかった？」

「何で女の子になっちゃったの？女の子になりたかったの？」

「おちんちん切られちゃうって、どんな感じ？」

「切り取られちゃったおちんちんはどうしたの？」

　さすが小２の質問は容赦がない。答え難い質問がポンポン矢継ぎ早に出る、と思ったんだけど、どうも様子が少し違う。眼に涙を溜めて、必死で恐怖に堪えているような雰囲気だ。きっと恐怖と不安で、質問をし続けなければいられないんだろう。

「さ、とにかくお風呂に入って話しましょう。ここに居ては身体が冷えちゃうわ。」

　促して風呂に入り、身体をさっと流してから二人で浴槽に漬かる。晶は先程とは一転、浴槽の端のほうに体育座りで膝を抱えて、俯いたまま黙り込んでしまった。

「さっきの質問だけど、順番に答えるわね。」

「まず、何でこうなったのかだけど、あたしも女の子になりたかったんじゃないわ。でもね、中学3年になると、全員が一斉に受ける試験があるの。それで成績が悪いと、女の子にされちゃうの。」

「試験は学校で全員が受けなければいけなくって、普段の勉強のテ

ストと、運動能力のテスト、例えば１００メートル走とか１５００メートル走とか、水泳とか、いろいろな種目があるけど、それらも全部、点数がついて、成績になるのよ。」
「この試験でビリになると、どんなに嫌でも女子にされちゃうの。あたしは勉強の点数も、そんなに良くなかったけど、運動が全部ビリだったんで、それで合計点でもビリになっちゃったの。」
俯き加減で、やや上目遣いながら、一言も聞き漏らすまいと全神経を耳に集中している晶。見ると手をぎゅっと握って、全身に力が入っているのが判る。
「この試験でビリになると、成績を返して貰うときに赤いカードが渡されるの。逆に一番の子は、もし女の子で希望すれば、男の子になれる青いカードが渡されるの。それで、この赤いカードが渡されちゃったら、どんなに嫌がっても、もうどうしようもなくて、あたしはその翌日にはまずタマタマを抜かれてしまい、一週間後に手術でおちんちんを切り取られちゃったの。手術の前は、ちょっと怖かったわ。」
話が佳境に入ってきたせいか、晶の硬直はピークになっているようだ。少し熱めの湯に漬かっているのに、肩は小刻みに震え、真っ青な顔をして固まっている。体育座りの手は膝を抱え、必死になって股間をガードしているのが判る。
「でも、手術は麻酔をされるから、痛くはなかったわ。タマタマを抜かれるときは、局所麻酔って言う、タマタマだけが痺れる麻酔で、手術するところを見ていたけど、ほんのちょっとだけ痛かった。それからおちんちんを切り取られるときは、全身麻酔で眠っていたから、全然痛いとは感じなかったわね。麻酔で眠らされて、気がついたらもう終わっていたのよ。」
「絶対に逃げられないの？逃げたらどうなるの？」
「切り取られちゃったら、もう元には戻れないの？」
「優稀お兄ちゃんは、これからどうなるの？」
「どうやったら、そうならないようにできるの？」

「そうね、まず逃げることはできないと思うわ。すぐに見つけられて、無理やりでも手術されちゃうでしょうね。」
「切り取られたおちんちんとタマタマは、代わりに男の子になる女の子にあげちゃったから、もうないの。そのかわり、このおっぱいは、その子から貰ったの。だから、もう元には戻れないわ。あたしはこれから女の子として生きていくのよ。お姉ちゃんになったって言ったでしょ。将来あたしは女性として、男の人と結婚して子供を産むの。お母さんになるのよ。」
「こうなるのが嫌だったら、とにかく成績を良くすることね。勉強も勿論だけど、身体も鍛えなくちゃ。あたしは勉強はビリじゃなかったけど、運動の点がクラスで一番低かったので、それで全体ではビリになっちゃったの。」
「だから、もし晶が男の子でいたいなら、まず勉強を頑張ることと、体力をつけてね。晶はあたしと違って運動神経は良いから、あとは体力さえつけば大丈夫よ。頑張って身体を鍛えてね。」
「お母さんの子供は男の子が二人に女の子が一人だったけど、あたしが女の子になっちゃったから、晶は男の子のままでいてくれると嬉しいな。きっとお母さんも、そう思っているんじゃないかしら？」
　真剣な眼差しで僕の話に聞き入っていた晶は、何かを決意したかのような思い詰めた表情で、黙ってコクンと頷（うなず）いた・・・。

第22話　女の子の快感

退院して1週間が過ぎた。このところ、いろいろなことがあって精神的に疲れていたせいか、毎晩風呂から出るとすぐ寝てしまっていたけど、今日は先生に言われたとおり、榊君が女性だったときに撮影したオナニービデオを何となく眺めていた。

もう家族全員風呂から出て、環も晶も寝たようだ。それとも晶は甘えん坊だから、自分の部屋ではなく、また母さんのベッドにもぐり込んでいるのかもしれない。

僕は下着姿でベッドに寝ころがり、見ていたビデオに倣(なら)って、自分の身体をあちこち触ってみる。

西郷先生にオナニーを勧められたけど、まだ何となく気後れして試していない。

こうしてみると、やはりこの胸は大きい。1週間ほどで少しは慣れてきたけど、こんな肉の固まりを胸につけていると、かなり肩が凝る。それに乳首や乳輪も、標準的な女性より明らかに大きい。妊婦とまではいかないけど、母さんも、ここまで大きな胸になるとは思ってもいなかったらしくて、驚いていたし、芳恵さんからは、将来が楽しみね、とやっかみのようなイヤミを言われる始末だ。でも、僕が大きな胸に困惑していると、いろいろと気遣ってくれて、外出できるようになったら真っ先に自分のサイズのブラを買いに行ってきなさいと言ってくれたから、そんなに苛(いじ)められたとか、酷(ひど)い扱いをされたようには感じなかった。でも、こういうのって、誰に聞けばいいんだろう。僕一人で下着を買いに行くのは高難易度だ。

股間はもう何もなくなり、つるんとした土手に一筋の割れ目があるだけだから、女の子の下着のショーツがよく似合っている。手術の前は、タマを抜かれていてもペニスが邪魔だったけど、今はもうスッキリしていて心地よい。さすがに完全な女子になった今は、喪

失感よりもスッキリして本来の姿になったという満足感が強くなってきた。

股間はスッキリしたけど、逆に腰からヒップにかけて、お尻のサイズは男子のときより明確に大きくなってきて、いわゆるボン・キュッ・ボンの姿になりつつある。こんなに大きなお尻が、なぜあんなに小さなショーツに納まるんだろう。いくら生地がよく伸びるといっても、未だに不思議だ。

身体をいろいろと確認し、触ったりしているうちに、もっと触ってみたい、感触を確かめてみたいという欲求が沸いてきた。男性のようにムラムラとして、射精したいという欲求とは少し違い、何となくふわふわというか、ちょっとエッチな気分が高まってきたという、不思議な感覚だ。もう来週には榊君とセックスするんだから、女の子の身体の感じ方や、どこが感じるか、ちょっと試してみようと思い、いよいよ僕も女の子としてオナニーデビューをすることにする。

下着を全部脱いで、裸でベッドに仰向けに寝転び、まず、大きなおっぱいを持ち上げるようにして両側からそっと揉んでみる。柔らかく、ふかふかの肉まんかゴム風船のようなつかみ心地で、男としてこの大きなおっぱいを揉むのは、さぞかし興奮するだろうなと思うけど、今の僕にとっては、特に大きな快感はない。

ちょっとくすぐったいような、あるいは何となく胸全体が温かくなるような感覚だけど、それよりはおっぱいの表面をやさしく撫で回すほうが、よほど快感がある。皮膚表面の感覚は、男性のときでもあったから、快感と感じるかどうかは別にして身体が理解できるのに対して、おっぱいという乳腺を揉む（揉まれる）感覚は、はじめてなので、どう感じて良いか、まだ理解が追いついていないのだろう。

次に、いよいよ乳首をそっと触ってみる。西郷先生にも感度が良さそうと言われたけど、かなり大きめの種なしブドウくらいはあるため、大きいおっぱいに相応しい、巨大な存在感だ。そっと触って

みると、ゾクゾクッとかぞわぞわっという感じで、乳首から痺れるような快感が胸全体に広がってゆく。男の子のときの乳首にはなかった凄い快感だ。

そんな乳首を、両手でそっと摘んだり抓ったりしていると、次第に乳首が固くしこってきて、勃起した？という位に固くなった。それに伴い、皮膚感覚もますます敏感になり、ちょっと触っただけでもピリピリとした快感だ。ここまでくると、指の腹でそっと触るだけでも、我慢できないほどの震えるような快感が全身を貫くようになる。男性の場合の、射精一歩手前の感覚といったら近いだろうか。もう、既に頭の中は乳首のことで一杯になり、何も考えられず両手で乳首をくりくり転がしたり、軽く摘んだり抓ったり、またはそれこそペニスを扱くように指でシコシコと擦ったりする。

「っんっ、んっ、ぁあっ、あんっ、うんっ、ひっ、ぃひっ、あひっ。」

出る声を必死に抑えながら刺激する。抓る度に身体がビクンっと震え、声が止まらない。無意識のうちに、左手はそのまま、右手を股間に伸ばして、クリトリスを人指し指の腹でそっと触ってみる。

「んんっあっんっ、あんっ、んっ」

こちらは乳首よりも更に痺れるような快感で、もう頭の中はパンク寸前だ。しかし、右手を下に伸ばしたため、両方の乳首を刺激するのが左手だけになってしまい、何ともどかしい。と、そのとき、ふと思いついて、右のおっぱいをぐっと持ち上げ唇を寄せると、何と自分の乳首に口が届いた。あとで考えると、ものすごいエッチな姿勢なんだけど、快感で頭がパンクしていて、自分がどんなに恥ずかしい格好なのか、気が回らない。それくらい、唇と舌による刺激は快感が強く、僕は必死になって自分の右の乳首に吸いつき、それを吸ったり嘗め回したりしながら、左の乳首は左手でくりくりと扱くように擦ったり摘んだりしつつ、右手でクリトリスを刺激した。

「うんっ、ひっ、ぃひっ、あひっ。」

たまに来そうになる大きな波が怖くて途中で緩めるため、意図せ

ず自分で寸止めの生殺しにしちゃっているんだけど、そんなことは気づかない。どんどん快感を与え続ける。
「あっ、ぁっ、ひっ、あっ、だめっ、だめっ、ぃひっ。」
もう何も考えられず、全身の筋肉がピンと攣ったように張りつめて力が入り、股間を大きく開きながら腰を思い切り浮かせるように空中に突き出して、三カ所を刺激し続ける。
と、右手で摘んだり捻ったりしていたクリトリスが、ちょっと力を入れすぎたのか、クリッと皮が剥けて、完全に剥き出しとなった。そこを人指し指と中指の腹でさわっと擦ってしまった。
「ひぃぃぃっ、ぃひっ、いひっ、ぁあっ、いひっ、っくっ、ぃくっ、いぃぃっ、いくぅぅっ、いくーっ。」
男子のときには考えられないほどの快感が三カ所から一気に襲ってきて、僕は思い切り声を張り上げてイッた。ところが、男子の射精とは違って、女子の絶頂は、まったく終わらない。それどころか、一度イクと、ますます快感が押し寄せてきて、もう頭の中は火花がバチバチとスパーク状態だ。瞼の裏には花火が次々と花開いている。
「だっ、だめっ、だめっ、とっ、止まらないっ、ひっ、たっ、たすけっ、助けてっ、止まらないっ、あっ、またっ、またいくっ、ぃひっ、またっ、いくっ、だめっ、助けてっ、いくっ、いくーっ、まただめっ、ぁあっ、まっ、またっ、たすけっ、もうっ、んくっ、死ぬーっ。」
バンッ。
いきなりドアが乱暴に開いて、千博が部屋に入って来ると、ベッドの上で喚きながらイキ狂っている僕のクリトリスを、思い切り捻りあげた。
「いひーっ、きーっ。きーっ。」
ひときわ大きな叫び声を上げると、僕は意識を手放した。
――――――――――――――――

ーーーーーーーーー

「・・・ぁっ、ぁあっ？、千博？」

「いくらなんでもうるさすぎ！！」

「・・・ごめん・・・。」

「少しは周りの迷惑も考えてくれるかな。環と晶はもう寝たみたいだけど、義朗兄さんは自分の部屋でニヤニヤしてるし、母さんと博美さんはリビングで二人してテレビの音量を上げて耳を塞いでいたよ。」

快感の濁流に飲まれ、何も考えられずに頭が真っ白の状態から、暫くして、ようやく思考力が戻ってきた。

まだ目はチカチカしつつ、荒い息を吐きながらも頭がはっきりしてきたことによって、自分の現在の状況というか惨状を再確認する。

ベッドの上は垂れた愛液や吹いた潮で染み込みきれない水溜まりすら出来ている。身体はバラバラになってしまったようで、力が入らない。それなのに、女の子になった身体は男の時と違い、イッても性欲が失われることがなく、ずっとエッチな気分のままだ。しかも、まだ皮膚の感覚はピリピリするほど敏感になっていて、ちょっと触られてもまたイッてしまいそうだ。

「本当にごめんなさい。こんなに気持ちいいとは思わなかった。」

「あと、足ピンオナニーはセックスでイキにくくなるらしいから気をつけた方がいいよ。すっごく阿呆なオナニーしてたけど。」

「ん？え？もしかして見てたの？」

「あれだけ煩さくちゃね。注意しようと思ったけど、せっかくの初めての快感だろうから、終わるまで待っていたんだ。でも母さんたちは困惑していたな。それに全然終わらないんだもの。それどころか、ベッドの上で悶え狂って、連続イキ状態になっちゃったんじゃない？」

そう言いながら、ベッドにできた水溜まりを手際よくタオルで拭き取って、僕の愛液やら潮やらでグチョグチョになったところを始

末してくれる。初めてのメスイキで、連続イキ地獄になってしまった僕は動きが鈍い、というか、ぐったりしてしまって、まるで身体が動かない。多分、腰が抜けてしまったんだろう。
「まぁ、女の子の身体が気持ちいいのはわかるけど程々にね。それと女の子のイキ状態は、連続で止まらなくなるから注意しな。そうなっちゃうと、身体がものすごく敏感になっちゃって、ちょっと触られただけでもまたいっちゃうよ。こんなふうに。」
「ひっ、ぃひーっ、ぃくっ、いくーっ。」
千博に脇腹をスッと触られただけで、またしても僕は激しくイッてしまい、股間から何かをプシュッと噴き上げた。
千博がベッドの上の惨状を片付けて、シーツまで代えてくれたころ、ようやく僕は全身が復帰して何とか動けるようになった。
「千博もオナニーしてみたの？」
「男の子のオナニーって、最初はものすごくムラムラして、自分を抑えることができないくらい高ぶるのに、最後は一瞬で何だかつまらないな。うまく言い表せないんだけどさ、まるでトイレをずっと我慢してきて、ついに我慢できなくなったような感じ。まだ僕が男の子の身体に慣れていないせいかもしれないけど・・・」
男の子のオナニーは、確かに射精の一瞬しか快感にならない。はじめる前のビンビンの状態は、とにかくもう射精することしか考えられないのに、実際に扱いてみても大きな快感があるのは射精の瞬間だけだ。確かにその瞬間だけはものすごく気持ちよいけど、こうして女の子のオナニーも経験してみると、性転換させられて損したという感覚は、あまり湧いてこなかった。ということは、逆に千博にすれば、ちょっと損したという気がしているのだろうか。でも、もうお互い、二度と味わうことのできない感覚なんだから、いまさら悩んでもどうしようもない。自分には関係ないことと割り切って忘れるしかないだろう。
でも、そうか、千博も射精したんだ。当然だよね。とすると、僕が隣で声を出してオナニーしていたら、千博もたまらないかもしれ

ない。女の子の僕がオナニーする声を聴いて、悶々とするのは気の毒だから、少し気をつけることにしようっと。
「ねえ、よかったら、気持ちいい男の子のオナニーの仕方を教えようか？それとも、もう勝美から教わった？」
「手術の後、まだ勝美とは会っていないんだ。メールは交わしているけど・・・。勝美が交換初夜まで会うのを待って欲しいって言うんで・・・。」
「何か理由でもあるのかな？まあ、でもあと二日じゃない。きっとすばらしくめかし込んで、お化粧もしたりして、すっかり女の子になった自分を見て貰いたいんだと思うよ。勝美のことだからさ、もし本当に何か問題があったり困ったりしたら、千博に必ず相談するだろうから。」
　ようやく身体が動くようになってきて、ベッドに腰掛けてショーツを履きだしたところ、何となく、何かを悩んでいた雰囲気の千博が意を決したように言った。
「ねえ、優希は男の子のときに橘さんとセックスしたんだよね。やっぱり僕に男の子のセックスとか、オナニーの方法や気持ちの良い射精のやり方を教えてくれない？」

第２３話　男の子のオナニーのやり方

「何で千博があたしと円との関係を知っているの？でも、勿論いいわよ。ただ男の子のオナニーは慣れてるけど、円とのセックスは１回しかしていないから、そんなに詳しいわけじゃないわ。勝美には聞かないの？」
「橘さんとの関係は、優稀を見ていれば何となくわかるよ。学校でも、確証はないけど疑っている女子は何名も居たよ。まあどこまで行ったかについては、手術の前に優稀に来たメールを偶然チラ見しちゃったからね・・・。よもや最後まで行っていたとは・・・。」
「人のメール、勝手に見ないでよ。」
「ごめん。偶然見えちゃったんだ。・・・悪気はなかったんだよ。だから僕だって、勝美とのことは全部包み隠さず話してるじゃないか。恋人とのセックスについて家族に話すなんて、どんだけ恥ずかしいか、優稀にもわかるだろう。」
「でも、あなたたちだってセックスしているじゃない。」
「僕と勝美は、１回だけオーラルセックスをしたけど、それは本能に基づいてやったようなもので、それだけだよ。勝美も経験なんて全然なかったし、そもそも勝美は真面目一本で奥手だったから、性別とは関係なく、二人ともセックスについては何も知らないんだ。男性が女性をリードする方法とか体位とか、よくわからないことだらけで、勝美からのメールにも、不安が綴られていた。僕もこれまでそっちの方面は、あまり興味がなかったし、あったとしても男性がどうするかなんて考えたこともなかったからね・・・。」
「でも、父さんにも言われたとおり、これからは僕がリードしなければならないし、勝美に痛い思いをさせちゃったら申し訳ない。恋人同士の初体験なんだから、二人とも良い思い出にしたいけど、何をどうしたら良いのか、実はかなり焦ってきてるんだ・・・。」

「そんなことなら、勝美の家でやるなんて言わずに、先生のお勧めどおり病院で、まずレクチャーを受けてからにすれば良かったのに・・・。パンフレットによれば、不安なら見守ってもらいながらというのも可能みたいじゃない。」
「相手が普通の人ならそれでもいいけど、やっぱり恋人同士の初体験で、お互いに初めてを捧げ合うんだよ。他人になんか見られたくないし、お仕着せも嫌じゃないか。優稀は橘さんと二人だけで恋人同士の想いを遂げたんだから、羨ましいよね。それに優稀は男女両方のセックスを経験できるんだろう。僕らは勝美の希望で、それはやらないことにしたから・・・。」
「それと、こっちのほうが大事なんだけど、オナニーのことを勝美に聞くのはさすがに申し訳なくてさ。何せ僕の我が儘で、勝美の男を奪っちゃったんだから、切り取られちゃったのに男の子のオナニーのこととか、男の子の快感のことを聞くのは残酷だよ。」
「それはあたしだって心に堪えるんだけど・・・。」
「ごめん、それはわかるけど、でも優稀が女性化したのは僕のせいじゃないだろ。こんなこと頼めるのは、双子同然に育った兄妹、いや姉弟しかいないんだから、是非教えて欲しいんだ。お願い。」
　千博はそう言って頭を下げた。まあ、言いたいことは何となくわかる。それに辛いことを聞いたというなら、僕だって導尿カテーテルの話を聞いたのは、千博のトラウマに塩を擦り込むような行為だったことを思い出した。なら、自分の知っている範囲に限られるけど、千博の疑問に最後までつきあってあげることにした。
「わかったわ。でもあたしもオナニーはいつもやっていたけど、男子としてのセックスは、たった1回しか経験がないんだからね。初体験しか経験のないのに、たいしたことは話せないわよ。それでも良いなら。」
「ありがとう。じゃ、まずは男の子のオナニーで、もっと気持ちよくなる方法を教えて?」
「そうね。まず着ているものを全部脱いで、そこに仰向けになって

くれる？」

　自分から申し出たからだろう。千博は何の躊躇（ちゅうちょ）もなく、着ている服をパパッと脱いだ。上は普通のランニングシャツだったけど、下は僕が前に履いていたのと同じ、グレーのトランクスだった。多分、僕用に買ってあった新品の予備だろう。前はテントを張っているという程ではないが、中身が入っているのが明確にわかる程度の半勃ちだ。千博はそれもスッと脱ぐと、僕のベッドに腰掛け、それから仰向けに横たわった。

　関係ないけど、千博は僕の前で脱ぐことに、ほとんど躊躇（ちゅうちょ）がない。もともと双子のような兄妹だったから、とか、僕が元は男子だったからとか、いろいろな理由はあるだろうけど、きっと、これはまだ自分のペニスだという意識がないんじゃないだろうか。

　でも、だとすると、もしかして榊君も僕のペニスをつけた身体を人前に晒（さら）すことに躊躇はないのかな？ちょっと気になるけど、これは僕も似たような感覚だし、もう自分のモノではないのだから、まあ良いか・・・。

　僕が一応、部屋の鍵を締めてくると、千博のペニスが次第に固さを増して、上向きになってきたところだった。本当は、まだ僕の心は男子のままなんで、他人のペニスを見たり触ったりするのは、ちょっと抵抗があったんだけど、これから僕もペニスを舐（な）めたり銜（くわ）えたりしなけりゃならない訳だし、そもそもペニスを挿れられてしまう身体になったんだから、まあ慣れるためには勝美のペニスなら良いかと考えた。

「あれっ。勝美はいつのまにズル剥けになっていたの？確か夏に見たときには、まだ先っちょがちょっとだけ剥けはじめた位で仮性包茎だった記憶があるけど・・・。」

　勝美のペニスなら、これまでに何度も見たことがある。今年に入ってからだけでも、一緒に立ちションしたこともあれば、春の修学旅行で一緒に風呂に入ったこともある。勝美が僕より少し大人で、既に先端がちょっと剥け始まっていたのは、今年の夏に勝美の家族

と我が家で一緒の家族旅行をして、海辺の温泉に行ったときにも見て知っていたし、僕と同じように小柄でも、僕のような華奢な体つきではなく、もう大人の身体になりつつあって、胸や肩の筋肉もがっちりしているし、脛毛も腋毛もかなり生えてきているのも知っていた。でも、こんなに見事なズル剥けになっていたとは知らなかった。いつの間にそうなったんだろう。

「うん、勝美は仮性包茎って言うのかな？勃起しても自分で剥かないと全部は剥けなかったよ。それは手術の前にオーラルセックスで知っていた。でも、手術の後で先生に説明されたのは、性転換手術のときに男子は全員、割礼して剥き出しにしちゃうんだって。」

「割礼って、確かオチンチンの皮を切り取って、亀頭を常に剥き出しにしちゃう手術のことよね。そうすると、性転換して男子になった子は、全員がズル剥けだということなのね。」

「うん。これは男女ともに一緒らしいんだけど、手術に際しては標準的な成人男性や成人女性の生殖器というのが規定されていて、サイズや発達具合、形状なんかが極端に外れている場合、特別な希望でもない限り、機械的な整形手術を施して標準的なものに揃えるようにするんだってさ。まあ、たいていの場合は小さすぎるものを標準サイズに揃えることが多くて、大きいほうはそのまま移植しちゃうことが多いらしいけどね。」

「で、普通それに該当するようなことは、めったにないんだけど、男子の包皮についてだけは、中学生の段階ではまだ包茎または仮性包茎の子が圧倒的に多くて、普段は勿論、完全勃起しても剥けていない子のほうがずっと多いんだってさ。それで移植時に成人男性の標準形になるように、例外なく割礼しちゃうんだって言っていた。」

そうか、僕のときの説明では、そんなことは何も言われなかったから、してみると僕に移植された榊君の女性器は、標準的なものだったということだろう。ああ、そう言えば胸については、それなりに詳細な説明をされたけど、あれは標準より大きかったからなのか。

でも、それなら榊君に移植された僕のペニスは、同じように割礼

されてズル剥けになっている筈だ。いつもオナニーのときは自分で剥いていたけど、普段の状態でも大人のように剥けているのを早く見てみたい気がして、何となく憂鬱だった明後日が、ちょっとだけ待ち遠しくなってきた・・・。

「わかったわ。じゃ、早速だけど、千博は手術後、何回オナニーしたの？きちんと射精はできているんでしょ？どんなふうにしているのかしら？」

「うん、まず病院で、傷がほとんど癒えた6日目の朝に先生がやってきて、テストをしてみましょうと言われた。このときは、先生が見ている前で、看護婦さんがペニスをマッサージしてくれて、まず勃起するかどうか、勃起したときにどうなるか、といったことをいろいろと計測したり、反応を調べたりした。それまでにも、何となくムラムラするような感覚は出ていたし、病室にはいわゆるエロ本の類が結構置いてあったので、そんなのを眺めたりしてはいたけど、何といってもカテーテルで大変な目にあって、とても元気になるような雰囲気じゃなかった。それが、ようやくおしっこをしてもしみなくなって、普通にトイレで立ちションできるようになったのが5日目の夕方で、それで6日目の朝にテストができるようになったところだから、本格的に勃起したのは、このときが最初だったんだ。」

「それで、看護婦さんがいろいろと調べたり計測したりしているうちに、ガチガチに完全勃起したんだけど、それを見ていた先生が、そろそろ良いみたいですね、と言って、それから看護婦さんがローションを使って、ペニスをゆっくり扱きだした。」

「先生の指示で、適当なエロ本を眺めながら、看護婦さんにペニスを扱いてもらうと、最初はなんだかくすぐったいような感じだったんだけど、次第に身体の中からじわじわと何かが登ってくるような感覚がして、何というか、極限までおしっこを我慢していたのが、もう無理というような感じになった。」

「それに合わせて、なのかはわからないんだけど、看護婦さんの手の速度が早くなったような気がしたと同時に、『出るっ！！』と思

った瞬間、射精した。本当に一瞬だけ、全身を貫くような快感があったけど、女の子のときの快感と比べると随分短くて、なんだか我慢していたおしっこを、やっとしたような感覚で終わっちゃった。・・・正直、えっ？これだけっ？という感じだった。」

「射精した精液を、看護婦さんがシャーレに全部受け止めて、見せてくれた。先生は、見たところ何も問題なさそうだと言いながら、検査に回すと言われた。これが全部で、看護婦さんがペニスを拭いてくれて、お終いだった。」

「これでちゃんと勃起も射精もできることが確認されて、その後の精液検査でも精子数とか運動機能とか奇形率とか、何も問題ないということがわかったので、それで６日目の夜に、翌日には退院して良いとの許可が出たんだ。」

「家に帰ってからは、一度だけ風呂上がりに自分でオナニーをしてみたんだけど、扱(しご)いてみてもあまり気持ちよくないんだ。結局、少し擦(こす)ってみて、途中でやめちゃった。だから、何となくムラムラして、射精したいという感覚はわかるんだけど、別にペニスがギンギンに勃起するというわけでもなく、かわいい女の子の写真を見ても、ちょっといいなと思う程度だし、エロ本を見ても、それでオナニーがしたくなる訳じゃないんだ。・・・僕って淡白なのかな。それとも脳がまだ男性化していないんだろうか。」

「だから、手術してから検査で一回だけ射精したけど、それ以外では射精はしていないんだ。男性の射精の快感って、こんなものなのかなっ、ていう程度で、実はまだよくわからないんだ。これで勝美とちゃんとできるのか、失敗しないかと不安なんだけど・・・。」

「ひとつには、まだ男性ホルモンが全身、特に脳に十分回っていないという可能性があるわね。でも、そういったことは病院で血液検査をやったときに調べている筈だから、多分、そっちじゃないと思うの。とすれば、あとは自分で刺激するテクニックと、頭の中でエッチなことを考える想像力でしょう？男の子のオナニーは、とにかくいやらしいことを想像するのが第一よ。」

第２４話　男の子の快感

「まずは、寸止めじらしをしてみましょう。千博はエロ本を持っているかしら？」

　千博が出してきたエロ本を見ると、前に僕が持っていたやつだった。芳恵さんがやったのかどうか知らないけど、こんなものまで交換されていたんだ。とすると、あの壁のピンナップ・ポスターは千博が持っていたものなんだろうか・・・。ま、とにかく、この本ならお勧めページは熟知しているから、その中でも特に過激なページを開かせておいて、指でワッカをつくって亀頭のカリの部分を中心に、裏筋とか鈴口のところなどを、ゆっくり扱（しご）いてみる。

　すると、千博が「ああっ、はぁっ。」と軽く喘（あえ）いで言った。

「それ、すっ、すごく気持ちいい。じっ、自分でやるのとっ、大違いだっ・・・。」

「扱（しご）き方というか、擦（こす）り方なんだけど、力任せにガシガシ扱（しご）くと、扱（しご）いているときはあまり快感がなくて、でもあっというまに射精してしまうのよ。そういうオナニーの仕方もあって、とにかく短時間で出すものを出してしまうという場合には、この方法を取るんだけど、これはムラムラを収めなきゃならないときや、勃起してしまって困るときに急いでオチンチンを抑えるためのオナニーの方法ね。瞬間的な快感はあるけど、あまり気持ちが良くはならないわ。だってこれ、男の子をいじめて、無理やり射精させるときによく使われたりするんだから。本人が嫌でも、普通の男の子はこれをされると、あっと言う間に射精してしまうのよ。」

「一方、時間があってオナニーを楽しもうというなら、ゆったりした気分で、ゆっくり何度も刺激と中断を繰り返して、性感を高めていく必要があるのよ。それは女の子でも一緒でしょ。千博だって経験があるんじゃないの。」

「うっ、うんっ。わっ、わかるっ。」

「まあ、いずれにせよ、こうやって手でワッカをつくってオチンチンをゆっくり扱(しご)くのが、男の子のオナニーの基本なの。これ以外でも、例えばオチンチンを何かに押しつける人も多いし、いろいろと変わった性癖を持った人もいるけど、男の子の性感帯は、基本全部オチンチンに集中していて、その中でも特に亀頭のカリの部分が一番感じるところなの。」

　そう言いながら、カリ首のあたりを集中的に刺激する。もう千博のペニスはビンビンのガチガチとなり、腹にくっつく勢いだ。

「あ、オナニーのときにオチンチンを何かに押しつける男の子は多いけど、これは千博が教えてくれた足ピンオナニーと一緒で、セックスのときにイキにくくなるから、あまりしないほうが良いみたい。でも、あたしもときどきやっていたけどね。お布団にうつ伏せになって、オチンチンを潰すように押しつけるの。あたしのオチンチンは、そのせいで少し右に曲がっていたのよ。」

「それから、カリの部分が一番感じるといったけど、その中でも特にオチンチンの裏側が敏感なの。だから、カリの下側で、この裏スジという部分から、鈴口と言われている尿道の出口——おしっこや精液が出てくるところね——が特に敏感で、ここを中心にやさしく触ると・・・。」

「あっ、ぁあっ、ぃひっ。」

「こんなふうに、快感も特に強いわ。」

　そう言いながら、千博が登り詰めてしまわないように、手加減する。

「あっ、ぁひっ、そっ、それっ。」

　刺激を少なくすると、千博がたまらず、ねだるように腰を浮かせて、ペニスをぐいぐいと前に突き出すしぐさで腰を振る。多分これは無意識にやっているんだろう。それで少し目先を変えて、亀頭への刺激はやめて玉袋をさわさわと撫でたり、睾丸の裏側、いわゆる蟻の門渡りという会陰の部分を押し込むようにマッサージする。こ

れは間接的ながら前立腺を刺激することになり、僕が去勢されたときに肛門からプラグを入れられて、直腸から前立腺を直接マッサージされたのと比べると刺激は少ないけど、それでも前立腺刺激による快感と射精反応が起きる場所なんだ。
「あっ、なっ、なんかっ、何か変っ、っつっ。」
千博は堪らなくなったのか、自分で乳首を弄りだした。ただ、男子でも乳首は多少感じるけど、性感帯はある程度開発しないと、くすぐったいだけのことが多い。勝美がこれまで乳首オナニーをしていればともかく、そんな経験がない勝美の乳首を移植されたなら、乳首はくすぐったいだけで、性感はあまりないんじゃないかな・・・。そう思っていると、やはり千博はものたりなくなってきたらしく、自分でペニスを握って扱きだした。
「だめよ！強く扱かないで、利き手の親指と人指し指、中指でカリの部分から裏筋、そして鈴口のあたりを、ゆっくりそっとさするように擦るのがいいわよ。それからもう片方の手は玉袋をさすったり、会陰を押し込むようにマッサージしたりして、性感を高めて行くの。オカズのエロ本は横に置いて、チラチラ見ていてね。できたら、その本にあるような、うんといやらしいことをしたりされたりするのを想像すると、なお良いわ。」
「あっ、あっ、あひっ、もっ、もうっ、いっ。」
睾丸がググッとせり上がり、千博がイッてしまいそうになったので、僕は千博の睾丸をぐっと握って下に引っ張った。こうされると、男の子は射精しそうになっていても、無理やり射精を押さえ込まれてしまい、射精できなくなる。
「あっ、あっ、ぃやっ、なっ、なぜっ、そんなっ。」
「簡単にイッちゃったらダメなのよ。ギリギリでイカないように、イク直前で止める、これを寸止めというんだけど、これを数回は繰り返してごらんなさい。最初は難しいけど、こうすると性感がどんどん高まってきて、最後は女性のオナニーに似たような強い快感が得られるのよ。」

「ぁっ、あっ、いっ、ぃひっ。」

千博が必死になって扱いて、イキそうになるのを横からタマを引っ張って無理やり止めさせる、というのを数回繰り返したら、我慢ができなくなったみたいだ。

「もっ、もうっ、たっ、頼むっ、頼むからっ、イカせてっ、もうっ、限界なのっ、ぁひっ、あっ、もうっ、お願いっ、ねっ、っくっ、あっ、またっ、あっ、あっ、イキたいっ、ぃひっ、ねっ、許してっ、ねっ。」

「もう少し我慢できないかしら。」

「ぃひっ、あっ、ぁあっ、イキたいっ、いっ、ぃいっ、まっ、またっ、あっ、ねっ、もうっ、だっ、だめっ、いやっ、ぁあっ、お願いっ、お願いだからっ、許してっ、イカせてっ、イカせてーっ、ぃひーっ。」

とうとう腰をガクガクと振りながら、泣きだしてしまった。

「もうちょっとだけ頑張りましょう。」

タマを引っ張る力を加減しながら、千博がペニスを扱(しご)くのを、敏感な亀頭先端やカリ首の部分ではなく、竿のほうが中心になるように誘導する。

「あっ、ああーっ、ぃひっ、ぁんっ、あぁんっ、いっ、イカせてっ、たっ、頼むから、ねっ、ねっ、もっ、もう、ぼっ、僕っ、僕っ、ぃひっ、いひーっ。」

「じゃあ、そろそろイッてごらん。」

タマを引っ張っていた手を離し、左手で会陰の部分をグッ、グッと押しこむようにマッサージしながら、右手は鈴口からカリの部分までを素早く擦(こす)った。

「いっ、っくっ、いくっ、いくーっ、いくーーっ。」

ペニスを思い切り前に突き出し、空中の一点をペニスの先で何度も突っ付くような動作をしながら、千博は全身をガクガクと痙攣させて射精を開始した。それはドピューッ、ドピューッという感じで6回も続き、ものすごい量の精液が天井まで届く射精だった。天井

に精液のしみができてしまったけど、女の子の部屋の天井には、あるまじきものだよね・・・。まあ、あとで拭いておけば良いか。
千博は眼を反転させて白目を見せており、口からは涎（よだれ）が泡となって吹き出していて、さっきの僕のメスイキにも負けない位の激しいイキ方だ。僕も男子のとき、ここまで激しくイッたことはなかったし、こんなに大量の精液を射精したこともなかった。勝美のペニスやキンタマが優秀なのかどうかわからないけど、これなら一発で妊娠させられるだろうと思えるような魅力的な射精で、僕も知らないうちに、あそこがまた濡れてしまっていた。
ベッドの上で白目を剥いてぐったりしている千博を横目に、取り敢えず飛び散った精液をタオルで拭き取ってから、千博が回復するまで少し待ってみた。
アへ顔で、眼の焦点があっていないようだった千博が、少し回復して、泳いでいた眼が僕をしっかり見られるようになったので、次に移ってセックスのときの体位を説明することにした。
「あたしが円と結ばれたときは、円が上になって、あたしの身体に跨がって自分から体重をかけてあたしのオチンチンで自分を貫いたの。だから、あたしから何かをすることはなかった。こんな感じね。」
ぐったりしていた千博に僕が跨がって、腰の位置を調整して示した。といっても、僕はさっきショーツを履いたから、勿論間違っても挿入してしまうことはない。千博のペニスは、まだ完全復活したわけではないにしても、もう半勃ち程度にはなってきて、さすがに勝美は優秀だと妙なところで感心した。
「これが騎乗位。女性が上になって、挿入を自分でコントロールできる体位。だけど、男性がリードして初体験するんだったら、やっぱり正常位かしら。これ結構大変で体力も使うのよ。その場合は、まず女性の股を開かせなけりゃ。」
そういって、今度は僕が仰向けになると、股をM字型に開いて股間を晒（さら）すような姿勢を取った。といっても、僕は下着を着けている

ので、あそこが見える訳ではない。
「多分、最初のとき女の子はすべてを男の子に委ねる筈だから、勝美の足をゆっくりこの形に持って行くのが良いわね。ベッドに寝て貰ってから、隣に横になって、おっぱいをやさしく撫でたり、乳首を吸ったり指先で刺激したり、あるいはクリトリスを弄(いじ)ったりして、次第に性感を高めるようにしてみて。千博は女の子だったんだから、しかも自分の身体についていたものなんだし、どこをどうすれば快感が強くなるかは判っているわよね。まずはそれで、勝美を徹底的に刺激して、できたら連続イキの状態にまで持っていければ、挿入時の痛みは殆どないと思うわ。」
「でも、あんな細いカテーテルでも気が狂いそうなほどの痛さだったんだ。僕は自分の膣に何かを入れた経験はないけど、こんな太いペニスを入れられたら、さぞかし痛いんじゃないかな。勝美に痛い思いをさせるのだけは、何としてでも回避しなくちゃ・・・。」
ようやく息が整ってきた千博は、僕のアドバイスを一生懸命に聞き、言われたとおりに身体を動かしながら聞いてきた。
「あたしもまだ経験はないけど、女性の膣は本来オチンチンを入れるようにできているんでしょう。それに赤ちゃんが出てくるほど伸びる場所じゃない。尿道とは訳が違うと思うわ。第一、慣れれば快感になるんだから、そこまで痛い筈はないでしょう。実際、円は自分から思い切り挿入したけど、ちょっと痛くて動きが止まっただけで、少ししたら痛みがなくなってきたらしくて、最後は膣の奥をツンツンされて軽くイッていたみたいよ。」
「だから、勝美が何度かイッたのを確認できたら、いよいよ挿入モードに入ると良いわ。男子のオチンチンは、こういうシーンでイメージというか想像するだけで、どんどん元気になってくる筈だから、目の前で好きな相手が喘(あえ)いでいる状況で立たないということは心配する必要がないと思うの。むしろ暴発しちゃわないように気をつけるほうが大事かな・・・。我慢できなくなったら、別のことを考えるといいみたいよ。・・・で、勝美が何度か絶頂して、千博もオチ

ンチンがガチガチになったなら・・・。」
　そう言って、千博の身体を、股を開いた僕の身体の上に誘導する。
「そう。体重は両手と膝で支えて、相手にあまり体重をかけないように。でも手はおっぱいを揉(も)んだり乳首を刺激したりする関係で、どうしても片手は使うだろうし、場合によると両手とも使うでしょう。口はキスしたり、乳首をなめたり吸ったりするだろうけど、どうしても体重を支えきれないときは、身体を相手の身体の上に重ねて、むしろ抱きつくような姿勢で腰骨のところを密着させるようにすると良いわ。」
「これ、結構大変だね。」
「ええ。かなり腕の力が必要で、しかも相手にあまり体重を感じさせないようにするのは、かなり慣れが必要みたいだから気をつけてね。ただ、まあ身体を密着させて、広い面積で全体的に体重を預けるような姿勢なら、そんなに苦しくはない筈よ。」
「それに、あなたたちはもうオーラルセックスをしているんだから、身体の向きが逆だとしても、やることに大きな差はないと思うの。あとは、オチンチンをどう挿入するかだけど、これも千博は元の自分の身体でどこに膣がついていたのかは知っているから、そんなに難しいことではないわよね。多分、オチンチンを下側から上に向けて身体ごと滑らせるように入れていくと、すんなり入るんじゃないかしら。でもこればかりは、あたしも自分でやった訳ではないから、よく判らないわ。」
「まあ、あまり最初からさまざまな体位を試すのもあれだから、それは自分達で楽しみながら開発すれば良いと思うけど、もし勝美が嫌がらないなら、バックでやるのは男性側にとって楽に挿入できる体位よ。これは女性が手と膝をついて四つん這いになって、男性が後からオチンチンを入れるもので、四つ足の動物の交尾の姿勢というか、猿がマウンティングする姿勢といったほうが判りやすいわね。」
「いずれにせよ、あそこが十分に濡れていればスムーズに入るだろ

うから、その前に勝美をできるだけイカせることね。それから根本まで挿入したら、痛みが収まるまで少し止まって待ってあげることと、その後もガンガンやらずにゆっくり動くことを心掛けることかしら。」

「セックスの基本は、とにかく相手のことを常に考え、相手が何を望んでいるか、何を嫌がっているか、それを先回りして実現してあげることだと思うわ。また快感はゆっくりじらすことが一番の近道なのよ。それは男子も女子も一緒なの。今、千博自身が身をもって知ったでしょう。要するに男子側が配慮してあげれば、案外なんとかなるものよ。お互い愛し合っている恋人なんだし、そんなに心配することもないわ。」

第２５話　初夜の準備（１）

「おはよう。」
「おはようございます。」
父さんや母さん達と朝の挨拶をしていると、母さんが耳元で「随分大きな声だったけど、どうだった？」と聞いてくる。
やっぱり聞こえてたんだ！！・・・と恥ずかしさで消え入りたくなるが、隣で千博は平気な顔をしている、と思ったら、歯ブラシにハンドクリームを絞り出している。千博も思いっきり動揺しているみたいだ。
真っ赤になって眼を泳がせている僕や、ハンドクリームで歯を磨こうとしている千博を見て、芳恵さんが父さんに聞こえる声で言った。
「そう言えば、優稀も千博も明日よね？交換初夜。」
「はい」
そう僕が答えると父さんがこう続ける。
「そうか、優稀。女は男を満足させる義務がある。最初は痛いだろうが我慢するんだぞ。そして慣れていなくとも、相手の男性が満足できるよう、精一杯努めるんだ。いいな？」
「それから千博、男になったからには、お前が主導権を握らなければいけない。わかるな？・・・お前もまだ慣れていないだろうから、最初から女をコントロールするのは難しかろうが、暴発してみっともない真似は晒（さら）すなよ。」
「「はい。」」
「優稀は芳恵と明日の為の服を誂（あつら）えてきなさい。男子は身なりに気を使う必要はないから、学生服でも何でも構わないが、女子にとっては、一生で一度の経験だ。下着から何から、恥ずかしくないように準備万端整えるように。」

「・・・はい。」
　家の財布の紐を握ってるのは芳恵さんのため、お小遣い以外で買い物をするには、芳恵さんに頼らなければいけない。どんな下着を選ばれるのか、かなり心配になったが、父さんにこう言われてしまっては母さんを連れて行けないし、男になった千博も下着売り場には連れて行けない。仕方なく返事はしたが、不安が頭を覆ってくる。
　だが、芳恵さんが意外な提案をした。
「あたしは男の子になった千博の服を買うのに付き合いたいから、博美さんが優稀に付き合ってあげて。そのほうが優稀も気をつかわなくて良いでしょ。お父さんが言うように、一生に一度の思い出になるんだから、お金に糸目をつけないでいいわよ。どうせ必要なものなんだしね。出かける前にお金を渡すから、久し振りに優稀と二人で買い物を楽しんでらっしゃい。女の子になると、揃えなけりゃならないものも多いわよね。あたしはあたしで、久し振りに千博と一緒にショッピングを楽しむわ。本当は女の子の千博と母娘でショッピングしたかったんだけど、男の子の千博とショッピングも悪くないわ。夕食は、適当なレストランを予約しておくから、そこで皆で落ち合いましょう。お父さんも、皆を連れて来て貰いましょう。あなた、それで良いわね？」
　芳恵さんがこう言ったからには、父さんとしても特に異論はないらしく、「なら、そうしなさい。私は後で義朗と環と晶を連れて、レストランに直行するから。」ということになった。
　出かける前に芳恵さんのところに行って、お礼を述べたら、微笑みながらこう言われた。
「勿論、優稀と一緒にショッピングするのも楽しみよ。次は私と一緒に行きましょうね。初体験も終わって、優稀が完全な女の子になったなら、もっともっといろいろなことを楽しみましょう。それまで、早く女の子に慣れて貰って、身体だけでなく心の中も、どこからどう見ても完全な女の子になってちょうだい。」
「はい、これからあたしが千博の分まで娘として頑張りますから、

母さんともども、仲良くして下さい。今日はありがとうございました。」

「本当にいい子だね。優稀は。羨ましいわ。やっぱり博美の血を引いてるんだな〜って思うもん。優稀だけじゃなく千博も素直で良い子に育ったのも、博美の性格よね。この間は辛い思いをさせてしまって、ごめんなさいね。あのときは千博がとうとう男子になっちゃうことになって、博美が羨ましかったので、ついあんな憎まれ口をきいちゃったのよ・・・。ううん、あのときだけじゃない、これまでずっと、博美には常に嫉妬していたの。美貌も体型も、子供との関係もそう。あたしの取り柄は頭と体力だけ。女性としての魅力や、母親としての魅力は、博美にはまったく敵(かな)わないわ。グラマーで美人で、性格もそう。・・・それは今でもそうよ。でも、これからは優稀が娘になってくれるのなら、もうあんなことはしないわ。その代わり言ったからには千博の分まで娘として可愛がってあげるからそのつもりでいなさいよ？」

「はい。」

　ということで、思いがけず、芳恵さんとの関係がずいぶん改善されたような気がした。あとは僕が芳恵さんの娘として、芳恵さんの喜ぶような行動を取れば、もう母さんにあたるようなことも減ってくるに違いない。やっぱり家族内での悪口は、本心でないにしても人を傷つけるから、何とかしたいよね。

　その後、僕と母さん、それに千博と芳恵さんの四人で揃って出かけた。この組み合わせで一緒に出かけることなんて、これまで一度もなかった気がする。電車の中では、母さんと芳恵さんが、何となくぎこちない雰囲気で相談しながら、スマホでどこかのレストランを予約していた。僕と千博は、それぞれどんな服を買うかとか、下着を選ぶときはどこの店が良いかとか、男の子、女の子が好むアクセサリーだの小物だのを売っている店だのを教え合ったりして、電車で３駅の超大型ショッピングセンターにやってきた。１０時を少し過ぎたところで、ちょうど開店したところだった。

「じゃあ、取り敢えずここで二手に分かれましょう。お昼はそれぞれで好きに食べて、夕食はさっき予約したレストランが、このショッピングセンターの隣にあるから、そこで7時に集合ね。父さんたちにはメールしておいたから、そこに合流してくる筈よ。」

二手に分かれてまず、母さんとともに下着を買うことにした。今日の一番の目的だし、そもそも、ショーツは千博用に買ってあった新品を貰い受けて履いているが、ブラは母さんのものを無理やり着けているので、まず一番に買わなければならない。

「とにかくサイズを測って貰わなくちゃね。・・・あっ、すみません、この子の胸のサイズを測って頂けるかしら？」

奥のフィッティング・ルームで着ているものを脱いで、母さんのブラも外すと、店員さんが手慣れた様子でてきぱきと測りだした。

「まだ中学生でいらっしゃいますか？ずいぶん立派な胸ですね。これだとDカップまたはEカップの中から選ぶのがよろしいかと思います。」

僕はチビで童顔だから小学生のようにも見える筈だけど、この胸のサイズだと、大人向けというか、成熟した大人に似合うデザインのものが多く、店員さんが選んでくれたのは、わりとセクシーなものだった。それで、何となく僕が躊躇（ちゅうちょ）していたら、母さんが助け船を出してくれた。

「まだ新米女子だしね・・・。それに相手は女の子だったんだから、無理して頑張っても痛く見えちゃうんじゃない。だったらシンプルに清純派のほうが、まだ格好がつくわよ・・・・・・。」

そういって母さんが探したのは、かすかにベージュとかピンクがかっている白のもので、ブラとショーツが上下お揃いになっていて、ちょっとだけレースと刺繍があって、少し華やかにも見えるものだった。可愛い雰囲気の中だが大人っぽいところがあって、それでいてあまりセクシーな雰囲気はない、というものを何種類か見繕って、カゴに放り込むと、早速試着をしてみた。

「それにしても立派なサイズね。今でDとかEだったら、将来はGかHになるんじゃないかしら。あたしが最初はCで、今がFだから、優稀はもしかするとHを超えちゃうかもしれないわね。巨乳で有名なタレントとかモデルがそのくらいの筈よ。女性の憧れの的で、男性にも絶対に注目されるわね。」
そんなに注目されなくても良いし、そもそも胸が大きいと肩が凝るし動くにも邪魔で、本人としてはあまり良いことが思いつかない。ただ、男子から見たとき、大きなおっぱいを揉んでみたいという感覚は、よくわかる。今は少しもそんな気にならないけど、少なくともかつての僕は、そう考えていたし、円のおっぱい（彼女はCカップだった）は立派でいいなと思っていたから、まあ良い方に考えることとしよう。
結局、Dカップのものを中心に、すぐ大きくなるかもしれないという母さんの助言を入れてEカップのものも少し混ぜて、上下セットのものを４つ、それと普段使いのもので、スポーツブラのような気軽に着けられるものを4枚と、やはり普段使いのショーツを１０枚ほど購入した。これだけで、大枚１０枚近くが消えてしまった。芳恵さんからはいくら貰ってきたのか、僕が気にしてもしょうがないけど・・・。それにしても、女性の下着は、なんでこんなに高いんだろう。男性の下着は、トランクスでもブリーフでも、3枚でいくら、というのが沢山あって、そんなのしか買ったことはなかったのに・・・。
「あとは、生理用品も買っておかなくちゃね。サニタリーショーツはあそこかしら。」
僕はまだ生理が来ていない。でも、先生が話していたとおり、まもなく来るのは確実だから、準備しておく必要がある。いろいろと知識としては勉強したけど、こういったものは実際に使っている人の意見が一番大事だ。
「サニタリーショーツも試着してみなさい。身体にあっていないと、漏れたりしたら大変だから。」

そんなことがあるんだろうか。とにかくここは母さんの助言に従うしかない。
結局、下着を買い揃えるだけで、午前中いっぱいかかってしまった。今日は夜にレストランで外食するから、昼は軽くしようということになり、セルフサービスのフードコートで簡単に済ませることにした。母さんとこういうところに来るのは、久し振りだ。ただ、千博と違って僕には妹と弟がいるから、母さんと四人で来たことは、何度かある。そういえば、そういうときのお金はどうしていたんだだろう。母さんも芳恵さんにお小遣いでも貰っていたんだろうか・・・。それとも父さんから秘密のボーナスを貰ったとか？へそくりかも？？

いつもは環や晶の希望で、ハンバーガーとかラーメンとかなんだけど、今日は母さんと二人だけだから、スターウォーズコーヒーでサンドイッチとホットモカを頼んだ。
「どう？少しは女の子に慣れてきた？」
「ええ。何とか言葉だけは直そうと努力しているの。でも意識のほうは、まだまだみたい。頭の中の考え方というか、視点が男の子なんだと思う。あ、でもトイレとかに入るとき、迷わなくなったし、女性に混じっていても、そんなに違和感はなくなってきたかしら。服については、かなり慣れたと思うわ。」
「よかった。その様子だと、男の子に未練があって、めそめそするような感じじゃないわね。大きな胸も、そんなに嫌そうじゃないし。」
「それに女の子の身体って、気持ちいいでしょ？あたしも最初はびっくりしたから。」
「ええ、手術までは、オチンチンを切り取られちゃうことがどうしても納得できなかったけど、完全な女性になった今は、女性も楽しいことがいっぱいありそうだって、そう思えるようになってきたの。母さんが前に話してくれたように、幸せって、男女関係なく、どこにでもあるんじゃないか、それを是非見つけてやろうって、そう考

えるようにしているのよ。それに女の子の身体って、本当に快感が凄いのね。あっ、でも、大きすぎる胸は余計かもしれないわ。あたし、男の子のときは、大きなオチンチンに憧れたこともあったし、男子なら誰でも大きなおっぱいを揉んでみたいと夢見るから、女の子は大きな胸に憧れるものだと勝手に思っていたけど、やっぱり身の丈にあったサイズがあるものなのよね。」

「よかった、優稀が前向きな性格で。あたしはそう考えられるようになるまで、1年以上かかったわ。高校に入学するときに北海道から転校してきて、高校で父さんに見初(みそ)められて、高校卒業と同時に父さんの第二妻となったんだけど、父さんのことを好きになるまでは、ずっと自分が自分じゃないというか、どう生きたら良いのか、わからなかったの。」

「今だから言えることだけど、本当に一時は自殺しようかと考えたこともあったのよ。笑い話みたいだけど、あのときは本当に辛かったわ。だからお父さんと知り合えて、あたしは心が救われたの。今でも覚えている。お父さんとはじめて結ばれた日のことを。・・・あたしを女性として全力で愛してくれたお父さん・・・。こんなあたしでも好きになってくれる男性ができたことが嬉しくて、思わず泣いてしまったの。お父さんは何か誤解していたような気もするけどね・・・。」

「だから、優稀がこれから女性としての人生を楽しんでくれるようになることが、母さんの最大の願いよ。辛いこと、悲しいことがあっても、後を向いてしまってはダメ。優稀がこんなに早く立ち直れるとは思わなかったわ。是非、身近にある幸せを見つけて、それを確実に掴むことができるよう、母さんも常に応援しているからね。これで母さんも一安心よ。」

第２６話　初夜の準備（２）（前書き）

同一タイトルが続くので、連投します。
次の投稿は、また来週末になります。

第２６話　初夜の準備（２）

　昼を軽く済ませた僕たちは、午後はずっと僕の服とかバッグとかアクセサリーとかを見て回った。服は普段着なら千博に貰ったので、ほとんど間に合うけど、いわゆるフォーマルとか、明日のような特別なときに着るものは、さすがにきちんとしたものを誂えたほうが良いというので、そういったブランド服などを見て回り、濃紺の女性のリクルートスーツのようなものをひとつ、ベージュのワンピース型のものをひとつ、グレーのパンツとセットになったスーツをひとつ、それに明日のためにといって、夜のパーティーにも着ていけるような、濃い赤のロングドレスのようなものをひとつ、それに時節柄ウールのしっかりしたコートを１着と、都合５着購入した。いったい幾ら掛かったのか、値札は見ないようにしているんだけど、母さんが次々と購入するので、空恐ろしくなった。
「大丈夫、お金は十分に預かってきたわ。芳恵さんもだけど、これはお父さんからの言いつけなの。自分の娘の晴れ姿なんだから、きちんとしなさいってね。全部で来年の成人式の晴れ着を買うのと同じくらいの予算を貰っているのよ。お父さんはさすがにいなほＵＡフィナンシャルグループの重役だけあって、お金には不自由しないから。」
　晴れ着って、確かレンタルでも莫大な金額だった記憶があるけど、そんなにあるのか。それに来月にはお正月と成人式もあって、そこでは本当に晴れ着が必要になる。本来、僕が女性化しなければ、男性化した千博と二人で、お金がかからない筈だったのにと思うと、ちょっと申し訳なかった。
　結局、下着に洋服、バッグ（これも高かったのに、服に合わせてハンドバックとかポーチとか、いくつも買って貰った）、靴、それにアクセサリーも必要と言われて、ネックレスとブローチ、それに

髪飾りにイヤリングといったものをいくつか見繕った。といっても、こっちはまだ学生なので、本物の宝石がついているものではなく、イミテーションのガラス製にしたけど・・・。

　服や雑貨をひととおり購入したら、制服をどうするかという話になった。本当は僕の胸が巨乳になってしまったので、制服も新調すべきなんだろうけど、中学の制服はあと３カ月しか着ないので、もったいないということになり、ブラウスだけを新しいものにして、あとは千博からのお下がりを、少し手直しして誤魔化すことにした。ウエストは単に出せばよいけど、胸の部分はどうするつもりだろう。ただ、僕は千博より背が低いので、その分少し余裕があるから、何とかなりますと言われた。何をどうするのかは、制服を扱っている店の人に任せるしかなかったけど・・・。まあ、どうせ学校ではずっと体操着のジャージだからね。

　そんなこんなであっと言う間に夕方になり、最後は生理用品（母さんのお勧めで、最初はナプキンタイプを何種類か選んだのと、明日の交換初夜の後は、精液が垂れてくる可能性があるから二重にしたほうが良いと言われて、タンポンタイプも小さいのをひとつ選んだ）を購入し、母さんと二人で、もうこれ以上はとても持てないというまで、いろいろなものを買い込んで、レストランに向かったのは１８時半頃だった。

　レストランには、もう芳恵さんと千博が到着していて、奥の予約した部屋で待っていた。そこへ、僕達が着いて少しすると、父さんが義朗兄さん、環と晶を連れてやってきた。我が家は八人家族なので、大きなテーブルに父さんを中心に家族全員で着席した。今夜は、どうやら僕と千博が主役ということらしくて、父さんの向かい側に僕達二人が座ることとなった。

「では優稀、それから千博、今日はお前たちの新たなる門出と、成人を祝うこととしよう。明日の初夜をもって、二人の性別交換に関する一連のイベントが全部終了する。普通の人の成人時期は、一月の成人式と決まっているのだが、性別交換をした者については、法

律の特例で、交換初夜の終了をもって成人とすることになっている。
」

「つまり、お前たちは普通の人より１カ月早く、明日の初夜の終了をもって、法律的にも成人として認められることになる。これまでは未成年として子供扱いであり、何をするにも保護者である私の最終確認が必要だったが、明日からは成人として、私に関係なく、自分の責任においてあらゆる法律行為ができるようになる。酒もタバコも許可されるし、選挙権も結婚も然り(しか)だ。厳密には一日早いが、二人のグラスにもワインが注いであるだろう。」

「だから、普通ならば1月の成人式の日にするべきお祝いを、今日ここでやろうという訳だ。これまで１５年間にわたり、お前たち二人を育ててきたが、立派に育ってくれて本当に嬉しい。たまたま、二人の性別は入れ代わったが、そんなことは些細なことだ。男だろうと女だろうと、二人とも私の子供であることに変わりはない。」

「世間の風潮というか、お前達も大きく誤解しているかもしれないが、父さんは決して男尊女卑主義者ではない。ただ、男性と女性は、まったく違う役割があり、社会における位置付けが異なるということだ。これはどうしようもない性差であり、それをもって男性が偉いとか上だということではない。我が家のルールも然り(しか)。これは社会における男性と女性の違いを表現したに過ぎず、例えば男性が先にやる、といったものは、単にそういう順番になっているだけであって、先にやるから偉いということは何もないし、女性が後だからといって身分が下だということもない。誤解され易いところではあるが、二人とも、性別が変わっても、この事実だけはしっかりと認識しておきなさい。」

「「はい！」」

「明日、晴れて成人を迎えたお前達は、これからは自分の努力と責任において、自分の人生を自由に切り開いて欲しい。どんな人生をどう送るのも、自分の勝手だ。父さんや母さんたちは、全力で応援するが、あくまで応援であって、決断し、実行するのは自分だとい

うことを、心に刻んで欲しい。」
「もし困ったときには、援助が必要ならば精一杯の支援をするし、悩んだり迷ったりしたら、いつでもどんなことでも相談に乗るが、父さんや母さんたちから主体的に何かをすることはない。親といえども、成人した子供の世話を焼きすぎるのはおせっかいになってしまう。厳しく聞こえるかもしれないが、親離れ、子離れをするときが来たのだ。いいな。」
「「はい！！」」
「では、乾杯することにしよう。二人とも成人おめでとう。」
「「「「おめでとうございます。」」」」
「「ありがとうございます。」」
レストランは、ちょっとだけフォーマルな、でもそんなに肩肘の張らないイタリアンで、一応コース料理を注文していたので、前菜から順番に出始めた。ここは人気のお店で、さすがにどれも美味しいが、前菜に出てきたシーフードをマリネしたものは、サラダととってもよく合っていて、絶品だった。今日の今日で、よく予約がとれたな、と感心していると、芳恵さんが僕に対して話しかけてきた。
「優稀もすっかり元気になって、女の子が板についてきたんじゃない？よかったわね。」
「ありがとうございます。」
「赤いカードを貰った日の夜は、死にそうな顔をしていて見ていられなかったわよね。普段泣かないあなたが、あんなに大泣きするんで、私もちょっと心配していたのよ。優稀のことは、これまで何となく邪険にしてしまったことが多いけど、一緒に住んでれば愛着は湧いてくるものだし、千博と一緒に育ってきて、小さい頃から見てきてるからね。」
「ご心配をおかけしました。」
「あの日も厭味（いやみ）なことを言っちゃったと反省しているのよ。だって、千博が男の子になっちゃって、女の子が羨（うらや）ましかったんだもの。」
前に母さんが芳恵さんのことを、「いつもああ言ってるけど悪い

人じゃないから責めちゃダメだよ？」って言っていたのを思い出す。きっと母さんには判っていたのだろう。僕もこの二週間で、芳恵さんの違った一面を理解したような気がした。
　だから、芳恵さんに再度お願いする。
「今朝も話しましたが、これからは千博に代わって僕が娘として振る舞います。だから、ますます可愛がって下さい。」
「本当にいい子だね。優稀は。博美が羨ましいわ。こんなに可愛くて、素直で、他人に気配りができる性格なんだから。しかも、その優稀が女性化したのよ。理想的な娘じゃない。あたしのときは、義朗が男子でちっとも構ってあげられなかったし、千博もあたしのことを避けていると思ったら、とうとう男子になっちゃったんで、なんだかものすごく不公平に思えて博美に嫉妬していたんだけど、あたしにもこんなに素直で可愛い娘ができたんだから、もう嫉妬するのは止める。そしてこれからうんと可愛がってあげる。父さんはああ言ったけど、成人したからといって親子は親子よ。同じ家族の一員でしょ。鬱陶(うっとう)しいかもしれないけど、思いっきり面倒見てあげるから、千博みたいに嫌がったり逃げたりしないでね？」
　そういって僕と母さんの二人を見ながら微笑んだ。僕と母さんは、軽く会釈をして、母さんが「環と晶も是非よろしくお願いします。」と頼んでいた。
　これで母さんと芳恵さんの間にあったわだかまりが、完全に解消したということではないんだろうけど、少なくとも家庭内でのギスギスした雰囲気は、ずっと減るに違いない。僕の女性化は、こんなところまで影響を及ぼしたのかと考えると、それだけでも決して無駄じゃなかったという気がして嬉しかった。

――――――――――――――――

――――――――――――――

　こんなに和(なご)やかで、家族全員で楽しい食事は、もう何カ月ぶりだ

ろう。特に僕の意識としては、女性化が決まってからこれまでは、まるでお通夜のような日々が続いていたことを考えると、本当にこれが僕の新しい人生の門出になるんだろうと思った。何となく憂鬱(ゆううつ)だった明日のことも、逆に新しい経験にチャレンジするんだというドキドキワクワク感が高まってきて、何だかジェットコースターに乗る列に並んだような気分になってきた。それとも初めて飲んだお酒のせいで、気分が高揚しているからだろうか？千博も横で、赤い顔をしてケラケラ笑っている。こんな陽気な千博を見たのも久し振りだ。千博って笑い上戸だったのか。

結局、デザートまで全部終わったのは9時半過ぎで、それから僕達の膨大な買い物（千博達も結構な量の買い物をしていた。きっと今日一日で、我が杉田家は父さんの給料の1カ月分以上を優に使った気がする。）を皆で手分けして持ち、タクシー2台で帰宅したのは10時を回っていた。

帰宅すると、またしても一番風呂に入るよう、父さんから命令された。「えっ？またっ？？」と思っていたら、なんと母さんと芳恵さんが、二人して脱衣室についてきた。そして、わけが判らないうちに、あっと言う間に全部脱がされ、風呂で全身をピカピカになるまで磨き上げられた。髪の毛をシャンプーしてトリートメントしたり、襟足などの産毛を処理したりと、二人がかりで徹底的にボディケアをされて、明日に備えるんだと言われた。むだ毛の処理もばっちりされてしまった。といっても、腋毛は手術のとき永久脱毛されているので、そっちではなく、去勢から一ヶ月たってチラホラ生えてきたVIOゾーンを毛抜きで整えられて、死ぬほど恥ずかしかった。あれは絶対、女の子になった僕の身体を隅々までチェックしたかったんだろう。なにせ自分でもまだよく見ていないあそこを、思い切り広げて中までじっくり見られてしまったんだから、もうこれ以上、何も恥ずかしがることはなくなったと開き直るしかなかった。多分、いや絶対、二人して僕の処女膜をばっちり確認したに違いない。この分だと、明日、交換初夜を済ませて帰って来たら、また二

人掛かりで僕の処女膜が破られたところを思いっきり広げて確認されてしまうだろう。（そんなに見たければ、もう明日は僕から二人の前で、あそこをクパァと広げて見せてやるさ・・・。）
最後にアロマオイルを全身に塗り込められて、美顔パックとか言うマスクのようなものを顔に張り付けられ、今夜はこれで寝なさいとベッドに連れて行かれた。まるで着せ替え人情だが、芳恵さんと母さんの二人がかりなので、文句も言えないし逆らうことも出来ない。女性の初夜って大変なんだなと、改めて思った。まあ、美顔パックは、母さんも芳恵さんも、ときどきやっていたから、そういうものがあるのは知っていた。けど、これは明日、お化粧するときに違いが出るんだと言われても、そもそもお化粧をしたことのない僕には縁のない世界だった。
女性って、こういうところが面倒で大変なんだなーって思いながら、お酒も入って疲れていた僕はそのまま寝てしまった。

第２７話　いよいよ

朝、いつもどおり６時に起床すると、まず昨日の美顔パックをペリペリと剥がしてから、普通に洗面をする。そして、まだパジャマがわりのジャージのままリビングに降りて行ったら、もう千博は先に朝食を食べていた。

「おはようございます。」

「あ、おはよう。昨日の夜は重かったから、朝は軽くトーストで良いかしら。」

芳恵さんが聞いてくる。千博もトーストにジャムを塗ってたから、僕もそうすることにした。

「急いで食べてちょうだい。出かける準備を整えなければならないからね。」

今度は母さんが、コーヒーを淹れながら不気味なことを言う。病院で指定された時間は１０時だから、９時頃に出かけるとしても、まだ３時間近くあるのに、何をそんなにかかるんだろう。トーストの朝食なんか、せいぜい１５分もあれば食べ終わっちゃうし、母さんや芳恵さんが出かけるとき、確かにお化粧とか服装の選択で父さんよりも時間がかかっているのは知っているけど、それでも１５分か２０分位で支度を終えて出かけている。いくら僕が慣れていないとしても、１時間あれば十分じゃないのかな。それとも初夜に臨む特別な準備でもあるんだろうか。でも昨晩、風呂であれだけ念入りに身体のお手入れをされたんだから、もう僕としては十分だけど・・・。

テーブルに着いて母さんが淹れてくれたコーヒーを飲みながら、トーストをとってふと千博を見ると、何だか随分緊張しているようだ。普通は女性である僕のほうが緊張するのかと思ったけど、千博は責任感という重圧に潰されそうになっている。逆に僕は、あまり

気にしていない。まあ榊君に任せておけば大丈夫だろうと、のほほんとしている。
「優稀は食べ終わったら歯を磨いて、洗面所に来てちょうだい。お化粧をするから。」
　いよいよ、僕も化粧デビューだ。まあ女子の中には中学生でも、結構ゴテゴテの厚化粧をしている奴もいたから、こういう場合には多少の化粧をするんだろうとは思っていた。でも、あまりゴテゴテの厚化粧は嫌だな。よくわからないけど・・・。
「千博は何時に行くの？」
「勝美からは、11時頃に来て欲しいってメールが来ている。で、今日のお昼は勝美と勝美のお母さんが、手料理をご馳走してくれるんだって。」
　ん？・・・何か違和感がある。
「それって、どういうスケジュールなの？」
「勝美のお父さんが海外からわざわざ戻って来ているんだって。それで、まずは11時から勝美の家族に挨拶して、そのままお昼を食べて、肝心のことは午後みたいだ。」
　なるほど。千博の緊張の原因はそれか。要するに勝美のご両親に、「お嬢さんを下さい！！」をやらなければならないのか。しかも、今日はセックスするために訪問するんだから、そのセリフは「お嬢さんを（やらせて）下さい！」または「お嬢さん（の処女）を下さい！！」という意味だ。そんなことを相手のお父さんに話さなければならないなんて、それは緊張するだろう。男の子になったばかりの千博には、かなり高いハードルだ。
「そうなの？でも千博はもう勝美のご両親には何度か会っているじゃない。」
「お母さんにはね。でもお父さんは、普段海外に行っているので、これまでに1度だけご挨拶したことがあるだけだし、あのときは僕が女子で勝美は男子だったから、別にどうということもなかった。けど、今度は男子の立場で、父親に一人娘とお付き合いの許可を、

それもこれからやっちゃいますという話をするんだ。どんな顔をして、何をどう話していいのやら・・・。一昨日、急に勝美からのメールで知って、途方に暮れているんだ。こんなことになるなら、優稀が言っていたように病院にしとけば良かったかな・・・。」

　まあ、そうなんだろうな。でも、それは世の中の多くの男性が、結婚するときに一度は通る試練なんだ。相手の家族は歓迎してくれている筈だし、何より勝美がついてくれて？いるんだから、頑張るしかないだろう。途方に暮れているというより、重圧に潰されそうになっている千博に、僕からかける言葉も特に思いつかない。

「まあ、緊張するのはわかるけど、頑張るしかないわね。いっそ、結婚の申し込みでもしちゃったらどう？どうせ中学卒業したら結婚するんでしょ？テレビドラマでは、真剣な態度で『結婚させて下さい、お嬢さんを必ず幸せにします。』と言うのが王道のパターンらしいから。」

「うん、それは考えている。ただ、勝美の家は・・・。」

　何故か、言葉を濁した。何か、引っかかることでもあるのかな？まあ、僕が気に病んでも仕方がないだろう。と、そんなことを考えながら、朝食を終えて立ち上がった。

「じゃ、あたしは準備に取りかかるから、頑張ってね。」

「うん。ありがとう。優稀も頑張ってね。」

　ということで、僕は再度歯を磨くと、洗面所に向かった。

「さ、じゃあそこの椅子に座って。博美は着替えを準備してちょうだい。優稀はお化粧するのは初めてでしょ。あたしが全部やって上げる。今朝は時間がないから解説とかは一切しないから。冬休みになったら、最低限の外出用メーク位はできるように覚えてね。じゃあ、まずは髪形から行こうかしら。といっても、優稀はまだそんなに髪が長くないから、ごく軽く整える程度で良いわね。」

　そういって、ヘアスプレーをさっとかけられ、髪を梳（と）かしながらドライヤーで整えてくれる。そこに母さんが新品の下着から何から、服一式を持ってきた。

「ドライヤーしながらで良いから、まずは下着から着替えて。」
そういって、母さんに着ているものを全部脱がされ、スッポンポンにされた。恥ずかしがる暇もなく、まずはショーツを履かされ、お揃いのブラに腕を通す。
「あ、丁度良いじゃない。似合っているわよ。すぐに男性に脱がされるにしても、やっぱりかわいい雰囲気は大事よね。胸はこうして、少し前かがみになった状態でカップの中に落とし込むようにして寄せながら入れると、形よくぴったりはまるのよ。」
母さんが、ブラの着け方を指南してくれる。今日、終わったら自分一人で着られるようにしておかないと、困ることになる。あ、それで気がついたんだけど、終わって出てくるとき、お化粧はどうするんだろう。僕は一人では何もできないし、そもそも何も持ってはいかないんだよね?
そんなことを考えていたら、お化粧を担当している芳恵さんが話しだした。
「いいこと。お化粧はごく簡単にファウンデーションで肌を軽く整えているだけで、それ以上のことはしていないから、終わっても何かをする必要はないわ。ただしシャワーを浴びるようなことになったら、身体だけをさっと流して、頭や顔には水をかけないようにしなさい。あと、ごく薄い口紅をさしておくから、それだけを持っていって、終わったらそこだけ塗り直しなさい。これはリップクリームを塗るのと同じ要領で、鏡を見ながらやれば簡単だから、今もここでちょっと練習していくと良いかもね。」
などと言いながら、てきぱきと髪をセットし、顔にまず乳液をすり込むと、その上からパフを使って粉のようなものを薄く塗ってくれる。母さんは母さんで、持ってきた服をてきぱきと僕に着せてくる。ただ、これは着直すときにまごつかないように、ボタンを留めたりホックを留めたりするのは、基本的に僕にやらせるようにしているみたいだ。
バタバタしてテキパキと進んでいるように感じたけど、やっぱり

はじめてのことばかりで僕も慣れていないし、母さんや芳恵さんも勝手が違うせいか、なんだかんだで時間はあっと言う間に過ぎていく。アクセサリー類まで着けてひととおり終わったのは、８時半を随分過ぎていて、あと１０分位で出かけなければならない時間になっていた。

母さんが見繕った小さなハンドバック（これもブランド品で高かった）に、取り敢えずお財布やらハンカチやら口紅やらを詰め込み、下ろしたてのパンプスを履いて手術した病院に向かった。特にハイヒールという訳じゃないけど（僕はまだ慣れていないので、ハイヒールなど履いたら絶対に転んでしまう）、でも少しヒールが高くなっているだけでも、チビの僕にとっては身長が少し高くなったようで、ちょっと嬉しい。

病院に着くと、すぐに特別室というところに通された。奥に寝室があるらしく、その手前のリビングのようなところで、ソファセットに榊君がもう着席していた。

「おはよう。もう新しい身体には馴染(なじ)んだ？」

「ええ、まあ何とか・・・。」

そんな挨拶をしているところへ、執刀医の西郷先生、井上先生、それにもう二人が揃ってやってきた。

「おはようございます。あれから2週間たったけど、もう慣れたかしら？私と井上先生は知っているわよね。こちらはカウンセラーで精神科医の向井先生と中山先生です。二人とも本来の御専門は性同一性障害なんだけど、性転換者のカウンセリングにも沢山の経験をお持ちなの。二人がサポートしてくれるので、大船に乗った気で大丈夫ですよ。」

「はじめまして。向井です。本日は中山先生と一緒に、お手伝いさせて頂きます。」

「さっそくだけど、榊君も杉田さんも、退院した後で何か困ったこととか不具合あるいは不便なことはなかったかしら。トイレはもう

大丈夫だろうし、それぞれの新しい性別での生活も一通り経験したわよね。それと二人とももうオナニーはしたでしょ。どうだった？」
「想像はしていましたが、男性の身体はやはり定期的に射精しないと、ムラムラして勃起が収まらなくなってしまうということが、こんなにやっかいだとは思いませんでした。」
「そうね。それが良く言われる男子の生理というか性衝動です。これは男子の身体のメカニズムに基づくもので、健康な若い男子ならば、概ね72時間で精嚢が精子で満タンになってしまうものなの。そうなったら、もう射精しないと収まらないわ。一時的に紛らわせることに成功したとしても、結局は射精しないとダメなの。だから健康な男子は、概ね3日に1回は必ずセックスまたはオナニーで射精をしないと夢精してしまうのです。」
「ま、今はいろいろと練習というか訓練する期間だろうけど、そういう訳だから、中学を卒業したら、一刻も早く結婚するなりパートナーを見つけて、子供をつくって欲しいの。それが政府の奨励する政策だから、できるだけ協力してちょうだい。」
「で、杉田さんはどうだったの？」
「あたしは女性の性感が、こんなに良いとは思いませんでした。男性のときはエッチな本とかネットとかで、女性の性感は男性の何倍も高いなんて書いてあっても、想像を働かせるしか方法がなかったけど、自分で試してみて、失神するほどの快感って本当にあって、しかもそれが毎回のように楽しめるんだって判ったときは、結構驚きました。それと男性と違って女性は、一度イクと、その後、どんどんイクというか、イキっぱなしになるというのが、これも本やネットに書いてあるのは誇張かと思っていたのに、実際にそうなることがわかりました。性感は男性も強いこともあるけど、男性の場合は一度イクと、その後に必ず賢者タイムがあるのに、女性の性感では、このイキっぽなしというのが驚きました。」
「そうね。女性は一度イキだすと、連続で絶頂を迎えて止まらなく

なってしまう。そうなると僅かな刺激、ちょっと背中とか腕とかを触られただけでも、また何度でも激しくイクようになる。榊君はもと女性だから、この辺りの感覚はよく知っているわよね。だからあとで挿入するときには、必ず杉田さんを連続イキの状態にまで持って行ってあげて、その状態でペニスを挿入するようにすると良いわよ。ま、お互いもともとは自分の身体に付いていたものだから、扱いもわかっているだろうし、そこはあまり心配しなくても良いかしら？」

「それに、話によると二人とも別の相手らしいけど元の身体で性体験はあるみたいだから、あまり私から言うことはありません。何か質問はありますか。どんな疑問でも構いません。この際だから、聞いておこうということがあれば、何でも聞いてください。」

　こう言われたので、去勢されたときに看護婦さんから聞いた話で、心に引っかかっていたことを聞いてみようと思い、口に出した。

「西郷先生は女性で、井上先生は男性ですが、これは手術の内容と関係があるのでしょうか。実は去勢されたときに、看護婦さんが話してくれて、男子を手術するのは女医さんだと決まっているような話でした。」

「ああ、それね。私から説明しよう。去勢手術で睾丸を摘出するのは、確かに女医先生にお願いするのが一般的だ。というのは、多分聞いた話だろうけど、男性の医者だと患者への感情移入で手術がしにくいという人が多いからね。」

「でも、これはまあ、医者の側の意識の問題で、そんなに大した話じゃない。例は少ないけど逆の場合もある。しかし性器を全部交換するような手術のときには、もう少し現実的な意味があるんだ。」

「？？？」

「摘出ではなく、移植となると、やはり手術の難易度が高くなる。そのとき、仕上がりが男性になる患者には男性医師が、女性になる患者には女性医師が、それぞれ執刀すると、男性器／女性器の移植や造作・造形において、ずっと上手くできるんだ。これは自分につ

いているものをよく知っているんだから、当然だろう。それで、性転換手術のときは、必ず男性医師と女性医師がペアを組んで、それぞれ自分の性別になる患者の手術を担当するというようになったんだ。もう20年以上も前から一般的だね。」

　そうだったんだ。やっぱり、意味があったのか。

「他には、もう質問はないかな。」

「では、最後に向井先生、中山先生、お二人から何か追加することありませんか。」

「そうですね。セックスは二人の好きなようにやれば良いので、これという正解は特にありません。自分たちが楽しめれば何でも構わないのですが、お互い新しい身体では処女と童貞ですから、こうやるとスムーズだという一般的なアドバイスをしておきましょう。」

「まず、最初は榊君がベッドに横になって、杉田さんが奉仕して射精させてあげて下さい。これは男性側の性衝動が暴走しないように、一度射精してしまうのが良いからです。手を使っても何でも構いませんが、できたらフェラチオをしてあげると良いでしょう。もともと自分のペニスだったのですから、杉田さんとしても、あまり嫌悪感はない筈です。」

「次に杉田さんが横になって、榊君が杉田さんを連続イキの状態にまで高めてあげて下さい。女性が連続イキの状態になると、挿入時の痛さを殆ど感じなくて、快感が勝るようになるため、イキっぱなしの状態で破瓜することで強い快感が心に刻みつけられます。そうして子宮の奥に射精するようにしましょう。この膣内で射精される感覚、これこそが男女の性別が変わったということを精神的に確認する一番の近道です。」

「その後は、何度でもどのような体位でも、自由に試して下さい。時間があれば、コンドームが枕元にあるので、練習してみるのも良いでしょう。とはいっても、まあ、今日は避妊の必要がないですから、あくまでも練習です。失敗しても大丈夫です。それよりも二人

とも若いんですから、３回でも４回でも、できる限り何度もやってみて下さい。やればやるほど、心の性転換が進みます。ですので、是非繰り返してみて下さい。くれぐれも、一度だけやってみて、さあ終わったと解散するようなことはしないで下さい。セックスは男女両性が協力してやるものです。お互いに相手を思いやり、心ゆくまで楽しんで下さい。」

「では、我々は退出しますので、本日夕方までこの部屋を自由に使って下さい。冷蔵庫に食べ物や飲み物が入っているので、ご自由にどうぞ。また部屋の奥にユニットバスがあるので、そちらも使って下さい。」

「最後は特に片付けたりする必要はありませんが、終了後にアンケートと診察がありますので、その電話で連絡して下さい。受話器を取ると私のオフィスに繋がりますから、困ったことや質問があれば、いつでもどうぞ。」

「なお、最後の診察の時間がありますので、遅くとも５時過ぎには終了してお電話ください。今からだと、概ね６時間はありますね。」

「以上です。それでは、ごゆっくりどうぞ。」

第２８話　優稀と怜央

榊君と二人きりで部屋に残され、ちょっと気不味い空気が漂う。病院の特別室と言っても、要するに男女の行為をするための部屋ということだ。覚悟はしてきたつもりだけど、多分これはラブホテルに入ってしまった処女の女の子が感じる恐怖とか躊躇に近いんだろう。ただし、少し違うのは、二人だけでなく先生達も皆がそれを期待しているということか。

僕は母さんが見繕ってくれた赤いドレスを着ているが、榊君はごく普通の学ランだ。確か最初の登校日からずっと同じなんだけど、改めて良く見ると、サイズがぴったりで、もしかすると新たに誂えたものなのかもしれない。女子の制服と違い、男子は高校に行っても（ボタンや校章は違うけど）やはり学ランが制服だから、このタイミングで新しいものを購入しても、決して無駄にはならない。そんなことを考えていたら、榊君から切り出してくる。

「もう杉田さんから女の子の匂いがしてるの気が付いてる？」

そんな気はしていた。うまく説明できないんだけど、これまで周りの女の子からそれとなく感じていた女の子の匂いがあまり気にならなくなって、逆に自分の寝ていた布団が、まだ何となく男の匂いがしたり、千博からも同じ男の匂いがするようになり、今、榊君からも同じような匂いがしていた。男子のときは、殆ど感じないか、または単に汗くさいような、やや不潔な臭いだと思っていたけど、そういう感じではなくて、異性の匂いというか、女性になった今は心がときめくような、あるいはあそこがキュンとかジュワッとなるような、不思議な匂いで、決して嫌いではない。これはフェロモンのようなものなのだろうか。

「僕も杉田さんに劣情を向けないように我慢しているんだ。けど、密室に２人きりだと、さすがにね。」

榊君の股間は既に大きく膨らんでいる。きっと、女性がレイプされちゃう状況は、こういう雰囲気と、この異性の匂いから引き起こされるんだろう。これが男性の性衝動だというのは、自分でも経験があったから、わかっていた。だから先生のアドバイスに従う。

「じゃ、言われたとおり、あたしが最初に奉仕するから、そのベッドに寝てくれるかしら。」

　榊君はパパッと服を脱ぎだした。僕もあわてて、高かったドレスを汚したり皺にならないように、気をつけて脱いで、ハンガーにかける。そして、ブラを外し、ショーツを脱ごうとすると、既に裸になってベッドに横たわった榊君が話しかけてきた。

「杉田さんは女性として理想的な身体だね。ものすごいグラマーだし、背は小さいけどモデルみたいな体型に綺麗な肌と可愛い顔で、男性を魅了する魅力がいっぱいだ。このままだと、本当に君を襲ってしまいそうだ。」

　そう言った榊君のペニスは、ギンギンのガチガチに勃起して、天を向いて屹立していた。見ると、千博に聞いたとおり、見事なズル剥けで亀頭が黒光りしている。

　こんな凶悪なものが、本当に僕についていたんだろうか。ちょっと戸惑いながら、僕も裸になって榊君の股間に座り、ペニスをそっと掴んでみる。

　すると、確かにこの手の感触、かつて毎日のように握っていた感覚が蘇ってきた。たった3週間前まで、僕のものだった相棒、いや愛棒だ。思わず懐かしくなり、顔を近付けると、股間の臭いにまじって、男子特有の匂い、これが雄の匂いというんだろうか、それが鼻を突いた。たちまち、僕の股間から脳天にまで突き抜けるような、痺れるような感覚が全身を駆け巡った。きっとこれが男性のフェロモンなんだろう。僕も以前は、こんな匂いをさせていたんだろうか。あとで円に聞いてみよう。あ、でも、あのとき僕はもう去勢されて雄ではなくなっていたんだっけ。とすると、もうフェロモンは出ていなかったのかな?

まあいずれにせよ、この匂いによって、脳なのか子宮なのか、とにかく女性としての本能に直接働きかけられた気がした。だって胸がキュンとなり、あそこがじんわりと濡れてくるのが感じられたから・・・。

　先生に言われた指示に従い、またフェロモンに誘われた？のもあって、ペニスから発せられる雄の匂いを、もっとしっかり嗅ぐために鼻を近付けたら、ペニスの裏側、亀頭の付け根のところに小さな黒子が二つ並んでいるのを見つけた。忘れようもない、これこそ僕のペニスだった証拠だ。それに床オナをしていたせいか、それともいつも右手で扱いていたせいか、少し右に曲がっているのも僕のペニスの特徴だ。

　タマを見ると、もう殆ど判らないくらいになっているけど、袋の脇のところにかすかな縦筋があった。これは去勢されたときの傷跡に違いない。思わずあのときのことを思い出してしまい、ペニスを握ったまま感傷に浸っていたら、榊君が聞いてきた。

「どう？・・・前と何か変わっているかい？・・・先生の話だと、割礼して亀頭を剥き出しにしたと言っていたけど・・・。」

「ええ、私に付いていたときは仮性包茎だったけど、立派なズル剥けになったわね。逞しくて羨ましいわ。」

「うーん、まだ僕にはそういう感覚はないな。でも元男子として君がそう思うんだったら、他の男子からもそう思われるんだろうね。君の大事なものを無理やり奪っちゃって、本当に申し訳ない。一生大切にさせて貰うよ。」

　何だかよく判らないセリフだけど、それよりも懐かしさが上回って、そっと手を上下させながら言った。

「あたしのものだったんだから、どうすれば良いかはあたしが一番よく知っているわ。うんと気持ちよくさせてあげるから任せてね。」

　そう言って手で扱きながら、そっと口をつけキャンディーのようにペロペロと舐めだした。

「ぁあっ、じゃぁ、お願いします。っんっ、やっぱり、上手だねっ。」

自分でやってみたときとは比べ物にならない、ずっ、ずっと気持ちがいいよっ。あっ、あぁっ、はぁっ。」

　榊君が喜んでいる。そんなに特別なことをしている訳ではなく、僕とすればこれまで何百回となく繰り返してきた習慣だ。ただし、さすがに自分で自分のペニスには届かなかったから、舐めるのは初体験だ。

　しばらく亀頭をペロペロと舐めていると、かなり我慢汁が出てきた。それと唾液の両方でヌルヌルになった竿の部分を手で上下させながら、亀頭をパクッと口にくわえた。

「んぁっ、ぁあっ、ぅんっ。」

　榊君は、眼をつぶって快感に身を任せている。と、千博と同じように、乳首を弄りだした。けど、僕はオナニーのとき乳首を刺激した経験がないから、多分あまり感じないだろうな。だから、それよりもっと感じるように、くわえていたペニスをもっと喉の奥のほうまで飲み込むようにして、亀頭だけでなく根元まで口に入れていく。これはなかなか苦しくて、思わずオエッとえずいてしまうのだけど、それを何とか我慢して喉の奥まで入れては出してと繰り返す。またそのとき、亀頭の裏筋から鈴口のところまでを、舌でざりざりっという感じで刺激するようにする。

　結構難しくて、喉の奥を突かれると自然と吐瀉反応はあるけど、これはきっと胃カメラを飲み込んだりするのと同じだろう。でも、そういう物理的な反応はともかく、精神面において、男子だったときには、フェラなんて自分には絶対にできない、ペニスを口に入れるなんて、どんな拷問かと思っていたのに、なぜか嫌悪感はほとんどない。むしろ愛おしくて、早く射精して欲しい、早く精液を飲みたいな、とさえ思う。これは僕についていたものだからなのか、それとも女性にされたため、雌の本能として雄のペニスに抵抗感がなくなってしまい、誰のペニスでも同じように愛おしく感じるのか、よくわからない。ただ、ペニスを喉の奥まで入れると、必然的にペニスの付け根の、本来なら陰毛が密集している部分に鼻をくっつけ

ることとなる。手術で剃ってしまったので、まだ陰毛はボチボチと生え始めている程度だけど、そこの匂い、これこそ雄としてのフェロモンが一番出ている匂いを思い切り嗅いでいるうちに、僕のあそこはもうびしょびしょで、愛液がポタポタと垂れるほどになった。
「すっ、すごいっ、さすがだっ。あっ、じっ、自分でっ、自分でやったのとはっ、全然違うっ。」
さらに舐めながら、陰嚢の付け根から会陰にかけての部分を、指でグッグッと押すようにして、前立腺を刺激する。
「ぁっ、あっ、そっ、それっ、ぅんっ、ぁあっ。」
やはり前立腺は敏感な性感帯みたいだ。こんなところをマッサージすると、射精反応があるなんて、普通の女子ではまずわからないだろう・・・。
「ひもひひぃひぃ？」
「あぁっ、もっ、もうっ、出るっ、っんっ、いっ、ぃくっ、いくっ。」
そう言って、いきなり僕の頭を思い切り押さえつけて、ペニスを喉の奥まで無理やり突っ込んできた。
「うっ、ぅげっ、んぐっ、ぐげっ、うぐっ。」
何とか必死になってペニス全体を喉の奥までいれ、それと同時に口と舌を使ってペニスを刺激すると、次の瞬間、ものすごい勢いで射精が始まった。
「うぐっ、んぐっ、ぐぐっ、んんっ、げっ、げぼっ、げほっ。」
少し零してしまったが、殆どはうまく飲み込めた。口の中に射精されたので、どのくらいの量だったのかは判らないけど、飲み込んだ感じから何となく自分でオナニーをしたときよりも、かなり多い気がした。
榊君の精液の味は、昔、まだ男子だったときに射精した自分の精液の味と一緒で、エグくて苦くてどろっとしていて、青臭く喉に絡みつくような独特の味だった。タマを抜かれてしまった後に、試しに飲んでみたときのような、さらっとして少ししょっぽいだけの、

涙のような味とは全然違う。どうやら、僕のキンタマは榊君の身体にしっかり根付き、きちんと仕事をしているみたいだ。少し誇らしく、安心した。
「ケッ、ケホッ、ゲッ。・・・どうだったかしら？」
榊君に並んで、同じベッドに横たわりながら聞くと、射精してぐったりしていたのが、ようやく回復してきた榊君が言った。
「男子の射精でも、ここまで快感があるとは知らなかった。最初に病院で射精したときは、本当に一瞬で快感もあまりなく、『えっ？こんなものなの？！』と思ったけど、こんなにも強い快感があるんだ。」
「男子も女子も、性感帯って、ある程度開発しないと感じるようにはならないって先生が言っていたわね。だからどんどんオナニーをして、性感帯を開発するように勧められたわ。」
「僕もそれは聞いた。だから自分でもオナニーをしてみたけど、よくわからなかったせいか、あまり感じなかったんだ。多分、そのために例のビデオを見て研究しろということだったんだろうな。それに君がやっていなかったからだと思うけど、乳首がまったく感じない。本来は男性の乳首も性感帯のはずなんだけど・・・。」
「あたしの乳首は、ものすごく感じるんだけど、これは女性だからということではなく、あなたがいつもオナニーで開発していたからということかしら？」
「多分ね。僕はレズセックスでタチを務めていたことが多かったけど、それでも女性同士のときはお互いに乳首を重点的に刺激していたな。でも男子になってからのオナニーでは、どこが性感帯かよく判らなくて、今一つ物足りなかったんだ。今、君にやって貰って、僕は自分でオナニーしたときとは比較にならない位、物凄い性的快感を感じた。とても我慢ができなくって、全身を快感が駆け巡った瞬間、思わず君の頭を思い切り押さえて喉に突っ込んでしまった。申し訳なかったね。」
「あたしも初めてだったから、ちょっとえずいちゃった。これは練

習しないと難しいわ。」
「そんなことはないさ。君のフェラは絶品だったよ。これは君が自分で開発した場所を的確に刺激したから、最高の快感が得られたということだろう。」
「だから今度は僕が、勝手知ったる自分のものを刺激して、先生が話したとおり、君を気絶するまでの快感漬けにしてあげよう。女性の連続イキ状態というのは凄いよ。」
「お手柔らかに・・・。」
そういって、ベッドに横たわった。単に連続イキ状態というなら、既に2日前に自分でオナニーしたときに、そういう状態になっているし、千博にも教えて貰った。でも、やはり持ち主が開発してきた身体を、持ち主に刺激されるのは、格別なんだろう。榊君がわざわざ「凄いよ。」と言っている以上、思わず身構えてしまう。
「知ってる？人間は、男女ともに一緒なんだけど、絶頂を迎えると、オキシトシンという物質が脳内に分泌される。これは別名『幸せホルモン』といって、その性的な絶頂を与えてくれた相手に対する好感度が上昇する。つまり性的快感を与えてくれた相手を好きになる、さらには愛情を抱くようになるんだ。」
「僕もさっき、君にイカされて、その結果とっても幸せな気分となり、君のことをますます好きになった。あ、いや、君はそもそも女性として理想的な身体だし、とってもチャーミングでグラマーで魅力的だから、別にイカされなくても朝から君のことを異性として強く意識していたけど、君にイカされた結果、性衝動つまりムラムラは射精によって減った一方で、逆に君のことを大好きになり、是非とも自分のものにしたい、君とセックスしたいという気持ちが高まってきて、抑えきれなくなりつつあるのが感じられる。」
何だか凄いことを言い出した。
「それに君の身体から匂ってくる女子特有の香り、多分フェロモンなんだろうけど、これらが重なって、君をいっきに襲って強姦した

い、君の子宮に思い切り射精したいという欲求がどんどん高まってきているんだ。でも、そんなふうにして襲っちゃうなんて、男子として最低だから、やはりここは先生に言われたとおり、まずは君を連続イキの状態にしてあげるよ。そうすれば君もオキシトシンの効果によって、僕に対する愛情が高まり、僕に是非とも処女を捧げたくなるに違いない。」

「さっきの先生のアドバイスには、ちゃんと医学的根拠があるんだ。いくら君が覚悟を固めているといっても、僕とのセックスを義務感から受け入れる、つまり無理やりされると感じるのと、逆に襲われたり奪われたりすると感じるんじゃなくて、自分から望んで僕に処女を捧げたい、僕のペニスで貫かれたいと希望するのでは、君も僕も満足感が何倍も違うだろう。」

そう言って、僕にやさしくキスをすると、舌を入れてきて、口内を舐め回した。そして両手で確かめるように僕の左右の乳房をやさしく揉んだり、さすったりしてくる。さすがレズセックスで鍛えた手管だ。僕の身体からみるみる力が抜けてくる。

いよいよ女になるときが来たんだ・・・。僕は不安半分、期待半分で、もう榊君にすべてを委ねることにした。

第２９話　心の女性化

「杉田さん、ごめん。絶対に痛くしないから、心配しないで僕に全部任せてくれるかな。入れて欲しくなったら、途中でも良いからいつでも言ってね。」
　断続的にキスをしながら、慣れた手つきで乳首をそっと摘むようにして、コリコリと軽く転がすような刺激を始めた。
「あっ、ぁあっ、っくっ。」
　自分で乳首を刺激したときなど、比べ物にならない。流れるような動作で快感が途切れなく襲ってくる。でも、自分でやったときほど強くはない。本当にそっと、壊れ物を扱うみたいな優しいタッチで、快感と、もどかしさが混ざったような不思議な感覚が昂り、胸がどんどん熱くなってくる。
　これはレズセックスでタチをやっていたから、女子の扱いに慣れているということもあるだろうけど、もともと自分の身体についていたものだから、いつも自分で触り慣れていて、どうやると感じるのか熟知しているんだろう。いや、もっと言えば、榊君の手で開発されてきた身体であり、その開発によって、僕の身体に移植されたものは、榊君の手技が一番感じるように慣らされてしまっているんだと気付いた。
「っんっ、ぁあっ、ぃひっ、だっ、だめっ、ひっ、やっ、ぃやっ、ぁあっ。」
　乳首の刺激だけで、小さくピクンッピクンッと軽くイッた感じになる。身体の力が抜けて行き、多少なりとも冷静な観察をしていた僕の頭は、もうこのまま榊君にすべてを委ねて、榊君の手によって最高の快感を得たい、気絶するほどの快感が欲しいとしか考えられないように次第に染め上がって行った。

「杉田さん、かわいいよ。大好きだ。全部食べてしまいたい。」

そう言いながら、キスのシャワーは口から顎(あご)、喉(のど)、そして胸へと移って行き、左の乳首に到達した。

「っんっ、んっ、ぁあっ、あんっ、うっ、ひっ、ぃひっ、ぁひっ。」

出る声を必死に抑えても、乳首をゆっくり舐(な)め回され、吸われる度に身体がビクンッ、ビクンッと震え、声が止まらない。

空いた右手は身体を滑るようにさわさわと刺激しながら下半身へと移動し、とうとう股間に到達すると、スリットをスリスリしながら、溢れ出る愛液をたっぷりまぶした指で、クリトリスに触るか触らないかという位の微(かす)かな刺激を加えてきた。

「んっ、あぁん、そこダメぇ。らめぇらからぁ。」

さすがに経験豊富で女の子の感じるところはすべて知り尽くしてるようだ。三カ所をリズミカルに刺激され、もう何が何だかわからない。頭が真っ白になり、何も考えられない。皮膚感覚もますます敏感になり、ちょっと触っただけでもピリピリとした快感だ。ここまでくると、背中だろうが腕だろうが、指の腹でそっと触るだけでも、我慢できないほどの震えるような快感が全身を貫くようになる。

「ゆっ、ゆるっ、許してっ。ぃひっ、らめっ、らめぇ、らめぇらからぁぁっ。」

「もっともっと気持ちよくしてあげるよ。頭がバカになっちゃって、ペニスのことしか考えられないようになるまで、もう他のことが一切考えられなくしてあげる。・・・心の底から、女の子になって、本当に良かったと思うようになるまで・・・。いや、それしか思えないようになるまでね。」

クリトリスがクィックィッとリズムよく抓(つね)られ、舐(な)め回されている乳首をカプッカプッと甘噛みされる。

「んんっあっんっ、あんっ、んっ」

抓(つね)られる度に身体がビクンッ、ビクンッと震え、細かく何度も何度もイッてしまう。すると、クリトリスを摘(つま)む指先に、グッと反対向きに力を込めてきて、クリトリスの包皮を一瞬で剥かれてしまっ

た。
「ひっ、ひっ、ひぃーっ、ひぃぃーっ。きぃぃーっ。」
　またしても思い切り声を張り上げて激しくイッた。だが女子の絶頂は、ここからが本番になる。一度激しくイクと、ますます快感が押し寄せてきて連続イキ状態となり、もう何もわからなくなってしまう。榊君の右手は、剥き出しにしたクリトリスを親指の腹でやさしく刺激しながら、中指をスリットから膣の中にズブッと入れ、第二関節をグッと曲げて、クリトリスの裏側の辺り、いわゆるGスポットの部分をクイックイッと刺激してくる。
「ひぃぃぃっ、ぃひっ、いひっ、ぁあっ、いひっ、っくっ、ぃくっ、いぃぃっ、いくぅぅっ、いくーっ。」
「僕も自分のものを舐めるのは初めてだけど、全力で奉仕してあげる。」
　そう言うと、おまんこに顔を近付け、舌を膣の中に入れてきた。両手はまた乳首に戻り、リズミカルにクリックリッと扱くように摘まれる。もう頭の中は火花がバチバチとスパーク状態だ。こっ、このままだとっ、あたしっ、調教されちゃうっ。あっ、ぁあっ、本当に頭がバカになっちゃうぅぅっ。いやっ、このまま続いたらっ、きっ、きっと死んじゃうっ。
「だっ、だめっ、だめっ、とっ、止まらないっ、ひっ、たっ、たすけっ、助けてっ、止まらないっ、あっ、またっ、またいくっ、ひぃーっ、しっ、死ぬっ、もうっ、死ぬっ、らっ、らっ、らめーっ。」
　気絶するような快感の連続。でも、決して気絶させてくれないの。絶妙なリズムで刺激され、あたしの性感帯をすべて刺激し尽くしてくる。もうあたしは何も考えられない。ただ指の動きにあわせて、悲鳴を上げ続けるだけっっ。
　と、いきなり剥き出しになっているクリトリスを、思い切り強く吸われ、吸いながら舌先で先端部分をクリクリッと刺激された。
「あひっ、ぁひーっ、・・・んっ・・・欲しいっ、んんっ・・・おちんちん・・・んっ・・・欲しいのっ。このままじゃ・・・おかし

くなるっ、らめっ、・・・らっちゃうのっ・・・・・・。」
「ひっ・・・おっ・・・お願いっ、・・・早くっ・・・・、早く入れてっ・・・。・・・もうっ、もうっ我慢がっ・・・・れきないのーっ・・・。」
　すると、ゆっくり身体を重ねてあたしの上に乗り、口の中全体を舐め回すようなディープキスをまたしてもされる。あたしは必死になって榊君の唾液を貪(むさぼ)るように飲む。
　けど、なぜか入れてはくれないの。やさしく愛撫されるだけで、あたしは、余韻で悶(もだ)えることしか出来ない。男の子と違って、女の子はどんなに望んでも、どんなに昂(たかぶ)っても、男の子におちんちんを入れて貰わないと満たされないんだ、と心の底から思い知らされた瞬間だったわ。
　あたしの上に乗った榊くんの肌の暖かさを感じるけど、体重は一切感じさせない。これは円との経験から、ものすごく大変で腕に負担がかかっている筈だわ・・・。そんなことが頭の片隅を過(よぎ)るうちに、ようやく榊君がおちんちんをゆっくり、あたしの膣に差し入れてきてくれた。ちょっときつめで、何かがみっちりと詰まったような感覚。でも、ぬるぬるでゆっくりだから、痛くはない・・・。これは榊君の優しさかしら。でも早く、早く奥までっ、一番奥までちょうだいっ、と思ったら、半分入れたところで、引っかかるような感覚があって、そこで動くのをやめちゃったの。
　えっ？・・・処女膜の手前で止まっちゃったの？・・・そんなっ！！いやっ！・・・なんでっ？！
「おっ、お願いっ、意地悪っ、意地悪しないでっ。早くっ、早く奥までっ、でないとっ・・・。」
　でも、榊君は止まったまま、相変わらずあたしの唇から顔全体そしてクビからうなじにかけてやさしくキスするばかり。それから耳たぶを甘噛みしながら囁(ささや)いた。
「杉田さん、本当に魅力的でかわいいよ。男性なら誰でも夢中になっちゃう筈だ。こんなかわいい杉田さんの初めてを貰えるなんて、

男冥利に尽きるよ。」
と言いながら、あたしの両方の乳首を強めにギュッと摘んだ。
「ひぃーっ、きぃーっ、ぃひーっ。ぃくっ、いくーっ。」
もう何十回目だろう、連続イキ状態のあたしは、またしても激しく絶頂して、身体全体が引き攣ったように弓なりになり、逆海老の態勢で自然と腰を前方に突き出した。と、その瞬間に完全にタイミングを合わせて、榊君も腰を前に思い切り突き出した。
ズンッ、という衝撃と、何かがブチッと身体の中でちぎれるような感覚とともに、『あ、入れられた！』『この人に征服されたっ！』という感覚が股間から全身に広がった。勿論、ずっと処女だったあたしの膣は、まだ全然開発されていないので、あまり快感は感じない。だけど、痛みも殆どなかった。いや、むしろあたしの膣は、ようやく帰ってきた相棒（愛棒）をもう離さないとばかりにキュッキュッと締め付ける。突き入れられたまま動かないおちんちんが、ものすごく懐かしく感じるの。・・・身体の中心からじわっと広がる暖かさ・・・、これが女の幸せなのかしら・・・。
痛いのを気遣って止めてくれてたのだろうけど、あたしがほとんど痛がっていないのを確認すると、ようやく榊君がゆっくりと動き出したの。乳首を指で転がしながらずんっずんっとリズミカルに突いてくる。あたしのおちんちんは、以前からこんなに大きかったんだっけ、と思うくらい身体の奥の奥まで届いて、降りてきた子宮口におちんちんの先端が当たり、一突き毎にツンツンと刺激される。その度にあたしは絶頂が押し寄せて、声が止まらない。
「ひあっ……やあぁ……かふっ………へあぁっ……くぅうんっ……はふぅうっ……んっ。」
この短時間ですっかり雌穴となってしまった、あたしのおまんこを突いてくる榊君のおちんちん。その一突き毎に、あたしは女の子としての快感、女の子としての幸せを感じて、心の底から、女の子になっていく。それは、身体も精神も、これまで残っていた男の子としての記憶や経験、感覚などが、どんどん上書きされて、書き換

えられて行くみたいで、自分が自分でない別のものに造り替えられていくような感覚・・・。サナギが蝶になるみたいな、そんな感じがする。でも決して嫌ではないの。心が暖まるようなほんわかとした気持ちで満たされて行く。

　全身を支配する快感とともに、これがあたしの本当の幸せなんだ、あたしが望んでいるのは男性に貫かれて、子宮に精子を入れられて妊娠させられることなんだと、心からそう思えてきちゃったの。早く、早く射精して。あたしに種付けして！！

　きっと、あたしの膣は、まだ十分に開発されていないから、奥の子宮口をツンツンされる快感があるといっても、連続イキで何も考えられない状態から少し余裕が出てきて、こんなことを考えられるようになったんだわ。

　しばらくすると、何度も止めながら動いていた榊君も、とうとう限界が来たようで、「出るっ」と言うと、子宮口に亀頭をグッと強く押し付けるのがわかった。そして、ドクッドクッドクッドクッと熱い迸りが子宮の中に直接注ぎ込まれてきた。

　子宮のあたりがじわっと熱くなったと同時に、ものすごく幸せな気分で一杯となり、種付けされる喜びを子宮全部で味わいながら、生まれて初めて、精神的にイッちゃった。頭がボーッとしていて何も考えられず、身体はまだイキッぱなしの状態になっちゃっている。ちょっと腕とか肩とかを触られただけでも簡単に絶頂しちゃう。でも、そんなことよりも、精液を注ぎ込まれて精神的にイッてしまったあたしは、おちんちんを挿れる側から挿れられる側になったことを思い知らされ、種を注ぐ側から種を注ぎ込まれて孕ませられる側に変わったことを心の底まで刻み込まれ、これでついに心が完全に女性化したんだと確信したの。

　ふと気がつくと、あたしは榊君の腰に自分の足をしっかり巻きつけ、榊君の腰をしっかり抱え込み、もう絶対に放さない、少しでも奥までおちんちんを突き入れて欲しいという姿勢で榊君にしっかりと抱きついていた。いわゆる「だいしゅきホールド」という体位だ

わ。顔は榊君の胸に埋めて、無意識におでこや頬や鼻をスリスリとこすりつけている。榊君の脇の下から香る雄の匂いにうっとりしている・・・。まだ、あたしの身体は生理がきていないけど、排卵するようになったら、この人の種をまた子宮に受け入れたい、この人に種付けされたい、そしてこの人の子供を是非産みたいという感情が、心の底から溢れてくるのを抑えることができなくなっちゃった。

　少しして、漸くあたしが落ち着くと、榊君がおちんちんを引き抜いた。出したばかりなのにまだ大きいおちんちんが引き抜かれると、あたしの中に注がれた精液がとろとろと溢れ出るの。あたしの愛液と精液が混じった液体が布団のシーツを汚していくけど、あたしは疲れきって動くことも出来ず、仰向けになり、ただ流れ出る感触を感じるだけだった。

　この交換初夜までが、一連の性別交換に関する手順だと何度も説明されてきたけど、自分で経験して、はじめて本当の意味が理解できた、いや、心の底まで刻みつけられちゃった。おちんちんを入れられて、子種を注ぎ込まれる喜び、種付けされて妊娠させられる喜び、これこそが本当の女の子の幸せだったんだと、理屈ではなく身体で思い知らされちゃった・・・。きっと、榊君がさっき話していたオキシトシン？だっけ、それがたっぷり分泌されて、こんな快感を与えてくれた榊君のことが大好きになり、榊君にもっと何度も膣内射精して貰いたい、榊君の子供を産みたいと、それしか考えられなくなっちゃったんだわ。これって、榊君に惚れちゃったということかしら・・・。それとも、自分のものだったおちんちんから出てくる、自分の遺伝子をもった精子だから、妊娠したいと感じるのかしら・・・。

　なににせよ、目の前の男の子に逆らおうと言う気がまったく起きないの。それどころか、逞しいおちんちんを突き入れられて、そのおちんちんで何度でも絶頂させられたがっている自分がいる・・・。あたしは、身体を犯され、心を侵され、膣内射精されたことによって完全に一匹の雌と化してしまったのがわかる。処女だったあたし

のおまんこは、もう榊君のおちんちん専用の雌穴になっちゃった。榊君におちんちんを入れられたい、種を植えつけられたい、中で射精して欲しい、そう考えるだけで、じわっと濡れてくるの。まさに、これこそが交換初夜の、本当の意味だったんだわ。

　手術によって肉体的には完全な女性になったといっても、ついさっきまでは、心の中はまだ男子だったあたし・・・。自分が男子を好きになるとか、射精して貰いたい、種付けされたいと思うなんて、想像もできなかったし、心の中は常に男の子の視点だったのに、たった数時間の、この交換初夜によって、もう女の子の視点でしか考えられなくなっちゃったんだ。

　女は子宮で考える、なんて言われるけど、男子の匂いにうっとりして、新しい命を宿すことを願い、膣内へ射精されることに幸せを感じるあたし・・・。もっと男性の裸を見てみたい。逞しい男性のあそこを見てみたい・・・。そんな感覚すら湧いてくる。

　これからも、何度でもあのおちんちんを入れて欲しい・・・。膣内射精されて子供を産みたい・・・。自分が男の子だったなんて、夢だったのかしら・・・。

　心がすっかり書き換えられ、身体的な性別が換わっただけでなく、精神的にも、完全な女の子となってしまい、もう二度と元には戻れない・・・。

　あたしが本当の女の子として完成した瞬間だった。

第２９話　心の女性化（後書き）

ついに心まで完全な女性にされてしまった優稀ですが、これからいよいよ女性としての生活が始まります。

といっても、次からはしばらく、千博と勝美の初夜の様子が続きます。

性別が換わった彼ら、彼女らの今後が、どうなっていくのかは、第３５話以降の予定です。

第３０話　千博の試練（前書き）

連投します。
次の更新は、また週末のペースに戻ります。

第３０話　千博の試練

「おはようございます。今日はよろしくお願いします。」
　ドキドキしながら玄関で挨拶した。勝美のご両親が前に居て、その後ろに、この見たことのない可愛い女の子は誰だろうという感じの勝美（だろうと思う？！）が恥ずかしそうに俯（うつむ）いていた。ピンクのブラウスに、紺のチェック模様のタイトミニスカートを履いている。
「おはよう。こちらこそよろしくお願いします。ふつつかな娘ですが、という挨拶も、何となくしっくりこないな。それに君も勝手知ったる場所だろうから、まあそんな堅苦しい挨拶は抜きにして、とにかく上がって寛いで下さい。」
　勝美のお父さんがそう促（うなが）してくれた。
「はい、ありがとうございます。それでは、お邪魔します。」
　と言いながら、靴を脱いで玄関を上がり、靴を揃える。そのまま、応接間に通された。僕の対面にお父さんとお母さんが並んで座り、勝美（本当に見違えるような美少女で、可愛さ抜群、しかも思ったよりもずっと胸のボリュームがあり、もともとの僕の胸のサイズからは想像もできない、意外なほどのグラマーとなった。）が、僕の横にちょこんと腰掛ける。
　かすかに薄化粧をしているのか、きめ細かい肌に頬紅を薄くつけたような顔で、唇には、これも薄紅色の上品な口紅を塗っているのだろうか。思わずキスをしたくなる唇だ。
「あ、これ、つまらないものですが、皆さんで召し上がって下さい。」
　言いながら、昨日買ってきたクッキーを差し出した。勝美のお父さんは海外で勤務しているので、外国製の高級クッキーはきっと珍

しくないだろうと考えて、町で一番と評判のケーキ屋が自分のところで毎日焼いているクッキーにしたんだ。海外の高級クッキーなんて、僕にはあまり縁がないけど、ここのクッキーは美味しくて、確か前に勝美も好きだと話していた記憶がある。

「あ、わざわざありがとうございます。気をつかわせちゃって申し訳ありませんね。」

そんな世間話を少しすると、もう話すこともなくなってしまった。勝美はさっきから一言もしゃべらず、僕の隣で僕の膝にそっと手を触れるか触れないかというような様子で、じっとしている。心臓がバクバクして、脇の下からは汗が垂れて来るのを感じる。

もう言うべきことは早く言ってしまわなければ、僕の精神が持たない。出された紅茶のカップをずっと見つめていたが、遂に意を決して勝美のお父さんの眼をまっすぐ見て言った。

「あっ、あのっ、かっ、勝美さんとっ、けっ、結婚させて下さい。かっ、必ずっ、必ず幸せにしますっ。おっ、お願いします。」

「勿論、こちらこそよろしくお願いします。先程、ふつつかな娘ですがと言ったけど何だかまるで冗談を言っているみたいで、まったく実感が湧かないね。これが最初から娘だったなら、父親のセリフとしては、『勝美はやらない！！』・・・とか言う場面なのかもしれないけど、つい1カ月前までは、てっきりあなたが勝美のお嫁さんに来てくれるものと信じてたからね・・・。」

そう言って、お義父さんははクックッと笑った。僕はどういうリアクションをすれば良いのか判らなくなってしまい、固まって口をパクパクとさせていると、お義母さんが助け船を出してくれた。

「千博さんには、これまでもよく遊びにきてくれて、本当に仲良くさせて頂いていたので、性別が変わったからといって、そんなに身構えることもないわよ。二人がいずれ一緒になればいいなって、主人も私もずっと思っていたし、性別が変わっても一緒になってくれるんでしょ。だったら何も遠慮することはないわ。これからも勝美と仲良くして下さいね。よろしくお願いします。」

「でも、勝美がお嫁に行っちゃうことになったのは寂しいなあ。勝美は一人っ子だったからね。あ、勿論、だからといって勝美との結婚に反対するようなつもりはまったくないよ。でも、家も近いんだし、ちょくちょく遊びにきてくれると嬉しいな。」
　やはり、この話になった。ここは僕が決断して言わなければならない、勝美の男性を奪ってしまった僕の責任なんだ。まだ父さんや母さんにも話していないけど、いずれ絶対に了解して貰わなければならないと覚悟を決めて口を開いた。
「そのことですが、お義父様とお義母様にご相談があります。勝美と結婚するに際して、僕が遠藤家に婿に入ります。遠藤家の将来を考えると、一人っ子の勝美を貰ってしまうわけには行きません。幸い、僕には兄も弟も居ますし、そもそも僕は女性として遠藤家に嫁に来るつもりだったので、男性になっても勝美と結婚するからには、入り婿となって遠藤千博になることにします。」
　隣に座った勝美が、驚いたような顔で僕の左手をぎゅっと握った。僕も勝美の手を握り返して、勝美を振り返り、かすかに頷(うなず)くと、お義父さんの目をまっすぐ見つめた。
「え？そんな話になるのかい？勿論、君が勝美と二人で話し合って決めることだとは思うけど、別に私達のこととか、遠藤家のことといった心配はいらないよ。君のご両親はどう考えているの？」
「いえ、まだ両親には話をしていません。というか、勝美にもまだ相談してはいないのです。だから、勝美に反対されてしまうと、僕の一人相撲になってしまうのですが、勝美に大変な負担をかけてしまい、また遠藤家にもご迷惑をおかけしてしまった僕のけじめの問題です。僕なりにいろいろな可能性を考えた結果、こうしようと心に決めたので、是非、認めて下さい。お願いします。」
　とにかく必死でそれだけ言うと、椅子に座っているので土下座はしなかったけど、深々と頭を下げて最敬礼をした。
「すると、今、ここではじめて決意表明した訳だね。君の覚悟の程は理解した。けど、こういう話は即断即決できるものでもないだろ

う。まずは君のご両親のお考えもあるだろうし、それ以前に勝美と二人でどうするのが良いか、よくよく話し合ってみなさい。私達は、皆が賛成するなら、どんな結論でも祝福するよ。ただ、本当に無理をする必要はないからね。結婚生活は、これからずっと続く訳だし、夫婦の関係がどうあるべきかは、二人で考えるものだろう。君達が早く結婚したいと思っているのは知っているけど、いつ結婚するにしても、まだ考える時間位は十分あると思うよ。」

「そう言えば、二人はいつ結婚するつもりなのかしら？一応、もう成人したんだから、今日にでも結婚届を提出することだって法律的には可能なんでしょ？でも勝美はまだ女性として半人前にもなっていなくて、家事を特訓している最中だから、まだもう少し先にしないと、いろいろと困るんじゃないかしら。」

「それについては、まだ性転換という話が出る前に勝美と話したことがあるのですが、中学を卒業したら、直ぐにでも結婚しようと思っていました。といっても、さすがに春休み中というのも難しいでしょうが、例えば来年のＧＷの頃とか、初夏の頃とか・・・。あ、でも、それは僕が女性だったときの感覚でして、結婚はやはり女性にとって一生に一度の晴れ姿ですから、勝美が望むような式を挙げるつもりです。」

「勝美もそれで良いの？でも、あなたの今の状態では、まだ主婦業は2割もできないわよ、きっと。・・・そうね、千博さんがお婿さんになってくれるのかどうかはともかくとして、二人でこの家に住むというなら、あたしが勝美を特訓しながら、何とか主婦として勤まる程度に鍛えることにして、それまではあたしがサポートするということは可能かもしれないわね・・・。」

　そうなんだ。もともと僕が嫁に来るなら当然、そうでないにしても、入り婿かどうかとは別に、結婚したらどこかに住む場所を考えなければならないと思っていたんだ。我が家は家族が多くて、新婚家庭としては向いていないし、そんなに余っている部屋がある訳でもない。といって、学生の身でアパートを借りるほどの余裕もない。

でも勝美の家は、勝美が一人っ子だったせいで、空き部屋が二つもあるし、お義父さんは海外に単身赴任、お義母さんは日中不在にすることが多い。つまりうってつけなんだ。だから、ここぞとばかりに力説した。
「ええ、そうさせて頂けると嬉しいです。僕を入り婿にさせて頂けるなら、この家にお義父様、お義母様と一緒に暮らすのが一番自然でしょう。勝美もそれで良い？」
「・・・はい。そうして貰えると助かります。でも、どこであっても、千博の住むところが、あたしの家になります。」
そう言って、僕の左腕に頬をくっつけて、しなだれ掛かってきた。かっ、可愛いっ！！勝美がこんなに可愛いとは知らなかった。これは反則だ。胸がキュンとなり、僕は言葉を失った。こんな可愛い少女と、これからセックスをするのかと思うと、全身が熱くなり、顔が赤くなるのが判った。ふと目をやると、タイトミニスカートから覗く勝美の太股に気がついた。見えそうで見えない、あの中はどうなっているんだろうか。そんな僕の精神状態を正直に現したのか、股間も同時に熱くなり、ズボンの前がテントを張ってしまった。男子になって、はじめての経験だ。お義父さんやお義母さんは気がついたのか、それとも気がついても知らんぷりをしてくれているのか判らないけど、勝美は気付いてしまったようで、勝美も赤くなって俯（うつむ）いてしまった。物凄く気まずい。何とかしなければ、と気は焦るが、でも何をどうすれば良いのだろうか・・・。あ、まずい。意識すると、ますます固くなっていくのが判る。どっ、どうしようっ。こういうときの男性の生理って、どうすれば良いんだろうか・・・。
「あ、ちょっと早いけど、そろそろお昼の時間だわね。急いで準備しますので、１０分位待っていて下さいね。実は今日のお昼は、勝美にも手伝って貰ったのよ。どの料理が勝美のつくったものか、食べてみて当ててちょうだい。」
僕の苦境を知ってか知らずか、そう言ってお義母さんが立ち上がった。

「じゃ、あたしも母さんと一緒にご飯の準備をするから、ちょっと待っていてね。」
えっ！・・・勝美もいなくなっちゃうの？とすると、僕はお義父さんと二人きり？！？！・・・この状態で？・・・どんな顔で、何を話せば良いんだろう？！一気に心拍数がＭＡＸだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「お母さん、千博、大丈夫かしら・・・。」
「大丈夫でしょ。お父さんと二人きりで、男同士の話しもあるんじゃない？」
「でも、千博はまだ男子になって、たったの三週間なのよ。新米も新米、お父さんに苛(いじ)められたり、ぶん殴られたりしないかしら。」
「まさか。第一、お父さんの頭の中では、まだ千博さんは女子のままかもしれないし、そもそも勝美のことだって、まだ男子のままじゃないのかしら？ただ、そんな状況だから、セクハラになりかねない発言をしちゃうかもしれないわね。でも、その程度よ、きっと。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「さて、千博君。これで男同士、腹を割って話ができるようになった訳だ。」
　やはり来た！ここからが本番だ！！何を聞かれるんだろう。下手なことを言ったら、「頬(ほほ)を出せ！（怒）」とか言われるんだろうか。喉がカラカラだ。脇の下を冷や汗が流れるのがわかる。まるでカテーテルを再度入れられかけたときみたいだ。緊張と恐怖のため、おしっこチビりそうで、全身ガチガチだけど、必死で耐える。
「君とは、そんなに何度も会って話をした訳じゃないからだろうけど、まだ女子のときの印象しかなくって、男子という気がしないんだよね。でも、もうすっかり男子になったんだろう。だから男性として、女性には聞かれたくない、聞かせたくない話をしても良いかな・・・。」

「はっ、はいっ。大丈夫です。もう僕は完全な男子ですからっ。よろしければ確認して下さい。証拠をお見せしますっ。」

わっ！僕はいったい何を言っているんだっ！！これって、お義父さんの前でパンツを下ろしてあそこを見せると宣言しているに等しいじゃないか？！まるで露出狂の変態だ。でも、思わず口を突いて出てしまった言葉は、取り返しがつかない。

僕の言葉の意味を察してしまったに違いないお義父さんが、ニヤニヤしながら聞いた。

「えっ。証拠って、どういうもの？簡単にわかるものなの？」

「はいっ。ここで射精してみればっ・・・。あっ、いやっ、あのっ、しょのっ。ぁっ、ぁぁっ・・・。」

だっ、ダメだっ。口が勝手にっ。もう頭が真っ白で、自分が何を話しているのか、考えがついていかない。それに噛んだ。泣きたい！！もう誤魔化しようがない。勝美と結婚するのは絶望だ。このまま家に走って帰りたい。勝美、僕を助けてっ。勝美っ！

「はっはっはっ。そんなきわどい冗談が普通に言えるなら、もう完全に心まで男子だね。安心したよ。まだ男子になってたったの３週間だろう。女子の心が残っていて、こういう話をするとセクハラのように感じてしまうんじゃないかと、少し心配だったんだが、どうやら杞憂だったみたいだ。実は勝美は必死になって女子のように振る舞っているけど、まだ心が完全に女性化したわけではなさそうで、ときどきチグハグな素振りが見られるんだ。だけど、午後に君が勝美の処女を奪ってくれれば、あるいは意識が変化するのかもしれないね。」

返事のしようがない話を振られ、どう答えて良いかわからないから曖昧に頷く。

「勝美も自分で希望して女性になった訳だし、覚悟はできているんだろう。是非、午後は有無を言わさず、力ずくで押さえつけてでも、勝美の処女をきっちり散らして、女性になったことを心に刻みつけてやって欲しい。泣こうが喚(わめ)こうが痛がろうが、そんなことは気に

しなくて良い。ベッドにおいて女性をしっかり躾け、コントロールするのは男性の責任だ。頑張って勝美を征服してくれよ。」
「・・・はい・・・。」

第３１話　ようやく

「お待たせしました。ご飯の準備ができましたよ。」
　お義母さんが声をかけてくれた。ほんの１０分程度だったんだけど、お義父さんとの二人だけの緊張のやりとりで、もう僕の精神はボロボロになりかけていたんだ。これ以上二人だけでこんな会話を続けたら、僕はもう二度とここに来ることも、お義父さんと話をすることもできなくなっていたかもしれない。危ないところだった。
　ダイニングテーブルに行くと、勝美が料理や皿を並べていて、お義母さんは台所から次々とごちそうを運んでいた。
　先程のソファのときと同じく、僕と勝美が並んで座り、その反対側にはお義父さんとお義母さんが並んで座る。するとポンと音がして、お義父さんがシャンパンの栓を開けた。
「では、千博君と勝美の二人の成人と婚約、それに交換初夜を祝って、「乾杯！」。
『乾杯！！』
　４人で唱和した。とうとうこの日が来たんだと、胸が一杯になった。でも、成人と婚約は良いとしても、交換初夜を祝うって、どういうものなんだろう。ものすごく恥ずかしい。見ると勝美は、まだ一滴も飲んでいないのに、既に真っ赤になって俯いてしまっている。
第一、娘の処女喪失を祝って乾杯する両親って、どうよ？という気がするけど、これは僕がまだ女性の感覚を持っているからなんだろうか？男性視点だと、喜ぶべきなのか？しかし娘の処女喪失を喜ぶ父親というのは、少なくとも僕は聞いたことがない。とすると、これはやはり、僕の感じ方の問題ではなく、まだお義父さんとしても、勝美が男子だったときの感覚のままだからだろう。
　そんな僕の困惑を打ち払うようにお義母さんが言った。
「まずは全部、ひととおり食べてみてね。それで、どれが勝美のつ

くったものか、当ててみて。でも、勝美の腕はまだまだだから、案外簡単にわかっちゃうかしら？」
「いやいや逆だよ。『愛情』というスパイスさえあれば、千博君には一番美味しく感じるのかもしれないよ。」
　お義父さんが、さりげなくプレッシャーをかけてくる。これって、僕の愛情を試しているんだぞと言外に告げているに違いない。世の中の男子は、彼女の両親、特に父親に会いに行くときは、皆こんな試練を受けなければならないんだろうか。まだ男子になって三週間の僕には、あまりにも高いハードルで、さっきから緊張のしっぱなしだ。心拍数はまるでジェットコースターに乗ったみたいに、急上昇と急降下を繰り返している。物凄い負担だ。これじゃ、ベッドにたどり着く前に、クタクタになってしまう。いや、このまま続いて、その後でベッドインしたら、それこそ腹上死してしまうかもしれない。交換初夜で腹上死した男子なんて、絶対ニュースになるに違いない。そんな恥ずかしい死に方は嫌だ・・・。

　料理はどれも美味しかった。実は最初、緊張していて味なんて全然わからなかった。ただ、お義父さんに勧められるままにシャンパンを2杯、３杯と重ねるうちに、なんだか気持ちが大きくなってきて、心がうきうきと楽しくなってきた。またさっきみたいに変なことを口走ってはいけないと、気をつけていたんだけど、いつの間にか気がつくと、ケラケラと笑ったり、勝美の手を自然に触ったりしながら、すっかり打ち解けてきて、料理を楽しんでいた。
　でも、そもそも、僕には殆ど女子力がなくて、母さんに手伝うようにいつも言われていても、家事は苦手だった。なかでも料理は破滅的に下手で、母さんにも博美さんにも、配膳や片付けしか、やらせて貰えなかった。これでどれが勝美のつくったものかを判別するのは、ちょっと無理かと焦ったんだけど、食べていくうちに、料理の味付けが少し違う傾向があるような気がしてきた。５品はやや薄味で少し糖分の甘さが感じられるのに対して、２品は少し濃い目の

味付けで、醤油の味わいが効いているものだった。
もし、お義母さんと勝美が別々に担当したんだとしたら、どちらかが勝美の味付けで、もう片方がお義母さんに違いない。勝美が5品つくるのは無理だろうと判断して、2品のほうを勝美、5品のほうをお義母さんではないかと考え、聞いてみた。
「どれが勝美のつくったものかというクイズですけど、この野菜炒めと肉巻きが勝美のつくったものではないですか。」
「すごい！二つとも当てたなんて、どうしてわかったの？」
「やっぱり愛情スパイスの威力か？」
勝美が喜色満面の笑顔で、僕の左腕に抱きついてきた。
「いや、この2品だけ、味付けが少し濃くて醤油が効いているのに、他のものは少し薄味で甘みが感じられたので、どっちかが勝美だと思ったんです。勝美が沢山つくれるとは思えなかったから・・・。」
「その差がわかるとは、君の舌は優秀だね。やはり元女子だ。私にはよくわからなかった。」
タネ明かしを聞いて、勝美がちょっとふくれっ面をしたような気がした。けど、そんなことは問題ではない。さっきもそうだったけど、勝美が抱きつくと、ムニュッとした豊かな胸の感触が左腕に感じられる。それに頬をくっつけて、しなだれ掛かってくるしぐさは、それだけで僕の心拍数を一気に押し上げ、あそこを制御不能にする大量破壊兵器だ。食卓テーブルに隠れているからお義父さん達には見えないだろうけど、またしてもあそこが固く元気になってしまった。そう言えば、男子は概ね72時間で精子が満タンになってしまうと先生が話していたっけ。優稀にオナニーを教えて貰ったのが、ちょうど二日前だから、そろそろ精子が溜まってきて射精するべき頃合いなんだろう。隣に座っている勝美には、今回も気がつかれてしまったけど、まあそれはいいや。とにかく早くご飯を食べてしまわなければ・・・。
7種類もあった主菜を必死で食べると、続いてデザートにババロ

アとチョコムースでつくったパフェのようなものが出てきた。生クリームとフルーツが添えられていて、これも勝美が手伝ったんだと紹介された。
「すごい！こんな美味しいスイーツができるなんて、結婚したら太っちゃいそうだ。」
そう褒めたら・・・。
「そんなに期待しないでね・・・。あたしがやったのは生地を泡立てただけだから・・・。」
　と、テヘペロ顔で勝美が恥ずかしがった。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです。」
「お腹一杯になったかしら。遠慮することはないのよ。まだ沢山あるんだから。」
「よかったら、シャンパンもまだ残っているよ。これは開けちゃったら保存できないから、もう一杯どうかな？」
「いえ、もう本当にお腹一杯です。それにお酒は・・・。」
「そうだな、無理に飲ませて、肝心のときに使い物にならなくなっちゃったりしたら、何のために今日来たのかわからなくなっちゃうからね。」
　そう言ってお義父さんは、ニヤニヤと笑った。見えていないと思ったんだけど、やっぱりお義父さんには気付かれていたんだ！！勝美は耳まで真っ赤にして俯（うつむ）いている。僕も恥ずかしくて今すぐ逃げ出したいけど、ぐっと堪（こら）えた。結婚すると、こんな話も普通になるんだろうか。まるでセクハラを受けているみたいだ。でも、入婿だと、こんなセクハラまがいの発言も耐えなければならないんだろうな、きっと。・・・今から覚悟しとかなきゃ・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

「じゃ、このあとは二人の時間ということで、勝美の部屋を準備しておいたから。あ、二階の洗面所に新品の歯ブラシがあるんで、使って下さい。我々はずっと、ここ一階のリビングに居るつもりだから、何かあったら声をかけて下さい。それと夕方には風呂が沸き上がるようにしてあるから、入っていくと良いよ。うちの風呂は、わりと大きめだから、勝美と二人で入っても余裕があるだろう。是非そうしなさい。」

「ありがとうございます。それでは退席させて頂きます。」

勝美と二人で、逃げるように二階に上がった。あのままあそこに居たら、話がどんどん猥雑な方向に向かいかねない。処女と童貞の僕達には、とても耐えられないし、下手な発言をしたら、からかわれて大変だ。心臓に悪すぎる。

二階に上がったら、まずトイレを借りた。さっきから緊張のしっぱなしで、特にお義父さんと二人きりのときは、おしっこがチビりそうだった。トイレでは、まだ完全には慣れていないのだけど、便座を上げて立ちションをした。最近、ようやくコツがわかってきて、概ね狙ったところにできるようになったけど、最初はあちこちにひっかけちゃったりしたんだ。

トイレから出てくると、洗面所のところで勝美が「これ」といって新品の歯ブラシと歯磨きチューブ、それにマウスウォッシュを出してくれた。それを受け取って、歯を磨こうとすると、勝美はもう歯磨きを済ませたみたいで、「じゃ、あたしは先に行っているから。」といって自分の部屋に入って行った。

急いで歯を磨き、マウスウォッシュで口を濯(すす)いでから勝美の部屋に入ると、部屋の中はかなり暖房が効いて温かくなっている。裸になるんだから当然か。

それよりも、部屋の雰囲気が随分変わっている。カーテンとかの

インテリアが、女の子の好きそうなデザインに替わっていて、ちょっと可愛らしいぬいぐるみや小物が少し置いてあるけど、もともと勝美の部屋はあまりモノがなくて、ベッドに勉強机と本棚、それに小さいちゃぶ台のようなミニテーブル位しかなかったから、目につく変化は姿見が正面にかけられたことと、洋服掛けに女物の服がかけてある位だ。ただ、ベッドがずっと大きいものに取り替えられている。前回、勝美とここで愛し合ったのは、試験の前だったから、ちょうど1カ月位前なんだけど、あのときは普通のシングルベッドだったのが、今は新品のダブルベッドに替わっている。そのベッドに勝美がもう先に入って、シーツから顔を半分だけ出して僕のことを見ながら言った。

「これからは二人で寝ることになるだろうからって、お父さんが新しいベッドを買ってくれたの。嫁入り道具のつもりみたい。」

　これが、さっきお義父さんが話していた、勝美の部屋を準備しておいた、っていうことなのか。さらに部屋の中を見回すと、枕元にはティッシュボックスとコンドームがこれ見よがしに広げられて置いてあった。

　まだ勝美は生理がはじまっていない筈だし、僕も勝美も、避妊するつもりもなければ、そもそも二人のはじめてのときは、何も遮(さえぎ)るものなしに膣内射精(なかだし)をすると決めていたけど、きっとこれは雰囲気づくりなんだろう。僕も勝美も、いわゆるラブホテルに入ったことは勿論ないけど、多分、こんな感じで置いてあるに違いない。まるで、「さあ、やれ！！」・・・と言われているみたいで、先程のお義父さんとのやりとりを思い出して、またしても顔が赤くなった。でも、僕が今日、ここに来た目的は、まさにこれなんだ。これをきちんとやり遂げなくては、僕は男子失格になってしまう。だったら、こういう演出も、これはこれで受け入れなければならないのかな・・・。

　ふと気付いたんだけど、洋服掛けのハンガーに、さっきまで勝美

が着ていた服がかかっている。ということは、今の勝美は裸なの？でも探しても下着は見当たらないから、下着だけ着ているんだろうか？そんなことを考えていたら、またしても股間が熱くなってきた。

第32話　暴発

「恥ずかしいから、千博も早く服を脱いでこっちに来て。」
　勝美がベッドの中から声をかけてきた。今朝から、勝美は殆ど話をしてこなかったけど、さすがに二人だけになったら少しはリラックスしたんだろうか。
　手術のあと、勝美とはメールでは何度もやりとりしているけど、何故か勝美の希望で会うことがなくて、今日初めて直接話をした。勝美がすごく可愛くて、言葉遣いや仕草なんかもすっかり女の子になっているのもびっくりしたけど、やはり一番の変化は声だろう。優稀もそうだったけど、勝美も声帯を手術して、声がずいぶん高くなっていた。もともと勝美は中2の夏休み頃には声変わりして、小さい身体にしては低くて渋いテナーだったんだけど、1オクターブ近く高くなって、ソプラノに近いアルトといっても良い程の甲高い声になっていた。まだ喉が完全に慣れてはいないらしく、ときどき声が裏返ったりしているけど、優稀よりも明らかに高くて綺麗な声色だ。
　その玉を転がすような声で話しかけられるのだから、さっきから興奮している僕のあそこが、ますます元気になってくる。僕は学生服を手早く脱ぎ、下着姿になると、勝美が待つベッドに向かった。僕のトランクスの前は見事なテントを張っていて、隠しようもないけど、もう勝美との間には、何も隠すようなこともない。いっそ、全部脱いでしまおうかと思ったけど、勝美も多分、まだ下着は着ている筈だと思い直し、そのままベッドに腰掛けると、シーツをそっとまくった。
「きゃんっ！！」
「っつっ！！」
　勝美が変な悲鳴を上げて腕で胸を隠したのと、僕が思わず息を呑

むのとが同時だった。何と勝美は、スケスケのシースルー下着を着けていた。胸は腕で隠しているので、乳首のところはかろうじて隠れているけど、豊かなおっぱいは腕から溢(あふ)れていて、どうみてもCカップはありそうだ。僕の胸はAカップしかなかったのに、どうしてこうなるんだろう・・・。手術のとき、ペニスを割礼したみたいに、何か手を加えたりしたんだろうか？またショーツは完全に透けていて、スリットやらクリトリスやらがくっきりと見えている。それに少し生えてきた陰毛が、スケスケの下着越しにエロさ加減を引き立てており、僕は一気に暴発寸前となった。だめだっ、このままだと勝美の二の舞になるっ。そう思って腰を引くと、勝美が少し恥ずかしそうな、それでいてちょっと潤(うる)んだ眼差しで、胸を隠していた腕をどけて見事なおっぱいや乳首を僕の視線に晒(さら)しながら、「うふっ♡」とか言って股を大きく開いて突き出した。

「そっ、そんなことされたらっ、ぼっ、僕っ、出ちゃうよっ。」

　さっき寝室に入ってから下着を着替えてる時間はなかったはずだ。とすると今日は朝からずっと、このスケスケ下着を着ていたんだろうか。まさか、僕の横に座っていたときもそうだったの？確か、あのとき勝美はかなり短いタイトスカートを履いていたような気がする。つまり、余裕のない僕は気がつかなかったけど、もしかして、ちょっとした拍子にスカートの中が見えてしまったら、このスケスケの何も履いていないに等しい下着が見えたんだろうか。そしてその中身も・・・。あっ、まずいっ、そんなことを考えちゃっっ！！でも眼が離せない！！

「ぁあっ、だっ、だめだっ、ぃひっ、くっ、ぃくっ、ぁああっ。」

ドピューッ、ドピューッ、ドピュッ、ドピュッ、ドクッ、ドクッ、ドクッ。

　トランクスの前を必死で押さえた。けどダメだった。

「あっ、千博、イッちゃったの？ごめんなさい！そんなつもりじゃなかったの。」

「ぅうっ、っくっ、ぼっ、僕っ、ぅうっ、ぐすっ。」

失敗しちゃった・・・。男の子失格だ！・・・やっぱり新米男子には、初夜のハードルはものすごく高かったんだ。
父さんにも、お義父さんにも、あれだけ言われていたのに暴発しちゃった・・・。恥ずかしくて、情けなくて、悔しくて、涙が溢れてくる。
「かっ、勝美っ、勝美っ、ぼっ、僕っ、ごっ、ごめんなさいっ、ぅうっ。」
　僕は思わず勝美の豊かな胸に顔を埋めて、泣きついちゃった。
「男の子は興奮すると、そうなっちゃうものなのよ。城址公園のこと覚えているでしょう。それが男の子の生理なんだって。だから気にしないで。変に挑発しちゃったあたしが悪いのよ・・・。」
「・・・ぅ、うんっ・・・、ぐすっ。」
「さ、とにかく下着を脱いで。そのままじゃ漏れてきて大変なことになるし、気持ち悪いでしょう。第一、これから脱いでするわけだから、着ている必要はないわよね。」
そう言うと、勝美は僕を抱きしめて、トランクスをやさしく脱がせてくれた。そして精液でベトベトのグチャグチャになったトランクスを、こぼれないように上手く丸めて下に置くと、ベッドの周囲になぜか沢山置いてあるタオルをひとつ取って、僕の股間をそっと拭いてくれた。
「あっ、ありがとう。」
「本当に気にしないで。ここで千博が恥ずかしがっていては、城址公園でのあたしはどうなっちゃうっていうの。これからベッドインしようというならともかく、あのときあたしはキスしただけで暴発しちゃったのよ。」
「ごめんなさい・・・。あのとき、男子の生理現象だと頭では理解したつもりだったんだけど、自分がこんなことになるなんて、まったく想像もしていなかった・・・。」
「でも、安心したわ。あたしのおちんちんとタマタマは、千博の身体できちんと仕事しているってわかったし・・・。だってこれこそ

健康な男の子の証拠なんだから。千博もあのとき、あたしに言ってくれたでしょ。気にしなくて良いって・・・。あたしも全然気にしていないわ。それに先生に貰ってきたパンフレットによれば、男子はこうなることが多いから、まず女子がおちんちんを刺激して、一度射精させてあげてからのほうが上手く行くって書いてあったわよ。読まなかったの？」
「・・・うん。開けてもいない・・・。何となく気後れがしたのと、そういうことは優稀に聞くほうが簡単で話が判りやすかったから・・・。・・・ごめんなさい・・・。実は僕、オナニーの仕方もよくわからなくて、優稀に聞いたりしたんだけど、もっと勉強しとくべきだった・・・。」
「ううん、全然構わないわ。」
「こういうことって、本能のままにできるものかと思っていた・・・。」
「勿論、本能に任せていいんだけど、普通男の子にせよ女の子にせよ、自分で何度も練習というか自習する時間があるじゃない。でもあたしたちは性別交換したばかりなのよ。」
「うん、僕、男の子の性について、もっともっと勉強するよ。勝美は女の子の性について、どこで勉強したの？」
「まだ何もしてないわよ。でも、そんなの簡単じゃない？・・・あたしたちは、元の性別については熟知しているのよ。二人して教え合いながら、愛し合えば済む話だわ。」
「そうだよね。・・・実はこれまで、切り取られちゃった勝美に聞くのは、なんだか可哀相で申し訳ない気がして、気後れしていたんだけど、やっぱり新米男子じゃダメだよね。だから、僕にいろいろ教えてね。」
「ええ、そうするわ。あたしにも、沢山教えてね。・・・あたし、切り取られるときまでは、手術がちょっとだけ怖かったけど、千博からこんな立派なおっぱいとおまんこを貰ったんで、いまでは嬉しくて幸せ一杯なの。だから千博が申し訳ないと思う必要はどこにも

ないのよ。・・・さ、じゃ、気を取り直して、もう一度やり直ししようね。今日の千博は朝から頑張って来たんだから、あと少し、あたしのことをリードしてくれる？」

　そうだ。今朝からの針の筵（むしろ）を何とかここまで乗り切って来たんだ。大丈夫だ。もうここには僕と勝美しかいない。お互い処女と童貞なんだから、失敗だってあるだろう。でも二人で乗り越えれば良いんだ。・・・とはいえ、ここはやはり男子の僕が主導権を持って勝美をやさしくリードしなければ・・・。父さんにもお義父さんにも言われたんだ。そう考えて、勝美の肩をやさしく抱き寄せて、目をつぶっている勝美の唇にそっと僕の唇を重ねた。

「ぁむっ、ぅむっ、んっ、んむっ。」

　お互い舌で相手の口中を必死に舐め回す。勝美の唾液と僕の唾液を全部交換する。

　勝美とは、もう何度もキスをした。（といっても、そんなに多いわけじゃないけど。）最初はチュッとするバードキス、それから、あの忘れもしない城址（じょうし）公園で最初のディープキス・・・。

　なぜか、当時は女子の僕からすることのほうが多かった気がする。そして性別が換わって最初の、このキス・・・。キスそのものは性別が換わっても、何も変わらない。でも、これまでで一番感じる。裸で抱き合って、こうやってねっとりキスするだけで、また暴発しちゃいそうだ。けど、何とか他のことを考えて必死に耐える。そうだ、まず勝美の下着を脱がせなきゃ。僕の下着は勝美が脱がせてくれたから、今度は僕が・・・。

　キスしながら、背中に回した手でブラのホックをそっと外す。そして、やさしく語りかける。

「勝美、大好きだ。愛している。とうとうここまで来たんだ。もう勝美の全部が欲しい。」

「あたしも愛している。手術の日からずっと、千博にこうして抱かれるのを想像して待ち続けていたの。」

「このスケスケでエッチないやらしい下着はどうしたの。まさか自

分で選んだの？」
　言いながら、手をそっと下ろしていき、ショーツをくるりと剥くように尻から抜いた。
「ううん。これ、橘さんに貰ったの。プレゼントだって言われて・・・。」
　橘さんということは、多分、優稀の紹介かな？勝美が何か察したように続けた。
「あたしは一人っ子だし、周囲に千博以外、親しい女子もいなければ母さんも不在がちで、女子になって何をどうすれば良いか、服とか小物とか、それに生理用品なんかも、どんなものをどこで揃えれば良いのか、聞く人がいなくて困っていたの。そうしたら、優稀が橘さんを紹介してくれてね。優稀、橘さんとお付き合いしていたんだってね。知らなかった・・・。」
「それで、一緒に下着とか買い揃えに付き合って貰ったとき、初夜にはこういうものが必要だと言われてプレゼントされたの。橘さんの話だと、新婚初夜にはこういうのを着て、旦那様を楽しませるんだって。だから今日は朝からこれを着ていたのよ。父さんも母さんも知らないけど、午前中もし千博に気付かれたらどうしようかとドキドキして、あたしずっと俯いたまま話もできなかったわ。でも気付いて欲しい気持ちも少しあって、それであんな短いスカートにしたの。」
「気付かなかった・・・。でも、気付かなくてよかった・・・。」
　あっ、危なかったっ！万一、気付いたら、というかチラッとでも眼に入ったりしたら、きっと勝美のご両親の前で暴発してしまっただろう。いくらなんでも、ご両親の見ている前で娘さんに興奮して射精してしまうなんて、どんな変態かと思われるに違いない。そんなことになったら、もう完全に人生終わっていた。・・・知らなかった。今更ながら、物凄い綱渡りだったんだ・・・。
「あたし、少しは可愛くなったかしら？ちゃんと女の子に見える？手術のあとずっと、千博に会うのを我慢して、女の子としてのしぐ

さや話し方、それにお化粧の仕方なんかも特訓してきたのよ。でも、まだ母さんが言う通り、主婦としてはまったく素人だし、新米女子としてでさえも、まるで落第点だと思うわ。だから、さっき千博があたしのことを見て、暴発しちゃったのは、実はとってもも嬉しかったの。あたしの女の子としての魅力で射精したんだとしたら、女の子冥利に尽きるじゃない？」

「もう理想的な女の子だよ。今日、僕が何度もズボンの前を膨らませちゃって困っていたの、わかっていただろう・・・。ただ、勝美はこんなに可愛くてグラマーで、チャーミングで魅力的なんだから、あんまりセックスアピールをして欲しくはないな。だって僕以外の他の人が振り返っちゃったら、いやだから。ずっと僕だけの勝美でいて欲しいんだ。これって僕の我儘かな？」

「千博！千博！！大好き！・・・早く、早くそのあなたにあげたおちんちんを頂戴。あたしもう我慢ができないの！！あなたから貰ったおまんこに、ガチガチのビンビンになったおちんちんを突きたてて っ！・・・今すぐ、あなたから貰った処女膜を、そのおちんちんで一気に突き破ってちょうだい！！」

第３３話　愛し合う二人

勝美が股間を僕の股間にグイグイ押しつけてきた。
「まずは勝美が気持ちよくならなくっちゃね。もうあそこは濡れているかもしれないけど、もっともっと、何度も何度も絶頂して、連続イキ状態にしてあげる。勝美はその身体でもうオナニーをしてみたかな。僕が自分でやっていた方法を試してあげるよ。大丈夫、もともと僕の身体についていたものなんだから、最高に気持ち良くしてあげる。」
そう言って、ベッドに横たわる勝美に身体を重ねると、口から顎、耳の後からうなじ、喉、そして胸にかけて、キスのシャワーをしながら、手は豊かなおっぱいをさわさわとなでるように動かして、ピンと固く上を向いて勃っている乳首をスッ、スッと擦るように刺激していく。
「んっ、うんっ、あっ、ひっ、ぁあっ、ぃひっ、はっ、はぁっ。」
勝美が可愛い声で喘いでいるが、雑念を払って勝美の肌を舐めまわし、撫で回すことに集中する。僕が勝美に触られたら、また暴発してしまいそうだから、勝美には手を頭の上に上げさせて、ベッドの上の宮の部分を軽く持つように誘導する。たまたま板の飾りの部分が手で握れるようになっていたので、そこを握らせて、勝美の耳にそっと囁く。
「手はこのまま。思わず力が入ることもあるかもしれないけど、そこを握っていてね。」
喘いでいる勝美が、どこまで僕の言葉を理解しているのか判らないけど、どうやら勝美は僕のペニスが入る瞬間が痛いのではないかと考えて、それで僕がこんな指示をしたと誤解しているように見える。ま、どう思われようと、今はどうでも良い。この手が僕の身体を刺激しないようにしないと、前回の勝美のように男性側がイカさ

れて気絶しちゃうことだって、十分に考えられるんだから・・・。挿れる前に二度も続けて暴発しちゃったら、僕の沽券にかかわる問題だ・・・。

次に、乳首を順番に舐め回す。かつて僕についていた乳首。当時は、そんなに大きな胸ではなかったので、口が届かなくて自分で自分の乳首を舐めたことはなかった。けど、手で弄ったときの感触から、どのくらいの力でどう刺激するのが一番感じるかはわかっている。その記憶を頼りに、唇と舌をつかって、左右交互に刺激を加える。それと同時に、開いた右手を胸から下に滑らせて行き、勝美の股間をさわさわと刺激する。

「ぅんっ、あっ、ぁひっ、んっ。」

目を閉じた勝美が可愛い声を押し殺すように喘ぐ。僕はいよいよ、勝美のスリットをスリスリと擦るように刺激しながら、その上のクリトリスも同時に中指の腹でクリクリと刺激した。クリトリスへの刺激は、本当にそっと、触るか触らないかという程度が良いんだ。これをしばらく続けていると、もう頭が変になるくらい感じてくる筈なんだ・・・。

「あっ、あっ、あぁっ、ちっ、千博っ、千博っ、もうっ、もうっ、挿れてっ、お願いっ、挿れてっ、早くっ、挿れてっ、ひっ、ぃひっ、おっ、お願いっ。」

いよいよ勝美が焦れてきた。でも、これからが本番なんだ。意地悪をする訳じゃないけど、ここから連続イキ状態までは、もうすぐだ。勝美が気絶する位の快感で、僕がリードするんだ。そうすれば、ベッドでも主導権を握ることができる筈だ・・・。

「ひっ、ぃひっ、だめっ、はっ、早くっ、もうっ、あたしっ、だめっ、もうっ、ひっ。」

乳首を舐め回し、唇でカプッカプッと甘噛みしていたけど、そのままキスのシャワーを浴びせながら顔を下に移動させて、ついに股間を舐め始めた。といってもシックスナインではなく、僕の身体は勝美の足の間に下ろしてしまい、僕が勝美のあそこを口で刺激しつ

つ、手は勝美の胸を刺激するという体制で、勝美は僕に言われたとおり、両手でベッドの宮の部分を握っているため、僕が一方的に勝美を責めるようになっている。よし、これは良い体制だ。これなら安心して勝美を可愛がることができる・・・。

「さ、じゃいよいよ、天国を見せてあげるよ。安心して僕に全部任せてね。」

　勝美のスリットを丹念に舐める。また舌を挿入して、内部も舐め回す。自分のあそこを舐めたことはないけど、どこが感じるかは熟知しているから、そこを重点的に責める。その間にも、両手は胸をさわさわと刺激し続ける。また乳首を軽くコリコリと揉み上げるように扱く。

「ひぃぃぃっ、ぃひっ、いひっ、ぁあっ、いひっ、っくっ、ぃくっ、いぃぃっ、いくぅぅっ、いくーっ。」

　どうやら、連続イキ状態になってきたみたいだ。勝美は自分でここまでやってみたんだろうか。でもここで手を緩めず、さらに続ける。なんだか勝美を苛めているみたいだけど、その一方で勝美を征服しているような気分になる。これが父さんたちの言う、主導権を握るということなんだろう。

「だっ、だめっ、だめっ、とっ、止まらないっ、ひっ、たっ、たすけっ、助けてっ、止まらないっ、あっ、またっ、またいくっ、ぃひっ、またっ、いくっ、だめっ、助けてっ、いくっ、いくーっ、またっ、いひっ、っくっ、もっ、もうっ、死ぬっ、たすけっ、千博っ、だめっ、ぁあっ、まっ、またっ、千博っ、千博っ、たすけっ、もうっ、んくっ、しっ、死ぬーっ。」

　よし、そろそろ頃合いだ。唇と舌をつかって、勝美のクリトリスをクリッと剥きあげ、チューッと強く吸った。

「いひーっ、きーっ。きーっ。」

　ひときわ大きな叫び声を上げると、瞳がぐるんと裏返り、白目を剥いた勝美はくてっとなって意識を手放した。『よし！勝った！』何故か、そんな気分になった。男性の性衝動って、やはり征服欲み

たいだ。でも、これでさっきの暴発は、何とか帳消しにすることができたかな・・・。そう思いながら、勝美の身体に自分の身体を重ね、ペニスをスリットに合わせて、入口をそろそろと探る。ここで失敗する男子は多いらしいけど、さっき暴発して一度射精しちゃっているし、僕は自分のものがどういう角度でどこについていたのか熟知しているから、さすがにそれは間違いようがない。それで、先端を合わせると、勝美に呼びかけた。だって、二人のはじめての体験が気絶したまま挿れられてたなんて、いくらなんでも酷いからね。

「勝美、勝美、大丈夫？・・・ねえ、気持ちよかった？・・・いよいよ挿入するよ？・・・いいかな？」

白目を剥いて意識のなかった勝美が、急にぱっと目を開いた。

「千博っ、千博っ、千博ーっ！！」

そう叫ぶと、ベッドの宮を握っていた両手をガバッと僕の背中に回し、思いっきり抱きしめてきた。と同時に、僕の口に一気に吸いつき、舌を思い切り入れてきた。

「んっ、んんっ、ぁむっ、んむっ、むむっ。」

僕も、無我夢中で勝美の口を吸い、舌で勝美の口内を舐め回す。すると、勝美が物凄い勢いで、両足を僕の腰に回して、蟹のようにしっかりと抱きつくと、その足で力一杯僕の腰を引き寄せ、自分の腰を思い切り前に突き出した。

ズボッ。

「あっ、ぁあっ、かっ、勝美っ、勝美ーっ。」

なんという快感！！一瞬で根本まで銜え込まれてしまった僕のペニスは、亀頭の部分が四方八方からグネグネと肉襞に包まれてやさしく刺激され、肉茎の部分は膣の入口から中程にかけてキュッキュッと絞り出すように扱かれている。こっ、こんなのっ、ダメだっ、腰から全身に広がる快感！・・・もうっ、ペニスがっ、脳がっ、限界っ。・・・くっ、我慢がっ。・・・ぁあっ・・・むっ・・・無理っ！！

「勝美ーっ。」「千博ーっ。」

『いっ、いくっ、いくーっ、いくっ、いくっ、いくーーっ。』
　二人揃って同時に、あらんかぎりの大声で叫んだ。階下にご両親が居ることなど、考える余裕もなかった。ドピューッ、ドピューッと、射精が止まらない。幾度も幾度も、無限に射精が続くような感じがした。僕の体内から、総ての精子が出ていくような感覚。いや、僕の男の子の素がすべてペニスから吸い出されるような感覚の中で、僕も勝美も二人で抱き合ったまま意識が薄れて行った・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

　僕たちは何分位気絶してたんだろう。二人ともしっかりと抱き合い、僕のペニスはまだ勝美の膣(なか)に入っている。というか、勝美が自分の足を僕の腰にしっかりと巻きつけ、締めつけているため僕は腰を離すことができない。これって「だいしゅきホールド」とかいうんだっけ。勝美はまだ意識が戻っていないようだけど、僕の胸から喉のあたりに顔を埋めて、満足しきった様子で休んでいる。可憐で可愛くって、勝美がこんな魅力的な女性になるとは、思ってもいなかった。それに勝美のマンコ、もともとは僕についていたものだけど、今、こうして男子としてペニスを挿(い)れると、その包まれるような暖かさと、キュッキュッと締めつけてくる不思議な動きに、腰も脳味噌も蕩(とろ)けるようだ。これは、もう絶対にこのペニスを離さないと強く主張しているようで、僕からすると、僕のペニス（といっても勝美から貰ったものだけど）が勝美の膣(なか)に囚われてしまったように感じる。いや、僕としても、この蠢(うごめ)くような蠕動(ぜんどう)の中で、もうここが自分の本来居るべき場所であり、絶対に出たくない、常にここに入っていたい、そして、この中こそが自分の終(つい)の棲家(すみか)であり、どこにあっても、最後は必ずここに帰ってくる、安住の場所だと、そう確信した。
　そんなことを考えていると、半勃(はんだ)ち状態だった僕のペニスは、ま

たムクムクと元気になってきて、二回戦目の準備が整った。勝美はまだ僕に抱きついたまま眠っているけど、そのまま少しだけ腰を動かしてみた。
「んっ・・・んんっ・・・、ぁあっ・・・あれっ・・・千博？・・・あたし？・・・？？・・・ぁんっ？・・・あっ？」
まだ何となく眼の焦点が合っていないようだけど、勝美がうっとりして快感に身を任せている。僕もペニスから蕩けるような快感が広がって、腰の動きが次第に大きくなってきた。
「勝美、大好きだ。愛している。もう絶対に離さない。」
「あたしも愛している。千博とこうなるのを、もう何年も夢見ていたの。挿れるほうから挿れられるほうに代わっちゃったけど、千博と身体を重ねることができて本当に幸せ。」
「痛くなかった？勝美が急に自分で腰を打ちつけてきて驚いちゃった。それで僕もあっと言う間にイッちゃったけど・・・。」
「全然痛くなかった。あたしも射精された瞬間に激しくイッちゃった・・・。」
「子宮の中に射精されるのって、こんなに快感だとは思わなかったわ。何て言うか、心の底から、あなたのものになったんだって、精神的な満足感が物凄いの。種付けされてるんだ、あたしはこの人の子供を産むんだっていう感覚、これ男子のときにはまったくなかったことだし、考えもしなかったことなんだけど、精神的な絶頂というのかしら、心がイッちゃうような、そういう感覚なのよ・・・。」
「そうなんだ・・・。僕は元女子として、勝美が言っていることは何となく理解できるけど、実際に身体内にペニスを受け入れた経験もなければ、射精された経験もないんで、どうもピンとこないな・・・。やっぱり手術前に勝美にやっといて貰えばよかったかな・・・。」
「それはそうよね。あたしも、経験がないから正確なところは違うかもしれないけど、千博はあたしの膣の一番奥深くで射精した瞬間、『勝った』とか『征服した』とか『俺のものだ』と感じなかったか

しら。」
　ぎくっ！！・・・何でそんなことがわかるの？！？！・・・確かにそういうように感じた。「やった」とか「勝った」というように感じていた・・・。
「それが自然なのよ。男子の性衝動っていうのは、自分の精子を女性の子宮に放出すること、自分の子種で種付けすること、それが究極目標だから、子宮内に射精できると、やった！という達成感で一杯になる筈よ。まあ、あたしも経験がある訳じゃないけど、これまで男の子のときはずっと千博の子宮に射精したいと、いつも考えていたんだからね・・・。」
「そうなんだ・・・。でも、これで勝美が希望したとおり、勝美のペニスと僕のマンコで初体験ができたね。僕たちの、一生忘れられない記念日になったよね。・・・ありがとう・・・。」
　そんな話をしているうちに、あっと言う間にペニスが限界に近付いてきた。ピストン運動は、ひとりでにどんどん速く激しくなり、ベッドが大きくギシギシと揺れて、振動が二階の床にもビンビン響いている。階下のお義父さんやお義母さんにも、間違いなくわかってしまっているだろうけど、もう腰がとまらない。勝美も次第に息が上がってきて、上気してきた。二回戦を始めて、まだ2分か3分しかたっていないけど、もう出ちゃいそうだ。
「勝美っ、勝美っ、ぼっ、僕っ、そろそろまたっ、・・・あっ、ぁあっ、んっ、んんっ、がっ、我慢がっ。」
「あっ、あたしもっ、あたしもっ、もうっ、千博っ、千博っ、いつでもっ、いつでも来てっ、お願いっ、またっ、また中でっ、中で射精してっ、・・・種付けっ、種付けしてっ・・・。」
　二人とも、無我夢中で力一杯腰を打ちつける。ガタン、ガタン、ギシッ、ギシッと、ベッドが大きな音を立てて揺れ、振動は床にさらに大きく響く。
「ひっ、ぃひっ、でっ、でるっ、でるーっ。」
「あっ、ぁあっ、ちっ、ちょうだいっ、ちょうだいっ、ひぃーっ、

ひぃーっ。」
「「イっ、イクっ、イクーっ、ィクっ、イクっ、イクーっ、イクーっ、ィイーっ！！」」

またしても二人揃って大声で叫びながら、二人同時に激しくイッた。身体内から精子が全部出て行くような感覚とともに、長い長い射精が終わって僕は急に賢者タイムとなり、階下のご両親に絶対聞こえているということが恥ずかしくなって、真っ赤になった。
「ねっ、声、大丈夫かな？」
そう言うと、勝美も瞬時に気がついたらしく、耳まで真っ赤になって、うろたえ出した。
「もう、仕方ないわよね・・・。何をしているのかはわかっているんだから、理解してくれると思わないと・・・。」
「絶対に全部聞こえちゃってるよね？・・・またからかわれちゃうのかな・・・。あんなに激しくベッドを揺らして、最後は二人揃って大声で叫んじゃったんだょ・・・。」
理屈では勝美の言うとおりだけど、自分でも話していて語尾がどんどん小さくなってくるのが判る。あとで顔をあわせたとき、なんて言われるだろう。いったい、どんな顔でお義父さんやお義母さんに話をすれば良いんだろうか・・・。それともいっそ、「ごちそうさまでした！！」とか、「娘さんの処女は美味しく頂きました！！」とでも言えば、笑って許してくれるんだろうか・・・。
憂鬱（ゆううつ）だ・・・。

第３４話　千博の憂鬱

　しばらく挿入したまま、二人で抱き合っていた。まだ始めてから、あまり時間は経っていない。だって二回とも僕が一瞬で射精してしまったから・・・。でも、感覚的にはもう何時間も愛し合ったような気がして、体力的にも精神的にもクタクタだ。ペニスはさっきから賢者タイムなのか、お休みモードに入ってしまっているみたいだ。それにしても勝美の膣内(なか)は最高に気持ちよく、抜きたくない。もしかして、僕のマンコは名器だったのかしら・・・？

　二人でチュッチュッとキスをしながら、何を話すでもなく、お互いの眼を見つめ合い、微笑みあった。

「ふふっ、うふふっ。」

「えへっ、えへへっ。」

「よかったね。」

「うん、すごくよかった。」

「声、絶対に聞こえちゃったよね・・・？」

「多分・・・。間違いなく・・・。」

「どんな顔して・・・。」

「知らんぷりするしか・・・。わかってくれると・・・。」

　軽くキスをしながら、たわいもない話をする。これが、俗に言うピロートークというやつなんだろう。これをちゃんとやるかやらないかで、男女の関係が随分違ってくるって、前に聞いたことがあるんだけど、こんなに楽しくて幸せな気分になることを省略するなんて、あり得ないと思った。

　まだ繋がったままで、身体をぴったりと密着させ、しっかりと抱き合っている。幸せ一杯で、二人とも、もう絶対に離れないといわんばかりに手と足を互いの身体に絡みつかせるように回している。

　勝美の身体は、なんて温かいんだろう。それに、こうして抱き合

っていると、なんて心が暖かくなってくるんだろう。僕たちの身体も心も、相性は最高なんだと、改めて思った。人生の幸せとは、こういうことなんだろうな。やはり勝美と結婚できて良かった（まだ正式じゃないけど）。勝美の決断に、ただ感謝するしかない。僕は一生をかけて勝美を幸せにする。それが僕の幸せでもあるんだ・・・。

しばらく、二人でイチャイチャしていたけど、さすがにずっと、ペニスを挿れっぱなしにしておく訳にもいかず、抜くことにした。そっと離れると、コポッというような音がして、まるで栓を抜いたビンを倒したような、大変なことになった。

「あっ、ああっ、溢れてきちゃった・・・。止まらないのっ。そのタオル取ってっ。」

勝美が焦って手で股間を押さえながら言った。僕はベッドの周辺に沢山置いてあるタオルの意味がわかって、急いでそれを2〜3枚手にとって勝美に渡した。

「よかった。ベッドに大きなバスタオルを3枚も重ねて敷いておいて・・・。お母さんに言われていたのよ。最低でもコップ二杯分位の水を零しても大丈夫なようにしないとねっ、て。」

そうなんだ。さすが、お義母さんは、こういうことまですべてお見通しという訳か。とすると、さっきの嬌声を聞かれても、まあ仕方がないか。そもそも、勝美の家で交換初夜をやると決めたんだから、当然これも想定しなければならなかったんだ。なんとなく、いつもみたいに誰もいない状態に違いないと、勝手に考えたのが間違っていた・・・。お義父さんが在宅だと聞いて、そっちばかり気になっちゃってたけど、ご両親が階下に居るのに処女の娘をやっちゃうなんて、よくよく考えたらものすごい話だ。今更ながら、どんな顔をして話をすれば良いのだろう・・・。

「ありがとう。かなり中まで拭いたから、もうそんなに垂れてくることはないと思うの。一応、サニタリーショーツを履いておくから、

大丈夫だと思うわ。」

「ごめんね。僕がいっぱい射精（だ）しちゃったから・・・。」

「ううん、もともとはあたしのものだったんだし、元気な証拠じゃない。種付けして貰うためには、大事なことよ。・・・じゃあ、あなたのもきれいにしてあげるわね。」

　そう言うと、てきぱきとサニタリーショーツにナプキンをつけたのを履いた勝美が態勢を入れ換えて、僕のペニスをペロペロと舐（な）めだした。これってお掃除フェラとかいうやつだ！男の憧れのひとつだって、何かで読んだことがある・・・。男性の精液と自分の愛液でドロドロのぐちゃぐちゃになったものを舐（な）めて綺麗にするなんて、いくら愛し合っている恋人同士でも拷問じゃないか・・・。僕は今の勝美のあそこを舐（な）めて綺麗にできるだろうか？

　・・・勝美、そこまでしてくれるなんて！・・・と感激したんだ。・・・すると・・・。

「さっきは、あたしに天国を見せてくれたわよね。千博。・・・だから、今度はあたしが天国を見せてあげる。・・・男性も、すごい快感を得られる場所があるのよ・・・。あたし、去勢されたときに先生にこれをされて、あまりの快感に泣き叫んじゃったんだから。」

「？？？」

　ペニスを舐（な）めていた千博が、妙なことを言い出した。けど、まだ頭が完全に覚醒していない僕は、千博が何を言っているのか、よく理解できない。いや、そもそも、射精直後で敏感になっている亀頭を舐（な）められて、腰から全身にじわっと広がった蕩（とろ）けるような快感に支配されてしまった僕は、思考がマヒしてしまい、何も考えられない。

「うん、お願い。ありがとう。」

　だらしないアへ顔のまま、考えることを放棄した僕は、そんな言葉を口走った気がする。

「千博、さすがに疲れちゃったのかしら。なかなか元気にならないわね。でも大丈夫。力を抜いていてね。」

「あひゃっ、ひっ、やっ、やめっ、止めてっ、そっ、そこはっ。」
　勝美が僕のおしりの穴に、精液と愛液をたっぷりまぶした指をぐっと突きたててきた。それも、まず一本ぐいっと挿(い)れられて、続いてもう一本・・・。
「あっ、あっ、あーっ、あーっ、ひっ、なっ、何っ、ぃひっ。」
「男子のここには前立腺っていう器官があって、ここをマッサージされると、女子のGスポットみたいに感じるの。それと前立腺を刺激されると、我慢できない射精反応が起きるのよ。」
　そういって、挿入した指をぐっと中のほうまで入れると、第二関節からクイッと曲げて、会陰の裏側、ちょうど尿道が膀胱に入る辺りを直腸側からコリコリとマッサージし出した。ものすごい快感！身を捩(よじ)って泣きたくなるような、全身がピクピクと痙攣(けいれん)するような、そんな暴力的な快感が襲ってくる。
「☆！！＊▽？※◎§＃★□」
　ペニスは一気にギンギンに勃起して、腹に付く位反り返っている。けどペニスそのものを扱(しご)くわけではないから、もどかしくて切なくて、頭が変になっちゃうっ。あっ、今、星がっ・・・。
「あっ、ぁあっ、あんっ、ぁあーん、あんっ、あひっ、だっ、だめっ、たっ、たすけっ、助けてっ、ひっ、あっ、ひっ、ひーっ、死ぬっ、死んじゃうっ、あんっ、ぁあんっ、ぼっ、僕っ、もうっ、あひっ。」
「これ、すごい快感でしょ。あたしもこれをされて、泣き叫んじゃったわ。でも、これって女子がおちんちんを挿入されて感じる快感に、どことなく似ているのよね。最初、先生に聞いたときは半信半疑だったけど、今はとっても良くわかるの。千博は経験せずに男子になっちゃったから、これで疑似体験させてあげるわね。」
「そっ、そんなっ、あっ、ぁんっ、あひっ、ぃひっ、いっ、いっ、ひっ、ぁあっ、あんっ、ぁあっ。」
「もう頭がグチャグチャになっちゃったでしょ。何も考えずに、快感に身を任せて、好きなときに思いっきりイッていいわよ。」

そういって、勝美がペニスをパクッと口にすると、喉の奥のほうまで一気に飲み込んだ。
「あひっ、いくっ、いくーっ、ひーっ、ひーっ、いくーっ。だめっ、だめっ、たすけっ。ぃひーっ。」
ちゅるるるるる・・・。
「ぃひーっ、ひーっ、だっ、だめーっ、すっ、吸われているーっ、きひーっ、ぁあーっ。」
ほっ、星がっ・・・。花火がっ・・・。意識がっ・・・。もうダメっ・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・ひろ、・・・千博、・・・大丈夫？・・・気持ち良かった？」
勝美が僕のことを覗き込んでいる。僕はどうしちゃったんだっけか？？と、ぼんやり考えていたら、記憶が戻ってきた。・・・そうだ、僕は勝美にお掃除フェラをして貰っているとき、お尻の穴から指を突っ込まれ、前立腺をグリグリと刺激されたんだ。そして、そのまま射精させられて、それをバキュームフェラされて・・・。その後の記憶がない・・・。
「ぁあっ？・・・勝美？・・・ぼっ、僕は・・・？」
一気に顔が赤くなった。よりにもよって、お尻の穴でイカされて、気絶しちゃうなんて。前に勝美とオーラルセックスをしたとき、勝美が僕のバキュームフェラで気絶したけど、あのときは男子が気絶するの？普通は女子のほうが連続イキで快感は強いんじゃないって、何の根拠もなく思っていた。でも、男子の快感って、ここまで凄いんだ。身を持って思い知らされた。まだ腰から股間にかけて、自分の身体じゃないみたいな感覚だ・・・。

「ごめんね。千博を気絶させるつもりはなかったの・・・。でも、これ凄かったでしょ。もう何が何だかわからない位、快感で頭が変になっちゃったんじゃない？これから、いつもやってあげるからね。楽しみにしててね。」

だめだっ！完敗だ！！やっぱり、もともと男子だった勝美には、どうやっても勝てないんだ・・・。あんなのされたら、毎回気絶しちゃう・・・。もう僕の男子としてのメンツはゼロになっちゃった。僕はこれから、毎回勝美に弄ばれちゃうんだ。女の子みたいにアンアン泣かされちゃうんだ・・・。そうしてお尻でイカされた挙げ句、気絶させられちゃうんだ。そもそも、勝美は元男子で、僕の性感帯は全部知っている。いや、よくよく考えたら、僕の性感帯を開発した本人じゃないか・・・。

これから、僕は勝美に調教されちゃうんだ。・・・そうだ！思い出した！！・・・前に勝美が持っていたエロ本に、かわいい男の子が何人もの女の子に苛められて、べそをかきながら無理やり射精させられている写真があったっけ！僕もああされちゃうんだ！！信じたくないけど、きっとあれが勝美の趣味だったんだ・・・。（怖い・・・。僕はどうされちゃうんだろう・・・。）

その後、勝美と二人でお風呂に入った。お風呂は二階にあって、結構広くベランダにも面しているので、二人で入っていると、ちょっとした温泉のような気分だ。勝美は甲斐甲斐しく世話をしてくれたけど、僕の心は鉛のように重く沈んで、打ちのめされていた・・・。

結局、最初は暴発、2回目（これが僕たちの初体験）は勝美を連続イキにした筈だったのに、一気に挿入させられて5秒も持たなかった。何とか普通にできたのは3回目だけ。それだって随分短時間で発射しちゃった。勝美は僕と一緒にイッてくれたけど、何だか合わせて貰ったみたいだったな。そして最後、お尻の穴でヒイヒイ泣かされて許しを請うなんて、まるで女の子だ。しかも最後は気絶させられちゃった・・・。

やっぱり新米男子じゃ女の子をリードして主導権を握るなんて無理だったんだ・・・。これまでの人生で、男子にも女子にも負けたと感じたことは一度もなかったのに、こんな酷い敗北感は・・・。勝美のお義父さんもだ。父さんに何て言えば良いんだろう・・・。でも、きっと、それが入婿の運命なんだ・・・（涙）。

風呂から出ると、勝美が替えの下着を持ってきてくれた。新品みたいだったので聞いてみたら、以前勝美が自分のために買っておいたトランクスとランニングだって。ドロドロでグチャグチャになっちゃった僕のトランクスは、勝美がうまく処分してくれるそうだ。新婚さんみたいで、ちょっと恥ずかしい。

その後、二人揃ってリビングに降りて行くと、勝美の両親がワインを飲んでいた。向かい合ったソファに座ると、冷えたロゼワインを注がれた。

「勝美の抱き心地はどうだったかな？二人とも、随分と楽しんでいたように聞こえたけど、はじめての感想を聞かせてくれるかな。」

「勝美はちゃんと女の子にして貰えたみたいね。痛くはなかったでしょ。千博さんが元女子だから上手で良かったわね。なかなか最初からは楽しめないのが普通なのよ。」

「はい、すばらしい初体験ができました。一生の思い出です。ありがとうございました。」

やっぱり、僕たちの声は完全に筒抜けだった！お義父さんもお義母さんも、明らかに僕たちが叫んだ内容を知った上での質問を繰り出してきた！！二人であれだけ大声を出している以上、聞かれなかったと期待するのも無理な話だ。何とか前から考えていた、当たり障りのない答えをしたけど、これで納得してくれるかな・・・。まさか、僕がお尻を責められて、アンアン言いながら気絶しちゃったことも聞こえているんだろうか・・・。最初に暴発しちゃったときは、多分、そんなに大声を出していなかったつもりだけど・・・。

もう心臓がバクバクで、午前中よりもずっと辛い。しどろもどろ

というのは、こういう状態を指すんだろう。なにをどうやったか、顔に全部書いてあるよ、と言われても不思議じゃない気分だ。
ふと、横を見ると、勝美がまた真っ赤になって俯いている。女性はこういうときズルい。恥ずかしがって俯いているという必殺技で防御することができるんだ・・・。そんなことを考えていたら、勝美がさっきと同じタイトミニのスカートを履いていることに気がついた。まさか、午前中のスケスケの下着を今も着ているの？！・・・いや、いくらなんでも・・・？
あ、まずい、そんなことを考えてしまったら、またしてもテントを張ってきた。風呂では、うなだれたままだったのに、何でまたここで？！
「おや、千博君は、あんなにしたのに、まだ愛し足りなかったのかな。元気がいいね！よかったら、また上で続きをしてきても良いんだよ。もう二人は夫婦同然なんだから、いくらでも好きなだけやると良い。」
「いえ、６時までに病院で事後診察を受けなければならないので、時間がありませんから。」
「それなら、病院に行ってきて、夜に続きでも構わないさ。もうここは君の家と思ってくれて良いから、いつでも好きなときに勝美の部屋に泊まっていって良いんだよ。」
最悪だ。こんなところでまたテントを張ってしまって、それをお義父さんにからかわれるなんて。もう僕の精神はボロボロだ。婿に入るって、こういうことなんだ。しかも今のお義父さんのセリフ。僕が何回イッたかを、完全に把握していたようだ・・・。でもこれは僕が望んだ人生だ。これから一生、セクハラに耐えながら、勝美の尻に敷かれるんだ。
いや、尻に敷かれるだけなら、そんなの僕は全然構わないけど、きっとお尻の穴とか、いろいろ調教されちゃうんだ・・・（泣）。
「まあ、とにかく二人の初夜も無事終了したし、卒業したら直ぐにでも結婚するんだろう。だから、私たちから二人に、ささやかなプ

レゼントがある。もうすぐクリスマスだから、二人で楽しく過ごすためのものだ。新婚旅行の代わりと思ってくれても良い。」
そう言いながら、お義父さんが僕に封筒を差し出した。見ると、有名な耳の大きいネズミのマーク。千葉県にある某ネズミーランドの封筒だ。
勝美と二人で開けてみると、そこにはクリスマス・イブのオフィシャル・ホテルのスイートルームの宿泊券と、クリスマス・イブとクリスマスの二日間有効の、遊園地の入場券がセットになったペアチケットが入っていた。
「これって・・・。」「すごい・・・。よく取れた・・・。」
勝美と二人で驚いた。もう130年近い歴史がある千葉のネズミーランド。今もカップルには大人気で、そのクリスマス・イブのペアチケットと、オフィシャル・ホテルのスイートルーム宿泊券なんて、プラチナチケットもいいところだ。普通じゃ、まず入手できない。
「ちょっとしたツテがあってね。まあ、あまり大したことができる訳でもないので、本当に気持ちだけだけど、楽しんできてくれると嬉しい。」
「それから、これはプレゼントでも何でもない、ただの事務的な話だけど、家のスペアキーを渡しておくから。これからはいつでも、好きなときにやってきて、自由に家に入って貰って構わない。誰もいなくても気にせず、自分の家だと思って寛いで欲しい。勝美の部屋で休むもよし、なんだったらもうこっちに住んで貰っても構わないよ。それに気が向いたら、いつでも勝美を押し倒して構わないから。」
「・・・ありがとうございます・・・。」
どういう反応をすれば良いのか、さっぱりわからないから、何も気の利いたことも言えない。でも、これは素直に嬉しい。これで僕は遠藤家に受け入れられたということなんだろう。綱渡りだったけど、何とか試験に合格した気分だ。勝美も赤い顔で恥ずかしそうに

しつつも、全身から嬉しいオーラを放出しているので、まあ勝美がいるときには好きに来てねという意味にとっておこう。

その後、お義父さんとお義母さんに本日のお礼を述べてから、二人して終了診察を受けるために病院に向かったのは、5時を回っていた。

第３５話　行為の後で

あのあと、あたしは榊君の腕枕で少し休んでいたら、どうやら疲れて寝てしまったようで、榊君に起こされたのは小一時間経ってからだった。（榊君は腕が痺れていたみたいだったけど、そんな素振りを見せないようにそっと腕を回していた。）

もうこの人が自分の運命の人で、処女を捧げた相手の子供を産みたい、何度でも愛して貰って妊娠したいと、そう思うようになっていたあたしは、ごく自然にまた榊君を求めていた。榊君も、まんざらでもない様子で、しかも先生からは何度でもやるようにと言われていたので、すぐ応じてくれた。あたしとしては、さっきみたいに子宮に射精して貰いたい、実際に妊娠はしないとしても、さっきみたいに種付け射精をして欲しいと思ったんだけど、榊君はコンドームの使い方を練習してみたいと言い出して、二回目はコンドームを付けてみた。でも、いろいろ経験豊富な榊君でも、さすがにコンドームは初めてみたいで、そもそもおちんちんを扱うのにも慣れていなくて、うまく付けられないの。変に皺がよっちゃって、しかも先端には空気が入ってしまい、ダメな付け方の見本みたいになっちゃったので、あたしが新しいのを付けなおしてあげた。榊君はあたしがなぜ上手なのか、どこで経験したのかと不思議がっていたけど、あたしは男の子のとき、いずれ必要になると思ってコンドームを買ってきて、何度か練習したことがあったから。それに何といっても、あたしのおちんちんだったんだし・・・。（こういうのって、大抵の男子は経験があるんじゃないかしら。でも、あたしは結局そのチャンスがないまま、去勢されてタマを抜かれちゃったんで、円と愛し合ったときも使わなかったのよね・・・。）

ともかく、コンドームを付けて1回、その後、生でさらにもう2回、都合４回も肌を重ねて、あたしも榊君も、お互いが特別な人だ

と思えるようになっちゃったの。二人とも、オキシトシンとやらが出まくったんだわ。特にあたしにとっては、たった1回で心が完全に書き換えられて、もうこの人が自分の運命の相手としか考えられないまでになったのに、その後さらに連続3回もされちゃったことで、もう自分のおまんこは榊君専用の雌穴になって、これからあたしの口と喉も、榊君の専用の雌穴になるんだと、完全に心に刻みつけられてしまったの。だって身体の快感だけでも頭がバカになる程の絶頂だったのに、自分のものだったおちんちんを入れられ、子宮に種付け射精されたことで、最高の精神的絶頂も味わわされてしまい、その二つの絶頂が精神と身体へ同時に襲ってきて、これまで経験したこともない快感を、これでもかと心と身体の両方に強く刻みつけられちゃったんだもん。もう絶対に忘れられるはずがないわよ・・・。今のあたしは、女の子のほうが絶対にいいんだ、男の子なんて、つまらないし、これまで損をしていたと、そんなことすら思うまでになっていたの。

　だから、ごく自然な感情として、恋人として付き合って欲しいと告白したら、榊君も快諾してくれて、あたしは天にも登るほどの幸せを感じたわ。だけど、榊君は、ひとつだけお願いがあると言い出した。

「前から話しているとおり、僕は君に対する責任があるし、それ以前に君は本当に女性としての魅力に溢（あふ）れていて、男性から見て理想的なパートナーだ。君が女性化する前からそう感じていたけど、今日君と愛し合って、改めて確信した。だから、僕からも是非、お付き合いをお願いしたい。ただ、ひとつだけ理解して欲しいんだけど、僕は一級男子として複数の女性の相手をして、子供を沢山つくらなければならない。それが一級男子の義務だと思っている。君のお父さんだって、そうだろう。だから将来、君一人だけを愛するということにはならなくても、浮気だとか言わないで欲しい。あ、でもちょっと嫉妬されたり、焼餅を焼かれるのは嬉しいかな。勿論、君のことは常に一番に愛することは約束するよ。第一妻の座は、常に君

のためにあるって、前にも話したよね。」

「ええ、勿論わかっている。一級男子である以上、複数の女性がいても、それはしかたないわ。でも、あたしのことを忘れないでね。」

そうなの。今の日本の法律では、一級男子は正妻を二人、あとは本人の甲斐性（かいしょう）で側室を何名でも好きなだけ持てるんだわ。そして一人でも多くの子供を設けることが推奨されている。父さんは側室こそ持っていないけど、正妻は芳恵さんと母さんの二人がいて、子供は5名もいるのよね。二級以下の家族は、一人の正妻との間に、せいぜい3名程度の子供しかいないのが普通だから、これは一級男子の義務だという榊君の言葉は、あたしにも納得できた。

「僕ばかりが複数の女子と付き合うのは、何だか申し訳ないな。お互い、まだ若いんだから、君もよかったら他の男子と付き合ってみたらどう？恋愛は心を豊かにするし、男性経験は女性としての魅力を高める効果があるらしいから、君も僕も、いずれ結婚する段階では相手を決めるにしても、それまでは自由に経験を積むようにしよう。」

言ってることはわかるけど、これって結局、あたしたちの関係は身体だけ、要するにセフレでいいようってことかしら・・・。まあ、最初はそこからスタートする関係だってアリだけど、ちょっと不安・・・。でも、第一妻の座は空けていてくれるって言っているんだし、信じるしかないのかな・・・。二重の意味で男子のときには、考えもしなかった感情なんだわ、きっと・・・。

その後、順番にシャワーを浴びたんだけど（芳恵さんに言われたとおり、頭と顔にはお湯をかけないように注意して、首から下だけをざっと流した）、いくら流してもおまんこから精液と愛液が混じったものがとろとろ流れ出てきて、止まらないの。膣に指を入れて掻きだすように洗ってもみたんだけど、いったいどれだけの量の精液を入れられたのかしらと思う位、あとからあとから漏れ出てくる。これがたった3回分の射精量だなんて、いったいあたしのおちんちんとタマタマは、どれだけ優秀だったのかしら？？仕方ないから、

ある程度洗ったところで、芳恵さんが万一のこともあるから、常に持ち歩いていると良いわよと渡してくれた生理用ナプキンを当てて、サニタリーショーツを履き、その上からさらに来るとき履いてきたショーツを重ね履きして、何とか誤魔化したんだけど、漏れないしら・・・。

時間は4時を回ったところで、10時にこの部屋に来てから、合計で6時間もセックスしていたんだと、改めて思ったとたん、お腹がすいていることに気がついた。榊君も同じだったらしいんで、二人で冷蔵庫に入っていたワインとサンドイッチで遅い昼食を食べてから電話をしたら、看護婦さんがやってきて、診察室に連れて行かれた。そこで二人別々に診察を受けたんだけど、あたしは女子になって初めて内診台に乗せられ、鳥のくちばしのような器具で膣を大きく広げて内部を診察されちゃったの（といっても、去勢手術のときはまだ男子だったけど同じ格好をさせられてタマタマを抜かれ、さらに射精までさせられちゃったし、本番の手術のときも麻酔で意識がなかったにせよ、同じ格好で手術を受けた筈なのよね・・・）。さっき、よく洗ったつもりだけど、まだ精液が残っているんじゃないかと心配していたら、何とその膣内に射精された精液と、あたしの愛液、それに処女膜が破れたときの出血が混ざったピンク色のどろどろの体液を、針のない注射器のようなピストンで吸い出されて採取され、試験管に入れて見せられたのには、涙が出そうなほど恥ずかしかったわ。しかもあそこを大きく広げられた状態で、処女膜が本当に破れているかも撮影され、そのアップの画像が先生の前のディスプレイにチラッと映ったのが見えちゃったの。きっと、去勢されたときの写真（切り取った睾丸を腹に載せられているやつ）とか、手術中のおちんちんが切り取られた瞬間の写真（絶対に証拠写真がある筈だわ！）なんかも、あの中に全部保存されているのかしら・・・。

わかっていたけど、あたしにはもうプライバシーなど何もなくなっちゃったんだ・・・。

でも女性は妊娠すると、出産まで毎月こんなことをされちゃうのよね。あとで聞いたら、榊君はさすがに内診台には乗らなかったらしいけど、やはり先生におちんちんをさんざん弄（いじ）くられたんだって。勃起力とかを測定されたりして（どんな測定なのかしら？もうあたしには理解できない世界になっちゃったけど・・・）、最後はまた射精させられて、精液の量とか飛距離とかを測定されたらしいの。さすがに今日６回目ともなると、なかなか反応しなくて、以前あたしもやられたように、お尻の穴をグリグリされて無理やり射精させられたんだって。さすがの榊君も、結構辛（つら）かったって言っていたわ。あたしのタマタマは、何とか最後まで頑張ったようね・・・。

　その後、隣の部屋で榊君と二人揃ってアンケートに回答した。このアンケート、また例によって個人の恥ずかしい性癖とかを細かく聴かれるのかと思ったら、全然違ってて、何だか知能テストか性格判断テストのような、日常的な事柄に関する感じ方とか、こういう場面ではあなたはどうしますか、とか、これについてはどう考えますか、などと問われるような問題が１００問位あって、何かの間違いじゃないかと思った。でも榊君は何となく思い当たることがあるようだったので、聞いてみた。
「このアンケート、まるで知能テストか性格判断をやっているみたいなんだけど、何だかわかる？」
「うん、多分、これは心の男性化、女性化の度合いを見ているんだと思うよ。性格というのは、勿論個人差が大きいけど、それでもやはり男性的な思考法とか男性の考えそうなこと、逆に女性的な思考法とか女性の考えそうなこと、性差による意識の違いや傾向のようなものがあるんだ。そういうのを最後の仕上げに調べているように見えるね。」
「そうなんだ・・・。とすると、あたしはこれできちんと心の中まで女の子になったかどうか、女の子としての仕上がり具合を確認されている訳ね・・・。」

「やっぱり、こういうことを最後にやって、必要ならばカウンセリングとかをしてくれるんじゃないかな。これって、前にどこかで読んだ記憶があるんだけど、性同一性障害の患者さんに対するフォローアップのプログラムだったたと思うよ。」

あたしも榊君も、そんなに悩むこともなくパパッと記入してから、二人で病院を後にした。処女を喪失したといっても、榊君が上手だったせいか、よく聞くような痛みは全然なかったんだけど、やっぱり何となく股間に違和感があるのよね。何か異物が挟まっているような、あるいは膣壁が何となく引き攣るような感覚があって、ちょっと不快なの。それで歩くと、自然とガニ股になっちゃってて、これって見る人が見たらわかっちゃうんじゃないかしら・・・。なぜって、あたしたちのずっと前のほうを、学生服とセーラー服の、やはりカップルらしき二人が並んで歩いていて、遠いんで誰だかまではわからないんだけど、この路は病院から駅に向かう一本道だから、あの二人もあたしたちと同じように交換初夜を済ませたんじゃないかしら。その女性のほうが、遠目にもよくわかる、あからさまなガニ股で、しかも歩き方が随分変なのよね。あれを見ると、あたしもきっとガニ股で、いかにも「今やられちゃいました」「突っ込まれて喪失しました」と言って歩いているように見えるのかしら・・・。ちょっと嫌だわ・・・。

そんなことを考えながら、二人で並んで歩いてきて、もうすぐ駅に着くとき、ふと気になって榊君に話しかけた。

「ねえ、あたしたち、お付き合いすることにしたんだから、名前で呼んでも良いかしら。」

「勿論構わないけど、明後日の終業式は、まだあまり馴れ馴れしくしないほうが良いかもね。理由は二つあって、ひとつは、君があまりに可愛くてチャーミングでグラマーで、はっきり言って以前の僕なんか眼じゃない位、女性として本当に魅力的になったからなんだ。はじめて登校すると、僕は多分、これまでのこともあって女子に囲

まれるんだろうけど、君は男子全員の憧れの的になって、間違いなく一気に学校のアイドル的存在になると思う。そんなとき、僕と君が馴れ馴れしくすると、僕はまだ慣れているけどさ、君は男子生徒全員の嫉妬とか羨望とか、そういうものを一身に受けてしまい、きっと難儀することになるよ。」
「それに君の、その美貌とモデルのようなグラマーな胸、おそらく女子からも羨望とか妬みをもって迎えられるんじゃないかな。」
「しかも、君と僕はセックスしたというのを、みんな知っている訳だから、その結果として恋人になったなんて思われたらクラスで収拾がつかなくなっちゃうかもしれないね。」
あたしがそんなに魅力的な女子になったの？あまり実感がないけど、怜央がそういうなら、きっとそうなのかしら。それに怜央との初夜のことを根掘り葉掘り聞かれるのも、確かに嫌だわね・・・。
「わかった。じゃ、取り敢えず明後日はクールに行くことにするわ。でも、あたしの心の中では、もう怜央は怜央だからね。」
「僕も二人のときは優稀と呼ぶようにするよ。それとメールとラインを登録しよう。」
「わかったわ。今日はありがとう。それじゃ、また。」
やっぱり怜央はこういうところもスマートなのね。イケメンでスマートで、しかもベッドテクニックも上手・・・。これじゃ女の子が放っておかないわけだわ。あたしも、クラスのみんなの反感（男子からも女子からも、両方から反感を受けたらどうしよう？）を買わないように、それでいて怜央には捨てられないようにしないと・・・。いろいろ気を使いそう・・・。気をつけなくっちゃ・・・。

第36話　初夜の報告

あたしが家に帰ったのは6時を回っていた。千博は勝美の自宅で交換初夜をやったので、勝美と二人で病院に行って診察を受けなければいけないんだって芳恵さんが話していたけど、7時過ぎには帰って来た。聞くと勝美と二人で病院に行って、診察を受けてから、再度勝美を家まで送ってきたんだって。でも、千博は何となく元気がないみたい・・・。

「「「いただきます。」」」

千博の帰宅を待って、皆で夕食にした。昨日、あれだけ豪華な外食をしてきたので、今日は家で普通の夕食なんだけど、いつもは父さんだけにつくお酒（今日は日本酒）が、あたしと千博にも出されていたの。（義朗兄さんにもお酒が出ているけど、義朗兄さんはいつも殆ど飲まない。）今夜の献立はおでんだったから、熱燗が合うということみたい。でも、あたしも千博も、まだお酒は慣れていなくて、特に日本酒はワインより強いから、調子に乗って飲むとダウンしちゃうかしら・・・。それにしては、父さんも母さんたちも、あたしと千博にどんどんお酒を注いでくる気がする。

「さて、では本日の様子を報告して貰おうか。二人とも、どうだったかな。」

あたしたちにどんどんお酒を勧めていたのは、このためだったのね・・・。確かに素面（しらふ）じゃ、恥ずかしくて話せない内容だわ・・・。

あたしも千博も、真っ赤な顔でモジモジしていると、母さんが口火を切ってきた。

「ちゃんと女の子にしてもらったんでしょ。痛くなかった？」

「うん。・・・されちゃった。・・・痛くはなかった・・・。怜央・・・、あ、榊君は優しかった・・・。」

「そう。じゃ、良かったじゃない。素敵な思い出になったのかしら。」

「うん。・・・四回もして貰えた。・・・あたし、榊君が好きになっちゃったかも・・・。」

「それは素晴らしいことだ。女性は初めての男性のことが一生忘れられないと言う。相手の男性はどうだったんだ？お前はきちんと、相手を満足させることができたか？」

「・・・榊君も、あたしの奉仕にすごく喜んでくれた。それで、これからお付き合いすることになったの。」

「ということは、身体の相性もバッチリ、気持ちの上でも、初めての相手と相思相愛になれたということね。なかなかそうはならないものよ。本当に良かったじゃない。」

「うむ、男性とお付き合いをするようになると、心も身体も女性化がさらに進む。お前は男性がどうしたら喜ぶか、元からの女子よりは判っている筈だから、普通だと大きなアドバンテージになる。ただ、相手は元女子なんだから、少し勝手が異なるかもしれない。・・・まあ、そこは何事も経験だ。性別交換の相手と相思相愛になるというのは、案外ありそうでないレアケースかもしれないが、悪いことではない。是非お付き合いを深めなさい。」

「はい。」

「で、千博。お前はどうだったんだ。男子としてちゃんと女子をリードすることができたのか？相手は痛がらなかったか？」

「・・・・・。」

あれ？なんかおかしい？？千博は俯(うつむ)いたまま、黙っている。

「どうした、千博。男なら、そんなに恥ずかしがることでもないだろう。こういう話題にも慣れないと、男子として、いや、成人した大人として、ダメなんだぞ。」

義朗兄さんが、横から促した。

「ぅっ、つっ、くっ、ぇっ、ぅうっ、ひぐっ、ぅぐっ。」

えっ？千博が泣いている？！！見ると、肩が小刻みに震えていて、

俯いた顔から涙がポタッと膝に零れた？！
「どうしたの千博？何かあったの？？」
　芳恵さんが驚いて問いかけた。
「ぼっ、僕っ、僕っ、しっ、失敗っ、失敗しちゃったのっ！・・・ぼっ、・・・暴発しちゃったんだっ！！」
　涙をぽろぽろ零しながら、千博が顔を上げた。
「なんだ、そんなことか。千博と勝美さんは、性別交換する前から恋人だったんだろう。なら、別段、大した話じゃないと思うけどな。勝美さんだって十分わかっているだろうし。」
　義朗兄さんが慰めた。
「勝美はそんなことを気にする筈はなくってよ。正式な手術の前だったけど、あたしにも、千博との初夜を心待ちしているって、何度も話していたから。それに、二人で診察に行ってきたってことは、最終的にはきちんとできたんでしょ？だったら問題ないじゃない。」
「でっ、でもっ、でもっっ、父さんにも、勝美のお義父さんにもっ・・・、あんなに勝美をしっかりコントロールしろってっ・・・、ベッドでは男性がリードするんだって、何度も言われたのにっ・・・、僕っ、僕っ、見ただけでっ・・・、ぅぅっ、ぅううっ。」
「千博、確かに父さんはしっかりやってこいと言ってお前を励ました。しかしそれは男性として、また経験者として、ごく普通の励ましの言葉だ。特に他意はない。勝美さんのお父さんだって同じ筈だ。父さんが先日、わざわざ暴発に気をつけろと言ったのは、そうなる男子がとても多いからだ。性別交換とは関係なく、初体験で暴発してしまう男子は、半分以上だという。男子は皆、自分のプライドもあり、またその程度ではその後の男女関係にさしたる影響もないから黙っているだけなんだ。それがお前位の年齢の男子の生理現象なんだ。」
「そっ、それだけじゃぁないんだっ！・・・僕っ、ずっとっ、ずっと勝美にリードされてっ、・・・そっ、そのっ、勝美に何度もっ、何度も一方的にイカされちゃってっ、きっ、気絶っ、・・・うっ、

ぅうっ。もう僕はっ、僕は男子失格なんだっ・・・。こっ、これからも、きっと・・・。んぐっ、ぃひっ、くっ、ぅぐっ・・・。」

　なんだ、千博は勝美に責められ続けて主導権を取れなかったことを悩んでいるのね。でも、勝美はずっと男子だった訳で、自分のおちんちんの性感帯を知り尽くしているんだから、しかもあたしみたいに引っ込み思案の性格ではないから、これまで女性だった千博がどうやっても、手慣れている怜央のように上手くできる筈はないわよね・・・。

「千博と勝美さんが、これまでどういった関係で、どこまで進んでいたのか俺は知らないけどさ、これまでの二人の関係というのがあるだろうし、性別が変わっても恋人同士の関係というのは継続されているんだから、そこは二人だけの気の持ちようじゃないかな。普通はこうだ、なんて決まりがある訳じゃないんだし、他人がどうこうという話でもないだろう。もし仮に千博が勝美さんの尻に敷かれたように見えても、二人でそれを納得して楽しんでいるなら、夫婦の関係には誰も立ち入らないよ。」

　義朗兄さんが引き続きフォローする。昔のあたしに対する態度もそうだったけど、やっぱり義朗兄さんは、特に弟に対しては優しいのね。

「要するに、お前が勝美さんにたっぷり奉仕されて、夢のような最高の体験をさせて貰い、身も心も蕩(とろ)けてしまうまで存分に楽しんだということだろう。良かったじゃないか。泣くような話か？むしろ男冥利(おとこみょうり)に尽きる話だと思うし、父さんには、お前が家族の前で恥ずかしげもなく、閨(ねや)の様子を自慢して惚気(のろけ)ているようにしか聞こえんぞ。」

「それよりも、理由は何であれ、人前でそのように涙を流すことのほうが、男子としてずっと恥ずかしい、あるまじき行為じゃないか。昔から男は、自分の家族か親友が死んだときしか泣いてはいけないと言われてきたものだ。仮にお前としては不本意なことがあったとしても、過ぎたことをくよくよするのは、男ではない。最終的に目

的を達することができたなら、もう泣くな。いや、お前は頑張ってきたんだから、もっと堂々と胸を張れ。」
「俺も最初のときは失敗したな。結局できなかったもんな。で、友達とヤケ酒を飲んだのは、今となっては良い思い出だ。だから千博も、嫌ならその酒を飲んで忘れてしまえば良い。」
　知らなかった・・・。義朗兄さんでさえも、失敗していたなんて・・・。いつの話なのかしら。でも、だとするとあたしは円のおかげで、たった1回だけの、最初で最後の経験だったけど、男子として最高にすばらしい初体験ができたのね。あんな素晴らしい体験で童貞を卒業させてくれた円には、本当に感謝しても、し切れないわ・・・。
「・・・ごめんなさい。・・・でも今日のことは、忘れられないし、忘れたくもない。失敗でも何でも、僕と勝美の初体験なんだ。少し苦(にが)くても、恋人同士が処女と童貞を捧げあった一生の思い出なんだから・・・。」
　千博が涙を拭いて言い切った。どうやら二人に元気づけられて立ち直ったみたい。そもそも勝美はそんなこと、本当に気にもしていない気がするの。父さんが変な励まし方をするから、千博がプレッシャーでつぶされちゃっただけなのかしら。いずれ、笑い話になるわよね・・・。今度、勝美に会ったら、ベッドでも千博を立ててあげてって頼んでおこうっと・・・。

「父さん、それから母さん、こんな情けない僕が言うのは、おこがましいのは百も承知なんだけど、今ここで、どうしても言っておかなきゃならないお願いがあるんだ。」
　急に態度をあらためて、覚悟を決めたような目つきになった千博が、注がれていたお酒をぐっと飲み干すと、父さんを真っ直ぐ見つめて言い出した。
「うむ。勝美さんとの結婚の話だな。」
「うん。僕は勝美とは、できるだけ早く結婚したい。それは二人の

以前からの希望で、父さんや母さんにも話をしたこともある。だけど、もう一つ重要なことがあるんだ。それは、勝美との結婚に際して、僕が遠藤家の入り婿になって、勝美の家に入ることにしたいんだ。」

「そんなっ！！何でそんな話が出てくるの。あたしは聞いていないわ！」

　芳恵さんがうろたえて叫んだけど、父さんが手で制した。

「勝美さんが一人っ子だからだろう。勝美さんや勝美さんのご両親とは相談したのか？」

「今日、はじめてご両親に話をしたし、勝美にも今日告げた。勝美は僕の言うとおりに従うと言ってくれた。ご両親は、遠藤家のことを考える必要はないから、勝美と二人で一番良い方法を決めなさいと言ってくれた。」

「でも、これは僕のけじめの問題なんだ。僕の我儘（わがまま）で、男子になった。これは勝美にとっては、まったく晴天の霹靂（へきれき）だった筈なのに、何の躊躇（ちゅうちょ）もなく自分を犠牲にしてまでつきあってくれて、それどころか自分の身体を、自分の男性を、僕に提供してくれた。そこまでして僕と結婚することを最優先させてくれた。だったら、今度は僕が男子として勝美を幸せにする義務があるし、責任を持って勝美の家を存続させることを考えなければいけないんだ。」

「だからって、他にも方法があるんじゃない。例えば生まれた子供の一人を遠藤家の養子にするとか・・・。」

「でも、それだと勝美にすれば、自分の産んだ子供が自分の義理の弟になるんだよ。そんな不自然なことを勝美に強いることはできない。それに、僕はもともと女子として勝美のところにお嫁に行く筈だった。それが、たまたま性別交換したせいで、勝美を嫁に貰うという選択肢も出てきたけど、最初の想定とは随分違う。これは勝美というよりも、勝美のご両親の心情として、どうなんだろう。・・・例えば、自分の一人息子が、いきなり女性になってしまい、お嫁に行ってしまうなんてことになったら、母さんは耐えられる？」

「・・・それは・・・。」
「ねっ、だから、やはり僕が入り婿になって、遠藤千博になるのが一番良いんだ。僕が女性のままだったら、勝美のところに嫁ぐことは、母さんも当然覚悟していたんじゃない？」
「お前の考えはわかった。それはそれで立派な決心だと思う。ただ、今の話だと、まだ何も正式に決定したものでもなければ、勝美さんとの相談すら不十分に聞こえる。だから、まずは勝美さんと徹底的に話し合いをしなさい。そして二人の意志が完全に一致して一枚岩となったなら、次に二人で勝美さんのご両親に説明して、了解を貰いなさい。それが済んだら、最後に勝美さんと二人で、私のところに話を持ってきなさい。」
「私は、どんな結論にせよ、お前が勝美さんと二人で決めたことを全面的に応援する。昨日話したとおり、もうお前は一人前の成人なんだ。だから自分で責任をもって、自分の人生を決めて欲しい。それで良いな。」
「はいっ！」
　千博が明るい顔で力強く返事をした。まあ、確かにそれが一番自然なのよね・・・。そもそも、仮に勝美がうちにお嫁に来るとしても、この家に住むのはちょっと無理そうだから、そうすると、どっちにせよ勝美の家に千博が転がり込むような気がしていたし・・・。いわゆる「マスオさん状態」と、正式な入り婿と、どう違うのかしら。姓が変るといっても、もう夫婦別姓が正式に法律で認められてから５０年以上も経つんだから、あまり理由にはならないわよねぇ・・・。それに、今回ちょっとした失敗はあったとしても、ここまで何とか無事乗り切ってきたんだから、千博は勝美の家で大事にされる筈だわ。多分、それが一番幸せなんでしょうね。
「では千博、お前が遠藤家に婿に入るという前提で、父さんから二つ、大事な話がある。」
　父さんの突然の言葉に、千博が緊張した顔になった。芳恵さんも何事かと不安そう・・・。

「まず、結婚の日取りとか結婚式のこと、これらは父さんが早速先方のご両親に話をして、準備を進めることにする。一刻も早いほうが良いだろうから、できたら来月とか再来月とか、遅くとも春休みには結婚式を挙げるように努力しよう。お前もその位のスケジュールを考えておけ。まあ、最終的には先方のご家族の都合次第だから、もう少し延びるかもしれないが、それまでにどんな準備が必要か、勝美さんとよく相談しておくように。」

　これを聞いて、千博の顔がぱっと明るくなった。

「もう一つ、こっちのほうがずっと大事なことだが、婿に入るということは、先方の家を存続させる責任を負うということだ。というか、それが婿の一番大きな仕事になる。それはわかるな？」

「はい。」

「入り婿とは、要するに種馬だ。お前に期待されるのは、一にも二にも、勝美さんに種付けすること、勝美さんを妊娠させ、遠藤家の跡取り息子を一刻も早くつくることだ。それができない種馬は、役立たずとして離縁されてしまう。それが世間の常識だ。」

「幸い、二人とも機能的に問題ないことは、病院で確認されているし、今日、初体験も無事済ませた訳だ。だから、これから毎日でもないし、二人だけの場所が必要ならホテル代は父さんが出してあげよう。若いんだから、毎日でもできるな？」

「とにかく、結婚式のときには、もう勝美さんのお腹に子供がいるようにしなさい。それが種馬としての使命であり義務なんだ。わかったか？」

　千博が眼を白黒させている。そりゃあそうでしょ。必死の思いで結婚と入り婿の話をしたら、いきなりこれから毎日セックスしろ、何がなんでも直ぐに相手を妊娠させろと言われたんだから、リアクションに困るわよね。それも自分の父親からよ・・・。千博は何か言いたそうに口をパクパクさせていたけど、結局何も言い出せないまま、真っ赤になって（さっきから何度目なんだろう？）コクコク

と頷(うなず)いているだけだった。

第36話　初夜の報告（後書き）

これからようやく、登場人物たちが新しい性別での生活を営んで行きます。中学卒業から高校生活、結婚や出産、その他、いろいろなイベントやハプニングに翻弄されることでしょうが、基本的には学園モノのような展開がしばらく続く予定です。

ところで、コロナも少し落ち着いてきて、仕事が忙しくなりつつあります。これに伴い、来週からは週末に2話ずつの更新ができなくなるかもしれません。
更新ペースが少し落ちると思いますが、毎週末に必ず1話は更新するつもりですので、のんびりお付き合い頂ければ幸いです。

第３７話　闇の主導権

「ねえ、昨日はどうだった？」
勝美が聞いてきた。明日は二学期の終業式で、あたしたち性転換手術を受けた生徒が４週間ぶりに登校する日・・・。
あたしはもう、明日のことで頭が一杯だったんだけど、勝美はどうやら昨日のことがまだ意識の上では大きいみたい。
実は昨晩、円から連絡があって、明日に備えるというような名目で、あたし達女の子三人で会わないかって誘われたの。いわば女子会よね。何故この三人かっていうと、あたしと円は特別な関係で、その関係を知っているのが勝美で、しかも勝美は性転換して女物の買物とかに難儀していたときに、あたしが円を紹介して、女子用の下着とか生理用品とか、その他女の子に必要な小物類とかを買い揃えるのに、円に手伝って貰ったんだ。それがきっかけで勝美と円は仲の良い友達となり、それを親友と呼べる関係にしたいという円の発案というか提案があって、あたしも勝美も、渡りに舟で集まった訳なの。
待ち合わせ場所は、いつものショッピングセンターの入口。まだ円は来ていなかったけど、もう勝美は到着して待っていた。あたしも勝美も、手術後に会うのは実は初めてなんだけど、少なくとも勝美はもう完璧な女の子で、しかも結構グラマーな美人なの。見違えちゃった。それに声があたしよりさらに少し高くて、しかもきれいな声色、本当に玉を転がすという比喩がぴったりだわ。でも、あたしも傍目（はため）には、もっとグラマーで女の子しているのかしら。
「あたしは病院でやったんだけど、最初に執刀した先生と、それにカウンセリング担当の先生も居て、お話する時間が取ってあったの。そこで性転換した後の様子とか、困ったことはないかとか、初夜の際のお勧めする手順とか、少し雑談的な話をしたの。オナニーはど

うだったとか、男女の快感の違いとかも聞かれて、たわいもないことだったけど、最初は怜央と二人だけで部屋に居る気不味（きまず）さがあったのに、そういった気持ちを落ち着けるのには随分役立った気がする。」

「あたしもそうすれば良かったのかな・・・。父さんがたまたま帰国してたんで、千博にうちへ来て貰って、あたしの部屋でやったの。千博はなんだかものすごく緊張しちゃってて、ガチガチだったわ。」

「それはそうでしょ。だって、ご両親、特にお義父様に娘さんを下さいって話さなけりゃならないのよ。しかもそのお義父様のいる家で、娘さんの処女を食べちゃうんだから、緊張しないほうが変よ。終了診察も済んでいるみたいだから、最終的にはうまくできたんでしょうけど、新米男子の千博には、かなりハードルが高かったんじゃないかしら？」

「それでかな。・・・終わったあと、何となく千博が元気なかったんだけど・・・。きっと疲れちゃったのかしら。」

あ、ちょうど良かった。勝美のほうからこの話に振ってくれたわ。ベッドでは千博を立てて貰うように話しておかなくっちゃ。

「実はそのことで、勝美に話しておかなくっちゃいけないことがあるんだ。というか、お願いなんだけど。実は夕食時に勝美との様子を報告しようとして、千博が泣きだしちゃったの。自分は男子失格なんだって言って・・・。」

「ええっ！どうしてそんな？！・・・あっ、もしかして、暴発の？」

「ええ、それもひとつの理由なんだけど、それだけじゃないみたい。さすがに千博もはっきりとは言わなくて、言葉を濁（にご）していたから、あたしの推察も入ってるんだけど、どうやらベッドで自分が主導権を取れなくて、勝美にいいようにされちゃったって、そんなことを気にしているようなの。暴発して失敗しちゃったってことに加えて、そのあと勝美に一方的に責められて、何度もイカされちゃったって泣きじゃくって、父さんにも兄さんにも慰められていたのよ。父さ

んも悪かったんだろうけど、男子はベッドで女子をしっかりコントロールしなければならないとか、主導権を取らなければならないとか、いろいろと勝手なことを吹き込んだのよね。それで千博が真に受けて、よく小説などにあるような、恥じらう女性を男性が強引にイカせるとか、女性の身体を性的に開発する男性といった、ステレオタイプの男女の閨(ねや)の関係をイメージしちゃったんじゃないかしら。でも、現実のセックスって、そんなに単純じゃないし、そもそも二人とも処女と童貞なんだから、最初から小説みたいに上手くいかなくたって当然だと思うけどね。」

「そうなんだ・・・。あたし、初めてにもかかわらず、千博から気絶するほどの快感を貰って、喪失のときも全然痛くなかったんで、お返しにと全力で奉仕したんだけど、ちょっとやりすぎちゃったのかな？」

「ねえ、なんだか面白そうな話してるじゃない。どんな様子だったの？聞かせてくれる？」

いつの間にか、円があたしたちの後に来ていて、会話に割り込んできた。

「そうね、女の子の親友同士って、お互いのセックスのことについても、一切隠し事をしないんだって、前に円が言っていたわよね。あたしも後で、円との初体験と、怜央との初体験の両方を話すから、まずは勝美が千博とどんなだったのか、教えてよ。」

「うん、わかったわ。あたしも優稀と橘さんの女子会に入れて貰うんだから、恥ずかしいけど全部話すわね。でも千博には内緒よ。」

いよいよ千博と勝美の初体験の話が聞ける！！あたしはワクワクしながら、円と一緒にショッピングセンター入口にあるベンチで勝美の話に聞き入ったの。

「まず、緊張していた千博は、橘さんからプレゼントして貰ったスケスケ下着で誘惑したら、突然暴発しちゃったのよ。でも、それはあたしも以前、男子だったときに千博が男性化するって聞いて、パニックして公園でキスしただけで暴発しちゃったから、それが男の

子の生理だって話したの。そこまでは、まだそんなに落ち込んでいるようには見えなかったわ。」
そうだったんだ。それが、あの城址公園での顛末だったのね。勝美も大変だったんだ。
「その後、痛くしないようにって配慮してくれて、あたしを何度も何度も、連続イキでもう頭がバカになっちゃうまでイカせてくれて、あたしは途中から記憶がないの。」
「声をかけられて、あたしが意識を取り戻したときは、もう千博はおちんちんの先っちょを、あたしのあそこにあてがっていて、『いよいよ挿れるよ、いい？』って聞いてくれたの。あたしはもう一刻も早く千博のおちんちんが欲しくて、あたしが千博にあげたおちんちんを突き入れて欲しかったから、千博が動く前に、足を千博の腰の後に回して、ガッチリ抱きつく姿勢で思い切り自分から腰を前に突き出して、千博のおちんちんをあたしの一番奥までズンと突き入れたの。そうしたら、千博は一瞬であぁっと声を上げて、射精しちゃった・・・。」
「実はそのとき、あたしも思いっきりイッちゃったんだ。だって、それまでさんざんイカされていて、もう身体が物凄く敏感になっていたのに加えて、待ちに待ったおちんちん、それも自分についていたおちんちんなのよ。それが身体の一番奥深く、子宮の入口を一気に突いてきたんで、肉体的な快感だけでも我慢できるような状態じゃなかったわ。それに加えて、千博も一瞬であたしの子宮の中に射精してきたんで、あたしはとうとう千博のものになった、千博にすべてを捧げた、という満足感とか、千博に種付けされている、という達成感で、精神的にも一気にイッてしまったの。この精神的な絶頂感って、優稀は感じたことある？橘さんは優稀との初体験で、どうだったかしら？」
「わかる気がする。あたしも優稀との最初で最後のとき、処女だったから身体の快感はそんなになかったけど、射精された瞬間に、精神的な快感でイッちゃっていたから。」

「あたしも男子のときはそんなに感じなかったけど、女子になって怜央に女の子にされたとき、凄くそう感じた・・・。」
「やっぱり、みんなそうなのね。これって男子にはない女子だけの精神的な快感なのね。」
　確かに、あたしも凄くそう思った。だって、子宮に射精される感覚、膣内射精(なかだし)されて種付けされる感覚って、何とも形容できないような温かい気持ちになるんだもん。自分はこの人のものなんだ、この人の子供を産むんだっていう満足感や達成感で、それこそオキシトシンが一気に出るんだと思うわ。
「とにかく、それであたしも千博も、挿れたと同時に身体的にも精神的にも激しくイッちゃって、そのまま二人で気絶しちゃったの。」
「そんなに良かったんだ。あたしは優稀に奥をツンツンされて、初めてなのに、かなり感じたのは確かだけど、そこまで激しくイクことはなかったわ・・・。」
「ごめんなさい、多分、それはあたしが経験不足で下手だったからよ。だってあたしが怜央にされたときは、やっぱり連続イキ状態から中で射精されて、勝美みたいに身体的にも精神的にも激しくイカされて気絶しちゃったから。男子の側が上手だと、女性はそうなっちゃうんじゃないの?・・・でも、それならどうして千博は落ち込んだのかしら。多少射精が早かったとしても、勝美がそこまで楽しめたなら、十分に主導権は握っているように思うんだけど。」
「多分、その後のことだと思うわ。それで二人とも気絶して、少しして千博が先、あたしが少し後で気がついて、まだ二人ともつながったままだったんで、そのまま二回戦になって、やっぱりすぐに二人してイッちゃったの。このときも割と早くだったけど、あたしと千博の身体の相性はもうばっちりで、二人とも完全に揃ってイクことができたわ。だから、その後もしばらく二人でつながったままイチャイチャしながら、ピロートークを楽しんでいたの。」
「なんて羨(うらや)ましいのかしら。でもそれじゃ、やっぱり優稀が言うように、千博君が落ち込む理由はないわよね。」

「実はその後、千博にお掃除フェラをしてあげたの。千博は最初、すごく感激していたみたいで、蕩けたような顔をして嬉しそうだったんだ。それで、あたしが去勢されたときにやられた前立腺の快感を千博にも楽しんで貰おうと、お尻の穴に指を突っ込んで前立腺をグリグリやったの。」

「え？！あれをやっちゃったの！！多分千博にとっては、天地がひっくり返るような強烈な体験だったかも・・・。」

「だって、連続で射精したせいか、千博のおちんちんが元気なくなっちゃって、もっと元気になって欲しかったの。それにあたしと千博は手術の前には我慢して肌を重ねなかったから、千博は女性としてのセックスの経験がなくて、女性がおちんちんを入れられる快感を知らないのよ。それで千博にも是非、女性のセックスの快感を疑似体験して貰いたくて、頑張って奉仕したんだけど・・・。」

「それでそれで？・・・それで、千博君はどうだったの？」

円が興味津々という雰囲気で先を促したけど、これは千博には可哀相だわよねぇ・・・。

「千博はアンアン言って悶えていたんだけど、あっと言う間に射精したわ。それで、あたしはお掃除フェラをバキュームフェラに切り換えて思いっきり吸い込んだら、千博はあっけなく白目を剥いて気絶しちゃったの。」

そんなことがあったんだ！これじゃ千博が自信をなくすのも無理ないわ。

「勝美、それ絶対にやりすぎ！！あなたも元男子なんだから、男子のプライドというか気持ちがわからない？身体の快感だけじゃなくて、もっと千博の気持ちを考えてあげなきゃ。」

「ただでさえ千博は新米男子で、どうやったら良いかわからずにいるのに、勝美に痛い思いをさせちゃったらダメだとか、自分がリードしなければというプレッシャーと緊張でアップアップしているのよ。それがいきなり女の子にお尻の穴に指を入れられグリグリされて、アンアン悶えて泣かされちゃった挙げ句、バキュームフェラで

気絶させられちゃいましたなんて、もう男の子としてのプライドはズタズタのボロボロじゃないのかしら。昨晩の様子だと、千博はもう心が折れちゃってて、多分、あのままじゃ明日になっても絶対立ち直れないわよ。夫婦の関係に横から口出しするのは野暮ったいけどさ、かなり酷く落ち込んでいたから、もうしばらく無理かも・・・。」

「そっ、そうかしらっ・・・。あたしっ、そんなつもりじゃぁ・・・。」

「考えてもみて。勝美は手術前に千博とオーラルセックスをしているのよね。もし仮にだけど、そのときバキュームフェラされて気絶しちゃったとすると、それをご両親に問い詰められて、報告しなきゃならないとしたら、なんて答えるつもり？女の子にイカされて気絶させられましたなんて、正直に話せるの？そもそも、そんな恥ずかしい状況に耐えられるかしら？」

「それに、ご両親なら恥ずかしいというだけで、まだマシよ。まさか誰かに言いふらすこともないしね。でも、もし男のくせしてバキュームフェラされて気絶しましたなんて、クラスの皆に知られちゃったら、男の子としての勝美は、それでも普通に学校に来れたと思う？それこそ校舎の屋上から飛び下りたくなるんじゃゃない？」

「どっ、どうしようっ！あたしっ、そんなことっ！！」

「ねっ、今、あたしがこう言っただけでも、勝美はオロオロしてパニックしてるじゃない。ベッドでは、女の子はあまり自分で積極的に動かず、男の子を立てて、男の子の好きにさせてあげるくらいで丁度良いのよ。まあ、まずは次に千博とベッドに入るときには、勝美は恥ずかしそうにしているだけで、徹底的に受け身の姿勢で千博に全部任せることね。プロの女性じゃないんだし、あなたにすべてを委ねますという態度をとってあげて。それが新米男子の自信につながるんだから。」

「おそうじフェラは男子の憧れかもしれないから、まあ良いとしても、バキュームフェラは千博が希望して、はじめてやるべきだし、

間違ってもおしりの穴に指を入れて前立腺グリグリなんてやっては
ダメよ。そんなことをしていたら、行き着く先は二つしかないわ。
千博がＥＤになっちゃうか、それとも調教されちゃってお尻グリグ
リでしか射精できなくなっちゃうか、どちらかだと思うわよ。」
「どうしよう。あたし、千博にお詫びの電話かメールでもするほう
が良いかな・・・？」
「どうかしら？こういうことは、口でどんなに慰められても、かえ
って落ち込んじゃうかもしれないわよ。それよりも父さんからの指
示もあるんだから、今夜にでも、千博とベッドに入って、そこで受
け身の姿勢を見せるほうが効果的じゃなくって？」

第３７話　閨の主導権（後書き）

前回もお知らせしましたが、仕事が少しずつ忙しくなってきているので、当分は毎週末に１話のみの更新とさせて頂きます。従って、今週末は、この更新だけになります。

なお、土曜日の朝になるか日曜日の朝になるかは、その時々の状況次第です。どうかのんびりお付き合い頂ければ幸いです。

第３８話　初体験×２

「なんか男の子って大変なのね。優稀もあたしとの最初で最後の男の子としてのセックスのとき、そんな想いだったの？」
「それはそうよ。あのとき、あたしは本当に幸せだったわ。だって、二日後にはおちんちんをきりとられちゃうのよ。一度も使うことがないまま、男の子として本来の役割を果たせないうちに切り取られちゃうなんて、もう悲しくて悔しくて、やる瀬なくて涙していたときに、円があたしに男の子としての初体験をさせてくれたんだもの。それはそれは心から感激したわ。」
「円から連絡があったとき、あたしは円にお別れを言うことになると覚悟して出向いたのよ。だから、本当は円と会うのが怖かったの。事実、円から友達宣言されて、もうこれで円との関係は終了だと思ったから、泣きそうになるのを必死で堪(こら)えていたら、思いがけず円の部屋で初体験することができたんだから・・・。」
「それに、円はあたしに好きにさせてくれたでしょ。処女を捧げてくれただけじゃなくて、フェラもしてくれた。その上、あたしが望んだ体位は全部やらせてくれた。これって男の子にとっては、希望がすべて叶(かな)ったというか、男冥利(みょうり)に尽きる初体験よ。それまで、童貞のままで切り取られちゃうって思って涙して、運命を受け入れられず自分の不幸を嘆(なげ)いていたけど、これで胸を張って手術に臨めるって、そこまで感激したのよ。」
「ふふっ、そう言えば、あのとき優稀は、このまま二人で逃げようとか言っていたわよね。できない相談にしても嬉しかったわ。男らしい責任感というのかしら、そもそも女の子みたいな優稀から、そういう言葉が出るとは思わなかったし・・・。」
「いやぁねぇ、あたしの純情をからかわないでちょうだい。あのときは必死だったんだから。」

「ごめん。でも優稀が射精したとき、子宮で感じた幸せというのかな、好きな人の子種を受け入れる幸せ、子宮からじんわりと広がる暖かさ。精子はもういなかったけどさ、あれであたしも精神的にイッちゃったのよ。」

「それはあたしも怜央との初体験で思ったの。この中で唯一、男子としても女子としても経験済みのあたしからみて、男子と女子の快感における違い、つまり精神的な満足感が一番違うのは、この射精に対する感覚なんだと思うわ。」

「あたしは円との初体験のとき、生物学的にはもう雄じゃなかったのよね。去勢されてタマを抜かれちゃったあとだったから、射精はしても精子は一匹もいない状態だった。でもあのときはまだタマを抜かれてから日が浅かったから、体内に男性ホルモンが残っていたんだと思うの。それで男としての、雄の本能というのかしら、女の膣内の一番奥深いところに、雌の子宮に自分の種を蒔(ま)くんだっていう感覚で一杯だったの。この感覚、男の子としてセックスをしていない勝美にわかって貰えるかどうか、ちょっと不安なんだけど、実は男の子が女の子の膣内に射精するっていうことは、この相手に自分の子供を産んで貰うんだっていう願い、あるいはこれで自分の家族を築くんだっていう幸せの予感なんだと思うの。つまり女の子の膣内に射精するということは、一緒に家族を築いてくれる相手を手に入れたんだっていう、生物としての根源的な幸せにつながるものなんじゃないかしら。」

「そこまで考えたことはなかったわ・・・。」

「だから、子宮に射精する、自分の子種を蒔いて種付けをするということは、その子供と母親を守る義務が発生するのよ。生物的な本能だと思うんだけど、絶対に、それこそ命を懸けてでも自分の家族を、そして自分の遺伝子を受け継ぐ次代の子を護っていかなければならないっていう責任感とか意識が発生するんじゃないかしら。」

「種付けするということは、一方で自分の人生の目的が達成されたという達成感が満足されるんだけど、同時に命を懸けてでも守るべ

き対象ができたということなんだと思うわ。自分の遺伝子を受け継ぐ、自分の子供を何としてでも護っていく、それが家族というものの本質なのよ。だから、その子供の成長に責任があるし、子供が育っていくことが自分の幸せに繋がるんだと思うの。これは人間として、というより生物の本能として、種の維持を図ること、つまり先祖から受け継いできた生命の輪を自分の代で途切れさせないという摂理なのよ。」

「そんなことまで考えていたんだ・・・。」

「さすが気配りと優しさの優稀ね。普通、たかがセックスにそこまで深く考える人っていないんじゃないかしら。」

「まあ、あたしだって、実際に射精する瞬間に、こんな小難しい理屈を考えていた訳じゃないわ。それはあくまで、後から考えてみて、あの幸福感、心が温まる感覚は何だったのかしらって想いを巡らせたとき、はじめてこんなことじゃないかって考えが纏まってきたのよ。それに加えて、あたしの場合、男女両性の立場で初体験をしたということがひとつと、あとこれは勝美もそうだと思うんだけど、あたしたちのように性別交換して初体験した女子に共通する特徴として、自分のおちんちんを挿れられて、自分の遺伝子をもった種を植えつけられる幸せっていうのも大きい気がするの。」

「この制度を考え出した人は、よっぽど頭が良かったんでしょうね。それとも自分自身そういった体験をしたからなのかは知らないけど、表向きの理由、つまり自分のおちんちんなら抵抗が少ないだろうっていうのは勿論あるにしても、それよりもこの膣内で射精されたときに感じる幸せ、特に自分の遺伝子による子種を植えつけられる感覚って、心を女性化する上でいちばん効果的な気がするの。何せ自分のおちんちんと自分の遺伝子をもった精子なんだから、拒否したり、嫌悪したりする理由がどこにもないじゃない。」

「そうね。もしこれが他人のおちんちんで、他人の遺伝子だったとしたら、その相手のことを本当に好きになっていない限り、どうしても抵抗感はあるわよね。勝美みたいに恋人同士で、相手に挿れら

れることを待ち望んでいたとしても、それでも心のどこかに多少の恐怖はあるんじゃないかしら。」
「そうなの、そして多少とも抵抗感があるということは、心の女性化には、かなり大きな障壁になるおそれがあるのよ。」
「確かに・・・。恋人同士がはじめてセックスするときって、いろいろな立場や状況から、妊娠を望まないことも多いけど、やっぱり本質的にはこの相手に自分の子供を産んで欲しい、この相手の子供を妊娠したいって、そういう考えが心のどこかにあるからこそ、ひとつになろうって考えるんでしょうね。そうじゃないと、この精神的な充足感や心の一体感の説明がつかないものね。」
「ねえ、それって男性化する人にも当てはまることなのかな？」
「そこまではわからないわ。もしかするとあるのかもしれないし、或いは殆どないのかもしれない。でも男子になる女子って、普通は自分から希望してなるものよね。だから心の男子化には、そんなに配慮しなくても大丈夫なんじゃないかしら。それに対して女子になる男子は、絶対に女子にはなりたくなかったのに、無理やり性転換手術をされてしまう場合が殆どでしょ。嫌々手術されちゃって、おちんちんとタマタマを切り取られちゃったって、がっくりきて心が折れている男子に、抵抗なくおちんちんを受け入れて貰い、膣内で種付け射精されて幸福感を感じさせるには、自分の性器を交換した相手との初体験が絶対に不可欠なのよ。あ、勿論、勝美はかなり特殊な例外だからね。」
「そうなんだ・・・。この性別交換制度というのも、実は物凄く奥深くて、いろいろと考えさせられるところが満載なのね。」
「まあ、それだからこそ、制度ができてからもう３０年以上も経つのに、まだときどき手直しもあるし、試行錯誤が続いているみたいだわね。日本という国が、少子高齢化で滅亡してしまわないために、政府も必死なんだと思うわ。」
「性別交換制度に納得している訳じゃないし、自分が女の子にされてしまったときは、やっぱり絶対に嫌だったけど、でもこのプログ

ラムを受けた結果、あたしがこうして、男子におちんちんを入れて欲しい、膣内で射精して貰って、その人の子供を産みたいなんて自然に考えるようになっているんですもの。」
「本当にそうね。優稀がそう考えるようになったのは、やっぱり交換初夜でおちんちんを入れられて、膣内で射精されたからだと思う？つまり種を蒔く側から、種付けをされる側になった体験が、心の女性化に大きく貢献していると感じる？」
「自分では、よくわからないわ。でも、その可能性は高いような気がする。」
「あたしは自分から望んで女性になったんで、少し違うかな。でも千博に膣内射精(なかだし)して貰ったときに感じた幸せって、多分、今聞いた話のとおりだと思うの。勿論、あたしの場合は元から好きな相手だったから、膣内射精(なかだし)されて嬉しいのは当然なんだけど、それは別に自分のおちんちんだったからとか、自分の遺伝子だから、という感覚はあまりないかな。それよりは昔から好きだった千博にして貰えたっていう幸福感のほうが大きかったわ。これは性別交換とは関係なくって、普通の恋人の感覚に近いわよね。ただ、優稀の場合だと、好きな相手だから膣内射精(なかだし)されて嬉しいのか、膣内射精(なかだし)されたから好きになっちゃったのか、これは難問よね。」
「さ、少し話が難しい方向に行っちゃってるけど、あたしと優稀の話はこのくらいにして、今度は優稀が女の子になったときの話を聞かせてよ。」
「女の子になったあたしの場合、怜央が上手くて慣れていたんで、結局は彼に全部任せきって女の子にして貰ったの。彼はこれまでにもレズセックスで処女の女の子を食べちゃったことがあるらしくて、彼の流れるような愛撫に、あたしはもう頭がバカになっちゃうくらい連続イキ状態にされちゃって、気がついたら彼に早くおちんちんを入れて欲しいとせがんでいたわ・・・。」
「それって身体的な、あるいは肉体的な快感に負けて、女性として、

あるいは雌としておちんちんを入れて欲しくなっちゃったってこと？それとも自分のおちんちんだったからってことなの？」

「あたしは千博と恋人同士だったから、早く千博におちんちんを入れて欲しかったし、中で射精して種付けして欲しいと心から思ったけど、優稀はこれまで榊君とは何も関係がなかったんでしょう？それに、そもそも橘さんと恋人だったのに、榊君のおちんちんを入れられることに抵抗はなかったの？それとも自分のおちんちんだから抵抗がなかったの？」

「そこはよくわからないの。抵抗という程ではないにしても、最初はかなり緊張があったわ。でも、怜央も言っていたんだけど、義務で受け入れるのと、自分で入れて欲しいと望むのでは、男女双方とも満足感が雲泥の差だって。それは確かにそうよね。それで、最初は確かに義務だから仕方がないと思っていたんだけど、怜央に何度も繰り返しイカされているうちに、オキシトシンの効果とやらで、だんだん怜央が好きになってきちゃったみたいなの。それに、悲しいけど円とはもう恋人の関係を継続できなくなっちゃったわけだし・・・。」

「勿論、自分のおちんちんだから抵抗が少なかったというのは絶対にあると思うわよ。今も話していたとおり、自分のおちんちんだと、積極的に入れて欲しいと感じる気がするものね。でも、これ、あたしもまだ本当のところがよくわからなくて、もう少し詳しく知りたいんだけど、誰か他の人で試すっていってもねぇ。こればっかりは、相手があることだし・・・。」

「優稀はあたしみたいに、もう結婚が決まっている訳でもないんだし、榊君に操を立てるとかでないなら、誰とでも経験してみたらいいんじゃない？そもそも、榊君は結婚するまでに何名かとお付き合いしたらどうかって言ってくれてるんでしょ。それに橘さんはもう優稀が誰と肌を重ねても、嫉妬するということもないわよね。」

「勿論よ。もう優稀とあたしは、女の子同士の親友なんだから、優稀がいろいろ恋愛してみるのは全力で応援するわ。・・・そして、

この女子会で、詳しく報告して貰うわよ。」
「ええ、この三人の間では、どんな経験も、どんな恥ずかしいことでも、隠さず話すことを誓いましょ。」
「「賛成！！」」
「じゃあ、早速明日から、誰かお付き合いしてくれる男子を探してみるわ。それで怜央に膣内射精（なかだし）されたときとの違いを考えてみる。単に生物の雌として、雄を求めているだけなのか、怜央が好きになっちゃったからなのか、それとも自分のおちんちんと遺伝子だからなのか、これっていずれ結婚するときには、大事なことよね。」
「是非頑張ってみて。応援しているから。手伝いが必要なら言ってね。」
驚いた。勝美もそうだけど、優稀は本当に見た目も心も、完全に女性になっちゃったのね。交換初夜って、こんなにすごい効果があるんだ。今の優稀と話をして、元は男子だったなんて気がつく人がいるかしら。ほんの1カ月前までは、女子になることを嫌がり、あそこを切り取られてしまうと涙していた、ごく普通の男の子だったのに・・・。あたしの恋人で、お互い童貞と処女を捧げあった初体験の相手だったときの面影は、もう残っていないのかしら・・・。寂しいな・・・。

「ねえ、勝美は円のことを姓の『橘さん』って読んでいるけど、お互いのことを名前で呼ぶようにしない？あたしは二人とも、お互いに名前で呼び合う仲なんだけど、勝美と円が姓で呼び合うのは、何となく他人行儀な気がするの。」
「それ大賛成！女子会を結成して、これから何でも話し合う親友になるんだから、名前で呼ぶべきよね。勝美？」
「本当に？あたしも入れて貰って構わないの？優稀とは小さいときからずっと名前で呼び合ってきたけど、橘さんとはあまり接点がなかったんで・・・、それでも良いの？」
「勿論よ。親友になったんでしょ。そのかわり、今、三人で誓った

とおり、これからは今日みたいに何でも隠さず話し合って、悩みがあれば、どんなことでも必ず相談するのよ。たとえ旦那様となる千博君に内緒のことでも、あたしたちの間では隠し事はなしだからね。千博君との夫婦生活についても当然よ！！」
「ありがとう。ま、円さん。」
「いやぁねぇ、まだ他人行儀よ。円って呼び捨てにして。」
「あっ、ごめんなさい。円。」
よかった。あたし一人が二人と名前で呼び合っていても、勝美と円が他人行儀じゃ、話しにくくて仕方がなかったわ。これで二人の関係が、さらに深まると良いわね。

この女子会の結成によって、お互いの性体験を一切包み隠さず話し合う関係になったことが、この後のあたしたち三人の関係に、あんなに大きな影響を与え、やがて数十年後に円の一生を左右する大事件？にまで発展することになるなんて、この段階でのあたしたちには、想像すらできなかった・・・。

第３９話　フェロモン談議

「ねえ、円に聞きたいことがあるんだけど。円は男の子の匂いって、わかる？あたしは男の子だったときには、女の子の匂いというのは、ずっと感じていて、ふわっとするような、心がうきうきするような、うまく説明するのが難しいんだけど、甘くて頭の中とか心の中に直接作用するような、不思議な感覚を呼び起こすような、そんな女の子の匂いがいつも気になっていたの。一対一のときも勿論感じていたけど、教室なんかで、特に女の子が何名か集まっているときなんか、強く感じたわ。」

「この匂いを嗅ぐと、自分が抑えられなくなりそうで、ちょっと危険な気分になって、おちんちんが一瞬で元気になっちゃう、そんな匂いなのよ。いわゆる男の子の性衝動というのかしら、ムラムラして女の子を襲いたくなっちゃう気分の元となるような匂いだったの。」

「これって、多分、男子の性衝動を誘発するような、何らかのフェロモンじゃないかと思うんだけどね。それに対して、当時のあたしは、同性の男子からは汗くさいような、何となく不潔な臭いしかしなくて、これが男臭さだと思っていたの。例えば男子の運動部の部室なんて、その最たるものじゃないかしら。」

「でも、自分が女子になってみると、これまでふわっと心をとらえて内面から沸き上がる衝動を誘った女子の匂いが、殆ど何も感じなくなってきて、それどころか、自分からも、何となくそんな女子の匂いがしているんじゃないかって、そんな気がしているの。というか、実はこれ、一昨日の交換初夜で怜央にも言われたのよ。あたしから女の子の匂いがして、そのせいであたしを襲いたくなっちゃいそうだって・・・。」

「それに対して、男子の汗臭くて不潔な臭いと思っていたものが、

うっとりするような、もっと言うと男らしくて胸がキュンとなり、さらにあそこがジュワっとなっちゃうような、そんな匂いに感じるようになってきたの。しかも、自分のこれまで寝ていた布団からも、その匂いがするように思えてきて、これって男子のフェロモンに、あたしの女の子としての性衝動が反応しているんじゃないかって感じるのよ。」
「円は、あたしが男の子のときに、あたしと付き合っていて、どう感じた？ やっぱり、男の子の匂いだと思った？ それとも不潔な臭いだと感じた？ 今のあたしはどう？」
「当時の優稀からは、勿論、男の子の匂いがしていたわよ。優稀は優しいし紳士だし、まず襲われるような心配はしていなかったけど、でもしっかり男っぽい匂い、男子特有の、女子とは明確に異なる、さっきの優稀の言い方に従えば、胸がキュンとなるような、あるいはあそこがジュンとなるような、そういった匂いは間違いなくしていたわね。」
「だから、男の子と初めてお付き合いすることになったあたしは、優稀を自分の家に入れるのも、逆に優稀の家に行くのも、ちょっと怖かったの。あ、これは今言ったとおり、別に優稀が怖いという意味ではなくって、優稀からそういう匂いがすることに対して、あたしの女の子としての性衝動を直接刺激されるような感じが怖かったんだと思うわ。」
　やっぱりそうだったんだ。円があたしの誘いを断り続けたのも、自分の家に上げてくれなかったのも、それが理由だったのね。何となく、そんな気がしていたから、いずれは男女の関係になれるかもしれないって期待したあたしの考えは、決して間違ってはいなかったんだわ。すると、あのままの関係が続いていれば、そう遠くないうちに、例えば成人式とかバレンタインとか、少なくとも中学卒業のときまでには、最後まで行くことができたのかしら？
　でも、あたしがこんなことになって、結果的にはそれが早まったんだから、一度限りになっちゃって、ちょっと残念ではあるけど、

まあ良かったのかもしれないわね。

「それじゃ、二人で初体験したあの日はどうだった？もうあたしから、男の子の匂いがしなくなったから、円は安心して部屋に上げてくれたの？」

「んー、そんなことはなかったわ。言われてみると、以前ほど強く男の子の匂いはしなくなっていたような気もしないでもないけど、それは今、こうして考え直してみて、言われてみれば少し匂いが薄くなったかなって、初めてそういう気がする程度よ。あのとき、タマはもうなかったにしても、優稀からはまだしっかりと男の子の匂いがしていたわ。優稀のおちんちんを銜えてあげたでしょう。まだそのときは、それまでと変わらない男の子の匂いだったわよ。多分だけど、あの匂いって、タマのあるなしじゃなくて、おちんちんそのものから出ているんじゃないかしら。いや、おちんちんそのものの匂い、というんじゃなくて、おちんちんがついていると、全身、例えば頭の皮膚とか、脇の下とか、そういうところから匂ってくるような気がするの・・・。あ、勿論、おちんちんそのものからもしていたかもしれないけど。」

「じゃあ、何故・・・。」

「そんなの、もう優稀と初体験すると決心していたからよ。優稀を呼び出したのは、あたしがそうしたかったからだって、あのとき話したわよね？だから、優稀からしていた男の子の匂いは、あたしの背中を押してくれる力にはなっても、もう怖がる対象じゃなくなっていたの。」

「あ、あたしも優稀とおんなじことを考えていた。特にそういう意識はしていなかったから、どこの時点かはよく覚えていないんだけど、男の子の匂い、女の子の匂いというのは、手術前はそれぞれ相手の性別の匂いが気になる一方、自分の匂い、いや臭いはよくわからなかったんだ。今考えると、あたしが城址公園で千博に男性化の話を聞いて、パニックして千博にキスされたときは、千博の女の子の匂いにやられちゃったし、その後、去勢されてタマを抜かれちゃ

った後でも、円に手伝って貰って、女物の下着とか生理用品とかを買いに行ったときは、まだあたしの感覚として、円からの女の子の匂いを感じていたの。いや、それ以前に、ランジェリーショップに入った瞬間、女の子の匂いで一杯で、何だか自分が物凄く場違いなところに来ちゃったっていう感覚だったわ。・・・円はどうだった？あのときは、あたしにはまだおちんちんがついていたけど、女の子の匂いだった？それとも、男の子の匂いだった？」

「はっきりとは記憶していないんだけど、そう言われると、確かにまだ女の子の匂いじゃなかった気もする。だから、というわけじゃないけど、あのとき、一生懸命に女言葉を使って、女の子になろうと努力している勝美には、何となく違和感があったのよ。そう、なんか女装趣味というかオカマ？というような・・・。ごめんなさい、こんな言い方で・・・。でも、今の勝美も優稀も、もう男の子の匂いはまったくしないわよ。どこからどうみても、自分と同じ女子の匂いがしているわ。」

「やっぱり、この匂いの違いというのは、おちんちんがついているかどうかなのね。」

「そうね。おちんちんの有無というのが、大きな役割を果たしているのは間違いないでしょう。でも、もしこれがフェロモンだと仮定して、フェロモンって確か異性を引きつけるためのホルモンの一種だわよね。とすると、ホルモンは必ずしも性器から出ているとは限らなくて、脳の働きで、脳から出るときもあれば、全然別の臓器から出ることもあるのよ。あたしも詳しいことは知らないけど、例えばおちんちんがついていると、本人の意識というか脳の中で、まだ男の子のホルモンであるフェロモンを作れという指令が出ていて、それに基づいて男の子の匂いがするのかもしれないわね。あ、勿論、これは無意識のうちに行われるものよ。または、おちんちんがついているため、何らかの物質が脳まで届いて、それに基づき脳が指令を出しているのかもしれないわ。これなら本人の意識としてはもう女子になろうと努力していた勝美なのに、まだ男の子の匂いがして

いたことも説明がつくわよね。」
「そうだとすると、円に買い物を手伝って貰ったときには、あたしはまだあのとき、自分の希望はともかくとして、匂いの上では男の子してたということなのね・・・。でも、円って、そういうこと考えられるの凄いわよね。あたしなんか、テストの成績は取れても、そんなこと考えたこともないわ。これって、理系脳と文系脳の違いなのかしら。きっと円は理系脳なのね。あたしは間違いなく文系脳だわ。千博はどっちなんだろう。」
「うん、あたし、まだ先の話なんだけど、お医者さんになれればいいなって思っているの。それも開業医のような臨床医ではなく、病理とか免疫とか生体反応とか、そういった医学の研究をしてみたいの。一応あたしもギリギリだけど何とか一級になれたから、これから三年間、普通に勉強すれば大学は好きな学部に行けると思うのよね。医学部に進学して、研究医となり、医学の発展に寄与するような研究がしてみたい、そう考えているの。」
「円には、お似合いよ。これだけ医学が進歩して、もう直せない病気はほとんどないって言われるようになって久しいけど、それでも人間の身体には、わからないことが一杯あるじゃない。そもそも、臓器移植して直すことはできても、なぜその病気になったのか、まるでわからないことは、まだ多いじゃない。精神関係の病気にも原因不明は多いみたいだし、いくら対症療法で直すことはできるようになったといっても、原因が判らないと予防はできないでしょ。例えば性同一性障害なんかだって、今は性転換させて見かけ上直ったようにはできても、どうして身体の性別と精神の性別が違っちゃうのか、脳の働きはまだ判らないんじゃなかったっけ？」
「だから、円は絶対に医者になるべきよ。それも研究医になって、病気の原因を探る、そんな研究者になったら、かっこいいわね。あたし、応援するわ。」
「そんなに期待されると困っちゃうけど、でも頑張ってみるわね。ありがとう。」

円はあたしと違って優秀だから、きっと研究医になれるわよね。どんな研究をするのかな。医学の進歩に寄与するような研究だと良いわね。楽しみだわ。

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

そうだ、忘れてたけど、勝美に父さんのことを話しておく必要があるのかしら。千博から話すのがスジだけど、新米男子になったばかりの千博が、いくらもう結婚が決まっていると言っても、いきなりこれから毎日やらせろって勝美に言うのは、父さんの指示があってもさすがにハードルが高すぎるわよねぇ。あたしから勝美に話をして、千博がベッドに誘いやすいようにしてあげるのが勝美と同性のあたしの務めよね。

「ねぇ、勝美。ちょっと話が変るんだけど、実は昨日、千博が交換初夜の報告の後で、勝美の家に婿に入るって宣言して、父さんも基本的にはこれを承諾したとき、父さんから千博にひとつ、条件が出たのよ。」

「えっ？なにっ？？」

勝美がちょっと不安そうな顔になった。

「別にね、大した話じゃないんだけど、入り婿の一番の仕事というか役割は、婚家、つまりあなたの、遠藤家のことね、その跡取り息子を一刻も早く仕込むことだって、要するに入り婿は種馬なんだから、とにかくこれから毎日種付けに励むようにって、そう言い渡されたの。それも、結婚式の日までには、必ずあなたのお腹に子供ができているようにしろって。・・・でも、あなたたちがいくら頑張ってみても、これぱっかりはねぇ。昔から、授かりものって言うし、運とか偶然に左右されるしさ。」

「なっ！そっ、それっ！つっ、つまりっ、これから毎日必ず千博とやれっていうお義父様の命令？！」

「そうなの、それで場所は勝美の家が使えるなら、そこでも良いし、難しければ父さんがホテル代を出してくれるから、妊娠するまで、毎日絶対にやれと言い渡したの。千博はどういうリアクションをして良いかわからなくて、目を白黒させていたわ。それ以前に、どうやって勝美を誘おうか悩んでいたみたいよ。本当はこういう話も、千博から勝美に直接話をするべきなんでしょうけど、ほら、あの子はまだ新米男子だから、女の子をベッドに誘うのも慣れていないだろうし、なんか性欲の権化になったみたいに見られちゃうと可哀相でしょ。」

勝美が絶句してしまったわ。真っ赤な顔をして、口をパクパク。これ千博も一緒で、最近ではすっかり見慣れちゃったリアクションなんだけど、このところあたしも含めて、びっくりするようなことばかり次々に起きるから、仕方がないのよね。やっぱり、性転換すると、これまでの常識が覆る（くつがえ）ような事態が一気に押し寄せて来るのかしら・・・。

「あれ、でも、優稀と一緒で、勝美もまだ生理が来ていないのよね、確か。だったら、毎日やっても意味がないんじゃない？まだあたしと買ってきたものは手つかずなんでしょ？」

円が不思議な顔をした。そういえば、まだあたしも生理が来ていないわ。先生の話だと、1カ月から2カ月の間に来るらしいから、あと2週間程度の筈だわ。これって、やっぱり初潮っていうのかしら。実感がないんだけど、なんとなく面倒で憂鬱なイメージしかないし、いつ来ても大丈夫なように、常に生理用品を持ち歩くのも大変なのよね。最初はやっぱり不規則なのかしら。あまり辛くなければ良いんだけど、何か面倒だわ。

そんなことを考えていたら、焦りまくっていた勝美がお手洗いに行くと言い出した。あたしもさっきから、何となく下腹部がむずむずしていたので、一緒に行くことにしたら、円も一緒についてきたの。それで、皆で揃ってトイレに入り、隣同士の個室にそれぞれ入った・・・。

もう、さすがに慣れてきた動作でスカートをまくり、ショーツをすっと下ろそうとして・・・。
「きゃーっ！！」
思い切り叫んでしまった。
あたしの悲鳴を聞いて、両隣の個室に入っていた勝美と円が飛び出してきて、あたしの個室のドアをドンドンと叩いた。個室の中では、下ろしかけたショーツが真っ赤に染まっているのを見て、血の気が失せたあたしが中腰のまま、固まっていた。
「どうしたの？！！」「大丈夫？！！何があったの？！！」
「ちっ、血がっ、血がーっっ。」
これだけで、何が起きたのか察してくれた円がドア越しにそっと囁いた。
「今、誰もいないから大丈夫。ドアを開けてくれる？」
あたしはこの声で、ようやく思考停止状態から抜け出て、個室の鍵を開けた。
「勝美、急いで隣の身障者用トイレが空いているかどうか、見てきてくれない？」
「うん。」
勝美が駆けだすと同時に、円がさっと身体を個室内に入れてきて、手早くペーパーであたしのあそこから股間の血を拭ってくれた。そこに勝美が戻ってきて、身障者用トイレは空いていると告げたので、円はペーパーを多量に手にとり、大きめに畳んであたしの股間に当てると、血で濡れたショーツをさっと戻して履かせてから、個室の中を点検して問題がないことを確認し、あたしたちに告げた。
「じゃ、急いで身障者用トイレに移動するわね。勝美は忘れ物がないか荷物を確認してついてきて。」

第３９話　フェロモン談議（後書き）

仕事が忙しくて日曜日の更新になりました。これからも毎週末１回の更新は維持したいと思います。

なお、感想やコメントを頂けると励みになりますので、些細なことでも構いませんから、お待ちしています。

第４０話　女子会結成

三人で揃って身障者用トイレに駆け込むと、鍵を締めて円が言った。
「優稀、初潮おめでとう。手当ての方法を教えてあげるわ。血がつくといけないから、服は脱いじゃって。あ、上半身は大丈夫だから。」
ようやくパニックから少し落ち着いてきたあたしは、ぎくしゃくとしながら血がつかないように気をつけてスカートを脱ぎ、それを勝美に渡すと、念のため靴下も脱いでから、血で染まったショーツをそっと下ろした。「優稀、生理用品は持っているわよね。」
「ええ、そのバッグの中の内ポケットに入っているわ。」
「ちょっと失礼して、バッグの中を見せて貰うわね。」
そう言うと、円はバッグの中を覗きながら生理用品一式が入っているポーチを取り出して、そこからサニタリーショーツとナプキンを選び出した。
「身障者トイレは広くて三人で作業するのも楽々だし、トイレの横に介護者がアクセスできるようにもなっているから好都合だわよね。それに何といってもトイレの中に洗面台があって、水道が使えるのも便利なの。」
円が自分のバッグからハンドタオルを取り出し、それを水で絞ってあたしの股間を今一度綺麗に拭いてくれた。そうしてサニタリーショーツにナプキンを装着して（両側にある羽というか出っ張りの部分のところがシールみたいになっていて、そこの剥離紙を剥がしてサニタリーショーツの股間の部分に張り付けるなんて、母さんから一応教えて貰ってはいたけど、多分一人じゃうまくできなかったわ。だってあたし、最初に見たときは、シールであそこに張り付けるのかと本気で思ったんだから・・・。）、あたしにこっちを履く

ようにと渡してくれた。
　ナプキン付きのサニタリーショーツを履いたあたしが、ようやく人心地ついて、これでもう血が漏れるようなことはないと確認すると、あたしの血で染まったショーツをざっと水洗いしてくれて、それをビニール袋に入れて返してくれたの。
「本当にありがとう。あたし一人だったら、きっと何をどうして良いかわからなくて、トイレから出てこれなくなっちゃっていたに違いないわ。」
「あたしも、母さんからひととおり聞いてはいたけど、もし一人で外出しているときにこんなことになっちゃったら、多分、どうして良いかわからずにパニックしていたと思う。やっぱり見てみるのって大事よね。」
「うん、生理周期が安定していれば、そろそろ危ないというときには、もう最初からナプキンを当てておくというのもあるけど、最初は不規則なことが多いと思うわ。でも慣れてくると案外、始まるときの兆候というか、少しだけ出てきた段階でわかるものなの。で、最初は一気に出血することはなくって、じわっと出てから、段々多くなってくる感じで、最初はそうね、鼻水が垂れてくるような感じなのよ。」
「その後、次第に出血量が増えてきて、一番沢山出ているときで、鼻血が出る位の勢いかな？でも、これは人によって個人差がかなりあると思うわ。多い人だと、普通サイズのナプキンを2時間程度で交換しなけりゃならないこともあるみたいよ。」
「でも、先生に言われていたよりもずっと早く生理が来て、ビックリしちゃった。あたし、昨日怜央とセックスしちゃったんだけど、これって妊娠する可能性が高かったのかしら？」
「そんなことないと思うわ。精子が女性の体内で生きて居られる時間が４８時間から７２時間程度で、排卵から生理までがやはり数日はあるから、それらを総合すると逆に1週間前頃が危険日だった計算ね。でも、今回に限っては多分その計算は正しくない気がするの。

というのは、先生の予測だと、まだ2週間か３週間はある筈だったんでしょ。だから多分、初体験したことによりホルモンバランスが変化して、排卵が早まったというか、本当に急に生理になってしまったと見るべきね。それに第一、こうして生理が来た以上、妊娠はしなかったということに他ならないじゃない。これから気をつければ良いのよ。」

なんだ、そういうことなのね。ホッとしたような、でもちょっとガッカリしたような、不思議な感情だわ。これも、男子では絶対に考えなかった視点だっていう気がする。やっぱり子宮内に射精された結果、あたしの精神が完全に女の子に変わってしまったということなのね。榊君の子供を産みたい、榊君に膣内射精(なかだし)されて妊娠させられたいって、心のどこかで常に期待しているんだもん・・・。

とにかく、そんなこんなで、ようやく後片付けも終わったあたしたちが身障者トイレから出てきたのは、２０分位経ってからだった。円が居てくれて、本当によかったわ。

「ねえ、そろそろお腹が空かない？もうお昼を過ぎちゃったわよね？」

勝美が聞いてきた。あたしの生理騒ぎは、せいぜい３０分もなかったけど、確かに、初体験とフェロモン等について話が盛り上がっていたら、いつの間にか4時間も経っていたのね。もう2時を回っちゃったから、お腹も空くわけだわ。

「この時間だと、もうお昼のランチメニューは終わっちゃったかもね。でも、ここのレストラン街にあるスイーツで有名なお店は、確かランチタイムが終わるとケーキやパフェのバイキングがあった筈だから、そこで甘いものでも食べない？実はあたし、前に千博に聞いていたんだけど、さすがに男子だけで入るのは気恥ずかしくって、いつか入ってみたいなーって憧れてたの。」

「あ、あの7階の角にあるパフェテリアのことね。あたしは行ったことがあるけど、おいしくて種類も豊富だし、値段も手頃だから、そこにしましょうか。でも、あそこはつい食べすぎちゃうのよね。」

「あ、あのお店ね。前に一度、千博とデートで入ったことがある。この時間だとまだそんなに混んでいなければ良いんだけど。とにかく行ってみましょ。」
話がまとまって、そのスイーツバイキングで有名なお店に行くことにした。勝美は千博とデートで来たことがあるらしいし、円は何度か入ったことがあるみたいだから、知らないのはあたしだけかしら。女子になって、こういうところに堂々と入ることができるのは、ちょっと新鮮な体験よね。

お目当てのお店は、もうかなり混んでいたけど、丁度3人が座れる端っこのテーブルが空いていた。
「うまく入れたわね。ここは９０分のバイキングだから、早速取りに行きましょう。」
円にそう促されて、真ん中にあるバイキングテーブルで各種スイーツを次々とお皿にとってくる。ケーキ類だけでもスポンジ系、タルト系、ムース系、それぞれが何種類もあり、その他にパフェ類やプリン類、ジェラート類、さらに果物各種など、本当に目移りするほど。ひとつひとつのケーキは小さくて一口か二口で食べきれるサイズなので、いくらでも食べられそう。これだけ揃っているのに、値段はお昼の定食と大差ないんだから、人気なわけよね。
それ以外にドリンクバーがあって、こちらはごく普通だったけど、あたしはヨーグルトでつくったミルクセーキをとった。でも円は普通の紅茶にしていたし、勝美はアイスカフェオレを持ってきたわ。

「さ、じゃ改めて、女の子三人の女子会結成をお祝いしましょ。この三人はこれから親友として、何でも隠さず相談したり報告したりするんだからね。」
「で、早速だけどさっきの続き。勝美は千博とどんな関係だったの？・・・もう2年半も付き合ってきたのよね。どこまで行ってて、それは手術でどう変わったの？」

円が早速、勝美に問いかけた。あたしは千博からいろいろと聞いているので、二人の関係がどうだったかは、かなり詳しく知っていたけど、それでも勝美の口からも話を聞けるのは興味があるので、ちょっとわくわくしちゃった。

「あっ、あたしはっ、千博とは小学生のときからのお付き合いで、正式に告ったのは中1になって直ぐだっていうのは知っているわよね。当時はまだあたしが男の子で、千博が女の子だったけど。」

「千博も承諾してくれて、それから中3の夏休みまでは、ごく普通の中学生として、清いお付き合いだったわ。それどころか、中2の終わりまでは、手も握ったことすらなかったんだから。」

「でも、二人とも相思相愛で、学校でも両方の家族にも、公認だったんでしょ。男の子だった勝美が、よく我慢できたわね。家で二人きりになるようなチャンスはなかったの？」

「ときどき、千博がもの足りなさそうな顔をすることはあったわ。でも、いくら恋人でも、男性側から無理やり手を出したら、レイプとは言わないにしても、やっぱりまずいと思って我慢したのよ。だから、初めて手をつないだのも、ファースト・キスも、両方とも女の子だった千博からされたのよ。」

「やっぱりそうだったんだ。あたしはずっと千博の様子を見ていたけど、多分勝美は純情だから、自分から手を出すことは絶対ないんじゃないかなって気がしていたの。でも、勝美は決して奥手じゃなかったわよね。身体は小さかったけど、あたしと違って中学に入るときには、もう毛もぼっちり生えていたし、オナニーもしていたんじゃなかったかしら。精通はいつだったの？小6位？」

「そっ、そんなっ。何も男の子のときの話を暴露しなくてもいいじゃない・・・。」

勝美が真っ赤になって視線を泳がせながら抗議した。

「ごめんなさい。何でも話し合うって言うのは、こういうことも隠さず話題にするっていうことだと思うわ。でも、あたしがこんなことを言い出したのは、実は明日のことに備えてなの。」

「？？？」
「昨日、交換初夜の後で怜央と雑談していたときに、明日のことが話題になったんだけど、彼が言うには、明日、あたしは間違いなく、クラスの話題の中心となり、男子も女子も注目して質問責めに会うだろうし、そもそもクラスのアイドルになっちゃうだろうって言われたの。」
「同じことは怜央にも当てはまるんだけど、彼はこれまでそういう注目を集めるような場面に何度も遭遇して慣れているから、慣れないあたしには注意するようにって言われたの。」
「それで思い至ったんだけど、勝美と千博は売約済だから、お付き合いしようという意味での注目は集めないにしても、逆に二人で性別を交換したことに対して、好奇心とかやっかみから、容赦ない質問責めに会うんじゃないかって思ったのよ。」
「今、あたしが少し意地悪な質問をしただけで、勝美は真っ赤になっておろおろしちゃったじゃない。明日、クラスの、それも男女双方から質問責めにあって、本当に大丈夫？」
「昨日、怜央と話したときに、もしあたしが答えにくい質問責めにあったりしたら、怜央が割り込んで話を引き受けてくれるって言っていたの。でも、何も話題にならなければ、それが一番じゃない？だから、とにかく明日は二人で、目立たないよう大人しく静かにしていようってことで、交換初夜のことについても当たり障りのない回答をするつもりで口裏を合わせたんだけど、勝美と千博は、そんな話はしていないでしょう？ていうか、明日、クラスの皆から質問責めに会うということすら、考えてもいなかったんじゃない？」
「でも、千博は怜央みたいに男友達も女友達も扱いに慣れていると は思えないし、昨晩の様子からして、質問責めにあったら、何があったかバレちゃうかもしれないわよ。それに新米男子の千博は、多分まだ昨日の自信喪失から立ち直れていなさそうだから、クラスの皆に暴発をからかわれて泣きだしちゃうかもしれないわ。そのとき、勝美や千博の味方になってくれそうな友達って、誰かいるかしら。」

「そうね、優稀と怜央なら、そんなに心配はないし、それにあたしも居るから話に割って入ることもできるけど、勝美と千博のクラスには、二人以外に頼れそうな人はいないわよねぇ。」

「怜央は男勝りの性格で、こういう場面に慣れているから頼りになるけど、千博は慣れていないから、皆に質問責めにあったら、きっと全部白状させられてしまうわよ。それに、勝美だって、およそ嘘がつけないというか、隠し事はできない性格じゃない。交換初夜のことは、まあ皆も知識としては知っているでしょうけど、千博が勝美にお尻を責められて気絶しちゃった話なんて、本当にバレちゃったら、千博は校舎の屋上から飛び下りちゃうかもしれないわね。」

「そっ、そんなっ・・・。」

「それに、勝美と千博が、試験の前に城址（じょうし）公園で何をしたか、その翌日に勝美の家で何があったのか、そんな話までバレちゃったら、勝美自身も一緒に心中したくなるんじゃないかしら。」

「なっ、なぜっ、そっ、そのっ、優稀がっ、あたしたちのっ、恋人どうしの絶対内緒の秘密を知っているのっ！！」

「秘密っていうのは、必ずバレちゃうものなのよ。千博も勝美と同様に、隠し事はできない性格だしね・・・。」

「でっ、でもっ、そっ、それって、ちっ、千博がっ。」

「千博は交換初夜の報告を父さんにするとき、暴発しちゃったって自分から言い出して、泣いちゃったのよ。嘘がつけない、ウブで純情な子なんだから。クラスで男女双方から質問責めにあったら、きっとあなたたちの秘密はすべて白状させられちゃうんじゃない？」

「立場が逆かもしれないけど、勝美が、勝美は怜央みたいに千博を庇（かば）えるかしら。むしろ、男子のときの勝美が、キスしただけで暴発した話とかまで、全部バレちゃうと覚悟しなきゃ。」

第４１話　女の子はダイエット

「まあ、暴発するだけならば、童貞男子のお約束かもしれないけどさ、もし仮に誰かが、勝美は男子のときに千博のバキュームフェラで気絶しちゃったなんてカマかけてきたら、勝美も平気でいられないんじゃないの？どう切り返すつもり？」
「そっ、それっ！どっ、どうしてっ！！」
勝美が真っ赤になって絶句した。わざわざあたしが、仮定の話と言っているのに、きっと図星だったのね。完全に頭の中が真っ白になってしまったのか、めちゃくちゃ狼狽して混乱しているのが丸わかりだわ。もう自分が何を話しているのかも、理解できていないんじゃないかしら。
目的があったから仕方がないんだけど、ちょっと苛めすぎちゃったかなと心配したら、そこに円が追い打ちをかけちゃったの。
「え？本当にそんなことがあったの？・・・いつ？・・・どういうときに？」
「ぼっ、僕が最初にっ、最初に千博から男性化の話を聞いたときっ・・・。」
勝美が急に男の言葉に戻ってしまい、俯いて絞り出すように言葉を紡ぎだした。身体は小刻みに震え、声の様子からどうやら泣きだしたような気がするの。あっ、今、ポタッとテーブルに・・・。これって、誘導尋問でとうとう秘密を白状しなければならなくなったスパイだか忍者だかが、退路をすべて絶たれて自殺もできなくなっちゃった場面みたい。
「ストップ。そこまでで良いわ。ごめんなさい勝美。あなたを追い込むつもりはなかったのよ。ねぇ円、この話は、勝美が男の子だったときのプライドというか、男の子としてのメンツに深くかかわる問題で、このまま話を続けたら千博だけじゃなくって勝美も精神的

に立ち直れなくなっちゃう可能性があるわ。だから、あたしから話を持ち出したのに申し訳ないんだけど、もうこれ以上、この話をするのは止めたいの。良いかしら？」
「あたしは勿論構わないわ。隠し事はしないといっても、やっぱり話したくないことは誰にだってあるんじゃない。勝美、気にしなくて良いわよ。この話は聞かなかったことに、いや、そもそもなかったことにしようね。あたしは何も知らないから・・・。」
「ぼっ、僕っ、僕はっ、・・・うっ、ぅうっ・・・。っくっ、・・・ひぐっ・・・。」
　そう言って顔を上げた勝美は、さっきまで真っ赤だった顔が真っ青になっていて、涙でお化粧が大きく崩れて酷いことになっていた。
「勝美、本当にごめんなさい。でも、別にあなたたちのことを、あたしも詳しく知っているわけじゃないからね。前に千博を問い詰めたときの千博の態度から推理して、ちょっとあなたにカマをかけてみただけなの。だから、仮にそれに近いことがあったとしても、千博が勝美の秘密をばらしたなんて絶対に考えないでよ。あなたと千博が、恋人としてどこまで行っていたかは、あくまであたしの推測であって、これは仮定の話なんだからね。」
「ただ、千博と勝美の様子を見ていれば、ある程度は想像できるし、こうやってカマをかけられることもあるじゃない。二人して、クラスで質問責めされると、どうなっちゃうか、これでよくわかったでしょ。クラスで千博と二人して、こんなふうに追い詰められちゃったとき、どう切り抜けるのか、それだけは十分に心しておいてね。明日、二人で今みたいに進退窮まった挙げ句、校舎の屋上から飛び下りて心中なんて、絶対にやめてね。これ、あたしが冗談を言ってるんじゃないって、今のでわかるわよね。今夜、千博は父さんの指示で、多分勝美の家に行く筈だから、そのとき明日の対策をしっかり相談して二人で口裏を合わせておいてよ。」
「うっ、うん。・・・わかった。気を遣ってくれてありがとう・・・。僕も気をつける・・・。」

「さっき千博に主導権を持たせてあげてって話したことと矛盾するみたいで申し訳ないんだけどさ、千博はまだ心が折れてしまっていて、しかもこういう誘導尋問には、あなた以上に耐性がないからね。勝美だってこれまで3年近く付き合ってきて、千博の性格は知っているでしょ。怜央みたいに、こういうことに慣れていないのは明らかなんだし、そもそも新米男子だから、クラスのやっかみ男子とか言いふらし女子からのえげつない追求にあったら、千博の精神は持たないわよ。千博に主導権を持たせるのは、ベッドの上だけで良いからね。明日は状況次第だけど、勝美が千博を庇わないと本当にダメだと思うわ。勝美が恥ずかしがって俯いていては大変なことになるわよ。くれぐれもよろしくね。」

「大丈夫。千博と二人で何とか切り抜けるよ。」

勝美が涙を拭って、何かを決意したような眼差しとなった。男の子時代の勝美が、たまに見せた強い意思を秘めた表情・・・。すくなくとも、これまでのあたしが知っている限り、この顔をしたときの勝美は強かったわ・・・。大丈夫・・・。多分、これで何とかするでしょう・・・。

「さ、じゃ、この話はもうなかったことにして、勝美は急いでお化粧をざっとで良いから直したらどう？それと９０分が過ぎちゃうから、早く次のスイーツを取りに行こうよ。」

円がそう提案したんで、勝美もようやく我に返ったらしく、ポーチからコンパクトを取り出して目元の涙の跡を隠しだした。それを待って、三人で次の皿を取ってきたんだけど、勝美はあまり食欲がなくなっちゃったのか、ジェラートを二種類取っただけで、あたしが知っている勝美の食欲からして、あり得ない小食だったの。きっと、もう食べられなくなっちゃったのね。可哀相なことしちゃったかな。

でも、これは明日のために絶対話しておかないといけないことだったと思うから、仕方がなかったんだわよね・・・。それに勝美に

覚悟を決めて貰う効果はあったみたいだし・・・。
　それよりも意外だったのは、円が果物を少ししか取ってこなかったの。あたしはまたしても、パフェやチョコレートケーキ、ティラミスやムースなど、皿に山盛りで8種類も取ってきて、その対比が際立っていたわ。あたしとしては、これでもテーブルに出ている種類を全部取ってこれなかったと思ってた位なのに、二人ともどうしちゃったんだろう・・・。
「ねぇ、円って、そんなに小食だったっけ？せっかくのスイーツバイキングなのに、案外食べないのね。それとももう一回、取りに行くのかしら。勝美はあたしのせいで、食べる気力が失せちゃったのかもしれないけどさ。・・・せっかくの女子会なのにごめんなさいね。」
「え？あたしは別に食欲がなくなった訳じゃないわよ。そもそも小さい身体なんだし、女子は男子よりも食べる量が少ないのが普通じゃいない？・・・確かに男子のときは、もっと食べることも多かったけど、あの当時はずっと激しく動いていたし、基礎代謝も男子と女子では違うでしょう。今は全然運動もしていないしね・・・。」
「だから、別に優稀に問い詰められて、食べられなくなった訳じゃないわ。心配してくれてありがとう。」
「あたしにはむしろ、そんなにパクパク食べまくる優稀が心配になるわ。勝美が言ったとおり、女子は基礎代謝も少ないし脂肪がつきやすい身体でしょ。それに優稀はもともと運動が苦手で、ほとんどスポーツはしていないじゃない。それなのに、そんなに食べまくると、肥満体型一直線だよ。女子は太ったら大変だからね。皆、涙ぐましい努力をしているんだよ。」
　知らなかった・・・。円も勝美も、そんなことを考えていたんだ・・・。甘いものに目がないあたしは、初めてのスイーツバイキングで、全部食べまくるんだって張り切っていたけど、女子はそんなことまで心配しなければならないなんて、大変だわ・・・。でも、もし豚みたいになっちゃったら、怜央にも捨てられちゃうかもしれな

いし、男子は誰も見向きもしなくなっちゃうかもしれないわ。そんなの絶対にイヤだし、怜央に捨てられちゃったら、あたしも立ち直れなくなっちゃうかもしれない。
　こういう感情って男子のときには感じたことがなかったけど、これもやっぱり女子の視点なのかしら。去勢された後で、円に捨てられると覚悟したときは、とっても悲しかったけど、それは何か大切な持ち物を失うような悲しさ、なんて言うか、もったいない、というのに近い、残念な気持ちだった気がする。それに対して、今感じている、このどうしようもない怖さ、自分の拠り所がなくなっちゃうような感覚はなかった気がする。
「ねぇ、運痴の優稀はともかくとしてさ、円は何かスポーツはやっているの？確か運動部には入っていなかったと思ったけど・・・。でも見事な体型も維持しているし、いつも健康的そうで今回の試験でも運動点もかなり良かったわよね。そうでなければ一級にはなれないでしょ。」
　勝美がさりげなくあたしのことを『運痴』呼ばわりしてきた。これまで勝美に運痴と言われた記憶はないんだけど、これってさっきの仕返しなの？いや、でも勝美がそんなに性格悪い筈はないから、きっと勝美を泣かせちゃったあたしの心の負い目かしら・・・。まあ、実際あたしは運動神経ゼロに等しいしね・・・。
「あたしはこれまで、少年サッカーチームにも入っていたし、部活でサッカー部にも居たけど、女子になってそういうチームに居続けることができなくなっちゃったんで、何か健康のためにもスポーツはしてみたいと思っているんだけど、何かないかしら？」
「だったら、あたしが通っているスポーツジムに一緒に入らない？あたしはもともと、小さいときからそこの子供水泳教室に通っていて、今じゃマスターコースまで進んでいるの。別に選手になろうってつもりはないけど、週に2回か3回はそこに行って、自分のペースだけど3キロ位泳いでいるのよ。それに中学からは一般のマシントレーニングとかもはじめて、こっちは気が向いたときなんだけど、

筋力アップの各種マシンとか、ランニングマシンなんかもあるんで、その日の気分で好きなものをやっているわ。しかも、お風呂が充実していて、ジャグジーとかサウナとかも使い放題だから、学校帰りによく立ち寄るのよ。優稀もよかったらどう？自分の体力にあったことができるし、水泳は全身運動だから、ダイエットには効果抜群よ。」

「そこ、面白そうね。明後日からは冬休みだから、一度見学できるかしら。」

勝美が興味津々で乗り出してきた。

「見学じゃなくて、体験してみてはどうかしら？申し込めば、無料で１日体験ができるわよ。それで、もしそのまま入会するなら、いろいろな特典がつくキャンペーンをやっていた筈よ。入会金無料とかさ。あたしにも紹介特典として、何か貰えたような記憶があるし・・・。優稀も一緒に体験すればどう？」

円に誘われちゃった。あたしも少しは身体を動かさないと、豚になっちゃったらイヤだし、そもそも今回の試験結果で、体力がないことが、人生まで変えちゃうような大変なことになると思い知らされたんだから、少し本気で身体を鍛えるのは良い機会かもしれないわね。女子会の機会も増えるだろうし・・・。

「うん、じゃあ、あたしもまず体験してみる。明日が終業式で、クリスマスイブとクリスマスは勝美が新婚旅行だから、それ以外の日なら冬休み中はいつでも大丈夫よ。体験参加の予約が取れたら、連絡して。」

「そうだ、千博も誘ってみようかしら。ねぇ、優稀、優稀からも千博に声をかけてみたらどう？」

「わかったわ。あたしからも誘ってみる。勝美もそうだけど、千博も性転換すると、これまでの部活に所属して居続けることができなくなっちゃうから、スポーツジムに通うのは良いかもしれないわね。まあ、あたしみたいにもともと運痴で部活には参加していなかった人には、あまり関係ない話かもしれないけどさ・・・。」

「あれっ？もしかして、さっきあたしが運痴って言ったことを根に持ったの？だったらごめんなさい。そんな悪気があったんじゃないからね。」
悪気はなくても、無意識で反論されたのかしら？・・・まあ、そんなこともあるでしょ・・・。

こうして、最初の女子会は、三人が親友としての交流を深めることができ、勝美と円が名前を呼び捨てできる関係にもなれたんで、大成功だったわ。あたしとしては、単に三人でおしゃべりして、新米女子として慣れる程度のことしか考えていなかったんだけど、明日の対策とか、冬休みに入ったらスポーツジムに体験参加してみる話とか、得るものがすごく多かったわ。
それに、あたしは思わぬ収穫として、生理の手当て方法も実地で教えて貰い、一安心ね。これってやっぱり、経験しないと細かいところは判らないわよ・・・。
勝美は少し可哀相だったかもしれないけど、明日、いきなり本番でのっぴきならない状態にならないための心構えをすることができただろうし、本人も満足していたみたい。それに今夜、千博としっかり話し合うこともできるだろうし、結果オーライだと思うわ。
でも、円は最後に別れるとき、「優稀は本当に心まで完全な女の子になっちゃったのね。」と、少しだけ悲しそうな、複雑な顔をして寂しげにポツンと漏らしたのは、やはり思うところがあるんでしょうね。円とすれば、いつかあたしと結婚する未来も考えていたんだから、それが永久に失われてしまったことに対する残念な気持ちを一生持ち続けるのかしら。
いつの日か、あたしがこの責任をとって、円に何か償いをできる日が来ると嬉しいんだけど・・・。いったいそんな未来はあるのかしら・・・。

第４２話　終業式の日

今日はいよいよ終業式。あたしたちのように性別交換をした生徒が、手術後はじめて登校する日だわ。４週間ぶりにクラスの皆に会うのは、ちょっと怖いんだけど、あたしのことを見て皆何て言うんだろう。怜央はどうなのかしら。

ずっと休みの日が続いていたんで、まるで夏休みが明けて登校する日みたい。またあの日常が始まるのかという、ちょっとブルーな気分と、友達に会えるという期待・・・。でも、すっかり変わってしまったあたしにとっては、学校に行くことが、やっぱり怖かったの。それで昨晩、千博に明日は一緒に登校しようかと誘ったら、千博は勝美の家に行って、父さんの指令（？）を果たしてから、そのまま泊まって勝美と一緒に登校すると言って、断られちゃった。実は昨晩、千博に話をするとき、勝美には父さんの指令を伝えてあるから、これから毎晩、千博のことを待っているはずよと伝えたら、よほどホッとしたのか、夕食もそぞろにいそいそと出かけていっちゃった。千博としては、勝美に父さんの指令をどう説明しようかと、死にそうな顔をして悩んでいたのに、もう勝美が待っていてくれることになったもんだから、緊張が一気に解けたんでしょう。まあ、勝美のご両親に結婚を申し込んでＯＫして貰い、家の鍵まで貰ってきたそうだから、実質的にはもう結婚したも同然なのよね。

でも、これって千博はもう勝美の家に婿に取られちゃったってことよね。芳恵さんが寂しがる訳だわ・・・。

いずれにせよ、この調子じゃ、登校したらいきなりクラスのみんなの前でキスでもしちゃいそうな雰囲気だったけど、大丈夫かしら。今日のことについても、千博にも一応注意しておいたから、二人できちんと口裏を合わせておくでしょう。。

いつもは千博と二人で食べている朝食を、一人で食べ終わると、ごく自然な動作で女子の制服を着込んで登校の準備を整え、玄関に向かった。特にお化粧なんかはしていないけど、一応姿見で髪形やら服装やらをざっとチェックする。こんなの、男子のときには気にもしなかったわ。そういえば、この制服、ブラウスは新しく買ったんだけど、上着は千博のものを直して貰ったのよね。昨日ようやくできてきたんで試着してみたら、ぴったりだった。あたしは千博より身長が低いけど、肩幅とか胸板が少しあるし、何よりAカップだった千博と違って今のあたしはCカップかDカップかというグラマーな体型になっちゃったんで、本当に直せるのか心配だったの。でもさすがはプロの仕事で、まったく不自然な感じがしない状態に直ってきたわ。流石ね。ちょっとだけ気になる点は、本当にあたしの体型にぴったりあっていて、身体のラインがモロにでちゃうの。小さいあたしの身体なのに、多分クラスでも一番位の巨乳になっちゃって、からかわれちゃうのは間違いないわ。ちょっと憂鬱・・・。

今日は終業式だけだから、特に持っていくものはないんだけど、学校に置いたままになっているものを持ち帰ってこなければならないので、大きめのボストンバッグを空っぽで持って家を出た。実は、あたしと千博は、同じボストンバッグを持っていて、これまでは千博のものに勝美から貰った可愛いアクセサリがついていたので、それで区別していたんだけど、今では千博のバッグからアクセサリを外して、あたしのバッグに別のアクセサリをつけてある。でもなんか間違えそうなのよね。気をつけなくちゃ・・・。

電車に乗っているときは、あまり気にならなかったけど、駅で降りて学校までの通学路を歩きだすと、周囲に見知った顔が次第に増えてくる。皆、あたしのことを何となく遠巻きにするような態度で、見慣れない女子が歩いているけど誰かしら、という雰囲気なの。でも、これって案外、あたしが自意識過剰になっているだけで、毎日、

普段どおりに登校してくる生徒にとっては、あたしが誰かなんて、気にもしていないのかもしれないわ。

　それよりも、あたし自身、周囲の見え方、感じ方が、ずいぶん違う気がする。単に長い休み明けというのとは、明らかに異なるの。男の子だったときは、クラスメートの服装なんて気にもしていなかったし、自分の服装すら気にしたことはなかった。それは男の子相手でも女の子相手でも、変わりがなかったんだけど、今は明確に異なる。まず、自分がどんな服装なのか、何か変なところはないか、髪形は大丈夫か、といったことが常に気になって、それを他の女子生徒の服装や姿形と常に比較しなければ不安に感じるようになったの。これって、別にあたしが新米女子なので、自分が女子生徒として周囲から浮いていないかを気にする、というのとはちょっと違っていて、何か集団への帰属ということではなく、自分のことを他人がどう見るかということが、やたらと気になるようになってしまっているのね。特に、同性の女子からどう見られているかということに加えて、異性である男子からどう見られているかについても、特に気になるわ。この感覚、勿論男子のときもゼロではなかったし、女の子に良いかっこしたい、という感覚は持っていたけど、はっきり言って男子は普通、そこまで女子の風体やしぐさを気にすることは、なかったように記憶している。

　あれ。でも、これって知識としては記憶にあるんだけど、本当に当時のあたしがそう考えていたのかしら。何だかそういう意識を持ち出すと、当時の自分の心の中がどうだったのか、自信がなくなってきちゃった。本当にそうだったのかしら。それとも今のあたしの感じ方で、昔のことを思い返しているからこそ感じるのかしら・・・。

―――――――――――――――

――――――――

いつもより一本早い電車だったんで、まだ登校のピークにはなっていなかったけど、それでもクラスに着いたらもう１／３位の生徒が居て、教室の後ろのほうで女子に囲まれている怜央も居たし、円も自分の机に座っていた。男子は怜央を何となく遠巻きにして、話しかけるきっかけが掴めないような雰囲気だったけど、それともあれは女子が取り囲んじゃっているから、話の輪の中に入っていく勇気がないだけなのかしら。

でも、クラス中から匂ってくる男子の匂い、女子の匂い、それが以前男子だったときは、ここまで気にならなかったのに、今のあたしにはとてもはっきりとわかるのね。というより、当時は何となく胸がドキドキするような匂いだった女子グループの匂いは、殆ど気にならなくなっていて、逆に当時は殆ど感じなかった男子からは、心がときめくような不思議な匂いがするのがよくわかる。これがまさに、思春期の男子から出るフェロモンなんだわ。怜央からもしていたけど、これだけの人数がまとまると、さすがにすごいわね。

そんな中、あたしがクラスに入っていくと、あたしに気がついた何名かの女子は（男子は特に気にしていなかったみたい）、誰か別のクラスの子が入ってきたのかな、という程度の顔をしただけで、誰だったっけ、というちょっと考えるようなしぐさをした子が二人位居たけど、特に何も声をかけられるでもなかった。でも、あたしがまっすぐ自分の席に向かい、ごく自然にそこに座ると、一瞬の間というか静寂があって、次の瞬間、クラス中が一斉に物凄い歓声と驚嘆の声に包まれた。

「すっ、杉田かっ！杉田優稀なのか！！」
「うそーっ！杉田君なのっ！！」
「信じられない！」
「どうやったらそうなるの？！？！」
「むっ、胸っ、その胸・・・？」
「でけぇ・・・！！」

「ありえなーい！！」
「クラスいち、・・・いっ、いやっ、学年で一番でかいんじゃないか？！」
「さっ、触ってもいいかっ？？」
「あたしよりずっと美しいわね・・・。」
「似合ってるなんてもんじゃねえな・・・。」
「どこからどうみても女の子じゃない。」
「俺と付き合ってくれ！！」
「服を脱いで見せてくれよ！！」
「まさかチンコは付いていないよな？！」
「杉田のチンコって、でかかったっけか？？」
「カンケーねーだろ。それに杉田のチンコはもう榊についてるぜ。今度見てみな！」

いったい、あたしのどこを触りたいのかしら。それに触らせてくれとか服を脱いで見せてくれなんて、どういう神経なのかしらね。付き合ってくれというなら、まだわかるけど。
「みんな、久し振りね。長いことお休みしていたけど、前と同じくよろしくね。女の子になっちゃったから、前とは勝手が違うかもしれないけど、前と変わらずに仲よくしてね。あたしもまだ女の子には慣れていなくて、戸惑いだらけなの。変なしぐさとか、変な言葉遣いでも、笑ってスルーしてくれるかしら。」
「その声っ！！」
「かっ、可愛いっ！」
「喉も手術したのーっ？」
「天使の歌声だっ！」
「理想のマドンナ！！」
「待ち受けにするから写メ撮っていいか？！」

クラス中の生徒が皆、あたしの周りに集まってきちゃった。あた

しは男子にも女子にも取り囲まれ、あたしを中心に何重にも人垣ができてしまったみたい。と、人垣の向こうから、人気を取られてしまった怜央が、ちょっとだけ不本意そうな顔でやってきて、人込みをかき分けて輪の中に入ってきた。
「杉田さんはもうすっかり女の子だね・・・。こうして並んで立っても、僕たちが性別を交換したと理解できる人はいないんじゃないかな。」
「榊・・・さん？・・・君？・・・どっちで呼ぶべきなのかしら？？？」
「杉田さんは、もう間違いなく女子のさん付けで呼ぶのがよさそうね。」
「こんなイケメン男子をつかまえて、迷うことはないだろう。」
皆でワイワイガヤガヤと収拾がつかない状態だったのが、チャイムが鳴るのと殆ど同時に先生が入ってきてクラスを鎮めにかかった。
「さ、皆、席に着きなさい。性転換した生徒は、毎年必ず何名かはいるんだから、そんなに大騒ぎするほど珍しくもないだろう。とはいえ、榊は殆ど予想通りの見た目と雰囲気になったが、杉田は俺もちょっと驚いたな。性転換してグラマーになる生徒はときどき居るが、そこまで見事な体型になるとは意外だったぞ。それにチャーミングで声もきれいで、本当に理想的な女子になれたじゃないか。お前、やっぱり性転換して正解だったよ。自分でもそう思わないか。いや、実を言うと、毎年、この日に登校してくる生徒を見て、うまく順応できているのかがいつも心配なんだが、お前に限っては、本当に元から女子だったとしか思えないほど理想的な女の子になっているぞ。体型とか声とか、そういった外形的な部分はもとより、何というか全体の雰囲気が女子としか思えないんだ。これは決して俺の贔屓目（ひいきめ）ではなく、本当にそう感じる。杉田自身もそう思わないか？」
「ご心配頂きありがとうございます。ようやく、女子に少しずつ慣れてきたところですけど、まだまだ女子としては新米です。それに

まだ心が完全に女性化したわけではなさそうなので、そんなにアイドルみたいに持ち上げないで下さい。しばらくはそっとしておいて頂けませんか。」
「む、そうだよな。お前の気持ちも考えずに軽率なことを言って申し訳なかった。変な注目を集めたくはないだろう。皆もよくよく心して、二人にはごく普通に接するんだぞ。男子の榊、女子の杉田、ということで、それぞれ男子も女子も、変な色目で見たり、からかったりは絶対にするなよ。特に男子、うかつな発言はセクハラだからな。俺も気をつけるが、セクハラというのは杉田がそう感じたらセクハラになるんだから、発言には特に注意しろよ。まして触るなんて、もっての外だからな。発覚したら厳しい罰があるのは知っているよな。」
　そう、先生がこう言ったので、一瞬でクラスが静かになった。100年位前からセクハラという概念が出てきて、だんだん社会の風当たりが強くなっていったのは歴史の授業でも習っているけど、現代の日本においては、セクハラをしたと認定されたら、よくて社会的に抹殺、もし訴えられて裁判になると、最高刑は去勢、多少の情状酌量があったとしても、強制的な性転換をされてしまうんだわ。小学校低学年ならまだしも、もうすぐ結婚もできるあたしたちの年齢だと、もう成人と同じ量刑になることも多くて、セクハラで去勢の判決を受けたとか、罪一等を減じて判決は性転換だったという話もたまにニュース沙汰になるので、これかなり恐怖なのよね。というか、去勢とはその名の通り、もとの性器を摘出するだけで、男性でも女性でもなくされちゃうんだけど、これはさすがに可哀相だとか、少子高齢化の日本にあっては、たとえ重罪人だろうと生殖可能年齢の男女を実質的に抹殺してしまうのは良くないということから、最近では去勢処置はかなり年配の人とか、既に何名も子供がいる者に対する判決のみで、若い加害者は普通に性転換という判決が出るのが一般的みたいだわ。
　まあ、性転換というなら、要するにこれまでの自分の性別とは異

なった人生を歩むというだけで、子供を産み育てることに関しては、何も障壁がないんだけど、そのせいかどうか、セクハラなんていう重大な犯罪、それも破廉恥罪を犯したような者には、男性でも女性でも、わりと簡単に性転換の判決が出ているみたいなの。要するに反対の性別になって、自分の発言や行為が相手にとってどう感じるかを、一生かけて反省しなさいという意味なんでしょうね。でも、そう考えると、母さんじゃないけど、やっぱり性転換手術って、何かの罰なのかしら？・・・あたしは何か悪いことをしたの・・・？

今日は終業式だけなので、基本的にはホームルームだけ。先生から冬休みの注意事項とか、学校からのお知らせ、その他各人の階級が決まったので、それに関する各種書類の配布など、淡々と進んで行って、最後に通信簿が配布された。でも、もう判定試験も終わってしまって、学校の成績はあまり意味がないので、本当に参考というか単なる慣例として成績をつけて知らせるというだけみたい。クラスの皆もあまり興味がなさそうで、先生も機械的に配布しているだけだわ。

「・・・ということで、この冬休みは中学生活最後の休みであると同時に、お前達が成人になる前の最後の休みでもある。・・・まあ、二人ほど例外も居るけどな・・・。判定試験も終わったし、ハメを外したい気持ちは判るが、皆、程々にして、特に冬休み中の事故には気をつけろよ。それから、まだお酒は早いからな。毎年、成人式の前のお正月に酒で失敗するヤツがいるから、一応釘を刺しておくぞ。」

「あ、それから帰るときには体操服とか、いろいろ持ってきているものは忘れずに持って帰るんだぞ。机の中やロッカーには何も残しておくなよ。・・・じゃあ、これで2学期はお終いだ。皆、良い年を迎えてください。そして全員、元気で新年に戻ってくることを期待しています。」

「起立！・・・礼！！」

「さようなら。」

第４３話　親友と

先生の挨拶で長いホームルームも終わり、２学期が終了したんで、一気にガヤガヤと騒がしくなったわ。あたしは机に入っていた教科書やノートを全部、持ってきたボストンバッグに詰め、後ろの棚にある体操服（そういえば、男子の体操服だったんだけど、これもやっぱり千博と交換するのかしら・・・？）とかを取ってこようと立ち上がったら、またしても一気にクラスメートに取り囲まれてしまった。男子はクラスの殆ど全員があたしの周りに集まり、女子は半分位があたしに、残りの半分位が怜央に向かったわ。

「すっ、杉田っ、頼むっ。俺と付き合ってくれっ。」
「俺がっ、俺が先だっ。」
「セクハラじゃないぞっ。本気だからなっ。」
「まずは友達からスタートしないか。」
「俺たち親友だったよな。」

「ごめんなさい。あたし、まだ女の子になったばかりで、身体が全然慣れていないし、それ以前にあたしの心はまだ男の子のままだから、男の子とお付き合いするのは、もう少し待ってくれないかしら？」

「でっ、でもっ、その声。」
「それにその女言葉。」

「声は単に声帯を手術して、女の子みたいに少し高くしただけよ。だいいち、女の子に喉仏があっちゃ変でしょ。」
「この女言葉は、これでも４週間、必死になって練習したのよ。ち

ょっとはそれっぽく聞こえるかしら。でも、本当にもう少し待って欲しいの。もう少し慣れたら、あたしから声をかけるから。ねっ、お願いだから、それまで待っててね？」

「ほら、杉田さんは少し待ってって言ってるでしょ。本人が嫌がることは、全部セクハラになるのよ。正式認定されちゃったらどうなるのか、知らない人はいないでしょ。少しそっとしておいてあげたらどう？」

「わっ、判ったよ。」
「ごめんな、杉田。」
「なるべく早く返事くれよ。待ってるからな。」
「バレンタインには本命チョコが欲しいな。」
「おっ、俺は義理チョコでもいいぞっ！！」

よかった。円が割り込んできてくれた。それにセクハラ認定は、やっぱり恐怖なのね。これでまた一気に鎮静化したわ。皆、未練たっぷりの様子だけど、取り敢えず今日のところは、これで引き下がってくれるのかしら。昨日、話をしておいた成果ね。でも、男の子は殆ど全員があたしに声をかけてきたわよね。うちのクラスの男子は、誰一人として女子と付き合っている子がいないのかしら。あたしが男子だったとして、仮に魅力的な女子が突然現れたとしても、円と付き合いだしたのに他の女の子に声をかけようなんて普通思わないと思うんだけど、いったいどうなっているのかしら・・・？
それに対して、女子はあたしのほうにやってきた人も、何となくよそよそしくて、遠巻きにあたしのことを見定めているような目つきなのよね。心の中を見透かされているような感覚・・・。やっぱり同性の視線はごまかせないのかしら・・・。あとで円に少し聞いてみようっと。
一騒動が納まって、クラスの皆は三々五々、帰りだしたみたい。

怜央は数人の女子と何やら話していて、それぞれ手帳やスマホを出していたから、きっと冬休みのスケジュールを調整して遊びの計画でも練っていたみたいね。やっぱり怜央は、女の子を取っかえ引っかえ食べちゃうつもりかしら。あたしのあげたおちんちん、あんまりこういう活躍はして欲しくないんだけどな・・・。

そんなことを考えながら、下駄箱に行くと、元村寛君が丁度靴を履き替えているところだった。実は寛は、これまで加藤慶太君と並んであたしの一番の親友で、さっき話しかけられた俄か親友とは次元が違うのよ。何故って、寛と慶太の二人は、あたしの本当の親友で、特に寛には中一のときオナニーを教えて貰ったんだもん。あたしはそれまで夢精したことはあったけど、意識がある状態での初めての射精は寛の手でさせて貰って、感覚的には事実上の精通をさせてくれたオナ友だったのよね。彼も一人っ子で、あたしはよく彼の家に遊びに行っては、彼の膨大なエロ本コレクションやエッチなサイトをおかずに、二人で一緒にオナニーをしていたんだから。

「あ、寛君、一緒に帰らない？あたしも丁度帰るところなんだ。」

「ゆっ、優稀・・・さん？・・・今帰るところなの？」

「ええ、前みたいに仲良くしましょう。あたしのことは前みたいにユウキって呼びたいに仲良くしましょう。」

「うん、わかった。何となく勝手が違うけど、やっぱりユウキって言う方がしっくりするから、そうさせて貰うね。」

「それにしても本当に見違えたよ。どこからどう見ても、女の子じゃない。それもすばらしく魅力的だ。もともと優稀は小さくて可愛かったから、ある程度は、というか、ある意味イメージどおりなんだけど、その胸には本当に驚いたよ。そんなにグラマーで大きくなるとは思わなかった。すごく立派で良いね。あ、でもこんな話して、嫌だったらごめんね。知ってると思うけどさ、僕もときどきチンコが大きいって褒められてるんだか、からかわれてるんだか、よく判らない弄(いじ)りをされて、すごく嫌なことがあるから・・・。」

「ううん、構わないわ。気をつかってくれてありがとう。寛ならきっと、この感覚がわかってくれるんじゃないかと思うんだけど、やっぱりおちんちんにせよおっぱいにせよ、身体に対する適切なサイズってあるのよね。あたしは勿論、寛も小柄なほうだから、ただ大きければ常に良いっていうものじゃないじゃない？」

「やっぱり、いつも一緒にオナニーしていたオナ友の優稀なら、僕の悩みも理解してくれているんだね。あ、こんなこと無神経に女子に話しちゃってるけど、これもセクハラになるのかな？・・・気に障ったらごめんよ。嫌なら話題を換えるから、いつでも言ってね。それとも優希はまだ心が男の子だって言ってたから、こっちのほうが普通なの？」

そう、寛は中1のときにあたしを精通させてくれて、それからずっとオナ友だったのは事実なんだけど、実はそうなるのにはちょっとした事情があったの。寛は小学校の頃から、クラスでも目立たない存在で、勉強も運動も中の上といった辺り、いわゆる平均をちょっと上回るという程度のモブキャラだったんだけど、身長は割と小さい方で、あたしほどじゃないにしても、いつも前のほうだった。でも、そんな小柄でモブな外見とは裏腹に、寛のおちんちんは小4の頃から高度成長を遂げてぐんぐん大きくなり、小5の夏休みにはもう毛も完全に生え揃い、すっかり大人のおちんちんになっていたの。寛は必死で隠していたようだけど、こういうのってやっぱり伝わるものよね。

決定的だったのは、小6の夏に林間学校に行って、皆で風呂に入ったとき。最初、寛はタオルで隠していたんだけど、皆から風呂ではタオルを取るようにと言われて、ついに意を決してタオルを取ったときの衝撃は、今でも語り種になっているわ。へその近くまで黒々としたジャングルが生い茂り、その中心には大人のおちんちんと比較しても明らかに大きい、多分15センチ以上あって、平常時でも先っぽが完全に剥けて赤黒く色素の沈着した、もうエロ本に出てくる男性モデルもびっくりするような巨根が、ふてぶてしく鎮座し

ていたの。
まだ顔つきは本当にあどけなくって、身体全体も小児体型といって良いのに、あそこだけは大人でもめったにいないような、極めつけにすごいものを持っていて、クラスの皆は一言も発することができず、一瞬、シーンとしてしまった位なんだから。
皆が固まったようになって凝視していると、寛は恥ずかしいのか、それとも開き直ったのかは知らないけど、皆に見せつけるようにあそこを前に突き出してきた。すると、それまでデロンとしていたおちんちんが、急にムクムクと大きくなって、上を向いて見事に天を突くように屹立しちゃったの。
普通の状態でも大人のおちんちんよりずっと大きく見えたのに、屹立したらもう20センチを優に上回るようなサイズになって、太さは子供の手ではとても握りきれない、両手を使わないと握れないような、ゴツゴツとした野生の芋のような外見に、誰も声を出せなかった。しかも亀頭は大きくエラが張っていて、カリの部分の直径は、きっと6センチ以上あったんじゃないかしら。
まだ小学生だったあたしたちは、格の違いに声も出せず、からかうこともできないまま、そそくさと風呂から出て、その夜は布団で皆黙ったままだったわ。
この一件以来、寛はデカチンというレッテルが貼られて、ある意味、尊敬と羨望の対象にもなったんだけど、多くの場合は弄りとからかいの対象になっちゃったの。でも、あたしは同じような小さい身体なのにすごいと、純粋な憧れもあって、皆がからかったりしたときは、それとなく話題を逸らしたり、軽く注意するような言動を心がけていたら(同性に対するセクハラも、異性に対するものほどではないにせよ、やはり厳しく取り締まられていたしね)、いつの間にか寛とはとても仲良くなっていて、中学に入る頃には、何でも話せる一番の親友となっていた・・・。それで、当時のあたしは、夢精は何回かしたことがあったけど、まだ寝ているとき以外に射精したことがなくって、そんな話を寛の部屋でしていたら、じゃあ教

えてあげる、ということになり、寛の手ではじめての射精（あたしにとっては、事実上の精通だと思った）をさせて貰ったんだわ。忘れもしない、中１の夏休み最初の日だった・・・。
それ以来、寛とはオナ友として、よく一緒にオナニーをしていた。あたしの部屋とか、体育倉庫の裏側とかも、たまにあったけど、基本的には寛の部屋で、二人して同じエロ本やネット画像を見て、どっちが先にイクかを競争したりもした。だってサイズは言うまでもないけど、勃起力とか射精量とか、射精の回数とかじゃ、およそあらゆる点であたしは寛には敵わなかったから・・・。
寛は、あたし同様、身体点はかなり悪かったみたいだけど、勉強はそこそこできたし、何より生殖機能点が殆ど満点だったらしくて、それで第二階級になれたんだって。でも、そうね、寛なんて、お付き合いする候補として、理想的かもしれないわ。男の子だったときのあたしとは一番の親友で、お互い気心も知れているし、いつも一緒にオナニーしていたから、あのおちんちんにも何となく親近感があるのよね。でも、寛のおちんちん、物凄く大きいんで、あんなの入れられたらどうなっちゃうのかしら。ちょっと期待半分、怖さ半分なんだけど・・・。

「ねえ、寛。つかぬことだけどさ、今、寛は誰か付き合っている女の子は居るの？」

やっぱりこれは聞いておかないとね。慶太みたいに付き合っている女の子が居るんじゃ、そこに割り込むのは嫌だし・・・。

「ん？僕？・・・誰もいないよ？・・・それは優稀が一番良く知っているじゃない。彼女が居たら、優稀とあんなにしょっちゅう、一緒にオナニーなんかしていないよ？」
「そもそも彼女いない歴＝年齢の僕が、優稀が休んでいた４週間程度で彼女をつくれる筈もないじゃない・・・。」

「あ、それだったら、あたしと付き合ってみない？・・・いずれあたしが慣れてきたら、男女の関係になるのか、それとも以前みたいな親友の関係から、もう少しだけ仲良くなれるのか、あたしもまだ女子としては新米で、男子とどう付き合ったらよいのか、よくわからないの。それで、前から親友で、お互いのことをよく知っている寛となら、あまり気負ったりせずにお付き合いできるんじゃないかって気がするのよ。こんなこと頼めるの、寛しか思い浮かばないんで、ちょっと考えてみてくれないかしら？」

「ぇえっ？？・・・僕なんかで良いの？！」

「寛だから良いんじゃない。」

「優稀がそうしたいんだったら、勿論大歓迎だよ。今の優稀はどこからどうみても、チャーミングでグラマーで可愛くて、本当にアイドルみたいじゃない。そんな優稀と付き合えるなんて、感激だなぁ。」

「でも、ちょっとだけ違和感があるね。優稀はまだ心が完全に女の子になっていないって言ってたけど、僕にとっても優稀は同性の親友だったんで、何となくまだ昔のイメージがチラつくんだよね。第一、これまで僕は女の子と付き合った経験がゼロだから、女の子とどう付き合ったら良いのかもよく知らないのに、男の子時代の優稀との思い出があるから、女の子の優稀とうまくお付き合いできるかどうか、ちょっと心配だな。だから、まずは月並みだけど友達以上、恋人未満というところからスタートして良い？」

「ええ、あたしもそのほうが気楽で都合が良いわ。以前の親友が、単に性別が変っただけと思えば良いんじゃない。親友であることは変わらないんだから、同じように一緒に遊んだりして、やがて恋愛感情が育つのを待つことにしない？・・・普通の男女だってさ、一目惚れっていうこともあるのかもしれないけど、やっぱり仲良くしているうちにだんだん親しさが増してきて、気がついたらいつの間にか好きになっていたっていうことが多いんじゃないかしら？」

「そうだよね。じゃあ、まずはまた、僕ん家に遊びにおいでよ？・・

・さすがに前みたく二人でオナニーはしないと思うけどさ、よく一緒にゲームしてたじゃない。優稀が休んでいる間に、最新のゲームを二つ手に入れたんだ。それとも、男の子の部屋に一人きりで来るのは心配？」
「ありがとう。あたしは別に気にしないわ。寛は紳士だからいきなり女の子を襲うようなこと、するはずないって信用しているわ。それに処女でもないしね・・・。なら、家に戻ってお昼を食べてから、午後にお邪魔するわ。2時過ぎで良いかしら。」
「そういや、そうだったよね。もし、嫌じゃなければ榊君との様子なんて、聞かせて貰えると良いな。なにせ、僕はあんなにエロ本とかは持っていても、実際には本物を見たこともないからね・・・。」
「そっ、それはっ・・・！」
「あ、ごめんね。これってセクハラだよね。優稀と話しているとさ、何となく以前の同性だったときの感覚が残ってるんで、こんなエッチなことも普通に話題にしちゃうな。でも、こういう話、女子にとっては、やっぱり話したくないよね。気をつけるよ。」
「別にエッチの話をするのは構わないわ。でも自分のことを話すのは恥ずかしいわね。」
「それはそうだよね。でもやっぱり優稀とは親友だから、嫌なことは嫌と気軽に言えるね。こんなこともつい気軽に話しかけちゃうな。」
「それでいいんじゃない。あたしもそういう関係は気楽で良いわよ。これまでと同じにしましょう。」
「うん、わかった。・・・じゃあ、家で待ってるから。また後でね。」

上手く行ったわ。そうよ、寛なら手頃だし性格も判っているし、それに今みたいに気軽に話ができて、でもあたしがちょっとでも嫌そうな顔をすれば、すぐ気付いて話題をかえてくれる。さらに、一人っ子で家には彼一人しかいないのが普通だから、何かと都合が良

いわね。今の口調からも、寛もまんざらじゃない様子だったし、他の男子みたいにガッついたりすることもないと思うわ。
　さっそく、午後にデートの約束も取れたし、また前みたく遊びに行こうっと。まあいきなりセックスにはならないでしょうけど、でもちょっとお化粧とかして、可愛い服を着て行けば、寛もその気になったりして・・・。うふっ、ちょっと楽しみ。何か手土産でも持っていこうかしら・・・。
　そんなことを考えながら寛と別れて自宅に戻ってきたのは、まもなく正午になるところだった。

第４４話　終業式の朝（千博と勝美）

　朝、勝美のベッドで目が覚めた。僕にとっては初めての外泊だったけど、婿入りする婚家に泊まるんだから、まだ正式に結婚したんじゃないとはいえ、そんなにやましいところはない筈だ。（まあ、一応婚前交渉ということにはなるんだけど、両家の両親とも公認なんだし、父さんに至っては毎日やれと言ってる位だから、構わないよね・・・。）

　実は一昨日の父さんの命令を勝美にどう伝えようかと、ずっと途方に暮れていたら、優稀が女子会とかで勝美に話をしてくれて、昨日優稀が戻ってきたときには、もう僕は勝美の家に行くだけで良いところまでお膳立てがされていた。これは新米男子には本当にありがたかった。それで昨晩遅くに勝美の家を訪ねたら、勝美はリビングで僕のことを待っていてくれた。（お義父さんとお義母さんは気を利かせてくれたのか、一階の寝室で早々と寝てしまったらしい。）勝美の話だと、お義父さんはこれから年末年始をずっと日本で過ごすとのことだった。とすると、毎晩、勝美の部屋でやるのを知られちゃうのかな。まあ隠すことでもないけど、ちょっと憂鬱で気が引ける。本当はこんなことじゃ入婿失格なんだけど、まだ僕も心の準備が・・・。これは勝美が妊娠したら、少しは雰囲気が変わるんだろうか？

　いずれにせよ、昨晩は勝美と二人で、リビングのソファで勝美が淹れてくれた紅茶を飲みながら、今日の終業式のことをいろいろと話し合った。勝美は優稀に言われて、かなり深刻に考えているみたいだったけど、クラスの皆がそんなに意地悪なことをするのかなあ？少なくとも僕は、これまでそんな、吊るし上げのような苛めにあった記憶はないし（勿論、からかわれたりしたことは何度もあるけど、それはお互いさまだし・・・）、女子はもとより、男子とも、

そんなに悪い関係ではないつもりだから、いったい何を対策すれば良いのか、見当もつかない。優稀は僕にも、いろいろと質問責めに合うから、口裏を合わせておいたほうが良いとアドバイスしてくれたけど、そもそも質問されても、僕たちの間に隠すようなことは、ないつもりだ。僕たちが性器の交換手術をして、その上でセックスしたことはクラスの皆も知ってるんだし・・・。まあからかわれたり、セックスの様子を根掘り葉掘り聞かれるとしても、恥ずかしいのはともかくとして、あまり気にしなくてもいいんじゃないかな。そもそも、もうクラスでもセックスした奴だって居るだろうし、まだのやつらだって、来月の成人式で初体験を考えているのは、かなり居ると思うけど。

　ただ、勝美は、僕のプライドが貶められることを心配してくれた。特に勝美は以前、悪ガキ二人（勿論、仁科と片桐の底辺コンビだ）が僕達の悪口を言っていたのを聞き咎めて、二人をボコったことがあると言っていたっけ。まあ、あの二人なら、そういうこともあるだろうけど、でももう僕は男子なんだから、気にしなければ良いだけだし、勝美は女子になっちゃったとはいえ、悪口を言われた位じゃビクとも動じないと思うけどな・・・。

　とにかく、明日はあまりこちらからいろいろ話したりせず、大人しくしていようということにして、勝美とベッドに入った。さすがに二回目だってこともあるけど、お義父さんとお義母さんがもう寝ているというのは、精神的に随分と気楽になれる。それになぜか勝美も恥じらうばかりで、前回とは打って変わって自分から積極的には動こうとしない。僕はてっきり、またお尻をグリグリされて、女の子みたいにアンアン泣かされた挙げ句、何度もイカされて気絶するまで調教されちゃうのかと覚悟していたら、そんな素振りは微塵も見せない。でも、僕がやりたいと思うこと、やろうとしていることを先回りして読み取り、僕が動きやすいように姿勢を整えてくれる。それどころか、僕に身体を全部預けて、総てを僕に委ねるような態度を崩さない。僕が勝美のあそこに顔を近付けると、自分から

股を大きく開いて、両手であそこをクパァと広げ、真っ赤な顔をしながらも僕に奥の奥まで触って貰おうとする。僕も心置きなく勝美のあそこを舐め回し、膣内(なか)に指を入れて勝美のGスポットがどこかを探し、とうとうそこをつきとめて中指でグリグリしながら、クリトリスを剥き出しにしてチュッチュッと吸い回すと、もう勝美は連続イキ状態で悲鳴を上げては気絶し、また意識を取り戻して悲鳴を上げ直ぐに気絶を繰り返すようになった。

　こんな状態を長時間続けていたら、きっと勝美の精神が持たなくなってしまうので、適当な頃合いを見計らって、ペニスを挿入した。もう勝美はペニスを挿入(い)れられただけで、機械的な反応をする動物のようになってしまった。白目を剥いたまま、「ぅをっ、ぅぐっ、ぁおっ」と獣のような声を上げながら、身体をビクン、ビクンと痙攣させている。しかも勝美が痙攣する度に、僕のペニスを恐ろしいほどの力でキューッ、キューッと絞るように締めつけてくる。それで僕も、何も考えずに自分の好きなようにペニスを突き入れ、勝美の膣内(なか)の一番奥深いところに、思い切り射精した。

　僕が射精した瞬間、勝美はまたしても「ぅおぉぉ」とか「ぐぁわぁぁ」とか、うまく聞き取れない獣の咆哮のような唸り声を上げて身体をビクン、ビクンと引きつらせていたが、そのままカクッとなって糸の切れた人形みたいに反応がなくなってしまった。ちょっと焦ったけど、今度こそ勝美を完全に征服したという達成感に包まれて、僕の気持ちは随分落ち着いた。今度こそ、ベッドの主導権は完全に僕が握ったという自信が湧いてきた。その感覚は、気を失って、呼びかけても揺すっても意識が戻らない（というか全然反応がない）勝美のあそこを、枕元のタオルで丁寧に拭いてあげたことで揺るぎないものとなった。イキ狂った挙げ句に、気絶したままの女子の股間を世話する、これこそ男子として完全に女子をコントロールして、自分の支配下に置いたということの証明(あかし)のような気がした。だから僕は意識のない勝美にM字開脚姿勢を取らせて、随分長いことタオルを取り替えながら膣内(なか)の奥の方まで何度も繰り返し拭いてあげた

んだ。
　勝美は白目を剥いたまま、あそこから僕の精液と自分の愛液が混ざった白濁液をとろとろとたらし続けていたけど、僕が勝美の膣内をさんざん拭いても、まったく目が覚めない。でも規則正しい息はしているし、試しに剥き出しでビンビンになっているクリトリスをちょんと突っ付くと、ビクッビクッと痙攣するから、多分大丈夫だろうと考えて、二人とも裸のまま、勝美を抱き抱えるようにして眠ることにしたんだ。
　そして今朝、５時過ぎに目が覚めたら、勝美も丁度目を覚ましたところだったんで、二人で一緒に風呂に入った。前夜さんざんやりまくって、そのまま寝てしまい、朝風呂に入るなんて、なんて爛れた生活をしているんだろうと、ちょっとだけ心が痛んだ。それと、もうひとつ気になったんだけど、僕と勝美はこのまま登校しちゃうとすると、グチャグチャになっている勝美のベッドは、まさかお義母さんがシーツの交換とか、ベッドメーキングとかもしてくれるんだろうか。いくらバスタオルを何枚も重ねて敷いてあるといっても、僕の精液や勝美の愛液、それに二人の涎なんかでベトベトになっているのを交換して貰うのは、気恥ずかしくて逃げ出したいほどだ。せめてこの淫臭だけでも何とかしようと、窓を大きく開け放って、勝美と二人でリビングに降りて行ったら、もうお義母さんは台所で朝食の支度をしていた。
「おはようございます。昨日は夜遅くに突然押しかけてしまい申し訳ありませんでした。」
「あ、おはよう。昨晩は良く眠れたかしら。もうここは自分の家なんだから、私たちに対する気遣いはいらないわよ。」
　そんな話をしていたら、お義父さんも起きてきた。
「お、早いじゃないか。いつも寝坊助だった勝美が、こんなに朝早く起きてくるなんてビックリだな。」
「おはようございます。昨晩は夜遅くに勝手に上がり込んでしまい失礼しました。」

「まだそんなことを気にしているのかい？自分の家に帰宅するのに、何を遠慮しているんだ。こっちこそ、先に休ませて貰い、失礼したね。ま、家族なんだから、それぞれ好きな時間に好きにするということにしよう。それに千博君が来ることは勝美から聞いていたしね。」
「恐縮です。」
「そういえば、千博君はこれがはじめての外泊だって聞いたけど、本当かい？感想はどう？」
「婿入りする婚家に泊まるのですから、外泊といっても・・・。」
「まあ、そうだね。そんなに構えることもなかろう。もう君はこっちが自分の家だと考えてくれて構わないんだから。・・・それはそうと、これから毎晩お務めを果たすためにこっちに来るんだってね？なら明日からは最低限の身の回りのものとか、着替えとかを持って来なさい。千博君専用の小さなタンスかクロゼットでも用意しておこう。それと、空いている部屋があるから、千博君用の机も用意しようか。結婚しても、まだこれから高校そして大学と、勉強は続くだろうからね。」
「何から何まで気を使っていただき、ありがとうございます。」
「取り敢えず、自分用の洗面用具とか制服とか下着とか寝間着とか、必要なものを少しずつ持ってくると良いよ。・・・あ、でも寝間着はいらないかな・・・。ベッドではどうせ裸だろうしね・・・。」
　まただ！！・・・お義父さんがニヤニヤしながら、さりげなく僕のことを弄(いじ)ってくる。そりゃ、確かに毎日、勝美とベッド・インするんだから、裸もそのとおりなんだけど、こうもあからさまに正面切って言われると、もう恥ずかしくていたたまれない。入婿って、鋼の精神がなければ務まらないんだ・・・。それとも、お嫁に来た女性でも、似たような感覚なんだろうか。そんな僕に、お義父さんが追い打ちをかけてきた。
「まあ、何にせよ、君のお父さんの言うとおり、一刻も早く孫の顔を見せて欲しいな。そうだ、夕食もこっちで食べたら良いよ。ね、

明美、お前、千博君のために何か精力のつく料理を沢山つくってあげなさい。勝美も、それをよく覚えておいて、旦那様が我慢できなくなっちゃうような料理を出すのが妻の務めなんだぞ。」
「ごっ、ごちそうさまでしたっ。もう登校の時間なので、お先に失礼します。」
勝美と二人で、ほうほうの体で部屋に逃げ戻って支度をした。

ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

結構早く起きたつもりだったんだけど、勝美と二人で登校の準備をしていたら、思ったより時間がかかってしまい、結局いつもより1本後の電車になった。まあ、これでも丁度良い位の時間に着くから、この電車で来る子も沢山いる。でも、この電車だと余裕がないんで、皆、駅からは黙々と学校に急ぎ、どこかで寄り道したりお喋りを楽しむほどの時間はない。僕たちも二人で揃って、スタスタと歩いて教室に急いだんだけど、到着するまで、他の生徒から話しかけられたり、からかわれたりすることはなかった。
教室に到着し、それぞれ自分の席につくと、クラスの女子全員から、なんだか冷たい視線が突き刺さってくる。でも、理由が判らない。長く休んでいた間に、僕は何かやらかしちゃったんだろうか？
他方、勝美には近くの男子が、何となくおっかなびっくりという様子で、声を落として話しかけているようだけど、僕以上に大きく雰囲気が変わった勝美なのに、思ったより男子からのアプローチが少ない。勝美も、何となくクラスの反応に戸惑っているようだ。そうこうしているうちに、チャイムがなって先生がやってきた。
「おはようございます。杉田君と遠藤さんは、もうすっかり性別を入れ換えて、それぞれ男子と女子になりきれたみたいね。どこからどう見ても、遠藤さんは元から女子だったとしか思えない雰囲気だし、杉田君もやはり元から男子だったと言われても違和感がないじ

ゃない。」
「ありがとうございます。長いことご心配おかけしました。」
「普通、本人の意思に反して性転換させられてしまった場合、ちゃんと新しい性別に馴染めているか、精神的に大丈夫か、というフォローアップを考えなければならないことが多いんだけど、あなたたちは二人とも希望して性別交換したんだし、昔から恋人同士で今もそれは一緒なんでしょ。だから、何も心配することはないわね。是非、交換した性別を楽しんで、これからの人生を歩んでちょうだい。」
「「はい！」」
「さ、では冬休み前のホームルームを始めます。」
先生はなんだか、わりと普通の感じで、ちょっと長く休んでいた生徒が登校してきたという雰囲気の、気軽な口調だったけど、これって僕たちが変に注目を集めないように気をつかってくれているんだよね。まあ、僕たちみたいに男女双方とも希望して性別交換したなんて例は、あまり聞いたことがないし、ましてその二人が恋人同士であり続けたなんて、おそらく全国的に見ても前代未聞じゃないかと思うから、先生にも対応マニュアルがないんだろう。

ーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー

「では、これで2学期終了となります。皆さん、冬休み中の事故には気をつけて下さい。皆さんにとっては未成年時代最後の冬休みとなりますから、過度に羽目を外さないよう自らを律して、良い新年を迎えて下さい。そして、３学期には、元気にまた再会しましょう。」
「起立。・・・礼。」
「「さようなら。」」

さて、これで、終業式も無事終わった。取り敢えず、勝美と二人で家に帰ろうかと立ち上がったら、なんだか不穏な雰囲気のクラスの皆に、僕と勝美が取り囲まれていた・・・。

第４５話　終業式の後で

「なっ、何？・・・。皆、どうしたの？」
「いや、別にどうもしていないんだけどさ。性別を交換した二人がどんな様子か、いろいろと興味があるじゃない？」
「そうそう。興味本位で申し訳ないけどさ、ちょっといろいろ教えて欲しいんだ。それとも二人とも、急ぎの用事とかがあるの？」
「特に急ぎじゃないけど、お昼には帰りたいんで、３０分位なら・・・。勝美の家でお義母さんが昼食を準備してくれているって言っていたから・・・。でも、なんだか、皆、刺（とげ）があるように感じるんだけど、僕たち何かしちゃった？それとも休んでいる間に何かあったの？」
　こう言った途端、それまで何となく刺々（とげとげ）しい雰囲気だったのが、さらに明確に悪化した。皆、何だか憤（いきどお）っているようで、さあクレームをつけてやるぞと言わんばかりの鼻息だ。どうしちゃったんだろう。特に女子の視線がキツい。
「あのさあ、あんたたち二人、むかつくんだよ。」
「遠藤さんと杉田さんが前から付き合っていたのは知っているさ。理想的なカップルだと思ってもいた。でも今回のテストで杉田さんが男子になるっていうから、遠藤さんとは当然別れるんだと思ったんだ。」
「男子になってフリーの杉田さんは、当然、あたしたち女子の誰かと付き合うんじゃないか、元は女子で気心が知れている杉田さんなら、理想的な相手になるんじゃないかっていう期待があったんだ。」
「それにフラれちゃう遠藤さんも、当然、次の相手を探すだろうと期待したから、あたしたち女子にとっては、一気に優良物件が二人も出るものと期待したのに、何さ、ぬか喜びさせて！！」

何それ？！！・・・そんなのって、勝手な思い込みじゃないか！・・だいいち、仮に僕が勝美と別れたとしても、直ぐに次の相手を物色するなんて、普通はしないだろう。なのに、そんな都合の良い展開になるって、どうして思うんだろう。

「俺たち男子からは、そこまでバラ色の希望的観測はなかったけどな、それでも誰か生贄が出るなら、そいつは女子になる訳だから、もしかしたらそいつと付き合うことができるかもしれないっていう期待は、やっぱりあったんだ。」

「俺たちの年齢だと、もう結婚を真剣に考えなければならないじゃないか。なのにまだボッチじゃ、そりゃぁ焦りも出るさ。」

「恋人同士が、二人ともトップで性別交換をして、そのまま恋人でいるなんて、そんな話聞いたこともないわ。制度的に許されるのかどうかは知らないけどさ、何かやっぱりズルイって思っちゃうんだよね。」

「これが八つ当たりだってていうのは、あたしたちだってわかっているわよ。だから、別にあんたたち二人をどうこうしようとは思っちゃいない。でも、せめてあたしたちの好奇心を少しは満たして欲しいんだ。」

「二人だけの世界で完結しちゃったりしないでさ、あたしたちにも少しだけで良いから情報共有させてよ。」

「そう、これは理屈じゃない、感情の問題なんだから、俺たちの質問に少しだけ付き合ってくれよ。ほら、俺たちもあと3週間で成人式だろう。そこで初体験を考えているやつも多いからさ。だから、二人には先輩として、すべてを正直に教えて欲しいんだ。これまで、恋人時代にどこまでの関係だったのかは知らないけどさ、交換初夜で初体験をしたことは間違いなく事実なんだし、法律で決まっていることなんだから、初体験がどんな様子だったか位は、別に秘密にする話でもないだろう。」

「それにお前たちは近いうちに結婚するんだろう。だったら尚更、隠すようなことは何もないじゃないか。セックスって、どうやれば良いのか、或いはどうしちゃいけないのか、初めてのときの注意事項とか、俺たち皆、ネット等で知識としては持っていても、少なくともここに居るやつは、多分誰も実際の経験がないんだ。それは間違いないと思うぞ。」

「こうやったら成功した。これは失敗した。そういった生の体験談を聞かせて欲しいんだよ。」

「・・・・・・・・。」

「多少恥ずかしいかもしれないけどさ、あたしたちに是非教えてよ。ね、お願いだから。」

勝美も僕も、絶句してしまった。クラスの皆が言いたいことは、何となくわかる気もする。でも、それは本当に勝手な思い込みで、僕と勝美がどうなろうとも、どうしようとも、それは僕と勝美だけの問題じゃないか。そんなことを考えてみても、皆の雰囲気は許してくれそうもない。これが優希が言っていた、注意しろってことだったんだ。この鼻息だと、つるし上げされちゃうんだろうか。何を聞かれるんだろう。勝美は黙ったままだ・・・。でも、ここは僕が主として答えなきゃ。こういう場面では、男子が矢面に立たなけりゃいけないんだ。

「さ、じゃそんなに時間もないみたいだからさ、さっそく質問させて貰うよ。あ、勿論、二人がどう思ったか、どう感じたか、あくまで主観で構わないからね。」

「最初は簡単なところから。いつ、どこでやったの？病院？それともホテル？」

「・・・・・一昨日・・・勝美の部屋で・・・・・・。」

「何回やったの？まさか1回だけってことはないでしょ。」

「・・・・・その・・・・・・。」

数えきれない位ってこと？・・・それとも挿入しないで楽しんだとか？」
「そもそも、どんな気持ちだったの？お互い、相手のものは自分についていたものでしょ。それを見て、触って、どう感じたの？」
「・・・ちょっと、懐かしい気はしたけど、でもずっと見慣れたものだから特別な感情は・・・。」
「まあ、それはそうかもな。特に無理やり手術されちゃったやつだと、自分のモノが相手についているのを見て、泣きだすことも多いって聞いたことがあるけど、お前たちは希望して手術に臨んだんだから、そんなに感傷はなかったんだろう。第一、恋人同士だったんだし・・・。」
「お前ら、手術する前には、本当にやっていなかったのか？」
「二人とも1年のときから付き合っていたわよね？・・・あたし、二人がクラスでした恋人宣言覚えているわよ。それなのに手を出さなかったの？・・・遠藤君、よく我慢できたわね？」
「あっ・・・、あたしっ・・・。そのっ・・・、千博を大事にしようと思って・・・。」
「健康な男子なら、あんまり我慢しすぎると暴発しちゃうんじゃないの？・・・キスくらいはしてるんだよね？」
まっ、拙(まず)いっ。勝美の顔色が変わった。あの城址(じょうし)公園でのことは、何としてでも隠さなきゃっ。・・・あれがクラスの皆に知られたら、男の子だったときの勝美のプライドはズタズタのボロボロになっちゃう！！・・・それに女の子になった勝美に、そんなことを答えさせちゃいけないんだ！・・・ここは男子の僕が何とか話を逸(そ)らさなきゃ。
「勝美は本当に紳士で、僕のことを大事にしてくれていたんだ。だから、キスとかも、女子だった僕から迫ったんだ。」
「ねえ、挿(い)れるのはすんなりできたの？ほら、童貞と処女だと、うまく挿入できなくて初体験に失敗したなんて話もよく聞くじゃない。あたしも来月の成人式のとき、もしかするともしかするかもしれな

くってさ。・・・さらに、その後にはバレンタインも控えているじゃない。きっとチャンスもあるんじゃないかって、期待してるのよ。」
「まさか、勃たなかったってこともないだろうけど、案外、暴発しちゃって、うまくできなかったんじゃゃねぇか？」
「そっ、それはっ・・・！！」
「何だ、図星か。まあ、そういうやつは多いだろうし、男子になったばっかりでも、ちゃんと機能して良かったじゃないか。わざわざ交換初夜なんてもんがあるくらいだから、うまく勃たないやつも多いのかと思ったよ。」
「で、無事、初体験となったのね。遠藤さんは自分のモノを挿れられるの、どう思った？・・・抵抗はなかったの？・・・痛くはなかった？」
「痛くはなかったわ。あたし、手術の前からずっと、千博とひとつになるのを待ち望んでいたから、挿れられた瞬間、あまりの快感と幸せで気絶しちゃったの。」
「こっ、こいつらっ、なんて羨ましいんだっ！！」
「何だかムチャクチャ腹が立ってきたわ！」
「リア充め、モゲちまえっ！！」
「遠藤はもうモガれちゃってるじゃないかｗ」
「ちげーねーｗｗｗ」
「で、無事挿れられて幸せ一杯の遠藤は良いとして、最初に暴発しちゃった杉田は、どうだったんだ？念願かなって遠藤とひとつになったんだろ？」
「自分についてたものは名器だったの？さっきも聞いたけど、結局何回やったのさ。」
「・・・2回・・・。」
「それは暴発も入れて？それとも純粋な挿入で？」
「射精した回数では何回なのさ。」
「・・・よっ、４回っ・・・。」

「てことは、最初が暴発で2回はきちんとやって、残る1回はフェラでもして貰ったのか？」
「えぇー！！・・・遠藤君、女の子になったばかりで、よくフェラなんてできるね。おちんちん銜（くわ）えるの抵抗はなかったの？・・・とすると、もう心の底からすっかり女子なわけ？」
「ええ、あたしはもう完全に心の底まで女子のつもりよ。だから愛する千博のおちんちんは、とっても愛しいの。」
「いや、案外、自分についていたものだから、抵抗は少ないのかもしれないぞ。それに自分のものなら、どこが感じるかは熟知しているだろう。多分、杉田は蕩（とろ）けるような快感だったんじゃないか？」
「そもそも杉田君は女性としての経験はないって言ってたわよね。とすると、オナニー位はしていたにしても、遠藤さんから奉仕して貰うのは初めてなの？・・・女性として挿入される快感は知らないんだよね？」
「もったいないなー。遠藤もそうだけどさ、せっかく恋人同士なのに、性転換する前に経験しちゃえば良かったじゃないか。そうすれば二人とも、両方の性別での快感を経験することができたんだぜ。」
「あ、でもさ。お尻から指を入れて前立腺をマッサージすると、女性が膣に挿入されたような感覚を疑似体験できるって、何かで読んだことがあるぜ。杉田も遠藤にやって貰ったらどうだ？・・・きっと堪（たま）らないぞーっ。」
「それって、BLモノの定番じゃない。男同士でするんでしょ？」
「っつっ！！」
　思わず息を飲んだ。どうしてそんな話が出るのっ！！・・・一気に心拍数が跳ね上がり、多分僕は真っ青になった。まさか、あれがバレちゃうの？！？！・・・何で？！
「おや？杉田は何だか顔色が悪いぞ？・・・それに汗びっしょりじゃないか。何か気分でも悪いのか？？」
「いっ、いやっ、あっ、あのっ・・・。ぼっ、ぼっ・・・、僕っ・・・。」

まっ、拙(まず)いっ！・・・あれがバレちゃったら、僕も身の破滅だ！・・・そんなことになったら、もう僕は二度と学校には来れない・・・。・・・はっ、もっ、もしかしてっ・・・。勝美がそういう趣味だってことは、男子の間では、実は知れ渡ってたとかっっ？！・・・だとしたら、もうお終いだ・・・。もう遅いけど、これが優稀の言っていた、気をつけろってことだったのか・・・。

　真っ青で冷や汗がたれている。声は震えうわずって、まともな受け答えもできない。勝美っ、助けてっ、と言いたいところだけど、女の子の勝美が助けられる訳もないっ・・・。でもっ、僕にはどうしたら良いか、わからないし、頭が真っ白で何も考えられない！！

「おい、どうしたんだ？急に黙り込んじゃったじゃないか・・・。なぜそこで杉田が固まるんだ？・・・それとも、お前たち、まさかそんな・・・？」

「うわっ、こいつら、もうそこまでしちゃってんのかよ？！！！ヘンタイかぁｗ」

「トコロテンは気持ち良かったか？・・・性転換しても、やっぱり遠藤がタチで杉田がネコなんだなｗ」

「・・・っ、・・・ぅぐっ、・・・くっ。」

「お前ら、本当に初めてだったのか？それにしては、のっけから遠藤が杉田のケツを掘っているなんて、いったいどういう関係なんだよｗｗｗ」

「・・・まあ夫婦でどんな性癖を持ってたとしても自由だし、実際に夫婦でＳＭをしている奴らも多いって話だぜ。」

「そうだな。ヘンタイだなんて言わないからさぁ、是非とも詳しく教えてくれよ。」

「杉田はもう遠藤にバックを調教されちゃったって訳か。・・・やっぱり、蕩(とろ)けるような快感なのか？」

「ＢＬモノだと、気絶するほどの快感だっていうじゃない？杉田君はどうだったの？？」

「さっき遠藤さんは入れられて気絶したって言ってたわよね？・・・

杉田君も入れられて気絶しちゃったとか？？？」

だめだっ、俯(うつむ)いてちゃだめだっ。・・・でもっ・・・涙がっっ。・・・勝美っ。・・・どっ、どうしようっ。・・・誰かっ、・・・誰か助けてっ・・・・！！

ぼっ、僕はっ、・・・僕はもうっっ・・・。

ぽたっと、涙が一滴、ズボンに垂れた。と、そのとき・・・。

第４６話　逆襲

「ぁぐっ。」
「ぎゃっ。」
一番前で、ずっと僕たち二人を低俗な質問責めにしていた仁科と片桐の底辺コンビが、いきなり悲鳴を上げて股間を押さえ蹲（うずくま）った。
「千博を泣かせたわね！！・・・あんたたち、もう絶対に許さないわ！」
勝美が一瞬で二人の股間を思い切り蹴り上げ、二人が悶絶していた。周囲の皆は、何がおきたか、まるで理解できないくらいの早業だった。そう、勝美は小さい身長に似合わず、ものすごくケンカが強くて、しかも正義感に溢（あふ）れているから勝美にボコボコにされた悪ガキとか苛（いじ）めっ子は、案外沢山いるんだ。さすがにサッカー部の副主将で、かつ地元少年サッカークラブのエースストライカーだ。キックは見事に決まったみたいだ。
「こんなこともあろうかと、万一を考えてさっきからの会話は全部録音しておいたわ。」
そう言って、勝美はポケットからスマホを取り出した。そして勝美が操作すると、僕たちの会話が最初からきれいに録音されていた。
「皆、セクハラっていうのは、されたほうがセクハラだと感じたら成立するのは知ってるわよね・・・。この録音を証拠として、セクハラだと訴え出るから、あんたら二人、首ならぬ、おちんちんとたまたまを洗って、待っていなさい。」
「ひっ！」
「そっ、そんな！！」
「あっ、あたしたちも、ちょっと言いすぎちゃったけどさ・・・。」
「からかってごめんなさい。・・・でも、まさか、この程度で、本当に・・・？？」

「皆の声も入っているのよ。この二人を少しでも庇(かば)ったりしたら、その子も同罪で訴えるわ。それでも良いの？」

僕たちを取り囲んでいたクラスの皆が、一斉に俯(うつむ)いちゃった。

「この二人が、前にも千博とあたしのことをしつこくからかって、数カ月前にあたしが締めてやったのは、知ってる人もいるでしょ。あのとき、もう二度としないと誓ったから、一度は許したのに、今日のこれは何なの？今度やったら絶対に許さないって言い渡しておいた筈よ。」

「性転換なんて、確かに普通じゃないことだし、皆の興味もわかるから、千博と二人で我慢して恥ずかしい質問にも答えていたのに、単にからかって、弄(いじ)っているだけじゃない。これがセクハラじゃないって、胸を張って説明できる人がいるかしら？」

「・・・・・・・・。」

「この後、千博と二人で警察に行って正式に告訴してくるわ。あなたたち二人は、まだ成人式の前だから、完全去勢にはならないと思うけど、性転換処置になるのは間違いないでしょ。あたしと同様に男子を卒業して、これからは女子として生きたら良いじゃない。きっとあなたたちにも、素晴らしいバラ色の未来が待っているわよ。」

「あぁ・・・、ぁう・・・。」

「ゃっ・・・、やめてっ・・・、お願いっ・・・。」

「男子の皆は良かったわね。仁科君や片桐君じゃ、彼女にしたい気持ちになれるかどうかはあたしも保障できないけどさ、でも少なくとも女子が２名増えるんだから、お付き合いするチャンスという意味では、確実に増えると思うわ。」

「えっ、遠藤っ、遠藤様っ。たっ、頼む。いや、頼みます。お願いですから許して下さいっ。もう二度としませんから。」

「おっ、俺は家を継がなけりゃならないんだっ・・・。女になる訳にはっ・・・。」

「あら、あたしも一人っ子よ。でも千博が婿に来てくれるって言ってくれたんで、女子になっても家を継ぐことに何の問題もないわ。」

あなたも婿に来てくれる旦那様を見つければ良いだけじゃない？」
「そもそも、世の中には女子の一人っ子だって沢山居るでしょ。このクラスでも内藤さんとか武部さんとかはそうじゃなかったかしら。」
「男に二言はないって、よく言うじゃない。あなたたちはそれを破ったんだから、もう男の子でいる資格はないわよね。だったら男の子を卒業して貰うわ。当然でしょ。」
「大丈夫。女の子の人生も素敵よ。あたし、心からそう思うわ。性転換して女性として子供を産み育てるのは得難い経験だし、男性に愛して貰える幸せって、本当に素晴らしいものよ。これは希望したあたしだけじゃなくって、希望せずに女子にされちゃった優稀も同じ考えらしいから、多分あなたたちも実際に性転換すれば、そういう心境になれると思うわ。」
「それに、たまたまあたしが女性化を希望したから、あなたたちは逃れたけど、もしあたしが希望しなかったら、千博の交換相手はあなたたちのうちのどちらかになったのは間違いないんじゃなくって？」
「そう考えれば、どっちにせよ一度は覚悟したんだろうから、まあなるようになったということよね。まだ今は男子なんだから、男らしく諦めなさい。」
「「・・・・・。」」
「さ、じゃ皆、他にもう質問はないかしら。なければあたしたちは帰るわね。千博、大丈夫？立って歩ける？」
「うっ、うん。大丈夫。ありがとう、勝美。」
「じゃあ、荷物を持って、帰りに駅前の警察署に寄ってから帰りましょうね。」
「えっ、遠藤っ、遠藤様っ。・・・おっ、お願いだっ、お願いだよぅ。」
「ゆっ、許してっ、許して下さいっ。」
「土下座しても無意味よ。心配しなくても、手術はあっと言う間で、

痛くも何ともないわ。麻酔で寝ているうちに終わっちゃうから。つい先日、経験したあたしが保障してあげる。」
「判定試験とは違うから、まずは警察から聴取があって、その後に書類送検、そして裁判まで2カ月位じゃないかしら。セクハラ裁判は特に速いらしいわよ。聞いた話だけど、未成年はセクハラでは収監されないんで、普通に生活できて、自宅から学校に通えるみたいね。今からだと、多分、裁判が2月末頃になるのかしら。・・・で、セクハラ裁判は事実認定と被害者の意識確認だけで控訴審はないんで、判決が出ると直ちに手術が執行される筈だから、その期間が4週間とすると、4月からは女性として新しい人生を過ごすことができるわね。といってもあなたたち二人は第四階級だから、どっちにせよ高校には進学しないのよね。裁判所だか検察庁だか知らないけど、男子向けではなく四級女子向けの職業を斡旋してくれると思うわ。・・・あと、これは私もよく知らないんだけど、セクハラで性転換した人には、早々とパートナーを紹介してくれて、結婚まで面倒を見てくれる社会復帰制度もあるみたいよ。まあ、この辺りは、自分で警察によく聞いてみてね。判決の後にも詳細説明はあるみたいだから。」
「うっ、うぅっ。・・・えっ、ぇぐっ・・・。ひぐっ、ぅうっ。」
「たっ、助けてっ。・・・きっ、切られるのはっ、切られるのはっ・・・やっ、やだよぅっ・・・。うぐっ、ぐっ・・・。」
「じゃ、皆、また来年会いましょうね。良いお年を。」
　勝美に促されて、忘れ物がないかどうか、もう一度確認してから二人で教室を後にした。クラスの皆は僕たちが出て行くときも、固まっていて身動きもせず、ただ仁科君と片桐君が腰を抜かして泣き崩れているのを、遠巻きにしているだけだった。
――――――――――――――――――――――――――――――

上履きも持って、校門から勝美と二人で下校した。やっぱり勝美は、まだ僕よりずっと頼りになるんだ。昨晩ベッドの上では、僕にいろいろと気をつかってくれて、僕が男としてのメンツを保てるように、主導権を握らせてくれていたけど、実際は勝美の掌の上で踊っているに過ぎなかった。

でも、それが実態なんだと思う。今も、あのまま責め続けられたら、もう僕は窓から飛び降りるしかないかと発作的に思ったかもしれない。そこまで精神的に追い詰められていた。勝美だって、あの城址公園でのことがバレたら、どうなるのかと心配したけど、杞憂だったみたいだ。というか、勝美があんなに簡単に二人をやっつけちゃうなんて、考えもしなかった。僕がまだ新米男子で、頼りなさすぎるんだとしても、こういうことって、これからもよくあるのかなぁ・・・。なんだか自信をなくしちゃった・・・。こんなことで、男子としてやっていけるのかな・・・。

「さっきは、ありがとう。僕、もうダメかと思って、目の前が真っ暗になっちゃったんだけど、勝美があっけなく二人をやっつけてくれて、一瞬で逆転したのには驚いたよ。」

「あたし、はしたなくなかったかしら？・・・女の子として、ちょっとやりすぎちゃったかなと心配してるんだけど、千博はどう思った？」

「やっぱり、勝美は頼りになるなぁーって。いや、決してからかっているんじゃないよ。僕、あのままだったら発作的に窓から飛び下りちゃったかもしれない・・・。」

「それならよかった。あたし、あの二人に何を言われても、仮に城址公園でのことを暴露されたとしても、もうそんなのは気にしないことにしたんだけど、千博が追い詰められるのだけは絶対に許せなかったの。」

「・・・僕ね、これまで男子になることについて、いろいろな損得とか、利益とか、そういったことばかり考えていたような気がする

んだ・・・。だって、いろいろな場面で男子のほうが優遇されてるように感じるし、女子は何となく男子に従うものって、そんなふうに感じていたから。これは、法律的に平等だとか、建前としての同権といった話じゃなくて、昔からある社会的なシキタリや、人々の感情みたいな、言葉ではうまく説明できない、諸々の社会通念において、男尊女卑というのがしっかりあるんだと思っていた。」

「勝美も面識あると思うけど、僕のお父さんなんか、その最たるものでさ、我が家では食事のときの席順とか、風呂の順番まで、男子が先で女子が後と決まっているんだ・・・。」

「でも、新米男子になって2週間暮らしてみてわかったんだけど、この男尊女卑の日本において、男子は女子とは比較にならない位、大きな責任、というか、女子を守りリードする資質が求められているということを、思い知らされたんだ。あるいは、男子は皆、自分の男子としてのメンツをかけた、熾烈な競争の日々の中で生きていると言ったら良いのかな・・・。」

「例えば、ベッドの中では女子をリードして、主導権を握らなければならないなんて、無意識的に期待されていたりさ。・・・今回のことでも、あの二人の様子、まるで僕に何かを挑(いど)んでくるような、ちょっとでも弱気を見せたら、もう喰い殺されてしまいそうな弱肉強食の世界に放り込まれたようで、はっきり言って男子になるって、こんなに大変だとは思わなかった、いや、思ってもいなかったんだ。」

「ううん、千博は頑張っているわよ。あれだけ厳しく問い詰められても、誠実に答えようと、一生懸命努力していたじゃない。かなりきわどい、恥ずかしい問いかけにも、何とかきちんと回答しようという姿勢は立派だわ。それにあたしのことも、何かと庇(かば)おうとしてくれていたわよね。あたし、嬉しくなっちゃった。」

「僕なんて、結局、何もできないまま、真っ青になって震えていただけだよ。あのときは本当に、もうダメだと思って、『勝美、助けて!!』って叫びそうになったんだ。でも、男子が女子に助けを求

めるなんて、どう考えても男子失格だよね。きっと僕には男子は務まらないんだよ。ちょっとだけテストの点が良かったからって、生半可な気持ちで男子になろうなんて考えたから、きっとバチが当たったんだ。」
「そんなことないわ！！千博は男子になって、まだ2週間なのよ。新米男子にしては、本当によく頑張っているわ。あたしこそ、まだ女子になりきれなくって、さっきもいきなり切れちゃった挙げ句、二人にキンッ、そっ、そのっ、キン蹴りを喰らわせちゃうなんて、はしたないったらありゃしないわよ。どう考えても女子失格よね。」
「あれは勝美が僕のことを考えてくれてやったことだから、別に男女関係なくって、家族を守ろうとしてくれただけじゃない。本当に嬉しかったし、助かったんだ。それにあの二人だって、キン蹴りだけで済んだんだから、まあよかったじゃない。」
「え？キン蹴りだけって、何の話？」
「だから、あれだけ僕たちをからかった以上、キン蹴り位は仕方がないって言う意味・・・。」
「なにを言ってるのかしら。これから警察に行くって、さっきから話しているじゃない？」
「本気なの？！？！」
「当然でしょ？・・・千博を泣かせたのよ。許す筈がないじゃない。二人にはきっちり責任をとって貰うんだから。男の子の一番大事なもので償って貰うわ。」
「そっ、それはちょっと、いくらなんでも・・・。」
「あの二人は、つい3ヶ月前にも同じような事件を起こしているのは、前に話したわよね。あたしと千博の関係をいろいろとからかってきたんで、二人をボコボコにしたって。・・・二人はべそをかきながら、もう二度としませんから許して下さいって、詫びを入れたのよ。」
　そうだったんだ。勝美から漠然とは聞いていたけど、そんな事情だったのか。しかし勝美は本当に凄い。あの小さな身体で、二人の

悪ガキを簡単にやっつけちゃうんだから、羨ましい限りだ。こういうケンカに強いって言うのも、男子の重要な資質なんだろうな。やっぱり僕には、ハードルが高すぎたんだ・・・。
「ね、だから、せっかく与えられたチャンスを自分で潰しちゃった二人には、もう裁きを受けて貰うしかないのよ。セクハラは異性に対しては勿論、同性に対してだって重罪なのよ。あたしは何も、変なことや間違ったことをしているつもりはないわ。」
「それはそうなのかもしれないけど、でもやっぱり可哀相だよ。勝美は僕と性別交換するのを希望してくれたから、多少違うかもしれないけど、自分で意図しない性転換をさせられた優稀は、あの日、大ショックを受けて帰ってくると、もう魂が抜けちゃったみたいで、本当に自殺するんじゃないかと心配したんだ。夜、家族に報告したときもずっと泣いていて、その後わんわん大泣きして、見ていられないほど憔悴しきった様子だったんだ。きっと、あの二人も今、家で同じような状況になってるんじゃないかな・・・。」
「だから、もう許してあげようよ。僕はもう気にしていないからさ。・・・あの二人だって、これで少しは反省すると思うよ？」
「千博がそこまで言うなら、それでも良いわ。でも、あの二人、少し懲らしめてやりたいから、告訴しないことにした、というのは秘密にしておかない？そのうちわかるとは思うけど、少なくとも冬休み中は、毎日怯えて暮らして貰うようにしましょ。死刑囚の心境とは言わないけどさ、いつ警察がやってくるかと恐怖の毎日は、短期間であっても良いお灸になるんじゃないかしら。」
「だから、一応警察には立ち寄りましょう？誰が見ているかわからないから、セクハラ被害の相談コーナーに行って、パンフレットでも貰って帰れば良いわよね？」

第４７話　寛の秘密

家に帰ると、直ぐに昼食を食べて、出かける準備をした。一応、念入りに歯を磨いて、マウスウォッシュもしたから、万一寛とキスするようなことがあっても、大丈夫でしょ。

昨日から生理になっちゃったんで、さすがに勝負下着ということにはならないけど、まさか今日の今日で最後まで行くこともないでしょ・・・。

でも、以前みたいに完全な普段着（前はよくトレーナーとかで遊びに行ったんだけど）ではなく、ちょっとは可愛く見えるブラウスにキュロットを履いて、その上からカーディガンを引っ掛けて、女子会に行く程度の服装にはしたし、ファウンデーションと口紅でちょっとだけお化粧もしてみた。寛がどんな顔をするのか、楽しみだわ。

途中、手土産というほどじゃないけど、寛と二人でおやつになるかと思って、手作りクッキーを販売しているケーキ屋さんで名物のクッキーを一袋買って、寛の家に着いたのは２時を少し回ったところだった。

「やあ、いらっしゃい。何度も来ているから勝手は判っていると思うけど、いつものとおり僕の部屋においでよ。」

「お邪魔します。これまで何度も来ているけど、なんだか新鮮な感じで少しドキドキするわ。」

そう言って寛について２階の部屋に入ったら、男の子の匂いというか、雄の匂いが鼻を突いた。

「わあ！やっぱり男の子の匂いね！！」

「えっ？・・・何か匂う？・・・前と変わらない筈だけど？？？」

「あたしね、女の子になってから、男の子の匂いと女の子の匂いの違いというのかしら、特に男の子の匂いというのが、昔はまったく

気にもしなかったのに、物凄く良くわかるようになったの。これ、説明するのが難しくて、特に男の子には説明しても理解できないんじゃないかしらって思うんだけど、この男の子の匂いを嗅ぐと、何となく身体の芯が熱くなって疼くというのかしら、自分が女の子なんだっていうのを実感する瞬間なのよ。」

そういって部屋の中の匂いを、くんくんと嗅ぐような仕種をしたら、寛がハッとした顔になり、いきなり焦りだしてうろたえた。

「ごっ、ごめんっ、それ片付けるの忘れてた！！」

「ちょっと後ろを向いていてくれる？・・・本当にごめんね！！」

いきなり焦りまくった寛が、急いでごみ箱の中身をビニール袋に移し出した。見ると、丸めたティッシュが山のように入っていて、勿論あたしはそれが何だか瞬間的に理解した。

「あ、構わないわよ。以前は二人でよく一緒にやっていたじゃない。男の子なんだから、恥ずかしがることはないわよ。」

「いや、男同士ならそうかもしれないけど、やっぱり女の子相手にこのティッシュの山を見られるのは恥ずかしいよ。それに、優稀は気付いたんでしょ。これが、そのっ、まだ、だっ、出したばかりだって・・・。」

「ええ、何となくそんな気はしたけど、でもそれがどうしたって言うの？」

「いやぁ、優稀には隠せないし、恥ずかしいついでだから話しちゃうけどさ、優稀と付き合えるって思ったら、もうあそこがギンギンになっちゃったんだ。」

「だって、僕の部屋にはじめて女子が来てくれるんだよ。冷静に考えれば考えるほど、興奮してきてさ・・・。それで、ぜんぜん戻らなくて、万一、優稀に襲いかかっちゃったらどうしようかと悩んで、それで・・・。」

「あたしが来る前に、一発抜いておこうと、そう考えたわけね？」

「面目無いな。そのとおりだよ。ただし、抜いたのは一発じゃなくて四発だったけど・・・。」

なるほど、寛はあたしが来るんで、我慢できなくなっちゃったのね。でも、男の子としては当然だし、自分が抑えられなくなるかもしれないことを危惧して抜いておくのは、あたしに対する気遣いとしても立派だわ。それにしても四発とは・・・。

「さすが寛ね。戻ってお昼を食べてから、あたしが来るまで1時間ちょっとしかなかったじゃない。それなのに連続で四発だなんて、サイズも立派だけど、精力が物凄いわね。」

「そうかな？・・・でも、僕これまで、連続で五発とか六発っていう経験もあるよ。・・・って、僕は女の子を前にして、いったい何を話しているんだろうね・・・。気に障(さわ)ったら本当にごめんよ。」

「別に構わないわ。あたしは全然気にしていないから、寛も気にしないで。少し前までは一緒にオナニーした仲じゃない。・・・もう一緒にオナニーすることはないかもしれないけど、そのうちもしかすると、もっと先の関係になるかもしれなくってよ？」

「そう言ってくれると気が休まるよ。僕は一人っ子だし、女の子と付き合った経験がないから、女子を自分の部屋に入れたこともないんだ。それで、彼女が居る子なら普通に気をつけるようなことも、何をどうしたら良いのか、まったくわからないんだ。こういっちゃ申し訳ないけど、親友だった優稀なら、特に気を使うこともなくって、気楽に付き合えると思ったんだけど、やっぱり女子を部屋に招くからには、もう少し気をつかわないとダメだよね。」

「そんなことないわよ。以前と変わらない、普通の状態で大丈夫だから。むしろ、変に気を遣われると、あたしもかえって気疲れするわ。お互い、前と変わらない態度でいましょう？」

「ありがとう。じゃあ、早速だけど、優稀が休んでいる間に手に入れたゲームをやろうよ。これ、別にエロゲーでもギャルゲーでもないけどさ、なかなか面白くって奥が深いんだ。」

　そういって寛が出してきたのは、ＲＰＧ系のダンジョン攻略ものと、廃墟で敵と戦うシューティング系のアクションものだった。どちらも二人で協力して参加するもので、寛から手ほどきを受けなが

ら久し振りに二人で熱中して遊んでいたら、あっと言う間に日が暮れる時間になっちゃった。

以前だと、あたしはずうずうしくも8時9時といった時間まで夢中になっちゃって、寛のお母さんが帰って来て、あわてて帰るようなことも多かったんだけど、さすがに女の子がそんなことをしたら、はしたないって思われちゃうから、そろそろお暇すると伝えたら、急に寛が改まった態度になり、少しだけ逡巡した後に、真面目な顔で凄いことを言い出した。

「あっ、あのさあっ。・・・これを優稀に話すべきかどうか、さっきからずっと悩んでたんだけど、実は同性の親友だったときから、僕は優稀にはひとつ大きな隠し事をしていたんだ・・・。」

「?」

「ぼっ、僕ねっ、実はバイなんだ・・・。」

「バイ・・・???」

「そう。バイ、つまり男子でも女子でも、どっちでも好きになれる、両刀使いというのかな。男子でも女子でも、情欲の対象になる性癖の持ち主なんだ。」

「えっ?・・ぇえっ!・・・ぇぇーっ!!」

「だから、これまでも、優稀のことを、恋人になれたら良いな、恋愛対象になれたら良いなーって、そういった眼で見ていたし、優稀と一緒にオナニーしていたときも、単に二人でオナニーするだけじゃなくて、ベッドで愛し合いたいと、ずっと思っていたんだ。」

そっ、そんなっっ。・・・知らなかった・・・。寛が実はあたしのこと、そういう眼で見ていたなんて・・・。あっ、あたしっ、そんな寛と気軽に一緒にオナニーをしていたわけ?!?!・・・もしかして、いつも貞操の危機だったのかしら。・・・危なかった・・・。実は、いつバックを奪われてもおかしくなかったのかも?!?!

「最初に優稀にオナニーを教えたときにさ、優稀はやり方がよくわからなかったんで、僕が優稀のペニスを扱いてあげたでしょ?・・・

あのとき、優稀が射精するのを見て、僕もすごく興奮して、それで自分がバイだって確信したんだ。」

　ひっ、ひぇーっ。もしかして、あたし、男子のときにバック処女を奪われて、女子になったらまた処女を喪失することになっていたのかもしれないのね・・・。あたし、寛のことを疑うなんて、これっぽっちも考えなかったけど、実は狼の目の前でじゃれあう小羊だったんだわ・・・。

「二人で一緒にオナニーするとき、最初のときみたいに、また僕が優稀のペニスを扱(しご)いてあげたいなーって、いつも考えていたし、また逆に優稀に僕のペニスを思いっきり扱(しご)かれてみたいなーって、いつも考えていたんだ・・・。」

「そっ、そっ、・・・そんなっ・・・。」

　あっ、危ないっ、あたしっ、そんな危険なっ・・・。はっ、まさかっ、もしかして寛は、あたしの前と後の両方を狙っているのかしらっ・・・。まっ、拙(まず)いっ・・・。このままだと、あたしっ・・・。

　怯(おび)えた顔をして、思わず身を引いたら、寛がはっとした顔で焦って言った。

「ちっ、違うよっ。・・・ぼっ、僕っ、優稀を襲うなんてことはないからね！！」

「優稀はゲイでもバイでもないんだから、僕とそういう関係になるつもりはないって。・・・いや、それどころか、そんな関係にはなりたくないって、わかっていたし・・・。」

「僕は親友が嫌がるようなことをするつもりはまったくなかったよ。だから、我慢・・・というほどのこともしていないけど、分別のある態度をとっていたつもりだよ。」

「えっ？・・・つまり？？」

「だから、優稀と一緒にオナニーするのは嬉しかったけど、だからって優稀を襲って無理矢理どうこうしようなんて考えは、まったくなかったんだ。・・・まあ、優稀にペニスを扱(しご)いてもらいたいなーっていうのは、ちょっとだけ考えていたけどさ。・・・でっ、でも

っ、それだって自分を律していたから、一度たりとも優稀にそんなことを言ったことはないし、優稀のペニスを扱きたいと思っても、あるいは優稀にフェラしてあげたいなって思っても、それだって自制していたんだ。」
「じゃっ、じゃあっ、あたしの前と後の両方を食べちゃおうって思っているんじゃなかったの？？」
「やだなぁ。僕は相手が嫌がるようなことを強制する趣味は持ち合わせていないよ。」
「それに親友の優稀が嫌がること位は、理解しているつもりだよ。まあ、優稀の性癖を全部把握しているということではないから、あくまで一般論として、何が嫌かという程度だけどね。」
「もうひとつ、よく誤解されるみたいだけど、僕は何もバックが好きなわけじゃないよ。よくBL作品でバックに挿入する描写があるけど、あれは男同士だと、シックスナインで二人してフェラをするんじゃない限り、他に挿れるところがないから、やむを得ずやっているのが殆どじゃないかな。少なくとも僕は女性のバックにわざわざ挿れる趣味はないからね・・・。」
　何だ、あたしが勝手に先回りして慄いていただけだったのね。確かに寛はあたしの一番の親友で、一緒に居て嫌な思いをしたことは一度もなかったわ。気配りができる、やさしい性格で、勉強もそこそこできるし、小柄なモブキャラということで、目立たないけど女子にもわりと評判は良かった。でも、それだったら、何でこれまであまり女子に注目されなかったのかしら・・・。
「僕はね、何故だかゲイだっていう噂が流れたことがあってね。実際、男の子相手でも良いと思っていたんで、必ずしも根も葉もない噂とは言い切れないところがあって、僕も敢えて否定しなかったんだ。そしたら、なぜか女子には引かれちゃってさ・・・。」
「まあ、噂はどうでも良いんだけど、優稀からは、特に聞かれなかったから、こんなこと話すチャンスはなかったんだ。・・・聞かれてたら、多分正直に話したのかもしれないけどね。」

「というかさ、同性の親友なら、まあはっきり言って、僕の性癖がどうであろうとも、僕はそんなことはあまり気にしていなかったし、優稀もそんなこと気にしないと思っていたんだけど、今日、優稀から正式にお付き合いを申し込まれてさ、今後、どういう関係になっていくのか、まだ僕もよく理解していないにしても、一応男女の関係というか、いずれ恋人にまで発展できるかもしれないと思ったら、優稀が僕のこと知らないというのは、何だか騙しているようで申し訳ないという気がしてきたんだ。」
「それに、僕もこれまでは何とか抑えてきたけど、こんなにチャーミングで魅力的になった優稀がお付き合いを申し込んできたんだよ。バイってことは女性に対しても普通に欲情するんだから、いや、女性だからこそ、まかり間違って優稀のことを襲っちゃうなんてことがないとも限らないじゃない。そんなことになったら、僕は親友を裏切ったことになっちゃうよ。」
「・・・まあ、そんなことはないように、今日も優稀が来る前に四発も抜いておいたりしたんだけど、もし本当にお付き合いを深めるなら、やっぱり僕のありのままを知ってもらって、それでも僕で良いって言ってくれるなら、是非ともこれからもよろしくお願いしたいんだ。」
　そうだったんだ。やっぱり寛は誠実で紳士なのね。親友のときもそうだったけど、女子になったあたしに対する気遣いは、本当に立派だわ。寛の性癖なんて関係ない。やっぱり寛とお付き合いすることにしようっと・・・。
「わかったわ。やっぱり寛はあたしの一番の親友で、それはこれからも変わらないわ。バイかどうかは些細なことよ。是非これからは、恋人としてもお付き合いを深めていきましょう?」
　そう言って帰ろうとしたら、寛が急にあたしのことをぎゅっと抱きしめてきた。
「いきなりこんなことしてごめんね。・・・こんな僕でも、お付き合いの相手としてくれるって言ってくれてありがとう。これまで優

稀にこうしたかったんだけど、嫌われちゃうかと怖くてできなかったんだ。でも、僕の性癖を納得した上で、僕とお付き合いしてくれるんだから、せめてこのくらいはさせてね。僕、これまで女性とこうして抱き合ったこともなければ、手を繋いだこともないんだけど、親友だった優稀だから、こうして思い切り抱きしめる勇気が湧いたんだ。やっぱり女性はいいなぁ。やわらかくて、良い香りがして・・・。」

　そういう寛は、あたしの身体を力一杯抱きしめて、うっとり目を瞑（つぶ）りあたしのおでこのあたりに顔をスリスリと擦りつけてきた。あたしは思わず寛の頭を両手でしっかりと掴むと、寛の口にぎゅっと唇を押しつけ、舌を差し込んでいた・・・。

第４８話　千博の誤解

「綺麗だね。こんなによく見えるとは思わなかった。まさに特等席だ。お義父さんに感謝しなくちゃ。」
「本当ね、さすがにオフィシャルホテルのスイートルームだわ。」
千博があたしの肩に手を回して座り、感激したように話している。ここネズミーランドには何度か遊びに来たことがあるし、あたしが男子で千博が女子だったときに、二人でデートをしたこともあるけど、いつも日帰りで、普通はこの花火を園内で見終わると、ぞろぞろと芋を洗うような人混みに紛れて帰宅するのが常だったわ。このホテルに泊まるのは二人とも初めてだけど、やっぱり時間を気にする必要がないのは良いわね・・・。
スイートルームのテラスは、正面にパーク入口からお城までが見渡せる場所にあって、冬だから室内に座ったけど、大きなテラス窓を開けた先は、シンボルのお城の上空に大輪の花火が開くのを、何も遮(さえぎ)るものもなく見物できる特等席だった。
「夕食も美味しかったね。」
「ええ、ルームサービスでフルコースが食べられるなんて、あたし思っていなかったわ。これ、スイートルームだけのサービスらしいけど、このロケーションなら納得よね？」
「そうだね。・・・じゃあ、いよいよメインディッシュを食べても良い？」
千博が似合わないキザなセリフを囁(ささや)くと、持っていたシャンパングラスを横のテーブルに置き、あたしを両腕で抱くように身体を寄せて唇を重ねてきたわ。きっと、どこかで仕入れてきたセリフなんでしょうね・・・。何となくぎこちなくて、板に付いていないところが、ちょっと可愛い・・・。
今朝からもう何十回目のキスかしら。食事を終わってこのソファ

に座ってからだけも、数えきれないほどの回数のキス。あたしはもう、さっきからこのキスだけで軽くイッちゃっていて、キスをしながら全身がビクンッ、ビクンッと痙攣し、その度にあそこがきゅんきゅんとして、熱いものがジュワッと出てきているのがわかる。・・・きっとあそこは大変なことになっているに違いないわ。・・・お母さんに、はじめてのお泊まりだから、下着の替えを多めに持っていくようにと言われたけど、さすがお母さんはわかっていたみたい。
「千博・・・。あたし、幸せ・・・。女子になって、本当に良かった・・・。」
「僕も幸せすぎて怖いくらいだ・・・。男の子になりたいっていう僕の我が儘につきあってくれて、それどころか男の子の一番大事なものを僕にくれてありがとう。勝美がこんな大変な決断してくれたから、こうして幸せを噛みしめることができているんだ・・・。」
「そんなの、どっちが男の子でどっちが女の子かなんて、どうでも良いじゃない。千博とあたしが恋人同士で、その関係が継続して、二人が結婚して幸せな家庭を築くことには、何も変わりはないわ。」
「・・・そうだね・・・。勝美、改めてお願いします。僕をお婿さんに貰って下さい。そして僕を遠藤千博として、遠藤家に加えて下さい。」
「嬉しい!!・・・あたしこそ、これからよろしくお願いします。恋人としておつきあいして下さいっていう告白は、あたしからだったけど、今度は千博からプロポーズして貰った!」
「うん、やっぱり、こういうのは男子の側から切り出すものだよね。前回は勝美が男子だったから、勝美の告白を受けたけど、今度は僕が男子だから、僕から話すのが正しいんだと思う。プロポーズは男性からするもんじゃない?」
「うふっ、そうかもね。」
「それと、勝美のご両親にも、どんなに感謝しても足りないと思っている。なにせ、一人息子だった勝美の男性を奪っちゃったんだから、僕は息子の仇だと見られても仕方がないと覚悟してたんだけど、

こんなに暖かく迎えてくれたし、今日のこのプレゼントは本当にサプライズだった。」

「・・・あのね、あたし、今回の件では、ものすごく親不孝をしちゃったと思っているの。だって、両親に何も相談せずに、いきなり女の子になることを勝手に決めちゃって、それも話をしてから手術まで１カ月もなかったのよ。両親にしてみたら、一人息子が突然気でも狂ったか、それとも自殺しちゃった位の大ショックだった筈なの。」

「これが性同一性障害とか、そこまでじゃなくても小さいときから女の子っぽい子供なら、まだ心の準備もできたかもしれないけど、あたしの場合はあの城址(じょうし)公園での事件の翌日に決断するまで、千博をお嫁さんに貰うことしか考えていなかったから・・・。」

「・・・ごめんなさい・・・。全部僕の我が儘(わがまま)の所為(せい)だよね・・・。」

「実際、お母さんはかなり反対していたわ。でも、最終的にはお父さんが許可してくれたの。あたしの人生はあたしが決めるべきだって。もうあたし達は大人なんだから、成人した子供の人生は、親といえども干渉し過ぎるべきじゃないって言ってくれて、それで・・・。」

「・・・・・・。」

　勝美の話は、とんでもなく重い。そういう話を聞くと、やっぱり僕は遠藤家にものすごい迷惑をかけちゃったんだと、今更ながら改めて思う。一人息子に、突然こんなことを言われたお義父さんやお義母さんの心情は、どんなものだったんだろうか。それにもかかわらず、暖かく僕を遠藤家に迎え入れてくれたんだ。お義父さんにちょっとからかわれたり、セクハラみたいな冗談を言われたりする位は、どうということもない。僕はこれから入婿として、一生をかけて遠藤家に尽くすこととしよう。

「でも、千博がお婿さんに来るって決断してくれたんで、あたしの親不孝も少しは軽減されるかなって思っているの。あたしの家に一

緒に住んでくれるなら、両親に寂しい想いをさせることはないでしょう？」
「あたしはこれから、千博のことを立てて、千博の人生をサポートする。夫唱婦随って言うんだったかしら。昔からある言葉よね。先人の知恵だと思うから、きっと上手く行くわ。千博はお婿さんに来てくれるけど、あたしは家庭にあって、その千博を支えることにする。そして子供をバンバン生むの。」
「勝美・・・。」
「まあ、本音を言えば、あたし自身も、まだまだ新米女子で、まして主婦なんてまったく務まらないのは、この前の料理でもわかったと思うの。だから、あたしが一応は主婦としてやっていけるまで、あと3年かかるのか5年なのかわからないけど、それまでお母さんに助けて貰えるというか、実際にはお母さんに主婦業をやって貰って、あたしはそれを教えて貰うという状態がしばらく続けられるのは、あたしにとっても、本当に助かるのよ。」
「わかった。もう僕はこれから基本的に勝美の家に住むことにするよ。引っ越しというほどの荷物は持っていないけど、年内にいろいろと運び込んで、新年からは僕の住所も勝美の家にさせて貰うからね。」
「是非そうして！・・・お父さんに話して、勝美の勉強部屋もすぐに用意するから。」
「じゃぁ父さんに言われたとおり、せっせと励んで、野球チームができる位の子供をつくろうね♡」
　そう言うと、千博はゆっくりあたしをベッドに押し倒した♡♡♡
――――――――――――――
――――――――――――――
　何となく明るくなったんで、目が覚めた。二人とも当然のように裸で、あたしは千博の心臓の辺りに顔を押しつけるようにして、脇

の下に頭を入れて抱きついていた。（さすがに千博のおちんちんが、あたしの中に入ったままではなかったけど・・・。）
ふと顔を上げると、千博も起きたみたいで、あたしの頭を抱えながら、優しく微笑んだ。
「おはよう。昨夜は大丈夫だった？二回目の途中で気を失って、その後三回目は話しかけても、呻き声みたいな返事しかしなかったんで、ちょっと心配したんだ。」
「恥ずかしい・・・。」
あたしは、思わず目を逸らして、また千博の胸に顔を埋めた。
今の時間は何時かしら。この明るさからすると、6時半頃かもしれない。朝食はルームサービスも頼めたんだけど、折角のオフィシャルホテルのメインダイニングで食べてみようと考えて、昨日チェックインのとき、レストランを予約したんだっけ。ここでは、朝食時から、着ぐるみのキャラクターがサービスしてくれたりするらしいから、一度食べてみたかったのよね。

昨晩は、千博に三回愛して貰った。というか、二回目の途中から、あたしには記憶がない。幸せの絶頂で、千博に愛撫されているだけでも連続イキ状態になっちゃうのに、千博はあたしの全身をくまなく舐めながら、あたしの性感帯を刺激し続けるんだもん。もう気が狂っちゃいそうになって、頭がバカになっちゃったというか、本当に死んじゃうかと思う位、イキ狂っている状態なのに、一気におちんちんを挿れられて、あそこから頭まで電気が走ったの。もう死ぬっ！！て思った瞬間、頭の中で花火が開くような感覚とともに、あたしは完全に意識を失っちゃった。

「ねえ勝美。・・・昨夜はずっと受け身に徹していたよね？・・・優稀に何か言われたのかもしれないけどさ、僕が常に主導権を握っているようにしてくれたでしょ？」
「えっ？・・・何のことかしら？」

「いや、そのっ、ベッドの上で、僕が常にリードできるように、勝美からは手を出して来ないというか、僕が好きに勝美のことを責めたてて、勝美が連続イキ状態になって気絶するように仕向けてくれていたじゃない。」

「そんなことないわよ。千博に愛して貰うのは、ものすごく幸せで気持ちが良くって、あたしもう何がなんだかわからないうちに連続イキ状態にされちゃったんで、自分から何かするような余裕もないまま気絶しちゃったのよ。千博はあたしの性感帯をすべて知り尽くしているから、千博に触られただけで、あたしもう何も考えられなくなっちゃったのよ。」

「・・・だから千博に奉仕してあげられなくて、ごめんなさい。あたしも、もっともっと、男の子を喜ばせるベッドテクニックを勉強するからね。」

「いや、そうじゃないんだ・・・。その・・・、昨夜、１回目が終わったときは、お掃除フェラをしてくれたよね。これをして貰うと、僕は嬉しくてとっても感激するんだけど、最初にやったときみたいに、バキュームフェラはしないし、そっ、そのっ、お尻に指を入れてっ、そのグリグリするようなことはしなくなったよね？」

「あっ、千博、あれが好きだったの？・・・なら、今度からはたっぷり奉仕してあげられるように頑張るわ。」

「いっ、いやっ、あれが好きな訳じゃないっ！！・・・そんなことは絶対にっ・・・・。あ、バキュームフェラは、たまにしてくれても良いけどさ、・・・でっ、でもっ、お尻はむりやり射精させられちゃうんで、辛くて苦しくてっ、そのっ・・・。」

「わかったわ。じゃあ、お掃除フェラはいつもやってあげることにして、バキュームフェラはときどき、お尻はもうやらないっていうことにしましょう・・・。」

「あっ、ありがとう・・・。でっ、でもっ、でもさっ、そのっ、勝美がしたいなら、お尻もときどきやってもかまわないよっ。」

「？？？」

「だっ、だからさっ、・・・勝美の趣味もあるだろうから、そのっ・・・、僕っ・・・、勝美にならなら何されても構わないから・・・。」
「えっ？・・・何を言っているの？？？」
「ほらっ、前に勝美が持っていたエロ本あったじゃない・・・。あれ、勝美の趣味なんでしょ。勝美はああいった可愛い男の子が無理やり射精させられるのに興奮するんだったら、僕お尻を調教されちゃっても良いよ・・・。女子になっても性癖はそんなに変わらないって聞いたこともあるし・・・。」
「そっ、それっ・・・、それって、どういう・・・？！？！」
「本当はちょっと怖いけど・・・。でも勝美が望むなら、お尻でアンアン悶えて射精させられちゃう位、どうってこともないから・・・。夫婦の間柄は、他人から見たらどんなに変態的な行為も自由にやっていいんだから、勝美が僕のお尻を調教したければ、是非そうして。」
「とっ、とんでもない誤解だわ！！・・・あたし、そんな性癖は持っていないわよ！！」
「隠さなくても良いよ。もう僕たちは実質夫婦なんだし、それに勝美に調教されるのは、決して嫌なことじゃないし・・・。」
「あっ、あのっ、あのエロ本はね、榎木君から借りたものなの。ほら、榎木君ってクラスで一番エロいって自分で自慢していて、皆も彼のことエロ木君なんて呼んでるじゃない。だからよくクラスにエロ本とか何冊も持ってきてね、他の男子に貸してくれたりするのよ。」
「あのときはね、あたしがまだ千博と清い関係だって話したら、そんならこれでとにかく抜いておけって言われて、たまたま手元に残っていたのを2冊貸してくれたんだけど、別にあたしの趣味じゃなくって、本当にそのとき手元にあったものだったの。だから、片方はまあ女の子が一杯で、まだわからないでもなかったけど、千博が見て誤解したほうは、いわゆるショタものというジャンルらしくて、可愛い男の子が女の子にいろいろされちゃうものだったのね。あた

しもあとで見てびっくりしちゃったのよ。」
「だから、あれは決してあたしの趣味でも性癖でもないの。あたしがショタ趣味で、可愛い男の子を苛めて無理やり射精させるのが好きだなんて、とんでもない誤解よ。やっぱり変なものを借りるものじゃないわね。あの日も千博に見られちゃって、あたしもう顔から火が出る位恥ずかしかったのよ。特にあんなことがあった後で、千博にあれを見られちゃったら、もう生きていられないって、本当に自殺まで考えた位なんだから・・・。」
「そうだったんだ・・・。僕、てっきり勝美の趣味というか特殊な性癖で、それで勝美が僕のお尻の穴をグリグリやって僕を射精させたがっているんだって思っちゃった。だから、勝美に最初にされたとき、アンアン悶えて気絶しちゃったけど、勝美が僕のお尻を調教したいなら、それも仕方がないかなって思ったんだ。」
「なんだか、酷い誤解をされちゃったのね・・・。やっぱり変なものを借りると、ロクなことにならないわね。」
「でも、そうか、それなら安心したよ。僕、あれが勝美の趣味だと信じちゃったから、これからいつも勝美にお尻をグリグリされて、僕はもうお尻で気絶するまでイクように調教されちゃうんだと覚悟したんだ。あれ、実際、暴力的な快感で、本当に自分がレイプされているような気分になって、泣いても喚いても、どうしようもない、無理やりイカされちゃうんだ。女の子がイクときの感覚って、あんなふうなのかな？僕もやっぱり、手術の前に勝美とセックスしておけば良かったな・・・。」
「それはやっぱりダメよ。二人とも性転換しないままだったら、単に恋人同士がいつ最後の一線を超えるかというだけの話だから、別に早くても遅くても構わないけど、性転換するんだったら、例えば手術した後で違う性別でのセックスをしたとき、やっぱり前のほうが良かったと思っても、もう二度と元には戻れないのよ。しまった！と思いながら、一生後悔して生きていくなんて、そんなの絶対ダメなのよ。」

「それでも、後悔しても良いから女性の感覚も経験してみたかったな・・・。勝美は、もし僕が女子のうちに経験してみたいから、勝美以外の誰かに抱かれるって言い出したら、それでも平気だった？・・それとも、それくらいなら僕とセックスしてくれた？」
「そっ、それはっ・・・・・・！？」
「ごめんね。変なこと聞いて。最後のは忘れて。僕は勝美以外と身体を重ねるつもりなんて、これっぽっちもなかったからさ。・・・じゃ、とにかくシャワーを浴びて、そろそろ朝食会場に移動しようよ。せっかくお義父さんがプレゼントしてくれたんだ。今日も一日、思いっきり楽しもうね？」

第４９話　スポーツジムでの女子会（前書き）

今週は忙しくて日曜日のアップになってしまいました。これからも、このようなことがあるかと思いますので、気長にお待ち下さい。

第４９話　スポーツジムでの女子会

「あ、来た来た。おはよう。」
「おはよう。遅くなってごめんなさい。運動着が千博のもので大丈夫か試してみたり、それにまだ生理が少し続いているんで、タンポンにも初挑戦したりしているうちに、思ったより時間がかかっちゃったの。」
「勝美と話していたから、別に構わないわよ。でも、気がつかなかったけど、もう予約していた時間に近いわね。何か体験するなら、時間単位でプログラムが動いているから、早く行きましょ。」
　今日は円が通っているスポーツジムに、勝美と二人で体験参加してみようということになって、駅で待ち合わせたんだけど、あたしと勝美はおしゃべりして、あたしのことを待っていてくれたみたい。でも円準備に時間がかかっちゃって、２０分も遅刻しちゃったわ。
　円の話だと、今から行くスポーツジムは、この辺りでは一番大きくて、設備も充実してるんだって。今日は水着の準備がないからやらないけど、立派なプールがあり、水泳教室やアクアビクスなんかもあるらしいし、それ以外にも定番のマシンジムとか、屋外にはテニスコートなんかもあって、１日ではとても全部体験できないらしい。それにお風呂が充実していて、サウナやジャグジーとか、ちょっとしたスーパー銭湯並なんだって。楽しみだわ。あたしもそうだけど、勝美も女湯デビューらしいから、ここでも円にいろいろと教えて貰うことになるんでしょうね・・・。

　スポーツクラブの受付で簡単な手続きをすると、早速着替えて、まずは身体をほぐすのも兼ねてライトエアロビクスとかいうプログラムに参加してみることにした。
　これは屋内のスタジオで、前にいるインストラクターの動きと同

じことを、音楽に合わせてやるもので、見ているとそんなに激しい運動には見えない、それこそラジオ体操をちょっと速くした程度にしか思えないのに、実際にやってみると足踏みしたり股を上げたり、腕を振ったり回したりで、ついていくのが結構大変だった。ときどきやっている円は別にどうということもないような雰囲気だったけど、スポーツマンの勝美も、こういう運動は結構大変ねって言っていたから、思ったよりも運動強度があるみたいなの。当然、運痴のあたしはもうアップアップで、終わったら全身汗びっしょり、息が上がっちゃってゼーゼーハーハー状態だった。

「優稀、この位でそんなじゃ、いくらなんでも体力なさ過ぎよ。運動不足が酷(ひど)すぎなんじゃない？」

「そうよ、それであのスイーツの量を食べてたら、もう半年もしないうちにブタになっちゃって、着るもの全部新しくすることになるわよ。」

　二人から、さんざんボロクソに言われちゃった。でも、体力がないことが、おちんちんを切り取られちゃう原因となっちゃったんだと思うと、やっぱりあたしも少しは鍛えておかないと、今後いろいろと問題があるかなあって気がするの。それに、あんなに高かった洋服が、すぐ着られなくなっちゃったら困るから、やっぱりあたしもこのジムで頑張って身体を鍛える必要があるわね・・・。

　そんなあたしの心の中を見透かしたように、追い打ちをかけられちゃった。

「まあ、太るかどうかは食べる量との兼ね合いもあるだろうけどさ、もっと深刻な問題があるじゃない。出産とか子育てって、物凄く体力が必要らしいわよ。」

「それね。あたしもまだ経験がないから受け売りだけど、普通は性転換した元男子だと、体力は元からの女子よりずっとあるんで、出産や子育てには有利なんだって言われているの。でも、今の優稀の体力じゃ、ちょっと厳しいかもしれないわよ。大丈夫？」

「あたし、これからここで身体を鍛えることにする。」

「それが良いわ。あたしも気に入ったから、一緒に入会しましょ。毎日は無理でも、週に2回か3回は運動するのが健康にも良いし。」

勝美も入会するって言うから、早速帰ったら母さんに話をしなくちゃ。・・・あ、それとも芳恵さんに強請ってみようかな。娘として甘えて欲しいって言ってくれていたし、そもそも家の財布を握っているのは芳恵さんだから、芳恵さんに話をするのは何もおかしいことじゃないわよね。母さんには、その後で話せば良いだろうし・・・。

その後は、三人でマシンジムの部屋に移動して、それぞれ思い思いの機械を試してみた。勝美はベンチプレスをやった後、VRランニングマシンでボストンマラソンを体験（時間がなかったんで、ほんの一部をダイジェスト）していたし、あたしは腹筋とか大胸筋とか、普段あまり使わない筋肉を使うマシンを選んで体験したあと、やはりVRランニングマシンで沖縄の海岸線を15分だけ走ったりした。

何種類か試してから、三人でお風呂に入ることにしたんだけど、まだ何となく裸を晒すのが気恥ずかしい気がして、ちょっとモジモジしていたら、円に笑われちゃった。そんなに立派な、どこからどう見ても理想的な女の子にしか見えないのに、何を恥ずかしがっているのかしらって・・・。でも、勝美も何となく動作がぎこちないから、別にあたしが特別じゃないと思うんだけど、やっぱりこれって、性転換して心の中まで女性化したといっても、慣れるのは時間がかかるのかもしれないわ。

ざっと汗を流したあと、三人揃って大きな湯船に浸かると、もう極楽だった。

「あたし、女子になってから本格的に身体を動かしたのは、今日が初めてなんだけど、こんなに体力がなくなっちゃっているなんて、

ショックだわ。これって、やっぱり男子と女子の差なのかしら、それとも、１ヶ月以上も運動していないから、そのせいで身体が鈍っちゃっているのかしら。もう一回、頑張って鍛え直せば、元にもどるのかなぁ・・・。」

「両方だと思うけど、多分、勝美に関しては身体が鈍っちゃった可能性が高いんじゃないかしら。普段鍛えている人ほど、遊んじゃっていると鈍っちゃうみたいよ。逆に優稀みたく普段から殆ど運動していない人は、これが基本の体力だから、男子だったときと純粋に比較できるんじゃない。」

円がまたしても怖いことを言ってきた。やっぱりあたしも、勝美に倣って、少し本気で通うことにしようっと。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

前回の女子会から、まだ一週間もたっていないんだけど、話すことは尽きなくて、女三人寄ると姦しいとはよく言ったものだわ。風呂に出たり入ったり、のぼせてくると露天風呂のほうに行って、冷たい外気を浴びながら身体を引き締めたりしていたら、あたしの身体を見ていた円が急に独りごちた。

「それにしても見事な身体ね。特にそのおっぱいは、本当に羨ましいわ。あたしも結構、胸はあるほうだと思っていたけど、そこまでグラマーな身体を見せつけられると、何だか自信を無くしちゃうわ。」

「そう？・・・でも、皆にプロポーションを褒められるけど、大きなおっぱいって邪魔じゃない？あたしも男子のときは、ある程度大きなおっぱいに憧れたこともあったけど、ここまで大きい必要はないし、そもそも肩が凝ったりするし、今日みたいに運動すると、はっきり言って面倒な感じしかしないわ。」

「でも、それは贅沢な悩みなんじゃない？世の中には胸が小さくて

悩んでいる女子も沢山いるのよ。それに邪魔というなら、男子のおちんちんとタマタマだって、あんなものがブラブラするのって、かなり邪魔よね。優稀は運動するときサポーターをしていなかったの？」

「そうだったかしら・・・。何だかもう、随分昔のことみたいな感じがして、どんなだったかよく思い出せないのよ。あたしにおちんちんがついていたなんて、何だか夢だったんじゃないかって・・・。」

「確かに、今の優稀を見ていると、この身体がほんの一ヶ月前までは男子だったなんて、誰が信じられるかしら。どこからどう見ても、生まれたときから女子だったとしか思えないわ。」

「でも、自分のおちんちんは、もう忘れちゃったけど、勝美のおちんちんなら、まだよく覚えているわよ。ほら、夏の家族旅行で勝美の家族と一緒に海に行ったじゃない。あのとき、勝美のおちんちんは、もう大人のおちんちんになってて羨（うらや）ましいなーって思ったのを覚えているから。」

「いやぁねぇ・・・。そんな昔のことを言われると、恥ずかしいじゃない。でも、大人のおちんちんになるって、決して良いことじゃなかったわよ。だって性欲が物凄く強くなっちゃって、我慢できなくなっちゃうことが多かったんだから。あの頃、あたしは千博のことを考えて、１日に２度も３度もオナニーしていたわ。だってとにかく射精しないと、もうギンギンになったおちんちんが、ちっとも納まってくれなかったんだから。」

「そんなの、とっとと千博とセックスすればよかったのよ。あの頃、千博はよくぼやいていたわ。勝美がちっとも手を出してくれないって・・・。千博は勝美に抱かれるのを待っていたみたいよ。」

「それを言われると、ちょっと申し訳ないわね。紳士のふりをしていたけど、実はあたしに勇気がなかっただけなのかもしれないから・・・。」

「あたしも勇気がなくて失敗しちゃったな・・・。あの当時、優稀

はあたしに何度かアプローチしてきたわよね。あたしの家に遊びに来て良いかと尋ねたり、自分の家に遊びにこないかって誘ってくれたり・・・。でも、このあいだ話したとおり、あたしが自分の女子としての本能を刺激されちゃうことを恐れて、優稀の誘いを断り続けちゃったのよね・・・。」

「あたしに、もう少しだけ勇気があれば、もっと早くに優稀と最後の一線を超えることができたんだろうな。そうすれば、優稀ともっと何度も肌を重ねることもできただろうし、優稀の子供を産むことだってできたかもしれない。・・・優稀とまたセックスしたいな・・・。」

　そう言った円の瞳には、光るものが見えた。その瞬間、あたしも一気に涙が溢れてきて、涙が止まらなくなった。

「ごめんなさい。全部あたしが悪いの・・・。あたしがテストでもっと頑張れれば・・・。でも、もうあたしのおちんちんは、怜央のものになっちゃったの・・・。ごめんなさい・・・。何を言っても許して貰えないわよね・・・。あたしは、もう円の恋人の資格がなくなっちゃったから・・・。」

「気にしないで・・・。あたしの所為(せい)でもあるんだし・・・。ねっ、だから親友だよ・・・？」

　二人して、湯船の中で抱き合ったまま、涙をポロポロこぼしながら、いつまでもごめんなさいと言い合っているとなぜか勝美も抱きついてきて、裸の女子会はいつ果てるとも知れなかった・・・。

――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――――――

―――

おかしい・・・。なぜ肝心なときに勃たないんだ・・・？

優稀とは普通にできたし、それどころか何度も連続でやってもビンビンだったのに、どうして・・・？

「？？榊君・・・。どうかしたの・・・？」
「あ、ごめんね、なんだか僕、つかれちゃったみたいで、どうも上手くできないんだ・・・。君みたいに魅力的な女性を前にして、どうしちゃったんだろう・・・。」
「まだ榊君は男子になって、たったの2週間でしょ？・・・慣れていなくっても当然だよね？・・・あたし、気にしていないから、また今度にしよっ？・・・成人式のときなんてどう？」
「うん、ごめんね・・・。そうして貰えると、嬉しいな・・・。でも本当に変だな・・・。何で・・・。」

　こんなことって、あるんだな・・・。男子の身体は、思ったよりもずっと複雑でデリケートなんだろうか。ＥＤは精神的な問題が9割だって聞いたことがあるけど、そんな思い当たるフシは無いんだよな・・・。いったい何が原因で？？？
　でも、彼女に悪いことしちゃったな。そもそも、僕のプライドとしても大問題だし・・・。いっそ、以前のレズセックスのときみたいに、張り型でも持ってくればよかったかな・・・。でも、こんな立派なペニスを持った男子が張り型を使うっていうのも、情けないよな・・・。

　そもそも、思ったよりも約束が取れなかった。男子になったら、どんどん経験しようと思っていたのになぁ。これまで女子だったときの経験からして、もっと僕と付き合いたいという女子が門前市を成すかと思ったんだけど、案外そうでもなかったのは、どういうことなんだろう・・・。性転換しても顔を整形した訳じゃないから、顔の造りは以前のままだ。とすると、女子のときはあんなに多数の女子が簡単に引っかかったのに、男子になった僕にあまり興味がな

い状態は、どう考えれば良いのかな・・・？
　女子のときは、多くの女生徒からの憧れで、タカラジェンヌもかくや、と言われた僕なんだけど、このペニスの状態といい、不思議なことだらけだ・・・。こういう話は、いったい誰に聞けば良いんだろう？

第５０話　初デート（前書き）

また更新が日曜日になってしまいました。何とかまた、土曜日朝の更新に戻したいのですが、このところ忙しくて、なかなか間に合いません。

第５０話　初デート

明日は大晦日。今年もあと1日でお終いだわ。ほんの2ヶ月前までは、あたしが女の子にされちゃうなんて、想像すらしていなかったけど、終わってみればあたしはもう男の子だったことなんか忘れてきちゃっている。あたしにおちんちんがついていたなんて、夢じゃなかったのかしら・・・。本当にそう思える毎日だわ。

もう男の子としての杉田優稀は存在しない。これからあたしは女の子として素敵な恋をして、男の子と結婚し、妊娠させて貰って出産するんだ。自分のおなかを痛めて産んだ子供を自分の手で育てる、それも自分の母乳で育てることができるなんて、すごい幸せなことだと、今は心からそう思えるの。相手が怜央だったら嬉しいけど、怜央と本当に夫婦になれるかどうかは、これからの心がけ次第かしら・・・。でも、これがあたしの当面の目標ね。

千博もすっかり男の子が板についてきて、勝美と二人で並んで歩いているところを見ると、理想的なカップルとして女の子になった勝美をうまくエスコートしているみたいね。勝美も幸せそう。一昨日の女子会では、円の言葉に思わず泣いちゃったけど、でもあたしたちは性転換してよかったと、そう思えるなんて幸せだわ。

そういえば、他のクラスでも女の子にされちゃった男の子は何名かいるのよね。その子達にも、今度声をかけてみようかな。聞いた話だけど、ふさぎ込んでメソメソ泣いていたり、家に引き籠もっちゃった子もいるみたい・・・。母さんもそんなだったって言ってたから、本人の意図に反して手術されちゃうと、そうなっちゃう子も多いのかしら。でも、女の子にも、楽しいこと、気持ちの良いことは一杯あるんだし、人生の幸せを掴めないのはかわいそう・・・。

そんなことを考えながら、いつものショッピングセンターの前で

待っていると、寛がやってきた。はじめての女の子とのデートだという気負いがあるのか、いつもの服装ではなく、ちょっとだけファッションを意識したようなコーディネートで、とってもセンスがいいの。少し見直しちゃった。
「おはよう。その服、似合ってるわね。いつもの見慣れたトレーナーとかパーカーじゃなくて、爽やかな感じでかっこいいわよ。」
「そっ、そうかなっ？・・・僕、女の子とデートなんて、生まれてはじめてなんで、どんな格好すれば良いのかわからなくてさ、手持ちの服で普段あまり着たことのないのを引っ張りだしたんだけど、変じゃないかな？」
「ううん、とっても素敵よ。あと、寛が女の子との初デートというなら、あたしも男の子とは初デートだからね。怜央とは交換初夜を済ませたけど、あれはデートなんかじゃなくて、手術後の機能確認で検診を受けたようなものだから、ノーカンよ。・・・二人ともまだデートなんて慣れてないんだから、そんなに心配せず、もっと自然体で楽しみましょう？」
「ありがとう。・・・あれっ、でも男の子とのデートは初めて、っていうのは、手術してからの日数を考えれば納得だけど、もしかして優稀、男の子だったときに女の子とデートしたことがあるの？」
「・・・こういうとき、以前つきあっていた相手のことは、普通聞かないものよ。」
　ちょっとジト眼であたしが言うと、
「あっ、そっ、そうだよねっ・・・。ごめん、僕、こういうこと慣れていなくて、つい・・・。」
「そうね。寛とは以前と変わらない親友として、お付き合いしようと言い出したのはあたしだから、まあ気にするのは止めましょうね。あたしも話しにくいことでも、遠慮せずにはっきり言わせて貰うから、構わないわ。」
「うん、わかった。じゃ、早速だけど、まず何をする？映画でも見る？」

「ええ、あたしもそれを考えていたところなの。このショッピングセンター、最上階がシネコンになっているでしょ。さっき調べていたんだけど、冬休みに入って、先週からお正月映画が全部封切りされているみたい。で、これなんかどうかしら。基本はSFものらしいけど、主人公がVRで過去と未来を行き来する冒険なんだって。寛もあたしも、ゲームが趣味だし、VRにも馴染んでいるから、ちょっと面白いかと思ったの。」
「あ、これ、僕も気になっていた作品なんだ。じゃ、これにしようか。あと20分位で始まるから、今から行けば丁度だよね。」

先日、もうファースト・キス（それもいきなり濃厚なディープキス）を済ませたあたし達は、ごく自然に手をつないで、二人して最上階のシネコンに急いだ。明日が大晦日ということからか、ショッピングセンターでデートしているようなカップルは少なくて、どちらかというと人の流れはお正月の準備に勤（いそ）しむショッピング客という雰囲気だった。
「そんなに混んでいなくてよかったね。」
「ええ、もう皆、お正月の準備で忙しいのよ。」
実は、あたしが年末ギリギリの今日を指定したのは、勿論いろいろ忙しかったのもあるけど、寛とセックスすることを想定して、生理が終わる日を待ったというのが一番なのよね。まあでも、それは秘密だわ。
「でも面白かったわね。」
「うん、あの明治時代に行った主人公が、自分の先祖に渡した手紙が、未来の子孫の行動を規制する鍵になるなんて、タイムパラドックスがよく考えられていて凄いと思った。」
「でも、あのあと、平成時代から令和に変わるところで、あの手紙の示す未来は少なくとも二つあったでしょ？あれ、もう片方に進んだらどうなっていたのかしら？」
興奮覚めやらぬあたし達は、何となく7階のレストラン街に足を

向けた。　もうお昼を回っていたので、そこそこ混んでいたけど、いつもの週末とかと比べるとそんなでもないみたいだったんで、あたしは何も考えずにこの前来たスイーツバイキングのカフェにまた来てしまった。
「あ、ここ、聞いたことがある。スイーツバイキングなんだよね。一度入ってみたいと思っていたんだけど、男の子が一人で入る店じゃぁなくって、敷居が高かったんだ。」
「じゃぁ、ここに入りましょ。あたしも先週、はじめて来たんだけど、とっても良かったわ。つい食べ過ぎちゃうのが欠点な位で、甘いものが好きな人には天国よ。あたしもそうだけど、確か寛も甘いものには目がなかったわよね。」
　この店はバイキングの時間だけ入口で先に支払うことになっているんで、お財布を取り出したら、寛があわてて遮った。
「あっ、ここは僕に奢らせて。さっきの映画のときもそうしようと思っていたんだけど、僕慣れなくってモタモタしているうちに優稀がさっさと二人分の支払を済ませちゃったじゃない。」
「でも、あたしちゃんと寛の分の代金は頂いたわ？」
「いや、そうじゃなくってさ、デートのときはやっぱり男の子が支払うものじゃない？・・・勿論、割勘だってあるだろうし、デートで必ず男の子が支払うっていうこともないのかもしれないけどさ、でもモタモタして手間取っているうちに女の子が支払っちゃうなんて、男子のメンツが丸潰れだよ。」
「そんなこと気にしないで。これまでのように、同性の親友と同じにしましょうよ。そういう気遣いをすると、どうしても疲れちゃうわよ。・・・多分、まだ寛はステレオタイプの男女関係に囚われているんじゃないかしら？」
「うん、そうなのかもしれない。でも、気負っていると笑われるかもしれないけどさ、僕にも男子としてのプライドがあるんだ。失敗してばかりでカッコ悪いけど、そこは察してよ・・・。」
「わかったわ。それじゃ、あたしはあまり動かないで、寛のエスコ

ートにお任せすることにするから、焦らずに楽しみながらデートしましょう。」

席に着くと、さっそく二人でスイーツを取りに向かった。寛は前回のあたしみたいに、お皿に盛りきれない位、あらゆる種類のものを取ってきたけど、あたしは前回の円や勝美の話から、あまり取り過ぎると大変なことになるって言われていたんで、つつましくセーブしてお皿に取ったつもりなのよね。それでも結構な量になっちゃったけど・・・。

「ねぇ、寛。あなた、まだまだいけるわよね。あたしが取ってきたスイーツ、少し引き受けてくれないかしら？」

「ん？・・・別に構わないけど、せっかくのバイキングなのに優稀はもう食べないの？」

「逆よ。もっといろいろ食べたいんだけど、全部食べてたら食べ過ぎちゃうんで、一つ一つは半分ずつたべて、いろんな種類を食べてみたいの。あたしの食べかけを押しつけるみたいでごめんなさい。」

「そっか。勿論、それでも構わないよ。優稀の食べかけって、間接キッスじゃない。何だか興奮するなぁ。」

「ありがとう。ここ、本当に食べすぎちゃうのよね。でもひとつひとつのスイーツは、かなり小さくできてるから、これ以上小さくすると、ちょっと無理があるじゃない。やっぱりここはカップルで来て、スイーツを半分こにして二人で1つを食べるというのが、想定されているんじゃないかしら。」

「そうかもしれないね。ま、二度目を取りにいこうよ。」

「ええ、そうしましょ。あたし、まだ食べたことがない種類も一杯あって、どれを取ろうかと困っちゃうのよ。」

「じゃ、好きなものを好きなだけとってさ、優稀が一口ずつ食べたら、僕にちょうだい。僕はどうしても食べたいものを少しだけ取ってきて、あとは優稀から回して貰うことにするよ。」

「それはさすがに申し訳ないわ。まるで寛に残飯整理をさせているみたいじゃない。」

「そんなことないって。それに僕としても、優稀が口をつけたものを貰うのは、苦痛どころかご褒美(ほうび)だよ。」
「うふっ。ありがとう。じゃ、そうさせて貰うわね。」
驚いたことに、この方式であと2回取りにいって、結局全種類を制覇してしまったわ。寛って、底無しの胃袋を持っているのね。
「いやー、食べた食べた。」
「ほんと、もう入らないわ。身体が重いし。」
「何か、運動とか身体を動かしたい気分だね。」
そんなことを言いながら、二人で店を出てきた。運動なら、あたしとしては、これから寛と肉弾戦をするつもりなんだけど、さあどう切り出そうかしら。ホテルに行くのは何かハードルが高いし、そもそもお金がかかるわよね。
「ねえ、これからどうする？・・・特に予定とか、行きたいところとかがなければ、また寛の部屋におじゃましたいんだけど、どうかしら？・・・だめ？」
「勿論、構わないけどさ、せっかくの初デートなんだから、どこでも好きなところに行こうよ？」
「だったら、どこかホテルでも行く？？」
「えっ！・・・ええっ！！」
「冗談よ。またこないだのゲームの続きをやってみたいの。」
「そっ、そうなの？・・・じゃ、代わり映えしないけど、僕の家にまた来る？何もお構いできないけどさ。」
「そうしましょ。」
しめしめ、上手くいったわ。ホテルに興味がない訳じゃないけどさ、やっぱり二人で初エッチは、恋人の部屋でというのが王道よね。寛のお母さんは、今日も仕事で忙しいってさっき言っていたし、まだ時間はたっぷりあるわ・・・。

第５０話　初デート（後書き）

次回はいよいよ、寛の初体験です。

第５１話　（幕間）加藤慶太君とちー姉ちゃん（１）（前書き）

前回の最後で、次回は寛の初体験と書いたのですが、丁度５０話が終了したと気付きましたので、ちょっとここで幕間を入れることにします。

今回と次回の２回、優稀のもう一人の親友で、優稀と同じく小柄で運動も苦手な加藤慶太君のことについて、家族構成や小さいときのエピソードとか従姉弟のちー姉ちゃんとの関係など、主人公達４人を取り巻く登場人物の生活を紹介致します。

本編のストーリーとは少し離れてお楽しみ下さい。

第51話　(幕間)加藤慶太君とちー姉ちゃん(1)

「慶坊！！・・・あんた、また夢精したパンツを丸めてベッドの下に突っ込んでいたでしょ！」
「あっ、ごめんなさい！」
「ダメじゃない。精液は乾いちゃうと、落ちなくなっちゃうんだよ！・・・カピカピのゴワゴワなのは、洗えば何とかなるけど、黄色っぽい色はどうしても残っちゃうんだからね。そんなパンツ履いていたら、私はパンツに射精しましたって言いふらしているようなもんじゃない。恥ずかしくないの？！！」
「そのっ、昨日の朝はちょっと寝坊しちゃって、それで急いでて・・・。」
「ったく、慶坊くらいの年齢の男の子なら、毎日でもオナニーして射精しないと夢精しちゃうんだから、もっとどんどんオナニーすれば良いじゃない？・・・なぜそうしないの？」
「だっ、だってっ、・・・僕っ、オナニーするとっ、そのっ、なっ、何だかちー姉ちゃんに悪い気がしてっ・・・、それでっ・・・。」
「あのさあ・・・、あたしだって男の子の生理は判っているつもりよ。慶坊は小さくて可愛いけど、そんなに立派なチンポ持ってんだからさ、もっとどんどん射精しないと大変なことになるよ。あたし、やだからね。慶坊が他の女の子なんて襲ったりしたら、絶交だよ！！」
「そっ、そんな、僕っ、他の子なんて、絶対にっ・・・。ぅうっ、ぐすっ・・・。」
「なに泣いてんのさ。慶坊は昔からすぐ泣くんだから。本当にもうしょうがないわねぇ・・・。やっぱりあんたは、あたしがいないと何もできないのね。慶坊のことは、あたしが一生面倒見てあげるから、泣かないの。慶坊とは、もうこういう関係になっちゃったんだ

し、いくらナイショにしていても、母さんは気がついているみたいよ。ということは幸子叔母さんも知ってるんじゃないかな。だからオナニーをしたくないんだったら、もっとどんどんあたしとしようよ？・・・慶坊くらいの男の子が射精を我慢するのは、絶対に無理なんだって言っているのに、なぜわからないかなぁ。」

「だっ、だってっ、だって僕っ、そのっ・・・。」

「いつでも良いからさ、あたしの部屋においでよ。夜中でも良いよ。同じ敷地で向かい合わせの家なんだから、昔みたいにあたしの部屋の窓を叩いてくれれば、そこから入れてあげるわよ。」

「でもっ、僕っ、・・・ちー姉ちゃんの部屋に夜這いなんて出来ないよ・・・。」

「仕方がないじゃない。慶坊の部屋は２階で、あたしの部屋は１階なんだから、慶坊が来てくれないと、あたしじゃ玄関から入るしかないわよ。それとも、もうこの際だから、母さんと幸子叔母さんに、正式に話をしようか？・・・従姉弟は一応結婚できるんだし・・・。」

「・・・・・・怒られない・・・・？」

「慶坊だって、もうあと半年で成人式でしょ？・・・なら、母さんも幸子叔母さんも、ダメとは言わないと思うわ。二人とも、もうあたしたちの関係を薄々知っている可能性が高いしね。」

「それでも、僕がちー姉ちゃんの部屋に夜這いするなんて・・・。」

「バカね。正式に話をするなら、もう二人の部屋を一緒にして貰うのよ。同棲しちゃうなら、そんなに恥ずかしい感じはないでしょ？」

「毎晩二人で同じベッドに寝るなら、いつエッチをしているのかどうかは、わからないんじゃなくって？」

　ちー姉ちゃんが凄いこと言い出した。もう結婚する前提で同棲しようなんて、そんなの本当に可能なの？・・・何となく、毎晩必ずエッチしてますって逆に言いふらしているみたいだけど、本当にそんなこと許してもらえるのかなぁ・・・。伯母さんは優しいけど、母さんが怒ったら、また昔みたいにお尻丸出しにされて赤くなるま

で叩かれちゃうのかな。このところしばらくされていないけど、小さいときはよくされたんだよね。それで僕、なぜか叩かれているうちにおちんちんが固くなって、ピンと立っちゃうことが多かったんだ・・・。今、もし同じように勃っちゃったら、どうしよう・・・。さすがに恥ずかしいな・・・。

　ちー姉ちゃんとはじめてエッチしたのは、丁度一年前、僕が中2でちー姉ちゃんが高1のクリスマスイブだった。あのときは、たまたま母さんと理枝伯母さんが揃って出かけていて（クリスマスは書き入れ時らしい）、ちー姉ちゃんと二人だけでクリスマスイブを過ごしていたんだけど、二人で軽くワインを飲んだ所為か、ほろ酔い気分のまま、何となく一緒に僕のベッドに入ったんだ。夏位からときどき、ちー姉ちゃんは僕のペニスが立派になったって褒めてくれて、手扱き（てこ）して射精させてくれることがあったんだけど、その日もしてくれるのかなって思ってたら、いきなりキスしてきて、口の中に舌を入れられた瞬間に射精しちゃったんだ。その後は、ちー姉ちゃんが裸になって僕の上に重なってきて、もう僕は何がなんだかわからないうちに、ちー姉ちゃんの中で二回も射精していたんだ。そのときの僕は無我夢中で、全然わからなかったけど、あとでちー姉ちゃんも初めてだったって教えてくれて、嬉しさと怖さとで泣いちゃったんだ・・・。

　僕もちー姉ちゃんも、二人ともお父さんはいない。ちー姉ちゃんのお母さん（理枝伯母さん）は僕の母さんの４つ上のお姉さんで、ちー姉ちゃんは僕より二つ上の従姉弟だ。母さんと理枝伯母さんの両親（つまり僕のおじいちゃんとおばあちゃん）、それに父さんは、皆、僕がまだ赤ちゃんのときに亡くなったんだって。だから全然覚えていないや。

　でも、おじいちゃんやおばあちゃんのことはともかく、お父さんについては、お母さんが何も話してくれたことがないんだ。そもそ

も、僕が赤ちゃんのときからの写真は、それなりの枚数があるのに、お父さんと一緒に撮影されたものや、いわゆる家族写真の類が一枚もないのは、なんか不自然なんだよね。唯一、お母さんがいつも身につけているロケットの中に、赤ちゃんを抱いた学生服姿のカップルの写真が入っているのを、いちどだけチラ見したことがあるんだけど、あれがお父さんとお母さんなのかなあ・・・。だとすると、あの赤ちゃんは僕なのかもしれない。二人ともまだ中学生みたいで、赤ちゃんを抱っこしているのが不自然なくらい幼い感じだったけど、小さい写真でよく見えなかったんだ。でも僕と母さんの年齢差からすると、ピッタリなんだよね。本当に小さい写真だから、実はよく見えなかったんだ。あんなに若くして亡くなったとすると、事故か何かだったんだろうか？

ただ、これは僕の勘なんだけど、何となく父さんはまだ生きているような気がするんだよね。証拠は勿論、何の根拠もないけどさ・・・。この話は母さんの前ではできないんだ。だって前に一度だけ、お父さんのことを聞こうとしたら、母さんが号泣しちゃって、何も話せなかったんだ・・・。

それより、僕が唯一覚えているのは、ちー姉ちゃんのお父さん、安彦伯父さんの葬式だ。安彦伯父さんは、男同士だからって言って僕とよく一緒に遊んでくれて、僕が早く大きくなるのを心待ちしてくれていたんだ。公園にちー姉ちゃんと三人で遊びに行ったり、肩車をしてくれたり、僕も覚えている。でも、僕が年中さんになってすぐ、仕事で高所作業をしていたとき、なぜか倒れて、高層ビルの屋上から転落しちゃったんだって。

遺体は酷いことになっていたらしく、顔まで包帯でグルグル巻きにして柩に納められていたけど、理枝伯母さんとちー姉ちゃんが柩にすがりついて泣いていたのを見て、僕も一緒に泣いちゃった。

優しかった伯父さんが亡くなってから、理枝伯母さんも働きに出るようになった。それで家にはちー姉ちゃんと僕しかいないのが普

通になり、僕はいつもちー姉ちゃんと二人で遊んでいた。二人の家は同じ敷地にあったんで、小学校や幼稚園から戻ってくると、ちー姉ちゃんのあとをくっついていた。従姉弟だったけど、僕にとっては本当のお姉ちゃん以上の存在だった。お母さんたちが仕事で遅くなると（二人とも同じところで働いていて、忙しいときは一緒みたいだった）、ちー姉ちゃんはお母さんか伯母さんがつくっておいてくれた料理を並べて僕と二人で夕食を食べたり、僕と一緒に勉強したりしてくれて、お風呂も一緒に入ることが多かった。

　中学に入る頃になると、ちー姉ちゃんの身体は大人になってきて、おっぱいもふくらんできたし毛も生えてきた。でも、ちー姉ちゃんが堂々としているんで、お母さんと一緒に入っているみたいで、二人ともあまり気にしていなかった。

　そんな二人の関係に転機が訪れたのは、僕が小学校を卒業する頃だった。僕も毛が生えてきて、あそこがぐんぐん大きくなってきたんだ。ちょっと恥ずかしかったけど、何となく誇らしかったのもあったんで、特に隠したりもせず、いつも前と同じように、ちー姉ちゃんと一緒にお風呂に入っていた。

　そうしていたら、あるとき、僕ははじめて夢精した。朝、起きたらパンツがベトベトになってたんだけど、もう5年生のときに性教育の授業で習っていたし、これがそうなんだって、すぐにわかったから、僕はパンツを自分で水洗いしてから、ちー姉ちゃんにこれで洗濯機に入れとけば良いんだよねって聞いたんだ。

　ちー姉ちゃんは僕の精通を祝ってくれて、その晩、お風呂に一緒に入ったときに、自分でするのも教えといてあげるって言われて、オナニーを教えてくれた。はじめてちー姉ちゃんに手扱きして貰い、射精したんだけど、物凄い快感で、腰が抜けちゃうほどだった。

　でも、ちー姉ちゃんは僕の大きく勃ったおちんちんを弄りながら、深刻な表情で聞いたんだ。

「ねっ、慶坊。あんた、ここ自分で剥いたことある？」

　これも性教育の授業で習っていたんだけど、子供のときはおちんち

ちんの先端が皮を被っていて、それが大人になるにつれ、おちんちんが大きくなるとともに皮が剥けてくるっていうのは、僕も知識として知っていた。でも、勿論、僕はそんなふうになったこともないし、いくらおちんちんが大きくなっても、皮を剥くことはできそうもなかった。それで、そんなことはやったことがないって話したら、
「あたしがやってみてあげるね。ちょっと痛いかもしれないけど、少し我慢して。でもうんと痛かったら、無理に剥くと大変なことになるんで、我慢できそうもない痛みだったら教えてね。」と言われた。僕はちー姉ちゃんにすべてを任せきっていたんで、黙ってコクンと頷いたけど、本当はちょっと怖かったんだ。
　ちー姉ちゃんは、そっとそっと僕のおちんちんの皮を根元のほうに引っ張ったり、あるいは先端のところを摘んで引っ張ったりしながら、何とか皮を剥こうとしていたみたいだけど、結構ピリピリとした痛みがあり、また皮を引き下ろそうとしても、なんかくっついているものが引っ張られるような感覚で、痛くて怖くて、思わず涙目になってイタタタって言ったら、ちー姉ちゃんが困ったような顔で僕に言ったんだ。
「慶坊、これどうも真性包茎みたいよ。このままじゃセックスできないし、結婚もできないわよ。」
「うそっ?!・・・そうなの?!!」
「お医者さんにきちんと診察して貰わないと正確なところはわからないけど、最悪、手術する必要があるかもしれないわ。」
「ええっ!・・・そっ、そんなぁ・・・。まだ僕、中1だから、これから発育するんじゃないかな・・・。」
「勿論、そうかもしれない。いや、そうなら良いんだけど、でも慶坊のここ、もう大人も顔負けの大きさに育っているわ。毛も完全に生え揃ったでしょ。これから更に発育すると考えるのは、難しいかもね。少し様子をみてみて、変化がなければお医者さんに行かないとダメよ。」
　ちー姉ちゃんに宣告されちゃった僕は、がっくり来ちゃって、せ

っかくちー姉ちゃんが教えてくれたオナニーもできなかった。それでちょくちょく夢精していたんだけど、ちー姉ちゃんはその度に、お風呂で僕のおちんちんを皮の上からやさしく扱いてくれて、僕はいつもちー姉ちゃんの手扱きで射精させて貰っていた。
　その後、さらに何カ月かして、僕のおちんちんはさらに一回り大きくなり、大人顔負けの大きさどころか、大人でもあまりいない位の巨大さだということが明らかになったのに、どうやっても先端の皮は剥けなかった。しかも、勃起すると、先端の皮が引き攣れたようになって、痛くなるようになってきた。それで、ちー姉ちゃんに、おちんちんの先端が痛いと訴えると、やっぱりね、という顔をされた。
　やがて夏休みも後半になり、もう学校のプールも終了する頃になって、お母さんと理枝伯母さん、それにちー姉ちゃんの三人が揃ってやってきて、お母さんが突然僕に言い渡した。
「慶太。あなた、真性包茎じゃないかって千枝ちゃんが言っているわ。一度、お医者さんにきちんと診て貰いなさい。そして本当に真性包茎だったら、すぐに手術するのよ。いいわね！」
　三人しかいない家族が、皆揃ってやってきて、こう宣言されちゃったら、もう僕には一言も反論することなどできなかった。
　それからは、あれよあれよと言う間で、気がついたら僕は割礼という、おちんちんの皮の先端を切り取って、おちんちんを剥き出しにする手術をされていたんだ。忘れもしない、中一の夏休みの最後の日だった。

第５２話　（幕間）加藤慶太君とちー姉ちゃん（２）

割礼手術の日は、本当に突然やってきた。だって僕には、当日の朝、起きるまで何も知らされていなかったんだ。きっと僕が怖くてパニックしたり、泣き叫んだりしないように考えてくれたんだろうと思うけど、夏休み最後の日の朝、目が覚めて突然、これから病院に行くと言い渡されたときは、目の前が真っ暗になって気絶しそうだった。でも、お母さんの命令で、その前に一度、診察を受けて、真性包茎だから手術しなければダメですねって、お医者さんに言われちゃっていたから、そのうち手術されるのはわかっていたんだ。

よく、刑場に連行される死刑囚の心境なんて言う言葉があるけど、むしろ僕の頭の中には、ドナドナの曲が鳴り響いていた。まるで自分が、あの子牛になったようだった。でも幸いなことに、手術そのものは麻酔をされたんで全然痛くなかった。あ、でも最初、麻酔の注射でおちんちんの根本がチクッとしたけど、その前から目隠しされていたし、注射は普通の注射と一緒で、そんなに痛いわけじゃなかった。３０分位で全部終わって、目隠しを外して貰ったら、おちんちんが包帯でグルグル巻きにされていた。（先端のおしっこが出るところだけは、ちょっとだけ包帯から出ていて、ピンク色のきれいな部分が見えていたのが、なんだか滑稽に見えた。）

翌日、始業式の後、また病院に連れて行かれて、包帯を外して消毒すると、皮を切り取って縫ったところだけを保護する絆創膏のようなものを貼り付けられて、もうこれで普通にシャワーも大丈夫だし、運動も普通にやって良いと言われた。要するに皮を切り取ったといっても、傷そのものは掠り傷程度だってことなのかな・・・。

手術をされて、先端が剥き出しになった僕のおちんちんは、最初、ちょっとした刺激でもヒリヒリして少し痛かったんだけど、直ぐに慣れて痛みはなくなった。傷が直ってからは、ちー姉ちゃんの手扱

きも、剥き出しの先端を、石鹸でぬるぬると扱くようになり、これも最初は少し痛かったのが、そのうち痛みを感じなくなってくるにつれて、逆に耐えられない程の快感に変わって行った。

　おちんちんの先端（亀頭って名前が付いているけど、本当にここだけ見ていると亀の頭にそっくりだ！）が剥き出しになった所為なのかどうかわからないけど、いつもパンツに擦れて刺激が加わっていたからなのか、僕のおちんちんはそれからますます成長してしまい、特に亀頭のエラの部分（ここ、カリ首って言うんだって。優稀が教えてくれた。）がどんどん張り出してきて、もともと小さい身体に似合わない、大人と同じ位のサイズだったのに、中2に上がる頃には、とうとうデカチンで有名な元村寛君に次ぐサイズにまでなっちゃったんだ。それに合わせるように、精力もどんどん増してきたというか、性欲が強くなっていった気がする。なにせ、1日に2回3回と射精しないと、おちんちんがビンビンでギンギンに勃ったままになっちゃって、全然収まらなくなっちゃったんだ。

　でも、おちんちんがどんどん大きくなって、いつもガチガチのビンビンになっているのに、ちー姉ちゃんは逆にあまり手扱きをしてくれなくなっちゃった。お風呂には、まだときどき一緒に入ったりしてくれていたんだけど、オナニーは自分でやらなけりゃだめって言われて、ちー姉ちゃんが見ている前で、自分で扱いて射精させられるような関係が、ずっと続いていた。

　この関係が、何となく不自然だという感覚が生じたのはいつ頃だったんだろう。ちー姉ちゃんは幼馴染みの従姉弟のお姉ちゃんで、事実上の僕の保護者という感じだったけど、中学生になって二人とも身体は大人になっているのに、一緒にお風呂に入って、しかもちー姉ちゃんに見られながらオナニーしていると、ちー姉ちゃんの僕を見る眼が、なんだか潤んだような、ボーッとしてうっとりした眼になって、僕のことを見つめているみたいな気がしてきた。僕のおちんちんを見ているのかと、ずっと思っていたんだけど、どうやら

射精する瞬間の僕の顔や表情を見ていることに気がついて、急に恥ずかしくなったんだ。
それで、中2の秋頃に、ちー姉ちゃんに言ったんだ。「もう僕も大きくなったから、風呂に一緒に入るのは止めない？」・・・って。
「そっか・・・。そうだよね・・・。もうさすがに、一緒に入る歳じゃぁないよね・・・。」
「わかった。そうしよう。・・・でも、一人で入っても、必ずオナニーするんだよ。慶坊はあまりオナニーしないみたいだから、しょっちゅう夢精してるよね・・・。」
「・・・・・・」
「別に夢精するのが悪いとは言わないけどさ、慶坊位の年齢の男の子なら、一日何度も射精するのが普通なんだから、ごみ箱がティッシュで一杯になる位オナニーしな。お風呂なら石鹸も使えるから、もっと気持ちが良いと思うよ。」
そう言ったちー姉ちゃんの顔は、ちょっとだけ寂しそうだった。
それを見て、僕はちー姉ちゃんのことを、はじめて異性として意識したんだと、あとになってから気がついたんだ。
せっかく、これまで一緒にお風呂に入ってたんだから、ちー姉ちゃんの身体をもっとよく見せて貰えばよかったな・・・。おっぱいも、触らせてって頼んでみればよかったな・・・。そんなことを漠然と考えていたんだけど・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

「メリー・クリスマス！」
「メリー・クリスマス！！」
「今夜は母さんも幸子叔母さんも、掻き入れ時らしいから、かなり遅くなるみたいだよ。二人とも終電では帰れないかもしれないからってことで、わざわざ車で出勤していったから。下手すると午前様ね。」

」
「クリスマスイブに忙しい仕事って、何だか嫌だなぁ。」
「文句言わないの。慶坊もあたしも、お父さんが死んじゃってるから、母さん達が働いているのよ。忙しい位仕事があるのは、逆に感謝しなけりゃいけないことなのよ。」
「それはわかってるけどさぁ・・・。」
「だから今夜は、大きなチキンを丸ごと焼いたものと、クリスマスケーキも買ってきたんじゃない。一緒に食べようよ・・・。寂しいと思えば寂しいけどさ、ちょっと見方を変えれば二人きりで過ごすクリスマスイブなんて、まるで恋人同士みたいじゃない？」
　そう言ったちー姉ちゃんの顔は、ろうそくの灯に照らされて妖しくゆらめき、とっても大人の女性に見えた。まるで別人のようなちー姉ちゃんが注いでくれたワインを飲んでご馳走やケーキを食べ終わる頃には、僕は頭が変になっていたんだと思う。二人でテーブルをざっと片付けたあとで、もう二人ともお風呂は済ませていたにもかかわらず、つい口を突いて言葉が出ちゃったんだ。
「ねぇ、またちー姉ちゃんと一緒にお風呂に入りたいな・・・。」
「ふふっ、それも悪くないわね。でも、お風呂はもう二人とも済んでるでしょ。代わりに一緒にベッドに入ろうよ・・・。」
　僕はちー姉ちゃんが何を言っているのか、よく理解できなかった。多分、僕の頭は初めて飲んだワインの所為（せい）で、まともに働いていなかったんだと思う。ちー姉ちゃんに手を引かれるようにベッドに行くと、僕は言われるままに裸になって（きっと、僕の頭は風呂に入るような錯覚をしていたのかもしれない）、やはり裸になったちー姉ちゃんと、いつの間にか、しっかり抱き合っていた。ちー姉ちゃんが僕の口に自分の唇を押しつけてきて、舌まで入れてきたのは覚えているけど、その後のことは記憶が断片的なんだ。僕もちー姉ちゃんの口の中に舌を入れて、ちー姉ちゃんの唾液を一生懸命飲んでいたとか、おちんちんがぬるっとして暖かい何かに包まれた感触とか、腰が抜けるほどの快感とか、そういった記憶が飛び飛びにある

だけで、気がついた（意識がはっきりしてきた）ときには、もう夜が明ける頃、ちー姉ちゃんのベッドで二人とも裸でしっかりと抱き合っていたんだ。しかも、僕のおちんちんは、ちー姉ちゃんの中に入ったままだった。これって、やっぱりセックスしちゃったってことだよね。

急いで身体を離して服を着ていると、ちー姉ちゃんも目が覚めたみたいで、やさしく微笑んでいた。あとで何がどうしたのか、いろいろと聞きたかったんだけど、ちー姉ちゃんはこのときのことを、あまり話してくれないんだよね・・・。二人の初体験なんだから、もう少しいろいろと教えてくれても良いのに・・・。

理枝伯母さんはまだ寝ていた。僕がちー姉ちゃんとセックスしちゃったって、バレたんじゃないかと心配だったけど、これまでも夜遅くなって、僕がちー姉ちゃんの部屋で一緒に寝たり、逆にちー姉ちゃんが僕ん家に来て、夜遅くなって僕の部屋で一緒に寝ることもときどきあったから、あまり気にされていなかったのかな。それとも、実はバレていて、単に黙っていてくれているだけなのかなあ・・・。よくわからないや。

その後も、ちー姉ちゃんとは何度かエッチした。でも二人の関係は、相変わらず、お姉ちゃんと弟なのか、それとも保護者と子供なのか、そんな雰囲気だった。ただ、小さいときはいつも二人で手をつないでいたのが、最近ではあまり手をつなぐこともなくなっていたのに、いつの間にか、二人で外出するときは、また小さいときみたいに手をつないでいることが多くなった。

これって、やっぱり恋人同士の関係って言えるのかな？・・・従姉弟は結婚できる筈だから、いつか、ちー姉ちゃんと結婚するのかなーって、漠然と考え出していたころ・・・。

―――――――――――――――
―――――――――

『放課後、裏門横の大銀杏のところで待っています♡T．M．』
登校したら、下駄箱に手紙が入っていた。これってどう見てもラブレターだよね。そう言えば、今日はバレンタインデー。これまで僕も義理チョコはよく貰ったけど、女子とお付き合いした経験はないし、そもそもクラスでも優稀と一番チビの座を争っていて、しかも運痴でなよなよしいというか、まだ「お子ちゃま」と認定されている僕なんかに、いったい誰なんだろう。
気もそぞろで、T．M．という頭文字を考えていたんで、授業なんてまるで上の空だったけど、とにかく放課後、指定された場所に行ってみたら、何とクラスでもアイドル的存在の橘円さんが待っていた。
橘さんは、身長こそ小さめだけど、勉強も運動も抜群で、多分一級になるのは間違いないだろう。何とか二級になれれば良いけど下手すると三級になっちゃうかもしれない僕なんかとは、大違いだ。
「あっ、あのっ、・・・この手紙・・・？」
「わっ、私とっ、私とお付き合いして貰えませんか・・・？」
二人の声がハモった。言いながら、橘さんはリボンをかけた綺麗な包みを差し出した。これはどう考えても告白で、この包みは本命チョコというやつだろうと、男女関係には疎い僕だって想像がついた。でも、何で橘さんが僕なんかに？・・・という疑問以上に、相手が誰であろうと、僕の答えは、もう今朝から決まっていた・・・。
「ごっ、ごめんなさいっ。僕っ、これは受け取ることができないんですっ！！」
「僕っ、もう、心に決めた人がいて・・・、それで・・・。」
「そっ、それって、お互いに？？・・・それとも、まだ加藤君が片思い・・・。」
「きっと結婚することになるって、そう考えていて・・・。だって、もう最後まで・・・。」
こう言った瞬間に、橘さんは立ちくらみしたように崩れ落ちた。

「だっ、大丈夫？」
「えぇ。多分。」
僕も焦っていて、面倒なことに巻き込まれたくないという意識もあったからか、悪いことをしちゃったんだけど、橘さんが地面にしゃがみ込んで、何だか魂が抜けたような雰囲気になったものの、特に顔が青いとか、呼吸が荒いとか、そういった健康面での不安を感じさせるような感じではなかったんで、ほうほうの体でその場から逃げちゃったんだ。でも、ちょっと、いや、かなり恥ずかしかったな・・・。僕も焦っていたんで、思わず「もう最後まで」なんて口走っちゃった。あれって、絶対、意味を理解したよね。だから橘さんはがっくりして、しゃがみ込んじゃったんだと思う・・・。僕がもう童貞じゃないって、バレちゃったな。
それはともかく、橘さんには恨まれちゃったかと心配したけど、夏休みが終わって2学期になると、元気になったみたいで良かった。誰か別の恋人を見つけることができたのかな・・・。

第52話　（幕間）加藤慶太君とちー姉ちゃん（2）（後書き）

加藤慶太君にふられた橘円さんが、立ち直って優稀に告白するのは、半年以上かかったわけですね。
それなのに、やっと恋人になった優稀は、わずか3ヶ月で女子にされてしまいます。
橘円さんは、よほど男運に恵まれていないのでしょうか？？

第53話　寛の初体験（1）（前書き）

長くなったので、2話に分けました。
いいところで切れてしまったので、連休中にもう一回、更新しようと思います。
（多分、水曜日朝になります。）

第５３話　寛の初体験（１）

「おじゃまします。」
「先に僕の部屋に行っていてくれる？・・・僕は何か飲み物を用意してくるよ。」
「ありがとう。でも、あまりお構いなく・・・。これまでと同じで良いわよ。」
　そんな会話を交わしながら、勝手知ったる寛の部屋に上がる。以前の寛だったら、部屋の中はかなり散らかっていて、それこそ広げたエロ本の横に丸めたティッシュが転がっていることもあったけど、最近少しはマシになったのかしら。・・・それとも、先日のごみ箱の件で、判っていた筈はないわよね。まさか、今日、あたしが来ると少しは片付けるようになったなら立派ね。まあでも、今日は寛とエッチするのが最終目標だから、丸めたティッシュ位はいくら転がっていてもあたしとしては構わないんだけど・・・。
　そんなことを考えていると、寛がアイスコーヒーを持ってやってきた。
「ごめんね。ホットコーヒーを淹れるのは時間がかかりそうだったんで、冷蔵庫に作り置きしてあったアイスコーヒーを持ってきちゃった。冬なのに寒かったかな？」
「あ、ありがとう。あたし、冬でもアイスコーヒー好きよ。それに今日はわりと暖かいわよね。」
「そっ、そうかなっ？・・・僕っ、デートというから、どこかに行くことしか考えてなくって、優稀が僕の部屋にまた来るということは想定していなかったから・・・。」
「そのわりには綺麗に片付いているじゃない？・・・あ、別に前回のことを言ってるんじゃないわよ。」

寛が真っ赤になって眼を泳がせた。前回、抜いたばかりのティッシュの山をあたしに見られて、そんなに恥ずかしかったのかしら。でも、ほんの2ヶ月前までは、この部屋で一緒にオナニーをしていた訳だし、ティッシュどころか射精する瞬間だって見せ合っていたんだから、今更という気もするんだけど、やっぱり性別が変わると、意識するようになっちゃうのかもしれないわね。

あたしは、ずうずうしくも、寛のベッドに勝手に腰掛けていた。別に他意があったわけじゃなくて、寛の部屋だと、ここに腰掛けるのが一番楽というか自然なのよね。だからこれまでも、二人でゲームやるときなんかでも、ベッドに並んで腰掛けてやることも多かったわ。先日はさすがにあたしが自重して（というか、女の子として、はしたなく見えちゃうことを警戒して）、ディスプレイの前に座ったけど、ここに腰掛けてゲームしても、ディスプレイはよく見えるから、特に違和感はないのよね・・・。

で、寛からアイスコーヒーを受け取って、それを飲んでいると、寛は自分のコーヒーを一気に飲み終えて、コップを机に置いてから、あたしの隣に並んで腰を下ろして言った。

「じゃ、またゲームの続きをやろうか。この前のやつでいい？」

あたしは、寛が並んでベッドに腰掛けてきた、このチャンスを生かそうと考え、飲みかけの自分のコップを机に置くと、寛の左腕に抱きついて、胸をムニュッと押しつけてみた。寛がぎょっとして、一瞬で茹蛸（ゆでだこ）のようになるとともに、ズボンの前がいっきにググッと大きく膨らむのが見て取れた。

「ね、あたしとじゃ、いや？」

そう言って、寛の左腕に抱きついた腕に力を込めた。寛は真っ赤になったり真っ青になったりしながら、口をパクパクさせ、ブンブンと首を横に振ってあたしの言葉を否定していた。

「そう。良かった。じゃ、やさしくしてね♡」

と言いながら寛の口に唇を重ねると、寛がいきなりあたしのことをガバッと力強く抱きしめ、思い切り舌を入れてきた。あたしはそ

っと眼を瞑り、しばらく二人で抱き合ったままお互いの口の中に舌を入れて、口の中をくまなく舐めあって吸っていると、寛がいきなり「んっ、んんっ、んぐっ、んんー。」と唸りながら全身をがくがくっと痙攣させ、ビンビンでガチガチになっているおちんちんをあたしに押しつけてきた。あ、これはもしかしてっ、とあたしが思う間もなく、あたしの下腹部に押しつけられていた寛のおちんちんがビクッ、ビクッとなって、それと同時に寛のズボンの股間からドクッドクッと白濁液が溢れてきた。

「ぁあっ、あひっ、ぃひっ、ごっ、ごめん、ぼっ、僕っ、ごめんなさいっっ。」

「あっ、寛、もしかしてイッちゃった？」

「うっ、うんっ、ごめんなさいっ。僕っ、僕っっ。ぅうっ、ぐすっ。」

「気にしないで。男の子はそういうものじゃない。あたしも全然気にしていないから。」

　寛の股間は凄いことになっていて、あたしの股間にも精液がべったりとついてしまっていたけど、こればっかりは男の子の生理だから仕方がないわよねぇ。あたしは男の子としての初体験のとき、もうタマを抜かれちゃっていて、完全な男の子じゃなかったから大丈夫だったのかもしれないけど、普通の男の子なら、初体験のとき暴発しちゃわないほうが、ずっと少ないんだって聞くわ。男の子になったばかりの千博でさえ、暴発しちゃったんだから、もうこれは暴発するのが普通なんだと思わなきゃ。交換初夜のときの先生も言っていたわよね。まずは女の子が奉仕して、一度射精しておいたほうが上手く行くって・・・。

　そんなことを考えながら、ベッドの上にあったティッシュボックスを持ってきて、どんどん拭いていった。あたしの服もざっと拭いたけど、これはちょっと洗わないとダメかしら。何とか家に戻るまで誤魔化せるといいんだけど・・・。

「さ、もう服は脱いじゃいましょう。あたしもちょっと軽く揉み洗

いさせて貰うから、寛はもう全部洗濯機に入れちゃえばいいじゃない。」

　声をかけると、半べそをかいていた寛が、ようやく固まった状態から復帰したみたいだった。

「うっ、うんっ、ありがとう・・・。本当にごめんなさい・・・。」

「謝ることなんて、何もないわよ。それよりちょっと洗面所貸してくれない？精液は乾くと落ちにくいんで、軽く水で流しておきたいんだけど・・・。」

「あ、じゃあこっちにきて。というか、優稀は洗面所の場所知ってるよね。」

「勿論よ。でも、女の子が勝手に洗面所に入り込むのは、はしたないんじゃなくって？」

「寛の部屋なら、あたしと寛の関係だけなんだけど、洗面所なんかは家族全員のプライベートゾーンになるんじゃないかしら。」

「すごい！・・・僕、そんなこと考えたこともなかった。それって優稀は女の子になったから気にするようになったの？それとも男の子のときもそうだった？？」

「気にするようになったのは、やっぱり女の子になってからよ。でも、男の子のときから、そういう感覚は持っていたわ。こういうのって、やっぱり大人の社会常識じゃないかしら。」

「やっぱり優稀は一級の家庭なんだね。僕なんか比較にならないほど躾（しつけ）がしっかりしているよね。」

「そうかしら・・・。逆にあたしは、躾（しつけ）なんて、そんなこと考えたこともなかったけど・・・。」

　そんな会話をしている傍（かたわ）らで、あたしは自分の巻きスカートの股間のところについてしまった精液を水で洗い流し、寛は着ているものを次々に脱いで洗濯機に入れて行き、とうとうパンツも脱いで全裸になると、そのまま風呂に向かい、ベトベトの股間をシャワーで洗い流していた。

「優稀もシャワー浴びる？」

「あ、あたしは後でシャワーを貸して頂くわ。」
洗い終わった巻きスカートの前をタオルでよく拭いてから、ハンガーを借りてそれに引っ掛けると、あたしは上に着ていたブラウスも脱いじゃって、下着姿で寛の部屋に向かった。寛はもう開き直ったのかどうか知らないけど、素っ裸でおちんちんをぶらぶらさせながら、自分の部屋にやってきた。
「さ、じゃ続きをしましょう。」
そう言ってベッドに腰掛けたんだけど、裸の寛は何をどうして良いのか、わからないという様子であたしの胸を下着の上から撫でるように触るだけで、そこからまったく前に進まない、というより進めないらしいの。やっぱり怜央とは随分違うわよね。でもこれがあたしたちの年齢の男の子の普通であって、怜央が特別なんだと思うわ。
「ねぇ、あたしの下着を脱がせてくれるかしら?」
「あっ、はっ、はいっ。」
「何も焦ることはないのよ。ゆっくり、楽しむようにひとつずつ脱がせてみて。」
躊躇(ためら)いながらも寛がまずあたしのスリップを上に脱がせると、次にブラを外そうと背中に手を回してきた。ぎこちない手つきだけど、壊れ物を触るみたいに優しくそっと背中のフックを探すところは、とても好感が持てた。
「すごい立派なおっぱいだね。」
「ここまで大きいと肩が凝っちゃうの。それに動くのにはやっぱりじゃまよ。寛もそうじゃない?」
「そうだね。僕も身体に不相応なペニスで嫌な思いをしたことも多いからね。でも、これってきっと贅沢な悩みなんだろうね。」
それはそうよね。あたしも円からチラっと聞いただけだけどさ、貧乳の悩みを持つ女の子はいっぱいいて、皆、人知れず涙ぐましい努力をしているんだって。そういえば男の子のときはどうだったかしら。もう記憶が消えかかっているんだけど、男の子でもおちんち

んの大きさは、ある種のステータスだったような気がするわ。なにせ寛のこの巨大おちんちんは、学年全体でも一番で、寛が皆から一目置かれているのは間違いないんだから。

――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

話ながらあたしの下着を脱がせてくれた寛なんだけど、なんかちょっと様子が変なの。キスをするでもないし、あたしのおっぱいやあそこを触るでもない。何だか自分の股間に手をやっては、「あれっ。」とか「えっ。」とか、「なぜっ。」とか、小さい声で呟いている。でもよく意味がわからないあたしは、寛の背中に回した腕を寛の顔に持ってくると、寛の頭を抱えながら、寛にキスをした。でも、これまでやった数回のキスのように、寛も夢中になってキスをしてくるということがなくなってしまい、自分から舌を入れてくることもせず、何だか気もそぞろというか、心ここに在らずといった雰囲気なの。

その微妙な違和感を感じながら、あたしが自分の股間を寛の股間に押しつけたら、さっきまでガチガチでギンギンに勃起していた寛のおちんちんが、なんだかぐにゃっとして柔らかいことに気がついた。

あたしが「あれっ???」という顔をしたのと、寛が涙をぽろっと零して叫んだのは、同時だったわ。

「ぼっ、僕っ、ダメにっ、ダメになっちゃった!!」

第53話　寛の初体験（1）（後書き）

怜央といい寛といい、優稀と関係を持つと、皆ダメになってしまうのでしょうか？

まさか、何かの「呪い」とか？？（22世紀のこの時代、よもや、そんな非科学的なことはないですよね？！）

第５４話　寛の初体験（２）

「えっ。どうかしたの？」

「勃（た）たないのっ！！・・・優稀とこんな状態になってるのにっ、全然っ。」

　それだけ言うと、既に涙をいっぱい溜めていた寛は、あたしの胸に顔を埋めていきなり号泣しちゃった。もう一人の親友の慶太は、泣き虫で昔からすぐ泣く子だったけど、寛はこの巨大おちんちんの所為（せい）か、とても男らしくて泣いたところなんて見たことなかったのに、こんなにわんわん泣き喚（わめ）くなんて、よほどショックだったのかしら。

「泣かないで。初めてだと、こうなっちゃう男の子も多いみたいよ。手術のとき貰ったパンフレットにも、こういうことは普通にあるから、心配しなくても大丈夫って書いてあったわ。」

「でっ、でもっ、ぼっ、僕っ、僕っ、こっ、こんなことっ、一度もっ・・・。」

「そりゃそうでしょ！！・・・これが寛の初体験なんだから、初めてなのは当然じゃない。経験があったりしたら、逆に変よ。」

　胸に顔を埋めている寛の頭を抱きかかえ、寛の背中を優しくさすっていると、ひとしきり泣いてから、寛も少し落ち付いてきたみたいだった。それで、なるべく寛を傷つけないように言葉を選びながら語りかけてみたの。

「あたしも、赤いカードを貰ったときには、ショックでまったく勃（た）たなくなっちゃったのよ。男の子としての人生は、もう終わっちゃったって、心の底から絶望したんだから。」

「そうだったんだ・・・。」

「でもね、あたしはその後、まずタマを抜かれたときに、精嚢にある精子を全部出す必要があるって言われて、おしりに指を入れられ

て前立腺をグリグリされたら、おちんちんがギンギンに復活して、物凄い射精をしたの。あれはまるで拷問みたいな快感だったわ。」
「それと、これは絶対に内緒にして欲しいんだけど、実はあたし、男の子のときにお付き合いしていた女の子がいてね、去勢された後で、正式な手術を受けるまでの一週間の間に、その子と初体験しているの。といっても、タマは抜かれちゃっているから、もう精子はいなかったんだけどさ、ちゃんと射精はできたし、射精の快感もあったのよ。」
「そのときも、もうあたしは男の子としての人生は終わったと思っていたのに、ちゃんと勃起して、男の子として初体験することができたの。」
「・・・・・・。」
「・・・だから、ねっ、何も心配することはないわ。特に寛の場合は、別にタマを抜かれた訳でもなければ、女の子になるんでもないでしょ？・・・大丈夫。・・・あたしが元気を取り戻してあげる。・・・そこに横になって。」
「ありがとう。・・・これで良い？」
寛がベッドに仰向けになった。勿論、全裸なので、大きなおちんちんと立派なジャングルが、嫌でも目につく。でも、おちんちんはデロンとしてうなだれたままね。あたしは自分のポーチからハンカチを取り出すと、目隠しをするために寛の顔にかけた。
「そっと眼を瞑(つぶ)って、気持ちを落ち着けてリラックスしていてね。・・・あ、両手はバンザイしてくれる？」
「わかった。・・・このハンカチ、いい匂いだね。優稀の髪の匂いと同じだ・・・。こうしていると、優稀を抱きしめているみたいだ・・・。」
バンザイした寛の脇には、豊かな腋毛が生えていた。シャワーを浴びたとき、身体もざっと洗ったみたいで、石鹸の匂いがするそこを、そっと舐(な)めてみた。
「ぁっ、ぁひゃっ、あひゃひゃっ、くっ、くすぐったいっっ。」

舐めながら、乳首をそっと摘むようにコリコリすると、寛のおちんちんがピクッ、ピクッと反応する。これなら大丈夫みたいね。

身体を入れ換えたあたしは、反対側にまわって今度は乳首を舐めたり吸ったりしながら、左手で腋毛から脇腹のあたりを、触るか触らないかという程度にそっとさすって、空いた右手でおちんちんを優しく扱きだした。

「ぁっ、ぁあっ、ひっ、んっ、ぃひっ、あっ、ああっ、くっ、いっ、あひっ。」

悶えている寛のおちんちんが、次第に元気を取り戻してきて、なんとなく固くなって半勃ち状態になってきたわ。もうここまでくれば直ぐよね。そう考えたあたしは、最後に奥の手を繰り出すことにした。

「ちょっと力を抜いていてね。心配しなくても大丈夫だから、快感に身を任せるのよ。」

乳首への刺激を口から手に切り換え、口はおちんちんを舐めながら(それにしても大きいおちんちんで、口に入りきらないから、カリの裏側の部分から鈴口までを中心に、舌で丹念に舐めることにしたんだけど、本当に凄いわ。こんなの本当にあたしに入るのかしら・・・)、人指し指と中指を唾でたっぷり濡らしておいて、寛のお尻にぐっと突きたてた。

「あっ、ああっ、つっ、ひっ、だっ、だめっ、それっ、ぃひっ、あひっ。」

「力を抜いて!・・・そう、そのまま力を抜いていてね。・・・これ、凄い快感でしょ。」

そう言いながら、寛のお尻の中をグリグリと探って、前立腺を捜し当てると、それをググッと押し込むように刺激した。

「あーっ、ああーっ、だめーっ。」

寛のおちんちんが、一気にググーッと大きくなり、おへそに付く位にギンギンのガチガチに勃起した。あたしは、前立腺を押し込んでいる指に更に力を加えながら、鈴口の中にまで舌を差し込むよう

にしてザリザリッと舐(な)めたら、いきなり物凄い勢いで射精した。

「イクっ、イクっ、ひっ、ひーっ、イクーっ。」

ドピューッ、ドピューッ、ドピューッ、ドピューッ、・・・うそっ、全然止まらない？

　いったいどれだけ射精したのかしら。というか、これ、本当に1回の射精なの？！？！

　イキかたも凄いけど、何といっても射精した量が物凄くて圧倒されちゃったわ。普通、射精するときって、ドピューッていうのが3回か4回、多くても6回程度で、最後のほうは出る量もどんどん減ってきて、ピュッピュッていう程度なのに、寛の射精は10回位あって、しかも最後までドピューッていう量が落ちないの。何とか全部飲み込もうと頑張ったんだけど、最後のほうは口の中が一杯になっちゃって、一気に飲みきれず、とにかくこぼさないように必死で口の中一杯に溜めて、何回かに分けて飲むしかなかったわ。

「ほら、直ったでしょ。立派なおちんちんが復活したじゃない。」

「ほっ、本当だぁ！！・・・あっ、ありがとうっ。僕っ、僕っ、うっ、うぅっ・・・。」

　寛のおちんちんは、あれだけ多量の射精をしたのに、まったく衰えず、ギンギンのガチガチ状態を保ったまま天を衝(つ)いてそびえ立っている。本当に羨(うらや)ましい位だわ。あれっ、でも、女の子のあたしが大きいおちんちんを羨(うらや)ましがるって、どうなのかしら・・・。

「こんなの、よくある話だって言ったでしょ。ちょっと刺激すれば、すぐ直るんだって。それと、前立腺マッサージはどうだったかしら。男の子は前立腺を刺激されると、必ず射精反応が起きるみたいよ。だからBLの世界では、バックに挿入するなんてことになるんじゃないかしら？」

「物凄い快感だった。我慢できない、泣きたいような感覚で、女の子がレイプされる感覚？って、ああいう感じなのかな？・・・でもちょっとクセになりそうだった・・・。」

「そう？・・・じゃ、またあとでたっぷりやってあげても良いわよ。」

でも、今はとにかく、せっかく復活したんだから、普通に初体験をしましょう。寛のおちんちんは超巨大で、ちょっと怖いから、やさしくしてね。」
「わかった。でも、僕は経験がなくて、何もわからないから、いろいろと教えてね。」
「そんなに心配しなくても、本能のままで大丈夫よ。」
「うん、何とか頑張ってみる。・・・それにしても、僕がオナニーを教えてあげた優稀が女の子になって、僕の初体験の相手になってくれるなんて、想像もできなかった。嬉しくって、幸せで一杯だ。人生、何があるか判らないね。感激だなぁ・・・。」
寛が感無量といった雰囲気で呟いた。そしてあたしと身体を入れ換えると、自分が上になって、あたしにゆっくりとキスをしながら、あたしの胸をそっと触りだした。
あたしが眼を瞑ると、キスをしながら胸を触っていた寛の手が、そろそろと下に降りてきて、あたしの股間をそっと触りだした。それと同時にキスが口から喉、そして胸に降りてきて、直ぐに乳首に到達した。
「あっ、ぁあっ、んっ、んんっ、ぁひっ、あっ、ぁあっっ。」
左右の乳首を順番に吸われ、舌の先で転がされると、もうあたしは頭の中に花火が咲きだした。スリットを摩っていた指は、とうとうクリトリスを探り当てたらしく、人指し指でツンツンと突つきながら親指を膣内にそっと入れてきた。
「ひーっ、ぃひーっ、らめーっ、ぁあーっ。」
もっ、もうだめっ、イッちゃう、あっ、イクっ、・・・と思ったんだけど、なんだか寛の動きが急にぎこちなくなって、ちょっと身体をずらしたみたい。あれっ？となって、そっと眼を開けてみたら、寛が片手を伸ばして、机の二番目の引き出しの奥に手を入れていたわ。それで、思い出しちゃったんだけど、確か寛はあそこにコンドームを隠していたのよね。前にあたしに見せてくれたんだもの。
この状態で指摘するべきかどうか、寛に恥をかかせちゃうんじゃ

ないかしら、いや、それ以前にせっかくの流れに水を差すんじゃないかって、一瞬だけ躊躇したんだけど、今回の寛とのセックスは、怜央との違いを知るためにも、きちんと生で膣内射精して貰わなければならないのよね。だから、申し訳ない気もしたんだけど、そっと告げたの。
「ねっ、あたし、今日は大丈夫な日なの。それに寛の初体験でしょ。だから、コンドームはつけないで、そのまま膣内に出すことにしましょ。」
「どっ、どうしてっ・・・。」
寛が真っ赤になって、眼を泳がせちゃった。可哀相なことしちゃったかな。まさか、これでまたダメになっちゃったりはしないわよね・・・。
「気を遣ってくれてありがとう。でも、本当に大丈夫だから。それと寛、忘れちゃったの？・・・前にあたしに、そこに入っているコンドームを見せてくれたじゃない。」
「そっ、そうだったねっ。親友の優稀じゃ、僕の恥ずかしい秘密、全部知られちゃっているんだよね。・・・敵わないなぁ・・・。」
「寛だって、あたしの恥ずかしい秘密、いろいろと知っているじゃない。親友って、そういうもんでしょ？・・・たまたま、あたしが性転換しちゃったんで、同性から異性になっちゃったけど、でも親友に変わりはないんだし、恋人としてお付き合いするんだから、ますます隠し事はしないほうが良いんじゃないかしら。」
「うん、そうする。もう、優稀には何も隠し事もしなければ、異性だからって内緒にすることもしない。恥ずかしいって気持ちもやめた。以前のとおり、一緒にオナニーする仲の親友なんだって考えることにするよ。」
「そうよ。それで良いのよ。あたし、今回のことで男子から女子にされちゃって、いろいろとわかったことがあるの。男子も女子も、お互いにカッコのつけ過ぎなんだと思うわ。これって結局、異性に良く見られたいっていう見栄なのよね。そりゃ、人間誰しもそうい

う感情はあるんでしょうけど、家族だと、そういう感覚って、あまりないじゃない。例えば兄弟姉妹だと、お互いの性癖まで知っていて、だからって特に意識するようなこともないのも普通だし、結婚して何十年も過ごしてきた夫婦は、それこそ会話も何もなくても相手の考えていることが全部わかっちゃったりするじゃない？・・・つまりそういうことなんだと思うわ。」
「そうだね。じゃあ、もう一度最初から、やり直して良い？・・・終業式の日も話したと思うけど、僕、こんなにいろいろエロゲーだとかアダルトビデオとか、沢山持っているけど、実は女性のあそこって、一度も見たことがないんだ。いや、うんと小さいときに母さんと一緒にお風呂に入った記憶はあるんだけど、当時はそんなところに興味もなかったし、どうなっているのかわからないんだ。」
「だから、優稀のあそこを見せてくれない？・・・このとおり、是非お願いします。」
寛が最敬礼したんで、あたしから提案した。
「いいわよ。そうすれば、じゃ、シックスナインでオーラルセックスしましょうよ。そうすれば、寛はあたしのオマンコを心ゆくまで見て触ることができるし、あたしは寛の巨大おちんちんをしっかり見せて貰うことができるわ。・・・それでよければ、またベッドに仰向けになってくれる？」

第５４話　寛の初体験（２）（後書き）

寛の初体験は、思ったよりも長くなってしまいました。（３）に続きますが、この続きは週末までお待ち下さい。（多分、また日曜日になります。）

こういうことがあるので、どんどん話が長くなるのですね。プロットの上では、これは１エピソード（＝１話）としてカウントしていますが、実際に原稿を書くと、２話とか３話になってしまうことが多々あります。だから当初予定では全体で８０話程度と想定したのに、今では１５０話位になるのではないかと考えています。

第５５話　寛の初体験（３）

ベッドに仰向けになった寛の上に、身体を反対向きにして四つん這いになった。腹に付かんばかりにガチガチのビンビンで、天を衝いて屹立している超巨大おちんちんがあたしの眼の前にあり、一方、膝で寛の頭を挟むような姿勢になったあたしの股間は、すべて寛の眼の前にある筈だわ。しかもあたしは股を少し開いている関係で、寛はあたしの中までばっちり見えているんじゃないかしら。

　寛のおちんちんからは、俗に「我慢汁」とか言われる無色透明の液体がどんどん溢れて出てきているけど、きっとあたしのあそこからは、その何倍もの愛液が出ているに違いないわ。もしかして寛の顔にたれちゃっているんじゃないかしら。でも、もう恥ずかしがらないことにしたんだから、気にしてもしょうがないわよね。

「こっ、これっ、そのっ、さっ、榊さんのオマンコなんだよね？！！」

「いやだわっ！・・・確かに元は怜央に付いていたものかもしれないけど、今はあたしのおまんこよっ！・・・そんなこと言わないでよ。」

「ごっ、ごめん。つい・・・。優稀にこんな素晴らしいものが付いているなんて・・・。そのっ、僕っ、頭がついて行かなくってっ・・・。」

　まあ、それはそうかもしれないわね。あたしは手術で切り取られちゃって、しかも交換初夜で怜央に心の中まですっかり書き換えられちゃったから、精神が完全に女性化されちゃって、自分におちんちんがついていたなんて、もう記憶の彼方に消えかかっているけど、寛にしてみればほんの１カ月前までは、この部屋であたしと二人でおちんちんを並べて、一緒にオナニーしていたんだから、いったいどうしちゃったのかという感覚が残ってるんだと思うわ。

「いいわよ。じゃ、怜央のオマンコじゃなくて、あたしのおまんこを、しっかり見て覚えて、心に刻み込んでね。あたしも寛のおちんちんを、これまで何度も見てはいるけど、ここまでしっかり間近に見たことはなかったから、心の底まで堪能させて頂くわ。」

そう言って、寛の巨大なおちんちんを両手で握り、カリの部分を中心に亀頭全体をアイスキャンデーでも舐めるように、じっくり舐めはじめた。すると、寛はあたしのものを左右に思い切り広げて、いわゆるクパァ状態にして、膣内をじっくり観察しはじめた。

「恥ずかしいから、あまり中まで見ないでくれない？・・・あたしの処女膜、もう破れちゃってるでしょ？」

寛は鼻息が内部に感じられるほどに顔を近付け、あたしの膣内を観察していたんだけど、ごくりと音がする程に唾（つば）を飲み込むと言った。

「確かに破れた跡はあるけど、でも優稀の処女膜、まだきれいに残ってるよ。この破れたところを縫（ぬ）えば、また復活するんじゃないかな・・・？」

「別に処女膜に特別なこだわりがある訳じゃないし、そもそもあたし、怜央に処女を捧げたことは、まったく後悔していないわ。それどころか、怜央に身も心も女の子にして貰ったんですもの。あたしの処女を破ってくれたのが怜央で、本当に幸せだったの。怜央には心から感謝しているわ。」

「あれっ、ということは、優稀は怜央のことが好きになったんじゃないの？・・・僕とこんなことして、浮気にならないの？」

「そういうことを、この状況で聞くわけ？！！」

「あっ、ごっ、ごめんなさい。」

「まあ、でも、その疑問は当然よね。あたし、勿論怜央のこと好きよ。お付き合いの約束もしたわ。でも、まだ怜央とは、どういう関係に発展するのか、それともしないのか、よくわからないというのが本当のところなの。怜央もあたしが唯一の恋人ということじゃなくて、他の女の子とも、付き合ってみるようなこと言っていたし、

あたしにも、まずは女子として慣れなきゃいけないから、いろいろな男の子と付き合ってみたらどうって、言われているのよ。」
「もうあたしは成人したんだし、寛だってあと2週間で成人式でしょ？・・・だったら、大人のお付き合いをしてみて、その上で恋人として恋愛感情を深めて行くのか、それとも別れることになるのか、試してみてもいいんじゃないかしら？」
「そっ、そうなんだ・・・。なんか、優稀、随分大人びた考え方をするようになったね。ほんの1カ月前までは、僕と一緒にゲームに夢中になって、まるで小学生みたいな精神年齢だと感じることも多かったけど、この1カ月で物凄く変わった気がする。やっぱり初体験したからなのかなぁ・・・。」
「どうかしら、そりゃぁ確かに、あたしは男の子としての初体験と、女の子としての初体験と、両方を経験したけどさ、おそらくそれは本質じゃないような気がするわ。それよりもやっぱり、性転換したということが、人生の一大転機を経験したということなんじゃないかしら。」
「ほら、つい今さっき、一瞬だけおちんちんが勃たなくなっただけで、寛はあれだけ大ショックだったんでしょ？・・・あたしなんか、いきなり去勢されちゃって、女の子にされちゃったのよ。もし寛が、いきなりおちんちんを切り取られちゃったら、どう感じるかしら。」
「そういやそうだよね。きっと僕なんか、もう人生に絶望して自殺しちゃうか、部屋に引き籠もって、毎日泣き濡れているだろうね。」
「人間、大きな試練に会うと、短期間でも精神的に一気に成長するんだと思うわ。こういう成長の仕方は想像していなかったし、当初はあたしも自分の運命を受け入れられず、人生を悲観して呪ったりもしたんだけど、でもあたしの場合はいくつかの偶然と幸運が重なって、これもまたひとつの生き方、新しい人生だって、そう思えるような転機があったのよ。」
「そうだったんだ・・・。」
「あ、でも、その転機の原因については、親友でも話す訳にはいか

ないんだけどね・・・。ふたつあったんだけど、両方とも相手があることで、その相手のプライバシーに深くかかわる問題だから、申し訳ないけどいくら親友でも絶対内緒なの。」
「そうだよね。人間、誰しも他人には絶対に話せないことって、一つや二つは必ずあるもんだよね・・・。」
「だから、あたしは偶然が重なって、すごく幸運だったと、今でも思っているの。そして、この幸運を、少しでも多くの人に分けてあげられたらいいなって、そう考えるようにしたのよ。」
「あたしと一緒に性転換させられた男子の中には、終業式の日に登校できなかった子も何名かいるみたいなの。そういう子を、何とか気持ちを変えて貰って、前向きに生きられるようにしてあげられたら良いなって、そう考えているところなの。」
「すごいなぁ、優稀は！・・・僕なんて、とてもそんな気分になれないと思うよ。前から思っていたんだけど、優稀の素晴らしいところは、その他人の気持ちに寄り添って、他人の心を癒すことができる天然の性格なんじゃないかな。僕が優稀と親友になったのも、僕がデカチンをからかわれていたのに、優稀が僕に気をつかってくれたからだもんね。」
「そんな大層なことじゃないわよ。あたしなんて、あっ？・・・あっ？・・・ぁあっ？？・・・ぁひっ？？？・・・ぁあーっ、ひぃーっっ。」
　そんな話をしていたら、いきなり寛がクリトリスに吸いついてきた。それも、まず指と唇で包皮をクルッと剥いてから、きゅーっと強く吸い上げるように吸いついてきて、その状態で舌を使ってクリトリスのてっぺんの部分をクリクリざりざりとこね回すようにされたの。
「ひっ、んひっ、らっ、らめぇ、それっ、らめぇなのーっ。」
　寛は、あたしのクリトリスを吸ったり舐めたりしながら話を続けてきた。
「僕は優稀みたいに、そんなに急に大人になれそうもないけど、さ

っき勃たなくなっちゃって、もう人生終わったかと絶望した僕を一瞬で直してくれた優稀には、できる限りのお礼をしたいんだ。」
「あっ、あひっ、らめっ、そっ、そこっ。」
「さっき、優稀は僕に天国のフェラしてくれたよね・・・。だから、僕も優稀のここを、全力で奉仕してあげる。はじめてだからぎこちないかもしれないけど、でも頑張ってできる限りのことをするからね。」
そう言うと、クリトリスを舐め回していた舌が膣の中に入ってきた。また股間を動いていた手が脇腹から上がってきて、おっぱいに到達すると、その中心で固くしこって勃っている乳首をキュッキュッと扱くように擦りだした。
「ひぃぃぃっ、ぃひっ、いひっ、ぁあっ、いひっ、っくっ、ぃくっ、いぃぃっ、いくぅぅっ、いくーっ。」
もう頭の中は火花がバチバチとスパーク状態になっちゃった。れっ、連続イキっ、連続イキになっちゃうっっ。・・・こっ、このままだとっ、あたしっ、あっ、ぁあっ、本当に頭がバカになっちゃうぅっ。いやっ、このまま続いたらっ、きっ、きっと死んじゃうっ。
「だっ、だめっ、だめっ、とっ、止まらないっ、ひっ、たっ、たすけっ、助けてっ、止まらないっ、あっ、またっ、またイクっ、ひぃーっ、しっ、しっ、死ぬっ、もうっ、死ぬっ、らっ、らめーっ。」
気絶するような快感の連続。怜央のときもそうだったけど、もうあたしは何も考えられない。寛のおちんちんに奉仕することもできず、ただ寛の指と舌の動きにあわせて、悲鳴を上げ続けるだけっっ。
「あひっ、ぁひーっ、・・・んっ・・・欲しいっ、んんっ・・・おちんちん・・・んっ・・・・欲しいのっ。このままじゃ・・・おかしくなるっ、らめっ、・・・らっちゃうのっ・・・・・・。」
「ひっ・・・おっ・・・お願いっ、・・・早くっ・・・、早く挿れてっ・・・。・・・もうっ、もうっ我慢がっ・・・れきないのーっ・・・。」
すると、ようやく寛が身体を入れ換えて、正常位の態勢になって

あたしの上に乗ってきてくれたわ。やっ、やっとっ、やっとなのねっ！！
「じゃあ、いよいよ挿れるよ。ここでいいの？」
「そっ、そこっ、そこよっ、そのまっ、そのまま一気にっ、お願いっっ。」
一瞬の間があって、ズンッ、と挿れられた。
「はうっっ。あっ、あぅっ・・・。」
なっ、なんてっ、なんて大きさなのかしらっっ。いっ、息がっ、息ができないっ。
「やった！・・・できたっ！！・・・これで良いんだよね！！！」
「はっ、はぅっ、はぁぁっ。」
あそこがみっちり詰まって、お腹全体が一杯一杯。息をするのも苦しいあたしは、まともにしゃべることができず、ただ首をコクコクと頷くように振るだけ・・・。
「ごっ、ごめんっ、僕っ、もうっ、もうイっちゃう！・・・あっ、ぁあっ、いっ、イクっ、イクっ、イクーっっ、イクーーっっっ。」
あたしの身体の一番深いところに、まるでホースでお湯をぶちまけたような勢いで寛の精子が入ってきた。子宮が一気に一杯になるのが、自分でもよくわかる。お腹の中心から全身に向かって熱い奔流が流れだし、それと同時に快感が広がってくる。
でも、このたった1回で、わかっちゃったの。これはやはり怜央とは異質の感覚、自分の運命の人じゃないんだっていうことが・・・。だって、怜央に生で膣内射精されたときだけでなく、怜央がコンドームをつけてやったとき、つまり精液が子宮に入らなかったときと比べても、精神的な満足感がずっと少ないの。
寛はあたしの親友で、寛のことは好きなのは間違いないのだけど、怜央のように自分の運命の人という感覚がどうしても湧いてこないの。これってやっぱり、怜央のおちんちんは自分に付いていたもので、精子の遺伝子があたし自身のものだから、ということなのかしら・・・。どうもよくわからないわ・・・。新年になったら、怜央

とも、もっとやってみて、確かめなければね・・・。
「どうだったかしら？・・・初体験の印象は？？」
「感激した。一人でオナニーするのなんて、これに比べたらおままごと以下だ。なんて言うのかな、物理的な快感以上に、精神的な満足感が桁違いなんだね。」
「そうね。要するに性的快感というだけでなく、精神的な快感、精神的な充足感というのが、ずっと大きいんだってことがわかるでしょう？・・・これこそが男女の愛というのかしら、幸せに繋がる大きな満足感なんだって感じるの。それは男の子でも女の子でも変わらない、人生の喜びに通じるんだと思うわ。」
「優稀が言っていることが、今ならよくわかる。でも、童貞のときは、多分、そんなこと言われても、きっと理解できなかったんじゃないかな。だって、単に性的快感というだけなら、さっき優稀が僕を復活させてくれたときにやった、あのお尻をグリグリのほうが、ずっと上だったような気がするから・・・。」
「あ、そう言えば寛、あのお尻グリグリをもっとやって欲しいって言っていたわよね。今、やってあげるわよ。ほら、寛のおちんちん、まだまだ元気一杯じゃない。」
「えっ、そっ、そうなのっ？・・・じゃぁ、ちょっとだけやって貰おうかな・・・。」
「わかったわ。じゃ、そこに四つん這いになって、お尻をこっちに向けてくれるかしら。そう、それで足は少し開き気味にしてね。そのままでいてね。本当の天国を見せてあげるから。」
なんだ、寛はバックに挿(い)れるのは趣味じゃないようなことを言っていたけど、何のことはない、ゲイのときはネコで受けだったということなんじゃないかしら。それなら自分から相手のバックに入れたいという欲求はなかっただろうし、相手のお尻に興味ないのも当然よね。

あたしは、また人指し指と中指にたっぷり唾をつけると、四つん這いになってお尻を高く上げ突き出している寛の後ろに回り、お尻の穴にゆっくり挿入していった。
「ぁあっ、あっ、あーっ、ぃひっ、あひっ、ひぃーっ。」
寛が凄く悶えているわ。でも、痛がったりする感じではないから、気にしなくて良いわね。寛も自分から申し出て、覚悟の上なんだろうから、泣こうが喚こうが、続けてあげようっと。きっと天国に登っちゃうわ。
あたしは寛のおちんちんには一切触れずに、お尻の中で見つけた前立腺を、ちょっと力を入れて押さえるように優しくグリグリと撫で回し続けた。だって、どうやら寛はゲイとしてはネコで受けみたいだから、お尻をひたすら責められて、悶え狂うのが趣味なんだろうと予想したの。
「ひーっ、ひーっ、だめっ、ゆっ、許してっ、もうっ、僕っ、イっ、イクっ、イッちゃうっ。いひーっ。」
そう言うと、寛のおちんちんの先からたらたらと出ていた透明の我慢汁が、白濁液になって、精液が漏れだした。でも、いわゆる射精のような、勢いをもったドピューッというのではなく、まさに我慢汁が垂れてくるような、たらたらというか、そこまでも勢いがない、本当にじわじわと白濁液が滲むようにたれて来るの。
「ひーっ、ぃひーっ、イってるっ、イキ続けてるっ、たっ、助けてっ、とっ、止まらないっ、イクっ、イクっ、またっ、またイクっ、あっ、ああんっ、あん、あひっ。」
なんだか寛が物凄く悶えて、イクイクと言い続けているわ。さっきから、これをもう2分、いや、もっとだわよね、きっと3分か4分位、続けているの。おちんちんからは精液らしいものがたらたらと、止まらず連続でたれてきて、ベッドには大きな水たまりのように、精液溜まり？が広がっている。これって、小さいコップに半分近くあるんじゃないかしら。もしこれが精液だとすると、３分間も射精し続けているってことかしら？」

「たっ、たすけっ、助けてっ、僕っ、僕っ、もうっ、ひっ、ぃひっ、もう死ぬっ、許してっ、死んじゃうっ、バカになっちゃうっ、あっ、頭がっ、ひっ、ま、またっ、またイクっ、気がっ、気が狂うぅっ、ひぃぃぃっっ、死ぬっ、助けてっ、ぃぐっっ、いぐーーっっ。」

なんだか寛は、もう何を話しているのかわからない、単に泣きわめいているだけになっちゃった。これって、本当に気が狂っちゃわないかと心配になってきたわ。

あたしも女子としての連続イキ状態は、怜央に何度もされたし、そもそも千博に女子としてのオナニーを教えて貰ったときにも、そうなっちゃったから経験があるんだけど、男子としての連続イキ状態って、どんなものなのかしら。射精が何分間も延々と続く感覚って、どう感じるんだろう。もうあたしには、わからなくなっちゃっているんだけど、寛はどうなるのかしら。

もう5分以上になるわね・・・。そろそろ思い切りイかせてあげようっと。

そう考えたあたしは、たらたらと精液をたれ流し続けている寛のおちんちんを何とか口に銜え（といっても、亀頭だけを口に入れるだけでも苦労した）、そのたらたらと出ている精液を、力一杯吸い上げて、バキュームフェラをしてあげたんだ。

ちゅるるるるるーーーーっっ。

「きーーーっっっ、ぃぃーーーーっっ、ひーーっ、＃＆！？￥％＄／～＝＆＃。。。」

意味不明な叫び声とともに、寛は瞳をくるんと反転させ、白目の状態で意識を完全に手放し、そのままベッドに崩れ落ちると失禁した・・・。あたしは近くにあったタオルで必死になって寛のベッドを守る努力に追われていた・・・。

第５６話　大晦日（前書き）

２月に連載開始してから、７カ月半で３０万文字を超えることができました。よく書いたものだと思います。

一応、物語としては新年になりますが、特に何か新しい展開ということもなく、これからも日常が続く予定です。

引き続き、お付き合いのほど、よろしくお願いします。

第５６話　大晦日

今日は大晦日。今年も、もうお終いね。クラスメートは、成人になる前の最後の休みだって騒いでいたけど、あたしみたいに性転換した子は、もう交換初夜をもって成人になっちゃったから、関係ないわ。まあ、成人式には一応出るんだけど・・・。やっぱり女の子にとって、振り袖を着る機会って、まず成人式だから、是非出てみたいという感覚もあるし、父さんなんて、あたしの振り袖姿を絶対に見たいからって、赤いカードを貰った翌日には注文していたみたいなの。よく間に合ったなと思ったんだけど、あとで芳恵さんに聞いたら、千博のために予約していたものを、急遽あたし用に手直しすることにしたんだって。

でも、ほんの二カ月前には、あたしが女の子になるなんて、夢にも思わなかったのに、今では男の子だったことが夢みたい。昨日は寛とデートして、そのまま寛の部屋で最後までいっちゃったんだけど、寛は前立腺マッサージがよほど気に入ったのか、気絶から復帰したら、またやって欲しいようなことを述べていたわ。何でも、ヤバい薬でトリップしているような感覚らしくて、少し引いちゃうような気がしてきちゃった。ただまあ寛は、怜央とは何かが違うということがわかってきたんで、収穫はあったというべきなのかしら・・・。

いずれにせよ、男の子としての杉田優稀は、もういない。男の子だったことは、遠い昔の、それこそ彼方の記憶となっちゃったし、新年からは女の子としての人生を楽しむんだって、ごく自然に思っているあたしがいる。赤いカードを貰ったときには、将来の自分についていて、まったく思い描くことができなかったのに、今では自然体で女の子としての楽しみや女の子としての快感なんかを追求しようとしているんだから、あの日先生が言っていたとおり、やっぱりあ

たしは女の子になるべくして生まれてきたのかしら？・・・いや、女の子になれて幸せになったんだと思うの。交換初夜で怜央に心の底まですっかり女子としての意識に書き換えられて、本当に良かったわ。あと1点か2点、点数が良くて、あのまま四級男子でいるより、ずっと幸せで充実した人生を送ることになったんだから・・・。

　千博はもう勝美の家に引っ越すんだって言って、荷物を次々に勝美の家に持っていったんだけど、さっき最後の段ボールを荷造りして、義朗兄さんに車で送って貰っていたわね。荷物を置いたら、一度こっちに戻ってくるらしいけど、新年からはもう勝美の家に住むんだって言ってるわ。父さんもちょっと感傷的になっていて、家が近いんだから、ときどきこっちに顔を出せと言ったりしていて、まるで娘を嫁に出す父親みたいだわ・・・。芳恵さんなんか、もう泣いて縋（すが）りつかんばかりの様子なんだけど、肝心の千博本人は勝美と一緒に住むんだって浮かれていて、あの様子じゃいつも勝美とくっついているみたいなの。父さんの指令はあるにしても、おちんちんが乾くヒマもないんじゃないかしら・・・。

――――――――――――――
――――――――――――――
――

まっ、まただ！！・・・なっ、何故っ、何故ダメなんだっ・・・？！！

「榊君・・・？・・・どうかしたの？？」
「いっ、いゃっ、ちょっ、ちょっと・・・・。」
「今日はありがとう。楽しかったわ。・・・また会ってくれるかしら？」
「もっ、勿論だよっ。メールするからさ。」

「あたし、メールも良いけど、榊君の声が聞きたいな。電話くれる？」
「じゃ、僕から電話するから。さっそく今夜、あけおめするよ？？」
「それはそれで嬉しいけどさ、今から8時間後じゃ、まだお正月の予定も決まっていないかもね。予定の電話はもう少し先に貰えると助かるんだけど。」
「そうなるかな。じゃ、そっちは三が日が明けた頃に電話するよ。それで良い？」
「そうね、そうしてくれると嬉しいな。・・・あっ、三が日はずっと寝正月にするつもりなんで、そこでも構わないわよ。」
「わかった。・・・それじゃ、良いお年を。」

・・・こっ、こんなことが・・・。この僕が、どうして？？
いよいよこれは変だ。お正月は全部予定を返上して、ネットで調べなきゃ・・・。それでもわからなかったら、やはり病院に行くか・・・。いや、その前に優稀ともう一度・・・？
まずは、自分でいろいろなオナニーをしてみなくちゃ。男の子になってから、これまであまり、本気でオナニーしたことはなかったけど、それも優稀に聞くべきか・・・。あ、優稀のビデオもじっくり見直さなきゃ・・・。何かヒントでも？！？！
とにかく優稀に連絡だ！！

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

夕方もかなり遅くなってから、義朗兄さんの運転で千博が戻ってきた。今夜は千博がこの家で最後の夕食になるんだって言って、普通大晦日というと簡単に年越し蕎麦ですませちゃうんだけど、今夜はかなりのご馳走を準備したの。父さんが言い出したから、という

のもあるんだけど、芳恵さんはもう腕に縒りをかけて次々に料理をつくっていて、母さんだけでなくあたしも女性陣の貴重な戦力として朝から大車輪だわ。あたしが料理の支度で、そこそこ使えるって、芳恵さんに褒められちゃった。千博はこの方面では、絶望的に使えなかったんだって。でも、人それぞれ得意なこと、苦手なことはあるんだし、女の子だからって必ずしも料理が上手いなんて、そんなのムチャクチャだわよね。

夕食の準備がほとんど終わって、料理を並べるかというタイミングで、怜央から電話がかかってきて、冬休み中にまたデートしないかっていうお誘いだったんで、二つ返事でＯＫしたの。あたしも忙しかったんで、取り敢えず日取りだけ決めて、場所とか詳細はあとでということになったんだけど、怜央は自分の自宅に来ないかと誘ってくれた。これって、やっぱりまたやろうっていうお誘いよね・・・。でも、そう言われたとき、思わず胸がキュンとして、あそこがじわっと濡れてくるのがわかったの。つまりあたしも期待しているってことなんだわ。こういう感覚、寛ではなかったから、してみるとやっぱり怜央はあたしの中で、特別な存在だということは間違いないわよね。でも、どの辺りが特別なのか、それはこれから確認して行かなきゃならないんだわ。それと怜央の自宅にお邪魔するということは、怜央の両親にもはじめてご挨拶することになるのかしら・・・。ちょっと不安・・・。

「いよいよ、千博が遠藤家に引っ越すこととなった。勿論、まだ入籍した訳でもないし、結婚式は先方のご都合とか、式場のスケジュールとかで、ゴールデンウィークになる予定だが、それはともかくとして、もう明日、新年からは千博は婚家である遠藤家に引っ越しして、遠藤家で暮らすことになる。」

「入婿ということで、いろいろと苦労もあるかもしれないが、幸い先方のご両親には女子の時代から可愛がられていたようだし、普通の嫁よりもずっと大事にして貰えるだろう。あとは一刻も早く遠藤

家の跡取りを仕込むことだ。といっても、こればっかりは運だな。」
「父さんとしては、千博を15年間育ててきて、立派な成人になったと思ったし、それ以前に女の子だった千博が性転換して男の子になったことには、随分驚いたが、それはすべて千博の希望であり、千博の努力の結果である。また、遅いか早いかはともかく、いずれ女の子として嫁に出すことを想定していたが、それが男の子として婿に行くということになるとは、さすがの父さんも想定外だった。」
「まあ、でも相手が勝美さんというのは、前からそうなるだろうと思っていた訳で、その日が案外早く来るだろうということも、考えていたところだ。」
「実は父さんとすれば、娘を嫁に出す父親というのを、一度やってみたかったんだ。だから、勝美さんが家にきて、千博を下さいと頭を下げるのに、千博は絶対に嫁にやらない！！・・・と言って、ぶん殴って追い返すというシーンに憧れていたりしたんだが、思わぬ展開になってしまった。」
「まあ、冗談はさておき、千博、・・・これからがお前の新しい人生のスタートだ。男性か女性か、性転換したかどうかなど、実は些細なことだ。それより何より、結婚するということ、また配偶者を得て、その配偶者の両親と一緒に暮らすということは、まったく新しい家族関係を構築し、まったく新しい生活をゼロから立ち上げるということだ。生半可な覚悟では破綻する。だが、お前なら、絶対に大丈夫だ。これまで杉田家で育ち、これだけ立派に成長した自分を忘れず、杉田千博としての経験と誇りを胸に、新しい世界に羽ばたいて欲しい。つい先日のお祝いから、わずか2週間でここまで来てしまったが、千博の未来に乾杯しよう。・・・乾杯！」
「「「「乾杯！！」」」」
「ありがとうございます。これまで育てて貰った恩は一生忘れません。婿に行っても、僕は杉田千博としての意識を持ち続けるつもりです。本当にありがとうございました。」
　千博が泣いている。それに芳恵さんなど、もう滝のような涙を流

しているわ。父さんですら、眼が潤んでいるようだし、本当に娘が嫁ぐ前夜の最後の晩餐という雰囲気ね。でも、勝美の家は城址公園を歩いて横切った向こう側、せいぜい１５分もかからないところだから、毎日でもこっちに戻ってくることもできる筈よね。でも、それはこの席では切り出さない。だって、せっかくの感動の涙が台無しになってしまうから・・・。あたしがお嫁に行くときも、同じようになるのかしら・・・？

　しばらく皆でお酒をチビチビやりながら、鍋を突ついていたら、突然、父さんが鋭い目つきで千博に問いかけた。

「それで千博、お前は父さんの言いつけをちゃんと守っているのか。毎日、必ずやっているなら、そろそろ命中させてもよい頃合いの筈だが・・・。」

「えっ、ぇほっ、げほっ、うっ、ぅんっ、ちゃっ、ちゃんとっ、ちゃんとやっているっ。」

　一気に茹蛸（ゆでだこ）のように真っ赤になった千博が、眼を泳がせ思い切りむせながら回答した。

「本当かぁ？・・・お前、最初は暴発して失敗しちゃったんだろう。今はもうきちんとできるようになったのかな？・・・まさか、ちゃんと膣内射精（なかだし）しているんだろうな？」

　義朗兄さんが核心を突いた直球を投げてきた。

「うっ、うんっ、毎晩、必ずっ・・・。そっ、そのっ・・・、一番奥にっ・・・。」

「毎晩、何回位だ？・・・1回では、確率的になかなか難しいんじゃないかな・・・。若いんだから、空っぽになるまで頑張らないと命中しないぞ。」

「だっ、大体、二回位はっ・・・。」

「回数も大事だが、ちゃんと主導権を握れているのか？・・・女性がイクかどうかで、命中率が随分変化するって言うじゃないか。勝美さんは毎回、ちゃんと楽しんでいるのか？・・・お前は勝美さん

をコントロールできているんだろうな。」
「かっ、勝美はっ、このところ必ず気絶するまでっっ。」
「ほう！・・・そうすると、お前は毎晩、勝美さんが気絶するまで絶頂させてあげて、しかも二回以上膣内射精（なかだし）しているんだな？！！」
「それなら立派なもんだ。どんな体位でやってるんだ？・・・それも妊娠しやすさに関係するんだぞ。」
「そっ、そのっ、しゃっ、射精するときは大抵、普通の正常位っ・・・。」
「膣内射精（なかだし）すると、幸せ一杯で、男として女を征服したという気分になれるだろう？」
　父さんと義朗兄さんの質問は、本当に容赦ないわね。芳恵さんと母さんは赤くなって俯いちゃってるし、千博はもう自分の性癖を全部白状させられてしまい、赤くなったり青くなったりと羞恥プレイを延々されているみたいだわ。まあ、これも最初で最後なんだろうけど・・・。

　そんなこんなで、夕食の最後に年越し蕎麦を皆で食べてから、千博は勝美の家に向かったわ。

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――――――

「じゃあ、これで僕達はお先に失礼させて頂きます。」
国民的歌番組は赤組の勝利で終わったので、お義父さんとお義母さんに声をかけた。
「あと１０分位で新年よ。行く年、来る年は見ていかないの？」
「明美！・・・千博君にも予定があるだろうよ。・・・千博君は年越しエッチがしたいんだよね？・・・だったら急いだほうが良いよ。年が明けるまでには、もう時間が殆どないよ。」
「・・・いえ、別にそういう訳では・・・。」

「でも、今夜もエッチはするんだろ。君のお父さんからの指令とやらもあるんじゃないかい？」

「・・・・・。」

「あ、そうか！・・・姫初めか！！・・・やっぱり、子種を仕込むには新年が良いよね！」

「あなた、そんな、お米じゃないんだから・・・。それじゃ、まるで新米か古米かみたいじゃない。子作りに旧年も新年もないわよねぇ。二人で好きなときに好きなだけ、二回でも三回でも、何回でもすれば良いじゃない。・・・ほら、千博君が困っているわよ。」

ダメだっ。急いで逃げないと、勝美と二人でセクハラさらしものになっちゃう！！・・・さっきの父さんと義朗兄さんの質問は本当に恥ずかしかったけど、それ以上かもしれない。しかも、これまでは黙っていたお義母さんも参戦してきて、こんなに露骨な表現をするんだ！！・・・これってやっぱり、もうこれから一緒に住むことにしたんで、家族になったということだからなのかな。それとも、大人になると、いや、夫婦になると、性のこと、セックスのことは、別に普通の日常会話として、誰でもあけすけに話すようになるんだろうか・・・？

勝美はさっきから真っ赤になっちゃって、涙目だけど、僕のほうがよっぽど泣きたい。勝美の手を取って、二人で急いで階段を駆け上がった。

――

「二人はもうベッドインしたみたいだな。」

「ええ、この分だと、孫の顔も案外直ぐにみられそうだわね。」

「ん？・・・勝美から何かそんな話でもあったのか？」

「いいえ、そういう訳では・・・。あの子、恥ずかしがって、あたし

にはそういう話をしないのよ。いくら女の子になったつもりでいても、元からの娘と違い、あたしは異性の親という意識がどこかに残っているんだと思うわ・・・。でも、あなたに相談するのも、それはそれでハードルが高いんじゃないかしら。誰か、こういう話を相談できるお友達がいると良いんだけど・・・。」
「まずは千博君に相談するのがスジだろう。とはいえ、千博君も性別交換者だからな・・・。そこから先の相談相手とすると、千博君の腹違いの姉の杉田優稀さんあたりかな。彼女も元男子で、勝美とは小学校時代から仲が良かったし、千博君とはずっと双子同然で育ったらしいから・・・。」
「でも、何か問題が起きているなら困ったことだが、そうでないなら、妊娠してしばらくすれば、自ずと明らかになるだろう？・・・我々が気をつけていれば、それで大丈夫じゃないかな？」
「あたし、単なる勘なんだけど、あの子、もう妊娠したんじゃないかって、そんな気がしているの。本人は、まだ生理が来ないって心配してるけど、あれは妊娠したから生理が止まった可能性があるわ。」
「それならなお結構なことじゃないか。まあジタバタしなくても、あと1カ月もすればわかるさ。それよりも今日、先方のお父様から連絡があってな、もう春休みの式場には空きがないそうだ。ただ、私が次に長期で帰国する時期の関係から、実はGWが好都合だってお伝えしたら、そちらならまだ少し空きがあるそうで、多分結婚式はGWになりそうだな。今なら4月29日でも5月1日でも、どっちも取れると言っていた。・・・ただ、もし勝美が本当にもう妊娠していたとしたら、かなりお腹が目立ってくるかもしれないな。」
「あ、そっちはドレスで隠せるんで、大丈夫よ。でも母体に負担がかからないように、いろいろ配慮が必要かもしれないわね。」
「そうだな・・・。しかしこうなってみると、やはりもっと頑張って、勝美に弟か妹をつくってやれば良かったな・・・。俺が海外に長期赴任することが多くて不在がちだったから・・・。」

「あら、あたしは今からでも、勝美の弟か妹をつくってても良くてよ？・・・あたしはまだ３６歳だし、初産ということでもないから、高齢者出産にはならないわ♡・・・子供と孫が同じ歳というのも、ちょっと素敵じゃない？・・・それとも恥かきっ子は嫌かしら♡♡」
「じゃ、我々も千博君達に負けずに、姫初めとするか♡・・・寝室に行こう。今夜は寝かせないぞ♡♡♡」
「あら。あなたこそ、体力は大丈夫なの？・・・もう若くはないんだから、ぎっくり腰なんかにならないでね♡♡♡」

第５７話　あけましておめでとうございます

「よし、では皆準備は良いな？・・・特に優稀、晴れ着の着付けは大丈夫かな？」

「本当によく似合っているわ。お父さんの先見の明かしら。あのとき直ぐに千博のものを切り換えて貰うよう発注していたなんて、手際が良すぎ？！！」

今朝、あたしは起きると朝食もそこそこに、一昨日届いてきたという振り袖を着させられたの。良家のお嬢様で、一級家庭の教育を受けてきた芳恵さんは、着物の着付け（いわゆる帯締め）なんか、鼻唄まじりでできるのよね。

でも、着付けはともかく、本当にあたしの晴れ着がお正月に間に合うとは思ってもいなかったわ。勝美も先日の女子会のときに、お正月は間に合わなくって、ギリギリ成人式までに間に合わせるのがやっとだったなんて話をしていたわね。あたしや勝美みたいに性別転換して女子になった子は毎年一定数いるんだけど、皆、元日に晴れ着を間に合わせることはできないみたい。だって１１月の中旬頃に性転換が決まって、手術から退院するのは１２月になってからでしょ。体型を合わせたりすると、レンタルならともかく、普通は無理なのも当然よね。これってやっぱり、父さんの功績というか、先見の明があったんでしょうね。こういうところでさりげなくＧＪができるのが、一級男子たる所以（ゆえん）なのね。

晴れ着を着たら、家族揃って初詣に出かけることになっている。これは、ここ数年の我が家の恒例となった行事で、城址（じょうし）公園の外れに建っている豊玉姫神社に行くんだけど、今年は千博がいないと嘆（なげ）いた父さんが、勝美のお父さんを強引に誘って、勝美の一家も一緒

に初詣に来ることになったんだって。こういうところが一級男子の超強引なところなのよね。10時に待ち合わせているから、あと30分位で出かけないと・・・。

豊玉姫神社というのは、あたしたちの町にある一番大きな神社で、豊玉姫という初代の神武天皇のお祖母様にあたる人を祭っているんだって。何でも主社は九州にあって、ここは分社らしいけど、どういった経緯でそうなったのかしら。

髪を結うまでは手が回らなかったんだけど（そもそも、まだあたしの髪はそんなに長くない）、それでも晴れ着に合わせたお化粧までやって貰い、家族揃って家を出たのはもう9時半を回るころだった。あたしは慣れない履物で転ばないように気をつけながら、一生懸命歩いて神社に向かった。

それにしても、女性が和服を着るときには、下着を着けないって聞いたことはあるんだけど、やっぱりなんだか変な気分ね。胸は帯を締める関係で、ブラがなくっても下半分をしっかり支えてくれているような感触だから、まだ良いけど、下半身は単に布を腰に巻いただけで、本当に下には何も履かないんだわ。何重にもグルグル巻きしているから、まあ見えちゃうような気遣いはないにせよ、下が完全に開いていてあそこがスースーする感覚は、ちょっと慣れそうもないわね・・・。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―

「「「「「「「あけまして、おめでとうございます。ことしもよろしくお願い申し上げます。」」」」」」」

「「「「あけましておめでとうございます。こちらこそ、引き続きよろしくお願い致します。」」」」

「千博がこれからごやっかいになりますが、どうぞよろしくお願い

します。どれほどお役にたつかどうか、わかりませんが、最低限、婿としての義務は果たすように申しつけてありますので、ちゃんとやっていないときは、ベッドに縛りつけてでも、無理矢理やってしまって下さい。」

「いえ、千博君は、それはそれは毎晩頑張ってくれています。いつもいつも勝美を可愛がってくれて、勝美はもう毎晩、何回も気絶するまで楽しませて貰っているようです。この分ならば、すぐにでも初孫の顔を見ることができるでしょう。」

　千博と勝美が真っ赤になって、二人して俯いちゃったわ。父さんも勝美のお父さんも、確か初対面だったと思うんだけど、なんてあけすけなのかしら。いくら男性同士だとしても、男の人のこういう話には、本当について行けないわ。女子会でも、かなりきわどいエッチな話はしているけど、それは自分のことであって、言われる当人を前にして、こういう恥ずかしい話をするなんて、どういうつもりなのかしら。男性の神経って、本当にわからないわね。

　それに、そもそも千博と勝美が毎晩何回やっているかなんて、数えているのかしら・・・。これじゃ千博も大変だわね。いや、千博以上に勝美のほうが精神的にキツいかもしれないわ。自分の両親に毎晩、何回やっていて、何回イッたのか、そのときどんな様子だったのか知られているなんて、よく我慢しているわね。普通、そんなの恥ずかしくてやってられないわよねぇ・・・。

　でも、恥ずかしさはともかく、二人でしっかり腕を組んで、小柄な勝美は千博に縋り付くような態勢で大きな胸を千博に押しつけているし、千博は千博で勝美を庇うように肩から腰のあたりをしっかり抱きかかえていて、まるでどんな障害があっても、もう絶対に離れないという意思を二人で体現しているようだわ。これが俗に言う「嬉し恥ずかし」状態なんでしょうね・・・。芳恵さんは、何とか千博と話すきっかけを掴みたがっている様子がミエミエなんだけど、しっかり抱き合った千博と勝美の二人の間に入っていくことができずにウロウロしている。まあ親はいずれ、子供を結婚相手に取られ

ちゃうんだなんて言われているから、これはこれで普通なんでしょうね。

「それでは、結婚式は４月２９日で確定してよろしいですね。」

「私たちも、そのほうが好都合です。是非、よろしくお願いします。」

「あ、でも、もし勝美さんが妊娠していたら、ドレスで隠せるって言っても、負担にならないように・・・。」

父さんが勝美のご両親と結婚式の段取り等について話をしているけど、まあそれは任せておくことにして、さて初詣で何を神様にお願いしようかなっと・・・。やっぱりここは、女子としての幸せ、女の子として楽しいことを一杯経験したいから、そっち方面をお願いすべきよね。ここは確か祭神が女神様だったから、女の幸せを祈るのは不自然じゃない筈だわ・・・。

あ、いよいよあたしたち家族と勝美の家族の順番が来たわ。他の皆はどんなことをお祈りするのかしら・・・。

チャリン、チャリンチャリン、ガラン、ガラン。・・・パン、パン。（最敬礼）

『早く子供ができますように』

『千博さんと勝美が幸せになりますように』

『千博がちょくちょく帰って来てくれますように』

『絶対に一級になれますように・・・あそこを切り取られちゃうなんてことになりませんように』

『今年は中学生だから、誰かボーイフレンドができますように・・・できたらバレンタインまでにお願いします』

『優稀が女の子の幸せを掴（つか）めますように』

『俺も今年こそ結婚することにします・・・美香と愛と、どっちが先かな・・・いや、ダメだ、両方一緒にしなきゃ・・・よろしくお願いします』

・・・パン。（最敬礼）

「さて、お参りも終わったし、今年の運勢占いでもしてみるか。」
両家揃って社務所のほうに移動して、お札や破魔矢(はまや)、それにおみくじ等を買っていると、境内のあちこちにチラホラ、振り袖姿の子を見かけた。同じクラスの子はいなかったけど、あれは全部、あたしたちの学年の女子生徒よね。なにせ、この小さな町には中学校はひとつしかないんだから・・・。あ、でも、この神社は割と有名だから、他の町からも初詣に来てもおかしくはないかしら・・・。振り袖を着ている女の子は皆、着物に合わせてしっかりとお化粧しているんで、実は素顔がよくわからなくて、誰なのかさっぱりなのよね。あたしはそんなにベタベタのお化粧はしていないし、する時間もなかったんだけど、成人式のときはあたしもカツラとか用意して、しっかりお化粧するんでしょうね・・・。

「あ、優稀!・・・あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。」
おみくじで盛り上がっていたら、いきなり声をかけられて、驚いた。円が来ていたみたい。円って、いつも突然やってきて、こういう風に声をかけてくるのよね・・・。
「あ、こちらこそ、よろしくお願いします。円は家族に会うの初めてだったわよね。私の両親と、千博のお母さん、それに義朗兄さん、環と晶です。」
「こっちはあたしの両親です。千博は紹介するまでもないわよね。」
「はじめまして。橘円です。優稀と勝美とは、とても仲良くさせて頂いています。よろしくお願いします。」
「こちらこそ、よろしくお願いします。優稀はまだ女子のお友達があまりいないみたいだから、是非仲良くお付き合いしてやって下さい。」
「勝美がお世話になったっていうお友達ね。勝美も同じく、千博さん以外の女の子はあまり知らなかったみたいなんで、これからよろしくお願いします。」

（ひそひそ声で）『もしかして、優稀が男子のときにお付き合いを始めたって言っていた女の子か？・・・いい子じゃないか・・・。残念なことをしちゃったな・・・。』
『そっ、それはっ、秘密っ、絶対ナイショなのっ！！』
『誰にも言わないって。』
　焦った！・・・円のことは、義朗兄さんに、前にチラッと話したことがあったけど、名前までは言わなかった筈なのに、一瞬で見破られちゃった・・・。どうしてわかったのかしら・・・。
「あ、皆さん、おみくじを買ったんですね。あたしもさっき買ってみたところなんです・・・。」
　円が両家族と一緒に、おみくじの話題に加わったわ。皆、それぞれ重要視する項目が違うのが面白いわね。千博と勝美は、もう恋愛運など見ていないけど、あたしとか円は、やっぱりどうしても気になるわよねぇ・・・。そろそろ環も気になる年頃らしいし・・・。晶はどこかしら。あの子、なんだか学業欄を真剣な眼差しで見つめているみたい・・・。そんなに勉強で行き詰まっているのかしら・・・？
「あ、優稀！・・・あけましておめでとうございます。ことしもよろしくお願いします。それから優稀と勝美さん、千博さん、それに優稀のご家族の皆様ですね？・・・私、優稀の友人の元村寛と言います。あけましておめでとうございます。よろしくお願い致します。」
　今度は寛がやってきた。円もそうだったけど、寛も一人で普段着で来たわ。さすがに町内で一番大きい有名な神社だけあるわね。ここに居れば、今日一日で知り合いの半分位には会うことができるんじゃないかしら・・・。

第５７話　あけましておめでとうございます（後書き）

元日のエピソードですが、少し長くなったので、２話に分割します。
（もしかすると３話になるかも・・・。）

第58話　入籍（前書き）

前々回、元旦の話があと1話か2話続くと言いながら、少し混乱して次の日の話を投稿してしまいましたので、今回と次回は、元旦のエピソードを割り込み投稿します。ご了承下さい。

第58話　入籍

一人で神社にお参りに行ったら、優稀の家族と勝美の家族が一緒にお参りしていた。優稀は晴れ着姿で、もともと小さくて可愛い優稀が、本当にどこのお嬢様かと見紛うばかりだわ。あたしも成人式に合わせて晴れ着を準備して貰っているけど、一足先に成人になってしまった優稀は、もう振り袖を着ているのね。勝美も成人になっている筈だけど、こっちは普通の服装で良かったわ。

お参りした後、優稀たちと一緒におみくじを引いたんだけど、千博と勝美はもう結婚しちゃってるんじゃないわよね？・・・まるで新婚夫婦にしか見えないくらいイチャイチャでベタベタだわ。横では優稀のお父さんと勝美のお父さんが、二人の結婚式の相談をずっとしているし、何だかあたし一人、場違いな雰囲気かしら・・・。

ちょっとそんなことを考えながら、それでも優稀や勝美、それに千博と一緒におみくじの話で盛り上がっていたら、そこに元村君がやってきた。元村君って、男の子時代の優稀とは、とっても仲が良い親友だったわよね。確か加藤君もそうで、この三人は、しょっちゅう三人でつるんでいたわよね。三人とも小柄で優しくて、あたしはこの三人の性格や雰囲気が好きになって、それで最初に加藤君に告ったんだっけ・・・。あれからもうすぐ1年になるのね。本命チョコを持って必死の思いで手紙を下駄箱に入れたのに、その日に断られるとは思わなかったわ・・・。でも、加藤君には、もう夫婦の関係にある女性が居るんだって言われてちゃって、大ショックを受けたあたしが立ち直るまでには、半年近くもかかっちゃったのよね。

この三人は、皆同じような体型と雰囲気なんだけど、元村君と加藤君は勉強がすごくできて、いつもクラスでトップに近かったわ。身体・体力点では三人ともビリ争いをしていて、似たような点数だったって話していたけど、勉強ができるところが優稀と二人の大き

な違いなのね。それで優稀だけが女子になっちゃったんだけど、今はどうなんだろう・・・。三人の関係はどう変化したのかしら・・・。

そんなことを漠然と考えながら話をしていたら、ちょっとした違和感に気付いちゃったんだ。それは優稀と元村君の関係なんだけど、これまで仲がよかったにしても、それは同性の親友としてであって、お互い本当に気の置けない仲間というのかしら、どんなことでもあけすけに話し合い、お互い「俺」「お前」で呼び合うような(優しい優稀達が、実際にそう呼び合っていたかどうかは、あたしは知らないけど、多分そういう感じだったんだろうって思わせるような男の友情が間違いなくあったと思っていた)感じだったのに、さっきから二人が話しているのを見ていると、何となく雰囲気が変わっていて、優稀の態度が妙にぎこちないのよね。これが、元村君がぎこちないんだったら、久し振りに会った優稀が女子になっていて、これまで同性の親友だったのに異性になっちゃったんで、どう接して良いか戸惑っているに違いないから、まだ理解できるんだけど、そういう感じじゃなくて、何となく男女の関係というのかしら、あたしがはじめて優稀と付き合いだしたときに、優稀が見せた反応、つまり恋人初心者が、相手に対して見せる遠慮とか恥じらいとか、そういうのが言葉や行動の端々にちらっちらっと見て取れるんだ・・・。これはかなり怪しいわ。あとで優稀を問い詰めてみなくちゃ・・・。勝美は千博に夢中で、優稀のこの微妙な変化には気がついていないのかしら?・・・それとも、もともと男の子だった勝美には、この感覚が理解できないのかしら?

そう疑いだした眼で二人の様子を観察していると、元村君が優稀の手や肩に触れたり、あるいは優稀が慣れない草履(ぞうり)で転びそうになったときなんか、さっと優稀の身体を抱えるようにサポートしたりして(しかもそのとき、しっかり優稀の腰に手を回していたのを見ちゃったのよね)、どう考えても同性の親友に接する態度というよりも、恋人に対する態度に間違いないような気がしてきたの・・・。

多分、あたしの勘は外れていないような気がするわ。ただ、ひとつだけ疑問なのは、元村君が実はゲイだっていう噂(うわさ)なのよね・・・。これがあったんで、あたしも加藤君や優稀とお付き合いしようと考えたときに、元村君も検討したけど、やっぱり躊躇(ちゅうちょ)した大きな原因だったんだから・・・。でも、これは単なる噂(うわさ)だから、案外違うのかもしれないけど・・・。

――――――――――――――
――――――――――――――
―

円と寛と三人で、おくみじ談議で盛り上がっていると、千博と勝美がちょっと離れたところで何やら話をしていたんだけど、二人してうちの父さんや母さん、芳恵さん、それに勝美のご両親に向かって、何やら話があるといって、神社の境内の隅のほうに両家の皆を誘導して、二人して頭を下げた。

「この度は僕たち二人の結婚を認めて頂き、ありがとうございました。また僕が遠藤家に婿に入るということも、すんなり認めて頂き、本当に嬉しく思います。」

「僕たちはまだ学生なので、結婚と言っても、すべて父さん母さん、それにお義父様とお義母様にお世話にならなければ、自分たちだけでは何もできないヒヨッ子です。でも、全部お膳立てして頂き、ゴールデンウィークには結婚式を挙げて頂けるとのこと、何から何まで面倒を見て頂き、感謝の言葉もありません。」

「一から十まで、一方的にお世話になっている僕たちですが、今度の結婚に際して、僕たち二人が何か自分たちでできることがあるかどうか、また何か記念になりそうなことがないかどうか、勝美と二人でいろいろと話をしてきました。すると、昨日から僕は遠藤家に住まわせて頂くことになりましたので、これを記念して、本日、新年の始まりである元旦の日に、結婚届を提出しようと思います。結

婚届は、年中無休で２４時間いつでも受け付けて貰えるということを知って、いつどのタイミングで提出するのが良いかと、勝美と二人でさんざん話し合いをしたのですが、やはりここは実際に遠藤家にお世話になる日で、かつ、新年の計となる元旦の今日、これから提出に行こうと思い、必要書類を昨年のうちに揃えておきました。」
「なので、もしご賛同頂ければ、結婚届の立会人の欄に、父さんとお義父様の二人の署名を頂き、これから市役所に提出しに行こうと思います。」
「賛成！・・・これで正式に我が家の婿殿だ！！」
「それは良いアイデアだな。私も反対する理由はない。」
「そっ、そんなっ・・・。そんなに急ぐことはないじゃない！！・・・結婚式は半年近くも先なのよ！」
「でも、実態はもう結婚生活に入るんだし、元旦の今日という日は節目のときじゃない？」
「それと、もし勝美に子供ができた場合、正式に結婚していないと、僕が認知しない限り、その子は最悪私生児扱いになっちゃうかもしれないんだよ。そんなの絶対にダメだし・・・。」
そうだわ。千博と勝美が認知しないようなことはないにせよ、出産日と結婚日（婚姻届を出す日）との関係は、結構ややこしいものがあって、本当に自分の子供かということがＤＮＡ鑑定できなかった時代の名残で、いまだに子供の親を「推定」するという考えも、民法の中に残っているって聞いたことがあるわ。さすが千博と勝美ね。そこまで考えているなんて・・・。
「こういうものは、思い立ったが吉日とも言う。じゃあ、善は急げだ。これから皆で市役所に婚姻届を提出に行くこととしよう。もう一つの神社は、その後で回れば良いだろう。」
思いもかけず、千博と勝美の婚姻届を今日出すことになり、そのため皆で市役所まで行くことになったわ。寛と円はどうするのかしら。一緒についてくるのか、それともここで別れるのかな？
「優稀は慣れない履物であまり歩きたくないだろうから、皆でタク

シーに分乗して市役所に向かおう。お正月でもタクシーは走っているだろうし。」
父さんの提案で、皆でタクシー3台をつかまえた。あたしはお母さんに手伝って貰って、何とかタクシーに乗り込んだんだけど、和服ってこういうのには向いていないわね。・・・あっ、そう言えば円は市役所に付いていきてくれるんだって。婚姻届を出すところを、実際に見てみたいということらしいけど、案外ヒマなのね・・・。寛は、用事があるとかで遠慮しておくと言って、別れて反対方向に歩いて行った。

タクシーの中で隣に座った円が、あたしにヒソヒソと話しかけてきた。
『ねえ、優稀、元村君と何かあったんじゃない？・・・あたしの眼はごまかせないわよ。』
『えっ、そっ、そのっ、その話はっ、ちょっとここではっ・・・。あとで説明するわ・・・。』
『わかった。次の女子会のテーマだからね！・・・全部隠さず話して貰うわよ！！』
やっぱり円は鋭いわね。何を気付いたのかしら。まあ、でも寛とのことは、いずれきちんと円と勝美には話しておこうと思っていたんで、かえって話しやすくなったかもしれないわ・・・。
そんなことをヒソヒソと話しているうちに、市役所に到着した。勿論、元旦の今日は閉まっているんだけど、婚姻届だけは守衛室で受け付けてくれるんだって。知らなかったわ。
父さんと、勝美のお父さんの署名捺印を貰った婚姻届を、戸籍その他必要書類一式と合わせて守衛室のおじさん（おじいさん？）に提出すると、添付書類が全部揃っているかどうかをざっと確認した上で、今日の日付の受付印を押してくれた。
「ご結婚おめでとうございます。お二人が末永くお幸せになりますよう、心よりお祈り申し上げます。」

「これで千博君は正式にうちの婿殿だ！！・・・遠藤千博君、これから勝美ともども、よろしくお願いします！・・・もうこれで、いつ妊娠しても大丈夫だな！」
「まだ嘴の黄色いひよっ子ですが、婿として遠藤家の家風にしっかり染まるよう、よろしくご指導お願いします。どうか末永く可愛がってやって下さい。」
「任せて下さい。千博君は昨夜も、しっかり3回、姫初めをしていますから、初孫も直ぐでしょう。」
勝美のお父さんと、うちのお父さんが型通りの挨拶を交わした。
芳恵さんはもう涙をポロポロ零して、千博のことを見つめている。肝心の千博と勝美は、感極まったという感じで、ひしっと抱き合い、人目も憚らずに思い切り口づけをすると、見ているほうが恥ずかしくなってしまうほど延々とディープキスを始めちゃった・・・。お互い、舌を思い切り相手の口に挿入して、相手の口内を舐め回しているのがよく判るわ。それだけじゃなくて、千博はあそこが思い切りテントを張っているし、勝美は何だかキスだけで軽くイッちゃっているような反応で、小刻みにビクンッ、ビクンッとしているわ。まったく二人とも、いくら嬉しいからって、少しは人目をわきまえて欲しいわよね。さっきも今も、二人の夜の生活について、何回やったかまで、勝美のお父さんが詳しく解説していたけど、要するに二人の行動にも原因があった訳ね・・・。
ごちそうさま・・・。

第５９話　怜央との関係（前書き）

先週は仕事でトラブルがあり、連日、終電で帰ってきて始発で出勤するような生活でした。週末も土曜日は完全に普通に仕事をしていて、更新が遅れてしまったことお詫びします。
多分、今週も仕事はまだ尾を引くような雰囲気ですが、何とかできる範囲で執筆しようと思います。

第59話　怜央との関係

　とうとう千博が結婚しちゃった・・・。結婚って、こんなに簡単にできるものなのね。二人は前から理想的なカップルで、近いうちに結婚するだろうとは、誰しも思っていた筈だけど、まさか二人して性転換して、千博が男子になり、さらにお婿さんになって遠藤千博になるなんて、つい3カ月前には両家の誰も考えもしなかったんじゃないかしら。いや、きっと千博と勝美の当人同士でさえも、こういう結果になるなんて、考えたこともなかった筈だわ。あたしも自分のことがあったんで、そこまで余裕がなかったけど、普通に考えてこれは物凄いことよね。
　まあ、何はともあれ、これで二人は正式に夫婦となったんだけど、これ、発表するつもりかしら。それとも学校では、当面は婚約したということにしておくつもりかしら。多分、まだそこまで考えていないような気もするけど、まあバレるのも時間の問題よね・・・。

　そんなことを考えながら、次の神社に向かった。さすがに元旦の市役所の前でタクシーを拾うのは大変だったけど、何とか皆で分散して乗り込むことができて、無事、次の神社に到着した。
　この神社は、鹿島神宮の分社だそうで、この小さな田舎町に二つある、それなりに有名な神社のもう片方なの。鹿島神宮の祭神は建御雷神とかいって、天照大神が国譲りのために大国主命に派遣した神様らしいから、神武天皇のお祖母様だったっていう豊玉姫を祭神とする豊玉姫神社よりも、有名な筈なんだけど、血筋としては初代天皇のお祖母様のほうが上だからかしら、何故かこっちのほうが、少し寂(さび)れているんだ。・・・でも、あたしとしては、昔から、この少し寂(さび)れた人気(ひとけ)のない雰囲気が好きで、こっちの神社のほうが親近感があったのよね・・・。家からは少し遠くても、何か願い事があ

るときは、こっちに来ることが多かった気がする・・・。そういえば、判定試験の前にお参りに行ったのは、豊玉姫神社だったわ。女神様が祭神だから、それであたしの試験が失敗したのかと疑ったこともあったけど、結果的に女の子になれて却って良かったんだから、御利益は上だったということなのかしら・・・。少なくとも女神様だからこそ、あたしを女の子にすることができたのかもしれないわ・・・。本当に人生ってわからないものよね。

鹿島神社でお参りを済ませて、またしても皆でおみくじを引いていたら（本当はおみくじを同じ日に複数の神社で引くのは良くないんだって聞いたことがあるけど、我が家も勝美の家も、あまり気にすることもなくって、さっきと比べてどうだなんて、神様を比べて評価するようなことを平気で話して盛り上がっていた。バチが当たらなければ良いんだけど）、怜央がお参りにやってきたわ。彼は一人で来ていて、何かを必死になって祈っている雰囲気だったんだけど、何か願い事でもあるのかしら・・・。

「あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。」

「あ、優稀、いや、杉田さん、あけましておめでとうございます。こちらこそよろしくお願いします。」

「あたしの両親と、千博のお母さん、それに義朗兄さん、環に晶です。」

「こっちはあたしの両親です。今日から千博があたしの家族になってくれたの。」

「あ、榊怜央です。あけましておめでとうございます。杉田優稀さんには、本当にお世話になっています。」

「あけましておめでとうございます。あなたが榊さんですか。優稀はこんなに立派でグラマーな身体にして貰い、ありがとうございます。」

「いいえ、僕のほうこそ、優稀さんの男性を奪ってしまい、本当に申

し訳ありませんでした。」
「優稀は女性になって、女性のほうが幸せかもしれないって思うようになってきたみたいですので、あなたが気にする必要はありませんよ。それにあなたのほうが、以前の優稀より、よっぽど凛々しくて男前で、ずっと男性としての魅力に溢れているじゃありませんか。これがあなたたち二人の運命だったに違いありませんわ。」
「そういって頂けると、僕も気が楽です。優稀さんは確かに理想的な女性になって、僕も一目惚れしてしまいました。これから、是非お付き合いさせて下さい。」
「そうなんですってね。優稀からその話を聞いて、良かったわねって、家族皆で話をしていたんですよ。こちらこそ、是非ともよろしくお願いします。」
　怜央が父さんや母さんにつかまって、いろいろ質問責めにあっている。まあ、勝美や寛、慶太と違って、女子だった怜央は父さんも母さんも、まったく接点がなかった訳だから、これが初顔合わせになるのよね。父さんの印象を良くしておくためにも、少し話をして貰うのが良いかもしれないわ。
―――――――――――――――――
―――――――――――――――――
―
「その晴れ着、とっても似合っているね。綺麗で華やかで、今すぐにでも食べちゃいたい気分だ。」
「ありがとう。これ、実は千博のために予約していたものなんだけど、千博が男子になっちゃったんで、急遽あたしに回すことにしたんだって。和服って、洋服と違って多少のサイズ違いは簡単に調整できるらしいから・・・。」
　ようやく父さんたちとの会話が一段落した怜央が、あたしに話しかけてきたんだけど、今、さらっと凄いことを言ったような気がしたわ・・・。まさか父さんに聞かれたりしていないわよね・・・。あたしを食べちゃいたいなんて、いくら父さんが怜央とのおつきあ

いを快諾してくれたにしても、父親に聞かせられる話じゃないでしょう。千博と勝美みたいに、もう結婚したんならともかく、娘を食べちゃうなんて聞いたら、普通の父親なら彼氏をぶん殴ったっておかしくはないんじゃないかしら。こういうところ、やっぱり怜央も一級の尊大で場を弁(わきま)えない性格が出ているのね。

　でも、あたしだって怜央とは早く肌を重ねたいと思っているし、こうあからさまに求められると、おもわず顔がにやけちゃうじゃない。好きな男子にストレートに身体を求められるのって、こんなにも快感なんだわ。だから、あたしもこのノリに付き合うことにして、小声で囁(ささや)いた。

「あたしもあそこがジュンてしちゃってるかも。いつでも準備ＯＫよ。」

　そう言ったら、本当にあそこがジュワっとするのが感じられた。自分のセリフに、胸がキュンとなるなんて、初めての経験だわ。やっぱりあたしは怜央のことが本当に好きなんだ。これって、性器を交換した相手だから、つまり自分の性器を持っていて、自分の遺伝子を持っている相手だからじゃないわ。それは多分間違いない。怜央だから好きなんだ。怜央にさんざん愛して貰ったから、怜央を好きになっちゃったのかしら。いや、それも少し違う気がする。寛もあたしのこと愛してくれて、特にあの巨大なおちんちんを入れられた瞬間、あたしは息ができないほどだったけど、そういう身体の快感とは次元が異なるのよね。きっと怜央にされたら、あたしは手もおちんちんも、一切使わずに、例えばバイブを突っ込まれたりするだけで、いや、それすらも必要ない、きっと怜央にあそこをじっと見つめられるだけでイッちゃう気がするわ。恋人になるって、こういうことなんだわ。前回もそう感じたけど、怜央があたしの運命の人っていうのは、多分間違いないんだ。

　ふと眼をやると怜央がズボンの前を大きく膨らませて、見事なテントを張っているのが見えた。あたしのことを思っての結果だとしたら嬉しいわ。でも、さすがにちょっと、眼のやり場に困るわよね。

それで怜央にそっと耳打ちした。
「ねぇ、あたしのことを思ってなら、とても嬉しいんだけど、それちょっと何とかならないかしら。」
どうやら怜央は気がついていなかったみたいで、ちょっと顔を赤らめながら、そっと後ろを向くとゴソゴソと股間を触っていたわ。
きっとポジションを直して、目立たなくしているんじゃないかしら。かつてあたしもそういうことをした経験があったような記憶があるんだけど、どうやったんだったかしら・・・。もうそういう感覚も、すっかり記憶の彼方に消え去ってしまったんだわ。
股間を何とかした怜央がこちらに向き直ると、あたしに言った。
「ねぇ、これから少し僕に付き合ってくれない？・・・昨日電話でデートの約束したのは明後日なんだけどさ、今日これからではダメ？」
「良いけど、晴れ着じゃ動きにくいし、第一脱いじゃったら自分では着付けができないわ。・・・まだお昼前なんで、一度家に戻って、着替えてからどこかで待ち合わせましょ。家で揃ってお節料理も食べたいしね。」
「そうか、そうだよね。優稀もそういうことを期待しているんだ。嬉しいな。じゃ、2時に学校の裏門にある大銀杏ではどう？・・・あ、お正月だからって、お洒落してくる必要はないからね。普段着で構わないよ。」
「いいわ。それなら父さんや母さんにひやかされるのも少ないだろうし、さりげなく出かけることにするわ。」
まったく、「そういうこと」って、どういうことかしら。あの話の流れからすると、絶対にお節料理の話じゃないから、晴れ着は脱いじゃったら拙いということのほうよね。これは絶対に、怜央もやる気満々なのね。もうあたしのおまんこも口も、ことによるといずれはお尻の穴も、全部怜央の専用の雌穴なんだから、それは構わないんだけどさ。もう少し言い方もあるんじゃないかしら。あんなにイケメンでスマートで爽やかな男子の鏡と思った怜央も、やっぱり

男子は男子で、下品で頭の中にはセックスしか考えがないのかしら・・・。
「じゃ、またあとで。」
「さよなら。またね。」
怜央と別れて、帰宅する途中、父さんと義朗兄さんが話しかけてきた。
「今のが榊さんか。良い青年だな。あれで学年トップの一級なんだろう。立派なものだ。」
「かなりのイケメンだよな。優稀は彼と性器の交換をしたんだろ。その立派な胸を彼から貰ったのに、その代わりに優稀の貧弱なチンポを彼にあげたんじゃ、彼は損したと思ってるんじゃないか。」
「そっ、それっ、そんなことっ。」
「まあでも彼は優稀とお付き合いしてくれるって話だから、お互い自分に付いていたモノで愛し合うなら、そんなに不満も出ないか・・・。まあ何にせよ、今回のことでは、優稀のほうがいろいろな意味で得をしたみたいだな・・・。こういうことを損得で話すのも何だけどさ。お前、やっぱり運が良かったと思うだろう。」
――――――――――――――――――――――――――――――――――

帰宅して、晴れ着を着替えると、さっそく芳恵さんと母さん、それにあたしと環の４人で、お節料理を食卓に並べ、お雑煮をつくった。といっても、お正月は包丁を使ってはいけないと言われているから、料理としては全部昨日のうちに準備してあって、今日は並べるだけなのよね。千博がいなくなったので、男３人に女４人だと、手が多くて楽だわ。
千博がいないお正月は、ちょっと寂(さび)しくて、さっき父さんはしきりに勝美の家族と合同のお年始食事会をセットする話をしていたけど、それは結局、始業式の前日に、町に１軒だけある老舗(しにせ)の料亭で行うことにしたみたい。ただ、勝美のお父さんが、その日ならば勝

美の晴れ着が間に合うかもしれないなんて不気味なことを話していたんで、勝美と示し合わせて何とか阻止しないと・・・。晴れ着なんか着て行った日には、せっかくの料理が何も食べられなくなっちゃうじゃない・・・。

お節料理を食べ終わると、あたしは普段着（といっても女子会に行くときのような、ちょっと可愛く見える外出着）に着替えて、出かけてくると伝えて家を出た。こういうときの着る服について、最初はどうしたら良いのか、さっぱり感覚がわからなかったんだけど、千博が読み終わったティーンズ向けのファッション誌やら情報誌やらを１０冊以上置いていってくれたんで、それらを読んで研究したから、最近はようやくサマになってきたんだ。怜央は可愛いって言ってくれるかしら・・・。

父さんや母さんは、あたしが出かけることについて、気にもしていない雰囲気だったけど、義朗兄さんがニヤニヤしながら、親指を立てたグー握りをあたしに向かって突き出した。これって、頑張ってこいっていうサインだったわよね。さっきのあたしと怜央との雰囲気からして、きっと気付いているんだわ。隠し事はできないわね・・・。

それよりも、怜央はなぜ、学校の裏門にある大銀杏（おおいちょう）なんて場所を指定してきたのかしら。あの辺りに、あたしの知らない秘密のデートスポットでもあるとか？？・・・でも、さっきの話の流れからすると、どこかでエッチしようとしている筈よね。あたしもそれを期待しているんだし、間違いなくそういう場所を考えている筈なんだけど、あんなところにホテルがある訳じゃないし、まさか冬休みで誰もいない学校でやるとか？！

それとも、屋外で青姦（アオカン）とか？！！・・・そんなの嫌だわ！・・・いったい怜央は何を考えているのかしら・・・。かなり不安・・・。

第59話　怜央との関係（後書き）

あと1話、お正月（元旦）のエピソードが続きます。怜央は大丈夫でしょうか。

第６０話　怜央の秘密の隠れ家（前書き）

先週は更新ができず失礼しました。楽しみにされていた方には、心よりお詫び申し上げます。
まだ仕事のトラブルが続いていて、このところ連日睡眠が４時間程度です。先日など、帰宅の通勤電車で終点まで寝過ごしてしまいました。幸いにも終電ではなかったので、戻りの電車があって助かりました。
そんな状況なので、活動報告も書けないありさまです。
仕事は年内には一段落できると期待しますので（本人だけの希望的観測？）、どうか見捨てずにお付き合い下さい。

第６０話　怜央の秘密の隠れ家

「本当にここで間違いないのよね？・・・どこに行こうというのかしら？」

怜央から指定された裏門の脇にある大銀杏に、少し早くやってきたあたしは、所在なさ気にあたりを見回していた。ここは、学校の中でも少し寂れた場所にあって、それ故人目につきにくく、いわゆる告白場所のひとつとして認識されているのよね。しかも冬休み中だから、生徒は一人も見当たらないわ。怜央ったら、まさか、本当にここでやろうとしているのかしら・・・。

すっかり葉が落ちて、枝ばかりになった大銀杏を眺めていると、外の小道を歩いてくる怜央が眼に入った。さっきも特にめかし込んでいた訳ではないけど、家に戻ってから着替えたらしくて、本当に普段着のトレーナーのようなものを着ていた。寝間着だと言われれば、信じてしまいそうな位、本当にラフな格好だわ。・・・あれっ、でも怜央の家は、ここからだと電車で二駅行ったところの筈だったわよね。そこから、この格好で来たのかしら。なんで？？・・・これって、せいぜい近くのコンビニに夜中に買い物に行くような格好よね？？？・・・頭の中にいくつもの疑問が浮かんでは消えるあたしに、いたずらっぽい笑顔で怜央が話しかけてきた。

「あ、待たせてごめんね。ちょっと僕の秘密基地に来て欲しいんだけど、ついてきてくれるかい？」

怜央の秘密基地？・・・男の子だったら、ちょっと嬉しくなるような響きだけど、それって、いったい？

怜央について、ほんの２００メートルほど歩くと、住宅や空き地が点在する中に、かなり古ぼけた大きな倉庫というか工場跡のような建物があり、その脇を抜けて怜央が中に入って行った。なんだか、本当に子ども向け戦隊ドラマのワンシーンのようで、ちょっとドキ

ドキワクワクしながら、おっかなびっくり付いていくと、大きな建物の裏手に、やはり古びた木造の2階建ての、こっちは事務所のような建物があり、怜央が鍵を開けてドアを開けた。

「ここは？」

「ここは、父さんの会社の、元の本社工場があったとこで、榊機械工業発祥の地なんだ。工場は郊外に新しいものを建てたし、本社ビルも隣の市の駅前に建てたんで、ここは今、倉庫というか資材置き場になっていて、たまに工場からトラックが来る程度だから、普段は人が居ないんだ。」

「それと、この木造の古ぼけた事務所がもともとの本社で、僕が小さいころには、まだ一部使っていたんだけど、さすがにもう事務所としても使わなくなったんで、放置されていたのを僕が父さんから貰い受けて、秘密基地にしたんだ。」

本当に秘密基地という表現がピッタリで、外観はかなりボロくなったアパートか、それとも建設現場の飯場みたいな雰囲気（でも廃屋というのとはちょっと違う）だし、中から今にも黒尽（くろずくめ）の戦闘員とかボスの怪人とかが出てきそう。

「秘密基地はちょっと大袈裟かもしれないけどさ、でも何となく隠れ家という雰囲気だろう。僕は中学に入った頃にここを貰ってから、自分で少しずつ手入れをして、中はかなり改良したんだよ。自宅と違って、家族も誰もこっちには来ないから、本当に僕だけの隠れ家なんだ。結構、居心地を良くしたつもりなんだけど、そう思わない？」

そう言って少し自慢気にドヤ顔をした怜央は、本当に男の子そのものだった。あたしも元男の子だから、この怜央の感覚は、まだ何となく理解できるんだけど、多分普通の女の子には、こういう感覚はわからないんでしょうね。でも、これを見て、怜央はやっぱり、性同一性障害だったに違いないっていう思いが強くなったわ。だって、普通の女の子には、そもそも秘密基地をつくって遊ぶ感覚なんて、まずないわよねぇ・・・。

「あ、中は普通の部屋になってるのね。玄関で靴を脱ぐのかしら。」
「うん、外見はそのままなんで、ちょっとボロいけど、玄関からリビング、ダイニング、それに昔、給湯室やシャワー室があったところは、きちんとプロに改装して貰って、簡単なキッチンとユニットバスを設置したんだ。二階はもともと工場でつくる機械のための、設計製図をしていたオフィスなんだけど、床は全部たたみに取り替えて、和室の部屋が続くようにして貰ったんで、ここで20名程度の宴会もできるし、布団も揃えてあるから泊まることもできる。といっても、実際にここで泊まり込みの宴会をしたことは、一度もないけどね。」
「で、その和室で、女の子時代の怜央はレズセックスで次々に処女の女の子を食べちゃった訳ね？」
「そっ、そんなに何人もじゃないよ・・・。」
「でも、少なくとも一人二人じゃないんでしょ。あなたに破られちゃった女の子は、両手の指では数えきれないって、もっぱらの噂だったわ。女の子を連れ込んで襲っちゃうための仕掛けとか道具が次々に出てくるんじゃないかしら。バイブとか、張り型とか、その辺に隠してあるんでしょ。あたし、そういうのはちょっと・・・。」
「ごっ、誤解だよ。僕は女の子時代にレズセックスしていたのは確かだけど、必ず相手の同意を得ていたよ。実際、相手が少しでも嫌がったり、躊躇したりする素振りを見せたら、それ以上は絶対に手を出さなかった。相手の子が心の中でどう思っていたのか、本当の意味での本心はわからなかったにしても、僕だって嫌がる相手を無理矢理やっちゃうなんて、そんなことは僕のプライドにかけても、絶対にしたくはなかった。僕の魅力で、相手が抱かれたいって思わせることに意義を見いだしていたからね。・・・それに男の子になってからは、本当に優稀だけしかセックスをしていないよ。」
「本当かしらね。まあ怜央のことだから、あたしがここで家捜ししても、何か出てくるとも思えないけど、でもかなり強引に女の子を食べちゃったんじゃないのかしら？」

「そんなことないって。クリスマスとか、何名かに声をかけたけど、結局最後までは行かなかったから、そのっ、優稀に貰ったペニスは、まだ優稀にだけしか使ったことはないんだって・・・。」
　怜央が半べそ顔で、必死になって弁解している。以前のタカラジェンヌみたいな男装の麗人みたいだった怜央には見られなかったんだけど、本当の男の子って、こういう子供っぽいところがあるのよね。なんだかちょっと可愛い。
「わかったわ。今はそういうことにしておいてあげる。１００％信じたわけではないにしても、あなたがそういう言い方で嘘をついたり、他人を騙（だま）すことはないって、昔からわかっているつもりよ。」
「ありがとう。確かに僕は今日、優稀とまたエッチをしたいと思っていたのは事実だけど、だからといって特別な準備や支度をした訳ではないよ。あ、女の子時代には必要なかったけど、今は一応、コンドームを買っといたけどね・・・。でも、まだ封も開けていないんだ。」
　確かに、去年の交換初夜のとき、怜央はコンドームを練習してみたいと言っていたけど、本当に慣れていなくて、あたしのほうがずっと上手かったわ。あたしだって、コンドームの装着方法なんて、いずれ円とそうなることを夢見て、一生懸命練習したとはいえ、せいぜい１箱分１ダース程度しか試していないんだから、まだ本当に素人で全然たいしたことはない筈なのに、そのあたしから見ても手際が悪かったわね・・・。あ、でもやっぱり、男の子だったあたしのほうがおちんちんの扱いには慣れていたのかしら・・・。
「まあ、そんなことよりもさ、とにかく下でお茶にしようよ。」
「ありがとう。そうしましょ。あたしも、今日は朝から晴れ着で歩いていたから疲れちゃったわ。」
「お茶菓子は何にする？・・・さっき、帰ってくるときに学校の裏門のほうにあるケーキ屋で、四つほど買ってきたんだ。これ食べようよ？・・・それとも、お汁粉のほうが良い？・・・お正月の準備なんて、ここには何もないけどさ、たまたまパックの切り餅と餡子

だけは買っといたんだ。」
「せっかく買ってくれたんだから、ケーキを頂きましょう？・・・お汁粉は家に戻れば、きっとできているような気がするから・・・。」
「お正月らしくなくてごめんね。でも、神社で偶然優稀と会って、どうしても、もっと話したくなったんだ。」
「もっと話したくなったんじゃなくて、どうしてもあたしとエッチしたくなった、でしょ。・・・でも良いわよ。あたしも怜央と会いたかったわ。あの交換初夜のときに話したとおり、あたしはもう怜央のものなのよ。あたしは怜央に女にして貰ったの。それで怜央のことが好きになっちゃった。父さんに言われたの。女の子は、初めての男性が忘れられないものだって。本当にそう思うわ。」
「そもそも怜央には、こんなに立派なおっぱいとおまんこを貰って、これだけでもあたしのほうが得をしただろうって、父さんや兄さんにさんざん言われていたんだけどさ。」
「あの日、病院で怜央に何度も膣内射精（なかだし）されて、心の底まですっかり女の子に書き換えられちゃったの。手術した後も、まだ心の中は男の子だったあたしが、あれで完全に女の子にされちゃって、怜央に愛されたい、怜央に膣内射精（なかだし）して欲しいって、それしか考えられなくなっちゃったの。」
「だから、もうあたしは怜央一筋で、怜央が望むなら、あたしの身体はいつでも怜央の好きにして貰って構わないの。あたしの口もおまんこも、なんだったらお尻の穴さえも、怜央専用の雌穴で良くってよ。」
　こういうセリフがスラスラと口を衝（つ）いて出てきた。あたし自身も、ちょっと意外だったけど、でもこれが今のあたしの、偽らざる本心だっていう気がした。やっぱり怜央は寛と違う。どこがどう違うのか、口では上手く説明できないんだけど、これは精神的な期待感なんだと思うわ。だって、寛と肌を重ねたときは、ドキドキして心が震えてはいたけど、それは単なる未知の体験に対するワクワク感だ

ったんだわ。今の状態みたいに精神的な満足感、いや、やっとまた自分の本来の相手とひとつになれるんだっていう安心感のようなものは、感じなかったのよね。怜央との最初のときも、始めるまでは似たような感覚だった気もするけど、４回も愛して貰って、もうあたしの心の中には怜央が完全に刻みつけられたんだわ。そして多分、身体についても、同じ・・・。あれっ、でも、本当にそうだとすると、自分のおちんちんだから挿れられたい、自分の遺伝子をもった精子だから膣内射精されたいっていうのとは、ちょっと違う？！？！・・・どうなんだろう？？
　少し混乱したまま、そんなことを考えながら、１階のリビングで怜央が淹れてくれたミルクティーでケーキを一緒に食べることにした。
「全部違う種類になるよう、４種類買ってきたんだけど、どれが良い？・・・好きなやつを選んで二つずつ食べても良いし、今は一つずつにしておいて、あとでまた食べても良いし・・・。」
「どれも美味しそうで目移りしちゃうわね・・・。あ、そうだ、全部半分こにしない？」
「そうしようか。じゃ、ナイフを出して・・・。」
「そんな他人行儀なことしないでよ・・・。怜央が食べた後にあたしが残りを貰っても良いし、なんだったら怜央に食べさせてあげようかしら？」
「そっ、そうっ？・・・じゃ、全部ひとつの大皿に・・・」
「それも面倒だし、洗い物が増えるんじゃなくって？・・・そのまま箱から直接食べましょうよ。フォークはひとつで良いでしょ。」
　そういうと、あたしはフォークを手にとり、まず一つ目のケーキから一口分を取ると、自分の口に入れた。
「あ、美味しい・・・。これ、食べたことないけど、どこにあるお店なの？」
「これ、裏門からここまで歩いてきた路を、もう少し反対側に歩くとあるお店で、昔からあるんだけど目立たない場所なんで、あまり

知られていないみたいだね。」
「はい、あーん。」
あたしが自分で食べたそのフォークで、同じケーキを一口分取って怜央の顔の前に差し出した。怜央は一瞬、びっくりしたような顔をしたけど、すぐにニコッとして、あたしが差し出したフォークをパクっと口に入れた・・・。あれっ。今、怜央はニコッとする前に、ちょっと驚いたような表情をしたけど、あれは何だったのかしら・・・？

結局、ケーキは四つとも二人で食べちゃって（一口ずつ交互に、あたしが食べて次は怜央で、とやっていたら、あっと言う間に全部なくなっちゃった）、全部食べ終わる頃には怜央はもう我慢できなくなってきちゃったみたい。だって、あそこは大きくテントを張っちゃって、赤い顔をしたまま鼻息も荒く、必死になって自分を抑えているのが丸わかりだわ。もうあたしにはわからない感覚になりつつあるんだけど、そう言えば確かに男の子は、こういうとき、我慢できなくなっちゃうんだったわよね。あまりおあずけでは可哀相だし、あたしも早く怜央と肌を重ねたくなっちゃったわ・・・。さっき怜央はプライドがどうとか言っていたから、きっとあたしから誘わないと、ベッドに移れないのかしら・・・。あ、ここはベッドじゃなくてお布団だったわね・・・。
「ねぇ、そろそろお布団に行きましょう？・・・もうそんなになっちゃって、苦しそうじゃない？」
そう言いながら、怜央のテントをそっと触ったら、石のようにガチガチに上向いたおちんちんが手に触れたわ。怜央は一瞬、息を呑むように「っつっ。」と声を漏らすと言った。
「うっ、うんっ、わかった。・・・じゃ、また二階に上がろうか。」
さっきは見なかったんだけど、四間続きの和室の奥の部屋を開けると、そこにはもう布団がしいてあった。さすが、手慣れているわね。でも、何となく怜央の態度がぎこちないのよね。何というのか

しら、まるでエッチを恐れているというか、何かおどおどしていて、まるで童貞の男の子みたい・・・。これが、あの自信タップリで、前回あたしを抱いたときは全部自分に任せといてと述べていた怜央なのかしら？・・・いったいどうしちゃったんだろう？？

第60話　怜央の秘密の隠れ家（後書き）

元旦のエピソードを2話～3話程度追加する予定でしたが、書いてみると少し長くなったので、あと1話だけ元旦が続きます。その後は、五十嵐さんの次に女性化して落ち込んでいる山野さんの話となります。

第61話　怜央のＥＤ？（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

仕事が忙しくなってくると、どうしても執筆時間が取れずに更新が遅れがちになってしまいます。

これがいっそ、コロナの影響で、春のときのように全社一斉テレワークとなってくれれば、通勤時間分を執筆に充てられるので、多少は捗るのでしょうが、それを期待するのも本末転倒ですし、なかなか難しいところです。

それでも何とか、週1回は更新できるよう頑張っています。

第６１話　怜央のＥＤ？

布団の脇に座って、順々に服を脱いだあたしは、皺（しわ）にならないように、それらを綺麗に畳んで枕元に置いた。こういう動作、男子のときには、かなりいい加減にしていたんだけど、女子になっていろいろな作法やしぐさを練習するうちに、自然と身についてきたのよね。脱ぎ散らかしは女の子として、はしたないって言われたのも勿論あるけど、女の子になると、こういうちょっとしたところで、育ちがわかっちゃうっていう感覚が自然と身についてきた気がするの。これって魅力的な女性になる第一歩だって、芳恵さんに繰り返し言われたんだけど、あたしにもようやくわかるようになってきたわ。それに実務的な問題としても、自分でアイロンをかけなければならないんで、少しでも手間が楽になるっていうのも、実は大きかったりするんだ・・・。

「寒くない？・・・暖房、もう少し強くしようか？」

怜央もテキパキと服を脱ぎながら話しかけてきた。

「ありがとう。でも大丈夫。お布団に入るんだし、そもそも運動すれば暑くなるわ。」

後片付けもそこそこに、ざっとマウスウォッシュしたあたしたちは、二階の一番奥にある和室で、気もそぞろに裸になると、一緒に布団に入った。前回は、初めてのことで、しかも病院で先生のアドバイスに従って、あたしがまず怜央を射精させ、次に怜央があたしを気絶する直前までイカせてから、やおら肌を重ねたんだけど、今回は二人とも通常の状態（といっても、二人とも興奮しているのはよくわかる。怜央のあそこはビンビンのガチガチ状態で腹にくっつかんばかりだし、あたしもあそこがもうぬるぬるで、垂れてきてしまいそうな状態にある。）のまま、布団の中でしっかりと抱き合って、どちらからともなく、口を重ねた。

「「ぅむ、んむ、ぁん、むぐ。」」

お互い身体をぴったりと密着させ、最初、背中に回していた手は相手の全身をさわさわと撫でるように滑らせていく。あたしの胸は怜央の胸に強く押しつけられて、ムニュッとつぶれているけど、それを怜央の手がやさしく触り、それだけであたしはもう軽くイキだしてビクンッ、ビクンッと痙攣(けいれん)を始める。前回は怜央のテクニックでイカされたと思ったんだけど、これはテクニックなんて何もない、いや、テクニックとは別の次元で、怜央に触られているっていうだけで、あたしの身体はもう耐えられない位の快感に翻弄(ほんろう)されている。これが愛するということなのかしら・・・。怜央の手が、指が、軽く触れるだけで、まるで電気を受けたようにビリビリ、ジンジンする感覚・・・。やっぱりあたしの相手は怜央しかいない。寛とはまったく違う、ただ触れられただけで、もう身体が全力で反応してしまう。間違いない。怜央が運命の男性なんだわ。あたしはそのうち、絶対に怜央の子供を産む。怜央もあたしのことを好きだって言ってくれているから、何としても怜央にお嫁さんにして貰うわ・・・。

あ、拙(まず)い、もう身体がっ・・・。あっ、だめっ、止まらなくなるっ・・・。ぁあっ。

「ぁあっ、あんっ、あひっ、れっ、怜央っ、おっ、お願い、もうっ、もう早くっ、早く来てっ、あたしっ、もうっ、あんっ、あっ、ひっ、ひぃーっ、だめっ、だめーっ、あぁーっ。」

―――――――――――――――
―――――――――――――

優稀を僕の秘密の隠れ家に招待した。ここは僕が女の子時代に、何人もの女の子を連れ込んで、レズセックスをしていた、いわばホームグラウンドだ。それに優稀とはもう交換初夜で4回もやってるから、何も問題ないはずだ・・・。

「はい、あーん♡」
リビングに二人並んで座り、買ってきたケーキを開けると、優稀が自分でまずケーキを一口食べて、同じフォークで一口ケーキを取って僕の口の前に差し出した。もう優稀とは交換初夜も済ませて、他人ではないんだから、いまさら間接キスなどと言うような話じゃないけど、虚を衝かれてちょっと驚いた。こういうことをして貰うと、何だか付き合いだしたばかりの恋人同士のような気がして、やっぱり嬉しい。いや、実際のところ、交換初夜はお互いの性器がきちんと機能するかどうか、性転換が精神も含めて、完全に成功して、男性化・女性化が完了したかどうかを確認する医療行為の一部なんだと思う。だから、二人の間に恋人同士のような恋愛感情は、必ずしも存在しないことが普通であり、僕たちみたいに相思相愛になれるケースは稀なんじゃないかな。僕も男子としてはじめてできた恋人との、実質的な最初のデートだから、そういった期待感もあるのかもしれない・・・。（クリスマスのときに声をかけた女の子二人は、何故か上手く行かなかったし・・・。）
優稀は買ってきた４つものケーキを、自分と僕とに次々交互に食べさせて、あっと言う間にケーキは全部、二人の腹の中に収まっちゃった。僕も甘いものが好きなほうだけど、優稀の甘党は筋金入りみたいだ。

「ねぇ、そろそろお布団に行きましょう？・・・もうそんなになっちゃって、苦しそうじゃない？」
「っつっ！！」
ケーキを食べ終えて、後片付けをしながら、さてどうやって布団に誘おうかと悩んでいたら、優稀がいきなり僕の股間に手を伸ばしてきた。実はさっきから、あそこはもう石のようにガチガチに勃起して、上を向いたペニスが大きくテントを張っていたんだけど、こんなふうになるのは、あの交換初夜以来だ。いや、そういえばさっき、神社でもビンビンに勃起していたっけ。いずれも優稀と一緒の

ときだ。それ以外では、自分でオナニーをしたときも、ここまで強く勃起してはいないし、クリスマスに二人の女の子を誘ったときは、どちらもペニスがさっぱり反応してくれなかった。フニャッとして、うなだれたままで、まったく役に立たなかったんだ。それが優稀と一緒に居るときは、こんなにも強く勃起する。勿論、優稀は魅力的な女性で、はっきり言って僕は優稀に惚れちゃったのは間違いないけど、男性の生理として、恋愛感情と性欲は別物だと理解していた。それに、クリスマスに誘った二人については、確かに恋愛感情が特に強くあったということはないにしても、二人とも可愛くて、是非とも食べちゃおうと考えて誘ったんだし、ペニスが役立たなかったというのは、理由が思いつかないんだ・・・。

「うっ、うんっ、わかった。・・・じゃ、また二階に上がろうか。」

頭の片隅で、そんなことを考えながらも、はっきりした理由がわかるわけじゃないし、今、優稀を前にして、これだけ元気になっているんだから、まずは自分の身体というか性欲に素直になろう、そう考えて、二人で二階の寝室に上がった。

マウスウォッシュをしてから、布団の横に行くと、優稀はもうテキパキと服を全部脱いで畳んでいた。

「寒くない？・・・暖房、もう少し強くしようか？」

「ありがとう。でも大丈夫。お布団に入るんだし、そもそも運動すれば暑くなるわ。」

僕も急いで裸になると、二人して布団に入り、しっかり抱き合ってキスをした。

「「ぅむ、んむ、ぁん、むぐ。」」

身体をぴったりと密着させ、必死になってお互いの口の中を舐め回す。優稀の豊かな胸が僕の胸に押しつけられて、おっぱいがムニュッとした感触を伝えてくる。優稀の乳首も、ガチガチに勃起しているのがわかる。キスをしながら胸を軽く触ると、優稀の身体がビクンッ、ビクンッと痙攣（けいれん）をはじめて、どうやら優稀はイキだしたみ

たいだ。
　他方、僕のペニスも腹に付かんばかりに固く勃起し、二人の身体に挟まれて窮屈な状況になっている。クリスマスに誘った二人とは、凄い違いだ。やはり優稀が相手だと、無意識のうちにペニスに力が入るんだろうか・・・？？
　優稀との最初のときは、お互い新しい身体になって最初だったから、先生のアドバイスに従い、それぞれが順番に攻めと受けになって、一方通行で相手の身体を刺激した。一方、クリスマスのときの二人とは、いままでレズセックスしていたときの経験で、相手と相互に身体を刺激しながら、自然と肌を重ねるよう努力した。その違いが、何か精神的な負担になったのかとも思ったんだけど、こうして優稀と二人で、どちらともなく肌を重ねると、そういう手順や方法の問題でもなければ、精神的な余裕とも関係ないみたいだ・・・。むしろ、相手に対する信頼感、肌を重ねることによる安心感、そういったもののような気がする。
　この相手が、自分のパートナーであり、自分の家族なんだっていうような感覚、別れていた自分の分身と、ようやくひとつになれるという期待感、そういう意識が、実は必要なんじゃないだろうか。そう言えば、昔何処かで読んだ記憶があるんだけど、男性のペニスは、実は物凄くデリケートで、ちょっとした気分とか、そのときの体調、または相手に対する感情とかで、ギンギンになっちゃうこともあれば、直ぐにダメになって、ふにゃっとしちゃうこともあるらしい。一時的なこともあるけど、相手との関係とか、シチュエーションだとか、一度そうなっちゃうと、心の中にある自分では気がつかない原因が取り除かれないと、決して復活しないこともあるんだという。いわゆるＥＤと言われる症状の９割は精神的なものらしいけど、だとすると、やはり僕は優稀に対しては大丈夫で、他の適当に引っ掛けた女の子に対しては、役立たずになってしまったということなんだろうか。そのうち直るのかなぁ・・・。

「ぁあっ、あんっ、あひっ、れっ、怜央っ、おっ、お願い、もうっ、もう早くっ、早く来てっ、あたしっ、もうっ、あんっ、あっ、ひっ、ひぃーっ、だめっ、だめーっ、あぁーっ。」

特にどこを刺激した訳でもない。それどころか、少し長めのキスをして、胸を軽く触っただけで、あそこは全然触りもしていない。まあ、優稀は腰をくねくね動かして、僕の固く上向いたペニスにあそこを必死になって擦り付けようと努力しているけど、ときどきペニスの裏側がスリットからクリトリスにちょっとだけ触る程度で、あまり成功しているとは言い難い。にもかかわらず、優稀はもう連続イキ状態になりつつある。

僕も昂(たかぶ)ってきたし、せっかくペニスがこんなにビンビンに勃起しているんだから、とにかく挿入しよう。そう考えて、優稀にゆっくりと覆い被さると、足を大きく広げさせて、腹にくっつく程ガチガチのギンギンになっているペニスをスリットにあてがうと、一気に体重をかけた。

「あぁーっ、いひーっ、きーっ、ぃいーっ、ぃっ、イクーっ。イクっ、イクっ、イクーーっ。」

優稀が力一杯叫びながら、僕に必死にしがみついて、盛大に痙攣(けいれん)した。僕も、もう限界に近かったけど、必死になって耐えつつ、ペニスを1ミリでも深く挿入して、優稀の子宮に届くように股間を打ちつけた。

「ぁっ、らめっ、らめーっ、そっ、それっ、らめーなのーっ、たっ、助けっ、助けてっ、ひっ、ひーっ、ぃひーっ、止まらないっ、らめーっ、しっ、死ぬっ、死んじゃうっ、あぁーーっ。」

僕も、もう限界だ。やっぱり優稀の膣内(なか)は死ぬほど気持ち良い。我慢なんてできる訳がない。それに優稀と交換初夜をして以来、二人も失敗しちゃったんで、もうあれから2週間近くも射精していないんだ。精液が尿道を駆け上がってくる感覚がわかる。・・・あっ、もう射精(で)ちゃう・・・。

挿入して、まだ数回腰を振っただけだから、まるで童貞の男の子

みたいだけど、そもそも僕は優稀と交換初夜をやっただけで、男子としてはまだ童貞と殆ど変わりがない。本当の初心者だ。レズセックスで女の子を相手にしていたし、自分自身も女子だったんで、女性の感じるところ、性感帯の刺激方法なんかは、かなり自信があるけど、自分のペニスを使って女性を楽しませるテクニックなんて、実はまったく持っていない。いや、逆に自分のペニスが女性の膣内(なか)に入ると、もうその刺激だけで射精(で)ちゃうのが止められない。

「ぼっ、僕もっ、僕もイクっ！！」

亀頭の先端をピッタリと子宮口にくっつけて、精液が子宮の中にしっかり入るように股間を優稀の股間に密着させて、思い切り射精(だ)した。その瞬間、ビクビクッ、ビクンッ、ビクンッと、ひときわ大きく痙攣(けいれん)した優稀は、糸が切れた人形のように、くてっとなって気絶した。僕もあやうく意識が持っていかれるところだったけど、何とか耐え切って、ペニスを挿(い)れたまま優稀が気がつくのを待った。

でも、これで機能的には問題ないことが証明されたんだ。ということは、ホッとした反面、精神的な理由でのEDが確定したということでもある・・・。いったい、どんな精神的な理由があったんだろう・・・。何か自分では気付かないプレッシャーでも感じていたのかな・・・。とにかく、他の子と、もっと何人か試してみなくちゃ。それでどうしてもダメだった場合は、あのカウンセラーの先生に相談しよう。今の僕は、優稀には満足しているけど、でも折角男子になった以上、もう少しいろいろな経験はしてみたいから・・・。それとも、こういうことを考えること自体が、優稀に対する背信行為だと感じて、無意識の規制がかかっちゃうのかなぁ・・・。レズセックスのときは、こんなこと考えたこともなかったし、そもそも単なる遊びと割り切っていたけど、一応恋人ができると、精神構造として、操(みさお)を立てるという感覚が生じるんだろうか・・・。わからない・・・。

そうだ、そう言えば忘れていたけど、優稀はもう生理が来たんだろうか・・・。病院のときは、先生が確認して設定した日付だった

から心配いらないけど、もし優稀にもう生理が来ているとすると、膣内射精しちゃったから、妊娠してもおかしくないんだった・・・。
まあ、万一、妊娠しちゃったら、そのときは急いで結婚すれば良いか・・・。

第61話　怜央のED？（後書き）

当初、自信タップリで、手術する前から下手な男子よりもずっと凛々しい男の子だったはずの怜央ですが、本当の男子になっての戸惑いからなのか、それともEDになってしまい自信をなくしてしまったのか、とにかく、ごく普通の（年齢相応の）男の子になりつつあります。逆に短期間でも女の子としての経験を積んで自信をつけてきた優稀は、こんなに積極的だったんだろうかと思うようになってきました。

二人の関係が、普通の（処女と童貞を、ようやく卒業したばかりの）初々しい恋人関係になりつつある変化が適切に描写できていれば良いのですが、こういった人間関係の変化は、なかなか難しく、上手く伝わらないかもしれません。まだまだ筆力の不足を痛感していきます。

なお、これで長かった元旦のエピソードは終了で、次からは話が先に進む予定です。

第62話　他の女性化男子

　年末から考えていたんだけど、お正月三が日が明けたんで、今日は五十嵐さんと山野さんの様子を見に二人の自宅を尋ねることにしたの。勝美にも声をかけて、付き合って貰うことにした。こういうのって、一対一で話すのも良いけど、複数で話すほうが説得力があるし、勝美はあたし以上に女の子になって喜んでいるクチだから、きっと意味があるわよね・・・。

　昨年、秋の判定試験の結果、女の子になったのは、学年全体で7名だったんだって。クラスが全部で6クラスだけど、該当者がいないクラスもあって、逆に二人該当したクラスが2クラスあったってことよね。そのうち、昨年末の終業式に登校してきたのが5名で、あたしもよく知らない子も二人いたけど、まあ登校できたんなら、何とかなるでしょ。

　それよりも問題なのは、登校できなかった二人、A組の五十嵐紀実（イガラシノリミ）さんとE組の山野淳（ヤマノアツシ）さんよね。あ、確か二人とも女の子になって、名前を変えたんだっけ。たしか五十嵐さんは同じ読みで五十嵐紀美（イガラシノリミ）と漢字を一字だけ変えたって聞いたし、山野さんは同じ漢字で読みを山野淳（ヤマノジュン）に変えたって聞いたわ。二人ともあたしは結構仲が良くって、まだお互い男子だったときには、それぞれの自宅におじゃまして一緒に遊んだこともあるんだ。だから二人が登校しなかったって聞いて、ずっと心配してたんだけど、少し時間ができたんで励ましてあげようと考えていたんだ。本当は勝美は一分でも長く千博と過ごしていたかった筈だから、ちょっと申し訳ないことをしちゃったのかもしれないって心配だったけど、趣旨を話したら、千博からも是非、あたしと一緒に行きなさいって奨められたみたい。この二人、特に五十嵐さんとは勝美だけじゃなくって千博も仲が良かったみた

いだし・・・。
　で、まずは勝美も良く知っている五十嵐さんの自宅に行くことにした。五十嵐さんは学校のすぐ近くに住んでいて、それで学校の校門のところで待ち合わせたら、何故か千博も付いてきたわ。聞いたら五十嵐さんは男子バスケ部のエースで、女子バスケ部のキャプテンでエースだった千博とは、わりと接点があったみたいなの。まぁ、これは多分に、勝美に付いてきたいという千博の、言い訳というか建前だけかもしれないけどね・・・。

「「「あけましておめでとうございます。五十嵐さんの様子は如何ですか？」」」
「まあ！杉田さんは兄妹、あ、いや、姉弟二人揃って来てくださったのね？・・・それに遠藤さんも。本当にお正月から、申し訳ありません。あの子ったら、テスト結果を貰ってから手術までは、何とか気丈にしていたんだけど、いざ手術を受けて完全に女性となったら急に塞ぎ込んじゃって、元気がなくなっちゃったの。手術までは、これも自分の実力の結果だとか言って、運命を受け入れるような素振りだったのに、完全な女性になったら心が折れちゃったのかしらね・・・。特に交換初夜から帰ってくると、眼を泣きはらした顔で部屋に籠っちゃって、いくら呼びかけても出てこないし、食事もあまり食べていないの。もう1週間以上もこんな状態なんで、何とか様子を見てやって貰えないかしら・・・。」
「わかりました。では五十嵐さんの部屋にお邪魔します。」
　そう言って、3人でぞろぞろと二階の部屋に上がって行った。
「五十嵐さん、・・・五十嵐さん、杉田です。入って良いかしら。千博と勝美、あ、遠藤さんも一緒です。」
　返事がない。けど、シーンとしているだけで、拒否されるような言葉もないんで、三人で顔を見合わせて頷（うなず）くと、入ることにした。
「おじゃましますよ。」
　部屋はカーテンも開けず、薄暗いままで、いろいろなものが床に

乱雑に散らかっていた。ざっと見た限りでは、女の子の部屋というよりは、男の子の部屋のような雰囲気が色濃く残っているんだけど、でも女の子の匂いが充満していて、男の子の匂いは、もう残り香程度だった。あ、勿論、これはあたしの印象なんだけど、千博や勝美はどう思ったのかしら・・・。

　肝心の五十嵐さんは、ベッドの上で膝を抱えて、体育座りをしていた。布団を引っ被り俯（うつむ）いていて、顔は見えないんだけど、起きてはいるようだわ・・・。

「カーテンを開けるね。」

　千博がそう声をかけて、カーテンを開き、また部屋の空気がよどんでいたので窓も少し開けた。パジャマがわりのトレーナーを着ているんで、あまりよくわからないけど、胸はごく平均的な女の子位かしら・・・。この状況で、まず頭に浮かんだのがこれって、あたしもまだ男の子の意識が残っているのかしら・・・。それとも、女の子でも、初対面の相手（女子になった五十嵐さんとは初めて会うんだから、そう言っても良いわよね？）だと、胸のサイズが気になるものなのかしら・・・。いや、でも男子が、初対面の相手の、おちんちんのサイズを気にする筈もないから、やっぱりあたしはまだ心のどこかに男子のときの感覚が残っちゃっているのかしら。ちょっと嫌だわ・・・。

「おっ、俺の人生はっ。・・・もっ、もうっ、お終いなんだっっ！！」

　五十嵐さんが、甲高い裏声のような女子の声色で、それでいて男子の口調で急に叫んだんで、あたしたち皆、ちょっとビックリしちゃったわ。

「そんなことないわよ。男の子でも女の子でも、人それぞれ生き方はいろいろだわ。急に女の子の人生を考えるのは難しいかもしれないけど、世の中の半分は女性なんだし、そんなに悲観するような話かしら？」

「ちっ、違うっ。・・・俺はっ、・・・俺は頭が悪いからっ、この

身体を生かしてバスケで身を立てようと思ってたんだ。・・・四級でもスポーツ特待枠なら高校に進学できるし、そこで活躍すればプロとは言わないにしても、実業団チームなら、どこかに入れるかと考えたんだ。・・・それがっ、・・・その夢がっ・・・。うっ・・・・ぅうっっ・・・。」
「なんだ、そんな話なら簡単じゃない。女子だって有名な実業団チームは一杯あるわ。あなたのその体格と、これまでの経験を生かせば、女子バスケで有名な選手になれる可能性は、男子のときより高いんじゃないかしら？」
「そうよ。それにあなたは性転換対象になったことの特典で、第四階級だったのが第三階級になっているわ。だから、スポーツ特待枠を使わずとも、高校には進学できるじゃない。高校に入って、今度は女子バスケ部でどれだけ頑張れるか、そこから先はあなたの努力次第でしょうけどね・・・。」
「女子バスケ・・・？？」
「そうだよ。五十嵐さんは男子バスケであれだけ活躍してたでしょ。しかもそのガタイだから、女子バスケに入ったら、きっと無敵だと思うよ。・・・実は僕が男子になっちゃって、高校の女子バスケ部としては、うちの中学の女子バスケから来年度に高校に入る生徒が大幅な戦力ダウンになっちゃうって、ぼやかれていたんだ。僕の実績なんて五十嵐さんに比べれば、全然大したことじゃないけどさ、それすら期待して心配しなけりゃいけない位、この町の高校の女子バスケは選手不足で困っていたんだ。だから、五十嵐さんが高校で女子バスケに入るっていうなら、大歓迎されるのは間違いないよ。いや、上手くすると1年生からトッププレイヤーとして、レギュラーで活躍することになるんじゃないかな。」
「よかったら、僕から女子バスケ部の先輩で、今、高校の女子バスケ部のキャプテンをやっている人に連絡してみるよ。きっと、物凄く期待されると思うけどね。」
「おっ、俺がっ、・・・女子バスケの選手・・・？！？！」

「そうね、おちんちんを取られちゃったのは、ショックかもしれないけど、それは夢をとられちゃったことにはならないわよ。むしろ、夢の実現が近付いた可能性もあるんじゃないかしら。それとも五十嵐さんは、男子バスケに何か特別な思い入れがあったのかしら？」
「そっ、それはっ、・・・思い入れとかじゃなくって・・・俺は男だから・・・男として頑張ってきたんだし・・・。いつも自分の男にかけて・・・、そのっ、チンポとキンタマがあればこそ、苦しい練習にも頑張れるって、そう思って・・・。」
「うん、そう考える男子って、多いみたいね・・・。あたしも、つい2ヶ月前までは男子だったたから、言いたいことはわかっているつもりよ。実際、赤いカードを渡された夜は、あたしもベッドで号泣しちゃったし・・・。でも、精神的な支柱というのかしら、心の拠り所というのはよくわかるけど、男子よりも頑張って、辛い練習に耐えている女子なんて、幾らでもいるんじゃないの。別におちんちんやたまたまがあるかないかで、頑張れる限界が違うなんて、そんな話はないと思うわよ。」
「それはっ、・・・それはそうだけど・・・、でもっ、俺の自慢のチンポは、とうとう一度も本来の目的で使えなかったんだっ・・・。こんなっ・・・、こんなことがっ・・・。」
　あ、これはマズいわね。もう五十嵐さんの目は涙が溢れそう。と、そこで勝美が割り込んでくれたわ。
「あなた、交換初夜は無事済んだんでしょ？・・・普通はそこで、女の子の快感とか、女の子の幸せを感じることができて、自分が女の子になったっていう感覚を刻み込まれる筈なんだけど、そんな感じはなかったの？・・・どう感じたの？」
「あ、その前に、去勢されてたまたまを抜かれるところを見せつけられると、そこで諦める男の子も多いみたいね。それとも五十嵐さんはかなりモテていたから、男の子としての忘れられないセックス体験とかが沢山あるのかしら？・・・でも今、一度も使われなかったって言ってたわよね？」

「俺、ずっと硬派で通してきたんで、女の子と付き合ったこともなければ、手をつないだこともない・・・。」
「タマを抜かれたときは、声こそ上げなかったけど、涙をボロボロこぼしていて、何も見えなかったんだ。」
「交換初夜は、手術の結果を確かめるための医療行為だと思っていたから、突っ込まれた瞬間は痛かったけど、それは注射とか、歯医者とかで痛いのと一緒で、特別な感情はなかったんだ・・・。」
「しっ、しかもっ、仲嶺のやつ、・・・こんなに大きいのは僕には不釣り合いだから、やっぱりもう少し小さくしてから移植して貰えばよかったかな、なんて言うんだぜ・・・。俺・・・その言葉を聞いて、もう悲しくて悔しくて切なくて、仲嶺の股間を握りしめて号泣しちゃったんだ・・・。」
　そうだったんだ。確か五十嵐さんは、この大きな身体に相応しく、おちんちんのサイズも立派で、巨根王者の寛や慶太ほどではないとしても、それに次ぐ大きさだって言われていたわよね。寛や慶太と違って五十嵐さんは、よく西山中三大巨根の一人だということを自慢していたわ。その自慢のおちんちんを切り取られちゃって、それを貶めるようなこと言われたら、それは悲しくなっちゃうわよねぇ・・・。
「十五年間、俺の相棒だった自慢のチンポ・・・。小４のときに毛が生えてきて、その後中学に上がる直前に、ふざけて皮を剥いていたら、そのまま戻らなくなっちゃって、中１でもう完全なズル剥けになったんだ。この立派なチンポが、俺の心の中心だったんだ・・・。」
「わかるわ。その気持ち。・・・でも、性器を交換するとき、相手の身体に合わせたサイズというのは、考慮すべきじゃないかしら。あたしもこの胸、怜央から貰ったんだけど、あまりにも大きすぎて持て余しているのよ。そういう意味では、あたしも少し小さくして欲しかったんだけど、あなたは可愛い胸で良いわね。」
「俺の胸は逆に、小さすぎてツルペタになっちゃうからって言われ

て、これでも少し盛ってあるらしい・・・。仲嶺は小さかったし、体格的にも小柄だったからな・・・。」
ようやく、そんな話を普通にできるようになってきて、どうやら五十嵐さんの心も随分、落ち着いてきたみたいなの。最初に部屋に入ったときには、もう自殺するんじゃないかと心配になったほどで、まるで幽霊のような雰囲気だったんだけど、これなら始業式には登校できるわよね。最後に確認してお暇しようと思って、ふと思いついたことを聞いてみた。
「ちょっとつかぬことを聞くんだけどさ、五十嵐さんと仲嶺君が交換初夜をしたのは病院？・・・それで日付は？・・・もしかして終業式の前々日とかじゃない？」
「そうだけど、どうして？」
「それで、そのとき二人とも、制服を着ていなかったかしら？」
「そうだった。でも、どこかで会ったっけ？」
「実は、あたしと怜央も同じ日に病院で交換初夜をやったのよ。それで、病院から出てきて帰る途中、あれは6時ころだったかしらね。病院から駅まで向かう一本道を歩いていたら、あたしたちのかなり前を歩く制服姿のカップルが居てね、遠くてよくわからなかったんだけど、男子のほうがかなり小柄で、逆に女子のほうは随分体格が良いわねって思ったの。」
「で、それはまあ良いんだけどさ、そのカップルのうち、大柄の女性のほうが、物凄くぎこちない歩き方で、遠目にもわかるがに股なのよ。なんていうのかしら、下品な言い方で申し訳ないんだけど、まさに今、やられちゃいました、あそこが痛くて歩き方が変ですって、宣言しているような雰囲気なの。本当に今、突っ込まれて喪失したところですって、そうとしか見えなかったのよね。きっとあたし自身がそうだったから、気がついたんだと思うわ。」
「なっ？・・・そっ！・・・それっ？！？！」
今、こうして話をしていて、わかっちゃったんだけど、どうやらあのときあたし達が見かけたカップルは、五十嵐さんと仲嶺君だっ

たみたいね。どうでも良い話なんだけどさ・・・。
「まあ、それはそれとして、それじゃ千博には先輩を通じて、高校の女子バスケ部がどんな様子か、また五十嵐さんが入部したいって考えていることを伝えて貰うことにしましょ。」
「それじゃ、あたし達はこれで失礼するわ。五十嵐さん、気恥ずかしいかもしれないけど、来週の始業式からは登校してね？」

第63話　山野淳と和田一彦

　五十嵐さんといろいろ話をして、どうやら五十嵐さんは落ち付いたみたいだから、次は山野さんの家に行くことにした。千博と勝美は、こっちも付いてきてくれるって言っていたから、また三人揃って山野さんの家に向かった。山野さんはあたしたちの自宅の近くなんで、三人とも帰る道すがらというのもあってのことだと思うわ。

　山野淳（ヤマノアツシ）君改め山野淳（ヤマノジュン）さんは、あたしと境遇が似ていて、背が小さく、身体点・運動点は絶望的、それに筆記の成績も、あたしと同じ位で、やっと三級に届くかどうかという程度なのよね。あたしは小3と小4のとき同じクラスで、結構仲が良かったんで、その後は同じクラスになったことがないけど、今でもよく話をしたり、ときどき遊んだりしていたんだ。性別交換相手の和田一美（ワダカズミ）さん改め和田一彦（ワダカズヒコ）君は、山野さんとは幼馴染みだったかしら。・・・いや、幼馴染みではないのかもしれないけど、小1の頃から、わりと仲が良くて、よく遊んでいたわよね。でも恋人だとか、付き合っているという話は聞いたことがないわ。普通の古くからの友人という感じだったわ。といっても、あたしたちの町は小さくて、学区もひとつしかないから、殆どの子は小学校時代から知っていると言えば知っているのよね。

　山野さんは身体が小さくて勉強もあまりできない。筆記だけでギリギリ三級になれるかどうかかっていう立ち位置もあたしと似ているんで、何となく人ごととは思えなくて、もし、ふさぎ込んじゃっているのなら、ほっとけない気がするの・・・。確か彼女も一人っ子で、ご両親は共稼ぎだったから、周囲に話し相手も居ないんじゃないかしら・・・。

♪ピンポーン♪
「はい。」
「あ、D組の杉田優稀です。こんにちは。ちょっとお話したいことがあって、突然来ました。」
　少し時間があってから、玄関が開いて、山野さんが顔を出した。
彼女も、とても可愛い女の子になっていて、ちょっと幼い感じはあったけど、でもすごく雰囲気と似合っていた。
「あ、杉田優稀・・・さん、それに、杉田千博・・・君と遠藤勝美・・・さん？」
「急に押しかけてしまってごめんなさい。年末の終業式の日に、学校に登校していなかったんで、元気にしているかなって、ちょっと気になって、皆でやってきちゃったの。今、時間あるかしら？」
「・・・ええ、良いわよ。とにかく上がって。」
「おじゃまします。」
「杉田・・・優稀さんは、何度か来たことあるわよね・・・。狭くてちらかってるけど、あたしの部屋で良いかしら。杉田・・・千博君と遠藤・・・さんは、うちに来るの初めてでしょ。」
「あ、すみません。勿論、山野さんの部屋にして下さい。それと、特にお構いなく。僕たちも、手土産ひとつ持っては来ていなくて、ご迷惑おかけします。」
「別に気にしないで。あたしは一人っ子だし、うちの両親は共稼ぎだから、昼間はあたし一人しか家には居ないの。だから気兼ねせず楽にしてちょうだい。」
　そんな話をしながら、山野さんの部屋に入った。五十嵐さんと違って、思ったよりも元気かな、という気がした一方で、何となく違和感というか、あたしが知っている山野さん（昔の山野君）の雰囲気と、微妙に違う気がして、何だか無理してるんじゃないかしらって、ちょっと気になったの。
　山野さんの部屋は、昔来たときの記憶よりも、随分片付いていて、昔は典型的な男の子の汚くちらかった部屋という雰囲気だったんだ

けど、今はわりと小ぎれいな、女の子の部屋と言っても不思議ではない雰囲気に変わっていた。まあ、いわゆる典型的な女の子の部屋、という程ではないけど、この部屋に比べれば、あたしの部屋のほうが殺風景な気もするし、これは個性の範囲よね。

　お構いなく、と言ったんだけど、山野さんが紙コップとペットボトルのジュースを持ってきてくれたんで、皆でそれを飲みながら、お正月はどうしている、といった取り止めもない話を少ししてみたら、話し方や言葉遣い、それに何より考え方というか意識の視点が、もうすっかり女の子になっていて、今の山野さんと初対面の人が、なぜ、終業式の日に登校してこなかったのか、単にたまたま体調でも崩していたのかと、皆が思い出していたんだけど（実際、「風邪でもひいたの？」と、さりげなく聞いてみたところ、「ええ、ちょっと体調が悪くて・・・。」と軽く答えられたので、それ以上、追求できない雰囲気だった）、たまたま勝美と千博がもう入籍した、という話題になり、それを羨(うらや)ましそうな眼で見ながら、「二人はお付き合いしていて、二人で望んで性別交換をして結婚したのよね、いいわねぇ。」としみじみ言ったんで、あたしもついつられて、自分のことを口にしたんだ。

「あ、あたしも、それまでは、まったく関係のない相手だった怜央、あ、榊君と、交換初夜を経て、お付き合いすることになれたのよ。そういうケースって、あんまりないって聞いていたけど、当人同士が少しその気になれば、案外簡単に成立するんじゃないかしら。だってあたし、榊君にさんざん愛されて、女の子としての幸せ、女の子としての快感を目覚めさせられちゃったの。今では女の子になって本当に良かったって、そう思っているのよ。」

　そう言った途端、山野さんの雰囲気がさーっと変化して、それまで何となく違和感はあっても、普通に振る舞っているように感じたのが、突然暗い表情で俯(うつむ)いて黙っちゃった。あたし、何か拙(まず)いこと

でも言っちゃったかしら？
「どうしたの・・・。」
「ぅっ、つっ、くっ、ぇっ、ぅうっ、ひぐっ、ぅぐっ。」
えっ？・・・山野さんが泣きだしちゃった？！・・・見ると、肩が小刻みに震えていて、俯（うつむ）いた顔から涙がポタッと膝に零（こぼ）れた？！
「ごめんなさい。あたし、何か、気に障ること言ったかしら・・・？？」
千博と勝美も、訳がわからず、顔を見合わせて首を傾げている。やっぱり山野さんも、何かよほどのことがあったみたいね。でも女性化はこれだけ完成しているのに、何故なのかしら・・・。
こういうときは、ひとしきり泣いて貰って、落ち着くのを待ってからのほうが良い気がしたんで、三人で黙ってその場で見守っていた。
号泣というほどではないにせよ、わりとしっかり泣いていた山野さんだったけど、１０分もすると次第に泣き止んで、ちょっとべそをかいた程度になってきたので、三人で話しかけてみた。
「ねぇ、何か辛いことや悲しいことがあったなら、是非話してみて。あたしたちで力になれるかどうかわからないけど、他人に話すだけでも、随分心が軽くなるものよ。勝美もあたしも、女性化して生活が一変したのに戸惑っているけど、回りの人のおかげで何とかこれまでやってこれているんだから。」
「そうよ、それに自分で希望して女子になったあたしはともかく、望まないのに性転換されちゃった優稀の体験は、きっと山野さんにも参考になる筈よ。」
「失礼な言い方かもしれないけどさ、山野さんはもうすっかり魅力的な女子になったんじゃない。男子になった僕から見ると、本当に可愛くてチャーミングで、優稀や勝美とはまた違った女の子として完成してるよね。第一、身体や容姿だけでなく、心の内面や精神まで、もう完全な女子じゃない。これは女子から男性化した僕には、特によくわかるんだ。女性化はもう完璧だと思うけど、きっと素晴

らしい交換初夜だったんじゃない？・・・それとも交換初夜が何か上手く行かなかったの？・・・僕は二人で希望して性別交換したはずの勝美との交換初夜で、いろいろあって結構大変だったんだ・・・。」

「・・・・・。」

「ね、だから、とにかく話してみてよ。あたしたち三人の経験は、きっと山野さんの悩みを解決するヒントになると思うわよ。」

「・・・あっ、あたしっ、・・・あたしの恋はっ、・・・やっ、・・・やっぱりっ・・・。・・・うっ、・・・ぅうっ、・・・ぅぐっ・・・ぐすっ・・・。」

「やっぱり、どうしたの？」

「やっ、・・・やっぱりっ、・・・やっぱり叶(かな)わなかったの！！・・・ひっ・・・ひぃーんっ・・・。」

また泣きだしちゃったわ・・・。しかも今度は号泣。・・・誰か好きな女の子でも居て、女子になっちゃったんで、その子に振られたのかしら・・・。そうだとすると、その気持ちは、すごく良くわかるけど。・・・あたしも円との最後のお別れを言うんだと覚悟して出かけたときは、本当に悲しかったわ。でも、相手は誰なんだろう？・・・和田君じゃなかったのかしら・・・。」

またしても10分位泣くと、ようやく落ち着いてきた山野さんが、ぽつぽつと、つっかえながら話してくれたのは、次のようなことだった。

山野さんの性別交換相手の和田一美(ワダカズミ)さん改め和田一彦(ワダカズヒコ)君とは、幼馴染みというほどではないけど、小学校に入ったときからずっと同じクラスで、とても仲が良く、一緒に遊んでいたのが、中学校に上がる頃から、はっきり異性として意識し出して、何とかお付き合いできないか、恋人になれないかと密かに考えていたんだって。でも自分は四級が指定席の底辺男子で、かたや和田さんは一級間違いなしの勉強も運動もクラストップなんで、ずっと憧れていたけど高嶺

の花で告白できず、とうとう三年生になってしまったんだっていうの。ただ、少なくとも男子時代のあたしから見ていて、確かにお付き合いしている恋人同士ではないにしても、二人は幼馴染みと言っても良い位の親しい関係で、ごく自然体で話もすれば一緒に帰宅することもある、結構仲の良い関係で、そのうちお付き合いするようになるんじゃないか、さらには男女の関係にもなるんじゃないかって、なんとなくそんな雰囲気もあったのよね。

「あっ、あたしっ、ずっと和田さんのことが好きで、片思いだったんだけど、いつかもっと立派な男になって、そのときこそ告白しようと、いつも考えていたの・・・。」

「でもっ、運命の悪戯（いたずら）なのか、その和田さんと性器を交換することになっちゃってっ、夢が破れちゃったのっ。」

「去勢されたときは、ものすごく怖くて、あたしブルブル震えながら、泣き叫んでいたんだけど、でも切り取ったタマを見せられたときは、あたしが和田さんにあげられる最後のプレゼントなんだって思えたんで、それで無理矢理でも自分を納得させたの。」

「その後、手術をされて、さらに交換初夜であたしのおちんちんとタマタマをつけた和田君に、あたしのものだったおちんちんを挿（い）れられて、膣内射精（なかだし）されたときは、物凄い快感と満足感を感じたの。ただ、そのときは、これでやっと念願叶（かな）って和田君と男女の関係になれたっていう思いで一杯だったから、そこまで考えが回らなかったんだけど、交換初夜はしょせん、1回限りの、一夜の夢でしょ？・・・冷静な見方をすれば、あれは交換した性器がきちんと機能しているか、新しい身体に不具合がないかっていう確認をするための医療行為じゃない。別に相手のことを好きでなくても、愛してなくても、とにかく挿入して膣内射精（なかだし）できれば、それでOKになるじゃない？」

「いや、それは・・・。」

「そういうふうに考えることもできるにはできるけどね・・・。」

「終わってから、冷静になって考えると、これがあたしと和田君と

の、最初で最後のセックスなんだっていう現実がわかっちゃったの。・・・あたしはきっと、中学を卒業したら、直ぐに二回り以上も年上のひひ親父のような性欲魔人と結婚させられるんだわ。・・・そして、大嫌いな相手に毎晩、望まない膣内射精(なかだし)をされて、妊娠させられ、死ぬまで苗床として子供を産む道具とされちゃうの！・・・そう、性奴隷のような一生を送るのよ！！」

「どこをどうやると、そういう妄想が出てくる訳なの？」

「そうだよ。結婚は、自分の好きな相手とするものだし、そもそも君のご両親が、君にそんな酷いことを強制するって考える根拠はなんなの？」

　勝美と千博が、さっそく突っ込んだけど、あたしは山野さんの部屋の本棚とか、机の上にあったものを見て、原因がわかっちゃった・・・。そこには、いわゆるエロ同人誌とか、異世界転生ハーレム系のラノベとかが溢(あふ)れていて、多分、山野さんの頭の中では、女性に性転換させられた主人公が、口にするのも恥ずかしいような調教を受けて雌落ちしてしまい、悲惨な性奴隷とか、魔物の苗床にされてしまう妄想が渦巻いているんじゃないかしら。これって、どう話したら、妄想と現実の区別が付くんだろう。特に、机の上に置いてある、最近読んでいるに違いない本だと思うんだけど、これが見事に全部ＴＳ（トランス・セクシャル：性転換）モノなのよね・・・。あたしもちょっと興味があったりするから、あとで借りて読んでみようかしら・・・。

「ちょっと確認なんだけど、山野さんはこれまでずっと、和田君のことを片思いしていたんだろう。告白はまだしていないにしても、和田君の気持ちを確認したことってあるの？・・・あ、勿論、直接じゃないにしても、あれだけ仲良く遊んでいたりしたら、少なくとも相手からも好意を持たれているって普通は考えないかな。というか、そう思っていたからこそ、山野さんも和田君のこと好きになったんじゃないの？」

「こういったことは、本来は男性から女性に告白するものだけど、

これまで君は男子にもかかわらず、気後れしちゃって出来なかったんだよね。でも、今度は和田君が男子になったんだから、彼から君に告白して貰うようにすれば良いじゃない？」
「そっ、そんなことがっ、・・・そんなことが出来る筈ないじゃない！・・・第一、和田君があたしのこと、好きだなんて、そんなのっ・・・。」
「千博の言うとおりよ。あたし、あなたたちの関係はよく知らないけど、ときどき一緒に歩いているところを遠くから見ただけでも、割と良い雰囲気だったわ。そのうちくっつくんじゃないかなーって、何となくそう考えていたものよ。それに加えて、交換初夜でもう肌を重ねたんでしょ。あたしもそうだったんだけど、怜央、あ、榊君も、セックスをしているうちに、オキシトシンがどんどん出て来て、あたしのことを愛するようになっちゃったみたいよ。あたしは結局、榊君に4回愛して貰ったし、確か千博達も交換初夜で同じくらい愛し合ったらしいけど、あなたは和田君に何回膣内射精（なかだし）して貰ったの？」
「・・・5回・・・。」
「凄い！！・・・それだけ愛して貰えたってことは、絶対、和田君もあたなのこと愛しているに違いないわ。あたしや千博達の回数を上回っているんだから、もっと自信を持ちなさいよ！」
「それにもう一つ。これがもし和田君だけ男性化しちゃったんなら、あなたはもうどうしようもないけど、あたしと千博みたいに、二人して性転換して、しかもお互い性器を交換し合ったんでしょ。だったら、災い転じて福と成す、じゃないけど、二人でこのまま恋人関係を育（はぐく）んで、上手くすれば将来、結婚する未来だって考えられるのよ。だから、やっぱり、ここはまずはお互いの気持ちを確認するべきよ。」
「あ、それで思いだした。和田君は、確か榊さんとはかなり仲が良かったんだ。同じ一級女子で、二人とも前から男性化を望んでいて、そういうところが気が合ったんじゃないかな。僕は榊君とはそんな

に親しくないからさ、優稀から榊君に頼んで、榊君に和田君の気持ちを確かめて貰えば良いじゃない？」
「わかったわ。じゃ、早速、怜央に、あ、榊君に頼んで、山野さんのこと、どう思っているか確認して貰うことにする。それとも榊君から和田君をけしかけて貰うことにする？・・・上手くすれば、三学期に和田君から告白して貰えるかもしれないわよ？」
「そうだね。だから、山野さんも、気落ちしていないで、とにかく学校に出てこようよ。始業式の日に学校で待ってるよ！」

第６４話　内輪の披露宴で（前書き）

このところ、どんどん更新が遅れてきて、週1の更新が怪しくなってきていますが、何とかこのペースを守りたいと、必死で努力しています。引き続き、よろしくお願いします。

第６４話　内輪の披露宴で

「えー、本日はお日柄も良く、杉田家の皆様と、このようにめでたい場をともにご一緒できることは、まことに喜びに堪えません・・・。えー・・・。」

「あなた、そんなに畏まる必要はありませんよ。杉田家の皆様とは、勝美が小学校低学年のときから懇意にして頂いていて、このところ千博さんはしょっちゅう我が家にも遊びに来てたでしょう。・・・あなたは海外に行っていて、あまりお会いする機会がなかったかもしれませんが、勝美と私は千博さんだけでなく、杉田家の皆様とはもうずっと長いこと家族同然のお付き合いをさせて頂いてきたんですから・・・。」

「そうですね。ご主人は海外にいらしていてご不在だったようですが、昨年の夏休みには、我が家全員と、奥様それに勝美さん、・・・当時はまだ男子で勝美君でしたが・・・と一緒に、伊豆に二泊三日で家族旅行に行ってきましたので、もう我々は本当に家族と言っても良い間柄です。」

「あのときも、宅の千博と勝美さんが近い将来に結婚するだろうという話をした記憶がありますわ。千博をお嫁に出すのは、月並みですが寂しいですね、と申し上げたのが、よもや二人して性転換というか性器を交換して、しかも千博が婿としてお世話になるとは、まったく想定できませんでしたわ。」

「本当に人生、一寸先は闇と申しますが、こういうことになろうとは・・・。つい二ヶ月前の段階では、想像もできなかった訳ですが、まあ紆余曲折あっても、こうして今日の佳き日を迎えたのですから、千博も本当に果報者です。どうか末永く可愛がってやって下さい。よろしくお願いします。」

「勿論ですとも。もう千博君は我が家の大事な大事な婿殿ですから、

我が遠藤家の大黒柱として頼らせて頂く所存です・・・。千博君、是非よろしくお願いします。」

父さんと勝美のお父さん、それに勝美のお母さんと芳恵さんの四人で、いろいろ前口上のような社交辞令を述べあっているわ。一応、これが両家の正式な披露宴というか、結婚記念の会食になるのかしら。そもそも正式な婚約もしないまま、手術からなだれ込むように入籍しちゃったんで、何だか本当に普通の結婚とは手順も何もメチャクチャになっちゃって、それで今日こうして集まろうという話になったのよね。それも、元日の朝、突然入籍することになって、じゃあ両家の内々の顔合わせ会食をしましょうとなったのが、ほんの五日ほど前なんだから・・・。

肝心の千博と勝美は、二人して蚊帳(かや)の外というのかしら、一応真ん中に座っているんだけど、でも何も発言することもなく、まるでお雛様(ひなさま)のように、ただそこに飾ってあるだけみたい。まあ、二人はニ人で幸せ一杯なのか、周囲で何が起きていて、どんな会話がなされているのか、ほとんど耳に入っていないみたいだから、これはこれでアリなのかしら?

それはともかく、今も父さんが述べたとおり、丁度そのとき海外赴任中の勝美のお父さんは別として、我が家全員と勝美の家族(といっても先方は二人だけなんだけど)で、合同で伊豆に旅行に行ったのは、昨年夏の大きなイベントだったわ。あのときはあたしも勝美も、まだ男子だったんで男子チームということで、父さんや義朗兄さん、それに晶と一緒に温泉に入ったりして、逆に千博はまだ女子だったから女子チームで勝美のお母さんや母さん、それに芳恵さんと一緒に温泉に入った筈なのよね・・・。和風の旅館だったから、部屋も家族で別れたのではなく、男女で別れたんだったわ。偶然だけど、丁度男子チームが5名、女子チームも5名となり、部屋割の都合が良かったというのもあるんだと思うけど・・・。

「・・・というわけで、これからも両家のますますのご発展と、若い二人の末永い幸せを願って乾杯したいと思います。今回の結婚は、千博君が遠藤家の婿に入ってくれるので、僭越（せんえつ）ではございますが、私が乾杯の音頭を取らせて頂きます。皆様ご唱和（しょうわ）下さい。・・・乾杯！」

「「「乾杯！！」」」

延々とした挨拶を適当に聞き流していたら、いつの間にか乾杯になっていた。ようやくこれでご馳走にありつけるわ。

うちは総勢８名の大家族だけど、勝美の家は３名しかいないので、合計で１１名ということで、ひとつの大きな丸テーブルを囲んでの宴会だわ。こういうとき、中華料理は便利よね。大皿を真ん中に置いて、回しながら好きなだけ取ることができる。格式張った披露宴だと、こうは行かないけど、少人数の内輪のパーティーには打って付けだわ。

料理はどれも美味しくて、千博と勝美も箸が進んでいるみたい。実は今日、あたしと勝美に晴れ着を着せたいって勝美のお父さんが頑張っていたのを、あたしと勝美の二人で必死になって阻止したのよね。勝美のお父さんとすれば、突然娘になった勝美の成人式ということで、何としてでも間に合わせるようにと業者を急かせて誂え（あつらえ）させた晴れ着が、ようやく出来上がってきたらしいんだけど、そんなものを着ちゃったら、折角の料理が殆ど食べられないし、それどころか汚すことを恐れて、味なんてわからなくなっちゃうじゃない。それで、あたしたち二人だけ晴れ着じゃ浮いちゃうから、両家全員揃って正装しなきゃ、絶対に嫌だって、勝美と共同戦線を張ったのが良かったみたい。だって、最初に話があったときは、市内に１軒しかない料亭の和室でやるとか言っていたんだから・・・。でも、あたしと勝美の大反対にあって、もっとくだけた、気の置けない身内の会食になったんで、心置きなくご馳走にありつけるんだわ。

乾杯はビールだったけど、冬の中華料理なので温めた紹興酒が出

てきて、あたしや千博、勝美にもどんどん振る舞われた。もしかして、これはまた夫婦生活の追求大会になるのかしら？・・・勝美はもう赤い顔をして、陽気に笑っている。千博は前の経験があるから、最初は何となく警戒していたみたいだけど、勝美につられて千博も次第に酔いが回って、出来上がってきたらしく、赤い顔でケラケラと笑いだしている。
「さて、そろそろ座も和んできたようだから、夫婦になった二人の生活について、話して貰おうか。千博って、やっぱり笑い上戸みたいね・・・。ているようだが、まだ勝美さんに子供ができる兆しはないのか？」
「それについては、私から報告しましょう。さすがに本人の口からは話しにくいだろう。」
すっかり出来上がって、真っ赤な顔になった勝美のお父さんが話を引き取った。
「まず、交換初夜ですが、どうやらこれは本当に二人の初体験・・・手術する前を含めても、二人は最後の一線を超えてはいなかったようです。それで、我が家の二階、勝美の部屋で行ったのですが、最初に暴発しちゃったのはご愛嬌として、その後、2回ほどきちんと挿入して膣内射精をしているようです。1回目は本当に挿れて5秒も持たなかったかな。三擦り半ならぬ一擦りだったみたいだね。まあ最初はそんなものだろうと思うけど。」
二人して赤い顔で笑っていた千博と勝美が、一瞬で青くなり眼を泳がせた。
「2回目、つまり最初の暴発も入れれば3回目の射精は、かなり激しく頑張っていたみたいだね。5分間位、凄い勢いだったもんね。でも最初に挿入した2回目も、この3回目も、二人ともピッタリのタイミングで見事に同時にイキまくっていたよね。」
「っつっ、そっ、そのっ、あっ、あれはっ・・・。」
「なっ、なぜっ、そっ、それをっ・・・。」
「二人とも、あれだけ大声で叫んでいれば、そりゃぁわかるさ。覚えていないのかい？・・・イッた瞬間に二人して思い切り叫んでた

じゃないか。」

「それに我が家は安普請だから、ベッドの動きはモロに伝わるんだ。天井がぐらぐらギシギシして、イク瞬間には動きが変化するのも筒抜けで、映像こそないけど、まるで実況中継を聞いているみたいだったよ。いや、元気があって仲が良くて、理想的な夫婦だなって、明美と二人で毎晩感心していたんだ。だから、千博君が勝美を何回、どんなふうに愛してくれていたのか、また千博君と勝美が、いつどんなふうにイッているかについては、常に把握していたんだ。お父さんの指令云々はともかく、千博君は本当に毎晩、何度も頑張ってくれていて、これなら何も心配することはないと、明美と二人して安心して聞いていたんだよ。」

「「・・・・・・・・・・。」」

千博と勝美が、何も言えずに俯いちゃった。お酒が入って赤い顔だったのが、今では真っ青でぶるぶると震えているみたい。まあ、二人の愛し合う様子が筒抜けだろうっていうのは、当然予測できた訳だし、それも覚悟の上での夫婦生活なんだろうけど、いくらなんでもこれはちょっと可哀相かしら・・・。父さんも、勝美のお父さんも、いくらお酒が入っている無礼講だからといって、自分の子供達の性生活を、ここまであからさまに暴露するなんて、趣味が悪いわねぇ。やられるほうは、たまったものじゃないわ。

「結局、最初の日の膣内射精は2回だったのかな。その後、最後は勝美が奉仕して、千博君がイカされて気絶して終わったんだよね。勝美はもともと男子だったから、千博君が知らない男子の弱点なんかも知っていたのかな。・・・前立腺とかね？」

「「！！☆¿＃¿☆！！」」

「おじさま！・・・それ以上は許してあげて下さい！！・・・千博が、もう耐えられません！！」

咄嗟に口を挟んだ。だって、これ以上責められたら、千博は二度と立ち直れなくなっちゃうじゃない。お尻でイカされて、気絶しちゃったなんて両親に暴露されたりしたら、きっとあの子、自殺しち

ゃうかもしれないわ。・・・以前なら、いや、性転換した後でも、こういう状況のときは必ず勝美が庇うものなんだけど、今回に限っては勝美がやりすぎたことによって、千博が窮地に追い込まれているんで、勝美も真っ青になって固まっているしかできないみたい。
「ぅっ、つっ、くっ、ぇっ、ぅうっ、ひぐっ、ぅぐっ。」
「ちっ、千博っ！！・・・大丈夫？」
　隣に座った勝美が千博の肩を抱いて、あわてて問いかけた。
「ぅぐっ、うぅっ、ぅわーんっ。ぁあーんっ。」
「ごっ、ごめんなさい！・・・あっ、あたしがっ、・・・あたしが全部悪いのっ！！」
「ひーんっ、ひっ、ひぐっ、ひーんっ。」
「ごめんなさい！！・・・あたしがやりすぎちゃったんでっ！・・・千博っ・・・許してっ、千博っ、千博っ・・・千博ーっ！！」
　千博がテーブルに突っ伏して号泣しちゃった。はっきり言って、あたしも初めて見たわ。うんと小さいときの記憶はともかく、小学校からこの方、千博がこんなに泣くのはもう１０年も見たことがないわ。しかも勝美も千博に抱きついて、一緒になって涙をポロポロ零している。きっと、自分が不用意に千博のお尻をグリグリやったことが、こんなに大事になるとは思いもしなかったのよね。女子会のとき、あたしが千博の受けたショックを説明したら、はじめて自分がしたことの影響に思い至った位だから、勝美としても良かれと思ってのことなんでしょうけど、千博の男子としてのプライドはもうズタボロになっちゃって、立ち直れるのかしら・・・。それこそ、千博がＥＤにでもなっちゃったら、どうするんだろう・・・。それに、二人して抱き合ったまま号泣している姿は、本当に愁嘆場だわ。ここからどうしたら良いのかしら・・・。
「わっ、悪かったっ。・・・千博君を追い詰めるつもりはなかったんだ。千博君はもう、心の底まですっかり男子になったものと思ってたんで、つい・・・。本当に申し訳ない。」
「お父さんっ、酷いっ！・・・お婿さんを苛めて泣かせちゃう舅な

んて、聞いたことがないわっ！！・・・お父さんなんて大っ嫌いっ！！・・・千博っ、本当にごめんなさいっ！・・・あんなの、もう親でも何でもないわっ！！・・・絶交よ！！」

「いや、これは私にも責任がある。早く子供をつくれと不用意にけしかけたのが、こんな結果になってしまった。男子になったばかりの千博に無用なプレッシャーをかけてしまったのかもしれない。」

「お父さんもおじさまも、男子がデリケートだっていうことに無頓着すぎるんじゃないかしら？・・・あたし、今回、女子になったから、特にそう感じるのかもしれないけど、男子の、それもあたしたち位の思春期にあっては、男子の心はものすごく繊細でデリケートなんだって、改めて理解したわ。多分、お父さん達も、二十年前にはそうだったと思うんだけど、もう忘れちゃったのかしら・・・。それとも一級男子は最初から尊大で傍若無人で、他人の心の痛みや悩みがわからないものなのかしら・・・。」

「まあ、大人になると思春期に感じた性の悩みや心配事、不安なんかは、殆ど笑い話になっちゃうものなんだ。俺も最近になってようやくそれがわかるようになってきた。だから、あまり父さん達を責めるなよ。・・・父さん達も不用意だったたって理解した筈だしさ・・・。」

　義朗兄さんが、絶妙なタイミングで割り込んできたわ。

「要するに、お前たちに子供ができるかどうかは、それだけ大事な、それこそ遠藤家にとっては、家の存亡がかかっている重要事項だってことだ。・・・婿になるってことは、その重大な責任を背負って行く覚悟が必要なんだ。ちょっと口が滑ったかもしれないが、おじさんやおばさんにとって、また父さんにとっても、お前たちの夫婦生活がどうなっているかは、それだけの注目と関心を集めるのが当然のことなんだぞ・・・。」

「なぁ、千博・・・。恥ずかしいのはわかるし、自分の性生活や性癖を親に知られるのは、思春期の男子にとって、耐えられないのもわかるけど、お前はまだ男子になって1カ月の新米なんだ。・・・

最初は誰でも失敗も山ほどあるだろうし、誰もそれを非難すること
もない。恥ずかしくて、悔しくて、泣くのも良いけど、所詮は新人
のやること、大目に見て貰えるさ。だから、とにかく早く立ち直れ
るよう、心を鍛えるんだ。それが思春期というもので、いわば精神
を鍛える修行期間でもある。・・・今の日本では、成人年齢は15
歳とされているが、歴史的には12歳位で元服というときもあれば、
20歳という時期もあった。要は何をもって成人とするかであり、
今の状態は、子供を早くつくる必要から、性機能の完成、つまり性
成熟をもって成人としているけど、精神的な成熟は、もっと後なん
だ。・・・お前はまだ修行期間なんだから、何があっても、何を言
われても、気にするな。ちょっとからかわれただけだ。もうお前は
婿になり、おじさんはお前のお義父さんになったんだから、その人
がお前を追い詰めたり、何か悪意のある発言をする筈はないじゃな
いか。」
やっぱり義朗兄さんのフォローは上手ね。兄さんは飄々（ひょうひょう）としてい
るところがあるけど、こういう気遣いというか気配りは、昔から上
手いのよね。あたしもこれで良く助けられたわ。これは芳恵さんで
はなく母さんから学んだのかしら・・・。
「さ、これでもうこの話は終りにしましょう？・・・お義父様から
お詫びも頂いたんだし、義朗が言うとおり、千博の悪口を言ったり
する意図はまったくないんだから、もう泣き止んで涙を拭きなさい。
おめでたい席で、主役二人が泣いていては、形がつかないでしょ・・
・。」
芳恵さんの言葉で、ようやく千博と勝美が泣き止んで顔を上げた
わ。本当に一時はどうなることかと心配したけど、何とかこれで雨
降って地固まるになれば良いわね。きっと、こうやって少しずつ婿
家との関係を築いて行くんでしょうね。
・・・千博、・・・頑張ってね。

第６５話　恋のキューピット（前書き）

間があいてしまい申し訳ありませんでした。
仕事が多忙なことに加えて、先週は急に歯が痛くなってしまい、歯医者に行ったものの、歯ではなく歯茎が炎症を起こして腫れてしまったと言われて、それで三日ほど何も食べられず唸っていました。
（丁度良いダイエットではなかったか、という声もありましたが・・・。）
ようやく仕事も今週で終了となりそうなので、年末年始は少しストックをできれば良いと考えているのですが、さて・・・。

第６５話　恋のキューピット

「あけおめ！」
「あけおめ！！」
「お正月はどうしていた？」
「あたし、お汁粉の食べ過ぎで太っちゃった！！」
皆、それぞれ変わらない、いつもの始業式の風景だわ。でも、これが中学生最後の始業式と思うと、ちょっとだけ感傷的になったりする。あたしはごく普通に、もう学ぶべきこともあまりない３学期の学校生活で、とにかく女子学生としての日常に慣れようと思って、他の女子生徒に溶け込むことを目標に定めて行動することにした。
円がいろいろと気を回してくれて、他の女子生徒（円は顔が広く、クラスを超えて女子生徒に人気があり、というか顔が利くみたいで、他のクラスも含めて多くの女子生徒があたしに声をかけてくれたり、いろいろなお誘いをしてくれた。）とおしゃべりをするだけで、短い始業式の日は終わってしまったわ。
そう言えば、山野さんのことだけど、怜央に和田君に聞いてみてってメールしておいたのは、どうなったのかしら。さっき、教室で怜央に会ったとき、ちょっと話をしだしたら、円の口添えでわざわざあたしのクラスに来てくれた女の子がいたんで、その子との話を優先しちゃって、何も話ができないうちに中断しちゃったのよね。
でも、怜央がウィンクしてＯＫサインを出していたから、多分、悪い結果ではないってことなんでしょうね。端から見ていても、和田君が山野さんに好意を持っているのは多分間違いないっていってわかるんだから、怜央が上手く焚きつけられれば、和田君も絶対に拒否しないと思うんだけど・・・。あとで和田君と山野さんのクラスに顔出してみようかな・・・。

始業式が終わっても、まだ皆は何となくクラスでおしゃべりをしたりしていたんで、あたしはそんなことを考えながら、務めて周囲の女子生徒の輪に溶け込もうと努力していたところ、急にざわついて廊下を移動する生徒の流れが出来てきた。どうやら、皆がA組の教室に向かっているらしいことが判明したんで、あたしも何となくつられるようにしてついて行って見たら、何と教壇のところに千博と勝美の二人が並んで座っていて、これから二人の結婚発表という か記者会見?・・・インタビューが始まるところだった。冬休みに千博からちょっとだけ聞いたんだけど、終業式の日は、あたしと怜げを喰らって、かなり辛い思いをしたみたいなのに、また同じようなことになって、大丈夫なのかしら・・・。

でも、いつもはこういう場を仕切って、自分勝手に話をするA組の底辺コンビ、仁科君と片桐君が、なぜか人混みの後ろで隠れるようにして、でも何となく気になるらしく、そっと覗いているのが見えた。終業式のときは、あの二人が千博達をからかっていたって聞いたんだけど、今日はどうしちゃったのかしら?・・・何だか酷く怯えているようにも見えるんだけど、気の所為よね、きっと・・・。

「もう知っている人もいるでしょうが、僕と勝美は、1月1日に入籍しました。」

「終業式の日に、もうすぐ結婚するということを話したと思いますが、あのときは中学を卒業してから結婚することを想定していました。でも、結婚式場の空きがなくて、結婚式はゴールデンウィークになってしまうこととなり、それまで4カ月も婚約者として待つのは、もう嫌だったことと、万一、子供ができちゃったら結婚していないと拙いことになりかねない心配がありました。それに元旦に新年のことをいろいろと考えて、一年の最初の日に、二人の新しい生活を開始したいという思いも強かったんで、それで僕の両親と勝美の両親が揃って初詣に来ているこの機会に相談したところ、全員が

賛成してくれたんです。」
「勝美は一人っ子なんで、僕が勝美の家に婿に入ることにしました。なので、僕は遠藤千博になりました。夫婦別姓にはしませんから、これから僕のことを呼ぶときは、遠藤と呼んで下さい。・・・以上です。」
「ねっ、ねぇっ、もう一緒に住んでるの？」
「うん、それは実は入籍より先に話があって、年内に引っ越し荷物を持って行っちゃって、元旦から勝美の家に住んでいるんだ。・・・というか、そういう状態だからこそ、もういっそ、入籍もしちゃおうって思いついたというのが実態かな。」
「二人は同じ部屋に住んでいるの？・・・それとも別々の部屋なの？」
「勿論、同じ部屋よ。・・・あ、でも、千博のために独立した勉強部屋をひとつ用意してあるわ。千博の机はそっちに置いてあるの。勉強するのは、一人のほうが捗（はかど）るし具合が良いでしょ。それに、あたしの部屋は大きなダブルベッドを入れたら、もう千博の机を置く場所はなくなっちゃったから・・・。」
「だっ、ダブルベッドっ！！」
「やっぱり一緒に寝てるんだ！・・・当然か・・・。」
「すっ、するとっ、そっ、そのっ、夫婦生活はっ・・・。」
「ええ、千博は毎晩、あたしをいっぱい愛してくれるわ・・・。あたしはいつも、千博に愛されて、幸せ一杯でものすごく気持ちが良くて、いつも最後は気絶しちゃうの・・・。」
「すげぇ・・・。毎晩かよ・・・。」
「お前だって毎日射精（だ）してるじゃないか。そんなの驚く話じゃねーさ。単に一人でするか二人でするかの違いだろ。」
「毎日気絶するまでイカされちゃってるって・・・。羨（うらや）ましいわね・・・。」
「俺がやってやろうか？」
「あんたの貧弱なモノじゃ、ダメじゃない？・・・テクもなさそう

だし・・・。」
「テクもサイズもカンケーねーよ。」
「そりゃぁやっぱり、愛情だろ・・・。」
「それは、・・・もっとなさそうね。」
「もう子供はできたの？」
「いや、それは多分まだ・・・。」
「でも、もういつでも良いんだよね。」
「避妊せずに、好きなだけ膣内射精できるなんて、男冥利に尽きるじゃないか。」
「ハイっ、質問です。・・・子供は何人欲しいですか？」
「子供は多いほど良いと思います。最低でも五人以上は欲しいわね。あたしは何名でも、体力が続く限り産み続けるつもりよ。」
「・・・ありがとう、勝美・・・。」
「・・・千博・・・。」
あっ、千博たち、また完全に二人だけの世界に入っちゃった・・・。じっと相手を見つめ合って・・・。あっあっあぁっ、・・・キスしちゃったわ。
ヒューッ、ヒューッ。
ピィーッ、ピィーッ。
「やるねーっ、お二人さん。」
「なんて羨ましいんだ！！」
「彼女が欲しいなぁ。」
「あたしも彼氏が欲しいわぁ。」
「ねっ、俺とお付き合いしない？」
「あたしにも選ぶ権利はあるのよ？」
「だから俺を選んでくれよ？」
「いや、俺のほうが優良物件だぜ・・・。」
周囲の皆は、大騒ぎで囃し立てるんだけど、二人の耳には届いていないみたい。見ていて恥ずかしくなる位、夢中で口を吸いあって

いる・・・。舌を搦(から)めて、お互いの唾液を必死になって飲んでいるのが丸わかり・・・。と、勝美の背中に回していた千博の手が勝美の身体を撫(な)で回すように動き出し、それに合わせて勝美がビクンッ、ビクンッと痙攣(けいれん)しだした。

皆、固唾を飲んで二人の様子を見守っているけど、まさかこのまま公衆の面前で、イッちゃうつもりかしら。いくらなんでも、そんなことになったりしたら・・・。

「あなたち、いい加減にしなさい。犬や猫じゃあるましい、こんな場所サカるなんて、何考えているの！！」

千博と勝美の頭を、思い切りひっ叩いた。そうでもしないと、このまま二人でイッちゃうまでやっていたんじゃないかしら。あたしにひっ叩かれて、千博は直ぐに我に返ったのか、耳まで真っ赤になっていたけど、勝美はとろんとした眼で思考が回っていないみたい。千博にしなだれかかり、軽く喘(あえ)いでいる。

「こっ、これで今日は終わりにします。さよならっ。」

千博があわてて終了を宣言し、勝美を抱き抱えるようにして、教室から逃げて出て行ったわ。皆は何だか信じられないものを見たという雰囲気で、二人の毒気にあてられて、やはり言葉少なに固まっていた。

すると、突然、後方から声がした。

「あっ、あつしっ！・・・いやっ、山野淳(やまのじゅん)さんっ、・・・ぼっ、僕とっ、僕とお付き合いして下さいっ・・・。」

「でっ、できたらっ、できたらそのっ、けっ、結婚をっ、・・・結婚を前提としてっ、そのっ・・・。」

振り向くと、和田一彦君が、山野淳さんに告っていた。というか、これ、むしろプロポーズよねぇ。

「ぼっ、僕っ、ずっと君から告白してくれるのを待っていたんだっ・・・。でもっ、君はとうとう僕に何も言ってくれず、僕の気持ちにも気付いてくれなかった・・・。」

「僕も悪かったんだ・・・。バレンタインのときはいつも、そのっ、気恥ずかしくて・・・、他の皆にあげたのと同じチョコを渡していたんで、それで・・・、本命とは気がついてくれなかったのかも・・・。」

「でも、君にあげたチョコにだけは、手書きのメッセージカードを入れておいたんだけど・・・。」

「うそっ、・・・あれには〝ありがとう〟としか書かれていなかったわ・・・。そんなんじゃ、わからないわ！」

「そうなんだ！・・・僕も、男子になって、ようやくその感覚がわかるようになってきた。だから君も、今なら・・・。女子になった今ならば、僕があのカードに込めた想いを、わかってくれないかな・・・。」

「そっ、それはっ・・・。でっ、でもっ、あたしっ、・・・四級のあたしじゃ、一級のあなたとは釣り合わないって、ずっと・・・。いつか、あたしがもう少し上に上がれれば、そのときはって思っていたんだけど・・・。」

「だから、君が男子のときに躊躇(ちゅうちょ)したのはわかる・・・。でも、今は僕が男子で君が女子になったんだから、僕から告っているんだ。僕は君が何級でも、そんなのちっとも気にしない。」

「あっ、あたしっ、そのっ・・・。」

「君からとうとう告って貰えないまま、僕は男子になってしまうんだと思って、君のことを諦めなきゃと悲しかったんだ。僕が男子になっちゃう前に、君と男女の関係になれれば良いなって、密かに願ってたけど、その願いはとうとう叶わないままかと思うと、泣きたかった。でも、運命の悪戯で、君と性器を交換することになった。僕達も杉田君と遠藤さんのように、性別を交換しても、変わらず愛し続けることも可能なんだ。」

「杉田君と遠藤さん、あ、いや、今はもう二人とも遠藤君と遠藤さんなのか・・・。とにかく、この二人によって、君との関係をそのまま続けることができるって、気がついたんだ。」

「一彦・・・。」
「・・・その名前に変えてから、はじめて名前で呼んでくれたね。・・小さいときは、いつも僕のことを、カズミって呼びすてていたよね。僕も君のことを、アッシと呼びすてにしていた。でも、いつの頃からだったんだろう、君は僕のことを〝和田さん〟と姓で呼ぶようになり、僕も気がついたら君のことを〝山野君〟と姓で呼んでいた。おそらく、その頃から、お互いを異性として意識し出したんじゃないかな・・・。」
「だから、今、二人の関係がリセットされて、交換した性別でお互いを異性として意識したこの状況で、改めて君のことを〝ジュン〟と呼ばせて下さい。また、僕のことも今みたいに〝カズヒコ〟と呼んでくれると嬉しいな。是非、お願いします。」
そう言って、和田君は握手をするように右手を差し出した。一瞬の間があって、山野さんが両手で和田君の右手をしっかりと握ると、涙をポロポロ零しながら言った。
「あたしこそ、よろしくお願いします。これからずっと・・・。一生変わらず・・・、死ぬまで・・・。」
「ジュン！／カズヒコ！！」
二人の声がハモり、ひしっと抱き合うと、ごく自然に口を近付けてキスをした。それも、多分これが、二人のファースト・キスなんだろうけど、自然なディープキスで、舌をしっかり搦めあっているのが見て取れる。山野さんだけでなく、和田君も涙を零しているのが見て取れたんで、どうやらこれで収まるべきところに収まったということなんでしょうね。してみると、あの怜央のウィンクとOKサインは、和田君と話をして、彼も山野さんのことが好きで、実は相思相愛だったってことを確認した上でのことなのかしら。いや、きっとあの怜央のことだから、何かしらうまく焚きつけたのかもしれないわ。凄腕のキューピットも居たものね。
あ、でも、この二人はもともと相思相愛だったみたいだから、キ

ューピットなんていなくても、こうなる運命だったのかしら。そう考えると、今回のお手柄は、むしろ怜央じゃなくて皆の前で入籍報告をした千博と勝美かもしれないわ。なにせ、千博達二人の熱々ラブラブな様子を見せつけられて、和田君がいきなりあの行動に出た訳だから、さしずめ千博と勝美の場を弁(わきま)えないラブラブぶりについても、今回に関しては上手く行ったということなのかしら・・・。

第６６話　成人式の日

今日は成人式。１月の第２月曜日という、この日は昔から変わらないけど、成人年齢は最初が２０歳で、その後１８歳となり、３０年ちょっと前に、判定試験の導入に合わせて１５歳、つまり中学３年生の卒業直前に改められたのよね。あ、そう言えば歴史の授業で習ったんだけど、日付も最初は１月１５日で固定だったみたい。それに義朗兄さんも話していたけど、もっと昔は１２歳位で元服とかもあったりして、時代の要請で大人になる年齢なんて、いくらでも変化してきたみたいだわ。

まあ、蘊蓄(うんちく)はどうでもよいけど、この日の位置付けというのは、昔から変わっていないみたいね。要するに一人前の大人として扱われるようになる訳で、法律上はこの日をもって酒もタバコも許可されるし、自分たちだけの意思で結婚できるようにもなるんだわ。その代わり悪いことをしたら、犯罪者として大人と同じ扱いになっちゃうんだ。今では死刑になる人は殆どいないけど、去勢とか性転換とかはしょっちゅう聞く話だし・・・。まあでも、あたしはもうあまり関係ないのかしら。それとも悪いことをすると、女性でも去勢処置をされてしまい、男でも女でもなくされてしまうのかしら？・・・子供を産めない身体にされてしまい、結婚もできないなんて、死刑のほうがマシかもしれないわね・・・。

１１時から公民館で成人式の式典があって、クラスの皆はよほどのことがない限り、揃って出席するんで、あたしも晴れ着を着て参加した。本当はあたしたち性転換者は、交換初夜をもって法律的には成人扱いとなるんで、今日をもって成人扱いとなるクラスの皆よりも１ヶ月だけ早く成人しているんだけど、式典には普通に招待された。それで、またしても芳恵さんに着付けをして貰って（芳恵さ

んは和服の着付けも一人でできるの。これって凄くないかしら？・・・でも昔の人は、大抵の人ができた時代もあったみたいね・・・）、お化粧もバッチリ決めて父さん母さん、それに何故か芳恵さんも同伴でやってきたら、入口で千博たち遠藤家の４人とばったり出会った。勝美も晴れ着がすごく似合っていて、千博のエスコートで歩く姿は、ちょっと憧れちゃった。あたしも怜央にエスコートして貰いたかったな・・・。それとも怜央は他の女の子のナンパで忙しいのかしら。だったら寛に頼んでも良かったわね。・・・こういう考え方って、やっぱり尻軽なのかしら。ちょっと悩むところよね。

――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「・・・というわけで、皆さんは今日をもって大人の仲間入りをした訳です。大人になれば、子供のときには制限されていたことがいろいろと自由にできるようになります。つまり独立した一人の人間としての権利と義務をすべて手にすることになるのです。権利と義務。この二つは、車の両輪のごとく、どちらかが欠けても機能しません。・・・まず皆さんが手にした権利とは・・・」

市長の祝辞が延々続いているわ。こういうときの祝辞って、どうしてこんなにつまらなくて、しかも長ったらしいのかしら。そりゃあ人前で話すことが好きだから、政治家になったんだと考えれば、まあ仕方がないのかもしれないけど・・・。でもねぇ・・・。

「・・・そして義務は、何といっても、幸せな家庭を築き、子供を一人でも多く設けて育てることです。これは今の日本にとっては、何にも増して重要な問題でして、国民一人一人の最大の義務と言えます。これ以外の義務は、はっきり言って付け足しです。つまり・・・」

いよいよ演説も佳境に入ってきたみたいね。今、人が多数集まる場所での演説とか、こういった祝辞とかには、必ずこの少子高齢化

が極端に進んでしまった日本を救うためには、何ができるかというフレーズを入れなければ、話が完結しないみたい。特に成人式などという、若者が集まるチャンスにおいては、とにかく早く結婚しなさい、結婚しなくても良いから子供をつくりない、というメッセージが入らないと、社会的にダメな演説になっちゃうのよね。

「・・・まだ若い皆さんには、結婚と言われても実感が湧かないかもしれません。また、子供を産み育てることは、確かに大変です。しかし、ご心配には及びません。国や市から、手厚い支援が沢山提供されています。金銭的にも体力や時間的にも、皆さんはまだこれからも学生を続ける人が大部分でしょうが、勉学の上でも、何の心配もありません。家計の補助からはじまり、生活の上で子育てが負担となるようなことは、決してないように、万全のサポート態勢が整っています。無料のヘルパーの派遣や託児所の完備、さらには学校に併設された保育園や幼稚園など、これから皆さんが大学・大学院と勉学を進める上でも、負担にならないよう、政府も市町村も、考えられることはすべて実施しています。」

「だから、皆さん、どうか心配せず、子供をつくって下さい。何も結婚しなくても、シングルマザーやシングルファーザーでも大丈夫です。いや、どうしても事情がある方には、子供を引き取って養子に出す制度もあります・・・。」

「・・・だから皆さん、晴れて新成人になった訳ですから、どうかどうか、子づくりに励んで下さい。一人でも多くの赤ちゃんが生まれれば、それが即ち明日の日本を発展させる原動力になります。そのおおもとは、皆さんが一人でも多くの子供をつくってくれるかどうかにかかっているのです。・・・子づくりは、決して難しくはありません。これまで授業でも習ってきたと思いますが、勉強の成績など関係ありません。皆さんの年齢ならば、本能で簡単にできる筈です。好きな相手でなくても良い、などと乱暴なことは申しません。なぜなら、本当に愛し合った二人が、子供をつくる行為は、それはそれは神聖で幸せ一杯な気持ちになるからです。勿論、精神的にも

身体的にも、この上ない快感が伴います。愛し合う男女が身体を重ねるときには、この世で考えられる最高の快感・快楽、そして最高の満足感が約束されているのです。これは人体の神秘であり、また自然の絶妙な配剤なのです。しかし、まだ本当に愛し合っているわけではないとしても、二人とも何となく好意を持っているのでしたら、そしてお互いに気になる相手でしたら、まず行動してみても悪くはありません。肌を重ねるうちに、相手のことを深く愛するようになるというのは、人間の性質として自然です。見合い結婚など、一度か二度、会っただけで初夜を迎えるなどということだってあるわけです。それでも幸せな家庭を築き、赤ちゃんを授かって一生を添い遂げる人だって多数います。実は私も見合い結婚なのです。・・・どうか皆さん、新成人となったからには、明日の日本の繁栄のために、たったひとつの義務だけは忘れないで下さい。以上をもちまして、私の祝辞とさせて頂きます。・・・和徳二十四年一月十三日。××市長〇野〇男。」

やれやれ、やっと祝辞が終わったわ。それにしても、こんな祝辞を聞かされたんじゃ、まるで成人になったんだから、さあセックスをしろとけしかけられているみたいだわ。いや、みたいなんじゃなくて、実際にけしかけているんでしょうね。とにかく嫌いな相手じゃない限り、少しでも好意を持っているなら、とにかく子供をつくってしまえ、そういう演説なのよね。これを聞いたら、そりゃあ今日、何がなんでも初体験をしようと考える新成人が殆どじゃないのかしら。実際、今日、この日に初体験をする新成人は、全体の7割を超えるっていうデータがあるみたい。既に初体験を済ませてしまっているのが、あたしたちみたいな特例も含めて2割程度だとして、中学卒業までに経験する人は9割を超える筈だわよね？・・・そうすると日本人は男女とも、この日に初体験を済ませて大人の仲間入りをするというのが、それこそ国民的習慣になったのかしら？

実際、周りを見回すと、にわかカップルなのか、それとも以前か

らお付き合いしていたのか知らないけど、何となくぎこちない様子で手をつないだり、肩を抱き合ったりしながら、三々五々、解散していく子ばかりだわ。今日は殆どのホテルで、予約がないと泊まれないそうだから、まあお祭しだわ。
　そういえば、見渡したんだけど、怜央は見かけなかったわね。もう誰か女の子を引っかけて、早々に例の秘密の隠れ家に行っちゃったのかしら。やはりこういうときは、いきなり怜央の隠れ家に押しかけたりしたら拙いわよね。・・・ということで、あたしはどうしようかしら・・・。確か父さんが写真を撮ると意気込んでいたから、まずはそれを済ませなきゃ。あ、千博と勝美も一緒に撮るのかな。なら親族席に行ってみようっと。

「あ、優稀！」
「あ、寛が居た！」
「それは僕も居るさ。僕だって今日をもって新成人だからね。あ、でも僕はもう優稀のおかげで初体験は済ませているから、感慨はあまりないな・・・。」
「ねぇ、後で寛の家に行って良い？・・・それとも何か用事が入っているの？」
「えっ、またウチに来てくれるの？・・・勿論、大歓迎だよ。ケーキでも用意して待っているから。」
「別にそんな気を遣わなくても良いわよ。あたしは寛と一緒に居たいだけなんだから。」
「ありがとう。それにしても感激だなぁ。こんな僕でも、一緒に居てくれる彼女ができて、しかもそれが以前から親友だった優稀なんだ。いや、それ以前に、優稀が僕とお付き合いしてくれなかったら、僕は今頃、一人寂しくボッチの成人式で、日本人の９割が卒業する日にも童貞のまま、自分で慰めていたに違いないんだ。あそこが立派だなんて言われてみても、相手がいないんじゃ宝の持ち腐れだよね。」

「そんなことないわよ。まあ、あそこのサイズは、恋愛とは関係ないと思うけど、寛は見た目も可愛いし、何より性格が理想的だわ。クラスの女子はどこを見ていたんでしょうね。」
「あはは、・・・それは簡単だよ。前にも言ったじゃない。僕は多分、ゲイだと認定されちゃっていたんだ。決して完全な間違いじゃなかったんだし、僕も敢えて否定しなかったのも悪かったんだけどさ。」
「まあ、そんなことはもうどうでも良いじゃない。あたしはこれから晴れ着の写真撮影があるんで、それを済ませてから自宅に戻って、着替えて昼食を食べてから、寛の家におじゃまするわ。それまで待っていてね。一人で抜いたりしなくても良くってよ。なんだったら、また例のグリグリをやってあげようかしら。」
「うん。物凄く期待している。・・・あれをされると、もう僕は頭がバカになっちゃって、というか何も考えられない状態で、頭の中はとにかくイキっぱなし状態から逃れたい、そうじゃないと気が狂っちゃうっていう感じなんだ。でも、その一方で、あれをされているときは、もっともっと、快感を感じたい、このまま永遠に快感が続いて、死んじゃうまで快感漬けにされたいって、そういう考えしか浮かばなくなるんだ。いや、あの状態で何かを命令されたら、もうどんなに恥ずかしいことでも、平気でしちゃうのは間違いない。衆人環視の中で射精しろって言われたら、喜んでそうするだろうし、アへ顔をネットに晒せって言われても、多分拒否できないよ。これってもう僕は完全に調教されちゃったってことなんだろうね。」
「そこまで言われると、ちょっと引くわね。でも、まあ恋人同士納得しているなら、どんな変態的な性行為も正当化されるんだから、気絶するまで奉仕してあげるわ。・・・じゃあ、それはお楽しみということで、また後でね。」
　そう言うと、あたしは親族席で待つ両親や遠藤家の皆のところへ急いで向かった。途中で、学生服姿の和田一彦君に寄り添うようにエスコートされて幸せ一杯、それこそハートマークが周囲を飛び回

っているようなラブラブ状態の山野淳さんが、こちらもやはり晴れ着を着て歩いていたわ。あたしは写真館の予約時刻が迫っていたんで、挨拶だけで話はできなかったんだけど、二人とも本当に良かったわね。千博達や、あたしと怜央に次いで、これで3組目の幸せな性転換カップルになったんだから・・・。

第６７話　成人式の後

「お待たせしました。じゃあ写真を撮りに行きましょう。」
親族席に着いたときには、もう千博達遠藤家の４名も一緒に待っていて、二家族揃って写真館に向かった。千博は普通の学ランを着ていたけど、写真館に着くと、あたしと勝美がそれぞれ単独で、また二人並んでの写真を何枚か撮影しているうちに、控室で和服に着替えてきた。こういうときの男性の和服の正装って、あまり良く知らないんだけど、さすがに昔の侍のような裃（かみしも）じゃないのね。いわゆる紋付きの羽織袴（はおりはかま）というものらしいわ。着ているのは当然、遠藤家の家紋が入ったもので、これは勝美のお父さんが、若いときに使ったとか言っていたけど、こういうものを着るチャンスがあったってことなのかしら。でも、遠藤家の家紋の入った着物を着ると、改めて千博がお婿に入ったということを意識することになり、着付けを手伝っていた芳恵さんが涙ぐんでいた。
正装の千博と、晴れ着姿の勝美の写真を何枚か撮影したら、今度は勝美も晴れ着ではなく正式な紋付きの着物（黒の着物で、芳恵さんがときどき結婚式や葬式に着ていたのを見たことがある、既婚女性の和服の正装よね。これも勝美のお母さんが持っていたものらしいから、すると勝美のご両親は、結婚してわりと直ぐに、和服の正装を着る機会があったってことなんでしょうね。それとも遠藤家は代々、和服の正装を準備しておく習慣でもあったのかしら・・・。）に着替えて、千博と二人揃って遠藤家の若夫婦という出で立ちの写真を何枚か撮影した。和服って、ある程度は着付けるときの調整で、サイズを合わせることができるから、親から子に譲って使い回すことができるんだわ。こういうとき、着付けができる人が家族に居ると便利ね。ただ、二人揃って遠藤家の紋付きを着た姿を見ると、これはきっと、千博にとっても、あたしたちにとっても、千博がもう

遠藤家の人だということを再確認するための儀式なんじゃないかしら。それとも証拠写真とか？・・・シチュエーションはまるで違うんだけど、ふと去勢されたときのことを思いだしちゃった。要するに意識を強制的に切り換えさせる効果があるのよね。芳恵さんじゃなくても、なんだか少し寂しくなっちゃったわ。父さんもちょっとしんみりしている雰囲気だし・・・。でも、勝美のご両親は当然として、千博と勝美も二人して遠藤家の紋付きを着た写真を見てニコニコご満悦だから、まあ仕方がないわね・・・。

その後、別れて帰宅したのは2時過ぎだった。あたしは急いで着物を脱いで、楽な服装に着替えると(晴れ着はクリーニングに出すまでは、床の間に飾っておくんだって)、母さんが出かける前につくっておいてくれたグラタンを急いで食べて、また家を出た。もう成人したからなのかどうかは知らないけど、最近では家族もあたしが出かけることについて、まるで関心がないみたい。夜、何時に戻るかということも聞かれず、もしかすると、このまま外泊してきても、何も言われないかもしれないわ。ま、大人になるって、そういうことも含まれるんでしょうね・・・。

家を出たあたしは、途中で手土産のお煎餅（いつもクッキーだと飽きられちゃうから）を買うと、まっすぐ寛の家に向かった。今日は休日だから、もしかすると寛のご両親が家に居るかもって考えたんだけど、二人とも出かけていたみたい。というか、夫婦で久し振りに夕食を食べに出かけちゃったんだって。寛も誘われたけど、用事があるって断ったって言っていたわ。寛の成人を祝ってくれようとしたんだとしたら、悪いことしちゃったわね。でも、寛によると、両親が二人揃って出かけるのは久し振りだから、夫婦水入らずでデートするのは悪くないし、ことによると弟か妹ができるかもって笑っていたわ。まあ、寛のご両親も、まだ30台半ばなんだから、まだまだ子供をつくっても良い年齢には違いないんだけどさ、さすがに子供が成人した後で、また子供ができるのは、恥ずかしいものな

のかしら？・・・もし本当に弟か妹ができたら、世間的には恥かきっ子って言われたりしちゃうのよね・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あっ、あっ、ぁあっ、ひっ、ぃひっ、ひぃーっ、らっ、らめっ、らめーっ。」

「優稀は本当に全身が性感帯みたいだね。こうなっちゃうと、どこを触ってもイキまくっているじゃない。」

「たっ、たっ、たすけっ、助けてっ！・・・ひっ、ぃひっ、とっ、止まらないぃっ、あっ、あひっ、ぁひっ、あっ、ぁあーっ！！」

「クリトリスはやっぱり特に弱いのかな？・・・ここ、皮を剥いて刺激すると、もう大変なことになっちゃうみたいだね。でも、快感でイキっぱなしになるのって、本当に良いよね。頭がバカになっちゃって、他のことが何も考えられなくなっちゃうんだ・・・。僕もお尻をグリグリされて、連続射精状態にされちゃうと、もう何がなんだかわからない、何も考えられない状態で、ただひたすら、もっともっとっていう想いだけで頭が一杯になっちゃうんだ。」

「ぁっ、あっ、ぁあっ、ひっ、ひっ、らっ、らめっ、ぁひっ、あひーっ。」

「どうする？・・・もう少し、この快感を続けようか？・・・それとも、そろそろ僕のペニスを入れても良い？」

「ぁっ、あっ、ほっ、欲しいっのっ・・・。もっ、もうっ、らめっ、はっ、早くっ。」

「じゃあ挿れるね。一気にじゃなくて、そうっとやさしくするからね。」

はっ、入ってきたっ、・・・ゆっくり、ずっ、ずずっ、ずるっ、という感じで、もう、あっ、ああっ、星がっ、・・・花火がっ・・・、あひっ、ひっ、ひぃーっ。こっ、声がっ、声が出ないっっ？！！

「キツキツでいっぱいいっぱいだよね。優稀のあそこの中、ものすごく気持ち良いよ。グネグネと蠢いて、僕のものを締めつけてくるんだ・・・。あぁ、幸せだなあ。」
「ひっ、ひーっ、あひーっ、そっ、それっ、挿れてっ、しかも、クリっ、・・・クリはっ・・・。」
「こうやってペニスを挿れた状態でクリトリスを剥いて刺激すると、中が複雑に動くんだね。乳首もビンビンのガチガチになっているよね。摘むとコリコリしている。」
「ぁっ、あぁっ、ぁんっ、あぁんっ、ぁんーっ、ぁひっ、あひーっ。」
「・・・あとは、Gスポットって、どの辺りなんだろう？・・・クリトリスの裏側って聞いたことがあるんだけど、この辺りかなぁ・・・？」
「きーっ、きひーっ、あぁーっ。」
「ここが気持ちいいの？・・・少し下側からクリトリスの裏側を突き上げるようにするのかな？」
「！！？＠％＆＄！！¿〰๑！！！！！！！！」
「あ、優稀、大丈夫？・・・白目が！・・・気絶しちゃったの？・・・僕も、もう我慢できないや・・・。そろそろイクからね。・・・今日は最初からコンドーム付けているから、大丈夫だよね。本当は生で膣内射精するほうがずっと気持ち良いんだけどさ、でも妊娠しちゃったら、責任問題だからね・・・。あ、でも僕は優稀と結婚できるなら、それはそれで嬉しいな・・・。んっ、んんっ、んんーっ。」
「・・・き、・・・うき、・・・ゆうき・・・。あ、気がついた？」
「・・・あっ、・・・あたし？・・・」
「よかった！・・・白目剥いて気絶しちゃったみたいで、ちょっと焦っちゃった。もう大丈夫？」
どうやら、あたしは寛にクリトリスを剥き出しにされ、クリトリ

スと乳首をコリコリ刺激されながら、寛の巨大おちんちんでGスポットをガンガン突き上げられて、失神しちゃったみたい。・・・ものすごい快感で、まだ眼の奥がチカチカして全身ピリピリしているし、頭の中は霞がかかったみたい。それに何より、腰がまるで言うことをきかないというか、腰が抜けてしまったようで、力がまったく入らないわ。よく、やりすぎて腰が立たなくなっちゃった人の話を聞くけど、まさか自分がそうなるとは考えたこともなかった・・・。これはやっぱり、寛の巨大おちんちんが優秀だったってことなのかしら。それとも女性は皆、どんなおちんちんでも、挿れられてズコズコと突き上げられると、こうなっちゃうのかしら・・・。あ、勿論、そこには愛しているかどうかっていう、一番大事な要素があるわよね。男性は必ずしも愛していない相手でも、とにかく射精すると大きな快感に支配されるけど、女性は単純に挿れられてズコバコされるだけじゃ本当の快感は感じないって、よく言われるわよね。でも、男性でも女性でも、膣内射精のときに感じる、あの精神的な快感というか、物凄い満足感、これはやっぱり、相手に好意を持っていないと、あそこまで満たされた感じはしないんじゃないかしら。だってレイプされて、身体は快感に負けちゃったっていうような話はよく聞くけど（それは人間の本能というか、生物としての自然の反応なのかもしれないわ）、精神的に満足して、この人の子供を産みたいって感じたようなストーリーは、小説でもあまり聞かないものね・・・。

　そんなことよりも、今のあたしが気になっているのは、実際、怜央と寛の違いって、何なのかしらっていうことなんだ。・・・明らかに感じ方が違うし、心からしっくり来るのは怜央に間違いないんだけど、でも単純に快感だけで言うと、寛も決してひけをとらないのよね・・・。二人に聞いたって、わかる訳ないし、あたしのことしか知らない円や、千博一筋の勝美もこういうことに詳しい筈もないだろうから、あとは母さんに聞くのかしら・・・。それもちょっ

と恥ずかしいし、母さんだって、こんなことに詳しいとも思えないわよねぇ・・・。これ、誰に聞いたら良いのかしら・・・。あ、病院のカウンセリングをしてくれた先生、確か、向井先生と中山先生ってお名前だったかしら。あの二人なら、こういう話も沢山経験がありそうだから、今度電話してみようかな。

その後、シャワーを貸して貰って身体をざっと流し、寛が買ってきておいてくれたケーキを二人で食べた。これもまた、あたしは知らないケーキ屋さんで買ってきたらしくて、甘さが控えめで、それでいてムースとクリームのこってり感が際立っている、とても上品な美味しさのケーキだったんで、お店の場所を詳しく聞いちゃった。勝美や円は知っているかしら。今度の女子会のときにでも皆に紹介してみようっと。

ーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーー

「じゃあ、これでお暇するわね。今日はありがとう。」

「僕こそありがとう。さっきも話したけど、優稀が来てくれなかったら、僕の成人式はきっと独りぼっちで寂しい味気のないものになっていた筈だよ。」

「そんなことないわよ。寛だって、もう少しだけ積極的になれば、いくらでも女の子にモテるんじゃないかしら。」

「本気でそう考えている？・・・僕には、優稀が僕のこと哀れんでくれなかったら、右手が恋人っていう未来しか見えないんだけど・・・。」

「寛は性格も良いし見た目も可愛いし、それに巨大おちんちんっていう大きなアドバンテージがあるのよ。まあ、最後のは、男子はともかく実物を確認した女子はあたしだけだと思うけど・・・。それに寛は成績だって決して悪くないわよね。とすると、ホモとかゲイ

とかの疑惑を打ち消せば、もう恋人申し込みが殺到する筈だわ。」
「でも、それは嘘じゃないし・・・。」
「寛はバイなんでしょ？・・・つまり相手が女子でも、普通に恋愛できるのよね。そうじゃなければ、あたしとこんなことするわけないんだし・・・。」
「だったら簡単よ。まず、あたしと寛が付き合っている、っていう話を広めましょうよ。あたしは寛の素晴らしさを皆に宣伝するわ。その大きなおちんちんも含めてね。ただし寛が、バイだっていうことは、無理して言わなくても良いじゃない。そうすれば、あたしに多少の遠慮はあるかもしれないけどさ、寛とお付き合いしたいっていう女子が絶対に出てくるって。いや、それどころか、あたしみたいに元男子じゃなくて、自分にはもっと女子としての魅力があると自分に自信がある女子が、あたしから寛を奪おうとして、積極的にアタックしてくる可能性だってあると思うわ。」
「そうかなぁ・・・？」
「もっと自分に自信を持ちなさい。」
「僕は優稀とお付き合いできるなら、それだけでもう他には要らないんだけど・・・。あ、でも、そうか、優稀は怜央が本命なんだよね。とすると、僕はいつか捨てられちゃうのかな・・・。」
「そんなふうに後ろ向きに考えちゃダメ。あたしが怜央とはうまく行かない可能性だってあるし、それ以前に怜央からあたしを奪ってやるって、そういう気迫を持つべきよ。大人になったんだから、大人の恋愛というのを試してみましょう。・・・いや、別にけしかけているんじゃなくって、恋愛って、そういうウジウジした態度や、最初から諦めちゃったりすると、自然とダメになっちゃうものなのよ。逆に積極的に努力する人には、次々に新しい話や、良い話が見えてくるものなの。怜央なんて、あたしのことを第一妻にするんだって話しているその口で、他の女の子をしきりと口説いているんだから。あたしも以前は、そういうのって、なんとなく自分とは無縁の世界だって考えていたんだけど、それって結局、自分に自信がな

いからなのよね。もっと自分に自信を持ってみて。それだけでも、ずっと魅力的に見えるようになるものなのよ。」

そんなことを話して寛を励ましつつ、寛の家を出たのは7時過ぎだった。帰る途中で、怜央からメールが来ていて、相談したいことがあるんで、明日か明後日、いつでも良いんだけど会えないかなって書いてあったんで、あたしはいつでも時間をつくれるからって返事を返しておいた。でも、相談って何かしら。学校で話せないようなこと？・・・それとも、単にまたあたしと会いたいっていう口実かしら？・・・でも、例の隠れ家を指定してきた訳じゃなくて、どこか喫茶店でもって書いてあったから、やりたくなったということではなさそうな雰囲気なのよね・・・？？？

第67話　成人式の後（後書き）

年末年始は自宅で死んでいたのですが、緊急事態宣言が出て、今週から出勤は半分ずつとなり、あとは自宅でテレワークとなりました。仕事の効率は悪くなるものの、通勤時間がゼロになったので、毎日2時間以上、余裕ができました。この時間を、可能な限り執筆に充てられればと思います。（やはり電車の中では、アイデアとかプロットはできますが、スマホで執筆は無理があります。）

第６８話　怜央の相談（前書き）

１カ月ほど音信不通で失礼しました。
事情により、執筆がまったくできませんでした。
活動報告に詳しく述べてありますので、そちらも合わせてご覧下さい。

第６８話　怜央の相談

「今日は時間をとってくれてありがとう。」
「相談したいことって何かしら？あたしでわかることなの？」
「うん、ふたつあるんだけど、ちょっと話し難いことでね・・・。落ち付いた喫茶店にでも行こうか。」
　そういって、待ち合わせ場所の裏門から、例の隠れ家の方向に歩きだしたので、あたしも怜央の後について行った。
　この裏門の裏側に広がるエリアは、住宅地の中に空き地とか畑が点在するような場所で、ほとんど人通りもなく、たまに怜央の隠れ家のような工場とか倉庫がある程度の、郊外というよりも田舎という雰囲気が色濃く残るところなのよね。人通りも疎らで、特に治安が悪いとかいうことはないにしても、夜、女の子が一人で歩くような場所じゃないわ。でも、こんな場所にも、ところどころにお店が点在していて、前に怜央が買ってきてくれた美味しいケーキは、この辺りのお店だって言うし、今まさに入ろうとしている喫茶店も、外見は普通の民家のような佇まいなんだけど、ちょっと期待できそうなアプローチのある可愛い前庭があった。
「なににする？ここ、自家製ハーブティーが美味しいんだ。僕はそれにするけど、庭で取れるハーブでつくるんで、季節によって内容が変わるんだ。・・・今は何だろう。」
「今はレモンバービーナとミントをブレンドしたものになっています。」
「じゃあ、あたしもそれで。」
「あと、自家製シフォンケーキを二つ下さい。・・・ここのシフォンケーキも、なかなか美味しいんだよ。」
「ありがとう。怜央も結構、甘党なのね。でも女子時代の怜央は、

そんなに女の子同士でケーキとか食べているようには見えなかったんだけど・・・。」
「いや、男女関係なく、子供は甘いものが好きじゃない。僕も小さいときから、ケーキとか好きだったけど、ただ悲しいかな、当時の僕の周りには、一緒にケーキを楽しむような女子の親友がいなかったって、それだけだよ。勿論、僕の性格も原因のひとつだったんだけどさ、それ以上に一級になろうっていう女子の多くは、表面的には仲良くても、実は熾烈なライバル関係にあることが多かったんだ。千博君なんかは例外中の例外だよ。」

お店はガラガラで、あたしたち以外には客が一人しかいなかった。出されたハーブティーとケーキで一息ついたんだけど、肝心の相談には、なかなか入ることもなく、何となく怜央からは話し辛そうな雰囲気だったんで、あたしから促すことにした。
「で、相談って何かしら？・・・わざわざこんなところに来るなんて、それに怜央の様子も何だか話し辛そうだし、かなり難しいことなの？」
「いや、難しいとか、そういうことじゃなくて、何て言うか、そのプライベートな、プライバシーに関係することなんで、それでちょっと人目を避けたかったんだ。」
「まず一つ目だけど、僕に弟が居るのは知ってるよね。今、小６で、真央って言うんだ。」
「ええ、知っているわ。まだ会ったことはないけど、前に怜央が話をしていたのを覚えているわよ。女の子みたいで、性同一性障害かもしれないって話していたわよね。」
「その真央なんだけど、昨年秋からの診察と検査で、やはり、というか、とうとう、というか、性同一性障害であるという確定診断がでちゃったんだ。」
「そうなんだ。でも、怜央が男子になることを希望したのは、それも含めてのことじゃなかったのかしら。自分が会社を継ぐ必要があ

るって、話していたじゃない？」
「うん、確かにそれはそうなんだけど、相談したいのはそこじゃない。実は真央はこれでようやく、念願叶って女の子になれるって喜んでいる一方で、やっぱりそのペニスとキンタマを切り取られちゃうっていうことが、怖いみたいなんだ。何て言うか、本能的な恐怖というのかな、いよいよ手術するっていう日程をお医者さんと話しだすと、急に躊躇するそぶりを見せだしたんだ。」
「普通、性同一性障害の子供が手術するのは、小学校から中学校に進学する、このタイミングというのが一番良いとされているのは知っているよね。環境が変わるときに合わせて生活も切り換えることができるし、思春期に入る直前または入った直後というのも、いろいろ好都合なんだ。真央も当然、それを見込んでの確定診断を秋に受けて、それから着々と準備を進めて来たんで、手術のスケジュールも組んで貰ったし、移植すべき女性器の手配も整ったんだ。というか、クローンで培養完了したので、予定通り手術できますという通知が先週来たんだ。」
　そう、性同一性障害の患者を性転換させるときには、逆方向の性同一性障害患者との間で性器を交換するのが本来の方法なんだけど、それだとタイミングが合わなかったりするんで、性同一性障害患者に限っては、家族からのクローンで性器を培養して移植しても構わないというように法律が改正されたのが、もうかれこれ１０年前だったかしら。やっぱり、赤の他人よりは、自分の家族の遺伝子を持った精巣とか卵巣を希望する人が多くて、この法改正からこのかた、家族の細胞でクローンを希望する人が次第に増えてきたみたいね。何でも、今では半分程度の人が自分の家族からのクローン性器を培養移植されるようになっているって聞いたことがあるわ。
「それじゃあ、やっぱり春休みに？」
「うん、３月６日が小学校の卒業式なんで、その日の午後に去勢してタマを抜き、１週間後に正式手術して２週間程度で退院、その後自宅で女の子の身体に慣れてから、中学には女子として入学すると

いうことになっていて、もう女子の制服なんかも準備ができているんだ。といっても、制服は僕のお下がりとかだったし、もともと女の子みたいな子で、小さいときから女装したりもしていたんで、着るものとかは中性的な、ユニセックス物ばかりだったから、準備というほどのことは必要ないんだけどね。」
「で、いよいよ手術まで1カ月ちょっととなり、本人としても最後の心積もりを固めた筈なのに、何となく躊躇(ちゅうちょ)するような気持ちが見て取れるようになっちゃったんだよね。本人も意外だったらしく、やや戸惑っているんだけど、多分、それは手術するってことが、実際どんな様子なのかということが、まだ十分に理解できていないからだと思うんだ。第一、これまで真央の周辺には、性転換した人は居なかったからね。」
「この間も、病院で手術のことについて先生の話を聞いてきたんだけど、無意識のうちに股間を押さえて身体がガチガチに力が入った状態になってるのがわかるんだ。」
「それで、意図せず、というか意志に反して、無理やり女性化させられちゃった優稀の体験を、真央に聞かせてあげたら、性転換ということがどういうことなのか、被験者はどう感じて、どういう身体の変化があったのか、イメージが湧くんじゃないかと思った次第なんだ。」
「勿論、これまでに何度もカウンセリングの先生とは話し合ってきて、本人的にも納得しているんだけど、そうはいっても感情は別だし、最初から男子だったり女子だったりした先生では、いくらカウンセリングのプロとはいえ、自分の体験としては語れない。きっと、そういうところも含めての不安なんじゃないかな。」
「あたしの体験なんて、たかが知れてるし、そんなに参考になるとも思えないけど、でも真央君が安心するっていうなら、良いわよ。」
「悪い。いきなり去勢されちゃって、無理やりあそこを切り取られちゃった君に体験談を話して貰うなんて、辛い記憶を思い出させちゃうよね。本当に申し訳ない。その原因をつくった僕が頼めるよう

な話じゃないことは、重々承知しているけど、今のままだと真央が安心して手術を受けられないんじゃないかって心配なんだ。僕も一応性転換者ではあるんだけど、逆方向だから、あそこを切り取られちゃう男子の心情は、どうしてもわからないんだ。」
「だから、どうか真央のために自分がどう感じたか、恐怖はどう克服したのか、あるいは結局、克服できないままで手術になってしまったのか、そういった経験を話してくれない？・・・心からお願いするよ。」
「わかったわ。・・・あたしに悪いとか、そういうことは気にしないで。っていうか、あたしは女の子になって、本当に良かった、これがあたしの本来のあるべき姿だったんだって、今では心からそう思っているの。それに怜央に女にして貰って、心の中まですっかり女の子に書き換えられたときは、幸せで一杯になったわ。」
「だから、何も気に病むことはないわ。むしろ逆に、男の子のときの感覚とか、あそこを切り取られちゃうことになったときに感じた感覚、つまり怜央の言いたいところの絶望感とか恐怖とかだと思うんだけど、そういう感情は、もう記憶の彼方に埋もれかけているのよ。」
「もしかすると、今のあたしよりも、実は最初から男子の心を持っていたに違いない怜央のほうが、あそこを切り取られちゃうっていうことに対する恐怖は、強いんじゃないかしら。」
「実は僕も、男子になる前は、自分に男性器が移植されてしばらくすれば、そういう感覚も次第にわかるのかとも考えたけど、どうもそうはならないんだ。あるいは時間が必要なのかもしれないけど、なんとなく、これはきっと、僕がこれから男子として何十年か生きてみても、やっぱりわからないものじゃないかって思うんだ・・・。」
「そうなのかもしれないわね。心の男性化・女性化は、何かのきっかけで一気に進むものみたいだからね。これは五十嵐さんも山野さんもそうだったし、あたしはもう交換初夜で一気に女子の心に書き

換えられてしまったんで、男の子だったときのおちんちんやたまたまに、もう何の未練もないし、切り取られちゃったことに対する喪失感なんて、忘れつつあるのよ。そういう意味では、あたしも性同一性障害の気があったということなのかしら。」

「ごめんね。そういってくれると、僕も少しは気が楽だよ。・・・でも、それって、僕が実は性同一性障害者だって断言しているようなもんだよね。」

「あら？・・違ったかしら？・・・あたしは怜央も間違いなく性同一性障害者だったって確信しているんだけど・・・。そもそも怜央は、性転換する前にレズセックスしていたみたいだけど、一度でも自分が受けというかネコになって、挿入されることを考えてみた？」

「・・・・・・。」

「そんなの絶対に嫌だ、レイプされちゃうみたいだって、そう感じていなかったかしら？」

「・・・多分・・・。」

「本来、女性ならば、無意識かもしれないけど心のどこかには、逞しい男性に貫かれてみたい、身体の一番奥深くに射精されて、妊娠し子供を産みたい、っていう感覚が、多少なりとも必ずある筈なのよ。それは本能に基づくものであって、理性でもなければ感情でもない、もっと生物としての根源的なところに遺伝子レベルで組み込まれているメカニズムなんだわ。それがまったくなかったということは、やっぱり、ねぇ？」

「・・・・・・。」

「まあ、とにかく、真央君との話し合いは、いつでも構わないわ。場所はあの例の隠れ家なのかしら？・・・怜央が同席するのかどうかも含めて、怜央がスケジュールをアレンジして頂戴。あ、でも、まさかと思うけど、怜央のご両親が同席するとかはないわよね？・・・それはちょっと恥ずかしいから・・・。さすがにあたしも、自分

の性転換について、怜央のご両親に詳細に説明するのはねぇ。・・・
自分の両親にも話していないんだし・・・。」
「それに、真央君の感覚として、自分の両親のいる前で、こんな話をするのは、多分拷問じゃないかしら。思春期に差しかかったばかりの子にとって、それが男の子であろうと女の子であろうと、親に自分の性についての話をするっていうのは、堪えられないものよ。」
「わかっている。僕が入ることすら、どうよっていう感覚だと思うから、そこは真央と話してみるよ。でも、両親には、こんなことを伝えるつもりはないさ。それは安心して。」
「じゃ、近日中に日程とかを調整して連絡するよ。いろいろありがとう。」
　確かにこういう話なら、学校ではできないでしょうね。でも、これなら何もあたしと性器交換をしなくても、真央君と姉弟で性器交換して、兄妹になればよかったんじゃないかしら。わざわざあたしまで巻き込んだのは、やっぱり怜央が言うところの、自分が性同一性障害患者だということではなく、自分は自分の意志と努力で男子の身体を掴(つか)み取ったと言いたいがための、自己満足なのかしら？・・・まあ、姉弟で性器交換して、兄妹になるなんて、確かに恥ずかしいかもしれないわね。・・・でも、もうあたしにとっては、どうでも良い話だわ。今のあたしは怜央に女子にして貰って、本心から幸せを感じているんだし・・・。
「それで、二つ目の相談って何かしら。そっちもプライベートなことなの？」
　最初の話は終わったんで、ハーブティーをひとくち飲んで、シフォンケーキに添えられたラズベリークリームを載せて食べながら、話を変えたところ、怜央が急にあたふたとして、視線を泳がせだした。
「うん・・・。その・・・。何て言うか・・・。」
「それも真央君のこと？・・・それとも？」

「・・・いや・・・、実は・・・、そのっ・・・、ぼっ、僕のことなんだけど・・・。」

いつも自信満々で、およそ躊躇（ためら）うようなそぶりを見せたことがない怜央なのに、このあからさまな困惑というか、うろたえ方は何かしら・・・。よほど後ろめたいことがあるとか、あるいは他人に話すことが差し障りあるとか？・・・でも、ここにはあたししかいないんだし、こんなにも挙動不審になる話って、いったい・・・？？

「あっ、あのっ、あのさぁ、・・・男子のオナニーについて、そのっ、もっといろいろ教えてくれない？・・・つっ、つまりっ、やり方とか、どうすると快感が高まるとか・・・。いやっ、そっ、その前にっ、そもそもだけど、男子はどういうときにオナニーをするのか、したくなるのか、といったきっかけとかさ・・・。」

第68話　怜央の相談（後書き）

活動報告に述べたとおり、事情により更新が滞ることになりそうです。

暫くは無理のない範囲でボチボチ執筆していくつもりですので、どうか見捨てずに見守って頂ければ幸いです。

第69話　怜央の困惑

「男の子のオナニー？？？・・・勿論、構わないけど、セックスじゃなくてオナニーをしたい理由はなあに？・・・というか、怜央はそもそも男子になってから、オナニーしたことがあるの？確か入院中に、機能検査で射精したって言っていたわよね。その後は、あたしとの交換初夜までに、確か1回だけ自分でやったって言ってたと思うんだけど？」

「いずれにせよ、何も一人でやらずとも、怜央となら、あたしはいつだってOKよ。それに他の女の子とも付き合ってみるつもりだって言い出したのは、怜央じゃなかったかしら？・・・確か、あたしにも、いずれ結婚するときは貞節を守るにしても、その前の段階では、他の男子とも付き合ってみるのは悪くないって、とても恋人とは思えないようなことを述べていたわよね？」

「今の怜央の質問とも関係するんだけど、そもそも男の子がオナニーしたくなるのは、要するにセックスできる相手がいないからよ。性教育の授業でも、何度も習っているけど、健康な男子の場合、特に精力が有り余っている十代・・・つまりあたしたちの年齢よね・・・の場合、精子はひっきりなしに睾丸で作り続けられているんで、射精してから72時間程度で、精嚢が精子で一杯になっちゃって、要するに満タンで溢(あふ)れだしちゃうようになるのよね。だから、定期的にセックスできる相手がいれば問題ないんだけど、まだ若い十代のうちは、決まったパートナーがいないことも多いじゃない。それで、精嚢が満タンになると、どうしても射精したくなっちゃう、それが男子の生理現象で、これは膀胱が一杯になると、おしっこを我慢できないのと一緒なの。それで、止むを得ずオナニーで精子を排出する必要が出てくる訳なの。というか、もう満タンになると、頭の中は射精したいという欲求で一杯になっちゃって、他のことが考

えられなくなるのよね。それが男子のムラムラの原因で、理性ではどうやっても止められない性衝動の源なのよ。」
「だから、もしオナニーで射精しないでいると、普通必ず夢精しちゃうわよね。あたしも夢精したことがあったわ。平均的な十代の男子の場合、二週間以上射精しないでいると、夢精しちゃうことが多いみたいね。人に依（よ）るんでしょうけど、一カ月も射精しないでいると、間違いなく夢精する筈よ。怜央はもう夢精したことがあるの？それとも女の子とセックスしているなら、まだ経験はないのかしら？・・・あれ、寝ているうちにパンツがベトベトになっちゃうんで、まさにオネショと一緒で、後始末が大変なのよね。射精する量によっては、パンツだけじゃなくてパジャマとか、ひどいと布団まで沁みちゃったりするから、そうなったら、それこそ悲劇よ。それに家族に知られちゃう可能性も高くなるし・・・。だから、あたしはなるべく夢精しないように、ムラムラしてきたら直ぐに・・・その、オナニーするようにしていたわ。そうね、もう忘れかけていたけど、あたしにも、そんなことを悩む日々があったのよね・・・。」
「でもこんなことは、成績優秀な怜央は、とっくに知っているわよね。だからその先というか、実際のところ、殆どの男子が何を考えてオナニーをしているのか、というより、オナニーにふけるようになる、あるいはオナニー中毒とも言うべき行動に走る原因が知りたいんでしょう？」
「・・・まあ、そういうことだけど・・・。」
「勿論、恋人が居たり、それどころか結婚していてもオナニーをしている人は沢山いるのも事実よ。あたしは男子のときには、セックスは一度だけしか経験がないし、そのときはもう去勢されてタマタマを抜かれちゃった後だったから、正確なところはわからないけどさ、でもその少ない経験と、それから女子になって、女子としてのセックスも経験してみてわかったことは、純粋な性的快感という意味では、セックスよりもオナニーのほうが上じゃないかって感じることも、十分にあるような気がするの。これは男の子も女の子も、

多分どっちでもそうなる気がするわ。そりゃそうよね。だって、オナニーならば、自分が一番気持ち良い刺激の方法を工夫できるし、さらに一番気持ち良いときに射精できるように、刺激を加減したりコントロールすることも自由なんだから・・・。」

「ただ、精神的な満足感、精神的な快感というのは、やはりオナニーでは得られないものよ。何をもって精神的な快感というのか、説明が難しいんだけど、そうね、肌を重ねることの安心感とか暖かさ、満足感、そういったものが、オナニーには欠けているんじゃないかしら。人間には、他人の肌の温もりが必要なのよ。」

「それと、男子ならば征服欲、支配欲というのかしら？・・・女性を自分のものにしたい、女性に自分の精子を注ぎ込みたい、妊娠させたい、そういう欲求もあるんじゃない？・・・逆に女子だったら、身体内に射精して貰いたい、子宮を精子で満たされたい、種付けされたい、そういった欲求なのかしら？」

「・・・確かに・・・。僕も、昔レズセックスしていたときに、そういう感覚は少しあった・・・。やっぱり、僕も性同一性障害者だったんだね、きっと・・・。」

「どうして急に、こんな話を聞きたくなったのかしら？・・・怜央も男子としてのオナニーを極めることにでもした訳なの？・・・それとも、まさか、女子との普通のセックスには、もう飽きちゃったとか？！？！」

「・・・いや、そういうことじゃないんだけど・・・、その・・・。」

どうも歯切れが悪いわ。あの自信満々だった怜央はどこに行っちゃったのかしら。あたしの知っている怜央のイメージというと、手術の前から、何につけてもカッコ良くて宝塚のトップスターのような雰囲気を常に漂わせていたし、交換初夜のときは、まるで手練のプレイボーイみたいに振る舞って、あたしを翻弄し、あたしの心を一瞬で完全に女の子に書き換えたのに、これじゃまるで初めての女性を前におどおどしている童貞ボーイだわ。

「覚えているかしら?・・・あの交換初夜のとき、先生に言われて怜央に奉仕してあげたわよね。怜央もあたしの手と口での奉仕で、あっと言う間に射精したじゃない。」
「よかったら、またあれをやってあげても良いわよ。・・・いや、もっとずっと凄い、頭が変になっちゃう位の快感を味わわせてあげようかしら?・・・男性の性感も、究めるとかなりのものなのよ。」
「・・・実はその、・・・このあいだ、・・・ちょっとその、困ったことがあってさ・・・。」
さんざん促したら、口が重かった怜央が、ぽつりぽつりと話しだしたのは、いざセックスをしようとしたら、おちんちんが勃たなくなっちゃったんだって。
「・・・こういうことって、良くあるのかな・・・。僕もまだ男子になりたてで、ペニスがどういうときにどうなるっていう経験なんてまったくないし、いくらレズセックスで男役をしていたにしても、ペニスがあった訳じゃないから、どうしてこうなっちゃうのか、どうしたら良いのか、まったくわからないんだ・・・。」
そういった怜央は、ついに自分の弱点を知られてしまったような雰囲気で、それこそあたしがきついことを述べたら、泣きだしちゃうんじゃないかと思うほどに弱り切っていた。
「じゃあ、あたしが見てあげるわよ。ここじゃ無理だから、また怜央の隠れ家に行く?」
「いや、今は多分、問題ない。というか、優稀を前にすると、こんなに元気になっているんだ。」
そう言って、ちょっと腰を浮かした怜央の股間は、確かにしっかりとテントを張っていた。周囲には誰も人がいなかったので、あたしは念のため、怜央の股間に手をやってみると、そこはガチガチに勃起していて、まるで折り畳み傘を入れたようだった。
「なんだ、別に大丈夫じゃない。どこが勃たないのよ。」
「いや、優稀相手だと、問題ないんだ。・・・多分・・・。このままベッドに行けば、その・・・、普通に・・・。」

「どういうこと？」

「優稀とは、交換初夜で最初に肌を重ねたよね。あのときは、確か４回やった・・・。」

「ええ、それであたしは、女性としての喜び、例えば男性の逞(たくま)しいものを挿(い)れられて、膣内射精(なかだし)される喜び、種付けされる喜び、好きな人の子供を産む幸せ、そういった感覚を身体に刻み込まれて、自分が女性になったんだっていう精神的な満足感を思い知らされたのよ。これは性的な快感もさりながら、精神的な快感というのかしら、心の満足感なんだと思ったわ。」

「で、その後、今度は元旦にお参りした後、千博君達の入籍の後で、僕の隠れ家に来て貰って、そこでまた、今度は３回やった・・・。」

「そうね、それで、あたしは怜央がもう運命の相手で、怜央と結婚できれば良いなって、本心からそう思うようになったの。あたしも実は怜央以外の相手と、セックスをしてみたのよ。といっても一人だけだけどね。ほら、怜央は交換初夜の後で、お互いにまだ若いんだし、結婚する前に、それぞれ男子、女子としての大人の経験をもっと重ねても良いんじゃないかって言ってたわよね。」

「で、あたしは怜央みたいに手慣れてはいないけど、昔からの知り合いを誘ってセックスしてみたんだ。でも、その相手とのセックスを何回か試してみて、身体の相性は悪くないし、性的な快感は、むしろ強かったような気もしたの。・・・といっても、それがテクニックなのか、おちんちんのサイズなのか、それとも身体全体の相性みたいなものなのか、そこまでは、まだよくわからないんだ。・・・でも決して嫌いな相手じゃないんで、その相手と肌を重ねるのは、とっても嬉しいの。」

「・・・なんだけど、やっぱり何だかしっくりこないという気がして、怜央はあたしにとって、特別な存在なんだって、そう強く思ったの。よく女の子は、最初の相手のことが忘れられないって言うけど、それもあるのかもしれない。なんてったって、あたしは怜央の性器を移植されて、そのあと交換初夜で怜央に女にされたんだし、

怜央に何度も愛されて、心の中を完全に書き換えられちゃったんだから、女の子としてのあたしは、一から十まで怜央によって作り出されたようなものなのよ。」
「だから、怜央があたしのこと、うざったいとか、邪魔だって思っていないなら、いずれは怜央と結婚したいなって、そう考えているの。・・・ごめんなさい。こんな話を聞くと、引いたり負担になっちゃったりするかしら？」
「いいや、そんなことはないさ。優稀と最初に会ったときから、ずっと言い続けているよね。僕の第一妻の座は、いつでも優稀のために空けてあるって。確かに一番最初、君が去勢される朝の校門のところで挨拶したときは、社交辞令とは言わないにしても、多少の責任感もあっての発言だったのは事実なんだけど、性転換した後の君を見て、さらに交換初夜で幾度も肌を重ねているうちに、本当に君のことが忘れられなくなっちゃったんだ。君のことを考えると、見てのとおり、こんなに興奮しちゃうし、君とセックスするのは、大歓迎で、このまま隠れ家にいけば、何度でも普通にできるだろう。」
「さっき、君が話したのと同じように、僕もまた君の子宮に射精を繰り返すことによって、きっと君のことが忘れられなくなったんだ。いや、君の心が書き換えられたのと同様、僕の心も、君しか受け付けなくなっちゃったに違いない。」
「君が別の男の子と経験したって話してくれたから、僕も話をするんだけど、実は男子になってから、君以外の女の子を四名、誘ってみたんだ。」
「さすが怜央ね。あたしは一人だけよ。それも男子のときに仲の良かった子だったんで、気軽に声をかけることができて、相手もあたしと男女の関係になるとは予想しないまま、お付き合いしてみないって誘って、そのままあたしが押し倒しちゃったようなものだけどね・・・。」
「僕の場合は、以前からレズセックスで女の子を誘っては、ホテルとか、例の隠れ家に連れ込んで、処女を食べちゃうのが一般的なパ

ターンだった・・・。」
「といっても、僕は相手が少しでも嫌がったり、躊躇するような素振りを見せたら、決して手を出さなかった。やはり女の子にとって、処女を捧げるっていうのは、大きな意味があるし、遊びで簡単に身体を許すような、そんな軽いセフレが欲しい訳じゃなかったから、たとえ結果的に一回きりの関係になっちゃうとしても、相手が僕に身体を許しても良い、いや、もっと積極的に、僕に抱かれたい、僕の手で破瓜させられたい、そう考えていると確信を持てた場合しか、手を出して来なかった。つまり相手も期待しているという、そういう相手を選んでいたんだ。」
「それは男子になっても一緒で、相手が少しでも怖がったり、僕とセックスすることに躊躇いがあれば、手を出そうという気にはならなかった。いや、これは男子になって、より慎重になったというほうが正しいだろう。やっぱり、レズセックスと違って、男女の関係ということは、万一の責任が生じるからね。・・・ただ、これは実際に男子になってみてわかったんだけど、レズセックスだと、仮に僕に食べられちゃうということを理解・納得していても、相手が女の子だからかもしれないけど、精神的なハードルが低いような感じはあった。」
「それはそうでしょうよ。同じ処女を食べられちゃうにしても、女の子が相手なら、そんなに身構えないだろうし、そもそも女の子はいくら相手の処女を奪うって思っても、やっぱり同性だから相手の身体を気遣いながら、不安にさせないような配慮をするじゃない。それに対して、思春期の男の子だと、どんなに相手のことを大事にするつもりでも、ギラギラした欲望が見えちゃうことが多いのよ。当然、女の子は本能的に怖がっちゃうんで、どうやって滾る性欲を抑えるか、なんていう指南書まである位なんだから。」
「うん、それは僕もそう感じた。だから、という訳でもないけど、男子になって、女子のときより相手をうまく誘えないという事実に、ちょっと驚いたんだ。それでも優稀との初夜の後、何とか４名の女

の子と、そういう関係になれるチャンスがあったんだ。」
「けど、その誰とも、いよいよベッドインとなると、ペニスが元気にならなくって、二人で裸になるところまで行っても、そこから先には進めなかった。」
「幸いにも、４人とも、僕がまだ男子になったばかりで、男子の身体に慣れていないっていう説明で納得してくれているらしいから、話は広がっていないけど、このままだと、いずれ僕がＥＤだっていう噂が立つのも時間の問題だ。」
「でも、あたしとは何の問題もないのよね。それに病院でも機能検査はきっちりやっているでしょう？・・・だとすれば、何かしらの精神的な問題で、一時的にできなくなっちゃった可能性が一番高いわね。」
「男子の精神って、実はものすごくデリケートで、その影響はてきめんにおちんちんに出るものなのよ。貰った冊子にも書いてあったと思うけど、ちょっとしたこと、たとえば何か気掛かりなことがあったり、驚いたり、普段と環境が変わったり、そんな些細(ささい)なことで勃(た)たなくなっちゃうものなのよ。」
「これ、知識としては、わりと知られていて、あちこちに書いてあったりするんだけど、実際に自分で経験してみると、イメージとのギャップに驚くことが多いのよね。ただ、体験談としてあまり出てこないのは、ほら、やっぱり男子としては面子もあるし、人に自分の失敗談なんて、あまり語りたがらないからじゃないかしら。特に男子同士だと、他人に対するコンプレックスになっちゃったりするんで、皆、どうしても隠したがるから・・・。」

第６９話　怜央の困惑（後書き）

ぎっくり腰騒動で忘れていましたが、この小説を投稿し出してから、丁度１年が経過しました。当初から、全体構想はありましたが、正直、ここまで続けられるかどうか、自分でも確信はなかったのが、何とかここまで話が続いてきて、全体の１／３程度までは来ているように思います。

このあとも、無理のない範囲で更新を続けられればと努力しますので、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

かなりニッチな内容の小説ですが、一人でも読者がいる限り、頑張る所存です。

第７０話　焦り

「どこまで参考になるかわからないけど、あたしの経験を話すわね。でも、あたし自身の経験と、あたしの相手の経験だから、ある程度は客観的というか普遍性があると思うわ。」
「まず、あたし自身のオナニー経験だけど、確か中学1年の夏休みに精通があったのよ。最初は夢精だったわ。それで、そのすぐ後からオナニーするようになって、中３の判定試験までは、ほとんど毎日、それも多いときには1日２回とか３回とかするのが日課になっていたわ。」
「でも、その間、性欲が滾（たぎ）ってしまいムラムラすることはしょっちゅうだったけど、おちんちんが勃（た）たなくなることは、あたしが記憶している限りでは、一度もなかったわ。つまり、何も特別なこと、というか、急にいつもと違う状況になったり、精神的に大きなショックを受けたりすることがなかったんでしょうね。」
「ところが、判定試験の結果、赤いカードを渡された日、見事に勃（た）たなくなっちゃったの。そりゃそうよね。これまで15年間、男の子で過ごしてきて、自分はずっと男の子だと思っていたのが、突然おちんちんとたまたまを切り取られちゃうことになったのよ。それも、自分ではそこそこ良い点数だと思ってたから、よもや女性化対象になるなんて、夢にも考えていなかったのに、いきなりカードを突きつけられて、明日には男子じゃなくなっちゃうと宣告されたんだから、あたしにとっては、天地がひっくり返るようなショックだった。もう自分の人生は、これでお終いで、自分は生きていく価値がないと、そこまで思い詰めたのよ。発作的に自殺しなかっただけ、褒（ほ）められても良い位だわ。」
「ごめん・・・。僕の所為（せい）だよね・・・。」

「それは違うわよ。前にも言ったでしょ。仮に怜央が男性化を望まなかったにしても、それはそれで誰か代わりの女子が繰り上がったりして、別の女子が対象者になっただけだわ。あたしとしては、怜央が相手で本当に良かったと思っているのよ。怜央が相手だからこそ、今のあたしがこんなに幸せなんだから。」

「それに、仮に女性になりたくなかったにしても、あたし自身がもう少し、例えばあと１０点でも良い点数だったら、そうはならなかったんだから、これは完全にあたしの問題であって、怜央が気に病むことじゃないわ・・・。第一、もしあたしがもう少し点数を取った場合、怜央は相手がいなくて女子のままだったのか、坂野君あたりが女性化対象者になっていたのか知らないけど、そんな未来を想像できる？・・・誰も幸せになれなかったんじゃないかしら・・・。だから、そのことは、もう言わないでね。あたしも怜央も、そしておそらくは坂野君も、皆がハッピーで幸せになるのは、これが唯一の正解だったのよ。」

「・・・ありがとう・・・。」

「ともかく、あの日、あたしは魂が抜けた脱け殻のような状態で自宅に戻ると、夕食まではどう過ごしたのか、記憶にないのよ。・・・で、夕食時に家族に話したんだけど、父さんに一瞬で見放されちゃって、手術承諾書にパパッと保護者のサインをされちゃったの。それであたしは張りつめていた気力も一気に萎えて、その後、風呂に入ったんだけど、もうおちんちんはうなだれたまま、まったく元気になる気配もなかったわ。」

「それで、ああ、あたしの男の子としての人生は、もうこれで終わっちゃったんだって思って、涙がとまらなくなっちゃったの。あたしとしては、男の子最後のオナニーをしておこうかって考えたんだけど、本当に見事なまでに勃（た）たないのよね・・・。ＥＤって、精神的なものが９割だって言われる所以（ゆえん）だと思ったわ。」

「でも、その後、ベッドで震えて泣いていたら、母さんがやってきて慰めてくれたの。それで随分落ち付いて、ようやく寝られたの。

そうしたら、翌朝には、おちんちんが復活して、ギンギンに勃起したんで、急いで男の子としての最後のオナニーをしたわ。これまでにない位、物凄くいっぱい射精して、その男の子として最後に射精した精液は、小さい瓶に入れて取ってあるのよ。」

「その後、登校して去勢手術でたまたまを抜かれちゃったんだけど、手術の様子をしっかり見ていなさいって言われて、自分のたまたまが切り取られるところを見させられたの。あとで聞いた話だと、気絶しちゃう子が多いみたいね。でも、あたしは何とか最後までじっと見ていたわ。

　麻酔をかけて、袋に切れ込みを入れ、そこからたまたまを押し出して、血管と輸精管をチョキンて切っちゃうのよ。両方のたまたまを切り取るところを見ちゃったら、さすがにもうおちんちんが勃(た)つなんて、あり得ないと思ったわ。だって男性じゃなくなっちゃった、その瞬間をばっちり記憶させられたんだから。」

「そうだったんだ。知らなかった。・・・まるで拷問だね。・・・随分辛い体験だったんだね。・・・女性化する男の子は、皆その経験をしているの？・・・だとしたら、そんな酷(ひど)い経験をさせちゃった僕が、一生ＥＤになったとしても、仕方がないよ。きっと天罰なんだ・・・。」

「それがそうでもないの。その後、精嚢に残った精子を全部出して貰うって言われて、おちんちんを扱(しご)かれたんだけど、最初はショックからか、おちんちんがまったく反応しなくて、いくら刺激されても元気にはならなかった。」

「でも、お尻からプラグを入れられて、前立腺をグリグリとされたら、一瞬でギンギンに勃起して、あっと言う間に大量の射精をさせられたわ。搾り取られるって言うのかしら？・・・とにかく、無理やり射精させられたっていう感じだったわ。しかも、それが2回よ。１５分位の間隔は開けてだったけど、前立腺を刺激されると、男の子はどんな状態でも、強制的に勃起させられて射精反応が出るんだって言われたわ。」

「とにかく、それで2回連続で射精させられて、最初の精液はまだ精子が沢山入っているから、白濁してどろっとしているけど、二回目の精液はもう精子がいないから、透明でサラサラした、我慢汁というか潮吹きのような液体なんだって言われたわ。」
「その後、先生からは、もう女性ホルモンが優勢になるから、女の子に欲情するようなことはなくなるとか、ムラムラしたり射精したくなることは、ぐっと減ってくる筈だと言われたんだけど、数日後、本格的な手術までの間に、以前からお付き合いしていた女子と初体験をした話は、手術のとき、ちょっと話したわよね。」
「うん、覚えている。あのときは、それまで完全に君に対して優位を保っていると信じて疑わなかったのに、一気に打ちのめされて、敗北したような気がしたんだ・・・。」
「そういうふうに感じたとしたら、やっぱり怜央は、手術する前から男の子の感覚、男の子の精神構造を持っていたということね。性同一性障害だった証明だわ。」
「・・・ごめん・・・。」
「冗談よ。・・・ま、それはそうとして、その相手・・・、あっ、彼女のプライバシーがあるから、誰かは内緒よ。・・・とにかく、彼女に誘われて、彼女の家で男の子としての初体験をして、童貞を卒業することができたの。あれには感激したわ。」
「そのとき、あたしはもうその女の子とは別れる覚悟で出かけてきたの。だって、女の子になっちゃったら、怜央はどうか知らないけど、レズセックスで愛し合うなんて、想像もできなかったし、相手もそんなことは望んでいないのもわかっていた。第一、服装も完全に女物のワンピースで、くまさんパンティを履いて出かけたんだから・・・。まだブラはつけていなかったけど・・・。女の子の出で立ちでやってきたあたしをみて、相手も驚いていたわ。」
「でも、彼女の家にはじめて入れてくれて、憧れの彼女の部屋で、男の子としての最後に、思い残しのないように思い出をつくろうって言ってくれて、あたしに処女を捧げてくれたの。勿論、あたしも

童貞だったわ。だから、処女と童貞のカップルが、お互いのはじめてを捧げ合ったの。しかも、いろいろな体位も試させてくれたりしてね、あれは男子として最初で最後になるあたしに、好きに体験させてくれたんだって気がついたの。本当に嬉しかったわ。」
「それまでは、童貞のまま、一度も使わないうちに切り取られちゃうって、涙してたんだけど、これでもう前を向いて、手術に臨もうって決意することができたのよ。」
「そうだったんだ・・・。」
「実は、たまたまを抜かれちゃってから、その日までは、ムラムラすることは勿論、おちんちんが元気になるなんてことは、まったく気配すら感じられなかった。だから、先生が話したとおり、もうあたしは、心も身体も女の子になる準備が着々と進んでいるんだと思っていたけど、その日そのときは彼女を相手に、しっかりと勃起して、2度も射精したわ。勿論、たまたまが抜かれちゃってるんで、もう精子は入っていなかった筈だけど、射精する快感はまったく男子のときと変わらなかったわ。」
「だから、おちんちんが勃たなくなったり、また直ぐに復活したりするのは、本当にちょっとした、そのときの気の持ち方一つなんだと思うわ。」
「そうなのかなぁ・・・。」

「もう一つ、別の男の子の例もあるのよ。・・・怜央に勧められて、あたしも女の子になってから、怜央以外の男の子とも、おつきあいしてみようかと考えたの。それで、昔から仲の良かった男の子・・・、あ、この子もプライバシーの関係で、名前は勘弁して欲しいんだけど、その彼を誘って、お付き合いするようになり、彼の部屋で肌を重ねてみたの。彼も童貞だったわ。」
「優稀も隅に置けないね。男子のときには土壇場で童貞を卒業して、しかも処女を食べちゃったんでしょ。それで女子になったら僕との初夜で処女喪失と同時に僕の童貞も捧げて貰って、その後直ぐに他

の男の子としっかり経験して、今度は自分から二人目の童貞を食べちゃったなんて、僕は優稀以外の女の子とは、できなくなっちゃったんで、完全に逆転されちゃったね。」

「混ぜっ返さないで。そもそも他の子との経験を積むと良いって言ったのは怜央じゃない。」

「ごめん・・・。優稀を揶揄（やゆ）するつもりじゃなかったんだ・・・。むしろ、これは、これまでさんざんレズセックスで遊び惚（ほう）けて、何名もの処女を食べちゃってきた僕に天罰が下ったということなんだと思ってる。・・・いや、天罰じゃなくて、これが当然の、本来あるべき正しい男女関係なんだろうな。」

「そんなことないわよ。もしそれが事実なら、あたしはどうなっちゃうの？・・・女性になったら、急に遊び人になって、それどころかビッチになっちゃったってことじゃない？」

「そもそも、大人になったなら、大人の恋愛を経験すべきだって言ったのは怜央でしょ？・・・勿論、取っかえ引っかえしろっていう意味じゃないにしても、複数の相手とお付き合いをする経験って、本命の人をより良く知るためにも、ある程度は必要だと思うわ。・・・あ、といっても、千博達のような例もあるのかしら・・・。」

「脱線したから話を戻すと、それでお付き合いすることになった男の子の家に行って、といっても仲が良い友達だったから、彼の部屋には何度もお邪魔して、一緒にゲームとかしたことがあるんだけど、そこであたしが彼を押し倒しちゃったっていうのが実態なのかしらね。彼のベッドに腰掛けて、「あたしじゃ嫌？」って聞きながらディープキスをしていたら、彼、いきなり暴発しちゃったのよ。」

「ふぅん。彼は優稀のこと、どう思っていたの？」

「もともと仲が良かったし、あたしからお付き合いしないって告ったら、僕なんかで良いの？って、感激していたから、少なくともあたしに好意は持ってくれていたのは間違いないわね。でも、よもや、そんなに早いペースでディープキスをして、その先に進むことになるとは、思ってもいなかったらしくて、彼にしてみれば、これまで

の男友達の延長線上で、一緒にゲームしたり、デートで映画を見たりする程度と考えていたみたい。」
「それで、ベッドの上で抱き合ってディープキスをしていたら、彼がいきなり暴発しちゃって、それで彼が泣きだしちゃったんだけど、それはあたしから、男子がそうなるのは、ごく自然なことだから、気にすることはないって慰めたら、気を取り直してくれたの。」
「それで、彼はシャワーを浴びることになって、あたしは精液がついちゃったスカートを軽く洗って、もう一度ベッドでやり直すことにしたんだけど、そうしたら今度は彼のおちんちんが元気にならなくなっちゃったのよ。彼、ショックであたしに泣きついて、号泣しちゃったわ・・・。」
「その気持ち、わかる気がする・・・。」
「でも、これって、〝初体験あるある〟なのよね。緊張したり、ショックを受けたりすると、男の子はてきめんにおちんちんが言うことをきかなくなっちゃうの。思春期の男の子の精神って、それくらいデリケートで繊細なのよ。」
「僕もそうなのかなぁ・・・。」
「それで、あたしは、彼にベッドに横になって貰って、リラックスするよう軽く眼を瞑(つむ)って貰うと、全身を少しずつ刺激していって、彼のおちんちんが少しずつ反応するのを確認してから、最後にあたしも去勢手術の最後でされた秘儀、前立腺への刺激をやってあげたの。」
「それで彼のおちんちんは一気に復活して、その後は無事、あたしとセックスすることができたわ。」
「さっきも話したわよね。この前立腺を刺激されるのは、普通の男の子にとっては、まず経験したことがない感覚で、先生は女の子がセックスするときの性的快感に近いものがあるって言っていたけど、とにかくここを刺激されると、男子は必ず勃起して射精反応があるのよ。だから、どうしてもＥＤで勃(た)たなくなっちゃったときには、ここを刺激すると良いかもしれないわ。といっても、自分で刺激す

るのは難しいのよね。何だったら、あとでやってあげましょうか？」
「うん、それはとても興味がある。けど、その前に、まずは一人でやるオナニーの方法を教えてくれる？・・・お尻の刺激は、相手に頼まなければならないでしょ？・・・それはさすがに、処女の女の子にはハードルが高そうだから、まずは自分で自分のペニスを刺激して、勃(た)たせたり射精したりする方法をいろいろと試してみたいんだ。優稀から貰ったペニスだから、優稀がやっていた方法なら、勃(た)ちやすいんじゃないかな・・・。」
「わかったわ。それなら、もう忘れてきちゃってるんだけど、あたしがこれまで男の子の時代に自分でやったことのあるオナニーの方法や、何を考えてオナニーをしていたか、いわゆるオカズよね、そういうのを、覚えている限り全部教えてあげる。やっぱり、怜央の隠れ家に移動しましょ。」

第７１話　涙の怜央（前書き）

仕事にもプライベートにも、ちょっといろいろあって、更新が遅れてしまいました。
それで、連休中に執筆はできなかった代わりに、これまでの自分の作品を最初から通して、全部読み返してみました。
すると、怜央のＥＤについては、まだ書き足りないことが多々あるような気がしてきました。
これは、今後の物語の展開において、重要な軸となる伏線であり、ここできちんと定義しておくべきではないかと考えたため、勝美の妊娠の前に、話を割り込んで追加することとしました。（時系列としてそうなるため。）
今回の第７１話と、多分もう１話、今週末に追加で割り込み更新を行い、現在の第７１話～第７３話は、２話繰り下がって第７３話～第７５話となります。

第７１話　涙の怜央

怜央と二人で、また例の秘密の隠れ家にやってきた。怜央のおちんちんの具合を見るのが目的だから、早速、二階に上がって怜央と肌を重ねてみることにした。

　布団の横で服を脱いで、しわにならないよう丁寧に畳んでいると、やはり服を脱いだ怜央が、もうあそこをギンギンにして、鼻息を荒くしている。これまで怜央とは2回セックスをしたけど、いつも余裕があって、あたしのことを手玉に取っていたわ。怜央の手にかかると、あたしはもう良いように弄ばれて、連続イキ状態にさせられちゃった挙げ句、何が何だかわからないうちに卑猥な言葉を叫びながら怜央のおちんちんを求めるというのが常だったのに、どうしちゃったのかしら。そう、卑近な例えだと、これまでは手練のプレイボーイという印象だったのが、急に童貞ボーイみたいになっちゃって、何だか随分雰囲気が違う気がした。滾っているというのかしら、はじめて女性の裸を見たわけでもないのに、眼が少し怖い気がする。

「どうしたの？・・・何だかいつもと様子が違うみたいだけど、具合でも悪いの？」

「優稀！」

　そう短く叫ぶと、怜央があたしを強く抱きしめ、かなり性急なキスをしてきた。こういう、ちょっと乱暴な怜央も悪くないな、と考えながら、あたしもそれに応えて、身体を強く密着させるように怜央を抱き返して、舌を入れて吸いあった。すると・・・。

「んんっ。・・・んぐっ。・・・ぅんっ。・・・ぅくっ。」

　キスをしているので口を塞がれている状態の怜央が、呻くような、くぐもった声を上げながら、全身をビクンッ、ビクンッと痙攣させると、いきなり射精した。まだ挿入もしていなくて、あたしの身体と怜央の身体に挟まれた状態だった怜央のおちんちんから吹き出し

た精液で、二人のお腹周りは大量の精液まみれとなり、呆然とした状態の怜央が言葉を失っていた。

「あっ、怜央。射精しちゃったの？・・・そんなに溜まってたんだ・・・。でも、おちんちんは元気じゃない。どこも悪いところなんて、ないと思うわよ？・・・EDだなんて、何かの間違いじゃないの？」

布団にはタオルが敷いてあって、そっちは大丈夫そうだったんで、とにかくお腹周りを手近のティッシュで後始末をするため、まだガチガチのビンビン状態にある怜央のおちんちんを優しく拭いてあげた。射精したばかりで敏感になっている亀頭を拭いたら、我慢できなさそうな顔で「ぁっ、あっ、ぅうっ、あぁっ。」って声を出して悶えているのが、結構かわいい。でも、この状態ならすぐにあたしの中に挿れることができるわねって考えていたら、怜央が泣きそうな顔をしながら、涙声で言った。

「ごっ、ごめんっ、暴発しちゃってっ。・・・ぼっ、僕っ、こんなの初めてで・・・。」

「気にしないで。男の子は、こうなるのが普通よ。むしろ、これまでの怜央は妙に慣れているというか、プレイボーイのようで、本音を言うとちょっと引くところがあったのよ。遊び人の怜央も、決して嫌いじゃないけどさ、あたしはむしろ、今の怜央のほうが好き。・・・それにしても、随分いっぱい射精したわね。あたしがあげたおちんちんとたまたまは、そんなに性能が良かったのかしら。」

「いや、さっきから話してるよね。・・・実は僕、もう3週間も射精していないんだ。お正月に優稀とセックスしたでしょ。あれから、何名かの女の子に声をかけて、そのうち二人とはこの隠れ家に連れてくるまで行ったんだけど、土壇場で勃たなくなっちゃって、それで結局できなかった。」

「その前に、クリスマスのときも、やはり優稀以外の子とセックスしようと声をかけて、ホテルに行ったんだけど、役立たずになっちゃって、最後までは行っていないんだ。だから、僕は男の子になってから、まだ優稀との2回しか、セックスはしていないんだ。」

「その間、一人でオナニーしてみようかと考えたんだけど、それもうまく行かない。勿論、僕がまだ男の子のオナニーに慣れていないから、というのもあるんだろうけど、それ以前に勃起してオナニーができるような状況にはならないんだ。だから、もうとっくに満タンになっちゃって、ちょっとしたことでもムラムラして、衝動を抑えられない。それなのに、ペニスは元気になってくれない。実は先週、はじめて夢精したんだ。つまり射精はできていて、でも勃たないっていう、生殺しの状態なんだ。今も、優稀に襲いかかりそうになった。」

「あたしはそれでもよかったわよ。痛いのは嫌だけど、乱暴に求められるのは、決して嫌じゃないわ。」

「ありがとう。でも、毎回そういう訳にもいかないだろう。だから、オナニーをしてみようと努力したんだ。ふにゃふにゃでも、無理して擦（こす）っていると、何となく射精（で）そうな雰囲気にはなってくる。だから、このまま刺激を続ければ、あるいは射精に至るのかもしれない。それができるようになれば、まずはこの辛い状況は何とかなる。でも、仮にオナニーが成功しても、とにかくペニスが元気にならない。つまり、優稀以外の女性とはどうやってもできないんだ！」

「そんなことって、あるのかしら？・・・でも、お正月もそうだけど、あたしとなら、大丈夫なんでしょ？・・・今もこんなにギンギンでビンビンに勃起しているし、それどころか暴発しちゃった上に、まだ全然納まらないわよね？」

「そう。だから困惑しているんだ。きっと、優稀が相手なら、オナニーもできればセックスも普通にできる。でも、優稀がいなくなると、途端にふにゃふにゃで元気がなくなっちゃうし、射精すら難しくなる。」

「これは優稀に相談しても、あまり意味がないのはわかっている。一応、電話では僕の執刀医だった井上先生と、あのカウンセリング担当の向井先生に問い合わせてみたんだけど、機能的に問題ないことは手術のときに確認しているし、そもそも優稀とはできていると

いうことで、何か精神的な問題としか考えられないって言われたんだ。今度、向井先生と中山先生の二人に、相談に行くことになっていて、アポも取ってるんだけど、優稀相手だと大丈夫だっていうところが、不思議だって言われていて、最近、何か変わった体験はありませんでしたかって聞かれてる。」
「だから、もしかすると、そのとき、優稀に一緒に来て貰って、他の女の子とは何が違うのか、優稀にも問診をお願いするかもしれない。」
「勿論、あたしでよければ、いつでも同行するわ。でも、何となく、何か別の原因があるような気がしてならないんだけど・・・。だって、あたしとの交換初夜のときは、あんなに余裕たっぷりで、お正月のときもあたしをさんざん楽しませてくれたじゃない。」
「あたし自身は、怜央に勧められたから、他の男子ともお付き合いをしているけど、やっぱりあたしはもう怜央しかいないと、そう心から感じているわ。と言っても、あたしは女子だからそれでセックスができたりできなかったり変化するようなことはなくって、相手から挿(い)れられるのを待つだけの受身の側でしかないけど、怜央は男子でしょ。相手のことを考えているうちに、自然と心にロックがかかっちゃうなんてことはないのかしら・・・。」
　言いながら、男子の生理として、それはないとあたしも考えていた。もう記憶がかなり薄れてきちゃったけど、男子というのはとにかく沢山の女の子の身体の奥深くに膣内射精(なかだし)して、自分の遺伝子を持った子孫を複数残したいっていう本能があるし、性器への物理的な刺激をされただけでも、自分の意志に反して射精させられちゃう生き物だった筈だわ。第一、嫌いな相手ならともかく、自分からセックスしようと思って誘った相手を前にして勃たなくなるなんて、そんなことが本当にあるのかしら。
「だから、優稀とセックスができれば良いけど、まだ結婚も同棲もしていないのに、毎日するわけにもいかないから、せめて優稀に指南して貰えれば、オナニーで処理することはできるようになるんじ

ゃないかって、そう考えたんだ。」

「わかったわ。じゃあ、まずはあたしと普通にセックスしてみて、それからオナニーの方法をいろいろと教えてあげる。」

――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――――――

「だいたい、こんなところかしらね。いま、一生懸命思い出しているんだけど、あたしだって男の子のとき、そんなにいろいろなオナニーの方法を試していたわけじゃないわ。今教えてあげたとおり、あたしが主にやっていたのは、まず普通に自分の右手で擦(こす)るというか扱(しご)く、一番オーソドックスな方法、それから床オナニーといって、腹這いになってベッドにおちんちんを擦(こす)りつける方法。・・・これは擦(こす)りつけるというよりも、ベッドと自分の身体でおちんちんを潰すように圧迫するというのが正確な表現だわね。それに、あとは、たまにお風呂でやっていた、シャワーを強くして先端の敏感なところを中心にイクまで水流を当てる方法位かしら・・・。」

　怜央の状況を理解したんで、まずは怜央と普通にセックスをして、しっかり膣内(なかだし)射精して貰い、怜央のおちんちんが何も問題なく機能していることを確認したあと、あたしは昔、といってもほんの3カ月前までの日常だったんだけど、男の子のときには毎日のようにしていたオナニーの方法やバリエーションについて、懇切丁寧に教えてあげた。もうかなり忘れかけていたのに驚いたけど、でも頭では忘れたように感じていても、身についたしぐさなんかは、案外身体が覚えていて、怜央のおちんちんを握って擦(こす)るときの力の入れ方とか、どこをどう刺激すると気持ちが良いかなんていうことは、怜央にとっては初めての経験だったみたい。最初はあたしの言うことを、そのまま何とかやってみようとして必死だった怜央だけど、だんだん慣れてくると、そこは男の子の本能なのかしら、あたしが自分でやっていたのと同じような感じで、自分から工夫しておちんちんを刺激する方法をいろいろと試してみて、気がついたら2時間位の間に5回も射精していたわ。

「だいぶ慣れてきたみたいね。でも、この短時間に5回も射精して、疲れないかしら？・・・さっきあたしと1回やっているから、都合6回の射精よね。あたし、男の子だったときに連続射精したのは、せいぜい3回程度だったわ。それともあたしのあげたおちんちんとたまたまは、怜央の身体に馴染んで、性能が上がったのかしら。まるで接ぎ木みたいね。」

「いや、そういう訳じゃないさ。このところずっと射精していなかったんで、たっぷり溜まっていただけじゃないかな。でも、もう僕だって、そろそろ限界だよ。ただ優稀が相手だと、まったく普通に勃起するし、ちょっとした刺激でも簡単に射精する。つまり僕たちの年齢の、思春期男子として通常の反応なんだ。それなのに他の女の子には反応しない。だからオナニーを試したかったんだ。」

「そうね。でも、今、教えたオナニーの方法なんだけど、実はどれをやるにしても、ひとつ大きなポイントがあるの。女の子もオナニーするときは似たようなところがあるのは確かだけど、実は男の子は女の子以上に、脳で興奮するというのかしら、イメージが大事なのよ。怜央もあたしも、両方の性別を経験した訳だから、あたしが何を言いたいのか、多分理解できる筈だけど、男の子も女の子も、性欲とか性的興奮というのは、二つの要因が大きく関係しているんだと思うわ。まず第一がフェロモンの働き。フェロモンは多くの場合、異性の匂いと密接な関係があるけど、匂いそのものではなく、これは異性を引きつけ、異性を性的に興奮させる特殊なホルモンの一種だから、無臭でもフェロモンを吸い込むと、性的興奮が起きたり、性欲が高まるものよね。」

「といっても、フェロモンを吸うときは、必ず側に異性の相手が居る筈なんで、その匂いというのかしら、それも一緒に感じている筈で、だからフェロモンは匂いだと考えても、まあ間違いじゃないかもしれない。」

「それはともかく、フェロモンは、必ず異性の相手がいなくては吸うことがないけど、オナニーをするときって、普通は一人じゃない。

まあ、同性の友達同士で一緒にオナニーするというのも、たまにあるだろうし、特に男の子だと、同じオカズをつかって複数名で一緒にすることもあるけど、そういう例外的な話を抜きにすると、まず他人には見せない、見られたくない行為の筆頭じゃない？」
「だから、性的興奮を引き起こすもう一つの要因、すなわち想像力というかイメージが、とても大事になってくるの。」
「うん、それはわかる。女の子だって、一人でオナニーするときは、素敵な男性・・・どんな人を素敵な男性と考えるかは、その子の趣味もあるだろうけど・・・に抱かれている様子とかを想像するのが一般的だよね。・・・中には自分がレイプされているところを想像して興奮する性癖の子だって、いるかもしれないけど・・・。」
「そうね、何をイメージするかはともかく、それは女の子も男の子も、本質的には変わりないわ。でも、女の子は、別に毎日、性欲が昂進して、オナニーをしたいってムラムラするようなことは、殆どないじゃない。むしろ女の子のオナニーは、特定の男性・・・それは付き合っている相手かもしれないし、アイドルスターや素敵な王子様かもしれないし、あるいは年上の渋いおじさまかもしれないけど・・・、そういう特定の相手を思い浮かべて、その人との素敵な体験を思い浮かべるのが一般的じゃない？」
「でも、男の子の場合、特にあたしたちの年代の、童貞ボーイとか、童貞と殆ど変わらない程度の経験しかない子の場合は、特定の相手じゃなくても、とにかく異性との性体験をイメージして、それでオナニーをするものなの。それは素敵な相手とか、そういう次元じゃなくて、言葉は悪いけど、本当に肉欲の固まり、煩悩の固まりであって、とにかく射精したい、できればセックスしたい、女の子の中に突っ込みたい、そういったエッチな感情が頭の中で渦巻いていて、それがムラムラとした欲求となって自分でも制御ができなくなるのよ。」
「だからオナニーをするときは、　女性と絡んでいる状況・・・合意の上かもしれないし、レイプや、場合によったら逆レイプかもし

れないけど・・・そういう状態になっているとイメージしながらするのが一般的なのよ。しかも男の子の生理として、精子は72時間で満タンになっちゃうんだから、健康ならば毎日でもムラムラして射精したくなる生き物でしょう。となると、仮に特定の相手がいる場合だったとしても、その相手だけじゃなくて、いろいろな相手との変わった行為を想像しながらオナニーすることは一般的なの。」

「確かに、言われてみれば、僕がオナニーしようとしたときは、ただペニスを扱くことだけに意識が集中していて、何も想像もしなければ、特に考えもしていなかった気がする。」

「それだと、なかなか上手くいかない筈よ。例えばあたしとセックスしているところを想像したり、あたしに奉仕されているところを想像したりするだけでも、随分違う筈だし、他の女の子を想像して、その相手に自分の好きなことをさせてみたり、あるいは単にその相手を裸にすることを想像するだけでも、随分違う筈だわ。」

「わかった。それは優稀がいないときに、自分で試してみる。」

「じゃあ最後に、もし良かったらなんだけど、とっておきの必殺技を経験してみない？・・・嫌ならこのまま帰るけど、怜央は女の子のときは処女だったんでしょ。なら男の子になった今、女の子の性的快感というか、挿入される感覚を、擬似的に体験できる方法があるんだけど、試してみる気はある？」

「それは、さっき話していた前立腺の刺激のこと？」

「そう。おちんちんが元気なくなっちゃっても、男の子はここを刺激されると、強制的に射精反応が起きるという、魔法のような器官なのよ。あたしは去勢手術でタマを抜かれた直後に、もうどうやってもおちんちんが元気になることなんか、考えられない位、心が折れちゃっていたのに、これをやられてギンギンのバキバキに勃起させられて、あっと言う間に射精させられたのよ。何というか、暴力的な快感で、抗うことができないまま、無理矢理精液を絞り取られちゃって、泣きたくなるような辛い感覚だったわ。」

「だから、無理強いはしない。下手すると怜央の心も折れちゃうかもしれないし、実際、千博がこれをされて心がボロボロになっちゃったらしいの。」

まあ、千博の場合は勝美にされたんだから、夫婦の関係だけど、怜央は大丈夫かしら。でも、これ、おちんちんが元気ないときに、無理矢理でもギンギンに勃たせるための必殺技であることは間違いないのよね・・・。

第７２話　晶の決意（前書き）

この２話（第７１話と第７２話）が割り込み投稿されて、怜央の話が終わります。
次からは、繰り下がった第７５話の次の、第７６話を投稿することになります。

第72話　晶の決意

　怜央は大丈夫だったかしら。最後はもう眼の焦点があっていないような雰囲気で、受け答えも変だったけど、まあ自分の隠れ家なんだし、辛かったら今日はあそこに泊まることもできるでしょう。前に聞いたけど、レズセックスでお泊まりして、あそこから直接登校したこともあったようだし。
　結局、怜央に前立腺の快感を体験して貰うこととなった。怜央は最初、ちょっと逡巡していたけど、それは別に心が折れるとか、男子としてのプライドとか、そういうあたしが心配した次元の話ではなく、前立腺を刺激するのが自分では難しいので、相手の女性にやって貰わなければならず、それでは怜央的にはあまり意味がないという、そういった心配だったみたい。
　それで、自分で刺激することも不可能じゃないし、どうしてもというなら、プラグのようなものとか、あるいは専用の器具もあるみたいで、自分でオナニーのときに使って楽しんでいる男性もいるようだと話したら、ちょっと興味を持ったらしいの。
　で、まず四つん這いになって貰い、後ろに回ったあたしは怜央のおしりの穴に、つばと怜央の精液をたっぷりつけた人指し指と中指の二本をゆっくり挿入して、前立腺を探した。
　最初はそっと、撫でるような優しさでゆっくりマッサージをはじめて、だんだん強く押し込むように、揉み上げる刺激にすると、元気がなかった怜央のおちんちんが、ぐんぐんと大きく硬くなってきて、それに合わせて怜央も喘ぎ声をあげだした。
　怜央は、もう6回も射精して、さすがにおちんちんが元気になるとは思っていなかったらしくて、喘ぎながらも驚いていたんだけど、最初は「凄い」とか「こんなに効果があるとは思わなかった」などと、まだ余裕があったのに、しばらく続けていたら、だんだん声に

余裕がなくなってきて、「やっ、だめっ。」とか「あっ、あんっ。」とか、本当に喘ぎ声しか出さなくなってきちゃった。そのうち、泣きそうな、切なそうな声に変わり、「ひっ、ぃひっ、ぁあっ。」とか「もっ、もうっ、あへっ、ぁあーっ、いっ、イクっ、イクっ。」と言い出して、たらたらと出ていたカウパー氏線液（いわゆる我慢汁）が白濁してきた。これって、もうあたしにはわからない感覚だけど、寛のときでも同じことが起きていて、つまりだらだらと射精が始まって、しかも前立腺への刺激が続いているため、ずっと射精が止まらない状態なのよね。怜央はなんだか逃げようとしていたみたいなんだけど、バックからお尻の穴を確保しているあたしから逃れることなんて、できるわけない。指をぐっと曲げてしまえば、もう抜けないわけだし・・・。それで、そのまま、ざっと5分も前立腺への刺激を続けたら、やっぱり最後、怜央はもう何を話しているのか、まったく理解不能な喚き声をあげるだけの獣のようになっちゃった。ほとんど意味不明なんだけど、ときどき聞き取れるのは、とても他人には教えられないような、卑猥な言葉を全力で叫んでいるということに気付いて、そろそろ怜央が出した精液の量もコップ半分位になってきたんで、この辺りで開放してあげようと考え、右手の指に力を込めるとともに、左手で怜央のおちんちんを握って、亀頭のエラの部分を強く扱いたら、怜央は吠えるような声を上げて泡を吹き、白目を剥いて失神しちゃった。でも、終わって布団に崩れ落ちた怜央のおちんちんは、まだギンギンに勃っていて、収まる雰囲気はまったくない。あたしはちょっとした好奇心から、おちんちんをそっと触ったら、気絶したままなのに「んぐっ、ぁひっ。」と声を上げて、またしてもドピュッと射精しちゃった。あれってきっと、連続イキ状態になったままで、おちんちんが超敏感になっちゃって、ちょっと触られただけでも射精しちゃったんでしょうね。

　あたしはその後、怜央が蒔き散らかした精液を拭き取ったり、いろいろと後始末をして、ようやく怜央が意識を取り戻したんで（といっても、まだ眼の焦点が完全に合っていない雰囲気で、受け答え

も何となくおかしい）、怜央にはこのまましばらく布団で休んでいるように告げて、怜央の隠れ家を後にした。
本当は怜央を残していくことに、少し不安を感じたんだけど、怜央がもう大丈夫だと言い張るし、あたしもそろそろ戻らないと、家で夕食になっちゃうんで（女子になったからには、あたしも夕食の支度を手伝う必要があるから）、そろそろ失礼することにした。

でも、あの前立腺マッサージを延々続けると、寛も怜央も最後は頭がバカになっちゃうみたいね。あれってずっと続けていると、本当に精神が壊れちゃうのかしら。女の子の連続イキはいつも経験してるけど、男の子の連続イキって、どんなものなのかしら。男の子だったときに、経験してみたかった気もするけど・・・。もう射精の感覚も忘れてきちゃったんで、射精がずっと続くと、どんなふうになるのか、想像すらできないけど、怜央と寛、二人の様子からは、かなり辛いみたいね。何となく、拷問に使えそうなんだけど、そんなエロ小説って、どこかにないかしら・・・。今度、ノクターンのサイトでも探してみようっと・・・。

――――――――――――――――――――――――――

家に戻ったのは7時を回っていた。父さんと義朗兄さんはもう風呂を済ませていて、千博はもう居ないので、また晶と一緒に風呂に入ることにした。芳恵さんと母さんは二人で夕食の支度の最中で、手伝おうとしたら、手は足りているから、晶と一緒に、先に風呂を済ませちゃいなさいって言ってくれた。二人していっぺんに風呂を済ませちゃえば、夕食に間に合うだろうと考えて、晶に声をかけたんだけど・・・。

「ねぇ、優稀おにい、ぁっ、お姉ちゃん。・・・あのっ、あのさあ

っ。・・・そのっ。・・・手術したところ、もう一度、よく見たいんだけど・・・。見せてくれない？・・・だめ？」
さっきから、あたしの身体をチラチラと見ていた晶が、意を決したように頼んできた。特に赤い顔をしている訳ではないので、恥ずかしがっているということではなさそうなんだけど、でもこの躊躇は、やっぱり女性の性器を見てみたいという衝動が、他人に頼むような内容ではないことを認識している証拠でしょうね。小2ともなれば、そろそろ異性（特にその性器）に興味を持つ年頃ではあるし・・・。

最近、芳恵さんと母さんは二人で協力して夕食の支度をすることが多くなって（以前は二人で協力することはめったになくて、日によって分担していた）、今日もそうしているんで、あたしが家事を手伝う必要は、減ってきている。風呂の順番については、父さんは、男子が先、女子が後ということは、厳格に考えているようだけど、男子の中、女子の中での順番は、そんなにこだわらないし、あたしが晶の次に（つまり母さんたちを飛ばして）入浴しても、注意されたことはない。実際、今も芳恵さんと母さんから、晶と一緒に、先に入りなさいと言われたところだし。
それよりも、晶があたしの股間に興味を持つようになったのが、ちょっと気になった。性教育の授業が始まるのは小4からだった筈だから、まだ小2の晶には、少し早い気もしたけど、でも興味が出たときに疑問を解消してあげるのは、教育効果という意味で最適な筈だから、すべてじっくり見せてあげようと心に決めた。
「いいわよ。身体が冷えちゃうと困るから、よく温まってからね。」
手術から2カ月以上経って、傷はもうまったくわからないし、剃られちゃった毛も殆ど元に戻ってきたので、今ではどこからどう見ても、普通の女性の性器と変わりない筈だわ。あたしは、晶もこういうことに興味を持つようになったんだと、弟の成長を感慨深く思いながら、二人して急いで身体を洗い、湯船に漬かった。
晶の視線が、あたしの身体に突き刺さるようで、嫌でも自分の身

体の変化を意識するんだけど、この2カ月間で、本当にすっかり女性の身体になったんだと、自分でも驚いている。単に股間とか胸とかの、手術を受けた部分ではなく、身体全体のラインとか、腰やお尻、太股なんかに脂肪がついてきて、ふくよかでグラマーな身体つきになってきたのが大きいのかしら。それに女性ホルモンの影響なのか、肌の表面もきめ細かくすべすべになって、やっぱり女性になって良かったわ。もう記憶が曖昧なんだけど、昔の硬くてゴツゴツしていて、そのくせ油ぎった肌に戻るなんて、絶対に嫌だし、そんな自分は考えたくもない。これで髪の毛が、もう少し伸びてきたら、股間を見るまでもなく、あたしが元は男子だったなんて、きっと誰も信じないでしょうね・・・。

「さ、身体も温まったから、手術したところをよく見せてあげるわね。でも、こういうことは人に話すような話じゃないし、あたしの身体について、他人に知られるのも恥ずかしいから、あたしが見せてあげたことはナイショよ。他の人には絶対に話さないでね。お母さんにもよ。約束してね。」

　湯船にゆっくり漬かって、身体も十分に温まったので、つとめてさりげない様子で晶に話しかけた。晶は真剣な表情で、黙ってコクンと頷（うなず）いた。

　湯船の縁に腰掛けて、湯に漬かっている晶の視線の高さで、股を大きく開いた。もう毛はすっかり元に戻っていて、あそこの周囲からおへその下まで、びっしり生え揃い黒々としたジャングルになっている。男子としては決して毛深いほうではなかったあたしも、女子としてはやっぱり毛深いほうに分類されるのかしら。だって、あたしのように、おへそのほうまで、ダイヤモンド形に毛が生えている女の人って、あまりいないらしいということに、最近、気付いたのよね。これはあたしと円、それに勝美の毛の生え方をスポーツクラブの浴室で比較して、何となく気付いたことで、そういう意識で他の女性の毛の生え方をそっと観察してみると、普通の女の人は、見事に逆三角形になっていて、それでここがデルタゾーンと呼ばれ

るんだって思い至ったの。・・・それともあれは、そういう形になるように自分で処理しているのかしら？

　まあ、でも、毛の生え方については、晶はまったく気にしていないようだった。中学生になれば、誰でも生えてくるものだから、その生え方まで気にする年齢ではないんでしょうね。それよりも、あたしのおまんこを、穴のあくほどじっと見つめている。それで、あたしも、ちょっと恥ずかしい気はしたけど、晶の性教育ということも含めて、つとめて平静を装いつつ、自分の股間を説明しだした。

「この、両側のぷっくりしている部分が大陰唇、その中にちょっと見えている、びらびらした貝の舌みたいなのが小陰唇、そしてその中に（と言いながら、両手でクパァと広げて）あるのが膣というのよ。ここから赤ちゃんが生まれて出てくるの。こんなに小さい穴だけど、出産のときは赤ちゃんが出てくる位、大きく広がるらしいわ。といっても、あたしもまだ経験していないから、本当にここから赤ちゃんが出てくるなんて、信じられないんだけどね・・・。この大陰唇と小陰唇、それに膣をあわせて、俗に『おまんこ』と呼んでいるわ。」

「男の子だと、『おちんちん』と『たまたま』または『キンタマ』が見えているけど、女の子はこの三カ所全部を指して『おまんこ』と言うの、でも、普通、全部は外からは見えないのよ。ほら。」

　そういって手を離すと、割れ目が閉じてしまい、外部からは大陰唇の合わせ目しか見えなくなった。晶は、食い入るような目つきであたしの股間を見つめつつ、つばをごくっと飲み込んだ。

　あたしは、晶が触りたいと言ったなら、触らせてあげても良いと思っていたんだけど、晶はそんな雰囲気ではなく、自分の股間を必死になって押さえている。まさか、勃起してしまい、それを隠しているのかと一瞬疑ったんだけど、どうもそういうことではなく、前回もそうだったように、自分のおちんちんが切り取られてしまうような錯覚に怯（おび）えているみたいなの。

　あたしは、自分の性別というか、とりたてて男の子とか女の子と

かいうことを意識せずに育ったけど（そういうことを考えるようになったのは、思春期に入って、異性を意識し出した頃だったから、多分、中1で毛が生えてきた頃じゃなかったかしら）、晶は最近、とみに男らしいとか女らしいとか、自分は男の子だから、ということを気にするようになったのよね。これって、やっぱり、あたしが性転換した所為（せい）かもしれない。そんなことを考えながら、あたしは再度、両手でクパァとさせて説明を続けた。

「この赤ちゃんが出てくる穴の上、わかりにくいけど、ここにも穴があって、これがおしっこの出てくる穴。見えるかしら？」

しかし、晶は尿道口を確認するというよりは、ますます身体に力が入り、青い顔で言った。

「やっ、やっぱりっ、やっぱり優稀お兄ちゃんっ、・・・おっ、おちんちんがっ、おちんちんが全部切り取られちゃったんだ！」

「そんなことはないわ。女の子にも、ちゃんとおちんちんに相当するものはあるのよ。ほら、ここを見てみて。この、おしっこが出てくる穴の上、皮が被っているからわかりにくいけど、こうすると、皮を剥くことができて、中から顔を出すんだけど、これ、これが女の子のおちんちんなの。このちっちゃい、お豆みたいなのよ。」

「こっ、これがっ、こんなにちっちゃくされちゃったのっ！！」

そう言うと、晶は失神しそうな顔で涙をポロポロ零しながら、もうこのまま倒れてしまうのではないかと心配になるような声で叫んだ。

「ここはね、陰核とかクリトリスとか言うんだけど、男の子のおちんちんとは役割が違うから、小さくても大丈夫なのよ。」

「優稀お兄ちゃん可哀相・・・。おちんちんがあんなにされちゃったんだ・・・。勉強ができないとか、体力がないと、あんなに酷（ひど）い罰を受けるんだ・・・。僕は・・・絶対・・・。」

晶が真っ青な顔で、お湯に口まで漬かりながら、小声でぼそぼそとあたしのことをつぶやいている。はっきりとは聞き取れないけど、女の子になったあたしを哀れんでいるように聞こえるわ。これって、

やっぱり訂正しておくべきなのかしら。でも、男の子と女の子のどっちが良いかというのは、個人の価値観の問題だし、あたしだって男の子だったときに、女の子になる、という現実を突きつけられて、もう自分の人生は終わっちゃったと絶望して涙したのも事実なのよね。あたしは母さんが居たから、何とか心の平静を保てたんだし、さて晶には、何て言おうかしら・・・。

第７３話　初弾命中?!!

「ねえ、千博。いくらなんでも、おかしいと思わない？」
「何が？」
「あたし、まだ生理が来ないの。優稀はもう１２月には初潮が来て、先週には2回目も終わったんだって。でも、あたしはもう手術から２カ月になるのに、まだ生理がないのよ。これって、何か問題があるんじゃないかしら。」
「最初はそんなもんじゃないかなぁ。僕も小６になった春には初潮が来たけど、最初は不安定で、２カ月位間隔が開くことは良くあったよ。生理が毎月安定するようになったのは、確か中１の終わり頃じゃなかったかな。初潮から2年後位だったよ。」
「でも、それは卵巣が未発達というか未成熟だったんでしょ？・・・あたしの卵巣は、もう千博の身体内で完全に成熟している筈だし、手術したからって、不安定になる要素がないわよね？」
「手術のあとで説明を受けたとき、遅くとも2カ月以内には生理が来るようになりますって、先生にも言われたわ。・・・まさかとは思うけど、放っておいて子供が産めなくなっちゃったら大変じゃない。何となく心配なの。念のため、今度の土曜日に、手術を受けた病院で診察して貰おうかしら。確かあのとき、性転換者だって告げれば、最優先で予約が取れるって言っていたわよね。千博も一緒に来てくれない？」
「良いよ。きっと何も問題ないとは思うけど、勝美が心配なら、不安は解消しておこう。病院への予約はどうする？・・・僕が電話しようか？」
「それはあたしが自分でするわ。いくら夫婦でも、男の人に婦人科の予約を入れて貰うのは、気がひけるわ。」
「それって、婦人科なのかなぁ。まずは手術してくれた先生に電話

するんじゃない？・・・つまり外科の西郷先生か井上先生っていうことなんだけど・・・。」
「それもそうね。・・・じゃあ明日の朝に、あたしから西郷先生に電話してみる。土曜日の予約は何時でも構わないわね？」
「僕はいつでも大丈夫。病院の都合で決めて貰えば良いさ。あ、あと、性転換者は3カ月検診、6カ月検診、1年検診があるって言ってたよね。これって、別に義務ではないらしいし、多少前後しても構わないとは言われていたけど、手術から2カ月だから、少し早いけど3カ月検診も一緒に二人で受けて来ちゃおうか。そういうことができるのかどうか、聞いてみてくれる？」
「わかったわ。もし大丈夫なら、そうしましょう。そのときには、あたしも千博も、一緒に受けることになるわね。でも、もうあたしたちは結婚しちゃってるんで、いったい何を診察するのかしら。」
「よく知らないけど、パンフレットにちょっと書いてあったよね。確か、手術部位の目視検査から始まって、機能検査として、神経がきちんと機能しているか、性的刺激に対する反応がどうか、といったことが調べられるらしいよ。もし何か不都合があれば、エコーとかCTとかMRIとか、精密検査まで全部無料でやってくれるみたいだね。それと男子は精液検査、女子だと卵子を採取するのかなぁ。当然、内診台であそこを診察されるんだよね。それに精液検査って、射精させられるんでしょ。どんな感じなんだろう。お医者さんや看護婦さんにイカされちゃうのかな。・・・僕は勝美にやって貰いたいな。」
「わからないけど、精液検査は、男子が判定試験のときに受ける性機能検査のようなものじゃないかしら。それなら自分でやる筈だけど・・・。って、そうか、千博は男子の試験は受けていないのよね。医師や看護婦の見てる前で、というか時間を測定されながら、自分でオナニーして射精するのよ。どういう刺激で、何分何秒で射精したか、精液の量はどのくらいか、といったことを記録して行くのよ。」

「そんなことするの？？・・・結構恥ずかしいかも！」
「そうね、千博は経験がないでしょうけど、確かにあれは、慣れていないと、かなり恥ずかしいかもね。皆が見ている前でオナニーして、衆人環視の中で射精するんだから。多くの男子はそのために、判定試験に向けて自宅とか塾や予備校とかで、他人に見られながらどれだけ早く射精できるかっていう練習をしたりするのよ。・・・でも千博は手術の後の検査で、看護婦さんに手で扱かれて射精したんでしょ。ならばまあ、それと一緒よ。あたしなんかは去勢されたとき、タマタマを抜かれた後で、体内に残った精子を全部出しちゃう必要があるからって言われて、内診台に固定された状態でお尻をグリグリされて思いっきり射精させられたから、もうあまり気にならないわ。それに女子は妊娠すると、毎月内診されるじゃない。あたしたちにはもうプライバシーなんてないのも同然よ。」
「勝美はやっぱり凄いなぁ。覚悟が違うよね。僕なんて、そういうこと想像しただけでも、心配で恥ずかしくて、不安だらけになっちゃうんだ。これって、まだ心が女子なのかな・・・。男子は人前で裸になっても、隠さないものなんでしょ？」
「まあ、確かに股間を隠すのは男らしくないっていう雰囲気はあるのかしらね？・・・でも、実際にやってみれば、恥ずかしがる暇もなく、どんどん検査が進む筈よ。じゃ、予約はあたしが取っておくから。」

―――――――――――――――
―――――――――――――

「では、遠藤勝美さん、着ているものを全部脱いで頂いて、内診台にどうぞ。」
　執刀医の西郷先生と、もう一人、「婦人科　村上」という名札を付けた女医先生の二人に促されて、勝美が服を全部脱いで内診台に上がった。看護婦さんが勝美の足を固定すると、内診台の下にある

スイッチを操作して、大きく股を開いたM字開脚姿勢とした。上半身は少し起こしてあり、勝美からも自分の股間がよく見えるようになっている。こういうときって、カーテンで目隠しして、股間に座った先生とは視線が合わないようにするって聞いていたんだけど、性転換者は別なのかな。プライバシーなんて言葉は、きっと僕たちには与えられていないんだ・・・。

婦人科の村上先生が、勝美のあそこを広げて中を覗（のぞ）き込んでいる。ペリカンのくちばしみたいな器具をつかったり、大きな綿棒のようなものを中に入れたりしながら、てきぱきと診察をしていく。その傍らで、隣に座った西郷先生が勝美に次々と質問をしていく・・・。

「・・・では、生理が来ない以外に、身体の変化は特に気がつきませんでしたか？・・・例えば、性器から出血するとか、あるいは性器が腫れるとか・・・。」

「オナニーは何回しましたか。・・・一度もしていないんですか。・・・では、性行為は、どのような頻度でしていますか。・・・毎回、何回位愛して貰っていますか。・・・そのとき、毎回必ず性的絶頂、つまりイッていますか・・・。」

「性的絶頂になる時間はどの程度ですか・・・。そうなったとき、身体の反応はどうですか・・・。気絶しちゃったり、意識が飛んでしまうような激しいイキ方はしますか・・・。」

矢継ぎ早の質問で、じっくり考えるヒマを与えない、条件反射的に回答しなければならないような、畳みかける勢いだ。勝美も恥ずかしがったり、躊躇（ちゅうちょ）したりする余裕がまったくなくて、次々に答えさせられている。聞いているこっちのほうが恥ずかしくなっちゃう。

いや、むしろ僕のほうがずっと恥ずかしい。だって僕が挿れてから何回ピストンして射精したか、そのときの様子なんかも聞かれて、必死の勝美はそのすべてにいちいち全部正直に回答してるんだ。まるで僕のセックスの様子を実況中継されているみたいだ。

しかも、勝美がちょっとでも言いよどんだり、恥ずかしがるそぶりを見せると、まるで考える余裕を奪うように、クリトリスをチョ

ンと突ついたり、膣内の上側、多分あれはGスポットの辺りだと思うんだけど、そこを器具でククッと押したりと、勝美の性感帯を次々に刺激するようなことをする。その度に勝美は「ひっ、ぁひっ、ぁあっ、ゃあっ、だめっ。」などと軽く悲鳴を上げながら、恥ずかしい質問にも次々に答えさせられてしまう。これって恥ずかしがらずに白状させるための、ある種のテクニックなんだろうけど、まるで拷問みたいだ。

無限とも思える羞恥責めを受けて（実際には、せいぜい20分か25分程度だったのかもしれないけど）、気息奄々（きそくえんえん）となった勝美が、ようやく開放されて、内診台から降りるように言われた。僕が座っているパイプ椅子の隣に、看護婦さんがもうひとつパイプ椅子を出してくれて、精根尽き果てた勝美がそこに座ると、村上先生が満面の笑顔で言った。

「おめでとうございます。妊娠6週間位になります。・・・多分ですが、12／25のクリスマス前後が妊娠した日になるのではないかと思います。普通ですと、その頃、身に覚えがありますか、という質問が続くんですが、先程の質問で、お二人は交換初夜から、毎日かかさずセックスをしていて、しかも毎日、何も避妊をせずに最低でも2回以上膣内射精（なかだし）しているとのことですから、お二人の年齢を考えれば、これはむしろ妊娠しないほうがおかしい状況ですね。」

「うそっ！！・・・そんなことって！」

「やったー！！・・・ありがとう！勝美！！」

「どうやら、勝美さんに生理が来なかったのは、最初の排卵、つまり初潮のときに命中してしまい、それで生理がないまま妊娠となったからのようです。」

「ハネムーン・ベビーならぬ、ネズミーランド・ベビーに間違いないわ。」

「あのとき、命中していたんだね。」

「毎年、何名も性転換者を担当してきていますが、これは最速の記録ですね。交換初夜の1週間後に妊娠ですからね。」

「しかも、二人はもうご結婚して入籍しているとのこと、まるであつらえたような、予定通りのスケジュールですね。後ほど、自宅のほうにいろいろな資料やパンフレット、それに申請書類等の一式をお送りしますので、二人で読んでみて下さい。早期出産に伴う優遇措置や、各種補助の申請用紙等も同封されています。」
「今、採取したおりものを検査していて、確定診断は細胞培養の結果が出る明日になりますが、今の段階での簡易診断では、赤ちゃんはどうやら男の子のようです。」
「出産予定日は、これもまだ確定ではありませんが、多分、11月の第2週。そうですね、11月6日とか、その辺りではないでしょうか。」
　11月第2週って、毎年、判定試験が行われるときだ。ほんの3カ月前、僕と勝美は、二人して性転換することを目指して、判定試験に臨んだ。そして丁度1年後の同じ日に、性別を交換した僕たちの子供が生まれる。何だか、運命的なものを感じずにはいられない。早速、家に帰ってお義父さんやお義母さん、それに父さん母さんにも教えてあげなきゃ。

――

「さて、お二人は性転換後の3カ月検診を希望されて、本日予約も取っていたのですが、奥様の勝美さんはもう妊娠してしまったということで、3カ月検診は行いません。しかしご主人の千博さんは、このままここで検診できますが、受けていきますか？」
「はい、せっかくなので、今検診をお願いします。」
「では、着ているものを全部脱いで、その内診台にどうぞ。今、井上先生にも来て貰うことにします。」
　勝美があれだけ見事な脱ぎっぷりを見せたのに、男子の僕がここで恥ずかしがったりしたら笑われちゃうから、着ているものをてきぱきと脱いで、一糸まとわぬ素っ裸になると、僕も内診台に登った。僕も勝美と同じように、足を固定されたんだけど、僕は両手もバン

ザイの姿勢で頭の上にある把手を掴むように言われ、そのままベルトで固定されてしまった。これ、勝美はされていないのに、なぜ男子の僕だけ、手も固定されちゃうんだろう・・・。股間を晒すのも恥ずかしいけど、処理しなくなった腋毛がばっちり見られてしまい、もっと恥ずかしい。でも、この感覚は、男子にはない筈だから、慣れなければいけないんだろうな。というか、そもそも男子は自分の裸を見られることについて、あまり恥ずかしがったりはしないものとされているみたいだ。でも、それは建前で、特に思春期にあっては、どうしたって恥ずかしい気持ちは誰にでもあると思うんだけど・・・。

それよりも、女子の時代には腋毛はきれいに処理していたんで気がつかなかったけど、自然に任せていたら。かなり濃く生えてきて、両脇ともフサフサとした黒い固まりがもじゃもじゃになってしまった。これは、もともと僕がこんなに毛深い性質だったのか、それとも男性ホルモンが身体に漲るようになって、その影響なんだろうか？・・・そう言えば、最近、すね毛とかが目に見えて濃くなってきたし、腕とかの毛も明らかに濃くなってきた。それに乳首のところにも毛が生えてきちゃったんだ。さすがに恥ずかしいし、みっともないと思ったんで、乳首の横の毛は見つけ次第、毛抜きで抜くようにしているから、多分、大丈夫な筈だ・・・。あっ、でもっ、そう言えば、お尻にも毛が生えてきたような気がする。・・・どうしよう、そっちは自分で見えないから、特に処理していないけど、この姿勢だと先生にはばっちり見られちゃうんだ。まさか、お尻の穴の周りがもじゃもじゃになってたりしないよね・・・。急に不安になってきた・・・。どうしよう・・・。これでお尻の穴の毛を剃りますなんて言われたら、軽く死ねる・・・。

看護婦さんが操作して、Ｍ字開脚姿勢を取らされるのと、僕の執刀医だった井上先生が入ってくるのが、殆ど同時だった。
「あ、ご無沙汰（ぶさた）しています。」
情けない姿勢でご挨拶すると、井上先生は僕の隣に座って満面の笑みを浮かべてお祝いを述べてくれた。
「いやぁ、おめでとう！・・・もう妊娠させたなんて、優秀だね。これなら検診するまでもないかもしれないと思うけど、まあ制度がそうなっているから、一応手順に従いやってしまおう。」
そう言うと、井上先生がやはり物凄い勢いで次々に質問をし出した。最近の体調の質問などから始まって、性欲の強さとか、オナニーの回数（これはゼロと回答した。勝美のときにも言われていたけど、僕たちはそんなことをする暇もなく、毎日の夫婦生活があるから・・・。）とか、それから夫婦生活での僕の様子など、矢継ぎ早の質問だったけど、さっき勝美が回答していたんで、そっちは案外冷静に回答できた。ただ、体毛の質問で、どこの毛が増えたか聞かれ、腋毛の話になったのは、そこを晒（さら）した状態で見られながら質問されるんで、物凄く恥ずかしかった。さらに、ここからは自分では見えないんだけど、お尻の穴の周りはどんな状態なんだろう。まさか、同じようにもじゃもじゃになってるんだろうか・・・。そう言えば、女子になった勝美は、サービスで腋毛の完全脱毛処理をして貰ったらしい。有料でも良いから、僕もやって貰おうかと一瞬考えたけど、男子がツルツルの脇というのも、どうかと思いなおした。あ、でも、乳首の周りとか、お尻の穴の周りは、やって貰おうかな。そんなところに剛毛が生えているなんて、いくら男子でも恥ずかし過ぎる。この病院でやるのが良いか、それとも、どこかメンズサロ

ンが良いんだろうか・・・。
　それより、その質問をされている間に、股間に座った婦人科（？）の村上先生が、僕のペニスとか睾丸をいろいろ計測したり、刺激したりして、気が気じゃない。サイズの計測とか、刺激に対する反応とかを診ているということはわかるけど、質問しながらやらなくても良いんじゃないかと、思わず考えた。（でも、質問のほうも容赦がなくて、そんな他のことを考えられるような余裕はなかったんだ。）
　村上先生がいろいろと触れたり刺激したりするし、質問も思わず赤面しちゃうような、というか普通なら絶対に口にできないような恥ずかしい内容を聞いてくるんで、どうしてもペニスが反応してしまい、しばらくするとガチガチに勃起して、おへそにくっつくほどになっちゃった。しかも、先端からは透明な液体が滲んできて、これって、俗に言うガマン汁というやつなんだろう。勝美とのセックスでも、きっと出ていたんだろうけど、勝美の膣内に早くから挿れちゃっていたから、こんなふうに自分から出ているのを見る機会はなかったんだ。それに、気分もムラムラしてきて、射精したいっていう気分が高まってきた。これって、僕はいつも抱き合うと直ぐ挿入しちゃったんで、あまり感じなかった新鮮な感覚だ・・・。
「では、気分も高揚して準備が整ったようですので、射精して頂きます。眼は閉じていても開いていても、どっちでも構いません。」
　井上先生が質問を終えるタイミングで村上先生がそう告げた。言い終わらないうちに、村上先生はローションを手に取って、僕のペニスをリズミカルに扱き出した。
「あっ、あっ、ぁあっ、ぁひっ、あひっ、ひっ、ああっ。」
「我慢しなくて良いですよ。快感に身を任せて、イキたくなったら、いつでもイッて下さい。ただ、できたらイクときには、イクって教えて下さい。」
「ひっ、ひっ、だっ、だめっ、もっ、もうっ、ひっ。」
だっ、だめだっ！・・・村上先生は婦人科なのに、なっ、なんで

こんなにペニスを扱くのが上手いんだろう！！・・・あっ、あっっ、直ぐイッちゃったら、恥ずかしいっ！！・・・三擦り半なんてっ・・・僕のっ、僕の男の子としての沽券にかかわる！・・・でっ、でもっ、もうっ・・・もう限界だっ。まだ四擦りしかしていないのにっ、・・・5回、・・・6回、・・・7回、・・・でっ、出るっ！！

「あっ、ぁあっ、いっ、イクっ、イクーっ！」

ドピューッ、ドピューッ、ドピューッ・・・。

「ひっ、ひーっ、とっ、止まらないっ、イクっ、イクっっ、たっ、助けてっ、イっ、イクーーっ！！」

ドピューッ、ドピューッ、ピューッ、ピュッ、ピュッ、ドクッ、ドクッ・・・。

「凄いっ！・・・あたし、そんなにたっぷり射精したことは、これまで一度もなかったわよ！！」

そう言いながら、勝美が僕の顔の汗をハンカチで拭ってくれた。息が上がってハアハアしている。胸が苦しい位だ。それでいて、ペニスはまだ元気一杯で、ガチガチとは言わないにしても、しっかり天を突いてそびえ立っている。でも、これでやっと終わったと思って、力が抜けた僕に、僕の精液を受けたシャーレを持ち上げて見ながら、村上先生が話しかけてきた。

「確かに、沢山出ましたね。これだけ量が多いなら、一発で妊娠したのも納得です。では、まだ元気があって準備ができているようなので、最後に、前立腺の検査をして終りにしましょう。」

看護婦さんに、僕から採取した精液の入ったシャーレを手渡すと、村上先生がそう宣言した。僕は一瞬、聞いてはならない単語を聞いてしまったような気がして、ビクッとなったんだけど、井上先生が笑いながら話しかけてきた。

「千博君は前立腺マッサージを受けたことがあるかい？・・・あれは頭が変になっちゃうくらいの快感で、それこそ気が狂っちゃうんじゃないかって心配するほどなんだよ。それに千博君は女子の身体のときは処女だったんだよね。そうすると、女子がペニスを挿入さ

れるときの快感を疑似体験できるようなところもあるから、是非楽しんでいきなさい。」

まさか？！・・・あの、前に勝美にやられたお尻グリグリ？・・・あれをされちゃうの？！？！

瞬時に真っ青になり、全身が小刻みに震えだした。でも、この姿勢じゃ何もできないし、股間はペニスからお尻の穴まで、すっかり差し出した状態で、何でも好きにやって下さいって言っているに等しい。両手は頭の上でバンザイしたまま固定されちゃってるし、もう僕には何もすることができない。ここで先生二人と看護婦さん二人、それに勝美の見ている前で、あれをされてイキながら気絶させられちゃうなんて、考えてもみなかった。目の前が真っ暗になり、勝美が悲しそうな目で僕を見つめて、僕の手をぎゅっと握ってくれた。

「先生、お願いがあるんですが・・・。その、千博に目隠しをしても良いですか？・・・きっと千博は、これからされることが恥ずかしくて、とても見ていられないんじゃないかって心配なんです。」

「うん？・・・別に構わないよ。男子なのに射精を見られるのが恥ずかしいなんて、まだ気持ちが完全に切り替わっていないのかな？・・・でも、まあ手術から2カ月ちょっとだからね。・・・タオル出そうか？」

「あ、ありがとう、勝美。・・・でも大丈夫。必要ないよ。・・・僕はしっかり見ていることにする。この位のことで、見ていられないなんて、男子として失格だし、それに前に聞いたんだけど、去勢される男子は、全員、自分の睾丸を抜かれるところを見ていなきゃいけないんだってね？・・・勝美も見ていたんでしょ。・・・そんな拷問みたいな体験に比べれば、ちょっと恥ずかしいからって、眼を背けているわけにはいかないよ。・・・そもそも、男子はこういうことに恥ずかしがらないものなんでしょ。」

「・・・千博・・・。」

「心配しないで。・・・僕・・・頑張るからさ。」

勝美が、握っている僕の手に、さらに力を込めた。大丈夫、勝美が手を握っててくれれば、どんなに辛いことでも耐えられる気がする。そう思ったんだけど・・・。

　村上先生は、僕のお尻の穴にローションをたっぷり塗り込むと、看護婦さんからペニスのような形をした金属製のプラグを受け取り、それにもローションをたっぷりつけた。

「はい、では身体の力を抜いて、口を大きく開けてゆっくり深呼吸して下さい。」

「はっ、はいっ。・・・はーっ、はーーっ、はぅっっ・・・、うっ、ぅうっ、ぅぐっ、・・・はっ、はーっ、はーっ、はひっ、ひーっ、はひーっ。」

「はい、もう全部入りましたからね。別に痛くはないですね。・・・あとは快感に身を任せて、リラックスしていて良いですよ。」

「うっ、はっ、ぅうっ、ぅあっ、ぁはっ、はぁっ・・・。」

　前に勝美にやられたところ、お尻の中のほうで、尿道が通っている辺りにある部分を、プラグの先端でぐっ、ぐぐっと押し込むように刺激される。その度に、息が詰まるように身体に力が入り、呻くような声が漏れる。以前、勝美にされたときは、心の準備も何もなくて、何をされるかわからない状態でいきなりだったから、自分が何をされているのか、勝美がどうしているのかなんて、考えることもできない状態でイカされて気絶しちゃったけど、今度は心の準備もあったから、どこをどう刺激されて、どんな感覚なのか、少しは冷静に考える余裕がある。といっても、だから感覚が違うわけじゃないし、きっと僕はこのまま、イキ狂って気絶させられちゃうんだろうって予感しかしないんだけど・・・。

　お尻の穴の奥の部分から、痺れるような、でも暖かくなるようなじんわりとした快感が、ペニスや睾丸、そして腰全体に広がってゆくのが感じられ、呼吸が浅くなってきた。泣きたくなるような、切ない、身悶えしたくなる感覚・・・。勝美は同時にフェラをしてくれたんで、あっと言う間に射精したけど、先生はペニスには触れな

いんで、もどかしくて切なくて、頭が変になっちゃいそうだ。全身がピクピクと痙攣（けいれん）する。声を出さないように、歯を食いしばっていたんだけど、もう限界だ。
「あっ、ぁあっ、あんっ、ぁあーん、あんっ、あひっ、だっ、だめっ、たっ、たすけっ、助けてっ、ひっ、あっ、ひっ、ひーっ、死ぬっ、死んじゃうっ、あんっ、ぁあんっ、ぼっ、僕っ、もうっ、あひっ。」
　ペニスはガチガチのビンビンに勃起して、痛いくらいだ。先生がプラグを押し込む度に、ペニスがビックン、ビックンと痙攣（けいれん）し、先端からは透明な液体がじわっ、じわっと滲（にじ）むように沁（し）みだしてきた。
「この感覚は、女の子がセックスのときペニスでGスポットを刺激される感覚に近いなどとも言われています。あなたは女子のときにセックスした経験がないので、これで疑似体験してみて下さい。」
　かっ、勝美はっ、勝美は毎回、こんな感覚なんだろうか！・・・じょっ、女子のときっ、女子のときの快感とは随分違うっ！・・・ぼっ、僕には耐えられそうもないっ！！
「カウパー氏腺液がたくさん出てきましたね。力を抜いて、快感に身を任せて下さい。・・・では、さらに刺激を強くしましょう。」
　ブルルルルルルル・・・。
「あっ、ぁんっ、あひっ、ぃひっ、いっ、いっ、ひっ、ぁあっ、あんっ、ぁあっ。」
「このまま、しばらく振動によるマッサージを楽しんで下さい。大丈夫、気絶しないように、こちらでコントロールしますから。」
「あひっ、いくっ、いくーっ、ひーっ、ひーっ、いくーっ。だめっ、だめっ、たすけっ。ぃひーっ。」
「カウパー氏腺液が白濁してきましたね。精液が混じってきた証拠です。イクのが止まらないでしょう。・・・このままイキ続けて下さい。」
「いっ、イッてるっ！・・・イッてるっ！！・・・イクっ、イクっ、いっ、イキ続けてるっ、とっ、止まらないっっ。あぁーっ、ぁひー

っ、ぃひーっ、ゆっ、許してっ、ぁあーっ。」
「もっ、もうっ、だめっ、しっ、死ぬっ、死ぬっ、死んじゃうっ、たっ、たすけっ、助けてっ、ひっ、ひーっ、死ぬっ、死ぬーっ！」

千博が悶(もだ)え続けている。さっきから、イキ続けているみたいで、おちんちんの先からは精液（？）がじわじわと滲(にじ)むように垂れ続けていて、きっと連続イキの状態なんだわ。あたしも女子になって千博に愛されるときは、いつも連続イキさせられちゃうんだけど、わりと直ぐに気絶しちゃうんで、そんなに長時間、連続イキの状態を記憶しているわけじゃないのよね。それに男子のときの連続イキは経験がないんだけど、射精の絶頂がずっと続くって、辛くないのかしら。千博の様子を見ていると、これって、とんでもない拷問じゃないかって思えてきたわ。・・・千博、大丈夫かな・・・。頭が変になっちゃったり、EDになっちゃったりしなけりゃ良いんだけど・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

「いぎっ、・・・いぎぎっ、・・・ぁひっ、・・・ぐひっ、・・・ぃぐっ、ィググっ、ィグーっ。」

もう、５分以上もイキ続けているみたい・・・。じわじわと滲(にじ)むように垂れ続けている精液（？）は、看護婦さんがずっとシャーレに受け止めているんだけど、潮吹きのカウパー氏腺液と混じっているにしても、もう３０ｃｃ位になったんじゃないかしら。先生は千博の瞳が裏返って、白目を見せかけると、刺激を弱めて気絶しないようにしているみたい。それで千博は気絶することもできなくて、ずっと連続イキ状態をキープされて声を上げ続けている。でも、眼はあらぬ方向を彷徨(さまよ)っていて、焦点があっていない。これって、きっともう何も見えていない、何も考えられない状態なんでしょうね・

・・。さすがに心配になってきたわ。
「あのっ、まだこれ続けるんでしょうか？・・・千博が壊れちゃわないかと・・・。」
「そうだね、そろそろ良いんじゃないかな。」
「じゃあ、最後に一気に行きましょう。」
　そういうと、村上先生はプラグを持つ手に力を込めて、千博のお尻にぐっと突きたて、同時にもう片方の手で千博のおちんちんを掴（つか）んで激しく扱（しご）き上げた。それに合わせて、看護婦さんが千博の乳首をきゅっと摘（つま）むようにひねり上げた。
「あぎぎーーっっ、ぎーっ、ぐぎーーっっ。☆！！＊▽？※◎§＃★□。」
　ドピューッ、ドピューッ、ピューッ、ピュッ、ピュッ、ドクッ、ドクッ・・・。
「ぉおぉおっ、ぐぉぉおっ、ぃぐぅーーっ。」
　ピューッ、ピュッ、ドクッ、ドピューーッ。
「まだ出ますか。優秀ですねー。さすがにもう空っぽになったかと思いましたけど・・・。」

　この世のものとも思えない、意味不明の叫び声を上げ、千博のおちんちんの先から、まだこんなに精液がのこっていたんだと驚くような勢いで射精した。と同時に、千博の瞳がぐるんと裏返って、今度こそ千博は完全に気絶した。
「はい、これで全部お終いです。よく頑張りましたね。本当にお疲れさまでした。服を着せてあげて下さい。」

　看護婦さんがてきぱきと、内診台をもとのベッドの形に戻して、千博の手足の拘束を外している。でも千博は気絶したままで、意識を取り戻さない。はひっ、はひっと浅い呼吸で、全身がまだビクッビクッと小刻みに痙攣（けいれん）している。あたしは、千博の着ていた服を持ってくると、看護婦さんに手を貸して貰って、とにかくトランクス

を何とか履かせようとしたところ、ちょっとおちんちんに触れただけで、おちんちんがビクッビクッとして、身体をピーンと逆海老に仰け反らせて痙攣しながら、ピュッピュッと射精しちゃった。あわててタオルで拭いてあげて、おちんちんに触らないように気をつけて履かせたんだけど、おちんちん以外でも、身体のどこであっても触れると身体がビクンッビクンッとして痙攣しちゃってるわ。これ、射精こそしていないにしても、全身が超敏感になっちゃっていて、触るだけでイッちゃってるってことよね。気絶しているから良いけど、意識があったら、これ、物凄く辛いんじゃないかしら。少し落ち付くまで、このまま寝かせておこうと考えて、大きなシーツを貰って、千博の身体にかけてあげていると、村上先生があたしに話しかけてきた。

「妊娠初期は流産の危険がありますので、夫婦生活は控えめにお願いします。完全に禁止とは言いませんが、ごく浅く、・・・あまり深く挿入して奥を突っ付かないようご注意下さい。また奥様が激しくイクことのないよう、手短にお願いします。ご主人はまだ意識がないようなので、あとで奥様から説明してあげて下さい。」

「・・・わかりました。」

「まあ、それもあって、今、ご主人様からは、もう煙も出ない位、徹底的に搾り取っておきましたから、暫くはご主人様が奥様に迫ることもないでしょう。というか、迫ることができないというか、そんな気にならない筈です。」

　それであんな、検査に名を借りて、拷問みたいに搾り取っちゃったのね。・・・千博、可哀相なことをしちゃったわ。・・・大丈夫かしら。

　でも、あたしがあげたおちんちんとたまたま、それに前立腺は、何とか最後まで頑張ったみたい。取り敢えず、良かったわ。

第７５話　おめでた続き

「・・・ぁあっ、・・・かっ、・・・勝美。・・・あれっ、・・・ぼっ、僕っ・・・？？」

数分したら、千博がようやく気がついた。でも、まだ眼の焦点が合っていないらしくて、あたしの顔をぼんやり見つめている。

もう先生も看護婦さんも、皆出て行ってしまい、あたしはトランクスを履いただけで診察室の隣のベッドに寝かされ、シーツを掛けられている千博を、抱き抱えるように起こしてベッドに座らせた。

「千博、大丈夫？・・・酷い目に会っちゃったわね。まずは服を着ましょう。」

千博はまだ身体に力が入らないらしくて、それどころか頭がまだ十分に働いていないようなので、あたしが千博のランニングシャツとジャージ、それにフリースのパーカーを着せてあげた。下半身は、やはりジャージのズボンを履かせようとしたんだけど、千博ったら立ち上がろうとしたのに、蹌踉けてベッドから起き上がることができなかったの。それで、あたしが肩を貸してあげて、ようやくベッドに腰掛けたまま、ズボンを片足ずつ通して履いていた。

「どう？・・・立てる？・・・それとも、もう少し休んで行く？」

「あっ、ありがとう。・・・もう大丈夫。」

そう言って立ち上がりかけたところで、また蹌踉けてしまい、あわてて肩を貸した。その瞬間、あたしの膝が勝美の股間に当たって、グッと押してしまった。

「あっ、ぁひっ、だっ、だめっ、ィッ、ィクッ、ィックーッッ。」

千博がガクガクと痙攣すると、またしても腰砕けとなり、股間を押さえて蹲った。一瞬で事態を理解したあたしは、咄嗟に新しいタオルを掴むと、千博のジャージとトランクスをバッと引き下ろして、

トランクスの中に射精してしまった精液をさっと拭き取った。千博は蕩けたような顔で、ピュッピュッと可愛く射精するのを、あたしが手際よく拭っていくところを呆然と見ていたが、涙をポロッと零して言った。

「あっ、ありがとうっ。・・・うっ、ぅうっ、かっ、勝美っ、・・・ぼっ、僕っ、・・・うっ、・・・ぐすっ、・・・ぅぐっ・・・、ひぐっ・・・。」

「泣かなくても良いのよ。千博は最後まで頑張ったんだから。偉かったわ。」

「うっ、うんっ、・・・ぐすっ、・・・でもっ、でもっ、・・・ぼっ、僕っ、僕っ、こんなじゃなかった筈なのに・・・うぐっ、・・・ぐすっ、・・・情けないよね・・・。」

「そんなことないわよ！・・・千博は立派だったわ！！・・・あんなことされて、あんな状態で、最後まで頑張りきったんだから、胸を張って良いのよ。・・・あたしだったら、いや、誰であっても、あんなに頑張れる男子はいないわよ。」

「・・・でも・・・。」

「それに、千博は気絶しちゃってたけど、先生が話していたのは、あたしが妊娠しちゃったんで、当分は夫婦生活を控えなきゃならないから、その間、千博がムラムラしてあたしを襲っちゃわないように、もう当分は射精したくなくなるように、いや、射精ができない位まで、徹底的に搾り取ったって言ってたわ。つまり、もう煙も出ないように、わざと連続射精させ続けたんだって。・・・本当に拷問だわ・・・。」

「ああいうやり方されると、ちっとも気持ちよくないでしょ・・・。辛いだけじゃなかった？」

「うん、ものすごく苦しかった。・・・尿道カテーテルと、どっちが苦しかったかっていう、究極の質問が成り立つ位に・・・まあ、こっちのほうが、少しはマシだったのかもしれないけど・・・、それでもいっそ、このままペニスとキンタマを切り取ってくれって、

そう言いたくなった。といっても、無我夢中で何も話せなかったんだけど。」
「そうだ、あの勝美が持っていたエロ本？・・・あれに出てくる、責められ続けるショタの子とか、そんなのになったような気分だった。」
「そうね。あの写真の子、おちんちんは結構大きくて立派だったけど、まだ毛もチョボチョボで全部生え揃っていなかったし、あどけない顔つきといい、子供みたいな体型とか、せいぜい中1になったばかり位じゃないかしら。でも、あそこに飛び散っていた精液が全部本物で、本当にあの子が射精(だ)したんだとすると、あれだけ搾り取られたら、かなり苦しかったでしょうね。あれ、きっとコップに半分位あったんじゃないかしら・・・。あの子、演技じゃなくって、本当にべそをかいて、泣きはらした眼をしていたわ。・・・というか、もう泣き疲れて死にそうな顔だったわよね。・・・でも、千博もそんなふうだったわ。多分、夢中でわからなかったでしょうけど、千博も、全部でコップ半分程度搾り取られたのよ・・・。あたし、見ていて心配になっちゃった。」
　そんなに？！？！・・・どうりで、ペニスの感覚が殆どない。背骨から腰そして股間の付け根からキンタマにかけて、ズーンと重く、自分の身体じゃないみたいだ。しかも、まだ身体が敏感で、あちこち触られると、思わずビクっと反応する。確かに、この状況で勝美を愛せと言われても、多分、身体(ペニス)が反応しないだろうし、そもそもそんな気分には当分ならないだろう。妊娠初期は流産の危険性があるから、激しい性行為は厳禁だって言うけど、これまで毎日あれだけ励んできたのを正直に話したんで、それでこんなふうにされちゃったに違いない。以前、ネットで読んだ記憶があるエロ小説の場面で、性犯罪者に対する刑罰として、腎虚の刑とかいうのがあって、男性を徹底的に搾り取って、キンタマを完全に空っぽにしてしまい、というかキンタマの機能を痛めつけて、もう二度と射精できない、いや、勃起もしないようになるまでイカせ続けるというのがあった

んだけど、まさか、僕がそれをされるとは思わなかった。てっきりネタかと思っていたけど、この分だと、確かに当分はセックスどころか、射精もできそうもない。・・・いや、これ、本当にそのうち、もとに戻るんだろうか・・・。かなり不安・・・。思春期男子の性欲は、果てしないという噂を信じるしかない。それって、まさか都市伝説じゃないよね・・・。僕にはまだ、よくわからない感覚だけど、男の子がＥＤになっちゃったら、人生を儚（はかな）んじゃうって、よく聞く話だし・・・。

何とか勝美に手伝って貰ってベッドから立ち上がり、勝美の肩を借りて、よろよろと病院の玄関に向かった。

「千博、本当に大丈夫？・・・あたしがおんぶして行こうか？女の子になって、多少弱くなったとしても、もともとあたしは男の子として鍛えてあるから、千博をおぶって行く位はどうってこともないわよ。」

「そんなことしないで！・・・勝美は妊娠初期で、激しい運動・・・そのっ・・・とにかく負担がかかることはするなって言われているでしょ。・・・そんなときに、僕をおぶって行くなんて、力があるかどうか以前に、あり得ないよ。」

「それに、身体が小さい勝美に男の子の僕がおぶわれて行くなんて、僕の面子というか沽券にかかわるよ。・・・本当は今、こうして勝美に肩を貸して貰っているのですら、実はかなり恥ずかしいんだ。」

「でも、千博、この様子だと家までかなり辛い筈よ。なら、タクシーで帰りましょ。病院の玄関の脇にあるタクシー乗り場には、タクシーがいつも待っているじゃない。ここから家までなら、そんなに高くはないわ。」

そう言うと、勝美は僕を抱き抱えるようにしてタクシー乗り場へ向かった。

「ただいま。」

「あ、お帰りなさい。早かったわね。検診もあったんでしょ。どうだったの？」
「あたし、妊娠してた！！・・・今、６週間位で、多分だけど男の子だって。」
「本当に？！・・・やったじゃない！・・・おめでとう！！」
「これもお父さん、お母さんのおかげよ。」
「６週間ってことは、予定日が・・・？」
「多分、１１月の第１週だろうって。」
「へー、奇遇ね。それって、判定試験から丁度一年になるときね。あのとき、一年後に子供が生まれるなんて、考えたこともなかったでしょ。」
「それはそうだわね。でも、あたし幸せ。やっぱり、あのときの判断は正しかったんだわ。」
「千博君も頑張ったわね。毎晩の努力が報われたんじゃないかしら。」
「ありがとうございます。これもお義父さん、お義母さんに暖かく見守って頂いたからです。」
「あたし達は特に何もしていないわよ。むしろ、変にハッパをかけちゃって、申し訳なかったわね。プレッシャーが凄かったんじゃない。でも、これで役目は果たしたんだから、ますます大きな顔をする権利があるわよ。もうすっかり遠藤家の大黒柱ね。」
「ところで、お母さん出かけるの？」
「ええ、ちょっとね・・・。あ、帰りに、夕食の材料を買ってくるけど、何か食べたいものはあるかしら。今夜はご馳走にしましょう。勝美は悪阻（つわり）なんてないのかしら。」
「特にいまのところは・・・。そうだ、あたし、久しぶりにお母さんの手作りの餃子が食べたいな。あれ、あたしも作り方を覚えて、遠藤家のお袋の味にしたいのよ。」
「わかったわ、じゃ、それも材料を買ってきましょう。そうだ、千博君は実家に報告に行ってらっしゃい。向こうのお父様も、心待ち

していた筈よ。」
「そうね、じゃ、一休みしたら一緒に千博の家まで行きましょ。ね、千博。」
「勝美は大事な時期なんだから、家で休んでいたらどう？・・・僕が一人で行ってくるよ。」
「あたし、まだちっとも身体が辛くもなければ、悪阻もないし、それに千博のご両親に報告するのには二人揃っているほうが良いでしょ。」

　千博があたしのこと心配してくれているのはわかるわ。だけど、あたしからすれば、実は千博が心配なのよね。タクシーを使ったから目立たなかったけど、今も千博は、まだ足腰が覚束ないみたい。途中で何かあったら大変だから・・・万一、どこかで射精しちゃったりしたら、千博の精神が壊れちゃうし・・・、何としてでも、あたしも付いて行かなくっちゃ・・・。

「でかした！！・・・これで婿の責任を無事果たした訳だ！」
「こんなに早くおめでたになるなんて、本当におめでたいことね。お昼、どこかに食べに行きましょうか？・・・あ、それとも勝美さん出歩かないほうが良いかしら。・・・なら店屋物ね。」
「勝美さん、悪阻は大丈夫なの？・・・なら、寿司にしようよ。久しぶりだし。」
「わかったわ。それじゃ博美さん、お寿司の出前、オーダーお願いできるかしら。あたしはその間に、角のケーキ屋さんにひとっ走りしてお祝いのケーキを買ってくるわ。デザートで食べましょう。」
「ねえ、お寿司も良いけど、あたしはピザも食べたいな。」
「僕はピザとフライドチキン！」
「わかったわ、じゃあ蛇の目寿司に大きい樽を二つ出前お願いして、それとシチリアピザにLサイズ2枚とチキンやポテトのパーティーセットのデリバリーを注文しましょう。」

我が家に来てみれば、いきなり上を下へのお祭騒ぎとなった。もう１１時を過ぎていたから、普通だとそろそろお昼の準備に取りかかる頃合いなんだけど、たまたま家族全員が家でのんびりしている土曜日だったんで、まだ何もしていなかったのが幸いしたんだろう。やっぱり、勝美が来てくれて良かった。皆に祝って貰えるのも嬉しいし、それにナイショだけど途中、勝美が僕のことを気遣ってくれて、手を貸してくれたのは、随分助かったのも事実だ。

「千博、それに勝美、本当におめでとう。しかも男の子なんだって？・・・毎日、頑張った甲斐があったじゃない。もうこれでプレッシャーを感じる必要もなくなったし、義務からも開放されて、自分たちのリズムで夫婦生活を楽しむことができるわね。・・・父さんや勝美のお父様にからかわれることもなくなるでしょ。・・・あたしも負けていられないわね。ただ、妊娠初期は流産の危険があるから、夫婦生活は当分お預けだって先生に言われちゃったんだ・・・。」
「ありがとう。ただ、妊娠初期は流産の危険があるから、夫婦生活は当分お預けだって先生に言われちゃったんだ・・・。」
「本当に先生はそう言ったのかしら？・・・今は、激しくしないよう気をつけれぱ大丈夫って指導するんじゃなかったの？・・・少なくとも、性教育の時間では、そう習ったような記憶があるんだけど、何か変わったのかしら・・・。それともあたしの記憶違い・・・？」
「うっ、うんっ、・・・そっ、そう先生は言ったんだよね、確か・・・。」
「そう、先生は確かにそう言っていたわ・・・。ね、千博・・・。」
あっ、危ないっ。・・・優稀がそんな話題に振るから、あやうくバレるところだった。・・・僕が勝美を激しく求めないように、お尻をグリグリされてスッカラカンになるまで搾り取られ、気絶しちゃったとか、僕が気絶している間に勝美が先生から注意されたなんて、家族に知られたら破滅だ・・・。勝美が巧く話を合わせてくれて助かった・・・。
そうこうしているうちに、注文したものが全部届いてテーブルに

並べられた。
「じゃぁ準備もできたようだから、乾杯しよう。・・・あ、勝美さんはアルコールを控えたほうが良いのかな。環や晶と一緒にジュースで申し訳ないね・・・。なにはともあれ、おめでとう。元気な子供が生まれることを願って・・・乾杯！」
「「「「乾杯！！」」」」

――――――――――――――――
――――――――――――――――

結局、午後一杯、実家でパーティーの延長戦のような時間を過ごして、家に帰って来たのは18時近かった。実は実家では、そのまま夕食にと言われたんだけど、家でお義母さんがご馳走を準備してくれているからって話して、やっと開放された。
さすがに帰る頃には、僕の足腰もようやく普通に戻っていて良かった。
「遅かったわね。・・・まあ、でも当然かしら。直ぐご飯にする？」
「あ、ごめんなさい。まだそんなにお腹が空いていないんで、先に風呂に入っちゃって良いかしら？」
「そうかもしれないって思ったから、風呂沸かしておいたわよ。料理はもう大体出来ていて、あとは並べるだけだから、じゃあ先に二人で風呂に入ってきなさい。」
勝美と二人で風呂に入った。この家の風呂は、広くてやっぱり気持ちが良い。ちょっとした温泉の気分だし、家族風呂みたいに男女一緒に入れるところも良い。お義父さんとお義母さんは、こんな環境にいて、どうして勝美に兄弟姉妹ができなかったんだろう・・・。
「・・・ここに僕たちの子供が居るんだね・・・。」
「そうよ。しかも、あたしの遺伝子の精子と、千博の遺伝子の卵子でできた子供だから、正真正銘、あたしたちの子供よ・・・。」
「性別交換すると、普通は自分の遺伝子を持つ子供にはならないの

に、僕たちは本当に恵まれているね。これも勝美が大きな決断をしてくれたから・・・。」

「それを言ったら、千博だってあたしの家に入り婿に来てくれたじゃない。これも大変な決断だと思うわ。」

「まあ、僕の場合は、もともと女子のときには勝美の家にお嫁に来るつもりだったから、そこはあんまり違いがないように感じてるんだけどね・・・。」

勝美のお腹をさすりながら、そんなことを話して幸せを噛みしめつつ、風呂を出て食事のテーブルについた。こちらも大変なご馳走が並んでいて、しかもお義父さんまでオンラインで参加してくるんだって、ノートPCが席にセッティングされている。

取り敢えず、皆で席に着いて、お義父さんもオンラインで接続された。スマホではちょくちょくビデオ通話をしてるけど、大きな画面で、しかも声も大きく聞こえるんで、そこに居るみたいな雰囲気がする。

お義父さんは画面の向こうで、料理はどうやらケータリングみたいだけど、高級ワインを注いで待っていた。こっちは、僕には多分、同じ銘柄のワインが注がれているんだけど、勝美とお義母さんはジュースだ。勝美は当然だけど、お義母さんはワイン飲まないのかな・・・。

「じゃあ、早速乾杯することとしよう。今日はおめでたいことが二つある。まずは千博君と勝美に長男ができたことがひとつ。これは私と明美にとっては、初孫になる訳で、遠藤家の跡取りともなる。千博君は大変なプレッシャーの中、見事期待に応えてくれて、一発で命中させた。本当にありがとう。実に素晴らしく優秀なあそこだ。入り婿ということで、何かと肩身の狭い思いをさせてしまっていたかもしれないが、もうこれで大手を振って、遠藤家の主人として振る舞って欲しい。・・・明美、千博君はもう、婿殿ではなく、私の跡継ぎなんだから、私がいないときは主人に接するように心がけるんだぞ。」

「次に、もうひとつのおめでたい話。・・・これは私から話すのはちょっと恥ずかしいんだが、明美に女の子ができた。私たち夫婦の二人目の子供で、勝美の妹になる。勝美との年齢差を考えると、恥かきっ子と言われかねない年齢だが、どうか可愛がってやって欲しい。」

「「えっ？・・・ぇえっ？！・・・えぇぇーーっっ！！？？」」

第７６話　あれの性能と絶倫の関係

驚いた。僕たちの子供ができただけでも大ニュースなのに、お義父さんとお義母さんにも子供ができていたなんて、いったい、いつ作ってたんだろう。予定日がほとんど一緒ということは、僕たちがクリスマスのネズミーランドで命中したんだったとして、その前後、遅くとも年内大晦日までの間ということになる。僕たちがあんなに激しくイッて、その様子を全部聞いていたお義父さんとお義母さんがやはり興奮しちゃったんだろうか。あるいは、僕たちに負けられないと、妙に張り切っちゃったのかもしれない。あ、それとも、一人っ子の勝美が突然性転換しちゃったんで、子供が一人というのが急に不安になったのかな。だとしたら、これもまた明らかに僕の責任だ。僕が軽い気持ちで性転換したいと考えたことが、こんなところにまで影響を及ぼすとは、想像もできなかった。我儘（わがまま）を通すということは、こんなに多くの人に迷惑をかけてしまい（子供ができることが迷惑だというのは、考え方として間違っているのかもしれないけど・・・）、これ以外にもまだまだある気もする。幸い、取り返しのつかないような問題は、まだ出ていないようだけど、これから大人として生きていく上で、本当にいろいろ考えなければならないんだな。まして自分はこれからお義父さんに代わって遠藤家を任される身になるみたいだし、そう考えると、身が引き締まる思いだ。

　まあ、それは今、ここで悩んでもしょうがないし、お義父さんもお義母さんも、まだ４０歳そこそこなんだから、まだまだあっちも現役だ。将来さらに弟か妹ができたって不思議でもなんでもない。いや、むしろ、これまでは、子供ができないように気を遣っていたんだろう。そうでなければ逆に不自然だ。

　それに、こういう考え方は申し訳ないけど、これは僕にとっても、

有利なのかもしれない。僕や勝美に万一のことがあったとしても、その保険として子供を増やしておくということなら、何人でも大歓迎だ。自分の子供と自分の兄弟が同じ歳とか、兄弟のほうが年齢が若いというのは、大昔の子沢山の時代には、わりと多かったみたいだから、気にすることではないだろうし・・・。子供の生育環境として、同年代の子供が家に居るというのは、決して悪いことじゃない筈だ。本当に小さいときはともかく、ある程度大きくなってくれば、親の負担も逆に減るに違いない。

でも、そうか、僕にとっても義理の妹ができるのか・・・。あっ、そうか。もう僕は正式に入婿として養子縁組したんだから、義理の妹ではなく、戸籍上は本当の妹になるのかな？・・・まあ、そんなことはどうでも良い。なににせよ家族が増えるのは、めでたいことだ。

・・・待てよ。まさかと思うけど、実家のほうも父さんと母さんに、または父さんと博美さんに、弟か妹ができるなんてことはないよね？・・・でも、あっちも全員、まだ４０歳そこそこなんだから、今から子供ができても、ちっともおかしくはないな。直接聞くのは自分の親だと恥ずかしいから、それとなく優稀に聞いてみるか。

「でも、こうなると、やっぱり元旦に入籍しておいて良かったわね。千博君と勝美に先見の明があったということじゃない？」

「まったくだ。あのときは、私も、そしておそらく千博君のご両親も、お正月のおめでたい気分の中で、半分ノリで入籍まで突き進んだという雰囲気が強かったような気がするけど、こうなることを予想していたとすると、千博君は本当に用意周到だな。わりと出たところ勝負の性格の勝美とは、えらい違いだ。私たちは夫婦揃って二級なんで、勝美が一級になったのは、トンビが鷹を生んだに違いないと思ったりしたけど、その勝美がどうやっても足元にも及ばなかった千博君は、やっぱり本当に優秀で頭が良いんだね。さすがにご両親とも一級だと、ここまで出来が違うんだろうか。学年二位の面目躍如じゃないか。」

「いえ、僕の考えなんて、本当に浅くて底が知れています。現に今回も、僕が男性になりたいという我儘（わがまま）を述べたために、勝美はもとより、遠藤家にこんなにも大きなご迷惑をおかけしてしまった訳ですし、僕の気がついていないところでも、きっと何か回復できない程の大きな影響が出ているんじゃないかって、実は気が気じゃないんです。」

「そういう考え方ができるところが素晴らしいよね。普通の人は、そこまで気を回さないよ。勝美には、いや、我が遠藤家にとっても、本当にでき過ぎた婿殿だな。一瞬で勝美を孕（はら）ませるなんて、あれも極めつけに優秀だし・・・。」

「それについても、僕のものは勝美から貰ったものですから、子供ができたことの功績は、僕ではなく勝美のものが優秀だったということではないでしょうか。僕はただ、子供が早く欲しい、沢山欲しいって、それだけを考えて頑張っただけですから。」

「お、千博君も、こういう話にさりげなく合わせて対応できるようになってきたな。それでこそ大人の男性として、猥談にも参加できるようになってきた証拠だ。頼もしいぞ。・・・最初の日にこういう話を振ったら、しどろもどろになって見事に自爆していたよね。いきなり、私に射精するところを見せるようなことを話しだして、あのときは、もうこういった男同士の下ネタ冗談ができるようになったかと驚いたんだが、そのあと噛んでしまっただろう。それで、頭が真っ白になっていたとバレてしまったんだっけ。もう随分前のことのような気がするけど、まだほんの2カ月ちょっと前のことなんだよね。なんだか懐かしいな。」

「あっ、あれはっ。・・・そっ、そのっ・・・。」

「それとも、あれかな？・・・今なら、君が射精するところを見せてくれるのかい？・・・お互い男同士なんだし、何も別に恥ずかしがるような話じゃないよね？・・・私も君の優秀なところには興味があるんだ。何なら、今すぐ、ここでやってみて貰えるのかな？」

「ぁっ、ぁのっ、あっ・・・、そっ・・・、それはっ・・・、その

っ・・・・、ぁあっ・・・・、ぼっ・・・ぼきゅっ・・・・、あぅっ・・・・。」

「・・・と、あまり、からかうのは止めよう。さっそく噛んでしまったね。・・・また君の心を抉（えぐ）ってしまっては、こないだのレストランの二の舞になってしまう。あのときは本当に申し訳なかったね。」

「・・・いっ、いえ、・・・もう大丈夫です。」

「あなた、そういった冗談は、本当に気をつけてくださいな。また千博君を泣かせてしまったりしたら、勝美にこんどこそ絶交されてしまいますよ。千博君はもうパニック寸前じゃないですか。・・・でも、勝美が子沢山を望んでいたのは、去勢した日に勝美から聞いて知っていたけど、千博君も同じ考えだったとは頼もしいわね。是非とも沢山励んで下さいね。私は孫が何名いても大歓迎ですよ。」

「うん、それは真面目な話だよ。子沢山になるかどうかは、あれが優秀かどうかじゃなくて、考え方が絶倫かどうかで決まるんだ。私は自分のあれが特別優秀だとは思っていないけど、でもこれまで勝美が一人っ子だったのは、海外勤務が多かったりして、子供を作ることに躊躇（ちゅうちょ）したからだ。励んでもできなかった訳じゃぁない。だから、君たちが頑張っているのを見て、何も私たちが興奮したとか、そういう話じゃなく、もっと子供が居ても良いんじゃないか、君たちと一緒になって、もう一度子育てをやってみようかと、そういう気持ちになったからなんだ。」

「勿論、君たちの子供に同年代の親戚が居るのは、とても良いことだと考えたからというのもある。私たち夫婦は、お互いに一人っ子でね、勝美には従兄弟が一人もいないんだ。それで勝美にはとても寂しい思いをさせてしまったと考えている。千博君は兄弟が沢山居るけど、勝美は一人っ子だったんで、君たちの子供の従兄弟はうちの親戚にはいない。」

「そういったことをいろいろと考えていて、やはりここは、私たちもまた頑張るべきじゃないかと、思うようになっていたんだ。とい

っても、直接のきっかけは、やはり君たちが励んでいるときの、あんなに激しく、お盛んな嬌声を毎日聞かされて、つい年甲斐もなく、というのも本音だけどね・・・。」
「・・・・・・・。」
「知ってのとおり、今は結婚に際して、男女とも国が徹底的な生殖機能の検査をやってくれて、少しでも生殖能力に問題があると、完全に直るまで無料で治療の面倒を見てくれる。何せ今の医療技術では、クローンによって生殖器をまるごと作り直して移植することだってできるんだから、子供ができないというのは、当人が望んでいないということと同義なんだ。だからこそ、精神的な絶倫、つまり子供を沢山欲しいという意志こそが、子沢山の必要十分条件なんだ。」
「私たちだって、もう孫が生まれるというのに、やっぱりもっと自分の子供を欲しいと願ったから、今回のおめでたに繋がったんだ。君たちにも、これからもっともっと期待しているよ。」
「あたし、何名でも産み続けるわ。最低でも四人、できたら六人とか八人とか居ると良いわね。ほら、古典かもしれないけど、大昔の名作小説で、八男がどうとかいうのもあったじゃない？・・・あたし、前にあれを読んで、異世界モノっていうジャンルの小説に嵌まったことがあるのよ。」
「わかりました。でもそれは勝美が無事出産してからの話です。今はとにかく、無事出産することを優先しますし、それ以前にお腹に子供が居る状態で勝美を愛するのは、当面控えようと考えています。」
「そうなのかい？・・・まあ、それは二人で話し合って決めることだろうけど、激しくしなければ大丈夫なんだろう。忘れちゃわない程度に、ときどき愛し合うことは禁止されていないんじゃなかったかな？」
「いえ、これは僕のけじめの問題です。勝美とお腹の子供に、万一でも悪影響がありそうなことは、一切控えようと思っています。そ

れに、そんなつもりはないにしても、僕も男の子ですから、もし暴走して自分を抑えられなくなったりしたら、僕は自分を許せないでしょう。」
「そうね。それで千博は今朝の検診のとき、大変な目にあったのよね。いくら予防だとしても、あそこまで徹底的に搾り取られちゃったりしたら、もう暫くはセックスなんてできなくなっちゃうんじゃないかしら。」
「そっ、それはっ！・・・そのっ！！・・・。」
なっ、なんでっ！・・・。なんで勝美はそんなことお義父さんやお義母さんにバラしちゃうの？！？！・・・あれは僕と勝美だけの、最高機密なのに・・・。交換初夜のとき、僕がお尻をグリグリされて、失神しちゃったのは、きっとお義父さんはわかっている。それは今更もう仕方がない。でも、今日のことを教えちゃったら、またしても僕がお尻グリグリで失神しちゃったのが、わかっちゃう。というより、僕がお尻をすっかり開発されて、完全に調教されちゃったことが、周知の事実になっちゃう。・・・もう、僕、この家でお義父さんと暮らしていく自信がなくなっちゃうよ・・・(泣)。
「夫婦の秘め事を親に暴露するものじゃないぞ、勝美。千博君が困ってるだろう。そういうことは、家族でも黙っているものだ。」
ほら！・・・やっぱりお義父さんはもう、全部わかっちゃってるんだ・・・。きっと僕が、どんなふうにお尻を調教されているのかを想像して、それで興奮して子供ができたに決まってるんだ・・・(涙)。
「ごめんなさい、千博。あなたの気持ちを考えていなかったわ。・・・でも、そんなの大丈夫よ。あたし、身体を重ねなくても、男の子に奉仕する方法は沢山知っているわ。なんてったって、元は男の子だったんだし、それどころか、千博にあげたおちんちんは、もともとあたしについていたものでしょ。だから、安心してあたしに任せておいてね。ベッドでは、必ずや千博が満足するまで奉仕してあげるからね。・・・大丈夫。期待していていいわよ。いくらでも天国

を見せてあげるから。」
「いっ、いやっ、そっ、それはっ・・・、そっ、それもっ・・・。
そのっ、遠慮させて貰うよ！！」
あっ、危ない！！・・・勝美が本気で奉仕なんてしてきたら、たとえお尻グリグリをされなかったにしても、僕なんて秒殺もいいところだ。１分と持たずに射精させられてしまうのは間違いない。それどころか、次々に連続射精させられちゃうに決まってる。もうスッカラカンになるまで搾りとられて、泣いて許しを請う場面しか想像できない。やっぱり婿に入るって、精神的にキツいなぁ。覚悟してはいたけど、僕の男の子としてのプライドは、いったい何度ズタズタのボロボロにされちゃうんだろうか。いや、入婿になったからには、きっとプライドなんて持っちゃいけないのかもしれない。・・・嫁に来るのと、どっちが大変なんだろう・・・。

第７７話　妊娠発表

「皆に報告があります。・・・勝美が妊娠しました。」
「「「ぇえーっ！」」」
「「「うそーっ！！」」」
「「「おめでとうーーっ！！」」」
「「もう？」」
「いつ命中したんだよ？！」
「そりゃ、毎晩やってりゃ・・・。」
「本当に毎日やってたんだ・・・。」
「チクショーッ。羨ましいぞーっ。」
「でもよかったじゃない！」
「入籍しといて助かったな。」
「早晩こうなるとは思っていたが、随分早かったな。私も担任として鼻が高い。本当におめでとう。」
「予定日はいつ？」
「やっぱり婿は種馬か。」
「でも役目をきっちり果たした訳だ。」
「勝美が出産するなんて・・・。」
「千博もパパになるんだぜ！！」
「男の子？・・それとも女の子？」
「千博のあれは超優秀なんだな。」
「いや、もともとは勝美のものだろう？」
「勝美はそんなに立派だったっけ。」
「どうかな？・・・普通だったような・・・。」
「元村や加藤と比べちゃダメだよ。」
「でも、ちっちゃい身体にしては結構・・・。」
「そういや、そんな記憶も・・・。」

「えぇーっ。勝美って男の子のときは狸だったの？！？！」
「ねえ、内診受けたんでしょ？・・・どうだった？・・・恥ずかしくなかった？」
「二人はあそこを手術してるんだぜ、今更・・・。」

放課後の千博と勝美の発表は、学校中に物凄い激震をもたらしたわ。もうすっかりお馴染みになった、記者会見スタイル。千博と勝美が教壇のところに並んで座り、クラスの皆が前のほうに集まって、次々に質問を浴びせかける中、他のクラスの生徒はその後ろのほうに詰めかけるという、まるで有名人並ね。しかも今回は先生まで何名か、集まっている。

でもさすがに、おめでたい話であることは間違いないから、皆の質問も生暖かいものばかりで、鋭い質問や意地悪い野次はまったく見られないわ。皆、興味津々で山のような質問を次々に浴びせかけている。千博と勝美も、やっぱり嬉しいんでしょうね、かなり恥ずかしい質問でも、ひとつひとつ丁寧に答えているわ。・・・二人とも質問によっては顔を赤くしているけど、それでもにやけているんだから。いわゆる、嬉し恥ずかし状態にあるのが丸わかりだわ。

話がどんどん弾んで、千博のおちんちんやたまたまが優秀だっていう話から、もともとは勝美のものだから、勝美のものが優秀だったっていう話になり、勝美の生殖機能点は物凄く高かったっていう話とか（これは事実らしいけど・・・。そうじゃないと、男子の学年二位にはなれないわよね・・・。）、勝美のたまたまは狸並だったっていう話とか、毎日どんな体位でやっていたのか、とか、ネタは尽きないみたい。勝美は顔を赤らめながら「いやぁぁねぇ！」とか「恥ずかしい・・・。」とか言うんだけど、実は夢見心地でベッドでのことも明け透けに話してしまうので、千博は針の筵だわ。でも千博も他の男子から、さんざん羨ましがられ、悪い気はしていないみたい。やっぱりこの二人、似た者同士というか、お似合い夫婦なのね。

「ねえ、妊娠したら、あっちは控えるの？」
「うん、それはやっぱり、程々に・・・。」
「でも確か、性教育の授業では、激しくしなければ大丈夫って教えられたわよね？」
「そうらしいね。でも、やっぱり万一のこともあるじゃない。・・・勝美を愛していたら、お腹の子供に悪影響がありました、なんてことになったら、後悔しても遅いからね。」
「それはわかるけど、お前よくガマンできるよな。」
「これでやっと、独り身の悲哀を味わうことになる訳だ。・・・右手クラブへようこそ！」
「右手クラブは相手がいない童貞の溜まり場だろう？・・・結婚している杉田・・・、あ、遠藤が入ったら浮いちまうぜ、きっと。」
「そもそも遠藤はギッチョじゃなかったっけか？」
「そんなの、名称だから良いんだよ。細かいこと気にするな！」
「お前、まだ男子のオナニー、あまり慣れていないんじゃないか。よかったらいろいろ教えてやるよ。・・・オカズも貸してやろうか。」
「皆、ご親切にありがとう。でも、心配して貰わなくても、あたしが千博に奉仕してあげるから、大丈夫なの。セックスしなくても、千博を満足させる自信はあるから。」
「そういやこいつ、もう遠藤にバックを開発されちゃってたんだっけか？」
「別にバックじゃなくても、普通に手や口で奉仕できるだろうよ。」
「やっぱりリア充か。殴りたくなってきた。一発殴らせろ！！」
皆、口々に勝手なことを言ってたけど、千博のクラスだけじゃなくって、他のクラスから詰めかけた生徒の質問にも、だいたい答え終わったところで、千博と勝美が二人して立ち上がり、千博が言った。
「質問はだいたいお終いかな？・・・じゃあまた、後で思いついて聞いてくれても良いから、今日はこの辺で終りにします。」

「二人とも、これからが大変だね。」
「応援してるからね。頑張ってね。」
「しかし、一年のときから付き合ってきたお前らが、こういう結末になるとはなぁ・・・。」
「でも、二人は結婚して、無事子供もできたんだし、めでたしめでたしじゃないの？」
「杉田・・・、あ、もう遠藤千博か・・・。遠藤千博が子供を産むんだったら、そのとおりなんだがな・・・。」
「何よ、どっちが子供産んでもいいじゃない。随分と女性蔑視の発言ね。」
「そうじゃないって。二人が性別を交換したということが驚きだって言ってるんだ。」
「ま、夫婦の関係は、外部からはわからないということだ。」
会見が終わっても、まだ集まった皆は姦しいわね。話題が尽きないのはわかるけど、やっぱり千博と勝美の二人の行動力と結果には、皆も驚かされることばかりなのね。
と、勝美が人込みをかき分けるようにしてクラスの後のほうに進み、そこでひっそりと隠れるように身を潜めている底辺コンビ、仁科君と片桐君のところに行って、二人に話しかけた。
「ねぇ、あなたたち。もう覚悟はできたんでしょ？・・・その様子だと、まだ警察は来ていないようね。さぞかしたっぷり反省できたんじゃないかしら・・・。」
二人は勝美と眼を合わせることもできず、俯いたまま真っ青になって、ブルブルと震えだした。勝美が話しかけても、返事すらできない状況で、もう半べそ状態みたい。
と、そこに勝美を追いかけてきた千博が、割り込んだ。
「仁科君、それから片桐君、十分反省してくれたかな？・・・その様子だと、もう二度とセクハラやいじめはしないって心から思うようになったようだね。・・・よかったら、クラスの皆の前で、改めてそれを約束してくれるかな。」

「うっ、うんっ。・・・おっ、・・・俺っ、・・・もっ、もうっ、二度と、・・・二度と誰かをからかったりしない・・・。そのっ・・・、女になってもっ・・・女なら・・・、そういうことはそもそも・・・する側じゃなくなるけど・・・、でもっ・・・、ごめんよぅ・・・・、もうしないよぅ・・・、うっ・・・うぅっ・・・、ひっ・・・・ひぐっ・・・。」
「・・・ごっ、ごべんなざいっ・・・。ぐっ・・・、ぅぐっ・・・。ぼっ、ぼうじばぜんっ・・・。」
　片桐君がべそをかきながら詫びを入れ、仁科君も続いたわ。二人とももう泣きじゃくっていて、千博が話したような、約束とか誓いの言葉じゃないけど、でも十分に思いは伝わってきた。あたしは自分が女の子になって良かったと思っているけど、この二人を見ていると、何だか女の子にされちゃうのが可哀相になってきちゃったわね。あたしだって、最初に告げられたときは、この二人と同じくらいショックを受けて人生に絶望しちゃったんだわ。・・・いずれ二人にも、精神的なサポートをしてあげようかしら。
　そんなことを考えていたら、千博が思わぬことを口にした。
「ね、勝美。・・・これでもう十分だよね。・・・仁科君と片桐君、もう二度としないと約束してくれたから、警察には訴えないことにするよ。・・・実は君たちのこと、どうしようかと、まだ勝美と二人で話をしていたところで、訴えてはいないんだ。だから、二人とも反省しているようだし、今回だけは、もう無罪放免にしてあげるよ。でも、次はないからね。」
　あ、そういうことだったのね。きっと、千博が仏心を出して、二人を許してあげようと言い出したに違いないわ。二人とも、最初はポカンとしていて、何を言われたのかわからなかったようだけど、勝美も肯定して「あなたたち、おちんちん切り取られなくてよかったわね。」と言われたら、一気に喜びに包まれて、二人して涙をポロポロ零しながら、何度も何度もお礼を述べていたわ。それまでシーンとして、静まり返っていたクラスの皆も、ホッとした様子でま

た雑談を開始した。まあ、あの二人、これまでもさんざん好き勝手なことをしてきたから、丁度良いお灸になったんじゃないかしら・・・。

「ねぇ、優稀はこのあと、どうするの？・・・まっすぐ帰宅？」

円が聞いてきた。

「うん、もう特に用事はないんだけどさ、山野さんや五十嵐さんの様子を見に行ってみようかと思っていたんだ・・・。二人とも、最初はちょっと心配してたんだけど、何とか元気を取り戻してきたみたいだから。」

「じゃあ、あたしもついて行って良いかしら？・・・何となく気になるんで・・・。」

で、円と二人で向かおうとしたら、たまたま一緒になった千博と勝美も同行してくれることになった。この二人は、お正月に山野さんと五十嵐さんの様子を見に行ったとき、一緒に来てくれたんで、好都合よね。

「あ、杉田さん、それに遠藤夫妻と、橘さんも揃って、何か用事？」

「いや、前に君と山野さんとの関係を気にかけていたんで、その後どうしてるかなと気になって、ちょっと来てみたんだ。迷惑だったかな？」

「ありがとう。もう僕たちは大丈夫。君たちのように、妊娠発表とかは先の話だろうけど――そもそもジュンは生理が不順みたいだしね――。でも、多分、卒業したら早々に結婚することになると思う。君たちにはすっかりお世話になったね。特にその節は、ジュンの気持ちを前向きに切り換えてくれて、本当に感謝しても、し切れないよ。それにあとで聞いたんだけど、榊君からのアドバイス、あれも君たちがけしかけるように仕向けたんだって？・・・おかげで、僕も勇気を出して告ることができた。本当にありがとう。君たちは間違いなく、僕たちのキューピッドだよ。いずれ結婚式には、是非と

も招待するからね。」
　和田君はそう言いながら、山野さんの肩を抱いて、というか、腰に手を回し、絶対に離さないという雰囲気で身体を密着させている。山野さんは、うっとりとした顔、いや、とろんとした眼で蕩けてしまった顔というほうが適切ね。安心しきって、すべてを委ねたような雰囲気で、心ここに非ずという顔をして、和田君にしなだれかかっている。和田君が腰に回した手を少し動かすと、こちらも千博たちと同じで、山野さんがビクッ、ビクッと痙攣している。あれは絶対、軽くイッちゃっているみたいだから、このまま帰宅したら、ベッドに直行するんじゃないかしら。この二人は、もう大丈夫だと思ったので、次に五十嵐さんの様子を見に行くことにしたんだけど、その途中で円が話しかけてきたわ。
「ねぇ、あの二人だけどさ、もう妊娠してるんじゃないかしら。」
「えっ、なぜそう思うの？」
「んー、特に根拠がある訳じゃないんだけどさ。・・・今、和田君が、山野さんは生理不順で、とか言いかけたでしょ？・・・でも和田君が女子だったときには、生理周期は安定していたような記憶があるの。手術したからって、そんなに急に不順になるものじゃない気がするんだ。だから、案外、もう妊娠しちゃったんで生理が止まっている可能性もあるかもねって、そう思ったわけ。」
「実は、この前、勝美があたしに、生理がまだ来ないって相談したことがあったじゃない。確か成人式の翌週だか、二週間後だったか、その頃だったわよね。・・・あのときも、何の根拠もないけど、もしかして勝美はもう妊娠してるんじゃないかって、そういう気がしたのよ。つまり、妊娠したから生理が来なかったって、瞬間的にそう感じたわけ。」
「そうなの？・・・でも、そんなこと、少しも・・・。」
「ええ、二人をぬか喜びさせちゃ拙(まず)いと思ったから、何となく誤魔化していたんだけど、実際、そうだったでしょう？・・・あたし、こういう勘って、昔から案外よく当たったのよね。今回も、何とな

くそういう気がするっていうだけなんだけど、どうなのかしら。」
　確かに、円は勘が鋭いところがあるわ。妊娠したかどうかを見分ける能力があるのかどうかは知らないけど、でも円がこれだけ自信を持って話すところを見ると、もしかして、と思わなくもないわね。なにせ、あの二人の様子だと、もう千博と勝美みたいに、毎日毎晩、何度も膣内射精（なかだし）しているのは間違いなさそうだから、健康な思春期の男女なら、もうとっくに妊娠していないほうが逆に不自然ではあるのよね・・・。二人とも卒業したら直ぐに結婚するらしいから、妊娠しても何も困らないだろうし・・・。
「でも、勝美も山野さんも、二人とも素敵な旦那様と一緒になれて、いいなぁ。あたしが好きになった男子は、なぜか皆、あたしとは一緒にならない運命みたいだし・・・。」
「ごめんなさい・・・。それ、あたしの所為（せい）よね・・・。あたしが性転換しなければ、円はあたしと恋人で居続けた訳でしょう。あたしも残念で、あのときは本当に泣きたかったわ・・・。」
「まあ、でも今の優稀は、女子になったことを後悔していないんでしょ？・・・だったらそれで良いじゃない。せっかくのチャンスだ、そう考えるって、あたしに話してくれたわよね。その考え方、立派だし、あたしは好きよ。それに、あたしは優稀と、お互い処女と童貞を捧げあったんだから、十分満足だわ。たった一度だけの体験だったけど、ほら、思い出は一度限りだから美化されるんじゃないかしら？」
「わかるけどさ、あたしはたった一度だけの、二度と経験できない体験なんて、やっぱり嫌だわ。経験しちゃったら、どうしても思い出して、もう一度やってみたくなっちゃわない？・・・特に、そんな素晴らしい感動する体験だの、身体の中心からの快感だのを一度でも味わっちゃうと、そのあと、それが欲しくて堪らないのに、手に入らないということになるのよ。だから、あたしは千博とは、手術前に初体験するのは我慢したの・・・。」
「それね・・・。」

確かに、優稀との初体験は、素晴らしかった。破瓜の瞬間は痛いって聞いていたけど、優稀が入ってくる一瞬だけ、ちょっとピリッとした程度で、ちっとも痛いという感じはしなかったわ。その代わり、優稀が入ってきたときの満足感、充足感、そして、優稀のものから感じられる幸せ・・・。身体の中心、いや、身体の奥から、じわじわと全身に広がっていく暖かさと快感。

　あのとき、もう優稀は去勢されていて精子はいなかったにせよ、身体の一番奥深くに膣内射精(なかだし)されたときの、この男性(ひと)に征服されたんだ、この男性(ひと)のものになったんだっていう喜び・・・。もう一度、優稀のおちんちんを入れて欲しいな・・・。

・・・そうか、もう二度と経験できないと思っていたけど、怜央に抱かれれば、優稀のおちんちんを入れて貰えることになるのよね・・・。あのときと同じ感覚なのかしら。それとも他人のおちんちんになっちゃったから、変わっちゃったのかしら。・・・そもそも、こういう考えって、優稀はどう思うんだろう。・・・優稀は、もうお互い、新しい恋を探そうって言ってくれたし、優稀との関係は恋人から親友になったんだから、あたしが恋人をつくって、その男性(ひと)に抱かれることについては、優稀も応援してくれるだろうけど、怜央は優稀の本命の恋人だもんねぇ。あたしがアプローチしたら、怜央を寝取られちゃうって感じるんじゃないかしら・・・。だとすると、申し訳ないわ。・・・それに、そもそも怜央はどう思うのかもわからないし・・・。

第７８話　中学生活最後のバレンタインデー

「おはよう。女子になって初めてのバレンタインデーは、どう？・・・準備は大丈夫？」

「あ、おはよう。一応、本命チョコと義理チョコは持ってきたんだけど、友チョコがいまひとつわからないの。男子にはなかった習慣だから。・・・円には、友チョコで良いんでしょ？他には、勝美にも友チョコを持ってきたんだけど、それ以外の女子には、どこまであげる必要があるのかしら・・・。」

「友チョコは、まあ義理チョコとだいたい同じ感覚よ。相手のことを特に毛嫌いしていないなら、社交辞令としてちっちゃいものをあげておく・・・。要するに友人の和を少しでも広げる、良い機会だと軽く捉（とら）えれば良いんじゃない？」

　登校するとき、正門の近くで円に会って、気遣われた。でも、正直なところ、友チョコはよくわからないのよね。本命チョコは、あたしの場合、怜央と寛の二人だけで良い筈だし、それ以上拡大したら誤解を招きかねないんで、まあこれは簡単なんだ。それとクラスの男子には、全員に一応、小さな義理チョコを渡すことにしたの。やっぱり、これまで男子の仲間として１年近く過ごしてきたんだし、ここでヘタに渡す子と渡さない子なんて区別したら、それこそ大騒動になっちゃうから・・・。仲の良い友達っていうと、男子だったときには寛と慶太の二人がいるけど、お付き合いすることにした寛と、もう相手が居る慶太じゃ、扱いが違うのは当然だし、そんなことをいろいろと考えていたら、もう頭がパンクしてきちゃったんで、考えるのを放棄して、クラスの男子には全員、義理チョコを渡すことにした。実は怜央と寛にも義理チョコを渡してるんだけど、これはやっぱり、この二人が特別な関係だって、あまり宣伝したくないから、二人にはあとで、そっと本命チョコを渡すことにしたんだ。・

・・まあ、これは女の子になった必要経費だと考えたんだけど、女子の間では友チョコが、それも結構高そうなものが、こんなに飛び交うとは、想像もしていなかったわ。貰った友チョコは、殆どクラスの女子全員からで、義理チョコみたいに小さいものが多いにしても、中には結構豪華なものも混じっていて、ちょっと驚きだった。

　ただ、確かに円が言うとおり、アッケラカンと渡すところは義理チョコに似ているのかしら。あたしは友チョコを沢山準備するなんて、想像もしていなかったんで、次々に渡されて困っていたら、円がそっと教えてくれた。

「今日、友チョコを持ってこなかったのなら、ホワイトデーに友チョコを返せば良いのよ。それに、そもそも男子だった優稀が、そんな女子の習慣を知らなくても、誰も気にはしないと思うわ。ホワイトデーのお返しに、友チョコありがとうって書いておけばバッチリよ。」

「わかったわ。でも、こんなに沢山の友チョコ、二ヶ月連続でお小遣いがなくなっちゃうわね。」

「それだったら、今日から1カ月あるんだから、手作りのクッキーでもつくってみたら？・・・多少失敗したとしても、手作り品のステータスは買ったものよりずっと上なんだから。」

　その感覚は、良くわかる。失敗作でも、手間隙(てまひま)かけたものは真心が籠(こも)っているような気がするしね・・・。

　昼休みに、クラスの男子に機械的に義理チョコを配って回り、怜央と寛には他の人にわからないように、本命チョコを、家に届けることにした。まあ、玄関で渡すだけのつもりだから、まさかそのままベッドに入ることにはならないわよね・・・。

　なににせよ、これで中3の主なイベントは、全部終了したと考えて良いのかしら。あとは卒業式が残っているけど、ほんの3カ月前には、あたしが女の子になって、義理チョコを配って歩くなんて、想像すらできなかったわ。母さんの秘密といい、人生って本当にわからないものね。

―――――――――――――――

――――――――――――

「おい、遠藤婦人。お前、旦那には本命チョコを渡さないのか？」
「もうとっくに、今朝渡しちゃったわ。一緒に住んでるんだし、わざわざ学校に持ってくる必要もないじゃない？」
「一緒に住んでいるから、じゃなくて、一緒に寝ているから、だろ？」
「そうか、杉、あ、違った、遠藤旦那がベッドの中で目が覚めたら、遠藤婦人が身体にリボンを巻いて、『バレンタインは♡ア・タ・シ♡』ってやつか？」
「そんな千博の自制心を試すようなことはしないわよ！・・・千博が当面は我慢するって言っている以上、あたしがそんなことしたら、いじめになっちゃうわ。あなたも男の子なら、そんなことされて我慢するのが、どれだけ大変かはわかるでしょう！・・・一緒に寝て、抱き合っているだけでも、千博が必死に自制しているのは明白なんだから・・・。」
「でも、お前が奉仕して旦那の性欲を開放してやってるんだろう？」
「羨（うらや）ましいよな・・・。」
「男冥利（おとこみょうり）に尽きるじゃないか。」
「ねぇねぇ、今朝は何を何回やってあげたの？」
「いやぁねぇ。そんなこと聞いてどうするの？・・・いつも、普通に手で扱（しご）いて1回だけよ。だって、ほら、男の子は一度出しちゃうと、取り敢えず落ち着くものでしょう？」
「フェラはしないの？」
「しなくはないけど、あれって感じすぎちゃうのか、千博が気絶しちゃうこともあるのよね。だから・・・。」
　だっ、だめだ！！・・・勝美に受け答えさせちゃうと、もう僕はいたたまれない。夫婦のベッドでの様子を、クラスの皆にこんなに

アッケラカンと教えちゃったら、僕の精神は持たないよ・・・。これまで何度も勝美に注意して、いつも最後はお願いになるんだけど、勝美はそんなことまったく気にしていないのか、聞かれると全部答えちゃうんだ・・・。これは婿かどうかとは関係がない。こんなに昔から付き合っていても、勝美の性格を読みきれていなかったということなんだろうな。それとも、男の子同士だと、こういう話題も、ごく普通に冗談を言うような感覚で、言い合うものなんだろうか？・・いや、やっぱりそうではなく、こんなに早く、クラスのトップを切って結婚しちゃったからこそ起きる問題なのかもしれない。とにかく勝美を黙らせないと・・・。

「夫婦生活のことは、そんなに開けっ広げに話すものじゃないよ。第一、勝美は女の子だろう？・・・そんなに明け透けに話すなんて、はしたないよ！・・・皆も、もしどうしても聞きたければ、男子は男子同士で僕に聞けば良いし、女子は勝美に女子会トークの場とかで、そっと聞けば良いだろう。」

「いくら勝美が元男子だからって、男子から勝美へのそういう直接発言は、十分にセクハラになるんだって考えてみてくれるかな！！」

「ごっ、ごめんなさい。千博・・・。あたし、そんなつもりじゃ・・・。」

僕が少し強い口調で注意したので、話はそこで収まった。勝美も顔を赤らめて、恥じらう姿勢を見せているから、これで少しは落ち着くかな。

まあ、それはともかく、勝美の手作りになるチョコは、本当に本格的で美味しかった。これまで僕は、自分でチョコをつくるなんて、溶かして型に入れるだけでも絶望的になるほど料理が苦手（なにせ母さんも呆れるレベルで、とうとう最後は女子の僕に料理の手伝いをさせようとは、絶対に言わなくなった位）だったんで、いつも勝美にあげるものは、市販の高級チョコを買って、ラッピングだけ自分でやって誤魔化してきたんだけど、勝美はお義母さんのサポート

があったにせよ、これだけの生チョコを完全に自前でつくるとは恐れ入った。有名なブランドの生チョコを買ってきて、それを溶かして生クリームとかオレンジキュラソーとかを更に加え、別に準備しておいたドライフルーツやナッツクリームなんかを中心に入れて、見事なチョコアソートメントを手作りしてくれたんだ。本当に僕ひとりのための、一点もののハンドメイドチョコで、前から準備していたんだろうけど、これだけのものを前日に作って、当日朝渡してくれるなんて、もう感激しかない。でも、女子になってまだ2カ月ちょっとの勝美のほうが、十五年間女子をやってきた僕よりも、どう考えても女子力が高いって、どういうこと??

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。」

「あ、ちょっと待って。・・・友チョコを配っちゃうから。」

さっき、昼休みにクラスの男子全員に義理チョコを配っていた勝美は、今度は一転して友チョコをクラスの女子に配りだした。これらも手作りなのかどうか、よくわからないけど、勝美のほうが昔の僕よりずっと女の子らしく見える。多分、僕は男の子になりたくて、という以前に、自分が女の子であることが、まったく似合っていなかったんだろう。これって、やっぱり僕も性同一性障害の気があったということなんだろうか・・・。もうすっかり女の子としか見えない勝美は、女の子らしいしぐさや立ち居振る舞い、言葉遣いなんかもそうだけど、随分努力して必死に女の子になろうとしている。僕みたいに、深く考えもせず、十分な事前準備もなくして、いきなり性器だけを交換してみても、そんなに簡単には女子力や男子らしさが付いてくる筈もない。前から感じているんだけど、勉強がちょっとだけできるとか、成績が上位だということだけで性転換を決めてしまうと、その後、転換した性別での生活に慣れるまで、相当の努力が必要になる。やっぱり世の中、そんなに簡単に性転換できるものじゃないんだな・・・。

それはそうと、僕は今年、結婚したこともあって、女子からは沢山の義理チョコは貰ったけど、本命チョコはさすがにひとつも来な

かった。確か勝美は、公認で僕と付き合っていても、本命チョコとしか思えないものをわりと貰っていたみたいだから、これはやっぱり、結婚したということが、恋人よりもずっと大きな意味を持っているということなんだろう。まあ、これは想定の範囲内だし、義理チョコのホワイトデー返しは僕も貰った経験があるから、あまり心配はしていない。それよりも、これまでは女子の友達から山ほど貰っていた友チョコが、ひとつも来なかったのは、ちょっと寂しかった。まあ、女子にしてみれば、男子の僕に渡すのは、友チョコではなく義理チョコだというのが自然なんだろう。でも、義理チョコと友チョコは、立ち位置とすれば似てるし、ラッピングも中身も殆ど同一なのに、この感情の変化はどうしてなんだろう。クラス中の女子から、いや、他のクラスの女子からも、沢山の友チョコを貰った勝美が、何となく羨ましく感じる・・・。これってきっと、僕の心はまだ、女の子の部分が、かなり残っているということなんだろうな・・・。あれ?・・・でも、だとすると、さっき感じた、女子が似合っていない（男子になりたかった?）僕の精神と、女子の気持ちを引きずっている僕の精神は、どこで折り合うんだろうか?・・・不思議だ・・・。

―――――――――――――――――――――――

さ、これで男の子には全員、義理チョコを配ったし、あとは帰りに寛の家と怜央の家に寄って、本命チョコを渡すだけね。友チョコは、よくわからないけど、あとで手作りクッキーでも焼くことにして、誰と誰から貰ったかをリストにしなくちゃ。でも、あたしはまだ、クラスの女の子全員を、そんなによく知っている訳じゃないし、友チョコだと、必ずしもカードを添えたり、自分の名前を記載したりしない子もいるから、誰から貰ったのか、全部わかるかしら・・・。あたしたちのクラスだけじゃなくて、他のクラスの子からも貰っ

たような気もするし、そっちの子は、あたしあまりよく知らないのよね・・・。もう千博はいないし、夜に円に手伝って貰おうかな・・・。わかるかしら・・・。

それよりも、今日、クラスの女の子同士がトイレで話をしているのを小耳に挟んだんだけど、怜央がもしかするとEDじゃないかっていう噂が、ちらほら聞こえてきたのよね。怜央本人が悩んでるんだし、確かにそういうことはあったのかもしれないけど、あたしに対しては、何の問題もないんだから、多分、たまたま調子が悪かったんじゃないかしら。あんなに遊び慣れているプレイボーイに見えても、怜央だって年齢相応の男の子なんだし、レズセックスで沢山の女の子の処女を食べちゃったとしても、男の子としての経験は、あたしとの交換初夜からこっち、まだたったの3回なのよね。逆に男の子として、EDだなんていう噂がクラスの女子に広まっちゃったら、もう立ち直れなくなっちゃうかもしれない。だから、トイレであたしが出てきたときに居合わせた三名の女の子には、あたしから会話に割り込んで、怜央は交換初夜も、その後も、普通にあたしとセックスしたことを、やや誇張も交えて説明しておいたわ。といっても、勃たなかったというのも、一面の真実だろうから、無理して否定するのでなくて、男子の身体はデリケートで、特に精神的に追い詰められたり、プレッシャーをかけられたりすると、一時的に元気がなくなっちゃうこともあるかもしれないけど、そんなのは男の子とすれば普通のことだと、元男子だったあたしが説明し、怜央とは交換初夜と、その後も肌を重ねてることを、さりげなく伝えておいたから、変な噂が噂を呼ぶことは、取り敢えず避けられるかしら。

そう言えば、怜央で思い出したんだけど、弟の真央君だったかしら、あたしに聞きたいことがあるようなことを述べていたわね。これから帰りに怜央の家に寄って、スケジュールだけでも決めて貰おうかな。あたしは別にいつでも構わないけど、確か怜央の話だと卒業式の翌日が去勢日とのことだったから、もうあと三週間はないの

よね・・・。もし本当に、何か悩みがあるんだったら、宙ぶらりんのまま手術の日が近付いて来るのは、きっと精神的に辛いんじゃないかしら・・・。

第７９話　怜央の心配・真央の不安

真央は、小さいときから女の子っぽい子供だった。性格はもとより、体型も僕とは正反対で、いつも僕の後ろをくっついて歩くような可愛い男の子だった。

そんな弟をずっと見てきて、何となく真央が性同一性障害ではないかと密かに危惧し出したのは、多分、真央が小学校に入る頃、僕が小４になった頃じゃなかったかな。しばらく考えて、どうも変だという疑惑が消えなかったんで、僕から注意喚起して両親も知るところとなったんだけど、我が榊家では結構深刻な問題だった。僕たちの父親は二級だけど一代で会社（榊機械製造株式会社）を興した立身出世の人で、当然自分の後継者には長男の真央を充てようとしていたんだけど、その計画が崩れそうな状況になりつつあった。勿論、法律的には女性でも社長になれるけど、現実的に女性社長など、上場企業にあっては、会社全体の１％もなかったんで、真央がちょっと頼りないとしても、僕が代わりに継ぐことは、少なくとも当初、誰も考えもしていなかった。それなのに、真央が性同一性障害で女性化しちゃうとすると、会社を継ぐのは僕ということになる。僕が婿を取るということも、理論的にはあるけど、やっぱり父さんも母さんも、そして僕自身も、父さんが一人で築いた会社を誰か他人に任せるという発想は、どうしても取れなかった。それで何時の頃からか、僕は自分が会社を継がなければならないと強く思うようになっていったんだ。

幸い、僕は体格や体力には恵まれていたし、頭の出来も悪くなかった。それに相応の努力もしたつもりだ。その甲斐あってか、小学校の頃から、ずっとクラスではトップで、一級を目指す程度の成績を維持し続けることができた。というか、はっきり言って周囲の男子と比較して、勉強でも体力でも、負ける気がしたことはなかった。

それで僕は、いずれ自分は男子化するものと心に決めつけるようになった。当然、行動もこれに引きずられるようになり、行動がそうなれば今度は逆に精神というか性格が引きずられてしまい、気がついたら恋愛対象は男子ではなく、かわいい女の子になっていて、これまでに何名かの処女をレズセックスで食べちゃったこともあった。

まあ、僕自身、もともと女の子だったからなのかは判らないけど、処女ということに、そんなに大きな意味も価値も感じない。というより、男子になってから友達同士の猥談で皆が話しているのを聞くと、むしろ男子のほうが処女ということにかなり拘っている子が多いみたいだ。もっとも、これに関しては、要するに自分に自信が持てない男子が、相手の女の子に他の男子との経験があると、自分と他の男子のことを比べられる（それはセックスのテクニックかもしれないし、もっと直接的に男性器のサイズとかだったりするらしい）ということを恐れて、それで男性経験がない処女を好むんじゃないかって思うんだけどな・・・。ペニスのサイズなんて、身長と一緒で個人差があるのが当然だし、機能的に問題なければ、そんなの気にする話じゃない。背が低いやつが、背の高いやつを羨ましがる気持ちは、わからなくもないけど、それだって程度問題だろう。第一、女子が人並み外れたデカチンを好むなんて、都市伝説もいいところだ。普通の女の子は、平均的なサイズか、むしろちょっと小さめのペニスが一番だって思ってるのに、どうしてそれがわからないんだろう。

いけない、変なほうに想像がズレちゃった。・・・そんなことはともかく、僕のそういった変化に反比例してか、真央は女子っぽい部分がますます拡大してきて、やがて性同一性障害として女子に性転換するのではないかと、家族の皆が考えるようになってしまった。これは僕の態度とか、真央に対する接し方にも責任があったんじゃないかと、今でも申し訳なく思っている。第一、僕が両親に、真央のことを性同一性障害じゃないかって言わなければ、両親も精密検査を受けさせようとは考えなかったかもしれない。

ただ、ここにはひとつ、忘れてはならない別の大きな原因がある。両親は決して認めようとしないだろうけど、僕の名前が（生まれたときは女の子だったのに）怜央という、一般的には男の子に付けるような名前で、逆に弟は、男の子に生まれたのに真央という、どちらかというと女の子につけるような名前をつけた所為じゃないかって、昔から思っていた。僕たちの名前については父さんが強く主張したらしいんだけど、何故、父さんはこんなあべこべの名前を二人に付けたんだろう。以前、それとなく聞いてみたけど、言を左右して、はぐらかされてしまった。けど、母さんと話していて、それっぽいヒントは聞いた気がする。つまり、父さんとすれば、僕の性別が出生前診断で女の子だと判明していても、それでもなお最初の子供はどうしても男の子が欲しかったという、それだけの理由らしい。結婚したときに母さんと話をして、子供の名前は怜央、真央、未央、という中から付けていくことは決めていたらしいんだけど、確かにこれらの名前、男女どちらでも使えるように配慮されているとしても、やはりどちらかというと怜央は男の子の名前で、真央は女の子の名前、そして未央はどちらでも使える名前の気がする。女の子に怜央と名付け、男の子に真央と名付ける父さんのセンスは、僕には理解できない。願望はわかるけど、それが小さい子供の性格形成にどれほど大きな影響を及ぼすのか、考えたことはあるんだろうか。

　僕がこんな性格になって男性化を目指すようになり、真央は性同一性障害になってしまったのは、少なくとも半分以上、この変な名付けにあったに違いない・・・。名前が逆だったら、きっと僕は女子として成人して、誰かに嫁ぐことになっただろうし、真央はもう少し男の子らしい性格に育って、榊家の跡取りとして会社を継いでくれたんじゃないだろうか・・・。そもそも僕だって、見方によっては性同一性障害と診断されていたかもしれないんだ。男性になって父さんの会社を継ぐという考えはともかく、レズセックスにしか興味がなかったっていうのは、どう考えても僕の性癖の問題だ・・。

まもなく優稀がやってくる。優稀と相談して、この隠れ家に真央を呼んである。優稀が来たら、僕は自宅に戻って、ここで二人だけで落ち着いて話ができるようにしてあげよう。優稀なら、真央からどんな質問が出ても、どんな不安でも、きっと解消してくれるに違いない。それに、あの二人なら、どう転んでも間違いは起きないだろうし・・・。

（真央視点）

もうすぐ、怜央おねえ・・・、あ、お兄ちゃんの友達で、お兄ちゃんと性別を交換した優稀さんっていうお姉ちゃんが来てくれる。なんでも、判定試験で女性化対象にされちゃって、本人は嫌々だったのに強制的に性転換させられちゃったんだって。お兄ちゃんの話によると、突然女の子になることになって、かなりショックを受けたらしいけど、短期間で女の子になることを受け入れて、おちんちんやキンタマを切り取られることに同意したんだって言ってた。怜央お兄ちゃんと性別交換をしたっていう話だから、お兄ちゃんに今ついてるおちんちんやキンタマは、その優稀さんのものだったんだろう。といっても、僕はまだ男の子になったお兄ちゃんの裸は見ていないし、おちんちんやキンタマも見ていないけど・・・。僕がお兄ちゃんと最後に一緒にお風呂に入ったのは、もう3年以上前だったっけ。確かあのとき、当時はまだお姉ちゃんだったんだけど、自分はもう大人になるから、姉弟でも男女が一緒に風呂に入るのは、そろそろ止めようねって言われたんだ。でも、僕は当時、お姉ちゃんと一緒に風呂に入っても、特に性別を意識することもなく、というか同性のような気分が強かった気がする。確か、あの頃から、お兄ちゃん（当時はお姉ちゃんだったけど、なんてややこしいんだろう）が、僕のことを、何となく性別に違和感があるって言い出したような気がする。あの頃は僕もまだ気がついていなくて、そんなこともあるのかなって思った程度だったけど・・・。今は確かに、僕

の本当の性別はどっちなんだろうって、よくわからない気がする。
確かに、おちんちんには違和感があるような気もするし、別になくても困るとは思えないけど、切り取られちゃうのもちょっと怖いな・・・。それに、おちんちんがないと、立ちションするとき面倒かなぁ。でも、うちではお母さんが、トイレを汚されるからっていって、お父さんにも僕にも、座っておしっこするように言い渡されてるんで、小さいときから座っておしっこしていたから、少なくとも家では、立ちションはあまりしないんだよね。きっと怜央お兄ちゃんも、手術した後も座っておしっこしているんじゃないかな。前に何かのことで、そんな話をしていたような記憶が・・・？？？

優稀さんは、切り取られると決まって、怖くて悲しくて、随分泣いたんだって聞いた。（確かに僕には、そういった感覚はないみたいだ。）でも、その後、いろいろなことがあったらしくて、最終的には何とか納得したんだって。それでお兄ちゃんの話だと、今の優稀さんは、もうどこからどうみても女の子で、３カ月前までは男の子だったなんて、まったく思えないし、心の中まで完全に女の子になったって言っていた。お兄ちゃんとは性別交換の仕上げとして、セックスした筈なんだけど、その所為かどうか、お兄ちゃんとお付き合いすることになったみたいだ。ということは、もう二人とも、交換した性別で、何度もセックスしてるんだろうか・・・。そもそもお付き合いしている男の子と女の子なら、同級生でも何人も知ってるし、どうどうと恋人宣言したやつらもいるけど、僕たちの年齢でも恋人になると、皆セックスするものなのかなぁ。一応、何をどうするのかは性教育の授業で何度も習ったけど、どうも実感が湧かないや。僕も含めて、もうクラスの男子の多くは精通していて、連日オナニーしているような話も聞く。これも授業で習って、僕も実地でやらされたけど、何か違和感というか、自分の性格には合わない、どことなく違うことをやっている気がするんだよね・・・。快感とかの以前に、友達は皆、女の子のことを考えるとムラムラする

とか、どうしようもなく射精したくなる（だからオナニーをする）ような話をするんだけど、僕はどうしても話についていけない。多分この辺りが、性同一性障害とかいう病気で、身体は男の子だけど心は女の子だっていう診断が出た一番の大きな原因なんだろうな。僕は一度だけ授業でオナニーをしてみたけど、それ以外は一度もしたことがないんだ。いつも夢精ばかりで、あれはなんだかすごく煩わしく感じる。もしかすると、女の子の生理も一緒なのかなぁ。女の子は月に1回らしいけど、僕は月に2回か3回位はパンツを自分で洗ってるんだ・・・。

まあ、そんなこともあって、いよいよ卒業式の日には去勢してキンタマを抜かれて、その一週間後には、完全な女の子になる手術を受ける予定が組んである。でも、僕の最終的な決断は、まだ伝えていなくって、今ならやっぱり嫌だって言うことも、一応できるらしい。ただ、本当のことを言うと、僕自身、自分が男の子なのか女の子なのか、実はよくわからなかったりする。

確かに僕は、これまで男の子として生きてきたけど、男の子らしくないというか、自分でも男の子に混じって遊んだりすることが、何となく不自然で、女の子と一緒に遊ぶほうが楽しかったし、心が安らぐことは多かった。名前もなんとなく女の子っぽいし（結局、性転換しちゃったお兄ちゃんの名前のほうが、ずっと男の子っぽくて、僕の名前は女の子っぽいって、小さいときから皆に言われてきた気がする）、遊ぶときも野球とかサッカーとか、男の子がする遊びよりは、おままごととか、お人形遊びとか、女の子がする遊びのほうが、何となく多かった気がする。それにおままごとをしても、僕は男の子だったから、お父さん役をすることが多かったけど、本当はお母さん役が好きだった。こういうところが、僕は女の子っぽいって言われてきたところで、お兄ちゃんが何か変だって気付いたところなのかもしれない。

でも、それだからって、じゃあ僕は女の子なのかっていうと、そ

れもまたよくわからないんだよね。というか、女の子になると、何がどう変わるんだろう？・・・女の子と一緒に遊ぶのは楽しいし、男の子と遊ぶよりも、女の子との遊びが好きなのは確かだけど、だからって、そういう子もたまにはいるだろうし、そんなのは個性じゃないのかなぁ。第一、いずれ自分が女の子になって、子供を産むなんて、想像すらできない。ま、それはこのまま男性として成人して結婚し、誰かに僕の子供を産んで貰うことも想像できないのと一緒なんだけどね。今の世の中の風潮からして、お父さんになるのか、お母さんになるのか、どっちにせよ結婚して子供をつくるのは、国民の義務だろうし、自分が産むほうになるのか、それとも孕ませるほうになるのか、多少役割が違うとしても、父親と母親、子育てには双方とも同じ程度に重要な役割があるって、生殖の授業で繰り返し習っている。

ただ、僕のことを診察してくれた先生の話だと、僕が性同一性障害だという一つの大きな証拠は、僕が手術を受けることに対して、あまり心配していないというか、そんなに恐怖を感じていない点が大きいって言われたんだ。普通、男の子は、おちんちんとキンタマを切り取られるなんて言われたら、恐怖で気絶しちゃったり、気が狂ったりしちゃうのが一般的なんだって。優稀さんも、最初はそうだったらしい。でも僕は、そう聞いても、ちょっと怖いな、という程度で、これは手術に対する恐怖ではあっても、切り取られちゃうことに対する恐怖とは少し違う。つまり、おちんちんやキンタマに対して、そんなに執着心がないんだ。もし病気の原因がそれなら、手術で切り取るのも、治療の一部で当然だという気がする。でも普通の男の子にとっては、おんちんとキンタマを切り取られちゃうということは、自分の全人格を否定されちゃう、つまり自分はもう生きている価値がないことになるように感じるらしい。そんなことって、本当にあるのかなぁ。

もうすぐ、優稀さんがやってくるから、いろいろ聞いてみようか

な・・・。でも、変なこと聞いて失礼にならないかな・・・。

あ、チャイムが鳴った。

第79話　怜央の心配・真央の不安（後書き）

ちょっと更新が滞ってしまい、失礼しました。仕事が少し忙しくなってしまったということもあるのですが、それ以上に真央君の心の内面を描くのに苦労してしまいました。

性同一性障害なのかどうなのか、どっちつかずの揺れ動く心の状態をどのように描写すれば良いのか、悩んでしまい、書いて（一話分として完成した）は消し、また書き直しては消し、と3回も全面的な書き直しとなってしまいました。

実際、真央君がどのようなことを考え、どのような精神状態にあるのか、よく理解できていないということを思い知らされました。

しかし、この後も性同一性障害の登場人物が出てきますし、性転換を扱う小説である以上、いい加減なものを書くと、後々の展開に差し障りがあると思い、とても苦労しました。

これでも、まだ完全に完成した形だと言い切れる自信はないのですが、これなら何とか、この後の展開にも無理がないのではないかと思えるものにできたかなと考えています。

第８０話　優稀と真央

「今日は時間を取ってくれてありがとう。真央と会うのは初めてだったよね。話したとおり、小さいときから女の子みたいな子で、何となく変だって思っていたんだけど、僕だけじゃなくて父さんも母さんも、それが確信に変わってきたんで、去年の夏休みから何度も専門の先生に診察して貰ってたんだ。その結果、とうとう１１月には、間違いなく性同一性障害だろうっていう確定診断が出たんだ。それで冬休みからいろいろと準備をして、移植すべき女性の生殖器も、僕の細胞からクローンでつくったりしてきたんだ。」
「ようやくすべての準備万端整って、いよいよ来週の卒業式の翌日に去勢して貰い、その１週間後に完全な性転換手術を受ける予約というか段取りができている。つまり中学生活は女子としてスタートできるというスケジュールなんだ。ただ、本人が、まだ自分の性別について、本当に女性なのか、それとも男性なのか、少し迷っているような様子があってさ、それで最終的な手術の承諾書は、まだ出していないんだ。やっぱり、万が一にも誤診があったり、手術後に後悔しても、取り返しがつかないじゃない。・・・一応、前日までに決断することになっているんで、是非このタイミングで相談にのってあげて欲しいんだ。」
「初めまして。真央です。今日はよろしくお願いします。」
「こちらこそ、初めまして。優稀です。お兄さんの怜央とは性別を交換して、今は怜央とお付き合いしています。あたしもまだ女の子になって三カ月しか経っていないけど、男の子から女の子に変わる経験をしたばかりなんで、真央君の疑問とか心配事には、多少のアドバイスができるかもしれないわ。今日は何でも聞いて頂戴。」
１階のリビングに上がって、怜央が淹れてくれた紅茶を飲みながら、少し雑談していたら、怜央があたしに鍵を渡しながら席を立っ

た。
「じゃあ、僕はこれで失礼して先に家に戻っているよ。僕が居ると話しにくいだろうからね。だから、後は二人だけで何でも話してみてくれない？・・・まさか、真央と優稀なら、間違いもおきないだろうしね・・・。」
「真央はここの鍵を持ってる筈だよね。だから、優稀にも鍵を渡しておく。そうすれば、どっちが先に帰っても大丈夫だし、そもそも優稀にはここの鍵をもう渡しておこうと思ってたんだ。・・・ほら、恋人に家の鍵を渡すっていうのは、ひとつの大きなイベントじゃない？・・・こんな渡し方で、なんだかついでに渡すみたいで本当に申し訳ないんだけどさ、この埋め合わせは必ずするよ。・・・いずれ、家族になるかもしれないんだしね・・・。」
ちょっと照れた口調で、あたしに鍵を押しつけながら、そんなことを口にした怜央は、玄関脇にあるカバンを持つと、そそくさと家を出ていってしまった。

「えっと、それじゃ、改めて・・・。今日はどんなことが知りたいのかしら？・・・って、その前に、まずは真央君のことをいろいろと教えて頂戴。・・・何でも良いから、まずはいろいろとお話ししましょう？」
「えっと、あのっ、優稀・・・さん・・・。」
「あ、優稀でいいわよ。呼び捨てが気になるなら、『お姉ちゃん』でも何でも良いわ。それと、敬語はやめましょうね。・・・話しにくいでしょう・・・。」
「じゃ、じゃあ、・・・優稀お姉ちゃん・・・、僕って、・・・そのっ、・・・男の子なのかな？・・・それとも女の子なのかな・・・？」
「なるほど・・・、いきなり、そこからな訳ね・・・。順番に考えてみましょうか。」
「まず、外見というか、他人から見て男の子と女の子の違いって、

何かしら?・・・これはきっと簡単よね。」
「おちんちんがあるかないか、おっぱいがあるかないか、そういうこと?」
「そう。厳密には、見た目だけじゃなくて、それが本当に機能するかどうか、つまり射精できるのか、女の子を妊娠させる能力があるかどうか、あるいは妊娠して子供を産むことができるかどうか、ということが大事なポイントなんだけど・・・。これは、たまに半陰陽とか、そういった男と女の中間のような性器で生まれる病気もあるんで、ちょっとややこしいわね。・・・でも、まあ一般的には真央君が言った通り、おちんちんがあれば男の子、おっぱいがあれば女の子、そう考えて良いわね。」
「その外見の違い、つまり身体の見た目とか、あるいは性器の機能も含めて、さらにはもっと正確なところで染色体を調べて、その人が男性なのか女性なのか分類することはできるし、世の中の人は普通、そうやって男子・女子を区別するものだわ。つまり、見た目で、君は男の子、あなたは女の子、そういうふうに分類されるのが普通だわよね。・・・でも、本人がどう考えているのか、自分では自分のことを男子と考えているのか、それとも女子と考えているのか、あるいはさらに一歩踏み込んで、自分はどっちでいたいのか、どっちが良いと考えているのか、これは難しい問題なのよ。」
「それって、自分で決められるものなの?」
「ええ、勿論よ。というか、これだけなら単に、自分で自分のことをどう思うかっていうだけだから、別に誰かの許可を貰うものでもなければ、他人の考えに左右されるものでもないわ。ただ、自分がどう考えるかっていうのは、好きに決められる一方で、周囲からの状況に左右されて変化することも多いの。つまり周りからのアドバイスとかに影響されるということね。それは家族だったり、一緒に遊ぶ友達だったりとか・・・。それと、これが一番大きいんだけど、実際に自分の身体がどうなっているかによって、心の持ち方はまったく違っちゃうものなのよ。」

「どういうこと・・・？？？」
「つまり、男の子は、自分の身体が男の子の外見・・・おちんちんやたまたまがあるっていう意味だけど・・・をしているんで、その状態でずっと暮らしているから、自分は男の子だって思うようになるのよ。逆もそう。身体が女の子で、おちんちんがないっていうことが、自分を女の子だって認識する大きなポイントになり、それがずっと続くから、自分は女の子だって思い込む。そして、それ以外のことは考えられない状態になっていく、それが心の性別が決まっていく一つの理由だと言われているの。・・・あ、勿論、そこには、周囲の人、具体的には両親とか兄弟とかだけど、そういった人々が、子供を見て、この子は男の子の身体だから男の子だ、女の子の身体だから女の子だ、そう決めつけて接するんで、子供もそれに染まって行くというのが実際のプロセスなんだろうけどね・・・。」
「・・・何となくわかる気がする。・・・僕も、周りの皆から、女の子みたいだね、とか、男の子っぽくないねって言われ続けて、何となくそんな気になってきた気もする。」
「ええ、そういうことはあるかもね。でも、真央君の場合は、ちょっと因果関係が逆なんじゃないかしら？・・・つまり、真央君が男の子の格好をして、おちんちんもついているのに、行動とか考え方が女の子っぽいっていうか、女の子が好むような遊びをしたり、そもそも女の子と遊ぶのを好んだりしてきたんでしょ？・・・それが、男の子の身体、男の子の外見を持つ真央君の性格としては、大きくズレているという気がしたからこそ、お父様もお母様も、それに怜央も、何か違うと思うようになった筈なの。」
「でも、おとなしい性格の男の子とか、女の子の遊びが好きな男の子だって、中にはいるんじゃない？・・・そういう性格の違いも、個性じゃないの？」
「勿論、ある程度はそうでしょうね。ただ、外見・・・つまり身体的な違いという意味だけど・・・が精神に与える影響っていうのは、相当強いものがあるのよ。例えば、あたしは今でこそ心の中が完全

に女性化して、考え方もすっかり女子になったし、女子になって良かったと心の底から思っているけど、当初、男の子だったときには、自分が女の子になるなんて、想像もできなかったし、そんな考えになるなんて、絶対にあり得ないと思っていたわ。それなのに、実際に自分のたまたまが切り取られる瞬間を見せられて、その切り取られたたまたまを二つ、目の前に持ってこられたら、それで自分の身体に起こったことを、嫌でも現実として受け入れざるを得なかったわ。」
「それ以外にも、周囲の人が一斉に、あたしのことを女子として扱うようになったとか、いろいろと環境の変化があって、それで自分はもう女子になっちゃったんだって、認識するようになったのよ。」
「それは何となくわかる。でも、優稀お姉ちゃんは女の子になるのが嫌だったんでしょう？」
「ええ。嫌、というより、そんなこと考えたこともなかったし、考えられなかった、というのが実際のところかしら。・・・最初に聞いたときは、本当に気絶しそうになったし、もうこれで自分の人生は終わっちゃったんだって、そう絶望したわ。・・・どうやって家に帰ったのかも記憶にないし、家でもずっと部屋で泣いていて、夕食時に家族に報告しなければならないときは、自分の死刑判決を自分で読み上げているような気分だったわよ。・・・おちんちんやたまたまを切り取られちゃうってことは、男の子にとっては、その位、大変なことで、はっきり言って、これ以上の拷問はないと思ったわ。」
「僕は、おちんちんやたまたまが切られちゃうことに、そこまでの感覚はないかな・・・。勿論、手術は怖いけど、病気が直るっていうなら、そういう手術もあるのかなっていう気分？」
「そこがやっぱり真央君は、普通の男の子とは違うところなのよ。普通の男の子にとっては、おちんちんとたまたまを切り取るなんて言われたら、気が狂って自殺しかねないことなのよ。あたしも、その夜、もう部屋で布団を被って、泣きながら震えていたわ。そうし

たら、お母さんが慰めに来てくれたの。でも、最初、お母さんに抱かれて背中を撫でられたら、もうどうしようもなくなって、号泣しちゃったのよ。」
「でもね、涙が涸れるまで、とは言わないけど、ひとしきり泣いて、その後でお母さんから、あたしみたいに無理やり男の子から女の子にされちゃった人の話を聞いたの。その人は男の子だったんだけど、あたしと一緒で判定試験の結果、手術で女の子にされることになって、人生が180度変わっちゃったんだって。でも、いろいろと曲折はあったらしいけど、今では子供を三人も産んで、立派な母親になって幸せな家庭を築いているって言う話を聞いて、それで随分心が落ち着いたわ。」
「やっぱり、おちんちんやたまたまを切り取られちゃうっていうのは、男の子にとって、そんなに大変なことなのかな・・・。別に女の子になったって、そんなの役割がちょっと違うだけで、どっちだってそれなりの人生があるんじゃないかな・・・。」
「ほら、そういう風に考えられるところからして、やっぱり真央君は普通の男の子とは少し違うのよ。勿論、これだけで真央君が性同一性障害だって決めつけるのは、まだ早いし、だから手術を受けるべきだなんて、あたしには言えないわ。でも、あたしみたいに無理やり身体を変えられちゃったんじゃなくて、外部からの働きかけがないのに、おちんちんやたまたまに対して、そんなに執着心がないというその事実からして、真央君が普通の男の子とは、随分違っているのは間違いないわね。」
「・・・?」
「まだ難しいかな・・・。じゃぁ、ちょっと視点を変えてみましょうか。真央君は今、自分のことを『僕』と言っているけど、これを『あたし』とかにするのは、抵抗あるかしら?・・・つまり女言葉を使うことについての感覚なんだけど。」
「今は男の子だから『僕』と言ってるけど、女の子役をするときは当然『あたし』だよ?・・・ほら、僕は昔から、おままごとすると

きなんか、お母さん役をすることも多かったから・・・。」
「それって、自然に出てくるの？・・・つまり、特に気持ち悪いとか恥ずかしいとか、そういう感覚はないの？」
「なんで？・・・だってお母さん役なのに、お父さんに話しかけたり、赤ちゃんの世話をするときに、自分のことを『僕』なんて言ったら、逆に変じゃない？」
「じゃあ、そういう役をやること自体、どう感じたかしら？」
「特に・・・。というか、僕、案外、そういう役をやりたくて、自分でやっていたことも多かったんだ。赤ちゃんにおっぱいをあげるしぐさなんて、上手だって褒められたこともあるんだ。」
「わかった。やっぱり、真央君は普通の男の子とは違っていて、女の子になっても十分に適応できるのは間違いないわね。となると、あとは真央君の意識というか、気持ちの持ち方次第よ。自分がこれからの人生を、男の子として生きていくのが良いのか、女の子として生きていくのが良いのか、どっちが自然なのか、どっちの人生を送ってみたいか、それにかかっているんでしょうね。これは他人がどうこう言える話じゃないから、厳しいようだけど真央君が自分で考えて決断するしかないわ。ただ、どっちを選んでも、特に女の子になったとしても、真央君はあたしなんかより、ずっと幸せになれると思うわ。というか、女の子でもまったく違和感のない、普通の人生が送れることを保証する。」
「やっぱり、そうなるんだよね。悩ましいなぁ。こればっかりは、もし手術しちゃってから、やっぱり男の子のほうが良かったのにっ、てなっても、どうしようもないからね・・・。」
「その心配は、多分大丈夫よ。女の子になるのが嫌で、あそこを切り取られちゃうことに涙していたあたしでさえ、今はもう女の子になれたことが、よかったと心から信じている位だから、真央君の今の心境から、男の子が良かったのに、となる可能性は、ちょっと考えられないわ。」
「だから、あとは本当に自分がどっちになりたいかよ。・・・それ

と、女の子の快感、というか、これは幸せにも通じるところなんだけど、女の子の性的快感は、多分、男の子の性的快感よりも上だと思うわ。両方経験したあたしの実感だけど、まだこれはあまりわからないかしら。でも、真央君だって、もう射精したことはあるんでしょ？・・・あたしは切り取るって言われた当初、オナニーして射精することができなくなるって思って、ものすごいショックを受けたのよ。」

「僕も一度だけオナニーしたことはあるんだけど、何だかあまり気持ちよくなかった・・・。いや、快感はあったけど、『こんなものなの？』という程度で、それっきり一度もしていないんだ。だから、月に2回か3回は夢精していて、その後始末が面倒なんだけど、女の子の生理も似たようなものなのかなぁ。でも、あれは毎月1回なんでしょ？」

「へぇ！・・・じゃ、真央君、もう精通してるのに、ムラムラして射精したくなることとって、経験がないんだ。・・・やっぱり、お医者さんが、そういう診断を下したのも良くわかるわ。」

「やっぱり、そうなのかな・・・。よし、決めた！！・・・僕、手術を受けて女の子になるよ。きっとそれが僕の運命なんだ。」

「それが良いか悪いかは、あたしも責任のある言い方はできないけど、真央君は女の子になっても、後から後悔することは絶対にないと思うわ。それだけは言えるし、女の子になってからも、実はあたしの場合、心の中まで女の子になるのには、あるきっかけが必要だったんだけど、多分、真央君はそんなきっかけなんてなくても、手術を受けたら翌日から心の中まで女の子になっていると思うわよ。」

「僕、これから家に帰ったら、まず怜央お兄ちゃんとよく話してみる。それで今夜にでも、お父さんやお母さんとも話し合って、その上で来週に手術を受けようと思う。」

「わかったわ。私は真央君の考えを応援する。もしこれから、不安に思うことや、困ったこと、あるいは気になること、どんな小さいことでも良いから、何かあったらあたしに相談して。いつでも時間

を取って会うから。」
「ありがとう。じゃぁ、・・・そっ、そのっ、・・・ひとつお願いがあるんだけど・・・。でも、こんなこと、本当に頼んでも良いのかなぁ。・・・嫌だったらナシにするから、聞かなかったことにしてくれる？」

第８０話　優稀と真央（後書き）

真央君の「頼み」とは何でしょうか。怜央はなにやら心配をしていたような気もしますが・・・？？？

第８１話　真央の決断

「で、お願いって、何かしら？・・・あたしにできることかな？」
「うっ、うん。・・・そのっ・・・。実は僕に移植される予定の女性器は、怜央お兄ちゃんの細胞から染色体を抽出してクローンしたものなんだ。」
「あ、それができたのね。よかったじゃない。」
そう、自分が手術されることになり、性転換についてネットでさんざん検索していたときに、数年前の法律改正で、性同一性障害患者とか生まれつきの半陰陽患者とか、治療で性器を手術する必要がある人に限って、他の人からの性器を移植するのではなくて、身内からのクローンで性器をつくって、それを移植することが許可されるようになったんだっていう記事を読んだ記憶がある。やっぱり、どこの誰とも知らない人の性器を移植されるよりは、自分の家族の細胞からクローンをすれば、遺伝的にも自分に近いだろうし、ずっと安心できるわよね。
「そっ、それでねっ。・・・僕、実はまだ女性の性器って、よく見たこともなければ、自分にどんなものが移植されるのか、というより自分の性器がどうなるのか、このところずっと気になっていたんだ・・・。」
「わかったわ。それであたしのおまんこを見てみたいって、そういうことね。」
「うん、そのっ、・・・おまんこだけじゃなくって、おっぱいも見せて欲しいし、身体全体にも興味があるんだ。・・・優稀お姉ちゃんは怜央お兄ちゃんのおっぱいとおまんこを移植されたんでしょう？・・・とすると、お兄ちゃんの細胞からクローンでつくった、僕に移植される予定のおっぱいやおまんこは、優稀お姉ちゃんのものとまったく一緒の筈だよね？」

「そうか、そういうことになるのかしら？・・・いいわよ。・・・これまで、女の子だったときの怜央の裸は見たことなかったの？」
「三年くらい前までは、一緒にお風呂に入っていたけどさ、当時はそんなことに興味はなかったし、それにあそこをじっくり見るようなことはさすがにしなかったよ。」
　なるほど。まあ、普通はそうでしょうね。でもあたしは、つい先日も晶にあそこをじっくり見せてあげたんだし、自分の身体を見せることについては、そんなに抵抗はないのよね。いや、晶のは好奇心とか恐怖心とかだけど、真央君の場合、自分の身体になる予定の女性器を確認しておきたいという、極めて切実な願いなわけだし、一人で手術を受ける関係で、あたしと怜央みたいにビデオを交換するのでもないから、それは不安にもなるわよねぇ・・・。もしかすると、いずれ家族になるかもしれないんだから、ここはじっくり、気が済むまで見せてあげようっと・・・。
「じゃあ、ここだとなんだから、二階の和室に移動しましょ？・・・お布団があるほうが、多分見やすいわよ。」
　紅茶のカップとかケーキの皿を急いで片付けて、二人で二階に上がると、あたしは特に躊躇（ちゅうちょ）することもなく、てきぱきと制服を脱いで、畳んでいった。真央君は、目を見開いて、でもあたしの身体を凝視して良いものか迷うような素振りで、伏目がちにチラチラと視線を送ってきたけど、あたしがあっと言う間に一糸まとわぬ姿となり真央君の前に立つと、あたしの身体を上から下までまじまじと舐（な）めるように見回して言った。
「すごい。・・・きれいだ。・・・ほとんど記憶にないんだけど、これが怜央お兄ちゃんの以前の、・・・そのっ、女の子だったときの身体なの？」
「いいえ。これはあたしの身体。怜央から貰ったのは、おっぱいとおまんこだけよ。・・・それをあたしの、元からあった男の子の身体に移植したのよ。だから、身体のベースはあたしの身体なの。」
「でも、どこからどう見ても、最初から女の子だったとしか考えら

れないよ。・・・優稀お姉ちゃんは、もともと女の子みたいな身体つきだったの？」

「そんなことないわ。あたしはもともと、クラスで一番チビで背は小さかったけど、身体つきとしてはごく普通の男の子だったわ。おちんちんやたまたまも、特別大きいわけじゃなかったけど、クラスの男の子の中では、だいたい真ん中位というか平均的なサイズだったんじゃないかしら？・・・でも、まず去勢されて、たまたまを抜かれちゃった上に、女性ホルモンを連続投与されて、手術までの１週間で何となく身体全体に脂肪がついてきて、肌もつるつるのすべすべになったりして、ぐっと女の子っぽい雰囲気になってきたの。」

「その後、性転換手術で怜央のおっぱいとおまんこを移植されたんだけど、そのとき、骨盤を削って出産をしやすくしたり、喉仏(のどぼとけ)を削って声の高さを女の子みたいに高くしたりと、全身のいろいろなところにちょっとずつ手を入れているのよ。おっぱいに関しては、怜央の身体がもともとあたしの身体よりずっと大きかったんで、怜央はそんなにおっぱいが大きいほうじゃなかったんだけど、あたしの小さい身体に無理やり押し込んだ結果、前に飛び出してこんなに巨乳になったって説明されたわ。」

「だから、確かにおっぱいやおまんこは、怜央のものを移植されていて、ということは真央君のためにクローンしたものも、これに似たものになるのかもしれないけど、移植するときに調整はするだろうし、身体全体の雰囲気とか、そういったものは、真央君の身体がベースになっていて、特に変わるところはない筈よ。」

「性器・・・これは外に見えている部分だけじゃなくて、身体の中にある、卵巣とか子宮とか膣とか、そういったものだけど・・・そういうものは全部取り替えられたけど、身体の骨格や頭、顔、手足、そういった部分は、元からのあたしの身体よ。ただ女性ホルモンの影響とか、それ以上に大きいのが、本人の意識と、その意識から来る雰囲気なんだけど、そういったところが一気に変わるんで、驚くほど女子化が進むのよ。」

「このおっぱいは、移植されたときにすごく大きいと感じたんだけど、３カ月経った今では、それなりに慣れてきたわ。・・・そうね・・・身体に馴染んだ、というのが、一番それっぽい言い方なのかしら。でも、おっぱいはともかく、乳首は女子になってセックスをするようになったからなのか、それとも自分でときどきオナニーして弄るようになったからなのか、あきらかに大きくなってきて、このところ感度もずっと上がってきたように感じるわ。これは端的に言って、女の子としての性感が開発されたということなのかしら。といっても、怜央も女子だったときに、乳首はかなり開発していたようだけどね。」

　そうなんだ。怜央お兄ちゃんは、女の子のとき、家族にナイショで、女の子とレズセックスしていたんだよね。お父さんとお母さんは知ってたのかどうかわからないけど、この隠れ家の二階はそのための専用スペースで、まるでホテルの代わりに使っていたんだ。・・・といっても、まあ中学生にもなれば、誰とどう恋愛するかは、もう本人同士の問題だし、性教育の授業でも、中学生になれば子供をつくっても良いと言わんばかりだから、構わないんだけどね・・・。

（でも性教育の授業では、ホモやレズについて、そういう関係もあるということは習ったけど、決して勧めてはいなかったな・・・。きっと、子供ができない関係は、恋愛としては良くないってことで、矯正されるんじゃないかな。だから、僕みたいに女の子っぽい子は、とっとと女性になって、子供を産む側になるように仕向けられる気もするけど・・・。）

「触ってみても良いわよ。優しくね。」

　真央君があたしの身体を舐めるようにガン見している。と思ったら、そっと手を出してきて、おっぱいを軽く押すように揉みだした。これって、子猫が母猫のお乳を飲むときにやる、ふみふみと同じ仕種よね。

　真央君はおっぱいをしばらくふみふみして、それから乳首をそっとつまんだり、チョンチョンと突ついたりしてきた。今のあたしの

乳首は、巨峰とはいわないけど、種なしブドウ（確かデラウェアっていったかしら）よりはかなり大きくなっちゃって、昔ながらの甲州ぶどう（甲斐路とかいう種類だったような？）と同じ位のサイズがあるのよね。当然、感度もすごく敏感になっちゃってて、ちょっと触られた位でも、思わず声が漏れちゃうの。
「ぁんっ、ぁっ、ぁあっ、あんっ、んぁっ。」
　しばらくあたしの乳首を弄（いじ）っていたけど、満足したのか、次に視線を股間に移してきたんで、あたしは布団に横になって、股を大きく広げながら言った。
「今度はこっちかしら？・・・もう性教育で、おまんこの構造は当然習っているわよね。中も見えるかな。もう処女膜は破れちゃってるけど、まだそんなに使い込んではいないわよ。」
　両手で左右に開いて、クパァ状態にして見せてあげると、真央君は、あたしの股間にそっと手を伸ばしながら言った。
「これと同じものになるんだよね？」
「ええ、さっき話したとおり、完全にまったく同じにはならないと思うけど、基本的には同じものになる筈よ。全体のサイズや位置関係、それにクリトリスの形なんか、クローンだから、見た目は殆ど変わらないんじゃないかしら。」
「ここから赤ちゃんが出てくるんだよね。・・・なんか不思議だな。僕も赤ちゃん産めるようになるのかな・・・。」
　そう言いながら、あたしの股間をそっと触っていた真央君は、あたしのクリトリスを見つけて、そっと触ってきた。
「これがクリトリスだよね？・・・ここって、やっぱりすごく感じるところなの？」
「ぁっ、ぁあっ。そっ、そうよっ、そこ触られるとっ、あっ、かっ、感じちゃうのっ。」
「ねぇ、女の子の快感って、どんなふうなのかな？・・・男の子のオナニーは、僕がまだあまり慣れていない所為（せい）かもしれないけど、そんなにすごく気持ちいいって感じなかったんだ・・・。」

そう言いながら、多分偶然なんでしょうけど、皮がクリッと剥かれ、親指の腹の部分でクリトリスの裏側をさわわっと撫でられた。
「ひっ、ぁひっ、ひぃーっ、っくっ、ぃくっ！」
瞼の裏に花火が開き、全身をビクビクッと痙攣させながら、あたしはイッた。
「あっ、お姉ちゃん、今もしかしてイッた？」
「いっ、イッちゃったわよ！・・・というかイカされちゃったわ。」
「女子の快感って、そんなに凄いんだ・・・。やっぱり僕、手術を受けてみたいかな・・・。」
「真央君さぁ、男の子の快感は、一応経験したことがあるのよね？・・・だったら、女の子の快感も、手術前に経験してみない？・・・勿論、本物じゃないけど、擬似的にとても近い感覚を経験することができるのよ。よかったら、今ここでやってみてあげようかしら？」
「そんなことができるの？」
「ええ、着てるものを脱いで、そのお布団の上で四つん這いになって、お尻をあたしに向けて頂戴。・・・実はこれ、怜央も女の子のときに普通のセックスはしたことがなくて、男性に挿れられる経験はなかったみたいなんで、男の子になってから、これを試しにやってみてあげたんだけど、病み付きになりそうな雰囲気だったわよ。」
「わかった。じゃあ、さっそくお願いします。」
そういうと、真央君も着ているものをてきぱきと脱いでいった。白のブリーフを履いていたんだけど、特に脱ぐのに躊躇があるような素振りも見せず、すっと脱ぎ捨てた。
「うそっ！！・・・真央君、随分りっぱなおちんちんなのね！」
「うん、去年の夏に毛が生えてきて、そのころからぐんぐん大きく育ってきたんだ。・・・やっぱり、大きいよね？・・・でも、まだ剥けていないから、大人のちんちんになったわけじゃないでしょ？」
「剥けてるかどうかとサイズは、あまり関係ないのよ。大人だって、それだけ立派なものを持っている人は、そうそう居ないと思うわ。こんなに立派なおちんちん、切り取っちゃうのもったいないわね。」

「そうなのかなぁ。でも、あまりそんな感じはないんだよね・・・。それに、そもそもおちんちんって、大きければ良いってものでもないでしょ？・・・大きすぎるおちんちんってさ、挿れられるとき何か怖くない？」
「真央君、その発想は絶対に女の子の感覚よ？・・・普通、男の子だったら、立派なおちんちんを自慢することはあっても、挿れられるほうの心配をする人は、ほとんど居ないものなのよ。」
「それと、今気付いたんだけど、真央君、あたしの裸や、あたしのエッチな状態を見ても、興奮したりしないの？・・・おちんちんが元気になっていないじゃない。ムラムラしたりしないの？」
「うーん、僕、女の子の裸を見ても、そんなに興奮したりしないんだよね・・・。だからクラスでも、男の子同士の会話には何かうまく加われなくって、浮いちゃうんだ。」
「やっぱりそうなんだ。じゃあ逆に、男の子の裸には興味がある？」
「どうなんだろう？・・・そこはまだよくわからないよ。・・・あ、でも、男の子になった怜央お兄ちゃんと、一緒にお風呂に入ってみたいなっていうのはあるかなぁ・・・。」
先生が、性同一性障害だと診断した理由が、かなりはっきりしてきたわ。だって、あらゆる点において、真央君の心の中は、女の子の視点なんだもん。まあ、それは今は置いといて、真央君に前立腺マッサージをしてみてあげようっと。
「ぁひゃっ、なっ、なにっ？・・・そっ、そこはっ、・・・あひっ！！」
「力を抜いてっ、口で大きく息をしていて。」
真央君のお尻に、つばをたっぷりつけた人指し指と中指を、揃えてそっと挿入した。四つん這いになった後ろ側から見ると、かなり大きめのおちんちんは、まだブラーンと下に垂れ下がっているけど、指を入れられて、ちょっとピクピクッとしていた。それで、第二関節を折り曲げて、中をいろいろ探りながら、前立腺を探した。

「痛くはないわよね？・・・力を入れないようにしていてね。」
中を探っていた指先に、コリコリとした前立腺が触れたので、そこをぐっと押し込んだ。
「あっ、あぁっ、あひっ、だっ、だめっ！」
押し込むと、それまでブラーンとして垂れ下がっていたおちんちんが、一気にブワッと拡大し、臍に付くほどにガチガチのギンギンに勃起した。と同時に、おちんちんの先端が一気にペロンと剥けたわ。つまりこれまで、本当に勃起したことがなかったから、剥けた状態を見たことがなかったんでしょうね。
真央君は、もう何が何だかわからないという雰囲気で、視線があらぬ方向を彷徨っているけど、そんなことは構わず、力を込めてリズミカルにクイックイッとマッサージしていったら、おちんちんの先端から、透明の我慢汁がじわじわと溢れ出してきたわ。
「ぁっ、あっ、んぁっ、んひっ、ぁあっ、ぁふっ。」
「どう？・・・こんなの、初めてでしょ？・・・快感に身を任せて良いのよ。」
「あっ、ぁあっ、あんっ、ぁあーん、あんっ、あひっ、だっ、だめっ、たっ、たすけっ、助けてっ、ひっ、あっ、ひっ、ひーっ、死ぬっ、死んじゃうっ、あんっ、ぁあんっ、ぼっ、僕っ、もうっ、あひっ。」
我慢汁に白濁したものが混じってきたわ。いよいよ連続イキ状態になってきたみたいね。このまま刺激を続けましょう。
「いぎっ、・・・いぎぎっ、・・・ぁひっ、・・・ぐひっ、・・・ぃぐっ、ィググっ、ィグーっ。」
「真央君、これまでオナニーで１回イッただけって言ってたわよね。だとすると、こういう性的快感は初めてでしょ？・・・心ゆくまで楽しんでね。」
そのまま数分間、マッサージを続けると、真央君はもう目玉が裏返ってしまい、意味不明の喚き声を上げ続ける壊れたラジオのようになっていた。それで、あたしは最後に、お尻の指に力を入れてひ

ときわ強くグッと押し込むと同時に、左手を伸ばして左の乳首をキュッと摘むように捻り上げた。

「あぎぎーーっっ、ぎーっ、ぐぎーーっっ。☆！！＊▽？※◎§＃★□。」

ドピューーッ、ドピューーッ、ピューーッ、ピュッ、ピュッ、ドクッ、ドクッ・・・。

「ぉおおぉっ、ぐぉぉおっ、ぃぐぅーーっ。」

ピューッ、ピュッ、ドクッ、ドピューーッ。

真央君は、そのまま崩れ落ちるように気絶して、しばらく意識が戻らなかった・・・。

第８１話　真央の決断（後書き）

優稀は、なぜか次々とバックを開発することに夢中ですが、去勢されたときに経験したのが、よほど心に残ったのでしょうか。

なににせよ、真央君も、これで心おきなく手術に臨めるのならば良いのですが。

第８２話　卒業式（１）

あたしたち、中学校の卒業式は明日だけど、一日早い今日は小学校の卒業式だわ。３年前の自分を思い出してみると、小学校から中学校へは、隣の敷地に移るだけだったし、学区が一つしかないので全員一緒に進学したから、卒業式といっても特に感慨はなくって、そもそもあまり記憶が残っていないのよね。でも、今日、卒業式が終わると、午後に真央君は去勢手術を受ける筈。あたしのときの例からすると、本手術は１週間後の筈だけど、とにかく今日はたまたまを抜かれて、それと同時に今日から女子扱いになるんじゃないかしら。

去勢手術そのものは、ほんとうに簡単で３０分もかからない筈だし、特に入院もしないだろうから、夕方にでも真央君の様子を見に、お見舞いに行ってあげようかしら。怜央に話をすれば、一緒に怜央の家に行けるわよね。でも、あたし、怜央の家におじゃましたことってないんだけど、ご両親に何てご挨拶すれば良いのかしら。ちょっと緊張しちゃうわ。・・・まあそこは怜央が上手く紹介してくれることを期待しましょ。

それにしても、昨日の真央君、最後はお尻で気絶するまでイカされて、それで吹っ切れたみたいね。結果オーライだったから良かったけど、今改めて思い返すと、あれで真央君が男の子の快感というかＢＬとかに目覚めちゃったら、物凄くマズイことになっていたんじゃないかって気がする。ちょっとこれから気をつけなくっちゃ・・・。

――――――――――――――

「・・・ぁっ、・・・ぁあっ？・・・ぼっ、僕っ・・・？」
「真央君、大丈夫？・・・どうだった？・・・気持ち良かったかしら？」
「うっ、うんっ、凄い！！・・・こんなの初めて・・・。」
「辛くはなかったわよね？・・・最後は白目を剥いて気絶しちゃったみたいだけど。」
「こんなに気持ちの良いことがあるなんて、知らなかった。我慢できない快感って、本当にあるんだ。僕、てっきり、アダルトビデオとか、エロ本とかのネタかと思ってた。・・・射精の快感なんて、比べ物にならない。本当に女の子の快感って、こんなに強いの？」
「ええ、厳密には細部で多少違うんだけど、でも両方とも経験したあたしの感覚からすると、とても似ているわ。何て説明すれば良いのかしら、これ、結局は精神的な快感というか、感じ方が近いんだと思うの。」
「それって、身体の中に何かを突っ込まれるってこと？」
「ううん、そうじゃなくって、他人から無理やり快感を与えられる感覚って言うのかしら？・・・男子の射精する感覚っていうのは、自分である程度コントロールできるのよ。っていうか、より正確には、ここでこういう快感が来るっていうのが、少なくとも自分で認識できる状態なの。『あっ、もうだめっ、でちゃうっ』っていう感覚が湧いてくるものなのね。でも、女の子の快感っていうのは、結局、男の子、・・・レズセックスがあるから男子だけじゃなくて、相手というべきかしら・・・、その相手から、強制的に与えられる快感であって、快感を与えられたり、逆におあずけ状態にされたり、とにかくそれをコントロールしているのが相手方だっていう、この受身の状況に置かれる感覚が、とても似ているんだと思うわ。」
「あたしが話していること、わかるかしら。・・・まだ難しいかな？・・・つまり、自分では、もう早くイキたいのに、イカせて貰えない。あるいは逆に、もう何度もイッて、これ以上は辛いから休ませて欲しいのに、連続して快感を与え続けられ、イキっぱなしにさ

れちゃう。ひたすらイカされて、開放して貰えない。・・・どっちの状態の場合であっても、もう我慢ができなくなって、やめてっ！・・・助けて！・・・もう壊れちゃう・・・、ってなっているのに、泣いても叫んでも許して貰えない。・・・そういう状況に無理やりさせられちゃうところが、共通しているのよ。・・・勿論、これは別にMだという意味じゃないわよ。ただ自分でコントロールできない、受身の状態になることを述べているだけなんだけど・・・。」

「お姉ちゃんの言っていること、何となくわかる気がする。夫婦の関係っていうのも、そういう精神的な能動性・受動性になるっていうことだよね？」

「凄い！・・・良くわかるわね！！・・・これ、経験しないと、絶対にわからない感覚なんだけど、逆に一度でも経験させられると、一瞬で理解できるようになるのよ。・・・あたしはそれで、心が一気に女の子に書き換えられちゃったんだから。」

「でも、教科書にも書いてあったんだけど、男女の快感は、そんなに大きく違うものではないって言うじゃない？・・・僕、性教育の授業でオナニーをするように言われて、学校で1回だけ射精してみたんだけどさ、他の男の子は結構気持ち良さそうにしていたのに、僕は射精する瞬間に『あぁっ』ってなっただけで、あまり気持ちよくなかったのは何故なんだろう。特にシコシコしているときなんて、まったく快感はなくて、これ手が疲れるなーって思っていた位なんだ。・・・やっぱり慣れていないとか、練習が必要だってことなのかなぁ？・・・それにしては、他の子でも、そのときが最初のオナニーだった子も多かったし、それどころかそのとき初めて精通したって言う子も居たけど、皆、かなり気持ち良さそうだったよ？」

「それは慣れとか性感帯が未開発だとか、いろいろな原因があるだろうけど、多分一番大きいのは、特に男子はイメージがないと、快感を感じないからよ。イメトレをすれば、ある程度変わるけど、真央君みたく心の中で女の子の視点が強いと、自分のおちんちんで女

子を貫いているというイメージ、女子とセックスして、快感を感じているイメージが湧かないのが一番大きいんじゃないかしら。」
「やっぱりそうなのか・・・。よし、決めた！！・・・僕、やっぱり手術を受けるよ！・・・これまで、そうしたほうが良さそうだっていう漠然とした感覚はあったんだけど、本当にそれが良いのかどうか、不安もあったんだ。・・・でも、こんなに素晴しい快感があるって知った今、僕は是非女の子になりたい。」
「じゃあ、さっそく家に帰って、ご両親とよく話をして、皆で納得したなら明日の手術をうけたら良いわ。あ、でも、ご両親と話をするとき、女性のほうが快感が大きいという話はしないでくれるかしら？・・・特に、あたしが真央君のお尻をグリグリしたことは、絶対にナイショだからね？・・・まあ、怜央は気がつくかもしれないけど・・・。」
「それはわかってるよ。僕だって自分の親に、そんな恥ずかしいこと絶対に話さないさ。というか、そんな話を親に知られたら、普通に死ねるんじゃない？」
「それもそうね。じゃ、それは置いておいて、・・・とにかく真央君の不安とか心配が解消されて、迷いもなくなったなら、それが一番よ。・・・もしこれからも、ちょっとでも不安に思ったり、わからないことがあったりしたら、いつでも相談に乗るわ。」
「ありがとう。これで心おきなく、明日の手術を受けられる。」
「頑張ってね。去勢手術は、手術とは呼べない位簡単で、外来で10分程度で済むわよ。なんだかびっくりする位、あっけなくて、あたしもこれで男の子じゃなくなっちゃったっていうのが、信じられなかったんだから。」

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

「ねえ、怜央。真央君は昨晩、どうだったの？・・・家族で話は決

まったんでしょ。今日の午後に手術を受けるのかしら。」
「うん、おかげさまで、これまで見られた迷いが一切なくなって、是非女子になりたいと吹っ切れたようだった。もともと、そういう診断が出ていたこともあるんで、両親ともようやく一安心で、手術の承諾書を全部整えて、今日、小学校の卒業式が終わったら、その足で病院に行っている筈だよ。・・・えーっと、そろそろ手術が始まるのかな？・・・いや、もう終わった頃かもしれない。」
「そうなんだ。良かった。去勢手術は、たまたまを抜くだけなんで、本当に１０分もかからずに終わっちゃうわ。・・・そうね、剃毛したり消毒したり、そういう準備時間を入れても、外来で３０分程度の筈よ。」
「もうすぐ1時か。・・・小学校の卒業式だと、卒業生は１０時半頃に全員で出てきちゃうから、病院に１１時過ぎに到着したとして、やっぱりそろそろ終わって、家に向かう頃じゃないかな？」
「じゃあ、あたしも一度家に帰って、お昼を食べたら、夕方にお見舞いに行くわ。」
「ありがとう。昨日、どんな話をしたのか知らないけど、真央の雰囲気というのかな、希望に満ちた顔を見て、何も話をするでもなく、両親も僕も、これで大丈夫だと確信して、今日の手術に行ってきなさいとだけ伝えたんだ。本当に優稀のおかげだよ。優稀は凄腕のカウンセラーにもなれるね。」
「別に何も特別なことはしていないわよ。ただ、あたしが女性になってから、良かったと思うことをいくつか話しただけよ。それに真央君、素人のあたしが話してもわかるけど、あきらかに心の中は女の子じゃない。あれなら間違いないわ。単に未知の世界に飛び込む不安があっただけね。」
「それは僕もそう感じた。でも、初めて会って、ほんの1時間か2時間で本人の不安を完全に解消しちゃうなんて、やっぱり優稀は凄いよ・・・。」（できたら僕の不安も解消してくれないかな・・・。ＥＤなんて、精神的な不安しか考えられないんだから・・・。）

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

♪ピンポーン♪

「あ、いらっしゃい。どうぞ上がって。」
「あのっ、ご両親は？」
「今日は、卒業式に出た後は仕事で二人とも会社に行っちゃったよ。明日も卒業式が続くから、二人とも連続で休むためには、半休が精一杯だったらしい。」
「お仕事大変ね。」
　そう言いながら、あたしはかなりホッとした。あたしはこれまで、怜央のご両親には一度も会ったことがないんで、どういう挨拶をすべきか、そもそも怜央があたしのことをご両親にどんな関係だと話をしているのかどうかも知らないのよね。それによって、あたしのご挨拶の話し方も、随分変わるだろうし、やっぱりこういうのって第一印象が大事じゃないかしら？
「おじゃまします。真央君、どうだった？」
「あ、優稀お姉さん。わざわざお見舞いに来てくれたのね？・・・ありがとうございます。」
　真央君の部屋に入ると、真央君はベッドに腰掛けて、少女マンガを読んでいた。もう完全に女の子の服装で、部屋もどことなく女の子の部屋のような雰囲気が出ていたわ。これは模様替えをはじめたということなのか、それとも前からこういう女の子っぽい雰囲気の部屋だったのか、ちょっと判断に迷うところだわね。
「手術は一瞬だったでしょ。痛くはなかったかしら？・・・もうすっかり女の子の雰囲気になったんじゃないの？」
「ええ、全然痛くはなかったわ。あんな簡単なことで男の子じゃなくなっちゃうなんて、あたし、驚いちゃった。こんなことなら、も

っと早く手術して貰えば良かったかもしれないわね。」
「その、たまたまを切り取られるときも見ていたんでしょ？・・・どんな感じだった？・・・あたしは鈍い痛みがあったのよ。」
「全然？・・・というか、何か、おできとか、そんな身体の悪いところを切り取って、ホッとしたような気持ちになったの。これでようやく、落ち着いた静かな生活に戻れるのかなって安心したのよ。」
そうなんだ。やっぱり真央君、あたしとは大分違うわね。たまたまがとうとう切り取られちゃったっていう、あのときのあたしの絶望は、逆に真央君にとっては、自分の身体が本来あるべき姿に近付いたっていう安心感につながったのね。であれば、あのときあたしが感じた鈍い痛みも、あれは男の子じゃなくなって、心が折れちゃったあたしの精神の痛みだったみたいだから、そんなものは感じる筈もないわよね。
いずれにせよ、今日は真央君にとって、小学校の卒業式と同時に、男の子を卒業した日にもなったのね。
「ねぇ、真央君。この部屋も何となく女の子の部屋っていう雰囲気じゃない？」
「あたし、部屋は何もしていないわよ。前からこんなふうだったわ。それよりも、あたしのこと、真央『君』って、君付けで呼ばないでくれるかしら。もうあたしは女の子なんだし、あたしを君付けで呼んでると、何だか特殊な趣味のおじさんみたいに聞こえるわよ？」
「それもそうよね、ごめんなさい。じゃあ・・・真央さん？・・・真央・・・ちゃん？」
「あ、真央って呼び捨てで良いわ。・・・お兄ちゃんのこと、怜央って呼び捨てにしてるんでしょ？・・・だから、あたしのことも呼び捨てにして。・・・ね、未来のお義姉（ねえ）ちゃん？」
驚いたわ。昨日会ったときも、随分大人びていると感じたけど、女の子になった途端、ものすごくオマセさんになっちゃったのね。それにもう話し方や雰囲気だけじゃなくって、心の中まで、完全というか完璧に女の子になってる。これって、付け焼き刃じゃなくっ

て、かなり年季が入っていると見えたから、勝美や千博みたいに焦る状況になっても、きっとボロが出て言葉が戻っちゃうなんてことは、多分なんじゃないかしら。
未来のお義姉（ねえ）ちゃんって言われて、あたしも驚いたけど、怜央が真っ赤になっちゃったんで、ほうほうの体で怜央の家から逃げ帰ってきちゃった・・・。でも、いずれ、本当にそうなる日が来るのかしら・・・。

第83話　卒業式（2）

いよいよ今日はあたしたちの卒業式。千博と勝美にとっては当然、あたしたち全員にとっても、ひとつの区切りの日。ほんの4カ月前までは、まさかあたしが女の子になるなんて、想像もしなかったし、千博と勝美も、二人して性別を交換するなんて、考えたこともなかったでしょうね。

それが、あたしはこうして女子としての高校生活を心待ちしているし、千博と勝美は性別を交換しただけじゃなくって、千博が勝美の家にお婿さんとして入り、しかも勝美のお腹には、もう子供がいるんだなんて、こんな卒業式を迎えるとは、いったい誰が夢にも考えたことあるのかしら・・・。

思えば勝美とは、小学校の3年と4年で同じクラスになって、それであたしの家にときどき遊びに来たのが最初だったわ。それまで、あたしも千博も、勝美のことは、お互い顔は知っていた、という程度で、特に親しいというわけでもなく、普通に小学校で同じ学年だけど、違うクラスの子というだけの関係だったわ。いや、勝美があたしの家に遊びに来たときも、三人で一緒に遊ぶこともあったけど、千博と勝美はそんなに親しげな様子じゃなかったわよね。多分、千博にしてみれば、単に双子の兄妹（あたしたちは、感覚的には双子に近かったから）の友達という以上のものではなかった筈だわ。それにこの当時、あたしが勝美の家に遊びに行くこともあったけど、千博がついてきたことは、確かなかった筈だわ。それが、小学校の5年と6年のとき、二人が同じクラスになって（あたしは別のクラスになった）、その縁もあってか、勝美はよく千博と遊んでいたりして、引き続きあたしの家に遊びに来ていたのを覚えている。それに勝美の家に、あたしと千博が二人で遊びに行くこともあるようになった。そのうち、あたしがいなくても、千博一人で勝美の家に遊

びに行くようになって、気がついたら中学に入ったと同時に、正式におつきあいをはじめたみたい。
　勝美が千博に惚れたのが発端らしいけど、今では多分、千博のほうが、より惚れているように見えるわね。でも、どちらにせよ二人はもうお互いにべた惚れ状態で、こんなに幸せそうなカップルは見たことがないわ。その割に、３年間、清い関係を貫いた勝美は本当に立派ね。元男子として尊敬しちゃうわ。千博はいつでもＯＫと考えていたみたいだから、勝美がその気になっていたなら、もう今頃、とっくに子供が産まれていた可能性だってあるわよね・・・。でも、そのときは千博が子供を産んでいた筈だわ。既に子供が居る生徒の性転換って、どういう扱いになるのかしら・・・。
　成人年齢は１５歳でも、保護者の承諾があれば中学生でも結婚できるし、それ以前に中学校の校内には、「子供は国の宝」とか「産めよ！　増やせよ！！」といったポスターが掲げてあって、中学生でも子供をどんどんつくることが奨励されているのよね。なにせ小４からはじまる性教育の授業では、避妊などまったく教えず、性病の知識と妊娠（受胎）方法が中心だし、これが中学に入ると「生殖」という名の授業となって、ズバリ、妊娠しやすいセックスの方法や、どういったときが妊娠しやすいか、男女双方ともに楽しいセックスのやり方、セックス時には何に気をつけるべきか、といった実践的な授業に入っていくんだわ。それと同時に、若くして父親・母親となる場合の心構えからはじまり、子供の育て方、赤ちゃんの健康管理や育児の注意事項といったことが、これでもかと繰り返し教えられる。
　それで中学生でも子供をつくってしまい、その後結婚に進むカップルも、毎年必ず居るのよね。まあ、これ自体は当人同士が納得しているなら、国の手厚い保護もあるんで全然構わないんだけど、それでもやっぱり、殆どの子は一応成人式まで初体験を待って、中学を卒業したらすぐに結婚というカップルが多いみたいね。・・・あ、そんなことを考えていたら、もう式がはじまるわ。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

卒業式自体は、決まりきった式次第で、あっと言う間だった。校長先生の挨拶にはじまり、校歌斉唱、来賓挨拶（らいひんあいさつ）や在校生送辞、卒業生答辞と続いて、それから一人一人が流れ作業のように壇上で卒業証書を受け取り、最後は全員で蛍の光の合唱で終わった。でも、我が中学の伝統で、これが本当の終わりじゃない。このあと、一度教室に戻り、各クラス単位で、高校に進学しない四級の生徒や、近々専業主婦になる予定の生徒（そういう子も少し居る）、それに家庭の事情で遠くに引っ越ししてしまう生徒など、これで本当にお別れとなる生徒のための、ささやかなお別れ会を開催するの。といっても、そんな子は各クラスにせいぜい４名か５名しかいないんだけど・・・。

昔は卒業式後のお別れ会が、各クラスで盛大にあったらしいけど、今では四級の中卒で就職する若干名以外は、全員が同じ高校に進学するので、実際には就職したり、遠隔地にいっちゃう若干名の追い出しパーティーという趣ね。それらの子に抱負を語らせて、これからの人生、どこでどう暮らすつもりかを聞く程度。勿論、もう全員成人しているので、ビールで乾杯する予定。

卒業式から、このクラス単位での追い出しパーティーまでは３０分以上時間があるんで、もう１００年も昔から続いている習慣らしいけど、ボタンの奪い合いとか、それ以外にもいろいろ悲喜こもごもの光景が、あちこちで繰り広げられている。

この段階でようやく告白する子も、男女ともに結構いるみたい。両思いになれれば良いけど、玉砕したり、いきなり三角関係になったりと、卒業生の数だけドラマがあるのかしら。

あたしは、特に第二ボタンとかには拘り（こだわ）がなかったけど、怜央と寛がわざわざ自分で持ってきてくれたわ。二人ともこっそりやって

きたのに、目敏く気がついた円が目を剥いているのが、ちょっと可笑しいわね。あ、でも、あたし、怜央はＥＤの噂を打ち消すために、また寛はゲイの噂を打ち消すために、二人と肌を重ねていることを言いふらしちゃったんだっけ・・・。

「・・・ということで、君たちの大部分は同じ高校に進学するが、今日でお別れとなる５名には、乾杯のあとで、それぞれの今後と抱負なんかを、少し語って貰いたい。といっても、そんなに構える必要はないぞ。いつも通り、笑って楽しく語り合おう。・・・じゃあ、皆、３年間、無事過ごせたことと、これからの人生の成功を祈念して乾杯だ。・・・乾杯！！」

先生の挨拶のとおり、この町にひとつしかない中学校で、生徒は大部分が小学校時代から見知っているんだし、これからも同じ高校に通うことになるから、卒業といっても、何かピンとこないのよね。卒業というよりも、単に学年が上がるだけという感覚しかないわ。

とはいえ、３名の四級の男女にとっては、これで本当に卒業して就職することになる（他には結婚して専業主婦になる予定の女の子が１名と、家庭の都合で遠隔地に引っ越しする子が１名居た。）ので、そういう子にとっては感無量というか、本当にこれが学生生活の最後という感慨もひとしおみたいだわ。３名の四級のうちの二人、底辺コンビの坂野君と村上君も、何だか泣きそうな顔をしているし・・・。

一方進学組は、全員が３駅先にある唯一の公立高校に行くんだけど、この高校は、近隣の町にある３つの中学から進学してくる生徒が集まる関係で、生徒数は一気に３倍になるのよね。Ａ組からＺ組まで、１学年が２６クラスもあるマンモス高校になるんだけど、一級から三級まで、級によってクラスもカリキュラムも完全に別になるんで、一つの高校ではあっても三つの高校が同一敷地にまとまっているようなものだわ。まあ、体育祭とかのイベントは

一緒だし、制服も一緒だから、外からは違いは見えないんだけどね。
お別れ組５名の挨拶や、その後の懇親もあっと言う間に終わり、あたしたちは急いで教室を片付けると、全員で忘れ物がないか、チェックしながら最後の時間を待っていた。そして１１：５０分、チャイムに引き続き、校内放送で蛍の光が流れだすと、卒業生が一斉にクラスから出て、在校生が校門のところに並んで拍手をする中、学校から退出して行く。これが我が中学の伝統行事で、校門の前には校長先生以下、教師も全員が揃って並び、手を振っている。皆、ここに至って、ようやく卒業の実感が湧いてくるのか、涙・涙のお別れだわ。・・・もう、この風景も見納めね。
殆どの生徒は、校門のところで最後の感傷に浸っているんだけど、あたしは、これからちょっと企画したことがあるので、急いで学校を後にして怜央の隠れ家へ向かった。

－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－－－－－

「あ、おかえりなさーい。・・・っていうのは、まだ気が早いかしら？・・・いらっしゃーい、って言うべきよね。」
「真央ちゃん、お手伝いしてくれていたんだ。・・・もう身体は大丈夫なの？・・・どこか辛いところはない？」
「ええ、お兄ちゃんがね、優稀お姉ちゃんが今日、ここで性転換者を全員集めてパーティーを開くんで、あたしも参加したら良いって誘ってくれて、ちょっとずうずうしいかなって心配だったんだけど、お手伝いがてら、隅っこで参加させて貰うことにしたの。でも、お姉ちゃんが迷惑なら、あたしは急いで帰ることにするわ。ほら、だって、あたしはまだ完全じゃないでしょ。たまたまを抜いただけじゃ、性転換者とは言えないじゃない・・・。」

「いや、それは全然構わないわよ。そもそもここは怜央の隠れ家で、妹の真央ちゃんが手伝ってくれるのは、ごく自然だわ。それに、たまたまを抜いただけだといっても、もう真央ちゃん、どこからどう見ても女の子してるじゃない？・・・ていうか、今の真央ちゃんを見て、まだおちんちんがついているなんて、想像できる人、多分誰もいないわよ。だから、堂々として、性転換した女性ですって胸を張って良いわ。」
「ありがとう。優稀お姉ちゃんにそう言って貰うと、気が楽になるわ。・・・じゃ、準備の話だけど、こんなところで良いかしら？」
驚いた。真央ちゃん、もうすっかり女の子になっちゃって、男の子だったって言われても、誰も信じないでしょうね。ちょっと長かった髪の毛は、頭の上の両側でゴムで縛ってかわいい飾りがついているし、もしかして、うっすらとお化粧もしているのかしら？・・・多分、勝美と比較しても、ずっと女の子に馴染んでいるわ。あたしなんて、去勢された翌日は、たまたまを抜かれちゃったっていうショックで、もう何も考えることもできず、ただひたすらベッドで涙に濡れて打ちひしがれていたのよね。心が折れちゃってたあたしとは逆に、自分本来の姿・身体を取り戻したって思っている真央ちゃんだと、ここまで精神状態が異なるものなのね。
「ありがとう。完璧よ。紙皿や紙コップ、食べ物なんかは全部きれいに並べられているし、飲み物は直前に冷蔵庫から出せば良いわよね。これ全部、真央ちゃんが一人でやったの？・・・あたしなんかより、よっぽど女力が上だわね。」
「ええ、あたし、ちいさいときから、おままごとなんかでよく遊んでいて、そういうときはお母さん役をやることも多かったって話したわよね。だからだと思うわ。」
「ちょっと嫉妬しちゃうわね。でも、本当に助かったわ。もう間もなく、皆が来ちゃうころだから・・・。」
「あ、それでひとつ聞きたかったの。二階の部屋はどうすれば良いの？・・・各部屋にお布団を二つずつ敷いておけば良いのかしら。」

「いや、それはないわよ。いくらなんでも、パーティーの後で、そのままそういう行為をはじめるとは、ちょっと考えにくいわ。お布団はまだ押し入れから出していないわよね？」
「えっ？・・・それで良いの？・・・でも、お兄ちゃんの話だと、優稀お姉ちゃんの弟さんと、そのお相手は、もう結婚しているそうじゃない？・・・それに、もう一組、カップルが居るって聞いているわ。」
「それはそうなんだけどね、でもカップルだからって、いつでもどこでも見境なくそういうことを始めちゃうなんてことは、ないものよ。」
「そうなんだ。・・・あたし、男子としても女子としても、異性とお付き合いしたことがないし、そもそも異性との関係って、どういうふうになるのか、例えばデートとかって、どうやるのか、それこそ性教育の教科書の知識しかないの。」
まあ、それは当然よね。小6で、異性とのお付き合いの仕方とか、デートの組み立てや、身体の関係にまで持っていく経験があるとか、手順を熟知しているなんて子がいたら、それこそビックリだわ。あたし、思うんだけど、本当に少子高齢化を解消したいんだったら、性教育に力を入れるよりも、そういった男女の交際の仕方とか、どうやってデートするかといったノウハウを教えるほうが、よほどうまく行くんじゃないかしら。でも、これって、一歩間違うと、ナンパのテクニックを教えるプレイボーイ養成所になっちゃうのかしら・・・。
そんなことを考えていたら、玄関が急に騒がしくなって、怜央の声がした。
「さ、皆、遠慮せずに上がって下さい。ここは僕の隠れ家で、普段は僕しか使っていないんだ。今日は僕たち性転換者以外、誰もいないからさ。・・・レストランというほどのものじゃないけど、ちょっとした軽食を用意したんで、まあカラオケルームの代わりとでも考えれば良いよ。・・・あ、優稀はもう来ている筈だ。それと、僕

の妹の真央も居ると思う。」

第８４話　性転換者懇親会（１）

「こんにちは。」
「お邪魔します。」
「ここは榊君の会社関係の場所なの？」
「あたしたちのために、申し訳ないわね。」
「ここ、僕の会社の昔の本社工場だったところなんだけど、もう随分前から使っていなくて、僕が貰い受けて隠れ家みたいにしているんだ。・・・でも、今回僕は場所を提供しただけだよ。今日の懇親会は、全部優稀の発案とアレンジなんだ。・・・あ、話したとおり、食べ物なんかは会費を貰うからね。」
「でも設備も整っていて、カラオケとかゲームとか、何でも揃ってるじゃないか。さすがに榊ん家は裕福だよな。」
「ま、とにかく適当に座ってよ。僕たち全員で８組１６名だけしかいないし、・・・僕の妹になった真央が手伝ってくれているけど、とにかくここには性転換者しかいないんだから、今日は他の人の眼を気にすることもなく、他人には聞かれたくないような、僕たちだけの話とか悩みとか、なんでも気軽に話し合おう。」
「えっと、・・・あの、・・・真央ちゃん？・・・確か、榊君には弟さんが居た筈よね？」
「はい、今度、性転換して女子になることになった真央です。性同一性障害で、小学校を卒業したこのタイミングで性転換することになりました。あたしも皆さんとご一緒してよろしいでしょうか。」
「勿論、大歓迎するわ。女子になったということは、あたしたちの仲間ね。」
　よかった。あたしが説明するまでもなく、真央ちゃんは自然に皆に受け入れて貰えたようね。怜央も真央ちゃんも、まだ手術途中だっていうことは話していないようだから、それはこのまま黙ってい

ましょう。あ、皆、特に乾杯するでもなく、自由に始めたみたいだから、あたしも飲み物を頂きましょ。

―――――――――――――――
―――――――――――――

「さて、では喉も潤ったと思うので、まず男子チームの代表で遠藤君に一言、挨拶をお願いします。」
「え？・・・僕が？・・・榊君じゃないの？・・・君のほうが、ずっと点数は上だっただろう？」
「僕は今回は単なる裏方だよ。それに、女子チームの代表挨拶は、遠藤さんじゃなくって優稀・・・あ、杉田さんにお願いしているから、男子の挨拶は是非キミにお願いしたいんだ。実質双子の兄妹が揃って性転換して、姉弟になったなんて、普通ない話だから。」

　そう、今朝、怜央と話をして、誰が挨拶するかを相談したとき、あたしもこういうのは成績順だろうから怜央が挨拶するのが自然だって思っていたわ。でも、自分は今回は裏方だって固辞されちゃって、それで急遽、千博にやって貰うことにしたの。ただ忙しくて、千博に話をしておくのを忘れていたんだわ。
　以前の怜央は、もっと自信タップリで、こういう場面では自分が当然挨拶するものという態度だったんだけど、なんか最近、自信をなくしちゃったのかしら。やっぱり男の子にとって、あれがダメになっちゃうと、一気に気が弱くなっちゃうんだわね。寛もそうだったわ。・・・でも、そんなの、ほんのちょっとしたきっかけだと思うんだけど・・・。とはいえ、手術前のことを思えば、心が折れちゃって泣いていたあたしが大きなこと言えた義理じゃないわよね。
「なんだか急に当てられたという感じしかしないんですが、ご指名ですのでごく手短に、男子になった者を代表して一言。・・・男子になった皆さん、皆さんは念願叶い、ついに男子になることができ

た訳ですが、皆さんが男子になることができたのは、一から十まで、ここにいる女子になった方々のおかげです。・・・勿論、『身代わり』とか『犠牲』なんて言葉を使うのは、女子になってくれた方に失礼ですし、女子になった方がそのような同情を求めているとは思いませんけど、女子になってくれた皆さんが、男の子として一番大事なもの、・・・それこそ命にも匹敵する自分の身体の中心を提供してくれたからこそ、今の僕たちが男子としてここに居る訳でして、それは誰が何を言おうとも、絶対に否定することができない事実です。」

「女子になった皆さんは、一部の例外もあるでしょうが、女子になりたかった訳ではないでしょう。いや、それどころか、まさに寝耳に水、晴天の霹靂、そんな言葉ですら言い表せない大ショックだったと思います。以前の僕たちでは、理解の範疇を超えていましたが、それでもいきなり、あそこを切り取ると言われた皆さんの恐怖や絶望は、想像するに余りありました。・・・いくらこれが毎年の恒例行事とはいえ、自分の身に、よもやそんな不幸が降りかかって来るとは、夢にも思わなかった筈です。・・・実際、今こうして男子になった身としては、あそこを切り取られるということが、どれほど恐ろしいことなのか、身に沁みて感じます。」

「けれど、皆さんがそれに耐え、こうして皆さんの分身を提供してくれた結果、僕たちは無事、男の子になることができました。本当にどれほど感謝しても、感謝しきれるものではありません。ここに改めて、心からのお礼を申し上げます。」

「僕たちは、皆さんから頂いた、このかけがえのない贈り物を、一生大事にさせて頂きます。・・・皆さんの宝物は、僕たちの宝物になりました。僕たちは、皆さんからの贈り物を最大限活用し、一級男子としての義務を果たすべく、これからの人生で一人でも多くの子供を設けることを、ここに誓います。・・・僕たちの子供たちは、皆さんの遺伝子を受け継いだ子供になります。勿論、法律的には僕たちの子供ということになりますが、生物学的には皆さんの子供で

す。どうかこれからも、引き続き僕たちを見守っていて下さい。・・・本当に、・・・本当にありがとうございます。」（拍手）

「では続きまして、本日の懇親会を企画した杉田優稀さんに、女子チーム代表として一言お願いします。」

「今日は皆さん、全員が集まって頂き、ありがとうございました。あたしも今回は怜央のように、裏方だと思っていて、挨拶（あいさつ）は勝美、・・・遠藤さんにお願いしようとしたんだけど、怜央と話をしていて、勝美は自分から望んで性転換したんで、他の7名とは少し立場が違くないかということになって、それであたしが一言述べることになりました。」

「今、千博から話があったとおり、あたしも自分が女性化対象になったと言われたときは、目の前が真っ暗になって、もう自分の人生が終わってしまったような気分でした。実際、男子としてのあたしは、赤いカードを受け取った段階で、もう死んでしまった、消滅してしまったのです。・・・自分から女性化を望んだ勝美は例外ですが、多分、他の皆さんも、同じような気持ちだったに違いありません。・・・何も手につかない、誰にも会いたくない、というのすら手ぬるい表現で、心が折れてしまい、食事も喉を通らず、自分の部屋に引き籠（こ）もって布団をかぶり涙する毎日でした。」

「でも、あたしの場合、幸運だったのは、ひとつの大きな転機というか、得難い体験がありました。相手の方のプライバシーに関わることなので、あまり詳細には言えませんが、やはり同じように、意図せず、というか、いきなり性転換対象者となり、無理やり女性にされてしまった人が、今はすっかり女性として人生を楽しんでいる、そういう方に出会うことができて、その方から、自分が経験した恐怖や絶望を聞くことができ、それにもかかわらず、その方が今は完全に女性として人生を楽しみ、それどころか子供まで居るということを知って、それで本当に心が救われたのです。」

「どんな辛い体験でも、一人で抱え込まず、身近に居る人と共有し、同じ辛さを経験した人同士で語り合えば、辛さは半分にも三分の一

にもなります。また、折れてしまった心も、仲間と一緒に泣き、笑い、ともに助け合い、手を取り合うなら、必ずや乗り越えることができます。」

「あたしが偶然にも話を聞くことができたその方は、今では本当に楽しそうに女性としての人生を謳歌（おうか）し、女性としての幸せを噛み締めていました。いや、そもそも、あたしは言われるまで、その方がかつては男子だったとは、夢にも思っていませんでした。その位、自然に女性としての生活を楽しんでいました。」

「その方から言われたことは、今は心が折れてしまっているだろうし、頭が混乱しているかもしれないけど、人生の幸せ、人生の楽しみや喜びには、男女でそんなに大きな差はないんだということです。」

「この、性転換者の先輩からのアドバイスと精神的な支援、それに交換初夜で怜央、あ、榊君に心の底から女性に書き換えられてしまったことと相俟（あいま）って、あたしは完全に女子として生きていく目標を見つけることができました。それは、これまでの男子としての人生とはまったく違う、女子としての人生において、女子としての楽しみ・幸せを沢山経験し、普通の人の二倍の楽しさを得てやろうということです。」

「と同時に、あたしの同期（？）として女性にされてしまった皆さん。・・・中には、もう新しい人生に適応し、女性としての楽しみや幸せを体験しつつある方もいらっしゃいますが、まだまだうまく適応できず、塞ぎ込んだり落ち込んでいる方も居るのではないかと心配し、そのような方に、あたしが今、ここでこうして前向きに歩み出すきっかけとなったアドバイスや、辛い体験を分かち合うための、ほんの少しの手助けとなれればと考えて、本日、このような懇親の場を設けることにしました。」

「同じような境遇の人からの助言や体験談は、想像以上に励（はげ）みになります。・・・どうか女性となった皆さん、今日は皆さんが心の中に抱えている、どんな悩み、心配、あるいは悲しみなども、すべて

吐き出して下さい。ここにいるのは、全員が性転換者です。誰も皆さんのことを嘲笑ったり揶揄したり、あるいは哀れんだりすることもないでしょう。同じ境遇の者同士、心ゆくまで泣き、笑い、そして共感しあって下さい。」（拍手）
「本日は、怜央が、この隠れ家と彼が呼ぶ家を提供してくれました。ここは彼の・・・」

・・・まだ優稀の挨拶が続いている。こうして聞いていると、やっぱり優稀はすばらしい。こういうのを本当の人格者って言うんだろうな。・・・原因をつくった僕が言うのは申し訳ないけど、あそこを切り取られるなんて、改めて考えてみても、普通だったら気が狂っちゃう位のショックだった筈だ。でも、僕と一緒に手術室に入ったときには既に気持ちを切り換えていたみたいだし、僕との交換初夜で、心の底まで女の子にされてしまったことについても、逆に女子としての人生を楽しむための糧として、前向きに捉えている。いや、今の挨拶からは、僕に感謝さえしてくれているようだ。・・・さらに凄いのは、自分が苦しんで乗り越えてきた経験を元に、同じ境遇にある他の性転換者の心境にまで気を配って、彼女らが新しい人生を楽しめるように、自分が何か力になれないかと心配までしていることだ。

　今の日本では、極端な個人主義というんだろうか、誰しも自分のことしか考えない。とにかく自分が第一／自分ファースト。どんな場面でも自分のことだけを考え、自分が良ければ他人などどうでも良い、・・・そういう考え方が一般的だ。いや、それどころか、自分がのし上がるためには、他人を蹴落としても構わない、そんな風潮すら、ごく普通のこととして許容されている。僕だって、学年でトップを維持し、念願叶って一級男子となれたけど、ここまで来る間に、そういう考えでいたことは否定しない。でも、歴史の本とかによれば、ほんの１００年位前、まだ昭和とか平成とかの時代には、日本人は世界でも稀に見る、思いやりに溢れて他人を気遣う国民が

多い国だったらしい。というか、社会全体が、そういう風潮を当然と考え、逆にそのように考えない、今の僕たちのような個人優先の考え方というのは、卑しいものとして忌み嫌われていたらしい。勿論、今の僕たちが１００年前の時代に行くと、いろいろと窮屈で暮らしにくいと感じることも多いんだろうけど、でも優稀みたいな考え方の人が沢山居て、そういう人が大部分を占めていた社会って、かなり羨ましいというか、憧れたりもする。

　今の日本では、男女どちらであっても優稀みたいな考え方のできる人、つまり自分のことより他人のことを思いやり、他人のために骨を折って何かをしてあげようと考えるような人は、多分１万人に一人もいないんじゃないかな。

　今日のこの集まりにしても、優稀から相談を受けた当初、僕は優稀の意図がよくわからなかった位だ。でも優稀の説明をいろいろ聞いて、素晴しさに心から共感したんだ。こういうことを自然体でさらっとやるなんて、やはり優稀は凄い。僕にはでき過ぎた恋人だ。交換初夜以来、優稀とすっかり恋人になって付き合っているんで、あとは何としてでも優稀と結婚できるように努力しよう。優稀と結婚できれば、取り敢えず会社を継いで、跡取りを設けることはできそうだ。でも、第一妻は優稀で決まりとしても、一級男子としての義務を果たすためには、もっと他の女子も揃えないと・・・。僕のあそこは、本当にもう他の女子を相手にはできなくなってしまったんだろうか？・・・あ、優稀の挨拶が終わったみたいだ。

「それでは皆さん、引き続き、懇談をお楽しみ下さい。特に挨拶ということではありませんが、全員でも１６名しかいないのですから、一人ずつ、現在の状況、特に性転換してみて、驚いたことや発見したこと、それぞれの体験とか、これからの抱負とか、何でも構いませんので、自由にお話下さい。質問も歓迎します。それと、言うまでもありませんが、ここでの会話は、我々１６名だけの絶対の秘密です。くれぐれも他言無用でお願いします。」

第８４話　性転換者懇親会（１）（後書き）

書いてみたら、想像よりずっと長くなってしまったので、二話に分割します。

第85話　性転換者懇親会（2）

「じゃあ、次は誰にしようか。男女交互が良いと思うから、・・・和田一彦君どう？」

「ありがとう。杉田君と榊君に骨折って貰って、僕たちは今、幸せ一杯だ。淳とは、毎日のように、その、・・・愛し合っていて、双方の両親も僕たちの結婚を当然のように許してくれたから、今はいつ、正式な結婚式を挙げるのか良いか、相談しているところなんだ。」

「ヒューッ。やるねえ！」

「羨(うらや)ましいわね！」

「ただ、いろいろな事情で、式はかなり先になっちゃうかもしれないんだ。その辺りは親に任せてあるんで、実は僕たちは、あまり関与していない。というか、学生の僕たちには先立つものがないからね。そこは親に頼るしかないから、口を出さないようにしているんだ。・・・といっても、籍は卒業したら直ぐに入れちゃうつもりだけどね。ほら、遠藤夫妻のことを見て思ったんだ。やっぱり妊娠しちゃったらあれじゃない？・・・子供に不利になっちゃうようなことは避けなきゃなって思い至ったんだ。」

「避妊はしていないの？」

「うん、何となくだけど、せっかく二人で愛し合うのに、二人を遮(さえぎ)るようなものをつけるのは嫌なんだ。・・・実際、淳の身体の奥深くに射精するのは、僕にとっては淳が自分のものだっていう気分に浸(ひた)れるし、淳にとっても、僕に膣内射精(なかだし)されることが、この上ない喜びというか、心から幸せを感じられるらしくて、二人で最高の快感を得ることができるんで、避妊具をつけるようなことはしていないんだ。・・・それに、コンドーム代もばかにならなくって、僕と淳のお小遣いじゃ、とても払いきれないし・・・。」

「お前ら、毎日何回やってるんだ？！？！」
「それじゃぁ、遠藤夫妻みたく、直ぐに妊娠しちゃうかもね？」
「ところで、毎晩、どこでやってるの？」
「一晩にやるのは、せいぜい2回か3回だよ。いくらなんでも、それ以上は身体が持たないさ。でも、それだって1カ月で6ダース位は必要だし・・・。あ、場所については、もう両方の両親が公認なんで、僕の部屋でも淳の部屋でも、どちらの部屋でも普通にやっているんだ。僕たちが部屋に入ると、誰も絶対に部屋には入ってこなくて、それどころか翌朝には生暖かい眼で見られてるし・・・。」
「『ゆうべは、お・た・の・し・み、でしたね。』ってやつか！」
「よくそんな状況で、愛し合えるわね。」
「いや、結婚して親と同居したら、そんなもんじゃないか？・・・遠藤夫妻も似たようなもんだろう？」
「ええ、そうよ。千博とは毎晩、愛し合っているけど、あたしたちのことは両親には完全に筒抜けだわ。このあいだなんて、お父さんが千博のイクところを千博のご両親に実況中継みたく解説し始めちゃって、千博がパニックして大変だったのよ。」
「かっ、勝美っ。だめっ！・・・そっ、それっ、やっ、やめてっ！！」
「そうね。ごめんなさい。これは千博の男の子としてのプライドにかかわる問題だから、あたしの口からは、これ以上話せないわ。皆も忘れてね。・・・お願いよ。」
「じゃあ、遠藤夫妻のことは、またちょっと後にして、・・・和田君たちはどこに住むの？」
「あ、式は後日としても、入籍して和田淳になるんだから、あたしが一彦の家にお嫁に行く形になるわ。あたしの家はマンションで、そんなに広くないんだけど、一彦の家は昔からの農家で、・・・といっても、今ではもう農業は、お義祖父さまとお義祖母さまが、自分たちで食べる分をつくっている程度らしいけど、とにかく家は昔ながらの農家の作りで、とても広いのよ。だから、これまでの一彦

の部屋はそのまま物置にして、別にあたしたちの寝室を、二部屋続きの間として貰うことになってるの。今は板の間で、ほとんど物置と化している部屋なんで、この春休みにちょっとしたリフォームをしてくれるんだって。片方は和室にして、もう片方は洋風の部屋に改装して、ちゃんとドアもつけるみたい。だって今は、障子と襖しかなくって、しかも欄間は飾り彫で筒抜けだから、あたしたちが愛し合っているのが、完全に家中に聞こえちゃうのよね・・・。」
「そんなところで、よく愛し合えるよな。きっと僕じゃ、プレッシャーで勃たないかもしれない・・・。」
「そんなの、単なる慣れなんじゃない？・・・それに男子は、一度スイッチが入っちゃうと、見境がなくなって、誰が見ていようが、とにかく最後まで止まらなくなるものよ。そうじゃなかったら、集団レイプなんて事件、起きる筈がないじゃないの。・・・あ、でも、元女子だった和田君が、そこまで男子の生理に支配されるのかは別かしらね？」

話がどんどん弾んで行く。和田君たちの話が終わると、皆、次々に自分の現在の様子とか心配事、悩み、あるいは不安などをお互いに披露し、またそれに対する他の人からのアドバイスや自分の経験を解説したりして、話はあちこちに飛ぶし、もう順番に話すというよりは、皆が勝手に自分のことを話したり、他人の話しに割り込んだり質問したりするようになってきた。皆、ビールだけじゃなくてチューハイとか、もっと強い酒（といっても、あたしたちはまだお酒には慣れていないんで、ウィスキーとかブランデーといった蒸留酒は用意していなくて、せいぜいチューハイ用の焼酎と、あと中1の頃から飲酒していたという五十嵐さんが持ってきてくれた日本酒の一升瓶しかなかったけど）を飲み始める人も居て、皆、時間とともに陽気で饒舌になって行った。いつもどおり、千博はもう真っ赤でケラケラ笑っている。勝美も、お酒こそ飲んでいないけど、女子グループの中心で話し込んでいる。

「さて、これで１６名全員が自分の近況を報告しただろうし、それぞれの抱えていた悩みや不安なんかも、かなり解消されてきたようだから、ここでちょっと、男女別に分かれて、自分の秘密を話して欲しい。誰しも異性には聞かせたくない、聞かれたくない、そういった話題があるだろう。それらを話し合う時間にしたいと思うんだ。・・・僕たちは性転換をして、もう性的な羞恥心というか、性に関する秘密は一切なくなったのかもしれないけど、そうは言っても実際には、男子には男子の、女子には女子の秘密や悩みがあり、異性の前ではちょっと・・・、ということが、絶対にあると思うんだ。僕だってあるんだけど、他の人に知られたら、もう生きていけないという秘密を話すべきか、実はまだ迷っている。皆も同じだろうから、それをできる範囲で話し合ってみようよ。・・・女子はこの部屋に残って貰って、男子は二階に移動して、それぞれで懇談を続けよう。・・・あ、一応、上にも多少の飲み物は用意してあるけど、自分の紙コップは持って行ってくれると良いかな。」

怜央がこう切り出して、千博や他の男子を全員引き連れて、二階に上がって行った。あたしたち女子は、そのまま一階に残り、さて、何を話そうかと思案していると、あたしたちの中でも一番目立たない、桧山恵一君改め桧山恵（めぐみ）さんがおずおずと切り出した。

「あたし、まだ女子の快感って、よくわからないんだけど、遠藤さんや山野さんは、もう毎日、愛されて絶頂してるんでしょ？・・・気絶するほどの快感って、どんな様子なの。教えて貰えますか？・・・あたし、そのっ、オナニーしてみても、あんまり気持ちが良いって感じはなくって、それにっ、そっ、そのっ、交換初夜は痛いだけで、ただ必死に我慢していたんで・・・。」

「桧山さんの相手は佐藤君だったわよね？・・・交換初夜はうまく行かなかったの？」

確かに、あの堅物で眼鏡をかけた冷徹な委員長タイプの佐藤さんは、男子になっても似たような行動をとったのかしら？

「あたし、ベッドで股を開くように言われて、そうしたら、次に自分であそこを両側にぐっと開くように言われて、ものすごく恥ずかしくて抵抗があったんだけど、そうしないと痛いからって言うんで、一生懸命、左右に広げて、クパァ状態にしたの。そうしたら、あたしのものだったおちんちんに、佐藤君は自分のつばをタップリつけて、そのまま一気にグッて入れられてっ、・・・ぅっ、・・・ぐすっ。」

「何それ！・・・前戯も何もなしでいきなり突っ込むなんて！！」

「でも、経験がなにもない状態で、しかもほんの３週間前までは女子だったのよ。それも、あの堅物で浮いた話なんて一切ない佐藤さんでしょ？・・・ちゃんとつばで濡らした上で、あそこを自分で開かせて、一気に押し込むのは、教科書的には正しい方法なんじゃないかしら？」

「あたしたち、女子になっちゃったんで受身の立場だけど、自分がやらなければならない立場だったら、そんなに上手にできるかしら？・・・お互い、前から付き合っていたり、好きだったりすればともかく、最初でそんなに上手な男子はそもそもいないし、まして女子から性転換した男子がいきなりテクニシャンなんて、どんな性生活を送ってきたのかしら？」

　そうよね、怜央は規格外というか、レズセックスで鍛えていたから、特別だったんだわ。その後、この話題で少し盛り上がったんだけど、交換初夜で痛くなかったというのは、勝美と山野さん、それにあたしだけだった。あとの５名は全員、入れられたときは息が止まったとか、覚悟していた以上の激痛だったとか、いろいろな意見が出てきたわ。逆にあたしは、前から好きだった訳じゃないのに、最初から快感が大きかったなんて、怜央はどんだけプレイボーイでテクニシャンなのかって、そこに話題が集中しちゃった。・・・真央ちゃんが、後ろのほうで眼を爛々（らんらん）と輝かせながら、興味津々という雰囲気で聞き入っているわ。真央ちゃんは、特に交換初夜はないから、これから自分で恋愛をして、だれか好きになった男子と、い

ずれ経験する筈よね。しっかり聞いておくと良いわよ・・・。
そういえば、思い出したんだけど、交換初夜から帰るとき、あたしたちの前を歩いていたカップル、女子がいかにも痛そうで、歩き方が変だったわね。あれ、確か五十嵐さんと、その相手の仲嶺君だったわよね。・・・やっぱり、そういうことだったのね。

「さて、男子だけになったけど、何を話そうか。女子がいないわけだから、男子同士、何も恥ずかしがることはない筈だし、何だったら全員でオナニー大会でもやってみる？」
「オナニー大会をするかどうかはともかく、まず全員、裸になってみない？・・・いや、別にBLをしようというんじゃなくってさ、まず僕たち、男子の身体を見ることに対する免疫があまりないじゃない。だけど、男子になったからには、脱ぐのを恥ずかしがるような態度は男らしくないって言われるよね？・・・だから、皆、人前で裸になること、それと男子の裸が廻りにある状態に慣れるためにも、そういうことをやってみたいんだ。こんなの、ここじゃなかったら絶対にできないことだろ？」
「積極的に賛成とは言わないけど、言いたいことはよくわかる。よし、脱ごうぜ。この部屋、カギは掛けられたよな？」
いきなり過激な意見が飛び交った。しかも、誰も反対しない。榊君は急いでカギを締めているし、言い出しっぺの佐藤君と直ぐに賛成した仲嶺君が、てきぱきと服を脱ぎだした。他の子も、男らしくないと言われちゃうことを恐れたのか、あわてて服を脱ぎだした。僕も特に反対する理由がないんで、何だか釈然としないけど服を脱いだ。見ると、最後になりつつあるけど榊君も服を脱ぎ捨てている。
全裸の男の子ばかり8名がひとつの部屋に居るというのは、なかなか壮観な眺めだけど、運動部のロッカーとかシャワー室なら、別に不思議でも何でもない光景だ。
「で、全員服を脱いだけど、これで何をするんだ？・・・それとも本当に、全員でオナニーでも始めるのか？」

皆の身体を見た。元女子としては、やっぱりどうしても股間に目が行くけど、それは他の皆も同じだろう。三学期にも体育の授業は何回かあったから、上半身については裸の状態で見たことのある子もいる。でもさすがに全裸の男子を見るのは初めてだ。全員、割礼されているためなのかどうかは知らないけど、見事にズル剥けのペニスが8本並んでいる。サイズはそれぞれだ。これって完全に勃起しないと、本当の大きさはわからないんだよね。まさか、皆で勃起させて、サイズ比較とかしないんだろうな・・・。
「ねぇ、僕や和田君、それに優稀と付き合っている榊君は当然だけど、他の皆も交換初夜を済ませて、もう童貞じゃないんでしょ？・・・男子のセックスって、どう思った？・・・僕は、結構大変で、難しいしテクニックも体力も必要だって思ったけど。」
「そうだな、女子のときにセックスした経験がないから、比較しての感想ではないけど、腕がものすごく疲れるし、終わると腰にも来ていた。女子のときにセックスしたことのあるやつって、誰か居るのか？」
皆、顔を見合わせているけど、誰も手を挙げない。このメンツだと、皆、真面目なんで、全員処女だったんじゃないかと思ったら、榊君がおずおずと切りだした。
「知ってるかもしれないけど、僕はレズセックスで女子とは何度か・・・。でも、自分はタチというか攻め役ばかりで、自分が挿(い)れられた経験はない。・・・相手の処女を貰っちゃったことは何度かあるけど・・・。」
「酷(ひど)い！・・・女の子にとって、処女を捧げるって凄く大事なことだって、わかってやったの？」
「噂(うわさ)には聞いていたけど、初めての相手がバイブとか、鬼畜だよな？！」
「今は僕も、悪かったと思ってる。・・・でも、決して無理強いはしていなかったし、本当に良いのか、何度も確認した上でのことだよ。・・・それに挿(い)れられて相手も喜んでいたのも確かだし・・・。

」
「それ、本当に喜んでいたのか？・・・単に無理やり絶頂させられて、いわゆる調教されてメス落ちしちゃっただけなんじゃないか？」
「・・・・・・・・・。」
　榊君が皆にさんざん責められている。彼が女子時代、とんでもない遊び人で、何人もの処女を食べちゃったっていうのは、噂としては広まっていたけど、こうやって本人から直接聞くと、なんとも生々しいというか、やはり被害者（？）には同情しかない。いくら心を入れ換えたなんて言っても、こういう性格は一生直らないものだから、優稀は苦労するんじゃないかな。・・・絶対に浮気ができなくなるような呪いとか、あったら良いんだけど・・・。
「・・・話は変わるんだけど、もうすぐ手術から3カ月になるよね。確か3カ月検診っていうのがあった筈だけど、誰かもう受けた人いる？・・・あれ、何をやるのかなぁ。パンフレットには、目視検査とか機能チェックとか書いてあったけど、また射精させられるんだろうか。」
　ぎくっ。・・・まっ、まさかっ、あのときのことを話す羽目になったらどうしよう！・・・でっ、でもっ、僕が検診を受けたことは、誰も知らない筈だ。・・・うん、黙ってやりすごそう。・・・大丈夫。
「そうだ、遠藤旦那、お前、もう先月受けたんだよな？・・・確か遠藤婦人が、他の女の子と話をしていたのを、横で小耳にはさんだ記憶があるぞ。どんな様子だったんだ？」
「そうなの？・・・是非聞きたいな。教えてよ。」
「いやっ、・・・そっ、そのっ・・・、別にっ、・・・どっ、どういうこともないっ、・・・ふっ、そのっ、検診でっ・・・・。」
「何そんなに焦ってるんだ？・・・何か辛（つら）いことがあったのか？」
「精液検査は当然あるんだよね？・・・自分でオナニーして射精（だ）すの？・・・それとも手術の後みたいに、看護婦さんが扱（しご）いてくれる

の？・・・射精(だ)すのは1回？・・・2回？」
だっ、だめっ、ダメだっ・・・。逃れられないっ。・・・僕、こういうのを誤魔化すの、ものすごく苦手なんだっ・・・。どうしよう！！・・・もう頭が真っ白で何も考えられないっ。・・・勝美っ、助けてっ。・・・勝美っ、勝美っ・・・。僕、もうダメだっ！！

第８６話　里帰り

性転換者懇親会は大成功だったわ。あの後、あたしたち女子チームは、女性の性的快感の話になって、皆でどんなオナニーをしているのかを話し合い、かつ教えあったんだけど、いくら心が女子視点になったといっても、皆、もともとは男子だったせいか、こういう話を明け透け（あけすけ）に話し合うことには、そんなに抵抗がないのよね。それでも最初は、勝美と山野淳さん、それにあたしの三人に対する質問ばかりだったわ。なにせ、他の女子たちは、交換初夜は済ませたものの、それ以外には性体験はまったくなくって、必然的に毎日セックスしている勝美と山野さん二人が、まず質問責めに会っていたわ。

　勝美はお腹を摩（さす）りながら、これでもかと惚気（のろけ）ているし、山野さんもこのところ毎日のように愛されていることを話していたんだけど、山野さんは今、生理が来ていないらしいの。で、山野さんもあたしたちも、まだ新米女子なので、これが単なる性転換手術に伴う生理不順なのか、それとも妊娠しているのか、よくわからないのよね。でも、４／１には入籍するって言っていたから、本人はあまり気にしていないみたい。まあ、和田君と山野さんは、来週三カ月検診を受けに行くって言っていたから、そのときいろいろわかるでしょ。・・・あたしも怜央と二人で、受けに行く予約を取らなくっちゃ。怜央の心配事についても、そのときカウンセリングでも何でも受けてくれれば良いだろうし・・・。

　それはそうと、最初は勝美と山野さんが、気絶するまでイクってどういうものか、女子の性的快感は男子とどう違うか、等々について質問責めに会っていたんだけど、質問責めに辟易（へきえき）した二人が、セフレがいて定期的にセックスしているあたしにも話を振ってきたりして、そこから皆で性的快感についての実施勉強会の様相になっち

ゃったの。皆、元男子だったせいか、女子になってもしっかりオナニーに励（はげ）んでいたようで、乳首とかクリトリスとかの開発は順調に進んでいて、一通りの性的快感は経験しているみたいだったけど、実は女子の快感は、表面的な（というか身体的な）快感以上に、精神的な快感が大きいのよね。あたしは最初、交換初夜で怜央に心の底まで刷り込まれて、それで精神の女性化が完成したと思ったのだけど、それは確かにきっかけかもしれなくても、その後怜央や寛と何度か肌を重ねてみて、それだけじゃないってことがわかってきた。勿論、身体の一番奥深いところに膣内射精（なかだし）される喜び、つまりこの人の子供を妊娠するっていう雌としての本能的な喜びは大きいんだけど、じゃあその相手は誰でも良いのか、あるいは性的快感を沢山与えてくれた相手を、より好きになるのかっていうと、それはやっぱり違うのよね。怜央と寛を比較してみて、よくわかったわ。これが怜央の言う、いろいろな経験をしてみるべきだっていうことなのかしら。

　あたしがこういう話をすると、勝美も山野さんも、相手が一人しかいなくて比較のしようがないんで、一生懸命に聞いていたんだけど、勝美がぽろっと口走っちゃった言葉に、皆が色をなして食い付いてきた。それは、あたしがこの中で、セックスの経験人数が一番多いっていう話をしているとき（なにせ、勝美と山野さんは回数こそ多くても、一人の相手しか知らない）、勝美がつい、千博から聞いたんだけど、と言って、あたしが男子のときにも女子相手に初体験をしていて、男女双方のセックスを経験しているってバラしちゃったのよ。あたしが女子になってから、怜央以外にも寛とも肌を重ねているということは、あたし自身が話していたから、知っている子も多かったけど、まさかそんな希有な体験をしているって聞いたときの皆の食いつきと追求は、本当に今思い出しても凄いものがあったわ。だって、男子のときも女子のときも、両方の性別でセックスしているなんて、想像もつかなかったんでしょうね。それにあたしが両方の性別でリア充だっていうことで、やっかみも凄かったん

だと思う・・・。
　でも、あたしも絶対に円のことを話すわけにはいかないと思ったんで、プライバシーがあるから、相手が誰であるとか、誰であるかを推測できるようなことには一切回答しないと告げて、それは皆も理解してくれたし、それに自業自得のあたしはともかく、恋人が突然、性転換されちゃうことになっちゃった女の子の悲しさ、切なさを話したら、皆、心から同情してくれた。なので、質問の内容とか、話の中心は、もっぱらあたしがどう感じたか、男子の快感と女子の快感の違いや、逆に似ているところ、それに前立腺グリグリ（これは去勢された男子は全員やられているので、皆知っている）と、女子がセックスで感じる快感は、本当に似ているのかどうか（こっちは皆、まだ快感を得られるほど開発されていない人のほうが多かったので、そもそも快感という感覚がまだわからない？）といった部分に集中していたわ。
　でも、そんなこんな、いろいろあったにせよ、あたしが目論んだとおり、特に望まない性転換をさせられてしまった女子チームの面々は、皆、今の境遇にも何とか適応してきて、新しい人生を前向きに進み出していることが確認できたし、今回の懇親会は、そうした皆の仲間意識というのかしら、絆（きずな）を確固たるものにできたんで、すごく有意義だったみたい。皆にも随分感謝されて、これからも年に1回程度は、この会合を開こうという話になったから、まずは大成功と言ってもいいんじゃないかしら。
　他方、男子チームがあのあと、どういう話しになったのかは、後片付けをしながら怜央からちょっとだけ聞いたんだけど、皆で裸になって、裸に慣れる練習をしたとか、こっちはこっちでいろいろと楽しそうだったみたい。ただ、怜央がチラッと話しかけてから、あわててこれは絶対に秘密だからねと念を押されたんだけど、千博と勝美が3カ月検診を受けてきて、そこで千博がお尻をグリグリされて、スッカラカンになるまで搾り取られちゃったらしいの。で、それが話題となり、誤魔化したり嘘をつくのが苦手な千博が、皆の前

で全部白状させられてしまったんだって。怜央が言葉を濁していたんで断片的なんだけど、どうやら勝美が妊娠したため、千博が勝美に負担をかけないように、もう煙もでないところまで延々と射精をさせ続けられたらしくて、千博が涙を流しながら気絶するまでのことを皆に話したんで、皆、これはここに居る8名以外には、絶対に口外しない秘密にする、と約束したみたいなの。やはり、男女別のセッションを設けようというアイデアは、それなりに機能したんじゃないかしら。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

「こんにちは」
「あ、いらっしゃい。二人揃って何かしら。」
「いや、卒業式が終わったんで、遊びに来ただけなんだけど・・・。まずかった？」
「そんなことないわ。実家に来るのにいちいち了解を取る必要はないわよ。」
午後になって、千博と勝美が遊びに来た。丁度、我が家でもお昼を終わらした時間で、千博たちも昼食は食べて来たと言っていたから、うまい時間を見計らったんでしょうね。
「昨日はお疲れさまでした。大盛況で、皆、とても満足して優稀には感謝していたよ。ああいう集まりを、これからも定期的に開催したいねって話していたんだ。」
「あ、男子チームもそうだったんだ。女子チームでは、これを同期会として、毎年1回程度、開催しようかっていう話になったんだけど。」
「是非そうしようよ。僕から皆に話しておくから。・・・それと、いつも優稀が幹事というのも大変だろうから、幹事は持ち回りにしてはどうかな。」

「わかったわ。怜央にもそのように話をしておくから。・・・それはそうと、あの後、男子チームではどんな様子だったの？・・・全員で素っ裸になったらしいけど、皆でおちんちんの鑑賞会だか品評会でもやったのかしら？」
「いや、そういう訳じゃないけど、でも終わってみれば、他では絶対にできない、良い経験だったって、皆で話していた。」
「ふーん？・・・皆、元女子といっても、男子になると、頭の中身が男子のように単純で子供っぽくなるものなのかしらね・・・。ま、それも含めて、有意義だったんなら良いけど・・・。」
「・・・まあ、多少、羽目を外したきらいはあるね・・・。アルコールも入っていたし・・・。」
「そうだったんだ。・・・それはそうと、千博、三カ月検診の話をさせられちゃったんだって？・・・大丈夫だったの？・・・あなた、誤魔化すのが下手だから、恥ずかしい話を全部白状しちゃったんじゃない？」
「なっ、なんでっ！・・・なんでそれっ、・・・ゆっ、優稀が知ってるのっ！！・・・絶対に秘密にしてくれるってっ、皆約束してくれたのに・・・。」
「あら、あたしは怜央から男子チームの様子を聞いたとき、三カ月検診の話が出たってことを聞いただけよ。怜央はそれ以上のことは、何も言わなかったし、あたしも特に追求はしなかったわ。男子だけのプライベートな話もあると思ったし・・・。ただ、あたしは千博たちがもう検診を受けたことは知っていたから・・・。」
「でっ、でもっ、それっ。・・・ぼっ、僕のっ、・・・そのっ、秘密っ、・・・どっ、どうしてっ！！」
「ごめんなさい。前にあたしが優稀に、千博が三カ月検診で酷(ひど)い目にあったことを全部話しちゃったの。」
「そっ、そんなっ！・・・うっ、うぐっ、・・・ひっ、ひぐっ、・・・ぼっ、僕っ・・・。」
千博が肩を震わせながら泣きだした。

「そんなつもりで話したんじゃないわ。・・・でも、本当にごめんなさい。この話はもうお終いにしましょう？・・・優稀もそれで良いわよね？」
「もっ、もうっ、・・・ぅぐっ、もうやだっ！・・・僕のっ、・・・僕の恥ずかしい話はっ、・・・ぜっ、全部っ、・・・全部こうしてっ、・・・皆に知られちゃうんだっ！！」
「大丈夫。誰にも言わないわよ。・・・あたしも約束するわ。」
「でっ、でもっ、・・・でも榊君も知ってるしっ、・・・優稀も知ってるっ。・・・お義父さんやお義母さんはもう知ってるしっ、・・・きっと父さんや母さん、それに博美さんや義朗兄さんにもバレちゃうんだっ！！・・・もうっ、僕っ、・・・ひっ、ひーん、・・・うっ、うぐっ、・・・ひっ、ひぐっ・・・・。」

「あらあら、千博ったら、実家に帰って来たと思ったら、いきなりどうしちゃったのかしら？」
「かっ、母さんっ、・・・ぼっ、僕っ、僕っ・・・・、うぐっ、・・・ひっ、ひーん。」
　たまたま、リビングに入ってきた芳恵さんが、千博が尋常じゃない様子なんで会話に割り込んできたら、千博がいきなり泣きついちゃった。話の脈絡が全然見えていない芳恵さんは、それでも千博をやさしく抱きしめて背中をさすっていたんだけど、千博が少し落ち着いてくると、ゆっくり切りだした。
「ねえ千博。あなた、このところ、性転換手術から直ぐに結婚して婿入りして、さらに引っ越しやら卒業式やらで、眼の回るような忙しさだったんじゃない？・・・きっと精神的に疲れちゃってるんだと思うわ。勝美さんが安定期に入るのは、まだちょっと先だろうけど、でも勝美さん今のところ、落ち着いていて問題なさそうだから、来週か再来週にでも、一度里帰りしたらどうかしら？」
「それ、良いアイデアだわ。是非、そうしたらどう？・・・あたし、全然大丈夫よ。お母さんと二人で同時に妊娠しているんで、妊婦が

何に気をつけなければならないかは、全部お母さんが実地で教えてくれるし、何も心配ないわよ。」
「・・・でも・・・。」
「一週間位は全然平気だから、のんびり骨休めしてきなさいよ。・・・お義母様、是非、千博のことをよろしくお願いします。」
「さすが勝美さんは出来た人だな、千博。・・・ここは是非、お言葉に甘えさせて貰いなさい。・・・そうだな、まずは一日か二日、自分の部屋で休んだあと、家族全員で温泉旅行にでも行こう。昔から嫁いだ娘は、結婚式から新生活の立ち上げのバタバタが一段落したら、実家に里帰りするものと相場が決まっているんだ。」
いきなり父さんが乱入してきたわ。皆、驚いちゃった。けど、父さんは千博が里帰りしてくるっていうことに、一人で盛り上がっているみたい。

その後、皆で一緒にお茶をして、それから荷物とか準備をするために千博たちは一度、家に戻って行った。今夜から、うちに里帰りするって言うんで、早速芳恵さんが母さんと二人で、腕によりをかけてご馳走を準備し出して、また父さんは義朗兄さんをつかまえて、一緒に温泉旅行の計画に取りかかったみたい。急な話だし、大学生の義朗兄さんはともかく、父さんはそんなに何日も仕事を休む訳にはいかないからってことで、近場で草津温泉にしたんだって。あそこなら、大宮からリニア新幹線に乗れば軽井沢まで30分もかからなくって、軽井沢で観光した後にレンタカーで浅間山を越えて行けば、2時間程度で着く筈だから、丁度良いということになったんじゃないかしら。
あたしたちは埼玉県に住んでいるのに、すぐ近くの草津温泉には行ったことがなくって、有名な湯畑とか西の河原温泉なんかも写真で見たことがあるだけなんで、今から凄く楽しみだわ。父さんが奮発して、有名な高級旅館を手配したみたいだし。
そのあと、あたしも夕食の準備を手伝おうとしたら、それよりも

千博が泊まるために、千博の部屋の片付け（既に物置となりつつある）をして、掃除をするように頼まれたんで、そっちをやっていたら、6時頃に千博がやってきて、焦ったように、そこからは自分でやるから良いと言われて、部屋を追い出されてしまったわ。・・・まあ、千博も既婚者とはいえ、一応年頃の男の子なんだから、異性の姉に見られたくないものだってきっとあるんでしょう・・・。

第87話　千博の受難

　多少の着替えを持って実家に戻ったのは、もう6時近かった。まあ、実家には下着（優稀が買って使う前だったものらしい）や普段着などは、まだ残っているし、洗濯だってできるから、持っていくものは殆どない。家に着いたら、優稀が僕の部屋を片付けているところで、ちょっと焦(あせ)っちゃった。だって、男子になってすぐ、クラスの男友達から貰った（無理やり押しつけられた）エロ本だのオナホール（両方とも使ったことはないけど）なんかは、さすがに勝美の家に持っていく訳にはいかなくて、押し入れの奥とかベッドの下とかに押し込んでおいたんで、それが見つかっちゃったら気まずいから、あわてて優稀を追い出した。優稀はなんだか悟ったような生暖かい眼で僕を見ながら、当然のように手を止めて部屋を出て行ってくれたけど、あれって、もう見つかっちゃったってことなんだろうか。優しい優稀のことだから、見なかったことにしてくれたのかもしれない。でも、誓って、僕はそんなものを使ったことは一度もないのに、何か誤解されてるのかなぁ。

　いずれにせよ、久しぶりの我が家の風呂を、しかも今日はお客様だってことで一番風呂に入れて貰った。一人で入る我が家の風呂は、勝美の家の風呂よりも狭いけど、やっぱり落ち着くし、風呂から出て夕食になるまでの僅(わず)かの時間でも、自分の部屋で一人で寛(くつろ)ぐのは、本当に心が休まる。勝美の家だと、お義父さんもお義母さんも、それに勝美自身も、随分僕に気を遣(つか)ってくれているけど、それが逆に精神的な負担になっているのかな。貰った勉強部屋で、自分一人で居ても、それでもやっぱり、自分が育った部屋でのんびりするのには敵(かな)わないや。

　何をするでもなく、本棚から昔読んだ本を取り出して眺(なが)めていたら、夕食ができたって声がかかった。何の気遣いというか気兼ねも

なく、ダイニングに行くと、僕の席は父さんの隣だと言われた。徹底的にお客様扱いされるのが、もう自分はこの家の家族じゃないと言われているみたいで、ちょっと寂しい。

「では、千博が結婚して初めての里帰りということで、今日は久し振りに家族揃っての夕食だ。いろいろとご馳走も用意してくれたようだし、楽しくやろう。千博も遠慮するなよ。」

「ありがとうございます。でも、それなら以前のように、僕は義朗兄さんの隣か、あるいはもっと前のように博美さんの隣に座りたかったな。こんな上座じゃ、なんだか気持ちが落ち着かないよ。」

「それは悪かった。ただ、お前を父さんの隣にしたのは、別にお前がお客様扱いだからというだけじゃないぞ。単に父さんが、久し振りにお前とじっくり話をしたかったからだ。というか、そもそも以前は娘だったお前とは、腹を割って話をしたことが殆どないじゃないか。それに、お前が男子として立派にやっているか、遠藤家ではどんな様子なのか、そういったことをいろいろと話したかったんで、それで父さんと義朗との間に座って貰ったんだ。」

なんだか、またいろいろと追求されそうな流れで、ちょっとだけ気が重い。でも、僕も久し振りに、というか、これまで父さんとはあまり話をして来なかったし、男子になって、父親になる心構えというのを、父さんに聞いてみたい気もしたんで、ここは逃げずに話をすることにした。まだ結婚していないけど、兄さんも僕よりはずっと大人の男性だし、以前から付き合っている相手も二人もいるし・・・。

「どうだ？・・・久し振りの我が家は？・・・多少はのんびりできたか？」

「うん、やっぱり、実家は気楽だね。勝美の家、・・・あ、もうあそこが僕の家なんだけど、まだどうも気持ちがついて行かないや。・・・とにかく、向こうのお義父さんやお義母さんは、本当に良くしてくれているし、僕に物凄く気を遣ってくれている。それは勝美も

一緒で、常に僕のことを立ててくれて、不自由することはまずないんだけど、なんだか気が休まらないというか、落ち着かないんだ。」
「まあ、それはしばらく仕方がないだろう。普通、女性が嫁に行くと、まず妊娠したときがひとつの節目となって、立場や状況が大きく変わる。それまでは、単なる居候だが、妊娠すると、その家の嫁という立場になれるんだ。これは婚家の雰囲気もさりながら、当人の意識の問題も大きい。」
「次に、実際に出産して、子供ができたときが、次の節目となる。子供が生まれれば、旦那のご両親以下、家を挙げて赤子を育てることが至上命題となり、何にも増して優先すべき事項となるので、嫁という立場から、さらに進んで母という立場になる。ここまで来れば、もう外様というのではなく、その家の中心として、それこそ旦那にせよ両親にせよ、指示を出せる位の立場となる。これは、要するに婚家の次代を産んだという事実こそが、磐石の重みを持つからだ。」
「しかし、お前の場合は、婿に入ったのだから、もう勝美さんを妊娠させたという、種馬としての義務は果たしたにせよ、自分の意識の中では、あまり大きな変化は見られないだろう。それは、おそらく子供が産まれても、そんなに大きく変わりはすまい。それが入婿の、精神的に辛いところであり、どんなに婚家で大事にされたとしても、何となく居心地が悪いというか、心から自分の家として寛(くつろ)げない大きな理由なんだ。」
「まあまあ、父さんの小難しい理屈は聞き流しとけば良いからさ。・・・せっかく里帰りしてきたんだ。そんな気遣いは一切無用で、こっちも昔どおり、兄弟として、家族の一員として、ごく普通に接するから、すこし心を休めなよ。それと、さっきまで父さんと二人でいろいろ手配して、ようやく予約が全部取れたんで、明後日からは二泊三日で草津温泉に行くことにしたから、明日は一日のんびりしていろよ。」
驚いた。父さんが一人で温泉とか盛り上がっていたのかと思った

ら、義朗兄さんも手伝って、もう手配が完了してしまったなんて、手際が良すぎるよ。・・・でも草津温泉か。僕は行ったことがないな。関東では最大級の温泉として有名だけど、どんなところだろう。

「じゃあ、明後日の朝は早いから、皆明日のうちに支度をしておくように。といっても、何を持っていくわけじゃなし、着替え程度で十分だろう。」

「宿は、純和風の高級旅館を2部屋取ったぞ。男子チームと女子チームで、丁度4名ずつになる。千博は男子チームに初デビューだな。」

ん？・・・何か今、兄さんの言い方に、ちょっと引っかかるものがあったんだけど、何だろう？・・・からかわれているとは思えないし、何だろうな・・・。

「先方の家では、普段どうしてるの？・・・不自由はないのかもしれないけど、何となく気が休まらないんじゃない？・・・あたしも結婚して、この家に嫁いできたときは、幼馴染みでしょっちゅう行き来していたにもかかわらず、やっぱり最初は気が張っていたわ。」

「あたしは、結婚したときにはもう芳恵さんが居たし、それにほら、ズボラな性格だから、あまり細かいことは気にしなかったんで、そんなに気疲れはしなかったかな・・・。むしろ、北海道から出てきて、ようやく自分の居所ができたって、そういう感覚だったわ。」

　母さんが今、さりげなく話したけど、母さんの秘密を知っているあたしとしては、当時の母さんが無理やり性転換させられちゃって、毎日落ち込んで涙に濡れていたことを聞いているから、多分、今のは母さんの性格というよりも、ようやく父さんに愛して貰える住処ができたっていう喜びだったんでしょうね。

　結局、この日は久し振りの家族揃っての夕食懇談という様相で、思い起こすと、あの交換初夜の前日の、家族全員で行ったレストランでの食事以来の、和やかで楽しい夕食だったわ。千博は、父さんと兄さんに挟(はさ)まれて、両側からお酒を注がれて真っ赤になっていたけど、三人で顔を寄せ合って、なんだかこそこそとヒソヒソ話をし

てはやや下品な笑いをしたり、突然三人で爆笑いしたりと、男子チームの中ですっかり寛いでいたわ。その挙げ句、最後はとうとう酔い潰れて、ダイニングのテーブルに突っ伏して寝ちゃったし。

――

　頭が痛い。ガンガンぐらぐらする。それに喉がカラカラだ。眼の焦点が合ってくると、見慣れた天井が見える。僕の部屋の天井だ・・・。隣には勝美が・・・いない？・・・あれ？・・・僕は？・・・僕？・・・あたし？・・・あたしは男になったんじゃ・・・？

　焦って股間に手をやった。・・・良かった。・・・ちゃんと付いてる。

　ぼんやりした頭が、少しずつ回ってくると、昨晩の記憶が戻ってきた。・・・そうだ、僕は父さんと兄さんにさんざんお酒を勧められて、三人で卑猥な話題で盛り上がっていたんだっけ・・・。それで、・・・それで？・・・その後の記憶がない。・・・多分、これは噂に聞く二日酔いだ。

　ふらふらと起き上がり、覚束ない足取りでダイニングに行って水を飲むと、少しは落ち着いた。まだ頭はガンガンするんで、リビングのソファに崩れるように座り込むと、新聞を読んでいた父さんが顔を上げて笑いかけてきた。

「大丈夫か？・・・初めての二日酔いは、どんな気分だ？」

「・・・・・・。」

「昨夜は大変だったんだぞ。ダウンしたお前を義朗が担いでお前の部屋に連れて行こうとしたら、いきなり全部戻しちゃって、お前も義朗も、それにダイニングの床も、大変なことになったんだから。」

「ごっ、ごめんなさいっ！」

「いや、酒に慣れていないお前に、どんどん飲ませた俺が悪かったんだ。別に謝るようなことじゃない。・・・でも、俺が床を掃除す

る一方、義朗はお前の着てるものを全部脱がせて処分すると、自分は急いで風呂に入ったし、裸にしたお前の身体を芳恵と博美、それに優稀まで手伝ってくれて、全部きれいになるまで全身を何度も拭(ふ)いたんだ。それから皆で裸のお前をベッドに運び、そこで新しい下着や寝間着を着せてやっと一息ついたんだぞ。だから芳恵や博美、それに優稀にも、お礼を述べておくと良いだろう。」
「・・・わかりました・・・。」
「芳恵には、さんざん叱られたよ。急性アルコール中毒になったらどうするんだってな。・・・それと義朗には、失禁してなくて良かったって言われた。確かに本当に泥酔すると、吐(は)くだけじゃなくて漏らしちゃうからな・・・。」
「そっ、そのっ、・・・あのっ、・・・あうぅ、・・・うぅっ・・・。」
「今日は何も予定がないんだろう？・・・一日、寝ていれば良いさ。夕方になったら、明日からの旅行の準備だけやって、もう一晩寝ればすっかり回復するって。あ、水は沢山飲んでおけよ。・・・酒の失敗は、誰でも一度や二度は経験があるだろうが、それが許されるのも若いときだけなんだぞ。今のお前ならどんな醜態でも笑い話で済むが、俺がやったら社会的に死んでしまう。それに外でやるのと自宅でやるのと、どっちが被害が少ないか、考えるまでもないだろう。」
「・・・はぃ。・・・・・・・・(すみません)。」
　何も言葉がない・・・。というか、語尾が消え入りそうに小さくなる。確かに、父さんの言う通り、こんな醜態をあっちの家で晒(さら)したら、もう僕は一緒に住むことはできない。そういう意味では、実家で良かったというべきなんだろう。・・・でも、それでもやっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。本当に漏らさなくて良かった・・・。
　僕の身体を拭(ふ)いてくれたのは、母さんと博美さん、それに優稀だって言っていた。とすると、あそこを拭(ふ)いたのは誰なんだろう。一

番、恥ずかしいのは、やっぱり母さんだけど、でもその可能性が一番高い。といって、怖くて聞くこともできない・・・。でも、全裸の僕を三人で拭（ふ）いたってことは、三人とも、僕の身体を隅から隅まで確認したってことだよね。きっと、しっかりチェックされちゃったんだ。あそこだけじゃなくて、最近かなりもじゃもじゃになってきた腋毛とか、同じく毛が生えてきた（らしい）お尻の穴とか・・・。

「まあ、でも、俺も義朗も、お前とは腹を割って話す機会がまったくないまま、お前はさっさと婿に行ってしまったんで、寂しい思いだったし、お前のことをよく知る機会もないままかと心配したんだが、昨夜は本当に有意義な話をいろいろとできて、お前の本心とか心構え、それに性癖なんかもかなりわかって、得るものが多かった。俺は実に満足だ。」

　ぎくっ！・・・僕はいったい、何を話したんだろう。・・・まったく記憶がない。・・・まさか、勝美との夫婦生活なんか、話したりしちゃったんだろうか？

「最初のときの暴発しちゃった様子とか、そのとき、どんな快感があって、何をどう考えていたのか、勝美さんに奉仕して貰ったときの快感とか、それ以降も勝美さんと愛し合うとき、いつも何を考えながら、どんなふうにやっているのか、勝美さんの性感帯とか、実によく考えているのがわかった。立派だぞ。夫婦とは、かくあるべきだな。」

　ぅ、あ、あ、あ、ぁ！・・・やっぱり全部話しちゃったんだ！！・・・僕のバカ、バカ、今すぐ逃げ出したい・・・。

「それにお前が男になってからの経験とか失敗とか、いろいろ話してくれて、これまで相談する相手がいなくて苦労していたんだな。まさにそういうときこそ、俺や義朗の出番なんだ。三カ月検診のときの恥ずかしい体験を、皆に知られてしまったとか、バックが好きになってしまったなんてのも、一人で抱え込まずに、なんだったらカミングアウトしたって構わないじゃないか。そんなことは、お前

の価値を少しも毀損したりはしないだろう。悩むようなことじゃないんだぞ。」

そっ、そんなことまで全部話しちゃったんだっ！！・・・きっと、聞かれるままに、全部自分からペラペラ喋っちゃったに違いない・・・（泣涙泣涙泣涙）。

もっ、もうダメだ！！・・・僕は明日、草津に行ったら湯畑に飛び込むしかないんだ！・・・でも、僕が死んだら、勝美は悲しむだろうな・・・。それに、産まれてくる子供を不幸にしちゃう・・・。どうしよう・・・。困った・・・。あれ？・・・湯畑って、そもそも飛び込んで死ねるような場所なんだろうか？・・・写真では浅そうに見えたけど・・・。現地を見たことがないから、わからないや？・・・ダメだっ、・・・考えると、ますます頭痛が酷くなる・・・。

「・・・まだ頭が痛いんで、少し寝てきます・・・。」

「そうか。ゆっくり休んできなさい。とにかく水を沢山飲んどけよ。二日酔いの特効薬なんだぞ。あと、明日の朝は早いから、夜になる前に準備だけは忘れないように。といっても、着替えと洗面用具程度で十分だけどな。」

第８８話　杉田家の温泉旅行

「やっと着いたな。いろいろな場所に立ち寄ったんで、結構時間がかかったな。」
「仕方がないわよ。車2台じゃ飛ばせないし、もう1台を待ったりして、すこしずつ時間が余計にかかったりしたでしょ。それに、そもそもあたしたち家族は、普段あまり車を運転していないじゃない。慣れないレンタカーなんだから。」
父さんと母さんが、いつもの調子で話しながら、荷物を下ろしている。この奈良屋という旅館は、もう２００年以上も歴史がある、草津でも一番古い位の旅館らしくて、湯畑に面して建っている、立地としては最高だ。
なぜかは知らないけど、レンタカーは男子チームと女子チームに分かれていた。男子チームは父さんと兄さんが交代で運転し、女子チームは母さんと博美さんが交代で運転したみたいだ。兄さんがチェックインを済ませてやってきて、車を駐車場に停めると、全員で部屋に向かった。
部屋は男子チーム４名と女子チーム４名に分かれることになったみたいだ。だからレンタカーもそのようにしてあったのかと、何となく納得。で、部屋に着いたと思ったら、早速、父さんが温泉に行こうと言い出した。
そうなんだ・・・。温泉で有名な草津の旅館に来たんだし、男子チーム全員で温泉に入りに行くことは、当然なんだけど、僕、父さんや兄さんに裸を見られるのは初めてなんだ。一昨日は酔い潰れて、母さんや博美さん、それに優稀に裸をすべて見られちゃった（しかも母さんにあそこを拭（ふ）かれちゃった）らしいけど、あのときは意識がなかった。それに、性転換する前には母さんたちと一緒に、女子チームとして風呂に入ったこともあるんで、確かに男子の身体を見

られたのは初めてなんだけど、僕の意識としては、母さんたちに見られるのは、恥ずかしいって言っても、まだ抵抗が少ないんだ。（それに手術で入院していたときは、ずっと博美さんが付き添いしてくれていたんで、カテーテルを抜くときや最後の射精試験なんかも、部屋の片隅でずっと見られていたけど、そんなに抵抗はなかった。）

　でも、父さんと兄さんに裸を見せるのは、正直ものすごい躊躇がある。男同士なんだから、変に構えちゃいけないと思うんだけど、理屈と意識はまだ完全に一致していない。きっと心が、まだ完全に男子になりきっていないんだろうか。しかも、男湯デビューだ。これもかなりハードルが高い。一昨日、皆で裸になっておいて本当に良かった。あの経験がなかったら、僕はきっと脱衣室で固まっちゃっただろう。

「晶、浴衣のサイズは大丈夫か？・・・皆、替えの下着と手拭いを持ったな。じゃ、まずは露天風呂に行こうか。この時間なら、温泉も空いているだろう。」

　全員で浴衣に着替え、父さんと兄さん、それに晶と連れ立って、四人で大浴場に向かう。・・・脱衣室はガラガラで、ロッカーも殆ど全部空いていた。父さんたち三人は、何の躊躇もなく、ごく普通に浴衣を脱いでいる。でも、僕はなんとなく手が止まってしまい、浴衣の帯をくるくると五角形に畳んだりして、時間を稼いでいる。と、全裸になった兄さんが笑いながら話しかけてきた。

「どうした。早く脱いで入ろうぜ。ここは全員、男子ばかりなんだし、そもそも家族じゃないか。何を恥ずかしがっているんだ。・・・もう男子になって、かなり時間が経っているのに・・・。男子は裸を隠さないものなんだぞ！」

「うっ、うんっ・・・。」

　仕方がない。覚悟を決めて、トランクスを一気に脱ぎ捨てた。あそこがちょっとだけ半勃ち気味だけど、うん、この程度なら、むしろ大きく見えるから良いか。そう思ったんだけど・・・。

「どれ、やっと全部脱いだな。しっかりこっちを向いて見せてみろ。」

」

「なかなか立派な面構えじゃないか。別に巨根ということではないにしろ、これならどこに出しても、恥ずかしくない、一人前のモノだな。」

「良いものを貰って良かったな。勝美さんに感謝しなければな。」

父さんと兄さんが、二人してまるで解説するように話しながら、僕のあそこを品評している。いや、視線はあそこだけにとどまらず、全身を舐め回すようにチェックされ、前から後ろから、あらゆる角度で見つめられる。兄さんなど、しゃがんで僕のお尻とかをのぞきこんだり、そのまま前に回って顔をくっつけんばかりにペニスを眺めると、ペニスを持ち上げて裏スジとかを確認している。・・・ま、マズイ、そんなことされたら、ただでさえ半勃ち状態だったのが、ムクムクと頭を持ち上げてきた。・・・だっ、ダメだっ、静まれっ。・・・こんなところで勃起しちゃったら、絶対にダメだっ。・・・でっ、でもっ、止まらないっ！・・・どうしようっ！！・・・ペニスがお臍についちゃうっ！！・・・助けてっ！

「おっ、勃っちゃったか。元気で素晴しいぞ。男子はそうでなくてはいかん。」

「まあ、でも、それで温泉に入ったら、どう考えても変態に見えるよな。勝美さんが妊娠してから、ご無沙汰なんだろ？・・・お前の年齢だと、そうなっちゃったら、一度抜かないとおさまらないだろうから、トイレに行って一発抜いてこいよ。俺たちは先に露天風呂に行っているからさ。」

「一発抜くって、どういうこと？」

「ん？・・・晶はまだ性教育の授業は始まっていないんだっけ？・・・射精して、・・・射精ってわかるよな？・・・射精して、精液を出しておくことだよ。男子は精通・・・精通はまだわからないかな？・・・はじめて精液が出るようになることなんだけど、そうなったら、定期的に精液を出さないと、どんどん溜まっちゃって、おちんちんがあんなふうに上向いて立っちゃうんだ。それを直そうとす

ると、射精するしかない。・・・ま、もうすぐ学校で習う筈だ。」
「さ、我々は先に行ってるから、しっかり抜いて解消してから来なさい。」
父さんたちが浴室のほうに行ってしまった。確かに、こんな臍に付くほどギンギンの状態で大浴場に入って行ったら、いくら空いているとはいえ、僕は変態認定されてしまう。仕方がないから、素っ裸でトイレに行き、個室に入った。
「うっ、ぅんっ、あっ、ぁあっ。」
ガチガチに勃起したペニスを、看護婦さんにされたみたいに優しく握って前後に扱く。実は僕は性転換してから、まだ自分でオナニーして最後までイったことはない。そもそも勝美とのセックスか、勝美にやって貰う以外で射精したのは、退院した直後に優稀にオナニーを教えて貰った1回だけだ。あとは、病院で退院前に機能検査で看護婦さんに射精させられたのが1回、それとこの前の地獄の三カ月検診で、やはり看護婦さんに扱かれて射精させられたのが1回、さらに同じ日にお尻グリグリされた合計4回だけだ。まあ、お尻グリグリは、ずっと射精しっぱなし状態にされちゃってたから、あれを何回と数えるのかは知らないけど、本当に自分でやったことはない。病院でやったのは、単に医療行為としての機能検査だから、そうすると自分で射精したのは、優稀に手伝って貰ったオナニーを1回やっただけなんだ。・・・退院するとき、先生には是非ともオナニーをするように言われていたんだけど、一度やってみて、結局上手くできなくて、そのまま直ぐに勝美との夫婦生活になっちゃったんだ。
だから、一生懸命、見よう見真似で扱くんだけど、確かに快感はあるものの、どうもいま一つ、射精する感覚が昂ってこない。妊娠してからはセックスを控えているけど、勝美が殆ど毎日、必ず僕に奉仕してくれて、口とか手とかでいつも最低2回は射精・・・、って、そうか、今、気がついたんだけど、あれ、勝美が管理して抜いてくれていたということなんだな。それが、卒業式の晩は懇親会で

遅くなって、そのまま疲れて寝ちゃったし、一昨日と昨日は里帰りでやって貰っていなかったんで、それで三日ほど射精していなかったから、こんなになっちゃったのか・・・。
とにかく、一刻も早く射精して、父さんたちに合流しなきゃ・・・。でも焦れば焦るほど、射精できそうもない・・・。勝美はいつも、亀頭のカリの部分をこうやって指でワッカをつくって扱(しご)いていたな。口でやってくれるときも、おなじようにして・・・。あ、それと口でやるときは、この裏側のスジがあるところから、先端の尿道口までを舐(な)めてくれて、それがすごく気持ちよかった。
・・・でも、ダメだ。・・・どうもうまく行かない。とても気持ちが良いんだけど、どうしても射精感が滾(たぎ)ってこない。・・・困った。・・・どうしたら・・・。
そうだ。緊急事態だから、あれをすれば・・・。ええっと、こうして、片手でペニスを刺激しながら、もう片方の手の中指にツバをたっぷりつけて、・・・えいっ!?!?
「うっ、ぅぐっ、・・・はっ、はひっ、はーっ、はーっ、はっ、はひっ。」
息が止まった・・・。でも、お尻からじわじわと、腰全体に快感が広がってくる。それにあわせて、ペニスをシコシコと扱(しご)くと、あっと言う間に快感が亀頭からペニス全体に広がり、キンタマがじんじんしてくる。
「あっ、あひっ、ぅあっ、ひっ、だっ、ダメっ、これっ、ダメだっ、たっ、たすけっ、ぃひっ、ひぐっ。」
なっ、何もっ、何も考えられないっ。指っ、指が勝手にっ。・・・全身が性器になったみたいなっ、性感帯がっ、神経がっ、神経が剥き出しになってっ、あっ、あっ!・・・あぁぁっ・・・。
ぺっ、ペニスのっ、ペニスの先端からっ、・・・尿道を通じて前立腺までっ、・・・でっ、電気が走るっ!!・・・かっ、快感が奔(ほん)流(りゅう)になってっ・・・ペニスから脊髄を抜けて脳味噌まで・・・ぐぁあぁっ・・・!?＄＊▲～%＋%～▼＊£?!・・・。

突きたてた中指を無意識でぐっと曲げて、前立腺を思い切りぐぐっと押し込んだみたいで、瞼の裏に花火が咲いてっ・・・。
「ぁあーっ、あひーっ、いひーっ、ぃぐーっ。」
ドピュルルルーッ。ドピュルルーッ、ドピューッ、ドピューッ。
「とっ、止まらないっ、射精がっ、止まらなっ・・・、たっ、たすけっ・・・、ひっ、ひぃーっ。」
　ドピューッ、ドピュピューッ、ドピュッ、ピュッ。
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーー
・・・僕はどのくらい気を失っていたんだろう・・・。気がつくと、個室の便器に全裸で腰掛けたまま、ペニスを握りしめ、もう片方の手は中指をお尻に突っ込んだまま、気絶していたらしい。口からは涎というか泡を噴いていた。便器に腰掛けていても、屹立した状態のペニスから噴出したため、個室の中は大変な状態になっている。周囲が全部タイルで良かった。それに裸だったのも幸いだ。でも、必死になって拭き取ったけど、臭いが凄いことになっている。
　それにしても凄まじい量の射精だった。まだ腰が快感で痺れている。脳味噌が全部溶けてしまい、どろどろになってペニスの先端から噴出したような感覚だ。男の子のオナニーって、こんなに気持ちが良かったんだ。
　でも、取り敢えずペニスは落ち着いて、ぐんにゃりした状態になってくれた。個室の中をきれいにし終わった頃には、普段のときのように、だらんとペニスがぶら下がり、さっきまでキューッと上がっていたキンタマも、同じようにぶらぶらしている。
・・・よし、なんとかこれで大丈夫だ。臭いはまあ・・・、気にするのは止めよう・・・。
　急いで大浴場のドアを開け、入口の横でかけ湯をしてから、父さんたちがいる筈の露天風呂に向かった。
「おっ、やっと来たか。思ったより時間がかかったな。」
「大声を出さなかったか？・・・凄い叫び声が、こっちまで聞こえ

たぞ・・・。」
「一発じゃおさまらなかったのか？・・・2発か3発抜いたとか？」
「・・・・・いや、上手くできなくって・・・。」
「そうか、お前は手術してから直ぐ勝美さんとのセックスに明け暮れるようになっちゃったから、自分でオナニーした経験が殆どないんだよな。よし、後で俺が手ほどきしてやるよ。晶もよかったら一緒に見学すると良い。直ぐに必要になるぞ。」
「そっ、そんなっ！・・・いっ、嫌だよっ！！」
「えぇー？・・・僕も見てみたいな？・・・ねぇ、千博お兄ちゃん、射精するとこ見せてよ？・・・射精するって、うんと気持ちが良いんでしょ？・・・お兄ちゃんが気持ち良くなるところ、見ておきたいな。・・・だめ？」
「恥ずかしがるなよ。男の兄弟なら、オナニーを兄から弟に教えるのは珍しいことじゃないだろう。・・・って、そうか、千博は女子として試験を受けたんだよな。男子だと、あの試験のときに皆で一斉にオナニーをして、持続時間とか射精量とか射精回数とか、先生達に計測されるんだ。それが点数に直結するから、皆、恥ずかしいなんて感情は持つ暇もなく、必死でオナニーに没頭する必要があるんだぞ。」
「そもそも、今はどうやったんだ？」
「そっ、それはっ・・・。」
とっ、父さんと兄さんがっ・・・、僕の眼をじっと見つめている！・・・ダメだ。こういうとき、絶対に嘘がつけないのが僕なんだ・・・。
「どうした？・・・おさまっているからには、ちゃんと射精できたんだろう？」
・・・もっ、・・・もうダメだっ！！・・・話さざるを得ない！！（涙）
―――――――――――――――
――――――――――――

「そうか、お前はバックが好きだったんだよな。自分でオナニーするときも、指を突っ込んで刺激するほどハマっていたのか。・・・でも別に不思議じゃないぞ。男女ともに、そういう性癖の人は案外多い。特に男子の場合、肛門からだと前立腺を直接刺激できるんで、病み付きになっちゃうんじゃないか？・・・だから、トコロテンといって、バックに挿入されると、その刺激で押し出されるように射精しちゃう人もいるんだ。」
「あと、女性の場合でも、膣よりも肛門のほうが括約筋が強くて、それで男性の中にはバックを好む人が一定数いる。人類の歴史でも、肛門性交は別に珍しくないし、肛門は立派な性感帯のひとつなんだ。今の日本では、子供ができないんで膣内射精以外は推奨されていないけど、行為としてはフェラチオなんかと一緒だ。だから、別に恥ずかしがるようなことじゃない。気にするな。」
・・・最悪だ。・・・事実だから仕方がないけど、僕はとうとうバックを責められるのが大好きな変態ってことになっちゃった。・・・しかも、この話の流れだと、帰宅したら絶対、僕は家族が見ている前で、自分でお尻をグリグリやって射精するところを見せなきゃならないんだ。・・・どうして、・・・どうしてこんなことになっちゃったんだろう。・・・どこで何が間違ったんだろう・・・。泣きたい・・・。これじゃ、里帰りしても、心が休まる暇なんて、どこにもないよ（涙）。
・・・はっ！・・・まっ、まさかっ！！・・・この話が勝美に伝わって、お義父さんやお義母さんにもバックで射精するところを見せることになっちゃうんじゃないか？！？！・・・そっ、そんな！！
「まあ、その話題はもうこれくらいにしよう。・・・それよりも、千博、立派なペニスを貰ってよかったじゃないか。俺は去年の家族旅行のとき、当時の勝美君のペニスを見て知っているが、もうすっかり大人のペニスだった。こんな立派なものを譲ってくれた勝美さんに、一生感謝するんだぞ。」
「それはわかってる。僕が男子になれたのは、すべて勝美のおかげ

だ。だから、勝美のことだけを一生、愛し続けるつもりだ。勝美以外の女性には指一本触れない。いや、心を動かすこともない、そう心に誓っている。・・・というか、僕のペニスは勝美から預かったもので、勝美の許可なしには勝手に使わない、そんな意識だ。」

「ふぅん。・・・上手くオナニーができないのは、その意識に問題があるのかもしれないな。・・・夫婦のことに口出しするつもりはないけど、お前は一級男子として、優秀な子供を沢山設ける使命があるんだ。一級男子は、合法的に二人の妻を持てるのも、そのためだ。お前が一級男子の責任を果たすために、第二妻を持つといったら、多分、勝美さんは喜んで賛成すると思うがな・・・。」

「でも、僕は婿だから・・・。勝美の家にもう一人の妻を迎えるなんて、現実的にはあり得ないよ。」

第８９話　父の想い

「勝美君は去年の夏の時点で、もう身体が完全に大人として完成していたな。ペニスもそうだ。第二次性徴がもう完全に完成していたような気がする。あれなら、身体は小さくとも、生殖機能点は高かっただろう。」

「勝美は、確か生殖機能点の部分は、殆ど満点で、学年全体の男子の中でも相当上位だった気がする。」

「さもありなん、だな。第二次性徴が早く発現すると、生殖機能点は当然高くなるし、大人の身体として完成するから、体力点も期待できるんだ。要するに、今の判定試験というのは、１５歳の時点でもう大人の身体として完成している子を選び出し、そのような優秀な遺伝子を持っている個体、つまり早い段階で性的に成熟していて、次代を残してくれる種親を選別するためのものなんだ。」

「まあ、必ずしもそれだけじゃないけどさ。テストに関しては練習も大切だし、鶏(にわとり)と卵の関係みたいなもんさ。・・・それより、去年勝美君のペニスを見たときは、まだ剥けていなかったような記憶があるけど、手術までに剥けたのか？・・・今の千博のペニスは、しっかりズル剥けになって、なかなかの顔つきじゃないか。」

「ねぇ、お父さんも義朗お兄ちゃんも、それに千博お兄ちゃんも、皆僕のおちんちんとは形が違うけど、大人は皆こうなの？・・・僕もいつか、そうなるの？」

「日本人は大人になると、おちんちんの先端の皮が剥けてくる人が多いんだ。といっても、必ずしも全員じゃなくて、普段は皮を被ったままの人もいる。でも、さっきの千博みたいに、おちんちんが勃起、つまり大きくなって勃(た)ってくると、剥けなければいけない。そうしないと、女性とセックスするのが難しくて、子供をつくることができないんだ。」

「中学生になると剥けてくるの？」
「いや、それは人それぞれだ。俺は高２の秋から冬にかけてだったかな。」
「父さんはもっと遅かったぞ。高１の終わりに芳恵と結婚したときは、実はまだ晶みたいな子供ちんちんで、結婚するから割礼手術・・・、つまり先端の皮を切り取って、ここの亀頭という先端の部分を剥き出しにしてしまうんだが、その手術を受けようかと悩んだ位だ。・・・父さんが普通に剥けるようになったのは、高３で博美とも付き合いだしてからで、二人を相手に頻繁（ひんぱん）にセックスするようになったら、自然と発育して、大学に入って博美と結婚する頃には、常に剥き出しのズル剥けになったな。」
「普通、中学生では、まだ完全なズル剥けになっている男子は少ないよ。勝美のペニスも、優稀のペニスも手術する前は、普段は皮が被っていて、勃起すると剥けるようになる仮性包茎だったんだ。」
「それでも実用上は、何の問題もないんだけど、性転換手術を受けると、移植されるペニスは、全員、一律に割礼手術を施されて、ズル剥けにされちゃうんだ。これは手術のとき先生から聞いたんだけど、他人に移植する性器は、標準的な形や大きさ、発育具合といったものが決まっていて、そこから外れていると、移植するときにその標準値に合わせて整形するんだ。だけど、中学生男子だと、まだほとんどの子は仮性包茎で、完全にズル剥けになっている子は少ない。それで、手術のときには、標準的な大人のペニスに合わせて、全員必ず割礼をして、こんなふうに亀頭を剥き出しにしちゃうんだってさ。」
「だから、千博のペニスはズル剥けになっていたのか。」
「そう。優稀のペニスも仮性包茎だったけど、せんだって榊君のペニスを見たら、もうしっかりとズル剥けになっていた。それと、亀頭が剥き出しになると、発育が良くなるらしいよ。僕も手術から３カ月で、このカリの部分が一回り大きく育ったように感じるもの。」
「それは、毎日セックスしているから、・・・っていうの

もあるよな。」
「僕も剥いてみる。・・・どうやればいいの？」
「皮を根元のほうに、そっと引っ張ってごらん。でも、少しでも痛かったら、絶対に無理しちゃダメだ。無理やり剥くと、嵌頓(かんとん)包茎という状態になって、亀頭の部分が首を吊ったみたいになり、最悪ペニスが腐っちゃうからな。少しでも痛かったら、絶対に無理するなよ。」
「こう？」
・・・ズルっ。
「いっ、いたたたたっ。」
「直ぐ戻して！！」
「直ったな。・・・今のは力を入れすぎだ。そうならないよう、毎日、お風呂で少しずつ、剥く練習でもすると良い。」
「晶はまだ小2だろう？・・・そんなに焦ることはないさ。たまに思いついたら、やってみる程度で十分だよ。そして少しでも剥けるようになってきたら、中はよく洗うようにしろよ。・・・多分、最初はピリピリして痛いかもしれないけど、そこは不潔にしておくと、いろいろ具合が悪いんだ。特に白い垢がこびりついていることが多いから、それをよく洗い落としておかないとダメだぞ。」
――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――――――――
・・・良い温泉だ・・・。この季節の草津は、さすがにもう雪はないけど、まだまだ空気は冷たい。それが、温まった顔に心地よく、少しのぼせてきた兄さんは、裸で岩の上にこしかけて涼んでいる。こういうときは、タオルで隠すものかと思っていたけど、それは男らしくないんだそうだ。（それに父さんから、温泉にタオルを持ち込むのは良くないと言われてしまったので、僕たちは全員、タオルを入口の横にある小物棚に置いてきている。）
「・・・ふーっ、・・・良い湯だな。こうして、家族で温泉に浸かってのんびりする。まさに人生の幸せだ。・・・千博、お前は杉田

家に居たときも幸せだったと思うが、勝美さんという最高の伴侶を得て、しかも早々と子供まで授かった。・・・この幸せを一生大事にするんだぞ。・・・俺も今年中には、美香と愛と結婚する。そしてお前に負けないよう、沢山の子供をつくるんだ。・・・父さんには散財させてしまうかもしれないけど・・・。」
「そんなことは心配するな。子供が独立するまでは親の責任範囲だ。それに多少の蓄えもあるしな。・・・それより、美香さんと愛さんの二人とは、ちゃんと愛し合っているか？・・・夫婦は身体の関係だけじゃないけど、身体の関係がなければ、夫婦にはなれないんだ。肌を重ね続けているうちに、それが愛情となって育まれるものだ。また愛し合わなければ子供はできない。子供ができて、家族が増えるというのは、大変かもしれないが、本当に楽しくて幸せなものだぞ。」
「父さんは、今でも芳恵と博美のことを毎週愛している。そろそろ年齢的に大変になってきているが、そんなのは気力で頑張るもんだ。俺も枯れるには、まだ早い。・・・といっても、まあ、今からお前たちの弟か妹を仕込もうというつもりは、さすがにないけどな・・・。でも安全日を選んで、思い切り膣内射精する。・・・それが夫婦の愛情を再確認する、一番の近道であり、精神的な絶頂が得られるんだ。」
「芳恵も博美も、俺が子宮に思い切り射精すると、必ず一緒に絶頂して、俺と抱き合ったまま気絶しちゃうんだ。あそこが俺のモノを搾るようにキュッ、キュッと収縮し、白目をむいて意識を飛ばしながら俺にしっかりと抱きついてくるのは、本当に可愛くて愛されているっていう実感が湧くもんだぞ。」
・・・うわぁ、自分の親の性生活を聞かされるのは辛いなぁ・・・。母さんがイク瞬間の様子なんて、聞きたくなかった・・・。父さんがこんなふうに惚気るのは、はじめて聞いたけど、兄さんはよく平然としていられるな・・・。でも、父さんと母さんたちが、今でも毎週愛し合っているというのは意外だった。僕も勝美と、一生そ

んな関係を継続したいな・・・。
「父さんの言う通りだ。だから俺も、まだ結婚していないけど、美香と愛とは、毎日のように愛し合っている。」
「千博、顔が赤くて、いたたまれないような顔をしているな？・・・だが、大人になったなら、まして家族なら、性生活のことについては、ごく日常的な話なんだ。・・・例えば、昨日の夜、何を食べたか、それは美味しかったか、どれが好きだったか、そういう話と同じ感覚で、セックスについても普通に語れなければならない。それが大人なんだ。」
「勿論、特殊な性癖をわざわざ語る必要はないし、その場の雰囲気を考える必要はあるが、例えば自分は辛いものが好きとか、甘いものに目がないとか、お酒は日本酒が好きとか、どこで食べたあの料理は美味しかったとか、そういうのと一緒だ。大人になるということは、そして結婚するということは、そういうことだ。・・・性とかセックスは、人間の三大欲求であり日常だ。思春期を過ぎたら、避けて通ることはできない、生活の一部なんだ。バックが好きだったり、被虐が好きだったとしても、それは単に甘いものが好きとか、辛いものが好きというのと同じだ。あまり一般的でないとしても、苦いものが好きという人もいれば、世界には腐らせて食べる料理だってある。・・・どれも単なる嗜好の問題だ。」
「一昨日の夜は、お酒の助けがあったにせよ、実に楽しく勝美さんとの関係を語っていたじゃないか。勝美さんが絶頂するとどうなるか、とか、お前はどこが一番感じるかとか、バックを責められてバカになるくらい気持ちよかったとか、バックを責められると必ず気絶しちゃうとか、実に素直に話していたぞ。」
「・・・・・・・・。」（・・・もう、いたたまれない。この拷問は、いつまで続くんだろう・・・。）
「なあ、千博。今はまだ恥ずかしくて、針の筵（むしろ）に感じるかもしれないけど、本来、父親と息子というのは、こういう話題でも隠したりせず、自然体で明け透けに話し合えるのが理想的な関係なんだぞ。

それに、男の兄弟というのは、兄から弟にオナニーを教えたり、一緒にオナニーをしたり、オカズを共有したりするのも自然なんだ。俺と優稀は、ずっとそういう関係だったんだ。まあ、妹だったお前には、わからないように気をつけていたけどな。」

「だから、帰ったらお前が晶にいろいろと教えてやるんだ。射精するところも見せてやれ。」

「何もセックスに限らないが、息子に対しては父親が、娘に対しては母親が、それぞれこうして教えてやり、相談に乗る。どんなことでも恥ずかしがらず、すべてを話し合う。勿論、一方通行じゃないぞ。親にも悩み事はある。大人になった子供には、親の悩みを共有し、一緒に解決しようと努力する。それが理想的な家族関係であり、親子の関わり合いというものなんだ。・・・諺にもあるだろう。老いては子に従えってな・・・。俺は義朗とは意図的にこういう話を進んでしてきたつもりだし、優稀とも、何度かこういう話をした筈だが、あいつはまだ、こういう話についてこれるほどには、精神的に成熟していなかったのかもしれない。というか、いつも俺のことを怖がっていたようだからな。・・・晶とは、まだ小さいんで、そんなに会話をしてこなかったが、これから小学校高学年そして中学校に上がったら、父親としての務めを果たすべく、いろいろと話をしようと考えていたところだ。」

「だが、女子だった頃のお前は、芳恵とこういう関係を築けていたか?・・・少なくとも俺は見たことがない。芳恵が口下手だったというのは勿論知っているが、それにしてもお前がさっぱり心を開いてくれないと、芳恵がよくぼやいていたんだぞ。あいつは気丈だから、絶対に泣き言は言わなかったが、お前に振られ続けている芳恵は、見ていて可哀相だった。お前にすれば、鬱陶しくて煩わしかったんだろうけど、母親と娘の関係というものを、もう少し考えてやってもよかったんじゃないのか。」

「その挙げ句、お前はもう、男子になってしまい、それどころか婿に行ってしまった。芳恵にしてみれば、折角苦労して育てた娘が、

ちっとも自分に懐いてくれないまま、いなくなってしまったんだぞ。娘を亡くしたような喪失感で、芳恵が人知れず涙していたのを、お前は知っているのか？・・・優稀が、その穴を埋めてくれているようだが、お前の行動は、これだけ周囲に影響を与えているということだけは、忘れないようにしろよ。」

「・・・そうだったんだ・・・。」

　知らなかった。・・・母さんは、ただ口うるさくて、邪魔なだけに見えていた。僕が男子への性転換を望んだのも、そんな母さんから離れたくて、男子になれば、もっと自由になれるかと思っていたんだ・・・。母さんに悪いことしちゃった・・・。もう手遅れかもしれないけど、何か親孝行できると良いな・・・。

　でも、父さん、そんなところまでちゃんと見ていたんだ。男尊女卑の権化で、傍若無人で他人の心の痛みなんて、まるで無頓着な性格かと思っていたけど、実に細やかで気を遣っていたなんて、父さんのこと、見直しちゃった・・・。一家の長になるって、大変な責任なんだな・・・。僕にできるんだろうか・・・。

「さ、父さんの耳障りな話はこれくらいにしよう。それよりも、今後、千博がどう生きていくか、自分の家族をどう築いて行くかだ。」

「千博、これからお前には、子供ができて、どんどん家族が増えていくだろう。それはそれは楽しいものだぞ。子供は何人居ても良い。子育ては大変だが、本当に人生が充実してきて、自分の存在意義はここにあるんだということを思い知ることになる。・・・およそ男子たるものは、女子を妊娠させ、自分の跡取り、後継者を産ませるために生きている。これは生物の雄としての本能であり、自然の摂理だ。だから、無事、嫡男が産まれたら、それこそ男子冥利に尽きる。」

「勿論、娘だって可愛さには変わりがない。お前や環が産まれたときは、それはそれは嬉しかった。前にお前にも話したな。娘さんを下さいと言ってきた男をぶん殴って追い返してみたいと・・・。俺は昔から、嫁いでいく娘を涙で見送る父親というのにも、憧れてい

たんだ。だから、優稀にはショックだったかもしれないが、お前が男子になり、優稀が女子になると聞いたとき、娘の数は変わらないと、密かに安堵したんだぞ。」

　これも驚きだ。・・・父さんって、こんなにも子煩悩だったんだ。・・・いや、親バカというべきか。僕はてっきり、父さんにとって子供など、一級である自分を飾るアクセサリーか何かと考えているのかと思っていた。だから、自分の子供も一級になればよし、優稀みたいな、そうでない子供など、どうでも良いみそっかす扱いなのかと思っていた。しかも、決して男尊女卑ではない。いや、むしろ娘にも憧れているようだ。少し認識を改めなきゃ・・・。

「男子が子供を欲しがるのは、というか膣内射精をして女子を妊娠させたいと思うのは、自分の遺伝子を残したい、自分の分身を次の世代に残したいという、生物の根源的な本能に基づいている。好き合った男女がセックスをする、という行為は男子からすれば、自分の遺伝子を受け継いだ家族を増やしてくれる女子を手に入れた、という喜びなんだ・・・。ただ、普通、性転換すると、自分のものではない精巣、卵巣を移植されるので、子供は自分の遺伝子ではなくなってしまう。要するに人工授精による借り腹の親子の関係になってしまうんだ。だが、お前たちはお互いの精巣と卵巣を交換しているので、父親と母親の役割は入れ代わっていても、産まれてくる子供は間違いなく二人の遺伝子を受け継ぐ子供だ。性別交換したのに、そんな恵まれている状況にある幸運を、神に感謝しなければいけない。この感謝の心を、一生、忘れるんじゃないぞ。・・・お前の婿入りに際して、父さんから是非とも言いたかったのは、この一言だ。」

「・・・肝に銘じておきます・・・。」

第９０話　兄の想い

「千博はそれで良いとして・・・。義朗、お前はどうなんだ。今年中に結婚となると、もうあまり時間はないぞ。突然バタバタした千博は、やや特殊なケースだろうが、お前はもう長いこと二人と結婚する準備を進めてきたんだろう。俺も手伝うにせよ、もうとっくに成人して、大学生にもなっているお前は、いろいろな手配も含めて自分である程度はやっておくのが当然だぞ。」
「それはもう、かなり進んでいる。二人のご両親にも何度も話をして、１１月の連休のときに二人揃って、つまり三家合同の結婚式を挙げようと考え、式場も仮予約をしてある。勿論、経済的には父さんに全面的に頼りきってしまうことになるけど、手配やら準備やらは、今のところ問題ないよ。」
「そうか。なら全部任せておいて良いな。俺は請求書に支払うだけで本当に良いんだな。」
「夏頃になったら、全体の概算費用がわかるから、報告する。そもそも、それまでに三家での分担についても話し合わなきゃならないし・・・。」
「まあ、お前も芳恵に似て用意周到なほうだから、あまり心配はしていない。それより、二人と同時に結婚するとなると、どっちが第一妻になるんだ。」
「それなんだけど、二人と相談して、どっちかを第一とか第二とかは言わないつもりだ。法律上は同等であり、便宜的に先に結婚した方を戸籍の上で第一妻と称するだけだから、それもあって結婚式と結婚届の提出は同時にする。戸籍にどのように書かれるかは知らないけど、多分、五十音順になるのかもしれない。だとすると、青野美香が先になるのか、それとも結婚すれば二人とも杉田姓になるから、名前順で細川愛が先になるのかな。・・・まあ、どうしてもっ

て言うなら、童貞を捧げた美香にするけど・・・。」
「俺は一級になるために必死で、中学時代は恋愛など考えたこともなかった。そもそも俺は第二次性徴が出るのか遅くて、生殖機能点は絶望的だったし、運動能力点も決して高くはなかったから、学力点は満点をとらなきゃ一級になれないと思ってたんだ。」
「そんな俺が、何とかギリギリ一級に滑り込み、高校に進学してはじめて異性として意識したのが美香だった。彼女は心が優しく、常に自分のことより他人のことを第一に考え、他人が喜ぶのを見て自分も喜ぶという、丁度優稀のような性格だと気付いた。しかも、そのような他人ファーストの姿勢を取りながらも、ひょうひょうとして二級の上のほうをキープしてきたらしく、おそらく本気になれば一級にもなれただろうと思わせる頭の良さだった。」
「そんな美香に、俺は急速にのめり込んで行った。といっても、今考えると、あれは年上のお姉さんに甘える弟のような心境だったのかもしれない。なにせ高1の段階では、まだ俺は第二次性徴もろくに発現していなくて、美香にしてみればおねショタもいいところだったんだろう。・・・いや、俺は未だに、あいつの前では子供になってしまぅ・・・。」
「ともかく、そんな俺には男女のお付き合いの経験などひとつもなくて、もう成人しているのに、何とか休日に一緒に買い物したり、せいぜい映画を見たりするのが精一杯で、まるで中学生のようだったが、当時の俺は、彼女ができたと舞い上がって、いっぱしのデートのつもりだった。」
「それで、夏休みのある日、意を決して将来、自分と結婚して欲しいと、告白した。いきなりのプロポーズは、今思えば黒歴史も良いところで、多分美香も面食らったんじゃないかと思う。・・・でも、あいつは、それを真正面から受け止めてくれた。」
「その後は驚くべき展開だった。勿論、その場で返事など貰えなかったが、その代わり、あいつは、『いずれ結婚する意志があるなら、まず大人の男女の関係になって、もっとお互いをよく知り合いまし

ょう』と言ってくれて、その場でチュッとキスをされた。・・・唇を合わせるだけのバードキスで、勿論ファーストキスだったけど、それまでは、まだ手をつなぐこともなかった俺は、もう頭が爆発し、まったく思考停止状態のまま、手を引かれホテルに連れて行かれた。今思うと、あれは食べられるためハチの巣穴に引き込まれるチョウの幼虫のようだったな・・・。」

「部屋では、ねっとりした大人のキスをされて、俺は二度も暴発してしまった。そんな俺を、あいつはやさしく服を脱がせてくれて、そのまま風呂で全身を洗ってくれた。まるで親戚のお姉さんに風呂に入れて貰う小学一年生といった構図だった・・・。」

・・・もう僕は驚くばかりで、言葉もない。確かに兄さんも最初は失敗したと言っていたけど、あの兄さんがこんな・・・。でも父さんはこの話を知っていた。つまり兄さんは、こんなことまで父さんに何でも話しているに違いない。これが父親と息子の理想的な関係なんだろうか・・・。いや、それ以上に、今は僕と晶に対して、わざわざこの話をしているんだ。つまり、こういった話を、同性の家族とは隠すことなく話すようにということなんだろう・・・。翻(ひるがえ)って、僕はどうだったか・・・。勝美との関係など、母さんにも博美さんにも、何も伝えてはいない。勿論、環にもだ。ただひたすら、干渉が鬱陶(うっとう)しいものだと認識していた・・・。僕は随分、親不孝だったんだ・・・。でも、一昨日はお酒が入っていたからともかく、勝美と愛し合った様子とか、僕の性癖（もう僕がお尻でイクようになっちゃったことは完全に知られちゃったけど）とか、これからも明(あ)け透(す)けに話すなんて、僕にはハードルが高すぎるよ・・・。

「結局、その日は何もできず、俺の初体験は翌週末、もう一度ホテルに連れて行って貰い、そこで手取り足取り手ほどきされて、ようやく筆下ろしをして貰ったんだ。」

「美香に経験があったのかどうか、そんなのは童貞の俺にわかる筈もないし、今となってはもうどうでも良いことだ。今考えると、あいつもぎこちないところがあったような気もするが、俺も特に聞い

てはいない。でも、当時の俺の子供ちんちんを、しっかりセックスができる大人のペニスに鍛えてくれたのは、間違いなくあいつだ。俺は美香によって男にして貰ったんだ。・・・それから俺は、父さんにもアドバイスを貰いながら、美香とどのように愛し合えば良いかを、いつも考え実行してきた。」

「僕も美香お姉ちゃんみたいな人に教えて貰いたいな・・・。きっと学校の性教育より、ずっと楽しそうだ・・・。」

「そうだな・・・。性に関する知識だけならば、集団教育でも大丈夫だが、一人一人の性教育となると、個人の発育段階も違えば性格も違うから、やはりマンツーマンには敵わない。晶にもそんな相手が、いずれ現れると良いな。」

「細川愛については、大学に入って、同じクラスで一緒に勉強しているうちに、お互い何となく気になってきたというのが最初だ。実は美香と愛は同じ中学出身で、お互い昔から親しかったんだ。それで、俺が何となく愛に好意を持っているということを、二人で情報共有していたらしい。だから、本当に愛とは、いつのまにか、気がついたら付き合っていた、という状況で、しかも美香から、愛は良い子だから、と何度も推薦されて、三人で旅行に行くお膳立てをされてしまった。・・・ところが、いざ旅行に行くと、美香は一人で先に帰ってしまい、愛と二人だけで一夜を過ごすことになり、そのまま、愛とも将来を誓い合って今に至っている。」

「惚気るのはその位にしておけ。知っていても、聞いていると身体がむず痒くなるぞ。晶はまだよくわからないみたいだが、千博はもう茹で蛸になってしまってるじゃないか。・・・千博、よかったらサウナの前の水風呂にでも入るか？」

「水風呂に入らずとも、俺みたく岩に腰掛けて涼めば良いじゃないか。それともあれか？・・・またお湯から出られない状況になっちゃったのか？」

「そういうことは黙ってるのが武士の情けなんだぞ。見ろ。千博がまた涙目になってるじゃないか。弟に優しいお前にしては、さっき

から千博のことを弄りまくっているなんて、今日はいったいどうしちゃったんだ?・・・それより義朗、お前結婚までの準備は進んでいるとしても、どこに住むつもりだ?・・・我が家はそんなに広くないぞ。」

「うん、それは俺もちょっと困ってる。愛の家は、多少の余裕があるけど、いくら昔からの友人といっても、美香の肩身が狭くなっちゃいそうで・・・。」

「新婚のときは、他の人にあまり邪魔をされない環境が良いだろう。千博と勝美さんは、入婿ということもあって、やや特殊なケースだ。小さいところでよければ、アパート代程度は出してやるから近くにどこか探しなさい。そうして、夫婦の関係をしっかり築くことに専念するとよい。新婚のときの夫婦関係というのは、一生続くものだからな。・・・そして就職したら、一級男子は高給取りになることが約束されているから、是非自宅を建てなさい。男子たるもの、一国一城の主になって、はじめて周囲から認められるものだ。」

「じゃあ、そこまでは父さんに甘えさせて貰うことにするよ。・・・ありがとう。」

「お前は杉田家の跡取りなんだからな、何も遠慮することはない。」

「そんなことより、父さんからのお願いだ。・・・晶はまだ先の話になるが、義朗も千博も、一級男子となった。一級男子は複数の妻を娶って、なるべく沢山の子供を設ける社会的義務がある。俺は二人の妻と結婚し、子供は5名だった。でも優秀な一級男子になったからには、本当はもっと沢山の子供を設けるべきだったのかもしれない。一級男子は経済的にも恵まれた人生を送れるようになるので、側室を持つのも悪くない。ただ、それは人それぞれの考え方もあるだろう。・・・義朗も千博も、そしていずれは晶も、俺以上に沢山の子供をつくって、孫に囲まれる夢を見させて欲しい。」

「僕は、婿という立場もあるんで、第二妻を貰うつもりはないし、まして側室なんて考えたこともない。でも、子供は必ず5名以上にするよ。これは勝美の希望でもあるんだ。というか、勝美の体力が

持つ限り、もう燃え尽きて煙も出なくなるまで頑張るつもりだ。」
「頼もしいな。・・・俺も美香と愛の二人を相手に、負けないように頑張るが、お前もペニスがすり切れるまで頑張れ！」

ーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

（女子チームの様子）

母さんと芳恵さん、それに環を伴って、温泉大浴場に向かった。あたしはもう交換初夜の前日に、母さんと芳恵さんの二人掛かりで風呂に入れられて、全身を磨き上げられちゃったし、それどころか、あそこのムダ毛を処理するって名目で、あそこをクパァされちゃって、奥の奥まで全部ばっちりチェックされちゃってるから、今更裸になっても恥ずかしさはないけど、環は思春期に差しかかったところでしょ。一緒に入ることが恥ずかしくはないのかしら・・・。
「わあ！・・・ガラガラだ。良いときに来たわね！」
「平日だからね。うちのお風呂も、もう少し広いと、二人で入るのも楽なんだけどね・・・。」
環と母さんの会話から、どうやら母さんと環は、今でもときどき一緒に風呂に入ることがあるみたい。だからかしら、まったく自然体で、何の躊躇（ちゅうちょ）もなく普通に脱いで、隠すことなく浴室に歩いていったわ。あたしも急いで服を脱ぐと、三人の後を追った。
環は顔だけ見てると、まだあどけない小学生そのものなんだけど、身体はもうすっかり大人になっていた。胸は特に大きいわけじゃないけど、でもこれでもう完成ですと言われても違和感がない、形の良いおっぱいで、ざっと見てBカップ程度かしら。小5でこれなら、まだもう少し大きくなるでしょう。乳首がつんと上を向いていて、胸からお臍、そして腰廻りというかお尻に至るまで、見事なプロポーションに驚いたわ。あそこはもじゃもじゃで、もうすっかり大人の身体として完成しているんじゃないかしら。脇は・・・、微かにポツポツが見えるってことは、きちんとムダ毛の処理をしているっ

てことよね？
「優稀お姉ちゃん、おっぱい大きくて羨ましいな。・・・あたし、まだこんなちっぱいで、もうちょっと大きいと良いんだけど。お母さんは大きいから、もう少し大きくなるよね？」
「勿論よ。環はまだ小5じゃない。まだまだこれからよ。」
芳恵さんが励ました。でも母さんは黙っている。その理由もあたしにはわかる。だって母さんのおっぱいもあたしと同じで移植されたものだから・・・。
「あたしのおっぱいが大きいのは、身体が小さいのに、身体の大きい怜央のおっぱいを移植されたんで、それで前に飛び出しちゃったのよ。はっきり言って、ちょっと持て余し気味なんだけど・・・。」
「でも、男の子は大きなおっぱいに憧れるんでしょ？・・・あたしもボーイフレンドが欲しいのに、クラスの男の子は誰も振り向いてくれないの。きっとあたしがちっぱいなんで、振り向いてくれないんだわ。おっぱいが大きければ、もう少し注目されるんじゃないかしら。」
「それはおっぱいの大きさじゃないわ。・・・環、まだ小5になるところでしょう？・・・あたし男の子だった頃の記憶は、かなり薄れてきているけど、多分、その年齢だと、男の子と女の子には、発育というか第二次性徴の発達に、かなりの差が出るものなのよ。一例だけど、環はもう身体の発毛は完成しているみたいだし、初潮も済んでるわよね。でも、環の同級生の男の子だと、まだ本当に子供で、つるつるの子供ちんちんだし、毛が生え揃っている子なんてクラスに何人居るのかしら？」
「それに、肝心の精通が済んでいる子は、多分、クラスでもせいぜい二人か三人じゃないかしら。・・・勿論、お付き合いを始めるのに精通が必須ということはないし、セックスに至らない恋愛というのもあるけど、普通、男女の恋愛感情は、双方がお互いを異性として意識して、この相手とひとつになりたいと感じる・・・。それで

はじめて成立するものなのよ。」
「そうね。環の年齢の男の子だと、多分、友達としての好き嫌いはあっても、男女の関係としての好きとか愛してるといった感情は、まだ出ていないんじゃないかしら。バレンタインデーにチョコを渡したとか、ホワイトデーにお返しを貰ったとか、あるいはキスをした、というような話は聞くけど、結局おままごとの域を出ていないことが多いのよ。小学生時代のお父さんは、まだ本当に子供で、あたしと一緒に遊んでいたことも多かったけど、サッカーとかゲームとかばかりだったわ。それでデートに誘っても、ゲーセンとかであたしをほっぽり出して、自分一人でゲームに没頭しちゃっていたわね。・・・だから男女の関係と言うには程遠い、普通の小学生のクラスメイトで、仲の良い友達という以上の関係には、ついにならなかった気がするの。」
「まあ、要するに小学生のときのお父さんは、本当にまだお子ちゃまで、恋愛なんて頭のどこにもなかったと断言できる。・・・だから、環も、もう少し長い眼で見て、待つしかないんでしょうね。・・・大丈夫。あと1年か2年位したら、逆に男子の頭の中は女の子のこと、性のことで一杯になるわよ。中学生の男の子なんて、毎日、セックスのことしか考えられなくなっちゃうんだから。きっとうんざりする程、沢山の男の子が群がって来るわよ。」

さすが芳恵さんは辛辣（しんらつ）ね。事実だとしても、恋を夢見る環に、これだけ身（み）も蓋（ふた）もないアドバイスをするなんて、どんなものなのかしら・・・。でも、母さんも笑ってる。あたしもそうだけど、元男子としては、あまりにも適切な真実を暴露（ばくろ）されちゃって、笑うしかないわよね。

第９１話　芳恵さんの想い（前書き）

少し時間が空いてしまい、申し訳ありませんでした。

第９１話　芳恵さんの想い

「良い温泉だわね。・・・お父さん、本当に良い旅館を取ってくれたわ。」
「本当。・・・家族全員で旅行なんて、何年ぶりかしら。」
「千博は男子になっちゃったけど、代わりに優稀が女子チームに入ってくれたんで、寂しくはないわ。・・・優稀がこんなに理想的な娘になるなんて、あたし、思ってもみなかったわ。」
「そうね、優稀はやっぱり、女の子になる運命だったのよ。そういう星の下に生まれ育ったんじゃないかしら？・・・お父さんと名前を決めるとき、もっと男の子らしい名前か、せめて漢字を変えたらどうかって言われたんだけど、何となく閃(ひらめ)いたんで、これしかないって言い張ったのよね。」
「そうかもしれないわ。あたし、今では女の子になって、本当に良かったと思っているし、自分のことを不幸だなんて、ちっとも思っていないわ。・・・この名前もぴったりだし。」
「ふふっ。・・・赤いカードを貰った日に、あれだけ大泣きして憔悴(しょうすい)していたのが夢みたいね。・・・でも、今だから笑い話だけど、あのときはなんて声をかけて良いか、本当は見ていられなくて悩んだのよ。それなのに、あたしったら、あんなに酷(ひど)いことを言っちゃって、ごめんなさいね。」
「心配かけてすみません。今では本当に笑い話ですから、気にしないで下さい。」
「優稀は本当に優しくて素晴しい性格ね。こんなに素敵な娘ができたなんて、千博がいなくなっちゃったのを補(おぎな)って余りあるわ。」
「ありがとうございます。」
「・・・今だから言うけど、実はあたしが博美さんやあなたに意地悪しちゃったのは、自分の子育てが煮詰まっちゃったからなの。そ

れは自分でもわかっていたんだけど、上手くいかないイライラが高じて、つい博美さんに八つ当たりしちゃってたのよ。今更、謝っても許して貰えるものじゃないけど、仲直りして貰えるかしら・・・。」

「あたしはわかっていましたから、どうぞ気にしないで下さい。むしろ芳恵さんが千博に冷たくされて涙しているのに、何も手助けできず、すみませんでした。」

「ありがとう。博美さんが心の広い人で、本当に良かった。・・・優稀の性格は、博美さん譲りね。お父さんが博美さんに惚(ほ)れる訳だわ。・・・あたし、階級なんて全然気にしないけど、お父さんが第二妻として博美さんと結婚するって言ったとき、博美さんの美しさ、女らしさに嫉妬(しっと)していたの。だから、結婚してからも、何かと博美さんと張り合っていた。でも、容姿とか能力とかは、競争してもそんなの個性の違いが殆どじゃない。だから、勝敗はそもそもあまり意味がないって思っていて、あたし的にはちょっとした刺激とか、人生の娯楽のようなつもりだった。・・・多分、博美さんも、そこはわかってくれていたわよね。」

「ええ、あたしも結構楽しませて貰いました。芳恵さんが次は何を言ってくるかって・・・。」

「それが、子供が生まれて、特に千博と優稀は殆ど同時に生まれて、まるで双子のように育ったじゃない。それで、あたしはもう義朗を育てたっていうアドバンテージもあるんで、これは絶対に負けられないって、変に力んじゃったのよね。」

「それもわかりました。でも、あたしは子育てに力を入れるような余裕も考えもなくって、優稀はまったく放任に近い育て方でしたし、それに優稀の能力では、千博には到底及ばないと思ったんで、そもそも勝負するようなつもりはありませんでしたし、お父さんも成績など気にしていませんでしたから、二人を比較するような話にはならないと思っていました。」

「確かに勉強とか体力や運動能力なら、千博のほうが上かもしれな

いわ。でも、あたしは優稀のほうが千博より、ずっと優秀で優れていると、ずっと思っていたわ。・・・常に他人を思いやり、人が喜ぶのを見て自分の幸せに感じるところや、他人のために何かできることはないかと、いつも気を遣っているところ、こういう性格は、何よりも優れた、人間としての一番大切な能力、いえ、これこそが才能なのよ。あなたの教育よろしく、義朗も千博も、普通の子供よりはずっと優しくて他人に思いやりができる子に育ったけど、優稀のように天然で持つ性格には、いつもいつも羨(うらや)ましかったの。」

「義朗は、さすがに年上で、しかも頭の良い子だったから、そういった事情は中学になる頃には察していたみたいだけど、義朗のときはとにかく一級にしなければ、杉田家の嫡男を恥ずかしくないように育てるんだっていう気負いがあって、さらにお父さんの期待もあったんで、あたしはほとんど自分の意見を言うことができず、とにかく必死で成績を上げることに邁進(まいしん)するしかなかった。」

「それで義朗には厳しいことばかり言っちゃったし、あたし自身も寂しい思いをしていたんで、千博については、女の子だったこともあって、あたしの好きなように、いろいろと子育てをしたいと思ったの。あたしにも理想の親子関係というか、ある種の憧(あこが)れがあったわ。・・・それなのに、中学に入る頃から、あの子ったら、あたしが世話を焼くことを嫌うようになってきたの。」

「・・・・・。」

「あたしも不器用だったんで、一度そうなっちゃうと、何かやればやるほど、悪い方向に向かっちゃうのよね。千博はどんどんあたしから離れていって、あたしの干渉を嫌うようになっていった。・・・寂しくて、悲しかったわ・・・。」

　それはあたしも感じていた。芳恵さんが千博のために、よかれと思ってやることを、千博はとにかく自分に対する干渉だと反発していた。自分は母さんの人形じゃない、母さんの敷いたレールの上を走るのは御免だって、よくあたしにも話していた・・・。でも、あたし自身が芳恵さんに娘として接するようになったら、千博が言う

ほどには、過干渉で自分の考えを押しつけてくるようなところはないような気がしていた。・・・勿論、まだあたしに対する遠慮とかあるし、実の娘と義理の娘では、態度も違うのかもしれないけど、芳恵さんなりに、あたしにいろいろなことを教えたい、あたしが立派な大人として振る舞えるように、手助けしてあげたいっていう気遣いが見えるのよね。多分、芳恵さんが不器用なだけじゃなくって、千博もまた不器用で、さらに思春期に入って親が鬱陶しくなる時期と重なっちゃったんで、悪い循環に陥っちゃっただけじゃないかしら・・・。

「あたしには、あなたたち親子の関係が羨ましかった。自分はこんなに必死になっているのに、どんどん子供が離れて行ってしまう・・・。でもあなたたちは、自然体で放任主義のように見えるのに、幸せそうで理想的な親子の関係を築いている。」

「だから、あなたたちのことが妬ましくて、いやなことを言ったり、いろいろと意地悪しちゃってたの。・・・そんなの、八つ当たりだってわかってたけど、自分はこんなに苦労しているのに報われなくて、不公平だって考えちゃうのよ。それで、どうしても止まらなかった。」

「そんなこと、本当に気になさらないで下さい。私は事情が見えてましたし、優稀も特に気にしてはいないですよ。」

「特に優稀が赤いカードを貰った日、ショックで落ち込んでいて、それどころか恐怖で震えながらべそかいているのに、あたしったら、千博がとうとう男の子になっちゃった、あたしの手から逃げていっちゃったって、それが悔しくてね・・・。それに対して、博美は優稀が女の子になって、どうしてこんなに不公平なんだろうって、妬んじゃったの。」

「それで、優稀にはあんな厭味を言っちゃって、・・・あれ、自分でも、言ってからしまったって思ったんだけど、それを千博が窘めてくれた。それで我に返って、その夜は随分悩んだのよ。特に、あの晩、優稀の部屋に博美さんが行って少しすると、あなた号泣して

いたでしょう？・・・もう、本当に何て謝ったら良いのか、しばらく呆然としていたのよ。」

「ご心配おかけしました。あのときは母さんが寄り添って励ましてくれたんで、随分心が落ち着いたんです。」

「そうね。翌朝、あなたの様子を見て、ホッとしたのよ。・・・良く聞く話だけど、部屋から出てこれなかったり、泣き叫んだりする子を学校に送っていくのは、あたしの責任かしらって、心配で仕方がなかったの。・・・本当に、博美さんにも優稀にも、意地悪ばかりしてきて、嫌な思いをさせてごめんなさい。」

　そう言うと、あのプライド高い芳恵さんが、母さんとあたしに深々と頭を下げた。

「わざわざありがとうございます。私は前から、ちっとも気にしていませんでしたから、どうか頭を上げて下さい。」

　これって、芳恵さんが母さんやあたしを一方的に敵視してきたのが、もう完全になくなったっていうことなのかしら。だとしたら、素晴しいことだわ。今回の温泉旅行、もともとは千博の里帰りの一環で、父さんが「嫁ぐ娘（息子？）との思い出づくり」のために無理やりセットしたのが発端だったけど、本当に思わぬ効果というか想像もしていなかった成果が飛び出してきたわ。

　これ、絶対に千博に話しとく必要があるわよね。今の話を聞く限り、芳恵さんのひとり相撲という部分はあるにせよ、千博が芳恵さんの気持ちをちっとも考えずに、芳恵さんの言葉を干渉としか考えなかったのが、すべての発端なんじゃないかしら。千博も変に意固地で頑(かたく)ななところがあるんで、芳恵さんと衝突しちゃったのね・・・。まあ、ちょっと厭味(いやみ)を言われても、母さんはわかっていたようだし、あたしも別に苛(いじ)められたという感覚はないから、全然構わないんだけど、むしろ芳恵さんと千博の関係は心配だわよね・・・。

　でも、良かった。こんなに有意義な旅行になるなんて、思ってもいなかったわ。本当にいろいろなことが、次々と明らかになって解決するみたい。

「それなら、せめてもの罪滅ぼしに、５回分の権利をお譲りするわ。そんな程度で申し訳ないんだけど、これで許して貰えるかしら？」
「わかりました。では、それですべて水に流すことに致しましょう。(笑)」
「？？？・・・？？？」
　不思議議な会話に、あたしと環が頭の上に巨大な？を出現させていると、芳恵さんがあたしたちに向かって話しだした。
「ふふっ。なんだかわからない顔してるわね。・・・これは、昔から博美さんとあたしで、何か貸し借りとか、お礼とか、そういうことが発生したときに、お互いの間でやりとりしてきたんだけど、要するにお父さんと愛し合う権利を譲ったり貰ったりすることなの。」
「あっ、あのっ、そっ、それっ！・・・子供達の前ではっ！！」
「あら、良いじゃない。・・・もう優稀は大人なんだし、環だってそろそろこういうことを知っても良い年頃よ。・・・第一、家族なんだからさ。・・・お父さんは、もう義朗には、話したって前に言っていたわ。優稀には、成人したら話そうとしていたみたいだったけど、女子になっちゃったんだから、あたしたちが話してあげるべきじゃない？」
「・・・そうですね。・・・子供に話すのは、かなり恥ずかしいですが、わかりました。・・・どうぞ、続けて下さい。」
「つまりね、簡単に言っちゃうと、第一妻と第二妻は、同等に愛さなければならないっていう法律になってるんで、博美さんが結婚したとき、あたしたちとお父さんが相談してね、愛し合うのは必ず交代でっ、ていう取り決めにしたの。勿論、どうしても都合でどっちかが連続することもあるけど、全体としては等しい回数になるように調整しているのよ。」
「それで、お父さんは今でも毎週、必ず二人のことを愛してくれているんだけど、それを基本的には交互になるようにって決めているの。」

・・・知らなかった。二人の間で、そんなことになっていたなんて。・・・しかも、毎週愛し合っている？！・・・そんな素振りは、見たこともないけど、いったいいつ、やっていたのかしら。あたしだって中学に入ったら、自分の部屋で勉強していたり、本を読んでいたりと徹夜することだってあったし、我が家の防音性はそんなに高くないような気もするんだけど・・・。

「それでね、本来ならば交代なんだけど、お互いに何かの貸し借りができたり、何かのお礼をするような場面で、それならこれは、権利を1回分譲ることで手を打とうとか、これは3回分だとか、そういう話になったのよ。これは博美さんが結婚したのが、高校3年のときで、まだお父さんも大学生だったし、あたしもそうだったんで、皆、自分の自由になるお金なんて、僅かのお小遣いしか持っていなくて、何かをお礼にするとか、貸し借りを清算するのに、先立つものが何もなかったのよね。それで、当時、二人にとって一番大事なことで、金銭には変え難い価値のあるものとして、お父さんと愛し合う権利を、本来ならば交代で均等になるべきところ、お互いに譲り合うという習慣ができて、それが２０年近くたった今も続いているということなの。」

そんな話になっていたのね。確かに学生同士のノリでセックスの権利をやり取りするというのは、わからないでもないけど、あの父さんがねぇ？・・・それに芳恵さんだって、そういったおふざけは嫌いだと思っていたけど、よくこんな話に乗ったわよね。母さんだって、おしとやかな性格かと思っていたけど、やっぱり男女の仲って、他人からは絶対にわからないものなのね・・・。

「わかってるでしょうけど、ここでの話は、男子チームにはナイショよ。特にお父さんには、絶対に秘密にしておいてね。こんな話、ピロートークで直接お父さんに話すならともかく、子供から聞かされたりしたら、さすがのお父さんでも恥ずかしくて死にたくなっちゃうかもしれないからね。特に優稀は、まだ男の子の心が残っていたりすると、つい気安さでお父さんにポロッと話したりしないよう

に気をつけてね。」

第９２話　家族の想い（前書き）

大変お待たせしてしまいました。もう忘れられてしまったのではないかと心配です。
活動報告に、最近の様子を記載しましたので、そちらも是非ご確認下さい。

第９２話　家族の想い

母さんと芳恵さんがすっかり打ち解けて、いろいろな話題を次から次へと話している。これまであまり話をしてこなかったのを埋めるためか、話があちこちに飛ぶけど、二人して本当に楽しそうに語り合っているわ。特に、さっきの父さんとの馴れ初めや、父さんのどこが気に入ったか、どこを好きになったのか、という話題では、物凄く盛り上がっていた。あんまり長いんで、あたしも環も、すっかりのぼせてしまい、湯から出て涼んでいた位だから。

でも、本当に良かった。多くの一級男子が二人の妻を持っているけど、二人の妻の仲が良いという家庭は、めったにないって聞くわ。これまでの我が家程度でも、妻同士の関係は良いほうだって前に父さんが話していた位だから、他の一級家庭では、よほどギスギスした対立関係になっているケースが多いんでしょうね。

まあ、一夫多妻なんて、そんなに上手く行く筈もないわよね。もともと、戦争で男性がみんな戦死してしまい、女性ばかり増えてしまったために救済措置として考え出されたってことらしいから、いわば窮余の策だったのよね。人間の感性として、どうしても嫉妬（しっと）とか贔屓（ひいき）は出ちゃうし、どろどろした人間関係を解決する手段なんて、何千年たっても見つかるものじゃあないってことなのかしら。

いずれにせよ、あたしにとってみれば、まだまだ新米女子なんだから、二人の母さんから、女性としての立ち居振る舞いとか主婦としての技術やノウハウ、それに女性としての生き方とか女の幸せについて、短期間で教えて貰える理想的な環境が整ったと考えましょう。だって、まだ当分先かとも思っていたけど、周囲でこれだけくっつくカップルを見ていると、あたしもなるべく早く怜央と結婚したくなっちゃったから、実はあまり時間がないのかもしれないし・・・。うふっ、でも、そのためには、まずは怜央との関係を磐石なも

のにしなきゃね。もうすぐ始まる高校生活の大きな目標ができたわ・・・。それには、怜央のご両親に挨拶をする必要があるから、怜央に頼んで、ご両親がいるときに、さりげなく遊びに行こうっと。名目は、いよいよ女子として中学生活を迎える真央ちゃんの様子を見てあげるってことにしようかな・・・。

ようやく母さんと芳恵さんが湯から出てきたわ。それで、全員で洗い場のほうに移動して、身体を洗うことにした。女性は風呂でグルーミングをして、お肌の手入れとか髪の手入れをしっかりするものらしいから、それもいろいろと教えて貰わなきゃ。家のお風呂では一人ずつしか入れないから、こういったチャンスを活用しないとね。

母さん達とおしゃべりをしながら、皆で身体を洗っているんだけど、さっきから母さんや芳恵さん、それに環さえも、あたしの身体(特に股間?)にチラチラと視線を送ってくるのに気がついた。

母さんと芳恵さんは、あたしがそっちに視線を向けると、さりげなく眼を逸(そ)らして、あたしのほうを見ていたなんて素振りは全然見せないんだけど、環はまだそういう技術がないのか、あたしのあそこをガン見しているわ。それで、あたしが環のことを見返したら、あたしと眼が会っちゃったんだけど、そこが性格というか、いきなりストレートな質問をされた。

「ねえ、優稀お姉ちゃん。女の子になって、初体験のときって、どんな感じだった?・・・やっぱり痛かった?・・・というか、そもそも、女の子の快感と男の子の快感って、どう違うの?・・・優稀お姉ちゃんは男の子のとき、セックスの経験はないにしても、男の子なんだからオナニーはいつもしていたわよね?」

「あたしの場合は、怜央が上手だった所為(せい)か、まったく痛みはなかったわ。というか、最初から、気絶する位の快感があったわよ。でも、性的快感って、男の子と女の子でかなり違うんで、経験したこ

とのない人に説明するのは難しいわ。・・・そうね、身体的な快感に限れば、どっちも同じくらい気持ち良いんじゃないかしら・・・。よく、女の快感は男の快感より上だなんて言われているけど、それは本当に素晴しい快感を経験したことがないからだと思うわ。男女どちらであっても、パートナーとの間で最高の快感を得ることができたなら、という前提だけど、どっちも簡単に気絶しちゃう位気持ちが良いのは確かで、要するに人間の耐えられる限界を超えちゃうんだから、まあ一緒よ。」

「ふーん。そうなんだ。優稀お姉ちゃんは、どっちの快感でも気絶しちゃうほど良かったの？・・・あたし、性教育の時間にオナニーを習ってさ、自分で練習してみなさいって言われてやってみたんだけど、まだ慣れていないせいか、ちっとも気持ちよくならなかったの。他の女の子も、皆、似たような状況で、快感って、いったい何の話って言う雰囲気だったわ。」

「最初はそんなものかもしれないわね。特に女の子は、快感を感じるようになるまで、多少の慣れというか練習が必要なのよ。」

「でも、同級生の男の子は、先生にオナニーをしてみるように言われたとき、まだ精通していない子は女子と一緒で、ちっとも快感を感じていなかったみたいだけど、もう精通している子は皆、簡単に射精して、そのときは全員が全員、大声で喘いだり、身体をビクッビクッと痙攣させたりして、なんだか凄く気持ちよさそうだったわ。・・・まあ、意識が飛んじゃう子はいなかったみたいだけど・・・。それだけじゃなくって、この最初のオナニーの授業で先生に言われるまま、お手本ビデオを真似したら、はじめて精通したっていう子も何名か居たんだけど、その子たちも、いきなりの快感でビックリしていたのよ。これってどういうことなの？」

「それはね、身体的な快感に限れば、女の子はまず慣れないと、ちょっとくすぐったいだけで、あまり気持ちよくならないのよ。それがつまり慣れが必要っていう部分ね。・・・でも、男の子は、射精すると、精液が精嚢から前立腺、そして尿道を通って噴出されると

きに、必ず強い快感を感じるものなの。これは慣れとは無関係に、身体の機能としてそのようにできているんで、誰でも最初から強い快感があるの。生物的にどういう理由があるのかは知らないけど、あたしも男の子として最初の精通のとき、快感で腰が痺れるようだったわ。」

「でもね、そういった身体的快感というのは、実は本当の性的快感の半分程度なのよ。」

「性的快感のうち、もう半分は、精神的な満足感というか、心の快感があるの。これは男女ともにあるものなんだけど、どちらかというと女子のほうが、この精神的な心の快感の比率が大きいんだと思うわ。」

「？？」

「まだよくわからないかしら？・・・女子は誰でも、妊娠して、子供を産むことが最高の幸せに感じるように身体の構造や脳神経の構造ができているものなのよ。・・・勿論、相手が誰でも良いということではないと思うんだけど、でも、よほど嫌いな相手じゃない限り、おちんちんを挿(い)れられて、身体の一番奥深くに射精されると、『あっ、種付けされたんだ、この相手の子供を妊娠して産むんだ！』って、そう思わされることが、女性としての本能的な幸せというのかしら、精神的な満足、つまりこれで自分という女性がこの世に産まれて、生きてきた目的を達成することができた、一人の女性として、自分の次の代に生命の輪をつなぐことができたっていう、そういう心の快感に浸(ひた)れるものなの。」

「ふーん・・・。まだあたしにはよくわからないけど、そういうものなのかな？・・・で、男子の場合はどうなの？」

「男子の場合はね、やっぱり女子と一緒で、自分の子孫を残すという生物の本能に基づく満足感っていうか、達成感なのかしらね。つまり、ようやくこれで、自分の子供を産んでくれる女性を手に入れた、自分の子供を種付けすることができたっていう感情が、精神的な快感につながるのよ。これは多分、これでやっと、自分の遺伝子

を次代に残すことができる、自分の遺伝子を受け継いだ次代が産まれるっていうのが確実になったことで、要するに自分の家族を得ることができたっていう精神的達成感なんだと思うわ。これはコインの裏表のようなものだから、基本的には同一の感情なんだと思うけど、やっぱりそこには感じ方の差というか、快感に対する慣れみたいなものがあるんじゃないかしら。といっても、あたしもそこまで理詰めで検討した訳じゃないけど・・・。そうね・・・、男子は、どちらかというと身体的な快感のほうが少し勝っていて、女子は精神的な快感のほうが少し勝っているのかもしれないわ。」

「凄い！！・・・手術から、たった三カ月で、優稀がそこまで精神的に完全な女性になれるとは、思ってもみなかったわ。本当に良かった。・・・あたしは女性になってからも、暫(しばら)くそんな気持ちにはなれなくって、意識を切り換えられるまで二年近くかかったわ。いや、そもそも父さんと知り合わなければ、きっと女性の幸せを知ることもできなかったでしょうね。」

「えっ？・・・博美さん・・・、それ、どういうこと？」

「あっ！・・・そっ、そのっ・・・。大した事じゃないから、気にしないで下さい。」

「あたしもよくわからなかった。お母さんの言い方だと、まるでお母さんは昔、女性じゃなかったように聞こえるんだけど？」

「いっ、いやっ、あっ、あのっ。・・・ほら、お母さんも、そのっ、お父さんがはじめての男性でっ、そのっ、お父さんによって女性にして貰ったからっ、それでっ・・・。」

「お父さんに膣内射精(なかだし)されて、種付けされたんで、それで女性としての快感というか、女性としての幸せに目覚めたって言うわけね。その感覚、よくわかるわ・・・。あたしも、お父さんとは小さいときからの幼馴染みで、もう空気みたいな存在だと思っていたけど、それでも最初に肌を重ねたときは、やっぱり感動したものよ。」

「そうよ。あたしも怜央、あ、さっきから怜央って呼んでるけど、あたしの性別交換相手だった榊君のことね。・・・彼との交換初夜

で、彼に自分のものだったおちんちんを挿(い)れられて、それで女の子にして貰ったって思ったんだけど、そのすぐ後に身体の一番奥深くに膣内射精(なかだし)されて、そのあまりの精神的な快感というのかしら、幸福感で、それで心の底から本当の女の子にされちゃったのよ。」

「よく、女の子は最初の男性が忘れられないとか、処女を捧げた相手に尽くすなんて言われるけど、実際、その言葉は体験してみて、思い知らされた気がするわ。」

「ふーん？・・でも、何かちょっと引っかかるのよね。・・だって、お母さんの話、時系列が変じゃない？・・・お父さんに女にして貰ったって言いながら、暫(しばら)くはそんな気にならなかったって、矛盾しているわよね？」

「それに、意識を切り換えるって、何のこと？・・・お父さんとの初体験から2年かかったってことなの？・・・でも、それも変だわよね？」

「そう言われると、確かに不思議ね。・・・博美さん、いったい、何から数えて2年なの？」

「あっ、あのっ、・・・それはっ、そのっ・・・。」

「母さん、あたしが泣いていたとき、話してくれたじゃない。ほら、中学のとき、女の子として辛いことがあって、・・・それが何かは言いたがらなかったわよね・・・。でも、それで女の子は好きじゃなかったって、ずっと思っていたけど、やがて女の子にも男の子と同じ程度の楽しさや面白さがあるって、父さんと出会って気付いたって、そう言って励ましてくれたの、よく覚えているわ。あれで私、随分心が救われたのよ。」

「そっ、そうなの。・・・あたしはずっと、中学の頃、女の子だと、男の子に比べて何だか不利に感じていて、この世は所詮、男性中心の社会なんだって、そう考えていたんだけど、それがお父さんと出会って、人生の喜び、女性としての幸せを教えて貰ってから、人生観が変わったのよ。」

「確か母さんと付き合うようになったのは高1か高2の頃

だったわよね。そのときは父さんと芳恵さんは高3から大学に入った頃でしょう？・・・あたしは怜央に女の子にして貰って、それで直ぐに女の子の幸せを身体の奥深くで感じさせられたんだけど、お母さんも要するに高2のときにお父さんに女の子にして貰って、というかお父さんに膣内射精（なかだし）して貰って、それで意識が切り替わったってことじゃないの。」

「何かいろいろ複雑なのね。やっぱり男女の仲は、あたしにはまだ難しいかな・・・。」

「環もこれからいろいろと学んでいけば良いのよ。博美さんに聞くのも良いけど、優稀に聞くのが一番良さそうね。・・・優稀、あなたはまだ女の子になって日が浅いけど、千博なんかよりずっと女の子しているから大丈夫でしょ。妹にいろいろと教えてあげてね。それがお姉さんの役割なのよ。」

「わかった。そうする。・・・優稀お姉ちゃん、これから女の子の快感とか幸せとか、いろいろ教えてね。」

「勿論よ。でも、あたしもそんなに沢山の経験をしている訳じゃないし、第一まだ女の子になって3カ月なのよ。あたしこそ、環にいろいろと教えて欲しいところだわ。」

　よかった・・・。何とか誤魔化せたわ。優稀のことに気を取られて、思わず失言しちゃったけど、優稀がうまく誤魔化してくれた・・・。しかも、自分の初体験のことを、あそこまで明け透けに発言して、きっと恥ずかしかったんじゃないかしら。でも、あたしのために、自分の恥ずかしさを我慢して、必死であたしを庇（かば）って頑張ってくれた。・・・やっぱり、皆が褒（ほ）めるとおり、優稀は本当に他人に対する思いやりに溢（あふ）れているわね。本当に良い子に育ってくれた。これなら女性として、いや、一人の人間として、必ず幸せな人生に恵まれるに違いないわ。

第92話　家族の想い（後書き）

活動報告に記載のとおり、ちょっと事情により更新間隔が開いてしまうと思いますが、何とかぽつぽつとでも更新していくつもりですので（できたら1カ月に1本程度：少なくとも2カ月に1本程度）、どうか見捨てないで頂ければ幸いです。

第９３話　アナニー開眼

「・・・それで、芳恵とは、小さいときからの幼馴染みだったから、いつもお互いの家を行き来したりして遊んでいて、異性として意識したりしたことはなかったんだ。最初に肌を重ねることになったときも、お互いに初体験という意識よりは、子供の頃からのじゃれ合い、ふざけ合いという流れで、まるでお医者さんごっこをしているような雰囲気のうちに、何となく処女と童貞じゃなくなっちゃっていて・・・。」

父さんが母さんや博美さんとの馴れ初め（なそ）をまだ話し続けている。温泉に入っているときから、ずっと話が続いているんだけど、全員で部屋に戻ってからは、父さんの独壇場だ。さすがに兄さんも呆れているし、晶はもう飽きてるんじゃないかな。

確かに僕は聞いたことがない話ばかりで、きっと晶にとってもはじめての内容だろうけど、自分の親の初体験の話なんて、普通は聞かないものじゃないのかな・・・。でも、父さんも兄さんも、これは子供に伝えておかなければならない、家族の大事な歴史だと言わんばかりに力が入っている。あまつさえ、僕に対しても、勝美との関係を、いつか自分の子供たちにしっかり伝えるようにと、何度も念を押してくる。恥ずかしくていたたまれないから、そんなのもう忘れちゃった、と言ったら、一昨日、酔っていたのに細かいところまで、すっかり話していたじゃないか、あれで良いんだ、なんだったらもう一度、思い出させてやろうか、と言われてしまった。

勿論、勝美と僕との関係は、絶対に忘れられない体験で、性転換する前の恋人時代だった頃のことや初キッス、それに城址公園での出来事、その後のオーラルセックスから手術そして交換初夜まで、どれひとつとして、歳をとっても鮮明に覚えているだろうとは思うけど、それを子供に殊更（ことさら）話して聞かせる必要って、本当にあるのか

なぁ。僕と勝美がおじいちゃんとおばあちゃんになる頃には、そんなに恥ずかしがらずに話せるようになるのかもしれないけど、だからといって、何も子供に明け透けに話すような内容じゃない気がするんだよね・・・。僕の感覚が間違っているんだろうか・・・。

まだ新米男子の僕には、どうもよくわからない。でも、兄さんも父さんと同じ意見らしくて、美香さんと愛さんとの初体験から、その後のセックスの様子まで、温泉で詳しく話してくれた。それを聴いていただけで、僕なんか恥ずかしくて、いたたまれない気持ちになっちゃったけど、晶は眼を輝かせて食い入るように聴いていた・・・。しかも、この話、父さんはもう詳しく知っているらしい。ということは、父さんと義朗兄さんは、お互いの性生活について、すっかり話し合っているに違いない。家族って、こういうことを全部話し合うものなのかなぁ？・・・信じたくないけど、やっぱり僕が世間知らずで常識がなかったってことなの？・・・それとも、これが男女の差ということなんだろうか？？

「じゃ、そろそろ父さんの話も終わったみたいだから、いよいよ千博のオナニータイムにするか。晶も待ちかねてるだろうし、千博もすっかり復活したみたいだしな。なんだったら俺も手伝ってやるよ。」

「えっ！・・・やっ、やだよっ、そんなの、絶対にっ！！・・・それに、そんなに何度も連続して射精するのは無理っ！」

「何言ってるんだ。お前の年齢なら、毎日二度三度は普通だぞ。もう三日もご無沙汰だったんだろう？・・・さっき1回抜いた位じゃ、収まる筈ないじゃないか。・・・それに、そんなに見事なテントを立てていて、説得力なんてまったくないぜ（笑）」

まっ、拙いっ。・・・浴衣じゃ、あそこの状態が丸わかりだ。・・・さっきから、父さんと母さんの性生活とか、さんざん聞かされて、いつの間にかすっかり元気になっちゃってたみたいだ。それに兄さんが言うとおり、このところずっと、勝美に毎日二回は奉仕して貰

っていたっけ。それが三日もないとすると、本当に五回か六回は射精しないと収まらないんだろうか？
「ねえ、千博兄ちゃん、早く射精するとこ見せてよ。僕はまだ射精できないけど、僕が射精できるようになったら千博兄ちゃんにも見て貰うからさ。・・・だからお願い、早く千博兄ちゃんが気持ちよくなるとこ見せて？」
「うむ、それに、家に帰ってからでは、芳恵や博美、それに優稀や環にも見られることになると思うぞ。うちはそんなに広くないし、場所といってもリビングしか思いつかないからな・・・。それでも良いなら、そうするか？」
だっ、ダメだっ。・・・しっ、仕方がないっ。・・・どんな羞恥プレイよりもキツいけど、父さんと兄さんなら、同じ男性同士ということで、我慢して割り切ることにしよう・・・。少なくとも母さんに射精するところを見られるのだけは、死んでも御免だ。そもそも母子相姦というジャンルがある位だから、それが人として最大のタブーの一つだってことは間違いない。どんなことがあっても、母さんにだけは、絶対に見せられないから、ここでやるしかない・・・(泣)。」

全裸になり、布団の上に膝立ちとなって、既に元気になっているペニスを扱きだした。まだ、加減がよくわからないんだけど、特にローションとかをつけないで擦りすぎると、あとで亀頭がヒリヒリしちゃいそうで怖いんで、右手でワッカをつくるようにして、カリ首の部分を触るか触らないか、という位でシコシコと扱き続ける。
「いいか、よく見ておくんだぞ。この先端の亀頭のエラが張っている部分、カリ首っていうんだけど、このカリのところが敏感で、オナニーのときにはここを刺激すると良いんだ。・・・ああやって、親指と人差指でワッカをつくって、カリの部分を前後に扱くように、軽く擦るんだ。」
「千博は割礼されて、もう亀頭が剥き出しになっているけど、晶が

やってみるときは、もしまだ先端が剥けていなかったら、自分で皮を剥いて、その皮はペニスの根元のほうに引っ張って、もう片方の手で固定してから、皮が被らないようにしてカリの部分を刺激するようにしろよ。・・・それが亀頭オナニーといって、ペニスの発達に良いんだ。勿論、それまでに手で皮が剥けるようになっているのが前提だけどな。」

「そうだ。多くの男の子は、亀頭を直接擦(こす)るのではなく、皮を被せたり剥いたりするように滑らせてペニスを扱(しご)く『皮オナニー』というのをやっちゃうんだけど、それは皮が伸びちゃって剥け難くなるし、亀頭の発育にも悪いんだ。だから、将来、自分でオナニーするときには、必ず皮を剥いて、剥き出しにした亀頭を直接刺激するようにするんだぞ。」

「あと、カリの部分だけじゃなくて、この先端の尿道口、つまりオシッコが出てくる穴の周辺から、下側の合わせ目の部分。・・・ここは『裏スジ』といって、やはり敏感で快感の強い場所だ。千博も無意識でやっているみたいだけど、オナニーのときは、人差指や中指の腹の部分で、この裏スジを撫でると、特に気持ちが良いんだぞ。」

　兄さんと父さんが、微に入り細にわたり、僕のオナニーを晶に解説している。僕は、そんなことは気にしないようにして、とにかく早く射精して、この拷問を終わらせたいと必死なんだけど、どうもうまく射精感が湧いてこない。さっきと一緒で、やっぱり僕はまだオナニーに慣れていないから、扱(しご)き方が適切じゃないんだろう・・・。あ、それと優稀が話していたっけ。男子のオナニーは、イメージが大切なんだって。勝美に奉仕して貰っているときは、勝美にされているって考えるだけで最高の満足感が常に得られるから、軽く触られる程度でも我慢できずに射精してしまいそうになるんだけど、このような状況で父さんや兄さんに見られているんじゃ、いくらやっても射精したくなる要素なんて、これっぽっちもないからかもしれない。

でも、最初は嫌で嫌で堪(たま)らなかったのに、父さんや兄さん、晶に見つめられてシコシコしていたら、何となく、見られることがゾクゾクとして、頭がボーッとなってきた。恥ずかしくて、こんなの早く止めたいと思う一方で、何だか見て欲しい、皆に見られながら射精してみたい、射精する瞬間を見られたら、僕はいったいどうなっちゃうんだろうっていう不思議な感覚が湧いてきた。

「あっ、ぁっ、あひっ、んっ、ぅんっ。」

ほっ、本当に僕はっ、僕は一体どうしちゃったんだろう・・・。お酒は飲んでいないのに、身体が芯から熱くなってきて、酔っぱらったような変な感覚だ・・・。それに、皆の視線が、身体をくすぐっているような、何だか性感帯をコチョコチョと刺激されているような、そんな気がしてきた。この快感、まるで麻薬のようで、何だか癖になりそうだ・・・。

「かなり感じてきたみたいだな。先走りのカウパー氏腺液が随分沢山出てきたようだ。これは、感じてきた証拠で、射精する前に出るものなんだ。いろいろな言い方があるが、俗称では『我慢汁』なんて言われることもあるんだぞ。」

にっ、兄さんがっ、解説をしてっ・・・。でっ、でもっ、・・・まだ射精(で)ないっ・・・。そっ、それよりっ、・・・見られるって、こんなにっ・・・、かっ、快感がっ・・・。あっ、晶はっ、なにっ・・・、何をメモってっ・・・?!

「みっ、見てっ、・・・ぼっ、僕っ、僕のことっ・・・、みっ、見てっ・・・。ぁっ、んあっ、イッ、イクとこっ、・・・くっ、・・・んぐっ・・・、イクとこ見ててっ！」

「皆、しっかり見ているぞ。・・・大丈夫。いつでもイッて良いんだぞ。」

「スマホで動画撮影もしているからな。・・・でも、なかなか射精しないな・・・。千博、自分でバックを刺激してみろよ。」

そっ、そんなっ、でっ、でもっ、なっ、何もっ、何も考えられない・・・。無意識に左手の指がっ・・・。おっ、お尻の穴にっ・・・

。あっ、火花がっ・・・。ぜっ、前立腺はっ！・・・だっ、ダメっ、そこはっ！・・・くっ、んぐっ・・・。ゆっ、指がっ、指が止まらないっっ！

「見てっ、見てっ、ぼっ、僕っ、射精するっ、いっ、イクっ、イクっ・・・。」

もっ、もうっ、もう射精る！！・・・射精る！！・・・はっ！・・・あっ、あれっ？？・・・襖っ、襖がっ、・・・少し開いているっ？！・・・そっ、そこに眼がっ、眼が四組？・・・あれはっ、・・・あれはまさかっ？・・・かっ、母さんたち？？！！？！・・・眼っ、眼が合った。・・・そんなっ・・・。かっ、母さんにっ、母さんに見られてるっ？！！・・・いっ、嫌だっ。そっ、それだけはっ、・・・おっ、お願いっ・・・。

「ダメっ、ダメーっ、見ないでーっ、・・・あっ、あーっ、でもっ、でもっ、みっ、見られてーっ、やだーっ、イクっ、イグっ、イグーっ、ひっ・・・、やめてーっ、ぃひっ、イグっ、イグーーーっっ！！」

ドピュルルルーっ、ドピュルルルーっ。

「とっ、止まらないっ。・・・たっ、助けっ、助けてーっ・・・。しっ、死ぬーっ。・・・？？！！　”＃＄％＆，（～＝￥）＆％＄＃？？」

ドビューっ、ドビューっ、ピュピューーっ。

「ぁひーっ、いひーっ、んぐーーーっっ。」

ドピュっ、ドピュっ、ピューっ、ドピュピュっ、ピュっ、ピュっ。

―――――――――――――――

―――――――――――――

はっ、・・・ぼっ、僕はっ、・・・どうなって・・・。

気がついたら、全裸に浴衣が掛けられていて、その上から布団が軽く掛けられていた。下着は着けていない。ふと見ると、部屋の隅

にあるごみ箱は丸めたティッシュの山で一杯だ。父さんや兄さんが僕の身体を拭いてくれたんだろうか？・・・浴衣やシーツが、何となくベタつく感じがするし、あの臭いがする・・・。

・・・そうだ、思い出した。さっき、イク瞬間に眼があったのは、間違いなく母さんたちだった・・・。母さんたちに、僕がお尻をグリグリしながら射精するところを、すっかり見られちゃったんだ・・・。もうダメだっ！！・・・母さんにだけは絶対に見られたくなかったのに・・・。絶対に見られちゃいけない人に、僕の一番恥ずかしい瞬間をばっちり見られて、しかも眼まで合っちゃったんだ・・・。

・・・死にたい・・・。本当に、生きていることが苦痛だ・・・。母さんとは、もう顔も合わせられない。・・・母さんだって、気まずくて話なんてできっこないだろう・・・。

どうしたら・・・。

はっ、まっ、まさかっ。・・・また母さんたちにも身体を拭いて貰ったとか？！！

オナニーして射精した精液を、母さんに拭いて貰ったなんて、そんなっ！！

・・・いくら意識が飛んじゃっていたからって・・・、もう、僕はっ・・・ぅうっ・・・、くっ・・・。

―――――――――――――――
―――――――――

喉がカラカラだ。水を飲んで落ち着こう。・・・ところで、今は何時なんだろう。多分、もうすぐ夜明け頃だろうか・・・。窓の外が少し明るくなってきた気がする。

そっ、そう言えば、晶が何かをメモっていたみたいだけど、あれは一体・・・？？

何かすごく気になって、必死に薄暗い中を見回したら、晶の枕元

の荷物のところに小さなノートがあり、そこに僕のオナニーの様子が、最初から順を追って、綺麗にまとめられていた。手書きの解説図とかも入っていて、僕のペニスをスケッチした絵（ご丁寧に、僕のペニスの裏側や左の陰嚢にある黒子なんかも、きちんと描かれている。）で、どこをどのように刺激すると気持ちが良いか、快感が強くなるか、といったことや、実際に手でどのように擦るのか、また、どこをどのように刺激すると、僕がどういう反応をしたか、どんな声をあげたかまで、きっちり書かれている。実にわかりやすくて、とても小2の書いたレポートとは信じられない位、完成度が高い。

　しかも、ところどころに、まだ書きかけのところがあって、そこには（後でスマホ確認）とか、（千博お兄ちゃんに聞く）とか書いてある。さらに読み進んだら、最後のページに、僕がお尻の穴に指を突っ込むところから、とうとう射精したところまでが書かれていて、僕がイク瞬間にどんな顔をして、何て叫んだのか、そのとき精液がどのくらい、どこまで飛んだかまできちんと記載されちゃっている。・・・こっ、こんなものっ、学校に提出されたら、僕はもうバックでイキまくるヘンタイだってことが、街中に知れ渡っちゃう・・・。いや、それ以前に、僕のアナニーの様子が、すっかり露になってしまう。そんなことになったら、僕はもう本当に生きていけない。母さんに見られたことなんて、これに比べれば、まだマシに思えてきちゃう・・・。

　どっ、どうしようっ・・・。このまま破って捨てちゃうか？・・・でも、晶がこんなに頑張って書いたものを黙って捨てちゃうなんて、ダメだ・・・。明日、晶に、これを提出するのは止めてって、土下座して頼むしかない。晶が聞いてくれると良いんだけど・・・。晶は優しい子だから、僕が泣いて頼めば聞いてくれるかなぁ。でも、父さんや兄さんが何て言うだろうか・・・。そんなの、男らしくないとか何とか晶を焚きつけちゃいそうだ。父さんと兄さんがいないときに晶に話すチャンスを探すか・・・。何か代わりに晶に差し出

せるようなものがあると良いんだけど・・・。
　今回の里帰りは、何だか男子になったことのツケが全部一気に回ってきたような気がする。手術のときの尿道カテーテルに始まって、お義父さんやお義母さんへの挨拶から交換初夜、それに三カ月検診と、想像もしていなかった試練が沢山あったけど、いろんなことが、結果的には思い通りに上手く行って、勝美との幸せな生活を手に入れられたと思っていたら、最後にこんなとんでもないハードルがあったなんて・・・。いや、これが最後だなんて、油断しちゃダメだ。これからもっと辛いことが待ち構えているのかもしれない。それもこれも、すべて僕の我儘から出発した話なんだ・・・。きっと、僕のこれからの人生は、この払いきれないツケを一生かかって払い続けることになるんだ・・・。
　そう言えば、榊君も、男子になって大変というような話をしていた記憶がある。あの男子そのものといった雰囲気を出していた榊君でも、大変だって言われたんで、君が大変じゃぁ僕なんてどうすれば良いんだって話したのを覚えている。（でも、何が大変なのかは言葉を濁して教えてくれなかった・・・。きっと男子特有の何かがあったのかな・・・。）
　やっぱり男の子になるって、本当に大変なことで、死ぬほどの覚悟が必要なんだ。実際に自分で体験してみて、思い知らされることばかりだ。それに対して、女の子になった勝美や優稀は、女の子になったことを心から楽しんでいるように見える。
・・・他の性転換者達は、皆、どうなんだろう・・・。

第９４話　困惑

「「「おはようございます。」」」
「おはよう。皆よく眠れたかな？」
「ええ、部屋も極上で、ゆうべは女子チームで普段なかなか話す機会がない話題で盛り上がっていましたわ。」
「本当に良い旅館で、温泉も素晴しかったし、お父さんと義朗に感謝しなきゃ。」
「さすが草津でも一番の老舗旅館だな。朝食も期待が持てそうじゃない？」

・・・朝食会場で父さんや兄さんと母さんたちが楽しそうに会話をしている。けど、僕はさっきから母さんたちと顔を合わせることができない。ずっと俯(うつむ)いたまま、下を向いて黙っているだけだ。いったいどんな顔をして、母さんたちに向き合えばよいのだろう。何か話しかけられるのが怖い。昨日のことが話題になったりしたら、もう全力でここから逃げ出すしかない・・・。
「男子チームは何していたの？」
「どうせまた飲んだくれていたんじゃない。」
「そんなの決まってるわよ。・・・また、あたしたちには聞かせられないような秘密の話をしていたに違いないわ。一昨日の夜、千博が酔い潰れてしまったときもそうだったじゃない。」
「そうね、あのときも、いやらしい顔で下卑(げび)た笑いをしていたわよね。」
「失礼な！・・・とても高尚な話題だったぞ。芳恵や博美と俺の馴れ初めとか、どういうところに惚(ほ)れたのか、子供たちに話して聞かせてやっていたんだ。」
「俺も美香や愛との初体験について、千博や晶に聞かせてやってい

たんだ。こういう家族の歴史というのは、仮に黒歴史だったとしても、家族全員が知っておくべきことだからな。この前、千博から勝美さんとの関係について、詳細に話して貰ったんで、まあそのお返しというのもある。」
「あら、じゃあ千博にとっては、ずいぶんと有意義な時間だったんじゃないかしら？・・・でも、あたしたちから聞くのと、お父さんから聞くのでは、多分、かなりのズレがあると思うわよ。感じ方の違いというのも勿論あるけど、お父さんが話をすると、どうしてもカッコをつけて話を盛っちゃうんじゃないかしら。ねぇ、千博、あなたは元女子として、お父さんの話や義朗の話を聞いて、不自然に感じたところはなかったかしら？」
「べっ、別にっ、特に変わったところは・・・。」
　なっ、何故っ、昨晩の僕のことが話題にならないんだろう？・・・皆、そんなことは、おくびにも出さない。・・・というか、そもそも存在しなかったような話し方だ。・・・でも、僕にはとても耐えられないし、母さんの顔もまともに見ることができない・・・。
「あっ、あのっ、かっ、母さんたち、そのっ、昨晩、僕たちの部屋に来て・・・。そっ、それでっ、ぼっ、僕がっ、・・・しゃっ、・・・射精っ・・・・。」
「えっ？・・・何の話？・・・昨晩はあたしたちだけで、部屋で盛り上がっていて、どこにも出ていないわ。」
「そうよ。父さんの惚気（のろけ）とか、今更聞いてもしょうがないし、男同士のエッチな話題に割り込むような趣味はないわ。ね、優稀？」
「ええ、女子チームは温泉に入ったときからずっと引き続いて、普段は時間がなくて話せないようなこととか、いろんな話題で盛り上がっていたわよ。あたし、女子になって、母さんや芳恵さんに、いろいろ教えて貰ってきたけど、肌の手入れとか髪の手入れみたいなことは、やっぱり実際にやってみなくちゃわからないじゃない？・・・それで、そういった女性としての常識をいろいろと実地で教えて貰ったりして、とっても有意義な時間だったわ。男子チームはどう

だったのかしら？」
「千博はゆうべ、よほど疲れていたみたいだな。別に酒を飲んだ訳でもないのに、父さんの話の途中から船を漕いでいて、俺の話・・・美香や愛との馴れ初めを話しだしたら、晶は興味津々で聞いていたのに、お前は先に寝落ちしちゃったじゃないか。仕方がないから、お前だけ布団に転がして、父さんと晶と三人で暫く話してから寝たんだぞ。」
「まあ晶と違い、千博にすれば、俺の話にせよ義朗の話にせよ、そんなの興味ないんだろう。なにせ今の千博は、もう勝美さんとの幸せ一杯な生活・・・勿論、夫婦生活も含めてだが、それに満足しきっているから、他人の夫婦生活なんて、どうでも良いんだろうな。ま、それはそれで幸せなことだ。」
「千博兄ちゃん、結婚すると、そんなに忙しくて大変になるんだね。・・・やっぱり夜も寝られなくなっちゃうのかな？」
・・・なっ、何故っ・・・。何故皆、昨日の事などなかったように振る舞うんだろう・・・。母さんたちはともかく、あれだけ僕がオナニーして射精するところを見たいと言っていた晶すら、昨晩のことなど、なかったかのように平然と話している。これって、皆で口裏を合わせて僕の痴態を見なかったことにしてくれているんだろうか？
そう思える位、自然体で普通の会話だけど、でも晶の年齢で、そこまでのことが本当にできるというのは、何だか腑に落ちない。
でもっ、・・・でも、それでもっ、僕にとっては本当にありがたい。これで僕が変に話を持ち出したら、皆のせっかくの好意が台無しだ。不思議な気分だけど、取り敢えずこれで昨夜のことは、なかったことになったみたいだ。・・・良かった。
いやっ？・・・それじゃ、あの晶のレポートは何だったんだろう？・・・まっ、まさかっ、あれを僕にナイショで学校に提出するために皆で口裏を合わせているの？！・・・つまり僕からストップがかからないように、皆で僕を欺いているとか・・・？！？！

もしかして、僕は絶体絶命の罠に落ちてしまったんじゃないだろうか？！

「ね、千博。聞いて。・・・そんなことよりさ。・・・あたしたちは昨晩、我が家にとって、歴史的とも言える大きなイベントがあったのよ。母さんと芳恵さんが完全に和解して、芳恵さんがこれまで母さんにいろいろ意地悪してきてごめんなさいって、心から謝罪してくれたの。凄いでしょ？・・・これって凄いことだと思わない？？！」

「・・・？？？・・・」（僕に何の関係がある話なんだろう？）

「これまで芳恵さんが母さんに辛くあたっていたのは、千博が芳恵さんを邪険にしていたんで、仲の良かった母さんとあたしの関係を妬(ねた)んでいたんだって。言わば、八つ当たりだったらしいの。」

「だけど、あたしが千博の代わりに娘として甘えることにしたんで、それでもう羨(うらや)むのは止めるって、そういうことになったのよ。」

そっ、それってっ、父さんが話してた・・・？！

「そうよ。あたし、千博と優稀が殆ど双子同然で育ったでしょう。だから、義朗で経験があるあたしが、博美さんに負ける訳にはいかないって変に力んじゃって、何かと博美さんと張り合おうとしたのよ。」

「でも、博美さんは自然体で優稀と、それも息子の優稀と仲よくしているのに、千博ったら娘なのにあたしが可愛がろうとしても、あたしのこと何となく避けていたじゃない。・・・小さいときからそう感じていたけど、中学に入ったら、もう露骨にあたしを無視して、話も聞いてくれなくなっちゃった・・・。」

「あたしだって、義朗のときは必死だったけど、女の子の千博とは、一緒にやりたいことも沢山あったし、娘を育てる楽しみとか、娘と友達みたいな関係で、一緒に楽しむ子育てを夢見ていたのに、なにひとつ実現できなかった・・・。悲しくて、寂しくて、それで、つい、異性の子供なのに優稀と仲が良い博美さんに当たっちゃって・・・。」

やっぱり僕の所為だったんだ！！・・・父さんの言っていたとおりだ。すべて、僕の我が儘から始まったことだったんだ。それで博美さんにも優稀にも、とんでもない迷惑をかけちゃってたんだ・・・。いや、それ以前に母さんにそんな悲しい思いをさせていたなんて・・・。

「っくっ、うっ、うぅっ、ぼっ、僕っ、僕っ、ぐすっ、んぐっ・・・。」

「・・・千博？・・・」

「ぅっ、つっ、くっ、ぇっ、ぅうっ、ひぐっ、ぅぐっ。」

「ちっ、千博っ！！・・・大丈夫？」

「ごっ、ごめんなさいっ！・・・僕がっ、ぼくが我が儘でっ！！」

「そんなこと・・・。」

「ぅぐっ、うぅっ、ぅわーんっ。ぁあーんっ。・・・ぜっ、全部っ、全部僕の所為なんだっ！！」

「別に気にするようなことじゃぁ・・・。」

「ごめんなさいっ！・・・ごめんなさいっ！！・・・ひーんっ、ひっ、ひぐっ、ひーんっ。」

「僕っ、僕っ、母さんのことがっ！！・・・鬱陶しくてっ！！！・・・ごめんなさいっ！！・・・母さん・・・、母さん・・・。ごめんなさいっ・・・、許してっ、母さんっ、博美さんっ・・・優稀っ！！」

　千博がまたしてもテーブルに突っ伏して号泣しちゃった。千博は男子になって、やたらと涙脆くなっちゃったのかしら？

「こんな僕だから報いが来たんだ。・・・だから昨夜、父さんたちだけじゃなくって、母さんたち全員にも僕がアナニーで射精して気絶するところをバッチリ見られちゃったんだ！！・・・で、でもっ、それでも良いんだ。家族って、そういうものなんだ。僕もようやく気がついた。・・・もう僕は家族に隠し事は一切しない・・・。もう母さんたちにも、アナニーでイクところも見て貰うことにするん

だ。僕の一番恥ずかしいところも、何もかも、すべて父さんにも母さんにもバッチリ見て貰うことにする。」

「おいおい、千博・・・。お前、どうしちゃったんだ？・・・いきなり、頭のネジが何本か吹っ飛んじゃったんじゃないだろうな？」

「お前がどんな性癖を持っていても自由だし、家族にそれを知らせておくことは大事だけど、何もいつもそれを披露するべきだということでもないぞ？・・・どんなことでもそうだが、ＴＰＯというのも大事だ。」

「第一、それ以前に、昨晩はお前、早々と寝ちゃったじゃないか。母さんたちが俺たちの部屋に来たなんて、夢でも見ていたんだろう。」

「そうよ。あたしたち、昨晩は風呂のときからずっと皆で話し込んでいて、そのまま自分たちの部屋に戻ったのよ。」

「千博兄ちゃん。僕が温泉で、見せて欲しいなんて変なことお願いしたんで、それで悪い夢でも見ちゃったのかな？・・・だとしたらごめんなさい。僕、そんなに千博兄ちゃんの心に負担がかかるとは思わなかったんだ。・・・もう、あの話は忘れてくれて構わないよ・・・。」

　まっ、まただ。・・・しかも環や晶まで一丸となって、昨日のことは夢だったって言い張っている。それも、ごく自然で、どこにも破綻がない・・・。皆で一生懸命、僕の心が折れないように、昨晩のことは、なかったことにしてくれているみたいだ。・・・そうか、これが家族なんだ・・・。隠し事は一切しないけど、相手の心境に配慮して、決して追い詰めたり、嫌なことは話題にしない。父さんも母さんも、それに環や晶まで、皆で僕に気を遣ってくれている・・・。これが本当の家族関係なんだ・・・。知らなかった・・・。いや、僕が自分で勝手に拒否していただけなのかもしれない。

　やっぱり、すべての原因は僕にあったんだ・・・。なっ、涙が止まらない・・・。

「うっ、ぐすっ、ひぐっ、本当にっ、本当にごめんなさいっ。・・・

僕が全部悪かったんだっ・・・。もう僕は父さんにも、一切隠し事をしない。・・・ぐすっ・・・、どんなことでも、恥ずかしいことでも、全部話をする。・・・いや、射精するとこも、何もかも、全部見て貰うことにする。・・・もう僕は男子になっちゃって、それどころか婿に行っちゃったからっ・・・、そのっ、手遅れかもしれないけど、これからうんと母さんに甘えさせて貰う・・・。本当に、本当にごめんなさい！！・・・これまで母さんのこと邪険にしてっ・・・、ごめんなさいっ。鬱陶しいなんて思ってごめんなさいっ！！」

「おっ・・・。これは・・・？？」

「母さんと博美さんだけじゃなくって、母さんと千博も歴史的な和解をすることができたのかな？・・・だとしたら、今回の温泉旅行は、本当に得るものが多かったな。父さんの思いつきから急遽計画したんだけど、こんなに素晴しいものになるとは、父さんも俺も思わなかった。」

「やっぱり、一緒に風呂に入るというのは、それだけ意味があることなんだ。昔から、裸の付き合い、という言葉もあるじゃないか。・・今日も温泉巡りをするから、今度は混浴風呂に挑戦しよう。芳恵や博美も、それで良いな？」

「勿論よ。家族なんですもの、恥ずかしがったりすることじゃないし、お互いの裸なんて、もう何度も見ているじゃない。」

「あ、でも混浴だと、家族以外の異性にも見られちゃうわね。」

「旅の恥はかき捨て、じゃないけど、気にしなけりゃ良いだけさ。・・ま、どうしてもって言うなら、湯あみ着のレンタルもあった筈だ。」

「しかし、ここまでいろいろな懸案が解消されるとすると、風呂の効果というか、裸の付き合いは、今更ながら凄いものがあるな。我が家の風呂を、大きく作り替えるか。家全体を建て替えるのは大変だが、風呂のリフォーム程度なら、案外簡単じゃないかな。風呂場の外側にある物置を潰せば、３人位が余裕で入れる風呂に作り替え

ることができるぞ。・・・あの家は俺が就職して直ぐに建てたものだから、そろそろ二十年か。水回りを大規模リフォームする頃合いだな。早速、帰ったら検討しよう。」

「それは良いアイデアだ。是非やってよ！・・・３人が入れれば、美香と愛が遊びに来たとき、３人一緒に風呂に入ることができる・・・。是非一度、やってみたかったんだ。」

「是非そうして！・・・そうすれば、あたしも母さんや芳恵さんと一緒にお風呂に入って、いろいろ教えて貰うことができるようになるわ。」

「ま、何はともあれ、今回の草津旅行で、千博もようやく家族というものがどんなものなのか、どういった関係が理想的なのか、よくわかったみたいだな。それだけでも来た甲斐があったというものだ。」

「僕、もう父さんにも母さんにも、すべて話すことを約束するよ。たとえ恥ずかしいことだったとしても、絶対に隠さない。いや、それどころか、僕の一番恥ずかしいところも、全部母さんに見て知っておいて欲しい。もう絶対に母さんを邪険(じゃけん)になんかしない。母さんが世話を焼いてくれるのも鬱陶(うっとう)しいなんて思わない。そして母さんに息子として、思いっきり甘えさせて貰うことにする。」

「よかった！・・・これで千博が息子になって、優稀が娘になって、二人してあたしに甘えてくれる・・・。息子と娘が一気にできたような気分だわ。あたしもこれまで、変に意地を張っていたから、千博がよそよそしかったんだろうし。・・・ねっ、これですべて水に流しましょう？！」

「うんっ、母さん・・・。ありがとう。」

「家族は、あなたがどんな性癖を持っていたとしても、誰もからかったりしないからね。何も心配しなくても良いのよ。勝美さんは別格として、それ以外は、あたしがすべて、あなたの世話をしてあげるわ。・・・どんなことでも恥ずかしいなんて思わないでね。・・・大丈夫。幾つになっても、母親なんだから！！」

・・・っつっ？・・・やっぱり、バッチリ見られちゃってたんだ！・・・しかも今の言い方・・・。

僕の射精した精液を拭いてくれたのは、またしても母さんだ。今のセリフで確信した。家族って、こういう関係なんだ。恥ずかしくても、受け入れるしかない。

でも、だとすると尚更（なおさら）、僕は入婿だから勝美のご両親とも、こういう関係を築かなけりゃならないんだ。これまで、お義父さんからさんざん弄（いじ）られてきたと思っていたけど、あれは家族として普通の会話だったんだ。大人になるって、いや、家族になるって、大変なんだ。僕の場合は、性別を交換したことと、大人になること、そして婿に入って新しい家族を得たことが、全部いっぺんに起こって、それでこんなに大変なことになっちゃったのかなぁ・・・。これもすべて、僕が支払い続けなければならないツケの一環なんだろうな・・・。

第９５話　漢になる千博

朝食後、家族で揃って街の観光に出かけた。今日は温泉巡りだし、今夜も連泊するんで、全員浴衣の上に旅館の名前が入った半纏(はんてん)を着て、下駄履きだ。この格好で出歩くのは、まだちょっと肌寒いけど、草津の町は小さいから歩くのはせいぜい１５分程度らしい。

「あたし、湯畑って、初めて見たわ。これって、湯の花をつくる場所なんでしょ？」

「そうだ。源泉のすぐ横で、樋(とい)に湯を通して湯の花が析出されるようにするんだ。」

環がはしゃいでいる。義朗兄さんが解説してるけど、僕も初めて見るもので、ここに飛び込んで死のうと考えたなんて、なんだか恥ずかしい。てっきり、お湯が吹き出している源泉で、深い穴というか井戸のようなものをイメージしていたけど、随分と違うみたいだ。

「じゃあ、西の河原温泉に向かうとするか。草津で混浴大浴場といえばあそこだろう。」

西の河原温泉は、圧倒されるような大きさだった。ことによると５０メートルプールよりも大きいんじゃないか。それが男湯と女湯の二つ並んでいる。ここは昔ながらの混浴の日と、男女別になる日があって、今日は混浴だった。混浴の日は次第に減ってきているらしいけど、周到な父さんと兄さんが計画している以上、きっと事前に調べておいたに違いない。

「あ、脱衣場は別々なのね？」

「うむ。混浴でない日もあるからな。」

それぞれの脱衣場に行くと、父さん達はまたしても一瞬で全裸となり、手拭(てぬぐ)いも持たずに温泉に入って行った。僕も遅れてはかえって目立つと思って、急いで全裸になり、後を追った。すると、向こ

うの女子脱衣場から母さんたちが、やはり全裸で揃って出てきた。優稀はもうどこからどうみても、元から女子だったとしか思えない体型で、はっきり言って学年でも一番くらいの超巨乳だ。しかも、出るところだけでなく、引っ込むところもきちんと引っ込んでいて、小さい身体にもかかわらず、まるでモデルのようだ。これなら、同級生の男子達は堪（たま）らないだろう。でも、まだ学校ではっきり宣言した訳じゃないにしても、優稀はもう榊君に首ったけで、彼一本に絞るようなことを述べていたから、榊君さえ了承してくれれば、まもなく売約済という札がかけられるんだろうな・・・。

　しかし、それにしても優稀は堂々として、裸を晒（さら）すことに何の躊躇（ためら）いもないのは凄い。まだ男子の心が残っている？・・・という訳ではなさそうだし、他人に見られ慣れた、ということなんだろうか？・・・あんなに泣いていたのに、もう吹っ切れたんで、僕とは覚悟が違うんだろうか？

　いや、環も今度小5で、恥ずかしい時期になっている筈なのに、もうすっかり大人として完成した裸を惜しげもなく父さん達に晒（さら）している。・・・環と一緒に風呂に入ったのは、確か2年位前だったけど、あの頃はまだ幼女体型だったのに、今では出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでるし、毛も生え揃ってもじゃもじゃなのに、父さんや兄さんに対して、まったく隠そうともしない。それだけじゃなくて、父さんや兄さんの裸を真正面から見ているのに、ちっとも恥ずかしそうじゃない。これって、やっぱり家族だから当然なんだろうか・・・。僕なんか、男子にせよ女子にせよ、全裸の相手を見るとドギマギして気恥ずかしくなっちゃうんだけど・・・。

「さ、早く温泉に浸かろうぜ。この気温で裸じゃ、風邪ひいちゃうよ。」

　そう言うと、兄さんと晶を先頭に、家族全員が温泉に入っていった。僕は前を何となく手で隠したくなる衝動を必死になって押さえ込み、父さんや兄さんに倣（なら）って前を見せつけるようにして後に続いた。

―――――――――――――――
―――――――――

宿に戻り、大広間で家族揃って食事をしてから、部屋に戻ってきたら、もう布団が敷いてあった。今日は午前中、西の河原で混浴大温泉を堪能し、午後は有名な草津の湯揉みという入浴方法を体験する温泉に入ってきたので、へとへとになってしまい、もう温泉は良いかなと思って、このまま寝ることにした。まあ、宿の温泉は24時間入れるらしいから、明日の朝に朝風呂というのも悪くないな。

で、今日もまた、男子チームの部屋では、エッチな話題ばかり続いている。今日はもう寝るだけなんで、さっき買ってきた焼酎とウイスキーをちびちびやりながら、父さんと兄さんが、普段からはとても信じられない位の猥談（わいだん）を次々と繰り広げている。僕はあまりお酒が強くないんで、晶と一緒にジュースを飲んでいたら、兄さんがそこに焼酎を少しずつ入れて、チューハイのようにしてしまった。

話は自分の性癖の暴露とかに始まり、やがて父さんは母さんや博美さんとの馴れ初めから夫婦生活の様子を、昨日以上にリアルに語り、母さんの性感帯はどこか、とか、そこをどう刺激すると、母さんはどんな風に乱れるのか、といったことを、これでもかと語る。はっきり言って、もう僕は恥ずかしくて、母さんの顔をまともに見れないかもしれない。でも、兄さんも兄さんで、美香さんや愛さんとのセックスについて、本当にアッケラカンと何のてらいもなく、恥ずかしいという感情がないとしか思えない様子で自然に語っている。おかげで、父さんと兄さんの性癖だけじゃなく、母さんに博美さん、それに美香さんや愛さんの性癖まで、すっかりわかってしまった。僕もつられて、勝美との性生活をいろいろ話してしまったりしているけど、これ、晶にとっては、幻滅したりしちゃわないんだろうか。それとも男子としては、こういうことを普通に話すものなのか、あるいは家族だから話すものなのか、まだ僕にはわからない。

そもそも、女子同士だと、レズあるいは百合関係にない相手と、一緒にオナニーするなどというのは、あまり聞いたことがないけど、男子同士では一緒にオナニーして、どっちが先にイクか、どっちが遠くまで飛ばせるか、まるでゲームでもするように競争したりするらしいし、父さんも兄さんも、兄弟でオカズを共有するのはごく自然だって話していた。とすると、やはり家族間では、こういう話を普通にするものなのかな・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

父さんと兄さんは、かなりお酒が回ってきたようで、良い雰囲気になってきたので、昨日のレポートのことを言うのは今しかない気がした。このタイミングを逃したら、もうあのレポートのことを話す機会はないだろう。ということは、僕の破滅のカウントダウンがはじまってしまう・・・。家族に知られるのは、もう僕も覚悟したけど、学校や町中で、あんなレポートが出回ってしまったら、いくらなんでも僕はもうお終いだ。・・・今だ！・・・今話すんだ！！・・躊躇（ためら）っている時間はない！・・・でも、喉（のど）まで出かかった言葉が口から出てこない・・・。頑張るしかない。ここが運命の別れ道なんだ！！

「あっ、あのさぁ・・・。晶、そのっ、・・・昨晩、僕のオナニーを見て・・・、そのっ・・・・、レポートを書いていたよね。・・・小さなノートにさ・・・・。」

「千博お兄ちゃん。その話はもう止めようよ。終わった話なんだからさ。夢だったんだよ。」

「いやっ、違うんだ！・・・あのノート、頼むから、学校には提出しないで欲しいんだ。晶が一生懸命書いたのは知ってる。・・・物凄く良く書けているし、見事な観察レポートになっているのもわかる。・・・けどっ、・・・だからこそっ、・・・だからこそ、あんなに正確に、見たことをきっちり書かれたものが提出されちゃ

ったりしたら僕はっ、僕はもう学校には行けない・・・。それどころか、外を出歩くこともできなくなっちゃう！！」
「だからっ、だからお願いっ。あのレポート、学校には提出しないでっ！！・・・僕っ、僕・・・。こっ、このとおりっ。お願いしますっ。・・・僕にできることなら、何でもするからっ。・・・お願い、僕を助けてっ！・・・このとおり、お願いしますっ！」
そう言うと、畳に頭を擦りつけるようにして土下座をした。もう必死だった。涙が出てきたけど、それを拭うこともせず、とにかく晶にお願いした。
晶は唖然とした顔で、僕が泣きながら土下座するのを見ていたけど、自分のバッグを取ると、問題のノートを僕に差し出した。
「これ、千博お兄ちゃんにあげるよ。僕、別にこれをどこかに提出するとか、そんなことまったく考えていなかった。単に、僕がいずれ精通したら、千博お兄ちゃんの真似をして、僕も気持ち良くなりたい、気絶するほどの快感って、どんなものなのか、経験してみたいと思って、忘れないようにメモしていただけなんだ。・・・そもそも、春休みは宿題ってないよね？」
「千博お兄ちゃんがずっと持っててくれても構わないし、燃やしちゃっても構わない。どっちにしろ、提出するようなものじゃないし・・・。」
「そうだな。この程度のことを恥ずかしがるのは男子ではないから、千博がもう少し気持ちを切り換える必要があるのは事実だが、晶とて千博が嫌がることを無理やりするなんてことは、家族としてあり得ないだろう。」
「そうだ。でも、そもそも男子は射精することを恥ずかしがったりしてはいけないし、他人に見られても平気にならなけりゃいけない。判定試験では、クラスの皆が一斉にオナニーをして、射精する速さとか精液の量とかを競ったりするんだぜ。恥ずかしがっている余裕なんて、どこにもないぞ。・・・まあ、多少の恥ずかしさはあるけど、せいぜい、立ちションするのを見られた程度かな。オナニーに

よる射精なんて、所詮、単なる排泄行為なんだ。・・・思春期になって、第二次性徴が来た男の子は、全員、例外なく射精するようになる。そして男子の生理として、少なくとも72時間に一回は射精しないと、満タンになって大変なことになっちゃうんだ。」
「千博・・・、お前はトイレに行きたくなることが、恥ずかしいことだと思うのか？・・・まあ、見せびらかすことではないにしても、オシッコをすることは、家族にも、それも同性の家族にさえ隠さなければならないほど恥ずかしいことなのか？」
「・・・・・・。」
「まあ、そういうことだ。それに晶も家族を追い詰めるような趣味は持ち合わせていないだろうから、そもそもお前の一人相撲だったということさ。・・・家族をそんなふうに疑うから、一人で悩むことになるんだぞ。」
「うっ、うんっ。・・・晶・・・。本当にありがとう。何か僕にできることがあったら言って？・・・何でも、どんなことでも構わないよ。」
「特にお礼なんて、そんな・・・。あっ、そうだ！・・・それなら、もう一回、射精するところ見せてよ？・・・千博お兄ちゃんが射精する瞬間の表情とか喘ぎ声とか、それにあそこや身体が痙攣する様子とか、細かいところまで、まだよくわからなかったところがあったんだけど、今度はどこを注目すれば良いかわかっているから、もう一度見れば、もうそんなメモはいらない。頭の中にすっかり記憶するからさ。」
「・・・わっ、わかった・・・。じゃあ、もう一回やるから、母さんたちも呼んできて。・・・恥ずかしいけど、僕がお尻でイクところ、しっかり見て貰うことにする。」
「いや、そこまではやる必要はないよ。いくら家族だからって他人に見せるべきことと、そうでないことはあるさ。そもそも父さんや俺がセックスしているところをお前たちにわざわざ見せたりしたか？」

「そうだ。家族として、知っておくべきだが、呼びつけて公開するようなことじゃあない。それとも、それがお前の性癖で、母親に見られながら射精することに興奮して快感を覚えるというのなら、毎回でも協力してくれると思うが・・・。」

「何のために男子チーム・女子チームで別々の部屋を取ったと思ってるんだ。それぞれ、異性には話したくないこと、知られたくないことだってあるだろうし、同性同士のほうが猥褻（わいせつ）な雰囲気が強く出て楽しめるからこそ、二手に分かれたんだぞ。」

「そうだ。それに、ここで芳恵や博美を呼んでしまったら、せっかく昨夜のことをなかったことにしようという家族全員の思いやりを無にすることになる。そういうことも考えてみろ。」

「千博お兄ちゃん、これはあくまで、僕がお兄ちゃんにオナニーを教えて貰いたかっただけで、何もお兄ちゃんの性癖を家族に暴露する場じゃないよ。」

「あっ、ありがとう・・・。ぼっ、僕はっ、・・・僕はまだまだ家族との関係とか距離感がよくわからないんだ・・・。別に性転換したからじゃない・・・。女子だったときから、母さんとの関係が悪かったのは、多分僕の性格に問題があったからなんだ・・・。」

「だからって、そこまで極端に考えることもないさ。・・・どうもお前は、物事を極端に捉えて、一気に暴走するところがあるな・・・。二言目には、もう死にたいと言うのが口癖だし・・・。性についてわからないこと、悩みや不安があれば、まず同性の親や同性の兄弟姉妹に相談するんだ。それが普通であり、正しい親子・兄弟姉妹の関係なんだ。いきなり異性の親や異性の兄弟姉妹に相談するというのは、ダメではないが、かなり特殊な考え方だぞ。」

「そうだ。学校での性教育はともかく、俺は最初の精通のときと、それからオナニーも父さんに見て貰い、教えて貰いながら覚えていったし、それを今度は優稀に教えたんだ。優稀がまだ精通する前に、俺自身のオナニーを見せてやったし、優稀が精通してからはオナニーの手ほどきをしたり、俺が使っているオカズを貸してやったり、

一緒に楽しむこともあった。多分、これは普通の兄弟の関係で、兄弟とはそういうものだ。何も特別なものではないと思うぞ。」
そっ、そうだったんだ。僕は性に関することは超奥手だから、相当に歪な発育で、普通とは違う親子関係になっちゃったんだ。自覚はなかったけど、やっぱり娘として、母さんには本当に申し訳ないことをしちゃった。
「じゃっ、じゃぁっ、母さん達には、父さんから報告して貰うことにして、またバックで射精するから、僕が射精する瞬間をしっかり見ててね。」
「勿論だとも。ただ、別にいつもバックを刺激しなくても、そんなことはどうでも良いんだ。オナニーは少年が子供から大人になるときの必修科目で、自分でいろいろと工夫して、好きなように楽しめばよい。その中で、自分としてはどうすれば快感が強くて気持ちが良くなるのか、どれが一番好きなのかを実地で学んで行くんだ。これは、多分女子でもそんなに差はないと思う。お前、そもそも女子のとき、オナニーはしてたのか？・・・それはちゃんと芳恵に報告したのか？・・・環には教えてやったのか？・・・さっきも芳恵と話していたんだが、環はオナニーがよくわからないとか、あまり快感を感じないとか、芳恵や優稀に相談していたそうだぞ。それは本来、姉としての、お前の役目だった筈なんだが・・・。」
「・・・いっ、いやっ、オナニーはたまにしていたけど、母さんとか環には一切・・・。」
「そこが拙(まず)かったって、今ならわかるだろう？」
「・・・うん・・・。」
「男の子は、オナニーの訓練が判定試験の成績に直結するから、女子よりオープンで必死になるということはあるかもしれないが、まあ、そういうことだ。そもそも、こういう話は何も無理してやるものじゃない。あくまで自然体で、普段の生活の一部として、日常の中に存在するものなんだ。それが家族であり、それが大人になる、大人に育つということなんだ。・・・大人の階段を登るなんて昔か

ら言われるが、それは何もセックスする、初体験するということだけじゃないんだ。・・・勿論、セックスをする、初体験をするというのは、階段の大事なステップかもしれないが、それは何十段もある階段の、ほんの一段だけなんだ。オナニーだって、同じく大事な一段なんだぞ。」

「わかった。・・・じゃあ、とにかく始めるから、晶はよく見ておいてね。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

「千博は、またしても気絶しちゃったな。」

「よほどバックが気に入っているようだな。それまで普通にオナニーしていたのが、バックに指を入れた途端、ビックンビックンと痙攣（けいれん）して、口から泡を吹きながら思い切り猥褻（わいせつ）な言葉を叫んでいたし、最後は白目を剥いて意識を飛ばしたんだから。」

「でも、これでやっと、心の中が普通の男の子になってきたようだな？・・・射精を見られることに、何の抵抗もなくなってきたようだし、ようやく心が一人前の男、いや漢（おとこ）になったんだろう。。」

「そういえば、千博は男の子としてのオナニーは、殆どやったことがないんじゃないかな。性教育も女の子として受けた訳だろう？・・・俺も兄貴として、一緒にオナニーをしてやれば良かったかな？」

「まあ、大丈夫だろう。それに、いずれは晶と一緒にオナニーする日も来るに違いない。」

「僕、精通したら真っ先に千博お兄ちゃんに射精するところを見て貰うことにする。」

「そうだな。是非そうしなさい。兄弟で一緒にオナニーするというのは楽しくて気持ちが良いぞ。それまでに、できたら皮を剥けるようにしておくと良い。でも無理をするなよ。お風呂の度に、ちょっとずつやれば良いんだ。」

「わかった。」

「さ、千博の身体も拭いたし、これで寝るとしよう。今回の温泉旅行は、実に有意義だったな。千博と優稀の試験からここまで、怒濤のような毎日だったが、家族関係が再構築できて本当に良かった。これからも毎年1回程度はこういう機会を設けることにしよう。そうだ、次回からは勝美さんも一緒に呼んで、杉田家の恒例行事としないか。美香さんや愛さんも、是非一緒に来て貰うと良い。」

「それは大賛成だ。多人数になればスケジュール調整が厳しくなるけど、まあ2泊程度の休暇が取れないこともないだろう。」

第９６話　旅行の効果（前書き）

しばらく間が開いてしまい申し訳ありませんでした。
小説内時間では、もうすぐ優稀達は高校生活のスタートです。
その後、ＧＷになると、いよいよ千博と勝美の結婚式となります。
（あと5回か6回程度？）
でも、今の私のペースでは、月に１回から二月に１回の更新が限界のようです。
のんびりお付き合い頂ければ幸いです。

第９６話　旅行の効果

「今回の草津旅行、元は千博の里帰りに合わせて、父さんが強引に計画したんだけど、ここまで有意義なものになるとは思っていなかったわ。あたし、感動しちゃった。」
「僕もだ。母さんとのわだかまりが解消されたのもそうだけど、家族の関係がどうあるべきか、僕はこれまで何もわかっていなかったんだ。それを気付かせてくれた皆には、ただ感謝しかない。本当にありがとう。」
「そんなの家族なんだから、当然でしょ。今更だし、別に改めてお礼を言うような話じゃないわよ。・・・それよりも、父さんと母さん達との関係が、今でもこんなに熱々だったとは、あたしも知らなかったわ。やっぱり夫婦の関係って、他人からはわからないものね。千博、あなたは勝美と、ここまでラブラブで何でも言い合える関係にあるかしら？・・・前の母さんと芳恵さんみたいに、変に反発しあったりはしていないでしょうけど、勝美には一切隠し事はしていない？・・・勝美のご両親に対してはどうかしら？・・・まあ、勝美の性格からして、勝美があなたに隠し事をするのは、ちょっと考えにくいけど・・・？」
　家に帰って来てから、優稀と二人で今回の旅行について、話が弾んでいる。１週間の里帰りで、あと二日あるんで、また自分の部屋でのんびりしてると、優稀がやってきて、今回の久し振りの家族旅行で目の当たりにした父さんと母さん達がイチャイチャする様子など、お互い初めて知ったことに二人で興奮しているところだ。
　優稀に聞かれた質問を勝美に送ったところ、一瞬で返事が返ってきた。僕たちはしっかり繋がっていて、何も不安になる要素はないと、それだけで確信できる瞬間だ。でも、この里帰りは、僕にとってだけじゃなく、勝美にとっても、お義母さんに主婦業を教わった

り、これまであまり機会がなかったお義母さんとの時間をたっぷり取れて、とても有意義に使っているみたいだ。なにせ、母娘の関係など、手術してからほとんど時間が取れなかった筈だし、勝美もお義母さんも、僕に対する気遣いは尋常じゃなかったから、僕が居たんじゃ、ゆっくり母娘の関係など構築する余裕もなかっただろう。

（それはお義父さんとの父娘の関係も一緒だけど、そっちはまあ、どうでも良いや。少なくともお義父さんは、うちの父さんとは比べ物にならないほどざっくばらんな人で、不在がちではあったけど、勝美とは父息子の関係をたっぷり築いていたのは知っているから。・・・聞いてはいないけど、きっと勝美はオナニーの仕方なんかも、お義父さんからしっかり手ほどきを受けているに違いない・・・。）

「今、勝美にも確認したけど、僕たちの関係には、何も隠し事もなければ、秘密にしているようなものはないよ。恋人同士だったときから僕は勝美がどんなエロ本を読んでいたかも知っているし、逆に僕がバック好きだっていうのは自分でも知らなかった性癖を勝美に開発して貰ったんだから・・・。」

「だから、夫婦生活では、お互いの弱いところ、特に感じるところを熟知しているんで、そこを重点的に奉仕し合うと、僕も勝美もイキまくって気絶しちゃうんだ。」

「それは調教されちゃった、っていうことであって、秘密とか隠し事とは別の話なんじゃぁ・・・。」

これまで、兄妹の時間はあまりなかったし、それ以上に姉弟の時間はなかったんで、話が弾む。・・・それはともかく、旅行中、母さんと博美さんは、ごく自然に交代しながら父さんとイチャイチャしていて、見ていて羨ましくなるほどだった。自分の親があからさまに性的な雰囲気を醸（かも）しだしているのを見るのはキツいものがあるけど、でも仲が悪いのに比べたらずっと良い。それに母さんと博美さんは、決して張り合うことはなかったし、一定時間が来ると、これも阿吽（あうん）の呼吸で父さんの隣の場所を交換していた。というか、譲り合っていたみたいだ。父さんから温泉で聞かされたようなことは、

優稀も女子チームの中で話を聞いたみたいで、これが夫婦の関係の理想形だということは、疑いようがないと、二人して意見が一致した。優稀は、いつの日か怜央と、こういう家庭を築きたいと言っていたし、僕も勝美と、こういう家庭を築くことを目標にしようと思う。特に僕は入り婿だから、お義父さん・お義母さんとも、こういう関係を築かなければならないんだ。やるべきこと、やらなければならないことは山積みだけど、良い目標というかお手本が、こんな身近にあったんだから、家に帰ったら頑張ろう。・・・そうだ、取り敢えず、勝美と相談して、遠藤家でも家族旅行に行けないかな・・・。勝美もお義母さんも、二人して身重だから、あまり無理はできないし遠くに行くのも何だけど、電車で1時間位なら、大丈夫じゃないかな。・・・そうか、そう言えば、結婚式は父さんとお義父さんに全部任せちゃっているけど、新婚旅行はどうすれば良いんだろう？・・・やっぱり、僕が勝美と相談して、計画していかないと、どこにも行けずに終わっちゃうな・・・。

「ねえ、僕たちの新婚旅行なんだけど、どうしたら良いかな？・・・優稀はどう思う？・・・結婚式の後に、そもそもできるんだろうか？」

「それは勝美次第じゃないかしら？・・・今のところ落ち着いているみたいだけど、あまり無理することはできないわよね。妊婦がどうなるのかなんて、そのときになってみないとわからないじゃない？・・・そんなの、あたしに聞かないでよ。」

「それはそうなんだけど、でも結婚して新婚旅行に行けませんでしたなんて、いくら僕が高校1年生だとしても、勝美に申し訳なくってさ。」

「それなら後になって、出産してから行ったらどう？・・・父さん達も学生結婚だったからっていうのもあって、新婚旅行は、少し後だったと聞いているわ。確か、父さんと芳恵さんが大学生のときで、そのときはもう結婚していた母さんも一緒に三人で沖縄に行ったようなことを話していたわよ。」

「それは考えているんだけどさ、でも父さんたちは、まだそのとき子供はいなかったじゃない。まあ、母さんはもう妊娠していたってことが、後からわかったみたいだけどさ。・・・それともあれは、子供が出来たとわかったんで、生まれる前に急いで旅行することにしたのかな？・・・優稀は何か聞いていない？」
「そんな事情があったの？・・・あたしは初めて聞いたわ。」
「実際問題として子供ができちゃうと、どんなに時間をやり繰りしても、どうしたって限界があるよ。それに、僕たちの意識としても、子供を預けて遊び回るような気分にはなれないし、新婚旅行っていうのは二人だけで誰にも邪魔されずに楽しんでこれる唯一の機会だろう？・・・世間一般では、夫婦がまた新婚当時の関係に戻れるのは、２０年位たって、子供が独立してからだっていうのも良く聞く話だよ。僕はまあ我慢するにしても、性転換までしてくれて、女性になった勝美に、そこまで長いこと我慢させたりするのは可哀相だから・・・。」
「まあ、それはこんなに早々と妊娠させちゃったんだから、仕方がないんじゃないかしら。結果的には大成功だったにしても、世間的には「できちゃった婚」なんだからね。それに千博は、勝美のお父さん達に一泊だけど、素晴らしい新婚旅行の代わりを貰ったんじゃなかったの。・・・ていうか、どうやらそこで命中させちゃったんだから自業自得よ。文句を言う筋合いはないと思うわよ。」
「・・・・・うん・・・・・。」
それを言われると、一言もない。やっぱり、これも僕の我儘が すべての発端なんだ。・・・学生の身でこれだけのツケを払うのって、大変なんだなぁ。
「結婚式の頃の様子次第だけどさ、特に予定していなくても、一泊か二泊程度で近場の温泉にでも行ってきたら？・・・それこそまた草津でも良いし、反対方向なら箱根か伊豆・熱海なんかが定番よね。スイートルームとかに拘らないなら、予約とかせずとも、当日でも何とかなると思うわよ。・・・でも、そうか、ゴールデンウィーク

中なのよね。やっぱり混んでるかしら？・・・翌週に休みを取って行くのもアリかもね。いずれにせよ、父さんか義朗兄さんにでも頼んでおいたらどうかしら？・・・また家族旅行になっちゃう可能性もあるけど、要するに千博は行ったという事実が欲しいんでしょ？」
「うん、まあ、今、ここで考えても結論は出ないから、あとで勝美やお義父さん・お義母さんとも相談してみる。」
　父さんや兄さんに相談すれば、確かにあっと言う間に計画から予約までやってくれるだろうけど、優稀が言うように、また家族旅行になっちゃう可能性も高い。しかも今度は、お義父さんとお義母さんも一緒に来るって言い出されたらどうしよう。新婚旅行に両方の家族全員がついてくるなんて、そんなの絶対に願い下げだ。せっかく勝美と二人だけで楽しみたいのに、下手したら、先日の公開オナニーの第二弾で、勝美と愛し合うところを両方の家族に公開するなんてことになっちゃうかもしれない。確か中世の頃のヨーロッパで、貴族とか王族の話だったような記憶があるんだけど、結婚というのは家同士、国同士の絆を取り結ぶ大事なイベントであり、跡継ぎをつくることが何よりも重視されていたため、新郎新婦がちゃんとできたかどうか、新婚初夜に寝室で立会人が二人の結合しているところを確認して、ちゃんと膣内射精ができたかどうかを皆に報告するような習慣がある国もあったらしいし・・・。きっと、当時は性教育もロクになかったろうから、13歳とか14歳位で夫婦になっても、セックスなんてどうやったら良いかわからなくて、それで指南役の言うとおりに、二人で何とか結合して腰を振ったりしたんだろうな・・・。でも、そうか・・・。勝美と二人で愛し合っている姿は、誰に隠すようなことでもないんだから、ちょっと恥ずかしかったとしても、別にそれはそれで見たけりゃ見て貰っても構わないのかな・・・。特に家族には・・・。前にお義父さんが、それに近いことを言っていたような記憶もあるし・・・。

――――――――――――――――

――――――――――――――

千博が家に帰って行った翌週、あたしの新しい制服が出来てきた。勝美にも届いている筈なんだけど、いよいよこれを着て女子高生としての生活が始まるんだわ。試着して、姿見の前で細かいところまでチェックを入れながら、そんなことを考えていた。
あたしは四級男子で、中卒で働かなければならないかもしれないと覚悟もしていたんだけど、女性化したために三級にランクアップできたんで、高校生活を楽しむことができるんだから、そこは有意義に使わなくっちゃね。社会人と学生の恋人っていうのも悪くはないけど、やっぱり同じ学校で、学生同士の恋愛が王道よね。中学のときは円と2カ月位しか恋人関係で居られなかったんで、性別はかわっちゃったけど、これから3年間、たっぷり恋愛を楽しみましょう。

中学から高校に進学する春休みは、あまりやることがないのかと思っていたけど、なんだか次々と予定が入ってきて、時間はあっと言う間に過ぎてしまうわね。気がつけば3月は終わり、あっと言う間に4月だわ。胸を期待に膨らませていろいろ想像していたら、ふと真央ちゃんのことが気になった。
卒業式から3週間が過ぎているんで、去勢から1週間で本手術、そこから10日から2週間で退院とすると、もう完全な女子になって自宅に戻っている筈だわ。確かあのときも、3月末には退院する予定って話してたような記憶があるから、お見舞いに行ってあげようかしら。それにやっぱり怜央のご両親に、ご挨拶しておかないと、いずれ親子になるかもしれないんだから、あまり先延ばしするのは良くないわよね。でもまあ、そっちは怜央とよく話を詰めてからのほうが良いかしら・・・。あたしもご両親の性格とか、注意することなんかを聞いてからのほうが安心だし・・・。

第９７話　真央の新しい人生

♫ピリンポローン♫

「あ、いらっしゃい。お待ちしてました。」
真央が玄関を開けてあたしを迎え入れてくれた。怜央に連絡したところ、怜央はご両親と一緒に買い物とか、いろいろ用事があって出かけちゃうんで、今日は真央一人で留守番だっていうから、丁度良いと思ったの。まだ怜央のご両親にはご挨拶していないし、そもそも怜央があたしのことを何て伝えているのかもまだ聞いていなかったから、チャンスだと思っちゃった。やっぱり、この状態で怜央のご両親に会うのは、ちょっと不安だったから・・・。でも、後になって、ご両親が帰って来たら、どうしようかしら・・・。ま、そのときは怜央が上手く話してくれるでしょ。

前回真央と会ったのは、もう3週間以上も前になるのよね。たまたまを抜かれたその日と、その翌日の懇親会で会っていて、そのとき既に真央はどこからどう見ても女の子としか思えなかったから、そこから特に変わったようには見えないわ。でも、あのときは、まだおちんちんがあった訳だし、良く見ると以前はなかった胸が、はっきりわかる程度に膨らんでいた。ただ、真央はまだ声変わりがはじまっていなかったらしくて、喉は手術されなかったみたい。声も以前と同じで、いわゆるボーイソプラノというのかしら。綺麗で甲高い声だわ。
あたしが来るということを聞いていたからだろうけど、リビングに通されると手際よくコーヒーを淹れてくれて、ケーキを出された。こういう気遣いからして、元から女の子だったと言われても、ちっとも不思議じゃない雰囲気だわ。

「本手術はどうだった？・・・痛かったり、身体が不自然に感じたりすることはないかしら？」
「寝ているうちに、全部終わっていたという感じね。麻酔で寝ていたからっていうのも勿論だけど、たまたまを抜いたときは本当に、これで男の子の素が身体から取り出されたっていう感覚があったし、これまで何となく感じていた不安というのかしら、どっちつかずの状態に対する気持ち悪さが、すっと解消されたような気がしたんだけど、本手術は単なる美容整形みたいな感覚なのよ。そうね、脱毛とか、二重まぶたとか、そういった、ちょっとした外見を整える感じだわ。・・・あたしって、変なのかしら。」
「性同一性障害だと、そんなふうに感じる人も多いんじゃなくって？」
「手術後も特に違和感はまったくないし、つるんとした股間は、かえってさっぱりして気持ちが良いわ。・・・そうね、剃られた毛がポツポツと生えてきて、チクチクするのが不快ね。こんなふうになるとは思わなかった。」
「それは、あそこを剃られると、男女関係なく誰もが経験するものよね。・・・おしっこはもう大丈夫？・・・尿道カテーテルはどうだった？」
「カテーテルは抜くときちょっと痛かったわ。看護婦さんにグイって引っ張られて、あたし、思わずアーって悲鳴を上げちゃったから。でも、その一瞬だけ。あれ、男の子だと凄く痛いんだってね。」
「そうみたいね。おちんちんに管を突っ込まれるなんて、想像しただけでも恐怖でしょ。」
「そうね。なまじ男の子のときの感覚があると、拷問よね・・・。優稀お義姉ちゃんもあたしも、容易に想像できちゃうから、あんなことされたら、どんな秘密でも進んで話しちゃうんじゃないかしら。」
「そうね。小説なんかで、男性に対する拷問としては、去勢するの

が定番らしいけど、それって1回限りじゃない。でもおちんちんに突っ込むのは何度でも繰り返せるから、拷問としては上だと思うわ。・・絶対にナイショにして欲しいんだけど、千博は手術の後、引っこ抜かれるときも激痛だったらしいけど、その後、事情があってもう一度、突っ込まれかけたらしいの。よほど怖かったみたいで、この話をすると真っ青になってブルブル震えだしちゃって、まともに話もできないのよ。トラウマどころかＰＴＳＤになっちゃったようだわ。・・・それより、おしっこには慣れた？・・・もうトイレは大丈夫？」

「おしっこするのは、もう慣れたわ。それと、うちはトイレを汚さないようにって、立ちションを禁止しているんで、男の子のときも必ず座って用を足していたから、あまり違和感はないわね。・・・あ、終わった後、必ずペーパーで拭くのがちょっとだけ面倒かな。男の子だと、おちんちんを振るだけでお終いでしょ？・・・でも、本当にその程度の違いよ。」

「そうなんだ。良かったわね。胸はどうかしら？」

「想像していたとおりで、そんなに違和感はないわ。ほら、もともと怜央お兄ちゃんは女の子のときも、そんなに胸がなかったじゃない。それよりは、身体全体が少し太ったような、丸々とした雰囲気になって、なんだか身体が重くなった気がするの。別に体重が変化したという訳ではないんだけど、ホルモンの影響で筋肉が脂肪になっちゃったのかしら。ちょっとショックだわ。」

「まあ、それが男の子から見ると、色っぽいとかセクシーだ、たまらない、といった魅力になるんだから、仕方のないことよね。・・・それ以外で、何か不自由していることは他にないかしら？」

「今のところは特に・・・。あっ、じゃあ、いろいろ女の子の買い物に付き合って貰える？・・・怜央はお兄ちゃんになっちゃって、さすがにもう女の子の下着とか生理用品とかを買うのにアドバイスは無理だろうし、そういう売り場に一緒に来て貰うのは、あたしも

お兄ちゃんも、かなり気まずいのよね。」
「そもそも怜央お兄ちゃんは手術前から男の子のような性格で、女の子の下着とかを買いに行ったり、自分で生理用品を買ってる姿を見たことがないのよ。だから、あれは最初から女の子としては員数外なの。それよりは誰が見ても女の子の優稀お義姉ちゃんのほうが、ずっと安心して女の子の買い物に付き合って貰えるわ。」
　まあ、そうかもしれない。怜央は男子だった当時のあたしから見ても、ずっと男らしくって、その上レズセックスをして何人もの処女を食べちゃってたから、そもそも性同一性障害だった可能性も高そうだし、真央の言うとおり女の子としてはカウントできないわ。そもそも男子が女子の下着売場に同席するのは、恋人同士でも躊躇(ちゅうちょ)があるだろうに、兄妹の関係じゃお互いに気まずいったらないわよね。妹が生理用品を買うのにアドバイスするために付き合う兄なんてねぇ。
「わかった。あたしもまだ女の子になってやっと4カ月だから、そんなに立派なアドバイスはできないけど、それでも良ければいつでもお付き合いするわよ。何だったら明日か明後日でも大丈夫よ。・・・そうね、学校が始まる前に、一通り揃えて試してみるほうが良いわよね。じゃ、明日の朝一番にでも、一緒に行きましょう？」
「じゃあお願い。今は怜央がお姉ちゃんだったときに持ってた下着とか生理用品なんかを貰ったんで、それで誤魔化しているけど、やっぱり自分で選ばないとね。」
「中学の制服とか、もう出来てきたんでしょ。着てみてどうだった。違和感はないかしら。中3の試験と違って、小学校から中学校に上がるときに性転換する子は少ないだろうから、クラスで評判になっちゃうかもね。」
「ええ。でも、この町は小学校も中学校もひとつしかないでしょ。しかも校舎は隣同士。クラス換えはあるにしても、基本的に全員知っているし、友達もあたしが昔から女の子になるかもしれないってことは知っていて、小学校の最後の日にクラスの皆には話しておい

たから、多分、あまり驚かれることはないんじゃないかしら。」
　まあ、そうなんでしょうね。あたしが登校した日も、一瞬だけ大騒ぎになったけど、案外すぐに慣れて、三学期は普通に女の子として扱って貰ったから、真央なら直ぐに女の子として溶け込める筈だわ。
「ねえ、それよりも、中学生になったら、誰か男の子とお付き合いしたいな。ボーイフレンドは直ぐにできるかしら。お義姉ちゃんはお兄ちゃんとセックスして、それでお付き合いすることにしたんでしょ。お兄ちゃんも、そんなことを話していたわ。・・・やっぱりセックスすると、恋人になれるのかな。あたしも早く、誰か男の子とセックスしてみたいわ。お義姉ちゃんにバックに突っ込まれたでしょ。あれ、本当に凄い快感で、あたし全然我慢ができないうちに気絶しちゃったほどだから、ボーイフレンドにおちんちんを挿れて貰うのは凄く楽しみなんだ。それに女の子なら、前と後で、快感を比較することもできるじゃない？」
　・・・何か拙(まず)い気がするわ。真央ちゃんまさか、この前のお尻グリグリで、変な趣味に目覚めちゃったのかしら。・・・まあ、早くセックスしたいって考えるのは、とても良いことだし、女の子の意識としておちんちんを挿(い)れられたいって思うのも自然だけど、挿(い)れられたい場所がちょっと問題ありかもしれない。千博みたいにバック大好きになっちゃったら、どうしよう？・・・やっぱり、あたしの責任なのかしら。・・・でも、これなら交換初夜は必要ないわね。あれは意識の視点を無理やり男子から女子に書き換えるための儀式だから、ここまで精神構造が女子として完成しているなら必要ないわよね。きっと、性同一性障害の転換者は、こういう精神構造を見て診断される筈だから、そもそも交換初夜を経なくても女子の意識を持っているなら、わざわざやる理由はないわよね。だから、交換初夜は強制的に性転換されることになった、あたしたちのような試

験組だけに課せられた義務なんでしょうね・・・。
「そうね。中学に入ると、正式にお付き合いする男女は多いわよ。千尋が勝美に告られたのも、中1のゴールデンウィークの頃だったみたいだし。・・・でも、知ってると思うけど、思春期の発育は女子のほうが男子より1年か2年、先行しているものなの。だから、中1になったばかりだと、女の子はもうボーイフレンドが欲しいって考えることが多いし、それどころかセックスしたいって思う子も多いけど、男の子はまだ精通もしていなくて、女の子と男女の関係になるよりも、男の子同士で野球やサッカーをしたり、スマホでゲームしたり、そういった子供の遊びに夢中な子が多いのよ。真央は小6でも、立派なおちんちんだったから、男の子のときに女の子と恋愛したいって考えられたのかもしれないけど、それって平均的な男子の発育からすると、かなり早いんじゃなくて？」
「そうね。言われてみれば、あたしも男の子の中では、わりと第二次性徴が早く出てきたほうかもしれないけど、女の子とお付き合いしたいとか、ましてセックスしたいと焦るような気持ちは全然なかったわね。声変わりもまだだったし、そもそもあたし、男の子のときはオナニーを楽しいって感じなかったから・・・。友達でも、精通している子は少しいたけど、サルになっちゃった子は、まだいなかったような気がするわ。」
「そんなに焦（あせ）らなくても、あと1年もして中2位になると、男の子の頭の中は、皆、とにかく射精したい、女の子とセックスしたいって、それしか考えられなくなっちゃうものなのよ。だから少し落ち着いて、同級生の男子がもう少し発育するのを待っていたらどうかしら。大丈夫。真央はそんなに魅力的な女の子になったんだから、半年か一年もすれば何人もの男の子が群がってくるようになるわよ？」
「わかったわ。それじゃ、そっちはひとまず置いておいて、もうひとつお願いがあるの。女の子になったあたしの身体、見てくれない

？・・・病院では、もうこれで完全ですって言われてるんだけど、何となく不安じゃない。自分だと、あそこはよく見えないのもあるけど、そもそも確認してみても何が正しいのかなんて、あたし知らないもの。といって、いくらクローンの元だとしても、さすがに怜央お兄ちゃんに身体を見せるのは抵抗があるし、お母さんに見て貰うのもまだ少し恥ずかしいわ。そんなことないと思うけど、もしあたしの裸を見てお兄ちゃんがあそこを大きくしちゃったら、あたし、どんな顔すれば良いのかわからないもの。」
「家族なんだから、別に見られたってどうってことないし、自分が気にしなけりゃ良いだけだと思うけど、でも抵抗があるならあたしが見てあげるわ。何だったら、あたしの身体と比較してみましょうよ。同じ遺伝子からつくられたクローンなんだから、殆ど同じ筈じゃない？」
「そうしてくれる？・・・じゃ、さっそくあたしの部屋に来て。あ、カップやお皿は、あとであたしが片づけておくから、そのままで良いわよ。そこに置いておいてね。」

第９８話　快感と幸せ

　二階の真央の部屋に移動すると、真央はパパッと手際よく服を脱いで裸になった。といっても、多くの男の子がやるみたいに、服を脱ぎ捨てたというのではなくて、丁寧に脱いだものを畳んで枕元に置くと、全裸でベッドに寝転がり、手足を広げて大の字になった。こういった、ちょっとした動作にも、女の子らしさが溢(あふ)れているわ。
「どう？・・・女の子として、何か変なところはない？」
　あたしも手早く服を脱ぐと、ベッドサイドの小さなチェストの上に畳んで置き、全裸で真央の身体にそっと手を伸ばした。
「見事な身体ね・・・。環よりも立派だわ。・・・って、当然よね。環は今度小６になるところ、真央は今度中１なんだから、その分成長していなければならないんだし・・・。」
　そう言いながら、あたしは真央の大きく開いた足の間に座って、真央のあそこをそっと開いてみた。確かに交換初夜を経る前の、あたしの股間にとても良く似たものがついていたけど、あたしのものと比べると、本当にまだ初々しいというか、成熟していないような感じに見えた。それで、真央にも見えるように、あたしの身体を近付けてみた。
「見て。あたしの身体と真央の身体、同じＤＮＡから作られているから、基本はまったく一緒なんだけど、あたしのものは随分使い込んだ感じがするでしょ？・・・それに対して、真央のものは、まだ綺麗なピンク色で、まさに未使用と使用済みの違いがあると思わない？」
「でも優稀お義姉ちゃん、まだ初体験からせいぜい３カ月ちょっとよね？・・・そんなに何回もセックスしたとも思えないし、お兄ちゃんは女の子だったときは処女だったって聞いているから、そうするとこの違いは年齢の違いなのかしら？」

「確かに思春期で3歳違うと、その間に発育して成熟するのは当然よ。でも、それよりも大きいのは、挿入はしていなかったにしても、しっかりと使い込まれたということじゃないかしら？」

「怜央はレズセックスで、さんざん女の子と肌を重ねていたらしいし、オナニーはしょっちゅうやっていたみたいよ。あたし、移植されたときに、この大きく肥大した乳首やクリトリスが、ものすごく敏感で感度が良いことに驚いたんだから。」

「真央は女の子になってから、オナニーしてみた？・・・多分、そんなに気持ち良くなかったんじゃない？・・・実は妹の環も、そうだったのよ。」

「そうなんだ。・・・あたし、男の子のときもオナニーはそんなに気持ち良くなかったんだけど、女の子になってからも、乳首やクリトリスを触ってみて、やっぱりそんなに気持ち良くなくって、それで女の子の快感は、挿入されないと本当に気持ち良くならないのかなって、そう思っていたの。ほら、去勢前に優稀お義姉ちゃんにお尻をグリグリされたでしょ？・・・あのとき、初めて本当の性的快感というものを感じたんだと思うの。それで、挿入されるって、こんなに気持ちが良いんだ、頭がバカになっちゃう位、気持ち良くって、気絶しちゃうほどの快感って、小説の中だけじゃないんだって知って、それで女の子になったら、前も後も挿入して貰いたいって、それればかり考えていたのよ。」

　あちゃー。やっぱり真央は変な趣味に目覚めちゃったのかしら。これって、この前のあたしの責任だわよね。女の子になる決心が、あの所為（せい）だとすると、なんか申し訳ないわ・・・。

「あのさあ、あたしが今更こんなことをいうのは違うのかもしれないけど、誤解がないように話しておくことがあるの。」

「まずね、前でも後ろでも、挿入されれば、それは勿論、快感はあるわよ。性感っていうのは、ある程度開発しないと高まらないんだけど、それよりも、単にこれまで経験がなかったたんで、そんなところが性感帯だって知らなかっただけで、性感帯は元から変わらない

のが普通なのよ。もっとも、前後でどっちが好きか、どっちが強い快感かなんて言うのは、人それぞれで、それは性癖の違い、つまり個人差なのね。」
「男子だって、おちんちんを扱いて射精するのが普通だけど、バックが好きって人も結構いるみたいだし、なかには乳首の刺激だけで射精しちゃう人もいるんだって。」
「うん、・・・あたしも前回、優稀お義姉ちゃんにお尻をグリグリされて、あまりの気持ち良さに気絶しかかったわ。」
「男子は射精するとき、精嚢に溜まっていた精子が前立腺を通って尿道から出て来るんだけど、そのとき前立腺液と混ざって精液になって射精されるっていうのは、習ってるわよね。それで、これも男子の身体のメカニズムとして、精液が前立腺から尿道を通って射精されると、必ず強い快感を感じるものなの。これは慣れとは無関係に、身体の機能としてそのようにできているんで、誰でも最初から、かなり強い快感があるのよ。生物学的にどういう意味があるのかは知らないけど、あたしも精通したときから、快感で腰が痺れるようだったわ。」
「それに対して、女の子の快感は、最初のうちだと、ちょっとくすぐったいだけのことが多いわ。要するにそれが性的快感だって、初めはわからないのよ。・・・耳とか、首筋とか、脇の下とか、お臍とかね？」
「それ、男子のときクラスで回し読みしていたエロ本に出ていた気がする。要するに性感帯を開発するとか、調教するとか言うんでしょ？」
「まあそうね。でも、実は身体の快感って、単に一瞬の享楽なんだと思うわ。変なたとえかもしれないけど、大人になれば、誰でも楽しめる嗜みのようなものじゃないかしら。つまり酒や煙草みたいな嗜好品ね。・・・それに対して、精神の快感が得られると、幸せを感じるの。それでね、あたしもまだよくわかっていないんだけど、セックスすると、身体の快感だけじゃなくって、精神の快感も得ら

れるのよね。」
「やっぱりあたしにはまだ難しい話なのかな。それを知るためにも、中学に入ったら、早くボーイフレンドをつくって、最後まで経験してみたいな・・・。」
「それは大賛成よ。あたしも驚いたんだけど、身体的快感というのは、実は性的快感の半分程度しかなくて、性的快感のうち、もう半分は、この精神的な満足感というか、心の快感なの。これは男女ともにあるものなんだけど、どちらかというと女子のほうが、この精神的な心の快感の比率が大きいのかな？」
「？？？」
「よくわからないかしら？・・・この話は、妹の環にも話したんだけどね、女子は誰でも、妊娠して、子供を産むことが最高の幸せに感じるように身体の構造や脳神経の構造ができているものなの。・・・特に自分が好きな相手のおちんちんを挿れられて、身体の一番奥深くに射精されると、『あっ、種付けされた。この男性の子供を妊娠して産むんだ！』って、そう思わされちゃうじゃない。でも、それが、精神的な満足感につながるんだと思うわ。つまりこれで自分という女性がこの世に生まれてきた目的を達成することができたっていう女性としての本能的な幸せというのかしらね。・・・簡単に言っちゃうと、これで自分の次の代に生命の輪をつなぐことができたっていう、そういう女性としての心の快感が得られるものなの。」
「ふーん・・・。でも、生命の輪をつなぐっていうなら、男子だって一緒じゃないの？・・・子孫を残そうって言う本能は、雌だけじゃなくて雄にも等しくある筈だわよね？」
「勿論よ。男子の場合も女子と一緒で、自分の子孫を残すという生物の本能に基づく満足感っていうか、達成感は当然あるわ。つまり、ようやくこれで、自分の子供を産んでくれる女性を手に入れた、自分の遺伝子を種付けすることができたっていう感情ね。それが精神的な快感につながるのも女子と一緒。これでやっと、自分の遺伝子を次代に残すことができる、自分の遺伝子を受け継いだ次代が産ま

れるのが確実になった、・・・要するに自分の家族を得ることができたっていう精神的達成感なんだと思うわ。これはコインの裏表のようなものだから、基本的には同一の感情の筈で、だから精神的な部分は、多分一緒だと思うの。でも身体の造りが少しだけ違うのか、男子は、どちらかというと身体的な快感のほうが少し勝っていて、女子は精神的な快感のほうが少し勝っているのかもしれないわ。」

そんな話をしながら、真央と身体のいろいろな部分を比べていった。お互い、あそこの中までクパァして見たんだけど、やっぱり同じ遺伝子から造られているだけあって、発育度合い（または使い込み度合い？）はともかくとして、基本的な造作はまったく一緒だと思ったわ。ただ、触れてみると、性能というのか感度が桁違いで、それは性感の差にモロに現れているみたい。

同じ場所を同じように刺激したとき、真央はまだ、ちょっとくすぐったいとか、なんか変な感じという程度なのに、あたしはもう脳天まで響くような快感が全身を貫いて、一瞬でイッちゃいそうになるの。最初真央は、あたしがふざけて演技しているんだと思っていたのよね。真央にクリトリスの先端をそっと摘まれたり、間違って肘で乳首をスッと擦られたりしただけでも、ビクンッビクンッとなって、歯を食いしばって耐えないと一瞬で気をやっちゃうほどなの。あたしがあんまり喘いだり、ビクンッビクンッてなるんで、面白がった真央はわざとあたしのクリトリスとか乳首とかに、さりげなく、または笑いながらタッチしてきて、さんざん遊ばれちゃったわ。最後は何度も、本気でイカされちゃったし。・・・いつか、このお返しは、タップリしてあげなきゃね・・・。

「優稀お義姉ちゃんが言ってる精神的な幸せというのは、まだあたしには本当にはわからないけど、でも言いたいことは何となくわかる。要するに精神的な快感を得ることができるのが夫婦であり、そ

の夫婦によって子供ができる、ということが、家族という存在の基本だっていうことでしょ？」
「そうね。その家族を持ち、家族を増やしていく、つまり本当に好きな相手、心から愛するパートナーと一緒になって、二人の分身をつくり、産み育てて行くことが、人生の幸せなのよ。これは多分、男女とも差はないと思うわ。・・・あたしが言おうとしていること、わかるかしら。」
「何となくだけど、コインの裏表？・・・というか、もっと複雑ね。・・・サイコロとか、多面体のいろいろな面を違った角度から見ているだけで、本質はひとつの概念？・・・ということで合ってるかしら？」
「そのとおりよ。やっぱり真央は、年齢にしては随分と大人びた考え方ができるのね。」
「でも、そんなに幸せなことなのに、どうして日本ではここまで少子化が進んじゃったのかしら。社会科の授業では、歴史的な背景も解説されたわ。確か、今から１００年位前に少子化が進んだのは、子育てが大変だったとか、経済的な理由だとか、さらには核家族化が子供を育てる環境としては適していなかったとか、様々な原因を述べているけど、それらの殆どは、今はもう解消しているわよね。それなのになかなか人口が回復してこないのは、何故なのかしら。日本の人口が爆発的に伸びたのは、食糧事情が改善されて間引きとかしなくてもよくなった明治から大正にかけてらしいけど・・・。」
「それはいまだにわかっていないみたい。ただ、昭和の前半までは、乳児の死亡率が高かったんで、それで必要に迫られて子供を沢山つくっていたという背景があったのは事実よね。それが高度経済成長を経て、子供はまず死なない、全員が成人まで成長するとなったとき、子供を沢山つくるインセンティブが薄れちゃったんじゃないかしら。取り組んでみると面白い課題かもね。」
「ところで、話は変わるんだけど、真央のおちんちんとたまたまは、

どうしたの？・・・年齢にしては、結構立派なものだったと思うんだけど、誰かに移植したの？」
「それね。・・・実は、まだ誰もいなくて、このまま1カ月程度、移植希望者が出てこない場合には、希望すると貰えるらしいんだ。最近では、身内の細胞でクローンが認められるようになったんで、切り取った性器の需要は減っているんだって。・・・しかも、昔は広口ビンにホルマリンみたいな保存液を入れて漬けるのが主流だったそうだけど、最近ではプラスティネーションといって、細胞内の水分を特殊な樹脂で置き換えるのが主流らしいの。それも、最初の頃はプラスチックのような固い樹脂だったんで、仕上がりも固いプラスチックの模型のような手触りだったのが、今ではゲル状の柔らかい樹脂を使って、生きているときとまったく同じ手触りが再現できるんだって。」
「そんなことができるんだ。真央のおちんちんは立派だったから、貰えるなら絶対に貰っておくべきよ。」
「それだけじゃなくってね、看護婦さんが話しているのをチラッと聞いただけなんだけど、等身大の人体模型にくっつけて、生きているときと殆ど変わらない手触りのおちんちんとたまたまにすることもできるんだって。しかも体内に特殊なポンプが入っていて、スイッチで血液そっくりの樹脂を注入することによって、普段の状態からギンギンに勃起した状態まで、自由自在にできるみたい。」
「それって、・・・まさか・・・。」
「うん、ここから先は看護婦さんも、噂だって言っていたけど、その自分のおちんちんで、女性になった性転換者がオナニーして、処女を捧げたというケースがあったとかなかったとか・・・。そういえば、優稀お義姉ちゃんは交換初夜で、自分のおちんちんを挿れられて処女を喪失したんだよね。どんな気持ちだった？」
「あたしの場合、最初にフェラチオしたときは、自分のものだったっていう感傷が残っていたし、これまで見慣れた自分のおちんちんが怜央に付いているのを見て、なんか不思議な感覚だった。それと、

そのときまでは、まだ心の内面というのかしら、意識が男子の視点だったんで、これが自分に挿入されるというのは、何か非現実的な感じだったわ。」
「だけど、その後は怜央があまりに上手で、あたしは怜央の手技に翻弄（ほんろう）されちゃったから、もう自分で何かを考えるような余裕はなくって、すべて怜央に任せきりだったわ。連続イキ状態にされて、イキっぱなしで何がなんだかわからないうちに、貫かれて処女を失っていたの。・・・全然痛くはなかったし、頭が変になるくらいの身体的快感で全身が痙攣（けいれん）しているところに、自分の精子を膣内射精された精神的快感が合わさって、それであたしは心の底から、意識を完全に女性の視点に書き替えられちゃったのよ。」

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

「今日は本当にありがとうございました。これで新学期から自信を持って、女の子としての中学生活に入ることができます。手術は無事成功したと頭では理解していても、やっぱり何となく不安があったんだけど、優稀お義姉ちゃんのお墨付きも貰ったし、もう何も心配することはないわ。」
　良かった。真央の不安も心配も、どうやらすっかり解消できたようね。真央の意識に一抹の不安が残るけど、まあそれは個人の性癖の問題ということにしておきましょう・・・。

　二人の身体を比べたり、いろいろ触ったりしながら、結局3時間以上も裸で話し込んじゃったわ。でも、真央も満足したんで服を着て、また下のリビングで真央が新しく淹（い）れてくれたコーヒーを飲んでいる。本当は、もうそろそろお暇（いとま）しようと考えていたところなんだ。というのは、あまりのんびりしていると怜央とご両親が帰って来ちゃうんじゃないかと、心配な時間になっちゃった。まだ、怜央

とは、ご両親にどう挨拶するかも相談していないし、それ以前に怜央のご両親のことについて、もう少し情報を仕入れてからご挨拶したいと思っていた、そのあたしの不安をまるで見透かしたかのように、玄関が開く音がした。

「「ただいま！」」

「あら？・・・どなたかお客様が見えているのかしら？」

「優稀？・・・もしかして、まだ居たの？」

「あっ、あのっ、・・・はじめまして！！・・・おっ、お邪魔しています！・・・あっ、あたしっ、杉田優稀と言います。・・・そのっ、・・・榊君のっ、・・・せっ、性別交換相手ですっ！」

第９８話　快感と幸せ（後書き）

真央ちゃんも、ようやく新しい人生に踏み出せたようです。

他方、優稀は怜央のご両親に、うまく認めて貰えるのでしょうか。

第９９話　プロポーズ（前書き）

夏休みが取れたので、１話書けました。やはり理想的には毎週更新ができると良いのですが、なかなか時間がありません。
次回更新は、何とか９月末頃までにしたいと思います。

第９９話　プロポーズ

「あっ、あのっ、・・・はじめまして！！・・・おっ、お邪魔しています！・・・あっ、あたしっ、杉田優稀と言います。・・・そのっ、・・・榊君のっ、・・・せっ、性別交換相手ですっ！」
「あっ、あなたがっ、・・・杉田優稀さんですか？！・・・こっ、この度はっ・・・、本当にっ、・・・本当に申し訳ありません。してしまってっ・・・、うちのバカがっ、とんでもないご迷惑をおかけ・・・お詫びしてどうにかなるものではありませんが・・・、そのっ、・・・どうか、・・・どうか、うちのバカを許してやって下さいっ。・・・こっ、このとおりです。・・・ほらっ、お前もだっ！」

玄関から家に上がってきた怜央のお義父様（だと思う）が、ホールでいきなり土下座したんで、驚いちゃった。それも、怜央を引っ掴んで、叩きつけるように一緒に土下座して頭を下げさせた。それに釣られたのか、お義母様まで、一緒に正座すると、三人で深々と頭を下げてこういった。
「うちのバカ娘、いや、今はもうバカ息子ですか。・・・こいつの我が儘（わがまま）のせいで、あなたの人生をメチャクチャにしてしまい、お詫びのしようもありません。・・・確かにこいつは、昔から男勝りのところがあって、私も最初は男の子が欲しかったんで、怜央なんていう男の子のような名前をつけてしまった責任もあります。しかも下の子が男子だったのに、そっちはそっちで女の子のような性格で、実際女の子になってしまうような奴だったんで、それでこいつも自分が性転換してうちの会社を継がなければならないって、そう思い詰めたんだと思います。」
「でもっ、あなたから無理やり男を奪ってしまうなんて、世が世なら犯罪者です。いくら法律で認められているにしても、男にとって

命より大事なシンボルを切り取られてしまうなんて、そんなの、気が狂ってしまっても不思議じゃありません。真央のように自分で希望したならともかく、あなたは嫌々ながら手術されてしまったのでしょう。そんなとんでもない災難を与えてしまったこのバカを、どうかっ、どうか許してやって下さい。・・・この償いは、こいつに一生かけて支払わせます。・・・本当にっ、・・・本当に申し訳ありませんでした。・・・ほらっ、お前もお詫びしろっ！！」

「ぼっ、僕はそんな？・・・それに優稀は・・・。」

「まだ言うか！・・・」

パシーンと音がして、怜央が左頬（ほほ）を押さえて呻（うめ）いた。

「お前は勝手に男になったんだから、男として躾（しつ）けてやる。・・・拳骨（げんこつ）じゃなかっただけ、感謝しろ！」

怜央が口をへの字にして、不満げな目つきであたしのことを見ながら、シブシブという様子で頭を下げた。

「あのっ・・・、お義父様・・・、あたし、本当に、そんな気にしていませんし、今では女性になって本当に良かったと、そう心から思っているんです。・・・それに、これはあたしの責任でもあるし、仮に怜央が男子にならなかったとしても、やはり誰か他の女子が怜央の代わりにあたしと性別を交換することになっていた筈です。・・・だから、本当に、頭を上げて下さい。それに、怜央にも、特に謝って貰うような話ではありません。」

「そう言って頂けると、少しは心が安らぎます。でも、お聞きした話では、結果が出たとき、まるで魂が抜けてしまったようだったとか。・・・きっと、運命を呪って涙したのではありませんか？・・・普通の男性ならば、あそこを切り取るなんてことになったら、怖くて悲しくて、死刑よりも恐ろしかったでしょう。そんな精神的な、・・男性として最大の苦痛と屈辱を与えるなんて、人間として、到底許されるものではありません。しかも、その奪ったものを自分のものにしてしまうなんて・・・。」

「それに・・・、そのっ・・・、あなたの、・・・そのっ、・・・

女性としての初めてまでもっ、・・・そのっ・・・、奪ってしまって・・・。」
「それも決まりだって言っ」
パシーン。
またしても、怜央が何かを言いかけたが、話が終わる前に思い切り頬(ほほ)をひっぱたかれた。
「お前はっ！・・・女性が望まないセックスを強制するのは、レイプなんだぞ！！・・・それも、処女を・・・。そんな奴は去勢されちまえばいいんだ！！」
「お義父様。・・・どうか、お気になさらないで下さい。あたし、怜央とセックスするのは、嫌ではありませんでした。怜央はとっても上手で、ちっとも痛くありませんでしたし・・・。」
「そうですよね・・・。今となっては、そう言うしかないですよね・・・。本当に、心からお詫び申し上げます。こんな、最低な人間に育ててしまった責任を痛感しています。どのような償いでもさせますので、どうか何なりと仰(おっしゃ)って下さい。」
「・・・あっ、あのっ・・・、あたしっ、・・・怜央とお付き合いしたいんですが、・・・その、・・・よろしいでしょうか？」
「こんな奴でも？・・・そっ、そうかっ、そうですよね。・・・あなたにしてみれば、いきなり女性にさせられてしまい、人生をメチャクチャにされて・・・。そんな状態で、普通の恋愛や結婚なんて、難しいと考えるのは当然ですよね・・・。大丈夫です。こいつに全責任を取らせますから。・・・あなたの面倒は、一生こいつにみさせます。」
「父さん！・・・僕は、そもそも手術を受ける前から、優稀には惚(ほ)れていたんだ。しかも交換初夜で、優稀と肌を重ねて、もう僕の第一妻は優稀しかいないって、そう決めたんだ・・・。」
「だから、優稀・・・。是非、僕と結婚して下さい。結婚式はいつでも良い。君が望むなら、明日にでも入籍するし、待つというなら、君が高校卒業するまで待っても良い。・・・子供ができたりすると

面倒だから、入籍だけはすぐにすべきなのかな？・・・とにかく婚約しよう。明日にでも、君のご両親にご挨拶に伺(うかが)ってよいかな？・・・多分、父さんの考えていることとは少し違う気もするけど、君のことは一生大事にする。これが僕の今の心境だ。」

「こっ、子供？！？！・・・お前、もう子供を仕込んじゃったのか？！？！・・・うっ、ぅうーん・・・。」

　お義父さんが目を回してひっくり返っちゃったわ。

「どうやら、これですべて丸く収まったみたいね。これから家族としてよろしくお願いしますね。優稀お義姉ちゃん。」

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

「里帰りはどうだった？・・・少しはのんびりできた？」

「うん、のんびり、というより、物凄く有意義で、家族の関係というものについて、新しい発見がいっぱいあったんだ。・・・僕はこれまで、家族の関係という以前に、家族とはどういうものか、何も知らなかった。それが、結婚して家を出てみて、ようやくわかったんだ。これまでの僕は、特に母さんに大変な親不孝をしていたということに気がついた。・・・いや、自分で気がついたんじゃなくて、父さんや兄さんに教えて貰ったというのが正しいのかな。」

「それじゃあ、あまりのんびり休むことはできなかったのかしら？・・・かえって大変だったなんてことはないわよね？」

「うん、いろいろとあったけど、実に有意義で僕の意識の上でも、正しい家族関係というものをきちんと認識できたんだ。またとない機会だった。本当にありがとう。」

「そう。・・・なら、良かったわ。それで、という訳じゃないんだけど、今度はあたしが少し家を開けても良いかしら。実はお母さんが、妊娠してから一度も里帰りしていなくて、お腹が大きくなって

くる前に一度、実家のおじいちゃんとおばあちゃんに顔を見せに行くっていうのよ。それで、あたしもまだ性転換してから、そもそもお母さんの実家には行っていないんで、このタイミングで一度、挨拶がてら行ってこようと思うんだけど・・・。」
「お義母さんの実家って、確か房総半島の先っぽのほうにあったんだっけ？」
「そうなの、ここからだと3時間位かかるんで、あたしもしばらく行っていないし、このところお父さんのおじいちゃんとおばあちゃんの介護に忙しくて、お母さんも1年以上ご無沙汰なのよ。」
「そうか、そういうことなら、是非行ってきてよ。・・・っていうか、僕はご挨拶に行かなくて良いの？」
「別に良いんじゃない？・・・どうせ結婚式には二人で出てくるし、それにたったの1泊2日よ。それよりも千博には、お父さんと二人でこの家で過ごして欲しいの。お父さん、せっかく日本に戻ってきてるのに、一人で過ごすのは嫌だってゴネているの。千博が残ってくれれば、二人きりで男同士の会話も弾むんじゃないかしら？・・・ね、お願いして良い？」
お、お義父さんと二人きりで一晩過ごすの？！・・・そっ、それはかなりハードルが高い。僕は料理なんて、何もつくれないし、そもそも家事は大の苦手で、この家では何もしたことがない。・・・お義父さんと二人しかいないのに、何を話せば良いんだろう・・・。
「あ、心配しなくても、千博が料理とか家事は何もできないことは知っているし、多分、お父さんがどこかに美味しいものでも食べに連れて行ってくれると思うわ。だから、あとはお父さんの話し相手になってくれれば良いだけよ。・・・適当にお酒でも飲みながらさ・・・。」
そ、それも大変だ。交換初夜のときの緊張を思い出した。何を聞かれるんだろう？・・・何を話せば良いんだろう？・・・それに、お酒が入ると、僕はどうしてもハメを外す傾向にある。酔いつぶれて漏らしちゃったりしたら、取り返しがつかない。どんなに勧めら

れても、お酒は弱くて飲めませんと拒否できるんだろうか・・・。
「大丈夫よ。お父さんには、千博をいじめるという意識はないだろうし、お酒は弱いからあまり勧めないでって、お母さんからも念を押しておいて貰うから。・・・千博も無理して飲まなきゃ良いだけよ。」
・・・どうしよう・・・。不安しかない・・・。

――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

「それじゃ、行ってきます。」
「気をつけて。行ってらっしゃい。」
お義父さんとお義母さんが軽く挨拶を交わして、お義母さんは勝美と二人で朝早く出掛けていった。朝御飯は時間がないからって、トーストと牛乳だけで、皆でさっと済ませちゃったんで、もうやることは何もない。これからどうしようかと途方に暮れていたら、お義父さんは午前中、少し仕事を片づけちゃいたいからと、書斎に籠もってしまった。昼も夜も心配しないで良いから、一人でのんびりしていてと言い残して・・・。
それで、新しい高校の教科書を何となく眺めたりしていたけど、それも飽きてしまい、リビングでテレビをつけて、何を見るわけでもなく、なんとなくソファで寝転がっていると、昼少し前にお義父さんが降りてきて、台所に立った。
「あ、今日のお昼は僕が簡単なものをつくるから、千博君はそこでのんびりしていて。・・・こう見えても、単身赴任15年の経験はダテじゃないからね。」
お義父さんが魔法のような手際で料理をつくって行く。メインはパスタで、それにサラダとスープ、さらに小鉢のサイドディッシュという組み合わせは、確かに手のかかる肉料理や魚料理ということではないんだろうけれど、パスタソースは手作りだし、サラダはロ

ーストチキンやチーズを散らした豪華なもので、前菜としてメインに負けない存在感だし、スープは野菜がたっぷりのミネストローネで、どれひとつだけでも僕には到底できないものが、たちまち出来上がって並んで行く。しかもその傍ら、てきぱきとテーブルをセットして、お皿やナイフ・フォークなどを並べる様は、レストランのようだ。

結局、僕がやったのは、冷蔵庫から飲み物を出して、グラスを並べただけだった。

「本当に申し訳ありません。僕が家事は絶望的にダメなので・・・。」

「気にすることはないさ。この家は君にとって、まだアウェイだろう？・・・それに僕だって、最初からこんなに手際が良かった訳じゃないよ。千博君も将来、もし単身赴任するようなことがあれば、この位は直ぐにできるようになるさ。人間、必要に迫られれば案外なんとかなるものだよ。・・・ま、逆に言えば、本当に困らない限り、いつまでたっても出来ないかもね。でも、それはそれで幸せなことじゃないかな。うちは明美も勝美も、こういうことは好きだし得意らしいから、それで良いんじゃない？・・・それより、子供が生まれたら、子育ては夫婦の共同作業なんだから、そっちは是非とも参加して貰うよ。」

「それは勿論、そのつもりです。」

「僕は海外への単身赴任が長くてね、勝美の子育てに殆ど参加できなかったのが心残りなんだ。・・・いや、今度の二人目も、きっと同じような状況になりかねない。できたら千博君には、僕の二人目についても、一緒に子育てに参加して欲しいんだ。・・・君にとっては義理の妹になるんだよね・・・。多分、君たちの子供と双子のように育つんだろうな・・・。勝美にとっては、自分の子供と妹を同時に育てることになるし、明美にとっては子供と孫を同時に育てることになる。楽しそうだけど、きっと大変に違いない。・・・くれぐれも頼んだよ。」

そんな話をしながら、お義父さんが鼻唄まじりで、ほんの３０分程度でつくってくれたパスタランチは、どこのレストランで出しても通用するような出来栄えだった。僕は自分のふがいなさに打ちのめされ、しかもお義父さんと何を話せば良いのかと気が気じゃなくて、最初は味なんて何もわからなかったんだけど、話が弾んでくるとお義父さんは父さんと違って、権威主義的なところが何もない、とても気さくな人で、冗談も良く言う闊達（かったつ）な性格だというのが、よくわかってきた。これまで父さんのイメージ（それも旅行前の、昔の怖い父さんのイメージ）で、何となく怖がっていたんだけど、そんな心配はまったくない。（ただし、その所為（せい）か、僕のことを弄（いじ）ってくることがあり、ときどき答に窮（きゅう）するような恥ずかしい話をされたりする・・・。）ちょっと戸惑うこともあるけど、父さんや母さんより、お義父さんやお義母さんのほうがずっと家族として気軽に接することができそうな気もする。婿に入った僕とすれば、本当にありがたくて、ほっとした。

ランチが終わると、お義父さんが食器を片付けようとしたので、その位は僕にやらせて下さいとお願いした。

「じゃ、片付けをお願いしちゃって良いんだね。・・・なら、僕は午前中の仕事がまだ少しだけ残っているから、それをやっつけちゃうよ。千博君は片づけが終わったら、またテレビでも見てのんびりしていて。・・・あ、それから夕食なんだけど、実はパーティー用のプレートとピザ、それにお寿司の宅配を頼んであるんだ。お酒は弱いらしいから、ワインを１本だけ開けよう。君もグラス１杯くらいなら大丈夫だろう。その後は、ジュースに切り換えよう。」

そう言い残すと、お義父さんはまた書斎に引っ込んでしまった。それでお皿を洗って、片付けていたら、グラスを蛇口にぶつけて割ってしまった。

拙（まず）い！！・・・やっちゃった！

やっぱり僕は、食器の片付けすらまともにできないんだ・・・。
母さんが僕に家事をやらせようとしなかったのが、よくわかる。（
そういえば、実家でもお皿を割るのは、いつも僕だった・・・。）
せめてもの救いは、普段使いのグラスだから、そんなに高級品というわけではなさそうなことだろう。でも、こういったものは、１個だけで購入できないことも多い。数が不揃いになっちゃわないだろうか・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

♪ピンポーン♪

「はい。」
　チャイムの音で目が覚めた。玄関はお義父さんが対応してくれている。僕はあのあと、下手に何かやると失敗が増えそうだったので、お義父さんの言葉に従いソファでテレビを見ているうちに、寝ちゃったみたいだ。しかも毛布までかけてくれてある。・・・お義父さんに家事を全部やらせて、自分は惰眠を貪（むさぼ）っているなんて、こんなグータラな生活、婿に許される筈はない。いや、これが嫁だったら、即日叩き出されて離縁されても不思議じゃない。
　でも、お義父さんはまったく気にしていない様子で、戻ってきた。
「お、やっと起きたね。疲れていたのかな？・・・でも勝美とはずっとご無沙汰の筈だし、何か実家で夜更かしするような愉（たの）しいことでもあったのかな？・・・そういえば、草津に行ってきたような話をしていたよね。・・・あそこの花街はどうだった？」
　そういうと、ニヤッと笑った。
「すっ、すみません。お義父さんに全部やらせちゃって・・・。」
　寝落ちしてしまったことを恥じて、僕が真っ赤になって俯（うつむ）くと、お義父さんは何か勘違いしたのか、追い打ちをかけられた。

「妻に知られないように、たまには羽を伸ばすのも、男の甲斐性(かいしょう)だよ。僕だって海外では・・・。いや、何でもない・・・。」
僕の聞き間違いじゃなければ、今一瞬、お義父さんが凄いことを言いかけたような気がするけど、それは聞かなかったことにしよう。
「さ、あとはお寿司がもうすぐ届くだろうから、そうしたら始めようか。若いんだから、もうお腹は空いただろう？」
「申し訳ありません。何から何まで、全部やって頂いて。・・・本当は婿の僕が全部やらなければならないのに・・・。」
「だから気遣いは」
♪ピンポーン♪
「お、寿司も来たみたいだね。じゃあ、始めよう。冷蔵庫からワインを出してくれるかな。」

第９９話　プロポーズ（後書き）

次回は丁度、連載開始から１００話となりますので、またここで幕間を入れようと思います。
今度は誰のお話になるのか、お楽しみに。

第１００話　（幕間）寛は受け専？（その１）（前書き）

お知らせしたとおり、第１００話となりましたので幕間を入れます。今度は寛の新しい恋人？となる石川哲也君の話です。
この話、本当は本編の時間軸の中で完全にリアルタイムとなる筈だったのですが、草津旅行が思ったよりも長引いてしまい、さらに怜央のご両親とのエピソードや勝美の里帰りなど、春休みのイベントが幾つも入ってしまったため、第１００話の幕間が先になってしまいました。時間の流れからすると、この話は連休の直前、優稀たちが全員、高校生活にも少しずつ慣れて、新しい環境に適応してきた頃のエピソードです。

第１００話　（幕間）寛は受け専？（その１）

「ねえ、杉田さん。相談したいことがあるんだけど、時間取って貰えるかな・・・。」
「良いわよ。昼休みならいつでも良いし、放課後なら今日か明後日なら空いているわ。」
「じゃあ、今日の放課後にお願い。・・・実は、ちょっと立ち入った話なんで、学校じゃ話しにくくて、下校途中に駅向こうのインディアン・バーガーで待ってるから。」
「それって、デートのお誘いかしら？」
「まさか。・・・僕がゲイだって知ってるよね？」
「ごめんなさい。初耳だわ。・・・それじゃ、４時頃に行くようにするからね。」
「ありがとう。じゃ、また・・・。」
　同じ中学から進学した石川哲也君が、急にやってきて何かあたしに話があるんだって。いったい何なのかしら。中学時代には、クラスが違ったんであまり接点はなかったし、高校でも同じ三級といっても、性転換の代償としてアップしたあたしと、二級にちょっとだけ足りなくて三級になった石川君は、今でこそ同じクラスだけど、やっぱり接点は少ないのよね。
　でも、石川君がゲイだったなんて、初耳だわ。彼はあまり、社交的なほうじゃなくって、何となく影が薄かったから、あたしも男子の時代には、何回か話したことがある程度なんだけど、本当に何の相談なのかしら・・・。

「あ、杉田さん。こっち。」
「お待たせ。・・・それで、どんな相談なのかしら。わざわざ、駅向こうに来たってことは、あまりクラスの子に会いたくないってこ

となんでしょ。・・・あ、それとも、あたしと会っていることが具合悪いとか？」
　石川君はインディアン・バーガーの3階の一番奥まったところ、しかも柱の影で、目に付きにくい場所に居た。見ると、もう自分の飲み物は完全にカラで、それ以外にナゲットとかフライドポテトとかドーナツとか、いろいろ買い込んだものを食べ始めたところだった。
「別に秘密にする話じゃぁないんだけど。その、ちょっと恥ずかしかったから。・・・あ、よかったら手を伸ばして。僕はもう1杯、コーヒーを買ってくる。何か他に食べたいものでもある？」
「これだけあれば十分よ。」
「じゃあ、それを食べながらチョット待っててね。」
－－
「お待たせ。早速なんだけど、相談というか聞きたいことは、元村寛君のことなんだ。」
「寛がどうかしたの？」
「実は僕、ずっと元村君のことが好きだったんだ。・・・その、・・・彼は、・・・いや、彼もゲイだっていう噂だったから、いつか告って、恋人になれたら良いなって・・・。でも、彼は勉強ができるし、それに中学のときは違うクラスだったから、告るチャンスも勇気もなくって、それで遠くから見ているだけだった。・・・ほら、僕はこんな性格だからさ・・・。」
「そうしたら、杉田さんが元村君とお付き合いし出した、しかも、セックスもしたって、そういう噂を聞いて、それで居てもたってもいられなくなって、彼との関係とか、彼が本当にゲイなのか、それともノーマルなのか、聞いてみたかったんだ。」
「元村君は余裕の二級だったみたいだけど、僕は僅差で三級になっちゃったんで、クラスも違うんだ。だから、本当に彼がノーマルな

ら、これを機会に彼のことはキッパリ諦めようと思ってさ。第一、彼が杉田さんとお付き合いをしているのに、僕が割り込むなんて、そんなことできないし・・・。でも逆に、彼がやっぱりゲイならば、もうこれが最後のチャンスだから、とにかくアタックしてみて、どうなるか賭けてみようと思ったんだ。」

普段の石川君は、本当にモブもいいところで、こんなに積極的な姿勢は初めて見たわ。でも、それだけ思い詰めたということなんでしょうね。必死の形相で話す姿勢は、なんだか悲壮感が漂っていて、可哀そうな位。

「あたしが寛と付き合い出したのは本当よ。ただ、寛はノーマルでもゲイでもなくって、バイだったわ。つまり男が相手でも女が相手でも、どっちでも恋愛対象になるみたいね。それと、あたしと寛の関係は、お互い本命の恋愛対象というよりも、何と言うか実質的にはセフレなのよ。まだ公表していないけど、あたしは寛以外に本命の相手が居て、その相手から、結婚のプロポーズも受けているの。でも、その相手・・・もう少ししたら、発表するつもりだけど、とにかくその相手から、いろいろな人と肌を重ねるのは、人生経験だから、結婚するまでは積極的に行動すべきだってけしかけられて、それで寛とは男子だった頃から親友だったんで、お付き合いしてセックスもしてみたってことなの。それは寛もわかっているから、あなたが寛のことを好きならば、是非ともアタックしてみたらどうかしら?・・・少なくとも、あたしは反対しないし、あたしに気兼ねして躊躇(ためら)う必要はないわよ。」

「本当?！！」

「ええ、寛がどう思うか、バイだから女性も男性もいけるクチだとしても、石川君のことを好きになるのかどうか、それはあたしにはわからないわ。でも、あたしは別に構わないし、寛だって迷惑だとは思わないでしょ。どっちにせに、アタックするのは自由じゃない？」

「わかった・・・。ありがとう。・・・それと、・・・もう一点、

気がかりなことがあって・・・。」
「？？？」
「・・・そのっ、・・・元村君のペニスって、物凄く大きいでしょ。やれ馬並みだとか、手で掴めない位だとか、長さは３０センチを越えるだとか・・・。噂だけじゃなくて、僕も修学旅行で風呂のとき、遠くからチラ見しただけなんだけど、確かに普通にしている状態でも、ちょっと目を疑うようなサイズだった記憶があるんだ。」
「杉田さんは、元村君とセックスしたんだよね。・・・どうだった？・・・どんな感じだった？・・・あれ、普段であのサイズだと、勃起したらどうなっちゃうの？」
「確かに寛のおちんちんは巨大だったわ。正確に計ったわけじゃないから、あくまであたしの感覚的な感想だけど、両手で掴んでも掴みきれない長さと太さで、手からあふれた亀頭部分を口に入れることですら、顎が外れるかと思ったわ。」
「・・・・・。」
「あそこに挿れられた瞬間は、本当に息が止まるかと思ったし、それが動き出すと、もうあそこがみっちり一杯で、下から突き上げられるのよ。・・・そうね、杭を打ち込まれて胃が丸ごと逆流しそうな感じ？・・・だったわ。」
「やっぱり、そうなんだ・・・。慣れもあるんだろうけど、女性の膣は、赤ちゃんが出てくるんだから１０センチ以上に広がるようにできているじゃない。でも、お尻の穴は、そんなふうにはできていないし、僕は勿論、まだ童貞だから、バックに何かを挿れたことはないんだ。・・・きっと、裂けちゃうんじゃないかな。」
「石川君はバック処女だったのかしら？・・・自分で楽しんだことはなかったの？」
「うん。・・・僕は自分がタチというか竿役になることしか考えたことがなかった・・・。だから挿れられると、どんな感覚なのか、想像もできないし、何より恐怖しかないんだ。」
「寛は本当に大きなおちんちんだけど、実はバックに挿れられるの

も結構好きよ。寛もバック処女だったみたいだけど、この前あたしが寛のお尻をグリグリしてあげたら、あまりの快感にすっかりハマっちゃったみたいだわ・・・。最後は、もっとやって欲しいって、自分からせがんだ位なんだから。」
「というか、男子だったら誰でも一緒だと思うんだけど、前立腺を刺激される快感って、凄いのよ。あたしも男子最後の日に教えられたし、千博も勝美に教えて貰ってハマっちゃったらしいわ。前立腺ってね、射精を司るコントロールタワーらしいのよ。そこを直に刺激されると、誰でも我慢できない射精反応が出るみたいで、本当に自分の意志とは無関係に、無理やり射精させられちゃうみたいなのね。ただ、そんなところ普通は刺激されたことないでしょうから、殆どの男子は、きっとあの快感を知らないだけなのよ・・・。石川君も、是非経験してみなさいよ。絶対に新しい世界が見えるから。」
「そうだとしても、指の1本や2本とか、せめて普通サイズのペニスならともかく、寛のペニスだよ。僕、きっと壊れちゃうよ・・・。」
まあ、壊れちゃう可能性はあるわね。でも、それは物理的に壊れちゃうんじゃなくて、精神的に壊れちゃうんじゃないかしら・・・。何事も経験なんだから、そこも含めて当たって砕けろと励ましたんだけどね・・・。

――――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――――

『下校時刻に第二校舎屋上でお待ちしています♡T．I．♡』
今朝、登校したら机の中にこんな手紙が入っていた。ごく普通の白封筒で、見た目的には事務的な連絡だって言われても信じちゃうけど、書かれている内容と、机の中に手紙を入れるっていう古典的なシチュエーションからすると、これはラブレター（告白しようとしている呼び出し）にしか見えない。T．I．って、いったい誰なんだろう。優稀が僕とセックスしたって宣伝してくれたんで、早速誰か女の子からアプローチがあったんだろうか？

でも、僕は長いことゲイ認定されていた。とすると、男の子って可能性もある。勿論、僕は両方いけるから、男子でも女子でも嬉しいんだけど、この無機質な事務封筒とコピー用紙では、差出人が男の子か女の子か、まったく見当がつかない。
クラスの中でＴ．Ｉ．ってイニシャルの子を、男女ともに考えてみたら、うちのクラスには３人居た。でも、何となく、この３人じゃない気がする。手紙を入れておくだけなら、朝早く登校すれば、他のクラスの子だって可能だし、そもそも一級から三級まで全部の生徒を合わせると、この学校は１学年で８００人も生徒が居るんだ。
・・・いや、よく考えたら、同級生とは限らないかも。上級生の先輩だったらどうしよう。別に年上だからって、こだわるつもりはないけど、でも僕は同級生ですら、まだ殆ど知らないのに、どう考えれば良いんだろうか。
そうだ、優稀にも聞いてみなきゃ。優稀とは、何となくセフレみたいな関係という気もするけど、でも僕にとって初めての恋人なんだし、いくら優稀が気にしないからと言ってくれたにしても、やっぱり優稀には一言断っておかないと、僕としては後ろめたくて会う気になれない。
そんなことを考えているうちに、あっと言う間に昼休みになっちゃった。午前中の授業は、まったく頭に入ってこなかった。
昼御飯を、購買部で買ってきた焼きそばパンでさっと済ませると、優稀のいるクラスに向かった。
「あ、寛、どうしたの？」
「うん、実は今朝、こんな手紙を貰っちゃったんだけど、誰だろう。優稀はどう思う？」
「イニシャルだけだし、あたしも差出人が誰かなんて、そんなのわからないわよ。それより寛はどう思うの？・・・会ってみても良い、あるいはもう少し積極的に、興味があるとか、会ってみたいとか、そう思っているのかしら？」
「正直、よくわからない。でも、興味がないって言ったら嘘になる。

ただ、優稀は構わないの？・・・そのっ、つまり、僕がこの手紙の差出人に会うことに、反対じゃないの？・・・いやっ、優稀にしてみれば、僕は恋人といっても、セフレに近いのかもしれないけどさ・・・。」

「あたしは別に構わないわ。というか、お互い大人なんだから、いろいろな相手と経験してみるべきだって勧めたのはあたしよ。あたしだって、寛だけじゃなくて、怜央が居るんだし・・・。」

「優稀が言っていることは、何となくわかった。黙って他の人とお付き合いするとか、ましてセックスするとかいうのは、何となく二股かけているようで、気になったんだけど、優稀がそう言ってくれるなら、まずは会ってみるよ。その上で、どうするのか、きっとまた、優稀にも相談することになると思うんだけど、そのときは聞いてくれる？・・・相手が男子でも女子でも、優稀には隠さずに話をするからさ。」

「勿論よ。恋人になるのか、1回限りの関係になるのか、または最初から断ることになるのか、どれにするとしても、それは寛が決めれば良い話なのよ。別にあたしに気兼ねする必要はないわ。・・・あ、でも、どうするにしても、寛が嫌じゃなければ、結果を教えて貰えると嬉しいな。」

「ありがとう。じゃ、とにかく今日の放課後、屋上に行ってみるよ。」

・・・あのＴ．Ｉ．って、多分石川哲也君で間違いないわよね。・・・さっそくアタックしたって訳ね。上手く行くと良いけど・・・。

―――――――――――――――

―――――――――――――

「あれ？・・・石川君。・・・もしかして、この手紙をくれたのは？」

「うん、僕なんだ・・・。驚いた？・・・僕が相手じゃ、嫌？」
「別に嫌という感情はないけど、でも驚いた・・・。」
「僕がゲイだっていうのは知っているかな？・・・元村君は、中学時代にゲイじゃないかって噂があったんで、いつかお付き合いできたら良いなって、僕、ずっと思っていたんだ。」
「・・・そうだったんだ。・・・ごめん、僕、全然知らなかった。というか、気付きもしなかった。」
「仕方ないよ。違うクラスだったし、君は勉強ができるほうだけど、僕は下のほうだったでしょ。・・・今だって、君は二級のクラスで僕は三級クラスじゃない。」
「そんなの、高校になれば同じ級だって、選択科目も随分違うから、あまり関係ないよ。単に、中学のときもそうだったように、たまたま違うクラスになっただけじゃない。」
「ありがとう。そう言ってくれると気が楽になる。・・・実は、杉田さんが君と恋人になって、その、・・・君と身体の関係を持ったっていう話を聞いて、君は実はゲイじゃなかったんじゃないかと、もう気が気じゃなくなったんだ。それで居ても立ってもいられなくて、僕としては一大決心をして手紙を書いたんだけど・・・。僕、こういうことは凄く苦手でさ、本当は今、君にこうして話をしているだけでも、心臓がバクバクして足が震えるほどなんだ・・・。」
「優稀、・・・あ、杉田さんと話をしたんだ？・・・なら聞いていると思うけど、僕はバイで、相手が男でも女でも、どっちでもいけるんだ。・・・だから、石川君がゲイで、僕のこと好きになってくれたっていうのは、とても嬉しいし、石川君とお付き合いするのも問題ない。でも、一応僕は優稀の恋人でもある訳で、だから優稀に一言聞いてからにしたいんだけど、構わないかな？・・・あ、優稀は僕に、いろいろな人と付き合った上で、その中から自分が一番良いと思う相手を選ぶべきだって言ってくれてるんで、それで僕も、まずはお試しでお付き合いしてみようかって考えたんだけど、それでもやっぱり優稀には一言話しておかなきゃね。一緒に優稀のとこ

ろに行こうよ？」
「あ、寛と石川君。揃ってどうしたの？」
二人の顔を見るに、どうやら上手く行っているのかしら？・・・でも、あたしとしては、二人から相談を受けている事実は、さすがにここでバラす訳にはいかないわよねぇ。上手く話を合わせなくっちゃ・・・。
「実は、石川君が僕とお付き合いしたいって言ってきたんだ。・・・その、優稀は僕に、いろいろな人とお試しで付き合ってみたらどうかって勧めてくれたよね。だから・・・。」
「良い話じゃない？・・・寛はバイだから、相手が男子でも問題ないわよね。だったら、是非ともお付き合いしてみて、相性とか確認したら良いじゃない。それで、やっぱり合わないとなるのか、それとも本当の恋人に発展するのか、それはあたしにはわからないけど・・・。」
「ありがとう。じゃ、優稀との関係はそれとして、石川君ともお付き合いしてみるよ。・・・二股かけているなんて言わないでね。」
「まさか！・・・勧めたのはあたしだし、そうやって経験を積めば、自分に本当に合うパートナーが見つけられ易いのよ。・・・あ、だから必ず身体の相性も確認してみてね。」
「うっ、うんっ・・・。」
「・・・まあ、・・・それはその・・・。」
「あたしが焼餅焼いちゃったらどうするの？」
「えっ、そっ、それはっ・・・。」
「そうしたら、僕・・・、元村君のこと諦めるよ。」
「冗談よ！・・・そんなこと、一切しないから安心して。・・・その代わり、あとでどうだったか、全部教えてね？」
そういって二人の背中を押したつもりなんだけど、あの二人、絶対に相性が良いわよ。そんな気がするわ。

第１００話　（幕間）寛は受け専？（その１）（後書き）

やはり長くなってしまったので、２話に分割します。同時に書き進めているので、この幕間の続きは来週位に投稿できると思います。

第１０１話　（幕間）寛は受け専？（その２）（前書き）

幕間は、この2話で終了となります。
次の更新は、１か月後位になると思います。

第101話　（幕間）寛は受け専？（その2）

「今日はありがとう。楽しかった。また会ってくれる？」
「勿論さ。というか、僕はまだ遊び足りないんだけど、この後何か予定でも入っているの？・・・まだ時間も早いし、もし良ければ、僕のうちに来ない？」
「えっ？・・・いや、特に予定はないけど、でもそんないきなり押しかけるのは悪いよ。ご家族にも・・・。」
「大丈夫。僕の両親は共働きで、日中は誰も家に居ないんだ。一人っ子の僕とすれば、誰か友達が来てくれるのは、いつでも大歓迎なんだけど。」
「そうなの？・・・じゃあ、ちょっとだけ、お邪魔させて貰うね。」

いきなり、元村君の家に遊びに行くことになった。勿論、初めてだ。これが普通の同性の友達というなら、別にどうということもないし、特別に身構えるような話じゃない。親友でなくとも仲の良い友達なら、相手の家にゲームしに行ったり、宿題を一緒にやるのも、よくあることだ。・・・でも、僕と元村君はゲイとバイで、同性でもお互い恋人として付き合おうってことで今日は最初のデートだったんだ。僕は恋愛経験がないし、そもそもこういう話には疎いんだけど、恋人としてお付き合いを申し込んで、初デートのときに、いきなり自宅に招かれるって、よくある話なんだろうか。普通の男女の恋愛だと考えた場合、随分と急な展開な気がする。それとも、これが大人の恋愛というものなのかなぁ？・・・まさか、いきなり身体の関係から、なんてことにはならないよね・・・。まだ僕、心の準備が・・・。ちょっと不安？・・・なのかな・・・。
「さ、遠慮しないで入って。・・・僕の部屋は、そんなに広くないけど、これでも慣れれば快適なんだよ。このベッドに腰掛けてゲー

ムするのが僕の一番好きな時間なんだ。・・・まだ男の子だった優稀は僕の一番の親友でさ、よくここで二人でゲームとかしていたんだ。」

「元村君は杉田さんが男の子だった頃から恋愛関係にあったの？」

「いや、当時は本当にただの同性の親友さ。優稀はノーマルだってわかっていたし、僕もバイだったから、彼と二人してギャルゲーとか、成人男性向けのゲームなんか楽しんでいたよ。あ、でも一緒にオナニーしたことはあるけどね。」

「今、何か飲み物を持ってくるから、ベッドに腰掛けて待っててくれる？・・・もしよければ、勝手にゲーム初めてくれても構わないけど・・・。」

元村君が出て行ったんで、部屋の中を見回してみる。元村君は女の子になった杉田さんとセックスしたらしいけど、このベッドでやったんだろうか？・・・そう考えると、何だか興奮してきた。でも、ゲイの僕は普通の男女のセックスには、そんなに興味はないんだけどな・・・。

屑籠(くずかご)には丸めたティッシュが一杯入っていた。多分、一人で処理したあとだろうけど、僕たち位の男の子なら、特に珍しくもないし、気にすることでもないだろう。

そんなことを考えながら視線を巡らしていたら、机の二番目の引き出しが少しだけ開いているのが目に入った。何とはなしに覗(のぞ)き込むと、何とコンドームの箱が入っていた。しかもＸＸＸＬサイズだ。そんなの、売っているのを見たことがない。ネットで特注とかしたんだろうか。・・・もし、彼からセックスを求められたらどうしよう。これがあるってことは、当然、僕の身体をそういうふうに見ているに違いない。杉田さんは、元村君がネコになる可能性も述べていたけど、だったらＸＸＸＬサイズのコンドームは準備しないだろうし、そもそも僕にこうして見せつけているってことは、これを使うぞっていう意思表示だよね・・・。よくよく考えてみれば、僕が

女の子だったとしたら、付き合っている相手が一人でいる家に、のこのこ付いていくなんて、もう身体を許しますっていう明確な意思表示じゃないか・・・。いや、エロ本の知識だと、もっと積極的に、あなたに抱かれたいっていうことになるみたいだ。・・・XXLサイズなんて、いったいどれだけ大きいんだろう・・・。僕、きっと壊れちゃう・・・（怖）。

「お待たせ。急だったんで、飲み物は冷えていなくて、といってコーヒーや紅茶を淹れるのは時間がかかるから、取り敢えず氷を入れたジュースにしたんだけど、それで良かったかな？」
「あ、勿論それを頂くよ。ありがとう。」
そんな会話を交わしながら、飲み物を机の上に置くと、僕の隣で、出口に近いほうに腰を下ろした。これで僕は、部屋を出るには彼をまたいで行かなければならなくなった。しかも飲み物を机に置くとき、さりげなく開いている二番目の引き出しを膝でそっと押して、閉めるのを見ちゃったんだ。あれって、やっぱりそういう意味だったんだ。・・・どうしよう。僕、もしかして、絶体絶命の状態になっちゃったんじゃないかな・・・。でも、自分から告白して、しかも自宅まで付いてきちゃったんだ。・・・彼がそういう期待をしても、当然な気がしてきた・・・。

――――――――――――――――――――――――――――――――

さっきから何か、石川君の様子が変だ。この家に来るまでは、ごく普通だったのに、僕の部屋に入って、飲み物を持ってきた頃から、あきらかにぎこちない受け答えになっちゃって、というかゲームをしてみても、いや、そもそも会話が完全にうわの空になっちゃった。
これってやっぱり、石川君もそういうことを期待しているんだろうな。でも、僕は優稀に筆下ろしして貰ったけど、まだセックスしたのは2回だけで、殆ど経験がない。石川君がどの位経験があるのか知らないけど、ぎこちない様子からすると、彼もそんなに経験豊

富という訳ではなさそうだ。ということは、僕から少し積極的にやってみるべきなんだろうな・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

「ねぇ、キスして良い？」
「えっ？！！・・・うっ、うん。」
　元村君がいきなりキスを求めてきた。僕は何を言われたのか、咄嗟（とっさ）に理解できなくて、つい同意しちゃった。・・・勿論、嫌だった訳じゃなくて、逆に嬉しい感情のほうが勝ったんだと思う。でも、本当に突然で、瞬間的に僕の頭はパニックしたに違いない。
　そんなことを考えながら、それでも僕は幸せを噛み締めていた。ずっと憧れていた、いわば片思いの相手から、キスをされている。それも彼の部屋で、彼のベッドに腰掛けて。
　僕は必死になって彼と舌を絡め合い、彼の口の中をなめ回し、彼の唾液を必死になって飲み込んでいた。彼は僕の身体を抱きしめていた手をそっと下ろしてきて、僕の脇の下からお腹、お尻、そして股間までを、さわさわと撫でるようにしながら、僕の耳から首にかけてキスのシャワーを浴びせてきた。僕はまだそこまで大胆にはできなくて、彼の背中に回した腕で必死になって彼に抱きついていた。
・・・もう死んでも良い！・・・このまま、彼と最後までやりたい！！・・・そんな夢見心地で、ぼーっとなっている僕の耳元で、彼が囁（ささや）いた。
「服、脱ごうか？」
　こくんと頷（うなず）くと、彼は僕から手を離して、自分のシャツのボタンを外しだした。僕も焦って、自分の服を急いで脱ぎだした。
　彼がシャツとズボンを脱ぎ、下着に手をかけたのを見て、僕はもう何も考えられず、急いでボクサーブリーフを脱ぎ捨てた。とにかく彼より先に裸になるんだと、なぜかそう思っちゃったんだ。多分、長いこと片思いしていて、しかも一度は諦めなきゃならないかもって思いつめた、憧れの元村君と恋人同士になれて、いよいよ初体験

までこぎ着けたっていう状況に、僕の頭はもう他のことを何も考えられなくなっていたんだ。

でも、そんな僕の逆上せた頭は、トランクスを脱いだ彼がこっちを向いた瞬間、凍りついた。

「ひっ、そっ、それっ？！？！」

「ん？・・・どうかした？」

「むっ、無理っ、・・・絶対に絶対に無理！！」

そうだ。忘れていた。・・・元村君の股間に屹立しているそれは、前に修学旅行のときに風呂で遠くからチラ見した記憶を更に大きく上回り、まさに馬並み、海外製のポルノ男優でも、これだけのサイズはめったに居ないという位、巨大だった。特に完全にズル剥けでテカテカと黒光りする亀頭は、杉田さんが話していたとおり、テニスボールほどもあり、口に入れるのも難しかったっていうのも頷ける。どう考えても僕の身体に入るとは思えない。・・・でも、元村君はやる気十分だ。…あれを挿れられちゃうんだ！！

「石川君は初めてなの？・・・なら、僕が受けになるよ。君がタチで僕がネコなら大丈夫だよね？」

うっ、嘘だ！！…最初はそうでも、すぐに入れ替わって挿れられちゃうんだ！！…絶対に裂けちゃう・・・。

「ごっ、ごめんなさいっ・・・。僕が悪かったのっ・・・。ここまで付いてきて、今更許されるわけはないけどっ…、でっ、でもっ、・・お願いっ、元村君のことは大好きだけどっ、・・・そのっ、許してっ、・・・何でもするからっ、・・・そっ、そうだっ・・・、口で、…口で奉仕するからっ・・・。」

「そんな心配しなくても大丈夫だよ。それに口には、多分だけど入らないよ。優稀もペロペロ嘗めまわすことしかできなかったから・・・。」

やっ、やっぱりそうなんだ！！・・・杉田さんも口に入らなくて、それで最後は挿れられて口から胃が逆流しそうだったって話してた・・・。僕もきっと・・・。

ひっ、かっ、肩を掴まれた。・・・僕の背中に手を回してくる・・・。もっ、もうダメだ！！・・・誰かっ、・・・誰か助けてっ！！

「ごめんなさいっ、許してっ、お願いっ、僕が悪かったのっ、・・・助けてっ、ひっ、嫌っ、ダメっ、・・・ぁあーんっ、ぐすっ、あーん、お願いだよぅ、…助けてっ、ヤダっ、ヤダっ、あーん、おかーさーん。」

「困ったな。…僕、石川君が嫌がるようなことは、誓って一切しないよ？・・・本当に僕が受けで、君が竿役になって欲しいんだけど・・・。だから、泣き止んでくれないかな・・・？」

「ひっ、・・・ひーっ、・・・助けてーっ・・・、僕が悪かったの、・・・あぁーん、おかーさーん、僕っ・・・。僕っ、死んじゃうよーっ！！」

「これじゃ、どうしようもないな。・・・あ、あれ使えば大丈夫かな？」

てっ、手錠っ？・・・元村君が手錠を取り出した？・・・もうっ、もうだめーっ、・・・僕っ、死んじゃうーっ！！・・・ああーん、ぁあーん。誰かーっ！・・・誰か助けてーっ！！

「ほら、これなら心配ないでしょ。カギは僕の手が届かないところに置いてっと・・・。」

「こうすれば、僕は君に何もできないよ。逆に君は僕の身体を、好きにすることができるじゃない。僕はもう君の望むまま、どんな酷い折檻や調教をされちゃっても、どうすることもできない。いわば君の奴隷になったも同然なんだ。いくら僕のあそこが大きくても、これなら怖くないでしょ？」

そう言うと、元村君は自分の両手をバンザイの姿勢で頭の上のパイプベッドに手錠で留めてしまった。カギは僕の隣の机に載っていて、元村君の位置からだと、確かに届きそうもない。

元村君は、豊かな腋毛を完全に晒してベッドに縛り付けられた状態だ。股間は、これも小柄で幼い顔つきの元村君に似合わない、黒々としたジャングルの中心から、作り物じゃないかと見紛うような、

ありえないサイズのペニスがお臍にくっつきそうな状態になっている。（元村君はヒゲも生えていないし、腕とか脛とか、外から見やすい場所の体毛はそんなに濃く見えないのに、腋毛と陰毛だけは物凄い。）

僕は彼の首から脇、胸、乳首、お臍、それにペニスをそっと撫でながら、彼に問いかけた。

「元村君は本当にそれで良いの？・・・そのっ、・・・後になって、やっぱり僕に挿れたいってならない？」

「バイっていうのは、男女どっちが相手でもOKっていうだけじゃなくて、自分がタチでもネコでも行けるっていうことなんだ。それと、この前、優稀に教わったんだ。バックって凄く気持ちが良いんだよ。・・・それに、僕、相手が嫌がっていることをやるような趣味は持っていないよ。それは優稀にも何度も話したことなんだけどさ・・・。第一、嫌がっている相手を、・・・そのっ、・・・やっちゃうなんて、レイプじゃない。そんなの、あり得ないよ。」

「わかった。・・・でも、ちょっと怖いから、手錠はこのままにさせてね？」

「良いよ。君の好きなようにして。・・・あ、でも、痛くはしないでね？」

それを聞いて、僕は元村君の身体を本格的に愛撫し始めた。彼はうっとりと眼を閉じ、僕にすべてを委ねて最高の快楽を得ようとしているようだ。なら、僕も全力で応えなければならない。初めてだけど、何とかネットの知識でやってみよう。

僕は元村君と、もう一度じっくりねっとりとディープキスをしつつ、彼の身体をさわさわと撫でるように刺激した。

「ぁあっ。…あっ、・・・ぁひっ、・・・んっ、・・・うんっ、・・・ぅうっ、・・・そっ、そこっ、・・・それっ、…あぁっ、…気持ち良ぃ。・・・ぁんっ、・・・んぁっ、・・・ひっ、・・・ひーっ。」

元村君が快感に悶えている。いや、最高の快楽を得ようと、自ら

の身体を開いているというべきなんだろう・・・。いずれにせよ、僕の愛撫は効いているみたいだ。とにかく、このまま一度、イッて貰って、それからバックにしよう。
「あっ、ぁあっ、ぃひっ、もっ、もうっ、僕っ、…もうっ、だめっ、だめっ、あっ、ああっ、ああーーっ。」
ドピューッ、ドピューッ、ドピュッ、ドピュッ。
元村君がイッた。殆どペニスを触っていないのに、身体を撫でまわしただけで射精してくれた。…これは、期待できるかも…。
「はあ、はぁ、はっ、よっ、良かったっ。・・・はっ、じゃっ、今度は僕が・・・。」
「ダメだよ。手錠外したら、僕が君に食べられちゃうだろう？…だから、次はいよいよ君のバックを・・・。」
僕は精液で濡れた元村君のペニスやお臍、乳首などをペロペロと舐め回した。彼の精液は、かなりどろっと粘ついていて、ゼリーのようだったけど、青臭いえぐみの中に、ちょっと甘塩っぱいような味がして、これが長いこと片思いで恋焦がれていた元村君の出したものだと思うと、とても愛おしく、もっと沢山出して貰いたくなった。
「じゃあ、挿れさせて貰うよ。元村君はもう経験があるそうだから、指でマッサージしなくても大丈夫だよね。」
そう言うと、彼の精液を僕のペニスと彼のお尻の穴の両方にたっぷり塗り付けて、一気に押し込んだ。
「はっ、はうっ、はぅぅっ、・・・くっ、・・・ぁあっ・・・。」
「どうかな。気持ち良い？…指と違ってペニスだと、やっぱり感覚が違ったりするの？」
「ああぁっ、ぃひっ、そっ、そこっ、・・・んくっ、ひっ・・・。」
「僕は童貞だから、男女問わず他人と肌を重ねたことはないけど、挿入するのってこんなに気持ちが良いんだね・・・。僕も凄く良いよ・・・。」
「ぁあっ、だっ、だめっ、・・・んっ、あっ、いっ、・・・んくっ、

ぃっ、イクっ、イクっ、だめっ・・・。」
「このコリっとしているところが良いのかな？・・・ここを集中的に突っついてみるね？」
「いっ、ぃっ、イッてるのっ、・・・イッてるのっ、だめっ、ゅっ、ゆっ、許してっ、もうっ、イッてるの！！」
「そうだね。ペニスから精液が滲んできているね。」
「ひっ、いひっ、くっ、イクっ、イってっ、イってるのっ！！」
「うん、このまま、連続イキ状態で快感を楽しんでよ。」
「だめっ、つっ、辛いっ、辛いのっ、お願いっ、もうっ、もうっ。」
「女の子はイキ出すと、止まらなくなって連続イキ状態になるらしいね。君も今はネコで受けなんだから、このまま連続イキ状態を楽しんでみてよ。」
「そっ、そんなっ、僕っ、だめっ、あっ、ぁひっ、しっ、死ぬっ、死んじゃうっ、ぃひっ、ゆっ、許してっ、もうっ、ひっ、ひーっ。」
「じゃあ、僕もそろそろ射精させて貰うよ。・・・あ、でも心配しないで。僕、君みたいにペニスが大きい訳じゃないけどさ、精力には自信があるんだ。・・・これまでにも、休みなく連続5回とか射精したこともあるから、一度や二度射精した位じゃ止まらないよ。このまま挿れっぱなしで、1時間位は余裕で君のこと愛し続けてあげるからね？」
「いっ、一時間？・・・ひっ、そっ、そんなっ、たっ、たすけっ、助けてっ・・・、あっ、ぁひっ、あひーっ。」

第101話　（幕間）寛は受け専？（その2）（後書き）

この話の後日談は、本編において連休直前に、二人して優稀のところに報告に来たときに明らかになります。雌落ちして（させられて）しまった寛はどうなっちゃったのか。変わり果てた寛に優稀も驚きます。

第１０２話　勝美の里帰り（前書き）

お待たせしました。何とか月内に投稿できました。

第１０２話　勝美の里帰り

「乾杯！」
「乾杯！！」
　まずワインで乾杯してから、ケータリングしたパーティープレートからローストチキンと海老のアヒージョのようなものを取り分けた。本当はお義父さんの分も僕が気を利かせて取り分けるべきだったと、後になって気付いたけど、もう手遅れだ。お義父さんは自分でさっさと料理を取ってから、僕にプレートを回してくれた。こういったところが、僕は致命的にダメなんだ。元女子だった身としては、これまでどうしていたの？・・・という程に気が利かない。多分、勝美がいろいろと気を回してくれていたのに甘えて、自分では何も考えていなかったということなんだろう。やっぱり、勝美は僕には出来過ぎた相手なんだろうか・・・。
「どうかな。少しは我が家に馴染んできたかな。・・・まあ、私は海外に行っていたけど、我が家は明美も働いているから、いつも勝美一人しかいなくて、そこに君がよく遊びに来てくれていたのは聞いているよ。だから、勝手知ったる他人の家だったのかもしれないね。」
　そう言って、お義父さんがニヤニヤした。これって、恋人が一人で居るのを狙って、当時はまだ女子だった僕が下心を持って通っていたと言外に弄っているんだろうか？・・・確かにそういう期待がゼロじゃなかったのは確かだけど、勝美は手を出すどころか、僕に触れてもくれなかった。・・・その辺りの事情はお義父さんも知っているとは思うんだけどな・・・。
「まあ、それはともかく、私と二人きりで過ごすと聞いて、結構気が張っているんじゃないかい？・・・そんな、心配せずとも、取っ

て喰ったりしないよ。・・・どうも君は、婿に来たということで、やたらと身構えてしまうところがあるけど、それってステレオタイプの嫁・姑関係とか、婿・舅関係に囚われすぎていないかい？」

「すみません。僕は性転換とは関係なく、家族関係が苦手というか、家族との距離感がよくわからなくて、それで今回の里帰りで行った草津でも、温泉で父さんや兄さんにさんざん窘められて、説教されたんです。」

「えっ、そうなの？…君は他人のことにすごく気を遣うほうだし、自分が良ければそれで良いというところは見られないし、とにかく素直で性格が良い。さすが勝美が惚れただけのことはあると、前から思っていたんだけど、それでも足りないの？」

「ええ。そういった性格とか、気遣いとかではなく、家族の関係、…うまく言えないのですが、例えば親は子供にどう接するべきか、子供は親にどう甘えたりすべきか、そういった普段の生活の中での、その何と言うか、付き合い方が良くわかっていなかったんです。」

「それはまた、難しそうな話だね。でも、家族の関係なんて、そんなに身構えなくても、普通に自然体で接すれば良いと思うんだけど、何が問題だったの？」

「いや、確かにそうなんですが…。そうですね、一言で言ってしまうと、僕が母さんの干渉を鬱陶しいと感じて、避けていたということなんだと思います。…実は僕が男子になりたかったのも、その母さんの干渉から逃げたいと考えたからなんです。…申し訳ありません、そんなつまらない理由のために、勝美には性転換を強要することになってしまい、遠藤家にも本当に大きなご迷惑をおかけしてしまいました。」

「まあ、思春期になると、男の子でも女の子でも、親との関係は難しいものだよ。同性の親でも異性の親でもね。それが成長するということだし、そうやって自我を確立して行くものなんだ。親も子も、お互いに試行錯誤しながら学んでいくものじゃないかい。子供だけじゃなくて、親もそうだ。」

「でも、そのために勝美を巻き込んでしまい・・・。」
「それはまた別の話だと思うよ。勝美が自分で選択したことだ。君が気にすることじゃないさ。」
「そうは言っても、やはり原因をつくったのは僕ですから。…僕が母さんに上手に甘えることができなかったのが、こんな結果を招いてしまって・・・。」
「それは勝美もそうだよ。あの子も甘えるのは決して上手じゃなかったな。それに、男子のクセして、結構恥ずかしがり屋だったんだよ。中学に入る直前位から、それまで一緒に風呂に入っていたのに、絶対に一人で入るようになったんだ。それも明美はともかく、僕とも一緒に入るのはさりげなく避けていたな。夢精したときも、最初のころは必死に隠していたからね。・・・まあ、僕が不在がちだったんで、異性の親しかいないのが、やりにくかったのかもしれないけどね・・・。」
「そっ、それでしたらっ、僕、今夜のお風呂をご一緒してよろしいですか？・・・そのっ、この家のお風呂はかなり大きいですし、・・・あ、勿論、ご迷惑でなければですが、よろしければ背中を流させて下さい。」
「おっ、それ良いね！・・・じゃあ夕食が終わって一休みしたら、一緒に風呂に入ろう。息子と一緒に風呂に入るのは、実はちょっと憧（あこが）れていたんだ。結局、成長した勝美とは一度も風呂に入らないまま、性転換しちゃったからね。・・・今の勝美と一緒に風呂に入るなんて言い出したら、ヘンタイ親父として勝美にも明美にも絶交されちゃうよ（笑）。」
　そんな話をしながら食べたご馳走は、どれも大変美味しかった。こういうケータリングとかも、きちんと温めてお皿に盛りつけると、まるで見違えるし味も良くなったように感じる。そういうところも、僕は何もできないのに、お義父さんは手慣れていて、まるで自家製パーティー料理と見紛（みまが）うような雰囲気だった。
　お酒は最初に話したとおり、ワインを二人で1本だけにしたんだ

けど、結局僕が半分以上を飲まされてしまい、なんだかまた頭がふわふわして、身体がホンワカした状態だ。でも、僕の顔が赤くなってきたのを見て、お義父さんがあとは全部飲んでくれたんで、泥酔して戻したり漏らしたりするような酔い方はしてない・・・。と、思う・・・。大丈夫・・・。多分・・・。

ーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

「うちは風呂こそ広めだけど、さすがに脱衣室まで銭湯並とはいかないんで、ちょっと狭いかな。・・・あ、着ていた服は全部洗濯機に投げ込んでしまえば良いからね。」

そう言うと、お義父さんが着ているものをパパッと脱ぎ捨てて、タオルも持たずに風呂場に入って行ったんで、僕もあわてて服を脱ぎ、お義父さんの後を追った。変に隠すのは男らしくないし、みっともないから、少し前を突き出し気味にして風呂場に入って行った。

「おっ、堂々としているね。立派なもんだ。良く見せてくれるかい？・・・さっきも話したとおり、勝美は中学に入る前位から、決して一緒に入ろうとはしなくなったんで、僕は成長した勝美の身体を見たことがないんだ。君についているのが、勝美のペニスとキンタマだよね。」

先に入っていたお義父さんが、椅子に腰掛けて僕のほうを向いて話しかけてきた。

「ええ、勝美に貰ったものです。・・・どうぞ、じっくり見て下さい。」

そう言って、お義父さんの前に仁王立ちとなり、さらに腰を突き出した。僕の股間が、腰かけたお義父さんの、丁度目の前にある。まだ、ものすごく恥ずかしい。でも、これは慣れなきゃいけないんだ。同性の家族に見られるのが恥ずかしいなんて、そんな感覚は間違っているに違いない。さっきもお義父さんが、勝美のことを恥ずかしがり屋だって非難していた。つまり、そっちが普通の感覚なんだ。家族とは、裸の付き合いをするものなんだ・・・。

「見事なものだな。手術の跡がどこにも見えないよ。どこまでが君の元からの身体で、どこからが勝美のものだったんだろうね。でも、そうか、思春期以降、一度も見たことはなかったけど、勝美のペニスとキンタマは、こうだったのか・・・。小学校のときは、つくしんぼみたいな子供ちんちんだったけど、いつの間にか大人のペニスになっていたんだな。・・・勝美はいつからズル剥けになったんだろう？」
「あ、それは手術のとき、そうされたんです。なんでも性器の移植を行うときは、標準的な性器の規格？・・・というんでしょうか、それが決まっていて、そこから外れているときには、標準値に収まるように整形するんだとか・・・。ただ中学生では、まだズル剥けになっている子はあまり居ないんで、性転換手術するときは、ほとんど必ず、というか自動的に割礼といって、包皮を切り取られてしまうそうです。・・・勝美は仮性包茎で、普段は皮を被っていて、先端がちょっとだけ出ていましたが、勃起すると完全に剥き出しになっていました。」
「ふーん？・・・そうだったんだ・・・。で、千博君は何でそれを知ってるの？・・・恋人とはいえ、確か、二人とも結婚前は童貞と処女だったんだよね？」
「そっ、それはっ、そのっ、…実は僕たち、セックスは、いやっ、そのっ、そっ、挿入はしていないのですが、その前段階というかっ、二人でしょのっ・・・。あっ、あぅっ、あぅぅぅ・・・。もっ、申し訳ありません・・・。ぼっ、ぼきゅたちはっ・・・。」
「おっ、それは興味がある話じゃないか。この程度の話で噛んでいないで、少し詳しく聞かせてくれるかな？」
「そのっ、試験の少し前ですが、・・・二人してトップを取って、お互いの性器を交換しようと約束したときに、前もってお互いの身体・・・その、自分に移植されるものを良く見て知っておこうと、そういう話になり、それで二人で裸になってお互いのことを見せ合ったのです。」

「へぇ、さすがは恋人同士だね。普通、性別交換する相手とは、そんなことはできないし、やらないよね。それで？」
「僕たちはそれまで、キスしかしたことがなくて、それで僕は勝美に処女を捧げるんだって、ずっと思っていましたから、そのときセックスもしようかと思いました。というか、僕のほうがまず我慢できなくなっちゃったんです。でも、勝美が嫌がりました。・・・つまり、もう二度と経験できないことを知ってしまうと、万一それをもう一度経験したいと思ったとき、やるせなくなるのが嫌だって言っていました。」
「でも、二人で裸で、お互いの身体を触ったりしているうちに、最後は二人とも我慢できなくなっちゃって、それで、そのっ、僕が提案して、そのっ、シックスナインをしました。」
「そうだったのか。つまり二人は挿入こそしていないけど、それよりも激しい性行為を経験していたということなんだね。…良かった。勝美はヘタレだから、こんな素晴らしい彼女がいるのに、手も出せずにウジウジしているんじゃないかと、ずっと心配だったんだ。」
「いえっ、そんなっ、勝美は僕にいつも優しくしてくれて、いろいろと…。」
「優しいだけじゃ、男とは言えないよ。…あいつ、もしかして、キスも自分からはできなかったんじゃないかい？…君から誘ったんだろう？」
「えっ、えぇ。…まあ、その…。」
「やっぱり、二人は性別交換して正解だったんじゃないかな。勝美はそれなりに男らしいというか、チビでも男の子としてきちんと成長していると思っていたけど、どうも今の話を聞く限り、千博君のほうがずっと男らしいよ。少なくとも性格的にはね。…勝美は男性がやるべき女性のリード役を、何一つやっていないじゃないか。」
「いえ、勝美は僕が窮地に陥ったときには、必ず僕を助けてくれて…。」
「窮地とかの話じゃないさ。つまり勝美は男の子として、君という

女の子に、いや、自分の大切な恋人に、どういう働きかけをしたのか、どんな積極的な行動を起こしたのか、ということだよ。…そこへ行くと、君は自分から進んで、こうして僕に裸を、それも元気一杯になったソレを堂々と全部見せてくれたりするんだしね？」
そっ、そうだった。・・・こんな話をして、しかもお義父さんに弄(いじ)られたりしているうちに、ギンギンに勃起して、お臍(へそ)に付くほどまでにそそり立っちゃった。仕方がない。恥ずかしいけど、僕が婿として遠藤家に迎え入れられるのに必要な儀式だと覚悟しよう。
「あっ、あのっ、こんなになっちゃったんで、そのっ、ここでオナニーして射精するところをご覧に入れます。…勝美のペニスだったものから、僕が射精するところを、是非しっかり見て下さい。・・・ぼっ、僕はっ、おっ、お尻が大好きで、お尻から前立腺をぐりぐりされると、我慢できずに一瞬で射精してしまいます。」
「えっ？…はっはっはっは！！…何を言い出すかと思えば・・・。やっぱり君のほうが、ずっと男の子らしいんじゃないかい？…いや、というか、もうすっかり男の子の心になったということなのかな？…こういう猥談も、さらっと冗談をかましてついてくるなんて、頼もしい限りだよ。…まあ、何も、今ここでオナニーしなくても良いだろう。勝美とは妊娠してからご無沙汰なのかもしれないけど、TPOだってあるしね？」
やっ、やっぱりそうなんだ…。今ここで射精するところを見せるんじゃなくて、お義母さんや勝美が皆揃っているところで射精しなきゃいけないんだ！！・・・仕方がない。恥ずかしいけど、ここは覚悟を決める必要がある・・・。
はっ？・・・いやっ？・・・まっ、まさかっ、もしかして、勝美とセックスしているところもいずれ見せなきゃならないんだろうか…。それはちょっと、ハードルが高すぎる。でも、もうお義父さんもお義母さんも、僕たちの愛し合うところは詳細に知ってるから、あとはそれを見ている前で実践するだけだ・・・。困った・・・。勝美をどう説得しようか・・・。

―――――――――――――――

――――――――――――――

「お母さん、この温泉は天然なの？」

「ええ、この辺りは、案外温泉が出るのよ。といっても、この辺りは火山がないんで、温度はそんなに高くないから、温泉ではなく冷泉というのかしらね、ミネラルが溶け込んだ冷たい鉱泉なのよ。ここも沸かしている筈よ。」

　この辺りは海辺なので、ナトリウム含有量が多い、要するに海水みたいな冷泉がよく出る。なんでも大昔に地下に入り込んだ海水が、これら鉱泉の源らしい。

　今回、勝美と二人であたしの実家に来たのは、勝美と千博さんとの結婚式の前に、一度父さんたちに挨拶というか顔見世しておきたかったのよね。勝美が性転換してしまい、父さんたちも面食らっているんじゃないかと心配したけど、それはあんまり気にしていないみたいで良かったわ。しかも千博さんと性器を交換したという話をしたら、すると遺伝的には性転換しても二人の間の本当の子供ということで、何も変わらないんだねと、安心していたから、やっぱり来ただけの甲斐があったみたい。何も古い考え方というんじゃなくても、やっぱり曾孫が遺伝的に自分の子孫じゃないとなると、養子と変わりなくなっちゃうから、引っかかるところはあるんでしょうね。

　昔からよく来ていた、実家の近くの、この日帰り入浴施設、久しぶりに来たら昔とは随分変わったのね。どうやら建て替えたみたいだけど、結構儲かっているのかしら。ずっと明るくて、綺麗になったわ。…料金も少し上がったみたいだけど…。

「勝美、あなた、バスタオルを身体に巻き付けて、まさかそれで温泉に入るつもりじゃないわよね？」

「えっ、だめ？」

「周りを御覧なさい。そんなことしてる人、誰もいないでしょう。第一、お湯にタオルを浸けてはいけないのは、常識じゃない。」

「でっ、でもっ、…よくテレビの温泉番組なんかで、タレントが入浴するときは、皆タオルを巻いて温泉に浸かっているわ？…男性なら小タオルを腰に巻くだけだけど、女性の場合は必ずバスタオルをしっかり胸から巻き付けているじゃない？」

「この子は何を言っているの？…あれは放映する関係で、仕方なく隠しているだけじゃない。温泉に入るとき、タオルを湯に浸けないのは常識よ。…さ、早く取って、バスタオルは籠に入れておきなさい。」

「やっ、やめてっ。…見られちゃう…。」

「同性で何を恥ずかしがっているの？…この子は変なところで恥ずかしがるのね。第一、家族なのよ。…さ、早く取って、女の子になった勝美の身体をじっくり見せて貰おうかしら？」

第１０２話　勝美の里帰り（後書き）

１１月はちょっと忙しくなるので、次回はまた月末頃になると思います。

いよいよ、高校生活が始まります。その後は、千博と勝美の結婚式となります。

第１０３話　婚約

「そんなジロジロ見ないで！」
「なに恥ずかしがってるの？・・・そもそもここは女湯で、女性しかいないんだし、他のお客さんもほとんどいないじゃない。・・・家族に裸を見られるのが、そんなに嫌なの？」
「家族だからこそ恥ずかしいんじゃない！！・・・娘の裸を見たがる母親なんて？！！」
「何を言っているの？・・・親だからこそ、子供の身体をチェックするものよ。・・・ちゃんと成長しているか、何か不具合はないか、子供の発育は親の責任なのよ。いいこと、あなたは娘になったんでしょう？・・・だったら、母親のあたしが確認する必要があるわ。」
「それとも、まだ心が男の子のままで、あたしじゃ恥ずかしいのかしら。なら、お父さんにしっかりチェックして貰うんでも構わないわよ。帰ったらお父さんと一緒にお風呂に入ることにする？・・・勝美と一緒にお風呂に入って、勝美の身体の発育具合をチェックするなんて言ったら、お父さん嬉し過ぎて大変なことになるわよ。鼻血出してひっくり返っちゃうとか？」
「そっ、そんなっ！！」
　仕方がないわ。お父さんに裸を見せる位なら、お母さんに見て貰うのを我慢するしかないのね。でも、涙が出そうな位、恥ずかしい。・・・もともとあたしは男の子のときでも、他人に身体を見せるのが、とても恥ずかしかった。だから、中学に入って毛が生えてきたら、お父さんにも身体を見せるのが恥ずかしくて、必ず一人でお風呂に入るようにしていたし、夢精したときも必死で隠していた。判定試験のときの一斉オナニーは、身体検査のようなものだと割り切るしかなかったし、そもそも皆、自分のことで精一杯だったから、他人がどうしているなんて見ている余裕もなかったけど、千博とは

じめて裸を見せ合ってオーラルセックスをしたときは、本当に恥ずかしくて死にそうだったわ。・・・それまでにも千博から誘ってきて、何となく良い雰囲気になったこともあったけど、あたしはそこから先に行くことができなかった。どうしてよいか、わからなくて怖かったのもあるけど、お互いに裸になるのが恥ずかしくて、手を出せなかったのも大きかったわ。だから千博が裸になって迫ってきたときには、もう頭が真っ白でパニックしていたんだっけ。

　でも、今では考えられないことだわ。千博にあそこの中まで嘗(な)められても、幸せな気持ちになるだけで恥ずかしいとは感じなくなったんだから、お母さんとの裸の関係も、そのうち慣れることができるのかしら・・・。

「さ、じゃぁ納得したら、こっちに座りなさい。あたしが身体を洗ってあげるから。」

「・・・・・。」

「なめらかで、綺麗(きれい)な肌ね。男の子のときは、結構荒れた肌に見えたけど、今はよくお手入れしているわ。女性ホルモンの影響もあるのかしらね。」

「そんな、特別なことはやっていないわよ。…あ、髪は必ずリンスするようになったけど…。」

「若い、というのもあるんでしょうね。羨(うらや)ましいわ。それと、形が良くてきれいなおっぱいを貰ったじゃない。当時の千博君はそんなに巨乳とは思わなかったけど、身体が小さい勝美に移植すると、それなりに立派になるわね。」

「あっ、あのっ、もっ、揉まないでっ！！・・・あっ、ぁん、あぁっ、だっ、だめっ！・・・さっ、先っちょっ、触らないでっ。…ひっ、ぃやっ、いやっ、止めてっ！」

「後ろからじゃ、どうもやりにくいわね。・・・こっちを向きなさい。前から洗ってあげる。」

「でっ、でもっ、見えちゃう！！」

「何を今更恥ずかしがっているのよ。もういい加減、観念して、全

部見せなさい。」
　正面に回ったお母さんが、あたしの太腿の間に身体を入れて、股を閉じられないようにした。その状態で、あたしのあそこに手を伸ばしてきた。
「やっ、やめてっ！・・・お母さんのエッチ！！・・・娘のあそこをそんなっ・・・。」
「親は子供の身体の成長について、常に関心があるのよ。あなたも母親になったらわかるから。・・・娘の発育は母親が、息子の発育は父親が、責任をもって確認しなければならないの。お父さんは、大人になった勝美のあそこを見る機会がないって、ずっとぼやいていたんだけど、さっきメールがあって、千博君と一緒にお風呂に入ったそうだわ。」
「千博が？」
「お父さん、元気になった千博君のあそこをしっかり見せて貰って、これでやっと大人になった勝美のあそこを心ゆくまで見ることができたって、とても喜んでいたんだから。」
「だっ、だからってっ、・・・ひっ、それっ、やっ、やめてっ、お母さんのエッチ！！・・・だめっ、クパァしないでっ！」
「いいからっ、・・・ちゃんと中まで見せなさい！・・・綺麗（きれい）なピンク色ね。・・・さすがにもう膜は残っていないかしら？」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「はじめまして。榊怜央と申します。本日は突然おじゃまして、失礼します。」
　昨日の怜央の家での騒動の結果、こうして怜央があたしの家にはじめてやってきて、父さん以下の家族に挨拶と、それにあたしと結婚したいという了解を求めに来た。というか、あたしが帰宅して、家族皆のスケジュールを確認して、それを昨晩に怜央に連絡したん

で、それで今、我が家のリビングに怜央が来ているというのが正確なところ。
　お父さんは、娘のボーイフレンドが「お嬢さんを下さい！」と言ってくるんだ、と、一人で盛り上がっていたわ。何と言うか、ワクワクして、どう料理してやろうかと手ぐすねを引いて待っていたみたいなの。・・・ま、怜央ならば、お父さんの圧迫面接を受けても、うまく対応できるとは思うんだけど・・・。まさか、「頬を出せ！」とか言って、ぶん殴ったりはしないわよね。前にお父さんが、娘さんを下さいと言ってくる男の子を、ぶん殴って追い返す父親というのに憧れていて、一度やってみたいって話していたような記憶があるから・・・。
　実は、お母さんと博美さんから聞いたんだけど、昨晩遅く、あたしがスケジュール調整を終わった後に、怜央のお父様からお父さんに電話があったんだって。それで、今回の一連の話をさんざん詫びるとともに、本来は自分が怜央に同行して、お詫び方々ご挨拶に伺わなければならないところだけど、怜央が自分一人で行くって言い張るから、失礼を承知で怜央を一人で行かせることにしたんで、好きなように煮るなり焼くなりして下さいと言われたみたいなの。何だか少し心配になってきちゃった。

「で、君は優稀の性別交換相手だそうだが、今日はどういった用件かな？」
「単刀直入に申し上げます。優稀さんと結婚させて下さい。」
「ほう。・・・優稀と結婚したいと・・・。わかった。希望はそれだけかな？・・・ならば、君が我が杉田家に婿に来て貰おうか？・・・私はせっかく娘になった優稀を、僅か数カ月で手放すつもりはないんだが。」
「あ、いえ、僕も榊家の跡を取らなければなりませんので、優稀さんにお嫁に来て欲しいのですが・・・。そのっ・・・、優稀さんを、お嬢さんをお嫁に下さい。」

「すると何か？・・・君は、まず優稀の男を奪い、その奪い取った優稀の男のシンボルをもって、優稀の・・・つまり私の娘の処女を奪い、最後は優稀本人を奪おうというのか？」
「そっ、それはっ、・・・そのっ・・・。」
「君が優稀とどんな関係にあるのかは、よく知らないが、私は結婚そのものに反対するつもりはない。それは二人の合意があれば、二人の関係で決める話だろう。・・・法律にもそう書かれているからな。しかし結婚の形態となると、家と家との関係が絡んでくる。二人で駆け落ちするなんていうのは、ドラマの世界だ。そんなことをして、幸せになれる筈もない。それは判るな。」
「・・・は、はぃ・・・。」
「で、君は、これだけ杉田家から大事なものを次々に奪って行って、何を見返りに提供してくれるんだ？」
「・・・？？？・・・」
「君が、我が杉田家から奪うものに見合うものとして、君は何をもたらしてくれるか、と聞いている。・・・勿論、若い君が今すぐ、何かをできるとは期待していない。しかし出世払い、という言い方が適切かどうかは知らないが、君が今回、杉田家から、つまり私から奪って行ったものに見合うだけのものを、将来のことも含めて構わないが、何がしか提示してくれないと、優稀をやる訳にはいかない。これは、私の金融マンとしての性（さが）のようなものだ。といって、学生の君が、将来の抱負でも良いのだが、杉田家にどんなメリットをもたらしてくれるのか、そう簡単には示せないんじゃないかな？・・・だからこそ、君が我が家に婿に来てくれるのか、と聞いたつもりなんだが・・・。」
「そのっ、月並みですが、優稀さんを一生、大事にさせて頂きます。必ず幸せにすることを誓います。」
「君は学年トップの成績だと聞いているが、その割には頭が悪いのか？・・・まず優稀を幸せにするかどうかは、君と優稀との問題であって、杉田家としては、何のメリットもない。君が婿に来るなら、

君の優秀な頭脳も、我が杉田家に必ずや貢献してくれるだろうが、優稀を嫁に連れて行かれては、杉田家は何も得るものはないぞ。違うか？」
「・・・・・。」
「品の良い言葉ではないが、そういうのは、『やらずぶったくり』と言うんじゃないか？」
「・・・申し訳ありません・・・。」
「それに、そもそも優稀を不幸にしたのは君だろう。だったら、優稀を幸せにするのは、当然の義務というか責任であって、それはメリットでも何でもないこと位、子供でもわかる理屈だな。そんなものを振りかざして、私の質問に回答したつもりになっているのか？」
「いえっ、そのっ・・・。」
　怜央が真っ青になってきたわ。あの、いつも自信たっぷりで、言い合いでは、まず負けたことのない怜央が、一言も反論できず、一方的にやり込められている。昔から父さんが怒ると、本当に怖かったけど、ここまで圧倒的な貫禄の差があるとは思わなかった。さすがは同期のトップでいなほフィナンシャルグループの役員になった父さんの面目躍如（めんもくやくじょ）ね。・・・怜央、大丈夫かしら・・・。でも、事前に父さんから、サインが出るまでは、助け船を出してはいけないと釘を刺されているし・・・。
「さて、ということは、二人の結婚は良いとして、君が杉田怜央として我が家に婿に来てくれるということで良いのかな。・・・会社については、どうせ君の家で株式をおさえているんだろうから、君が杉田怜央として社長になれば良いだろうし、社名もそのままで構わないだろう。榊家を誰が継ぐかは、君と君のお父様の意向次第だが、妹さんに婿を取るのでも良いし、あるいは君が優稀に生ませた子供のうちの誰かに、榊の姓を名乗らせて、いずれその子に譲るのも良いんじゃないかな。それなら多分、君のお父様も反対はなさらないと思うぞ。」
「そっ、それって、つまり、・・・僕のしたことは・・・。」

「うむ。ただ優稀の人生をメチャクチャにしただけで、杉田家と榊家に多大な混乱を巻き起こし、それでいて何も得るところがない、それどころか、マイナスの効果しかない完全な徒労だったということだ。・・・ま、若いときには、ありがちな暴走だな。自分のしたことの影響について、まだよくわかっていない若造が陥る失敗だ。」
「そっ、そんなっ・・・。」
「若さ故の失敗は、誰にでもある。それを見守り、正しく指導するのも周囲の大人、とりわけ親の責任だ。私とすれば、君が婿養子になってくれるなら、それ以上は特に何も言うつもりはない。・・・優稀と二人で幸せな家庭を築いて欲しい。」
「・・・うっ、・・・うぅっ、ぅぐっ、ひぐっ、・・・ぼっ、僕はっ・・・ぐっ・・・。」

とうとう怜央が泣きだしちゃった。真っ青になって俯き、必死に耐えていたんだけど、プルプルと小刻みに震えながら、涙がぽたっ、ぽたっと膝の上に滴り落ちている。号泣しないのは立派というべきなのかしら。・・・前に父さんが、娘さんを下さいと言ってくる男の子をぶん殴って追い返してみたいと話していたけど、この圧迫面接は、頬を何発か殴るなんて比較にならない位の大きなダメージだわね。怜央、もう立ち直れないんじゃないかしら。
「では、納得したなら、これにサインして貰おうか。まあ、今はまだ婚約だろうから、提出は子供が出来た段階で構わないが、とにかく形式だけでも整えておくべきだからな。」

父さんが取り出した紙は、何と婚姻届けだった。しかも、そこには杉田怜央と杉田優稀という名前が既に記載されており、さらに父さんの手には、養子縁組申請書まで握られていて、そこにも杉田怜央の名前が記載されていた。ここで何らかの反論というか、少なくとも説明をしないことには、このまま杉田怜央とされてしまう。そ

うなったら、怜央のこれまでの努力は、すべて無に帰すどころか、逆効果となってしまうわ。これで、ついに怜央の心が折れてしまったのか、とうとう本格的に泣きだしちゃった。

「ごっ、ごめんなさいっ。ぐっ、ぅぐっ、ぼっ、僕がっ、・・・僕が浅はかだったんですっ！」
「そんなのはわかりきってる。・・・君はもう大人なんだから、自分の行動に責任がある。私としては、君と優稀が一緒になれて、我が杉田家にとっても君の榊家にとっても、受け入れられるアイデアを出したつもりだが、何か不満があるのかな？」
「ぅっ、つっ、くっ、ぇっ、ぅうっ、ひぐっ、ぅぐっ。」
「れっ、怜央っ！！・・・大丈夫？」
「ぅぐっ、うぅっ、ぅわーんっ。ぁあーんっ。ぼっ、僕がっ、・・・全部悪いんです！！」
「やっと理解できたか？…まあ、若さ故の過ちは、誰にでもある。そんなに気にするな。」
「ぼっ、僕はっ、・・・ひっ、ひーんっ、僕は榊家の跡を継がなければならなかったのにっ、それがっ、…ひっ、ひぐっ、ひーんっ。」
　怜央が突っ伏して号泣しちゃった。完全に勝負があった、という言い方が適当なのかどうかわからないけど、泣きじゃくっている怜央がここから反論して、お父さんに何かを提案するなど、とても考えられない愁嘆場になっちゃった。
　すると、ここでお父さんがあたしにニヤッと笑い、テーブルに置いてあったチョコレートをひとつ取って、口に入れた。普段、お父さんは甘いものをほとんど食べず、しかもこの状況で茶菓子に手を伸ばすという、極めて場違いで不自然な行動。これこそ、怜央が来る前にお父さんから言われていた、助け船を出しても良いというサインだわ。
「あ、あのっ、お父さん、・・・あたし、怜央の家にお嫁に行きたいんだけど、ダメかしら・・・。そのっ、今のあたしは女の子なわ

けで、勿論、結婚したいというのはそのとおりなんだけど、やっぱり女の子の憧れは、お嫁に行くことじゃない？…女の子になって、お嫁さんになって怜央に嫁ぐことを夢見てきたの。」

「確約できるわけじゃないけど、あたし、怜央と結婚したら子供を5人位は生むつもりだわ。きっと怜央も精一杯頑張ってくれると信じている。・・・あたし、杉田家とか榊家とかのメリットがどうかなんて、よくわからないけど、少なくともお父さんに沢山の孫を見せてあげる。・・・お父さんの昔からの夢だった、孫に囲まれたいっていう願いを叶えてあげる。」

「ふむ。だがそれは、婿に来ても一緒じゃないのか？」

「多分だけど、婿に入るより、あたしがお嫁に行くほうが、子供を沢山つくれるような気がするの。別に根拠はないんだけど・・・。それに、あたしと結婚することをタテにとって、怜央を縛り付け、怜央が思い描いた人生をすべて諦めさせるのは、それこそお父さんの言う『やらずぶったくり』になるんじゃないかしら？」

「榊君。・・・優稀はこう言っているが、君は子供を沢山つくって、私が孫に囲まれるようにしてくれると約束できるか？・・・そもそも、一級男子の義務として、できるだけ沢山の子供をつくるべきなのだが、君は何名位の子供を育てるつもりかな。」

「こっ、子供は・・・、多ければ多いほど良いと思います。幸いにも僕の家は金銭的には余裕がありますし、子供の5人や10人位でしたら、余裕で育てる程度の資産もあります。だから、優稀が協力してくれるなら、それこそ野球チームやサッカーチームをつくれる位まで頑張ります。」

「よし、では将来、沢山の子供をつくるということを担保に、優稀を嫁に出すことにしよう。・・・優稀もそれで良いな？」

「そうか？・・・優稀がそうしたいというなら、何とか叶えてやりたいとも思うが、杉田家としては何も得るところがないというさっきの話については、どうするつもりだ？」

「はい！」
「榊君。良かったな、優稀がお嫁に行きたいと言ってくれて・・・。そうでなければ、君はこのまま杉田家に婿入りするところだったんだぞ。優稀によくよく感謝しておけよ。」

なんだかまるで、将来の利益を担保に融資をしているみたいで、多分お父さんの普段の仕事そのものといった雰囲気なんだけど、取り敢えずこれで済んだのかしら。多分、嫁入りするあたしの立場を、少しでも有利にするための、父さんなりの一芝居だったのかもしれないけど、こんなの意味があるのかしらね。単にお父さんが舅（しゅうと）として怜央をいびって楽しんでいるだけじゃないかしら・・・。

涙と鼻水でひどいことになっている怜央を、まず洗面所に連れて行って、顔をあらわせている間に、お母さんと芳恵さん、環、それにお父さんや義朗兄さんも総出で、パーティー料理や飲み物などが瞬く間にテーブルにセットされた。怜央が洗面所から戻ってくると、お父さんがいきなりシャンペンを勢いよく抜いて、それにあわせて環と晶がクラッカーを鳴らした。

「「「婚約おめでとう！！」」」
「「「末永くお幸せに！！」」」
「優稀のことをよろしく頼むぞ。」

怜央は、何がなんだか訳がわからず、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔で、いつまでも目を白黒させていた。

第１０３話　婚約（後書き）

遅くなりました。優稀と怜央の関係も、ようやく見えてきたようですね。
次回は何とか年内にもう一回、更新したいのですが、時間が取れるかどうか・・・。

第１０４話　恐怖の三カ月検診？（前書き）

あけましておめでとうございます。

今年もぼちぼちと更新させて頂きますので、引き続きよろしくお願い致します。

いよいよ高校生活が開始します。新しい性別で、それぞれ高校生活を謳歌する様をお楽しみ下さい。

第１０４話　恐怖の三カ月検診？

入学式はすごい人数だった。この周辺には高校はひとつしかないから、近隣の３つの街の中学の卒業生が殆ど全員入学してくる。だから1学年は８００名近くとなり、Ａ組からＺ組まで２６クラスもある。ただ、実態的には一級のクラスが２クラス６０名、二級のクラスが１２クラス３６０名、そして三級のクラスが１２クラス３６０名となっていて、これらはカリキュラムもすべて異なっているため、これら３つの異なる高校がひとつに集まって運営されているようなものだ。

つまり、実質的には二級１２クラス３６０名（３学年では１０８０名）の高校と、三級１２クラス３６０名（同じく３学年では１０８０名）の高校があって、その上に少数精鋭の一級２クラス６０名（３学年では１８０名）の高校がある、というような感じなんだろう。１学年１２クラス３６０名程度なら、とりたてて大きな高校ということでもない。勉強のカリキュラムも適当だし、学校としてのまとまりも中庸だ。

といっても、校舎や施設・設備は共通だし、クラブ活動も共通なんで、その意味で一級から三級までは勉強の上では異なるにしても、やはりひとつの高校という意識にはなる。全員同じ制服だし、入学式とか体育祭（運動会）とか文化祭などは、学校全体で一丸となって活動する。

これだけ大きな学校だと、全校生徒が入れる建物はないらしくて、入学式と卒業式は外部のホールを借りて実施される。だから、午前中には外で式典だけ実施して、その後学校に戻り、各クラス単位で細々とした追加のプログラムが午後に予定されている。まあ、一学年で８００名弱、三学年だと２４００名ものマンモス校だから仕方がない。父兄席も一応あるけど、かなり人数が限られている。これ

も、もう成人した大人なのだから、ということで、出席する父兄は例年そんなにいないみたいだ。うちの両親も勝美の両親も、中学の卒業式には揃って来ていたけど、高校の入学式にはもう出ないと言われた。中学までは親の責任範囲だけど、成人した後は、子供の人生だということなんだろう。

　高校に戻って、まずはクラス分けを確認した。僕たち一級はA組とB組なんで、だいたい半分ずつに分かれている。これは他の中学からの生徒も同様で、各学校からA組とB組にそれぞれ10名ずつ配置されていた。僕はA組で、勝美とは別のクラスになったけど、結婚していると別々になるのかな。・・・多分、双子を同じクラスに配置しないみたいな配慮なんだろうか？
　榊君とは同じクラスになった。橘さんはB組、それに和田君もB組だった。入学に伴う細々とした事務的な伝達事項を聞いたり、各種プリント類なんかを受け取り、あとは勝美を誘ってクラブ活動でも見て回ろうかと、隣のクラスに赴いた。といっても、部活は連休までが選択期間で、この間はいろいろな部活にお試しで参加することができるらしいから、そんなに慌てることはない。中学では僕はバスケ、勝美はサッカーだったけど、二人とも今度は文科系のクラブが良いかなって前に話していたんだ。やっぱり、性転換すると、どうしても運動能力的には様々な点で不利になったり、勝手が違うこともあるみたいだから・・・。
　B組に行くと、何だか、ただならぬ雰囲気だった。その中心には和田一彦君が居て、まるで出涸(でが)らしのミイラというか、いかにも辛そうな雰囲気で老人のように椅子に座っていた。
　他の中学から進学してきた子で、特に性転換して男子になった（らしい）子が何名も取り囲んでいて、和田君を質問責めにしているんだけど、和田君は本当に話すのも辛いという様子で、俯(うつむ)いたまま、一気に歳をとったように見えた。声は嗄(しゃが)れていて、ゼイゼイという息も大変そうだし、何より心が折れてしまっているらしくて、ガッ

クリして元気がない。いや、これは泣きだす一歩手前のように見える。横には、山野さんが寄り添うようにして和田君の手を握り、何とか励まそうとしている。また勝美も心配そうに隣に座って、皆の質問を捌いているようだ。・・・何だかよくわからないけど、雰囲気としては優稀が赤いカードを貰って帰って来た夜に近い。

「どうしたの？・・・和田君、何だか具合が悪そうに見えるけど・・・。大丈夫？」

「あ、千博、丁度良いところに来たわ。あなたも経験者だから、説明してあげてくれる？・・・和田君と山野さん、一昨日三か月検診を受けに行ってきたんだって。…山野さんはめでたく妊娠していたそうだわ。」

「あ、そうか。おめでとう！…二人は確か、もう結婚したんだっけ？」

「ええ。あなたたちと一緒で結婚式はまだ先なんだけど、4月1日に入籍したんで、丁度良いからと3日に病院に行ったのよ。そうしたら、子供ができていて、それは嬉しくて入籍しておいて良かったんだけど、一彦が精液の検査と前立腺の検査とかで、徹底的に搾り取られちゃって、見てのとおり、ミイラみたいな搾りかすにされちゃったの。」

「どうやったら、そんなになるんだよ？」

「三か月検診って、こんなに過酷なのか？」

「あぁ、それね。・・・確かに極限まで搾り取られちゃうんだ。比喩じゃなくって、本当にもう煙も出ないという状況にされちゃうんだ。…物凄く辛くて、僕も殆ど記憶がないんだけど、でも気絶させてはくれなかったな。…とにかく地獄のようだった。…あの苦しさに比べたら、多分、尿道にカテーテルを入れられたのも、まだ手緩い気がする。」

「きっ、君もっ、もう三か月検診受けてきたの？」

「どんなだったの？…教えてよ。…あ、僕、山下中出身の佐藤って

んだ。一級で性転換した元女子なんだけど。」
「あのカテーテルより辛くて苦しいなんて、どんな拷問なの？」
「僕はA組の遠藤千博。西山中出身で、この遠藤勝美と二人で性別交換した上で1月に入籍したんだ。勝美は小学校からの幼馴染で、今は妊娠４カ月に入るところなんだ。…あ、事情があって、僕が勝美の家に婿に入ったんだけどね。」
「俺は北川中からきた下村照佳。同じく性転換組だ。お前たちの中学では、もう二組も三か月検診を受けているのか。あれはそもそも義務じゃないし、三か月から六か月の間に受けるようにと言われているんで、俺たちの中学で性転換した奴らで、もう受けてきたって話は聞いていないな。」
「そう言えば、遠藤君も結婚してるんだっけ？…結婚すると、三か月検診を受けるように指導でもあるの？」
「いや、そういう訳じゃないよ。ただ、結婚するということは、当然だけど直ぐに妊娠する可能性があるよね。結婚したら、普通は避妊せずに膣内射精(なかだし)するじゃない？…男性側は精液に問題がなければ、普通に妊娠させられるけど、女性側は子宮が正しく機能するか、着床は問題ないか、やってみないとわからないからだと思うよ？」
「それで検査に行ったって訳か。」
「うん。タダで全部チェックしてくれるんだし、本来やるべきものなら、多少早くても良いかなと思ったんだ。…ていうか、勝美の生理が遅れているみたいだったんで、その診察も兼ねて、早めに行ったんだけどね。」
「具体的に何をどうされたの？」
「あ、あたしは、物凄く恥ずかしい問診だけだったわ。…ただ、裸で内診台に上がった状態で、一人の先生が身体のあちこちを診察したり、触って感度を確かめたりしながら、もう一人の先生がとても恥ずかしい質問を次々にするのよ。…恥ずかしさで頭が一杯になっちゃって、質問に全部正直に答えざるを得ないような状況だったわ。
しかも、そんな状態で刺激をされ続けるんで、あたし、何度かイカ

されちゃった。その様子とか、あそこから恥ずかしい液が垂れてくる様子なんかも、ばっちり診察されて撮影もされちゃったわ。でも、妊娠していることが判明したんで、やっぱり早めに受診して良かったと思ってる。」

「なるほど。羞恥プレイをされたってことなのか。・・・で、女子はわかったけど、男子はどうなんだ。何故、彼がこんなに酷（ひど）いことになってるんだ？」

「そっ、それはっ、話すと千博のプライドがっ・・・。」

「いいんだ、勝美。…僕、吹っ切れたんだ。というか、この前の家族旅行で考え方を変えたんだ。…変に恥ずかしがっても、どうなるものでもない。もう僕の家族にも君の家族にも、僕の性癖はすっかりわかっちゃったし、僕もこれ以上隠すつもりはない。だから、学校でも、少しは恥ずかしいけど、そんなに隠し立てするようなことじゃないんだ。」

「別に君のこと馬鹿にするわけじゃないし、揶揄（からか）ったりもしないよ。これは僕たち性転換で男子になった奴ら全員に関係することだろう。だったら、明日は我が身なんだから、是非とも情報を共有させてよ。…なんだったら、僕たちだけの秘密にしても良いよ。」

「そうだね。一級男子は女子からの性転換組のほうが人数が多いけど、それでも２組合わせて、せいぜい２０名ちょっとだろう？…十分に秘密は守れるさ。」

「いや、別に秘密にするような話じゃないさ。ただ、ちょっと恥ずかしいんで、あまり言いふらさないで欲しいっていうだけだよ。」

「わかった。約束する。…で、何をされたんだい？」

「基本的には男子も女子と一緒で、裸で内診台に上がって手足を固定され、その体勢で恥ずかしい問診と、恥ずかしい触診を同時に受けるというものだ。問診は女子と殆ど一緒だったな。性生活全般について、頻度とか体位とか、どんなふうにやっているのか、どこが感じるか、そういった月並みな質問なんだけど、面と向かって自分の性癖とか性感帯とか聞かれるのは、やっぱり恥ずかしいよ。でも、

それと同時にペニスを刺激されたりして、その反応まで録画撮影されるんだ。もう頭の中は真っ白になっちゃって、質問に全部正直に回答させられちゃった。」

「こっちも羞恥プレイか。」

「質問の聞き方は、僕らみたいな既婚者と独身の未婚者では少し違うらしいけど、聞かれている内容は多分一緒だよ。要するに性器とか性感帯、それに性機能についての確認だから。」

「なににしても、質問と診断は、単に恥ずかしいってだけだから、どうってこともないんだけど、最後に精液と前立腺の検査をしますって言われてね。精液の検査は普通に看護婦さんが扱（しご）いてくれて射精しただけで、特に問題はなかった。でも、そのあとの前立腺検査は地獄だった。」

「先生がペニスの形をしたプラグみたいなもの、多分、あれは女性がオナニーするときに使うバイブレータじゃないかと思うんだけど、それを肛門に挿（い）入れられたんだ。」

「痛くなかったの？」

「うん、ローションをたっぷりつけてくれたし、挿（い）入れるときはそんなに辛くなかった。でも、そのプラグで前立腺をぐいぐいと押し込むようにマッサージされて、もうペニスはバキバキでギンギンに勃起して、お臍につく位だった。直前に射精しているから、普通ならそこまで勃起するとは思えないんだけど、前立腺を刺激されると男子は皆、快感が高まってきて我慢できない射精反応が起きるんだ。」

「BLでよくあるトコロテンというやつだな。」

「だけど、ペニスは触ってくれず、ひたすら前立腺だけを刺激されるんで、一気に射精するってことがなくて、どんどん快感が高まって行き、やがてじわじわと垂れているカウパー氏腺液に精液が混じってきて、何ていうのかな、精液がたらたらと出続ける状態にされちゃうんだ。」

「それって、射精の絶頂がずっと続くような感覚なの？」

「うん、普通だと男子の絶頂っていうのは、射精して精液が噴出している一瞬だけじゃない。その一瞬のイクーっていう感覚が、延々と続くんだ。」
「女子のときオナニーして、絶頂がずっと続いたみたいなもの？」
「うーん、・・・あれは確かに連続イキ状態なんて言われるけど、何て言うか絶頂感が次々と襲ってくるようなものなんだよね。うまく説明できないけどさ、その、波が打ち寄せるような雰囲気があるじゃない。でも、こっちは本当に、絶頂のピークが一瞬たりとも途切れない感覚なんだ。・・・それとも、女性でもオナニーじゃなくてセックスで男性から本当の快感を与えられると、絶頂が途切れないのかな。僕は女子のとき経験がなかったから、よくわからないけど・・・。」
「そうね、元男子だったあたしの経験からすると、確かに女子の連続イキは波のようで、絶頂が次々押し寄せるって感覚よね。それに対して男子の絶頂は射精の一瞬だけ。けれど、ほんの数秒にしても、射精が続いている間は女子の絶頂に勝るとも劣らない絶頂感が継続していて、ある意味、何も考えられない、身体が突っ張って痙攣し、とても耐えられないような快感のピークじゃない？…あたしは男子の時、数えきれないくらい射精はしたけど、どの射精も、本当にあっという間に終わったから良かったものの、その間、ただひたすら全身が快感に支配されていて、あの瞬間って、何もできないというか、他のことを考える余裕すらなかったわ。というか、早く終わって欲しい、もう精神が耐えられない、そんな状態だった気がするわ。…勿論、女子になってから経験した、イキっぱなし状態でも、他のことは考えていないんだけど、でもそのイキっぱなし状態というのは、波のように本当にイッている状態と、それが収まる状態が交互に来るような感覚なのよ。…なんだかわかり辛い喩えかしらね？」
「いや、言いたいことはよくわかるよ。僕も女子だったとき、オナニーで連続イキ状態になったことはあるけど、確かにそれは波が打ち寄せるように、絶頂の状態と、少し休んでいるような状態が交互

に押し寄せてくるような感覚だったな。」
「そう、それに対して、男子になって経験した射精の絶頂は、その女子の時代の絶頂のピークだけが大きく1回やってくる、そんな感じに思った。」
「そのピークが延々と続いて、ちっとも終わらないんだ。もう地獄だったよ。」
「よく気絶しなかったな。」
「記憶がいろいろ跳んでいて、実はよく覚えていないんだ。ただ辛かったという感覚だけが鮮明にあるんだけど、あれって気絶してたのかな…。」

第１０４話　恐怖の三カ月検診？（後書き）

またしても途中で切れてしまいましたので、近日中にもう１話更新致します。

第１０５話　恐怖の三か月検診（その2）

「じゃあ、見ていたあたしが説明するわ。構わないわよね、千博？」
「うん、僕、あのときどうなっていたの？」
「先生がプラグというかバイブレータをバックに挿入して、しばらく押し込むようにマッサージしていると、やがてあなたのおちんちんから流れていた我慢汁が白濁してきて、精液が混じってきたようだったわ。」
「そこまでは僕も記憶がある。射精が始まったのはわかったから。」
「そうしたら、先生は、この状態を楽しんで下さいとか言いながら、プラグのスイッチを操作したわ。すると、まさにバイブレータそのもののように、強く振動をはじめたのよ。それが千博の前立腺に押し当てられた状態なんで、千博はもう目が泳いで、意味不明の喘ぎ声？…それとも呻き声かしら？…それを上げ続けて、多分意識が跳んじゃったんだと思うわ。」
「僕もそのあたりから先の記憶がないんだ…。」
「でも、先生は千博が白目をむいて気絶しそうになると、力を抜いたりスイッチを切ったりしながら、千博が完全には気絶しないように、ただ絶頂の状態が継続するように、絶妙にコントロールして、たらたらと垂れるように精液が出続ける状態をキープしていたわ。」
「うわぁ。…それは…。」
「キツそうだな…。」
「その状態のまま、そうね、…１０分以上、ことによると１５分近くも続いたのかしら。…その間、千博のおちんちんから垂れてきた精液は、看護婦さんが全部ビーカーに入れていたけど、あれ、チラッと見ただけでも、多分３０cc位あったんじゃないかしら。」
「それって、普通の成人男子の射精８回分から１０回分程度じゃないか。」

「そうなのよ。終わったとき、もう千博は気絶していたんだけど、あたしが服を着せてあげようとして、うっかりおちんちんに軽く触れたら、それだけでビクッビクッと痙攣して、ピュッと射精しちゃったんだから、もう全身が連続イキ状態のままで、戻ってこれなくなっちゃっていたのね。」

「僕にはそのころの記憶がまったくないんだ。多分、完全に気絶しちゃっていたんだろうと思う。」

「それはそうよ。だって10分以上もイキっぱなしの絶頂状態をキープされ、気絶することもできず、というか気絶をさせて貰えず、普通じゃあり得ないような量の精液を搾り取られたのよ。まさに今の和田君と一緒よ。うっかり身体を触ると、また痙攣してイッちゃうんで、30分位ベッドで休ませて、それから家に帰ろうとしたんだけど、千博は立ち上がることもできなくて、立ち上がろうとした千博は、腰が抜けちゃったみたくよろめいて、手を貸そうとしたあたしが膝で股間を押しちゃったら、またしてもビクビクってなって、射精しちゃったわよね。」

「そうだったね。股間にちょっとでも触られると、全身がピーンと突っ張ったみたいになって、射精しちゃうんだ。はっきり言って、地獄だったよ。…今だから笑い話だけど、あのときは、もう死んじゃうかと思った。立ち上がることもできず、勝美がおんぶするって提案してくれたんだったね。でも、妊婦に力仕事させちゃマズイってことで…。いや、その前に、おんぶなんてされたら、勝美の背中に股間がくっついて、大変なことになっていたと思う。きっと、電気アンマ状態が継続しちゃったんじゃないかな・・・。それこそ、勝美の背中に精液を垂れ流し続けたかもしれない。」

「結局、病院からタクシーで帰ってきたのよね。」

「うん、何とか平静を装っていたけど、実は本当に苦しかった。やっと家にたどり着いたら、そのままベッドに直行だったから…。しばらく休んでから、実家に報告に行ったじゃない。あのときも、本当は勝美が付いてきてくれるってんで、内心ほっとしたんだ。」

「なんでも、これはあたしが妊娠していたんで、妊婦に旦那が襲い掛かって無理をさせないように、徹底的に搾り取るんだとか言われたけど、ホントなのかしら？…まあ、でも、確かに千博は暫くの間、あたしに触れようとしなかったけど、そんなの心配しなくても、千博はあたしの身体とおなかの子供を気遣ってくれるのは当然だろうし…。」
「そっ、そのっ、搾り取るってっ…。遠藤君もやっぱり、そのっ、だっ、ダメになっちゃったのっ？」
「何の話？」
「それはっ、…そのっ…。」
「…実は一彦がね、病院でスッカラカンになるまで搾り取られて、その所為か、おちんちんが勃起たなくなっちゃったのよ。…病院では、これで当分、あたしに手を出す気も起きないと思いますって言われたんだけど、まさか、このままEDになっちゃうんじゃないわよね。遠藤君はどうだった？」
「それね…。僕もしばらくは、勝美の裸を見ても、あるいは一緒に風呂に入っても、ピクリとも反応しなかったね。」
「ぅっ、うっ、ぐすっ、うぐっ、ひっ、ひーんっ、…やっ、やっぱりっ、やっぱりそうなんだ！！…もう…僕は…。」
和田君が泣き出しちゃった。あそこがダメになるって、男子にとっては、死刑になるのと同じくらい、精神的なショックなんだろうな。僕も最初は焦ったから…。
「そうだな。完全に元に戻ったのは、1カ月後位だったかな。あれだけ徹底的に搾り取られると、実際あそこがまったく反応しなくなるんだよね。よく煙も出ないなんて言われることもあるじゃない。それ、本当だよ。…まあ、僕はそんな無理やり搾り取られなくてもさ、勝美の身体やおなかの子供に万一のことがあっちゃ嫌だから、自制して手を出さなかったと思うけど、でも本当にペニスが元のようにきちんと勃起つようになったのは、里帰りの頃だったから、だいたい1カ月はかかったよ。」

「いっ、一カ月も？！！」
「うん、そのくらいは優にかかったな。…でも、どのみち山野さんは妊娠初期で大事にしなけりゃならない時期だから、セックスは控えるんだろう？…なら、あまり気にすることもないじゃない。別に肌を重ねずとも、夫婦の絆はそんなに簡単には壊れないと思うよ。」
「うぐっ、ぐすっ、でっ、でもっ、…1カ月もっ…、そんなにできなくってっ、…僕っ、忘れちゃうかもしれないしっ…、そもそもできるようになるって保証はないんだろう？」
「大丈夫だよ。僕たちの年齢だと、男子の性欲は果てしがないし、あっという間に回復するさ。1カ月なんて、本当に直ぐだよ。それに、僕は勝美から貰ったペニスとキンタマを信じていた。先生からは、特に期間についての説明はなかったけど、そのうち必ず治ると信じて、それまでは勝美も特に僕のことを求めては来なかったから、だいたい1カ月たって、性欲も戻ったし普通に勃起して勝美と愛し合うことができたときは、ようやく元に戻ったという安堵感はあったにしても、そんなに大騒ぎするようなことには思えなかったな。」
「そうよ。たったの1カ月よ。あなたも山野さんから貰ったおちんちんとたまたまを信じてあげて、とにかく大人しく待っていれば良いだけよ。…大丈夫、絶対にEDなんかにはならないから。」
「一彦、あたし、待っているから、身体をまず回復させることに専念して。辛いことがあったら、あたしがサポートしてあげるからね。」
「うぅっ、…ありがとう…。僕、頑張るから淳も待っていてね。」
「しかし、三か月検診って恐ろしいな。1カ月もチンポが使い物にならなくなるほど、徹底的に搾り取られちゃうのか。」
「あっ、あれって、確か義務じゃなかったよね？…受けなくても構わないんだろう？」
「確かに義務とは書いていなかった気がするけど、受けることを強く推奨するような表現じゃなかったっけ？」

「受けなかったらどうなるのかな。何かペナルティでもあったりするの？」
「いや…。多分、受けるようにしつこく言ってくるだけのような気もするけど…。」
「確か3カ月から6カ月の間で都合の良いときに受けるように書いてあったよな…。」
「そう。そして6カ月検診は確か全員受けるように書いてあったから、そっちは間違いなく義務なんだ…。」
「とすると、どっちにせよ6カ月で逃げられないということか。…俺、そんな搾りかすのミイラみたいになるまで射精させられるの嫌だよ。…何とか逃れられないのかな…。」
「でも怖いからって逃げるのは難しそうだね…。」
「僕はちょっと興味があるかな…。そういうの、されてみたい気持ちが少しあるんだけど…。」
「ここにドMが一人いたぞ！！」
「よし、お前、人身御供（ひとみごくう）になれ。早速受けてきて、俺たちに報告してくれよ。」
「でも、一人だと足腰立たなくなるまで搾り取られて、歩けなくなったら家に帰れなくなっちゃったりしない？」
「そのときは病院に一泊させてくれるだろうよ。…まずは、当たってみろって。」
「当たって砕けちゃったらどうするの？」
「それも一つの経験だ。…男なら、いや、真の漢（おとこ）なら、とにかく経験してみろ。」
「じゃあ、今度の土曜日に一緒に病院に行こうよ。二人分のアポを取っておくからさ。…二人なら怖さも半分じゃない？」
「いっ、いやっ、そのっ、俺はまだっ…、後でいいから…。そっ、そうだっ、後に取っておくから…。」
　なんだか凄い騒ぎになっているな。確かにあれは辛かったけど、

でも男子になるということは、本当はもっともっと大変な経験が待っているんだけどな…。

勝美を誘って部活の体験をいくつかやってみようかとB組に来てみたんだけど、三か月検診と、その影響の話題でものすごく盛り上がってしまい、時間がなくなっちゃったな。まあ、どうせ部活の紹介とかは、本来は明日の午後に予定されているみたいだから、急ぐこともない。確か明日は午前中が身体検査で、午後は部活の時間に充てられているんで、そこで詳しい説明とかもあるだろう。それに、体験入部に関しては、今から連休に入る前まで幾つでもやってみることができる、いわばお試し期間となっているんだから、じっくり選べば良いか。

中途半端な時間が余っちゃったんで、勝美と二人で託児室とか、子供のサポート体制について、少し見て回り、話を聞くことにした。

「あ、見学希望の新入生ですね。どうぞこちらへ。…ここに名前とクラスを記入して下さい。子供さんの名前もお願いします。…いつから利用するつもりですか？」
「あ、まだ生まれていないんです。家内のおなかに今…。だから名前はまだ…。」
「4カ月なんで、11月には生まれる予定です。…はじめてなので、全体の概要と、どんな手続きが必要なのかを一通り教えて頂けますか？」
「わかりました。それでしたら、子供の名前は未定としておいて下さい。…まず、子供は新生児、それこそ退院した翌日からでも預かることができます。普通、出産から1週間とかで退院するでしょうから、生後8日目から預かることになります。」
「まあ、でも、出産休みがお父さんとお母さん、二人とも3ヶ月は取れるんで、それが終わってからの方もいますし、あと3ヶ月も休

んじゃうと、さすがに勉強が苦しくなってついていけなくなることを心配して、１ヶ月で登校してくる方も多いですね。その辺りは、自由に決めて下さい。」
「ここは乳児専門の小児科医が常に待機していて、また設備的にも大きな産婦人科医院と遜色ないだけのものが整っていますので、安心して子供を任せて下さい。」
「赤ちゃんに母乳をあげたいときは、休み時間や昼休みに来て頂いて、こちらで授乳することもできますし、あるいは事前に搾乳しておいたものをこちらの職員が与えることも可能です。…粉ミルクでよろしければ、こちらで適宜準備して、おなかが空いたときに与えるので、お母さんは何も心配する必要がありません。」
「朝、登校するときに連れてきて頂き、夕方は授業だけでなく放課後の部活その他、校内での用事が全部済んで帰宅するときまでお預かり致します。…あ、といっても、夜は１９時までになっていますので、もし校外活動などがあるときは、事前にご相談下さい。」
「あと、お二人はA組とB組ということは、二人とも一級ですね。でしたら、必要ないのかもしれませんが、子育てが始まると、特に新生児から2歳位までは夜もあまり寝られなかったり、とにかく大変な時期です。勉強など、やっている暇がなくなって、多くの生徒では、お父さんもお母さんも、二人とも成績が一気に落ちてしまうケースが多いのです。そういうときは、子供を預かることによって、自分の勉強に充てる時間を確保するというサポートや、さらに踏み込んで授業の補習を行うサポートなども申し込めます。特に補習については、そもそも人数が少ないからというのもありますが、殆どマンツーマンに近い、生徒１人か2人に先生が１人位の割合で、わからないところを徹底的に指導してくれます。短時間でも効果的に学習してキャッチアップできるようになっていますので、是非ご利用下さい。なお、子供を預かるのは、７時まではここで受け付けますし、７時を過ぎるようでしたら、外部の提携託児所をご紹介します。ただし、その場合は当日の朝１０時までに申し込んで下さい。

その受付も、ここでお願いします。」
「あと、お忙しいお二人のために、夕食もこちらで食べられるサービスがあります。メニューは日替わりで、まあ給食のようなものですが、栄養学的にはきちんと配慮された内容ですので、よろしかったら是非どうぞ。これも当日の朝10時までに、こちらで申し込んで下さい。食べる場所はこの横の歓談室で、時間は6時から7時の間です。子供が大きくなってきたら、一緒に食べることも可能ですし、離乳食もいくつか取り揃えてあります。」

その他にも、子供を持つ両親に対しては、至れり尽くせりのサポートプログラムを、これでもかと説明された。しかも、これだけ充実したサービスが、殆どタダ同然で利用できるらしい。とにかく若い新成人に、一刻も早く、一人でも多くの子供をつくって欲しいという熱意が、ひしひしと感じられるものだった。
「あたし、こんなに充実しているとは知らなかったわ。これなら新米女子でも、何とかお母さん業をやっていけるかしら。」
「そうだね。そもそも、主婦業は慣れの要素が大きいし、勝美は実家でお義母さんが手助けしてくれるって言っていたから、僕は何も心配してはいなかったけど、でもこのサービスは是非利用すると良いね。」
「あたしたちの場合は、自分たちの子供だけじゃなくって、お母さんの子供も一緒に面倒見なきゃならないこともある筈なんだけど、そこはどうするのかしら。」
「パンフレットの最後のところに、それらしいことが出ていたね。確か、そちらは有料になりますって書いてあったよ。きっと追加料金でも払うんじゃないかな？」
「まあ、そこは後でお義母さんと相談しようよ。まだ生まれるまでは半年もあるんだからさ。」

第１０６話　身体検査

今日は午前中が身体検査で、午後がクラブ活動の説明＋体験になっている。朝、ホームルームで本日の予定とか注意事項とかの説明があって、その後、女子はクラスに残って体操着に着替え、男子は全員で体育館に移動するように指示があった。男子も体操着に着替えるのかと思ったら、体育館は大きな一部屋の中に診察するエリアと脱衣エリアが共存しているんで、その場で脱ぐだけで、特に体操着には着替えないと説明された。

これを聞いて、僕たち西山中出身ではない、他の山下中と北川中から来た性転換男子が、皆顔を見合わせた。

「あのーっ、体操着に着替えないってことは、学生服で身体検査ですか？」

「いや、男子は下着のみで、上半身は裸だ。もうそんなに寒くはないだろうし、一応暖房は入っているから、パンツ一丁でも何の問題もないだろう。・・・判定試験のときは、どうせ素っ裸でオナニーとかしてるじゃないか？」

「でっ、でもっ、僕たちっ、・・・女子からの性転換組は・・・。」

「んっ？・・・そうか、お前たち第一階級のクラスは、女子からの性転換男子のほうが多いんだっけな？・・・といっても、男子になったからには、男子として扱うしかないぞ。男子はそもそも裸を隠したり恥ずかしがったりしないものだし、下着は着けているんだ。何も全裸になるわけじゃぁあるまい？」

「・・・・・・。」

「さ、わかったらさっさと体育館に移動して身体検査を受けて来い。あ、貴重品は持っていけよ。・・・女子はこのまま、ここに残って体操着に着替えて待つように。」

そう言い残して、担任の先生が出て行ってしまった。僕たちは言われたとおり、手ぶらで体育館に移動を開始したんだけど、何となくガヤガヤと話しながら歩いていくと、他の中学出身者たちの顔色が優れないことに気がついた。

　体育館では入口のところで自分の診察カルテを受け取ると、そこで財布とかスマホとか、貴重品を預けられるようになっていて、中に入ると、もう他のクラスの子たちが身体検査を受け始めていた。体育館なんて、どこでも同じつくりだと思うけど、だだっ広い場所にパイプ椅子が並べてあって、一人一脚の椅子に、脱いだ制服を置いて、まさにパンツ一丁でそれぞれの測定項目の列に並ぶ。館内は暖房も効いていて、特に寒くもないので、他のクラスの子たちは皆、裸であちこちへとウロウロしている。勿論、衝立など、どこにもない。

　特に数えたりはしていないけど、パッと見た感じだと、ボクサーパンツの子とトランクスの子が、だいたい半々といったところかな。中にはきわどいビキニパンツを履いている子もいるが、数としては１割もいないだろう。あと、たまに昔ながらの白いブリーフを履いている子もチラホラと見える。それから向こうのほうには、褌をキリリと締めている褐色の子が１人居るけど、あれは多分、何か武道でもやってるんだろうか？…僕は褌を締めている人を、生まれて初めて実際に見たんで、思わず目が釘付けになっちゃったけど、周りの男の子たちは、チラッと見て、それ以上は特に興味があるようには見えない。男同士だと、褌を締めている人も、たまには見る機会があるんだろうな。

　僕は、榊君と隣同士の手近な空いている椅子に、学生服の上下を脱いで軽く畳んで置き、シャツも靴下もパパッと脱いで、トランクス一丁で空いている列に並んだだけど、ふと周囲を見回すと、僕たちのクラスと、それからＢ組の子のうち、他の中学から入学してきた子の多くが固まってしまっていて、服を脱ぐ手がまったく動いていない。学生服のボタンをゆっくり外して、脱いだ学生服を綺麗

に折り畳み、それを椅子の上に置いて、また畳み直している子も多い。そこへ行くと、僕たち西山中出身の子は、多少ぎこちない仕草はあるにしても、皆、普通に服を脱いで、次々とパンツ一丁になっていく。

「どうしたんだい？・・・皆、揃って脱ぐ手が止まっているみたいだけど、何か問題があるの？」

榊君が、近くに居た同じクラスの子に声をかけた。すると、その中のうち、普通に服を脱いでパンツ一丁になった子が答えた。・・・確かこの子、自己紹介で山下中出身の一条君って言っていたっけか。・・・服を脱ぐと、結構立派な身体で、肩の筋肉とか腹筋の割れ具合からしても、かなり鍛えているみたいだ。

「あ、大したことじゃないから、気にしないでよ。・・・こいつら、性転換組なんだけど、どうやらまだ心が完全に男子に成りきっていないらしくてさ、男子の前で裸になったり、周囲に裸の男子が沢山いる状況に、まだ慣れていないんだ。だから、自分の脱ぐ手も止まっているし、周囲に男子の裸が溢れているんで、固まっちゃったんだよ・・・。交換初夜を経験したといっても、あれはたった一人の女子の裸しか目にしていないし、たった一人にしか裸を見せていないだろう？・・・しかも、その相手の身体にあるのは、つい先日まで自分についていたモノなんだぜ。・・・要するに、男子の視線とか、男子の裸に対する免疫がないだけなんだ。」

「そっ、そうは言ってもっ、・・・そのっ、・・・やっぱりそのっ・・・。」

挑発されて、のろのろと服を脱ぎだした彼らだが、何か反論を試みようとはしても、やはり躊躇(ためら)いがちな様子がヒシヒシと伝わって

くるし、周囲の様子も気になるようで、それどころかパンツ一丁でウロウロする他の男子をガン見する子や、逆に目を伏せて周囲を見ることができない子もいる。
ただ、どの子にも共通するのは、皆、一様に恥ずかしそうな顔をして、真っ赤になって目を泳がせている。まるで、男子更衣室に迷い込んでしまったウブな女の子が、どうして良いかわからずワタワタしている状況というのが、一番近そうだ。

「お前ら、努力が実って、ようやく念願の男子になれたんだろう？・・それなのに、この程度のことで固まっちゃってて、どうするつもりなんだ。いくらなんでも、もう手術から4ヶ月になるんだぜ。この後、夏の林間学校とか、冬のスキー教室とか、皆で風呂に入る機会もあるだろうし、体育会系の部活に入れれば、部室やシャワー室では素っ裸でブラブラさせているもんなんだぞ。」
「・・・・・・。」
「ちっ、しょうがないな。・・・じゃ、ひとつ気合を入れてやるよ。性転換組は注目！！」

一条君は、A組とB組の男子のうち、まだ服を脱げずに固まっている子たちの前に出ていくと、いきなり自分のボクサーパンツをパッと膝まで下ろした。すると、ビンッという音がしそうな勢いで、黒々としたジャングルから天に向かって彼のペニスが立ち上がった。
「っつっ！」
「っくっ！」
「キャッ！」

それは、特に巨大ということではないんだけど、惚れ惚れ（ほぼ）するような形の整った立派なペニスだった。完全にズル剥けとなった亀頭は、エラの部分が大きく張り出していて、傘が完全に開いた松茸そっくりで、見事に上反りをして黒光りしていた。ペニスにイケメン、

というのがあるのかどうか、そもそもどんな表現が適切なのか知らないけど、思わずそう呼びたくなるような、かっこいい整ったペニスだった。
　西山中以外の性転換組は、まるでペニスをいきなり見せられた思春期の女子のような反応を見せた。目を伏せて恥ずかしそうに俯いてしまう子、逆に目が離せなくなってしまった子など、パニックに近い。しかも、自分の身体（上半身？であったり、股間であったり、あるいは全身であったり、様々）を、なぜか手で必死に隠そうとする子も少なくない。

「お前ら、男子のクセして、まだ男子の裸を見るとパニックするのかよ。・・・自分にも付いているんだろうに、もういい加減に慣れないと、これから苦労するぜ。・・・ほら、俺のチンポ、そんなにでっかくはないし、ごく普通のものだから、お前らのものと比べても、特に違うところはないだろう？・・・よく見比べてみろよ！」
「だっ、だってっ、・・・きっ、君のがっ、・・・そのっ、ぼっ、勃起しててっ・・・。」
「ぼっ、僕のもっ、・・・そのっ、大きくなっちゃってっ・・・。」
「俺たちの年齢だと、ちょっとしたきっかけで勃っちゃうことは普通だし、それどころか何の刺激もなくても、突然元気になっちゃうのも自然なんだぜ。そうなったら、すぐシコって出しちゃえば、取り敢えずはおさまる。そんなの、性転換手術したときに説明を受けなかったのかよ？」
「でっ、でもっ・・・。」
「そもそも、お前ら、ちゃんと毎日オナニーしてるのか？・・・さっきの和田君とか、そこの遠藤君とか、性転換する前からの恋人同士が結婚したなんていう特殊な状況ならともかく、手術から４カ月じゃ、まだ付き合っている相手もいないんだろう？・・・俺たち位の男子は、毎日きちんと射精しないとダメなんだぜ！・・・俺なんか、毎日何度もやっているぞ！」

そう言いながら、ペニスをシコシコと扱いてみせた。その刺激により、既に天を向いていた彼のペニスは更にガチガチになり、先端はパンパンに赤黒く膨れ上がった。そのまま、腰を振るように前に突き出し、真っ赤になって俯いている子たちに見せつけるようにしてペニスをブルンブルンと振り回していたが、近くの列に並んでいた僕のことを見ると、なぜか手招きした。何となく興味を曳かれたんで、彼のところに近付くと、彼が凄いことを言い出した。

「西山中出身の遠藤君？・・・だったよね？・・・君も性転換組だろう？・・・なのに、堂々としているね。普通の男子と、まったく変わりがないくらいだ。・・・やっぱり結婚すると、そんなに堂々とした態度になれるのかな？」
「いや、僕は別にそんな・・・。」
「どうだろう、君も一緒にパンツ脱いで見せてみてよ。ここには男子生徒しかいないんだし、そもそも男子は裸を人前に晒すのは、別に恥ずかしがるようなことじゃないよね？」
「えっ？・・・そっ、それってっ・・・？」
「こいつらに気合を入れるのに、協力してよ？・・・ね、良いだろう？・・・お願い。」

そう言うと、いきなり僕のトランクスを膝まで引き下ろしてしまった。僕のペニスは、特に勃起っているわけではなかったけど、少し半立ち状態で、それが一気に皆の視線に晒された。

「なっ、何するの！！」
「ごめんごめん。でも、ほら、俺も一緒なんだからさ、こいつらに見せつけてやろうぜ。」

そう言って、僕の肩に腕を回して肩を組み、固まっている他の性

転換組らしい生徒らに二人して素っ裸で向き合った。

「ほら、遠藤君もお前らと同じ性転換組の元女子生徒だけど、こんなに堂々としているじゃないか。これが普通の男子生徒なんだぜ。少しは見習えよ。・・・それに、お前たちについているものと、何も変わっていないだろう？・・・男子の股間にあるものは、どれも一緒なんだって。」

身体検査の会場で、いきなりパンツまで脱いであそこを晒（さら）すなんて、露出狂じゃないかと一瞬思ったけど、周囲の他クラスの男子生徒を見回すと、それぞれふざけ合ってパンツを脱がせようとしたり、あるいは逆に自分からパンツを下ろして他のやつらに見せたりと、そういった行為があちこちで行われている。勿論、一瞬だけの悪ふざけなんだけど、でも、こういうことがごく自然に行われるノリというか、これが男子生徒の日常なんだろうか。そういえば、今はもう消滅しちゃったんだけど、２１世紀にあったという男子校というのは、こんな雰囲気だったのかな？・・・男女が別々の学校なんて、僕には想像もつかない・・・。男子しかいない（または女子しかいない）学校生活って、いったいどんな風なんだろう・・・。

僕も必死になって男子の心になろうと努力しているけど、なかなか男子生徒の輪には入れていなかった。初対面の相手に、いきなりパンツを下ろされて驚いたけど、僕を普通の男子生徒とまったく同様に扱ってくれた一条君って、なんだか仲良くなれそうな気がしてきた。これまで僕には、恋人の勝美以外に、親友と呼べる友達が一人もいなかった。でも、男子になったからには、生涯の親友と呼べる同性の友達が最低一人か二人は欲しいな・・・。どんなことでも隠さず話し合える、いや、勝美との夫婦生活についても相談できるような、本当の親友になれるかな・・・。

僕たちのヌードが功を奏したのか、性転換男子たちも、ようやくパンツ一丁となり、それぞれ空いている列に散っていった。僕と一

条君は、パンツを上げると二人で同じ列に並んだ。
「いきなりパンツを下ろされるとは思わなかったよ。男の子って、いつもこんな風なの？」
「うん、ちょっと悪ふざけが過ぎたかな？・・・でも、あいつらに対しては、一定の効果があったんじゃない？」
「まぁ、確かに・・・。」
「それよりさ、君のチンポも、もうすっかりズル剥けなんだね。・・・俺は割と早くから皮が剥けてきてさ、サイズはそんなに大きくないにしても、俺たちの年齢だとかなり早いほうじゃないかと密かに自慢だったんだけど、君はいつから剥けたの？」
「うん、僕たち性転換者は、手術のとき全員皮を切り取られて、剥き出しにされちゃうんだよ。なんでも、標準的な成人男性のペニスというのが想定されていて、手術のときに、その標準的な形に整形されちゃうんだってさ。だからペニスの皮は、全員、有無を言わさず切り取られちゃっているんだ。」
「マジかよ！・・・とすると、あいつら、あんなにウジウジしていて、心の中はまだ男の子になりきっていないくせに、チンポは全員ズル剥けなのか！・・・俺のチンポ、特に大きいというわけでもないし、早く剥けた位しか取り柄がないんだけどな・・・。一級の男子は、性転換組のほうが多いんだろう。とすると、俺の自慢できるところがなくなっちゃうよ・・・。」
「そんなことないよ。君のペニス、上反りでエラが大きく張り出しているし、亀頭は黒光りしてるじゃない。僕はペニスのこと、そんなに詳しいわけじゃないけどさ、君のペニス、凄くかっこよくて立派で、イケてるように思うよ。」
「ありがとう。君のその意見は、元女子としての感想なのかな？・・・君たち性転換組は、全員、初体験は済んでるんだよね。・・・というか、君はもう結婚もしてるんだったよね。・・・俺は成人式も終わったのに、恥ずかしながらまだ女性経験がゼロで、このまま二

十歳を迎えて魔法使いになっちゃうかもしれないんだ。だから、そういった女性の視点には疎(うと)くてね。」

「でも、君は本当に堂々としていて、どう見ても元から男子だったようにしか思えないな。いや、君たち西山中の性転換組は、皆、僕たち山下中や北川中出身者よりも、ずっと堂々としていて、心の内面まで元からの男子に近いように感じるんだけど、俺の気の所為(せい)かな？」

「それね。・・・まずペニスについての感想だけど、残念ながらこれは男子になった僕の感想だよ。ペニスの大小とか形とかは、普通の女子ならまず気にしないし、多分だけど考えたこともないと思う。それを気にするのは男子のみだよ。要するに見栄の一種かな？」

「そっ、そうなのか？…でも、胸が大きいか小さいかは、俺たち男子からしたら結構大きな問題だぜ。」

「おっぱい星人を否定はしないよ。でも、胸が大きすぎて悩む女子は、案外多いんだよ。・・・勿論、小さいと悩む子もいるけどね。・・・要するに、身長なんかと一緒じゃないのかなぁ。」

「あと、僕たちが堂々としているように見えるのは、ちょっとしたイベントをやったからなんだ…。あ、ただ、これ性転換者だけの秘密なんだ。だから、申し訳ないけど、あまり詳しく話せないんだよ。」

「いや、別にそれを聞きたいわけじゃないさ。ただ、もし良ければ、山下中や北川中から来た性転換組の奴らにも、それをやってくれないかな。・・・あいつら、どう見ても、まだまだ心の中が完全に男子にはなりきっていないだろ。・・・いずれ解消されるにしても、これから俺たちA組とB組のクラスメートとして、3年間を共に過ごすわけだから、一刻も早く心の中まで完全な男子になって欲しいし、なるべきなんだと思う。今回みたいなことは、これからいくらでもあるだろうし、その度に大騒ぎするのもね。」

「わかった。それは実は優稀、・・・あ、僕の姉なんだけど、春休みに優稀が計画して仕切ったんで、優稀に相談してみる。」

「ありがとう。秘密って話だけど、もし差し支えなければ、俺もお手伝い位はできるよ。あと、さらに話が大きくなるようなら、俺たちの中学で実質的に男子全体を取りまとめていた武史、あ、伊集院武史にも声を掛けるよ。」

「伊集院君？」

「うん、彼は筆記試験の点が、ほんの少しだけ足りなくて二級になっちゃったけど、文武両道で男の中の男、いや本当の漢といっても良いだろうな。俺の一番の親友で、なんでも室町時代から続く旧家というか名家の次男なんだ。…別に武道家ということじゃぁないんだけど、でも剣道と合気道の有段者で、家に小さい道場もあるんだぜ。彼は中学では生徒会長も務めていたんだけど、一級になれなかったんで、一時はものすごく落ち込んじゃってね。伊集院家の名折れだとか、家でも相当厳しいことを言われたみたいだけど、立ち直ったのかな。・・・そういえば、さっき向こうのほうに見かけたっけ。浅黒くて、いつも六尺褌を愛用しているから、遠くからでもすぐわかるよ。」

第１０６話　身体検査（後書き）

この時代には、２０歳まで童貞だと、魔法使いになってしまうようです・・・。

第１０７話　部活選択

「そうなの？・・・身体検査で、そんな一幕があったのね。でも、その感覚、とても良くわかるわ。・・・というか、その性転換した男子たちに、ちょっと同情しちゃうわね。」

「勝美もそんな感覚があったの？・・・優稀はどうだった？・・・僕たち性転換男子組は、あの榊君の隠れ家での秘密イベントで、多少の経験というか耐性をつけたつもりだけど、確かに他の中学から来ている子は、これがはじめての裸男子大集合なのかな？」

「個人差はあるでしょうし、三学期にも体育の時間はあったでしょうから、単に慣れるのが早いか遅いかって問題かもしれないわね。でも、あたしも気持ちを切り換えたつもりだけど、やっぱり女湯に入るのは、まだ抵抗があるわよ。自分の裸を見られる恥ずかしさと、他の女の人の裸をみて、何となくドギマギするっていうか、落ち着かない感覚なのかしらね。この前、お母さんの実家に行ったとき、お母さんと一緒に温泉に入って、かなり恥ずかしかったわ。もっとも、それはお母さんだったから、逆に恥ずかしかったのかもしれないけど・・・。優稀はどう思った？」

「あ、あたしは最初にたまたまを抜かれたときから、手術そして交換初夜なんかを通じて、裸を見られる機会が多かった所為か、男子だろうが女子だろうが、裸を見たり見られたりすることに対して、ほとんど抵抗がなくなったかしら？・・・それどころか、手術の日に病院で手術着に着替えたとき、わざと全裸でお母さんの前に立って、なくなっちゃう前におちんちんをしっかり見ておいて貰ったし、手術した後で晶と一緒にお風呂に入ったら、晶があたしの身体を見たいって言い出したんで、あそこを広げて見せてあげたりもしたわよ。でも、一番恥ずかしかったのは、交換初夜の前日に、お母さんと芳恵さんの二人が風呂で全身グルーミングしてくれたときかしら。

だってあそこのむだ毛を毛抜きで一本一本抜かれたりしたんだから・・・。」
「優稀は、その前からも、裸を見られることには、そんなに抵抗がなかったのかもしれないけど、それって男子の感覚だよね？・・・それが女子になっても、そのまま継続しているとか？・・・僕の場合は、最初はやっぱり家族に裸を見られるのは嫌だったな。でも、あの温泉旅行で気持ちを切り換えることができたから。」
「今は、同性なら誰であっても、また性別にかかわらず家族なら誰であっても、裸を見られることにはあまり抵抗もないし、それどころか人前でオナニーして射精するところを見られても、そんなに抵抗感はなくなったかな？」
「その場合の家族っていうのは、勝美のご両親、つまり義理の両親でも一緒？」
「ほぼ、そうなったって言えると思う。といっても、羞恥心が完全になくなったか、というと、まだ少し恥ずかしいって感覚が残っているのも確かだけどね。・・・やっぱり、アナニーでお尻を自分でグリグリしながら射精するところなんて、お義母さんに見られるのは相当の覚悟が必要だよ。・・・まだやったことはないんだけど、でも近いうちにやらなけりゃ、本当の家族にはなれないって、この前、そう決心したし、まして入婿である以上、そういった羞恥心があっちゃダメなんだと思うんだ。・・・まあ、理性で必死に感情を押さえ込んでいる状況なのかな？」
「僕は、もともと女子の時代から、男子の裸よりは同性の女子の裸を見たかったクチだな。・・・やっぱり性同一性障害の気があったのかもしれない・・・。だから、男子の裸には、あまり興奮した記憶がないんだ。今も勿論、男子の裸は別にどうって感じもないけど、女子の裸・・・特に優稀の裸を見ると、滾(たぎ)るものがあるね。」
「れっ、怜央のエッチッ！！」
「ねぇ、面白そうな話してるね。・・・俺も混ぜてくれない？」

お昼に、いつものメンバーで集まってお弁当を食べながら、午前中のことを話していたら、一条君が購買部からパンと牛乳を買ってきて、僕たちの机にやってきた。

「さっきはビックリしたよ。いきなりパンツを下ろされるとは思わなかった。」

「いや、それよりも自分からあそこを皆に見せつけるとはね。・・・まあ、男子なら、別に素っ裸になることには抵抗ないだろうし、男子同士なら、友達と一緒にオナニーすることも自然なんじゃないかな？・・・実際に、周りにもふざけてパンツを脱いで見せびらかしていた奴が何人かいたよね。」

「ええっと・・・。確か榊君だっけか？・・・君も性転換男子なんだよね。そうは見えないなぁ。・・・あ、他のクラスの人は初めましてだよね。俺は山下中出身の一条。一条剛ってんだ。よろしくね。」

「あ、こっちがB組の遠藤勝美。僕の奥さんで、性別交換の相手なんだ。・・・それから、そっちがY組の杉田優稀。僕の姉で、そこの榊君と性別交換した元男子、つまり僕たちはもともと兄妹だったんだけど、今は姉弟になったんだ。」

「遠藤君と杉田さんって、姉弟なのに姓が違うの？・・・それに同い年なの？」

「あ、優稀とは腹違いなんだ。僕たちの父さんは妻を二人娶(めと)っているから、母親が違うんだ。優稀が2カ月早く生まれたんだけど、いつも一緒に育ったんで、感覚的には双子だね。・・・で、姓が違うのは、僕が結婚して婿に行ったんで、僕の姓が変わったからだよ。勝美は一人っ子でね・・・。」

「ごめん。立ち入ったことを聞いて・・・。でも、二人とも、完全に女の子が板についているというか、元男子だったとは、とても信じられないな。まさか、二人も性同一性障害だったわけじゃないよね？」

「あたしは自分から女性化を希望したの。恋人だった千博が男子に

なるって言い出して、そうすると恋人で居続けるためには、あたしがトップをとって女子になるしか方法がなかったのよ。それに、千博のおっぱいやおまんこが、他人に移植されるなんて絶対に嫌だったし、千博に他の男子のおちんちんが付いているなんて、考えたくもなかったんで、迷いはなかったわ。あたしも必死になって判定試験を頑張ったのよ。」

「あたしは落ちこぼれで、特にこの体型から体力点が絶望的だったのよ。だからクラスでビリになって、女性化対象にされちゃったの。・・・最初はもう茫然自失だったんだけど、いろいろあって、もうこうなったからには、女性化をたのしまないと負けちゃうって心を切り換えたの。・・・まあ、手術直前に、男子としての本懐を遂げることもできたんで・・・。」

「えっ？・・・それって、男子のときに初体験したってこと？・・・誰と？・・・。」

「あっ！・・・今のなしっ！！・・・お願いっ、聞かなかったことにして！！」

「優稀は男としても女としても、両方の性別でセックスしているんだ。といっても、その事実を知っているのは、ここに居る者だけなんだけどね。・・・僕も勝美が反対しなければ、勝美との間で、性別交換の前後でセックスしていたかもしれないけど。」

「わかった、誰にも言わないよ。こう見えても、僕は口が固いほうだから。」

「ありがとう。」

「それにしても、君たち、随分複雑な事情があるみたいなのに、そんなことまったく見えないよね。さらに凄いのが、望んで男子になった二人は当然としても、女子になった二人も、一人は望んで女子になったらしいし、望まないのに女子にされちゃった杉田さん？・・・も含めて、四人とも元から男子だったり女子だったとしか思えない位、完全に心の底まで意識が切り替わっているじゃないか。」

「それね。・・・さっきちょっと話したけど、僕たち西山中では、

性転換者8組16名で、ちょっとした秘密のイベントをやったんだ。で、その中心となったのが優稀なんだけど、優稀の働きで、男子は男子らしく、また女子も自分の境遇を嘆いたり落ち込んだりせず、女子としての新しい人生を楽しむように意識を切り換えることが出来たんだと思うよ。」
「そうか、もしできたら、山下中出身者や北川中出身者の性転換者にも、是非ともその秘密のイベントとかをやってくれないかな。・・・あいつら、望んで男子になったクセに、さっきも見たとおり、まだ心の底から男子に成りきれていないだろ？」
「女子にされちゃった奴らは、もっと悲惨だぜ。もう手術から4ヶ月が経過してるのに、未だに人生が終わっちゃったような暗い雰囲気から一歩も抜け出せていないんだ・・・。引き籠もっちゃった奴もいるし、一応登校してくるにしても、常に俯（うつむ）いていて、話しかけようとしても逃げるように引いちゃうんだ。・・・高校でどうなるのかは知らないけど、三学期は中学でもカウンセリングとか、さんざんやっていたんだよね。でも、どうしても自分の身に起きた不幸を嘆くばかりで、何も改善されていないみたいだぜ。制度だから仕方がないってのはわかるけど、とにかく可哀相というか、元のクラスメートがそんな状態じゃ、こっちもやりにくくてね。」
「カウンセリングは多分ダメよ。自分の身に起きた不幸が自分の中でループしちゃうのよ。そうでなくて、同じ境遇の女性化した仲間・・・あたしみたいに自分で希望したんじゃなくて、優稀みたいに無理やり女性にされてしまったクラスメートに励まして貰うのが、やっぱり特効薬なんじゃない？」
「俺もそう思う。西山中の女性化組は、希望した遠藤さんは当然として、それ以外の誰もが、とても生き生きしていて、新しい性別で新しい人生を精一杯楽しもうとする意欲とか気力に溢れていない？」
「わかった。それじゃ、その件については、僕たち西山中出身の性転換者全員で働きかけをしてみるよ。」
「是非頼む。男子組は同級生として、どうにもやりにくいし、女子

組はかつての同性の友達だったのに、あの惨状はなんとかしてあげたいからさ。」
「じゃ、性転換者全員のリストをつくるところから始めよう。山下中からの該当者はお願いして良いかな。あとは北川中からの該当者だな。それはこっちでも当たってみるか。・・・僕と千博で男子を当たるから、優稀は女子を当たってくれる？」
「ええ、良いわよ。五十嵐さんとか山野さん、あ、今はもう和田さんかしら。・・・彼女ら他の元男子だった子にも、協力して貰うわ。」
「でも、和田さんは和田君の看病というかケアで戦力にはならないわよね。」
「まあ、一人位いなくても作業はできるわよ。和田さんには、皆で集まったときに来て貰って、あの落ち込んでいた状態から今の幸せ一杯な状況までの心の変化を話して貰うことにするから。」
「そう言えば、和田君で思いだした。性転換男子は3ヶ月検診であんなに酷い目に会うんだね。僕は女性経験がないんで、他人に射精させられたことがないんだけど、無理矢理射精させられるって、どんな感覚なんだろう？・・・やっぱり、苦しいのかなぁ。さっきの千博の話だと、拷問みたいだったらしいよね？・・・結局、何をするにしても、やはり相応の覚悟が必要というか、試練があるということなんだなぁ。」
「あのっ、僕も今度、3ヶ月検診を受けに行こうと思ってたんだけど、・・・そのっ、優稀も一緒に受けてくれるかな？」
「ええ、良いわよ。あたしは別に妊娠している可能性は・・・、多分ないと思うけど、性別交換相手と一緒に検診を受けるのは自然だから、今週末にでも行きましょうか。」
「ありがとう。じゃ、僕の方で優稀と二人の検診のアポを取っておくよ。・・・やっぱり、遠藤君や和田君を見ちゃうと、ちょっと怖いんでね・・・。」

怜央はそう言ったけど、多分、そんなに酷いことにはならないんじゃないかしら。だって、千博や和田君が搾り取られちゃったのは、要するに奥さんの妊娠が発覚して、激しく求めたりするとお腹の子供に障るかもしれないということを危惧したからだと思うんだけど、違うのかしら・・・。でも、いつも自信タップリの怜央が内心はかなりブルっているのって、ちょっと可愛いかな・・・。先日の、父さんの圧迫面接で泣きだしちゃったことも含めて、完璧人間だと思っていた怜央も、やっぱり普通の男の子なのね。・・・何だか嬉しいわ。

―――――――――――――――

―――――――――――――

「ところで部活はどうするの？・・・午後は各部、それぞれ説明会やオリエンテーション、それに体験入部なんかのプログラムを組んでいるだろう？・・・まあ、体験入部は連休前までお試し期間があるから、焦ることはないんだけど、でも今日が実質的な初日なんで、各部ともいろいろ趣向を凝らした工夫をしているみたいだし、先輩たちも揃っているんじゃないかな？」

「僕は生徒会に入ろうかと思っている。会長は選挙があるみたいだけど、あとは部活と一緒で参加した子に会長が役割を割り当てていくらしいから、とにかく入ることはできそうだ。」

「あたしは前に千博にも話したとおり、今度は文科系の部活に入ることにするわ。女の子らしい、おしとやかな雰囲気を身に付けたいんで、茶道部か華道部を考えてるの。だから今日はこのどっちか、または両方を見て回るつもりよ。」

「茶道部と華道部って、一緒に活動していることが多いらしいよ。茶道部で使うお花は華道部が活けているようだし、両方とも同じ畳の和室で活動するんで、隣あった和室で活動することになって、何かあると両部合同でやっているんだって。」

「あたしは女子会結成から円に勧められてフィットネスクラブで水泳を始めたんで、水泳部を見に行くわ。この学校には屋内プールがあって、冬でも泳ぐことができるっていうのが、凄く魅力的なのよ。・・・あ、でも、あまり選手育成に振ったような活動だったら考えちゃうな。泳げないわけじゃないけど、初心者なんだし、選手みたくタイムを競うつもりはないんで、泳法をきっちり教えてくれると良いんだけど・・・。」
「大丈夫じゃない？・・・紹介プリントには、４泳法だけじゃなくて、古式泳法とか着衣泳法とかも指導してくれるようなことが書いてあったから・・・。」
「じゃ、あたしは水泳部に行ってみるわ。千博はどうするの？」
「僕は新聞部に入ろうかと思ってたんだけど、生徒会も楽しそうなんで、そっちも見に行きたいな。」
「新聞部と生徒会なら、掛け持ちもできるんじゃない？・・・確か、新聞部は生徒会の会報発行を下請けしているって聞いたことがあるよ。・・・僕は生徒会に行ってみるんで、一緒に行ってみようよ。それで掛け持ちが可能か、どんな様子なのか、先輩に聞いて見たらどう？」
「それ、俺も聞いたことがある。新聞部は、実質的には生徒会報道班だって・・・。俺も生徒会やってみようかって考えていたから・・・。」
「じゃあ、午後は分かれて、勝美は華道部と茶道部、優稀は水泳部、僕と榊君と一条君は、まず生徒会に行ってみようか。」
「あ、それなら生徒会に行く前に、ちょっと武史、・・・伊集院武史を誘ってみて良いかな。さっき遠藤君にはチラッと話したんだけど、彼は僕の親友で、中学のときは男子全体のまとめ役というかリーダーみたいだったんだ。ずっと生徒会役員で、２年後半から３年前半までは会長も務め、多分高校でも生徒会活動に参加するんじゃないかと思ってたんだけど、ちょっとした事情で判定試験を失敗しちゃってさ。」

「誰もが一級間違いなしと信じていたのに、二級になったんで、当初は本当に落ち込んでいて、それどころか試験結果が出てからずっと不登校になっちゃって、引き籠もっていたらしいんだよ。・・・三学期もたまに登校する程度だったんで、ずっと心配でね。ぼくが話しかけても、何だか避けられているみたいなんで、この機会に是非誘ってみたいんだ。」

第１０７話　部活選択（後書き）

高校で、新しい友人ができて、話がまた広がると思います。といっても、あまり登場人物を増やすと、筆者にもわけがわからなくなる危険性があるので、難しいところです。もし矛盾点などありましたら、是非ご指摘下さい。

第１０８話　伊集院武史

「いた。・・・おーい武史、元気してる？」
「あ、剛。・・・と、あとは他の中学からの子かな？」
「こいつら、Ａ組の榊君と遠藤君。二人とも西山中出身で、元女子なんだぜ。そうは見えないだろう？」
「榊怜央です。」「遠藤千博です。よろしく。」
「Ｃ組の伊集院武史です。武史って呼びすてて下さい。剛とは、そう呼び合ってるんで。」
「じゃ、僕たちも怜央、千博って、呼びすてにしてよ。」
「そんな、Ａ組で、しかも性転換者ってことは、それぞれクラストップ、いや、学年でも特に上位に居たんでしょ？・・・そんな呼び捨てにするなんて、恐れ多くて・・・。僕は自分の弱さの所為（せい）で落ちこぼれちゃった負け犬ですから・・・。」
「そんなの、気にしないで話をしようよ。君も一条君のことは一級でも剛って呼びすててるじゃない。第一、一級だから偉いとか、二級だから下だとか、そういう上下関係はないよ？」
「君、あのっ、確か六尺褌（ろくしゃくふんどし）していた子だよね。今朝、体育館で遠くから見かけて、随分鍛えていて立派な身体だなって思ってさ。・・・そのっ、褌（ふんどし）もよく似合っていて、男らしくてかっこいいなって、そう思ったんだ。いつも褌（ふんどし）しているの？・・・何か武道でもやっているの？」
「武道は、小さいときから身体づくりで、ちょっとやらされていただけだよ。・・・褌（ふんどし）は中学校のとき、男らしくなれるかと思って締めるようにしたんだけど、きっと僕はもう褌（ふんどし）をすることができなくなっちゃうんだ・・・。」
「どういうことだい？・・・武史は試験からずっと、明らかに様子が変だぞ。・・・そりゃ、一級間違いなしと皆に期待されていたの

が、あんなことになっちゃって、落ち込んだのはわかるし、家でもさんざん詰められたんだろうけど、それにしたってこんなに引きずるなんて、お前らしくないな。何か、まだあるなら、話してくれよ。・・・それとも、俺にも話せないようなことなのか？」

「剛は俊一さんから聞いていないの？」

「兄貴がどうかしたのか？・・・武史のことなんて、別に何も話してはいなかった気がするけど・・・？」

「うっ、うぅっ、ぼっ、僕なんてっ、・・・僕なんてもうっ、・・・くっ、うぐっ・・・。」

「何か事情がありそうだね？・・・僕たちも聞いて良いんだったら、力になるよ？」

――――――――――――――

――――――――――――――

「・・・で、一級になれなかった言い訳は、それで終わりか？・・・私には、それのどこが、やむを得ない事情になるのか、あるいは不可抗力になるのか、さっぱり理解できないんだが・・・。」

「・・・すみません・・・。」

「お前が肉欲に溺（おぼ）れ、夏休みからセックス三昧、いや、セックス中毒となり、勉学が疎（おろそ）かになった結果、点数が届かなかったということを認めるんだな？」

「・・・はぃ・・・。」

「我が伊集院家は室町時代から8百年も続く名家で、常に他人の模範となるべく己を律するようにと、常々教えてきた筈だ。求められれば、リーダーとして他人を指導する責任を進んで引き受け、またはリーダーを支えるフォロワーとして、いつ如何なるときも自己鍛練を欠かさないようにと言うのが、我が家の家訓であり、我が一族の誇りでもある。それにお前は色恋沙汰で泥を塗ったのだぞ。」

「なぁ武史、お前、夏休みから判定試験まで、いったい何をやって

たんだ？・・・精一杯努力して、それでも点数が及ばなかったってんなら、まぁ仕方がないさ。でも、お前は中1と中2では、学年トップをずっと張ってたんだろ？・・・体格は人並みだが、剣道と合気道をやってたんだから、身体機能点がそんなに悪い筈はないだろうし、生殖能力点だって、毎日必ずオナニーをするようにきっちりスケジュールを組んでいたんだから、人並みには取れるだろう。それなのに筆記試験の点数が3カ月で2割も落ちるなんて、どうなってるんだ？」

「生徒会長だったお前が、4月に入ってきた後輩の女の子と恋仲になったのは、結構なことだ。その相手と夏休みに初体験をしたのも、お前の年齢なら普通だろう。だが、それからのお前は、連日のように外泊をしたり、その女の子を自分の部屋に泊めたりしていたようだな？・・・剣道や合気道も、さっぱり道場に顔を出さなかったと聞いているぞ？」

そうだ。兄さんの言うとおりだ。兄さんも中学時代からの恋人がいて初体験は中2だったって聞いているけど、ずっと学年トップを争ったまま大学院を出て、研究室に残って、もう准教授になったんだ。きっと遠からず、教授の跡を継ぐに違いない。

・・・僕が美沙子に夢中になって、・・・いや、美沙子に夢中になるというより、セックスに溺れちゃって、毎日のように爛れた生活を送っていたのとは大違いだ・・・。やっぱり心のどこかで判定試験をなめていたんだろうか？・・・それとも、そんなことまで頭が回らないほど、僕の頭の中はセックスのことで一杯になっちゃったんだろうか？・・・今となっては、何を言っても見苦しい言い訳にしかならない。

9月末の小テストで、点数が大きく下がって、それから焦って勉強に取り組もうとしたんだけど、思ったように点数が上がらなかった。・・・って、それはそうだ。皆、この時期は判定試験に向けて最後の追い込みにかかっているから、一度落とした順位を挽回する

のは、かなり難しいというのに気がつかなかったんだ。・・・1500点ある筆記点が2割減ったら、300点のマイナスだ。一級の基準は2700点だから、それだけでもアウトなのに・・・。こんな、小学生でもわかる計算すらできなくなっちゃってたんだ。・・・全部、僕の責任だ。

「恋仲になるのも、セックスをするのも結構だけど、どんなに愉しいことでも、溺(おぼ)れちゃあダメなんだよ。僅か3点とはいえ、一級に届かなかったのは、厳然たる事実なんだぜ。」
「お前が嫡男(ちゃくなん)であるなら、当然だが廃嫡して勘当と言うことになろう。つまり伊集院家から追放し、伊集院の名を名乗ることもできなくなる。お前は幸いにも次男なので、勘当はしない。だが、今回の惨状の責任はとって貰う。」
「・・・はい・・・。今回のことは全部僕の責任です。・・・どのような処罰も受けるつもりです。」
「その覚悟や良し。・・・では、これに署名して拇印(ぼいん)を押捺(おうなつ)して貰おうか。」
「こっ、これはっ・・・!!」

『承諾書』と大きく書かれたその紙は、性転換手術の承諾書だった。

「我が伊集院家には、二級以下の男子は不要だ。いや、昭江は女子だが一級になって、一級の鍋島仁君に嫁いでいったぞ。それなのにお前は一級になれなかった。こうなってしまった以上、お前が一級に連なるためには、女性になって誰か一級の男性のところに嫁ぐしか方法があるまい。本当は一級女子なら間違いなく一級男子に嫁ぐことができようが、二級女子だと、少し頑張る必要があるだろう。だが、一級男子に嫁ぐ二級女子というのも結構多いから、二級のお前にも一級男子に嫁ぐという相応のチャンスはあると思う。・・・勿論、伊集院家を挙げて、良い一級男子を見つけてやるつもりだ。

お前は伊集院家の娘ということになるから、大丈夫だろう。・・・ま、手術が終わってからの話だが、良縁があると良いな。」

「ぼっ、僕はっ・・・、女の子にされちゃうの・・・？！！」

「うむ。四級未満の男子は女子のトップの子に希望者がいれば、性器の交換手術に応じなければならないのは知っているな？・・・これは法律に基づく義務だ。・・・だが、それとは別に、自分で希望した場合でも、一定の条件さえ満たせば、誰でも性転換手術を受けることができる。これは案外、知られていない制度だ。」

「でっ、でもっ、・・・それは性同一性障害といった特殊なケースでは・・・？」

「病気なら勿論そうなるんだけど、単に希望するだけでも、要するに自分と性器を交換してくれる相手が居れば、基本的には可能なんだ。ただ、通常だと男子になりたい女子は山ほど居るのに、女子になりたい男子はめったに居ないんで釣り合いが取れず、あまり例はない。でも男子が希望すれば、男子になりたい女子は列をなして順番待ちしているような状況だから、簡単に相手が見つかってＯＫが出るんだ。」

「ぼっ、僕はっ、そのっ、・・・男子のままでっ、・・・男子が良くってっ・・・。」

「一級になれなかったお前の遺伝子など、伊集院家として残す必要はない。というより、そんなレベルの遺伝子を伊集院の一族とすることはできない。それよりは、お前が私の娘として然るべき一級男子に嫁いでくれるほうが、伊集院家としては遥かにメリットが大きい。有力な家と姻戚関係になったり、名家の閨閥に連なることもあろう。」

「そっ、そんなっ！・・・僕はこれまで立派な男になるためにさんざん努力してきたのにっ・・・！！」

「だが、今回のことはすべてお前の責任だ。女にうつつを抜かすような奴には、伊集院家の男子たる資格はない。自分の身体で償うしか手がないだろう。・・・また、キツい言い方かもしれないが、お

前は次男だ。これまでは、嗣智に万一のことがあった場合のスペアとしての役割があったが、嗣智は立派に一級の社会人となり、この若さにして大学の教授が見えてきた。しかも、結婚して子供も二人居る。つまりもう跡継ぎのスペアは必要ないんだ。」

「そっ、そんなっ、・・・うっ、うぅっ、・・・くっ、うぐっ、ぐすっ・・・。」

「まあ、お前が俺のスペアかどうかはともかくさ、小さいとき、悪い子にしてると、オチンチンを取られちゃうってよく言われていたのを覚えていないか？・・・あれは別に脅しではなく、比喩でもなかったんだ。こういった場合には、現実の処罰として本当にあるってことさ。」

「うっ、うぐっ、ひぐっ、ひっ、ひーんっ、僕のっ、僕のチンコがっ、・・・僕はっ、そんなっ・・・。」

「さ、もう諦めてそこに署名捺印しちゃいなよ。お前はまだ未成年なんだから、どのみち父さんには従うしかないんだ。」

　そんなっ！・・・絶対に嫌だ！・・・誰かっ、・・・誰か助けて！！・・・僕っ、チンコ切り取られちゃう！！

「ほら、ここに書くんだ。・・・できないなら手伝ってやろうか？」

「・・・よし、署名捺印したな。・・・実はもう、手術の予約をしてあるんだ。・・・来週の水曜日が去勢手術で、病院でタマを抜いて貰い、その一週間後が本手術で完全な女子となる。わかったな。」

「うっ、ぅうっ、・・・やっ、やだっ、・・・ごっ、ごめんなさいっ・・・、ぼっ、僕っ、・・・うぐっ。」

「もうどうしようもないだろう。諦めろ。・・・本手術は十日から二週間程度の入院が必要らしいけど、タマ抜きは外来で、ほんの３０分程度だそうだ。それまでに、女性服でも揃えておくんだな。・・・それか、嫁いだ昭江が残して行ったお下がりで良ければ、まだ残っていた筈だぞ。」

「うぐっ、ひぐっ、ひっ、ひーんっ、・・・うっ、うぅっ、・・・くっ、うぐっ、ぐすっ・・・。」

「昔、武士が責任を取るということは、腹を切るということだった。我が家の祖先にも、切腹した者は何名も居たと記録されている。・・・たかが女性になる程度で、そんなに女々しく泣きだすなんて、やはりお前は女子になるべくしての結果のようだな。せめて男子としての最期くらいは粛然として、みっともない姿をさらさないようにしろよ。」

確かに僕の責任なんだ。すべて僕が悪かった。・・・でっ、でもっ、・・・あと五日でキンタマを抜かれちゃうなんて！！・・・そして、その翌週には、チンコも！！

僕はっ、僕の人生はっ・・・、もうっ・・・。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

♪ピーッ・・・ポポーン♪

『照合終了です。署名と拇印（ぼいん）の真贋（しんがん）を確認しました。本人で間違いありません。』

「はい。確かにご本人様のご希望で手術を受けるということですね。それでは、手術の説明をいたします。まず、この後・・・。」

先生が何か説明をしているみたいだけど、何を話されているのか、まったく頭に入ってこない。というか、聞いても、どうしようもない気がする。

今朝は怖くて、布団から出てくることができなかった。母さんに布団を剥がされ、着替えも手伝って貰った。・・・いや、身体が固まっちゃった僕は、手が震えて上手く着替えることができず、褌（ふんどし）も

母さんに締めてもらった。・・・僕の縮こまったチンコを見て、母さんは微(かす)かに鼻で笑っていたけど、僕にはどうすることもできず、そのまま手を引かれるように車に乗せられた。何とか自分一人で病院に行こうとしたけど、玄関で腰が抜けちゃって、まともに歩くこともできなかった・・・。僕は腰抜けなんだ・・・。
父さんと兄さんは、もう僕のことなど、まったく関心がないということらしくて、朝からどこかに出かけてしまっている。僕は母さんの運転する車で病院に連れてこられて、今、先生の診察室に一人で居る。
この診察も、なんだったら去勢の間も、家族が付き添っていても構わないらしいけど、さすがに母さんに付き添って貰うのは僕のプライドが許さなかった。そういう人も居るとは聞いたけど、キンタマを抜かれる瞬間を母さんに見られたり、あるいはキンタマを抜かれるときに手を握っていて貰うなんて、いくらなんでもそんな・・・。

「説明は以上ですが、何かご質問はありますか？・・・わからないところはありませんか？・・・大丈夫ですか？」
「はっ、はいっ。」
「では、処置室に移りましょう。こちらへどうぞ。」
診察室の裏手から、廊下のようなところを抜けて移動した小部屋には、歯医者の電動椅子のような形の椅子が部屋の真ん中にひとつだけ置いてあった。実物を見るのは初めてだけど、多分これが噂に聞く産婦人科の内診台なんだろう。
「着ているものを全部脱いで、この椅子に上がって下さい。荷物と脱いだものは、あちらのカゴを使って下さい。」
「少し寒いかもしれませんが、すぐ終わりますから、ちょっとだけ我慢できますか？・・・処置台はヒーターが入っていて、背中のと

ころが暖かくなっていますから、急いでこちらにどうぞ。」

女性ものの下着など、着替えを入れたバッグと、着てきた服を脱いでカゴに入れた。最期に六尺褌（ろくしゃくふんどし）を外し、これも畳（たた）んでカゴに入れた。・・・もう僕が褌（ふんどし）を締めることは二度とないんだ。何分後かに服を着るときは、もう僕は男の子じゃなくなっていて、持ってきた女物のパンティを履かなけりゃならないんだ。・・・これが今生の別れなんだと思ったら、また涙が出てきた。でも、必死になって涙を拭い、電動椅子によじ登る。

「手は上に上げて・・・。そう、バンザイの姿勢で、そこのバーを掴（つか）んで下さい。」

言われたとおりにすると、そこにベルトで固定されてしまった。また左右別々に足首と膝の位置で、同じようにベルトで固定されてしまった。・・・もう僕はピクリとも動くことができない。

「倒しますね。」

看護婦さんが椅子のスイッチを操作すると、背中が大きくリクライニングするとともに、足が左右に大きく開かれ、また膝から下の部分が上に持ち上がって行って、僕は両足をM字型に開いた姿勢にされてしまった。上半身は頭が足と同じ高さにリクライニングしているけど、完全に寝ているわけではなく、自分の股間がよく見える姿勢だ。股の間には何も遮るものがなく、お尻の下の部分も斜め下に移動して、僕はチンコからキンタマ、お尻の穴まで、すっかりさらけ出した無防備な体制となった。

「では、毛を剃っていきます。」

開いた股の間に椅子を持ってきて座ると、泡立てた石鹸を臍からチンコ、陰嚢、太股、そしてお尻の穴の周辺までタップリ塗られ、T字型の安全カミソリであっと言う間にツルツルに剃られてしまった。すると、一人が消毒薬をしみ込ませたガーゼで広範囲に何度も拭いながら、もう一人に先生を呼んでくるようにと指示した。僕はもうブルブルと震えが止まらず、涙をポロポロ零(こぼ)していると、やさしく話しかけてくれた。

「この段階で怖くなってしまう方は沢山いらっしゃいますから、気になさらないで下さい。・・・大丈夫。心配しなくても、少しも痛くはありませんからね。今日は本当に、あっけないくらい直ぐに済みますよ。片側2分か3分で、傷口を縫い合わせる時間など入れても全部で10分位ですからね。・・・あっと言う間に男の子を卒業できますよ。」

そのとき、ドアが開くと、さっきの女医先生、そしてその後ろから、この病院で外科医になっている俊一さんと、さらに父さんと兄さんが揃って入ってきた。まさか？・・・僕がキンタマを抜かれて男じゃなくなるところを、皆で確認しに来たんだ！！・・・そんな、酷すぎる！

「ごめんなさいーっ！！・・・やだーっ！！・・・切らないでーっ、お願いっ、お父さーん！！・・・兄さーん！・・・やだよーっ、許してーっ！！・・・あーんっ、ぁあーっ！・・・ひっ、ひーっ、いやーっ、あーんっ、ひっ、ひぐっ、ひーっ！！」

「大丈夫。今、麻酔をしますから、少しも痛くないですからね。」

先生が注射器を手にとった！！

「・・・ひっ、ひーっ、いやーっ、・・・切らないでーっ、だめー

っ、・・・やめてーっ！！・・・やだーっ、ぁあーっ、ごめんなさーいっ、お願いっ、お願いだよーっ、あぁーんっ、いやーっ、きゃーっ！！」

チョロロロロロー。

「なんだお前、泣き喚くだけじゃなくて、怖くて失禁しちゃったのかよ？・・・いよいよもって情けない奴だな！」

第１０８話　伊集院武史（後書き）

武史君の運命や如何に？！！

３月は年度末で少し忙しいので、概ね１ヶ月後になると思います。

第１０９話　武史の受難

「なんだお前、泣き喚くだけじゃなくて、怖くて失禁しちゃったのかよ？・・・いよいよもって情けない奴だな！」
「そう言うなよ、嗣智。・・・男の子にとって、その椅子に固定されて、タマを抜かれちゃう恐怖は半端じゃないぞ。お前だって、タマを抜かれて、今からタマを抜くってことになったら、冷静じゃ居られないと思うぜ。それに、武史君を苛めに来たわけじゃないんだろう？・・・まあ、今回のことは、武史君には良い薬になっただろうから、それで充分じゃないか？」
「うむ、そのとおりだ。私も嗣智も、泣き叫ぶ武史を見るために、わざわざ足を運んだわけではない。・・・武史、お前にもう一度だけ、チャンスをやろう。」
「ぅうっ、うぐっ、ぐすっ、・・・チャンスって？・・・ひぐっ、んぐっ・・・？？」
「判定試験には、再試験という制度があるのを知っているか？・・・ボーダーぎりぎりの点数だった者が、上の階級への編入を求めて、翌年１回だけ受けられるもので、例年、通常の判定試験の前の週に全国で実施される。だが、受験者はあまり多くなくて、そんなに知られているわけではない。その理由は、合格率が極めて低く、学区単位、つまりここだと高校全体で、数年に１名あるかないか、という程度だからだ。」
「お前も聞いたことはないかな。俗に敗者復活戦とか呼ばれている試験のことを。・・・ま、本当に復活できる合格者は、ほんの一握りだけなんだがな。・・・あとちょっとで上がれたのに、っていうギリギリだった者が、納得するプロセスなんだろうな。」
「そっ、その試験に受かるとどうなるの？」
「提案したのは私だから、私から説明しよう。この試験、内容は判

定試験とまったく同一で、丁度1年後の判定試験の直前に行われる。ここで一級相当の点数が取れれば、一級に編入という扱いになる。・・・勿論、筆記の試験問題は1年間の進歩を考えて、高校1年の前半までの範囲も含まれているし、運動点とか身体機能点とか生殖機能点とかは中3と高1で身体の発育による補正があるけど、やることは一緒だ。武史君の場合、一度受けているから、勝手はわかっているだろう。」
「で、この試験の合格率が極めて低いのは、通常の判定試験のとき、実は採点を少し甘くして、なるべく上の階級に入れるように多少の配慮があるんだ。特にボーダーラインにいる生徒には、結構甘い採点があると聞いている。だから、その甘い採点でも届かなかった生徒が、それから1年頑張ったからといって、上の階級に合格するだけの点数を取るのは至難の技なんだ。」
「けれど、武史君の場合は、もともと実力があるのに、つい、さぼっちゃって、どん底で試験を受けたような状態だったんだろう？・・・本来、君の実力があって、君の身体能力なら、かなりの余裕をもって一級になれた筈じゃぁないか。・・・そんな実力がある君が、たった一度の失敗で二級になってしまい、それどころか性転換されてしまうなんて、ちょっと可哀相だって、嗣智に話したんだよ。」
「お前の手術を、この病院で予約したことから、外科の医師だった俊一が気付いて、俺のところに相談に来たんだ。俊一は俺の一番の親友だったんで、昔からうちにもしょっちゅう遊びに来ていたから、お前のこともよく知っていた。・・・お前も遊んで貰ったのは覚えているだろう。」
「それで、父さんと3人で相談してたんだが、俊一が強く再試験を勧めるんで、それなら再試験を受けさせてみて、その結果次第ということにすべきだということになったんだ。」
「どうだ？・・・再試験を受けてみるか？・・・それとも、せっかく前処置も済んで、すべての準備が整っているところだから、このままサクッとタマを抜いて貰って、女の子としての人生を歩むこと

にするか？・・・10分位で済むそうじゃないか。そうすれば、辛い試験勉強をせずとも済むぞ？・・・お前が男の子を卒業するところを、俺たち全員で見届けてやるよ。」
「さっ、再試験を受けます！！・・・おっ、お願いです。受けさせて下さい！・・・ぜっ、絶対、絶対に死ぬ気で頑張ります！！」
「そうか。なら、俊一によくよくお礼を述べておくんだな。彼がお前を不憫(ふびん)に思って、父さんを説得してくれたんだ。そうでなければ、お前はもう今頃、タマを抜かれていた筈だ。」
「あっ、ありがとうございます。・・・ぼっ、僕っ、・・・そのっ、うっ、うぅっ、・・・たっ、助かりましたっ！・・・キンタマを抜かれる一歩手前でっ・・・、んぐっ、ひぐっ、・・・命がつながりました！・・・地獄に仏です！・・・命の恩人です！・・・本当に、本当に感謝感激です！！」
「なら、とにかくこれから1年間、全力で頑張ってみろ。ただし、そんなに簡単なことではないぞ。実際問題、合格するのは、めったに居ないんだ。だから、これで命永らえたと安易に考えるのは禁物だぞ。実績をバカにするなよ。」
「伊集院家としては、お前に1年間の猶予を与えた。まさに刑の執行猶予だ。それで結果が出なかったなら、お前も諦めがつくだろう。そのときは・・・。」
父さんが、いきなり僕のチンコとキンタマを強く握ると、力を込めてグイッと引っ張りながら宣言した。
「・・・これともお別れだからな！・・・いいな！！」
「あっ、あぁっ、んっ、んぐっ、あひっ、あぁあぁーっ、ぃくっ、いくいくっ、いっくーっ。」
ドピュッ、ドピューッ、ドピューッ、ドクッ、ドクッ、ドピュッ、ピュッ、ピュッ、ドクッ、ドピュッ。
それまで怖くて思い切り縮み上がり、小さくなっていた僕のチンコは、父さんに力強く握られて、いっきに元気になり、ビンッとな

った。あの日から五日間、僕はチンコが勃たなくなってしまい、一度も射精していなかったんだ。でも、とにかく切られずに済んだっていう言いようのない精神的な安堵感と心からの感激、それにギュッと握られて引っ張られた強い物理的刺激が同時に襲いかかり、これまで経験したこともないような精神と肉体の両方の快感が一気に全身を貫いた瞬間、父さんの中で思い切り射精していた・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

「そんなことがあったのか。知らなかった。・・・気付いてやれなくて、いや、一番辛いときに支えてやれなくて、本当に申し訳ない。親友失格だな。」
「いや、これは僕の問題だから、剛が気に病むような話じゃないよ。ただ、僕はてっきり、剛は俊一さんから聞いているものだと思っていた。」
「多分だけど、医者の守秘義務ってやつだろう。それに武史の黒歴史をわざわざ俺に話すのは、躊躇（ちゅうちょ）したんだと思うぜ。」
「でも、取り敢えず良かったじゃない。あとは秋の再試験を頑張るだけだろう？」
「いや、それがそんなに簡単でも楽観視できるわけでもなさそうなんだ・・・。」
「そうなの？」
「その後、僕も必死になって再試験のことを調べてみた。すると、最近では3年前に三級から二級に上がった男子が一人。また7年前に四級から三級に上がった男子が一人と三級から二級に上がった女子が一人。これが全部らしい。」
「二級から一級に上がった先輩は、ネットで調べられる１０年間では一人もいない。それで県の教育委員会に問い合わせたところ、この制度ができた約３０年前からの記録として、僕たちの学区では2

４年前に男子が一人と、１３年前に女子が一人だけ、これですべてだそうだ。」

「なるほど。確かにデータだけ見ると、狭き門っちゃ狭き門なんだな？」

「だから、本当に今の僕は、死刑の執行を猶予されているだけなのかもしれないんだ。」

「あと半年したら、僕は女子になって、君たちの前に現れる可能性が高いんだ。・・・きっと、男子としての僕の人生は、もう終わっちゃったんだと思う。美沙子は、僕がこうなっちゃった責任を感じたのか、二級になって、しかももうセックスは凍結したって宣言しても、変わらず僕のことを支えてくれているんだ。それも、僕の負担にならないように、遠慮がちに励ましてくれてるんだけど、きっと、あと半年で僕は美佐子を愛する資格がなくなっちゃうんだ・・・。もう僕が女子になることは決まっちゃったんだよ！・・・僕はっ！・・・僕はっ！！・・・うっ、うぐっ、うぅっ・・・。やっ、やだっ、チンコ切られるのっ、・・・ひぐっ、たっ、助けてっ、おっ、お願いだよぅ・・・。」

「今からそんなシケたこと言ってどうすんだよ。・・・大丈夫。お前なら絶対に再試験に受かるさ。」

「でも、勉強が全然手につかないんだ。・・・気持ちばかり焦って、身が入らず実力がついてこないんだ。・・・チンコが切り取られちゃう日まで、あと何日って数字が頭の中でカウントダウンしていて、毎日が恐怖で、もう気が変になりそうなんだ。・・・このままじゃ秋が来る前に、僕の精神は崩壊して廃人になっちゃうかもしれない・・・。こんな状態で、勉強なんて・・・。」

「そりゃぁそうだろうな。自分のチンポが賭の対象になったみたいな・・・、いや、人質になっていると言うべきなのか・・・。男の子にとっては、失敗したら命を落とすような綱渡りだからな。想像を絶するプレッシャーだろうさ。」

「しかも、あの内診椅子に固定されて、前処置が終わり、いよいよ

先生が麻酔の注射器を手に取ったときの筆舌に尽くし難い恐怖・・・。あれが頭の中にフラッシュバックすると、それだけでまたオシッコを漏らしそうになるんだ。（いや、皆にはナイショだけど、そのときの夢を見て、実際に漏らしちゃったことも何度もあったんだ・・・。僕はもう腰抜けの小便タレ小僧なんだ・・・。）あのトラウマは、多分、一生消えないよ・・・。女の子にされちゃった子が、精神を病んじゃっているのも当然さ。僕だってきっと・・・手術されちゃったら、自殺しちゃうかもしれないし・・・。」

「あのさ、事情はわかったから、僕たちも全面的に協力するよ。・・・そうだな・・・、まずは一級の授業ノートを僕たちでしっかり準備するからさ、それを一緒に勉強しようよ。毎日は無理でも、一日おきとか、週末は必ずとか・・・。一級と二級だと、違う科目もあるし、同じ科目でカリキュラムが一緒だとしても、実際に教える内容は一級のほうが早いし広いみたいだから・・・。」

「そうだね。一級の再試験に受かった前例が少ないのは、そのあたりじゃないかな。中学までは全員が同じクラスで同じ授業を受けていただろう。だけど、高校で一級だけを集めたクラスができれば、そこの授業はとんでもなくハイレベルで進み方も早くなる。つまり二級と一級の差が、高校では加速的に拡大していく筈なんだ。だから、一級に上がるためには、高校の一級のクラスの授業についていくような勉強法にしないと、多分受からないんだよ。」

「・・・やっぱり、僕にはもう・・・。」

「いや、大丈夫だよ。君も中学でずっとトップを張っていたならわかるだろうけど、勉強って、毎日の習慣が何より大事なんだよね。・・・毎日、キチンキチンと予習・復習をやって、その日に習ったことはその日のうちに身体に覚え込ませちゃうと、試験のときも焦る必要がないし、付け焼き刃で勉強する子なんて逆立ちしても叶わない高得点を簡単に出せるものなんだ。」

「そうだね。自慢じゃないけど、榊君と僕は、西山中ではずっと学年でトップと2番をキープしてきたし、後で手伝って貰おうと考え

ている勝美は、男子として学年で2番とか3番とかをキープしてきたんだ。それに君だって、試験の少し前までは学年トップだったたんだろう？・・・だったら、僕たちと一緒に勉強を続けて行けば、どうということもないよ。何も不安に感じることもないさ。」

「よかったなぁ武史。俺も勿論、精一杯協力するぞ。・・・これだけのメンツが揃ったんだから、この勉強会はハイレベルになるぞ。・・・なに、絶対に大丈夫さ。心配せず、大船に乗ったつもりでいろよ。」

「うっ、ぅうっ、・・・あっ、ありがとう。・・・こんな落ちこぼれの僕のためにっ！・・・うっ、ぐすっ・・・。」

「ん？・・・だが、待てよ？・・・ということは武史、お前は部活には入らないつもりか？」

「・・・うん、寂しいけど、今の僕には、そんな余裕はないよ。・・・なにせ、チンコがかかってるんだ。」

「それもそうか。・・・仕方がないのかなぁ・・・。」

「あっ、あのさぁ、・・・提案なんだけど、取り敢えず生徒会に籍だけ置かせて貰ったらどうかな。・・・生徒会は、どんな役柄をやるのかは会長の一存だって聞くし、そもそも他の部活と掛け持ちする子も居るんだろう？・・・ということは、再試験までの半年間に限って、殆ど活動しなくても大丈夫なように配慮して貰うこともできるんじゃないかな？」

「すると、半年後に合格してから、実質的な活動に参加するということか？」

「うん、これから生徒会の活動を見に行こうとしていただろう？・・・多分、会長や副会長も居ると思うんだよね。だから、そこで事情を説明して、半年間は籍だけ置かせて下さいって頼んでみたらどうかな。・・・後半には戦力になるって言えば、多分だけど許してくれないかな？」

「それ、聞いてみる価値はありそうだね。その場合、武史は来ないほうが良いかも。・・・本人が居ると、追求されて性転換の話がバ

レてしまいかねないけど、そんなの武史のプライドを考えたら、絶対に阻止しなきゃダメだろう？・・・だから、僕たちで交渉して、・・そうだな、ストーリーとしては、家から厳命されているんで、とにかく受からないと勘当されちゃうんだってことにでもしとけば良いんじゃないかな？」
「武史はそれで良いかい？・・・お前、中学のときは生徒会長も張っていた位なんだから、それなりに土地勘はあるだろう。・・・それとも、他の部活をやってみたいとか、もう生徒会はこりごりだとか？」
「いや、そんなことは何もないよ。・・・っていうか、こんなことになっちゃったから、もう僕は部活なんて諦めていたんだ。そこまでどうしてもやってみたいものはなかったし、精神的にそんな余裕はどこにもなかったし・・・。それは今でもそうなんだけど・・・。それと、半年後に女の子にされちゃうんじゃ、体育会系の部活なんて、そもそもできるわけないじゃないか。」
「よし、じゃぁ、そういう方針としよう。これから俺たち3人で生徒会の活動を見学して、話を聞きに行くから、その場で武史を半年間、幽霊会員として籍だけ置かせて下さいって、交渉してみようぜ。・・・なぁに、これだけのメンツが加入するって言ってるんだぞ。生徒会も反対する理由はないさ。大丈夫。俺たちに任せておけよ。」
「そうだ。それと、女になるなんて、軽々しく口にすべきじゃないよ。別に僕は言霊（ことだま）信仰を持っているわけじゃないけど、そういうのってフラグになったりするもんなんだ。何とかの法則じゃないけど、下手に口にすると、そのとおりになっちゃうかもしれないからね。」
「大丈夫！・・・心配するな！！・・・もし、・・・本当にもし、万が一の話だけど、お前が性転換することになったら、俺が一生面倒を見てやるよ！・・・俺じゃ嫌か？」
「え？！！・・・それって？・・・どういう？？」
「まさか？？・・・プロポーズ・・・？？」
「いやっ、そのっ、・・・あくまで、親友のお前を励ますためにっ、

そのっ、・・・心配する必要はないってことであって、・・・絶対にBLじゃないからな！！・・・俺はそんな、腐ってはいないぞ！！・・・単に、セーフティ・ネットの話をしただけなんだからな！」
「誰も腐男子とは言っていないさ。・・・でも、結婚はセーフティ・ネットでするもんじゃないと思うけどね・・・。」
「そこまで真剣に考えてくれている親友って、素晴らしいな！！・・・いや、冗談抜きに羨ましいよ。」
「そうだ。勝美と優稀が、女子会とかいうのを結成したんだそうだ。そこではどんなことでも隠さずすべて話し合える関係・・・それこそ、僕との夫婦生活もすべて相談したりするような、そんな関係の親友同士になるんだって、話していた。だったら僕たちも、男子会を結成しようよ。まずはこの４人でスタートして、何ならもっと仲間を増やして行けば良い。どんなことでも、どんな恥ずかしいことでも、すべて隠さず話し合う。悩みも、心配事も、とにかくすべて話すことにするからさ。生涯の親友になれると嬉しいな。」
「よし！・・・じゃあ手始めに、俺たち全員、オナニーやセックスをしたら、必ず報告することにしようぜ！！・・・武史、お前、セックスに溺れて失敗しちゃったんだろう？・・・もう大丈夫だとは思うけど、俺たちでお前の性欲を管理してやるよ。だから、まずは、いつ、何回射精したかを必ず報告しろ。そうすれば、もっとオナニーしろとか、逆に禁欲しろとか、アドバイスもできる。俺も隠さず、オナニーしたら必ず報告するようにするからさ。」
「わかった。ただ、あの日からずっと、僕はオナニーしたくても、できなくなっちゃったんだ。・・・チンコが元気になってくれなくて、そもそもムラムラもしないんだ。・・・ときどき夢精はするんだけど・・・。」
「お前、それ試験までに直さないとヤバくないか・・・？」
「・・・やっぱり、僕にはもう・・・。」
「その話、美佐子さん？・・・には話したの？・・・彼女にも協力して貰おうよ？・・・僕は今、勝美のお腹を気遣ってセックスはず

っとご無沙汰なんだけど、定期的に勝美が奉仕してくれて、抜いてくれているんだよね。・・・君もそうして貰いなよ。勉強をするのに性欲管理は大事だよ？」

「さっきの身体検査での開チンで剛の思考法が過激なのは理解したけど、千博もそれに影響されちゃったのかな？（笑）・・・そういうことなら、僕も優稀との夜の生活を全部話すよ。・・・あ、でも、まだ童貞の剛には、刺激が強すぎちゃうかもね？」

「煩(うるさ)い！・・・俺は絶対に魔法使いにはならないからな！！」

第１０９話　武史の受難（後書き）

どうやら、千博や勝美が美佐子さんを通じて武史の射精管理をするみたいですが、この様子だと武史も思い切りバックを開発されてしまうのでしょうか？！？！

六尺褌でバックを責められるなど、まるで往年の「さぶ」のような絵柄ですが、別の意味で武史の運命や如何に？！？！

第１１０話　部活スタート

「武史のこと、うまくいって良かったね。」
「まあ、秋の文化祭の後に来期の会長の選挙があって、それで新しい執行部が決まるから、そこまではどのみち、１年生は見習い期間ということなんだろう？」
「武史は中学でも生徒会長を務めていたくらいだから、土地勘があるんで、見習いはしなくても大丈夫だって判断してくれたんだろうぜ。・・・それと、千博の新聞部との兼務も問題ないってことだったじゃないか。」
「というか、もう早速、生徒会報道班の仕事を貰っちゃったのには驚いたよ。しかも、締め切りが１週間って、なんだかブラック企業に就職しちゃったみたいだ。」
「俺も知らなかったんだけど、形式的にはともかく、新聞部と生徒会報道班は実態的には同じものらしいから、千博の場合はもう役割が早くも決まって、飛んで火にいる夏の虫だったんだろうぜ。」
「でも、会長が言ってたじゃない。これは、新入生の視点で、各クラブ活動の紹介をしてもらい、他の新入生が最終決断をする上での参考になるような記事であれば、何でも良いって。・・・方法も文体も分量も、すべて任せるって言われただろう？・・・要するに、千博が報道班として使い物になるかどうかを知るための試金石というか登竜門なんだと思うよ。」
「確かに。一人で全部やるってことは、構成からインタビュー、執筆、編集まで、全部をやらなきゃならないんだろう？・・・それらのスケジューリングだってある。俺たちも手伝うよ。」
「まあ、毎年、この最初の会報は新入生の目で見た各クラブ活動紹介記事が大きな目玉企画らしいから、何とかバックナンバーを参考にして書いてみるよ。まずはインタビューの練習かな。」

「僕たちは生徒会をやるんで、もうこれで他の部活を回ることもないんだけど、でもせっかくの機会だから、いろいろなところを見て回らない？」
「うん、大賛成。・・・ていうか、僕は早速、部活の紹介記事を書かなきゃならないから、今からその取材とかインタビューに回ろうと思ってる。だって1週間で記事まで仕上げなきゃいけないんだから、とにかく時間がないよ。これから1週間、毎日４つか５つ回らなきゃ。」
「なら、俺も付き合うぜ。こんな機会はもうないだろうし、どんな部活があるのか知っておくのは、友達との話においても、意味があるんじゃないか？」
「迷惑じゃなければ、僕も一緒に回ろう。生徒会は部活同士の調整業務なんかがあるって、さっき聞いたよね。調整するためには、まず相手の内情を知らなきゃ話にならないから、各部が説明しているところを見て回るのは効率が良さそうだ。それに今の時期ならきっと各部の部長や副部長、マネージャーといった中心人物が絶対に揃っている筈だから、インタビューで聞いて回るのも都合が良いんじゃないかな。」
「なら、インタビューを手伝ってよ。自分でインタビューして、自分で執筆するっていうスタイルもあるけどさ、執筆者とは別のインタビュアーを立てることも多いじゃない。って言うか、僕はまだインタビューに慣れていないんで、自分でインタビューと原稿執筆を両方やるのは、ちょっと自信がないんだ。」

　結局、怜央と剛がインタビューを手伝ってくれるって言うことになって、じゃあいくつか小手調べに回ってみようってことで、最初は女子バスケ部に来た。ここは確か、五十嵐さんが入ったところで、彼女はもう3月からここで練習とかしているようなことを話していたから、ある程度馴染んだ頃合いかと思ったんだ。
「女子バスケ部へようこそ。見学ですか？」

「あ、僕たちは入部希望者じゃなくて、生徒会なんですが、今度発行する会報に、各部活の紹介記事を載せたいんで、それで取材させて頂きたいんですけど・・・。」
「わかりました。一応見学者にはなるんで、こちらにクラスと名前をお願いします。」
「あっ、あなた！・・・もしかして、杉田千博さん？」
「あっ、山本先輩！！・・・お久しぶりです！」
「あなたが男子になっちゃうんで、こっちでは大変だったのよ。何せあなたは一年生からレギュラー間違いなしの戦力として期待されていたのに、急に男子になるんですもの。」
「すみません。ご迷惑をおかけしました。」
「でも、あなたが紹介してくれた五十嵐さん・・・。本当にこんな人材が来てくれるなんて、夢みたいだわ。」
「あ、活躍しているようで、安心しました。」
「是非、練習風景を見ていってよ。もう3年生を完全に押し退けて、うちの部のエースになっているわ。」
「ありがとうございます。実は僕、新聞部と生徒会に入ることになりまして、今日はその初仕事で各部活動の紹介記事を生徒会報に書かなくっちゃならないんです。それで、いろいろな部に取材に回っているところなんです。是非お話を聞かせて下さい。」
「じゃあ、まずはその五十嵐さんも含めて、練習風景を取材してきて。部員の手が空いていれば、自由に声をかけて貰って構わないわ。それがひととおり済んだら、あたしのところに来て頂戴。どんな質問でも歓迎するわよ。」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――

「・・・いやぁ、五十嵐さんがすっかり主軸メンバーとして溶け込んでいることに、安心しました。実は彼女、手術した当初は、運命

を受け入れられず、自宅に引き籠もって毎日泣いていた位なんですが、今はもうどこからどう見ても、女子選手としか見えませんね。」
「でしょう？・・・本当にこんな掘り出し物の人材が居るなんて、あなたに推薦して貰って大助かりよ。・・・これなら、夏のインターハイで地区優勝も視野に入ってくるわ。」
「彼女は男子のときから、バスケで身を立てて、・・・というか、卒業したら実業団チームにスカウトされるのが夢だったらしいんです。それで、手術当初は夢が絶たれたと思い込んで、もう自分の人生は終わったと自殺しそうな雰囲気だったんですが、それだけ経験と実力があるんだから、今度は女子バスケで頑張れば、女子でも実業団チームを持っているところはあるよって勧めてみたんですよ。」
「そうね。このまま順調なら、その可能性は、多分男子のときより高いかもしれないわ。だって彼女は・・・。」

――――――――――――――――
――――――――――――――

「五十嵐さんって、元男子なのか？・・・あれを見ると、『やっぱり』、というべきなのなか？」
「そうは見えないでしょ？・・・彼女、手術された当初は、本当に落ち込んでいたんだよ。それを姉の優稀が心配して様子を見に行こうって言い出して、それで家内の勝美と僕との三人で家庭訪問したんだ。・・・勿論、誰に言われたわけでもなく、優稀が自分の経験を元にずいぶん心配してね、自分たちで考えて行動に移したんだ。それで、引き籠もり状態になっている五十嵐さんに、将来の進むべき路というか、新しい可能性について示してあげることができて、今につながったんだと思う。」
「元男子だから、体格とか体力があるのは当然だけど、あの運動神経やテクニック、あれは天性のものなのかな。先輩部員達が、まるで赤子みたいにあしらわれていたじゃないか？」

「そりゃそうだろう。彼女は西山中の男子バスケ部でも、その人ありと言われ続けていた逸材でさ、まあ将来、プロになると言われても、何も違和感がないだけの実力があったんだ。」
「普通、そういう大型新人が入ってくると、先輩との間で軋轢（あつれき）があったりもするんだけど、彼女の場合は元男子ということが、良い意味で先輩達との緊張関係を生んでいるのか、すっかりチームの中心として溶け込んでいるね。その辺りのところもインタビューできたんで、あとはこれを原稿に起こす僕の筆力ということか・・・。」
「よし、じゃ、次行こうぜ。どこにする？」
「そうだな、日があるうちに運動系の部活を回りたいから、次は野球でも行ってみようか？・・・ちょうど、あそこで練習しているみたいだし。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

「・・・というのが、今の野球部の現状と、今年の目標です。野球部は特別強いわけではありませんが、さりとて最下位が指定席という弱小チームでもありません。地区の中では平均的なレベルでして、皆、野球というスポーツを楽しんで貰い、高校生活の中で確固たる思い出をつくって貰うことを第一目標に、各自が自主的に取り組んでいます。」
「今年は、もう入部を希望する新入生が今日だけでも5名来てくれて、先輩達と一緒に練習試合をしていますので、彼らも含めて、是非インタビューをしていって下さい。・・・あ、丁度試合が終了しましたよ。」
「ありがとうございました。では、部員にいろいろと聞いてみます。」
「すみません。生徒会報道班なんですが、恒例の部活紹介記事を書

くのに、少しお話を聞かせて頂けますか？」
「あ、インタビューね。勿論歓迎するけど、ちょっと先にシャワーを浴びて来ちゃいたいんで、少しだけ待っていてくれるかな。汗と埃（ほこり）でドロドロなんで、早くさっぱりしたいんだ。」
「あ、すみません。・・・じゃ、ちょっと部室で待たせて貰います。」

　怜央と剛と三人で、ロッカー室の隅にあったパイプ椅子に腰掛けると、グランドから引き上げてきた3年生と2年生の先輩部員達は、パパッとユニフォームを脱いで、素っ裸になってタオルだけ持ったまま、シャワー室のドアに入って行った。それを見て、新入生の部員達も、急いで脱ぎだしたんだけど、一人だけ、真っ赤な顔をして固まっちゃった子がいる。
「あ、児玉じゃないか。お前、野球部に入ったのか？・・・こいつ、児玉恵（めぐみ）って言って、俺と一緒の山下中出身の元女子なんだ。・・・そうか、今は「メグミ」じゃなくて「ケイ」って名前の読みだけを換えたんだっけ？・・・こいつね、中学のときはソフトボール部のキャプテンをやっていて、確かショートで3番なんかを打っていたんだ。高校に入って、野球をやることにしたのか。・・・そう言えば、お前の兄貴も弟も、確か野球部だったよな。」
「児玉君？・・・君、なんだか顔色が悪いけど、体調でも悪いの？・・・高校の部活は、キツかったの？」
「いや、多分、さっきの身体検査のときと同じじゃないか。・・・もうお前は男子になったんだから、とっとと素っ裸になって、他の部員と一緒にシャワーを浴びて来いよ！」
―――――――――――――――
――――――――――――
　こっ、この試練を乗り越えなきゃ僕は本当の男子にはなれない！・・さっきの身体検査もそうだったけど、男子同士なんだから、別

に恥ずかしがることはないんだ。・・・それに、そもそも男子は女子のように裸を見られて恥ずかしがったりするものじゃない。それはわかっているつもりだけど、理屈と意識は別物だ。
さっきは皆、パンツを履いていた（一部、脱いで見せびらかしている子もいたけど）。でっ、でもっ、今度は本当に素っ裸だ。僕も素っ裸にならなきゃいけない。・・・まだ僕には、そこまで堂々とした態度は取れない。・・・どっ、どうしようっ・・・。
一条君がやってきて、からかわれたけど、どうしても手が止まっちゃう・・・。いや、そんなことを考えている場合じゃない。もう先輩たちは勿論、一緒に入部した同級生も皆、シャワー室に入って行っちゃった。・・・僕も早くしなくちゃ。ここには一条君たちしかいない。彼らは皆が出てきたら、インタビューするって言ってたから、ここで待ってるんだろう。だったら僕も、急いでシャワーを浴びてこなきゃ・・・。さりげなく後ろを向いて、一条君たちには見られないようにしながら、とにかくシャワー室に行くんだ・・・。だっ、だからっ、そ、そのっ・・・、えーいっ！！

「お、児玉君、遅かったじゃない。生徒会のやつらに捕まってたのかい？」
「さ、早く君もシャワーを浴びちゃいなよ。ただ、ここ、スポーツジムと違うから、シャンプーは備え付けがないんだ。学校支給の固形石鹸があるだけなんだよね。」
み、みんな裸だ！！・・・ペニスがいっぱい！！・・・ぶらぶらしてるっ？！？！・・・おっ、落ち着くんだっ。僕は兄さんも弟も居て、男の子の裸は家でもときどき目にしてるんだ！！・・・がっ、頑張ってっ、・・・そっ、そのっ、・・・さりげなくっ、・・・あまり見ないように・・・。
「よし、一年生5名全員揃ったな・・・。じゃあ全員、こっちを向いてそこに整列しろ。」
「今年の一年生は、皆、なかなかの面構えじゃあないか。立派だな。

・・・といっても、完全にズル剥けなのは児玉君だけか。他の４人は、まだ仮性人なのかな。」

「児玉君は元女子なんだよね。立派なペニスを貰ったね。それに君は、もう転換初夜で女性とセックスしてるんだよね。他の子で、もう経験済な子はいるかな？・・・ん？・・・今年の一年生には、誰もいないのかい？・・・もう皆、成人したんだから、高校では是非とも頑張って、女性経験を積むようにね。」

　みっ、見られてるっ。僕のだけじゃなくて、同学年の子も・・・。そっ、それにっ、先輩たちも全員、ペニスもキンタマもぶらぶらさせてっ、そっ、そのっ、目がっ、目のやりようがっ・・・。あっ、拙（まず）いっ！・・・そのっ、意識したら急にっ！・・・だっ、だめだっ、意識しちゃだめだっ！！

「おや？・・・児玉君は元気になってきたみたいだね？・・・良かったら、ここで抜いちゃっても構わないよ。」

「俺も勃（た）っちゃったから、ここで抜かせて貰うぞ。児玉も一人じゃ、やりにくいだろう。俺と一緒にやろうぜ。」

「お、柴田、お前も勃っちゃったのか。・・・よし、先輩として、新入生に手本を見せてやれよ。」

「わかった。児玉、身体を拭いたら、ロッカー室のテーブルに腰掛けようぜ。俺の隣に並んで座って、・・・そう、皆に見えるように、股を大きく広げて・・・。誰か、適当なオカズは持ってないか？」

―――――――――――――――
――――――――――――

　すべてが信じられない。・・・僕はいったい、夢を見ているんだろうか？・・・いや、多分、夢であって欲しいという願望なんだろう。

　柴田先輩と二人で、野球部のロッカー室のテーブルに、全裸で腰掛けてオナニーをしている。・・・そもそも、僕はまだ男子になっ

てから、そんなに何回もオナニーをした訳じゃない。父さんや兄さんには、しょっちゅうからかわれたり、けしかけられたりするけど、手術からもう４ヶ月が経過しても、まだ自分でオナニーして射精までいったのは、多分、１０回とか、せいぜい１５回程度だ。・・・交換初夜は性転換者の義務というか、機能確認試験だと思ったから、必死で予習して頑張ったけど、あれは無我夢中だった・・・。その後、自分でオナニーしても、そんなに気持ちが良いという感覚は湧(わ)かなくって、それだからなのか、積極的にオナニーしたいとか、ムラムラして射精したいとか、そういう気分にはなったことがない。ただ夢精しちゃうと嫌だし、ペニスが元気になっちゃって、どうしても収まらなくなったりしたときに、やむを得ずオナニーして解消した程度だ。僕たち位の年齢の男子だと、３日に1回程度は射精しないと大変なことになるって習ったけど、本当なのかなぁ？

・・・周りでは、部員の半分程度が僕たち二人のオナニーをガン見している。僕のやり方は金子さん（僕の性器交換相手）に交換初夜で教わった方法だけど、皆特に何も言わないところを見ると、別に変なところはなさそうだ。隣の柴田先輩も、僕と同じように右手でワッカをつくって、亀頭のくびれたところを中心にシコシコと扱いている。周りで見ている皆は、素っ裸でブラブラさせているか、せいぜいタオルを1枚、腰に巻いただけだ。

こうしてオナニーをしているところを大勢に見られるのは、物凄く恥ずかしい。でも、男子の間では、そんなに恥ずかしがることではないらしい。いや、男子は判定試験のとき、全員で一斉にオナニーして射精するって聞いている。・・・そんな・・・男性として、一番恥ずかしい瞬間を共有するなんて・・・。

隣では、生徒会から新入生が3名、部活の様子をインタビューしに来ていて、部長とかはそっちに対応している。部長も他の部員も、まだ暑いせいか、着替えはせず、腰タオルだけなんで、下からチラチラとあそこが見えたりしている。生徒会からの3名は、一人が一条君で、あとの二人は西山中出身の性転換者だそうだ。でも、彼ら

は僕たちのこんな状況を、あまり気にせず普通にインタビューを続けている。二人も元女子の筈なのに、どうして平然として居られるんだろう？
「うっ、いっ、いくっ、いくっ、いくーっ。」
「おーっ。柴田、盛大にイッたな！」
「よく拭いとけよ！！」
「児玉君はまだかな？・・・もうかなり近いんじゃない？」
「はっ、はいっ、そっ、そうですっ、もっ、もうっ、僕っ、僕っ、もうっ、あっ、あぁっ。」
ぼっ、僕もっ、息が上がってきたっ。・・・皆がっ、みんなが一斉にガン見しているっ！！・・・やっ、やだっ、みんなが見ている前でっ、射精なんてっ、そっ、そんなっ、やっ、やっぱり恥ずかしいっ、いやっ、それはっ、・・・でっ、でもっ・・・。
あっ、もっ、もうっ、限界だっ。・・・キッ、キンタマもキューッと上がってきたっ。・・・みっ、見ないでっ、お願いっ、そんなっ、だめっ、だめーっ。
「イーけっ、イーけっ、逝ーけっ、逝ーけっ！」
「あぁあ、あっ、あっ、ぁひっ、ぁくっ、くっ、ぐっ、いっ、いぐっ、イクっ、イクっ、イクイクっ、イックッーっ！！」
ドピューッ、ドピューッ、ドピューッ、ビュルルルルーッ、ドクッ、ドクッ、ビュルッ、ビュルッ。
「「イッたーっ！！」」
ドピュッ、ドピュッ、ドクッ、ドクッ、ビュルッ、ビュルッ。
「とっ、止まらないっ、たっ、助けて、ひっ、ひーっ、死ぬっ、死ぬっ、ぁひっ、あひーっ。」
ピューッ、ピューッ、ピュッ、ピュッ、ドクッ、ドクッ。
「凄い量だな？！！」
「よっぽど溜まっていたんだな？」
「おい！！・・・白目を剥いて、大丈夫か？！！・・・しっかりするんだ！」

そんな先輩たちの声を聞きながら、僕は意識を手放していた。

第１１１話　部活動インタビュー（前書き）

少し短いですが、前回、話が途中で終わっていたので、その部分だけ終了させました。

第１１１話　部活動インタビュー

「あっ、気が付いたみたいだな。」
「児玉君、大丈夫？」
…ぼっ、僕はっ？…僕はどうして？？
「君、イキ過ぎて気絶しちゃったんだよ。」
「そんなに良かったの？」
「確かに、物凄いイキ方だったよな。」
「あり得ない位の射精量だったじゃないか。…よほど溜まっていたのかい？」
そうだ。…僕はシャワー室で勃（た）っちゃって、それで柴田先輩と一緒に野球部のロッカー室で、皆に見られながらオナニーをしたんだっけ。物凄く恥ずかしくって、・・・なのに皆に見られながら射精したら、経験したことのない強烈な快感で射精が止まらなくって、もう死んじゃうって思って・・・。そんな感覚は、男子になって初めてだった・・・。
「お前の身体、シャワーで濡れていたんでティッシュで拭くことができなくてさ、お前の持っていたタオルで拭いたから、タオルがベトベトになっちゃった。持ち帰ったらちゃんと洗っとけよ。」
なっ！・・・気絶した僕の身体を先輩たちが拭いてくれたんだ？！・・・そのっ、精液でベトベトのあそこもっ？！！・・・死にたい。・・・こんな恥ずかしい姿を晒（さら）しちゃって、これから野球部でやっていくなんて・・・。部員は全員、僕の一番恥ずかしい瞬間をばっちり見てるんだ・・・。どんな顔をして毎日の部活に臨めば良いのか・・・。もう先輩たちと顔を合わせることもできない・・・。
「ねえ、君も性転換組なんだって？・・・僕は西山中出身の遠藤。遠藤千博ってんだけど、僕も元女子なんだ。・・・生徒会に所属す

ることにして、今日は早速、その初仕事で各部活の紹介記事を書くため、こうしてインタビューに回っているところなんだ。・・・君、さっき、2年生の部員と一緒にオナニーしてたでしょ。凄くかっこよくて、男らしくて、立派だったたよ。・・・そのっ、ナニも立派だったし、何より堂々として、心の底から男の子になってるんだなって、感心して見ていたんだ。」
「きっ、君も見てたの！！・・・やっぱりもう僕はダメだっ！！・・・この部には居られないっ！！・・・はっ、まっ、まさかっ？・・・僕のさっきのこと、生徒会報に載せるの？！？！」
「何だ、お前、そんなこと気にしてるのか？・・・男子になったからには、人前で射精するのを見られたとしても、そんなの立ちションを見られるのと何ら変わらないじゃないか。いい加減慣れろよな。・・・千博、バッチリ写真付きで掲載しちゃおうぜ？」
「ひっ、やっ、やめてっ！！・・・やっ、やだっ、やだーぁっ、あん、ぁあーんっ、ひぐっ、ぐすっ・・・。」
「そんなことはしないよ。剛もあまり児玉君のこと、からかっちゃ可哀相だよ。・・・ね、だから、泣き止んで。君が部室でオナニーしたなんてことは、部活の紹介とは何の関係もないことじゃないか。そんなの、会報に載せるわけがないさ。」
「どうも剛は言動が過激だな。・・・悪気があってのことじゃぁないってのは、よくわかるけど、周囲は振り回されちゃうことが多いんじゃないかい。今朝からのほんの数時間でも、驚くことばかりだよ？」
「ぅぐっ、ぐすっ、・・・ぼっ、僕はからかわれたの？」
「ごめん。・・・児玉が男子の心に早くなれるように、ちょっと過激な言い方をしたんだ。・・・俺だって、そんなのが記事になるとは思ってもいないさ、なぁ？」
「あのね、僕も最初は君と同じような感覚だったんだ。でも、春休みに今の君と同じく、オナニーして射精するところを家族全員に見られちゃったんだ。それも、母さんも含めて。」

「本当に？」
「うん、それも、ちょっと変わった性癖も知られちゃって、思い切りイッて気絶するところを、二人の母さんと父さん、兄さん姉さん、それに弟と妹にもバッチリ見られちゃったんだ。さらに気絶した僕の身体を、どうやら母さん達が拭いてくれたらしいんだ。・・・想像してごらんよ。・・・射精した精液を、母さん達に拭き取って貰ったんだよ。・・・勿論、あそこも全部、きれいに拭いてくれたみたいで、赤ちゃんがおしめを換えて貰うのと同じことをされたんだ。翌朝、家族にどんな顔をして会えば良いのか、本当に死ぬ思いだったよ。」
「そんなことがあったのか？・・・どうりで、胆が据わっているというか、身体検査のときも、元女子とは思えない態度だったんだな。・・・まあ、でも、確かに母親に見られるのは、かなり恥ずかしいとは思うけど、射精するところを見られるのは、そこまで恥ずかしいという感覚は、俺にはないな。さっきも言ったとおり、単なる排泄行為を見られたに過ぎないんだから、それこそ立ちションしているところを覗かれたというのと、大差ないと思う。女の子がスカート捲られて、『エッチ』って叫ぶ。そんなのが平均的な男子の感覚じゃないのか？」
「確かに。・・・僕も今なら、そう思えるよ。・・・だから、児玉君も、もう男子になったんだし、剛が言うように、そんなに深刻に考えなくても良いんじゃないかい？・・・現に、あのとき一緒にオナニーしていた柴田先輩だっけ？・・・あの人なんて、一人でさっさと射精しちゃって、他の皆もそれで終わったという感じで、それっきりだろう？」
「だから、大丈夫だよ。男子部員なんて、皆、明日にはもう興味を失っているさ。というか、そういうオナニーショーなんて、多分あちこちの体育会系の部活で、日常的に行われていると思うし、男子の感覚からすると、そんなの話題にもならないと思うよ。」
「そのとおりだ。千博の言うように、俺だって、お前がオナニーし

て気絶しちゃったって言うのを聞いても、別にだからどうしたって言う気がするぜ。」
「そんなことよりさ、山下中出身の性転換者である君に、是非とも頼みたいことがあるっていうか、協力して欲しいんだけど、相談に乗ってくれるかな？」
「どんなこと？」
「あとでまたきちんと話したいんだけど、実は僕達西山中では、春休みに、性転換者１６名が全員、一堂に会して懇親会をやったんだ。それで、僕も、この怜央も、それに僕の姉になった優稀や、僕の奥さんの勝美・・・彼女は僕の性器交換相手でもあるんだけど・・・、そういった全員が集まって、性転換者だけが抱える心配とか悩み、それに新しい性別での生活とか、これからの抱負、そういったものを本音で話し合って、隠し事なくぶつけ合う。そうすることによって、新しい人生のスタートに少しでも備えることができればというイベントを実施したんだ。それが、元男子も元女子も、それぞれ自分の心を切り換える、とても良いきっかけになったみたいで、僕が身体検査なんかで、わりと平然としていられるのも、それがあったからなんだ。」
「それでね、今朝の身体検査で、君達山下中の性転換者と、それから多分だけど北川中からの性転換者が、まだ男子の中に混じっても、慣れていなくて困惑というか、ぎこちない様子を見ていた剛、・・・あ、一条君がさ、僕たち西山中出身の性転換者がもう心の中を切り換えていることに感心して、是非同じことをやってくれって頼まれたんだ。」
「あっ！・・・君、・・・もしかして、今朝、一条君と一緒に、そのっ、パンツ脱いでっ、・・・あそこを皆に見せつけていた子だよね？」
「まいったな。・・・やっぱり、そういう恥ずかしい印象だけが残っちゃってるのか・・・。剛、君の責任だよ。どうしてくれるんだ！」

「そんなの、男子にとっては、別にどうということもないだろう？・・・そもそも、そういったことに頓着しないのが男子なんだぜ。・・・そりゃ、人それぞれ性格は違うだろうし、俺みたいにはっちゃけているのも居れば、千博みたいに常識派もいるだろうけど、男子の心の中なんて、皆、大差ないと思うぞ？」

「まあ、そのとおりなんだろうな。で、ここからが本題なんだけど、剛は別格としても、僕がこんなふうに、他の男子と殆ど変わらない態度を取ることができるようになったのは、その懇親会での経験が、かなり大きいのは、間違いない事実なんだ。」

「だから、君達山下中出身の性転換者と、それに北川中出身の性転換者も、全員集まって貰って、僕たち西山中出身の性転換者と一緒に、性転換者懇親会を是非やりたいんだよ。その準備というか、イベントの事務方をお願いしたくてさ・・・。是非、相談に乗ってくれるかな？」

「うっ、うんっ。・・・僕なんかで手伝えることがあるなら・・・。」

「ありがとう。まずは性転換者のリストをつくって、声掛けをするところから始めるつもりだけど、詳細はまたあとで連絡するから。・・・それじゃ今はこれで。」

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「インタビューにご協力ありがとうございました。大変いろいろなお話が聞けて、しかも皆さんの日常風景がよく理解できました。」

「俺と児玉が楽しんだことも紹介されるのか？」

「いえ、まさかそれは部活動とは何の関係もないので・・・。」

「でも、今、部員の日常風景と言ってたじゃないか？・・・こういうことは、うちの部だと、ときどきあることだぞ。」

「それは・・・よくわかりますが、逆に男子の運動部には普遍的にあるでしょうし・・・。」

「ちげぇねぇ。柴田は1年のときから、しょっちゅうあそこをおっ勃ててては、部室で抜いていたもんな！」
「児玉君も、こんな先輩、別に見倣わなくても良いからね？」
「ま、どんな記事にするかはそっちの話だ。俺は別にここで児玉と二人で抜いているところを、写真付きで実名紹介されても、一向に構わないからな。」
「顔写真はよくても、あそこはモザイク処理でもするのかｗｗ」
「あまりからかうなよ。生徒会の二人も困惑しているし、それ以前に児玉が死にそうな顔をしているぜ。」
「ご配慮ありがとうございます。・・・では、これで失礼致します。」
「素敵な紹介記事を期待してるぜ！」
「最期の柴田先輩の一言で、児玉君、またしても真っ青になって固まっちゃってたね。」
「まあ、あれも男子になった試練のひとつだろう。暫く（しばら）は弄（いじ）られるだろうけど、半年もすれば皆、もう気にしなくなるさ。」
「さて、じゃ、次はどこに行こうか。」
「そろそろ日がかげってきちゃったんで、運動系の部活はそろそろ終了かな？」
「体育館でやっているところは、まだあると思うよ。」
「あ、それなら、是非とも優稀が行くって言っていた水泳部に行ってみたいんだ。ここの水泳部は、屋内温水プールがあるんで、通年で水に入れるって言うのが売りだろう？」
「そうだね。屋内プールなら、完全下校まで、まだあと1時間はあるから、もう少しやってるんじゃないかな。よし、そこに行ってみるか。」

第１１１話　部活動インタビュー（後書き）

次回更新は、多分６月になると思います。

第１１２話　優稀の水難（前書き）

１話更新しました。

「・・・で、選手を目指す部員はどの位居るんですか？」
「そんなに多くはないかしらね。女子だと、３学年全部を合わせても、今は４名だけよ。男子も似たようなものだった筈だわ。・・・タイムを向上させようとしている選手コースの部員には、マンツーマンで個人別のコーチングをすることにしているの。というのも、選手になるからには、一人一人、オーダーメードの育成プログラムが必要なんで、その他大勢と一緒にはできないのよ。」
「そこに行くと、他の２０名近い部員は、皆、タイムなどどうでも良くて、とにかく泳法をきちんと学んで、しっかり泳げるようになりたいという人が殆どね。だから、そういったニーズにはしっかり対応できるように、４泳法の練習は毎回、きっちりやっているし、ときどきだけど着衣泳法とか、古式泳法なんかも練習するわよ。」
「あと、普通の４泳法でも、基礎をみっちり練習したあとは、人によってだけど、ダイエットに良い泳ぎ方とか、遠泳の練習とか、それぞれ各人が興味を持った課題に自由に取り組めるように配慮しているわ。」
「今後、取り組むべき課題とか、あるいは今年度に何かスタートする新機軸といったものはありますか？」
「まだ構想の段階なんだけど、直ぐに取り組めそうなものとして考えているのは、ダイエットプログラム・・・これは女子高生の永遠のテーマなのよね・・・に関連して、アクアビクスとか水中ウォーキングなんかをやってみようかと思うんだけど、それが「水泳部」の活動として適切なのか、単なる「プールを使った運動」に過ぎないのかという本質的な部分で、まだ割り切れていなくて、最終的な結論には至っていないの。・・・多少なりとも水泳つまり「泳ぐ」という動作を取り入れることができたら良いんだけど・・・。」

「ただ、水泳部の基本は、とにかく水に親しむこと。水に入って楽しくスポーツをすること。これに尽きるわ。タイムを目指す人、きちんと泳げるようになりたい人、健康を考える人、いろんな楽しみ方があって、それに全部対応するのは難しいけど、少なくとも楽しみ方、楽しむことを否定するのはやらない、そういう部活動を目指しています。」

「あ、準備ができたみたいね。・・・これは単なる余興なんだけど、今日は新入生も沢山来ているんで、今から古式泳法のひとつで、鎧（よろい）兜（かぶと）を纏（まと）ったまま、対岸まで泳いでいくというエキジビションをこれからやるわよ。鎧兜（よろいかぶと）って、かなりの重量があるんで、これを着ると浮いているだけでも大変なのよ・・・。」

　プールでは、それまでいろいろな泳法の指導とか、あれは多分、選手コースの部員なんだろうけど、コースの真ん中をつかってタイムアタックのようなことをやっていたりしたのが、全員、プールサイドに上がってきて、８レーンあるプールは誰もいなくなった。

　そこに、左手から、鎧兜（よろいかぶと）を身につけた男子部員が二人、やってきて、水にゆっくり入ると、見事な古式泳法の立ち泳ぎ（？）で、プールのこっち側、深くなっているところへ向かって泳いできた。頭に被っている、あの兜だけでも、かなりの重量がありそうで、全身では多分１０キロを超える重量物を身につけた状態で、平然と泳いでいる。

　僕たちが見とれていると、そこに優稀がやってきた。水着はまだ指定のものではなく、円に勧められて通いだしたフィットネス・クラブで使っているものらしく、他の部員とは少し違うデザインだったけど、いわゆる競泳水着というやつで、優稀があのボディで薄くて身体にピッチリと密着する競泳水着を着ているのは、はっきり言って殆どの男子にとっては、凶器を通り越して、大量破壊兵器と言っても良いんじゃないかな。小柄な優稀だけど、超巨乳が否が応に

も強調されていて、しかも腰はきゅっとくびれている一方、ヒップはまたバーンとボリュームがあり、身長こそ小さいにしても、体型はまるでグラビアモデル、いや、そんな生易しいものじゃない、これは男子学生のオカズとしてのピンナップモデルとか、そういう用途の雑誌に出てくるような、極めつけのセクシーな体型をしている。こういうのって、なんて言うんだろう。マイクロダイナマイトボディ（死語？）とかいう単語を、前に聞いたことがあるけど、そんなだったっけか？

「あ、みんな来てくれたの？・・・ここ、聞いていたとおり、設備は最高よ。それこそ、下手なスポーツジムとかフィットネス・クラブにも負けない立派なプールで、更衣室やシャワー室も綺麗で、しかも部活動はあたしが望んでいたとおり、各種泳法をきちんと教えて練習させてくれるみたいで、とても気に入ったわ。あたし、ここに入部することに決めた。」

　優稀が、この部活の魅力や、設備の素晴らしさをしきりに話すんだけど、周囲にいる男子部員は皆、大変なことになっている。ピッチリした競泳水着を着て、ボディのラインが丸わかりというか、胸やあそこの形、盛り上がり方まではっきり見て取れる。しかも、優稀の水着はかなりのハイレグで、深くV字型に切れ上がった股間は、眼のやり場に困るほどだ。あの角度の水着を着るためには、股間の毛をきちんと処理しないと大変なことになるんじゃないかな、なんて、僕が下世話なことを考えていたら、周囲の男子部員は優稀の身体に自分の身体が反応してしまい、ほぼ全員があそこを大きく膨らませてしまっている（僕はさすがに双子の姉弟のようなものだし、元女子だったから何とかなっているけど、他の男子は皆、優稀の身体をチラチラと横目で盗み見るような視線を送ってきて、というか目が離せないようだ。ただ、男子部員はサポーターを履いていて、あそこをしっかり押さえつけているらしいのと、それ以前にこういったことは普通にあるせいか、大きくなってしまった股間を特に隠そうという意図はないようで、皆、競泳水着の前を大きく膨らませ

ながらも、比較的自然体で平然としている。

　それよりも、普通の学生服を着ていた怜央と剛が、優稀の身体を見て、思い切りテントを張ってしまい、特に怜央は前屈みになってしまった。優稀は気がついていないようだけど、へっぴり腰で、あきらかに前を隠そうとしているのが、丸わかりだ。（剛は、テントをあまり隠そうとしていない。これは性格もあるだろうし、剛はそういうことを気にするタイプではないからだろう。）

「杉田さんって、お前の彼女だろう？・・・てか、お前たち、性器を交換したんだよな？・・・あれ、物凄いな。ある意味、千博やお前が元女子だったたって言う以上に、彼女が元男子だったなんて、いったい誰が信じるんだ！・・・もう人間不信になっちゃいそうだぜ。」

「彼女、素敵だろう？・・・手を出すなよ！」

「出さねぇよ！・・・でも、あれがお前の胸についていたんだろう？・・・それはそれで、何だか複雑なものがあるな。・・・秋のミスコンにでも出るように勧めてみるか。」

「僕と優稀は体格が違ったからね・・・。僕はAカップだったよ。」

「それよりさ、怜央は自分の婚約者だから仕方ないけど、剛もそんなにテントを張ってるんじゃ、早く彼女をつくらないとね？」

「剛は武史とくっつくんだから、別に要らないんじゃない？」

「なっ、ばっ、バカなこと言うな！！」

「そういうことは、フラグになっちゃうから、怜央も軽々しく口にしちゃダメだよ。」

「む、それもそうだな・・・。すまない。そういうつもりはなかったんだ・・・。」（確かに僕が、最初に校門のところで優稀に話しかけたのが、今ここに繋がってるんだ。案外、そういうのって、本当に話したとおりになっちゃうものなのかな？・・・まあ、僕にとっては、瓢箪（ひょうたん）から駒、みたいな出来事で、結果オーライだった気がする・・・。でも、それが事実とすれば、武史には申し訳ないけど、剛とくっつくのは、決して悪いことじゃないような気がするんだけ

どなぁ・・・。）
　皆で優稀の素晴らしいボディを肴（さかな）にして、好き勝手な話をしていたら、部長が面白いことを言い出した。
「この鎧兜（よろいかぶと）、全部で２０キロ近くあって、普通の人では水に入ると、浮くことすら難しいのよ。なので、例えばこの兜、これは約５キロ程度なんだけど、これだけでも被って、泳いでみては如何かしら？・・・どの位大変なのか、良くわかると思うわ。杉田さんは新入生の中では、選手希望者を除くと、普通に泳ぐことに慣れているように見えるんで、よかったらやってみて下さい。」
「え、あたしですか？・・・じゃあ、ちょっと試しにやってみます。・・・あ、確かに結構重いですね。兜って、こんなに重いんだ・・・。」
「そう、頭にしっかり被って、顎（あご）のところでヒモを結んで・・・。うん、それでＯＫだわ。水に入って、立ち泳ぎで泳いでみて。ひとつ、コツを言うと、立ち泳ぎで身体をまっすぐにして、頭をその上にバランスをとって載せるような感覚で浮いてみて。頭をなるべく身体重心の真上に載せるのよ。そうしないと、バランスが崩れてひっくり返るから・・・。」
「あたし、立ち泳ぎって、やったことないんですけど、確か平泳ぎのカエル足を左右交互に蹴るんでしたっけ？」
「そう、イメージとしては概ね合ってるわよ。」
「こんな感じですか・・・。っとっ、これ、頭の上から押さえつけられているみたいで、どんどん沈んじゃいます・・・。」
「それをしっかり、足で水を蹴（け）って、立ち泳ぎするの。そうしないと、確かに頭が沈んじゃうから・・・。手は、水を掻（か）くというより、手でバランスをとるようにして、それで慣れてきたら、手を使って少しずつ移動するのよ。」
「こうですか？・・・ぅっ、うわっとっ、ぁあっ！！」
　ガボン！
　優稀がひっくり返った！・・・頭を下にして、どんどん水中に沈

んで行く！！・・・なんだかもがいているみたいだけど、兜は顎の紐でしっかり縛りつけてあって、外せないみたいだ！
「おい！・・・溺れたみたいだぞ！！・・・皆、手を貸してくれ！」
部長と、隣に居た男子水泳部の先輩が飛び込んだ。優稀は頭を下にしたまま、水中でもがいていたけど、口と鼻から多量の泡をボワッと吹き出して、一瞬だけ喉を掻きむしったと思ったら、そのまま動きが止まり、くてっとしたまま、プールの底に横たわるように沈んで行った。
「優稀が死んじゃう！！」
そう思った次の瞬間、怜央が着衣のままプールに飛び込んだ。先に飛び込んだ女子水泳部の部長と男子水泳部の部員の二人が、深みに沈んでいる優稀を掴んで引き上げにかかっている。そこに怜央も加わって、３人で優稀の身体を何とか引き上げようとしているのだが、兜が思いの外、重たいようで、足のほうは上に引っ張れるのに、肝心の頭が浮き上がってこない。そこで怜央が優稀の兜を脱がせようと何かを水中でやっている。人間って、息が止まってから何分位、生きていられるんだろう・・・。そんな不吉な考えが頭を過ったところで、ようやく怜央が兜を脱がせるのに成功したらしい。
３人で優稀の身体をプールの端まで引っぱってきたので、僕は剛と二人で、プールのへりから手を伸ばして優稀の身体をプールサイドに引き上げた。部長や怜央は水中から優稀の身体を押し上げてくれた。
「水を吐かせるのよ！！」
部長は慣れているらしく、優稀の背中に膝を当てて膝蹴りを入れた。
「ゲボッ、ゴボッ、ゲホッ、ゴボッ、ゲホッ、ゴホッ・・・。」
「じっ、人工呼吸を！！」
「大丈夫、今ので肺に入った水は吐いたから、息が戻ったわ。」
「優稀！・・・大丈夫？！」
「ゲホッ、ゲホッ、ゴホッ、ゴホッ・・・。」

「優稀！・・・優稀！！・・・。」
「ゲッ、ゲッ、・・・あ、・・・怜央？・・・あたし？・・・」
「良かったー。優稀！・・・優稀！！」
怜央が優稀を力強く抱きしめ、キスした。周囲の人目も憚(はばか)らず、思い切り舌を入れてのディープキスだ。・・・優稀はまだ、何がどうなっているのか、よく理解できていない様子だけど、それでも怜央にしがみつき、優稀からも舌を搦(から)めて怜央の口を貪(むさぼ)っている。僕も部長も取り敢えず安堵したんで、しっかり抱き合ってキスしている二人をホッとして眺めていたら、いきなり怜央がくぐもったような声で叫びだして、身体をビクンッ、ビクンッと痙攣(けいれん)させ始めた。
「ん、んんっ、んぐーっ、うぐっ、んぐーーっ。」
怜央は必死になって抑えているみたいだけど、腰の辺りが痙攣(けいれん)しているし、あの声、あれは絶対に暴発しちゃったんじゃないかな。服がビショビショに濡れてるんで、都合よく誰にも気付かれていないみたいだけど、勝美が暴発したときや、僕が暴発したときとまったく同じだから、きっと怜央も優稀が助かった感激と、このディープキスで、暴発しちゃったに違いない。こんなところで暴発したなんて、皆に知られちゃったら、怜央のプライドはズタズタになっちゃう。となれば・・・。
「さ、じゃ、感動のキスはその位にして、優稀は保健室に行っておいでよ。僕も一緒に行くから。それから水泳部のどなたか、一緒に行ってあげて下さい。怜央はビショビショだから、体操服に着替えてきたらどう？・・・あ、すみません、水泳部で余っているタオルなんか、あったら何枚か貸して下さい。」
「あたしも保健室に同行するわ。こうなったのは、部長たるあたしの責任だから。」
「ありがとうございます。じゃ、剛は、もしできたらで良いけど、他の水泳部員に、続きのインタビューでもしておいてよ。・・・どんなことでも構わないよ。ネタのメモを貰えれば、あとは僕が適当に原稿にするから。・・・あ、タオルが来たね。じゃ、怜央はこれ

を持って体操着に着替えてきて。では後で生徒会室に集合しよう。」

第１１３話　生徒会報（部活動紹介号）完成

「何とか完成したのですが、出来栄えは如何でしょうか？・・・一応、去年や一昨年のものを参考に、それらしいことを書いてみたつもりですが・・・。」

　会長や副会長、それに生徒会役員の先輩達が全員で、僕のつくった最初の生徒会報（部活動紹介号）を食い入るように読んでいる。ときどき、クスっと笑う人もいるけど、皆、真剣な表情で、僅かのミスでも見逃さないというような雰囲気だ。もしこれで多量のダメ出しを喰らったら、今夜は徹夜だ。それでも来週の発行日までの配布が間に合うかどうか・・・。針の筵（むしろ）に座ったみたいで、もう精神が持たないんで、つい催促するようなことを聞いてしまった。

「印刷屋さんは週末も作業してくれるそうなので、これで問題なければ、来週火曜には配布できると思います。」

　話してから、しまった、と思った。新人にこんな聞き方をされたら、ムカっとするかもしれないし、生意気だと思われたらどうしよう・・・。どうも僕は精神的に弱いところが眼に付く。これまでも、気が焦って、言わずもがなのセリフ、言わなくても良いようなことをうっかり口を滑らせてしまうことが多かった気がする。勝美にフォローして貰ったことも何度もあったけど、その勝美に対しても、口に出してから、しまった、と思うようなことを話したことだって、沢山ある。勝美は優しいから、いつもニコニコしていて、僕が凄い失礼なことを言っても、別に何も言い返したりしてこなかったけど・・・。あの二人して性器の交換を誓った日も、僕がうっかり勝美の一番触れて欲しくないことを抉（えぐ）っちゃったし、交換初夜で勝美の家に行ったときもそうだった。・・・あ、つい先日も、お義父さんとはじめて風呂をご一緒したときだって、ヒヤッとしたことがあったっけ。

それにしても、早く何か話して欲しい。この沈黙には耐えられない・・・。

「・・・凄い。・・・本当に全部できてるわ。これ、たった1週間で完成させた新人って、いったいどれだけ優秀なの？・・・私が知っている限りでは、ここ10年位、居なかった筈よ。」

「えっ？・・・それって、どういうことですか？？」

「これはね、新人の報道班員が、どの程度使えるかっていうことを見るための試験であって、間に合うってことは、まったく想定していなかったのよ。」

「各部を回って取材して、インタビューをこなし、原稿を書いて、それを文字数とか考えながら会報に編集する。・・・しかも、それ全部をたった1週間で完成させるのよ。部活は全部で26もあって、勿論、全部を回る必要はないにしても、大半を回った上で、どれとどれを選択するのか、その理由は何故なのか、それらはすべて、最終的に仕上がった、この会報に詰め込まれているわけよね。・・・それって、プロの新聞記者や雑誌の編集者でも、簡単にはできないことなのよ。」

「だから、彼らは何名かのチームを組んで、デスクの指揮の下、分担して取り組むのよ。」

「しかも、君は新人で、他の生徒会の先輩の助力を得られた訳でもないし、それどころか同級生だって、まだよく知らない子も多い筈だ。そのような状況で、確かに手伝ってくれる友人が2名いたにしても、彼らをチームとして率いて、しかもこれだけの原稿を一人で書き上げ、これだけ完成度の高い会報に仕立て上げた・・・おそらくだけど、これだけのものを発行するためには、この3倍程度の原稿を書いて、それらを取捨選択しながら、編集していったんじゃないかい？」

「確かに涙を呑んでボツにした原稿も沢山ありますが、なにかを編集して出版するっていうのは、そういうものじゃありませんか？」

「いいや、そこが凄いんだよ。・・・プロの編集者であっても、そこ

の割り切りというか、取捨選択に苦労し、だからこそ記者が書いてきた原稿を、その上のデスクが整理して、これとこれを掲載する、これは短縮書き直し、これは切る、といった判断を日々行うものなんだ。それを君は、一人で全部こなして、もう我々が手を入れる余地がないほどの完成品を、到底無理と思われる1週間で完成させた。」

「会長、これなら、今回の部活紹介号は、彼の作成したこの原稿を、このまま印刷ということでよろしいですよね？」

「勿論だとも。・・・いや、凄い大型新人が来てくれたものだ。これでもう報道班は、彼にすべて任せても大丈夫だな。」

「ありがとうございます。・・・やっと肩の荷が降りました。何だか、物凄くブラックな企業に間違えて就職してしまったような気がしていて、ちょっと失敗したかなと、密かに考え始めていたところなんです。」

「いや、君を試して悪かったと思っている。・・・実はこの1週間で部活動紹介号を完成まで持っていくのは、そもそも時間的にも難しいし、ましてそれを入ったばかりの新入生にやらせても、絶対にできないと思っていた。それなのに君は配布予定日から逆算して、印刷屋さんとも調整を済ませ、この日に我々の最終了解を得なければならないとスケジューリングした上で、これだけのものを持ってきた。１００点満点どころか、２００点をあげたい位だ。」

「さっきもチラッと話したけど、ここ10年位、これをまともに仕上げられた新入生って、一人も居ないんだよね。」

「えっ？・・・あれっ？・・・でもっ、もしそうだとすると、ここにある去年とか一昨年の号は、いつ誰が作成したんでしょうか？」

「それね・・・。実は、これまで、この4月号の会報（部活紹介号）は、先輩達が全部あらかじめ取材して原稿を作成し、準備を済ませていたんだ。」

「つまりね、・・・君達にお願いしたのは、例年そうなんだけど、会報の発行っていうのが、どんな作業があって、それはどの程度の

時間がかかって、どういうところがどれだけ大変なのかっていう経験を積んで貰うために、わざと普通の新人ではできないような無理難題の課題を与えて、その様子を見るとともに、これからの作業は甘くないぞと自覚して貰うための、一種の通過儀礼にしていたんだ。だから、例年だと、ここにやってきた新人が、何かを出してきたとしても、それをダメ出ししてボツにさせるか、いや、それならまだマシなほうだな、ここ数年は、指定した日時になっても出来上がらなくて、新人が泣きそうな顔で、どうしましょうと相談に来るのを、上級生がさんざん責めたて、そんな甘い考えではダメだとキツいことを言ってボロクソに貶し、最後に予め作成しておいたものを渡して、これで印刷しなさいと助け船を出す、そういう試練の場だったんだよ。・・・新入生にとっては、パワハラと感じたかもしれないけど・・・。実際、私の代の報道班になった二人は泣きだしてしまい、もう生徒会を辞めるどころか、学校も辞めると言い出して、大変だったんだ。」

「会長、あの話はもう勘弁して下さいよ。何も私の昔の恥を新人に晒さなくても・・・。」

「悪い。副会長のメンツを失わせるつもりはなかったんだ。・・・なににせよ、君には報道班長をやって貰うことにしよう。班長だから、生徒会報の発行は、すべて君に任せる。どういった編集方針で、何を書くか、毎回のテーマ設定から取材・インタビュー、そして原稿執筆と編集まで、私は一切口を出さない。最終的に、印刷する前に一度だけ見せて貰う、それで充分だ。」

―――――――――――――――

―――――――――――――

「凄いじゃないか！・・・一発で合格、それも修正するところがないって絶賛されたんだぜ！！」

「ありがとう、二人が手伝ってくれたおかげだよ。特に剛の書いて

くれたメモ、あれは助かった。最初にお願いした水泳部のインタビューメモ、あれが実によく纏（まと）まっていて、必要な情報が過不足なく入っている、つまり相手から必要な情報をきちっと聞き出せている。しかも相手の言葉のちょっとした雰囲気とかニュアンスも伝わってくる内容で、あんな走り書きのメモのような体裁なのに、なんて完成度が高いんだって、感心したんだ。・・・あれがあったから、あとは単に原稿に落とし込むだけで、スラスラと記事にできたんだ。」

「それは僕も強く感じたな。剛にあんな才能があったなんて、知らなかった。」

「よせやい。あんな、グチャグチャに書き殴っただけのメモなんて、褒（ほ）められるようなものじゃないだろうに。」

「文字の綺麗（きれい）さなんて、どうでも良いのさ。取材メモは、とにかく必要な情報が過不足なく網羅（もうら）されているか、相手が何を言ったか、きちんと書かれているか、それがすべてだよ。・・・剛の性格からして、こんなにきちっと相手から聞き出して、それを最適かつ最小限の単語、それこそキーワードを並べただけかもしれないけど、メモとして最高に使いやすいものを書いてくれるとは、想像もしていなかった。良い意味で、期待を裏切られたといったら、申し訳ないかな？・・・でも、原稿にするには、これが大事なんだ。」

「まあ、何にせよ、一発で合格してよかったよ。千博のことだから、ここでダメ出しがあったら、徹夜してでも書き直すつもりだったんだろう？」

「うん。・・・まあ、それは何とかしなけりゃならないとは考えていたけどさ・・・。任されたのに、できませんでしたってのは、いくら新人だからって、流石（さすが）にね？」

　確かに怜央の言う通り、一発で通って良かった。というか、徹夜も覚悟していたのは、事実だ。でも、剛のメモのおかげで、原稿を書くのは簡単だったし愉（たの）しかった。・・・いや、それだけじゃない、

あの最初のメモが素晴らしい出来だったんで、安心して他の部の取材やインタビューも任せることができた。僕一人じゃとても無理、いや、怜央と二人でも難しかったろうけど、剛が一人で10箇所も回ってくれて、どれも完璧な取材とインタビューになっていたから、僕は原稿執筆に集中することができたんだ。

　性格的にはかなり面白いけど、やっぱり剛も一級を張っていただけのことはある。・・・いや、一級になるような男子というのは、誰も能力が抜群というだけじゃなくて、何かに全力で取り組んだときの、ここ一番の集中力とか行動力が物凄い。それは勝美や父さん、兄さんを見ていても、よくわかる。・・・僕も含めて、女子で1級になったやつ（つまりは性転換組ということだけど）は、皆、まじめ一筋でコツコツと勉強して、いわば努力の積み重ねで一級になった子ばかりだ。そこに行くと、もともと男子で一級の子は、こういうイザというときの底力というか瞬発力が、やはり元女子とは比較にならない。そういえば、勝美も普段は、クラスで2番とか3番位に居た筈だけど、最期の試験のとき、あのときは学年全体で男子の2番をあっけなく取った。つまりそういうことが簡単にできるだけの能力と、積極性に秀(ひい)でているということなんだろうな。・・・やっぱり、性転換した元女子が、最初から男子だった一級者に混じってやっていくのは、かなり大変なんだってことが、改めて突きつけられているみたいだ・・・。

　まだよくわからないけど、他の中学の出身者でも、おそらくはこの男女の傾向は同じようなんじゃないかな・・・。女子で一級になるようなやつはコツコツと努力して、その積み上げで成果を出す。それに対して、男子で一級になるようなやつは、ここぞというときに集中してやり遂げる積極性とか行動力が素晴らしい。・・・多分だけど、これは一級になるようなやつは眼に付くというだけで、何級であっても、級に関係なく、男子と女子との間にある、超え難い違いなんじゃないだろうか・・・。

・・・でも、勝美は僕に対しては、およそ積極的に手を出すこと

がなかったけど、あれはどう考えれば良いんだろう？・・・勝美の優しさなのか、それとも相手が僕だったからなのか、はて？・・・。あ、そう言えば、怜央もこの例外なのかな？・・・。

　さて、じゃ早速、印刷屋さんに原稿のデータを渡すことにしよう。結局、最終的な記事として紹介できたのは、野球部、華道部、水泳部、それとこの生徒会の４箇所となった。A３両面印刷で１枚じゃ、写真を入れるスペースも考えると、１つの紹介記事を５００文字から６００文字としても、せいぜい４つの部しか紹介できなかったのは、仕方がないんだけどね。

　でも、野球部はともかく、華道部、水泳部、生徒会は、皆、知り合いが居たから選んだと言われても仕方がなさそうだな・・・。

　まあ、取り上げた部に限っては、特徴をきちんと紹介できたと思うし、内容的にも纏（まと）まっていて、必要な情報は盛り込んだつもりだ。僕が手がけた最初の会報としては、こんな感じなのかな・・・。

＊　野球部　部員全員が家族のような雰囲気で部室は自宅みたい。野球を楽しむことが第一。

＊　華道部　部長がとても面白い方。前衛的な華道に積極的に取り組む雰囲気。

＊　水泳部　素晴らしいプール。とにかく設備が良い。何をやるかは、かなり自由。

＊　生徒会　扱いは部活動と同等。報道班は新聞部と実質的に同一。

第１１４話　雌落ちした寛

「ねえ、優稀。ちょっと話があるんだけど、良い？」
寛と石川君が、二人揃って訪ねてきた。
昼休み。皆、それぞれ学食に行ってしまったり、外で弁当とか買ってきたパンを食べるんで移動したりして、教室に残っているのは１０名にも満たない。あたしは普段だと、怜央とか勝美達と一緒に、高校に入って自分でつくるようになったお弁当を食べるんだけど、今日は千博たちが生徒会報の執筆とかで、全員昼休みも掛かりきりらしくて、のんびりお昼を食べてる時間がないって言われたんで、自分の席で一人寂しくお弁当を食べ終わったところだった。
「ええ、別に構わないわ。石川君と二人揃って来たってことは、石川君が寛に告った話よね？」
「あっ、あのっ、あのさぁ。・・・そのっ、僕っ、優稀とお付き合いさせて貰っていたけど、・・・そのっ、石川君から告白されてっ、そっ、それでっ・・・。」
「うまくいったってことね？・・・良かったじゃない。あたしとの関係は、いわばお試しだったんだから、気にすることはないわよ。そもそも、あたしも怜央が本命だって断った上で、寛とお付き合いするって話したわよね？」
「本当にごめんなさい。優稀には中学時代を通じて、ずっと僕の一番の親友だったし、年齢＝彼女いない歴だった僕の初めての恋人になってくれて、夢のような初体験させてくれて、童貞を卒業させて貰ったのは、本当に感謝している。それなのに、いきなり乗り換えちゃうようなことになって、恩を仇で返しちゃって、・・・もう僕、優稀に嫌われちゃうかな・・・。」
「そんなことないわよ。寛はバイって言っても、どっちかというとゲイの要素が強かったんじゃないの？・・・実を言うと、あたしこ

そ、ナイショなんだけど、春休みに怜央から正式にプロポーズされちゃったの。といっても、まだいつ結婚とか、具体的な話は何一つ決まっていないんだけど、あたしの両親も怜央の両親も、ともに話もついたみたいで、だからいつ、寛に説明しようかって、悩んでいたところだったのよ。これからも寛とは、親友で居られたら嬉しいんだけど、良いかしら？」
「優稀、婚約したの？・・・おめでとう。やっぱり僕と優稀は、恋人という関係じゃなくて、親友・・・そのっ、異性の親友は成立するか、なんて議論もあるみたいだけど、やっぱり中学三年間、親友だった関係は、性別が変わっても、変わらないものなんだね。」
「ありがとう。寛も良かったわね。何年も前から寛のことを思い続けてくれていた石川君と、相思相愛になれたんなら、これに勝るものはないと思うわ。寛こそおめでとう。・・・で、石川君とはどうだったの？・・・こんなこと聞くのは野暮かしら？」
「うっ、うんっ・・・。そっ、そのっ・・・。」
「ん？・・・どうかしたの？」
「ぼっ、僕っ、・・・石川君じゃないと、もうダメなんだ・・・。」
「そんなに石川君が好きになったんなら、本当に良かったじゃない？・・・石川君も長年、恋い焦がれていた甲斐があったって訳ね？」
石川君が、少しニヤニヤしているようなのは、まあ当然だけど、でも寛のこの不自然な態度。それに、石川君も満更ではなさそうなのに、何となく微妙な表情で、二人の間に妙な間というかぎこちない雰囲気があるのは何故なのかしら？
「ぼっ、僕っ、・・・もうっ・・・石川君の性奴隷になっちゃったんだっ！！」
「ぇえっ！・・・いったい何の話？」
「僕っ、石川君の命令なら、ここで今すぐ服を全部脱ぐし、石川君に命令されたら、クラスの皆の前でオナニーするっ！！」
「しない！・・・しないよ！！」
「逆に、石川君がダメって言ったら、僕はもう二度と射精できない

っ！・・・いやっ、一生、射精しちゃいけないいんだっ！！」
「そんなこと言っていないって！！」
「僕は石川君に射精管理されるんだっ！・・・僕の身体は、もう全部、石川君のものなんだっ！！・・・僕は石川君の命令どおり、射精したり禁欲したりするしかないいんだ！！」
「いったい寛は何を言い出したのかしら？」
「うーん、どうも肌を重ねたら、壊れちゃったみたいなんだ。」
「どうしてセックスするとこんなに壊れちゃうの？・・・寛はそんなにポンコツじゃなかった筈よ！」
「僕にもよくわからないいんだけど、昨日何があったのかは順を追って説明するよ・・・。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

「・・・という訳なんだ。元村君がどこから壊れたのか、よくわからないいんだけど、とにかく彼は昨日からこの状態なんだよ。」
「呆れた！・・・寛はおちんちんが大きいからか、かなりの絶倫なのは確かだけど、いくらなんでも2時間もイキっぱなしで絶頂状態が継続したら、そりゃ壊れちゃいもするんじゃない？・・・気絶すらさせて貰えなかったんでしょう？」

発端は、寛のおちんちんがあまりにも巨大なんで、いざセックスするときになって、石川君が怖がって泣きだしちゃったんですって。寛は自分が受けのネコで良いって何度も話したんだけど、もう手を触れるだけでも石川君が泣き叫んじゃうんで、仕方がないから寛が裸になって手錠で自分をベッドに縛りつけて、石川君に自由にして良いって言ったらしいの。そうしたら、逆に石川君が調子に乗っちゃったのか、寛のバックに挿入したまま、ぬか六（都合6回も、抜かないで連続セックスすること：昔からある表現らしいけど・・・。

）に及んじゃって、その間、約2時間以上にわたり寛はイキっぱなしだったみたい。

寛も大概絶倫だと思うけど、石川君の精力は、まるでオークとか、そういった想像上の魔物みたいね。

その結果、寛は千博とか和田君とかが3ヶ月検診を受けたときと同じ状態にされちゃったみたい。いや、3カ月検診は、専門医の先生が患者の状態を見ながら、きちんとコントロールしつつ絶頂・射精をさせているけど、石川君はそんな経験も知識もないだろうから、自分の性欲の赴くままに、ひたすら寛の前立腺を突きまくっていたみたいなんで、あれより何倍も、何十倍も酷かったのかしら・・・。しかも、ぬか六なんて、いくら石川君が絶倫だとしても、賢者タイムも考えると、時間にして1時間じゃ効かない筈だわ。多分だけど2時間以上、もしかすると3時間位はやりまくっていたのよね。千博や和田君のときは、せいぜい20分か30分位だったそうだけど、それでもあの惨状なんだから、2時間以上もイキっぱなしにさせられた寛が完全に壊れちゃっても、不思議じゃないわ。

寛が出し続けさせられた精液だか我慢汁だか潮だか、とにかくおちんちんから出てきたものは、正確に計ったわけじゃないんでしょうけど、石川君のざっとした感覚だと、コップに3杯位はあったんじゃないかですって。

最後のころになると、寛はもう何を言っているのかわからない、動物的な喚き声を上げながら、気絶しかかるとまたイカされて、それで気絶させて貰えないという無限地獄状態だったみたい。白目を剥いて口からは涎というか泡を吹いちゃって、おちんちんからは精液がずっとだらだらと垂れるように射精し続けて、人間としての反応じゃなくって、死にかけた獣が痙攣しているようだったなんて、よく意識が戻ったわね。・・・実際、終わってからも全然回復しなくて、身体のどこであっても、ちょっと触っただけでビクンッ、ビクンッとなって射精しちゃうようになって、またそれを石川君が調子に乗って全身で試して遊んだんで、寛は今でも身体のどこを触ら

れても、簡単にイッちゃうようになっちゃったんですって。要するに、石川君の調教が完成して、寛は完全に雌落ちしてしまい、石川君じゃないとダメな身体にされちゃった訳ね。可哀相に・・・。

「ぼっ、僕はっ、僕はもうっ、優稀とは愛し合うことができないんだ！・・・そのっ、優稀とセックスしちゃいけないし、石川君の許可がないとオナニーで射精もできないんだ！！」
「そんなことないって！・・・僕と恋人になってくれるのは嬉しいけど、だからって、元村君が誰とセックスしようとも、それを止める権利は僕にはないよ？・・・あ、勿論、フリーセックスを勧めている訳じゃないけどさ・・・。」
「わかったわ。寛の状況はともかくとして、さっきも話したとおり、あたしこそ寛との関係を解消しなきゃって、悩んでいたところなの。だから、あたしからも寛とのお試し恋人関係を解消させて下さい。そして、今後は昔のとおり、一番の親友としてこれからも仲良くさせて貰えるかしら？」
「本当にごめんなさい。優稀はずっと僕の一番の親友で・・・、その、お試しとはいっても僕のはじめての恋人で、童貞を卒業させて貰った恩人だから、これからもずっと親友でいてくれると嬉しい。」
「あたしこそ、昔の同性時代の親友に戻ったと思えばいい訳だし、とても気楽で気の置けない関係が、また復活できて良かったわ。・・・それにしても、何をされたのか、どういう状況だったのかは、今の石川君の説明でわかったけど、寛はどう感じたの？・・・凄く興味があるわ。」
「・・・うん・・・。そのっ・・・。最初は石川君が怖がってたんで、僕が手錠で動けないようになって、石川君に可愛がって貰ったんだ。」
「それはさっき聞いたわよね。」
「それでさ。・・・僕が一回、愛撫で逝かされて、そこまでは良かったんだ・・・。でも、その後、石川君が僕のバックにペニスを挿

入してきて、コリコリしたのは物凄く気持ち良くって、ずっとイキっぱなしにされちゃったんだ。・・・石川君は何度イッても、ぜんぜん収まらなくって、僕もう死んじゃうって、何度も何度も許してって言ったのに、石川君は僕の敏感なところをひたすら突っ付いて、それで・・・。」
「気絶もできなかったのね。可哀相に。石川君も、いくらなんでもやりすぎよ！」
「・・・ごめん・・・。」
「石川君は、ずっと寛のバックばかり責めていたの？・・・他のところは、奉仕してくれなかったの？」
「そう言えば、あまり記憶がないんだ・・・。とにかくバックに挿れられっぱなしで、僕はもう何が何だか、わからないまま、ひたすら苦しくて・・・。」
「それもごめん。僕、元村君のペニスがあまりに大きくて、・・・そのっ、・・・何となく怖くて、無意識にペニスには一切触らなかった気がする・・・。僕のコンプレックス？・・・それとも嫉妬？・・・よくわからないけど、確かにペニス以外の乳首とか、そういったところばかり刺激していた気がする。・・・本当にごめんなさい。」
「いいんだ・・・。僕はもう、石川君に触られれば、どこでも射精しちゃうんだ。・・・いや、逆にペニスは、もう必要ないんだ・・・。ペニスなんて、なくっても射精には何の関係もないんだ・・・。」
「元村君がこんなになっちゃったのは、僕の責任だから、僕は一生、元村君と生きていくよ。将来、結婚するのかどうするのか、それは二人の関係でよくよく話し合うつもりだけど、そもそもゲイの僕はいずれ同性婚するつもりでいたから、僕のプロポーズを受けてくれると嬉しい。」
「うん、僕は石川君の性奴隷なんだから、石川君が僕のご主人様になってくれるんなら、是非そうして。・・・僕はもうペニスがいらないから、さっそく手術でペニスを切り取って、石川君に捧げるこ

ととするよ。」
「なっ、何をまた訳のわからないこと言い出すの？・・・君が僕の性奴隷と呼ばれたいのか、奥さんとか嫁さんとか呼ばれたいのか、それは君の意識の問題だから、どうでも構わないけどさ、どこをどうやるとペニスを切り取る話になるの？・・・そんなもの貰っても、嬉しくも何ともないし、そもそも僕はゲイに誇りを持っているんだ。ペニスを取っちゃったら、ゲイと言えなくなっちゃうよ。」
「そうよ、寛はそんなに立派なおちんちんを持っていて、クラスで一番どころか、学校でも一番大きい位じゃないかしら？・・・そんな素晴らしいものを、どうして要らないなんて言えるの？・・・あたしの親友の、男の子だった寛はどこに行っちゃったのかしら？」
「・・・でも、もう僕は石川君にバックを可愛がって貰えれば、それで大満足なんだ・・・。石川君がバックに入れてくれれば、僕は射精する。・・・そうでないと、もう二度と射精しちゃいけないんだ。」
「やっぱり、これじゃぁダメだな。・・・僕が責任を持って、君のことを厳しく躾けてあげるよ。そんな訳がわからないことを変に口走ったりしないようにね。」
「僕のご主人様になってくれるの？！！」
「ご主人様でも旦那様でも、好きなように呼ぶが良いさ。早速、僕の両親にも話をするから、君も君のご両親に話をして、然る後に僕が君のご両親に挨拶に行くよ。それで良い？」
「ご主人様！・・・ありがとうございます。・・・もう、僕の身体はすべてご主人様のものです！！ご主人様のお気に召すまま、どのようにも扱って下さい！！」
「じゃあ、まずはその変な言葉遣いを止めようよ。普通に恋人同士・・・ゲイだからって、別に意識することもないか・・・とにかく普通の親友と同じ口調にしよう？・・・君と杉田さんは、ごく自然に親友同士の話し方だよね？・・・それで良いからさ。あと、名前で呼んでよ。僕のことは哲也って呼んで？・・・僕も君のこと杉田さ

んみたいに寛って呼ぶからさ。」
「わかった。僕は哲也の言うとおりにする。・・・哲也にすべてを管理して貰い、しっかりと躾けて貰うんだ。・・・哲也が良いって言わなければ、もう射精はしない。哲也が射精しろって言ったら、いつでもどこでも射精する。たとえクラスの中でも、どこでも・・・。」
「どうも、まだピントが合っていないみたいだね。そんな寛には・・・・・こうだ！！」
「あっ、あぁっ、ひっ、ぃひっ、あっ、あっ、だめっ、あぁーっ、いっ、いぐっ、ぐっ、ぃぐっ、くっ、いくっ、いくーーっ。」
石川君がいきなり寛の乳首をシャツの上から両手でぎゅっと摘まみ、グリグリと刺激した。すると寛は、腰を思い切り前に突き出し、全身をビクビクと痙攣させたかと思ったら、腰を前後にガックンガックンと震えるように動かしながら、一気に射精してしまった。
学生服のズボンの前は、吹き出した精液で大変な事態になっていて、その下のトランクスの惨状など、想像するだけでも酷い状態だろう。
「あれーぇ？・・・僕、射精しろなんて一言も言っていないよ？・・・それなのに、ちょっと乳首を刺激しただけで勝手に射精しちゃったの？・・・それも教室の中で？・・・僕の命令がないのに、勝手にクラスで射精しちゃうなんて、どんなヘンタイさんなのかなぁー？」
「うっ、ぐすっ、ひぐっ、ごっ、ごめんなさいっ！・・・ぼっ、僕っ・・・。」
「精液でベトベトじゃない。早く始末してこないと、皆にばれちゃうよ？・・・それとも寛がヘンタイだって、クラスの皆に発表したいのかな？」
「うっ、ぐすっ、哲也がそうしろって言うなら、・・・僕・・・。」
「冗談だよ。・・・自分の恋人を、そんな貶(おとしめ)めるようなこと、僕しないよ。・・・早く、体操着に着替えてきたらどう？」

「きっ、今日は体育がないから、持ってきてぃなくて・・・。」
「しょうがないなぁ。僕のを貸してあげるよ。似たような体格だから、着れるでしょ。・・・さ、僕もついて行ってあげるからさ、トイレに早く行こう？・・・昼休みが終わっちゃうよ。」

体操着を持った石川君に手を引かれるようにして、寛がへっぴり腰で前を隠しながら、トイレに連れて行かれた。半分べそをかきながら、でもかなり嬉しそうだったわね。石川君も、自分の体操着を貸してあげて、しかもトイレまで一緒に行くなんて、良いところあるわね。しかし、乳首を摘んで捻られただけで、一瞬で射精しちゃうとは思わなかったけど、どうやら、これで納まるべきところに収まったということなんでしょうね。・・・あたしも肩の荷が下りた気分だわ。

第１１５話　性転換者懇親会ふたたび（１）

「こんにちは。Ｂ組の鈴木芳雄です。北川中出身です。」
「今日はお世話になります。山下中の児玉・・・児玉恵です。」
「お邪魔します。山下中の市野昭子です。」
「ここは榊君の会社関係の場所なの？」
「あたしたちのために、申し訳ないわね。」
「ここ、父さんの会社の昔の本社工場だったところなんだけど、もう随分前から使っていなくて、倉庫というか、殆ど廃材置き場になっていたんで、僕が貰い受けて隠れ家みたいにしているんだ。・・・あ、話したとおり、食べ物なんかは会費を貰うからね。」

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー

時間近くになったんで、性転換者が続々と集まってくる。入り口では、わざわざ机まで出して、優稀と勝美が対応してくれている。
　あの衝撃的な身体検査の日から、僅か２週間で、３中学出身者合同の拡大性転換者懇親会を開催するまで漕ぎ着けられたのは、勝美と優稀、それに山下中の児玉君など、他の中学出身の性転換者にも手伝って貰えたからだ。・・・いや、実は準備段階では、名簿の整理とかで、剛にもかなり手伝って貰ったんだけど、今日の懇親会は純粋に性転換者だけを集めるという前回僕たちがやった方法を踏襲したかったんで、申し訳ないけど剛には今日は遠慮して貰っている。（というか、剛のほうから、気を遣ってくれて、ここには来ていない。）
　前回は完全に裏方に回った怜央だけど、今回は自分からもいろいろと動き回ってくれて、他校からの生徒への声掛けとか、懇親会の趣旨や効果の説明など、大活躍だった。特に今回は優稀が発起人の

ような立場になったことから、本当に自分のこととして骨を折ってくれて、やっぱり婚約するのと違うのかと、妙に納得したりした。
　前回は、僕達全員で8組16名に真央ちゃんが入って17名だった。今回は学校が忙しいらしくて、真央ちゃんは参加できないとのことだったけど、それでも人数が3校合わせて22組44名にもなってしまい、一気に3倍近くにもなる。といっても、怜央の隠れ家は80名程度（引っ越す前の当時の人数）がここで働いていたそうだから、44名のパーティーは充分に可能だろう。ただ全体的な広さは何とかなりそうだけど、1階はキッチンとかバストイレとかがあるんで、少し狭くて、さすがにここに全員が入るのは厳しそうだったから、まず2階の和室4部屋（12畳が4部屋連なっている）を使って全体会合を行い、その後男女に分かれたときに女子だけが下に移動するということにした。
　今回、他校の性転換者を集めるのに、やはり一番苦労したのは、落ち込んじゃっている女子転換者だった。勿論、その理由もよくわかるけど、それぞれの学校側でどういったフォローがあったのか、なかったのか、とにかく彼女らは、もう自分の人生が終わったと思い込んで涙する状況から一歩も出られず、それどころか学校にも殆ど出てこなかったり、人と会うのを拒否したりと、結構大変だった。しかし、優稀からの働きかけで、僕たち西山中の女子転換者が全員で個別に当たってくれて、勿論、優稀や勝美もそれに同行したりして、一人ずつ根気よく説得したところ、この短時間で全員が参加を約束してくれることになった。
　優稀の頑張り、それから西山中の女子転換者たちの積極性、これは山下中や北川中の男子転換者に驚きと、大きな感銘を与えたみたいだ。実は、噂（うわさ）として聞いた話なんだけど、僕たちの学区、つまりこの高校に限っても、この強制的に女子にされてしまった生徒にあっては、自殺しちゃう子とか、精神が完全に崩壊しちゃって、事実上の廃人になる子というのが毎年のように出るらしいんだ。といっても、そんな統計はどこにも発表されていないし、市でも隠してい

るんだろう。今年はとにかく全員を集めるところまでは漕ぎ着けられたんで、ここからは僕たち西山中の性転換者の出番だ。何とか、他校の子が前向きな思考に切り換えて、新しい人生を精一杯楽しめるように、意識を切り換えるお手伝いができると良いな・・・。その第一歩が今日の懇親会だ・・・。

全員、揃ったようだ。全部で丁度４４名だから、ほぼほぼ１．５クラス分の人数が居ることになる。男子は全員が一級で、Ａ組かＢ組のどちらかの生徒だ。一方、女子は勝美が唯一の例外で一級のＢ組だけど、あとは全員が三級なんでクラスもＯ組からＺ組に分かれている。Ａ組とＢ組は、それぞれ１５名ずつの男子のうち、２２名が性転換組なんで、元からの男子は２組合わせても８名しかいない。(剛はその貴重な1名だ。勝美が男子のままだったら、当然入っていた筈だけど、でも、その場合は僕はどうなったんだろう・・・？)

他方、性転換女子は勝美を除く２１名が１２クラスに分かれているので、各組ともだいたい2名ずつとなっていて、同じ学校からの生徒が同じクラスになった例は、どうやらいないみたいだ。我が西山中出身の女子転換組は皆、それぞれのクラスで居場所を見つけつつあるようだけど、山下中と北川中出身の女子転換組は、きちんと登校してきているのも半分程度で、その登校組でさえ、やはりクラスには全然溶け込めていないらしい。引き籠もりになってしまい、高校には全然登校していなかった子も何名か居て、彼女らにコンタクトしてここまで来て貰うのは、かなり大変だった筈だ。・・・さて、彼女達の心をどうやって溶かして行くのか、ここからどう進めるのか、あとは勝美と優稀の手腕に期待しよう・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「ねえ、ここ、カラオケとかゲームとか、いろんなものが置いてあるんだけど、遊んでも良いの？」

「勿論さ。・・・ただ、今日は多分、皆で自己紹介とか話をしているると、時間があまりないんじゃないかな？・・・ここは、僕たち性転換組、男子も女子も、どっちでも良いけど、皆は自由に来て使って貰えるように開放するからさ、あとで好きなときに来て使ってよ。・・・あ、鍵の関係もあるんで、いつ使うのか、一応、事前に僕か優稀、・・・杉田優稀さんに連絡して貰えるとありがたいけど。」

「榊ん家って、かなりの資産家なんだな？！」

「いや、僕のところなんて、小さな会社だよ？・・・もともとは父さんが若いときに始めた町工場みたいなところだったんだ。この建物は、その最初の本社工場で、少しずつ規模を拡大したらしいけど、5年前に引っ越す直前でも、従業員数はせいぜい８０名しかいなかったんだよ。ちょっと大きな町工場でしかないよ。」

「でも、今はもう４００名以上の立派な大企業じゃないか。何でも世界中でここでしか造っていない製品、オンリーワンの技術を持ってるって話を聞いたよ？・・・この町では、多分だけど一番大きな会社じゃないかい？」

「まあ、その話は取り敢えず置いておいて、皆が揃ったみたいだから、今は懇親会を始めようよ。最初はこの会を企画した優稀と千博の姉弟から説明があると思うよ・・・。」

――

「性転換組の皆さん、本日はご参集頂きましてありがとうございます。西山中出身の杉田優稀と言います。本日ここには、３つの中学出身の性転換者しか居ません。といっても総勢で２２組４４名の多人数になって、この場所を開放してくれた怜央・・・、あっ、榊怜央君には感謝しかないのですが、さすがに狭いとは思いますので、男女全体での合同懇親会は短めにして、適当なところで男子組と女子組に分かれようと思っています。」

「まあ、それはあとでご案内しますが、とにかくここには性転換者

だけですので、皆さんがそれぞれ男子になって、あるいは女子になって、どう感じたか、どんなところに悩み、どういったところが不便で、何に困っているのか、普段から聞きたくても聞けないこと、または話したくても話せないこと、どんな些細なことでも構いませんので、心の中を自由に明かして下さい。私たちは、男子になった方も女子になった方も、皆仲間です。どっちの性別であろうが、そんなことは気にせず、自由に発言して貰えたらと思います。」
「実は、私たち西山中出身者は卒業式の日に、これと同じ性転換者懇親会を、この同じ場所で開催しています。理由は幾つもあるのですが、一番の目的は、女性にされてしまった皆さんに、そのショックや辛さを乗り越えて、これからの人生を楽しく前向きに歩んで頂きたい、そのお手伝い、とまでは言わないにしても、何らかのきっかけになれれば良いと考えて実施してみたところ、望外の結果を得ることができたので、それを是非、山下中や北川中で女性化対象にされてしまった皆さんにも拡大できればと思ったからです。」
「私も今でこそ、こんなに明るく振る舞っていますが、忘れもしない半年前、赤紙を渡されたときは、ショックで茫然自失でした。自分の命にも匹敵する身体の中心を切り取られてしまう、という恐怖と絶望は、女性になった皆さんでしたら、身に沁みておわかり頂けると思います。あのままだったら、私も良くて引き籠もり、下手をすると、それこそ自殺していても不思議ではなかったと思います。でも、私の場合、あるきっかけで何とか心を保つことができました。そして、こういう運命になった以上、泣いていないで女性になったことを、いっそ楽しんでみようと、そう考えを入れ換えられたのです。」
「これについては、後で詳しくお話するつもりですが、今ここで私がひとつだけ述べておきたいこと、それは、女性にされてしまった皆さん、・・・皆さんの男子としての遺伝子は、性器を交換した相手の男性が、しっかり受け継いでくれているということ、そして彼ら一級男子となった交換相手は、一級男子の責務として、必ずや多

数の子供を設けてくれるだろうということです。・・・ちょっと想像してみて下さい。もともと四級の下程度では、結婚して子供を設けることも難しいかもしれなかったのが、自分の男子としての遺伝子をもった子供が多数生まれてくる、そして次代を担うような重要な役目を、新たに一級男子となった相手に託することができる。さらに、それに加えて自分自身も、女子として妊娠・出産するチャンスは広がっている訳でして、自分でおなかを痛めて子供を産み、子育てをする楽しみも得られる、そんな2倍も3倍も楽しい生活を送る可能性が広がっているのです。」

「あたし達は決して、犠牲になった訳でも生贄になった訳でもありません。男子としての幸福、つまり自分の子種を多数の女子に蒔(ま)くという果実を楽しみながら、同時に自分で子供を妊娠し、産み、育てるという女子の幸福も得ることができるのです。」

「女子になった皆さん。・・・今は辛くて悲しくて、そんな前向きな考えにはなれないと思っているでしょうが、どんな辛い体験でも、一人で抱え込まず、身近に居る人と共有し、同じ辛さを経験した人同士で語り合えば、辛さは半分にも三分の一にもなります。また、折れてしまった心も、仲間と一緒に泣き、笑い、ともに助け合い、手を取り合うなら、必ずや乗り越えることができます。そしてその乗り越えた先には、今私が話したような、2倍も3倍も楽しい未来が待っている、そう考えようではありませんか。」

「同じような境遇の人からの助言や体験談は、想像以上に励みになります。・・・どうか女性となった皆さん、今日は皆さんが心の中に抱えている、どんな悩み、心配、あるいは悲しみなども、すべて吐き出して下さい。ここにいるのは、全員が性転換者です。誰も皆さんのことを嘲笑(あざわら)ったり揶揄(やゆ)したり、あるいは哀れんだりすることもないでしょう。同じ境遇の者同士、心ゆくまで泣き、笑い、そして共感しあって下さい。」（拍手）

「では、男子になった側を代表して、僕から一言。皆さんは念願叶

って男子になった訳ですが、男子になって、こんな筈じゃなかったとか、戸惑ってしまったこと、あるいは理屈では理解していても、心がまだついていかない、そういった体験はありませんか？」
「僕は男子になって、しかも以前から恋人だった勝美・・・そこに居ますが、彼女が一級にもかかわらず、僕と結婚するために女子になってくれて、結果として恋人同士で性器を交換するという、ちょっとあり得ないほど恵まれた境遇だったのに、毎日これでもかという位の試練の連続でした。勝美と結婚して、勝美のおなかには僕の子供が、もう４カ月となり、現在は勝美の家に婿として暮らしていますが、それだけ恵まれた僕でもなお、男子になるとは、こんなに大変なのか、きっと僕は、男子になったことのツケを一生涯、払い続ける人生なんだろうと、そう考える毎日です。」
「まあ、それは僕が入り婿になったということもあるからでしょうが、それを抜きにしても、男子になると、心の中を入れ換えないと、本当に大変です。男子とはかくあるべし、という固定概念、あるいは社会通念というものが、極めて強固に存在し、それはステレオタイプかもしれませんが、大きなプレッシャーとなってのしかかって来ました。・・・まず最初の試練ですが、皆さんは人前で裸になるということには、もう慣れましたか？・・・人前でイクこと・・・つまり射精するところを他人に見られるのはどうでしょうか？・・・それも、赤の他人ならともかく、親しい友人とか、あるいは家族、それも母親に見られるのはどうでしょうか？」
「これらは、男子であれば、多少の気恥ずかしさはあるにしても、別に普通にやっていることだ、と言われますよね。皆さんはそれを普通に受け入れることができるようになりましたか？」
「こんなことを話すのは、先日の身体検査のとき、西山中以外の出身者が、まだまだ心の中が男子になりきっていなくて、それで躊躇というか固まってしまったのを目にして、これはやはり僕たち西山中の性転換者が卒業式の日に行った、この懇親会での経験が、極めて大きな意味を持っていたんだと改めて思い知ったからです。・・・

僕たち西山中の新人男子が何をやったのか、それは後で男女に分かれてから、説明しますので、今日の1回だけでは難しいかもしれませんが、皆さん全員が、何とか一日も早く、心の底まで完全な男子・女子になれるよう、今日の懇親会を、是非スタートラインとしてご活用下さい。」（拍手）
「それでは皆さん、自由に懇談をお楽しみ下さい。まずは私たち西山中出身者の性転換者が、簡単に自分の現在の様子とか、性転換してどう感じたか、何が困ったか、といった体験を順番にお話ししま す。西山中出身の性転換者、男女あわせて16名全員から、一人ずつ、現在の状況、特に性転換してみて、驚いたことや発見したこと、それぞれの体験とか、これからの抱負とか、今何をしているのか等、自由にお話を致します。勿論、質問も歓迎します。それに引き続いて、皆さんそれぞれ、自由に発言して頂くことにします。」
「その後で、男女に分かれて、それぞれ同性同士、秘密の会話というか、異性には聞かれたくない内容や、異性がいると気まずい話や気まずい行為などもやってみようかと考えています。そちらは、またそのときになったら、ご案内致しますので、まずは飲み、食べながら、歓談致しましょう。」
「それと、言うまでもありませんが、ここでの会話は、我々性転換者だけの絶対の秘密です。くれぐれも他言無用でお願いします。」

第115話　性転換者懇親会ふたたび（1）（後書き）

次回はどこまでハメを外すことになるのか、請うご期待!!

第１１６話　性転換者懇親会ふたたび（２）（前書き）

長いことお待たせしてしまって申し訳ありませんでした。
１１月に大きなイベントがあり、９月からずっと忙しい状態だったのですが、ようやく少し手透きになってきました。
引き続きスローペースで続けたいと思いますので、どうかお付き合い下さい。

第116話　性転換者懇親会ふたたび（2）

「では、場所の都合もありますので、この辺りで男子組と女子組に分かれたいと思います。男子はそのまま、女子は一階に移動しますので、自分の紙コップを持って、あたしに付いてきて下さい。」

今回は人数が多いんで、男女合同の懇親会は本当に短くして、男女別に分かれようと話していたとおり、本当に挨拶もそこそこに優稀が声を掛けて、女子がぞろぞろと出て行く。ここからは僕たち男子組のサバトとなる。下は優稀と、それに勝美もいるから大丈夫だろう。こっちは僕と千博の二人で何とか仕切らないと・・・。

「じゃあ、男子だけになったから、まず僕からの提案なんだけど、全員裸になろうよ。というか、この懇親会は、最期まで裸で過ごすというのはどうだろう？・・・僕たち西山中の男子転換組は、卒業式の前にこれをやって、物凄く有意義だったんだ。というのも、これで皆、自分の裸を晒(さら)すことにも耐性がついたし、周囲に裸の男子が居る状態にも慣れて、普通の男子と遜色ない態度というか、要するにオタオタしたり焦ったりすることが、殆どなくなったんだ。・・・まあ、僕の場合は、その後、家族で温泉旅行に行って、父さんや兄さん、それに弟と大浴場に入ったりして、それも効果があったんだけどさ・・・。」

「そうだ、西山中の出身者なら、皆、それを身をもって体験し、賛同してくれるだろう。この集まり、女子転換組については、落ち込んでいる彼女らを励ますという部分が大きいんだけど、僕たち男子転換組に関しては、心の内面、特に羞恥心といったものを、完全な男子に切り換えるための練習の場としたいんだ。いや、練習というよりも精神の訓練、鍛練の場というべきなのかな。今の発言を聞いてもわかるとおり、そこの千博・・・遠藤君は、もうどこからどう

見ても、元から男子だったとしか見えないだろう？・・・皆、先日の身体検査のときもそう感じたんじゃないかい？」

「そう言えば君、男子の中でも特に突き抜けている一条君と一緒になって、開チンダンスを披露していたよね？」

「やれやれ・・・。何だか僕の評価は、露出狂ということに決まっちゃったみたいだね。どうしてくれようか？・・・あとで剛をとっちめないと・・・。」

「ということで、皆、裸になろうよ。西山中の出身者は、全員、経験しているから何も問題はないよね？」

「またアレかよ。・・・まあ、確かに意味はあったと思うから、じゃ、皆、裸になろうぜ。」

　西山中の８名は、全員、手際よく脱衣して、あっと言う間にスッポンポンになった。それとは対照的に、北川中と山下中の出身者１４名は、全員、固まってしまい、先日の身体検査のときの二の舞状態だ。

「ほら、僕たちはもう全員、全部脱いだよ。君たちも早く脱ぎなよ。」

「そっ、そのっ、・・・こんな話は聞いていなかったから・・・。」

「きっ、君たちっ、・・・そのっ、・・・よくそんなに躊躇（ちゅうちょ）なく・・・。」

　北川中と山下中の出身者が、恥ずかしそうに目を背けたり、逆に僕たちの裸を見て目を離せなくなってしまっている。殆どの子が真っ赤になって、手で顔を覆ってしまった子も居るし、今から逃げ出そうとしているヤツも居る。けど、怜央が部屋の鍵をかけてしまっているので、彼から鍵を奪わないことには、部屋から出ることができない。（ここは構造的にトイレが部屋から入れるので、施錠されても特に問題はないだろう。）

「ほら、ここには僕たち性転換男子しかいないんだ。・・・皆、それぞれ貰ったものは同じで、機能的にはまったく一緒の筈だよ。・・・ま、サイズとか色とか形とか、微妙に異なるにしても、そんなの

は身長とか顔つきとかと一緒で、ちょっとした個人差だろう。」
「そうだ。それに俺たちは全員、手術に際して割礼されちまってるから、ペニスはズル剥けの筈だ。包茎の皮かむりは、一人もいないだろう。俺も聞いた話だが、俺たち位の年齢の男子にとっては、剥けたかどうかは、かなり大きな関心事らしいぞ。それを他人に知られたくなくって、他人に裸を見せたがらないというのが、男子にあっては唯一の裸に対するハードルみたいだけど、全員皮を切り取られちゃってる俺たちには無縁の話じゃないか。」
　そんなことを、怜央をはじめとした西山中出身者に寄ってたかって問い詰められ、北川中と山下中の出身者もおずおずと服を脱ぎだした。特に、この前、部室でオナニーを披露していた児玉君が、真っ先に服を脱いだんで、他の子も仕方がなくという雰囲気で脱ぎだした。
「よし、これで全員、裸になったね。じゃあ、皆が男の裸に慣れるという意味で、今日の懇親会はずっとこれで過ごすこととしよう。寒くはないよね。」
　そう声をかけたけど、この部屋の中は皆の熱気でムンムンして暑い位だ。
「で、これから何をするの？・・・皆で一斉オナニー大会とか？」
「いや、それはもう少し打ち解けて、アルコールで喉(のど)を潤(うるお)してからにしようよ。まずは、各自簡単な自己紹介と、それから男子になって、こんなことが良かった、こんなことが大変だった、思っていたのと違っていた、そういう体験を、何でも構わないから順番に話してみない？」
「皆、交換初夜は済ませている筈だけど、それ以外でセックスをしたことのあるヤツは何名位いるんだ？・・・といっても、俺もそうだけど、まだ男子になって４カ月ちょっとだから、遠藤とか和田みたいに結婚していればともかく、女性の恋人をつくったヤツもいないんじゃないか？」
「いや、榊君は、それまで全然付き合いのなかった性別交換相手の

優稀と婚約したんで、多分普通にセックスしてるんじゃないかな？・・逆に僕は勝美が妊娠しちゃったんで、セックスはこのところかなり控えていて、実は1ヶ月もご無沙汰なんだ。」
「それは挿入をしていないってだけで、君たちが毎晩、同じベッドに寝て肌を重ねているのは聞いているよ？・・・勝美さんは男子の生理を完璧に理解しているから、君がつらくならないように、きちんと抜いてくれているんだろう？・・・僕たちの年齢だと、性欲をちゃんと処理しておかないと、我慢できずに暴走したり暴発したりするもんだよね？・・・やっぱり、婚約したばかりの僕たちと、結婚することを前提に性器を交換した遠藤君じゃ、レベルが違いすぎるよ。」
「ま、それ以前の問題として、山下中や北川中の出身者には、そんな相手もいないんじゃないか？・・・俺たちだって、この3組6人はかなりの例外だと思うぞ。」
　他中学出身の全員が、顔を見合わせている。まあ、実際問題として、手術から4カ月で新米男子が恋人をつくり、身体の関係まで進むというのは、かなりのハードルだろう。

「わかったよ。・・・じゃ、トップバッターとして、僕の経験から話すとさ、僕の場合、相手が小学校時代からの恋人の勝美で、・・・といっても、正式に付き合うことになったのは、中学に入った最初のGWの直前に、当時は男子だった勝美から告られて、それからだね。でも、勝美はよく言えば紳士というのか、とにかく僕には絶対に手を出してこないんだ。それでキスも当時は女子だった僕からしたし、結局、交換初夜まではセックスはしたことがなかったな。」
「へぇ、そうだったんだ。僕はてっきり、二人はもう男女の関係に当然なっているものと思っていた。」
「うん、まあ、僕たちの様子を見ていれば、そう感じても不思議じゃないだろうね。でも、二人とも、交換初夜までは正真正銘の童貞と処女だったんだ。・・・ていうか、キスしたのも、中3の夏休み

だったから、かなり遅かったんだよ。」
「よくそれで当時は男子だった遠藤が我慢できたな。」
「それは思った。逆に僕が我慢できなくなって、勝美に強請ったりした位だから。」
「それでも手を出さなかったのかよ。あいつチンポやキンタマがついていたのか？・・・って、今、お前についているのがそうだよな。立派なものじゃないか？・・どういうことだ？」
「単にチキンだったってことだろう？」
「どうだろう。当時は僕も女子で、そこまで深く考えたこともなかったから・・・。勝美は僕のこと大事にしてくれているんだって、そういう考えしかなかったな・・・。」
「惚れた相手だからな。ま、そんなもんだろう。・・・まあ、1杯呑めよ。」

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

千博が勝美さんとの馴れ初めから、これまでのお付き合いの歴史を一つずつ解説している。他中学出身者は勿論のこと、僕たちのようにずっとそばで見ていたクラスメートにとっても初めて聞くことも多く、そもそも男女経験に疎い僕たちには新鮮な驚きばかりだ。それに心が男子だろうが女子だろうが、そんなことには関係なく、僕たちの年齢では恋バナが一番の話題であることには変わりがない。話は自然と盛り上がろうというものだ。じゃあ次は和田君たちの話を聞いて、それから僕と優稀のことについて語るとしよう・・・。

　漠然と、そんなことを思い描いていたんだけど、さっきから見てると、千博がかなりのハイペースで杯をあおっている。話が弾んで、周りからどんどん注がれるから仕方がないとはいえ、はて、彼はアルコールに強かったのかな？・・・千博の性格からして、他人から

勧められると、なかなか断れないんだろうな。でも、かなり顔が赤くなってきて、ちょっと心配だ。優稀や勝美さんなら、彼の普段の様子を知ってるんだろうけど、今はそんなことわかるヤツなんて誰もいない。僕だって千博とは、親しくなったのが性転換してからなんで、まだほんの４カ月だし、そもそも彼と酒を飲んだことは一度もない。

　といっても、陽気にケラケラと笑っているだけで、特に顔色が悪いとか震えだしたとか、そういった症状は出ていないから、まぁ仮にダウンしちゃっても、ここに寝かせとけば良いし、優稀と勝美さんがいれば、３人でタクシーで連れてくことも可能だろう。場はかなり盛り上がってきて、あちこちで男子の性行動などについての話題を、皆大声で話している。これが全員、４カ月前までは女子だったんだから、かなりの進歩と言えるし、男子組に限れば今日の懇親会は大成功なんじゃないかな。

　そんなことを何となく考えながら、僕も少し酔ってきたように感じていたところ・・・。

「ちゅうもーく！！・・・僕はこれからオナニーしまーす！」

　いきなり千博が声高く宣言した。そして仁王立ちになると、皆の見ている前で、自分のペニスを強く扱き出した。

「いいぞっ！！・・・頑張れ！！」
「漢（オトコ）だな！！」
「でも勃（た）たないじゃないか！！・・・酔ってフニャチンになっちまったのかよｗｗ」
「だいじょーぶでーすっ！！・・・僕にはとっておきの秘策があるんだっ。・・・こうバックを刺激して・・・ぁっ、ああっ、ぁひっ、ひっ、あああっ。」

「すげーっ、こいつ、いきなりアナニー始めやがった！」
「チンポが一気にガチガチのビンビンじゃねえか。」
「ひっ、ぃひっ、ひーっ、もうっ、あっ、ぁあっ、ぁあああっ、ああーーっ。」

「あの乱れよう。完全に眼がイッちゃってるな。」
「これはなかなか見られないもんだぞ。スマホスマホ・・・。」

「だっ、だめーっ、やめてあげてっ！！・・・お願いっ、撮影だけはやめてあげてっ。・・・遠藤君、今は酔っぱらってハイになっちゃってるけど、こんなアナニーで乱れてイクところ撮影なんてされたら、もう学校に来れなくなっちゃう。・・・だから、だから撮影だけはしないであげてっ！！・・・おっ、お願いっ、・・・お願いします。」
　児玉君が必死になって千博を隠すように手を広げた。
「そうだな。今日のこの集まりは、僕たち性転換者だけの秘密で、何をやっても、何を話しても良いんだけど、中での話や何をやったかは外部に出さないことにしているんだ。だから証拠が残っちゃうような撮影は止めようよ。」
「ま、それはそうか。じゃ、せいぜい遠藤がアナニーでイキ狂うところを眼に焼き付けておこうぜ。」
「イクーーっ、イックーっ、イグっ、イグっ。」
どぴゅるるるっ、どぴゅーっ、どぴゅーっ。
「イグっ、イグっ、とっ、とまらないっ、ぃひっ。」
どぴゅーーっ、どぴゅるるるっ、どぴゅっ、どぴゅっ。
「すげーっ！・・・本当に射精が止まらないぜ。イキっぱなしじゃぁないか！・・・どんだけ沢山出すんだよ。」
「たっ、たすけっ、助けてっ、死ぬっ、死ぬーっ、あっ、ああっ、ぁひーーっ。」
ぴゅっ、ぴゅっ、どくっ、ぴゅっ。

千博がとうとう白目を剥いて、泡を吹きながら失神しちゃった。身体はベトベトで、周囲の畳は何とかタオルで拭いたけど、凄いことになっている。

「こいつ、こんなにバックを調教されちゃってて、もう普通のセックスじゃ満足できないんじゃないか？」

「自分で開発したのかな？・・・それとも、奥さんに開発されちゃったのかな？」

「元からの性癖じゃないか？」

「まあ、あまり詮索するのは勘弁してあげようよ。性癖は人それぞれだって。・・・千博は漢(オトコ)として立派だったじゃないか。だから、彼を見習って、僕たちもオナニーをやろうよ。僕たち位の年齢の男子だと、友達同士で連れションならぬ連れオナニーをするのも普通らしいし、判定試験のときはクラスで一斉にオナニーを競うらしいから。」

皆、お互いの顔を見回している。千博じゃないけど、もうかなりアルコールが入ってきて、それなりに理性の箍(たが)が外れてきている筈だ。

「よし、俺はやるぞ。」

「僕も付き合うよ。」

西山中出身の齋藤君と仲嶺君がペニスを握って立ち上がった。二人とも、もう臨戦態勢だ。特に仲嶺君は、あの五十嵐さんのペニスを移植されたんで、小柄な体格に似合わず、この性転換男子全員の中でもトップクラスのサイズを誇っている。

「じゃあ、僕も・・・。」

児玉君がおずおずと立ち上がった。見ると、彼もまだペニスに触れてもいないのに、既にお臍にくっつく程の状態になっていた。やはりあの部室での経験は、しっかり根付いていたに違いない。

「他にはいないかな？・・・その場で良いから、皆も自分で始めて

よ。・・・今、ここにはガチのオカズになるようなものはないんだけど、一応、ヌードの女性が海とかプールとかで遊んでいるＢＧＶがあるんで、それをかけるよ。それとも、まさかとは思うけど、男子の裸のほうが良いってヤツはいるかな？・・・心がまだ女子だと、男子の裸のほうが興奮するってこともあったりして？」

「そういうヤツは、周りのヤツらの裸を見れば良いさｗｗｗ・・・じゃ、さっそく始めようぜ！！」

第１１６話　性転換者懇親会ふたたび（２）（後書き）

狂宴はまだ続きます。

第１１７話　性転換者懇親会ふたたび（３）　（前書き）

ようやくこちらも再開しました。前とうまく話がつながれば良いのですが、どうぞ読んでみて下さい。

第117話　性転換者懇親会ふたたび（3）

（場面が変わって女子部の様子）

男子たちは、また無礼講で好き勝手するのかしら。お酒が入って、千博大丈夫かしらね。ハメを外したり、泥酔して大変なことになっちゃわなきゃ良いんだけど・・・。ま、でも、それはあたしが心配してもしょうがないわよね。本当に何かあったら、怜央が何とかしてくれるでしょ。そのことは取り敢えず、頭の中にしまっておいてっと・・・。

さて、女子だけ下の階に移動したけど、ここからどうしようかしら。他の2中学の出身者は皆、お通夜のような雰囲気なのよね。事前に勝美と、それから淳にも適宜手伝って貰えるようにお願いはしているけど、勝美はちょっと境遇が違うし、淳もそういう意味では落ち込んでいる子の琴線には触れないような気がするから、何とか五十嵐さんだとかに話を振ってみるしかないわね・・・。いや、こちらからいくら話しかけても、心を閉ざしている相手には響かないに違いないし、下手に話すと自慢話とか上から目線だって思われちゃうかもしれないから、むしろ彼女たちから質問して貰うことにして、こちらは質問に自分の体験や考えを回答するということにしましょう。

それにしても、よく全員集めることができたわ。

「皆さん、今日は全員集まって頂き、本当にありがとうございました。特に山下中と北川中の出身者の皆さんには、まだ心が折れてしまって、痛手から立ち直れていない方が多いようですが、とにかくここまで出てきて頂いたという決断と行動に、まず心から称賛させて下さい。誰だって最初は不安で一杯です。でも、その最初の一歩を踏み出すことができれば、あとは何とかなるものです。皆さんは

私たちの呼びかけに応じてくれて、ここにこうして集まることができました。実は私たち西山中の性転換者は、卒業式の日にこの同じ集まりを持って、いろいろな悩みを打ち明けあったのです。勿論、それですべて解決という訳ではなく、そこに至るまでの紆余曲折も当然にあるのですが、それはおいおいお話しするとして、まずは皆さん、図らずも望まない性転換をされてしまって、こんなことが不安だとか絶望したといった、他人にはなかなか言えない思いがあるでしょう。そういう悩みや疑問など、聞きたくても聞く相手もいなくて、チャンスもないのではありませんか？・・・だから、この機会に是非、山下中と北川中の皆さんから、私たち西山中の性転換者に、質問をしてみて下さい。」

「自分のことを話すのは、誰しもハードルが高いでしょうが、単なる質問、なんだったら一般論でも結構です。聞きたいことや疑問、あるいは日常生活で困っていること、どんなことでも構いません。是非質問をしてみて下さい。」

「私たち西山中出身の性転換者も、自分で希望した勝美・・・遠藤勝美さんは例外として、他の7人は皆、自分が女性にされてしまうなんて、想像もしていなかった人ばかりです。当然ですが、最初は今の皆さん同様、心が折れてしまい、もう自分の人生は終わったと、そう考えてばかりでした。私もそうでした。でも、ご覧になってわかるでしょうが、西山中出身の7人は、皆それぞれ女性としての新しい生き方、新しい目標を見つけ、新しい人生の第一歩を踏み出したところです。」

「といっても、皆、まだまだ女性としての生活に慣れたとは言い難く、毎日が戸惑いの連続ですが、それでも新しい毎日を精一杯生きて、女性としての人生を歩み始めています。どうぞ皆さん、ご自由に問いかけてみて下さい。・・・なお、この集まりは、性転換者だけの集まりです。どんなことを発言するのも自由ですし、私たちも自分が知る限りの知識を誠実にお答えしますが、ここでどのような話があったのか、誰がどういった発言や行動を取ったのかは、ここ

に居る人だけの秘密であって、外部には絶対に漏れないようにするつもりですし、皆さんもご協力をお願いします。」
「それでは皆さん、私たちに、どんなことでも結構ですので、自由に何でも質問してみて下さい。」
「・・・・・・・・。」
「さ、どなたでも結構です。私たちに聞きたいこと、何かありませんか？」
「・・・あっ、あのっ・・・。」
「はい、なんでしょうか？」
「そっ、そのっ、・・・西山中の皆はどこで諦めることができたの？・・・そのっ、男じゃなくなっちゃうことにっ・・・。タマを抜かれちゃったとき？・・・それとも本手術のあと？・・・交換初夜？・・・ぼっ、僕はっ、・・・僕はそんな気分にはっ、とてもなれそうもなくって・・・。まだ毎日あそこを見ては泣いているんだけど・・・。」
「おっ、俺もっ、・・・俺も切り取られちゃう前に撮影しておいた自分のアレを毎日見ては涙が止まらないんだ。」
「あたしたちも、別に諦めたということじゃあないわよ。男子だったときの自分を否定するつもりはないし、自分のものだったおちんちんを見返すのも、小さいときの写真を見て懐かしがるのと一緒だと思うわ。ほら、昔の写真を見ながら、あのころは良かったっていう感覚は、誰にでもあるでしょう？・・・でも、別に男子を諦めたというんじゃなくって、女子には女子の楽しさ、面白さ、幸せがある筈なのよ。・・・今はまだ男尊女卑の風潮が強く残っているにせよ、世の中半分は女子なんだから、女子の幸せが男子に劣るなんていうことは、絶対にない筈なの。つまり、男子を諦めるんじゃなくて、女子としての楽しさを探してみよう、きっと男子にはない面白さも絶対にある筈だって、そういう考えをするように、意識を切り換えてみようとしているところなのかしら？」
「そうよ。あたしなんて、バスケで身を立てるっていう男子だった

ときの夢を捨てられなくて、それでふさぎ込んでいたのが、杉田さんに言われて、同じ夢を女子でも追求できるって気付いてからは、男子とか女子とか関係なく夢の追求に日々努力しているところだわ。」

「そんなに上手いこと行けば良いけど・・・。まだ僕には・・・。」

「そうね。確かにそんなこと、急に言われても、簡単には行かないでしょうね。これからあたしたちも全力でお手伝いするわ。でもその前にひとつだけ、是非心がけて欲しいことがあるの。それは、自分のことは、もう『俺』とか『僕』とか言わないで、『あたし』とか、せめて『わたし』を使って欲しいの。・・・自分の呼称を変えるのは、まず自分が変わることの第一歩で、それを変えないといつまでたっても心が女性の視点にはならないのよ。・・・『あたし』は難しいにしても『わたし』ならば男の子だったときでも、改まった席では普通に使っていたでしょ？・・・『わたし』とか『わたくし』なら、別に女言葉という訳じゃないと思わない？」

「それはそのとおりね。あたしも杉田さんが訪ねてきて、それを指摘されるまでは、男を失ってしまったということばかりに気を取られて、女性の喜び、女性の楽しさ、そういったことに目を向けるなんて考えることもなかったけど、自分のことを『あたし』と呼ぶようにしてみたら、そういう意識が少しずつ芽生えてきて、女性として生きていく自分の未来についても考えてみようという気になったのよ。」

「そうね。そういう精神的な視点の変化っていうのは、タマを抜かれたときとか本手術のときとか、交換初夜とか、そういった物理的な、あるいは身体的な変化とは直接関係がないのかもしれないわね。勿論、個人差はあるだろうし、きっかけにはなるのかもしれないけど・・・。」

「そんなこと、ぼっ、いや、私、考えたこともなかった。・・・そもそも、交換初夜で自分のものだったペニスを挿れられたときは、思わず吐いちゃったから。」

「それは相手の男の子が可哀相ね。でもレイプされて吐いちゃう女の子って、結構居るって話だから、そういう感覚だったのかもしれないわね。」
「そうね、やっぱりそういう感覚の子も多いんでしょうね。でも、あたしは交換初夜で自分のおちんちんが交換相手についているのを見て、なんて言うか、安心したっていうか、ほっとしたのもあるわ。まず懐かしいっていう感覚、それと自分から独立していっちゃったけど、元気にやっているんだっていう、・・・ほら、よく言うじゃない。子供が独立して、家を出て行ったのが里帰りして来たような感覚かしら。」
「それはあたしも感じたわ。でも、写真はとっておいたにせよ、これでもう見納めだっていう寂しさで、思わず握りしめちゃったの。交換相手は目を白黒させていたけどさ・・・。」
「俺、あ、いや、わっ、私は、赤いカードを貰ってから、交換初夜を終えるまでの記憶が殆どないんだ・・・。何だか催眠術にかけられたみたいで、夢を見ているうちに、いつのまにか女子にされていたって感じで、赤いカードを貰った日に布団を被って泣いていたのが、そのまま今も続いているようで、その間、何があったのか、時間の感覚もなくって、こんな身体になって今も布団を被って泣いている毎日だから・・・。」
「そういう人って、案外多いみたいよ。あたしが赤いカードを貰ったとき、落ち込んでいたら励ましてくれた人って、元は男子だったんだけど、あたし、その人が元男子だったって、そのときまで知らなかったの。だってその人、もう子供が3人も居て、立派な母親として幸せ一杯だったから。」
「で、その人から、自分も元男子だったたって聞いてあたし本当にびっくりしたんだけど、その人も性転換が決まったときから手術が終わるまでの記憶って、殆ど残っていないそうよ。でも、そんなの、別に気にすることもないわ。人は自分に都合が悪い記憶だと、意図的ではないにしても忘れるものらしいから・・・。」

「わっ、私は手術で麻酔をかけられるときが一番怖かった。・・・そのっ、もうこれで自分は死ぬんだっていう気がして・・・。」

「私はタマを抜かれるときが怖かった。あれ、見ていなさいって言われたけど、麻酔の注射されるときに気絶しちゃったから。」

「でも、気絶しても起こされるんでしょ？・・・あれも鬼の所業だよね。私は泣き叫んで暴れて椅子ごとひっくり返っちゃった。」

「でも、やっぱり一番イヤだったのは交換初夜かな。さっき誰かが話していたように、自分のモノっていう懐かしさや嬉しさは勿論あったけど、それを差し引いても、男にヤラれちゃうなんて、まるでバック処女を失ったような気がして、自分はゲイじゃないって叫びたくなったんだもの。」

「あたしは千博に貫かれたとき、幸せすぎて気絶しちゃったわよ。」

「勝美は他の子とは立場が違うんだから、ちょっと黙っていて！」

「ごめんなさい・・・。」

「でも、好き合っていると、初めてでも痛くないどころか、最初から快感があるって前に読んだエッチな本に出ていたけど、あれって本当なの？」

「快感っていうのは、精神的な部分がかなり大きいから、身体で感じる痛みとかも、心が満足しているとかなり緩和されるっていうのはあるんじゃない？」

「あと、相手の上手下手にもよるんじゃないかしら。怜央は、あ、あたしの交換相手なんだけど、彼は女子だった頃から女子相手にレズセックスを繰り返していたらしくて、処女を食べちゃったこともあるみたいなの。・・・で、その経験豊富な怜央にかかったら、あたしはもう最初から快感漬けにされちゃって、挿入されたときは一気にイカされちゃった位だから。」

「確か杉田さんって、その人と婚約したんでしょ？・・・前からお付き合いしていたっていう話は聞かないし、そうすると、そのっ、ヤラれちゃって、それでメス落ちさせられて結婚することになったの？」

「別にそういう訳じゃないわ。身体の相性って大事だって言うけど、そんなの何度もやっていれば自然と馴染むものじゃない？」
「そんなことより、かつてのあたしのモノはとても大きくて、実は男子だった頃のあたしの自慢だったんだけど、それを挿入されるっていうことが、物凄く恐怖だったわ。」
「あ、それ、あたしも感じた。あそこが大きいのって、男子のときには無条件に良いことだって考えてたけど、女子になって、いざ挿入されるってなると、そんなの絶対に無理っていう感じで、何でこんなに大きいモノを喜んでいたのかって、かつての自分を恨みたくなったものよ。」
「そう、あたしも交換初夜のとき、相手があたしの足を思いっきり広げて、自分のあれに唾をつけて一気に挿入してきたときは、身体が裂けて死んじゃうって思った位だから・・・。」
「それね。あたしの交換相手は、特に巨乳という訳じゃなかったんだけど、身体が大きかったんで小柄なあたしに無理やり移植したら、こんなに巨乳になっちゃったの。・・・何事も中庸というのがあるのよ。」
「あたし、男子のときは、あそこが大きいことは良いことだと信じていたし、絶対に正しいと思っていたけど、女子の側からすると、そんな巨大なものを挿入されるなんて恐怖でしかないということを、思い知ったわ。あそこがもっと大きくなりたいって思っていたのが信じられないわ。」

西山中の皆は、アルコールが回ってきたこともあって、それぞれの体験を次々と語りだしたわ。山下中と北川中の子は、まだ自分から積極的に話をするには至っていないけど、西山中の子の体験談を食い入るように聞いているわね。暫く話を続けて貰いましょうっと。
「わっ、私はっ、その、タマを抜かれて、それを見せられたときが一番怖かった。・・・わんわん号泣しちゃったから・・・。」

「あれは本当に辛かったわ。あたしもあれで心が折れちゃったから。」
「その後の、お尻をグリグリされて射精させられたのはどうだった？」
漸く、山下中と北川中の子たちも会話に参加し出したみたいね。これは良い兆候だわ。そんなことを考えていたら・・・。
「ねえ、杉田さんって、男子のときに女子とセックスしたことがあるって噂を聞いたんだけど、本当なの？」
「ええっ！・・・そんな話があるの？・・・真相はどうなの？」
いきなりあたしが話題の中心に放り込まれちゃった！！・・・これまで何となく会話に加われなかった子も、凄い勢いで喰いついてきたわ。これはごまかしても許しては貰えなさそうね。すべてを知っている勝美は別にしても、西山中の子は多少知っている話だから、別に秘密というほどのものじゃないけど、円のことは伏せておきたいし、さてどこから話そうかしら・・・。

第１１７話　性転換者懇親会ふたたび（３）　（後書き）

今後、基本的に「牡牧場」と交互にアップできればと考えています。

第118話　性転換者懇親会ふたたび（4）（前書き）

懇親会は思ったよりも長くなってしまいましたが、これでようやく収束です。優稀たちの努力で、他の中学からの性転換者も少しずつ元気を取り戻すことができてきたのでしょうか。

第118話　性転換者懇親会ふたたび（4）

「ねえ、杉田さんって、男子のときに女子とセックスしたことがあるって噂(うわさ)を聞いたんだけど、本当なの？」
「ええっ！・・・そんな話があるの？・・・真相はどうなの？」
「あ、それ、あたしも聞いたことがあるんだけど、単なる噂(うわさ)よね？・・・クラスで一番チビだった杉田さんが、実はもう童貞じゃなかったなんて、そんなの嘘でしょ？・・・ていうか、嘘って言ってよね？」
「ごめんなさい。隠すつもりはないから、この際みんなには話しておくわ。・・・実は本当なの。」
「ええーっ！！」
「そうなの！」
「いつ？」
「もっと詳しく！」
「わかった。皆に何でも聞いてって言い出したのはあたしだから、あたしのことについては全部教えるわ。でも、話す代わりにふたつ約束して欲しいの。・・・ひとつは、この話は今日ここに居る性転換者だけの秘密にしてくれないかしら。さすがにクラス全員に知れ渡っちゃったら、あたしも高校生活がやりにくくなっちゃうだろうし、毎日男子からの好奇の目の見られるのはイヤだから。」
「もうひとつは？」
「あたしのことは包み隠さず話すつもりだけど、相手の女子については、話すわけにはいかないわ。プライバシーもあれば、今後の彼女の学生生活にも影響があるだろうし、下手したら将来の結婚にまでかかわっちゃうかもしれないでしょ？・・・だから、相手については、一切話すことはできないし、みんなも聞かないで欲しいの。つまり相手が特定されちゃうようなことは話せないんで、そこは理

解して貰えるかしら？」
「それは、・・・まあ当然よね。約束する。ここに居る人だけの絶対の秘密ってことにするわ。皆もそれで良いかしら？」
「勿論それで良いわ。」
「じゃあ話すわ。話の途中でも、何か質問とか、疑問があったらどんどん聞いてくれて構わないわよ。」
「あたし、３年の夏休み明けに、とある女の子から突然告白されたの。といっても、お付き合いしない？って、そういう言い方で、何だか疑問符がついた問いかけというか、疑問文のような形式で、ぁれが告白だったのかは、実はいまだによくわからないのよ。・・・まあ、後から聞いてみて、一応の理由はわかったけどさ・・・。」
「そこんとこ詳しく！」
「聞いてみればたいしたことじゃなくってさ、その子、あたしの少し前に好きになった別の男の子に告ったんだけど、断られちゃって、それで自信を失くしていたんで、問いかけるような告白になったんだって。」
「それで？・・・それでそれで？！」
「女の子から告白してきたってことは、直ぐにそのっ、最後まで行ったの？」
「まさか！・・・あたしだって、クラスで一番、いや、学年で一番チビだったし、成績も体力も、４級になるような位置に居たから、なんであたしが？って半信半疑で、とても手を出すような雰囲気じゃなかったわ。それに、自宅に遊びに行って良いか聞いたら、もう少しお互いのこと良く知ってからって言われちゃったし、あたしの自宅に誘ってみても、はぐらかされちゃったりして、なかなか距離を詰めることができなかったの。」
「最初は、あたしが男子として人畜無害なんで、他の男の子が寄ってこないように、いわば虫除けとして期待されたのかとも思ったりした位なんだから。キスどころか、手をつないだこともなかったわよ。」

「9月の頭に告白されたんだけど、何となく他人に話すのは憚(はばか)られたんで、お互い学校では特にお付き合いしているとは見えないように振る舞っていたの。それに、そもそも2カ月しかお付き合いできなかったから、発展する時間もなくって・・・。」

「それって、判定試験の・・・？」

「そう、11月上旬の判定試験で、あたしは赤いカードを貰っちゃって、それでもうどうしようもなかったの。」

「じゃあ、いつ、そのセックスを・・・。」

「ええ、土曜日にあたしが去勢されて、タマを抜かれちゃった次の木曜日、彼女からメールが来たのよ。短いメールで、今日会えないかって書いてあって、あたしとしても彼女にはお別れを言わなきゃって思っていたから、怖かったけど会うことにしたの。・・・当然なんだけど、女の子の格好をして行ったあたしを見て、彼女びっくりしていたわ。」

「それでセックスすることになったの？・・・でも、もう杉田さんは女の子になりかかってるんでしょ？・・・彼女はレズだったの？」

「まさか。『一生親友でいよう？』って、友達宣言されちゃったわよ。でも、彼女の部屋にはじめて入れてくれて、最後に恋人らしいことしたいってキスされたの。あたし、タマを抜かれた日からもう男の子としては終わっちゃったと思ってたんだけど、このキスと、それに彼女が服を脱ぎだしたのを見て、おちんちんが急に元気を取り戻したのよ。」

「そのあと、二人して服を脱いでさ、あたし、タマが入っていないのを見られて、恥ずかしくて悲しかったんだけど、彼女は『これなら安心してできるよね？』って言ってくれて、それどころか『いつか優稀とこういうことしたいと思ってた』とも言われたの。」

「羨ましいくらいのリア充じゃない。」

「あとがあればそうかもね。でも、あたしにしてみれば、死刑囚が食べる人生最後の晩餐と一緒よ。これで思い残すことなく死ねって言われているみたいじゃない。」

「それはそうか・・・。」
「実はあたしね、そのときもまだ、こんな自分が相手で本当に良いの？とか、自分はもう責任をとることができなくなっちゃったんだけど、それでも処女を捧げてくれるの？なんて思っていたのよ。・・・あ、あたしも勿論童貞だったけど、彼女も処女だったわ。」
「すると、童貞と処女で初体験となったわけだね。」
「ええ。・・・どうやら、それが理由で、彼女が積極的になったみたいなの。つまり、お互いに童貞と処女を捧げあった体験というのは、あたしが完全に女子になってしまっても、決して消すことのできない二人の記念だって言ってくれたのよ。もっと早くに勇気を出して、こういう関係になれば良かったって、彼女が涙ぐみながら話したのを見て、あたしも涙が止まらなくなっちゃったわ。」
「でも、はぐらかしていたのは彼女なんでしょ？・・・急に気が変わったのかしら？」
「初体験が終わってから聞いたんだけど、実は彼女がはぐらかしていた理由は、あたしとセックスしちゃったら、のめり込んじゃうんじゃないかって、それを危惧していたみたいなの。つまりあたしのことが好きで、当時のあたしの男の子の部分をかいま見ちゃったら、自分が抑えきれなくなっちゃいそうで怖かったんですって。」
「なんだか、これ以上聞いているのが馬鹿らしくなってきたわ。他人の惚気(のろけ)を聞いても、ちっとも参考にならないわね。」
「ごめんなさい。そんなつもりじゃないんだけど・・・。ただ、当時のあたしは、彼女に申し訳ない気持ちで一杯だったわ。あたしは自業自得なんで、悲しくても試験結果を受け入れるしかないと考えていたけど、彼女にしてみれば、突然自分の恋人が性転換するなんてことになっちゃったのよ。自分は何も悪くないのに、理不尽で泣きたくもなるわよね。」
「それは確かにそうかもしれないわね。」
「だから、この話、私自身のことについてはいくらでも話せるんだけど、彼女との関係については、あまり話したくないのよ。まして

今も同性の親友として、女子になったあたしをいろいろとサポートしてくれているのを見ると、心苦しくてね。・・・それに、あたしが婚約したことを話したら、心から祝福してくれて、あたしとしてはそれもまた自分ばっかり勝手に幸せになるみたいでさ・・・。」
「だいたいわかったわ。なら、この話はもう止めにしましょう。それより、皆、女子と男子で、どっちが快感が強いというか、気持ちが良いと感じた？・・・あたしは、最初、女子になって、病院でオナニーを勧められたこともあって、いろいろ試してみたんだけど、ちっとも気持ちよくならなくってさ、しかも交換初夜は恐怖が勝ったこともあってか、痛いだけだったんで、いまだに男子だったときの射精の瞬間の気持ち良さが懐かしいんだけど、皆はどうかしら？」
「あたしは千博に愛されると、もう天にも登るような快感が全身を貫いて、いつも気絶しちゃうんだけど・・・。」
「あたしも、一彦に愛して貰うと、あまりの快感に気絶しちゃうことが多いわ。」
「それはお互い愛し合っているからよ。物理的な刺激による快感というよりも、精神的な幸福感でイッちゃうんじゃないの？・・・あなた達は性転換する前から、好きだった相手と結婚したんだもんね？」
「あたしは怜央とは何もなかったのが、交換初夜からイカされまくっていたわ。怜央を好きになったのは、交換初夜の後だから、好きな相手だから快感があるっていうのは、必ずしも当てはまらないことがあるんじゃない？」
「つまりテクニックってことかしら？・・・でも、そうすると杉田さんは榊君のテクニックで堕とされちゃって、俗に言う『メス堕ち』とか『わからせられちゃった』とかの状態にされちゃったのかしら？」
「どうかしら？・・・あたしが交換初夜から怜央にイカされたのは確かだけど、別にそれだから怜央を好きになったとも言えないわよ。あ、でも怜央は性別交換する前から、あたしのこと好きだったよう

な話はしていたような気がするけど・・・。ただ、あたし交換初夜の後に、昔からの親友の男の子ともお付き合いしてみたんだけど、その子、怜央よりもっとずっとおちんちんが大きかったのよね。でも、結局その子とは何回かセックスしただけで、セフレみたいな関係で終わっちゃったから・・・。」
「杉田さんって凄いね。男の子だったのに、男の子に抱かれることに拒否反応がないんだね。・・・もしかして、もともとゲイの素質があったの？」
「まさか！・・・あたしは至ってノーマルだったわ。女の子とお付き合いして、童貞を捨てたことも話したじゃない。性同一性障害でもなかったわよ！・・・もう自分は女の子になっちゃったんだから、気持ちも切り換えなきゃって、必死に努力したのよ。だから、自分から進んでフェラチオもしてみたし・・・。」
「ごめんなさい。気を悪くしないで。ただ、ちょっと気になったんで、聞いてみただけなんだ。」
「でも凄いね。僕、いや、私は他人の精液を飲むなんて絶対に無理だと思う。」
「だから交換初夜で自分の性器を交換した相手とセックスするのよ。自分の精液なら、そんなに抵抗感はないんじゃない？・・・あたしは昔、自分の精液を飲んでみたことがあるわよ。みんなはどう？」
「そのっ、ちょっと舐めて味見したことはある・・・。」
「キスして相手の唾液を飲むより、抵抗は少ないかもね。」
「さっきの快感の話に戻るんだけどさ、結局、快感はテクニックよりも愛情が勝るってことで良いのかしら？」
「それは間違いないわね。特に女子の快感は、どんなにテクニックがあっても、愛情には敵わないのよ。逆に相手に対して拒否反応があったりすると、快感どころか吐いちゃったりした子もいるでしょう？」
「そうね。やっぱり、そういう話に落ち着くのかな・・・。」
「あのー・・・、ちょっと質問して良い？・・・そのっ、性別を交

換した相手と結婚した二人に聞きたいんだけどさ・・・。二人とも結婚前にはセックスはしていなかったんだよね？・・・それで夜の生活でさ・・・。」

　良かった、取り敢えずあたしの話は一段落したみたいだし、何より今の一件で山下中と北川中の出身者もみんな会話に参加できるようになったみたい。やっぱり食いつきが良い話題ってあるのね。とにかく会話が成立するなら、あとはもう何とでも話し方もあるし、それ以前に自分から質問してくるまでになれば、家で引き籠もったり落ち込んだまま精神が壊れちゃうのも止められるでしょう。このまま暫（しばら）く皆の話を続けましょう。

―――――――――――――――
―――――――――――――

「話が弾んでいるところ、大変申し訳ないんだけど、そろそろ時間も良いんで、この辺りで男女分かれてのパートは切り上げて、また男子と合流しましょう。なお、この場所は怜央、あ、榊君の好意で、いつでも使わせて貰えるそうだから、必ずしも全員が集まらなくっても何名かで集まってちょっと秘密の話がしたいとか、悩みの相談とかあったら、榊君かあたしに連絡して欲しいの。鍵と、利用上の注意を渡すから。」
「榊君はオーナーだからわかるけど、何故杉田さんがその取り次ぎを？」
「ほら、あたしも一応、榊君の婚約者だから・・・。」
「そう言えば、そんなこと話していたわよね。改めて、性器を交換した相手と結婚するって、本当にあるんだと実感するわ。」
　皆がそんなことを話ながら、二階に上がっていくと、部屋の中は大変なことになっていたわ。乱痴気騒ぎ、というのすら手緩い、酒

池肉林という言葉が、これほど似合う場面もないかもしれない。全員ヘロヘロに酩酊（めいてい）していて、もう呂律（ろれつ）が回らなくなっている子もかなり居るし、千博をはじめ何名かはダウンして床に転がっている。しかも全員全裸で、部屋の中はあたしたちには懐かしいあの匂いでむせ返るようだわ。男の子ばっかで肉林というのは、どんな状況なんだろうかしら。

　窓際では3人ほどが並んでオナニーをしていて、あたしたちが入ってくると、こっちを向いてシコシコするスピードが上がったと思ったら、そのうちの一人が「イキまーす！！」と思い切り叫んでドピューッて射精した。それを見て、一ノ瀬さんが真っ赤になって俯いちゃったけど、あの男子は確か一ノ瀬さんの性別交換相手じゃなかったかしら。自分のおちんちんが射精する瞬間を見る（または他人に見られる）のって、やっぱり恥ずかしいのかしら？

　千博は全裸であそこを元気にしたまま、股間から周囲の床までベトベトにしちゃってて、白目を剥いて意識を完全に手放しちゃっている。しかも、お尻がぽっかり穴を開けて、ヒクヒクしているんだけど、これはもしかして誰かに掘られちゃったのかしら？・・・勝美があわててタオルをとって千博の身体を拭きだしたし、かろうじて正気を保っている怜央も、真っ赤な顔をしてあそこをギンギンに勃てている。っていうか、男子はダウンして床に転がっている子も含めて、全員あそこが元気に上を向いているわ。いったい何をしてたら、こうなっちゃうのかしら。

「ひぐっ、ひっ、んっ、んぐっ、ぐっ、ぃぐっ、いぐーっっ。」

　プシャァアアアッ！

「おっ、またシオ噴いたぜ。これで何回目だ？」

「そんなのいちいち数えてぃねーよ。」

「確か、最初に4連続で射精して、その後はシオを2回噴いて、・・・その後はどうだったたっけ？・・・さらに射精を何回かして、シオ噴きもあった気がするけど・・・。」

「何にせよ、こいつが自分から望んでやってくれって言い出したんだからな、自分の言葉には責任を持って貰っているだけじゃないか。」

「ちっ、ちがっ、・・・たっ、助けてっ、誰かっ、ぼっ、僕っ、僕っ、死んじゃうっ、死ぬっ、死ぬっ、ぃひっ、ぁひっ、助けてっ・・・。」

部屋の真ん中で数人に責められているのは、確か北川中出身の小鹿君だったかしら。彼、小さな身体と童顔で、全体的な雰囲気は小学生といっても通る位のあどけなさなんだけど、交換相手の確か佐竹さんって、北川中でも巨根で知られていたみたいなのよね。それでうちの中学の加藤慶太君のような感じで、あどけない雰囲気なのにおちんちんは学年でもトップクラスという、かなりアンバランスな身体になったみたいなの。（この話は、前に怜央から聞いていたんだけど、実際に実物を見ると、確かに加藤慶太君にどことなく雰囲気が似ているわ。おちんちんが大きいところもそっくりだし・・・。）

その小鹿君なんだけど、バックにおちんちん型のバイブレーター（ディルドゥ？）を突っ込まれて、さっきからそれでお尻をグリグリされ続けている。それでひっきりなしに射精とか潮吹きとか、連続でさせられているの。あれって確か、千博や和田君が3カ月検診でされたのと一緒よね。いや、それよりもっと酷い、元村寛君と同じにされちゃったのかしら。

「見ろよ、こいつ、もう身体のどこを触っても射精しちまうんだぜ。ほら、こんなふうに・・・。」

「あっ！！・・・ぁひっ、ぃぐっ、イグーーッ！！」

ドピューッ。

首筋の辺りをそっと撫でられただけで、小鹿君はビクビクッと痙攣して射精しちゃった。見ると完全に白目を剥いて気絶しちゃって

る。これって、まったく元村寛君と一緒だわ。もう完全に壊れちゃったみたいで、普通のセックスとか普通の射精って、できなくなっちゃうんじゃないかしら？

せっかく男子になったのに、元村君みたいに、もうおちんちんは要らないなんてこと言い出したりはしないわよね？

佐竹さんが複雑な表情で、「もう許してあげて！」と頼み込んでいたけど、大丈夫かしらね？

第１１８話　性転換者懇親会ふたたび（４）（後書き）

このあとは、いよいよ千博と勝美の結婚式から新婚旅行となります。

第１１９話　勝美の内診

性転換者懇親会は大成功だったわ。男子転換組はお酒の助けもあったらしいけど、もう完全に思春期の男子として心が切り替わったんじゃないかしら。あたしたちが上がって行ったときには、皆で全裸になって大オナニー大会とかやっていて、ちょっとM気質だった小鹿君が寄ってたかって責められて、大変なことになっちゃったりとか、いろんなことがあったみたいなの。まあわざわざ男子組と女子組に分かれたのは、そういう無礼講をするためでもあったんで、あまり詳しい話は聞かなかったんだけど、結果オーライよね。

ただ、口さがない人は、あのままだと男の子だけで大乱交大会になっていたとか言われていて、腐る一歩手前だったって考えている人は多いみたい。あたしたちが踏み込んだから、それ以上の乱痴気騒ぎが収まったっていうところはあるみたいで、理性をかろうじて保っていたのは怜央一人位だったわね。あとは全員、ダウンして意識を失っているか、または酩酊してヘロヘロになっておちんちんを扱(しご)いているか、どちらかだったんだから・・・。

千博がどうしたかは、あたしもそれとなく怜央に聞いたんだけど、勝美が必死になって怜央に問いただしていたわ。だって千博本人は完全に酔っぱらっちゃってて、記憶が飛んでまったくないんだって。

でも、そんなに酷いことではなかったらしくて、単に一人でアナニーを披露して、皆の前で自分でバックにバイブを突っ込んでイキ狂って気絶しちゃったっていう、それだけだったみたい。お尻の穴がぽっかり開いていたから心配したけど、別に掘られちゃった訳じゃないそうで、もともと千博は腐女子じゃなかったから大丈夫だと思ったけど、まさか腐っちゃってたらどうしようかと勝美は真剣に心配したみたい。

それより女子のほうがここまで打ち解けることができたのは、大

きな収穫だったわ。山下中出身者と北川中出身者合計１４名、皆最後はいろいろな質問とか、自分の悩みとかを話せるまでになってきたから、このまま引き籠もりでどうしようもないということにはならないんじゃないかしら。だから、あたしが提案して、３つの中学の出身者がそれぞれ１名ずつ集まって、３名で１組のグループを７つつくり、性転換者の女子会ということで何でも話し合い相談し合うことができるようにしたんだ。西山中だけは８組の性転換者が居たんで、ちょっと立場が異なる勝美は特定のグループに属さず、フリーで事務局のようなことをお願いしたの。あたしは一番落ち込んでいた水野さんのグループに入ることにしたわ。彼女、これまで一度も学校に出てこれなくて、それどころか自分の部屋からも出たことがないような状態で、精神が崩壊する一歩手前だったんで、かなり心配していたんだけど、とにかくこの場に引っ張ってきたら、他の子が刺激になったのか、案外すんなりと話をするようになってくれて、本当によかったわ。

　それと、最後の締めの挨拶も、怜央に頼もうとしたらまたしてもあたしを逆指名されちゃったんで、前から考えていたことを披露したの。それは、西山中の場合、性別交換相手とくっついたのが、あたしも入れて３組居て、８組中３組だからかなりの高率と言えるんだけど、その３組とも幸せを噛み締めている。他の皆さんは、もし転換した性別で恋人とかをつくれそうなら良いけれど、まだどうして良いかわからないなら、自分の性別転換相手と是非付き合ってみてはどうかと提案したんだ。

　これは、相手に付いているものが自分のものだったから、抵抗が少ないんじゃないかという、よく言われていること以上に、自分のものを懐かしみ、慈しむことができるんで、絶対に幸せになれる近道だと話したところ、山下中の児玉君が、自分の性別交換相手に近付くことは、自分の所為で切り取られちゃった相手に対して申し訳ない気持ちが強くって、また相手もきっと思い出して悲しくなっちゃうんじゃないかと心配していたんだけど、これには五十嵐さんが

全否定してくれたわ。
　つまり、自分のものが相手に移植されて、立派に役立っているのを知ったり見たりするのは、自分の息子（意味深ね）の成長を見ているような気分になって嬉しいから、あまり心配することじゃないと断定してくれた。これを受けて勝美が、もし恋人となって肌を重ねるようになれば、その息子をまた愛でることができるんで、まるで服を取り替えっこしたような感覚だから、是非積極的に交換相手とお付き合いすべきだと、こちらは自分の経験を元に力強く説明してくれた。
　あたしからも、もし交換相手同士で結婚ということになったなら、遺伝的には自分達の本当の子供になる訳だから、こんなに理想的なことはないと力説しておいたところ、早速帰るまでに、仲嶺君と五十嵐さん、小鹿君と佐竹さんが、それぞれ付き合わないかっていう話をしていたし、他にも何名かそれらしい雰囲気だったから、案外沢山のカップルができるかもしれないわ。特に地獄の搾精をされて歩くのもままならない小鹿君をかいがいしく世話していた佐竹さんとは、かなり良い雰囲気になっているみたい。これは西山中も含めて、３中学の全員に、是非ともそうすべきだって焚きつけると良いわね。

――

「来週はいよいよ結婚式と新婚旅行ね。お医者様にきちんと診て貰って、大丈夫かどうかを確認しなくちゃね。」
「ええ、先月までは順調だって言われてるし、あたしも今のところ特に変わったとかの自覚症状はないわ。」
　今日は母さんと二人で産婦人科の定期診察に来ている。これまでは一人で来たり、千博についてきて貰ったりしたんだけど、母さん

と二人で来るのは初めてで、実はちょっと恥ずかしいんだ。これってまだあたしの意識が完全には切り替わっていないのかしら。
　そもそも親と一緒というのは、何となく気恥ずかしいっていうのもあるけど、それ以上に母親に自分の性に関することを知られるのは、なんだか物凄く抵抗があるの。これが千博なら、別に何も感じないのは、勿論もうすべてを許しているからっていうのもあるけど、それ以上に性器を交換した相手だからっていうのも大きいのかもしれないわ。それともこれは、まだあたしの中に男の子のときの感覚が少し残っていて、母親にオナニーとかを知られちゃった男の子のような意識なのかしら・・・。内診もあるわけだし、まさか母さんは外に出ていてくれるのよね。千博だって、あたしの内診のときは席を外していたし・・・。
　そんなことを考えながら、母さんと二人で待合室のソファに腰掛けていると・・・。

「遠藤明美さん、遠藤勝美さん、診察室にお入り下さい。」

　母さんと二人揃って名前を呼ばれた。ちょっとイヤな予感がしたけど、平静を装って母さんに続いて診察室に入って、そこの丸い椅子に腰掛けた。いつもの雨宮先生が、優しく微笑んで話しかけてきた。

「お母様も、それから勝美さんも、その後、お変わりはありませんか？・・・お腹が張ったり、特に下り物が増えたとか、気になることはありませんか？」
「ええ、私も勝美も、特に変わったこともなく、二人して若干太ったかしらって話をしていた程度です。」
「あたしも特に・・・。つわりも殆どなかったですし・・・。」
「そろそろ安定期に入る頃ですね。もう心配するようなことはないでしょう。多少の運動とかも大丈夫ですよ。」

「あの・・・。来週に結婚式を挙げて、その後新婚旅行に行く予定なんですが、大丈夫でしょうか？」
「以前にも、そのようなお話しをされていましたね。それも大丈夫です。ただ、決して無理をなさらないで下さい。それと夫婦生活は、あまり激しくならないように気をつけて下さい。」
「ええ、そっちは千博、あっ、主人が本当に気をつけてくれていますので、問題ありません。」

いつもどおりの、通常の問診が続く。

「じゃあ最後に、二人ともお腹のエコーと内診をしましょう。今日は腹部エコーだけでなく、経膣エコーもしますので、そちらの内診台にどうぞ。・・・どちらからにしますか？」
「あ、あたしがまず先にお願いします。」

母さんがそういって内診用の特殊な椅子に移った。この椅子、確か去勢でたまたまを抜かれたときに使ったものと一緒なのよね。いや、逆ね。もともと内診用の椅子を、去勢手術のときに流用したというのが正確なんでしょうね。そんなことを考えながら、席を立って診察室から出ようとすると。

「どこに行くつものなの？・・・ここで良く見ていなさい。」

母さんに急に呼び止められちゃった。これって、あたしに妊娠とか、女の子としての性教育をしてくれるつもりなのかしら。確かにあたしも自分の身体がどうなっていて、妊婦は何を気をつけなきゃいけないかを知っておくのは大事なのはわかるけど、母さんのあそこの中まで見るのは、物凄く躊躇があるわ。・・・しかも、きっと同じことをあたしもみられちゃうんだ。理性では必要なことだとわかっていても、恥ずかしくて仕方がない。この前、母さんの実家に

行ったときに、温泉であやうく母さんにクパアされかかったけど、あのときは必死で逃げきったと思っていたのに、こんな地雷が仕掛けてあったなんて・・・。

「ではまず、お腹のエコーから見ていきましょう。」

先生が母さんのお腹にゼリーを塗って、いつもの超音波プローブを当て出した。下腹部からお臍の上の辺りまで、あちこち動かしていくと、モニターには赤ちゃんの身体が映し出されてきた。５ヶ月ともなると、もう完全に人間の赤ちゃんの形が見えるのね。態勢をいろいろと動かしていると、股間がアップになって、よく言われるコーヒー豆のような形が見られた。

「これが女の子の証ですね。」

一応、妊娠初期の段階で羊水検査をして、性別はわかっていたんだけど、改めてあたしの妹ということが確認できたわ。

「すべて順調です。では、経膣エコーに移りましょう。」

そう言うと、先生は内診椅子の下に付いているスイッチを操作して、ベッド型になっていた椅子を少し起こした。と同時に、膝が持ち上がってきて、両足が大きく左右に開かれ、M字開脚姿勢となった。既にショーツを脱いでいるお母さんのあそこが、先生の目の前にモロに見えるようになったけど、流石お母さんはまったく動じることもなく平然としている。

この経膣エコーというのは、普通は子宮頸癌とかの婦人科の病気を診察するために行うものらしいけど、子宮頸部の様子が詳細に診れるそうで、妊婦の場合だと、子宮頸部の長さとか、内子宮口の開き具合とかを診察するのに使われるんですって。だから妊娠後期までに最低一度だけは受けておいたほうが良いみたいなんだけど、こ

れって要するにあそこにおちんちんを挿れられるのと一緒よね。見ているだけでも物凄く恥ずかしいわ。
　そんなあたしの気持ちなど無視するかのように、先生はてきぱきと診察を終え、特に問題ありませんと述べると、最後に鳥のくちばしのような器具を母さんの膣に挿入して、ネジを使って広げたままにした。しかし母さんはこうされるのが予定されていたような雰囲気で、あたしに話しかけてきた。

「勝美、母さんの中をよく見ておくんですよ。どこがどうなっているのか、妊娠するとどのような変化があるのか、先生に解説して頂くから、しっかり覚えておきなさい。」

　すると、先生があたしを手招きして、母さんの股間の真正面に座らせ、広げた母さんの膣の中を解説し始めた。

「一番奥に子宮口があるのが見えるかしら？・・・あなたも出てきたところで、子宮口や子宮頸部に何か問題があると、流産しやすくなったりするんだけど、お母様は何の問題もないですね。」

　それからも、いろいろと膣内を解説してくれて、処女膜についても説明してくれたのは驚いちゃった。きっと母さんが先生に、いろいろと因果を含めてお願いしてあったみたいで、これってやっぱり、女の子になったあたしに、女子としての性教育を実地でしてくれようという親心なのかしら。
　でも、理屈ではわかるけど、母さんのあそこを大きくクパアと広げた状態で中を覗き込むのは、まだあたしにはハードルが高すぎて、恥ずかしさで先生の解説も頭によく入ってこないわ。それに母さんが終わったらあたしの番になるってことは、あたしもこんなふうにクパアされて、先生だけじゃなくて母さんにも一番奥まで覗き込まれちゃうなんてこと、まさかされないわよね・・・。

どうしよう・・・。母さんが終わっちゃった。この流れの中で、母さんに出て行ってくれって言うのは無理だし・・・。第一、気をつかって自分から席を外してくれた千博と違って、母さんは見る気満々だし・・・。

「さ、今度は勝美の番よ。下着を脱いで内診台に上がりなさい。」

第１１９話　勝美の内診（後書き）

次週はこの「杉田家〜」も「牡牧場」も、更新をお休みいたします。
２週間後までお待ちください。

第１２０話　母さんに・・・

　先生が内診椅子を普通の状態に直したので、母さんが降りてきて、横のカゴに脱いでいたショーツを履(は)いた。そして、あたしにカゴを明け渡してくれたんだけど、母さんの前で下着を脱ぐのは、まだあたしにはハードルが高いわ・・・。つい先日、母さんが実家に里帰りしたとき、一緒に行って温泉に入ってきたんで、初めてというわけじゃぁないんだけど、どうしても手が止まってしまう。
　でも、先生と母さんの二人であたしの一挙一動を見守っているんで、逃げ道がない。ノロノロとショーツを脱いで、椅子に腰掛ける。
「じゃあ、まずはお腹の赤ちゃんの様子を見て行きますね。・・・倒します。」
　先生がそう言うと、スイッチ操作で椅子がベッドのように完全にフラットになった。まだあたしはスカートを履(は)いているんで、あそこは見えていないけど、下着を履(は)かずにスカートだけっていうのは、かなりの不安だわ。
　お腹にゼリーを塗って超音波のプローブを当てると、見慣れた映像が映し出された。１ヶ月前と比べて、赤ちゃんがだいぶ育ってきたのがよくわかる。もう身体は完全に人間の赤ちゃんの形で、顔の雰囲気もそれなりにわかる。といっても、まだヘチャむくれの福笑いみたいな感じで、顔のパーツが確認できるようになったという程度かしら。もう１ヶ月くらいすると、表情もわかるようになるらしいけど・・・。
　先生がプローブを当てる位置をいろいろと変えたり、また赤ちゃん自身もクルクル回ったりして動いているので、いろいろな角度から見えていたのが、偶然なのか股間がアップで映し出されて、かわ

いいおちんちんとたまたまがバッチリ見えた。性別は一応わかっていたけど、こうはっきり目にすると、愛おしさが一気に増すものなのね。もうすぐ、あの可愛いおちんちんを見ることができるんだわ・・・。

そんなことを考えていたら、先生がスイッチを操作しながら声をかけてきた。

「とても順調ですね。では経膣エコーと内診に移ります。」

ハッと我に返ったあたしの気持ちより早く、内診椅子がモーターで少し起き上がり、同時に膝の部分がさらに上に持ち上がりながら、大きくM字開脚姿勢になった。先生はまったく躊躇(ちゅうちょ)なく、あたしのスカートをお腹のほうまで完全にまくり上げ、あたしは股間を完全にさらけ出した。この姿勢そのものは、これまでの内診でも取ったことがあるから、先生に見られたことは何度もあるけど、千博はいつもそのときは部屋を出ていたか、またはさりげなく横を向いていてくれたのに、今日は母さんが先生の隣に座っている。

まず、おちんちんのような大きさと形の、超音波プローブをあたしのあそこにぐっと挿入して、子宮頸部の診察をされた。こういったものを入れて感じるとか、オナニーするなんて、どういう神経なんだろうって思ってたけど、このところしばらく千博とはご無沙汰になっている状況で挿入されると、確かに何だか妙な気分になったりするわね。

・・・先生が、超音波プローブであたしの膣内をあちこちグイグイと押している。母さんは一瞬で診察が終わったのに、何故あたしのほうは、こんなに念入りに、しかも力を入れて突っ付くようなことをするのかしら。さっきからの一連の動作というか刺激で、あたし、何だかあそこが熱くなってきて、恥ずかしい液が垂れてきちゃったような気がしてならないわ。特に先生が、クリトリスの裏側のあたり、いわゆるGスポットっていう性感帯をグッと押し込むよう

に突くと、思わず声が漏れそうになっちゃうのを、必死で歯を食い
しばって堪え耐えるようになっちゃった。なんたってここは、千博
とエッチするときに千博のおちんちんでズンと突かれると、一瞬で
イッちゃう弱点なのよね。千博もわかってやっているみたいで、完
全に開発されちゃった場所なんだけど、どうして先生がそんなこと
を知っているのかしら？

「ここは多くの女性が一番感じるという場所なんですよね。気にせ
ず快感に身を任せていて結構ですよ。」

へっ、変だわっ？・・・なぜ先生がそんなことを？？・・・そん
な考えが頭を過ったけど、あたしはもうその理由を考えるような余
裕がなくなってきていた。

「あっ、ぁあっ、んっ、あんっ・・・。」
「勝美もしっかり女の子の快感が定着しているようで安心したわ。
いつも千博さんに愛して貰っているときの様子から、満足している
らしいことは判っていたけど、どこまで本当に快感を得られている
のかちょっと心配だったのよ。・・・それで先生に無理を言って、
あなたの性感帯についても確認して欲しいってお願いしておいたん
だけど、充分に性的快感を感じているみたいだわね。」

え？・・・それってつまり、あたしがきちんと感じているか、性
的快感がどこまで得られているかを確認するってこと？・・・そん
なの、あたしは千博に愛して貰えるだけで充分に満足しているのに・
・・。

「あなたが千博さんに愛して貰って、それだけで精神的には満足し
ているにしても、夫婦生活というのはお互いに最高の性的快感をし
っかり味わってこそ、愛している、愛されているという実感が湧い

てくるものなのよ。それがないと、若いうちはよくても、結婚生活を何十年も続けているると、いずれ相手の身体に興味がなくなってきて、やがてセックスレスになっちゃったりすることがあるのよ。」
「ええ、普通の方にこんなことをしたら問題なのですが、あなたは性転換した元男性なので、性転換手術後の術後経過観察という目的で、術後５年間に限るのですけど、きちんと保険診療の対象にもなっているのです。これは性転換者なら男性にもある診療項目です。」

そっ、そんなっ！・・・それって、あたしがどの位感じているのか、試されちゃうってこと？！・・・こっ、こんなっ、お母さんの見ている前で？！！・・・たっ、確かに千博は３ヶ月検診で何度も射精させられていたけど、あれって・・・？？

「かなり感じていらっしゃるようで、とても良い感じですね。・・・じゃ、お母様はおっぱいを刺激してみて下さい。」

だっ、だめっ、・・・母さんがあたしの胸を下からゆっくりと揉みだした。それで、あそこだけだった快感の震源地が一気に全身に広がってきた。全身がゾクゾクビリリビリとして、・・・あっ、そっ、そんなっ、そこっ、だめーっ！

「やっ、やめてっ、・・・ひっ、いやっ、だめっ、・・・ぁっ、・・・あぁっ、ぁひっ、・・・だめっ、・・・ぃゃっ、いやっ、・・・だめっ。」
「勝美も優稀さんほどじゃないけど、身体が小さいから、千博さんのおっぱいを貰って、こんな立派なサイズになったのよね。・・・これ、多分だけどあたしより大きいわよ。・・・赤ちゃんが生まれて、もしあたしのお乳が足りなかったら、妹にも分けてあげてね？」
「わっ、わかったからっ！！・・・わかったからやめてっ・・・ひっ、だめっ、・・・もうっ、もうあたしっ、あっ、ぁあっ。」

「じゃあ、そろそろ最後にしましょうか。」

先生がそう言うと、母さんが両方の乳首をクリクリと摘んできた。それと同時に、先生はおちんちんプラグであたしの弱点のあたりをグリグリと突っ付きながら、クリトリスの皮をもう片方の手でくるっと剥くと、剥き出しのクリトリスを指の腹で摘むようにきゅっきゅっと扱いた。ここも千博にさんざん開発されて、物凄く感じるようになっちゃったところだし、最近特に大きくなってきて、簡単に皮が剥けるようになっちゃったんだけど・・・。

「いっ、イクッ、イクッ、イックーッ。」

プシャァアアアアッ・・・・・・。

―――――――――――――――
―――――――――――――

・・・なんだか、股間がスースーする。それにあそこの異物感も、さっきより増えている？？

「あ、気がついたようですね。性的快感は、どんな女性にも劣らないくらい、しっかりあるようで、まったく問題ありません。・・・普通の性転換者ですと、特に女性の場合、性的快感が定着するのは、もう少し時間がかかるのが普通なのですが、さすがにもうご結婚して、ご主人様に連日愛されていると、神経が完全に機能するのも早いですね。」
「勝美、盛大に気を遣って潮を噴いたのよ。これまでも気絶したことはあったかもしれないけど、潮を噴いたのは初めてなんじゃない？・・・あなたたちのベッドを毎日整えているけど、ここまで潮を噴いたことなかったでしょう？」

あたしは、ようやく頭が働きだして、様子がわかってきた。まだ内診椅子にＭ字開脚姿勢で固定されたまま、あそこには鳥の嘴のような形をした器具が挿れられて、ネジで大きく口を開いた状態に固定されている。

　そのあたしの膣内を、先生と母さんが二人してペンライトのようなもので照らしながら、一番奥まで覗いている。・・・そうだ、あたし、先生と母さんの二人に思い切りイかされちゃったんだ・・・。それも、今の話だと、二人の見ている前で、潮を噴いたんだって・・・。千博にもまだされていなかったのに・・・。

　あたしは呆然自失で、もう恥ずかしいという感覚もどこかに消し飛んじゃった。

「・・・まだ、処女膜は綺麗に残っていますね。」

「ええ、男性器が挿入された程度では、一部切れたり裂けたりする程度ですから。・・・だから、処女膜再生手術などというのが現実的にあったりするのです。」

「普通、出産すると、さすがに処女膜はわからなくなるものなのですが、先程確認しましたところ、お母様にもまだ痕跡が残っていらっしゃいましたよね？」

「うちは主人が海外にずっと単身赴任していますので、回数という意味ではあまり・・・。それに子供も勝美一人ですし・・・。」

「いえ、セックスの回数とは、あまり関係ないと思います。出産回数は、ある程度影響があるでしょうけど・・・。」

　母さんと先生が、あたしのあそこを覗きながら、なんだか異次元のような会話をしているわ。これは本当に現実のことなのかしら。

「特にどこかに問題があるような兆候は見られません。ごく普通の妊娠２０週目というところです。ただ、ひとつだけ気をつけたほう

が良いかもしれない点として、先程行った経膣エコーで、勝美さんの子宮頸管の長さが、平均より少し短いことが判明しました。それが性転換手術と関係があるのかどうかは、よくわかりませんが、この部分の長さが短いと、切迫早産になる可能性が少し高くなるのです。」

「特にこれから赤ちゃんがどんどん大きくなって育ってくると、そのリスクが高くなってきます。・・・といっても、勝美さんの今の様子ですと、子宮口はしっかり閉まっていて、心配するような兆候はありませんので、日常生活において何かをする必要はありません。ただ、万一何か不都合があってお腹が痛くなってしまったりしたような場合には、早産になってしまう可能性というものを、頭に入れておいて下さい。」

「といっても、もうあと1ヶ月もすれば、２４週を超えてきますので、今の医療水準では、仮にその程度の超未熟児で生まれてしまっても、９７％程度はきちんと成長できます。だから、そんなに過度に不安になったり、心配することではないでしょう。通常の妊婦としての注意を守って生活すれば大丈夫です。」

「ええと、明後日が結婚式で、その後引き続いて新婚旅行と仰(おっしゃ)っていましたよね。新婚旅行はどちらに行かれるのですか？・・・あまり激しく動いたり、疲労がたまるようなことはしないように、ちょっとだけ気をつけていれば問題ありませんので、どうぞ楽しんできて下さい。」

「ありがとうございます。新婚旅行は、こういう状況なので、近場ということで熱海のほうに3泊程度で、時間があれば伊豆とか湯河原、修善寺あたりを少し回ろうという計画なんですよ。・・・実は心配だったので、主人とあたしも同行する予定なんです。」

　そんなことを話ながら、先生があたしの膣を大きく広げていた嘴(くちばし)のような器具を抜いてくれた。もう、あたしは羞恥心など、すっかりなくなってしまい、どんな恥ずかしいことでも気にならなくなっ

ていた。
　よく、女性は出産すると羞恥心がなくなるっていうか、度胸がついて動じなくなるって言われるけど、つまりこういうことだったのね。こんな羞恥プレイを延々続けたら、そりゃそうなるわよ。それにあたしは、思い切りイクところを母さんに見られちゃった・・・。いや、見られたなんて生易(なまやさ)しいものじゃないわ。母さんにイかされちゃったんだ・・・。これって男子だったら、母さんにオナニーして射精するところをバッチリ見られたとか、それどころか母さんに射精させられたりしたようなものじゃない。もし、本当にそんなことになったら、きっと当時のあたしだったら自殺していたかもしれないわ。

　もう、ここまでされたら、何も恥ずかしがるようなことはなくなっちゃった。いっそのこと、新婚初夜を父さんと母さんの見ている前で、やってみようかしら。実は父さんと母さんが新婚旅行に付いてくるって言い出して、あたしは必死になって抵抗したんだけど、千博は入り婿なんで遠慮があったのか、真剣な（というか、深刻なというのが正しかったんだけど）表情で、父さんたちに賛成して、結局押し切られちゃったのよね。

　さすがに、いくらなんでも、両親の見ている前でエッチするなんて提案をしたら、千博はきっと嫌がるでしょうね。でも、今のあたしの心境とすれば、そんなことすら、もういくらでも見せてやろうという感じになっているの。そう言えば、前に優稀と話していたとき、優稀は交換初夜の前日に風呂でお母様二人（優稀のところはお母様が二人居るのよね）に全身グルーミングされて、あそこのむだ毛を毛抜きで処理されたんで、羞恥心が全部吹き飛んで、もう初夜が終わって帰ってきたら、自分からあそこをクパァして処女膜が破れたところを見せてやろうと思ったなんて言っていたけど、あれ、どうなったのかしら？・・・まさに今のあたしの心境と一緒なのよね。

第１２０話　母さんに・・・（後書き）

ようやく勝美も母親としての度胸がついてきたようです。

この部分、書いていたら思ったよりも長くなってしまったので、ここで一旦切って、結婚式から新婚旅行は次回以降に回します。

千博はもう両親の前でエッチをして見せなければならない（それが婿の義務だ）と固く信じていますし（第１０２話）、勝美もこの有り様ですので、前の温泉旅行（第９３話～第９６話）のようなことになったりするのでしょうか？！

第121話　結婚式　～それぞれの想い～

（優稀）

千博と勝美が二人揃って神主さんの祝詞を受けている。さっきは巫女さんが3人で短い舞を踊っていたし、何かするたびに神主さんが榊の枝の先に白いギザギザに切った紙を張り付けた御祓い棒（これ、正式名称は「大幣：おおぬさ」とか「御幣：ごへい」って言うんだって。初めて聞いたわ。）で、二人の頭の上と、それから場所全体を祓い清める動作をするのが、雰囲気を盛り上げてくれているわ。あたし、神式の結婚式って見たことなくて、こうやって進むのかって、初めて知ったけど、結構「儀式」っていう雰囲気が強く出ているものなのね。・・・指輪の交換とか、誓いのキッスとかはないのかしら？

当初、千博も勝美も、教会のチャペルで結婚式をするようなことを考えていたらしいんだけど、勝美のお父様が自分も含めて、誰もキリスト教ではないんだし、和式・和装の結婚式が良いって言い出して、父さんもそれに賛成したの。というか、父さんは別に宗教とかのことを考えたというんじゃなくって、千博は婿に入るんだから、先方のお父様の意向に合わせるのが入り婿の義務だって言って、それでこうなったみたいなの。

もっとも、チャペルでやるとなると、祭壇の前で待っている千博のところに勝美を連れた勝美のお父様が、バージンロードを一緒に歩いてきて、勝美を千博に渡すということになり、どう考えても入り婿にはそぐわないのよね。・・・かといって、祭壇で待ち構える勝美のところに、千博を連れた芳恵さんがバージンロードを歩いてきて、千博を勝美に渡すなんて、まるでコメディ映画になっちゃうわ。

だから、これはこれで良かったんだと思うの。千博は成人式のと

きに着た紋付き袴（遠藤家の家紋入り）で、どうやら勝美のお父様から正式に譲って貰ったらしい。勝美は白無垢で、これは多分レンタルよね。その辺の差配は、海外に駐在している勝美のお父様の意向を確認しつつ、うちの父さんが実務を取り仕切ったみたい。

このあと、神社の隣にあるホテルで披露宴をする手筈になっているらしくて、そこまでは歩いても2分だから、皆でこの衣装のまま、ぞろぞろと行くって、千博が言っていたわ。お色直しは、千博は特にしないみたいだけど、勝美はお正月や成人式のときに着た晴れ着に着替えるって言ってたわね。

今日は、披露宴が済んだら、二人はそのままホテルで一泊して、明朝新婚旅行（といっても熱海にほんの3泊だけ）に行くんだけど、笑っちゃうのは勝美のご両親も一緒に行くんだってさ。当初、勝美は猛反対したんだけど、千博がそういうのもありだし、万一勝美のお腹に問題が出たとき、ご両親が一緒なら安心だからって言ったんで、勝美も最後は渋々了解したって言ってたわ。でも、新婚旅行に新婦のご両親が付いて来るなんて、確かに新婚の二人にしてみれば完全なお邪魔虫で嫌でしょうね。千博はまあ立場上、先方のご両親の意向には逆らえないでしょうから、その千博が了承しちゃったら勝美も仕方がなかったのかしら。あたしのときはどうなるんだろう？

・・・あ、いよいよ三三九度の杯になるところね。固めの杯といって、この酒を二人して飲むことによって、正式に夫婦となるわけよね。・・・でも、勝美は妊娠しているのに、アルコールは大丈夫なのかしら。それに千博は、また酩酊したりはしないわよね・・・。ちょっと心配。

――――――――――――――――

――――――――――――――

（勝美）

この5カ月間、あなたと夫婦として生活してきたし、それどころか、あたしはもうすぐ妊娠5カ月に入るところ。あの城址公園での出来事から、もう7ヶ月になるのかしら。あと5カ月もすると、あ

たしはあなたの子供を産みます。そして最初の子供が無事産まれたなら、その後は体力の続く限り、何名でも、何十名でも、あなたの子供を産み続けます。あなたの子供なら何名でも欲しいし、それがあなたの愛の証（あかし）だから。それに、あたしたちの子供は、間違いなくあなたとあたしの遺伝子を受け継いだ、正真正銘の実子だっていうのも嬉しい。性別交換したにもかかわらず、これだけの幸せを手にすることができるなんて、夢にも思わなかった。両家のご両親には、ただただ感謝しかないわ・・・。

・・・千博のことを意識し出したのは、いつの頃からだったのかしら。お互いに城址公園でよく遊んでいたから、何となく見知った仲だったように思うけど、あたしの家と千博の家は公園の反対側にあって、結構離れていたから、そんなに良く知っているというほどには面識がなかったわよね。何となく顔は知っていたけど、いわゆる幼馴染みという程ではなかったわ。

あなたは近くの幼稚園に行っていたけど、あたしは母さんが働いていたから保育園に行っていたんで、ここでも接点はなかったわよね。

小学校に上がると、この地域は学区がひとつしかなかったから、あなたと同じ小学校に通うことになったけど、まだこのときはそんなにお互いのことを意識してはいなかったと思うの。小学校では2年毎にクラス替えがあって、3年生になったときにあなたのお姉さん、当時はお兄さんだった優稀と同じクラスになって、優稀の家にも遊びにいったりするうちに、あなたのことを少しずつ知ることとなったのよね。でもこのときはあなたが優稀と一緒に帰ることも多かったのに、あたしは母さんが働いていたので学童保育に入ってて、あなたと一緒に帰宅することはめったになかったわ。

その後、5年生になったときのクラス替えで、いよいよあなたと同じクラスになって、それから2年間、小学校の卒業まで、ずっと一緒だったわ。その頃はあたしが男の子で、あなたは女の子だった

んで、ちょっとグループが違っていたけど、あなたもあたしも、まだ本当に子供で男女の違いとか性差とかは、まったく考えていなかったと思うの。だから男女合同でやるときは勿論、そうでなくともあなたと一緒に遊んだり班をつくって学級活動することも多かった気がする。当時からボーイッシュで体力も体格もあたしより上だったあなたは、あたしと一緒に何かをやることに、まったく遜色ない、それどころかあたしがついていくのに苦労するほど優秀だったわよね。

　そんなあなたと2年間同じクラスで、本当に楽しく充実していたの。だから中学に入って、また同じクラスになったとき、迷わずあなたに告白した。あなたが大好きだったし、自分が将来、結婚するのはあなたしかいないと確信していたから・・・。

　あなたは覚えているかしら。あたしがあなたに告白したときのことを。ゴールデンウィークが過ぎて新しいクラスにも慣れてきて、しかも友達は小学校時代から同じ顔ぶれも多かったから、何となく誰と誰が仲がよいとか、誰と誰はよくケンカするとか、そういうことがある程度見えてきたころ、そろそろ男子と女子で、好きな相手は誰かなんて話題も出るようになり、男女の関係を意識し出したんだと思うわ。あたしはあなたしか眼中になかったし、他の誰かにあなたを取られるのは絶対嫌で、というか小学校の5年生と6年生のときに2年間一緒にいて、あなたが自分の運命の人だと思っていたから、何の迷いもなかったし、誰に遠慮することもなく、あなたに告白したの。ほら、やっぱりこういうのは、男子から女子に対してするものでしょう。当時はあたしが男子だったから、自然とあたしからあなたに告白したんだ。

　あたしとしては、告白というより、プロポーズに近いものだと考えていた。といっても、まだ中学1年生で、お互い思春期に差しかかったばかりだったんで、男女の関係というには早すぎたし、そもそも二人とも男女の関係っていうのが、どんなものなのか、知識すらなかったんじゃないかしら。あたしもあなたも、恋人になる、付

き合う、ということが、当時、周囲の友達の間で、ちょくちょくと話題になったりするようになってきたけど、小学校時代の班とかグループの仲間と、何ら変わらない程度の認識だったように思うの。だってあたし、いずれあなたと結婚する、という将来の夢はあったにしても、告白して恋人になったら何をすればよいのか、どういう関係になるのか、なんて何も考えていなくて、そのうちあなたとキスするのかなーって、何となく考えていた程度だったんだから・・・。でも、あなたのことを考えると、いつもおちんちんが硬く元気になっちゃうし、内緒だけどその頃覚えたオナニーをするときは、必ずあなたのことを考えていた。といっても、まだセックスなんてイメージもできなくて、何となくあなたの裸とかを想像しながら、必死になっておちんちんを扱(しご)いていたのが、つい昨日のことのようだわ。

クラスの皆の前で恋人宣言もしたし、あなたのご両親に挨拶もして、公認カップルになったけど、逆にそうなるとクラスの友達もいろいろと姦(かしま)しくなって、あることないこと噂したり、けしかけたりもされたわよね。でも、あたしとしては成人して正式に結婚するまでは清い関係でいようと心に決めていたんで、周囲のちょっかいは気にならなかったわ。

あたしも健康な思春期の男の子だったから、我慢するのは結構大変だったのよ。あなたに手を出しそうになったことも一度や二度じゃなかったけど、でもこれは男子のあたしが我慢すれば、問題ない筈だと、そう考えていた。それでもあたしの部屋であなたからキスされたときは辛かったけどね。あなたを押し倒すのは、何とか理性で思い止まったけど、もうおちんちんが爆発しちゃうと、本気でそう思ったわよ。それとも、あなたは期待していたのかしら？・・・まあ、どうして良いかわからなかったあたしがチキンだったっていうのもあるんだけどね。・・・あそこであなたに手を出していたら、二人して性器を交換することにはならなかったのかしら・・・？

それはともかく、そんな二人のプラトニックな関係が、判定試験

の直前のあなたからの言葉で、一気に変わったのよね。あのときは本当にショックで、もうあたしは人生が終わったような、いや、もっと酷い、世界が滅亡するような気がしたわ。そのあと、城址公園であたしが射精しちゃってあなたに精液をかけちゃったことや、その夜の悶々とした長い長い一夜、そしてあなたにエロ本を見られてしまったことなど、どれひとつをとっても、あたしは校舎の屋上から飛び下りるしかないと、本気で悩んだのよ。

　でも、あたしが最後に辿（たど）り着いた唯一の解決方法、こうしてあたしも揃って性転換することで、二人の関係は前のままに保つというのを、あなたはあっさり受け入れてくれた。

　あなたの、この決断がなかったら、多分あたしは今、ここにこうして居られなかったに違いないわ。最悪、飛び下りてもうこの世にいないか、それとも気が狂って精神病院に入院しているか、多分どちらかだったんでしょうね。

　・・・千博。・・・愛しています。ようやくあなたと結婚できるわ。小5から5年越しの愛が結ばれるのね。もう5ヶ月も前に入籍しちゃったし、それ以来、ずっと一緒に住んでいるとはいえ、やっぱりきちんと結婚式は挙げたいわよね。別に秘密にしていた訳じゃないけど、結婚式を挙げないと、何かちょっと大きな声で発表できないような後ろめたさというか、引っかかるものがあるじゃない？・・性別を交換して、二人の役割は変わったかもしれないけど、二人の関係は、何も変わらない。これまでと一緒、いや、ますます濃厚に、そして今後とも未来永劫、死が二人を別つまで、変わらない愛情を持ち続けます。

　―――――――――――――――

　―――――――――――――

（千博）

　勝美と最初に遊んだのは、僕が記憶している限りだと、あの城址公園で母さんに連れられて少し遠くの方まで散歩していたときだっ

た。確か、幼稚園に入るちょっと前くらいじゃなかったかな。もうすぐ入園式とか言われていたけど、当時の僕には幼稚園ってどんなところかわからないし、それよりもこの公園で遊ぶ毎日がすべてだった。君のことを特に意識したというわけではなく、たまに僕が遠出したり、君がこっちへ遠出してきたときに、一緒に遊ぶくらいだったよね。でも、不思議と印象に残っているのは、当時からウマが合ったんだろうか。

ほどなく僕は幼稚園に入り、君はご両親とも不在のことが多いとかで保育園に入ったんで、平日の接点はなくなっちゃったけど、週末や休日になると、いつしか君と一緒に遊ぶのが日課（週課？）になっていたっけ。

そんな関係だった僕たちは、二人揃って同じ小学校に入学した。でも1年と2年のときはクラスも違っていて、帰宅する方面が一緒だから集団登校で一緒になるくらい（下校は学童保育に入っていた君は別だったっけ）で、それほどいつも遊んでいたという意識はなかった。単に幼馴染みとして、幼稚園に入る前から知っていたという程度だと認識していたんだ。

それが、3年になってクラス替えで君と優稀が同じクラスとなり、優稀も当然君とは幼稚園に入る前から遊んでいて知らない仲じゃなかったんで、ちょくちょく僕の家に遊びにくるようになったよね。そんなとき、君は優稀とも勿論遊んでいたけど、どっちかというと僕と一緒に遊ぶことが嬉しそうだったっけ。僕も久しぶりに君とよく遊んで、さらには優稀と二人で君の家に遊びに行って、三人で遊ぶことも多かったし、三人で宿題とか勉強を一緒にすることもあったよね。（でも、大抵の場合、僕たち二人は自分の勉強をさっさと済ませちゃって、優稀の勉強を見てあげたり、優稀の宿題を手伝ってあげた記憶ばかりがあるのは、気の所為（せい）なんだろうか？）

優稀と君は、成績はずいぶん差があったし、何より運動神経抜群でスポーツ少年だった君と、完璧な運痴で体力もあまりなく、俗に言うみそっかすの優稀とは、いろいろな面で正反対かと思っていた

けど（二人ともチビで背が低いというのが唯一の共通点に思ったりしたんだ）、でも三人で遊んでいると、君と優稀の性格は、かなり似ているということに気がついたんだ。それは常に他人に気を配り、自分の我を通すことがない、つまり他人に優しくて、思いやりに溢（あふ）れているということだった。

このことは、小5のクラス替えで君と同じクラスになり、卒業までの2年間を君と同じクラスで過ごして確信に変わった。それに、二人とも意識してはいなかったのか、それとも君は密かに手を回していたりしたのか知らないけど、クラスで班とかグループをつくるときは、必ず君と一緒だったっけ。僕も君と一緒に何かをすることが本当に心地よくて、何となく君と同じ班になれるように、無意識に行動していたのかもしれない。

この当時はまだ、男女の関係というのは一切なくて、クラスでの親友、いや、大親友というのが僕の認識だった。（そう言えば、前に読んだラノベに、男女の親友というのは成立するのかということを扱ったものがあったっけ・・・。）

このときの2年間は、優稀も入れて3人で遊ぶこともあったけど、君がうちに遊びに来るのは、完全に僕と遊びたいからだったよね。逆に僕が君の家に遊びに行ったり、一緒に勉強に行ったりすることも多くて、優稀は仲間外れとは言わないけど、たまたま時間があれば参加する程度になってたね。仲がよくても、小学生でクラスが違っちゃえば、ま、そんなものか。

だから、中学生になって、また同じクラスになって、君から付き合って欲しいと告白されたときも、何の不思議もてらいもなく、ごく自然にOKしていた。むしろ、君からの告白が、まるでプロポーズの言葉のようで、ちょっと笑いだしそうなのを必死に我慢したのを覚えている。（あとで友達から随分からかわれたっけ。）

それから、3年生になるまで（正確には、あの城址公園での『事件』があるまで）は、普通の中学生としても、本当に清くプラトニックなおつきあいだったね。君は決して僕に手を出すことはなく、

でも僕のことを本当に心から愛しているのが伝わってきて、僕は君と結婚するんだろうなーって、ずっと思っていた。だから、というわけじゃないけど、まったく僕に手を出してこない君に、何となく物足りなく思ったのも事実なんだ。手をつないだのも、キスをしたのも、いつも僕からだったよね。しかも、あの城址公園のときまでは、キスっていっても、単にチュッとするだけのバードキスで、舌を絡めるディープキスさえしなかったから、僕が君とセックスしたい、、君に奪われたいって密かに期待していたのは、結局空振りに終わっちゃったよね。

でも、こうして二人で性器を交換して、今の状態になってみれば、結果的には君の希望どおり、それぞれ新しい性別で初体験をしたのは、良かったんだろうな。（でも優稀みたいに、僕も男女両方の性別でセックスを体験してみたかったのは、ナイショだ。君を悲しませちゃいけないし、そんなことはないと思うけど、万一にも君の決断に泥を塗るようなことは、一切避けなければならないからね・・・。）

いよいよ固めの杯、俗に言う三三九度だ。これを呑み終えれば、僕たちは晴れて正式な夫婦になる。

でも、これ、お酒のように見えるけど、実はみりんにして貰った。勿論、みりんにも多少のアルコールは入っているけど、妊娠中の勝美はお酒を飲むわけにいかないし、僕も万一酔っぱらったりしたら、大変なことになっちゃうから・・・。ま、みりんなら大丈夫だろう・・・。

第１２２話　新婚旅行

昨日はホテルでの披露宴が終わったのが６時頃で、参列者はそのまま解散で帰ったけど、僕と勝美はこのホテルのスイートルームを取ってあって、着替えてからそこに移動して、そのまま朝まで新婚初夜となった。

あの交換初夜以来、勝美とは何回となく肌を重ねてきたし、勝美はもう妊娠５カ月になるけど、義両親が二人ともいない場所で勝美とベッドを共にするのは、実は昨晩が初めてだった。

僕も勝美も行為に夢中になっちゃうと、ご両親が居ても気にするような余裕はなくなっちゃって、激しく愛し合った挙げ句、思い切りイッて大声で叫んじゃったりするんだけど（だからお義父さんやお義母さんに、僕たちの様子は常に完全に筒抜けで、いつも終わってから、からかわれたりして物凄く恥ずかしい）、昨日はそんな心配がまったくないんで、僕も勝美も気にすることもなく、心行くまでセックスを愉しむことができた。二人して気絶するまで快感に溺れたり、勝美だけ、または僕だけが攻められて意識を手放しちゃったりしたけど、これこそが新婚初夜の醍醐味なんだろう。（勝美のお腹は大丈夫だったかな。一応、正常位は避けるようにしたつもりだけど・・・。）

勝美も随分積極的で、勝美に騎乗位でピストンされながら乳首から脇を攻められたり、四つん這いにさせられてバックから前立腺を指でグリグリされたりと、もう死んじゃうと思うほどイキ狂わされたんだ。・・・まあ、勝美も僕にクリトリスをペロペロチューチュー吸われながら乳首をクリクリされて、何度も白目を剥いていたから、それはお互い様ということかな・・・。

でも、これが普通の新婚夫婦の初夜の様子なんじゃないかと思う。我が家のように、親が僕たちの嬌声を全部聞いているというのは、

やっぱりちょっとね・・・。

何時間もぶっ通しで愛し合って、二人とも腰が立たないくらいクタクタで寝落ちしちゃったんで、朝起きてから急いでシャワーを浴びた。勝美の中に入れたままで寝ちゃったのは、久しぶりだったけど、赤ちゃんは大丈夫だったかなぁ・・・。

急いで朝食ビュッフェを食べて、チェックアウトするとタクシーで東京駅に向かった。スイートルームだとルームサービスも頼めるらしいけど、待ち合わせの時間が迫っていたんで、メインダイニングのバイキングで軽く済ませちゃった。荷物はここに来るときは、今朝の着替えだけで、あとはお義父さんたちが僕たちのスーツケースも家から持ってきてくれる手筈になっているんで、僕も勝美も身軽なものだ。

「「おはようございます！」」

「あ、おはよう！・・・ちゃんと遅れずにやってきたね。・・・新婚初夜の翌朝だから、遅れるんじゃないかって思ってたよ。昨夜は足腰が立たない位、激しかったんじゃないかな？」

お義父さんが早速、セクハラまがいの発言をかましてきて、勝美とお義母さんに思い切り睨(にら)まれていた。

「君たちのスーツケースはこれだね。随分小さいけど、これで本当に二人分なのかい？」

「ええ、僕も勝美も、そんなにおしゃれするほうじゃないんで・・・。」

「まあ、新婚旅行だから、寝間着だけあれば事足りるのか。いや、寝間着も必要ないのかな？・・・あっ、痛っ、イタタタタっ！」

またしてもお義父さんがセクハラ発言で、今度はお義母さんに脇

腹を抓（つね）られらていた。ま、この辺も通常運転の範囲内だ。
　熱海までは、新幹線だと４０分で着く。リニアは熱海を通らないんで、もう開業して１００年以上になる従来の新幹線に乗ったんだけど、寛（くつろ）ぐ暇もなく、あっと言う間に到着した。宿は駅から少し離れたところにある老舗の温泉旅館のスイートルームで、離れのような場所になっていた。しかもかなり広い専用の露天風呂がついている。お義父さんたちは当然別室なんだけど、これってやっぱり、家族全員で一緒に入ることになるんだろうな。とすると、その流れで勝美と愛し合うところを見て貰うことになるのかなぁ。昨日の夜、ベッドで勝美にこの話をしたら、思い切り笑い飛ばされちゃった。そもそも、勝美は家族全員で風呂なんて、あり得ないって話していたけど、草津では家族風呂じゃない、普通の混浴露天風呂で父さん母さんと一緒に杉田家の家族皆で入っていたから、そんなに大笑いされるようなことじゃない筈だし、入り婿の義務として、きちんと種付けをしているところを（今後のこともあるしね）ご両親に見せなければならない筈なんだ。そうじゃなかったら、ご両親も大事な娘がちゃんと愛されているのか、可愛がって貰えているのか、きっと心配だろう・・・。

　チェックインしたら、お義父さんたちは二人で夕食まで出てくるからといって、いなくなってしまった。僕たちに気をつかってくれたというよりは、まるで二人して久しぶりの旅行を愉しんでいるみたいで、してみるとお義父さんお義母さんが僕たちの新婚旅行に付いてきたのは、単に僕たちのことをダシに使ったのか、それとも本当に勝美のお腹を心配してのことだったのか、よくわからない。でも今はそんなことを気にせずに、勝美と二人で熱海の町を散策してみることにした。
　バスかタクシーでも使おうかと思ったんだけど、勝美はまだそんなにお腹が大きくはないから、歩くのはいくらでも大丈夫だって言

うんで、小さい熱海の町をぶらぶら歩いて、有名な貫一お宮の像とか、熱海七湯を巡り歩いたり、起雲閣をはじめとする歴史的建造物（熱海は明治から大正にかけて、多くのセレブが別荘を建てたんで、それが観光名所として残っている）を見て歩いたりした。でも、実は僕も勝美も、そんなものは実はどうでもよくて、二人で手をつないで一緒に歩いているだけで充分に楽しくて幸せなんだ。・・・っていうか、新婚旅行なんて、そんなものじゃないかな。

旅館に戻ると、部屋にはもう布団が敷いてあった。僕たちが新婚だということが伝わっている所為か、ご丁寧に枕元にはタオルとティッシュボックス、それにコンドームが用意されていた。これ、確か勝美の部屋で交換初夜をしたときにも、同じようなセッティングだった気がする。ということは、使うかどうかは関係なく、ここでセックスをしなさいというサインというかアイコンなんだろうか・・・。

ただ、仲居さんが言うには、スイートルームだと大広間で食事もできるけど、基本的には自分の部屋での食事になるという。（そう言われてみると、この「離れ」の間には、前室の奥に食事のための部屋、寛（くつろ）ぐための居間、そしてその奥に寝室があり、寝室の庭園側が露天風呂となっている。）そして、その食事の間には、僕たちの分だけでなく、四人分の食事が並べられつつあった。

「お連れ様は渡り廊下を本館に向かい、最初のお部屋になる萩の間にお泊まりですが、ご希望によりこちらで夕食をご一緒するそうです。」

「お食事は7時にして欲しいと伺っておりますので、それまで奥の居間でお寛（くつろ）ぎ下さい。」

そうか、やはりここで皆で一緒に食事をして、そのまま四人で露天風呂に入るとか、または僕たちだけ風呂に入って、そのままお義

父さんとお義母さんに勝美と愛し合っているところを見せる流れのようだ。僕はもうとっくに覚悟を決めているけど、勝美は大丈夫かな・・・。

そんなことを考えながら、勝美に話すきっかけがないまま、二人で居間のローテーブルで、仲居さんが淹れてくれたお茶を飲みながら明日はどこに行くかを相談する。下田まで足を伸ばすのも悪くないけど、僕は伊豆半島ってはじめてなんで、バナナワニ園とかシャボテン公園なんかが有名みたいだから、まずはそういったところに行ってみたいな。勝美は何か希望があるんだろうか・・・。

7時になり、夕食の準備が整うのと、お義父さんとお義母さんが戻ってくるのが殆ど同時だった。さっそく席に着き、仲居さんのお世話で食事を開始した。

お義母さんと勝美、それに僕は最初からご飯と味噌汁も注いで貰って食事を食べ始めたけど、お義父さんは熱燗を頼んで、ご飯は食べずに料理をつまみにして飲みだした。そして当然だけど、僕にもお酒を勧めてきた。あまり飲んじゃうと、大変なことになるけど、ま一杯か二杯なら断るのも悪いと思って、僕も頂くことにした。でも、本当に酔っちゃうわけにはいかないから、二杯目を頂いたところで杯を伏せてしまい、もう本当にこれで結構ですと言うと、お義父さんがまたニヤニヤしながら、「そうだね。今夜使い物にならなくなっちゃったら困るからね。」と言われちゃった。これはやっぱり、僕たちが愛し合うところを見せて欲しいという意味なんだろうな。これだけ念を押されちゃったら、もう逃げられないな・・・。

――――――――――――――

――――――――――――――

「もうお腹一杯で食べられないわ。勝美よかったらもっと食べない？・・・あなた二人分食べないといけないのよ。」

「なんだ、もう食べないのか。じゃ俺が貰うよ。さすがに伊豆は海の幸が絶品だからな。」
「本当に美味しかったですね。こんな素晴らしい新婚旅行ありがとうございます。」
「千博君はもう家族なんだから、遠慮することはないさ。それにこっちも夫婦水入らずで愉しんでるからね。」
「お父さん達はどこに行っていたの？」
「レンタカーを借りて湯河原から箱根まで足を伸ばしたんだ。十国峠からの富士山とか、大観山からの芦ノ湖の眺めは素晴らしかったぞ。」

お茶を飲みながら雑談しているうちに仲居さんが食事を片付けてしまい（お義父さんだけは熱燗の続きで、料理をいくつか残しておいて貰ってチビチビやっていたけど）、部屋には僕たち四人が残された。

いよいよだ。ここでお義父さんお義母さんと一緒に、風呂に入ることを提案しよう。

「このスイートルームは一部屋だけで離れになっていて、ここ専用の露天風呂がついています。かなり広いですし、丁度家族風呂のように使うこともできますので、お義父さんお義母さんと一緒に、家族四人で風呂に入りませんか？」
「なっ、千博っ、何を言い出すの？！！」
「素晴らしい露天風呂のようですので、是非ご一緒しましょうよ。」
「お、それは良い考えだね。僕は勿論構わないよ。明美はどうだい？」
「あたしも構わないけど、こんなおばさんの裸、見てみてもつまらないんじゃないかしら？・・・（千博さんと一緒に入るということは、勝美のおちんちんが見れるということよね。勝美と以前にお風呂にはいったのは、勝美がまだ小学校の低学年のときで、それ以降、

あの子はかたくなに裸をあたしに見せてくれなかったから、大人になった勝美のおちんちんが移植された千博さんの身体を見ることができるなんて、千載一遇のチャンスだわ・・・。）」

「そっ、そんなっ、・・・お父さんもお母さんも、何を馬鹿なこと言っているの。あたしたち、もう子供じゃないのよ。」

「でも、家族でしょ？・・・家族が一緒に風呂に入るのは、別に不思議じゃないと思うけど。この前、里帰りしたとき僕の実家では家族全員で草津に温泉旅行に行ったんだけど、混浴の大露天風呂で家族全員で一緒に入ったんだ。別に大人も子供も関係なく、家族で風呂に入るというのは、そんなに珍しいことじゃないんじゃないかな。」

「そうよ勝美。あなた、小さいときはそうでもなかったのに、大きくなったら凄く恥ずかしがり屋になっちゃったのか、あたしにも父さんにも、決して裸を見せようとしなかったわよね？・・・もう大人になって、恥ずかしがる時期は超えただろうから、是非家族全員で一緒に露天風呂に入りましょう？」

「・・・・・・。」

第１２２話　新婚旅行（後書き）

ちょっと短いのですが、このあと長くなるので、ここで切って残りは次話といたします。

第123話　新婚旅行2

どっ、どうしよう！！・・・お父さんもお母さんも、それに千博も一緒に風呂に入ることで話がついちゃった！？！？

お父さんもお母さんも、何の躊躇(ためら)いもなく浴衣を脱いでいる。千博もそれに倣(なら)ってか、浴衣をバッと脱いで、トランクスもスッと脱ぐと、素っ裸で浴衣を丁寧に畳んでいる。

「勝美はどうしたの？・・・あなたも早く脱いで、一緒に入りましょうよ。」

「俺たちは先に入ってるから、急いで来なさい。」

お父さんたちは、三人で揃って露天風呂に行ってしまった。あたしも仕方がないから、とにかく浴衣を脱いで後を追った。この前、お母さんと一緒に実家の近くのスーパー銭湯に行ったとき、バスタオルを巻いて入ろうとしたら物凄く怒られたから、手拭いを手に持って、それで何とかあそこだけ隠して風呂に入って行くと、何とお父さんとお母さんが千博の身体の鑑賞会をしていた。千博はしゃがんだお母さんの前で仁王立ちになり、半立ち状態のあそこを突き出すようにしている。

「これが勝美のおちんちんだったものね。あたしが知っているのは、まだ小学校の低学年までだったから、ちっちゃくてかわいい子供のおちんちんだったけど、本当に立派なものになって・・・。しかも完全に剥けているし・・・。」

「あ、それは移植手術のとき皮を切り取られちゃったんです。性転換者はペニスの形状とかサイズを成人男子の標準形に揃えるとかで・・。だからお義父さんみたいに、自然に剥けた人には敵いません。

」
「いや、俺だって完全に剥けたのは、明美と普通に身体を重ねるような関係になってからだから、高二から高三にかけて位だったぞ。もっとも、ヘタレで君に手を出せないでウジウジしていた勝美には、望むべくもないのかもしれないな。」
「そもそも中三で自然に剥ける男の子って、どのくらい居るのかしら。」
「当時の俺の感覚だと、クラスでも一人か二人、居たか居なかったか、という位だった気がする。」
「僕はあまり詳しく知りませんが、男子になってからの短い経験でも、そんなものじゃないかと思います。普通は高校に入って、というか成人式を過ぎると、女性と普通に関係を持つようになる子も多いんで、それでセックスを繰り返すうちに、自然と剥けてくるんじゃないでしょうか？」

父さんたちと千博が、物凄い会話をしているわ。あたし、この隙にさっとお湯を被って、とにかく湯に入っちゃったんで、これで身体を直接見られるおそれは減ったわね。でも三人の話を聞いていて思わず赤面しちゃう。・・・確かにあたしがヘタレで、千博が期待していたのに手を出せなかったのは事実だけど、それとおちんちんの皮が剥けてくることと、何か関係があるのかしら。それにあたし、別に千博とセックスしていなくても、夏休みの頃にはもう少しだけ皮が剥けてきていたのよ。それは千博も多分、知っている筈よね。それなのにお父さんの変な説に同調して調子を合わせるなんて、やっぱり入り婿だと義父に異を唱えるって難しいのかしら・・・？

「あら、そんな話をしていたら、千博さんのが元気になってきたわ！・・・凄い、随分立派ね。これが勝美のおちんちんだったなんて、信じられない。あなたのより大きい位じゃないかしら？」
「うむ。勝美は小さな身体の割には、立派なものを持っていたよう

だな。これで毎日、勝美のことを可愛がってくれているんだな。・・・勝美も、自分についていたもので愛されるのは本望だろう。・・・若いって良いな。羨ましい限りだよ。」

父さんと母さんのこの発言で、二人は千博のおちんちんとして見ているのではなく、あたしのおちんちんという認識で鑑賞しているんだって、気がついた。そしたら急に、物凄く恥ずかしくなっちゃった。もうアレはあたしのものじゃなくって、千博に上げちゃったんだから、あたしが恥ずかしがる筋合いじゃないのはわかるけど、理屈と感情は別物よね。例えば今、ここでお父さんにあそこをクパアされて中の奥まで見られるのも恥ずかしいけど、お母さんに元気になった千博のおちんちんを間近でじっくり観察されるのは、もっとずっと恥ずかしい。何だか過去の自分というか、隠しておきたい心の中の恥ずかしい部分まで、すっかり見られてしまっているような気がするわ。これって、まだあたしが心の中まで完全に女の子になっていないということなのかしら。それとも、今のあたしのあそこは、まだ自分のものじゃなくって、千博から貰ったものだっていう感覚があるからなのかしら。・・・そう、例えば、借りた服が自分には似合っていないとき、それを他人に見られる恥ずかしさと、どれほど似合った服を着ていても、自分の心の内面を知られることの恥ずかしさの差みたいな・・・。

そんなことを考えていたら、千博のおちんちんが完全に上を向いて、お臍（へそ）にくっつくほどになっちゃった。あたしも昔、経験があるけど、ここまで臨戦態勢になると、もう簡単には収まらないのよね。どうするつもりかしら。冷たい水でもぶっかけるとか？

「ガチガチになっちゃったわね。あなたの年齢では、もうこんな元気なのは、望むべくもないんじゃない？」

「そりゃ若いからだよ。俺だって昔、君と付き合いだした頃は、このくらい普通だったの覚えていないかい？」

「あら、そうだったかしら？・・・でも、今のあたしには、自分の生んだ子供が、こんなに立派なおちんちんになったことのほうがずっと感動的なのよ。」
「では、せっかくこんなに元気になってしまったので、ここでオナニーをして射精するところをご覧に入れます。」
「なっ！・・・何を言っているの千博！！」
「いいんだ、どのみち、いつかはお義父さんとお義母さんに、僕がイクところを見て貰おうとは思っていたし、君さえよければ僕たちが愛し合うところも見て知っておいて貰うのが、家族としてのあり方だって、この前気がついたんだ。」
「だから、ほら、こうして・・・。あっ、はぁっ、あぁっ。」
「だっ、だめーっ！！」

　千博に思いっきり飛びついて、シコシコするのを止めさせた。自分の裸が見られるのなんて、もう構っていられなかった。だって、まるで自分が父さんと母さんの前でシコシコしてオナニーをしているような気分になっちゃったから。・・・あたし、どうしちゃったのかしら・・・。

――――――――――――――――――――――――――――

　勝美が思い切り僕に飛びついてきて、ペニスを扱くのを止めさせた。動きの素早さといい、僕の手を握って押さえ込んだ力強さといい、とても僕じゃ敵わない、まさに男の子だった頃の勝美を彷彿とさせる動作だった。
「どっ、どうしたの。急に？」
「だめっ！・・・絶対だめなの！！」
「でも、丁度良い機会だし・・・。」

「とっ、とにかく絶対にダメ！！」
「まあ、千博君も別にここでいきなり一人で愉しむこともないだろう？・・・まだ夜は長いんだし、そもそも勝美と二人ですれば良いことであって・・・。それとも明美、お前は千博君が射精するところを見たかったりするのか？」
「まさか、そんな・・・。（ちっ、せっかく勝美のものだったおちんちんから射精するところを特等席で見れたかもしれないのに、あなたったら余計なことを・・・。）」

そっ、そうだ。お義父さんやお義母さんは、何も僕がオナニーして射精するところなんて見たいんじゃないんだ。・・・僕と勝美が愛し合っているところを見せてあげなきゃいけないんだ。・・・そうじゃないと、いくらもう子供を設けたといっても、入り婿の義務を果たしたことにはならないんだ。・・・でも、ここからどうやって・・・。えっ、えーいっ、こうだ！！

「むぐっ、んむっ、ぁむ、あぐっ。」
「むっ、むむっ、んぐっ。」

飛びついてきた勝美を思い切り抱きしめ、キスをして勝美の口の中に舌を強引に割り込ませた。そして勝美の舌を思い切り吸った。勝美は最初、驚いたように眼を一杯に見開き、一瞬だけ身体に力が入ったが、特に拒絶するような素振り(そぶり)は見せず、みるみるうちにとろんとした目つきになった。・・・よし、これなら行けるかも・・・。

「勝美っ、・・・むぐっ、あむっ、・・・勝美っ、勝美っ。」
「千博、・・・んむっ、ングッ、・・・千博っ、千博っ。」
お互い、名前を呼びながら一心不乱に口を吸い合った。勝美の身

体から力が抜けてきて、くてっとなってきた。・・・よし、大丈夫だ。そう判断して、千博のおっぱいを鷲掴みにすると、乳首をクリクリとひねり回した。

「あっ、ぁあっっ、ちっ、千博っ、ぁんっ、ああんっ、あっ、あたしっ、あたしっ、千博っ、っつっ。」

　勝美が完全に蕩けたアへ顔となり、自分からあそこを僕に擦りつけてきた。僕のペニスも、さっきからガチガチのままで、臨戦態勢というか、準備万端だ。っていうか、もうこれ以上すると暴発しちゃいそうだ。このまま勝美の足を開いて、一気に押し込もう。立位はやったことがないけど、多分お腹にはそんなに負担がかかる体位じゃない筈だ。・・・そう思って行動に移そうと身体を入れ換えたとき・・・。

「ちょっ、ちょっとっ、あなたたち、・・・その続きは二人だけで愉しみなさい。あたしたちは直ぐに出るから。」

「申し訳ない。考えてみれば君たちの新婚旅行なんだよね。新婚旅行なら、二人だけでそういうことを一日中でもやっていたいだろうに、邪魔しちゃって悪かったな。・・・私も明美も、自分たちが新婚時代に戻ったような気分でいて、君たちに対する配慮がなさすぎた。あとは二人だけでゆっくり愉しんでくれ。・・・ここでも良いし、部屋にはもう布団が敷いてあるんだから、そっちでも良いだろう。・・・じゃ、これで、・・・おやすみなさい。」

　そう言い残すと、お義父さんとお義母さんは身体を拭くのもそこそこに浴衣をパッと羽織って、風のような速さであわてて部屋を出て行ってしまった。後にはもうペニスが我慢の限界に達した僕と、蕩けたアへ顔で僕にしなだれかかってくる勝美が残された。

「来てっ、千博っ、・・・早く来てっ！」
しまった。しくじった。やはり、ちょっと突然すぎたんだ。こういうことは、家族と雖(いえど)もお膳立てが大事なんだ。・・・って、少し考えれば、そりゃそうだって今ならわかる。事前に話を聞いていればともかく、突然、自分の娘がヤラれちゃうところを見せられる訳だし、それによって娘が快感で堕とされちゃって、アヘ顔を晒(さら)すなんて、積極的に見たい親もそうそう居る筈がないじゃないか。これは僕たちが愛し合っているかどうかとは次元が違う、どちらかというと公共マナーに属するような配慮だ。・・・僕はまだこういったところがダメなんだ。
そんなことを考えながら、でもペニスは僕の意識とは無関係に、もう一刻の猶予もない状態になってしまっているので、とにかく勝美の中にそっと押し込んだ。

「ぁあーーっっ、千博―っ。」
「勝美ーっ、勝美ーっ。」
「「イッ、イクーッ、イクイクッ、イックーッ。」」

二人揃って、挿入したと同時に思い切りイッた。またしても大声で叫んでしまったけど、まあここなら人に聞かれる心配もないか・・・。そう考えた僕たちは、このあと布団に移動して、明け方まで何度も何度も愛し合った。勝美のお腹・・・は、大丈夫だと信じよう・・・。

―――――――――――――――
――――――――――――

翌朝。朝食は部屋に持ってきて貰うこともできたらしいけど、部屋の中は大変な状態になっていて恥ずかしかったんで、大広間に食

べに行った。すると、丁度部屋から出てきたお義父さん、お義母さんと一緒になって、四人で同じ座卓についた。

「ゆうべはせっかくの新婚旅行なのに、一番大事なことを邪魔しちゃって本当に申し訳なかったね。」

「本当に、あたしたちが調子に乗っちゃって、あなたたち二人の新婚旅行に付いていくなんて言い出した所為(せい)で、ごめんなさいね。」

「いえ、僕たちはちっとも迷惑だなんて思っていませんから。逆に、あんな大事なことを事前のご相談もせず、いきなり始めてしまって失礼しました。・・・やはりああいうことは、いつ、どのようにするかというのを事前にお話しして、ご理解を得てからにすべきだったと反省しています。・・・不快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ありませんでした。」

「なにを他人行儀なこと言ってるんだ。君はもう家族なんだ。それも遠藤家の跡取りなんだぞ。何を遠慮することがある。家族の性行動、なかでも親が子供の性生活を知っておくのは、ごく普通のことだ。・・・昨夜のあれはどう考えても、私たちが我儘(わがまま)を言ったことに端を発している。」

「いえ、そんなことはありません。むしろ、僕としては、もっとお義父さんやお義母さんと一緒にゆっくり温泉に浸かって、結婚生活の秘訣とか、いろいろとお話しを伺いたかったんですが、いきなりあんなことになってしまって・・・。」

「なら、今夜にでももう一度、四人であの温泉に入ろう。別に昨日の続きをしろということじゃないよ。僕たちの経験でも良いけど、それこそ、勝美の生い立ちとか、君が多分知らないだろう勝美の話なんか、話すことはいくらでもあるさ。」

「それと、君が新婚旅行で我慢できなくなって、私たちがまだ居るのに勝美と始めちゃったのは、別に気にしていないから。むしろ私たちが君たちの気持ちをまったく理解していなかったことが原因だから、気に病まないで欲しい。本当にすまないことをした。」

お義父さんとお義母さんが深々と頭を下げた。でも、あれは僕が家族としての義務をここで何としてでも果たしてしまおうと焦った結果であって、お義父さんたちの責任じゃないし、それ以前に何か誤解されているような気もする。さっきから勝美は真っ赤な顔をして俯いちゃってるんで、会話には参加してこないし、後で勝美に聞いてみるか・・・。

「いや、それにしても、さすが新婚だね。あの後、私たちが出て行ってから直ぐに風呂場でまず一回やって、殆ど挿入した瞬間に二人して激しくイッてたよね？」

「えっ、ええっ！・・・まあ・・・。」

僕たち、そんなに大きな声を出していたんだろうか？・・・確かに二人で同時に思い切り叫んだのは覚えているけど・・・。

「今夜もまた同じかもしれないから、予め話しておくと、あの露天風呂と中庭、あれは君たちが泊まった特別室に付随している専用であるのは間違いないんだけど、実は私たちの泊まった桔梗の間も、特別室に準ずる良い部屋でね、その風呂の窓を開けると、一応目隠しはあるとはいえ、狭い中庭を挟んで君たちの露天風呂の声は完全に筒抜けなんだよ。」

「えっ！・・・そうなんですか？！！」

「しかも君たち、あのあと部屋に入ってから、明け方近くまで励んでいたけど、そのとき露天風呂に出る扉を開けっ放しだっただろう？・・・だから、その後の様子も、実によく聞こえてね・・・。」

「「・・・・・・・。」」

「いや、若いって本当に素晴らしいね。・・・まあ新婚旅行なんて、二人だけで愛し合うためだけの時間なんだから、誰に遠慮するでも

なく、思う存分に愉しめば良いんだけどさ。」

僕も勝美も、もう何も言えなくなり、二人して真っ赤になって俯くだけだ。目の前には、豪華な和朝食が並んでいて、朝から海の幸が満載で美味しそうなんだけど、僕も勝美も、とても喉を通らない。そこにお義父さんが追い打ちをかけてきた。

「でも、そんな状況でも勝美のお腹を気遣ってくれて、途中からは勝美が君に奉仕してばかりだったね？」

ぎっくーっ。まさか、あれもバレてしまって・・・。

「君はかなりバックが好きなんだね。勝美が君のお尻に指を入れて、前立腺をグリグリしたときの乱れようといったら、聞いているこっちが赤面するほど激しくイキ狂っていたよね。あれは元からなのかい？・・・それともお腹を気遣って勝美に抜いて貰っているうちに、自然と開発されちゃったのかな？」

「ぐっ、・・・いっ、いえっ、・・・そっ、そのっ・・・。」

やっ、やっぱりっ、やっぱり僕の痴態は完全に把握されちゃったんだ（泣）。でも入り婿は義両親に性癖をすべて開示する必要があるんだ・・・。ここが試練だ。堪えなければ・・・。あ、涙が・・・。

「あ、悪い、この話は君にはタブーだったんだよね。じゃあ話題を変えて僕たちのことだけど、君たちに当てられちゃったんで、僕と明美もあの後、久しぶりに激しく燃えちゃってさ・・・。」

「明美はこう見えて実は、うぐっ、ぐぼっ・・・。」

お義父さんがお義母さんのことについて、何か言いかけた、その

瞬間にお義母さんのグーパンチがお義父さんの鳩尾（みぞおち）に力一杯決まって、お義父さんが悶絶した。実家と違い、遠藤家ではお義母さんが絶対的な権力を持っていて、お義父さんよりずっと強いんだ。これはよくよく心しておかないと・・・。

第１２４話　怜央のＥＤとは

「月並みなもので申し訳ないですけど、皆さんで食べて下さい。」
「朝食で出たもので、かなり美味しかったよ。干物なんで日持ちもすると思うし・・・。」

千博と勝美が新婚旅行から帰って来て、挨拶にやってきたわ。新婚旅行なんだから、他人に気を遣うような必要はないし、まして実家にお土産を買ってくるなんて、さすが千博と勝美は二人とも気遣いの人ね。
結婚式の翌日、新婚旅行に出かけた千博たちに、勝美のご両親も一緒に付いて行くって聞いて、ちょっと同情しちゃったけど、まあ千博は入り婿だから婚家の方針には反対できないだろうし、最近だと両親同伴の新婚旅行っていうのも、たまに聞くから、本人たちが楽しければ何でもアリなんじゃないかしら。
それはともかく、早速母さんと芳恵さん、それにＧＷでたまたま家に居た兄さんも加わって、二人にいろいろと質問責めタイムとなった。

「熱海からどこに行ったのかしら？」
「あ、両親は最初の日に湯河原から箱根方面にドライブしたみたいです。富士山とか芦ノ湖の眺めが素晴らしかったって言ってましたから。あたしたちはその日は熱海市内を少し散策した位で・・・。熱海の源泉七湯とか、貫一お宮の碑とかをぶらぶら歩いて見て回りました。」
「翌日は、お義父さんたちは下田までドライブに行って、水族館を見てきたみたいだね。僕たちは途中のバナナワニ園まで乗せて行って貰って、そこから電車で戻ってきたんだ。」

「それで、最後の日は皆でシャボテン公園を見て、早めに帰宅したんだ。」
「まあ、熱海で二泊三日だから、そんなにあちこち回れるものでもないだろう。それに、そもそも新婚旅行ってのは観光は二の次で、二人でいちゃいちゃするために行くんだからさ。」
「あなたたちはもうとっくに済ませてるとはいえ、肝心の新婚初夜・・・になるのかしら？・・・はどうだったの？」
「・・・それが、ちょっといろいろありまして・・・。」

千博が口を濁(にご)し、勝美は真っ赤になって俯(うつむ)いてしまった。でも母さんと芳恵さんの追求は簡単には逃れられないし、そもそも千博も勝美も、こういうとき誤魔化すということができない性格なのよね。結局顛末(てんまつ)をすべて白状することになっちゃったわ。二人の様子が完全にご両親に筒抜けだったことや、千博の性癖とか、バックを責められてイキ狂う様子なんかも完全に把握されちゃったことなんかを、半べそかきながら語る千博と勝美は、ちょっと可哀相だった。・・・まあでも、それが結婚するってことなのよね。それに入り婿の千博は、何があっても耐え忍ばなけりゃならないわけだし・・・。

結局、お土産の鯵(あじ)の干物を届けてくれるだけだったはずが、夕方まで母さんと芳恵さんに詰められて、精根尽き果てた二人は、魂が抜けたみたいになっちゃってほうほうの体で帰って行った。千博、それに勝美も、頑張ってね！

――――――――――――――
―――――――――――――

「なんだかあたし、このところ毎日のようにここに来ている気がするわ。」
「そんなことはないけど、でも君はもう僕の婚約者なんだから、自

分の家だと思って自由に来て貰って構わないんだよ。・・・だから、という訳ではないけど、本宅と、それにここの合鍵を渡しただろう？」

「まあそうなんだけどさ、本宅に行くのは、まだちょっとハードルが高いのよね。ほら、あたし、一応長男の嫁という立場だから、義両親には気を遣うのよ。・・・それに、この建物は、怜央にとっては単なる隠れ家というか秘密基地なのかもしれないけどさ、あたしにとっては、これまで使ってきた経験から、何となくラブホテルのように感じるのよね・・・。」

「ラブホテルでも良いじゃないか。どうせ結婚すれば、ここに住むことになるんだし、仮に結婚まで少し時間があるとしても、世間では僕たちと同年齢で同棲しているカップルなんて、履いて捨てるほど居ると思うよ。」

そんな話をしながら、二階の和室に布団を敷き、あたしは服を脱いでスリップ一枚になる。怜央はそそくさと服を脱いで、ボクサーブリーフ1枚となった。表面上は余裕をかましているけど、あそこはもうギンギンに勃起して、ボクサーブリーフの中に折り畳み傘を上向きに入れたような状態は隠しようもない。それに交換初夜のときの怜央は、もっと優しい眼をしていたのに、最近、ここに来ると怜央の全身から、思春期の男の子に特有のギラギラした性欲が溢れ出しているようになってきた。あたしとセックスするのは、なんだかんだで二週間に一回とか三週間に一回程度なんで、その間、オナニーするなり、あるいは他の女の子と寝ても構わないんだけど、どうやら怜央は他の女の子とは、一切寝ていないらしい。勿論、それはそれで嬉しいけど、あの怜央がどうしちゃったのかしら？・・・婚約したからといって、急に遊び人を返上したということではなさそうで、第一、一級男子なら複数の妻を持つことが法的にも許されている（むしろ推奨されている？）から、あたし的にも、あたしを愛し続けてくれるなら、怜央が他の女の子と肌を重ねたからといっ

て、そんなに目くじらをたてるつもりはないと伝えてあるんだけど、どうもうまく行かないらしいのよね。以前にもＥＤで相談されているし。

　でも、あたしとなら普通にセックスして、普通にイクことができるし、当然だけど射精もしている。膣内射精することもあれば、あたしが手や口で抜いてあげることもあって、何も変なところは見当たらない。

　最初、あたしがあげたおちんちんとたまたまに、何か欠陥でもあったのかと焦っちゃったけど、どうもそういう話じゃなさそうなの。とすると、何か精神的なことなのかしら。男の子のセックスって物凄くデリケートで、ちょっとしたことでおちんちんが役立たずになっちゃうのは良くあることだから・・・。

「怜央、愛してるわ。」

「僕も愛してる。・・・優稀。・・・優稀・・・。」

　お互いに膝立ちの姿勢でしっかりと抱き合い、舌を絡め合っていると、突然、怜央の腰がガクガクと痙攣しはじめた。

「んっ、んんっ、んくっ、んひっ。」

　口が塞ふさがっているため、言葉にならない呻き声とともに、ガチガチに固く大きくなっていた怜央の股間が、腰の痙攣に合わせてビクンビクンと震えた、と思った瞬間、急に股間のあたりがじわっと生暖かくなり、怜央は腰が抜けたように後へ倒れ込んだ。

「あぁっ、ぁひっ、あひっ。」

　怜央は、まだ腰をガクガクと痙攣させ続けて、口からは涎が溢れている。ボクサーパンツには白濁した精液の染みが大きく拡がって

いき、それがみるみる拡大していった。白濁液の噴出は、どろっどろっとかなりの勢いでまだ沸きだしており、怜央の股間はすごいことになりつつあった。

「あ、怜央、イッちゃったの？」
「ぼっ、僕っ、僕っ。・・・ごっ、ごめんなさいっ。」
「随分溜(た)まっていたのね。あたしこそ気がつかないでごめんなさい。もっと頻繁(ひんぱん)に抜いてあげれば良かったわよね。」
「うっ、ぐすっ、・・・ぼっ、僕っ、・・・こんなこと初めてでっ・・・。」
「他の女の子とはセックスができないって言ってたけど、オナニーもしていなかったの？・・・あたしと前回ここに来たのは、確か三週間前よね。・・・懇親会のときは後片付けなんかがあって、セックスできなかったし・・・。でも、あのとき、男子グループではオナニー大会だったんじゃないのかしら？」
「あのときは、僕も一緒になってオナニーしたんだけど、結局僕だけ最後までイクことができなかったんだ。他の皆は、２回とか３回とか射精していて、中には２時間で６回も射精したヤツも居たんだけどね。」
「ということは、もう三週間も射精していないの？・・・あたしたちの年齢で、それはかなり厳しいわよ・・・。っていうかさ、オナニーもできなくなっちゃったの？」
「オナニーだと、最後まで、つまり射精できるときもあれば、できないときもあるんだ。どういう条件でそうなるのか、今一つよくわからないんだけど・・・。」
「でも、あたしと一緒だと、セックスもできればオナニーも問題ないわよね？・・・少なくともあたし、怜央が射精できなかったことって、あたしが奉仕しているときだと、見たことないわよ。」
「そうなんだ。何故か優稀にやって貰うと、何も問題なくて、本当に気持ちの良い射精ができる。でも、それ以外だと、上手く行かな

いことも結構多い。さらに不思議なのは、優稀がいなくても、オナニーして最後に射精することもあるんだけど、どこが違うのか、さっぱりわからない。」

「じゃあ、いろいろと試してみましょうよ。どのみち、あなたの年齢だと三週間も射精しないなんて、普通だと不可能よ。男の子は72時間でタンクが一杯になっちゃうのは知ってるわよね。特に我慢している訳じゃないのかもしれないけど、あたしがあげた、おちんちんやたまたまに問題がないんだとすれば、男の子の生理からして限界を超えちゃっているのは間違いないんだから・・・。」

「うん、わかった。・・・ありがとう。」

「さ、じゃ、そのベトベトでぐちゃぐちゃのボクサーパンツはもう捨てて、布団に寝てくれる？・・・今、綺麗（きれい）にしてあげるから。」

そう言うと、あたしは怜央の脱いだボクサーパンツをタオルに包んでごみ箱に捨て、怜央のおちんちんをペロペロと嘗（な）め出した。

怜央は目を瞑（つぶ）り、うっとりした表情で呟（つぶや）いた。

「優稀にフェラして貰えるなんて、幸せだなぁ・・・。しかも、お掃除フェラだなんて・・・。精液でグチャグチャのベトベトになったペニスをしゃぶるなんて、嫌じゃない？」

「ふぉんなほほぉいは。・・・そもそも、このおちんちんはあたしについていたものだし、出した精液もあたしのたまたまが製造したものじゃない。これが他人のおちんちんだったり、他人のたまたまから出たものなら、多少の抵抗はあったかもしれないけど、自分のものだったんで、むしろ懐かしくて嬉しいってのが本心かしら？」

「優稀は男の子だったとき、自分のペニスを嘗（な）めたり精液を飲んだりしたことがあるの？」

「さすがにペニスは届かないわよ。でも精液を飲んでみたことはあるわよ。これ、前に何かで読んだんだけど、自分の精液を『味見』したことがある男の子って、９９％位は居るそうよ？」

「そうなんだ。」

「女の子でも、興味本位でオナニーのとき、自分の乳首を嘗めたことがある子って、それなりに居るんじゃない？」

「僕は貧乳だったから、乳首には届かなかったけど、仮に届いてもしなかったと思うな。」

「それはあなたが性同一性障害だったからじゃないかしら？」

そんなことを話しているうちに、怜央のおちんちんは再びガチガチの状態で天を突いて屹立しちゃった。そもそも三週間も禁欲していたとすると、一度や二度、暴発した程度じゃ治まる筈がないわよね。このまま嘗め続けて、もう一度射精して貰うか、それとも何か他のことをすべきか、どっちが良いかしら。

「優稀、今度は僕が・・・。」

怜央が急に体を入れ換えると、あたしの足首を荒々しく掴んでガバッと大きく広げた。そしてあたしに何も確認せず、ガチガチにいきり立ったおちんちんを一気にあたしの中に挿入してきた。

普段の優しい怜央からは、とても考えられないような動作で、まるでレイプするような勢いだわ。あたしは勿論、もうすっかり準備ができていて、ぬるぬるのびしょびしょだったんで、何の問題もなくするっと一番奥深くまで挿入されると、軽くイッちゃったんだけど、これがもし経験の少ない女の子だったり、セックスに多少なりとも恐怖を感じていたら、絶対にあそこが傷ついちゃうんじゃないかしら。怜央がそんな若い経験不足の男の子みたいな行動に出るとは、ちょっと信じられなかった。でもあたし的には、これはこれで新鮮で普段と異なる感覚なんで、ちょっと興奮したりしたんだけどね。・・・まさか、怜央、こんなふうに他の女の子に迫って、それで振られちゃったりしたのかしら・・・。

「あっ、ぁあっ、んぐっ、ぃひっ、っくっ、ぃくっ、いくーっ。」

と思ったら、怜央がいきなり大声で叫んだ。挿入した瞬間に射精しちゃったみたい。さっきの暴発や、この超特急の絶頂を見ていると、あの交換初夜のプレイボーイぶりが嘘みたい。こんなに荒々しく乱暴で余裕がない状態、これってまるで、童貞ボーイが女の子を前にして、眼をギラギラさせて滾（たぎ）っているみたいで、やはり男の子は溜まっちゃうとこんなにも様子が変わるものなのね。・・・もう忘れてきちゃったけど、あたしも昔はこんなふうだったのかしら？

――――――――――――――――

――――――――――――――――

僕はいったいどうしちゃったんだろう。まったく自分をコントロールできず、本能に任せて優稀を襲っちゃった。これじゃあまるで、童貞ボーイの初体験みたいで、余裕もなにもあったもんじゃない。射精できない状態が三週間も続くと、男の子は皆こうなっちゃうんだろうか。優稀に愛想尽かされちゃったらどうしよう。

さっき、僕の頭の中には、優稀の身体の一番奥深く、子宮に自分の精子を注ぐんだって、その本能だけしかなかった。いくら婚約しているとしても、あれはない。やっぱり僕たちの年齢だと、三週間も禁欲するのは無理があるんだろうな。これは何としてでも、オナニーをいつでもどこでもできるようにならないと、今後どこでどんなふうに暴走・暴発しちゃうかもしれない。ここは是非とも優稀に手伝って貰って、男の子のオナニーについて、しっかり教えて貰うことにしよう・・・。

「乱暴にしちゃってごめんね。・・・僕のこと嫌いになった？」

「そんなことないわよ。むしろ怜央も年齢相応のところがあって、可愛いって思った位よ。」

「よかった。・・・なら、当初の予定どおり、僕に男の子のオナニーを全部教えてよ。何をおかずにして、どこをどうやれば一番気持ちが良いか、どうしても知りたいんだ！・・・（それと、どうすれば射精まで行くことができて、逆にどういう条件だと射精できないのか、それも絶対に見つけなきゃいけない。今日は長くなりそうだけど、明日はまだＧＷの最終日だから、今夜は優稀に泊まっていって貰おうかな・・・。」

第１２５話　武史の特訓（１）

「その式にさっきのを代入してごらん。・・・ほら、エックスが３と－７って出てくるだろう？」
「二次関数は式を因数分解できると、簡単なんだ。あと、二次関数を学ぶときは、必ずグラフと一緒に覚えると良いよ。直感的な理解とリンクしててね、これは三次関数以上になったときにも、普遍的に利用できるんで、絶対に楽だから。」
「本当だ。さすがに西山中の学年１番と２番だね。教科書どころか、参考書よりもさらにわかりやすいノートだ。」
「俺だって貢献してるんだぜ。」
「剛もありがとう。ただ、これは西山中も山下中も一緒だと思うけどさ、僕と剛は中１から中２のとき学年１番と２番を張ってたけど、それって男子の１番と２番だったじゃない。女子で性転換したやつらは、全員僕らより成績が良かったよね。多分西山中もそうなんでしょ？」
「そうね。あたしは男子だったとき、男子の学年２番とか３番とか取ったことが何度かあるけど、千博や榊君・・・当時は女子だった二人を筆頭に、全部で８人居た女子の性転換組には、まったく歯が立たなかったわ。」
「それは仕方がないだろう？・・・こと成績においては、女子のほうが男子より平均点レベルで１５点位上なんだからさ。でも、どうしてそうなっちゃうんだろうね？」
「いろんな説があるけど、ま、それは今、考える話じゃない。それより、これで勉強については、多分何とかなるんじゃない？」
「うん、本当にありがとう。やっぱり１級と２級だと、同じ単元でも中身というか深度がまるで違うんだね。１級の追試に合格した先輩がいない訳だよ。それをこんなにわかりやすく纏めてくれて・・・

。この半月だけでも、僕のチンコが生き延びられる可能性が少しは出てきたような気がしてきた。」

「まあ勉強はこれで半年間頑張れば良いとして・・・。それより問題は生殖機能点だろう？・・・武史、お前、まだ勃起しないのかよ？」

「そうなんだ。・・・あれからさらにいろいろ試してみたんだけど、どうしてもオナニーで射精することができない。といって、勃起しない訳じゃないんだ。ずっと射精しない状態だと、ちょっとしたことでもガチガチに勃起まではする。でも、そこからいくら擦（こす）っても扱（しご）いても、射精できなくって、結局２～３週間毎に夢精しちゃうんだ・・・。」

「でも、それ何とかしないと、射精できなくっちゃ３００点もある生殖機能点が零点になっちゃうぜ？・・・いくら勉強で頑張っても、３００点のロスはさすがに挽回（ばんかい）できないだろう？」

「そっ、そうなんだ！・・・やっぱり、もう僕には女の子にされちゃう道しかないんだ！！・・・うっ、うぅっ、・・・皆にこんなに手伝って貰ってるのに、僕のチンコはもう・・・。」

「ここはやっぱり、君の彼女の美佐子さんにも手伝って貰うのが良いと思う。実は君には話していなかったけど、剛が母校に赴（おもむ）いて美佐子さんを連れてきてくれたんだ。それで、こういう話は多分、女子同士のほうが話しやすいと思って優稀に別室で事情を説明して貰っているんだ。ちょっと呼んで来るよ。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

「美佐子！！」

「武史さん・・・。」

「話はすべて美佐子さんに伝えて、納得して貰ったわ。・・・美佐子さん、これまで武史に遠慮というか、武史が失敗したのは自分の

責任だと思っちゃって、それで武史とのセックスを控えていたんですって。」
「でも、武史が射精できなくなっちゃって、秋までに何とかしないと、武史が女の子にされちゃうんだって話したら、自分にできることなら何でもやるからって言ってくれたわ。」
「じゃあ早速だけど美佐子さんにお願いするのは2つかな。まずは武史の性欲管理というか性衝動の管理。これは射精管理と言い換えても良い。勉強を効率的に進めるためには、性欲が漲(みなぎ)ってしまい悶々としていると、うまく頭に入ってこないんだ。本来これは精通したばかりの小学生とか中1の子に対する処置なんだけど、今の武史はどうやら射精に問題を抱えているらしいから。」
「うん、中学のときは、ずっと毎日1回は必ずオナニーしていたし、美佐子と付き合うようになってからは毎日のようにセックスしていたのが、何故かダメになっちゃって・・・。」
「それと、もうひとつお願いしたいのは、武史が追試のとき、短時間でなるべく多くの精液を射精できるようにすること、・・・って言うか、短時間で何回も連続して射精できるように、どんな状況でもオナニーができるようにして欲しいんだ。・・・これはちょっと考えがあるんで、あとで一緒にやってみることにして、まずは武史、君は今、オナニーとかセックスとか、意識がある状態でちゃんと射精できるの？・・・そもそも、美佐子さんとは試験以降、接触していないって話していたよね？・・・夢精以外で射精したのはいつが最後なの？」
「・・・試験に失敗して、女の子にされることになってタマを抜くために病院に連れて行かれたとき、追試の話を聞いて、そのとき父さんにチンコをギュッと握られたのが最後だと思う。あのときは取り敢えずチンコとキンタマが無事だったっていう安堵感で、思い切り射精できたんだけど、その後は自分で何度やっても射精までたどり着かないんだ。」
「それって、もう半年も前じゃないか！・・・俺たちの年齢で半年

も射精しないなんて、俺だったら気が狂っちゃうぞ。」
「いや、夢精はときどき。・・・だいたい2~3週間に1回はしてるんだけど・・・。だから機能的には問題ない筈で、あとは精神的なものかも・・・。」
「ね、武史さん、・・・これまで、あたしが原因で試験に失敗しちゃったからと考えて、ずっと遠慮してたんだけど、是非セックスしてみましょう?・・・それで問題なければ、自信も取り戻せると思うし、自分でやることも可能になるんじゃないかしら?」
「じゃ、さっそく試してみたらどう?・・・この部屋使って良いよ。布団は押し入れにあるから自由に使って。僕たちは1階に行ってるからさ。」
「いえ、ご迷惑でなければ、皆さんにもここに居て下さい。武史さんが本当にちゃんとできるのか、もしうまくできなかったら、どうすれば良いのか、あたしではわからないこともあるでしょうから、是非皆さんに横で見ていて貰いアドバイスして欲しいんです。」
「そっ、そんなっ!!・・・美佐子、お前、皆の見ている前でっ、・・・そっ、そのっ、セッ、セックスを披露するなんてっ?」
「いや、美佐子さんさえ構わないなら、案外良い考えかもしれないよ?・・・僕も家族の前でアナニーを披露したりして、それで羞恥心が突き抜けちゃったから・・・。」
「ねえ、美佐子さんがここまで覚悟を決めてくれてるのよ?・・・どうせ男子は、試験のときには皆で一斉にオナニーして射精機能をテストされるじゃない。あなたも去年、受けて知ってるわよね?」
「そっ、それはそうだけどっ、・・・いや、確かに僕は去年、何となく恥ずかしくて、あまり思うように射精できなかったから、それで僅かに点数が届かなかったというのもあるけど・・・。」
「今更だけどさ、あの生殖機能テストは、人前だろうが何だろうが、周囲のことなど気にせずひたすらオナニーに没頭して何度も射精できることが点数につながるのよ。あたしも優稀も、テスト前にはオナニーの練習なんかやった記憶があるわ。千博や榊さんは女子だっ

たから経験なんてないでしょうけど、一条君は多分経験があるんじゃないかしら？」
「確かにそうだな。俺は普段からよく友達と一緒にオナニーしたりしていたし、裸を見られたりしても全然気にしなかったから、あまり特訓みたいなことはしなかったけど、確かにそういう訓練をしているヤツも結構居たし、塾なんかでも試験間際になると、そういうカリキュラムをやっているところもあるらしいな。」

　たっ、確かにっ、・・・美佐子はこれだけ覚悟を決めて僕のために何でもしてくれるって言ってるし、僕がここで躊躇したら美佐子に恥をかかせちゃう・・・。仕方がない。僕も覚悟を決めて・・・。

「あ、あのさぁ。・・・そのっ、・・・コッ、コンドームあるかな？」
「ん？・・・下にあるから、必要なら取ってくるよ？」
「武史さん。あたし、そのっ、・・・避妊しなくて構いません。そのまま膣内射精して下さい。」
「いや、いくら安全日だとしても、そういう訳にはいかないよ。」
「でも中学のときは、いつも避妊せずに膣内射精してくれていましたよね？」
「あっ、あれはっ、そのっ、・・・美佐子が僕の子供ならいつでも産んでくれるって言ってたし、僕も美佐子と結婚しようと思ってたから、もし妊娠しちゃっても直ぐに婚約して結婚すれば良いって、そう考えてたんだ。」
「だったら、今回も・・・。」
「いや、ダメだ。・・・僕はもしかすると、君と結婚できなくなっちゃうかもしれない。そうしたら子供の父親がいないことになっちゃう・・・。」
「それでも構いません。あたし、武史さんの子供なら、一人で育てます。だから・・・。」

「おい、武史！・・・お前、恋人にここまで言われて、それでも逃げようってのか？」

「そうだよ。美佐子さんがこれだけの覚悟をしてるんだ。何がなんでも、それこそ石にかじりついてでも、絶対に受かるって気合を入れて、死ぬ気で頑張るべきじゃないかな？」

「そうよ、今は失敗するなんてこと考えちゃダメ。皆がこれだけ手助けしているんだから、自分の実力を信じて全力で頑張ってみるべきだわ。」

「・・・一応、安全日なんだよね？」

「いえ、多分危険日です。・・・あたし、生理は安定している方なんですけど、多分あと2週間位で始まります。」

「それって・・・。」

「まさに排卵日という訳だな。」

「それに、あたしも武史さんが欲しいんです。武史さんに愛して貰いたい、あたしの膣内（なか）に武史さんのを挿（い）れて、武史さんで満たして貰いたいんです。」

「妊娠したいって身体が求めているのか・・・。」

「完全に排卵日確定だね。・・・ということは、今やれば高い確率で・・・。」

「なぁ武史よ。もう覚悟を決めたんだろ？・・・だったらいっそのこと退路を絶っちまえよ。万一、試験に失敗したら美佐子さんと生まれてくる子供を不幸にしちまう。そんなことになったら、お前は女の子を妊娠させておいて自分は女子になっちゃった最低のクズ野郎だってことになる。そこまで自分を追い込んだらどうだ？・・・ずっと武道で心身を鍛えてきたお前は、プレッシャーに強かったんじゃないか？」

しっ、しかたがないっ。・・・確かに剛が言うように、もう後がない状況なら、気合も違うかもしれない。・・・でも、僕が父親？・・・こんな頼りない僕が？・・・もう？・・・いや、今はそんなこ

とを考えるべきじゃない。まずは、ここで美佐子に恥をかかせないためにも、しっかり美佐子を抱かなければいけない。

ゆっくり服を脱ぎだすと、美佐子もパパッと手早く服を脱いだ。褌を外すとき、一瞬の躊躇があっけど、美佐子が大人っぽい雰囲気のレースのブラと、お揃いの柄のショーツをくるんと脱いで、一糸纏わぬ姿で布団を敷くと、そこに横たわったんで、僕も急いで褌を外した。しばらく射精していない僕のチンコは、もうガチガチのギンギンに滾ってお臍にくっついてしまっている。

「・・・武史さん、・・・来て・・・。」

美佐子が足をM字に開き、両腕を僕のほうに伸ばした。開脚した美佐子の股間を見た瞬間、僕の理性が吹き飛んだ。

「美佐子！」
「武史さん！！」

美佐子のおっぱいにむしゃぶりつきながら、僕はもう何も考えられずに、ガチガチのチンコを美佐子に一気に挿入した。もう暴発一歩手前で、一瞬の猶予もなかった。久しぶりの美佐子の膣内はぬるぬるで火傷しそうに熱く、挿れたと同時に僕は一番深いところで多量に射精した。

「「イクッ、イクッ、イクイクッ、イックーッ。」」

凄い！・・・二人して挿入と同時に一気にイッちゃった。・・・まるで僕と勝美が交換初夜で最初にやったときみたいだ。武史も美佐子さんも意識が戻っていなくて、二人ともまだ腰がビクンビクン痙攣している。

力をなくした武史がちょっと身体をずらすと、ペニスがズボッと

抜けて、美佐子さんのあそこから多量の精液がどくどくと零れてきた。排卵日にこんなに多量に膣内射精しちゃったら、これは完全に妊娠したんじゃないかな・・・。
あのとき僕と勝美は、二人でしっかり繋がったまま二回戦に突入しちゃったから大丈夫だったけど、この状況だと布団はクリーニングに出さないとダメだろう。僕が漠然とそんなことを考えていたら突然、剛が叫んだ。

「だっ、ダメだっ、おっ、俺もイクッ！！」

見ると必死に股間を押さえた剛が暴発していた。

「なんだ、武史と美佐子さんをみて暴発しちゃったのか。・・・やっぱり童貞の剛には刺激が強すぎちゃったのかな。」
「うっ、うるさいっ！・・・俺は絶対に魔法使いにはならないからな！」
「大丈夫、剛にもすぐに恋人ができるさ。・・・二十歳まではまだ5年もあるんだし・・・。」
「まあ剛は一人で勝手にオナニーしてれば良いさ。それより、これで武史が美佐子さんとのセックスでは問題なく射精できることがわかったから、いよいよ本題に入るとしよう。武史と美佐子さんはもう回復したかな？」

怜央が冷静な声で次のステップについて説明し始めた。

第１２５話　武史の特訓（１）（後書き）

美佐子さんは妊娠したのでしょうか？
また、このあと武史はどんな特訓を受けるのでしょうか？

第126話　武史の特訓（2）

怜央が冷静な声で次のステップについて説明し始めた。

「暴発しちゃった剛はほっといて、まず、武史にはアナニーを覚えて欲しいんだ。男性の射精を司る重要な器官として、前立腺というのがあるのは知ってるよね？・・・ここを刺激されると、どんな男性でも強い射精反応が引き起こされるんだ。」

「・・・一応、知識としては知ってる。・・・だからBL作品なんかで、よく男同士のセックスを描いて、バックに挿入されるとトコロテンという射精をするみたいだね・・・。勿論、やったことはないけど・・・。」

「それを知ってるなら話は早い。ただ、前立腺刺激による射精は、ある程度慣れないと簡単じゃないんだ。・・・例えば、家畜の人工授精で精子を採取するときにも、前立腺刺激が使われるんだけど、そのときは前立腺に電極を当てて、電気刺激を与えているんだ。これなら強制的に射精させることができるけど、それは君の今の状況では意味がない。テスト本番のときに電気刺激なんてできないからね。」

「そうすると、必然的にバックから指を入れて、自分で自分の前立腺を刺激する、つまりアナニーをすることになるんだけど、これ、慣れないとうまく射精できないんだ。っていうか、前立腺をマッサージするとかの刺激を繰り返し与えて、バックを『開発』していかないと、射精まで至らないことが多いんだよ。」

「・・・わかった。・・・それで、どうすれば・・・？」

「これから君の性欲管理、つまり射精管理を美佐子さんにお願いするって言ったよね。そのとき美佐子さんには、必ずバックで射精させて貰うようにするんだ。つまり、美佐子さんに毎日、お尻をグリ

グリして前立腺の刺激だけで抜いて貰うようにするのが、まず当面の課題だね。」
「それで、ある程度開発が進んで、前立腺を刺激すると必ず射精するようになってきたら、今度は自分で刺激して射精できるように練習をするんだ。」
「僕は今、ちょっと事情があって優稀にバックを開発して貰っていて、っていうか、アナルで抜いて貰ったりしているんだけど、まだ自分でアナニーをして射精するのは、いつもできるとは限らなくってさ、練習しているところなんだ。・・・だから、ここはもう既にアナニーに開眼した千博に、是非とも手本を見せて貰いたいんだ。」
「ぇえっ！・・・ちょっ、ちょっと待って！！・・・こっ、ここでっ、・・・皆の前でアナニーしろって言うのっ？・・・剛や美佐子さんもいる前でっ？」
「君は例の懇談会のとき、皆の前で自分から進んでやっていたじゃないか？・・・家族の前でもやったようなことを聞いたよ？」
「そうよ。それに美佐子さんはあたしたちの見ている前でセックスまで披露したのよ。だったら男子である千博がアナニーくらい見られるのを恥ずかしがるなんて、男の子らしくないわ。」
「恥ずかしがり屋だったあたしが言うのも何だけど、あたしが千博にあげた、たまたまが泣いているわよ。・・・千博には、もっともっと男らしくなって欲しいから。」
「あのときはお酒も入っていたし、性転換者しかいなかったし・・・。」
「お酒が必要なら、持ってこようか？」
「ダメよ。千博は極端にお酒に弱くて、下手に飲ませると大変なことになるわよ。何度も失敗しているんだから。」
仕方がない。僕も覚悟を決めよう。そもそも怜央と武史の特訓について話したとき、射精に問題があるならアナニーを覚えれば良いと提案したのは僕だから、武史がきちんとアナニーできるように指

導するのは僕の役目だ。まだ少し恥ずかしい気持ちはあるけど、男子になったからには、こんなことで恥ずかしがっちゃいけないんだ。僕も剛みたいにならないと・・・。

「わかったよ。じゃ、今からアナニーするから、武史と美佐子さんはもっと近くに来て、よく見ていてね。」

　服を脱いで、全裸で二人の前に膝立ちの姿勢になった。さっき武史と美佐子さんのセックスを見ていたんで、ペニスは少しだけ元気になっているけど、まだ半勃ちというか、縮こまっていたのが普通になったという程度だ。でもアナニーをすると、この状態から一気にガチガチのギンギンになって、あっと言う間に射精まで行けるんだ。それを是非見て貰おう。

「本当はローションとかワセリンがあると良いんだけど、なければこうやって指を舐めて唾でよく濡らしてね、・・・そうしてお尻に一気に押し込むんだ。」
「はぅっ、ぅうっ、ぁひっ、んぐっ。」
「こっ、こうしてっ、自分の指でっ、・・・お尻の中にある前立腺をっ・・・ぃひっ、こっ、こうしてっ、あっ、ぁあっ、あひっ、おっ、押し込んでっ、んっ、あっ、だっ、だめっ、だめっ、あひっ。」
「ほら、見てご覧。・・・千博のペニスが一気にビンッとなって、ガチガチに勃起してきただろう。前立腺の位置は、肛門からだいたい5センチから8センチくらい入ったところにあって、中指か人指し指を根元まで挿入して、第二間接を身体の前側に曲げると、ちょうど当たる位置にある。クルミとか栗の実くらいの大きさの、少し硬くてコリコリしている器官なんだ。実際に指を入れて中でグリグリして探してみれば、案外簡単に見つかると思う。」
「あっ、あっ、ぃひっ、だめっ、ぼっ、僕っ、もっ、もうっ、あひっ、んぐっ、だめっ、んぐっ。」

「もう千博はイッちゃうみたいだね。我慢汁もダダ漏れだし、ペニスはもう断末魔の痙攣(けいれん)が始まっちゃった。それに多分だけど、意識も飛んじゃってるんじゃないかな。」

「んぐっ、くっ、いっ、ぃくっ、いくっ、いっくーっ！」

ドピューッ、ドピュルルーッ、ドピュッ、ドピューッ。

「まっ、まだっ、まだいくっ、いくっ、ぃひっ、とっ、止まらないっ、たすっ、助けてっ、だめーっ。」

ドピューッ、ドピューッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピューッ。

「あひーっ、ひーっ、ぃひーっ、いくーーっ。」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピューッ。

「凄い量ね。でもさすがにそろそろかしら？・・・白目を剥いちゃってるし・・・。」

「最終的には、これができるようになって欲しいんだ。このアナニーで前立腺を刺激すると、わりと直ぐにまた射精ができるんだよ。ただ、こうなるまでには訓練をして、バックの性感帯を繰り返し開発しないとダメなんだ。そこで、その開発を美佐子さんにやって貰う必要がある。」

　美佐子さん、驚いて固まっちゃってるけど大丈夫かしら？・・・でも、必死になってガン見しながらコクコクと頷(うなず)いているから、一応理解はしているみたいね。

「ということで、勝美、お願いできるかな。千博はダウンしちゃってるけど、四つん這(ば)いにさせてバックからやるのはできるよね？」

「ええ、何度かやったことはあるけど・・・。でも千博、これ、あんまり好きじゃないらしいのよね。気持ちが良いか悪いかということじゃなくって、これをされると何でも男子としての尊厳が失われちゃうとか言っていたし・・・。」

「言いたいことはわかるけどさ、武史にとっては、男子の尊厳どころか、男の子の一番大事なもの、・・・男子そのものを剥奪されち

ゃうかどうかの瀬戸際なんだから、この際、何とか協力してくれないかな？」
「是非教えて下さい。お願いします。・・・武史さん、男の子じゃなくなっちゃうなんて、可哀相すぎます。」
「・・・無理しなくても良いよ。・・・どうせ僕なんか、もう女の子にされちゃうのが決まってるんだから・・・。」
「だから、そんなシケたこと言ってたら、本当に切り取られちまうぞ。武史はあれ以降、どうもネガティブな思考に走るようになっちまったな。まずはそこから直して行く必要があるかもしれないぜ。」
「わかったわ。なら、千博にも協力して貰いましょう。それで良いわよね、千博？」
「はっ、はっ、はぁっ、んっ、うんっ・・・。」
「じゃあ、うつ伏せ状態から、そのままお尻をこっちに向けて持ち上げてくれる？・・・そう、四つん這いの姿勢で。」

千博がのろのろと腰を持ち上げ、お尻を突き出してくれた。でも、千博はまだ意識が完全に戻っていないように見える。単に、勝美が言ったんで、何も考えずに従ったというんじゃないかな。これから何をされるのか、わかっていれば良いんだけど・・・。

「じゃあ早速だけど、まずさっき千博がやったみたいに、指をよく唾で濡らして・・・あ、これはローションとかワセリンとかがあれば、もっと良いのよ。」
「それで、指を十分濡らしたら、こうやってお尻に一気に突っ込むの。」
　ズボッ。
「はぅっ？？！」
「指を根元まで挿入したら、さっき見せたとおり、直ぐにクイッと曲げるの。そうすると、指を曲げている限り、もうどうやっても逃げることができなくなるのよ。お尻に指を入れられると、どんな相

手でも無意識で逃げようとするから、そうはさせないのがコツなのかしらね。」
「ひっ、はひっ、ぁひっ、だめっ、ゆっ、許してっ、ぃひっ。」
「今も千博は無意識で必死に逃れようとしているんだけど、中で指を曲げちゃうと、もうどうやっても抜けなくなっちゃうのよ。」
「この状態で、中で指をグリグリして前立腺を探すと、簡単に見つかるのよ・・・。で、見つけたら、それをグッグッと押し込むようにしてマッサージするの。ほら、こんなふうに・・・。」
「あひっ、あひっ、っくっ、いくっ、いくっ、いくいくっ、いっくーっ。」
　ピユッ、ピュッ、ピュッ、ピュッ。
　ピュッ、ピュッ、ピュッ、ピュッ。
「たすけっ、助けてっ、とっ、止まらないっ、いくっ、いくっ、またっ、いくっ。」
「マッサージで押し込むのに合わせて、いくらでもピュッピュッで射精してるでしょ?・・・うまくやると、一気にドピューッて射精することもあるけど、多くの場合は今の千博みたいにピュッピュッと射精したり、あるいはたらたらじわじわと滲むように精液が溢れだして、マッサージを続けている間、ずっと射精が止まらないこともあるのよ。」
「助けてっ!・・・死ぬっ!・・・ぼっ、僕っ、もうっ、もうっ・・・ひっ、死んじゃうっ!!」
「わかったかしら。これ、あまりやりすぎて限界まで搾り取っちゃうと、しばらく射精できなくなっちゃったりするから、一日の、あるいは一回の訓練はこの程度で止めておくわ。」
「さ、じゃ、やってみて。」
「今の見て、ちょっと怖くなっちゃった・・・。お手柔らかにお願い。」
「大丈夫、大体わかったから、あたしを信じて任せてくれる?・・・武史さんの悩み、絶対に解消してあげる。そして、何としてでも追

試に合格するのよ！」
　武史が布団の上で四つん這いになって、美佐子さんのほうにお尻を向けた。すると、美佐子さんはいきなり武史のお尻の穴をペロペロと舐めだした。
「なっ、何？・・・そんなとこ、汚いよ！！」
「武史さんの身体に汚いところなんてないわ。・・・とっても綺麗でおいしぃの！」
「ひっ、そっ、それっ、だめっ、ぃひっ、ぁあっ。」
　美佐子さんが武史のお尻の穴を一生懸命舐めている。と、今度は舌を丸めてお尻の穴をほじくるように舌を入れ、穴の中まで舐めだした。武史はもう何もできず、ただ悶えているわ。本当に美佐子さんは武史のことを愛しているのね。さっき美佐子さんの膣内に思いっきり多量に射精していたけど、この奉仕でまたお臍にくっつく位ギンギンに勃起したわ。とても、つい今しがた射精したばかりとは信じられない・・・。武史の悶え方からして、お尻に適性もあるみたいだし、これはうまく行くんじゃないかしら・・・。
　頃合い良しと見たのか、美佐子さんが中指と人指し指をペロッと舐めると、武史のお尻の穴に一気に根元まで突っ込んだ。この段階では、武史は短く「ひっ」と小さく声を上げただけだったけど、直ぐ「あ？・・・ぁあっ？・・・あひっ？」と変な声を上げだした。
「指をぐっと曲げて、コリコリしたところを探すんですよね？」
「やっ、やだっ、それっ、だめっ、だめっ、・・・ひっ、たっ、助けてっ、だめっ、そこっ、あひっ。」
「これかしら？・・・ここをグッと押し込むようにマッサージをするんですよね？」
「ひーっ、ひーっ、だめっ、だめっ、あひっ、あっ、あっ、たっ、

助けてっ、だめっ。」
「上手いわ。そこで合っているみたい。もうおちんちんが限界を超えちゃったんじゃないかしら。」
勝美のアドバイスで美佐子さんの手に力が入り、スピードアップした。武史のおちんちんが爆発しそうな位、赤黒くパンパンになってきたと思ったら、次の瞬間にはおちんちんから腰までがブルブルガクガクと震えだして、可愛らしくピュッ、ピュッと射精が始まった。
「ぃひっ、っくっ、いくっ、いくっ。」
「上手い上手い。それで良いんだ。そのまま、暫く続けていて。」
「イクッ、イクッ、イッてるっ、だめっ、そっ、それっ、死んじゃうっ、たっ、助けてっ、まだっ、まだイッてるっ、とっ、止まらないっ、死んじゃうっ。」
「そのまま止めずに、最低でも1分位は続けて。・・・イキっぱなし状態をキープしていると、早く開発されるみたいだから。・・・でも、やりすぎには注意してね。その加減が難しいんだよね。」
「あと、このとき左手が空いてるでしょう?・・・その空いてる手は、おちんちんを軽く扱(しご)くのも良いし、乳首をクリクリ捻(ひね)って刺激するのも効果的よ。」
「死んじゃう!・・・死んじゃう!・・・助けてーーっ、・・・ひぐっ!!」
「あ、完全にダウンしちゃったわ。白目剥いてるし、叩いてもつねっても、もう反応がなくなっちゃったわね?」
―――――――――――――――
――――――――――――
「最初にしては、随分と上手く行ったみたいだ。これなら、あっと

言う間に千博みたく一人でアナニーして、簡単に射精できるまでになるんじゃないかな。」
「じゃあ、これから毎日、美佐子さんにこの方法で抜いて貰いなよ。欠かさずやって貰っていれば、直ぐにバックが開発されるだろう。そうしたら、もう一度千博に一人でやるアナニーを教えて貰えば良いさ。」
「よかったなぁ武史。これで、勉強も射精も、両方ともバッチリじゃないか。もう秋の追試は絶対に大丈夫だぜ。俺が保証するよ。大船に乗ったつもりで、この特訓を今のペースで続けて行こうぜ。」
「剛の言う通りだ。多分、これでもう武史は心配ないよ。美佐子さん、引き続き武史のバックを開発してやって欲しい。毎日が理想的だけど、まあこれは武史が我慢できなくなる間隔との兼ね合いもあるから、武史とよく話し合うことだね。正解はないから、1日置きとか週3回とか、自分たちに合った頻度を見つけて欲しい。」

「ところで、どう?・・・剛もこれ体験してみない?」
「う～ん、魅力的ではあるけど、二つの意味で止めておく。・・・一つ目は、これはやっぱり夫婦とか婚約者とか、あるいはせめて身体を許している恋人同士でやることだと思う。何の関係もない相手・・・それが同性だろうが異性だろうが、簡単にやって良いものじゃなさそうだ。俺は男子の尊厳なんてものはどうでも良いけど、これって他人にオナニーをして貰って抜いて貰っているようなものじゃないか。せめてセフレとかならともかく、ただの友人に、そんなことされるのは、俺は嫌だな。」
「・・・二つ目は、こんなの覚えたら、普通のセックスなんてもう満足できなくなっちゃいそうだ。いや、本当に開発されちゃったら、それこそＢＬに走っちゃうかもしれない。俺は腐るつもりはないし、とにかく早く彼女をつくって、何としてでも童貞を卒業したいんだ。」
「まあ剛の場合はそうなるのかな。禁断の世界を知ったがために、

魔法使いになりましたじゃ、本末転倒だ。だから別に無理強いはしないよ。ただ、彼女ができて、無事初体験も済ませたなら、是非一度は経験してみるのは悪くないと思うよ。これをやって貰うと、きっと新しい世界が拓(ひら)けるからさ。」

第１２６話　武史の特訓（２）（後書き）

とうとう武史もバックを開発されてしまうことになりました。この様子だと、剛もいずれ・・・？

次週の牡牧場の更新は、予定通り６／８の午前零時に致しますが、その翌週の杉田家の更新（本来は６／１５の予定）は、出張で不在になるので、１回お休みさせて頂きます。
次の杉田家の更新は、６／２２の午前零時に第１２７話を予定しています。

たったの三日間だったけど、新婚旅行から帰って来たら勝美は心なしか太ったように見えた。でも、これはきっと太ったんじゃなくて、お腹がようやく少し出てきたということなんだろう。勝美にそれを告げるべきかどうか、ちょっと悩ましいところだ。ただ僕が勝美のお腹をさすったり、勝美のお腹に頬(ほお)ずりしたりキスしたりすると嬉しそうな顔をするから、お腹が大きくなることとは別に話題にしても良い筈だ。（単純に太ったというのとは事情(わけ)が違う。）

　僕たちみたいに、もう5ヶ月に入ったというのはさすがに聞かないけど、実は高校でクラスを問わず（ということは階級も問わず）、妊娠したという女の子が、結構出てきた。多分だけど中学時代から付き合っていたカップルとか、付き合うまでは至らなかったけど、成人式の日に初体験して、そこから正式に付き合うようになったカップルが沢山居たんだろう。勿論、付き合うようになることと身体の関係は必ずしも対応しないけど、やはり成人式を済ませて、これで晴れて大人になったという意識の変化によって、単にセックスを頻繁(ひんぱん)にするようになったというだけでなく、結婚という選択肢も視野に入ることになったため、万一妊娠してしまっても、それならそれで結婚すれば良いという安心感につながり、その結果がこの妊娠ラッシュではないのかな・・・。この傾向は、どこの高校でも一般的に見られることらしい。

　僕たちはもう中学時代に何度も皆の前で婚約発表とか結婚報告とか妊娠報告とか、いろいろやったんで皆も慣れっこになったみたいだけど、他の中学から来たヤツは、まだお付き合いを始めたばかりというのも多くて、っていうか成人式の日に二人とも初体験をして、そこから始まったカップルというのも結構居る。そういうヤツらに限って、何故か妊娠してしまったりしているのが面白い。きっとサ

ル状態になって避妊もろくにせずヤリまくったに違いない。（まあ、これは僕たちも人のことを言えないか・・・。）
どっちみち、今は少子化対策で妊娠した高校生カップルに対するサポートは手厚いから、学校を続けながら出産するヤツも不安になることはない筈だし、それもあって妊娠（または出産）を期に結婚するカップルもかなり多いそうだ。

勝美はこのところ、毎日のようにお腹をさすっている。まるで、早く大きくなるようにおまじない（願掛け？）をしているような雰囲気だ。でも、そんな様子なのに勉強はしっかり一級の授業に付いて行ってるし、家事もいつの間にかお義母さんから手解きを受けて、それなりにこなせるようになっている。勿論、お義母さんと二人で分担しているんだろうけど、でもたった５ヶ月で、どこを分担しても一通りこなせるようになったのは、家事が絶望的にできなかった僕からすれば驚異を通り越して魔法を見ているみたいだ。それともこれは単に僕が例外的にダメだっただけで、普通の子なら男女を問わず、この程度はできるものなんだろうか・・・。

生徒会の活動は、報道班長に指名されて会報の発行を全面的に任されたんで、そろそろ次の号に取りかからないといけない。生徒会報は隔月発行で、次は６月１０日発行だ。
６月号の記事としては、新しい生徒会の陣容を述べるのと、来週に実施される運動会の様子が大きなニュースになるから、これで紙面の基本が固まるだろう。
あとは連続でつまらないけど、部活動紹介の続きで行くか、それとも各部の何らかのデータ（例えば今年の新入生の数とか？）を貰って載せるか、はたまた囲み記事として各部の期待の新人紹介といったような個人に着目した囲み記事をシリーズでやってみるか、いくつかアイデアはあるんだけど、まだ何も具体的に考えていない。ただ剛から、ちょっと面白い提案があって、どうしようかと悩んで

いるものがある。それは、性転換者について紹介するという連載コーナーのようなものだ。勿論、無理強いするようなことじゃなくって、声をかけてみて賛同してくれた子だけになるんだろうけど、男子になった子ならば高い確率で出てくれるんじゃないかな。・・・女子になった子は難しいかもしれないけど、少なくとも勝美と優稀は大丈夫だと思うし、僕たち西山中の性転換女子なら、他にも山野淳さんとか五十嵐紀美さん辺りも出てくれるんじゃないかな？・・・あるいは皆にイメージが伝わるように、僕がトップバッターになるというのも手かもしれない。ちょっとインタビュー項目をいくつか考えてみようっと。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

ドーン。・・・ドドーン。・・・パパーン。ドカーン。
・・・晴れ渡った空に花火の音が響きわたっている。今日は高校の運動会。雲一つない絶好の運動会日和で、ＧＷが明けてから梅雨に入る前のこの時期に開催するのは、勿論気候的なものもあるにせよ、ようやく生徒が学校生活に慣れてきたところを見計らって、懇親を深めるために開催するイベントという性格も強いのよね。
　あたしはそもそも男子のときから絶望的に運動が苦手で、それは女子になっても変わらないから、全員参加の競技を二つと、あと部活対抗の競技のうち、文化系クラブにも不利にならないよう運動能力はあまり問われない借り物競争の合計３種目にエントリーしてるんだけど、他の女子転換組はどうしているのかしら。
　一般的に女子転換組の子は、あたしみたいに運動能力も低い、いわゆるみそっかすが多いのよね・・・。勿論、中には脳筋で身体能力は良いのに勉強は零点というのも居るには居るけど、でもあのテストは配点からしても、どちらか片一方が平均点以上あれば、そう簡単に４級になることはない筈で、さらにその下の性転換対象者に

なっちゃうなんて、どんな頭の構造なのかしら・・・。まあこれはクラスで男子になりたい子の人数とか、自分が取った合計点とかを総合して変動するから、運の要素もかなり入ってくるんでしょうけどね。
　勝美は、淳（山野淳さん）なんかと一緒に妊婦席に座っているわ。ここ、大会本部の隣のテントで、場所としてはＶＩＰ席／来賓席と一緒なのよね。つまり、妊婦さんは激しい運動ができないからってことで、ＶＩＰや来賓の対応を任されているんですって。少子化が進む日本では、妊婦さんの社会的ステータスは極めて高くて、お偉いさんの相手をしても決して失礼にはならないし、逆に相手から気遣われる存在みたいだわ。でも、上級生ならともかく、今年入った一年生じゃ、そもそも高校の運動会は初めてで、他人に解説なんかはできないんじゃないかしら。多分これは、成人式から３ヶ月にして、もう妊娠したということが極めて誇らしいことで、そういう社会の宝が相手をしてくれる、というんで、ＶＩＰや来賓も単に話をするだけで満足するみたいね。あたしも婚約以来、いつも怜央は生で中出ししてくるんで、来年はあの席に座っているかもしれないわね。・・・うふっ！

――――――――――――――――――――――

「いやー、今日は随分盛り上がったな！」
「本当だね。これまで、３つの中学出身者の間で、特に垣根があるということじゃなかったにせよ、何となくまだぎこちない関係だったのが、４つのグループ、赤白青緑に分かれて力一杯戦ったのが、皆の心を一つに纏める上でこんなにも効果的だとは思わなかったよ。」
「だからこの時期に運動会をやるんだと思うぜ。それに、マンモス校だからってのもあるにせよ、普通の紅白じゃなくって４つの組に

分かれて、しかもそれぞれの組には、各クラスからバラバラに入ってくるというか、出身中学や階級がわざとバラけるように、かなり緻密に組分けが配慮されている。これを考えた先生方と、実務で動いていた生徒会は本当に大変だったろうな。頭が下がるぜ。」
「あたしは妊婦席に居たから何もお手伝いしていないんだけど、本当に千博にせよ怜央にせよ、よく細かいところまで動いて大車輪だったわね。」
「あたしはそれよりも、怜央にせよ千博にせよ、もともと女子だったのに男子に混じって男子の種目に出場し、男子よりも優秀な成績を上げているのが凄いと思ったわ。男子から女子に性転換した子で活躍したのは、五十嵐さんとか、本当に一人か二人程度じゃない。あたしなんか、元からの女子に混じってもビリのほうだったんだから・・・。」
「勝美が出場していれば、もう少し変わったかもしれないね。もともと勝美はサッカー部のエースだったんだし。」
「あたしなんて大したことないわよ。男子だったときでも、女子だった千博のほうが身体能力は上だったような気がするわよ。だからこそあたしと千博の役割を入れ換えるほうが合理的だって思ったんだから。」
「ところで怜央と千博は生徒会役員だってことで、あまり競技には出場しなかったけど、仕事は無事うまくいったのか？・・・それであっても、二人とも出場した競技では優秀な成績だったのはさすがだけど。」
「僕はよろず雑用承り係だから、こまごまとした雑事で忙しかったけど、仕事としては大したことはやっていないよ。それより報道班長として運動会の取材に走り回っていた千博は大変だったんじゃない？・・・次の生徒会誌の取材はできたの？・・・ネタはもう充分なのかい？」
「充分、かどうかはわからないけど、一応原稿を書ける程度のネタは集まったと思うよ。あとは僕の文章力というか、編集者としての

力量だね。」

「それをさらっと言えるところが凄いぜ。特に自慢してる訳でもなさそうだし、どこをどうやったらその自信が出るのか、さすがだ。」

「そう言えば、今年の運動会では1年が出すことになっている各色チームの副応援団長に、３中学から1名ずつの性転換者が入ったじゃない。あれって、怜央が裏で動いたんだって？」

「動いたなんて、そんな黒幕みたいなカッコいいことは特にしていないよ。ただ生徒会の方針として、性転換者を引っ張り込もうってなったんで、頑張って説得しただけだよ。」

「でも初めての試みだよね。」

「各色チームとも団長は2年生から1名選ぶことになっていて、それは各色チームで決めたんだけど、1年生から各色チームで男女1名ずつを選ぶことになっている副団長に、五十嵐さんと児玉君、それと北川中出身の武藤君が入ったのは驚いたな。」

「本当だね。僕も上から言われて説得に歩いたんだけど、特に望まないのに女子にされちゃった子が引き受けてくれるとは、とても思えなかった・・・。」

「でも五十嵐さんは、結構楽しんでノリノリに見えたぜ。あのガタイでチアリーディング部の制服の短いスコートを履いて、足を大きく振り上げながら、かなりのハイレグなアンスコを惜しげもなく晒(さら)して楽しそうに踊っていたじゃないか。これまで性転換女子だってことで何となく遠巻きにしていた男子が、あの姿に参っちゃって、告りたいとか玉砕覚悟でアタックするとか、はたまた推しにするなんて話もしていたぞ？」

「僕はむしろ、児玉君と、それから北川中の武藤君だっけ？・・・この二人が、よく引き受けたと思ったな。だって応援団長と副団長になると、女子はチアリーディング部の制服ーこれも結構恥ずかしいけど、男子は六尺褌に祭法被(まつりはっぴ)を引っかけただけなんだ。それも、あの法被は丈が物凄く短くて、腰から下は完全に出ちゃうんで、下半身は六尺褌ひとつの姿で生徒の前に立つことになるんだ。今朝、

着替える段になって、あの六尺褌と祭法被を渡された児玉君と武藤君が目を剥いて、必死に抵抗していたからね。」
「でも二人とも、褌をキリリと締めてチームの前で副団長を立派に務めていたじゃない。最初は確かに恥ずかしそうではあったけど、最後のほうでは褌の脇から思いっきり毛がはみ出ていたし、それどころか汗で晒がスケスケになって、大事なところがほぼ丸見え状態だったけど、そんなこと少しも気にせず、最後まで副団長をやり切っていたね。」
「そんなのたかが褌になっただけだろう。全裸になった訳じゃあるまいし。・・・こいつを見ろよ。普段から六尺褌を締めていて、別にそれを誰かに見られたからといって騒いだりはしないぜ。」
「まあ六尺褌は下着であると同時に、昔は男子の正装という側面があったらしいからね。といっても武史は少し特別かもしれないけどね・・・。それより、武史と、それから剛もだけど、さすがに男子で山下中のツートップを張っていただけあって、凄い活躍だったじゃない。それぞれ7種目と6種目に出て、二人とも6種目で優勝して、最後の1種目でも2位だったなんてさ。その優勝した種目の大量得点のおかげで、赤組と青組が白組と緑組に大差をつけて1位と2位だったんだから、さすがとしか言いようがないよ。」
「俺のことはともかくさ、武史がどうやら吹っ切れたみたいで良かったぜ。」
「そうね。武史はこれまでの絶望的で自信なさげな雰囲気がすっかり影を潜めて、運動会を心から楽しんでいたみたいだわね。ようやくこれで、秋の再試験に向けて全力を投入できる気力が整ったんじゃないかしら。」
「どうなの？・・・その後、美佐子さんには順調に射精管理して貰ってるのかな？」
「うっ、うんっ。・・・美佐子にバックを責められると、本当にあっと言う間にイッちゃうんだ。・・・っていうか、イキっぱなしになって、もう何がなんだかわからないまま、気絶するまで射精が続

くらしい。」
「らしいってことは、お前、自分では何が起きているのかわからないままってことかよ。」
「でも、その言い方なら、もうすっかり開発訓練は終わったってことじゃない？」
「だよな。それじゃ今度は美佐子さんにやって貰うんじゃなくて、自分でコントロールできるようになる訓練に移らなきゃだな。」
「じゃ、次は千博に是非とも模範を示して貰って、自分でアナニーをして射精する練習を頑張ろう。ということで、千博はもう一度手伝ってくれるよね？」
「うっ、うんっ。まあ、仕方がないから、一肌脱ぐことにするよ。」
「よし。なら善は急げだから、来週の水曜日か木曜日にでも、また放課後に僕の家の隠れ家に集合しよう。美佐子さんにも来て貰えるよう、武史から声を掛けてよ。」
「あっ、ごめん。来週の水曜木曜辺りは次の会報が佳境に入っちゃうんで、申し訳ないけど今度か次回かの週末に、いつもやっている勉強会の後ではダメかな？」
「俺はいつでも構わないぜ。」
「僕も皆にお世話になる立場だから、皆の都合でお願いするよ。」
「優稀も多分問題ないよね？・・・とすると、あとは美佐子さんの都合次第か。それだけ急いで確認して、皆に知らせてよ。」
「わかった。美佐子は基本的に僕に合わせてくれる筈だけど、とにかく聞いてみる。今週末か来週末だね？」